新潟県埋蔵文化財調査報告書　第133集

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ

青 田 遺 跡

本文・観察表編

２００４

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ

青田（あおた）遺跡

本文・観察表編

２００４

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

新潟県教育委員会は、高速自動車道・新幹線・国道バイパスなどの開発事業に伴う遺跡の発掘調査を行っており、その成果を発掘調査報告書として公表してまいりました。

本書は日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い実施した加治川村青田遺跡の発掘調査報告書です。日本海沿岸東北自動車道は、新潟市を起点に青森市に至る高速道路で、日本海沿岸地域における産業・経済・文化の交流・発展の促進に大きな役割を果たすものと期待されております。

青田遺跡は江戸時代までその地にあった旧紫雲寺潟の底から発見されました。調査の結果、低湿地を流れる河川に沿って営まれた縄文時代晩期終末の大規模なムラ跡であることがわかりました。検出された58棟の掘立柱建物の多くは当時の木柱を残していたほか、全国初となる建物の草壁材や、縄文時代では県内初となる丸木舟など、多数の木製品が出土しました。このほか、漆製品やクリの実・魚骨など、縄文人のくらしの様子を生き生きと伝える遺物が出土しました。この中の優品については、県民の財産として末永く後世に伝えるために保存処理が行われ、展示・公開をしております。

また、こうした情報豊かな遺跡をさらに詳しく解明するため、地質学や植物学などの関連諸科学の協力を得て調査・分析を行い、貴重な成果を収めることができました。

この報告が今後の縄文時代史の研究に資すると共に、県民の皆様が“青田ムラから見える縄文文化”について一層の理解と関心を深めていただければ幸いです。

最後に、この発掘調査に際し多大なご協力と援助を賜りました加治川村教育委員会・青田遺跡調査検討委員会、ならびに発掘調査に参加された地元の方々、また、調査から報告書刊行に至るまで格別のご配慮を賜りました日本道路公団北陸支社、同新潟工事事務所などの関係機関に対して厚く御礼を申し上げます。

平成16年3月

新潟県教育委員会

教　育　長　板屋越　麟一

例　　言

1　本書は新潟県北蒲原郡加治川村大字金塚字青田985番地1ほかに所在する『青田遺跡』の発掘調査報告書であり、3分冊から構成されるうちの「本文・観察表編」である。

2　発掘調査は日本海沿岸東北自動車道（以下、日東道）の建設に伴うものであり、新潟県教育委員会（以下、県教委）が日本道路公団から受託して実施したものである。

3　発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を委託し、平成9・10年度に確認調査、平成11～13年度に本発掘調査を行った。発掘調査対象面積は14,160㎡であり、複数層で行った調査面積は延べ48,260㎡である。

4　発掘調査作業及び関連諸工事は株式会社 吉田建設に委託した。調査に参加していただいた作業員は加治川村・紫雲寺町・中条町・黒川村・新発田市在住の方々で、3年間で延べ34,826人（1日最多126人）に上る。

5　本書で示す方位はすべて真北である。グリッドの長軸方向は真北から東偏14°22′40″である。

6　発掘調査での航空写真は、スカイパルと株式会社 イビソクに委託した。遺物の取り上げ（ドット取り上げ）や遺構の図化はコンピューターシステム株式会社作成のプログラム「SITE」を用いた。なお、ドット番号は年度ごとに通し番号を付した。

7　遺物の註記は、遺跡名を「アオタ」とし、各調査年度（西暦の下2ケタ）・出土地点・遺構名・層位名・ドット番号を記入した。なお、平成12年に調査を行ったB区出土遺物には00年の註記を記入しているが、ドット番号は99年度のものに続けて通し番号を付した。

8　本格的な整理及び報告書作成にかかる作業は、平成13～15年度に実施し、埋文事業団職員がこれに当たった。ただし、平成13年度に行った土器の接合作業は株式会社 吉田建設に委託した。また、遺物写真図版の一部と実測用写真の撮影・印画は、小川忠博氏及び株式会社 セビアスに委託した。

9　出土遺物と調査に関わる資料は、すべて県教委が新潟県埋蔵文化財センターで保管・管理している。なお、遺構・遺物の基礎データは公開する予定である。

10　文中の注はすべて脚注とし、節ごとに番号を付した。引用・参考文献は、著者及び発行年を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。ただし、本文・観察表編第Ⅶ章1・2及び関連諸科学・写真図版編の各項目については節ごとに掲載した。また、掲載した地図や写真のうち、既成のものはそれぞれ出典を記した。

11　遺物番号は土器・土製品、石器・石製品、木製品・編物製品、漆製品、植物遺体、動物遺体・昆虫遺体、弥生時代以降の遺物でそれぞれ通し番号とした。図面図版と写真図版の遺物番号は一致する。

12　剥片石器の実測、遺構図・遺物図（剥片石器・木製品・編物製品・漆製品の一部）のトレース、各種図版の作成・編集に関しては、株式会社 セビアスに委託し、完成データを株式会社 第一印刷所に渡して印刷した。

13　次に示す項目は、個人・機関に分析を委託し、玉稿を賜った。

本文・観察表編

第Ⅶ章　1　青田遺跡の住居と集落……宮本長二郎（東北芸術工科大学）

2　青田遺跡の木質遺物から議論できること

－西紀前一千年紀における木・繊維製品関連技術系の交錯－……山田昌久（東京都立大学）

関連諸科学・写真図版編

第Ⅰ章　1　青田遺跡の立地環境と紫雲寺地域の沖積低地の発達過程……

高濱信行・卜部厚志（新潟大学積雪地域災害研究センター）

2　土壌分析からみる地表環境と人為の痕跡……坂上寛一（東京農工大学名誉教授）

第Ⅱ章　1　青田遺跡における縄文時代晩期以降の花粉化石群……吉川昌伸（古代の森研究舎）

2　青田遺跡より産出した大型植物化石からみた古環境と植物利用……吉川純子（古代の森研究舎）

3　青田遺跡出土木材の樹種……
鈴木三男・小川とみ（東北大学大学院理学研究科附属植物園）
能城修一（独立行政法人 森林総合研究所）
4　プラント・オパール分析
A　SD1420右岸1地区とSX51における分析 ……江口誠一（千葉県立中央博物館）
5　珪藻分析……安井　賢（新潟基礎工学研究所）
6　青田遺跡出土クリ遺体のDNA分析 ……
坂平文博（名古屋大学大学院情報科学研究科博士後期課程）
新美倫子（名古屋大学博物館）
7　青田遺跡の植物的自然と植物資源……鈴木三男（前掲）
第Ⅲ章　青田遺跡出土の動物遺体……西本豊弘・小林園子（国立歴史民俗博物館）
第Ⅴ章　1　青田遺跡出土黒曜石製石器、石材の原産地分析……藁科哲男（京都大学原子炉実験所）
2　青田遺跡出土玉類の非破壊分析による組成分析と原材産地分析……藁科哲男（前掲）
3　青田遺跡出土琥珀の分析 ……植田直見（財団法人 元興寺文化財研究所）
4　青田遺跡出土の天然アスファルトの化学分析による産地推定……
小笠原正明（北海道大学高等教育機能開発総合センター）
第Ⅵ章　青田遺跡出土漆関係資料について……永嶋正春（国立歴史民俗博物館）
第Ⅶ章　1　植物遺体の放射性炭素年代測定による青田遺跡の編年……辻　誠一郎（国立歴史民俗博物館）
2　青田遺跡における柱根の年輪年代学的解析による建物群の年代関係の検討……
木村勝彦（福島大学教育学部）
斉藤智治（聖光学院高等学校）
中村俊夫（名古屋大学年代測定総合研究センター）
3　青田遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定
－柱根のAMS^{14}C年代測定と^{14}Cウイグルマッチングを中心にして－ ……
中村俊夫（前掲）、木村勝彦（前掲）
4　青田遺跡出土土器付着試料の^{14}C年代測定……
小林謙一（総合研究大学院大学博士後期課程）
今村峯雄・坂本　稔（国立歴史民俗博物館）
松崎浩之（東京大学原子力研究総合センター）

14　次に示す項目は、機関に分析を委託した。

関連諸科学・写真図版編
第Ⅱ章　4　プラント・オパール分析
B　SD1420右岸3・左岸地区における分析……株式会社 古環境研究所
C　土器胎土中における分析……パリノ・サーヴェイ 株式会社
第Ⅳ章　青田遺跡出土土器の胎土分析 ……パリノ・サーヴェイ 株式会社

15　本書の執筆は荒川隆史（埋文事業団主任調査員）、加藤　学（新潟県教育庁文化行政課）、赤塚　亨（山の下小学校教諭）、石丸和正（埋文事業団嘱託員）、猪狩俊哉（同嘱託員）がこれに当たり、編集は荒川が担当した。執筆分担は以下の通りである。

第Ⅱ章3.A…赤塚
第Ⅴ章5.B.2）･･･加藤・猪狩
第Ⅱ章3.B（弥生時代以降）、第Ⅴ章5・7.B・8、第Ⅵ章2、第Ⅶ章5･･･猪狩
第Ⅱ章3.B（縄文時代）、第Ⅴ章2・3・4・6・9・10、第Ⅶ章4･･･石丸
第Ⅰ章、第Ⅱ章1・2、第Ⅲ章、第Ⅳ章、第Ⅴ章1・7.A、7.C～I、第Ⅵ章1、第Ⅶ章3・6･･･荒川

16　本遺跡の調査成果は、平成12年度に行われたシンポジウムの資料集、及び下記の刊行物で一部紹介されているが、内容に齟齬がある場合は、本報告書の記載内容を持って正式な報告とする。

埋文事業団・県教委　2002　『シンポジウム「よみがえる青田遺跡」資料集　川辺の縄文集落』埋文事業団・県教委
荒川隆史　　2002　「青田遺跡発掘調査概要」・「新潟県における縄文晩期のムラ・墓・建物」同上

石川日出志　2002　「青田遺跡の土器を読む」同上
木村勝彦・村越健一・中村俊夫　2002　「青田遺跡の柱根を用いた年輪年代学的研究」同上
小林達雄　　2002　「縄文世界の青田遺跡」同上
坂上寛一　　2002　「土壌分析からみる地表環境と人為の痕跡」同上
鈴木三男・吉川昌伸・吉川純子・小川とみ　2002　「青田遺跡の植物的自然と縄文人の植物資源」同上
高濱信行・卜部厚志　2002　「湖底に沈んだ縄文遺跡－青田遺跡の立地環境」同上
辻　誠一郎　2002　「青田遺跡の暦年代を知るために－放射性炭素年代の測定－」同上
永嶋正春　　2002　「青田遺跡の漆製品・漆要具」同上
前山精明　　2002　「青田遺跡の石器群」同上
宮本長二郎　2002　「青田遺跡の住居と集落」同上
山田昌久　　2002　「木器・木造施設に見る青田縄文人のくらし」同上
赤塚　亨　　2000　「青田遺跡－川べりに築かれた縄文晩期終末の集落跡－」『埋文にいがた』No.33　埋文事業団
荒川隆史　　2000a「遺跡だより青田遺跡」『埋文にいがた』No.29　埋文事業団
2000b「青田遺跡調査速報－その２－」『埋文にいがた』No.31　埋文事業団
2000c「青田遺跡縄文時代晩期の木製品」『埋文にいがた』No.32　埋文事業団
2000d「青田遺跡」『遺跡が語る縄文社会』青森県教育庁文化課三内丸山遺跡対策室
2000e「青田遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成11年度　埋文事業団
2000f「青田遺跡」『発掘調査報告会2000』埋文事業団
2001a「新潟県加治川村青田遺跡の調査」『考古学ジャーナル』No.480　ニューサイエンス社
2001b「青田」『2001発掘された日本列島』文化庁
2001c「青田遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成12年度　埋文事業団
2001d「青田遺跡－縄文時代の晩期の集落－」『第８回発掘調査報告会資料』埋文事業団
2001e「青田遺跡－低地集落の構造が明らかに－」『埋文にいがた』No.36　埋文事業団
2001f「青田遺跡にみる縄文の建築」『文化遺産の世界』２号 国際航業株式会社
2001g「新潟県青田遺跡の調査」『亀ヶ岡文化－集落とその実体－日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集』日本考古学協会
2002　「青田遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成13年度　埋文事業団
石丸和正　　2003　「青田遺跡」『埋文にいがた』No.45　埋文事業団
小浜　亨　　2000　「青田遺跡－掘立柱建物建物跡の概要－」『埋文にいがた』No.30　埋文事業団
坂上寛一　　2001　「青田遺跡東側ベルト土層における炭素含有量の垂直分布」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成12年度　埋文事業団
鈴木三男　　2001　「青田遺跡の木材遺体群集」同上
高濱信行・卜部厚志　2001　「青田遺跡のベルトセクションにおける河川流路の変遷と変形過程」同上
埋文事業団　1999　『青田遺跡現地説明会～縄文時代終末から平安時代の遺跡～』埋文事業団
2000a『青田遺跡現地説明会～潟底から甦った縄文時代晩期終末の掘立柱建物～』埋文事業団
2000b『青田遺跡現地説明会～川べりに築かれた縄文晩期終末の集落跡～』埋文事業団
2000c『第４回青田遺跡現地説明会～川べりに築かれた縄文晩期終末の集落跡～』埋文事業団
松井　智　　2001　「青田遺跡」『埋文にいがた』No.35　埋文事業団
吉川純子　　2001　「青田遺跡大型植物化石分析中間報告」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成12年度　埋文事業団
吉川純子・鈴木三男・荒川隆史　2000　「縄文時代後晩期における堅果類の形態と割り方」『日本植生史学会 2000年大会 講演要旨集』日本植生史学会
吉川昌伸　　2001　「花粉化石群から見た縄文晩期の植生史及び土坑の利用に関するコメント」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成12年度　埋文事業団

17　発掘調査から本報告書の作成まで多数の方々や関係機関にご教示・ご助言を頂いた。ここに全氏名を記して感謝の意を表すべきものだが、多数にのぼるため一部割愛させて頂いた。ご了承願いたい。（敬称略・五十音順）
岩手県立博物館　　大船渡市立博物館　　加治川村教育委員会　　加治川村土地改良区　　黒川村教育委員会

紫雲寺町教育委員会　新発田市教育委員会　財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
豊栄市博物館　中条町教育委員会　日本道路公団新潟工事事務所　日本道路公団北陸支社
弘前市教育委員会　八戸市教育委員会　八戸市博物館　安田町教育委員会
財団法人 山形県埋蔵文化財センター　山形県立博物館

相沢　央	青山宏夫	赤澤徳明	赤羽正春	浅川滋男	安部　実	甘粕　健	五十嵐一治
石井　寛	磯部保衛	市原寿文	伊藤　崇	伊藤隆三	稲野裕介	上野修一	上屋眞一
江原　英	小川忠博	小熊博史	奥山一絵	長田友也	押山雄三	金子昭彦	金子拓男
木下哲夫	工藤竹久	桑野春雄	小久保拓也	小林和彦	小林圭一	小林昌二	小林正史
小林　克	小林幸雄	齋藤基生	齋藤義弘	酒井亜紀	坂井秀弥	坂野井絵里	佐藤雅一
佐藤嘉広	設楽博己	関　雅之	高木　晃	高島成侑	高田　勝	高橋龍三郎	田口　尚
田中耕作	谷口宗治	種市幸生	勅使河原彰	出口晶子	富樫泰時	富岡直人	中沢道彦
中村　大	中村良幸	長森英明	名久井文明	西田泰民	布尾和史	久田正弘	平川　南
松井　章	松井敏也	松本一男	水澤幸一	水ノ江和同	宮尾　享	宮路淳子	武藤康弘
村木　淳	百瀬長秀	八木勝枝	矢田俊文	山口博之	山本直人	渡邊朋和	渡辺　誠

目　　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調　査　経　過 …… 4

A　一　次　調　査 …… 4

B　用水路工事立会い調査 …… 4

C　二　次　調　査 …… 6

3　調　査　体　制 …… 8

4　青田遺跡調査検討委員会 …… 8

A　設置の経緯と目的 …… 8

B　調査検討委員会の構成と検討項目 …… 8

C　調査検討委員会の活動 …… 8

D　公開シンポジウムの開催 …… 10

5　整　理　体　制 …… 11

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 12

1　遺　跡　の　位　置 …… 12

2　地　理　的　環　境 …… 12

3　歴　史　的　環　境 …… 15

A　阿賀北地域における遺跡の分布と立地 …… 15

B　周　辺　の　遺　跡 …… 19

第Ⅲ章　調　査　の　概　要 …… 24

1　概　　観 …… 24

A　遺　跡　の　時　期 …… 24

B　遺跡の地区呼称について …… 24

C　遺構・遺物の検出状況 …… 24

2　グリッドの設定 …… 25

3　発掘調査の方法 …… 26

4　層　　序 …… 27

A　は　じ　め　に …… 27

B　基　本　層　序 …… 27

C　河川跡の層序 …… 33

D　各地区の層位関係 …… 36

5　簡易ボーリング調査 …… 38

6　地震動による液状化 …… 40

第Ⅳ章　遺　　構 …… 42
1　記述の方法 …… 42
A　方　　針 …… 42
B　遺構番号 …… 42
C　図　　版 …… 42
D　観察表 …… 43
E　遺構の分類 …… 44
2　SD19右岸地区の遺構 …… 47
A　概　　要 …… 47
B　掘立柱建物 …… 47
C　土坑・ピット …… 48
D　埋設土器 …… 49
E　炭化物集中範囲 …… 49
3　SD19左岸地区の遺構 …… 49
A　概　　要 …… 49
B　掘立柱建物 …… 50
C　土坑・ピット …… 53
D　埋設土器 …… 54
E　炭化物集中範囲 …… 54
F　堅果類廃棄範囲・性格不明遺構 …… 54
4　中央地区の遺構 …… 55
A　概　　要 …… 55
B　埋設土器 …… 55
C　炭化物集中範囲 …… 56
D　その他のピット …… 57
5　SD1420右岸１・２地区の遺構 …… 57
A　概　　要 …… 57
B　掘立柱建物 …… 58
C　土　　坑 …… 68
D　埋設土器 …… 72
E　柱穴列・柱穴 …… 72
F　炭化物集中範囲 …… 73
G　堅果類廃棄範囲・性格不明遺構 …… 73
6　SD1420右岸３地区の遺構 …… 75
A　概　　要 …… 75
B　掘立柱建物 …… 75
C　土坑・ピット …… 77
D　炭化物集中範囲・生粘土 …… 78
E　堅果類廃棄範囲 …… 79
7　SD1420左岸地区の遺構 …… 79
A　概　　要 …… 79
B　掘立柱建物 …… 80
C　土　　坑 …… 83
D　柱穴列 …… 84
E　埋設土器 …… 84

F　柱　　穴 …… 85
G　堅果類廃棄範囲 …… 85
H　木造施設・木製品 …… 86

第Ⅴ章　遺　　物 …… 88

1　土　　器 …… 88
A　記 述 の 方 法 …… 88
B　SD19右岸地区の土器 …… 102
C　SD19左岸地区・SD19の土器 …… 103
D　中央地区の土器 …… 108
E　SD1420右岸１地区の土器 …… 112
F　SD1420右岸２地区の土器 …… 119
G　SD1420右岸３地区の土器 …… 123
H　SD1420左岸地区の土器 …… 125
I　SD1420川底の土器 …… 128
J　その他の土器 …… 131

2　土　製　品 …… 133
A　分布と出土状況 …… 133
B　各器種の説明 …… 133

3　石　　器 …… 137
A　記 述 の 方 法 …… 137
B　石器の分布と組成及び石材環境 …… 144
C　SD19右岸地区の石器 …… 146
D　SD19左岸地区の石器 …… 146
E　中央地区の石器 …… 154
F　SD1420右岸１・２地区の石器 …… 161
G　SD1420右岸３地区の石器 …… 170
H　SD1420左岸地区の石器 …… 172
I　SD1420川底の石器 …… 176

4　石製品・自然礫 …… 178
A　分布と出土状況 …… 178
B　各器種の説明 …… 178

5　木　製　品 …… 183
A　記 述 の 方 法 …… 183
B　柱根・礎板・根絡み …… 186
C　成品・部材と加工材・加工材片 …… 200

6　編　物　製　品 …… 209
A　は　じ　め　に …… 209
B　各編物製品の説明 …… 210
C　網　代　痕 …… 212

7　漆製品・漆要具 …… 213
A　は　じ　め　に …… 213
B　赤漆塗り糸玉 …… 213
C　結 歯 式 竪 櫛 …… 216
D　腕輪状漆製品 …… 217

E　赤彩された貝殻 …… 219
F　漆　塗　り　弓 …… 219
G　その他の漆製品 …… 219
H　赤彩土器・漆容器 …… 219
I　赤 色 顔 料 塊 …… 220
8　植　物　遺　体 …… 221
A　ウォーター・セパレーション …… 221
B　植　物　遺　体 …… 221
9　動物遺体・昆虫遺体 …… 230
A　動　物　遺　体 …… 230
B　昆　虫　遺　体 …… 231
10　アスファルト …… 232
A　アスファルト塊・アスファルト入り土器 …… 232
B　黒色付着物（アスファルト）が認められる石器・石製品 …… 232
第Ⅵ章　弥生時代以降の遺構・遺物 …… 233
1　遺　　構 …… 233
A　遺構の検出状況 …… 233
B　遺　構　各　説 …… 233
2　遺　　物 …… 235
A　土　　器 …… 235
B　土　製　品 …… 236
C　金　属　製　品 …… 236
D　木　製　品 …… 236
第Ⅶ章　ま　と　め …… 241
1　青田遺跡の住居と集落 …… 241
A　は　じ　め　に …… 241
B　青田遺跡の住居形式と集落構成 …… 241
C　掘 立 柱 形 式 …… 244
D　壁　構　造 …… 246
E　亀甲型住居の復元 …… 247
F　ま　と　め …… 248
2　青田遺跡の木質遺物から議論できること
…西紀前一千年紀における木・繊維製品関連技術系の交錯… …… 249
A　調査成果と西紀前一千年紀研究の課題 …… 249
B　社会論未成熟の「縄文時代→弥生時代」接続法の限界 …… 250
C　人類・社会の認識と考古学者の仕事 …… 252
D　西紀前一千年紀の木・繊維製品 …… 252
E　小　　結 …… 258
3　青田遺跡における縄文時代晩期終末の土器編年 …… 261
A　は　じ　め　に …… 261
B　時間軸の設定 …… 261
C　各器種の変遷 …… 262

D　変遷の画期 …… 273
E　県内出土の縄文時代晩期終末の土器との並行関係 …… 274
F　編年的位置付けと地域性 …… 278

4　青田遺跡出土石器群の器種組成と石材組成 …… 282
A　器種組成 …… 282
B　石材について …… 284
C　各器種の特徴 …… 285
D　磨製石斧について …… 287
E　鳥屋遺跡との比較 …… 289
F　結　　語 …… 290

5　青田遺跡における柱根から見た木材利用と木製品の様相 …… 291
A　柱根の各項目の傾向と掘立柱建物との関係 …… 291
B　木製品の様相 …… 299

6　青田遺跡の集落と生業 …… 301
A　はじめに …… 301
B　集落の立地 …… 301
C　集落の変遷 …… 301
D　掘立柱建物の構造と機能 …… 307
E　青田集落の生業 …… 308
F　阿賀北地域における縄文時代晩期の生業活動 …… 310

《要　　約》 …… 312

《引用・参考文献》 …… 313

《観　察　表》 …… 320
遺構観察表
土器観察表
石器・石製品観察表
木製品観察表
漆製品観察表
漆要具観察表
貝殻観察表
弥生時代以降の遺構観察表
弥生時代以降の遺物観察表

挿図目次

第 1 図　青田遺跡の位置 …… 2
第 2 図　青田遺跡の調査位置 …… 3
第 3 図　一次調査の試掘トレンチ位置図 …… 5
第 4 図　用水路工事立会い調査及び二次調査範囲図 …… 5
第 5 図　阿賀北地域の地形と縄文時代後晩期の主要遺跡 …… 13
第 6 図　正保2（1645年）越後国絵図の復元図 …… 14
第 7 図　中条町の平均気温・降水量 1979～2000年の平均値 …… 14

第 8 図　阿賀北地域における縄文時代の遺跡分布 …… 16
第 9 図　阿賀北地域における弥生時代～奈良・平安時代の遺跡分布 …… 17
第10図　周辺遺跡地図　縄文時代 …… 20
第11図　周辺遺跡地図　弥生時代～奈良・平安時代 …… 22
第12図　地区の呼称 …… 24
第13図　グリッド設定図 …… 25
第14図　土層柱状図（1） …… 30
第15図　土層柱状図（2） …… 31
第16図　土層柱状図（3） …… 32
第17図　SD1420の層序模式図 …… 34
第18図　層序対応図 …… 37
第19図　簡易ボーリング地点と遺跡推定範囲 …… 38
第20図　簡易ボーリング調査柱状図（1） …… 39
第21図　簡易ボーリング調査柱状図（2） …… 40
第22図　各層における液状化 …… 41
第23図　遺構の平面・断面形態の分類 …… 43
第24図　遺構覆土の堆積形状の分類 …… 43
第25図　柱穴と柱根の関係 …… 43
第26図　掘立柱建物の分類と計測位置 …… 45
第27図　土坑群位置図 …… 46
第28図　SD19右岸地区の掘立柱建物主軸方位 …… 47
第29図　SD19左岸地区の掘立柱建物主軸方位 …… 49
第30図　SD1420右岸１・２地区の掘立柱建物主軸方位 …… 57
第31図　SD1420右岸３地区の掘立柱建物主軸方位 …… 75
第32図　SD1420左岸地区の掘立柱建物主軸方位 …… 79
第33図　SK2372底面の施設構造 …… 84
第34図　器種分類と部位の呼称 …… 90
第35図　施文手法の分類 …… 90
第36図　土器の法量 …… 91
第37図　土器の容量 …… 91
第38図　口縁形態 …… 92
第39図　突起の分類 …… 92
第40図　浅鉢の器形分類 …… 93
第41図　浅鉢の文様分類模式図 …… 93
第42図　浅鉢文様２～６類の文様模式図 …… 93
第43図　浮線文の段数の数え方 …… 95
第44図　浅鉢文様１類浮線文の種類模式図 …… 96
第45図　鉢の器形分類 …… 97
第46図　甕の器形分類 …… 98
第47図　甕の文様帯構成と文様種類の関係模式図 …… 98
第48図　綾杉文及び関連する沈線文の分類模式図 …… 99
第49図　深鉢の器形分類 …… 100
第50図　深鉢の文様分類模式図 …… 100
第51図　壺の器形分類 …… 101
第52図　土製品出土分布状況（S4～S3層期） …… 133
第53図　土製品出土分布状況（S1層期） …… 134
第54図　焼成粘土塊出土分布状況 …… 135
第55図　焼成粘土塊長幅分布図 …… 136

第56図　焼成粘土塊重量別個体数 ……136
第57図　焼成粘土塊分類別断面状況 ……136
第58図　スクリーントーン凡例 ……137
第59図　各器種の計測位置 ……138
第60図　石鏃分類図 ……139
第61図　石鏃欠損模式図 ……139
第62図　石錐分類図 ……140
第63図　両極石器分類図 ……140
第64図　不定形石器分類図 ……141
第65図　打製石斧分類図 ……141
第66図　磨製石斧刃部平面形模式図 ……142
第67図　磨製石斧基部形状模式図 ……142
第68図　磨製石斧縦断面・横断面・欠損模式図 ……142
第69図　磨製石斧分類図 ……142
第70図　磨石類分類模式図 ……143
第71図　多面体敲石分類図 ……143
第72図　砥石分類図 ……143
第73図　石皿類分類図 ……143
第74図　石核分類図 ……144
第75図　石材重量比 ……145
第76図　SD19左岸地区　石器出土分布図（S4～S3層期）……148
第77図　SD19左岸地区　石器出土分布図（S1層期）……148
第78図　SD19左岸地区　石鏃長幅分布図……149
第79図　SD19左岸地区　石鏃未成品長幅分布図……149
第80図　SD19左岸地区　石錐長幅分布図……150
第81図　SD19左岸地区　両極石器長幅分布図……150
第82図　SD19左岸地区　不定形石器長幅分布図1 ……151
第83図　SD19左岸地区　不定形石器長幅分布図2 ……151
第84図　SD19左岸地区　磨石類長幅分布図……152
第85図　SD19左岸地区　石核長幅分布図……153
第86図　中央地区　石鏃長幅分布図 ……155
第87図　中央地区　石器出土分布図（S4～S3層期）……156
第88図　中央地区　石器出土分布図（S1層期）……156
第89図　中央地区　石鏃未成品長幅分布図 ……157
第90図　中央地区　石錐長幅分布図 ……157
第91図　中央地区　両極石器長幅分布図 ……158
第92図　中央地区　不定形石器長幅分布図1……159
第93図　中央地区　不定形石器長幅分布図2……159
第94図　中央地区　磨石類長幅分布図 ……160
第95図　SD1420右岸1・2地区　石鏃長幅分布図 ……162
第96図　SD1420右岸1・2地区　石器出土分布図（S4～S3層期）……163
第97図　SD1420右岸1・2地区　石器出土分布図（S1層期）……164
第98図　SD1420右岸1・2地区　石鏃未成品長幅分布図 ……165
第99図　SD1420右岸1・2地区　石錐長幅分布図 ……165
第100図　SD1420右岸1・2地区　両極石器長幅分布図 ……166
第101図　SD1420右岸1・2地区　不定形石器長幅分布図1 ……167
第102図　SD1420右岸1・2地区　不定形石器長幅分布図2 ……167
第103図　SD1420右岸1・2地区　磨石類長幅分布図 ……168

第104図　SD1420右岸1・2地区　石核長幅分布図 ……169
第105図　SD1420右岸3地区　石器出土分布図（S1層期）……171
第106図　SD1420左岸地区　石器出土分布図（S4～S3層期）……173
第107図　SD1420左岸地区　石器出土分布図（S1層期）……173
第108図　SD1420左岸地区　石鏃長幅分布図 ……174
第109図　SD1420左岸地区　不定形石器長幅分布図1……174
第110図　SD1420左岸地区　不定形石器長幅分布図2……174
第111図　各器種の計測位置と部位名称 ……178
第112図　玉類分類図 ……178
第113図　玉類出土分布状況 ……179
第114図　東北地方の管玉 ……179
第115図　石製品出土分布状況 ……180
第116図　各器種別の部位名称 ……184
第117図　木取り及び木材一般の部分名称 ……184
第118図　木取りの分類 ……184
第119図　容器などの木取り ……184
第120図　斧入り付近の腐蝕の図化 ……184
第121図　加工痕の図化 ……184
第122図　樹皮・炭化・切り残し痕の表示 ……184
第123図　切り残し痕の形成 ……184
第124図　尖度 ……187
第125図　側面形態の分類 ……187
第126図　加工配列の分類 ……187
第127図　加工面構成の分類 ……188
第128図　加工痕の計測部位 ……188
第129図　溝にかかる各部名称 ……188
第130図　木製品の分布状況 ……202
第131図　丸木舟の木取り ……203
第132図　編物製品出土分布 ……209
第133図　編み方模式図 ……209
第134図　筌状編物（321）復元図 ……211
第135図　縦材同士の間隔 ……212
第136図　横材同士の間隔 ……212
第137図　赤漆塗り糸玉の分布 ……214
第138図　結び方 ……215
第139図　赤漆塗り糸玉の分類 ……215
第140図　結歯式竪櫛の各部位の名称と位置 ……217
第141図　漆製品・漆要具の分布 ……218
第142図　各種実の部位名称 ……221
第143図　各種実の大きさ ……223
第144図　遺跡全体層位別種実組成（推定個体数）……223
第145図　堅果類推定個体数 ……224
第146図　SX内出土種実平面分布 ……226
第147図　クリ破損・潰れ模式図 ……227
第148図　クリ破損と潰れの関係 ……227
第149図　トチノキ潰れ模式図 ……227
第150図　トチノキ破損と潰れの関係 ……227
第151図　オニグルミ破損分類模式図 ……227

第152図　オニグルミ破損比 ……227
第153図　オニグルミワレ分類比 ……227
第154図　貝殻各部の名称 ……231
第155図　曲物 ……237
第156図　青田遺跡掘立柱住居平面類型 ……241
第157図　住居類型別規模分布図 ……243
第158図　青田遺跡の掘立柱住居復元図 ……247
第159図　浅鉢の浮線文種類の消長 ……262
第160図　浮線文交点の調整手法模式図 ……263
第161図　浅鉢・鉢・台付浅鉢の変遷 ……264
第162図　甕の変遷 ……268
第163図　深鉢の変遷 ……271
第164図　壺の変遷 ……272
第165図　県内出土の縄文時代晩期終末の土器（1）……276
第166図　県内出土の縄文時代晩期終末の土器（2）……277
第167図　層位別器種組成 ……282
第168図　層位別剥片類分布 ……282
第169図　S4～S3層期　地区別器種組成 ……282
第170図　S1層期　地区別器種組成 ……282
第171図　層位別出土遺物 ……283
第172図　縄文時代後期～晩期遺跡器種組成 ……284
第173図　縄文時代後期～晩期遺跡分布図 ……284
第174図　層位別石器・剥片類石材組成 ……285
第175図　石鏃ＡⅠ類長幅分布 ……286
第176図　石鏃分類別石材組成 ……286
第177図　磨石類（長幅比2.0以上）長幅分布……286
第178図　磨石類（長幅比2.0以上）幅厚分布……286
第179図　紡錘形磨石類推定製作工程 ……287
第180図　周辺遺跡出土磨製石斧長幅分布 ……288
第181図　周辺遺跡出土磨製石斧基部幅比・長幅比 ……288
第182図　鳥屋遺跡と青田遺跡の器種組成 ……290
第183図　鳥屋遺跡石材組成 ……290
第184図　六野瀬遺跡石材組成 ……290
第185図　柱根・根絡み・礎板の利用樹種組成 ……291
第186図　柱根の木取り別樹種組成 ……292
第187図　礎板・根絡みの木取り組成 ……292
第188図　柱根の長さの分布 ……293
第189図　柱根の樹種別太さの分布 ……293
第190図　位置別の柱根の太さ（SB平面形Ａ・Ｃ類）……293
第191図　位置別の柱根の太さ（SB平面形Ｂ類）……294
第192図　母屋における柱根の太さと平面積の関係 ……294
第193図　柱根の尖度の分布 ……294
第194図　尖度と太さの関係 ……294
第195図　位置別の柱根の尖度（SB平面形Ａ・Ｃ類）……295
第196図　位置別の柱根の尖度（SB平面形Ｂ類）……295
第197図　母屋における柱根の平均尖度と 平面積の関係……295
第198図　側面形態・加工痕配列・加工面構成の類別組成 ……295
第199図　加工痕の長さと幅 ……297

第200図　本遺跡出土の磨製石斧の刃部幅 ……297
第201図　加工痕縦断面の類別組成 ……297
第202図　溝の類別組成 ……297
第203図　溝付柱根の樹種別太さの分布 ……297
第204図　溝付柱根の太さと高さ ……297
第205図　樹皮付柱根の太さの分布 ……298
第206図　掘立柱建物の構築時期 ……304
第207図　土坑群５・６の変遷……306
第208図　阿賀北地域の平野部における生業モデル ……310

表　目　次

第 1 表　調査体制……9
第 2 表　青田遺跡調査検討委員会組織表 ……10
第 3 表　調査検討委員会の開催 ……10
第 4 表　公開シンポジウムの内容 ……10
第 5 表　整理体制 ……11
第 6 表　基本層序 ……29
第 7 表　遺物包含層Ⅶｃ・Ⅶｄ層の細分……29
第 8 表　覆土の分類 ……43
第 9 表　中央地区出土土器の層位別ドット数 ……89
第10表　土製品観察表 ……134
第11表　石器遺跡全体層位別器種組成表 ……145
第12表　石器遺跡全体石材別器種組成表 ……145
第13表　SD19右岸地区　層位別器種組成表……146
第14表　SD19右岸地区　石材別器種組成表……146
第15表　SD19左岸地区　層位別器種組成表……147
第16表　SD19左岸地区　石材別器種組成表……147
第17表　SD19左岸地区　石鏃層位別分布表……147
第18表　SD19左岸地区　石鏃厚さ分布表……149
第19表　SD19左岸地区　石鏃重量分布表……149
第20表　SD19左岸地区　石鏃未成品厚さ分布表……149
第21表　SD19左岸地区　石鏃未成品重量分布表……149
第22表　SD19左岸地区　石錐層位別分布表……150
第23表　SD19左岸地区　石錐厚さ分布表……150
第24表　SD19左岸地区　石錐重量分布表……150
第25表　SD19左岸地区　両極石器厚さ分布表……150
第26表　SD19左岸地区　両極石器重量分布表……150
第27表　SD19左岸地区　不定形石器層位別分布表……151
第28表　SD19左岸地区　不定形石器厚さ分布表……151
第29表　SD19左岸地区　不定形石器重量分布表……151
第30表　SD19左岸地区　磨石類層位別分布表……152
第31表　SD19左岸地区　磨石類厚さ分布表……152
第32表　SD19左岸地区　磨石類重量分布表……152
第33表　SD19左岸地区　石核厚さ分布表……153
第34表　SD19左岸地区　石核重量分布表……153
第35表　中央地区　層位別器種組成表 ……154

第36表　中央地区　石材別器種組成表 ……155
第37表　中央地区　石鏃層位別分布表 ……155
第38表　中央地区　石鏃厚さ分布表 ……155
第39表　中央地区　石鏃重量分布表 ……155
第40表　中央地区　石鏃未成品厚さ分布表 ……157
第41表　中央地区　石鏃未成品重量分布表 ……157
第42表　中央地区　石錐層位別分布表 ……157
第43表　中央地区　石錐厚さ分布表 ……157
第44表　中央地区　石錐重量分布表 ……157
第45表　中央地区　両極石器厚さ分布表 ……158
第46表　中央地区　両極石器重量分布表 ……158
第47表　中央地区　不定形石器層位別分布表 ……159
第48表　中央地区　不定形石器厚さ分布表 ……159
第49表　中央地区　不定形石器重量分布表 ……159
第50表　中央地区　磨石類層位別分布表 ……160
第51表　中央地区　磨石類厚さ分布表 ……160
第52表　中央地区　磨石類重量分布表 ……160
第53表　SD1420右岸1・2地区　層位別器種組成表 ……161
第54表　SD1420右岸1・2地区　石材別器種組成表 ……162
第55表　SD1420右岸1・2地区　石鏃層位別分布表 ……162
第56表　SD1420右岸1・2地区　石鏃厚さ分布表 ……162
第57表　SD1420右岸1・2地区　石鏃重量分布表 ……162
第58表　SD1420右岸1・2地区　石鏃未成品厚さ分布表 ……165
第59表　SD1420右岸1・2地区　石鏃未成品重量分布表 ……165
第60表　SD1420右岸1・2地区　石錐層位別分布表 ……165
第61表　SD1420右岸1・2地区　石錐厚さ分布表 ……165
第62表　SD1420右岸1・2地区　石錐重量分布表 ……165
第63表　SD1420右岸1・2地区　両極石器厚さ分布表 ……166
第64表　SD1420右岸1・2地区　両極石器重量分布表 ……166
第65表　SD1420右岸1・2地区　不定形石器層位別分布表 ……167
第66表　SD1420右岸1・2地区　不定形石器厚さ分布表 ……167
第67表　SD1420右岸1・2地区　不定形石器重量分布表 ……167
第68表　SD1420右岸1・2地区　磨石類層位別分布表 ……168
第69表　SD1420右岸1・2地区　磨石類厚さ分布表 ……168
第70表　SD1420右岸1・2地区　磨石類重量分布表 ……168
第71表　SD1420右岸1・2地区　石核厚さ分布表 ……169
第72表　SD1420右岸1・2地区　石核重量分布表 ……169
第73表　SD1420右岸3地区　層位別器種組成表 ……170
第74表　SD1420右岸3地区　石材別器種組成表 ……170
第75表　SD1420左岸地区　層位別器種組成表 ……172
第76表　SD1420左岸地区　石材別器種組成表 ……172
第77表　SD1420左岸地区　石鏃厚さ分布表 ……174
第78表　SD1420左岸地区　石鏃重量分布表 ……174
第79表　SD1420左岸地区　不定形石器厚さ分布表 ……174
第80表　SD1420左岸地区　不定形石器重量分布表 ……174
第81表　SD1420川底　層位別器種組成表 ……177
第82表　SD1420川底　石材別器種組成表 ……177
第83表　編物製品観察表 ……212

第84表　各地区における遺構・層位別の漆糸出土量 ……213
第85表　SX出土種実一覧 ……225
第86表　P・SK最下層出土オニグルミ一覧 ……228
第87表　アスファルト塊・アスファルト入り土器観察表 ……232
第88表　黒色付着物が認められる石器 ……232
第89表　亀甲形住居分析一覧表 ……242
第90表　亀甲形住居類型別・母屋規模別棟数 ……243
第91表　住居類型別柱間比・柱間寸法分布範囲 ……243
第92表　柱掘形分析表 ……244
第93表　青田遺跡と周辺の並行関係 ……279
第94表　周辺遺跡出土黒曜石産出地 ……285
第95表　樹種構成とSB平面形の関係 ……291
第96表　木取り構成とSB平面形の関係 ……292
第97表　側面形態・加工痕配列・加工面構成の組み合わせとその尖度 ……296
第98表　柱根の各項目と掘立柱建物との関係 ……299

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

日本海沿岸東北自動車道（以下、日東道）は、新潟市を起点に青森市に至る総延長約440kmの高速道路である。日東道は平成15年現在、新潟空港インターチェンジから中条インターチェンジまで開通しており、日本海沿岸地域における産業・経済・文化の交流・発展の促進に大きな役割を果たしている。

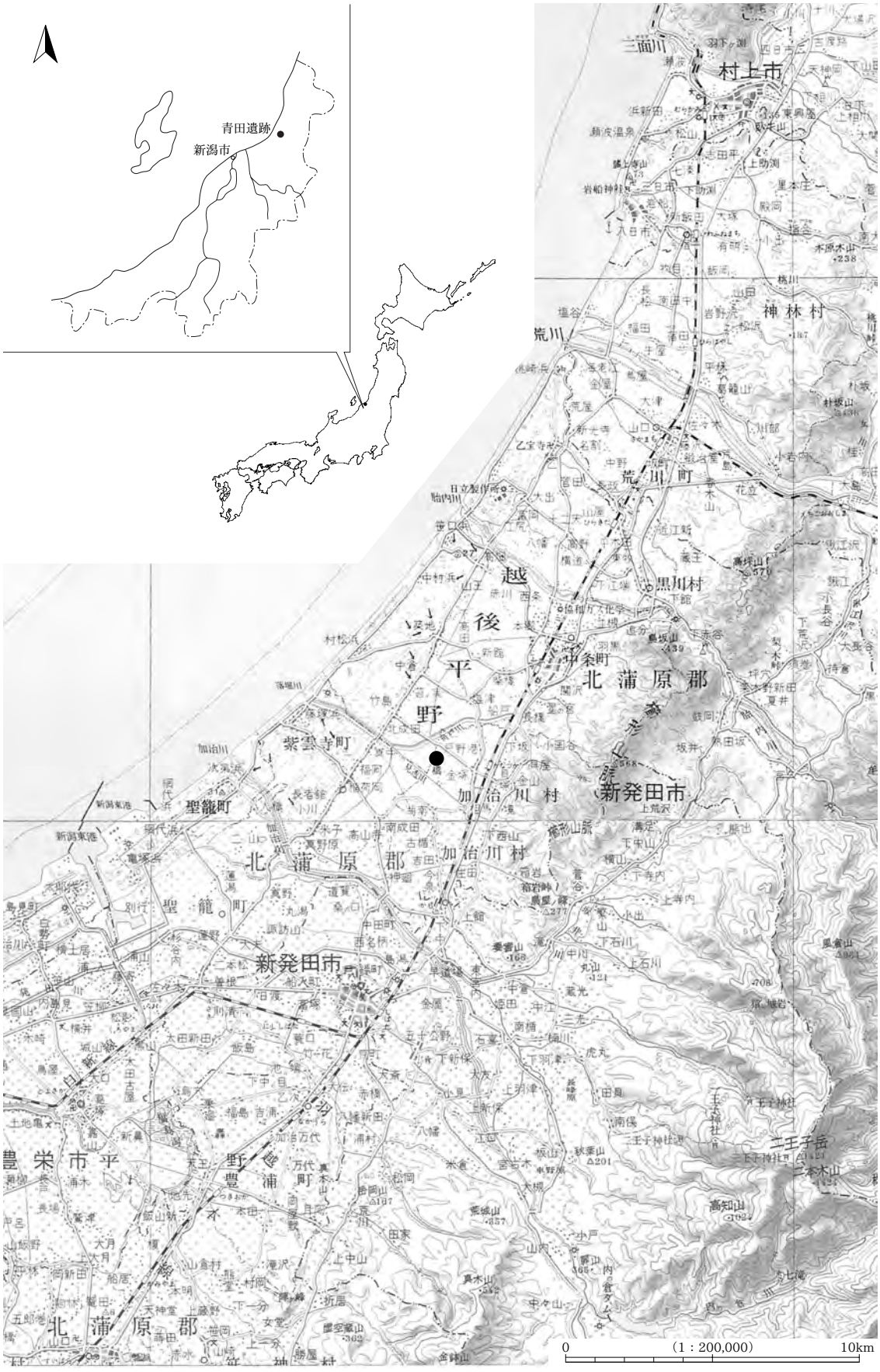
日東道のうち青田遺跡にかかる第12次施工命令区間（新潟－中条間　約27.5km）は、平成元年11月に基本計画が決定され、平成5年11月に施工命令が出された。これを受けて、日本道路公団新潟建設局（以下、道路公団）と新潟県教育委員会（以下、県教委）との間で当該区間の分布調査・試掘調査などに関する協議が本格化した。

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）は県教委の依頼を受け、平成6年3月1日及び11月28日～12月1日に当該区間の分布調査を行い、周知の遺跡2か所、遺物採集地点15か所について一次調査が必要である旨、県教委に報告した。その際、当該区間のほとんどが標高5m以下の低い水田地帯を通っているものの、地表下深くに遺跡が埋没している可能性があることから、遺物採集地点以外でも遺跡の有無を確認する調査が必要であることも合わせて報告した。その後、遺跡推定地6か所を追加し、総計303,200㎡が一次調査対象となった。なお、この分布調査において、青田遺跡の南西約500mの畑地で古代の須恵器を採集し、これが青田遺跡発見の契機となった。

埋文事業団は県教委の委託を受け、平成9～12年度に一次調査対象地について、遺跡の有無を確認し、今後の取り扱いについての協議に必要な資料を得ることを目的とする一次調査を行った。青田遺跡の一次調査は平成9年12月15～18日に、分布調査で遺物が採集された範囲を中心に実施した。その結果、地表下約1.5mから縄文時代晩期終末の遺物が見つかり、初めて青田遺跡が発見された（第1図）。そして、青田遺跡の発見と共に、3,900㎡について二次調査が必要なことを県教委に通知した。さらに、平成10年9月7日～10月23日に、青田遺跡の内容をより明確に捉え、本格的な発掘調査を円滑に実施する資料を得るための再確認調査を行った。この結果、一次調査で通知した範囲を含む16,200㎡について二次調査が必要なことを県教委に通知した。

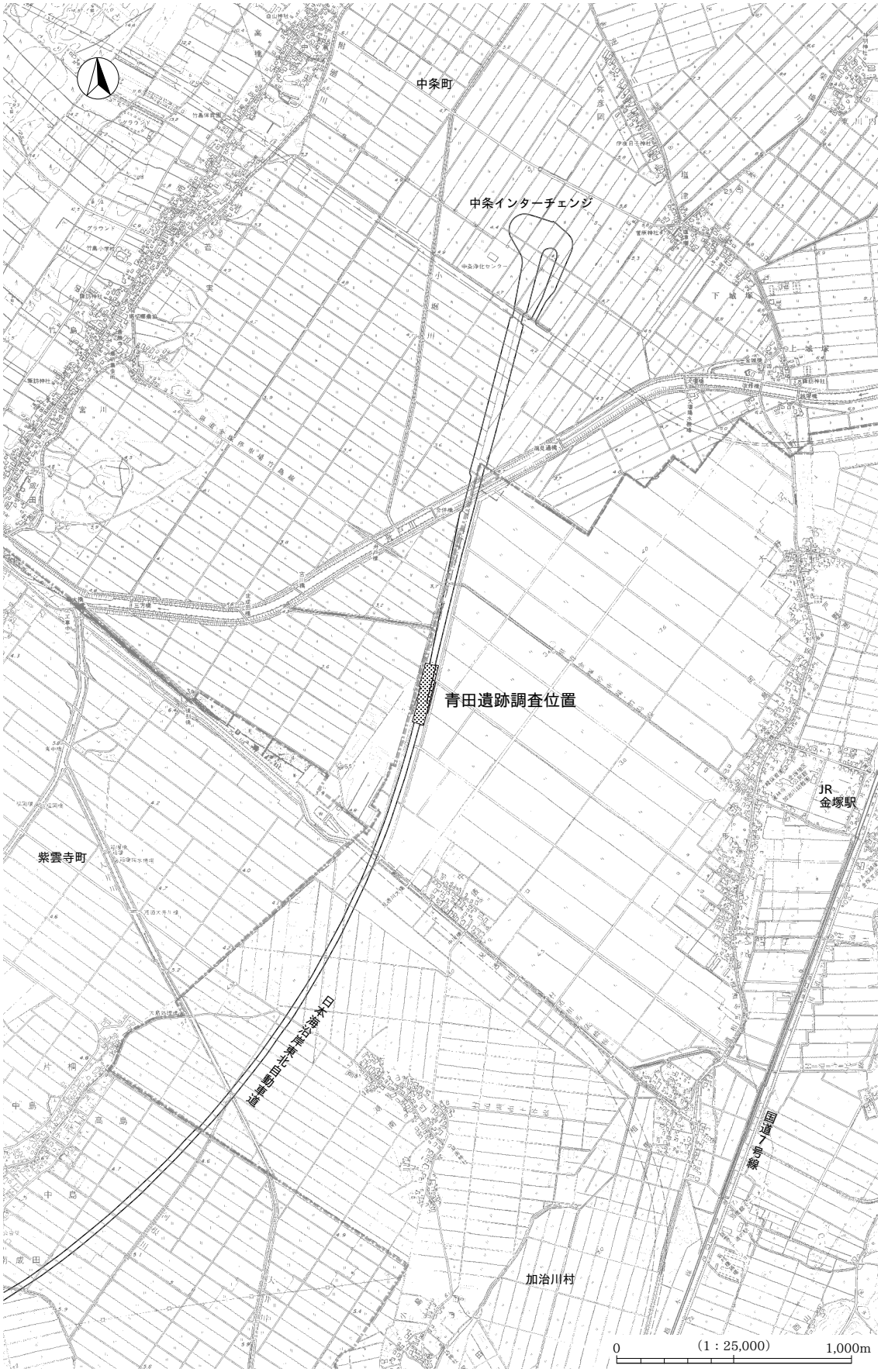
県教委は、二次調査を必要とした範囲内の東端において道路公団が用水路工事を行うことについて、道路公団と協議した結果、立会い調査で対応することで合意した。埋文事業団は県教委の依頼を受け、平成11年2月22日～3月24日に用水路工事範囲について立会い調査を行った。

本格的な発掘調査については、県教委と道路公団で協議した結果、遺跡範囲16,200㎡のうち9,800㎡を二次調査範囲とし、残りを立会い調査範囲や調査除外範囲とした。事業団は県教委の委託を受け、平成11年度に二次調査を行った。調査の結果、青田遺跡は縄文時代晩期の大規模な遺跡であり、有機質遺物が豊富に遺存する貴重な遺跡であることが明らかになったことなどから、立会い調査範囲とした大部分についても二次調査範囲に変更し、調査期間を平成12～13年度に延長して行った（第2図）。



第１図　青田遺跡の位置

〔国土地理院　平成８・13年度発行１：200,000原図〕



第２図　青田遺跡の調査位置

〔加治川村役場作成「加治川村全図」平成10年印刷、中条町作成「中条町全図」、紫雲寺町作成「紫雲寺町全図」平成８年修正　いずれも１：10,000原図〕

2　調査経過

A　一次調査

1）平成９年度

平成９年12月15日～18日、40,300㎡を対象に一次調査を行った（第３図）。遺物包含層は、地表から1.1～1.5mの深さで、旧紫雲寺潟（塩津潟とも呼ぶ。以下紫雲寺潟）の堆積土層の下に位置する。遺物は、45トレンチで晩期の浅鉢形土器20点、46トレンチの木製品１点が出土した。土器は摩耗があまり認められず、保存状態は良好であった。出土遺物は少ないものの、遺物包含層が軟弱地盤のため湧水などで確認できない可能性も考えられたことから、遺物出土地点を中心とする3,900㎡について二次調査が必要と判断した。その後の本格的な二次調査において、遺物包含層まで到達していたことが確認できたトレンチは3・35・38・42・45・48トレンチである。45トレンチで遺物を検出できたのは、青田遺跡の遺物包含層は北側で標高が高かったことによるものと考えられる。なお、35・38トレンチ付近は、本格的な二次調査で良好な遺物包含層や遺構が認められたものの、一次調査では遺物出土の報告はされていない。

2）平成10年度

平成10年９月７日～10月23日、一次調査の結果を受け、遺跡の内容を明確にするために再確認調査を行った（第３図）。一次調査で縄文土器が出土した45トレンチを中心に23,100㎡を対象に追加して調査を行ったところ、既に検出されていた遺物包含層が周辺に連続ないし断続して伸びることがわかった。そして、遺物が１・７・９・10・25・26・28トレンチで検出されたことから、遺跡範囲が一次調査の45トレンチを中心とする範囲より南側に200m以上も大幅に広がることを確認した。この結果、当初の調査対象面積3,900㎡は16,200㎡に拡大することとなった。遺構は確認できなかったものの、炭化物が集中する地点が多数見つかったほか、大量の遺物が出土する地点も確認でき、大規模な低地遺跡の可能性が高まった。

B　用水路工事立会い調査

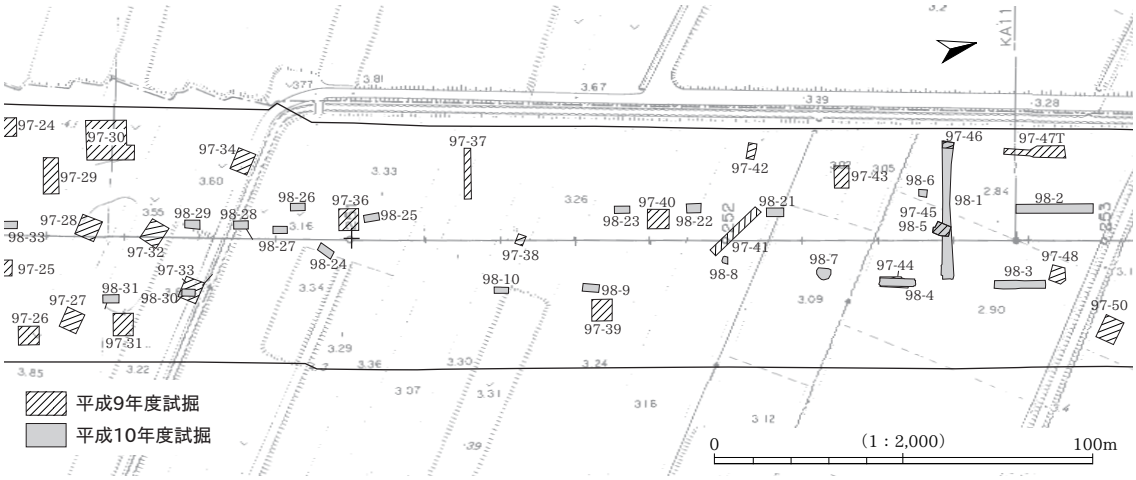
1）平成10年度

平成11年２月22日～３月24日、高速道路の東側に隣接する用水路の設置工事に伴い、幅約5m、長さ約100mの390㎡の範囲（二次調査の８～18Gグリッド）について立会い調査を行った（第４図）。工事は重機で現地表面から約2mまで掘削されたため、約1.5m下の遺物包含層も重機で掘り上げられた。中には多量の土器・石器のほか骨片が出土したため、掘り上げ土の中から遺物を探し出すこととした。遺物取り上げ位置については第４図のようにNo.1～26の範囲を設定してそのナンバーを記録した。また、掘立柱建物のものとみられる木柱の根元部分が直立した状態で43基（P9801～9843）出土した。一部は半截して埋設状況の確認などを行ったが、半截せずにワイヤーを巻き付けて重機で引っ張って取り上げたものもある。出土位置は高速道路の幅杭を基準としてトータルステーションを用いて記録し、後の調査データと合成した。また、木の実や遺物が集中して出土した範囲（SX9844）も確認したが、これは二次調査で検出した堅果類廃棄範囲と考えられる。このほか、遺構とみられる落ち込みや炭化物が濃密に集中する範囲を検出したものの、湧水や壁土の崩落など劣悪な条件であったことから、十分な調査を行うことがで

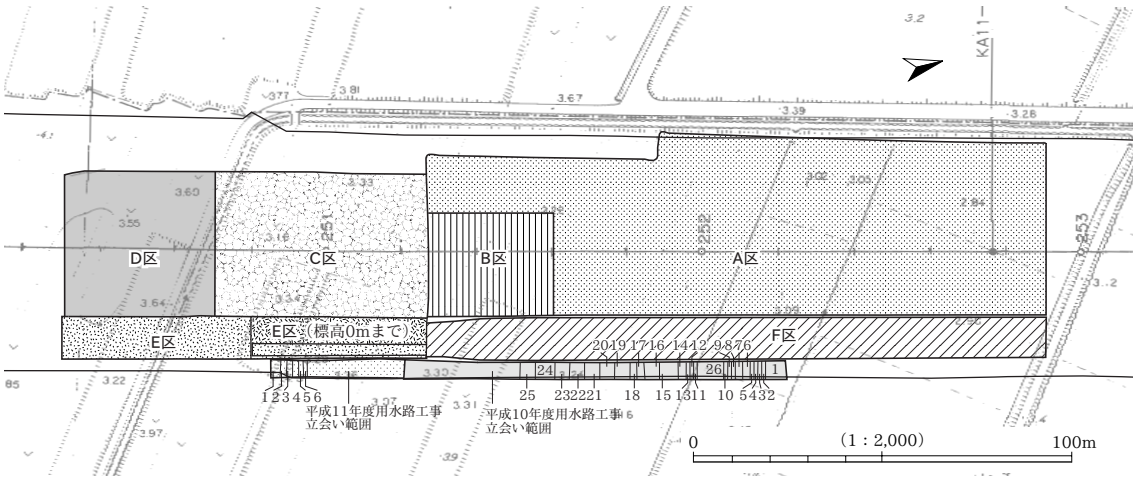
きなかった。しかし、狭い調査範囲ながら43基もの柱根が集中的に検出したことは、大規模な集落が存在することを予想するに十分であった。同時に、有機質遺物が良好な状態で保存されていることから、青田遺跡が低地遺跡の特徴を備えていることもこの時点で明らかになった。

2）平成11年度

平成10年度に行った用水路工事範囲の南側延長部分の工事が行われることとなり、平成11年10月20日～26日に約141㎡の工事立会い調査を行った（第4図）。その方法は平成10年度立会い調査と基本的に同様である。調査範囲のうち、北側ではSD1420のC層とみられる堆積範囲を確認したが、遺構・遺物は出土しなかった。一方、南側の21～22Gグリッドでは遺物が出土したことから、第4図のようにNo.1～6の範囲を設定し、重機で包含層を掘り上げ、その中から遺物を探し出した。炭化物集中範囲を3か所検出したほか、柱根らしいものも発見したが、腐蝕が進んでいたことと激しい湧水のため明確にできなかった。また、遺物が出土した範囲はSD1420のS1層期の川岸に当たるが、この調査時点ではこれを認識していなかった。



第3図　一次調査の試掘トレンチ位置図



第4図　用水路工事立会い調査及び二次調査範囲図

C 二次調査

本格的な二次調査は、平成11～13年度でA～F区の調査区に分けて行った（第4図）。調査対象面積の合計は14,160㎡であり、複数層で行った調査面積は延べ48,260㎡である。

1）平成11年度

平成11年4月12日～12月27日、7,220㎡（A・B区）を対象として二次調査を行った。表土は事前に遺物包含層上面まで重機で掘り下げた。4月13日、調査区の北側から作業員による掘削を開始した。4月23日、2～3A～Cグリッドにおいて幅15mほどの河川跡（SD1）を検出した。その上面に堆積した砂層（Ⅵ層）から古代の木製品が大量に出土し、縄文時代晩期以降の遺物があることが明らかになった。5月に縄文時代晩期の遺物包含層を確認し、層位を検討した結果、縄文時代晩期包含層の直上に古代の木製品を含む砂層が堆積すること、この砂層の直上に紫雲寺潟の堆積土層が位置することがわかった。さらに、縄文時代晩期の遺物包含層はいくつかの薄い層位に分かれることがわかり、4層（S4～S1層）に細分した。これにより、調査対象面積の約半分について各層位単位の調査を行う必要性が生じた。6月3日、5Cグリッドで炭化物が集中する範囲を検出した。6月25日、同じ5Cグリッドで柱根が残る掘立柱建物（SB1）を検出した。SB1の南側では河川跡（SD19）を検出し、河川跡の斜面部（8Eグリッド）において遺物包含層が厚さを増して多層位に分かれることがわかった。7月、8～12D～Eグリッドで各層から多量の遺物と多数の炭化物集中範囲、及び土坑・柱根を検出した。7月30日、初めて赤漆塗り糸玉が出土した。8～16A～Dグリッドでは、腐植土層が堆積する範囲（SX51）を検出し、その上面で平安時代のものとみられるヒトの足跡を多数検出した。9月、13～16D～Eグリッドにおいても多量の遺物と炭化物集中範囲を検出した。11月、15～16D～Eグリッドで柱根が残る掘立柱建物が集中して検出された。11月7日、第1回現地説明会を開催し、250人が参加した。11月17日、17～18D～Eグリッドで大規模な河川跡（SD1420）を検出した。斜面部にクリ・トチノキを主体とする堅果類廃棄範囲を確認した。しかし、これより上位のSD1420覆土最上部には多量の遺物を含む土層がなお河川の中央へ続いており、堅果類廃棄範囲が埋没した後に新たに遺物が廃棄されたことが分かった。12月7日、柱根下に礎板を有する大型掘立柱建物（SB4）を検出した。12月10日、文化庁記念物課の岡村道雄主任調査官から現地指導を受けた。調査終盤に貴重な遺構が多数検出されたことから、県教委と道路公団が協議した結果、SB4をはじめとする掘立柱建物とSD1420が位置する14～18C～Eグリッド（B区）の調査を次年に持ち越すこととし、12月27日にそのほかの範囲（A区）のみ調査を終了した。

平成12年2月29日、中断していたB区の調査を再開した。調査期間は2月29日～4月21日の予定で進められた。調査範囲は1mの雪で埋もれており、調査中も雪やみぞれのため調査環境は最悪であった。このため、SB4をはじめとする掘立柱建物のある範囲は鉄パイプを組んだ仮設の覆い屋を架け、SD1420はビニールハウスを3棟設置して調査を行った。SB4は柱根の実測及び柱根下の礎板の状況把握を主眼に行った。また、SD1420は全体的に掘り下げ、堅果類廃棄範囲（SX958）の検出と掘り下げを行った。その結果、多量のクリ果皮とトチノキ種皮が出土し、川底とみられる砂層からも土器が多量に出土した。3月14日に東北芸術工科大学 宮本長二郎氏、16日に文化庁記念物課 岡村道雄氏、國學院大學 小林達雄氏、17日に奈良国立文化財研究所 浅川滋男氏の四氏を招聘し現地指導を受けた。3月25～26日、第2回現地説明会を開催し、596人が参加した。

2）平成12年度

平成11年度に続き、B区の調査を行う。SB4は柱根を取り上げ、礎板は板材や丸木材が数段重なっていることを確認した。SD1420では堅果類廃棄範囲の調査を終え、川底を調査したところ土器が多数出土した。4月21日、B区の調査を終了する。

平成11年度調査範囲の南側にある遺跡範囲（C・D区）では、既に工事用に高さ約10mの盛土が施されており、当初はこの盛土中央に設置される用水路部分のみを調査する予定であった。しかし、平成12年4月7日、県教委は遺跡の重要性から道路公団に対し残りの遺跡範囲の追加調査を要請した。協議の結果、道路公団はこれを承諾し、すべての盛土を撤去し、調査範囲を囲う土留め支保工を行い、さらに遺物包含層上面近くまで重機で掘り下げた。この際、道路公団が調査範囲西端の矢板を誤って予定ラインより4m道路法線の内側に打設してしまったため、この範囲の調査を実施することができなくなった。県教委と道路公団との協議の結果、この範囲の調査を行わないことで合意した。6月1日、C・D区4,080㎡を対象として調査を開始した。18～19B～CグリッドでⅥ層から多量の遺物が出土した。一方、SD1420の範囲を確認するため重機でトレンチを掘り遺物包含層の標高を確認したところ、20～21グリッドで川底が標高-3m以下と深く、川幅は40m以上にもなることが明らかになった。SD1420の内部には遺物を含まない土層が厚く堆積していたことから、重機で遺物包含層上面まで掘り下げることとした。また、SD1420の川岸は、S4～S3層期とS1層期の2時期に分かれて形成されていることが明らかになり、上位から順に斜面と川底の調査を進めた。6月13日、調査範囲南端に隣接する工事用盛土下部を通る農業用水用パイプラインが決壊し、調査範囲全域が水没した。SD1420の川岸では多数の掘立柱建物や炭化物集中範囲が、斜面では堅果類廃棄範囲が多数検出された。また、櫂や簾状編物などの木製品・編物製品が出土した。8月27日、第3回現地説明会を開催し、730人が参加した。S4～S3層期の川底の調査では大量の遺物が出土した。9月29日、調査区北側（C区）の調査を終了した。10月以降、SD1420左岸の斜面の調査が進み、堅果類廃棄範囲などから草材を伴う壁材と筌状編物・籠などの編物製品が多数出土した。10月29日、第4回現地説明会を開催し、186人が参加した。11月2日、27Dグリッドから丸木舟が出土した。11月23日、第5回現地説明会を開催し、656人が参加した。12月9日、調査を終了した。

3）平成13年度

平成11・12年度調査範囲の東側に隣接する側道部分（E・F区）2,860㎡を対象に調査を行った。既に舗装道路が敷設されていたことから、道路公団がこれを取り除き、周囲の土留め支保工を行った。本線の工事の関係から、E区の一部については標高0mまでの調査に制約され、一部についてのみ矢板を打設して標高-3.5mまで調査することとした（第4図）。3月23日から遺物包含層上面近くまでの重機による掘り下げを行った。4月9日、調査を開始した。E区ではSD1420左岸で掘立柱建物や土坑などが初めて検出された。また、F区ではSD19左岸に掘立柱建物が多数検出され、SD1420左岸では底面に木材が敷かれた土坑も初めて検出された。SD1420右岸においても多数の掘立柱建物・堅果類廃棄範囲のほか、木材が敷かれた土坑とナラガシワ果実が詰まった土坑が検出された。6月25日、大雨による水害のため、調査範囲全域が水没した。8月5日、第6回現地説明会を開催し、333人が参加した。SD19とSD1420の斜面及び川底の調査を行い、堅果類廃棄層を検出したほか、SD19の川底ではシジミガイやカラスガイなどの殻が出土した。9月21日、調査をすべて終了した。

終了後、地主・加治川村土地改良区の許可を得て、調査範囲より東側の水田において、新潟大学積雪地域災害研究センターの高濱信行氏と卜部厚志氏と共にボーリング調査を行った。

3　調査体制

調査体制は第１表のとおりである。

4　青田遺跡調査検討委員会

A　設置の経緯と目的

青田遺跡の二次調査が進むに従い、柱根が遺存する掘立柱建物の検出や豊富な有機質遺物の出土など、低湿地遺跡特有の情報が明らかになった。また、青田遺跡が旧紫雲寺潟の湖底下から発見されたことから、遺跡の層序を含めた周辺地域の地質学的な調査の必要性が高まった。埋文事業団は、平成11年度に新潟大学積雪地域災害研究センターの高濱信行氏・卜部厚志氏の協力を得て、両氏に地質学的な調査を依頼した。そして、遺跡層序の検討や周辺のボーリング調査が行われ、花粉、プラント・オパール、珪藻の各分析による植生復元や年代測定も合わせて行われた。また、多数検出された掘立柱建物の構造については、東北芸術工科大学の宮本長二郎氏、奈良国立文化財研究所（当時）の浅川滋男氏から建築学の立場から指導を得た。平成12年度には、東北大学理学研究科附属植物園の鈴木三男氏と福島大学教育学部の木村勝彦氏に木製品及び自然木の植物学的な分析を依頼した。このように、関連諸科学の各研究者と連携して調査を行うこととしたが、青田遺跡の様相を解明するためには、埋文事業団と考古学及び関連諸科学の各研究者が相互に連携し、総合的な調査を行う必要性が高まった。また、現場調査班が各研究者と個別に対応することは、時間的・労力的に厳しいことも事実であった。こうして、青田遺跡の調査方法を検討し、調査成果を討議する場として調査検討委員会を設置することとなった。

B　調査検討委員会の構成と検討項目

平成12年度に調査検討委員会の目的・構成・調査検討項目・委員の経費負担等を定めた設置要綱を作成し、同年10月１日から施行した。調査検討委員会は同年10月から平成13年度に計４回の委員会の開催と、平成13年度末に公開シンポジウムの開催を予定した。委員は当初10名であったが、第１回委員会の後に東京農工大学 坂上寛一氏、国立歴史民俗博物館 辻誠一郎氏を新たに加えた総勢12名である。委員長は小林達雄氏、副委員長は石川日出志氏に就いていただいた。また、関係機関として文化庁記念物課から岡村道雄氏のほか、県教委文化行政課職員の参加を得た。委員会の構成は第２表のとおりである。

埋文事業団は、各委員に対してあらかじめ調査・検討を希望する項目を挙げ、協議した上で調査内容及び方法を決定した。これにより、両者が共通理解を得て調査に当たることができた。

C　調査検討委員会の活動

各委員による調査・分析に当たっては、年間の調査計画を作成していただき、予算決定の後に行うこととした。４回開かれた委員会（第３表）では、主に調査方法の検討や各委員による調査結果の報告がなされた。そして、シンポジウムの準備が行われた。各委員は委員会のほかに年数回にわたり現地調査を行っ

平成９年度（一次調査）

調査期間	平成９年12月15日～18日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 平野　清明）
調　　査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	須田　益輝（事務局長）
管　　理	若槻　勝則（総務課長）
庶　　務	泉田　　誠（総務課主事）
調査総括	亀井　　功（調査課長）
調査指導	藤巻　正信（調査課調査第一係長）
調査担当	田海　義正（調査課主任調査員）
調査職員	鈴木　　勉（調査課文化財調査員）
	野水　　仁（調査課文化財調査員）
	浦部　頼之（調査課文化財調査員）
	尾崎　高宏（調査課文化財調査員）
	湯田　儀礼（調査課嘱託員）

平成10年度（用水路工事立会い調査）

調査期間	平成11年２月22日～３月24日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 野本　憲雄）
調　　査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	須田　益輝（事務局長）
管　　理	若槻　勝則（総務課長）
庶　　務	椎谷　久雄（総務課主任）
調査総括	本間　信昭（調査課長）
調査指導	寺崎　裕助（調査課調査第一係長）
調査職員	鈴木　俊成（調査課主任調査員）
	高橋　　聡（調査課主任調査員）
	小濱　　亨（調査課主任調査員）
	河崎　昭一（調査課主任調査員）
	石田　守之（調査課嘱託員）

平成11年度（二次調査）

調査期間	平成11年４月12日～12月27日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 野本　憲雄）
調　　査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	須田　益輝（事務局長）
管　　理	若槻　勝則（総務課長）
庶　　務	椎谷　久雄（総務課主任）
調査総括	本間　信昭（調査課長）
調査指導	寺崎　裕助（調査課調査第一係長）
調査担当	荒川　隆史（調査課文化財調査員）
調査職員	小濱　　亨（調査課主任調査員）
	赤塚　　亨（調査課主任調査員）
	鈴木　秀人（調査課主任調査員）
	湯田　儀礼（調査課嘱託員）
	松島　悦子（調査課嘱託員）
	松井　　智（調査課嘱託員）
	轡田　克史（調査課嘱託員）
	田中　一穂（調査課嘱託員）
	高橋　　勉（調査課研修員）

平成12年度（二次調査）

調査期間	平成12年４月３日～４月21日・６月１日～12月９日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 野本　憲雄）
調　　査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	須田　益輝（事務局長）
管　　理	長谷川司郎（総務課長）
庶　　務	椎谷　久雄（総務課主任）
調査総括	戸根与八郎（調査課長）
調査指導	寺崎　裕助（調査課公団担当課長代理）
調査担当	荒川　隆史（調査課主任調査員）
調査職員	江端　高行（調査課主任調査員）
	小濱　　亨（調査課主任調査員）
	山口　勇雄（調査課主任調査員）
	赤塚　　亨（調査課主任調査員）
	松井　　智（調査課嘱託員）

平成10年度（一次調査）

調査期間	平成10年９月７日～10月23日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 野本　憲雄）
調　　査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	須田　益輝（事務局長）
管　　理	若槻　勝則（総務課長）
庶　　務	椎谷　久雄（総務課主任）
調査総括	本間　信昭（調査課長）
調査指導	寺崎　裕助（調査課調査第一係長）
調査担当	鈴木　俊成（調査課主任調査員）
調査職員	高橋　　聡（調査課主任調査員）
	鈴木　　勉（調査課文化財調査員）

平成11年度（用水路工事立会い調査）

調査期間	平成11年10月20日～26日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 野本　憲雄）
調　　査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	須田　益輝（事務局長）
管　　理	若槻　勝則（総務課長）
庶　　務	椎谷　久雄（総務課主任）
調査総括	本間　信昭（調査課長）
調査指導	寺崎　裕助（調査課調査第一係長）
調査担当	荒川　隆史（調査課文化財調査員）
調査職員	高橋　　聡（調査課主任調査員）
	赤塚　　亨（調査課主任調査員）
	松井　　智（調査課嘱託員）

平成11年度（二次調査）

調査期間	平成12年２月29日～３月31日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 野本　憲雄）
調　　査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	須田　益輝（事務局長）
管　　理	若槻　勝則（総務課長）
庶　　務	椎谷　久雄（総務課主任）
調査総括	本間　信昭（調査課長）
調査指導	寺崎　裕助（調査課調査第一係長）
調査担当	荒川　隆史（調査課文化財調査員）
調査職員	小濱　　亨（調査課主任調査員）
	赤塚　　亨（調査課主任調査員）
	鈴木　秀人（調査課文化財調査員）
	松島　悦子（調査課嘱託員）
	高橋　　勉（調査課研修員）

平成13年度（二次調査）

調査期間	平成13年４月９日～９月21日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 板谷越麟一）
調　　査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	須田　益輝（事務局長）
管　　理	長谷川司郎（総務課長）
庶　　務	椎谷　久雄（総務課主任）
調査総括	岡本　郁栄（調査課長）
調査指導	寺崎　裕助（調査課公団担当課長代理）
調査担当	荒川　隆史（調査課主任調査員）
調査職員	山口　勇雄（調査課主任調査員）
	辻　　範朗（調査課主任調査員）
	赤塚　　亨（調査課主任調査員）
	金子　正宏（調査課主任調査員）
	松井　　智（調査課嘱託員）
	片岡　千恵（調査課嘱託員）

第１表　調査体制

た。試料サンプリングについては、分析に最適な試料を確実に得るため、現地で調査班が委員と直接打ち合わせを行うように心がけた。このほか、平成12・13年度の冬期に山田昌久委員・宮本長二郎委員・鈴木三男委員・木村勝彦委員を招聘し、木製品について分類・評価・樹種同定用試料サンプリング・年輪解析用試料の選択を集中的に行った。柱根の年輪解析用試料は、新潟県埋蔵文化財センター近くにある製材所において柱根を輪切りに切断してディスクを作成した。漆製品については、保存処理前に永嶋正春委員のもとに搬送して分析を行った。

氏名・所属（所属・職名は当時）		分　野	主な調査項目
委員長	小林　達雄（國學院大學教授）	考古学	集落の機能・構造
副委員長	石川日出志（明治大学教授）	考古学	土器様相・編年
委員	前山　精明（巻町教育委員会参事）	考古学	石器様相・組成
	山田　昌久（東京都立大学助教授）	考古学	木製品の製作技術・用途
	高濱　信行（新潟大学積雪地域災害研究センター助教授）	地質学	立地環境の復元
	卜部　厚志（新潟大学積雪地域災害研究センター助教授）	地質学	立地環境の復元
	坂上　寛一（東京農工大学教授）	土壌学	地表環境の復元
	鈴木　三男（東北大学理学研究科附属植物園園長）	植物学	植生環境の復元
	宮本長二郎（東北芸術工科大学教授）	建築学	掘立柱建物の復元・建築技術
	永嶋　正春（国立歴史民俗博物館教授）	工芸技術	漆製品の製作技術
	木村　勝彦（福島大学助教授）	年輪研究	柱根の生長パターン解析・年代測定
	辻　誠一郎（国立歴史民俗博物館助教授）	年代学	年代測定試料の選定
関係機関	文化庁記念物課（岡村道雄　主任文化財調査官） 新潟県教育委員会文化行政課（伊藤善允　文化行政課長、藤巻正信　埋蔵文化財係長）		
事務局	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団		

第２表　青田遺跡調査検討委員会組織表

	期　日	場　所	主な内容
第１回	平成12年10月26・27日	新潟市・青田遺跡	調査項目の決定・現地指導
第２回	平成13年２月19・20日	新潟県埋蔵文化財センター	調査報告・平成13年度の調査計画
第３回	平成13年６月14・15日	青田遺跡・中条町	現地指導・公開シンポジウムの計画
第４回	平成13年11月30日	新潟県埋蔵文化財センター	調査・整理報告・シンポジウム準備

第３表　調査検討委員会の開催

D　公開シンポジウムの開催

平成14年３月９・10日、新潟市にある新潟テルサを会場として公開シンポジウム『よみがえる青田遺跡』を開催した。内容は第４表のとおりである。平成14年２月～３月に新潟日報社朝刊に青田シンポジウム関連の記事を連載したほか、テレビ・ラジオなどで情報を流して県民への周知化を図ったこともあり、２日間で延べ2,002人という多数の参加者が会場を訪れた。また、シンポジウムの開催に当たり、各委員

平成14年３月９日　第１部　「青田遺跡と縄文文化」 報告「青田遺跡発掘調査報告」 基調講演「縄文世界の青田遺跡」	 荒川　隆史 小林　達雄
平成14年３月10日　第２部　「青田遺跡－縄文人の生活と環境－」 報告「湖底に沈んだ縄文遺跡－青田遺跡の立地環境－」 「青田遺跡の植物的自然と縄文人の植物資源」 「青田遺跡の住居と集落」 「木器・木造施設に見る青田縄文人のくらし」 「青田遺跡の土器を読む」	 高濱　信行 鈴木　三男 宮本長二郎 山田　昌久 石川日出志
パネルディスカッション「青田遺跡を語る」 テーマ１「青田ムラと自然」　テーマ２「青田縄文人の生活誌」 テーマ３「青田遺跡をめぐる諸問題」	パネリスト：講演・発表者　コメンテイター：岡村道雄 卜部厚志・坂上寛一・前山精明・永嶋正春・木村勝彦

第４表　公開シンポジウムの内容

の調査成果をまとめたシンポジウム資料集『川辺の縄文集落』を刊行した。シンポジウムのパネルディスカッションでは、低湿地に立地する青田遺跡の性格が焦点となり、当時の生業や住居構造について議論された。また、集落の季節性についても関心が集まり、石器組成や掘立柱建物の年輪研究による成果が注目された。そして、青田遺跡の年代幅を解明するため、さらなる年輪年代測定と放射性炭素年代測定を行う必要性が明らかになった。いずれの問題についてもさらに検討が必要となり、最終報告に向けての課題となった。しかしながら、シンポジウムの開催と資料集の刊行により、青田遺跡調査検討委員会は総合的調査について一定の成果を収めたといえるであろう。

5　整理体制

二次調査を行った平成11・12年度の冬期にかけて基礎整理を行った。本格的な整理作業は、平成13年度に二次調査と並行して行い、調査終了後は調査班も整理作業に加わった。平成14・15年度は整理作業のみ行った。なお、平成13年度に土器の接合作業を株式会社 吉田建設に委託し、加治川村内の調査現場近くに作業所を設けて行った。整理体制は第5表のとおりである。

平成13年度

整理期間	平成13年4月1日～平成14年3月31日
整理主体	新潟県教育委員会（教育長 板谷越麟一）
調　　査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	須田　益輝（事務局長）
管　　理	長谷川司郎（総務課長）
庶　　務	椎谷　久雄（総務課主任）
整理総括	岡本　郁栄（調査課長）
整理指導	北村　　亮（調査課整理担当課長代理）
整理担当	加藤　　学（調査課文化財調査員）
整理職員	坂上　有紀（調査課嘱託員）
作　　業	和泉　裕子　笹川　陽子　島倉はるみ　鶴田須美子　吉原　智子（以上、調査課嘱託員）

平成14年度

整理期間	平成14年4月1日～平成15年3月31日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 板谷越麟一）
調　　査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	黒井　幸一（事務局長）
管　　理	長谷川司郎（総務課長）
庶　　務	高野　正司（総務課班長）
整理総括	岡本　郁栄（調査課長）
整理指導	北村　　亮（調査課整理担当課長代理）
整理担当	荒川　隆史（調査課班長）
整理職員	石丸　和正（調査課嘱託員）
	猪狩　俊哉（調査課嘱託員）
作　　業	小林智恵子　島倉はるみ　鈴木　芳子　高野智恵子　田辺恵美子　鶴田須美子　東條シゲ子　中川　祥子　広野　澄 吉原　智子　渡辺　和子　渡辺　知子（以上、調査課嘱託員）

平成15年度

整理期間	平成15年4月1日～平成16年3月31日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 板谷越麟一）
調　　査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	黒井　幸一（事務局長）
管　　理	長谷川二三夫（総務課長）
庶　　務	高野　正司（総務課班長）
整理総括	藤巻　正信（調査課長）
整理指導	高橋　　保（調査課整理担当課長代理）
整理担当	荒川　隆史（調査課班長）
整理職員	石丸　和正（調査課嘱託員）
	猪狩　俊哉（調査課嘱託員）
作　　業	加藤　祐子　小林智恵子　鈴木　芳子　高野智恵子　田辺恵美子　鶴田須美子　東條シゲ子　広野　澄　矢部千栄子 渡辺　知子　渡辺　容子（以上、調査課嘱託員）

第5表　整理体制

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置

青田遺跡は、北蒲原郡加治川村大字金塚字青田958番地1ほかに所在する（第1図）。加治川村は新潟県の北部に位置する総面積36.58km^2、人口7,276人［新潟県統計協会2003］の自然の豊かな村である。北西は北蒲原郡中条町、南東は新発田市、南西は北蒲原郡紫雲寺町にそれぞれ隣接する。東は櫛形山脈に抱えられ、西には越後平野が広がっており、平野の大部分は水田地帯となっている。櫛形山脈の麓には、国指定史跡である奥山荘城館遺跡のうちの金山城館遺跡が所在する。

青田遺跡は中条町との境界に近い加治川村の西端の沖積地に立地する（第2図）。遺跡周辺の現地表面の標高は2.8～3.6mで、周囲を水田に囲まれた平坦な地形だが、かつては紫雲寺潟（塩津潟とも呼ぶ。以下、紫雲寺潟）と呼ばれた潟湖があり、遺跡はそのほぼ中央に当たる。遺跡の北側約600mには櫛形山脈を源とする船戸川が西流し、河口から3.5km地点で見透川と合流して、落堀川と名を変える。また、遺跡の北方約7kmに胎内川、南方約5kmに加治川が西流し、日本海に注ぐ。加治川村は日本海に面してはいないものの、遺跡から直線距離で西方約5kmに日本海が広がる。

2　地理的環境

青田遺跡の南西約21kmには阿賀野川が北西方向に流れる。阿賀野川は福島県と新潟県にまたがる幹線流路で、延長210kmにわたる大河川である。青田遺跡が位置する地域は、新潟県内の下越地方と呼ばれる北部域の中でも阿賀野川の北側地域（以下、阿賀北地域と呼ぶ）として括ることができる（第5図）。

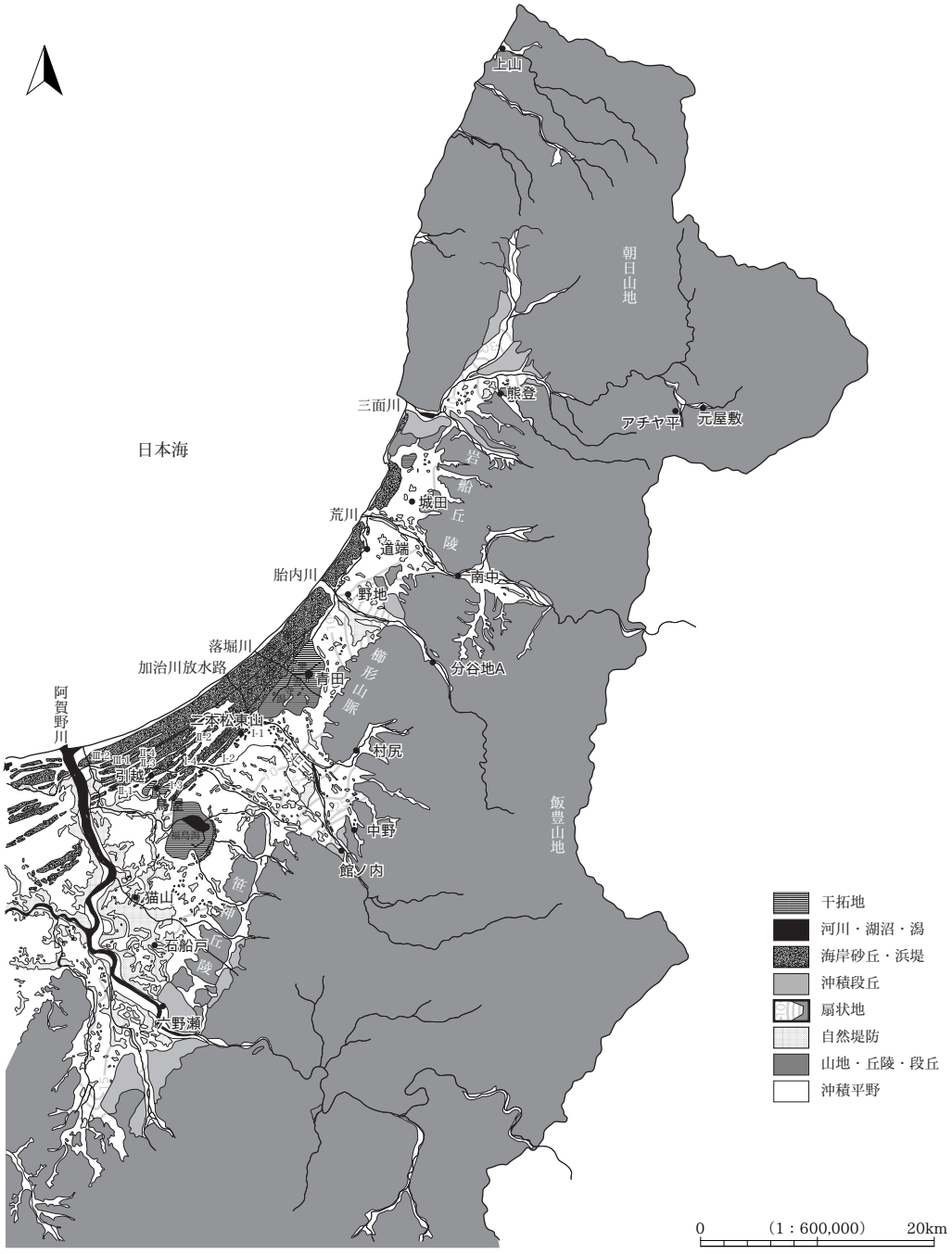
東側は、最高峰1,870mの朝日岳を擁する朝日山地と、2,105mの飯豊山を擁する飯豊山地が連なり、山形県・福島県との県境となっている。この西縁に岩船丘陵・櫛形山脈・笹神丘陵が概ね北北東－南南西に列状に並ぶ。青田遺跡の東に位置する櫛形山脈は胎内川と加治川の間に連なる、南北約13km、最高峰568mの日本一小さい山脈であり、新第三紀白亜紀の花崗閃緑岩を基盤とする褶曲山脈である。

山地を源とする荒川・胎内川・加治川などの河川は、堆積盆となる越後平野に流れ込み、胎内川と加治川では河川堆積物による扇状地が発達する。また、阿賀野川や加治川などの周辺には帯状の自然堤防が発達しており、流路を大きく変えながら土砂を運び、越後平野を形成していったことがうかがえる。

越後平野は岩船丘陵の南側を北端とし、南は長岡市と小千谷市との境界付近まで至る面積約2,030km^{2}の国内屈指の沖積平野である。信濃川流域に比べ本地域では東西幅が狭くなり、加治川より北側では幅が3～5kmほどと特に狭い。また、胎内川両岸は扇状地の発達により標高が高く、右岸の野地遺跡では標高約11mを測る［小田2002a］。これを境に北東側及び南西側に向かって低くなり、加治川村での最低標高は2.6mである。越後平野は、かつて芦が生い茂る湿地帯や潟湖が点在していたことから蒲原平野とも呼ばれている。江戸時代の絵図によると、荒川は日本海に流れ出ていたものの、胎内川や加治川は新潟砂丘にぶつかって砂丘沿いを南西に向かって流れ、阿賀野川と共に信濃川に合流して日本海に流れて出ていた様子が描かれている（第6図）。また、紫雲寺潟・福島潟・島見前潟などの潟湖が多数存在し、これら

が河川により結ばれていた。紫雲寺潟は、胎内川や旧坂井川が流入する面積約2,000haの広大なものであったが、享保12年（1727年）に干拓事業が開始され、享保18年（1733年）に砂丘を開削した落堀川により干拓された。福島潟と島見前潟も、享保16年（1731年）に現在の阿賀野川河口に当たる松ヶ崎放水路が開削されて干拓化が進んだ。近世以降の排水・干拓事業により、越後平野は芦沼から広大な水田地帯に様変わりした。

紫雲寺潟の形成時期は、青田遺跡の調査により平安時代以降（9世紀末以降）であることが初めて明らかになった。その要因については、地下の地盤変動による可能性が指摘されている（関連諸科学編第Ⅰ章1）。



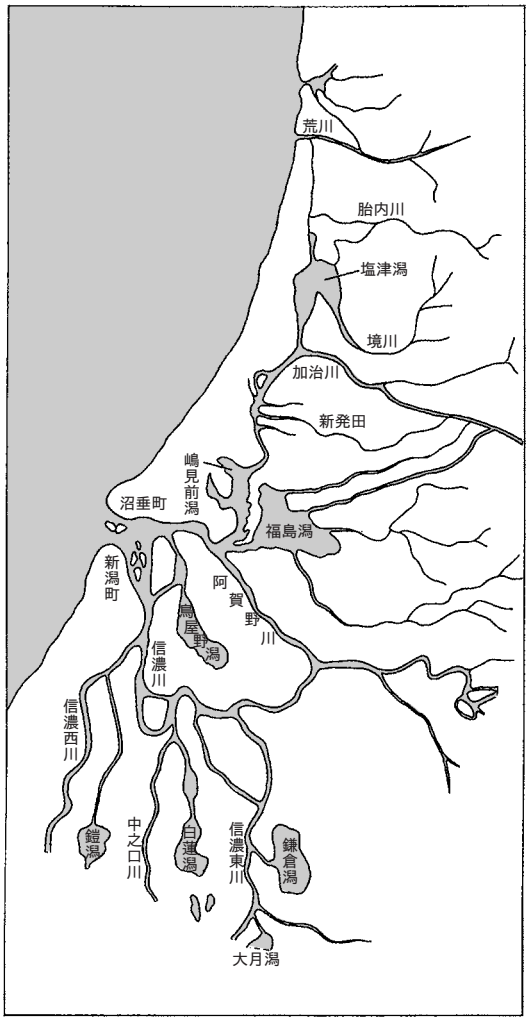
第5図　阿賀北地域の地形と縄文時代後晩期の主要遺跡

［大熊1979］を基に作成

なお、地元では平安時代後期の大津波により砂丘の土砂が流出して潟が広くなったものと推定されているが［加治川村役場1986］、珪藻分析（関連諸科学編第Ⅱ章5）によると紫雲寺潟の形成時期に海水の流入は認められないことが明らかとなった。

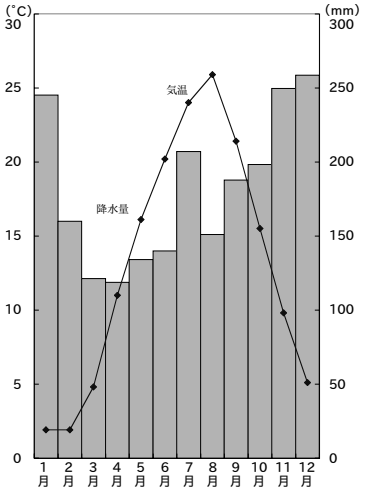
さて、日本海沿いには細く長く発達した新潟砂丘が北東－南西方向に伸びている。新潟砂丘は大きく3列に区分されており、内陸側から新砂丘Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと名付けられている［新潟古砂丘グループ1974］。阿賀野川付近では、砂丘列は西側で10列に枝分かれて幅が約7kmとなる。一方、胎内川河口付近ではこれらが収斂して幅1.5km程となる。新潟砂丘の形成年代は、新砂丘Ⅰが縄文時代前期初頭～中期、新砂丘Ⅱが縄文時代後期～晩期、新砂丘Ⅲが古代以降とされている［新潟古砂丘グループ1974；田中ほか1996］。

以上のように、阿賀野川以北の地域では大きく山地・丘陵・段丘、沖積段丘、扇状地、沖積平野、自然堤防、海岸砂丘に分類することができる。また、海岸から丘陵までは5～20kmで達することができ、狭い範囲の中に多様な地形を有することが特徴である。



第6図　正保2（1645年）越後国絵図の復元図
［坂井1991］より転載

周辺の気象は、夏は南東の季節風が吹いて高温多湿となり、冬は西の季節風となり低温多雨（多雪）となる典型的な日本海式気候である。中条町の気象データを参照すると、近年20年間の年間平均気温は13.2℃、年間降水量は2,178.6mmで、新潟市に比べ11～3月の平均気温は約1℃低く、年間を通じて降水量は多い（第7図）。また、11月から4月にかけての平均風速は2m/sを超える。遺跡のある平野部中央では、冬の西風が非常に強く、雪も海岸付近に比べ比較的多い。



第7図　中条町の平均気温・降水量
1979～2000年の平均値
新潟気象台観測データから作成

周辺の植生をみると、櫛形山脈の山頂付近はナラを主体とした天然広葉樹林となっているほか、国指定天然記念物の「橡平のサクラ樹林」と呼ばれる野生のサクラ分布地がある。山麓から中腹はスギの人工林が多い。平野部は水田地帯となり、河川の中洲にマコモ・ミクリ群落などの抽水植物がみられる。砂丘上はアカマツ林となる。船戸川～落堀川ではコイ・フナ・ナマズ・ドジョウ・ハヤなどの下流域に生息する淡水魚が豊富で、以前は四季を通じて漁が行われていた［熊倉1992］。地元の人によると最近でもわずかながらサケが上ってくることがあるという。冬期にはコハクチョウの大群が飛来し、水田で採食する姿を見ることができる。

3　歴史的環境

A　阿賀北地域における遺跡の分布と立地

ここでは、阿賀野川よりも北側の地域（以下、阿賀北地域）の縄文時代草創期から奈良・平安時代までの遺跡を分布・立地の面から概観する。遺跡の内容は、22市町村について県教委埋蔵文化財包蔵地カードを基に調べ、それに既刊の発掘調査報告書などの知見を加えた。遺跡位置図は、縄文時代草創期～前期、縄文時代中期、縄文時代後期、縄文時代晩期、弥生・古墳時代、奈良・平安時代の６時期に分けて作成してある（第８・９図）。

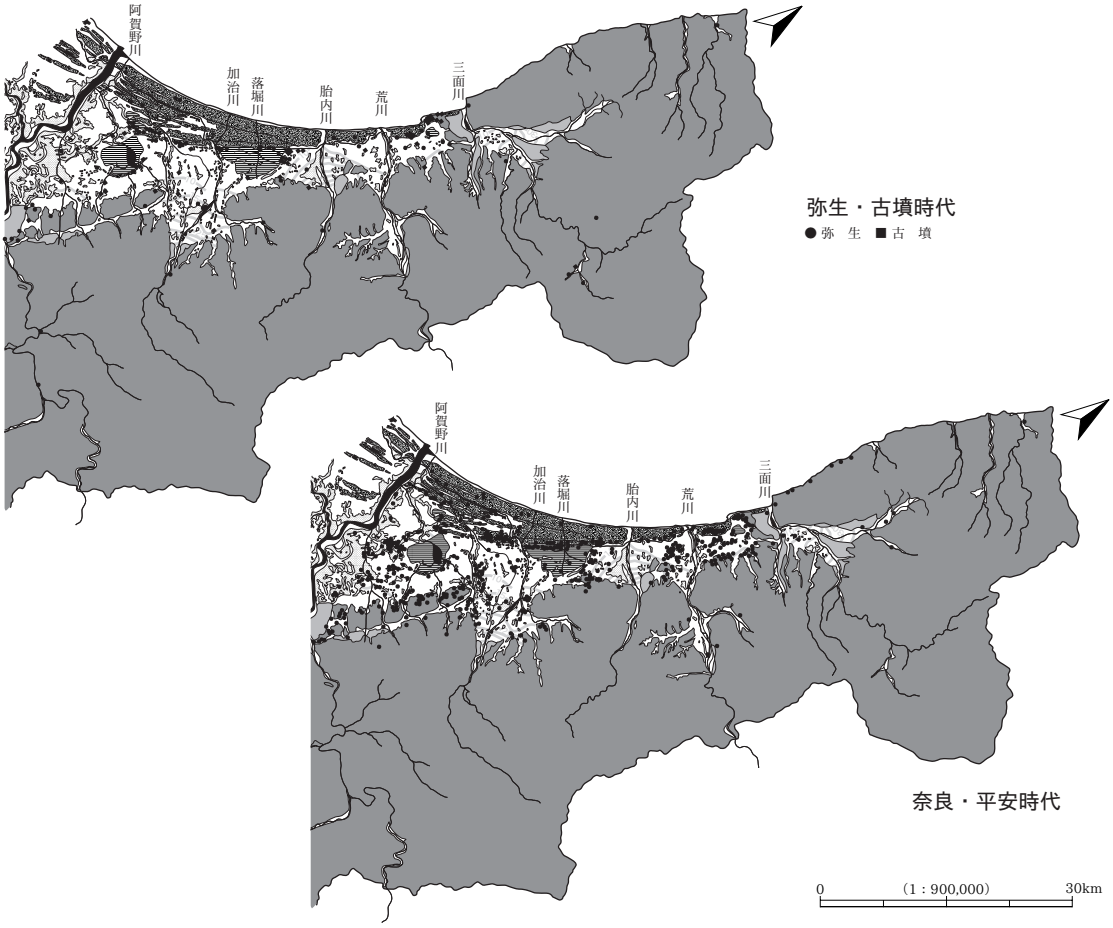
縄文時代草創期・早期　三面川及びその支流の段丘上と、加治川沿いの段丘・丘陵・山腹上に立地している。草創期は８遺跡が確認されており、前者では朝日村アチヤ平遺跡など、後者では新発田市扉山岩陰遺跡などが認められる。早期は13遺跡が確認されており、前者では朝日村元屋敷遺跡・樽口遺跡など、後者では新発田市上車野Ｃ遺跡・二タ子沢Ｃ遺跡などが認められる。草創期・早期の遺跡は、標高約100～200ｍの河川沿いの段丘・丘陵上に立地しており、今までに確認された遺跡は拠点集落ではなく、いずれもキャンプサイト的に使われた場所であると考えられている。早期の出土土器をみてみると、朝日村黒渕遺跡・樽口遺跡で関東系（三戸式、田戸下層式、田戸上層式）、上車野Ｃ遺跡で東北系（日計式、常世式）、中部・東海系（細久保式）が認められる。

縄文時代前期　草創期・早期と比較して、急激に遺跡数が増加し、69遺跡を数える。その大半は草創期・早期に同じく、標高の高い丘陵・段丘上に立地するが、一方で砂丘（新砂丘Ⅰ-1・2）や扇状地などの低地上に立地する遺跡も認められるようになる。また、面的には三面川、石川、荒川、胎内川、加治川、阿賀野川などの河川沿いに点在する傾向にある。草創期・早期で未確認の集落（竪穴住居）が、朝日村アチヤ平遺跡中・下段［滝沢・富樫1998］や新発田市二タ子沢Ａ遺跡［田中・鈴木2000］などで認められるようになる。出土土器をみてみると、県内の布目式（前葉）、刈羽式（後葉）のほか、前期を通して、関東系（花積下層式、関山式、諸磯式、十三菩提式など）・東北系（桂島、表館、大木２式、大木５・６式など）のものが出土している。また、わずかながら、北陸地方・近畿地方の影響を受けたものも認められる。

縄文時代中期　遺跡は阿賀北地域全体に広がり、遺跡数も飛躍的に増加し272遺跡を数える。丘陵・山腹上が66遺跡、丘陵麓・扇状地上などのいわゆる麓部が44遺跡、砂丘（新砂丘Ⅰ-1～4）上が12遺跡、平野部が２遺跡、自然堤防上が１遺跡を数え、前期よりも低地の遺跡が若干増加している。このような状況の中で、特に当該期より新たに遺跡の存在が確認された地域として、村上市上海府地区の海岸線に沿った標高40～60ｍの海岸段丘上［塩原・竹内2001］や、福島県との県境に近い鹿瀬町の阿賀野川による河岸段丘上［横山ほか2000］を挙げることができる。前期から認められるようになった集落は当該期では確認例を増やし、それらの中には三面川に沿った河岸段丘上に立地する朝日村前田遺跡［赤羽ほか1991；川村ほか1993］や、標高20ｍ程の段丘上に立地する安田町横峰Ｂ遺跡［川上ほか1981］のように、竪穴住居を円形やコの字形に配する例も認められる。出土土器をみてみると、前葉は、関東・中部高地系（五領ヶ台式、阿玉台式、勝坂式）が南部で、北陸系（新保・新崎式）、東北系（大木7a・7b式）が広範囲で認められる。中葉になると、東北系（大木8a・8b式）が全域で認められるようになり、県内の馬高式も広範囲で認められる。そして、後葉の阿賀北地域は東北系（大木9a・9b・10式）一色となる。

縄文時代後期　遺跡数は172遺跡を数え、中期に飛躍的に増加した遺跡数は減少方向に向かう。一方

第８図　阿賀北地域における縄文時代の遺跡分布



第９図　阿賀北地域における弥生時代～奈良・平安時代の遺跡分布

で新砂丘Ⅱに立地する遺跡の増加に伴い、砂丘上の遺跡総数は中期と比較して17遺跡と増加する。また、これまで未確認であった沖積地の遺跡が確認されたことは注目に値する。

当該期には、敷石住居が朝日村アチヤ平遺跡［滝沢・富樫1998；富樫ほか2002］・本道平遺跡［山崎2000］などで認められる。安田町藤堂遺跡は、隣接する同町中道遺跡と共に大規模な集落を形成している［甘粕ほか1983］。また、沖積地の遺跡としては、確認調査のため全容は明らかではないが、後期中葉から晩期前葉にかけて当時の川に沿って営まれ、掘立柱建物や炭化物集中範囲、大量の堅果類が検出された中条町野地遺跡［小田2002a］や、近接して確認された同町道下遺跡・昼塚遺跡・江添遺跡が挙げられる。出土土器をみてみると、関東系（称名寺式、堀之内式）・東北系（綱取式）のものも認められるが、県内全域に分布する三十稲場式・南三十稲場式が多く認められる。中葉も関東系（加曽利Ｂ式）のものも認められるが、県内全域に分布する三仏生式が多く認められる。そして、後葉になると、段丘上や丘陵上の遺跡に分布する東北系の瘤付（新地式）土器の出土が多くなる。

縄文時代晩期　遺跡数は後期より減少し、108遺跡を数える。分布・立地において、後期との大きな差異は認められないが、砂丘上の遺跡が24遺跡を数え、後期より増加している。また、当該期では遺跡数が減少する一方で、本遺跡のように多数の遺構が確認される大規模な遺跡が、立地・標高に関係なく各地で認められるようになる。そのような遺跡として、後期前葉から晩期末葉を主体とし竪穴住居や掘立柱建物など多数の遺構が検出された、標高約200mの三面川左岸の河岸段丘上に立地する朝日村元屋敷遺

跡［滝沢・池田1998；滝沢ほか2002］、後期後半から弥生時代にかけて営まれ竪穴住居・柱穴・土坑群・埋設土器などが検出された、標高約40mの谷底平野に立地する新発田市村尻遺跡［田中ほか1982］、晩期後葉から末葉にかけて営まれ出土土器が「鳥屋式」として新潟県域における晩期後葉の標識とされている、標高約2mの砂丘（新砂丘Ⅰ-4）上に立地する鳥屋遺跡［磯崎1957；小出・寺村1961；関・石川ほか1980；関ほか1988］などを挙げることができる。出土土器をみてみると、当該期の阿賀北地域では、大洞式土器が認められ、東北地方北部の影響を受けていることがわかる。しかし、東北地方北部の影響だけでなく、中部・関東地方からの影響と考えられる浮線文土器も認められ、阿賀北地域は両土器分布圏の接点であるといえる。そのほかの土器としては、北陸系（御経塚式・前葉、下野式・中葉）、鳥屋遺跡で西日本刻目突帯文系の甕形土器も出土している［石川1988］。

弥生時代　遺跡数は62遺跡を数える。縄文時代にみられた高地から低地への移行は弥生時代に入っても継続し、約70％に当たる43遺跡が標高20m以下の砂丘・平野・丘陵・自然堤防・山麓に立地している。逆に、山岳地帯である朝日村の奥三面地域や東蒲原郡の遺跡数は少なく、わずかに活動の痕跡が認められるのみである［高橋ほか1998］。時期的には、前期が7遺跡、中期が33遺跡、後期が26遺跡を数え、前期の遺跡数が格段に少ないものになっている。前・中期の墓制には、再葬墓という東日本に特徴的な墓制がある。黒川村分谷地Ａ遺跡、新発田市村尻遺跡などの５遺跡で確認されており、県内では阿賀北地域以外で確認した遺跡が少ないため、再葬墓は阿賀北地域を特徴付けるものであると考えられる。出土土器をみてみると、東北系（宇津ノ台式、南御山式Ⅱ式、天王山式）の土器が認められ、東北地方との強い関係が弥生時代でも推測される。このほかには、県内の山草荷式や北陸系（小松式）、東海地方との関わりを思わせる土器群が村尻遺跡・京ヶ瀬村猫山遺跡から、関東地方との関連を示す土器が安田町物見山（大曲）遺跡・津川町原遺跡から出土している。

古墳時代　遺跡数は弥生時代より若干多く、79遺跡を数える。その内の約90％の72遺跡が標高20m以下の地点に立地している。その内訳は平野が28遺跡、砂丘が22遺跡、自然堤防が14遺跡、丘陵が4遺跡、山麓が3遺跡、段丘が1遺跡である。また、前期が30遺跡、中期が17遺跡、後期が23遺跡を数え、中期において遺跡数の減少が認められる。古墳は、中条町大塚遺跡地内の前期と考えられている城の山遺跡（円墳）・籠ほろき山（円墳）、北部九州系石室を持つ後期の村上市磐舟浦田山古墳１・２号墳（円墳）が確認されているのみである。前期の周溝墓は聖籠町二本松東山遺跡で４基確認されている。また、検討を要するが、豊栄市正尺Ｃ遺跡でも１基確認されている。集落遺跡としては、竪穴住居が１軒ずつ認められた、加治川村野中土手付遺跡（前期）・豊栄市正尺Ａ遺跡（前期）・村上市宮の上遺跡（中期～後期）・同市三角点下遺跡（後期）、竪穴住居が12軒認められた聖籠町山三賀Ⅱ遺跡（前期～中期初頭）、竪穴住居４軒、掘立柱建物９棟が認められた豊栄市正尺Ｃ遺跡（前期）などを挙げることができる。

奈良・平安時代　遺跡数は496遺跡を数える。平野及び低地上には179遺跡、砂丘上には124遺跡、そして各河川沿いの自然堤防上には58遺跡が立地しており、人々の生活の場が低標高の平野部中心になっていたことが明らかである。当該期の阿賀北地域は、律令国家により東北経営の拠点として渟足柵（647年）・磐舟柵（648年）が設置され、その後、律令体制の下で沼垂郡・岩船郡として機能していた。主な遺跡としては、「律令制下村落の典型例」と位置付けられ、その成立背景に律令国家との強い関連が想定されている聖籠町山三賀Ⅱ遺跡［坂井ほか1989］、遺物（墨書土器・円面硯など）や遺構（掘立柱建物のみ）の内容から官衙関連遺跡と考えられている豊浦町曽根遺跡［家田ほか1981・1982；川上ほか1997］、旧紫雲寺潟東方に位置し、木簡など大量の木製品や墨書土器から内水面交通を利用した物資集積に係る津施設

と想定されている中条町蔵ノ坪遺跡［霜鳥ほか2002］・船戸桜田遺跡［水澤・吉村2001ほか］・船戸川崎遺跡［水澤2002ほか］などが挙げられる。生産関係遺跡の須恵器窯跡・製鉄遺跡はその大部分が集中的に笹神丘陵に分布しており、両者が同一地域内に共存することは、北陸地方でよくみられることである。また製塩遺跡は新潟市東港太郎代遺跡・出山遺跡、中条町下原遺跡が確認されている。

B　周辺の遺跡

本遺跡では縄文時代晩期の集落跡と古代の遺物が認められ、大きく2時期に分割できる。そこで、ここでは縄文時代と、弥生時代から奈良・平安時代に分けて周辺遺跡の概要を述べることとする。縄文時代の範囲は荒川と加治川に挟まれた櫛形山脈西麓（一部東麓含む）以西の地域（第10図）、弥生時代から奈良・平安時代の範囲は胎内川と加治川に挟まれた櫛形山脈西麓以西（一部東麓含む）の地域とする（第11図）。

縄文時代　本遺跡周辺における調査の歴史は古く、明治時代中頃から大正時代にかけて坪井正五郎・鳥居龍蔵らによって加治川村貝塚遺跡（28）が現地踏査されている［齋藤1917ほか］。続いて1935年頃に八幡一郎・大木金平らによって加治川村山草荷Ⅱ遺跡（36）の発掘調査が行われ、研究対象とされている［甘粕ほか1983ほか］。また、1937年に県内の遺跡がまとめられた『新潟縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第七輯では旧黒川村・旧菅谷村・旧金塚村・旧加治村・旧亀代村で合計32遺跡が報告されている［齋藤1937］。ただし、それらの中には工事に伴う削平などから、現在では位置不明の遺跡が多い。

早期の遺跡は新発田市二タ子沢Ｃ遺跡（41）において当該期の土器が若干認められる［田中ほか2003］。

前期の遺跡としては、櫛形山脈西麓で中条町大沢遺跡（15）・二軒茶屋遺跡（17）、加治川村貝屋Ｂ遺跡（27）などが、同じく東麓で新発田市小丸山Ａ遺跡（65）・二タ子沢Ａ遺跡（45）などが挙げられる。二軒茶屋遺跡は本遺跡の北東約3kmの丘陵上に立地し、県内でも希有な前期初頭の土偶が出土している［水澤2003a］。二タ子沢Ａ遺跡は前期末から中期初頭に所属し、尾根の最高面を広場にして竪穴住居が環状に配置される。またフラスコ状土坑は中期初頭には認められなくなり、フラスコ状土坑の消長を明確に示している［田中・鈴木2000］。砂丘上（新砂丘Ⅰ）に立地する遺跡として中条町中倉（宝塔山）遺跡（13）・兵衛遺跡（19）・四ツ持遺跡（18）、加治川村山草荷Ⅱ遺跡（36）、紫雲寺町白山島遺跡（34）などが挙げられる。中倉遺跡は本遺跡の北西約3kmに位置し、前期初頭の土器が確認されており、当該期に砂丘が形成されていた根拠となっている［戸根1982；酒井ほか2002］。山草荷Ⅱ遺跡は本遺跡の南西約5kmに位置し、前期末葉を主体とする。関東系の十三菩提式に比定される土器と、東北地方の大木6式の影響を受けた土器が出土しており、両型式の接点となる遺跡である［甘粕ほか前掲］。

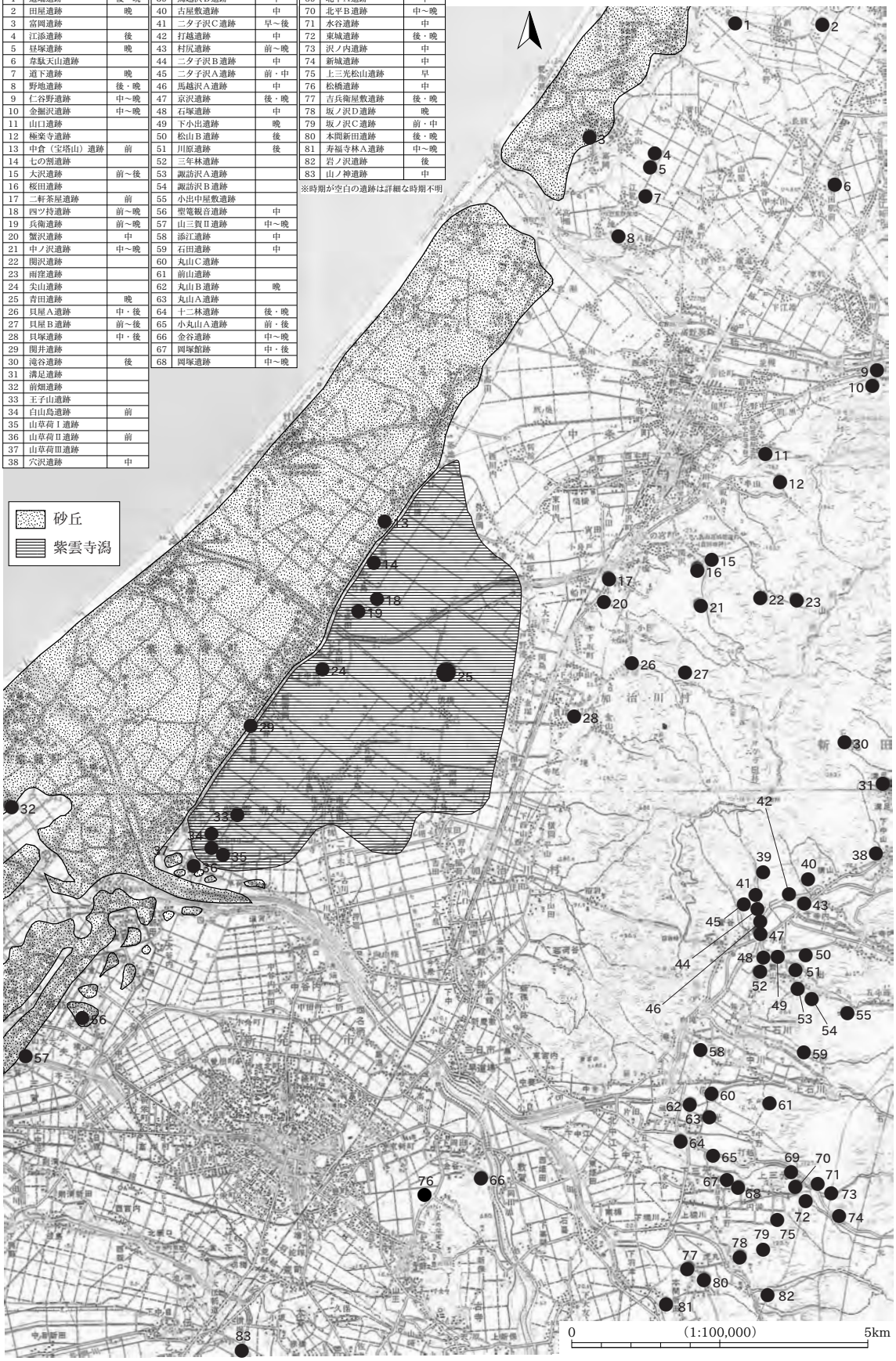
中期には、櫛形山脈山麓において遺跡数が増加する。櫛形山脈西麓で中条町仁谷野遺跡（9）・金掘沢遺跡（10）・蟹沢遺跡（20）・中ノ沢遺跡（21）、加治川村貝塚遺跡（28）などが、東麓で新発田市穴沢遺跡（38）・二タ子沢Ａ遺跡（45）・二タ子沢Ｂ遺跡（44）・石田遺跡（59）などが挙げられる。貝塚遺跡は山裾の台地上に立地し、中期前葉を主体とする。かつてはシジミなどの汽水性の貝が厚さ1m以上にわたって堆積していた［伊藤ほか1985］が、後世の掘削などによって現在では認められない。本遺跡周辺を流れる加治川・胎内川は近代に改修された河川であり、それまでは砂丘を越えることはできず、胎内川は荒川へ、加治川は阿賀野川へ合流していた。その影響により、周辺では湖沼や湿地が発達していたと考えられる。第10図では示していないが、中期後葉から後期前葉に所属する新発田市轟貝塚ではシジミのほかに淡水性であるカワニナが確認されており、当時の遺跡周辺において河川または湖沼の存在が推定されている［田中2001］。貝塚遺跡においても同様な自然環境が広がっていた可能性もあろう。中期中葉に所

No.	遺跡名	時期
1	道端遺跡	後・晩
2	田屋遺跡	晩
3	富岡遺跡	
4	江添遺跡	後
5	昼塚遺跡	晩
6	韋駄天山遺跡	
7	道下遺跡	晩
8	野地遺跡	後・晩
9	仁谷野遺跡	中～晩
10	金掘沢遺跡	中～晩
11	山口遺跡	
12	極楽寺遺跡	
13	中倉（宝塔山）遺跡	前
14	七の割遺跡	
15	大沢遺跡	前～後
16	桜田遺跡	
17	二軒茶屋遺跡	前
18	四ツ持遺跡	前～晩
19	兵衛遺跡	前～晩
20	蟹沢遺跡	中
21	中ノ沢遺跡	中～晩
22	関沢遺跡	
23	南窪遺跡	
24	尖山遺跡	
25	青田遺跡	晩
26	貝屋Ａ遺跡	中・後
27	貝屋Ｂ遺跡	前～後
28	貝塚遺跡	中・後
29	関井遺跡	
30	滝谷遺跡	後
31	溝足遺跡	
32	前畑遺跡	
33	王子山遺跡	
34	白山島遺跡	前
35	山草荷Ⅰ遺跡	
36	山草荷Ⅱ遺跡	前
37	山草荷Ⅲ遺跡	
38	穴沢遺跡	中

No.	遺跡名	時期
39	馬越沢Ｂ遺跡	中
40	古屋敷遺跡	中
41	二タ子沢Ｃ遺跡	早～後
42	打越遺跡	中
43	村尻遺跡	前～晩
44	二タ子沢Ｂ遺跡	中
45	二タ子沢Ａ遺跡	前・中
46	馬越沢Ａ遺跡	中
47	京沢遺跡	後・晩
48	石塚遺跡	中
49	下小出遺跡	晩
50	松山Ｂ遺跡	後
51	川原遺跡	後
52	三年林遺跡	
53	諏訪沢Ａ遺跡	
54	諏訪沢Ｂ遺跡	
55	小出中屋敷遺跡	
56	聖篭観音遺跡	中
57	山三賀Ⅱ遺跡	中～晩
58	添江遺跡	中
59	石田遺跡	中
60	丸山Ｃ遺跡	
61	前山遺跡	
62	丸山Ｂ遺跡	晩
63	丸山Ａ遺跡	
64	十二林遺跡	後・晩
65	小丸山Ａ遺跡	前・後
66	金谷遺跡	中～晩
67	岡塚館跡	中・後
68	岡塚遺跡	中～晩

No.	遺跡名	時期
69	北平Ａ遺跡	中
70	北平Ｂ遺跡	中～晩
71	水谷遺跡	中
72	東城遺跡	後・晩
73	沢ノ内遺跡	中
74	新城遺跡	中
75	上三光松山遺跡	早
76	松橋遺跡	中
77	吉兵衛屋敷遺跡	後・晩
78	坂ノ沢Ｄ遺跡	晩
79	坂ノ沢Ｃ遺跡	前・中
80	本間新田遺跡	後・晩
81	寿福寺林Ａ遺跡	中～晩
82	岩ノ沢遺跡	後
83	山ノ神遺跡	中

※時期が空白の遺跡は詳細な時期不明



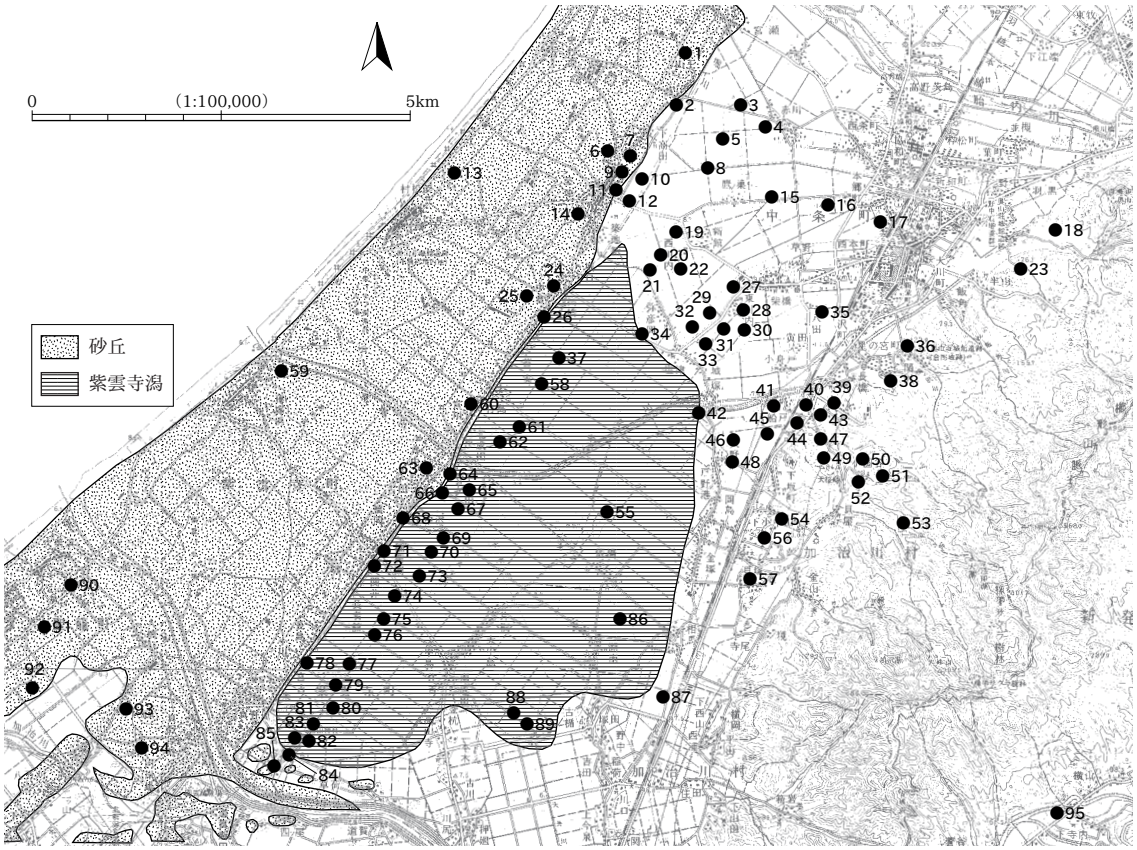
第10図　周辺遺跡地図　縄文時代

（国土地理院発行 平成3年「中条」平成2年「新発田」1:50,000原図）

属する石田遺跡［田中ほか1980］は石材組成に特徴があり、打製石器石材の半数が黒曜石を占める［阿部1997］。石田遺跡周辺の上石川・上三光地区及び、石田遺跡の南方約7kmに位置する板山地区は黒曜石の産出地であり、立地環境による影響とも考えられる。砂丘上に立地する遺跡として、中条町兵衛遺跡（19）・四ツ持遺跡（18）、聖籠町山三賀Ⅱ遺跡（57）などが挙げられるが、明確な遺構は確認されていない。

後期から晩期の遺跡として、櫛形山脈西麓で中条町中ノ沢遺跡（21）、加治川村貝屋A遺跡（26）・貝屋B遺跡（27）などが、東麓で新発田市村尻遺跡（43）・二タ子沢C遺跡（41）・十二林遺跡（64）などが挙げられる。二タ子沢C遺跡は山麓の緩傾斜地に立地し、後期中葉から後葉に所属する。竪穴住居のほかに土坑や埋設土器などが確認されている。当該期の集落跡は県内において類例が少なく、遺跡・遺物共に基準的な資料となり得る［田中ほか2003］。村尻遺跡は坂井川左岸の谷底平野に立地し、櫛形山脈を挟んで本遺跡の南東約7kmに位置する。後期後葉から晩期後葉に所属し、竪穴住居や炉址、土坑などが検出されており、土坑の中には柱穴と考えられるものも含まれる［田中ほか1982］。遺跡の規模は15,000㎡で、遺物も多く、当時の拠点的集落として注目される。砂丘上では中条町兵衛遺跡（19）・四ツ持遺跡（18）・聖籠町山三賀Ⅱ遺跡（57）などが挙げられ、特に四ツ持遺跡では本遺跡と同時期の土器が出土している［水澤1998］。また、沖積地では中条町野地遺跡（８）・道下遺跡（７）・昼塚遺跡（５）・江添遺跡（４）、荒川町道端遺跡（１）などが存在する。野地遺跡は本遺跡の北方約7kmに位置し、後期後葉から晩期前葉に所属する。確認調査によれば、包含層の厚さは最大で約1mに達し、遺跡の範囲は推定で108,500（日東道法線内15,500㎡×７層）㎡と大規模で、当時の拠点的集落と考えられている［小田2002a］。道端遺跡は本遺跡の北方約12kmに位置し、後期後葉から晩期前葉を主体とする。野地遺跡ほど遺物量は豊富ではないが、遺物集中ブロック間に時期差が認められることや、石器の出土量が少ないことが特徴として挙げられている［渡邊ほか2003］。道下遺跡・昼塚遺跡・江添遺跡においても後期前葉から晩期前葉の包含層が確認されているが、遺物量は少ない。上記の５遺跡は、距離的には約4kmの範囲内に立地しており、遺跡の規模や遺物量に著しい差が認められる点で注目される。沖積地において拠点的な集落の周囲に小規模な集落が点在することが予想される。ただし、道端遺跡以外では本格的な調査が行われていない。今後の調査成果が待たれる。

弥生時代　前期の様相をうかがうことのできる遺跡は、櫛形山脈東麓に位置する新発田市村尻遺跡（95）［田中ほか1982］のみである。本遺跡の南東約7kmの谷底平野に立地しており、再葬墓９基を含む11基の墓跡が検出されている。２基が前期末葉、９基が中期前葉に比定されている。これらの中には、東日本では希少なヒト形土器や剥片１点が出土した墓跡（第12号土坑）も存在する。剥片はヒト形土器の下から出土しており、副葬品であると考えられている［田中ほか1982］。また、東北系の土器を伴う墓址と東海系の土器を伴う墓址で墓址群が構成されており、出自を異にする二つのグループが共存していたと考えられている［甘粕1999］。なお、第11図には示していないが、櫛形山脈を挟んで本遺跡の東方約10kmの胎内川左岸段丘上に立地する黒川村分谷地A遺跡からも県内最北部となる再葬墓（前期３基、中期５基）が検出されている［伊東2001・2002・2003］。以上のように、村尻遺跡、分谷地A遺跡によって前期の墓制は明らかになりつつあるが、集落様相を明らかにする遺跡は当該期では未だ確認されていない。中期の遺跡の大半は砂丘上に立地している。当該期の遺跡としてまず注目されるべきは、本遺跡の南西約5kmの砂丘上に立地している加治川村山草荷Ⅱ遺跡（84）である。1935年頃に発掘・研究が行われ、福島県南御山Ⅱ式土器に類似した土器は山草荷式土器と呼称され、新潟県北部における中期の標識遺跡と



No.	遺跡名	時代
1	大坪遺跡	平安
2	家ノ浦遺跡	平安
3	沢田遺跡	平安
4	寺前遺跡	平安
5	一杯田遺跡	古墳
6	西裏遺跡	平安
7	堂前遺跡	平安
8	六斗蒔遺跡	古墳
9	竹の花遺跡	古墳
10	筑地館東遺跡	平安
11	筑地館北遺跡	奈良、平安
12	くね廻り遺跡	平安
13	下原遺跡	平安
14	裏山遺跡	平安
15	草野遺跡	平安
16	下名倉遺跡	平安
17	下町・坊城遺跡	弥生、古墳、平安
18	宮ノ入遺跡	平安
19	反貫目遺跡	古墳
20	西川内北遺跡	奈良、平安
21	西川内南遺跡	古墳、奈良、平安
22	中曽根遺跡	平安
23	極楽寺遺跡	古墳
24	中倉（宝塔山）遺跡	古墳、平安
25	筑地原遺跡	平安
26	宮崎遺跡	奈良、平安
27	野付遺跡	弥生、古墳、平安
28	屋敷遺跡	平安
29	天野遺跡	古墳、平安
30	上屋敷遺跡	古墳
31	大塚遺跡	古墳、平安
32	東川内中興野遺跡	弥生、古墳

No.	遺跡名	時代
33	城の山遺跡	古墳
34	福田遺跡	古墳、平安
35	段袋遺跡	奈良、平安
36	道西遺跡	奈良、平安
37	一の割遺跡	弥生、平安
38	高伝坂遺跡	平安
39	二軒茶屋遺跡	平安
40	蔵ノ坪遺跡	奈良、平安
41	船戸桜田遺跡	古墳、平安
42	船戸川崎遺跡	古墳、奈良、平安
43	蟹沢北遺跡	平安
44	蟹沢遺跡	古墳
45	下坂町遺跡	平安
46	大野Ａ遺跡	平安
47	升川遺跡	弥生、平安
48	大野Ｂ遺跡	平安
49	大桜峠遺跡	平安
50	家の下遺跡	平安
51	宮ノ下遺跡	平安
52	貝屋遺跡	平安
53	貝屋Ｃ遺跡	平安
54	下小中山窯跡	平安
55	青田遺跡	平安
56	下小中山遺跡	平安
57	八幡社遺跡	平安
58	四の割遺跡	弥生
59	葉塚山遺跡	平安
60	宮川遺跡	平安
61	四ツ持遺跡	弥生、奈良、平安
62	兵衛遺跡	弥生、奈良、平安
63	真中遺跡	平安
64	真中中割Ａ遺跡	平安

No.	遺跡名	時代
65	真中中割Ｂ遺跡	平安
66	真中中割Ｃ遺跡	平安
67	尖山遺跡	平安
68	稲荷岡Ｃ遺跡	平安
69	下中沢遺跡	平安
70	粒山遺跡	平安
71	稲荷岡Ｂ遺跡	平安
72	稲荷岡Ａ遺跡	平安
73	上粒山遺跡	平安
74	長者館北境遺跡	平安
75	薬師山遺跡	平安
76	銭島遺跡	平安
77	庚山遺跡	平安
78	小川遺跡	平安
79	小島遺跡	平安
80	王子山遺跡	弥生、平安
81	白山島遺跡	平安
82	山草荷Ⅲ遺跡	平安
83	山草荷Ⅰ遺跡	弥生
84	山草荷Ⅱ遺跡	弥生
85	山草荷Ⅴ遺跡	弥生
86	砂山中道下遺跡	平安
87	野中土手付遺跡	古墳、平安
88	二ッ割遺跡	平安
89	中住吉遺跡	平安
90	次第浜遺跡	平安
91	下新田遺跡	平安
92	前畑遺跡	平安
93	下二ッ山遺跡	平安
94	二ッ山遺跡	平安
95	村尻遺跡	弥生

第11図　周辺遺跡地図　弥生時代～奈良・平安時代

（国土地理院発行 平成3年「中条」平成2年「新発田」1:50,000原図）

して、当時黎明期にあった東日本の弥生土器研究に大きな成果をもたらした［森本・小林1938など］。また、山草荷Ⅱ遺跡では北陸系、中部山地系、東北北部系の土器が共存している［甘粕1999］。なお、隣接する山草荷Ⅰ遺跡（83）・山草荷Ⅴ遺跡（85）も山草荷Ⅱ遺跡と一連のものであると考えられている。後期の遺跡の大半は中期同様砂丘上に立地するが、徐々に平野部などの沖積地へも立地するようになる。当該期の阿賀北地域は多系統の土器が混在する地帯である。その様相を反映するように、本遺跡の北西約1.5kmの砂丘上に立地する中条町四ツ持遺跡（61）・兵衛遺跡（62）からは、東北系や北陸系の土器、あるいは東北地方北部との交流を想起させる続縄文土器が出土している［水澤1998］。

古墳時代　弥生時代から続く砂丘上から沖積地への移行は一層進み、前期の遺跡の大半は平野部や自然堤防上などを中心に立地する。このような遺跡の立地の中で、本遺跡から北東２～3kmの櫛形山脈の山裾に広がる平野には当該期の遺跡密集地帯がある。城の山遺跡（33）［水澤1999b］と籠ほろき山［吉村2002］は同じ大塚遺跡（31）内に所在しており、前者は平面形46×34m、高さ5mの円墳と考えられており、後者も径約8m（地籍図によると往時は約20m）の円墳である。両者の周辺には天野遺跡（29）・野付遺跡（27）・屋敷遺跡（28）・船戸川崎遺跡（42）など同時期の遺跡が確認されている［水澤1999b・2002ほか］が、現状でこれらの墳墓と集落の関連は不明確である。中期の遺跡は前期同様、平野部などの沖積地に立地するものが大半であるが、前期と比較すると格段に遺跡数が減少する。蒲原地方では古墳造営の断絶期が当該期に認められ、蒲原地方と大和政権との間に何らかの変化が生じた可能性も指摘されている［坂井ほか1989］。当地域における遺跡数の減少も、蒲原地方のような政治的情勢に起因する可能性もあろう。後期の遺跡は遺跡数・立地条件ともに、中期の遺跡とほとんど変化が認められない。中条町船戸桜田遺跡（41）では6世紀第２・３四半期の須恵器が出土しているが、当該期は越後で須恵器生産が始まっていないことから、北陸地方や関東地方からの搬入品であると考えられている［水澤・吉村2001］。

奈良・平安時代　旧紫雲寺潟と考えられている範囲の縁辺に、砂丘上から平野部まで多くの遺跡が分布し、古墳時代と比較して格段に遺跡数が増加する。本遺跡から出土した9世紀代の土器や木製品は地質的な調査から紫雲寺潟形成以前に北東方向からの洪水により運ばれたことが明らかになった［荒川2000；高濱・卜部2002］。そこで、本遺跡の北東方向に目を向けると、中条町草野遺跡（15）［水澤2003b］・中倉遺跡（24）［水澤1999a］・船戸川崎遺跡（42）［水澤2002ほか］・船戸桜田遺跡（41）［水澤・吉村2001ほか］・蔵ノ坪遺跡（40）［霜鳥ほか2002］などの9世紀を主体とする遺跡が舟戸川沿いに密集している。これらの遺跡は川跡から完形の土師器・須恵器・木製品が出土する点で共通している。それらの木製品には斎串や馬形などの形代類が含まれることから、何らかの祭祀行為に伴って川へ廃棄されたものと考えられている［水澤2003b］。また、木簡や墨書土器などの文字資料となる遺物が大半の遺跡から出土しており、船戸川崎遺跡出土の木簡に「土師船守」［水澤2002］、蔵ノ坪遺跡出土の木簡に「少目」、墨書土器に「津」が認められている［霜鳥ほか前掲］。以上のような文字資料と川沿いという立地を合わせると、当地域における内水面交通に係る官衙関連施設の存在も想定できよう。なお、先述した地質的な調査・研究から、紫雲寺潟は地盤変動による沈降が原因で形成された可能性の高いことがわかった［高濱・卜部2002］。現時点で10世紀代の遺跡がほとんど見つかっていないのは、この潟の出現により一帯の集落は崩壊し、各種機構や流通システムの再編を余儀なくされたためであろうとの指摘もある［水澤ほか2002］。

第Ⅲ章　調査の概要

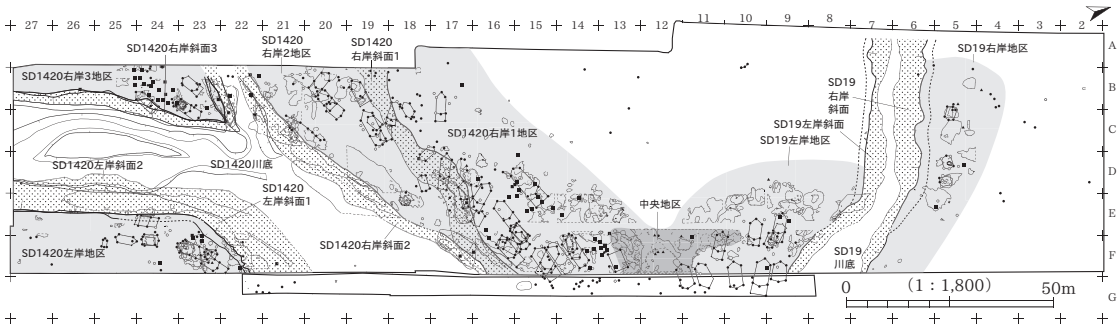
1　概　　観

A　遺跡の時期

本遺跡で遺構・遺物が検出された時期は縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世であるが、その主体は縄文時代晩期である。土器型式は大多数が在地の鳥屋2a式と鳥屋2b式で、これに東北地方の大洞A式・大洞A'式が共伴しており、縄文時代晩期終末に限定される遺構・遺物を多数出土検出した。古代の遺物は木製品を主体とし、出土土器から概ね9世紀第3～4四半期が主体とみられる。そのほかの時期の遺物はごくわずかに過ぎない。

B　遺跡の地区呼称について

本遺跡は二つの河川跡（SD19・SD1420）により分断されており、遺構や遺物の分布が河川により規制されている。また、11～13Fグリッドでは各時期に大規模な炭化物集中範囲は認められるが、掘立柱建物のない遺構空白域となっており注目される。さらに、後述するように層序も場所ごとによって大きく異なる。こうしたことから、遺構・遺物の記述に当たっては河川跡で区切られた範囲を基本として行うこととする。地区名称は第12図のようにSD19右岸地区・SD19左岸地区・中央地区、SD1420右岸1地区、SD1420右岸2地区、SD1420右岸3地区、SD1420左岸地区とする。また、河川内の呼称は、底面付近を「川底」、上端から下端に至る範囲を「斜面」と呼ぶ。SD1420右岸1・2地区の斜面については、S4～S3層期の斜面をSD1420斜面1、S1層期の斜面をSD1420斜面2とする。SD1420左岸地区の斜面も同様に斜面1・2に分かれる。地区単位で検討することにより、遺構・遺物の分布状況を明確にし、各層位単位の分布状況や遺物内容を把握することが期待できる。



第12図　地区の呼称

C　遺構・遺物の検出状況

北東から南西に向かって流れる河川（SD1420）の両岸に、南北210mにわたり形成された縄文時代晩期終末の大規模な集落跡を検出した。遺構は掘立柱建物58棟（ピット374基）・土坑79基・掘立柱建物を除くピット257基・埋設土器11基・炭化物集中範囲269か所・堅果類廃棄範囲59か所などである。遺物は土器750箱（箱サイズ54×34×10cm）、土製品21点、石器24,426点、石製品54点、木製品

1,182点、漆製品68点などである。遺構・遺物の検出は後述する基本層序のS4・S3・S1層期が大半であり、S4～S3層期とS1層期に大きく区分が可能である。

S4～S3層期の遺構はSD19右岸と左岸地区・SD1420右岸1地区・SD1420左岸地区で認められる。SD19右岸地区とSD1420左岸地区は少ない。堅果類廃棄範囲はSD1420右岸斜面1で多数検出された。遺物はSD19左岸地区～SD1420右岸地区の掘立柱建物と重ならない陸地側、ならびに中央地区に多く、炭化物集中範囲の検出域と重なる点が特徴である。また、SD19川底及びSD1420右岸斜面1から川底にかけても多数出土した。SD1420左岸地区は右岸に比べ少ない。

S1層期の遺構はすべての地区で認められる。特に、SD1420右岸2・3地区に新たに遺構が構築され、左岸地区も多数の遺構が認められる。炭化物集中範囲は掘立柱建物検出域と河川跡との間に多いことが特徴である。堅果類廃棄範囲はSD1420右岸斜面2・3及び左岸斜面に大規模に認められる。遺物はS4～S3層期に比べて多く、出土範囲は掘立柱建物検出範囲と重なる点が特徴である。

弥生時代は土器片がSD1420川底から1点出土したのみである。古墳時代も土器片1点のみである。

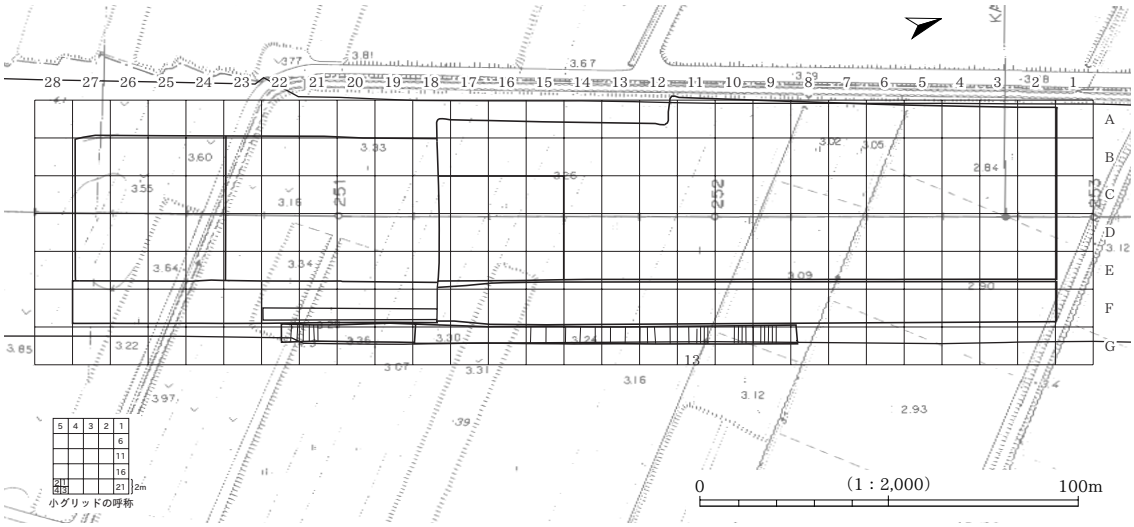
古代の遺構はSD19左岸地区からSD1420右岸地区にかけての陸地側に広がるSX51でヒトの足跡が1,225か所検出された。このほか、古代に所属するとみられるピットがSD19付近を中心に46基検出された。遺物は土器17点・土製品3点・木製品2,238点で、その多くが洪水により運ばれたものである。

中世のものとみられる木製品53点・鉄製品2点は紫雲寺潟の内部に堆積する基本層序Ⅴ・Ⅳ層から出土した。紫雲寺潟形成以後に潟内部に廃棄ないし水流により運ばれたものであろう。

2　グリッドの設定

グリッドの方向は高速道路の方向と一致させるため、道路のセンター杭を基準とした。STA.253＋00（新座標 北緯38°01′27.01312″東経139°21′27.60175″）（1D杭）を基点に、STA.251+20（新座標 北緯38°01′21.35336″東経139°21′25.79057″）を結ぶ方向を基準線として設定し、10m四方の方形を組み、これを大グリッドとした。このため、グリッドの長軸方向は真北から14°22′40″東偏している。

大グリッドは北西隅から長軸方向を算用数字、短軸方向をアルファベットとし、この組み合わせによって表示した。大グリッドはさらに2m四方に25分割し、第13図のように北西隅を基点に1～25の小グ



第13図　グリッド設定図

リッドを設定した。また、小グリッドはさらに1m四方に４分割し、北西隅を基点に１～４に設定した。以上からグリッドは、5C10-2のように表記した。

3　発掘調査の方法

土留め　遺跡は現地表面より1.5～8mも深く、軟弱地盤であったことから、調査範囲の周囲に土留め矢板を打設した。平成11年度調査では河川跡が確認されていなかったことから、長さ8.5mの鋼矢板を周囲に打設した。平成12・13年度は道路公団の協力を得て土留め工事を行った。平成12年度は地表面から5m以上掘削することが予想されたため、調査区の東西両端にそれぞれ２列の鋼矢板を10mの間隔で平行に打ち（矢板長：東端　内側10.5m　外側14.5m、西端　内側10m　外側9.5m）、内側の矢板列が傾かないように外側の矢板列をアンカーとするため、２列の矢板をタイロッドと呼ばれる直径65mmの鋼鉄ワイヤーで連結する工法を採用した。平成13年度は前年度の矢板をそのまま利用したほか、新たに10m前後の鋼矢板を打設した。しかし、河川跡の部分は非常に深いことから、河川跡と予想される範囲にのみ調査区内に中間杭を打ち、切梁を設置した。E区については、部分的に深く調査するため、調査区内にさらに鋼矢板を打設し、切梁を設置した。

排水　平成11・12年度は調査区の周囲に暗渠を施設した。暗渠工事の際は、柱根が出土した場合は位置を記録して取り上げたものもあるが、遺物については時間の制約から取り上げなかった部分が多い。平成13年度は調査区の幅が狭かったことから、調査区の周囲に土中の水を強制的に汲み上げるウェルポイントを施設した。調査中はグリッドラインに合わせて2.5m四方に幅20～50cmのトレンチを設け、土層観察用としたが、このトレンチは排水溝の役目も担った。トレンチ掘削の際は雨水などの水が暗渠や集水枡に流れ込むよう傾斜をつけた。また、トレンチの底面は遺物包含層下にある浸透性の高い砂層まで掘り下げたが、砂層の上面で止めることにより壁面の抉れと崩落を防いだ。水の溜まるところには適宜水中ポンプを設置したほか、水深の浅いか所では円盤形の吸引部を持つバキュームポンプが有効であった。

表土除去　遺物包含層より上位にある無遺物層については、作業量軽減のためできるだけ遺物包含層直上まで重機により掘り下げた。ただし、重機が調査区に乗り入れる場合は遺物包含層の上面に80cm以上の土層を残し、重機の重みによる地盤の沈下・崩落を防いだ。

遺物包含層の調査　土層観察用ベルトで層位を観察し分層した後に、薄い遺物包含層を１層ずつ面的に移植ごてで薄くスライスするように掘り下げた。層位は多様かつ複雑であったことから、土層断面図を各所で作成し、層位情報を記録するよう心がけた。遺物はすべてビニール袋に入れて出土した位置に残し、周囲を掘り下げた。そして、全点について柱状になった遺物下の土を削って層位を確認した後に、通しNo.を付けてトータルステーションで出土位置・標高・種別・出土層位などを記録して取り上げた。全点ドットは、遺構、特に掘立柱建物と遺物との平面的分布関係を正確に把握するための手段であり、遺物の一括性や土器の接合関係を検証する上でも重要である。青田遺跡では層位ごとの分布を読み取ることができ、さらに有効である。なお、土器については細片も多かったことから、2cm角未満のものはトータルステーションで記録せず、上記の情報を記載した荷札を添付して取り上げた。なお、Ⅵ層から出土する古代の木製品と判断できるものはドットで取り上げていない。

遺構の調査　遺構確認は主に複数の遺物包含層下にある間層の上面で行い、Ⅷ層上面まで掘り下げて最終確認した。沖積地の遺跡では遺構検出ができる層位を早く見つけることも重要である。土坑については、

土坑内覆土と周囲の土層との区別が難しく、検出は難航した。しかし、2.5m四方に入れたトレンチとその土層断面の観察で検出できたものが多数あり、沖積地における調査方法として非常に有効である。柱根の調査は、掘形の長軸方向や傾倒する方向に合わせて半截ラインを設定し、片側を箱状に半截した。このような方法をとった理由は、掘形の大きさが柱根より一回り大きい程度であったことと、周囲の層位との切り合い関係を観察するためである。半截に当たっては、掘形上端の半分を記録し、さらに出土遺物などに注意しながら掘り下げた。完掘に際しては、残り半分の掘形の上端を記録し、柱根平面図を作成してから柱根を取り上げた。炭化物集中範囲と堅果類廃棄範囲は、ウォーター・セパレーションによる微細遺物の検出を目的として土壌のサンプリングをしながら掘り下げた。ウォーター・セパレーションについては本編第Ⅴ章8.Aを参照いただきたい。遺構平面図はトータルステーションを利用して作成した。

脆弱遺物の取扱い　漆製品などの脆弱遺物の取り上げは、遺物を残したまま周囲を掘り下げ、その周りをダンボールなどの厚紙で囲み、土と厚紙の間に速乾性のウレタン液を流し込んで乾燥後に土ごと取り上げた。大形の丸木舟・草壁材・草材が敷かれた土坑・簾状編物も、周囲を板材で囲み、ウレタンを充填してクレーンなどの重機で吊り上げた。脆い木製品はアクリル板などに乗せて取り上げた。こうした有機質遺物は常に噴霧器やジョウロで水分を補充する必要がある。取り上げるまでに時間を要する場合は、遺物の上に不織布を被せ、湿らせた後にビニールを上から被せると有効である。また、こうした遺物の細かな掘り出しは、現地で無理に行わず室内で行ったほうが遺物を傷めず効率もよい。

科学分析用試料サンプリング　花粉分析や年代測定など様々な科学分析を行うに当たっては、分析者と現地で協議して試料を選択することが重要だが､調査側がある程度試料を採取しておくことも必要である。そこで、土坑覆土については概ねすべてについて、遺物包含層からは良好な試料を採取できるか所を抽出し、いずれも10cm角で柱状に断面から切り出して保管した。こうしておくと、科学分析の必要性が生じたときに対応できるメリットがある。

4　層　　序

A　はじめに

遺跡の層序は、紫雲寺潟の形成以前と以後の堆積層に大きく区分できる。遺跡が検出された紫雲寺潟形成以前の層序は、河川跡の内部に堆積した層序とそれ以外の陸地で決定した基本層序に区分することができる。ここでは、基本層序と河川跡の層序を説明した後に、これらの並行関係について述べたい。

なお、C・D区（第4図）には図面図版4に示したように高さ約10mの工事用盛土が施されていたため、C区を中心に最大約1mの地盤沈下が認められた。また、E・F区も工事用道路のために約1mの盛土が施設されており、40cmほど沈下している。本書で表す標高はこれらを勘案せず、調査データをそのまま用いている。

B　基本層序

1）基本層序の決定と表記方法

基本層序の決定は、調査範囲北側に当たるSD19右岸地区の5Aグリッド西壁セクションベルトの観察により行った（第16図㉖）。層位の呼称は大区分をローマ数字Ⅰ層～Ⅹ層とし、中区分にアルファベットの小文字を用いた。さらに小区分に細分する場合は、「S」「K」「D」のアルファベットを頭に付した後に、

アラビア数字・アルファベット小文字などを続けて表記した。なお、後述する縄文時代晩期終末の遺物包含層であるⅦｃ層及びＤ層は、SD1420左岸～中央地区～SD1420右岸１地区における細分を基準とし、遺跡の時期を述べる際もこれを基準とする。

2）基本層序の概要（表６・７、第14～16図）

Ⅰ層～Ⅳ層は調査初段階に重機による表土剥ぎで掘り上げており、詳細は不明である。Ⅶ層はSD1420右岸１地区より北側でのみ認められ、これより南側はSD1420の覆土となる。

Ｘ層・Ⅸ層・Ⅷ層は遺跡成立以前に堆積した砂層を主体とする層である。Ｘ層は砂層と腐植土層が互層となっており、止水期と氾濫期が交互に繰り返されていたとみられる。Ⅸ層はシルトを含まない砂層で、一部に腐植土が堆積する。Ⅷ層は砂層とシルト層が互層となる。図面図版141c-c"セクションをみると、全体的に南側に傾斜するものの、一定の層厚を保って堆積していることから、Ｘ層形成後の沈下による可能性がある。

Ⅶ層は縄文時代晩期の包含層を中心とするシルト層である。腐植土の有無により、Ⅶｄ・Ⅶｃ・Ⅶｂ・Ⅶａ層に区分できる。Ⅶｄ層はシルト・粗砂・腐植土が互層となる層であるが、一部で上位に薄い遺物包含層が確認された。この層位には「D」を付して、D4・D2層の遺物包含層、D3・D1層の無遺物層に分層した。これより下位はそのままⅦｄ層と呼んだ。

Ⅶｃ層は縄文時代晩期終末の遺物包含層である。さらに観察すると、粘性の高いもの、砂が若干混入するもの、腐植土が少量混入するもの、炭化物を含むもの、などの薄い層位の単位＝葉理（ラミナ）を認めることができた。本遺跡では、この葉理の単位で遺物を包含する層と含まない層に区分することができ、前者には「S」を、後者には「K」をそれぞれ層位名の頭に付した。

Ⅶｃ層はSD19右岸地区とSD19左岸～中央～SD1420右岸１地区で層序が異なる。SD19右岸地区ではK2・S2・K1・S1層の４層に細分した。S2層の炭化物層が２層に分離できる場合があり、さらに細分できる可能性がある。K2層は色調が比較的明るめなことが特徴で、Ⅶｄ層との区別は容易である。各層位ともSD19に近づくと層厚を増し、砂層が筋状に認められるようになる。

SD19左岸地区からSD1420右岸１地区にかけては、K5・S5・K4・S4・K3・S3・K2・S2・K1・S1層に10細分した。K5層はほかの混入物をほとんど含まず、層厚が厚いことや色調が明るいことから識別しやすい。S5層は腐植土が混入することが特徴である。S4・S3層も薄いが、炭化物や遺物を多量に含み明瞭に確認できる。S1層は層厚がほとんどない場合が多いが、S2層はほかのＳ層より厚く、13E～14Eグリッドでは灰白色の細砂が微量に混入し、S2b層と区分した範囲もある。こうした葉理に基づく層位区分の有効性は、層位別の遺構検出のほか、本編第９表に示すとおり土器の接合関係にも認められる。

Ⅶｂ・Ⅶａ層は、２～４グリッドでのみ確認できるが、遺物をほとんど含まない。両層ともSD1に切られており、SD1以前に周辺の湿地化により形成されたのであろう。

Ⅵ層は薄い砂層であり、調査範囲全域で確認できる。Ⅴ層と間を置かず直下に堆積し、シルトや粘土などを含まないことから短期間のうちに堆積したものと考えられる。古代の木器と９世紀中葉～末葉に位置付けられる須恵器・土師器が数点出土したことから、９世紀末葉に洪水などによって短期間のうちに形成されたものと考えられる[1)]。本遺跡では足跡以外の古代に属する遺構は検出されておらず、これらの遺物はほかの地域から砂層と共に運び込まれた可能性が高い（関連諸科学編第Ⅰ章１参照）。なお、Ⅵ層からは縄

1）調査検討委員 高濱信行氏、卜部厚志氏の調査による。

Ⅰ層	10YR4/2灰黄褐色土。粘性・しまりとも中。酸化鉄が縦に筋状に観察できる。現在の地表面下の表土層で、水田耕作土。
Ⅱ層	10YR3/2黒褐色土。シルト分多く、細砂を少量含む。粘性あり、しまり強。Ⅰ層と同様に酸化鉄を筋状に確認でき、水田耕作土の可能性が高い。
Ⅲ層	10YR3/1黒褐色の粘土層。細砂を中量含。土質はⅡ層に類似するが、筋状の鉄分を含まず分類可能。
Ⅳ層	2.5Y3/1黒褐色粘土とN5/灰色砂が厚さ1～5cm間隔で互層となる。粘土層は粘性強、しまり弱。砂層は細粒砂と中粒砂が混在。紫雲寺潟の内部に河川作用によって堆積したもの。全体の層厚は北側で薄く南側で厚い。砂層は南側から北側に傾斜して堆積する。坂井川や加治川からの流入により形成された可能性あり。木製品がわずかに出土。
Ⅴ層	5Y2/2オリーブ黒色粘土。Ⅳ層のシルト層に類似するが、砂を全く含まない。粘性強、しまり弱。
Ⅵ層	5Y3/2オリーブ黒色を呈する砂層。粘性なく、しまり弱。細粒砂と中粒砂が混在。木片や腐植物が混入する。層厚は5cm前後で、SX51やSD1420で約10cmと厚くなる。層位の下端ラインはⅦ層を切って波状を呈す。
Ⅶ層	N4/灰色シルトを基本とする層位。腐植土の混在の有無により、Ⅶａ～Ⅶｄに区分した。
Ⅶａ層	N4/灰色シルト。粘性強、しまり弱。2～4グリッドでのみ確認でき、SD1に切られる。
Ⅶｂ層	10YR3/2黒褐色で灰色シルトに腐植土が多量に混入。粘性・しまりとも中。2～4グリッドでのみ確認でき、SD1に切られる。
Ⅶｃ層	N4/灰色シルトを基本とする。粘性強、しまり弱。縄文時代晩期終末の遺物包含層である。S1～S5・K1～K5層に分類できる。
Ⅶｄ層	N6/灰色シルトと5Y7/1灰白色粗砂の互層。粘性弱、しまり中。5Y3/1オリーブ黒色の腐植土層が筋状に含まれる。上位部分に遺物包含層（D1～D4層）あり。
Ⅷ層	5Y8/2灰白色粗砂。粘性なく、しまり中。Ⅶｄ層の中粒砂より粒度が粗い。上面で遺物がわずかに出土。
Ⅸ層	2.5Y7/1灰白色砂。粘性なく、しまり弱い。粒子が粗く、砂礫に近いものを含む。遺物なし。
Ⅹ層	N6/灰色砂と10YR3/2黒褐色腐植土の互層。粘性弱、しまり中。

第６表　基本層序

SD19右岸地区

S1層	N4/灰色シルト。粘性強、しまり弱。この上面とⅥ層との境界部から遺物多量出土。
K1層	N4/灰色シルトに細粒砂が中量混入。粘性、しまりとも中。砂粒が混入せず、やや暗めのシルト層（変色部）の場合あり。
S2層	N4/灰色シルト。粘性強、しまり弱。炭化物の細粒が筋状に混入する。遺物出土。
K2層	N4/灰色シルト。粘性強、しまり中。色調が比較的明るめである。

SD19左岸～SD1420右岸１地区

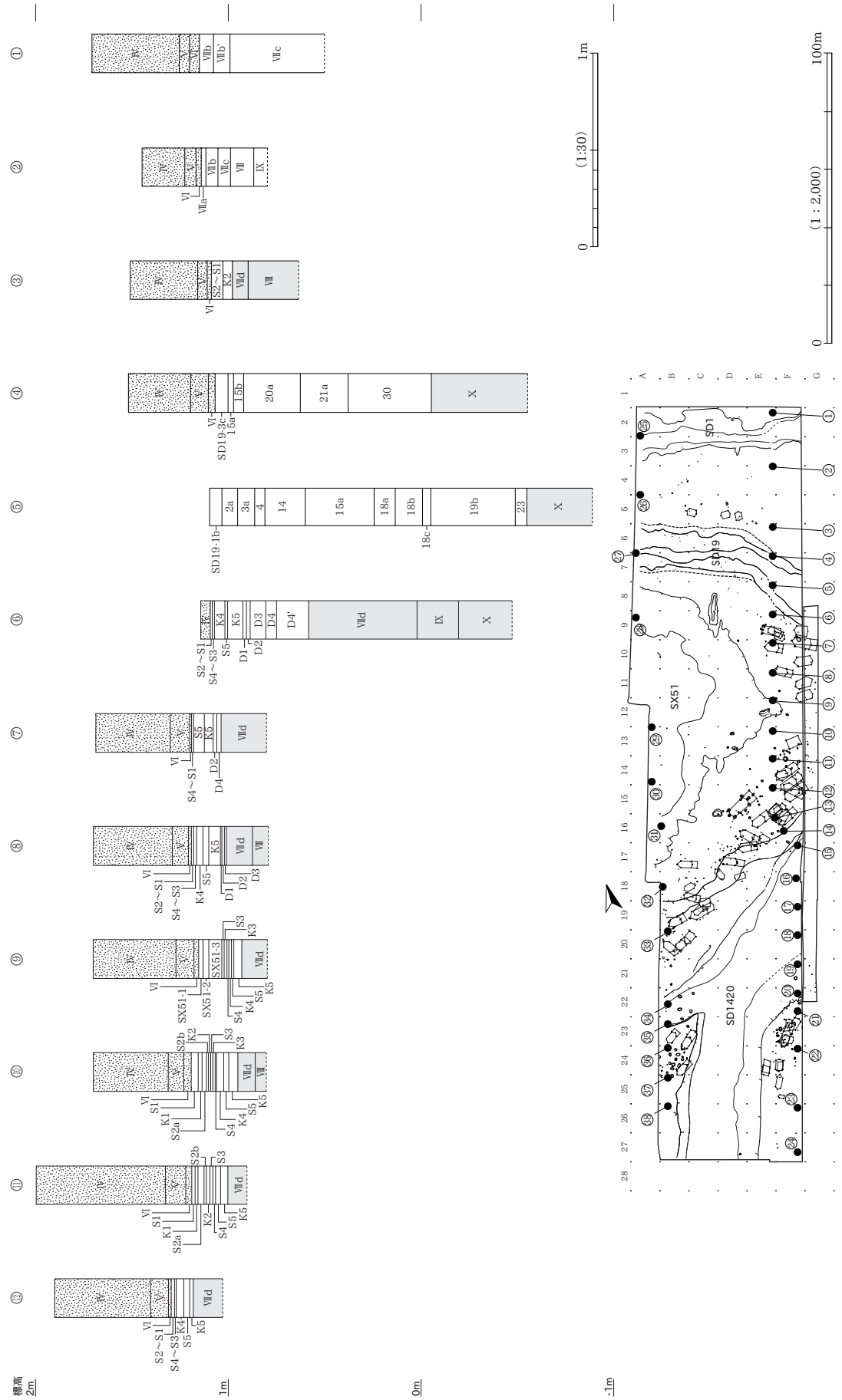
S1層	N5/灰色シルト。粘性中、しまり強。部分的にN6/灰色シルトをマーブル状に含む。堆積が安定せず。層厚が薄く確認できない場合あり。遺物は上面から大量に出土。
K1層	2.5Y8/1灰白色細砂、粘性・しまりとも弱。細砂とシルトがブロック状に混在する。層厚は薄く線状を呈する。
S2層	N5/灰色シルト、粘性中、しまり強。ほかのS層より厚く、13E～14Eグリッドでは灰白色の細砂が微量に混入するS2b層を分離できる。遺物出土量はS1層やS3・S4層に比べ少ない。
K2層	2.5Y7/2灰黄色細砂に灰色シルトが混入する場合と、N6/灰色シルトのみがある。粘性・しまりとも弱。層厚が薄く線状を呈する部分あり。
S3層	N4/灰色シルトで、粘性・しまりとも強い。遺物・炭化物多量含。
K3層	5Y8/2灰白色細砂に灰色シルトが混入。粘性・しまりとも弱。層厚は薄く、部分的に線状を呈する。
S4層	N4/灰色シルトで、粘性・しまりとも強。礫（径10～50mm）を微量含、腐植土が少量混入。遺物・炭化物多量含。
K4層	N6/灰色シルト。粘性中、しまり強。S4層より粒度が小さく、色調も明るめで区別が容易。植物遺体を少量含。炭化物の混入はほとんどない。
S5層	10Y3/1オリーブ黒色シルトに腐植土が混入。粘性強、しまり中。部分的に層厚が薄く線状を呈す。
K5層	10YR5/1褐灰色シルト。粘性・しまりとも強。混入物をほとんど含まず。層厚が厚く、色調が明るく識別容易。
D1層	7.5Y7/1灰白色砂。粘性中、しまり中。遺物含まず。
D2層	7.5Y7/1灰白色砂とN6/灰色シルトの互層。粘性中、しまり強。遺物出土。
D3層	N6/灰色シルト。粘性中、しまり中。筋状に砂層を少量含。遺物含まず。
D4層	7.5Y7/1灰白色砂。粘性弱、しまり中。筋状にシルト層含。遺物出土。

第７表　遺物包含層Ⅶｃ・Ⅶｄ層の細分

文時代晩期末葉の遺物も多量に出土しているが、縄文時代晩期の遺物包含層と間層を挟まずに接している場合に限定されていることから、Ⅵ層が堆積する際に遺物下部に砂層が流入したものと考えられる。あるいは、縄文時代の遺物廃棄後からⅥ層が形成されるまでの長い期間に、現在では区別できない砂層が形成されていた可能性もある。

Ⅴ層は紫雲寺潟の最も底に堆積する黒色粘土である。Ⅳ層は紫雲寺潟の内部に堆積した土層であり、シルト層と砂層が互層となるのが特徴である。砂層は河川による土砂の流入が活発化したことにより形成されたものであり、シルト層はそうした河川による堆積活動が弱まった時期に形成されたものであろう。SD1420の左岸に当たる23～27E～Fグリッドでは、Ⅳ層の上部に黒色土を含まない粗い砂層が厚く堆積するのが確認された。堆積角度は南側から北側に傾斜し、遺跡南方の中俵や湖南など旧坂井川によって形成された自然堤防の延長上に位置することから、埋没した自然堤防の可能性が高い。

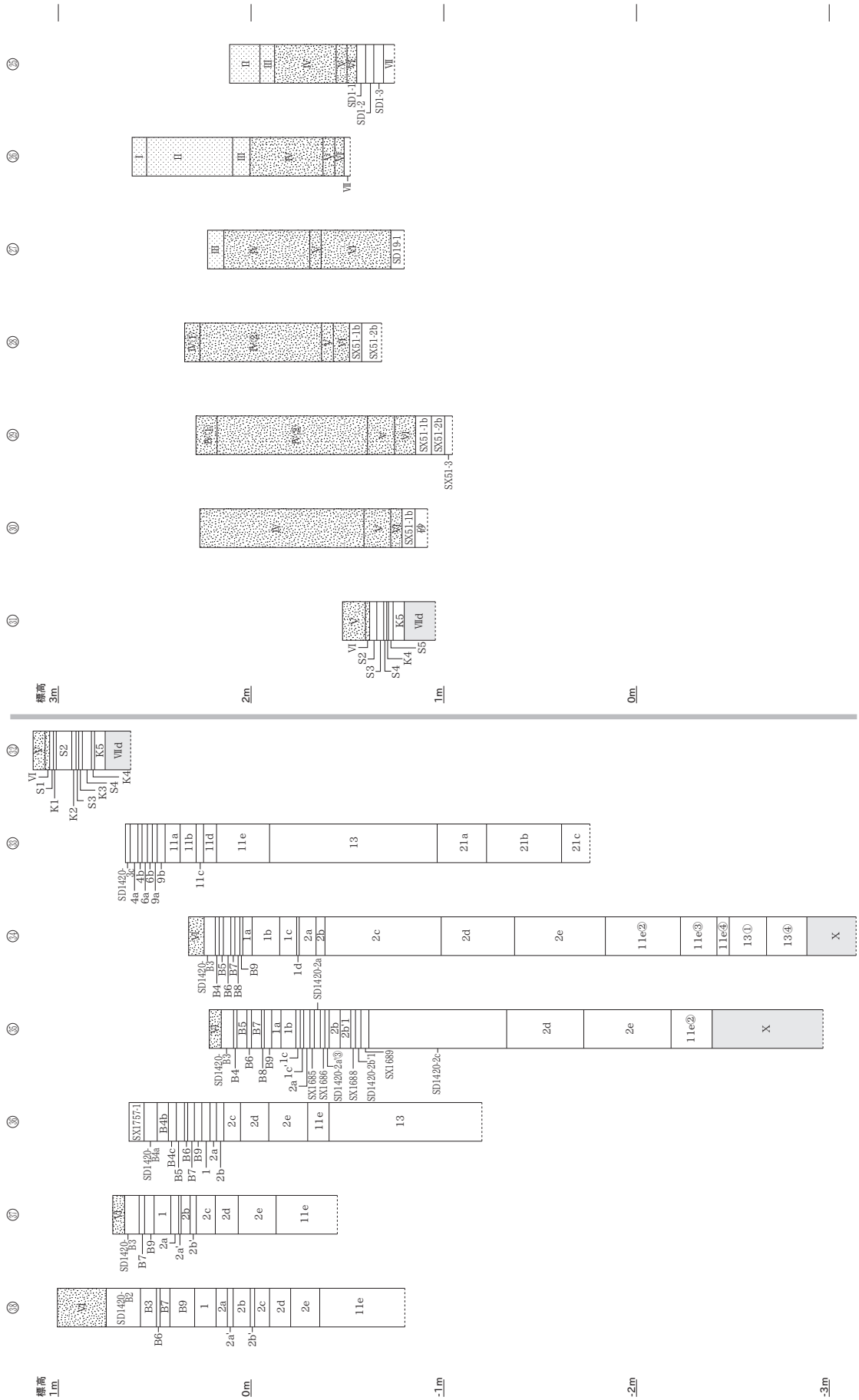
以上の堆積状況をみると、各層が安定して認められる範囲がある一方で、SD19及びSD1420の上端付


標高
2m
1m
0m
-1m
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
⑪
⑫
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶa
Ⅶb
Ⅶb'
Ⅶc
Ⅶd
Ⅷ
Ⅸ
Ⅹ
S2～S1
S4～S3
S5
K1
K2
K3
K4
K5
D1
D2
D3
D4
D4'
S2a
S2b
S3
S4
SX51-1
SX51-2
SX51-3
SD19-1b
SD19-3c
15a
15b
18a
18b
18c
19b
20a
21a
23
30
1m
(1:30)
0
100m
(1：2,000)
0
SD1
SD19
SX51
SD1420

第14図　土層柱状図（1）

標高
2m
1m
0m
-1m
-2m
⑬
⑭
⑮
⑯
⑰
⑱
⑲
⑳
㉑
㉒
㉓
㉔
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷ
Ⅸ
Ⅹ
SD1420-D6
B7
B8
B9
1a
1b
1c
2a
2a'
2b
2c
2e
11d
21a
21b
21c
SD1420-C2a
C2b
C3
B1
B2②
B2⑥
B2⑦
B2⑧
B2⑩
B2⑪
B3
B4a
B4b
B5
B6
B7
SD1420-C1
C2a
B2①
B2⑤
SD1420-E1a
E1b
E3
E4a①
E4a
E4b
E5a②
E5a③
E5b
E5c
E6b
E6c①
E6c'②
E6c'③
E6c'
SD1420-E6b
E4a
E4b
E4c
E5a①
E5b
E5c
E6b
E6c③
E6c'③
E6c'
E7a
E7c
E7d
E7f
腐食土
SD1420-E4a
E4b
E4c
E5b
E5b'
E5c
E6a
SX2020-1
SX2020-2
SX2020-4
E7a
E8a
E8b
E8c
E9a
E9b
E10
E11
E12
E14a
粗砂
E15
E17a
SD1420-E6c③
E7
E8
E9
E10
E11
E12a
E13a
E14a
E15
E16a
E17a
VIId
SX2016
SX2016-2
SX2016-E6c③-2
SX2016-1
SX2016-3
SX2016-5
SX2016-7
SD1420-E7
E18
SX2016-6'
SX2016-4
SX2016-6
SX2016-6'
SX2016-7
SD1420-E7
SD1420-4
5
S3
SX2196
SX2197
17b
6a
9a
10
11e
15(K2)
SX2528
K5
SD1420-17a
VI
S2～S1
S4～S3
K4
S5
K5
VIId

第15図　土層柱状図（2）


標高
3m
2m
1m
0m
-1m
-2m
-3m
SD1420-3c
4a
4b
6a
6b
9a
9b
11a
11b
11c
11d
11e
13
21a
21b
21c
SD1420-B2
B3
B4
B5
B6
B7
B8
B9
1a
1b
1c
1d
2a
2b
2c
2d
2e
SD1420-2a
SD1420-2a③
SD1420-2b'1
SD1420-2c
SX1685
SX1686
SX1688
SX1689
11e②
11e③
11e④
13①
13④
X
SX1757-1
B4b
B4c
1
2a'
2b'
SD1420-2b'
SD1-1
SD1-2
SD1-3
SD19-1
SX51-1b
SX51-2b
SX51-3
K1
K2
K3
K4
K5
S1
S2
S3
S4
S5
VI
VII
VIIb
VIId

第16図　土層柱状図（3）

近ではK5層の上面標高が高くなり、S5層～S1層が薄く区別できなくなる特徴がある（第14図⑦・⑫など）。こうした現象は、川跡の上端ラインと平行して広範に認められた。これは、各河川の形成初期の段階において、斜面上にⅦｄ層から連続して厚くやや盛り上がるように土層が堆積したために起こったものと考えられる。また、Ⅶｃ層の細分は河川跡から離れるほど不明瞭になることから、無遺物層であるＫ層は河川の増水や洪水などによって中粒砂を多く含むシルトが河川付近に供給されて形成されたものと考えられる。

C　河川跡の層序

1）SD1（図面図版307、写真図版202）

２～３グリッドで長さ54mにわたって検出された東西に伸びる河川跡である。縄文時代の遺物包含層であるⅦｃ層を切って形成されていることから、弥生時代以降に所属することが明らかである。深度は約30cmと浅く、腐植土を中心とした覆土であることから、水流の弱い河川であったものと考えられる。

2）SD19（図面図版139、写真図版100）

６～９グリッドで東西に伸びる河川跡である。規模は長さ約57m、幅約15mだが、形成初期は幅20m以上であったとみられる。深度は1.7m、底面標高は-0.7mで、Ｘ層の上面に達する。流路方向は、覆土中にある砂粒の堆積角度から東から西へ流れていることが分かった[2)]。

図面図版139b-b'セクションをみると、両岸にⅦｄ層から派生する土層がⅧ層を切って堆積しており、SD19の形成時期はⅦｄ層期といえる。その後、30～１層が堆積する。左岸では28層はS5層、27層はK4層から連続する層であり、遺物は出土していない。これより上位では基本層序との対比が明確ではない。26・25層からはわずかに遺物が出土し、S4層に対比できる可能性がある。川底の23層は粗い砂層で、多量の遺物が出土した。19・18層は厚い砂層で形成され、遺物の出土はわずかである。17・16層はシルト層に砂層が混在する土層で、これも遺物の出土はわずかである。14～５層はSX112とした遺物廃棄層に相当する[3)]。このうち、13・11・10・８・６層から多量の遺物が出土し、これ以外は砂層を多く含む間層となっている。４～１層は縄文時代の遺物は出土せず、１層から古代の木製品が出土した。

右岸は覆土の変形が著しく、セクション壁面の崩落もあり、層序が明確でない部分が多い。30層が右岸K2層に相当する。21層は右岸S2層に相当するものと考えられ、１点のみ出土した。20・15層は右岸K1層・S1層に相当し、15層から少量の遺物が出土した。

以上の覆土にはいくつもの切り合い関係があり、流路の移動や川幅の増減を認めることができる。縄文時代の遺物出土状況は、23層を中心とする下位層と15～５層の上位層とに大きく二分される。特に、23層は遺物の出土しない19層により分離することができ、その出土遺物は古相を示すものと考える。23層が形成されたS4層期頃は水の流れがある程度あったものと考えられるが、埋積が進むに従って深度は浅くなり、S1層期には左岸付近を流路とする深度1m程度の小規模なものであったと推定される。弥生時代以降はほとんど流れのない浅い湿地域になっていたとみられる。

3）SD1420・SD1745（図面図版140～142、写真図版101～103）

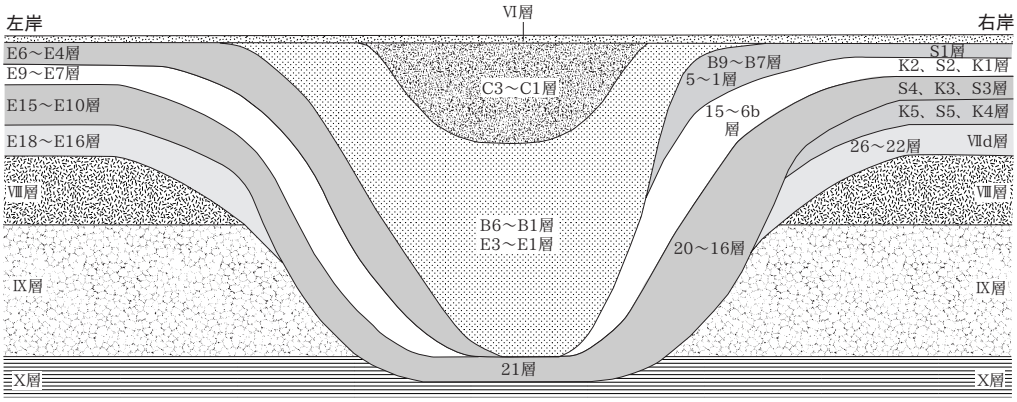
規模　SD1420は16～27グリッドの約120mの範囲にわたり北東から南に流れる河川跡である。調

2）調査検討委員 卜部厚志氏の土層観察による。
3）当初、SX112の層位は１～16層に分層して調査を行った。後にこれをSD19の覆土に含めて層位番号を付し直している。

査検討委員会においてこの河川を通称「青田川」とすることとした。19～23B～Cグリッドでは西に流れる分流が認められ、これをSD1745と呼ぶこととした。ただし、層序についてはSD1420に統一し、遺物もSD1420の層位名で取り上げた。これらの川幅はS4～S3層期とS1層期で大きく異なる。S4～S3層期では、幅が18C～22Fグリッド間で約51mと最大で、23C～23Fグリッド間で約25mと狭まる。Ⅵ層下面からの深度は24Dグリッド地点で4.1m、標高-3.75mを測り、最深部は26Dグリッドの-4.1mである。また、19Fグリッドでは深度2.8m、標高は-2mとなり、全体的に東側に向かって浅くなる。S2層期からS1層期にかけて右岸17～21グリッドの埋積が進み、S1層期の川幅は19D～22Fグリッド間で約33mと大きく狭まる。また、SD1745はS4～S3層期に最大幅約42mで、22B～Cグリッドが最も深く、最深部は22Bグリッドの深度3.2m、標高-3mを測る。20Bグリッドでは底面標高が約-2mであり、北側に向かって浅くなる。SD1420と同様に、S1層期には22B～Cグリッドで幅約11m、深度約80cmのほとんど流れのない浅いものになっていたようである。

形成時期　SD1420は図面図版141a-a'セクションによるとK4層を切っており、遅くともS4層期には形成されていたものと考えられる。しかし、覆土26層がⅦd層に相当する可能性があり、SD19と同様にⅦd層期に形成されていた可能性が高い。底面はX層を掘り込む。SD1745も覆土状況から同一時期と考えられる。河川は規模を縮小しながら弥生時代以降も続くが、古代までには埋積が完了する。そして、全体が基本層序のⅥ層によって覆われた後は紫雲寺潟の湖底に沈む。

覆土の分類　覆土の分類は調査の進行順に行ったため、地区ごとに分類していった経緯がある。このため、当初からすべての新旧関係を考慮して層位名を付してはおらず、前後関係について適切でない表記方法が用いられていることをあらかじめ明記しておく。また、各地区の層序については調査中にセクションを確認し、統一を図り、層位名を変更した[4)]。覆土はシルト層・腐植土層・砂層などで構成され、下位に砂層が多く、上位にシルト層が多くなる。SD1420の右岸・中央部分・左岸で土層の表記方法が異なる（第17・18図）。右岸で形成された土層は上から26～1層に分類した。中央付近に近づくと、これより上位に当たる層位を確認でき、頭に「B」を付してB9～B1層と区別した。中央付近ではさらに上位に当たる土層が確認され、頭に「C」を付してC3～C1層に分層した。一方、左岸の土層は右岸と直接つながらないことから、頭に「E」を付してE18～E1層に分層した。左岸の中央付近では右岸と同様に「E」層の上に「B」層→「C」層の順に堆積する。以上の層位については、必要に応じて細分した。層位番号の表記方法は、数字にアルファベットを続け、さらに必要に応じて「'」や「①」などの記号を付した。



第17図　SD1420の層序模式図

4）遺物に註記した層位名は変更前のものになっている。各年度の旧層位から新層位への変更記録は、県教委が保管している。

右岸～中央部分の層位　SD1420右岸斜面１に認められる26～22層（図面図版112a-a'セクション等参照）は、Ⅶｄ層～S5層に相当するものと考えられ、遺物はほとんど出土していない。21層は川底に広く堆積する粗砂層であり、S4～S3層期に相当する。21d～a層に細分したうち、最も下位の21d層は遺物が多く、SD1745の22B～Cグリッドにも続く。ただし、SD1420の中央付近では21層の上面がS1層相当の土層とも接しており、S1層期の土器と21層出土土器の接合関係も認められる。おそらく、S1層期の河川運動によりS4～S3層期の21層が削られ、S1層期の川底として新たに砂層が堆積したのであろう。さらに、21a層からは弥生時代中期のものとみられる土器片（図面図版309-1）が出土しており、縄文時代以降も同様のことが起こったものとみられる。20層も右岸に広く認められる砂層で、遺物は少ない。19～16層は17～18Eグリッドを中心に認められ、S4～S3層期に形成されたものと考えられるが、遺物はほとんど出土しない。15層はK3層に相当し、これを境としてS2層期に相当する14～7層ではほとんど遺物が出土しなくなる。6b層がK1層に相当し、6a～1層がS1層に相当する。図面図版141b-b'セクションでは6a層→4a層→3a層の順に堆積するが、遺物が出土するのはこれらがⅥ層直下に位置する部分のみであり、集落形成以前に堆積していたものと考えられる。2層は2c・2b'・2b・2a'・2a層に細分され、2b'・2a'層は砂を含むシルト層で遺物が少ないものの、ほかは非常に多い。2d層以下は出土しない。1層は1d～a層に分類でき、遺物は1c・1a層に多い。

B9～B1層はS1層期の斜面部と中央部分で認められる。また、22～27B～Cグリッドの平場の範囲でもほぼ水平に堆積することが認められた。縄文時代晩期終末の遺構・遺物はB9～B7層で検出されており、特にB9・B7層に多い。B6・B5層は遺構・遺物はわずかに過ぎず、弥生時代以降のものである可能性が高い。また、B4～B1層は縄文時代の遺物・遺構は認められない。SD1420の中央部分ではB4～B1層が厚く堆積する。図面図版142f-fセクションでは、B6・B5層がB3層によって切られており、縄文時代以降の河川運動を確認できる。

C3～C1層はSD1420の中央部分にのみ確認できる土層である。黒褐色や褐色の腐植土が主体で、B層と明確に区別できる。砂の混入はごくわずかであり、ほとんど流れのない状態であったものと考えられる。遺構・遺物は検出されていない。

左岸の層位　左岸の平場では、E18～E5層が層厚をほぼ一定にして堆積する。土層内容は概ね遺物を含むシルト層と遺物をほとんど含まない砂層の互層である。遺物は、E18～E15層でごくわずかに過ぎず、E14層も少量だが、E12・E10層でまとまって出土する。E9・E7層はほかより若干厚い砂層で、遺物はほとんど出土しない。中間のE8層からはごく少量の遺物が出土した。E6c・E5c層では多数の遺構・遺物が検出された。E6c層は③～①に細分できる範囲があり、E6c②層を間層として上下に遺物包含層が分かれる。また、E5c層も同様に③～①に細分できる範囲がある。平場では全体的に南側に傾斜して堆積しており、北側ではE5c層の直上にⅥ層が堆積するものの、南側ではこの間にSX2016と名付けた腐植土層が認められる。遺物はSX2016-3層から少量出土した。

斜面部ではE17～E5層から派生する土層に加えてE4～E1層が認められる。E14～E10層は斜面部でも層厚が薄く、図面図版142e-e'セクションでは川の変形により急角度で傾斜した様子が観察できる（関連諸科学編第Ⅰ章1第4図を参照）。E9～E7層は平場と同様に層厚が厚く、遺物はほとんど出土しない。E6・E5層は堅果類廃棄層などを含むほか、多量の遺物が出土した。E4層からもややまとまった遺物量が認められた。E3～E1層は遺物を含まない土層で、E3～E2層がB3層に、E1層がB2層に対応するものと考えられる。

右岸と左岸の対応関係　右岸斜面部の土層堆積パターンを観察すると、S4～S3層相当の土層はほぼ同じ位置に堆積し、S1層相当の土層はこれと距離をおいて斜面を形成している（図面図版141a-a'セクション）。また、図面図版141c-c"セクションではS1層相当の土層がS2～K1層に相当する土層を切って堆積する特徴がある。同じc-c"セクションの左岸斜面部をみると、遺物が出土するE12・E10層はほとんど同じ位置に堆積し、E6・E5・E4層は遺物がほとんど出土しないE7層を切って形成されており、右岸と堆積パターンが一致する。これに遺物出土状況と後述する土器分析の結果から、E12～E10層がS4～S3層期に、E6・E5・E4層がS1層期に相当するものと考える。また、E18～E13層はⅦd層・K5・S5・K4層に相当するものと推察される。なお、SX2016は右岸平場に認められるB4～B1層と土層内容が類似することから対応関係にあるものと考える。

D　各地区の層位関係

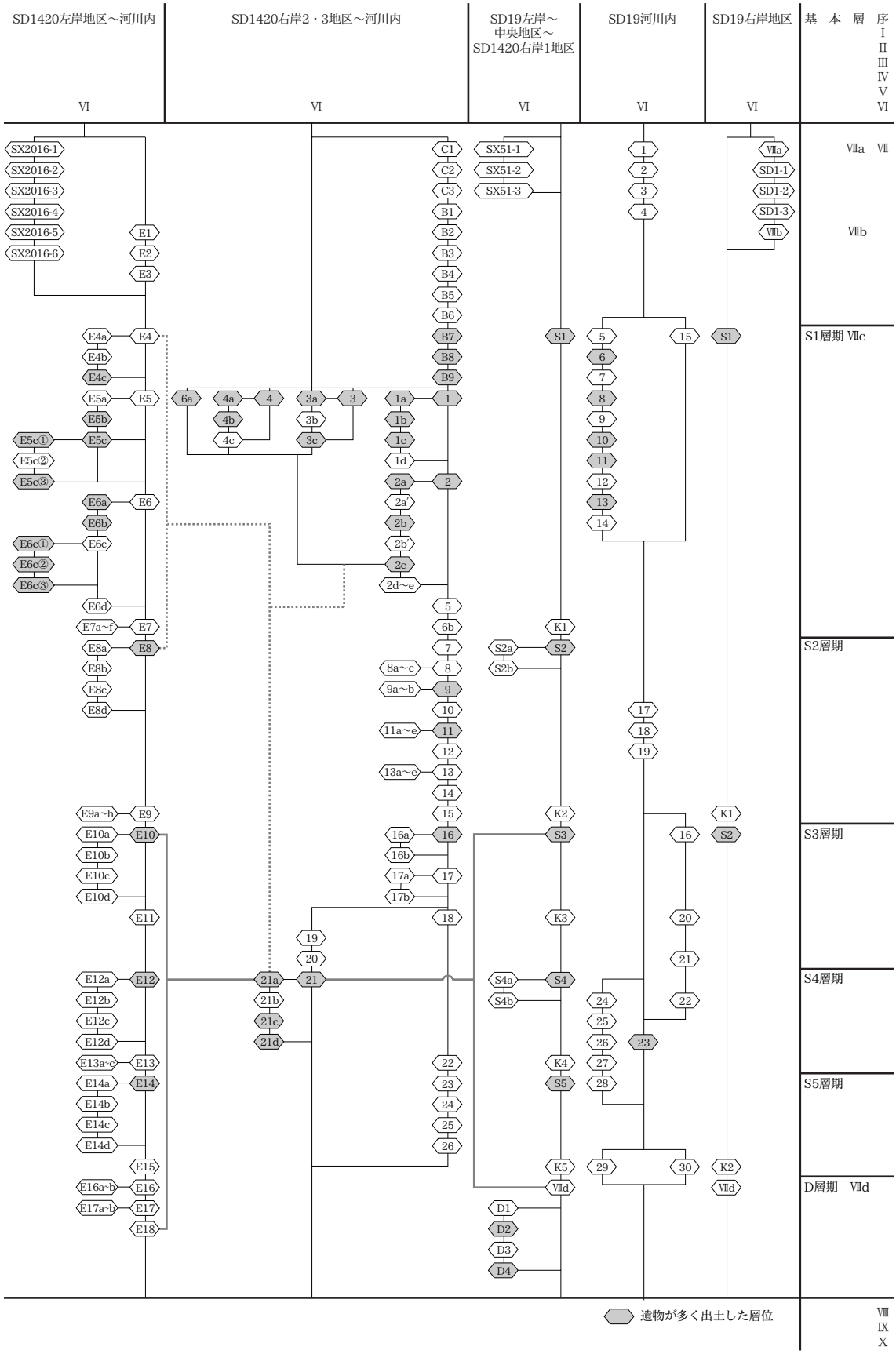
各地区で確認した層位の対応関係について述べる。並行関係の把握は遺物の出土状況と土器の接合関係や土器型式の検討も踏まえて行った。

第18図に層位関係を示した。SD19右岸地区では、K2層が遺物を含まない安定したシルト層であることから、基本層序のK5層に対応するものと考えられる。そして、S2層はS4～S3層期に、S1層はS2～S1層期に対応する可能性が高いとみられるが、土器出土量が少ないため明確ではない。

SD19左岸地区とSD19覆土との関係は、K5・S5・K4層がSD19-29・28・27層にそれぞれ対応する。また、D層出土土器（No.32・34・40）、S4層出土土器（No.260・406）がSD19-23層と接合関係が認められ（図面図版58）、23層がD層～S4層期に対応する可能性が高い。SD19-22～16層はS4～S3層期に対応するものとみられるが、出土遺物が少ないことからS2層期以降に下がる可能性もある。なお、S3層はSD19-23層との接合関係が不明瞭だが、土器内容からみると対応していた可能性がある。SD19-14～5層はS2～S1層期に対応するものとみられるが、遺物量が多いことから大多数がS1層期に当たるものと考えられる。以上のように、層位関係は明瞭とはいえないことから、SD19-23～16層をS4～S3層期に、SD19-15～5層をS2～S1層期に概ね対応させることとする。

次に、SD1420右岸1地区と右岸2地区との関係について述べる。SD1420-22層がK4層に、15層がK2層に、6b層がK1層と対応することから、SD1420-21～14層はS4～S3層期に、14～7層がS2層期に対応する。SD1420-23層はS4層及びS3層と接合関係が認められるが、D層及びS5層との関係は不明瞭である。SD1420-5～1層及びB9～B7層は、遺物量が多いことからS1層期に対応する。このうち、6a・4・3層は1層と一部並行し、3層は2層に一部後続する。B6～B1層及びC3～C1層は遺物量がほとんどないことからⅦb～Ⅶa層に対応するものと考える。SX51も同様である。また、S1層期の土器と23層との接合関係も認められ、23層の一部はS1層期にも対応するものとみられる。

さて、SD1420左岸地区との並行関係はSD1420-E3・E2層がB3層に、E1層がB2層に並行するものの、ほかの層位関係は明確でない。遺物出土状況及び土器内容から判断すると、遺物量が多くなるE12層がS4層期、E10層がS3層期に並行する可能性が高い。E18～E14層はD層～S5層期に並行する可能性があるが、明確ではない。E8・E7層は遺物量が少なく、S2層期に並行するものとみられる。そして、E6～E5層は遺物量が非常に多く、E4層も比較的出土していることから、S1層期に並行するものと考える。なお、SX2016はE5層を切って形成されていることから、SD1420-B6～C1層と同様にⅦb～Ⅶa層に並行するものと考える。


SD1420左岸地区～河川内
SD1420右岸2・3地区～河川内
SD19左岸～
中央地区～
SD1420右岸1地区
SD19河川内
SD19右岸地区
基本層序
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶa
Ⅶb
Ⅶ
Ⅷ
Ⅸ
Ⅹ
S1層期 Ⅶc
S2層期
S3層期
S4層期
S5層期
D層期 Ⅶd
遺物が多く出土した層位

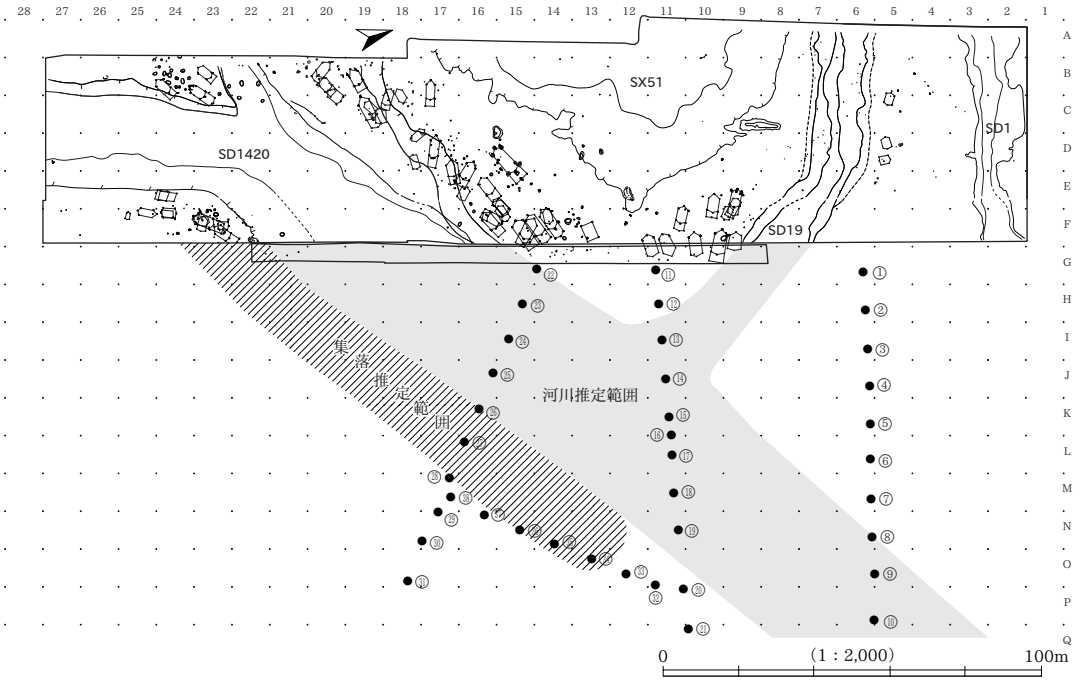
第18図　層序対応図

5　簡易ボーリング調査

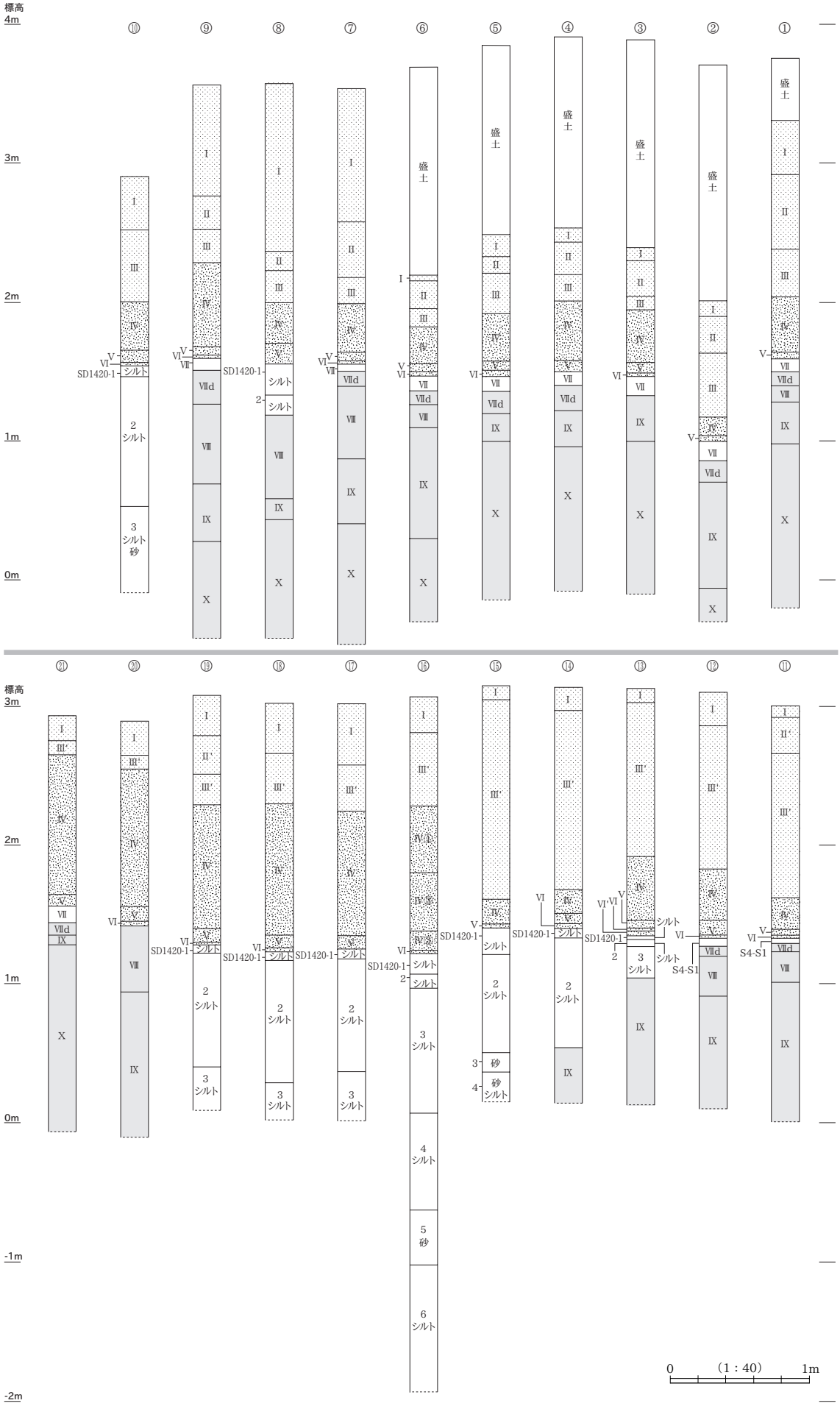
調査終了後の平成13年10月1～3日に地権者及び加治川村土地改良区の了解を得て、発掘調査範囲の東側隣接範囲において調査検討委員の高濱信行氏、卜部厚志氏と簡易ボーリング調査を行った（第19図）。目的はSD1420の範囲を把握し、縄文時代晩期集落のおおよその範囲を探ることである。なお、調査範囲の北東側で基本層序Ⅵ層の供給方向を探る目的でボーリング調査を行ったが、これと調査方法については関連諸科学編第Ⅰ章1を参照願いたい。

層位の認定に当たっては、発掘調査と同じ層序をできるだけ用い、SD1420については大別できるものに分けた（第20・21図）。①～⑩列では比較的基本層序が安定して堆積している。⑩でⅥ層下にSD1420とみられる土層が厚く堆積しており、⑧・⑨もその可能性がある。Ⅶ層中に炭化物などの人為的な痕跡は認められない。⑪～㉑列では⑬～⑲でSD1420を確認でき、⑳・㉑は左岸と考えられる。ただし、⑳ではⅦ層が確認できず、不安定な堆積を示す。⑪・⑫は発掘調査範囲と同様の堆積状況であり、遺跡が広がることが予測できる。㉒～㉛列では、㉒～㉕がSD1420、㉖～㉛が左岸である。㉖～㉘はⅦ層が安定して堆積しており、遺跡の存在する可能性がある。㉜～㊲では、SD1420の堆積を示すものはなく、すべて左岸と考えられる。このうち、㉞のⅦ層から炭化物粒が検出され、遺跡が広がっている可能性が高いものと考える。ほかの地点もⅦ層の堆積は安定しており、遺跡が広がる可能性を指摘できる。

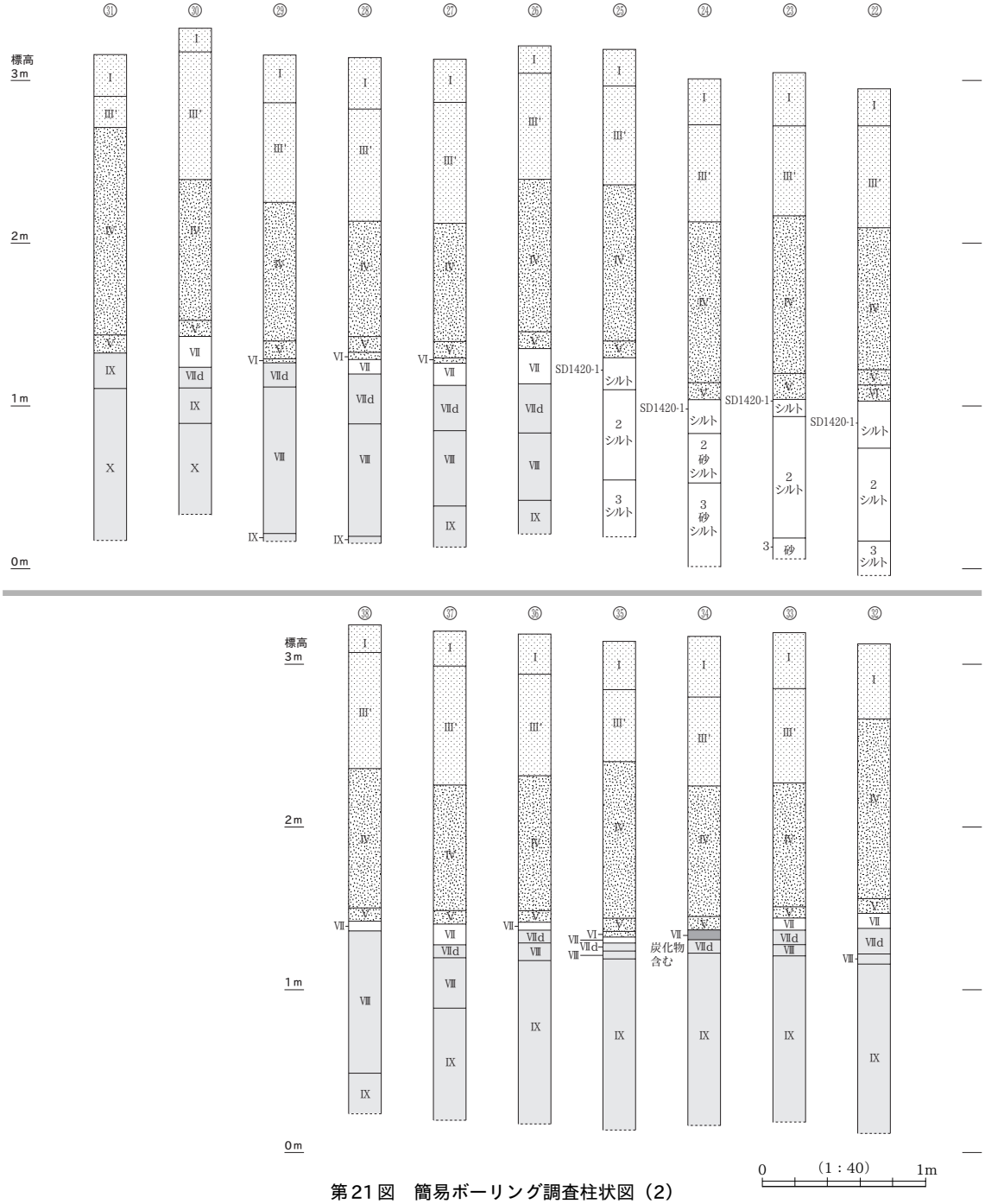
以上から、SD1420及び縄文時代の集落範囲は第19図のように推測される。SD1420は幅約40mで北東方向に伸び、10～12I～Jグリッド付近にSD19との分岐点があるものと考えられる。一方、縄文時代晩期の集落は、簡易ボーリングコア試料という制約はあるものの、遺物包含層であるⅦ層が安定していることや炭化物粒の検出などから、集落は左岸にも広く展開している可能性を指摘できる。おそらく、



第19図　簡易ボーリング地点と遺跡推定範囲



第20図　簡易ボーリング調査柱状図（1）



第21図　簡易ボーリング調査柱状図（2）

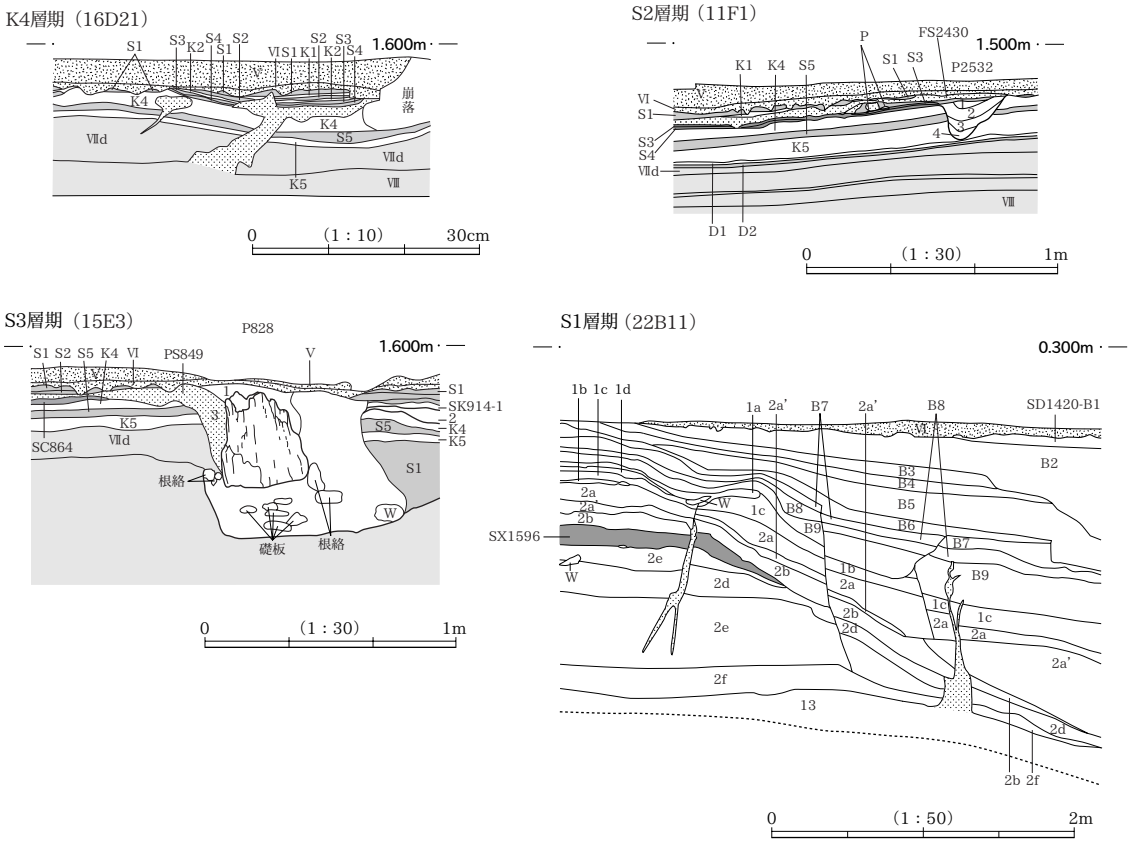
右岸に連なる集落範囲と対峙するかのように左岸に展開していたのであろう。

6　地震動による液状化

発掘調査中に地震動による液状化を確認した。縄文時代晩期終末の集落が営まれていた頃については、K4・S3・S2・S1層の合計4回の液状化を観察できた（第22図）。K4層期の液状化は16Dグリッドや15Eグリッド（図面図版79g-g'セクション参照）などで確認でき、噴砂の影響で周辺のK4層は厚くなり、

Ⅷ層から噴出した中粒砂が多く含まれる[5]。S3層期のものは15D～EグリッドのSB4周辺で明瞭に観察できる（図面図版79）。FS849・866はS3層上で平面的に検出できたもので、P828セクションでは柱根脇から噴砂が噴き出した様子を観察することができる。これらの噴砂が直接遺物を覆っていたほか、SK874の内部には噴砂が厚く堆積しており、S3層期の集落が営まれていた時に地震が起こったものと推測できる。また、17EグリッドのSX958上に堆積するSD1420-15層もこの噴砂により堆積した砂層の可能性があるほか、多数のセクションや平面で確認できることから、かなり大規模なものであったことが指摘できる。S2層期のものは11FグリッドのFS2340で確認できる。この噴砂はSB38の柱穴を覆っており、掘立柱建物の廃絶後に堆積した可能性が高い。S1層期のものは22Cグリッドのセクションで確認できる。SD1420-B8層に到達する噴砂脈があるほか、B7層を上限として断層のような層位のずれが認められ、B7層の段階に地震が起こった可能性を指摘できる。SD1420右岸２・３地区やSD1420左岸地区のS1層期に所属する掘立柱建物に柱根が横倒するのが目立つのも当期の地震の影響と考えられる。このほか、縄文時代晩期終末以前及び以後の液状化が観察されているが、詳細は関連諸科学編第Ⅰ章１を参照いただきたい。

液状化の観察は、掘立柱建物などの遺構の所属時期を決める重要な手掛かりとなる。また、S3層期の地震の後、集落は一時途絶え、S1層期の集落も地震の後廃絶されている可能性が高いことから、地震が集落の盛衰にも大きく関係していた可能性も考えられる。



第22図　各層における液状化

5）シンポジウム資料集［荒川2002a］ではS5層期としていたが、噴砂脈がK4層中まで伸びることからK4層期に変更する。

第Ⅳ章　遺　　構

1　記述の方法

A　方　　針

遺構の説明は、本文・観察表・図面図版・写真図版を用いて行う。観察表ですべての遺構の記載を行い、重要度の高い遺構について本文で解説することとする。本文の記述に当たっては、遺構ごとに分類や概要を述べた後に、地区別の遺構について個別説明を行う。詳細については観察表に委ねることとし、特徴的な点やほかの遺構との関係を中心に述べることとする。なお、本文中の樹種は関連諸科学編第Ⅱ章３に従う。

B　遺 構 番 号

遺構個々の名称は、遺構種類・番号の順に表記した遺構番号で表す。遺構種類は後述するように略称を用いた。番号は平成11年度～平成13年度までのものに通し番号を付した。用水路工事立会い調査で検出した遺構番号は、平成10年度は9801から、平成11年度は9901から始まる４桁の数字を付した。

C　図　　版

遺構の図面図版は、全体図・分割図・個別図で構成される。全体図は、1/400・1/500の平面図と遺物分布図があり、すべての層位を重ねたもの（図面図版１・16）と、層位別に表したもの（図面図版２～４・17・18）がある。層位区分は本編第18図の層位対応に基づき遺構及び遺物ドットを表示した。なお、SD19右岸地区の遺物ドットは、SD19右岸地区のS2層出土遺物をS4・S3層期図面（図面図版17）に、SD19右岸S1層出土遺物をS2・S1層期図面（図面図版18）に掲載した。また、SD19出土遺物も層位区分に基づきS4・S3層期図面とS2・S1層期図面にそれぞれ同一図を掲載した。SD1420右岸斜面１で検出された堅果類廃棄範囲及びその出土遺物は、S4・S3層期図面に同一図を掲載した。SD1420-23層出土遺物はS1層期のものも混入するが、ここではS4・S3層期図面にのみ掲載することとした。Ⅵ層出土遺物はS1層に帰属させた。以上の遺物ドットの表示方法については、分割図も同様である。このほか、Ⅵ層直下全体図（図面図版４）は基本層序Ⅵ層直下で測量した地形図を示したものである。南側に工事用盛土があったため、地盤沈下を起こしていることが分かる。

分割図は、調査範囲を11分割して1/150で表した遺構平面図（図面図版５～15）と、各地区の層位別に遺構と遺物を表した1/200の遺物分布図（図面図版21～37）がある。また、４地点について任意の縮尺で出土遺物の垂直分布図を作成した（図面図版19・20）。さらに、遺物出土平面図を基に土器出土状況を表した1/100の土器接合関係図がある（図面図版38～58）。土器の所属層位は本編第Ⅴ章１に基づき出土した最も下の層位とした。以上の分割図により、各層位時期の遺構と遺物の関係を読み取ることが可能である。

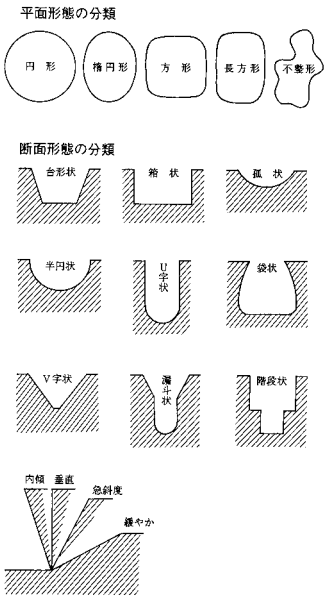
個別図は平面図・セクション図・エレベーション図で構成される（図面図版59～138）。掘立柱建物は平面図・エレベーション図を1/60、セクション図を1/30で表したが、炭化物集中範囲などと重なるものについては1/80の平面図を別に加えた。土坑・ピットについては1/30の平面図・セクション図で表し、

炭化物集中範囲と堅果類廃棄範囲については1/100～1/200の平面図と1/30～1/40のセクション図で表した。このほかにも重要と認めたものについては、適宜、平面図・セクション図を加えた。平面図・セクション図については、網掛けをして層位の区別を明確にするよう心がけた。セクション図の土層の色調は『新版　標準土色帖』［小山・竹原1998］に基づいている。

写真図版は、個別図にある遺構について掲載するよう努めたが、すべてを網羅してはいない。各図版の掲載順は、冒頭に全体図と分割図を掲載した後に、地区ごとに遺構個別図を掲載した。河川跡及び弥生時代以降の遺構は巻末にまとめた。

D　観　察　表

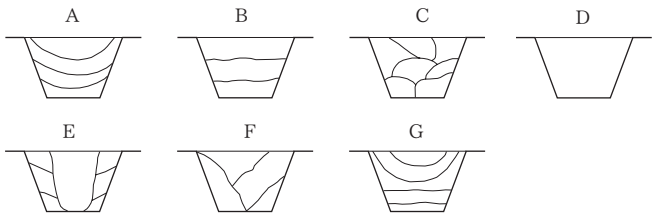
観察表の項目は、位置・検出層位・所属層位・形態・規模・底面標高・覆土・出土遺物・切り合い関係などである。検出層位とは遺構を確認した際の遺構上面の層位であり、所属層位とは基本層位や河川跡の層位との切り合い関係から想定される所属時期を層位名で表したものである。深度は上端標高の最高値から底面標高を引いた数値である。覆土は第8表に基づき分類して記載した。柱根の方位とは、柱根が傾いている場合に傾いた方位を表し、傾斜角度は傾いた角度を計測したものである。切り合いは「＜」・「＞」・「＝」の記号を用いて示した。「＜P100」とはP100に切られ、「＞P100」とはP100を切って



円形	長径が短径の1.2倍未満のもの。
楕円形	長径が短径の1.2倍以上のもの。
方形	長軸が短軸の1.2倍未満のもの。
長方形	長軸が短軸の1.2倍以上のもの。
不整形	凸凹で一定の平面形を持たないもの。

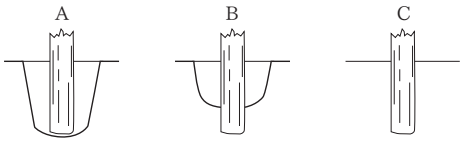
台形状	底部に平坦面を持ち、緩やか～急斜度に立ち上がるもの。
箱状	底部に平坦面を持ち、ほぼ垂直に立ち上がるもの。
弧状	底部に平坦面を持たない弧状で、緩やかに立ち上がるもの。
半円状	底部に平坦面を持たない椀状で、急斜度に立ち上がるもの。
U字状	確認面の長径よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立ち上がるもの。
袋状	確認面の径よりも底部の径が大きく、内傾した後に垂直ないし外傾して立ち上がるもの。
V字状	点的な底部を持ち、急斜度に立ち上がるもの。
漏斗状	下部がU字状、上部がV字状の二段構造からなるもの。
階段状	階段状の立ち上がりを持つもの。

第23図　遺構の平面・断面形態の分類



A レンズ状	複数層がレンズ状に堆積する。
B 水平	複数層が水平に堆積する。
C ブロック状	ブロック状に堆積する。
D 単層	覆土が単一層のもの。
E 柱痕	柱痕と思われる土層が堆積するもの。
F 斜位	斜めに堆積するもの。
G 水平-レンズ	覆土下位は水平に、上位はレンズ状に堆積するもの。

第24図　遺構覆土の堆積形状の分類



A	柱穴の底面より上に柱根が位置するもの。
B	柱穴の底面より柱根の底面が低いもの。
C	柱穴としての掘形が確認できないもの。

第25図　柱穴と柱根の関係

A	シルト層のみ。
B	腐植土層のみ。
C	炭化物を含むシルト層のみ。
D	シルト層と腐植土層とが互層となるもの。
E	シルト層と炭化物を含むシルト層とが互層となるもの。
F	砂層やシルトを含む砂層のみのもの。
G	暗灰黄色粘土層が堆積するもの。
H	シルト層と砂層とが互層となるもの。
I	シルト層・腐植土層・炭化物層が互層となるもの。

第8表　覆土の分類

いることを示す。「＝P100」はP100と切り合い関係があるものの、新旧が不明なことを示す。

E　遺構の分類

1）基 本 分 類

遺構の機能を検討するため、遺構の平面・断面形態（第23図）・堆積形状（第24図）・覆土内容（第8表）について分類した。平面・断面形態の分類は［荒川・加藤1999］に基づいて分類した。また、木柱の根元部分（以下、柱根）が遺存するものについては、掘形と柱根の関係について分類した（第25図）。

2）掘立柱建物（SB）

a　掘立柱建物の認定

本遺跡では柱穴に柱根が遺存するものが多く、同規模のものが六角形や長方形に規則的に巡るものがあり、柱穴であることを容易に認めることができた。こうした柱穴から、さらに底面標高や所属層位を加味して建物の組み合わせを認定した。これらの建物は、セクションの観察から半地下式の床面を持たないことが明らかになったことから、地面下に柱を掘立てて構築された掘立柱建物［宮本1998］と考える。掘立柱建物は調査時に現地で認定するよう努めたが、SB49～58は調査終了後に認定したものである。掘立柱建物を構成する柱穴の総数は全体の約1/2であるため、認定したもの以外にも多数の掘立柱建物が存在したものと予想される。

認定した掘立柱建物のうち、用水路工事立会い調査で検出した柱根を含むものについては、調査時に作成された平面図と柱根の規模によって組み合わせを推定した。しかし、立会い調査におけるデータは二次調査に比べて正確性がやや劣ることは否めないことから、掘立柱建物についても信頼性は低いといえよう。なお、こうした掘立柱建物の平面図では、立会い調査出土の柱根をその直径に合わせた単純な円で表記した。また、エレベーション図も遺存した長さに基づき、直立していたものと推定して外形のみ表した。

b　分　　類（第26図）

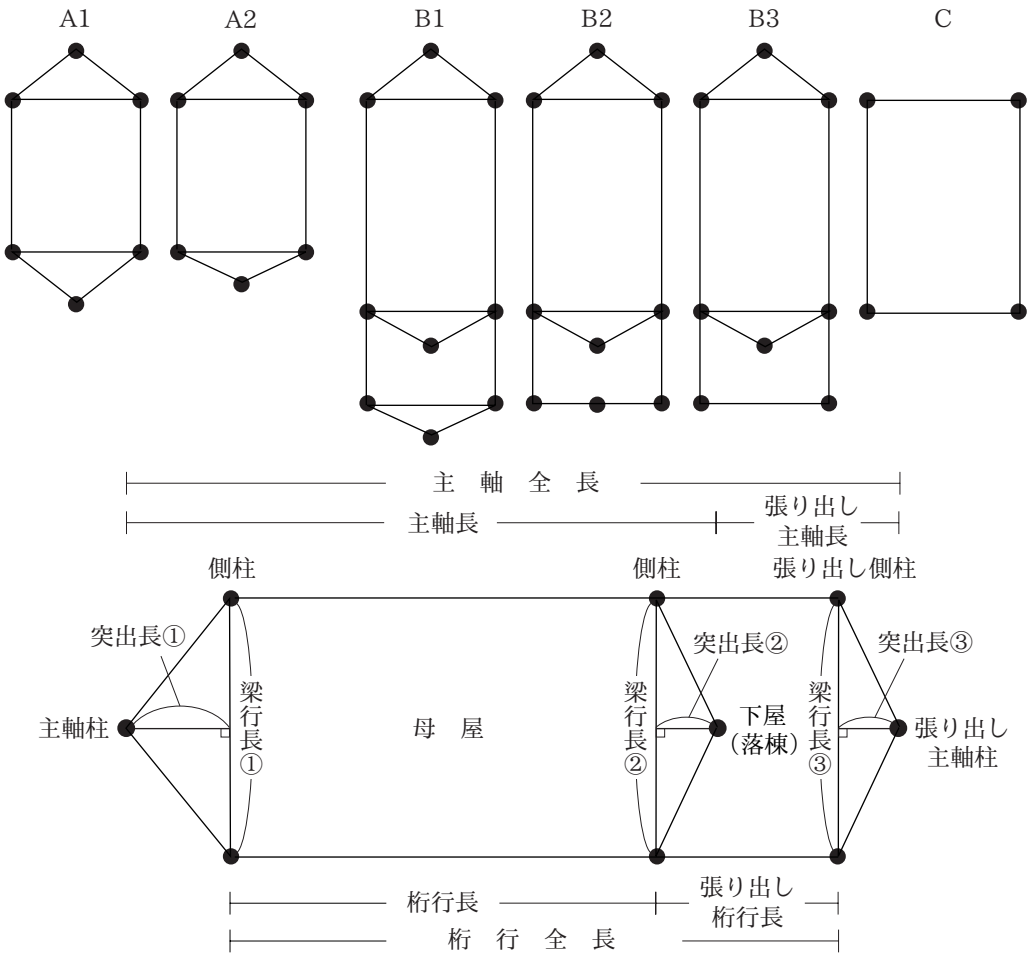
平面形態及び柱穴配置に基づいて分類した。分類に当たっては、青田遺跡の掘立柱建物について分類した宮本長二郎氏の論考［宮本2002］を参考にした。

A類　1間×1間の方形ないし台形の両端に突出する2基の柱穴を有して、六角形のいわゆる亀甲形を呈するものである。両端の突出する柱穴（以下、主軸柱）から近接する梁間までの垂直距離（以下、突出長）は、両端でほぼ同じものと異なるものの二者が認められたことから、前者をA1類、後者をA2類とする。

B類　A2類の突出長の短い方の妻側に張り出すように2～3基の柱穴が付属するものをB類とする。これらは落棟［宮本2002］や庇[1)]とみられる下屋が付属していたものと考えられている。これらの木柱及び柱穴を「張り出し柱」と呼ぶこととする。張り出し柱は中央の張り出し主軸柱とその両端の張り出し側柱の3基が付属するものがある。このなかには張り出し主軸柱が突出するものと突出せずに張り出し側柱と並ぶものがあり、前者をB1類、後者をB2類とする。また、張り出し側柱のみのものをB3類とする。

C類　1間×1間の長方形を呈するものである。

1）浅川滋男氏の指導による復元図が［埋文事業団2000］に掲載されている。



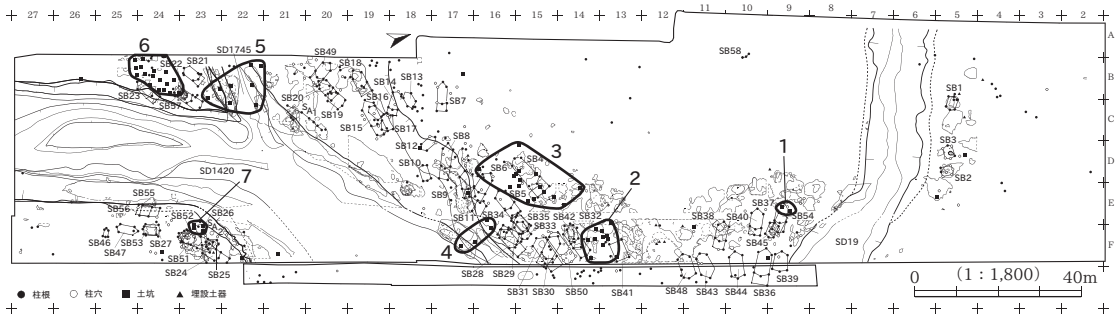
第26図　掘立柱建物の分類と計測位置

c　規模・主軸方位の計測方法

規模及び面積は、柱穴下端の中心及び柱根下端の中心を基点として計測した。計測位置は第26図のとおりである。主軸長は主軸柱間を計測し、張り出し主軸長は張り出しが付属する側の主軸柱と張り出し主軸柱との間を計測した。この二つを足したものを主軸全長とした。桁行長は主軸と平行する側辺の側柱間を計測し、張り出し桁行長は張り出しが付属する側の側柱と張り出し側柱との間を計測した。これらを足したものを桁行全長とした。梁行長は主軸と直行する①～③の各側柱間を計測した。本文中では桁行長と桁行全長・梁行長の長いほうを表示した。突出長は①～③について計測した。面積は、母屋の面積と、下屋を入れた全体の面積を計測した。主軸方位は、主軸長の方向について真北を基準として東西に傾く角度を計測した。

3）土坑（SK）・ピット（P）・杭列（SA）

前述した基本分類に基づいて遺構を検討した結果、掘立柱建物を構成する柱穴の平面形は円形や楕円形が多く、断面形はU字形ないし漏斗状を基調とする傾向がみられた。また、柱根が遺存しない柱穴の覆土堆積形状は、レンズ状や単層のものが多く、堆積内容はシルト層のみのものが主体を占める。さらに、柱穴の底面より下方の土層観察により、上屋などの上部構造の重みによる沈下を確認できることも特徴で



第27図　土坑群位置図

ある。こうした柱穴の特徴を備えるものをピットとした。なお、後述する土坑と認定できないものもピットに含めた。

一方で、こうした特徴とは異なる特徴を示す一群を認めることができた。平面形は主に円形や楕円形で、上端規模が柱穴より大きく、断面形態は台形状・弧状・半円形・袋状を示すものが占める。そして、覆土の堆積形状がレンズ状ないし水平で、シルト層と腐植土層の互層となるものが特徴的である。特に、最下層に特徴的な黒褐色土が堆積するものが目立つことから、貯蔵穴の可能性が高いと判断される。こうした柱穴とは異なる特徴を示す遺構は土坑とした。土坑は特定の地域に集中する傾向も読み取れることから、これらを土坑群１～７に区分した（第27図）。杭列は、ピットが間隔を置いて規則的・直線的に並ぶものを認定した。

4）埋 設 土 器（SH）

土坑内に土器を埋設したもののほかに、穴を掘らず土器を土中に押し込んで埋めた本遺跡特有のものが検出された。ここでは、これらを一括して埋設土器と呼ぶこととする。

5）炭化物集中範囲（SC）

炭化物が同一層位で密集している範囲である。大きさは直径10cm程度のものから数ｍに及ぶものがあり、炭化物の濃淡も多様である。同じ炭化物集中範囲内で特に濃密な部分も記録し、これを「濃密範囲」と呼ぶこととする。濃密範囲が複数認められる場合は、「V1」のように通し番号を付して区別した。炭化物集中範囲の下面には、灰状のものが堆積するものや、被熱して変色したと考えられるものがある。また、円形を呈する灰白色の生粘土（ND）が重なるものも認められた。

6）堅果類廃棄範囲（SX）

SD19及びSD1420の斜面部、あるいは平場の同一層内において、クリ果皮やトチノキ種皮などの堅果類が廃棄された範囲を検出した。これを堅果類廃棄範囲と呼ぶこととする。本文中における堅果類の部位呼称は本編第Ⅴ章８に従う。

7）性格不明遺構（SX）

前述した以外の遺構で、性格が不明なものをまとめる。遺構略号は堅果類廃棄範囲と同じSXである。

8）生　粘　土（ND）

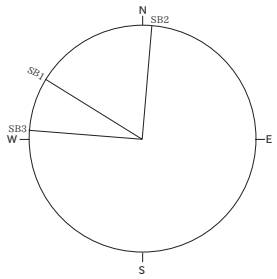
生粘土が同一遺物包含層内に直径20～100cmほどの範囲で堆積しているのが検出された。円形を基調とし、炭化物集中範囲と重なるものが多い。人為的なものと考え、この範囲を記録した。

2　SD19右岸地区の遺構

A　概　　要

1）遺構の分布（図面図版5）

本地区の遺構は5B～Eグリッドに集中し、掘立柱建物3棟・土坑2基・埋設土器3基・炭化物集中範囲16か所を検出した。ほかのピットは少なく、堅果類廃棄範囲は検出されなかった。掘立柱建物は主軸方位が一定しないのが特徴である（第28図）。なお、2～4B～Eグリッドにもわずかにピットがあるが、縄文時代に所属するものかは不明である。



第28図　SD19右岸地区の掘立柱建物主軸方位

2）遺物出土状況（図面図版21・38）

遺物も遺構と同様に5B～Eグリッドに集中して認められた。包含層はSD19右岸地区のS1層とS2層が認められたが、本遺跡の調査初期段階であったことから、層位の確定に時間を要した。このため、遺物の取り上げ層位はS1・S2層を付したもののほかに、Ⅶ層で取り上げたものも多く、層位別の出土状況を明確にできない。本遺跡の中では最も遺物の少ない地区である。遺物は掘立柱建物内からの出土が少なく、その周囲にまとまって廃棄される傾向がある。

B　掘立柱建物

SB1（図面図版59、写真図版26）

位　置　5B・5Cグリッドに位置する。SD19から約5m離れた位置に構築されていたものとみられる。

分類・規模　A1類であり、北西側の主軸延長線上に柱穴1基（P47）が付属する。主軸長3.36m、梁行長2.32mである。

柱　穴　7基に柱根が遺存する。P45のみ同じ掘形内から柱根が2本出土しており、同時性が高いものと考える。柱根の直径は9～12cmである。底面標高は0.85～1.3mであり、P47を除きほぼ同じである。柱根樹種は、P43・45B・46がクヌギ節、P40がキハダ、P44がヤマザクラ、P47がヤナギ属、P45Aがイヌエンジュであり、バラエティーに富む。P50は根絡みが残存する。

重複遺構　SC3（SD19右岸地区S2層期）がSB1にほぼ収まるように重なる。この濃密範囲はSB1の中央に位置し、主軸と同一方向に広がるように検出された。

層　序　ほぼ水平に土層が堆積しており、付属施設は確認できない。

出土遺物　P50とSC3で接合した土器No.1のほか、P40・45から土器が出土した。また、SC3出土の土器No.16がある。SC3より下から櫛No.27が出土した。S2～S1層出土遺物は少ない。

構築時期　P40の掘り込み位置は明確にできなかったが、SC3との重複関係は同時存在の場合とSC3よ

り新しい場合との二者が考えられる。平面的な重複関係を重視して前者の場合を想定し、SD19右岸地区S2層期に所属する可能性が高いと考える。

SB2（図面図版59、写真図版26・27）

位　置　5Dグリッドに位置する。SD19から約6m離れた位置に建っていたものと考えられる。

分類・規模　A2類であり、東側主軸柱の突出長が短い。主軸長2.92m、梁行長2.16mである。

柱　穴　いずれもⅧ層で検出した。柱根はP705（直径13cm・クヌギ節）・P706（直径10cm・コナラ節）のみ遺存する。柱穴の底面標高は0.96～1.06mとほぼ同レベルである。

重複遺構　SC35A（SD19右岸地区S1層期）とSC35B（SD19右岸地区S2層期）が重なる。SC35AはSB2より北側まで広がる。SC35BはほぼSB2と同一の範囲に収まるほか、濃密範囲はSB1と同様に中央に主軸と同一方向に広がって検出された。P96はSC35Bの下面で検出された。

層　序　ほぼ水平に土層が堆積しており、付属施設などは確認できない。

出土遺物　SC35Aから土器No.17が出土している。S2～S1層出土遺物は少ない。

構築時期　柱穴の掘り込み位置を検出できず、不明である。しかし、SC35Bの重なり様はSB1とSC3との重複関係に類似することから、これらがSD19右岸地区S2層期に同時存在していた可能性がある。

SB3（図面図版60、写真図版27）

位　置　5Dグリッドに位置し、南側にSC104（S2層期）が接する。

分類・規模　A1類である。主軸長3.2mで、梁行長2.36mである。

柱　穴　いずれもⅧ層で検出した。柱根はP726・728が遺存（いずれも直径6cm・樹種不明）するのみ。ほかの柱穴は上端長径が7～10cmと小さい。柱穴の底面標高は0.95～1.07mとほぼ同レベルである。

重複遺構　SC100・101とSX36が重なる。SC100・101はいずれもⅦc層で検出した円形を呈する小形の炭化物集中範囲である。SX36はS2層期に属する盛土状の遺構である。S2層の上面に厚さ6cmで概ね楕円形に砂が盛られている。砂の内部には赤色顔料とみられるものも含まれていたが、用途は不明である。

出土遺物　P726の近くから櫛No.26が出土した。S2～S1層出土遺物はわずかに過ぎない。

構築時期　柱穴の掘り込み位置を確認できず、不明である。また、SX36との関係も不明である。

C　土坑・ピット（図面図版60、写真図版27）

SK733　平面形は楕円形を呈し、深度は40cmである。覆土は底部上面に特徴的な5層黒褐色土が堆積し、自然堆積のシルト層の後に炭化物層と腐植土層が堆積する。クリ・トチノキ・クルミの果皮がわずかに出土したが、5層からの出土はほとんどない。構築時期はSD19右岸S2層期である。

SK757　平面形は楕円形とみられ、深度は25cmである。SC82と重なる。覆土2層は炭化物と腐植土を多量に含み、1層はSC82から続くとみられる炭化物を大量に含む。半埋没の状態でK1層とS1層に覆われる。2層からはクルミ内果皮が大量に出土した。また、1層からは土器No.2の一部が出土し、SC82出土土器と接合した。構築時期はSD19右岸S2層期である。

P99　5D8グリッドに位置する。直径6cmの断面円形の木材が直立した状態で検出された。掘形がないことから、打ち込まれたものと考えられる。樹種は未同定である。構築時期は不明である。

P109　SC82の底面で検出したピットである。覆土上位にSC82から続く炭化物層が認められることから、SC82以前に構築されたものであろう。

D　埋 設 土 器（図面図版60、写真図版28）

SH8　5B23グリッドに位置する。口径27.5cmの深鉢形土器（No.6）が逆位でⅦ層中に埋まった状態で検出された。上半は欠けていたが、底部は内部に崩落していた。掘形の有無は不明である。土器の内部にはⅦ・Ⅵ・Ⅴ層が堆積しているが、Ⅵ層の標高は周辺と変わらないことから、Ⅵ層堆積以前に土器上半が崩落していたものと考えられる。

SH32　5C12グリッドに位置する。Ⅶc層の下半で検出した。平面形は楕円形で、深度は10cmである。浅鉢形土器2個体が入れ子状になって埋設されていた。内側の土器は口縁部片のみである。

SH13　4B15グリッドに位置する。土器No.3が逆位に伏せられた状態で検出した。掘形の有無は不明である。土壌の水洗により赤漆塗り糸玉の一部とみられる破片が出土した。

E　炭化物集中範囲（図面図版61、写真図版28）

SC2　5Cグリッドに位置し、2.4×1.35mの不整形を呈する。所属層位は明確ではなく、層厚は一定でない。平成10年度確認調査で一部削平されたため2か所に分かれているが、本来は続いていたものとみられる。炭は全体的に濃く、土器片やクルミ内果皮がわずかに出土した。

SC104　5Dグリッドに位置し、SB3と一部重なる。所属層位はS2層で、SX36と同一層位である。層厚は一定で、炭の濃淡も均質である。遺物は出土していない。

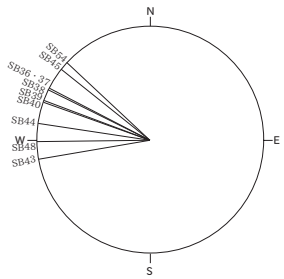
SC82　5～6D～Eグリッドに位置する。規模は7.2×5.6mである。層位は南側で炭化物を含まない土層をはさみ1～4層に区分できるが、層位別の平面形を捉えることができなかった。炭化物の濃度は濃く、遺物は多量の土器のほか、石器・赤漆塗り糸玉片・クリとクルミの果皮が出土した。所属層位はS2～S1層期だが、SK757出土土器と接合関係が認められ、S2層期に所属するのは確実である。

3　SD19左岸地区の遺構

A　概　　要

1）遺構の分布（図面図版6・7）

本地区の遺構は掘立柱建物10棟（柱穴370基）・土坑3基・ピット19基・炭化物集中範囲41か所・堅果類廃棄範囲4か所を検出した。遺構配置は、9～11E～Gグリッドに掘立柱建物と土坑・ピットがあり、8～11D～Fグリッドに炭化物集中範囲が多数認められる。掘立柱建物の主軸方位をみると、SB36・37・38・39・40・45・54は48°～71°西偏して北西～西北西を指すのに対し、SB43・44・48は82°～100°西偏して西を指している（第29図）。また、これらの建物位置もそれぞれ南北に分かれてまとまっていることを指摘できる。土坑はSB37の柱抜き取り後の柱穴再利用も含め9Eグリッドに集中しており、これを土坑群1とする。炭化物集中範囲は、S4～S3層期では内陸側に集中し、S1層期ではやや川岸よりに認められる。堅果類廃棄範囲は8E～FグリッドのSD19斜面部で検出されたが、いずれも小規模なものである。



第29図　SD19左岸地区の掘立柱建物主軸方位

2）遺物出土状況（図面図版22～26）

包含層はS4～S1層が安定して認められ、一部でS5層とD層から遺物が出土した。S4～S3層期では炭化物集中範囲の分布と同様に陸地側に集中し、S1層期では掘立柱建物の分布範囲にも広がる。遺物量はいずれの層も多く、特にⅥ層の出土が多い。D層は10～11Fグリッドに集中するが、量は少ない。

SD19左岸斜面では、8Eグリッドで遺物廃棄層が多層に分かれて確認でき、多量の土器・石器のほか、骨片や赤漆塗り糸玉が出土した。これをSX112と名付けて層位別に遺物を取り上げたが、これらの層位はSD19の層序に帰属すべきものである。

B　掘立柱建物

SB36（図面図版62、写真図版30）

位　置　9～10E～Gグリッドに位置する。北側にSB39が長軸方向をほぼ同じくして隣接する。

分類・規模　B3類としたが、西側のP1852・1858・1860以外は用水路工事立会い調査で検出したものであり、張り出し柱が明確でない。主軸長6.8mで、梁行長3.56mである。

柱　穴　西側の3基はⅥ層で検出した。柱根は7本遺存し、直径18.3～38.6cm、残存長44.3～97.5cmである。主軸柱はP1852は深く、張り出し柱側のP9803は残存長からP1852より浅いものと推定される。側柱はP1858とP1860は規模・底面標高がほぼ同じだが、P9802とP9804は残存長と直径が異なるほか、ほかの柱根がすべてクリなのに対しP9802のみコナラ節である。張り出し柱P9842はほかより細く浅い。

重複遺構　S3層期以降に所属するSK1872が重なる。炭化物集中範囲などは検出されなかった。

出土遺物　柱穴から出土していない。S4・S3層出土遺物は少なく、S1層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　P1852はK3層を切り、P1858・1860もS4層を切ることから、S3層期以降と推定される。

SB37（図面図版62・63、写真図版31）

位　置　9E～Fグリッドに位置し、SB45・54と重複する。

分類・規模　B1類であり、主軸全長7.12m、梁行長2.84mである。

柱　穴　6基に柱根が遺存し、直径は主軸柱が20cm、側柱が14～15.6cm、張り出し柱が11～13.3cmである。底面標高は主軸柱・側柱が0.01～0.29mなのに対し、張り出し柱は0.77～0.95mと浅い。柱根の樹種は、P2105がクヌギ節でこれ以外がコナラ節である。P852には柱根を固定するように根絡みが施され、P1854にも根絡みが認められる。P710・716は、覆土の状態から土坑と誤認し、セクション図などから調査終了後に柱穴としたものである。セクション図や写真から柱穴底面まで掘りきれていないことが明らかで、本来はほかの側柱と同様の深さであったものとみられる。P710・716は掘形の上端南側に浅いテラスが付いており、柱根抜き取りの際に上端が広がったものと考えられる。P710は覆土20～18層に破砕したクルミ内果皮・トチノキ種皮を多量に含み、16～12層に植物の葉や茎を含む腐植土が堆積することから、木柱の抜き取り後に廃棄された可能性がある。

重複遺構　SC120（S2～S1層期）、SC1867（S3～S1層期）と一部重なるが、それぞれの中心が外にあることから関連性は低い。SK717が西端で重複するが、前後関係は不明である。

層　序　m-m'セクションではほぼ水平に堆積しており、掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　P710から20～19層出土の土器No.26と、赤漆塗り糸玉片が出土した。P716・852から土

器が出土した。S4・S3層出土遺物は少なく、S1層出土遺物は濃密に重なる。

構築時期　P2113はSC1867-5層を切っていることからS3層期以降に所属するものと考える。また、P710・716はS3層を切っているが、廃絶後に木柱が抜き取られたことから遺物包含層との切り合い関係が構築時期を示す可能性は低い。よって、SB37はS3～S1層期に所属する可能性が高い。

SB38（図面図版64・65、写真図版32）

位　置　10～11E～Fグリッドに位置する。南側の中央地区に隣接する。

分類・規模　B1類である。主軸全長6.74m、梁行長2.6mである。

柱　穴　7基に柱根が遺存し、直径は主軸柱が14.5～25.1cm、側柱が15.4～22cm、張り出し柱が13cmである。底面標高は主軸柱・側柱が-0.21～0.46mなのに対し、張り出し柱は0.9～1.11mと浅い。柱根の樹種は、P1862がクリ、P2505がヤマグワで、これ以外がコナラ節である。P1890・1891は、噴砂とみられるFS2340に遺構上面が覆われていた。

重複遺構　SC2266（S4層期）の濃密範囲V11が母屋のほぼ中央に位置する。また、SC2247・1822（S3層期）の一部が重複する。

層　序　n-n'セクションではほぼ水平に堆積しており、掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　P1891から土器が出土した。S4・S3層出土遺物は少量で、Ⅵ層出土遺物と濃密に重なる。

構築時期　P1890・1891を覆っているFS2340は、n-n'セクションをみるとS3層の直上に位置するものの、P2532の西側でS3層との間にシルト層を挟んでいる。このシルト層をS2層と考えてFS2340の所属時期をS2層期と推定できる。したがって、P1890・1891はFS2340噴出以前のS4～S3層期に所属し、SB38もS4～S3層期と推定される。

SB39（図面図版65、写真図版30）

位　置　9F～Gグリッドに位置する。北側にSD19が接する。

分類・規模　A2類としたが、東側のP9801・9806は用水路工事立会い調査で検出したものであり、張り出し柱が明確でない。主軸長4.78m、梁行長3.08mである。

柱　穴　5基に柱根が遺存し、直径は主軸柱が12.5～16cm、側柱が13.5～18.5cmで同規模といえる。底面標高は主軸柱・側柱が0.65～0.71mで差がほとんどない。柱根の樹種は、P1910がクヌギ節で、これ以外がコナラ節である。

重複遺構　重複する遺構は認められなかった。

出土遺物　柱穴からは出土していない。S4・S3層出土遺物は少量で、Ⅵ層出土遺物と濃密に重なる。

構築時期　P1851はS3層を切っているものの、層厚が薄いことからS3層期に構築された可能性もある。よって、SB39はS3層期以降に所属する可能性がある。

SB40（図面図版66、写真図版33）

位　置　10E～Fグリッドに位置する。

分類・規模　張り出し側柱を1基確認していないが、B2類である。主軸全長6.32m、梁行長3mである。

柱　穴　7基に柱根が遺存し、直径は13.5～19cmで、位置による差はあまりない。底面標高は主軸柱・側柱が0.24～0.74mなのに対し、張り出し柱は0.76～0.94mと浅い。柱根の樹種は、P21がヤナギ属、P2115がマツ属で、これ以外がコナラ節である。

重複遺構　張り出し部の南側にSC1877（S3層期）が重複する。

層　序　j-j'セクションではほぼ水平に堆積しており、掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　柱穴からは出土していない。S4・S3層出土遺物は少量で、Ⅵ層出土遺物と濃密に重なる。

構築時期　P1857はS4層を切り、S3層も切っているものの、K2～S1層の層厚が薄いことからS3層期以降に構築された可能性もある。よって、SB39はS3層期以降に所属する可能性がある。

SB43（図面図版67、写真図版33）

位　置　11F～Gグリッドに位置する。南側にSB48が隣接する。

分類・規模　A類としたが、P9812・9838は用水路工事立会いで検出されたものであり、平面形が明確ではない。主軸長6.54m、梁行長2.8mである。

柱　穴　5基に柱根が遺存し、直径は15.5～25.1cmである。底面標高は0.09～0.41mで、主軸柱P1897が深い。柱根の樹種は、P2451がヤマグワで、これ以外がコナラ節である。P2451は、柱根の周囲に根絡みと共に磨石類と生粘土塊が多数混入していた。P1896・1897は掘形脇あるいは覆土中に噴砂が認められる。

重複遺構　重複する遺構は特に認められなかった。

出土遺物　P1897から土器が出土した。S4・S3層出土遺物は少量で、Ⅵ層出土遺物と濃密に重なる。

構築時期　P1896はS4層を切り、S3層も切って構築された可能性が高いことから、SB43はS2～S1層期に所属する可能性がある。しかし、資料が少なく断定はできない。

SB44（図面図版67、写真図版34）

位　置　10F～Gグリッドに位置する。

分類・規模　A2類としたが、P9805・9808・9810は用水路工事立会い調査で検出されてものであり、平面形が明確ではない。主軸長6.4m、梁行長3.16mである。

柱　穴　6基に柱根が遺存し、直径は主軸柱が15.5～19cm、側柱が24～31.5cmであり、側柱が太い。底面標高は0.81～0.99mで、差はあまりない。柱根の樹種は、P1861がコナラ、P9805がカツラで、これ以外がクリである。P1863の柱根側面には溝が施される。

重複遺構　重複する遺構は特に認められなかった。

出土遺物　P1888から土器が出土した。S4・S3層出土遺物はなく、Ⅵ層出土遺物と濃密に重なる。

構築時期　P1861はS4層を切って構築された可能性があることから、SB44はS3層期以降に所属する可能性がある。しかし、資料が少なく断定できない。

SB45（図面図版68、写真図版34）

位　置　9～10E～Fグリッドに位置する。SB37・54と重複する。

分類・規模　A類と考えられる。主軸長は約3.8mと推定され、梁行長は2.32mである。

柱　穴　検出した5基すべてに柱根が遺存する。直径は8～10cmである。柱穴の底面標高は0.52～0.78mで、差はあまりない。柱根の樹種はすべてクヌギ節である。P2110には根絡みが施される。

重複遺構　SC1867（S3～S1層期）がSB45にほぼ収まるように重複する。また、その濃密範囲である5層と3層はSB45の中央に位置し、主軸と同一方向に広がって検出された。SB54e-e'セクションにおける層序は5層がS4層直上に堆積していることから、濃密範囲はS3層期に形成された可能性が高い。

層　序　SB54e-e'セクションでは、P2113の西側付近でK4層が切られてS4～S3層の④～①層が堆積し、その上部にSC1867が形成されている。人為的な掘り込みの可能性もあるが、面的には確認されなかった。

出土遺物　柱穴からは遺物が出土していない。SC1867から土器・石器・クルミ内果皮が出土した。S4・S3層出土遺物は少量で、S1層出土遺物と濃密に重なる。

構築時期　いずれの柱穴もK4層を切って構築されていることからS4層期以降ではあるが、細別時期の特定は難しい。しかし、SC1867の濃密範囲５層がS3層期に形成された可能性が高いことと、平面的な重なりを重視すれば、S3層期に所属する可能性も考えられる。

SB54（図面図版68、写真図版35）

位　置　9E～Fグリッドに位置する。SB37・45と重なる。

分類・規模　柱穴は３基のみだが、北西側に位置するとみられる柱穴は暗渠及び未調査部分のため検出できなかったものと考える。おそらくA類と考えられる。梁行長は2.38mである。

柱　穴　柱根は遺存していない。底面標高は0.51～0.88mである。覆土の特徴が３基とも類似している。P1913には根絡みとみられる木製品が遺存する。

重複遺構　SC1867と一部重複するが、P2112がこれを切って構築されていることから関連性は低い。

出土遺物　P2112から土器が出土した。S4・S3層出土遺物は少量で、Ⅵ層出土遺物と濃密に重なる。

構築時期　P2108がS3層を切って構築された可能性が高いことや、P2112がSC1867を切っていることから、SB54はS2～S1層期に所属する可能性が高い。

SB48（図面図版69、写真図版35）

位　置　11～12F～Gグリッドに位置する。北側にSB43が隣接し、南側に遺物集中地区が広がる。

分類・規模　A2類としたが、P9813・9836・9835は用水路工事立会い調査で検出されたものであり、平面形が明確ではない。主軸長6.08m、梁行長3.26mである。

柱　穴　６基すべてに柱根が遺存し、直径は16～25cmである。底面標高は0.53～0.66mで、大きな差はみられない。柱根の樹種は、P2310・9836がコナラ節、P9813がハリギリ、これ以外がヤマグワである。柱根は東～南東側に傾斜している。

重複遺構　SC2266（S4層期）・2247（S3層期）と重複する。

層　序　g-g'セクションではほぼ水平に堆積しており、掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　柱穴から遺物は出土していない。S4・S1・Ⅵ層出土遺物と濃密に重なるが、S3層出土遺物はわずかである。

構築時期　P2460はSC2247を切っていることから、SB48はS2～S1層期に所属する可能性が高い。

C　土坑・ピット（図面図版70、写真図版36）

1）土坑群１

SK121　　9E18グリッドに位置し、S2層で検出した。平面形は楕円形を呈すとみられる。深度は10cmだが本来は20cmほどであろう。覆土２層は炭化物を含む。土器（No.27）が出土した。

SK717　　9E14グリッドに位置し、S4層で検出した。平面形は楕円形で、深度は20cmである。覆土は３層と４層にそれぞれ生粘土塊を多量に含むことが特徴である。４層から出土した生粘土塊は円盤状を呈していた可能性がある。１層出土の土器No.25はS2・S1層出土土器と、２層出土のNo.28はD2層出土土器と、３層出土のNo.29はS3・S4層出土土器と接合した。このほか、赤漆塗り糸玉片とクリ・トチノキ・クルミの果皮が覆土上位からわずかに出土した。

2）その他の土坑・ピット

SK1872　　9～10Fグリッドに位置し、SB36と重なる。平面形は楕円形で、上端径は161×136cm、

深度は18cmである。覆土下半９～７層に炭化物を含む土層が堆積することが特徴である。

P2121　9F13グリッドに位置する。直径12cmの柱根が遺存する。樹種はエゴノキ属であり、同一樹種の柱根としてはSA2のP2024出土柱根のみである。

D　埋設土器（図面図版70、写真図版36）

SH118　9D20グリッドに位置する。口径37.4cmの深鉢形土器（No.30）が逆位の状態でS3層からS2～S1層にかけて口縁部～体部上位が埋まった状態で検出された。体部下位・底部はつぶれるように内部に崩落していた。掘形は認められない。S3層が堆積した後に埋められた可能性が高い。

E　炭化物集中範囲（図面図版70～72、写真図版36・37）

SC111・114　8～9D～Eグリッドに位置するS1層に属する炭化物集中範囲である。長径はSC111が4.85m、SC114が3.13mを測り、いずれも不整形を呈する。SC111から出土した土器（No.1）がSB1-P50出土土器と接合した。このほか、石器・赤漆塗り糸玉片やクルミ内果皮が出土した。

SC125　9Dグリッドに位置する、長径2.4～2.85mの楕円形を基調とするものである。ほぼ同じ位置でA・Bの重複が認められ、SC125AがS2層、SC125BがS3層に属する。炭化物の密度は濃い。土器（No.130）・石器のほか、赤漆塗り糸玉片とクルミ内果皮が出土した。

SC712・735・737・740・767　10～11Eグリッドに位置し、SC740・767がS4層、SC735・736・737がS3層、SC712がS1層に属する。SC740は長径10mを超える大規模なもので、11E19グリッド付近に濃密範囲が確認された。S4～S3層にかけて深鉢・甕などの一括土器が重なるように出土した。また、SC740・767・735・737から赤漆塗り糸玉やその破片や漆被膜が多数出土したほか、長径約30cmのベンガラ塊SX754（S4層）がSC767に重なって出土した。このように、S4～S3層の炭化物集中範囲と共に漆製品に関する遺物が多数出土していることが注目される。このほか、SX743（S4層）は人為的に持ち込まれた黄褐色砂が堆積する範囲で、赤色顔料粒が若干混入していた。なお、SC712においても赤漆塗り糸玉が出土している。

SC1865・1866・1901　9E～Fグリッドに位置し、SC1865がS3～S1層、SC1866がS4～S1層、SC1901はS2～S1層と所属層位が明確ではない。SC1865は濃密範囲を２か所検出した。a-a'セクションでは濃密部分に若干の窪みが認められ、掘り込みを持つ可能性もある。SC1866は濃密範囲を１か所検出したが、落ち込みは確認されていない。SC1901はシルト層を挟んで炭化物層が上下に２層確認されており、同一地点において幾度か屋外炉としての機能を有していた可能性がある。

F　堅果類廃棄範囲・性格不明遺構（図面図版72、写真図版37・38）

SX2501・2502・2459　10Fグリッドで検出した数少ないD2層の遺構である。SX2501は腐植土が堆積する範囲で、その東側にサケ科・コイ科の骨片が集中する範囲SX2459が上に重なって検出された。土器は浅鉢形土器No.31・34と甕形土器No.38が出土した。No.34はSD19-23層出土土器と接合し、D層期にSD19が形成されていたことを示す一資料といえよう。SX2502も腐植土が堆積する範囲だが、遺物は出土しなかった。

SX112・763　SD19左岸斜面部の８～9Eグリッドにおいて、土器・石器・堅果類・骨片を含む土層が間層を挟んで多数形成されている範囲を検出した。これをSX112と名付けて、１～16層に分層して

遺物を取り上げた。その後の調査により、SX112はSD19の土層の埋積過程において遺物廃棄行為により形成されたことが明らかになり、本来はSD19の埋積層位に帰属するものである。ほかの堅果類廃棄範囲と同様に各層における廃棄範囲を記録する必要があったが、ここでは行っていない。概ね図示した範囲から広く遺物が出土した。層位の検討から、16～13層がS4～S3層期に、12～1層がS1層期に所属するものと考えられる。遺物は11・9・8・4層から多数出土した。遺物では赤漆塗り糸玉が6点出土したほか、堅果類はクリ・トチノキ・クルミがあり、特にクルミが多い。骨片は魚類（サケ科・コイ科）、小形鳥類、哺乳類（海獣・シカ・ヒト）が出土した。SX763はクルミの集中する範囲である。A・Bに分かれ、いずれもSX112-8層に属するものと思われる。Bからは木製の角材が出土している。

4　中央地区の遺構

A　概　　要

1）遺構の分布（図面図版7・8）

本地区は、炭化物集中範囲から一括土器などの遺物が集中的かつ多量に出土したことと、SD19左岸地区とSD1420右岸地区とを分ける遺構空白域であることを重視して地区設定したものである。遺構はSC2266（S4層）・2247（S3層）・2226（S1層）の大規模な炭化物集中範囲のほかに、埋設土器5基・ピット1基と骨片集中範囲や生粘土が検出されている。本地区の南東側ではS5層に属する炭化物集中範囲が検出された。西側ではSX51の東端が検出された。図面図版75d-d'セクションをみると、土層は西側に向かって傾斜しており、S1層上にSX51-1層が堆積する。S4～S3層は層厚が一定であるが、S1層は厚くなっていることが分かる。すなわち、S1層期にこの範囲が窪地になったことを示すものである。この西側には縄文時代晩期以降とした自然の陥没であるSX741（図面図版304）があり、これがS1層期に既に陥没し始めていたことを示すものと考える。なお、SB48は本地区の北東側に位置するが、SD19左岸の一連の掘立柱建物とみなし、本地区では説明を行わないこととする。

2）遺物出土状況（図面図版22～30）

包含層は炭化物集中範囲と共にS4・S3・S1層から多量に出土した。S4・S3層は土器の残存率が高く、埋設土器が集中する範囲において顕著であった。また、赤漆塗り糸玉が多数出土したことも特徴である。南東側ではS5層に属する炭化物集中範囲と共に遺物が多数出土した。

B　埋 設 土 器（図面図版73、写真図版42）

SH2301　12F8グリッドに位置する。口径34.2cmの深鉢形土器（No.300）が逆位でS5層からS3層にかけて口縁部が埋まった状態で検出された。体部・底部は遺存していなかった。掘形は認められない。構築時期は、セクションの観察からSC2266が形成された頃かそれ以後と考えられるが、S4層出土土器と接合することを重視しS4層期に構築された可能性が高いものと考える。

SH2302　12F13・14グリッドに位置する。口径34.7cmの深鉢形土器（No.298）が逆位でD2層からS5層にかけて口縁が埋まった状態で検出された。掘形は認められない。土器は接合の結果、全形がほぼ残っていたことがわかり、完形の状態で埋設されたものと考えられる。構築時期は、セクションの観察からSC2266が形成された頃ないしそれ以後と考えられるが、土器の体部片が土器内部のS4層上に認

められたことと、周囲のS4層上にも同一個体の破片が散乱していたことから、S4層期に構築された可能性が高いものと考える。

SH2443　12F8グリッドに位置する。口径29cmの深鉢形土器（No.297）が逆位でS5層からS3層にかけて口縁部が埋まった状態で検出された。体部・底部は遺存していなかった。掘形は認められない。構築時期は、図示したように別個体であるS4層出土土器片の下から本土器片が出土したことから、S4層期に構築されたものと考える。

SH2448　12F1グリッドに位置する。口径37.9cmの深鉢形土器（No.299）が逆位でK5層からⅥ層にかけて埋まった状態で検出された。底部は遺存していなかった。掘形は認められない。土器内部の３層はSC2247と同一層位だが、炭化物の濃度が周囲に比べ薄い。これはS3層期に構築されたために土器内部のS3層に炭化物の堆積が停止したためと考える。よってS3層期に構築されたものと考える。１・２層は周囲の堆積状況と異なりレンズ状を呈していることもこれを裏付ける。構築時には土器が地上に約15cm飛び出た状態であり、Ⅵ層堆積時にも一部露出していたと考えられる。

SH2457　12E24グリッドに位置する。口径15.9cmの甕形土器（No.301）が斜位でS4層からSX51-1③層にかけて埋まった状態で検出された。底部が欠け、口縁部から体部まで全周が残ったままの状態で出土した土器はほかに例がないことから、埋設土器の可能性が高いものと判断した。土器内部にⅥ・Ⅴ層が堆積しており、一部地上に露出していたとみられる。構築時期はS2層を切って埋められていることから、S1層期に所属するものと考える。

C　炭化物集中範囲（図面図版74・75、写真図版39～41）

SC2266　10～13E～Fグリッドにおいて南北29mに広がり、不整形を呈する。濃密範囲は11か所を検出したが、そのうちV8は炭化物と共に完形土器が多量に出土した範囲である（図面図版41）。ほかの濃密範囲は炭化物の濃度が極めて濃い。漆製品では赤漆塗り糸玉７点・腕輪１点のほか赤漆塗り糸玉片や漆被膜が多数出土した。堅果類ではクルミ内果皮が認められた。また、生粘土ND2322・2510・2526・2527がいずれも上面に重なって出土した。SX2454・2455は骨片が集中する範囲であり、SX2454からコイ科・サケ科・鳥類などが確認された。SX2282では石器の薄片が集中して出土した。

SC2247　10～13E～Fグリッドにおいて南北約26mに広がり、SC2266とほぼ同じ位置・規模・形態で重なる。濃密範囲は５か所を検出した。V4はSC2266V8と同様に遺物が多量に出土した範囲である。ほかの濃密範囲もSC2266の濃密範囲とほぼ同じ位置、類似した形状で重なっていることが注目される。すなわち、SC2266とSC2247では同じ場を廃棄場などとして継続的に利用していた可能性が高いものと考える。さらに、S4層とS3層との間のK3層は短期間に堆積した可能性を指摘できる。出土した漆製品は赤漆塗り糸玉５点・腕輪２点のほか赤漆塗り糸玉片・漆塗膜多数である。堅果類ではクルミ内果皮が認められた。

SC2227　12～13E～Fグリッドにおいて東西約10mに広がり、SC2266・2247と規模・形態が異なる。濃密範囲は４か所を確認した。出土した漆製品は赤漆塗り糸玉４点のほか赤漆塗り糸玉片・漆塗膜多数である。SC2266・2247に比べ大形品の完形土器は少ない（図面図版46）。

SC2424　13Fグリッドに位置し、周囲に位置するSC2425・2426・2427と共にS5層に属する。土器・石器が多数出土したほか、赤漆塗り糸玉１点とその破片が出土した。また、クルミ内果皮もわずかに出土した。SX2428・2429は骨片が集中して出土した範囲である。

D　その他のピット（図面図版75、写真図版39）

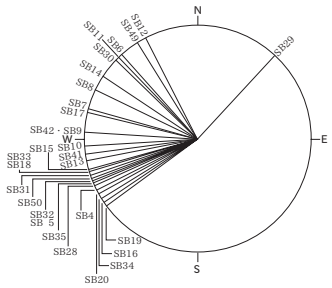
P2515　11F4グリッドに位置し、S4層で検出した。平面形は楕円形で、上端径は36×25cm、深度は12cmである。覆土は3層と4層にそれぞれ生粘土塊を多量に含むことが特徴である。5層から出土した土器No.382は、SC2266出土土器と接合した。

5　SD1420右岸1・2地区の遺構

A　概　　要

1）遺構の分布（図面図版8～12）

本地区は土砂の埋積による川岸の移動により、S4～S3層期の右岸1地区・斜面1、S1層期の右岸2地区・斜面2に分けることができる。右岸2地区の遺構のほとんどはS1層期に所属するが、右岸1地区の遺構は各時期のものが混在する。よって、ここでは両地区の遺構を分けずに記述することとする。



第30図　SD1420右岸1・2地区の掘立柱建物主軸方位

検出した遺構は掘立柱建物29棟・土坑46基・埋設土器1基・杭列1基・ピット134基・炭化物集中範囲145か所・堅果類廃棄範囲など28か所である。右岸1地区では掘立柱建物が14～16D～Fグリッドに集中する。S4～S3層期は、炭化物集中範囲が掘立柱建物群より北西側の陸域に、堅果類廃棄範囲が斜面1の16～17D～Fグリッドで掘立柱建物に付随するように検出された。S1層期になると、炭化物集中範囲はSD1420の上端ライン付近にわずかに認められる程度である。

右岸2地区ではSD1420の上端ラインから約10mの間を空けて掘立柱建物が川岸に沿って構築される。そして、この間に炭化物集中範囲が位置し、掘立柱建物群より陸地側にはほとんど認められなくなる。堅果類廃棄範囲も斜面2のほぼ全面にわたって検出された。

掘立柱建物の主軸方位（第30図）をみると、SB4・5・15・16・18・19・20・28・31・32・33・34・35・50は106°～130°西偏して西南西を指すのに対し、SB9・10・13・41・42は87°～101°西偏して西を指している。また、SB7・8・14・17は65°～77°西偏して西北西を、SB6・11・12・30・49は28°～47°西偏して北北西から北西を指している。以上のように主軸方位に4つのまとまりを認めることができる。なかでも、SB31・32・50はほぼ同じ長軸方向で並んでおり、規則性がうかがえる。なお、SB58はSD19左岸地区ともいえるが、本節で記述する。

土坑は各地区において集中的に構築されていることが読み取れる。右岸1地区では13～14E～Fグリッドと14～16D～Eグリッドに集中が認められ、前者を土坑群2、後者を土坑群3と呼ぶこととする（第27図）。一方、右岸2地区では斜面部付近の16～17E～Fグリッドと22～23B～Cグリッドに集中が認められ、前者を土坑群4、後者を土坑群5と呼ぶこととする。土坑群5はSD1420右岸3地区にまたがるが、便宜的に本節で記述することとする。これらの土坑群は掘立柱建物群の周囲や空白域に構築されていることが特徴であり、場の利用方法を検討する上で重要な意味を持つといえよう。

2）遺物出土状況（図面図版27～35）

SD1420右岸１地区では基本土層が安定し、右岸２地区ではSD1420の覆土が堆積する。Ｄ層からは遺物がほとんど出土しなかった。S5層では13～14E～Ｆグリッドから調査範囲の中で最も多くの遺物が出土した。S4～S3層期では炭化物集中範囲の分布と重なるように多数出土し、掘立柱建物群からほとんど出土しない。また、斜面１の堅果類廃棄範囲や川底のSD1420-23層にも認められた。なお、16～18A～Ｃグリッドではほとんど出土しておらず、遺構も希薄なことを合わせると、SD1420右岸におけるS4～S3層期の集落範囲はこれより西側に広がらない可能性が高い。S2層期では右岸１地区は希薄であり、S2層に対応するSD1420の土層からもわずかに出土したのみである。S1層期では右岸１・２地区とも掘立柱建物群と重なって多量に出土し、SD1420斜面付近にも多く認められた。13～20グリッドにかけてはⅥ層からの出土が目立つ。また、遺物が集中する範囲もいくつか認めることができる。斜面２では堅果類廃棄範囲に伴って木製品も出土した。遺物は西側の調査区外にも続いており、S1層期の集落範囲がさらに西側に広がることは確実である。

B　掘立柱建物

SB4（図面図版76～79、写真図版45～48）

位　置　SD1420右岸１地区の15～16D～Ｅグリッドにあり、掘立柱建物群の陸地側に位置する。

分類・規模　B2類としたが、張り出し主軸柱に当たるSK817には柱根が遺存しておらず、貯蔵穴の可能性もあることから、B3類になる可能性もある。主軸全長10.68m、梁行長3.36m、全体面積33.25㎡であり、本遺跡の中で最も規模が大きい。

柱　穴　柱根は８本遺存し、主軸柱・側柱のすべてに礎板・根絡みを伴う。主軸柱・側柱のうち、下屋側の主軸柱を除く直径は43.6～52.0cmだが、下屋側の主軸柱は37.5cmとやや細いことが特徴である。張り出し柱は共に約24cmで、主軸柱・側柱に比べかなり細い。底面標高も主軸柱・側柱が0.52～0.83mなのに対し、張り出し側柱は0.91～0.98mと浅いが、張り出し主軸柱に当たるSK817は0.85mと深い。柱根の樹種はすべてクリだが、礎板・根絡みにはクリ以外にクヌギ節・コナラ節・ブナ属・アカマツ・ヤナギ属・トネリコ属・ハンノキ節など、多種類の木材が利用されている。

P923は長径約1mの柱穴を持ち、S3層から掘り込まれる。柱穴周囲の土層が柱穴内側に傾いているのは、上部構造の重みによる地盤の沈下により引きずられた結果であろう。木柱設置部分が深く掘り込まれることは、ほかの柱穴と共通する特徴である。礎板は二重に敷かれ、上部の礎板は板状を呈す。根絡みに大形の木材が目立つ。P907は長径1.5mの柱穴を持ち、南側は浅いテラス状となる。覆土上部は噴砂範囲であるFS866（S3層期）の噴砂に覆われる。礎板は東側に密に設置されており、丸太状を呈するものが多い。P868は長径約1.5mの柱穴を持ち、周囲の土層は大きく柱穴内側に傾く。柱根は外周の約1/3が欠け、中央が空洞となる。礎板は５点が設置されているだけだが、柱根を囲む根絡みは柱根の空洞部に縦に打ち込まれたものなど多数の木材が出土した。P920は長径1.36mの柱穴を持ち、北側が浅くなる。礎板は二重で南側に多く設置される。根絡みは柱根を囲むように出土したことが特徴である。P825は長径1.25mの柱穴を持つが、掘り込み位置は確認できなかった。礎板・根絡みともほかの柱穴に比べ少ない。P828は長径0.9mの柱穴で、SK914を切って構築される。礎板は小形の木材が多数重ねられる。以上の主軸柱・側柱の柱根の位置は柱穴の建物内側に寄っており、さらに礎板はP825を除き柱根の外側寄りに多く設置されていることが読み

取れる。このことは、木柱が建物の外側に傾かないように工夫されていたことを示すものと考える。

重複遺構　母屋でSC859（S4層）、ND836・837（S3層）と重なり、下屋部分ではSC838（S3層）とSC864（S4層）の一部が重なる。P868と重なるSC824（S1層）はSB4廃絶後に形成されたものである。このほか、土坑群3のSK875・878・909・914が重なるが、明確に伴うものはない。なお、噴砂範囲のFS849はm-m'セクションをみると、P828の側面を通って地上に噴出したことが観察できる。噴砂は噴出当時の地表面上に堆積するはずであり、FS849はK3層の上でS2層の下に堆積していることから、S3層期に噴出したものと判断した。同じように、FS866はP907のh-h'セクションにおいてK3層上に堆積しており、FS849と同様にS3層期と判断できる。これらの噴砂は木柱が構築されたことによって、地中の圧力を受けた砂層が密閉度の弱い木柱脇を通って噴出したものと考えられる。よって、SB4はFS849・866の噴出時には既に構築されていたことになる。

層　序　液状化による噴砂部分を除きほぼ水平に堆積しており、掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　P923出土の土器No.519はSK914出土土器と接合しており、SK914に廃棄された土器片がP828の構築によって掘り出され、P923に埋められた可能性がある。P825・827・920からも土器片が出土した。P826・923を除く柱穴覆土からはクリ・トチノキ・クルミの果皮が出土した。S4・S3層では遺物はほとんど出土しておらず、S1・Ⅵ層出土遺物も少量である。

構築時期　前述したように、FS849・866の層位解釈からS3層期には構築されていたものと考えられる。そして、P827・868・923がS4層を切り、P828がS4層期所属のSK914を切っていることから、SB4はS3層期に所属するものと判断する。

SB5（図面図版80、写真図版49）

位　置　SD1420右岸1地区の15～16Eグリッドに位置し、SB35と一部重複する。

分類・規模　B1類であり、主軸全長7.24mで、梁行長3.04mである。

柱　穴　9基すべてに柱根が遺存する。柱穴はいずれも柱根より一回り大きい程度である。柱根の直径は14～23.5cmで、張り出し側柱が細いといえる。残存長は80～137.5cmで全体的に根入れが深い。底面標高は0.16～0.6mで、下屋寄りの主軸柱と張り出し主軸柱がやや浅い。柱根の樹種は、P24が単維管束亜属で、これ以外がコナラ節である。

重複遺構　SC870（S4層期）と重なる。

層　序　n-n'セクションではほぼ水平に堆積しており、掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　P922から土器片が出土した。S4・S3層出土遺物は少量で、Ⅵ層出土遺物は濃密に重なる。

構築時期　P885・886はS4層を切っている可能性が高いが、P2284ではS4～S3層が柱穴を覆っており、S4～S3層期に属する可能性が高い。

SB6（図面図版81、写真図版50）

位　置　SD1420右岸1～2地区の16～17D～Eグリッドに位置し、SB9・11と一部重なる。

分類・規模　B3類であり、主軸全長7.2m、梁行長2.96mである。下屋寄りの突出長が著しく短い。

柱　穴　8基すべてに柱根が遺存する。柱根の直径は17～28cm、残存長は36～68cmで短めである。底面標高は0.86～1.05mである。柱根の樹種は、すべてクリである。P919では柱根の周囲及び底面下から多量の土器が折り重なって出土した。おそらく柱穴底面に土器片を敷き、木柱を設置してから周囲に土器片を詰め込んだものとみられる。P883は柱根脇から根固めとして石皿類が出土した。

重複遺構　SC912A（S3層）とわずかに重なる。

層　序　n-n'セクションではほぼ水平に堆積しており、掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　P919から土器（No.529・530・528）、P883から土器片・石皿類（図面図版233-419・424）が出土した。S4・S3層出土遺物は少量で、Ⅵ層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　P961はSD1420-10層を切っていることから、SB6はS1層期に所属することは確実である。

SB7（図面図版82、写真図版50）

位　置　SD1420右岸１地区の17B～Cグリッドにあり、掘立柱建物群の陸地側に位置する。

分類・規模　張り出し側柱を１基確認できなかったが、B3類と考えられる。主軸全長は推定で約7m、梁行長は2.32mである。下屋側主軸柱の突出長が著しく短い。

柱　穴　５基に柱根が遺存する。柱根の直径は９～17cmで、張り出し柱が細い。P948Aは柱根の表皮しか遺存しないが、直径は12cmと推定される。また、P948Bは直径6.3cmの柱根が遺存するが、P948Aとの切り合い関係は不明である。底面標高は主軸柱・側柱が0.58～0.83mでほとんど差がなく、張り出し柱P985のみ1.04mと浅い。柱根の樹種は、P948B・981・1402がクヌギ節、P955がクリ、P985がトネリコ属である。P981はクリとトネリコ属、P985はクヌギ節の根絡みが出土した。

重複遺構　重複する遺構は認められなかった。

層　序　l-l'セクションでは北側の桁行と交わる付近に若干の窪みが認められるものの、明確な掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　P948から土器（No.520）のほか生粘土とクルミが出土した。S4・S3層出土遺物はほとんどなく、Ⅵ層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　P955はS2層を切って構築された可能性が高いことから、SB7はS1層期に所属する可能性がある。

SB8（図面図版83、写真図版51）

位　置　SD1420右岸１～２地区の17Dグリッドに位置する。

分類・規模　B3類である。主軸全長8.64m、梁行長2.44mである。

柱　穴　９基すべてに柱根が遺存する。柱根の直径は18～29.5cmで、主軸柱が太い。底面標高は0.32～0.82mだが、P953が深いのはSD1420の地盤変動により柱根自体が南側に引きずられるように傾斜したためとみられる。P1447はP963と新旧関係が認められず、SB8に伴う可能性がある。また、柱根は細く浅いことから、補助的な柱であった可能性もある。柱根の樹種は、P937・1447がクヌギ節で、これ以外はクリである。

重複遺構　SC957（S4層）が母屋の一部と重なり、SX958（S4～S3層期）も一部重なるが、所属時期が異なり関連はない。

層　序　o-o'セクションでは掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　P953から土器片が出土しているのみである。Ⅵ層出土遺物はSB8の周囲は濃密に出土したが、母屋部分は少ないことから、建物が利用されていたために廃棄行為が行われなかった、あるいは片づけ行為が行われたことが推測される。

構築時期　SD1420右岸２地区に立地することから、S1層期に属する。P952・977がSD1420-4層を切って構築されていることから、SB8はSD1420-3層期以降に構築されたものと考えられる。

SB9（図面図版84、写真図版52）

位　置　SD1420右岸１～２地区の16～17D～Eグリッドに位置する。SB6と一部重なる。

分類・規模　B3類である。主軸全長6.56m、梁行長3.12mである。梁行長が下屋側に向かって短くなることが特徴である。

柱　穴　８基すべてに柱根が遺存する。柱根の直径は12～18.5cmで、全体的に細めである。底面標高は0.54～0.97mで、張り出し柱が浅い。柱根の樹種は、P930がコナラ節で、これ以外がクヌギ節である。

重複遺構　SC944（S4層）・945（S4層）と重複するが、所属時期が異なるため関連はない。下屋部分にSK946が位置するが、関連性は不明である。

出土遺物　柱穴から遺物は出土していない。S1・Ⅵ層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　SD1420右岸２地区に立地することから、S1層期に属する。P1407がSD1420-6a層を切って構築されていることから、SB9はSD1420-5層形成以降に構築されたものと考えられる。

SB10（図面図版85、写真図版52）

位　置　18Dグリッドにあり、SD1420右岸２地区の最も川寄りに位置する。

分類・規模　柱穴２基を確認していないが、A類と考えられる。主軸長3.8m、梁行長2.04mである。

柱　穴　４基に柱根が遺存する。柱根の直径は10～11cmで、全体的に細い。底面標高は0.78～1.04mである。柱根の樹種はP986・987がクヌギ節、P1455がコナラ節である。

重複遺構　重複する遺構は認められなかった。

出土遺物　柱穴から遺物は出土していない。S1・Ⅵ層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　SD1420右岸２地区に立地することから、S1層期に属する。柱穴の切り合い関係からSB10はSD1420-3a層形成以降に構築されたものと考えられる。

SB11（図面図版85、写真図版52）

位　置　SD1420右岸１～２地区の16～17Eグリッドに位置し、SB6と一部重なる。

分類・規模　柱穴２基を確認していないが、A類と考える。主軸長は推定約3.8m、梁行長は2.4mである。

柱　穴　４基に柱根が遺存する。柱根の直径は９～13cmで、全体的に細い。底面標高は0.75～1.04mである。柱根の樹種は、すべてクヌギ節である。

重複遺構　SC950（S3層）と一部重複するが、関連性は低いものと考えられる。

層　序　g-g'セクションでは掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　柱穴から遺物は出土していない。Ⅵ層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　包含層との切り合い関係を捉えることができず、所属時期は不明である。しかし、SB6と同様にSD1420右岸２地区に建物の一部が及んでいることから、S1層期に所属すると考える。

SB12（図面図版85、写真図版53）

位　置　SD1420右岸１～２地区の17～18C～Dグリッドに位置する。

分類・規模　柱穴１基を確認していないがA類と考える。主軸長は推定約4.4m、梁行長2.06mである。

柱　穴　３基に柱根が遺存する。柱根の直径は９～11.5cmで、全体的に細い。底面標高は0.45～0.94mで、P1432のみ深い。柱根の樹種はP980・1462がクヌギ節、P1432は不明である。P980は柱根底面に礎板とみられる木材が設置される。

重複遺構　重複する遺構は認められなかった。

出土遺物　柱穴から遺物は出土していない。S1・Ⅵ層出土遺物が少量のみ重なる。

構築時期　P1432がSD1420-14層を切って構築されていることから、SB12はS1層期に所属する。

SB13（図面図版86、写真図版53）

位　置　SD1420右岸１地区の18B～Cグリッドに位置する。

分類・規模　柱穴１基を確認していないがA類と考える。主軸長は推定約4.2m、梁行長は2.24mである。

柱　穴　４基に柱根が遺存する。柱根の直径は９～11.5cmで、全体的に細い。底面標高は0.36～0.59mで、ほぼ同規模である。柱根の樹種はP1499がタラノキで、これ以外がヤマグワである。P1500は樹皮のみ遺存し、柱根径は12cmと推定される。地盤変動の影響で北側に傾いたものと考えられる。

重複遺構　重複する遺構は認められなかった。P1500はP1498に切られる。

層　序　i-i'セクションでは掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　P1576から土器片が出土している。S1・Ⅵ層出土遺物はあまり重ならない。

構築時期　P1496・1533がSD1420-6a層を切って構築されることから、S1層期に所属する。

SB14（図面図版86、写真図版53）

位　置　SD1420右岸１～２地区の18～19B～Cグリッドに位置する。

分類・規模　B1類である。主軸長5.88m、梁行長2.36mである。

柱　穴　５基に柱根が遺存する。柱根の直径は16～20cmで、樹種はP1471がタラノキ、P1535がヤマグワ、そのほかがクリである。柱穴の底面標高は0.25～0.73mで、張り出し柱が浅い。P1471の柱根下の層序をみると、上部構造の重みによる地盤沈下を認めることができる。P1501は根絡みがあるほか、柱根が南側に傾く。P1534には礎板と根絡みが認められた。

重複遺構　重複する遺構は認められなかった。

層　序　j-j'セクションでは掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　柱穴から遺物は出土していない。Ⅵ層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　SD1420右岸２地区に立地することから、S1層期に属する。柱穴の切り合い関係からSB14はSD1420-6a層形成以降に構築されたものと考えられる。

SB15（図面図版87、写真図版54・55）

位　置　SD1420右岸２地区の19Cグリッドに位置する。SB16・17と一部重なる。

分類・規模　B1類である。主軸全長9.36m、梁行長3.56mであり、SB4に次いで規模が大きい。

柱　穴　９基すべてに柱根が遺存する。柱根の直径は主軸柱が30.5cm・35cm、そのほかが18.5～26.5cmであり、主軸柱が太い。樹種はP1507・1526がヤマグワ、そのほかがクリである。柱穴の底面標高は-0.28～0.28mである。P1519の柱穴は長径76cmと大きく、柱根は建物内寄りの壁近くに設置される。P1524は長径1.41mの楕円形を呈する大きな柱穴で、柱根はやや東寄りに設置される。柱根に近接して板状を呈する大形の根絡み２点が縦に差し込まれるように出土し、ほかにも根絡みが多数出土した。主軸柱は大きな柱穴を伴う点で共通する。P1523は柱根下に石皿類が礎板として用いられていた。P1546・1526からは根絡みが多数出土した。なお、P1531は主軸上に位置する柱穴で、直径23cmのトネリコ属の柱根が出土した。ほかの掘立柱建物と組み合う可能性は低く、SB15に付属する可能性もある。

重複遺構　重複する遺構は認められなかった。

出土遺物　P1546-1層出土土器がSX1583（SD1420-2c～2a層）出土土器と接合し、両極石器が出土した。P1523から土器片と石皿類、P1524から土器片と石鏃が出土した。Ⅵ層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　SD1420右岸２地区に立地することから、S1層期に属する。柱穴の切り合い関係からSB15はSD1420-4a層形成以降に構築されたものと考えられる。

SB16（図面図版88、写真図版55）

位　置　SD1420右岸２地区の19Cグリッドに位置する。SB15・17と一部重複する。

分類・規模　柱穴１基を確認していないが、A2類と考えられる。主軸長3.72m、梁行長2.04mである。

柱　穴　４基に柱根が遺存する。柱根の直径は3.9～10cmで、樹種はP1513がコナラ節で、そのほかがクヌギ節である。柱穴の底面標高は0.37～0.49mであり、差があまりない。

重複遺構　重複する炭化物集中範囲などは認められなかった。

出土遺物　P1582から土器片が出土した。Ⅵ層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　SD1420右岸２地区に立地することから、S1層期に属する。柱穴の切り合い関係からSB16はSD1420-6a層形成以降に構築されたものと考えられる。

SB17（図面図版88、写真図版55）

位　置　SD1420右岸２地区の18～19Cグリッドに位置する。SB15・16と一部重複する。

分類・規模　A2類である。主軸長4.2m、梁行長2.84mである。

柱　穴　６基すべてに柱根が遺存する。柱根の直径は7～14.3cmで、樹種はP1502・1589がクリ、そのほかがヤマグワである。柱穴の底面標高は0.22～0.5mである。

重複遺構　重複する遺構は認められなかった。

出土遺物　P1512から土器片・不定形石器が出土した。Ⅵ層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　SD1420右岸２地区に立地することから、S1層期に属する。柱穴の切り合い関係からSB17はSD1420-6a層形成以降に構築されたものと考えられる。

SB18（図面図版89、写真図版56）

位　置　SD1420右岸２地区の19Bグリッドに位置する。

分類・規模　柱穴を１基検出していないがB3類と考えられる。主軸全長は推定6.36m、梁行長は2.92mである。

柱　穴　６基に柱根が遺存する。柱根の直径は8.5～21cmで、樹種はP1538がクヌギ節、P1558がコナラ節、P1580がヤマグワ、そのほかがクリである。柱穴の底面標高は-0.15～0.23mだが、P1580・1573・1557は地盤変動により柱根が著しく傾斜しているため比較できない。P1558・1572・1580は根絡みを伴う。P1572はP1591とした柱根と接するが、前後関係などは不明である。

重複遺構　SD1420-4b層に所属するSC1492・1493・1486と重複するが、関連性は不明である。

層　序　l-l'・m-m'セクションでは掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　P1557・1578から土器片・不定形石器が出土した。Ⅵ層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　SD1420右岸２地区に立地することから、S1層期に属する。柱穴の切り合い関係からSB18はSD1420-6a層形成以降に構築されたものと考えられる。

SB19（図面図版90、写真図版56）

位　置　SD1420右岸２地区の20B～Cグリッドに位置する。SB20と一部重複する。

分類・規模　A2類である。主軸長4.48m、梁行長2.92mである。

柱　穴　６基すべてに柱根が遺存する。柱根の直径は13～15.5cmとほぼ同規模であり、樹種はP1627がクリ、そのほかがコナラ節である。柱穴の底面標高は-0.36～-0.05mだが、P1627・1631は地盤変動により柱根が傾斜しているため比較できない。P1631は根絡みを伴う。P1617・1629の柱根下の層序では上部構造の重みによる地盤沈下を認めることができる。

重複遺構　重複する遺構は認められなかった。

層　序　j-j'セクションでは掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　P1617から土器片、P1631から石錐が出土した。SD1420-4～３層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　SD1420右岸２地区に立地することから、S1層期に属する。柱穴の切り合い関係からSB19はSD1420-6b層形成以降に構築されたものと考えられる。

SB20（図面図版90、写真図版56）

位　置　SD1420右岸２地区の20B～Cグリッドに位置する。SB19・49と一部重なる。

分類・規模　B3類である。主軸全長5.44m、梁行長2.8mである。

柱　穴　８基すべてに柱根が遺存する。柱根の直径は10.5～19cmで、樹種はP1618・1646・1662・1681がクヌギ節、そのほかがクリである。柱穴の底面標高は-0.22～0.11mだが、P1604・1608・1636・1647の柱根が地盤変動により著しく傾斜しているため比較できない。P1681は根絡みを伴う。

重複遺構　SD1420-2a層に所属するSC1560と重複するが、関連性は不明である。P1615は根絡みのみ出土した柱穴であるが、SB20との関連は不明である。

出土遺物　P1636からクリ・クルミの果皮が出土した。SD1420-4～３層ではSB20の範囲内のみ遺物がほとんど出土しておらず、注目される。

構築時期　SD1420右岸２地区に立地することから、S1層期に属する。柱穴の切り合い関係からSB20はSD1420-6b層形成以降に構築されたものと考えられる。SD1420-4～３層出土遺物（図面図版50）がほとんど重ならないことは、SB20が構築されていたために遺物が廃棄されなかったか、SB20を構築するために既に廃棄されていた遺物の片付けが行われたことにより遺物空白域ができたか、あるいは、これら両方のことが行われた、の３パターンが想定される。

SB28（図面図版91、写真図版57）

位　置　15～16Fグリッドに位置する。SD1420右岸１地区の最も川寄りにあり、SB29と広く重複する。

分類・規模　柱穴１基を検出していないがB3類と考える。主軸全長は推定7.4m、梁行長2.88mである。

柱　穴　７基に柱根が遺存する。柱根の直径は12～20cmで、樹種はP1989がコナラ節、そのほかがクリである。柱穴の底面標高は0.38～0.95mで、主軸柱P2195と張り出し柱P2210が細く浅いといえる。主軸柱が側柱より規模の小さい例は少なく、P1959が主軸柱になる可能性もある。

重複遺構　SC1961（SD1420-3a層）と重複するが、関連性は不明である。

層　序　n-n'セクションでは掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　柱穴から遺物は出土していない。Ⅵ層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　P1936がS2層を切って構築され、ほかの柱穴もS2層以降に構築されたものが多いことから、SB28はS1層期に所属する可能性が高い。

SB29（図面図版92、写真図版57）

位　置　SD1420右岸１地区の15～16E～Fグリッドに位置する。主軸方位は本地区の中で唯一北東方向を指す。

分類・規模　B1類である。主軸全長5.86m、梁行長2.92mである。

柱　穴　９基すべてに柱根が遺存する。柱根の直径は主軸柱が18.6cm・19.5cmで、側柱・張り出し柱は11～14cmと細い。樹種はすべてクリである。柱穴の底面標高も主軸柱が0.47m・0.62mなのに対し、側柱と張り出し柱は0.84～1.16cmと浅く、側柱が主軸柱に比べ規模が小さい例はほかにない。

P1939・1937は根絡みを伴う。P1937・1957・2201・2525は柱根脇に噴砂脈を観察できる。

重複遺構　SC1961・1962（SD1420-3a層）、SC2187（S2層）、SC1933（S1層）と重複するが、関連性は不明である。

層　序　o-o'セクションでは掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　柱穴から遺物は出土していない。Ⅵ層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　P1939・2194がS4層を切って構築され、P2201がS2層を切って構築されていることから、S4層期ではないことがいえる。S1層期に所属する可能性がある。

SB30（図面図版93、写真図版58）

位　置　SD1420右岸1地区の14～15F・15Gグリッドに位置する。SB31・50と重複する。

分類・規模　B類としたが、張り出し柱は用水路工事立会い調査範囲にあることから詳細は不明である。主軸全長は7.9mと推定され、梁行長は3.16mである。

柱　穴　7基に柱根が遺存する。柱根の直径は20.9～26cmで、樹種はすべてクリである。主軸柱・側柱の底面標高は0.45～0.68mでほぼ同規模だが、張り出し柱は底面標高が0.76mと推定され、浅いといえる。P1942・1944・1976・9833の柱根下部に溝状の抉りが認められる。

重複遺構　SC1969（S4層）の一部と重複するが、関連性は不明である。

出土遺物　P1944から土器・両極石器、P1976から土器が出土した。Ⅵ層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　P1944・1946はK2層を切って構築されることから、S2～S1層期に所属する可能性が高い。

SB31（図面図版94、写真図版58）

位　置　SD1420右岸1地区の14～15F～Gグリッドに位置する。SB30と重複する。

分類・規模　B類としたが、張り出し柱は用水路工事立会い調査範囲にあることから詳細は不明である。主軸全長は8.4mと推定され、梁行長は3.48mである。

柱　穴　7基に柱根が遺存する。柱根の直径は主軸柱・側柱が26～30.8cm、張り出し柱P9831が21.5cmであり、張り出し柱が細い。樹種はP1945・2299がコナラ節で、これ以外がクリである。柱穴は柱根に比してやや大きめである。底面標高は0.21～0.62mである。P1951・2506・9831の柱根下部に溝状の抉りが施される。

重複遺構　SC1969（S4層）、SC1971（S4～S3層）が母屋に重なるが、関連性は不明である。

層　序　l-l'セクションでは掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　P2292から土器が出土した。Ⅵ層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　柱穴の切り合い関係からはS4層以降に構築されたこと以外はわからない。

SB32（図面図版95～96、写真図版59）

位　置　SD1420右岸1地区の14E～Fグリッドに位置する。SB42と重複する。

分類・規模　B1類である。主軸全長は8.88m、梁行長3.16mである。

柱　穴　9基すべてに柱根が遺存する。柱根の直径は19～26.6cmだが、底面標高は主軸柱・側柱が-0.1～0.51mで主軸柱P1948が深く、張り出し柱は0.37～0.75mで浅い。P2001は浅い土坑SK2257が付属するが、P1948と同様に柱穴に付属する浅いテラス状の掘り込みの可能性がある。P1964には礎板・根絡みが伴う。柱根の樹種はP2421・2439がクヌギ節、P2338がアカマツ、そのほかがコナラ節である。

重複遺構　SC2000（S5層）、SC2225（S4層）、SC1981（S3層）、SC1982・SC1993・SC2188（S1層）と重複する。また、S5層が上下に分かれるSX2218・2246も重なる。SC2225はP1948に切られ

ており、S4層期以前の遺構は関連がないものと考える。

層　序　o-o'セクションでは掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　P1948・1964・2001から土器片が出土した。S4層出土遺物が少量重なるが、母屋範囲が少ない。Ⅵ層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　P1948がSC2225（S4層）を切っていることから、S3層期以降に構築された可能性が高い。

SB33（図面図版96、写真図版60）

位　置　SD1420右岸１地区の15～16E～Fグリッドに位置する。SB29・34・35と重複する。

分類・規模　A2類である。主軸長は4.65m、梁行長2.48mである。

柱　穴　本来は6基すべてに柱根が遺存していたが、P2208・2193は柱穴の上端を記録した後に起こった水害により流出・滅失してしまい、詳細は不明である。ほかの柱根の直径は11～23cm、底面標高は0.74～0.9mである。柱根の樹種はP1953コナラ節、そのほかがクリである。

重複遺構　SC1966（S3層）と一部重複する。

出土遺物　P2186から土器片が出土した。Ⅵ層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　P1953・2198がS2層を切っていることから、S1層期に構築された可能性が高い。

SB34（図面図版97、写真図版60）

位　置　SD1420右岸１地区の15～16E～Fグリッドに位置する。SB35と主軸方位を同じくして重複する。SB5・33とも重複する。

分類・規模　A2類である。主軸長は5.2m、梁行長2.64mである。

柱　穴　６基すべてに柱根が遺存する。柱根の直径は８～14cm、底面標高はP1934以外が0.65～0.93mだが、P1934のみ0.3mと深くなっている。柱根の樹種はP26・1934がヤマグワ、そのほかがクヌギ節である。

重複遺構　SC1966（S3層）と重複する。

層　序　n-n'セクションでは掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　柱穴から遺物は出土していない。Ⅵ層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　P1952・2010がS4層を切っているので、S3層以降である可能性は高い。また、P1938がS2層を切っていることからS1層期に構築された可能性もある。

SB35（図面図版97、写真図版60）

位　置　SD1420右岸１地区の15～16E～Fグリッドに位置する。SB33・34と重複する。

分類・規模　柱穴２基を検出していないが、A類とした。主軸柱P2202の突出長が短いことから、A2類の可能性が高い。主軸長は4mと推定され、梁行長2.4mである。

柱　穴　４基に柱根が遺存する。柱根の直径は15～19cm、底面標高は0.76～0.87mであり、ほぼ同規模といえる。柱根の樹種はすべてクリである。P2009・2011の柱根は半割材が用いられている。

重複遺構　SC1966（S3層）と重複する。

層　序　n-n'セクションでは掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　柱穴から遺物は出土していない。Ⅵ層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　P2205がS2層を切り、P2011もK2層を切ることから、S1層期に構築された可能性が高い。

SB41（図面図版98、写真図版61）

位　置　13Fグリッドに位置する。SD1420右岸１地区の最も北側に位置し、中央地区と接する。

分類・規模　C類である。桁行長4.4m、梁行長3.24mであり、ほとんど歪みのない長方形を呈す。

柱　穴　4基すべてに柱根が遺存する。柱根の直径は17.5～23cm、底面標高は0.78～0.84mであり、ほぼ同規模といえる。柱根の樹種はP1949がヤマグワ、P2277がクリ、そのほかがコナラ節である。

重複遺構　SC2427（S5層）と重複する。

層　序　i-i'セクションでは掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　P1980から土器（No.521）が出土し、S3層出土土器と接合した。S4層出土土器は少量で、S3層土器はほとんど重ならない。Ⅵ層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　P1980はS2～S1層が柱穴上を覆っていることから、S4～S3層期以前の可能性がある。しかし、基本層位が不分明のため時期は明確ではない。

SB42（図面図版98、写真図版59・60）

位　置　SD1420右岸1地区の14E～Fグリッドに位置する。SB32と重複する。

分類・規模　A2類である。主軸長4.36m、梁行長2.68mである。

柱　穴　5基に柱根が遺存する。柱根の直径は10.5～15cm、底面標高は0.8～1.18mで、ほぼ同規模といえる。P1947・1974は柱根が大きく傾斜する。柱根の樹種はP1999・2280がクヌギ節、そのほかがヤマグワである。

重複遺構　SC2000（S5層）、SC1981（S3層）、SC2188（S1層）と重複する（図面図版96）。また、S5層のSX2218・2246も重なるが、各柱穴がS5層を切っていることから関連がないものと考える。

層　序　図面図版96o-o'セクションでは掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　柱穴から遺物は出土していない。Ⅵ層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　P1947・1999の切り合い関係から、SB42はS2～S1層期に所属する可能性がある。

SB49（図面図版99、写真図版61）

位　置　SD1420右岸2地区の20Bグリッドに位置する。SB20と一部重複する。

分類・規模　B1類である。主軸全長6.28m、梁行長2.84mである。

柱　穴　8基に柱根が遺存する。柱根の直径は14.6～25.5cm、底面標高は-0.45～0.45mである。P1466・1675の柱根は地盤変動により柱穴から浮き上がって横倒しになったものとみられる。P1466の南側で出土したP1467・1468はこの根絡みと考えられる。また、P1675の西側にあるP1602もこの根絡みと考えられる。b-b'エレベーション図をみると、柱根は規模・レベルともほぼ同じであることが分かる。ただし、張り出し主軸柱のみ浅い。柱根樹種はすべてクリである。

重複遺構　SC1561（SD1420-3a層）の一部と重複する。

層　序　l-l'セクションでは掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　P1601・1602・1603・1607から土器が出土した。SD1420-4～3層ではSB49の範囲内のみ遺物がほとんど出土しておらず、注目される。

構築時期　SD1420右岸2地区に立地することから、S1層期に属する。柱穴の切り合い関係からSB49はSD1420-4a層形成以降に構築されたものと考えられる。SD1420-4～3層出土遺物とほとんど重ならないことは（図面図版50）、SB49が構築されていたために遺物が廃棄されなかったか、SB49を構築するために既に廃棄されていた遺物の片付けが行われたことにより遺物空白域ができたか、あるいは、これら両方のことが行われた、の3パターンが想定される。ただし、同じ特徴を持つSB20と重複しているが新旧関係は不明である。

SB50（図面図版100、写真図版62）

位　置　14～15Fグリッドにあり、SB31・32の中間に同じ主軸方位で位置する。SB30と重複する。

分類・規模　柱穴１基を検出していないが、B1類と考えられる。主軸全長8.56m、梁行長2.92mである。

柱　穴　柱根は遺存していない。柱穴の上端長径は32～66cmであるが、底面標高は0.75～0.97mであり大きな差はない。断面形は上位が開く漏斗状が多く、木柱が抜き取られたものと考えられる。また、覆土は堆積形状がすべてレンズ状で、シルトブロックや炭化物集中範囲が混在しており、埋め戻しの可能性を指摘できる。P1977も断面形・堆積状況がほかと類似しており、内部から出土したクリ材も上端が平らで腐食も著しいことから、不要となった木材を廃棄したものと考えられる。

重複遺構　SC2004（S4層）、SC1997（S1層）と重複する。

出土遺物　P1977・1998・2179から土器が出土した。P1998から生粘土が出土した。S4層出土遺物がわずかに重なり、Ⅵ層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　柱穴の切り合い関係からはS4層以降に構築されたこと以外不明である。

SB58（図面図版106、写真図版70）

位　置　10A・Bグリッドにあり、集落範囲から外れた位置で検出された。

分類・規模　柱穴３基のみで不明だが、A類の可能性がある。梁行長1.6mである。

柱　穴　遺存する柱根３基がすべてトネリコ属であり、同一の掘立柱建物と判断した。柱根の直径は７～18cm、底面標高は0.66～0.76mである。いずれも掘形は認められない。

構築時期　周辺から遺物が出土しておらず不明である。

C　土　　坑

1）土坑群２（図面図版101・104、写真図版63・64・68）

SK2228　13E24グリッドに位置する。上端長径72cm、深度22cmである。覆土は底面直上８層に均質な黒褐色土が堆積することが特徴である。磨石類・不定形石器が出土した。構築時期は不明である。

SK2235　13F9・10グリッドに位置する。上端長径は約92cmと推定され、深度は15cmである。覆土は底面直上にS4層から続く炭化物を含む土層が堆積する。土器・石核・生粘土が出土した。構築時期は切り合い関係からS4層期と考えられる。

SK2253　13F15グリッドに位置する。上端長径66cm、深度17cmである。覆土は底面直上５層に均質な黒褐色土が堆積することが特徴である。４層出土土器がS4層出土土器と接合したほか（No.587）、構築時期は不明である。

SK2272　13F5グリッドに位置する。上端長径45cm、深度22cmである。覆土６層に多量のクルミ内果皮や炭化物・土器を含む腐植土が厚く堆積するが、土坑内に廃棄されたものの可能性が高い。構築時期は不明である。

SK2279　13F10グリッドに位置する。上端長径は56cmと推定され、深度18cmである。覆土は底面直上５層に均質な黒褐色土が堆積することが特徴である。また、炭化物を多量に含む４層は、隣接するSC2252（S4層）の可能性が高い。５層出土土器がSC2266出土土器と接合した。以上から、構築時期はS4層期の可能性が高い。

SK2287　14F1グリッドに位置する。上端長径34cm、深度3.5cmだが、本来はこれより規模が大きい。覆土は底面直上３層に均質な黒褐色土が堆積することが特徴である。構築時期は不明である。

SK2319　13F18・19グリッドに位置する。上端長径50cm、深度35cmである。覆土は底面直上12層に均質な黒褐色土が堆積することが特徴である。構築時期は不明である。

SK2423　13F10グリッドに位置する。上端長径31cm、深度13cmである。覆土は底面直上５層に均質な黒褐色土が堆積し、４層は炭化物を多量に含む。構築時期は不明である。

SK2441　14F16・17・21・22グリッドに位置する。上端長径108cm、深度16cmである。覆土はシルト層のみで形成される。SC1992（S1層）と重複するが、SK2441の検出はS4層であることや、覆土にこれを由来とする炭化物層が認められないことから、構築時期はS4～S2層期の可能性が高い。

SK2453　14F6・7・11グリッドに位置する。上端長径180cm、深度52cmである。平面形は不整形であるが、下端は楕円形を呈する。断面形は袋状を呈するが、a-a'セクション北東側のⅦｄ層が土坑内に落ち込むように傾斜することから、地盤の移動による形状変化も認められる。注目されるのは、底面上に長さ30～50cmの竹笹類が底面全面に敷かれた草敷土坑である。この草材は上下２段に角度を変えて認められ、間にはシルト・砂のほか、小枝や樹皮が含まれる。また、下端の縁辺まで達しているものが多く、壁の崩落も認められないことから、構築当初から底面全体に敷かれていたものと考えられる。縁辺部には完形のクルミ内果皮が数個遺存するほか、草材上に割れたクリ果皮もわずかに認められた。土坑内からこれ以外の遺物は出土していない。草材より上位の覆土は、砂粒を多量に含むシルト層が厚く堆積した後に黒褐色土が形成されている。この黒褐色土はほかの土坑に特徴的な黒褐色土に類似するものの、底面直上に形成されない点が大きく異なる。花粉分析においてもほかの土坑と異なる結果が得られている（関連諸科学編第Ⅱ章１参照）。これより上位はシルト層・黒褐色土層・腐植土層が厚く堆積する。SC2223（S4層）と一部重複し、SK2453上面から完形土器が出土した（図面図版111）。本遺構はこの下から検出されており、S4層期までに構築され、Ｄ層～S5層期に収まる可能性がある。

2）土坑群３（図面図版101・102、写真図版64～66）

SK817　15E2・7グリッドに位置する。上端長径113cm、深度55cmである。下端には窪みが２か所認められる。覆土はブロック状に堆積していることが特徴で、上位に炭化物を多量に含むシルト層が堆積する。また、7層は噴砂脈と考えられる。遺物は8・6・4・3・2層からクルミ内果皮が少量出土したほかは土器片のみである。SC864（S4層）と重複するものの、S2層以下を切って構築されていることから、S1層期に構築された可能性が高い。ただし、SB4の張り出し側柱の中間に位置することから、SB4構築期に張り出し主軸柱があった可能性もあるが、柱根が遺存していないことから不明である。

SK851　15D5グリッドに位置する。上端長径51cm、深度9cmである。覆土は底面直上４層に均質な黒褐色土が形成され、その上に炭化物を含むシルト層が堆積する。４層から完形のクルミ内果皮が１点出土した。S3層を切って構築されていることから、S2～S1層期に所属する可能性がある。

SK853　14E3グリッドに位置する。上端長径50cm、深度13cmである。覆土は底面直上３層に均質な黒褐色土が形成されることが特徴である。SC808（S4層）と重複し、覆土１層がSC808である可能性が高いことから、S4層期までに構築された可能性がある。

SK854　14E15グリッドに位置する。上端長径73cm、深度21cmである。覆土は底面直上３層に均質な黒褐色土が形成されることが特徴である。５・４・２層から完形のクルミ内果皮が合計10点出土した。SC814（S4層）と重複するが、SK854の覆土である可能性もあり、所属時期は不明である。

SK873　15D25グリッドに位置する。上端長径62cm、深度11cmである。覆土は１層のみだが、半

割のクルミ内果皮と多量の生粘土が出土した。所属時期は不明である。

SK874　15E8グリッドに位置する。上端長径42cm、深度12cmである。覆土２層から遺物は出土していない。１層はS3層期の噴砂とみられることから、構築時期はS4～S3層期と考えられる。SK874は埋没していない状態で噴砂に覆われたものと考えられる。

SK878　15D20・25グリッドに位置する。上端長径59cm、深度16cmである。覆土は底面直上３層に均質な黒褐色土が形成されており、クルミ内果皮（完形4、半割4）が出土した。切り合い関係からS2～S1層期に構築されたものと考えられる。

SK887　15E9・14グリッドに位置する。上端長径56cm、深度14cmである。覆土はシルト層で形成され、３層から半割のクルミ内果皮１点が出土した。構築時期は不明である。

SK893　15E5グリッドに位置する。上端長径は約40cmと推定され、深度は9cmである。覆土は底面直上３層に均質な黒褐色土が形成されることが特徴である。３・２層から完形のクルミ内果皮が合計３点出土した。覆土は噴砂脈により切られる。所属時期は不明である。

SK899　16E1グリッドに位置する。上端長径82cm、深度13cmである。覆土は底面直上４層に均質な黒褐色土が形成されることが特徴である。４層から完形１点、３層から完形２点・半割１点のクルミ内果皮が出土した。所属時期は不明である。

SK900　16D21グリッドに位置する。上端長径38cm、深度2cmである。調査時に遺構上部を削平したが、浅い土坑であったものと考える。覆土は底面直上に均質な黒褐色土が形成される。所属時期は不明である。

SK909　15D18・23グリッドに位置する。上端長径72cm、深度20cmである。覆土は底面直上２層に均質な黒褐色土が形成されることが特徴である。２層から完形１点、１層から半割４点のクルミ内果皮が出土した。所属時期はS2～S1層期と考えられる。

SK910　15E6グリッドに位置する。上端長径62cm、深度19cmである。覆土は底面直上５層に均質な黒褐色土が形成される。４層は腐植土が多量に混入し、完形１点・半割９点のクルミ内果皮や土器片が出土した。所属時期は不明である。

SK914　15E3グリッドに位置する。上端長径104cm、深度55cmである。覆土は全体的にシルト層と砂層が混在し、クリ果皮が多量に含まれる。ほかの土坑のようには層序が明確に分かれず、ブロック状に堆積することが特徴である。また、各層から半割のクルミ内果皮が多数出土した。９・８・６層から出土した土器No.519がSB4-P923出土土器と接合していることや、覆土の状態から、短期間に埋め戻された可能性が高い。SB4-P828に切られていることや図面図版79q-q'セクションからS4層期に構築されたものと考える。

SK941　16D20グリッドに位置する。上端長径53cm、深度15cmである。覆土５層は黒褐色土とシルトがブロック状となる。４層は樹皮や葉などからなる腐植土が多量に混入し、３層は完形のクルミ内果皮１点が出土した。また、２層から生粘土塊が多量に出土したが、生粘土は円盤状の塊が埋められていた可能性がある。所属時期は不明である。

3）土坑群４（図面図版102・104、写真図版66・68）

SK1932　16E24グリッドに位置する。上端長径84cmと推測され、深度40cmである。覆土は底面直上９層に均質な黒褐色土が形成され、完形のクルミ内果皮１点が出土した。８～５層は黒褐色土とシル

トが混在し、完形・半割のクルミ内果皮とクリ果皮が少量出土した。4層はその大半が炭化物であり、土器・石器と完形5点・半割10点のクルミ内果皮が出土した。所属時期はS4～S3層期と考えられ、SD1420上端近くに構築されていたものとみられる。

SK2190　16E3・4グリッドに位置する。上端長径71cm、深度30cmである。断面形は袋状を呈し、覆土はいずれもシルトを主体とする。遺物は出土していない。所属時期はS4層期以降と考えられるが、SD1420との距離はSK1932と類似する。

SK2221　16～17Fグリッドに位置する。上端長径122cm、深度29cmである。覆土11～9層の大半は腐植土であり、多量の木材と半割のクルミ内果皮が合計88点出土した。7・6層から土器が出土し、SD1420-2a層出土土器と接合した。底面直上9層に均質な黒褐色土が形成され、8～5層も黒褐色土とシルトが混在する。これらの層はSD1420-2a～1層から続いており、所属時期もその頃と考えられる。よって、SD1420斜面2の上端近くに構築されていたものとみられる。

SK2276　17F12グリッドに位置する。SD1420斜面2で検出されたもので、上端長径38cm、深度15cmである。底面直上にナラガシワ果皮が多量（覆土半分で36点）に詰まった状態で出土した。果皮はほぼ完形で若干つぶれているものの、果実が残っていた可能性がある。底面標高は0.56mと低いことから、水漬けによる灰汁抜きや保存のために埋められていた可能性が高い。所属時期はSD1420-1c層以降である。

4）土坑群5（図面図版103、写真図版66・67）

SK1632　22C1・2グリッドに位置し、SD1745のS1層期の底面上で検出された。上端長径84cm、深度24cmである。覆土6層は底面直上に人為的に砂が敷かれ、その上に黒褐色土が形成されている。遺物は出土していない。所属時期はSD1420-1b層以降である。

SK1661　22B17グリッドに位置し、SD1745のS1層期の底面上で検出された。上端長径144cm、深度26cmである。覆土はシルトを主体とし、2層から廃棄されたものとみられるクリ果皮が多量に出土した。所属時期はSD1420-2b層以降である。

SK1678　22C4・5グリッドに位置し、SD1420右岸斜面3で検出された。上端長径105cm、深度27cmである。底面上にシルト層を挟み黒褐色土が形成されており、12～10層でクリ果皮がわずかに出土した。SD1420-2a層を切って構築されており、所属時期はSD1420-1層以降である。

SK1691　22B19グリッドに位置し、SD1745のS1層期の底面上で検出された。上端長径147cm、深度35cmである。覆土は底面上に腐植土・シルトが水平に堆積する。7層出土土器（No.834）はSD1420-1b層出土土器と接合した。所属時期はSD1420-1層上面から検出されていたことから、1層以降の可能性が高い。

SK1696　22B1・6グリッドに位置する。上端長径40cm、深度5cmである。遺構上端は調査中に削平された。底面上の黒褐色土層から生粘土が出土した。所属時期はSD1420-2c層以降である。

SK1701　22B2・7グリッドに位置する。上端長径40cm、深度5cmである。遺構上端は調査中に削平されている。底面上の黒褐色土層から生粘土が出土した。所属時期はSD1420-2d層以降である。

SK1714　23B16・21グリッドに位置し、SD1420右岸斜面3で検出された。上端長径100cm、深度43cmである。覆土は底面上に黒褐色土8・7層が形成され、8層からクリ果皮・トチノキ種皮と完形7点・半割18点のクルミ内果皮が出土した。クリ廃棄層SX1685を切り、所属時期はSD1420-1d層以

降である。

SK1734　23B～Cグリッドに位置し、SD1420右岸３地区で検出された。上端長径94cm、深度12cmである。覆土は底面上に黒褐色土層が形成され、５層から完形６点・半割３点のクルミ内果皮が出土した。所属時期はSD1420-2c層以降である。

5）その他の土坑（図面図版103、写真図版67・68）

SK983　17B7・12グリッドに位置する。上端長径31cm、深度7cmである。覆土は底面上に黒褐色土層が形成される。所属時期は不明である。

SK1463　18D2グリッドに位置する。上端長径80cm、深度15cmである。覆土上位に炭化物を含む層が堆積する。土器・磨石類・赤漆塗り糸玉片などが出土した。所属時期は不明である。

D　埋設土器（図面図版105、写真図版69）

SH1418　17D6グリッドに位置する。長径39cmの土坑中央に口径11cmの完形の甕形土器（No.523）が逆位の状態で埋められていた。本来、土坑の規模はこれより大きかったが、調査による削平で小さくなっている。ほかに出土遺物はない。所属時期は不明である。

13E出土土器　13E11-4グリッドから出土した浅鉢形土器（No.670）である。S4層からS3層にかけて正位の状態で出土し、底部～口縁部が残る。意図的なものかどうかは不明である。

参考資料P772　13E8・9グリッドで出土した大形の甕ないし深鉢である。横位の状態で南側が口縁部側である。S4層期に廃棄された土器の内部にS4～K3層が器外と同じレベルで堆積する。また、Ⅵ層も認められることから、器面上位はⅥ層形成期まで地上に露出していた可能性を示す資料である。

E　柱穴列・柱穴（図面図版105・106、写真図版68～70）

SA1　20～21Cグリッドにおいて、柱穴７基がSD1420のS1層期の上端に平行するようにほぼ直線的に並んで検出された。このうち５基に柱根が遺存し、その直径は４～14cmである。樹種はクリ・タラノキ・ヤナギ属が用いられている。柱穴の間隔は1.2～3.8mと不規則だが、この間にも柱穴が存在していた可能性がある。これ以外に隣接するP1707・1713も柱根が細く、打ち込み杭の可能性が高いことから、SA1に関連する可能性がある。所属時期はS1層期のSD1420-2c層以降である。機能は不明だが、SD1420左岸のS1層期の上端付近にも同様の柱穴列SA2がSA1とあたかも対峙するかのように平行に構築されていることが注目される。

柱穴　P1472・2244・2330・2430はSD1420右岸１地区に位置し、これら以外はSD1420右岸２地区に位置する。P1472は礎板に礫が用いられる。P1626・1635・1637は20B～Cグリッドに近接し規模も類似するが、関連性は不明である。P1658・1679は木柱が抜き取られた大形の柱穴で、根絡みを伴う。P1679は覆土上面がSC1642（SD1420-2a層）に覆われており、構築時期はSD1420-2c～2b層である。また、20Bグリッドの暗渠掘削中にP1470の上面のみを検出したが、柱根が遺存しておらず、大形の柱穴の可能性が高い。これら３基が同一の掘立柱建物を構成し、調査区外に伸びる可能性がある。なお、P927は集落から外れた13B6グリッドで検出され、SB58と同じトネリコ属の柱根である。

F　炭化物集中範囲（図面図版107～110、写真図版71～73）

SC801・776　SD1420右岸1地区の13Eグリッドでは、S4層期の炭化物集中範囲が多数検出された。SC801は長径10.5mの大規模なもので、炭化物の濃密範囲が8か所認められた。V7からは生粘土ND835が炭化物と混在するように出土した。SX855は10E10グリッドで検出したSX743と同様の褐色砂や顔料粒などを含むシルト範囲である。遺物は多数出土し、特に赤漆塗り糸玉1点とその破片が多数出土したことが注目される。S3層期ではSC776・773がSC801とほぼ重なるように検出された。SC776からはND778・779が出土した。また、赤漆塗り糸玉片も出土している。以上の炭化物集中範囲は、生粘土と赤漆塗り糸玉が出土する点が特徴といえよう。

SC864・838　SD1420右岸1地区の15EグリッドではS4～S3層期の炭化物集中範囲が多数検出された。S4層期のSC864は長径6.8mで、濃密範囲を持つ。出土遺物は赤漆塗り糸玉片のほかクルミ内果皮片が多数出土した。S3層期のSC838は全体に濃い炭化物が堆積し、クルミ内果皮片が出土した。

SC863・912A・912B　SD1420右岸1地区の16～17Dグリッドで検出された。S4層期のSC863は土器・生粘土やクルミ内果皮が出土した。また、SC912BとS3層期のSC912Aは同じ位置に形成されている。SC912Aには粗い砂粒が含まれることが特徴で、S3層期の噴砂の可能性もある。

SC1517・1482・1529・1483　SD1420右岸2地区の18～19C～Dグリッドにおいて、SD1420の上端に平行するように炭化物集中範囲が認められた。SC1517は長径17mの大規模な炭化物集中範囲であり、SD1420-2a層に属する。遺物は多量の土器・石器のほか、赤漆塗り櫛や赤漆塗り糸玉片が出土した。18E3・4グリッドでは多数の炭化物集中範囲が重なって検出された。SD1420-2c層期にSC1483が形成された後、2b層を挟み2a層期にSC1529が形成される。この直下には褐灰色を呈するND1537がある。また、SC1482は濃密範囲が2か所認められ、このうちV1の直下にはND1488・1494が認められる。ND1537・1494はいずれも被熱により褐灰色に変色したものと推定され、炭化物も多量に含むことから、この上で火を焚いていたことを示すものと考える。

SC1680・1664・1645・1668・1628・1597・1644・1643　21C～DグリッドSD1420右岸2地区から斜面2において、SD1420-2c層からB9層に所属する炭化物集中範囲が重なるように検出された。SC1680・1664・1645・1597は全体的に炭化物が濃く、下部は褐色に変色し、灰のような土壌が堆積する。この場で火が焚かれたものと考える。出土遺物は少ない。

SC1677・1666・1665・1634　21BグリッドのSD1420右岸2地区から斜面2において、SD1420-2a層と1b層に所属する炭化物集中範囲が重なるように検出された。SC1677→SC1666→SC1665→SC1634の順に形成される。全体的に炭化物が濃く、褐色に変色したシルトを含み、灰のような土壌が堆積する。この場で火が焚かれたものと考える。出土遺物は少ない。

G　堅果類廃棄範囲・性格不明遺構（図面図版111～115、写真図版74～76）

SX2249・2251、ND2254・2267　14～15E～FグリッドのSD1420右岸1地区において、SX2251（S4層）、SX2249（S3層）が重なるように検出された。SX2251は腐食が進んだトチノキ種皮とクルミ内果皮を含み、赤漆塗り糸玉片も出土した。また、この上面と周辺のS4層に完形に近い甕・深鉢がつぶれた状態で出土したことも特徴である。SX2249もトチノキ種皮とみられる堅果類を含むほか、腕輪状漆製品が出土したことが注目される。出土土器はSC777（S3層）出土土器と接合した。また、ND2254

（S3層）がSX2249の内部に認められ、ND2267（S3層）は隣接して検出された。

SX2528・2197・2196　16～17Fグリッドの SD1420右岸斜面１において、S4～S3層期に属するSX2528・2197・2196を検出した。SX2528は長さ9.8m、幅2.8mにわたり、トチノキ種皮を主体とし、クリ果皮・クルミ内果皮がわずかに含まれる。SX2197・2196もトチノキ種皮を主体とするが、廃棄密度は低い。a-a'セクションでは各廃棄層の所属時期を特定することはできないが、同じ場所に厚く堆積することから、連続的に廃棄行為が行われたものと考えられる。なお、ほかの遺物は多く出土していない。

SX958　17D～Eグリッドの SD1420右岸斜面１において、S4～S3層に所属するSX958を検出した。長さ14.4m、幅2.5mの範囲に廃棄層９層が形成される。このうち、６～４・２・１層に堅果類果皮が多量に認められた。いずれもクリ果皮を主体とし、トチノキ種皮・クルミ内果皮も少量含まれる。クリ果皮・トチノキ種皮は完形に近いものが多い。３層は黄褐色砂を含み、堅果類は少ない。９～７層は腐植土で堅果類はほんのわずかである。各廃棄層では土器・石器の出土量は多くはないが、籠類２点（図面図版291-316・317）が出土し、SD1420-16層出土の籠類（図面図版292-318）もこれに伴う可能性が高い。このほか、赤漆塗り糸玉・木製品が出土した。セクションをみると、６～１層は薄く安定して堆積しており、水流の影響は弱かったものとみられる。

SX2185・2184・2182・1987・1986　16～17Fグリッドの SD1420右岸斜面２において、SD1420-2b層からB8層に属するSX2185・2184・2182・1987・1986を検出した。SX2185（SD1420-2b層）は長さ9.8m、幅3mにわたり、トチノキ種皮を主体とし、クリ果皮・クルミ内果皮も多く含まれる。SX2184（SD1420-2a層）は長さ12m、幅5.1mにわたり、クリ果皮・トチノキ種皮・クルミ内果皮とも多い。SX2182（SD1420-1b層）は長さ1.8m、幅1.6mにわたり、トチノキ種皮が多く、クリ果皮・クルミ内果皮がわずかに含まれる。SX1987（SD1420-1a層）は長さ9.2m、幅6.9mにわたり、クリ果皮・トチノキ種皮・クルミ内果皮とも多い。SX1986（SD1420-B8層）は長さ5.2m、幅4.5mにわたり、トチノキ種皮が多く、クリ果皮・クルミ内果皮がわずかに含まれる。クリ果皮は完形に近い形で遺存するものが多く、果皮を粉々に破砕しないで果実を取り出したものと考えられる。各廃棄層では土器・石器の出土量は多くはない。また、SX1986を除き赤漆塗り糸玉片も出土した。a-a'セクションでは廃棄層は同一箇所に形成されるものの、廃棄行為の行われない層位も多く断続的に廃棄行為が行われたものと考えられる。

SX1583・1528　18～21C～Eグリッドの SD1420右岸斜面２において、SX1583（SD1420-2c～2a層）とSX1528（SD1420-B7層）を検出した。SX1583は長さ26.4m、幅3.8mの範囲にわたり、腐植土や土器・石器を多く含むが、堅果類は少ない。木製の櫂（No.240）が出土した。SX1528は長さ23.2m、幅6.4mの範囲にわたり、３・１層が腐植土を多量に含む土層で、クリ果皮をわずかに含む。木製の櫂（No.242）が出土した。セクションでは表れていないが、廃棄層の南側下端はSD1420の変形により垂直に近い角度で落ち込んでいた。いずれの廃棄範囲も堅果類が集中的に廃棄されたものではなかろう。

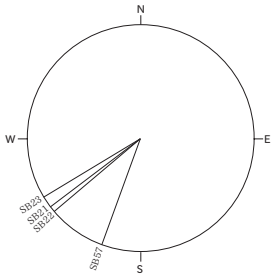
SX1596　21～22B～Cグリッドの SD1420右岸斜面２において、SX1596（SD1420-2c層）を検出した。長さ20.2m、幅7mの範囲にわたり堅果類の廃棄が認められた。クリ果皮を主体とし、トチノキ種皮・クルミ内果皮も少量含む。ほかの遺物は少なく、赤漆塗り糸玉片が出土した。SD1420右岸斜面３にあるSX1689と同時期にクリ果皮が集中的に廃棄されたものとみられる。

6　SD1420右岸３地区の遺構

A　概　　要

1）遺構の分布（図面図版12・13）

本地区の遺構は掘立柱建物３棟（柱穴24基）・土坑24基・ピット８基・炭化物集中範囲28か所・堅果類廃棄範囲９か所を検出した。遺構配置は、23～24B～Cグリッドに掘立柱建物が主軸方位を西南西～南西にして検出され（第31図）、その中央及びSD1420斜面３に土坑が集中的に構築される。炭化物集中範囲は掘立柱建物に重なるものとそれ以外のものがあり、堅果類廃棄範囲はSD1420斜面３の同一範囲に集中的に検出された。土坑は掘立柱建物より北側のものと、掘立柱建物に囲まれるように構築された２群を認めることができ、前者を土坑群5、後者を土坑群６とする（第27図）。土坑群５についての記述はSD1420右岸１・２地区で行っている。土坑群６は切り合い関係が少なく、その多くがSD1420-1層～B9層に構築され同時存在していた可能性があり、集中的な貯蔵が行われていたことも推測される（本編第Ⅶ章３参照）。また、覆土も底面上に黒褐色土が堆積することや、それより上位が自然堆積によるシルト層と腐植土層が互層となる堆積パターンをとることも共通する。炭化物集中範囲及び堅果類廃棄範囲はSD1420-2層に所属するものが非常に多いことが特徴である（図面図版34）。なお、本地区で埋設土器は検出されていない。



第31図　SD1420右岸３地区の掘立柱建物主軸方位

2）遺物出土状況（図面図版34・35）

本地区の遺物包含層はSD1420-2～１層及びB9～B7層が整然と堆積する。特に掘立柱建物の内部への廃棄が顕著である。SD1420-2層期ではSB23内部に遺物が濃密に認められ、SB21もSD1420-2層～B7層まで継続的に廃棄が認められる。一方、SB22は各期とも遺物量が少ないことが特徴である。いずれも掘立柱建物の構築時期を推定する上で重要な指標となろう。なお、B9～B7層出土土器は２～１層出土土器と接合するものも多く、土坑の構築などによる廃土の二次堆積も含まれている可能性がある。25Bグリッドより南側は遺物がほとんど出土せず、むしろ西側の調査範囲外に濃密に広がることが明らかである。

B　掘立柱建物

SB21（図面図版116、写真図版79）

位　置　23Bグリッドにあり、SB22とほぼ同じ主軸方位で隣接する。

分類・規模　柱穴２基を検出していないが、B3類と考えられる。主軸全長は5.24mと推定され、梁行長2.48mである。３基の側柱において２～３基の柱根が重複ないし隣接しているが、主軸柱と張り出し柱では重複が認められないことから、ほかの掘立柱建物との重複は考えにくい。

柱　穴　合計10点の柱根が遺存する。柱根の直径は11～15cm、底面標高は-0.55～-1.05mである。P1736はP1725に切られP1726を切って構築されているが、時期差を示すかどうかは不明である。なお、柱根の年輪解析により、P1740の柱根の最終年輪はP1721・1725・1743より２年新しく、追加

が行われたことが指摘されている（関連諸科学編第Ⅶ章２参照）P1720は根絡みを伴う。柱根樹種はP1719がクリ、P1736がハンノキで、これ以外がクヌギ節である。

重複遺構　SC1703（SD1420-1a層）とわずかに重複する。

層　序　k-k'セクションでは掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　柱穴から遺物は出土していない。SD1420-2～１層出土遺物がやや重なり、B9～B7層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　P1721-1層がSD1420-2a層に相当することから、構築時期はSD1420-2b層期で、１層期には廃絶されていた可能性が高い。

SB22（図面図版117・118、写真図版79）

位　置　23・24B、23Cグリッドにあり、SB57と重複する。

分類・規模　柱穴１基を検出していないが、B1類と考えられる。主軸全長7.8m、梁行長2.6mである。

柱　穴　８基に柱根が遺存する。柱根の直径は16～28.5cmであり、主軸柱が太い。底面標高は-0.68～-1.33mだが、P1729・1750はSD1420の変形により原位置より深くなったものと考えられる。P1846はSK1751に切られているが、遺存する柱根上端面はSK1751底面に沿う形状となっており、土坑構築の際に削られたか、あるいは切断された可能性を指摘できる。柱根樹種はすべてクリである。

重複遺構　母屋範囲において複数層にわたりほぼ同一か所に多数の炭化物集中範囲と生粘土範囲が重なる。SD1420-2c層でSC1748、2a層でSC1747・SC1744・SC1742・ND1731・ND1733、１層でSC1722・ND1730・ND1850、B9層でSX1717である。r-r'セクションをみると、SC1748-1層は極めて薄い灰色シルトを数層挟んでいることから、短期間に炭化物層が幾度か形成されたと考えられる。南側では25cmほどの落ち込みを観察できるが、平面プランは検出できなかった。SD1420-2b層では炭化物集中範囲が認められない。SC1747は１層中に薄い間層とオリーブ褐色土を観察できる。また、２層は灰色シルトが被熱により黄褐色に変色した可能性が高い。いずれもこの場で火が焚かれた可能性が高いことを示すものと考えられる。SX1717は炭化物集中範囲とシルトブロックを含む褐灰色シルト層が厚く堆積するもので、自然堆積のような葉理は認められず人為的な堆積土と考えられる。

層　序　o-o'セクション及びs-s'セクションでは掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　P1846から土器片が出土した。SD1420-2層出土遺物は母屋においてほとんど重ならず、１層もわずかである。B9～B7層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　P1846はSD1420-2c層期に構築され、SD1420-1層期に構築されたSK1751によって切られている。以上から、SB22はSD1420-2c～2a層期に収まるものと考えられ、当該期の出土遺物との重なりが少ないこともこれを支持する。当該期の炭化物集中範囲と生粘土がこれに伴う可能性が高いが、SB57に伴う可能性を否定できない。本掘立柱建物に重なる遺構の変遷はSB22・SB57・SD1420-2c～2a層期のSCとND→SK1751（SD1420-1層）→SX1717（SD1420-B9層）となる。

SB23（図面図版119、写真図版81）

位　置　24B～C、25Bグリッドにあり、SD1420右岸の最も南側に位置する掘立柱建物である。

分類・規模　柱穴２基を検出していないがB3類と考える。主軸全長は推定6.3m、梁行長は2.24mである。

柱　穴　６基に柱根が遺存する。柱根の直径は13.5～16.5cm、底面標高は-0.62～-1.12mである。k-k'セクションのようにSD1420の変形の影響を受けて柱根は傾斜するものが多く、全体的に東側で深くなっている。柱根樹種はP1810・1830がクリ、P1816がコナラ節で、これ以外がクヌギ節である。

重複遺構　SC1801（SD1420-2b層）、SC1768・ND1779（SD1420-2a層）、SC1769（SD1420-1層）と重複する。SC1768は炭化物とシルトブロックを含む土層が厚く堆積し、土質はSX1717に類似する。全体的に遺物量が多い。また、24B19グリッドでは上面に楕円形の黄褐色粘土が堆積するのが認められ、コイ科などの骨片が多量に含まれていた。

出土遺物　柱穴から遺物は出土していない。SD1420-2層出土遺物が濃密に重なり、1層及びB9～B7層出土遺物はほとんど重ならない。

構築時期　P1816層がSD1420-2b層を切って構築されていることから、構築時期はSD1420-2b層期以降と考えられる。SC1768は建物外に大きくはみ出しており、SB23に伴う可能性は低いと考える。

SB57（図面図版117・118、写真図版80）

位　置　24Bグリッドにあり、SB22と重複する。

分類・規模　柱穴3基を検出していないが、A類と考えられる。梁行長は1.6mである。

柱　穴　2基に柱根が遺存する。柱根の直径は6.5～10.5cmと細く、底面標高は-0.36～-0.27mである。柱根樹種はP1811がアカマツ、P1847がクリである。

重複遺構　SB22と同じ多数の炭化物集中範囲や生粘土範囲が重複する。

層　序　s-s'セクションでは掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　柱穴から遺物は出土していない。SD1420-2層出土遺物はほとんど重ならず、1層もわずかである。B9～B7層出土遺物が濃密に重なる。

構築時期　P1848はSD1420-1層期に構築されたSK1751によって切られることから、SB57はSD1420-2c～2a層期に収まるものと考えられる。なお、SB22はSD1420-2c層期には構築されていることを考慮すれば、SB57はこれより後に構築された可能性がある。当該期の炭化物集中範囲と生粘土がこれに伴う可能性があるが、掘立柱建物B類に炭化物集中範囲が明確に伴う例が認められないことを重視すれば、SB57に伴う可能性が示唆されよう。

C　土坑・ピット

1）土坑群 6（図面図版120・121、写真図版82～84）

SK1751　24B16・21グリッドに位置する。上端長径140cmと推測され、深度33cmである。底面上に黒褐色土10層が形成され、半割のクルミ内果皮が6点出土した。SB22-P1846とSB57-P1848を切って構築され、SX1717により覆われていることから、SD1420-1層期に構築されたものと考えられる。

SK1760　24B17・18・22・23グリッドに位置する。上端長径56cm、深度23cmである。底面上に黒褐色土6層があり、完形のクルミ内果皮が1点出土した。所属時期はSD1420-2a層遺構である。

SK1763　24B11グリッドに位置する。上端長径75cm、深度40cmである。底面上に黒褐色土9層があり、完形のクルミ内果皮が7点出土した。これより上位の腐植土層から完形11点・半割5点のクルミ内果皮が出土した。SX1717を切って構築されており、SD1420-B9層期に所属する。

SK1764　24B7グリッドに位置する。上端長径115cm、深度36cmである。底面上に黒褐色土14層があり、完形1点・半割2点のクルミ内果皮が出土した。これより上位層からも完形クルミ内果皮合計34点が出土した。SD1420-1層期に所属する。

SK1765　24B12・17グリッドに位置する。上端長径145cm、深度18cmで浅い。底面上に黒褐色土は認められず、遺物もほとんど出土していない。所属時期はSD1420-1層以降である。

SK1766　24B13グリッドに位置する。上端長径86cm、深度37cmである。黒褐色土11層から半割のクルミ内果皮が２点出土した。８層からは板材（No.276）が出土した。所属時期はSD1420-1層である。

SK1770　24B10グリッドに位置する。上端長径65cm、深度24cmである。黒褐色土11層から完形のクルミ内果皮が１点出土した。所属時期はSD1420-1層である。

SK1774　24～25Bグリッドに位置する。上端長径114cm、深度25cmである。黒褐色土８層からクルミ内果皮が出土した。SD1420-2a'層に覆われていることからSD1420-2b層期に所属する。

SK1781　24A～Bグリッドに位置する。上端長径100cmと推定され、深度29cmである。黒褐色土９層から完形のクルミ内果皮が５点出土し、８～５層からも完形品８点・半割３点を含む。所属時期はSD1420-1層以降である。

SK1783　24B14グリッドに位置する。上端長径120cm、深度28cmである。黒褐色土９層からトチノキ種皮・クルミ果皮片が出土した。所属時期はSD1420-B9層である。

SK1784　24B18・23グリッドに位置する。上端長径68cm、深度37cmである。底面直上に薄く粗砂12層が敷かれる。黒褐色土11層から完形のクルミ内果皮が２点出土した。所属時期はSD1420-1層である。

SK1802　24Bグリッドに位置する。上端長径128cm、深度34cmである。９層から完形のクルミ内果皮が２点出土した。所属時期はSD1420-1層以降である。

SK1803　25B1グリッドに位置する。上端長径80cmと推定され、深度32cmである。黒褐色土は形成するが、遺物は出土しない。所属時期はSD1420-2c層以降である。

SK1807　24B19グリッドに位置する。上端長径143cm、深度32cmである。底面直上に薄く粗砂８層が敷かれる。黒褐色土７層から遺物は出土しない。所属時期はSD1420-B9層である。

SK1808　24B8・９グリッドに位置する。上端長径80cm、深度15cmである。黒褐色土11層から遺物は出土せず、10層から完形のクルミ内果皮が１点出土した。所属時期はSD1420-2c層以降である。

SK1820　24B22グリッドに位置する。上端長径50cm、深度8cmで、浅く小さい。底面上に黒褐色土は認められず、遺物も出土しない。所属時期はSD1420-2b層以降である。

SK1828　24B5グリッドに位置する。上端長径49cm、深度10cmで、浅く小さい。底面上に黒褐色土は認められず、遺物も出土しない。所属時期はSD1420-2b層以降である。

2）その他の土坑・柱穴（図面図版121・122、写真図版83・84）

SK1786　最も南側に位置する。上端長径120cmと推定され、深度8cmである。底面上に黒褐色土は認められない。２層から完形５点・半割434点のクルミ内果皮が出土した。多くのクルミ内果皮は利用後に廃棄されたものであろう。所属時期はSD1420-2a層以降である。

柱穴　P1812は24B4グリッドに位置し、２本の柱根（クリ・コナラ節）が遺存する。調査区外に伸びる掘立柱建物を構成するものとみられる。P1815は柱根（ブナ属）が遺存するものの、腐食が進み残存長が短い。P1842は側面が加工された木材（スギ）であり、柱根かどうかは不明である。

D　炭化物集中範囲・生粘土（図面図版122、写真図版84）

SC1794・1787、ND1755・1806　24～25Bグリッドにおいて、SD1420-2c層～１層に所属する

炭化物集中範囲が検出された。SC1787は炭化物の密度が低く、SD1420-2c層に所属する。SC1794はSD1420-2a層に所属し、中央に細かな焼骨を含むにぶい橙色粘土が直径70cmほどの円形に堆積する。ND1755・1806は共にSD1420-1層に所属し、砂粒が混入する。

E　堅果類廃棄範囲（図面図版123、写真図版85）

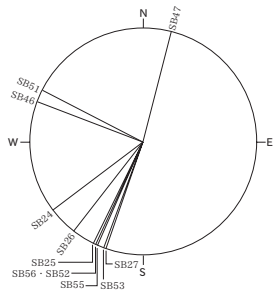
SX1689・1688・1687・1686・1685・1684　22～23B～CグリッドのSD1420右岸斜面3において、SD1420-2c層～2a'層に属する堅果類廃棄範囲を検出した。SX1689（SD1420-2c層）は長さ12.9m、幅3.7mの範囲にわたり、クリ果皮が多量に出土し、トチノキ種皮・クルミ内果皮もやや含まれる。SX1688（SD1420-2b'層）は長さ7.9m、幅3.8mの範囲にわたり、クリ果皮が多く、トチノキ種皮・クルミ内果皮は少量である。SX1687（SD1420-2b層）は長さ6.9m、幅4mの範囲にわたり、クリ果皮が多量で、クルミ内果皮も多いがトチノキ種皮はわずかに過ぎない。SX1686（SD1420-2a'層）は長さ11.7m、幅6.8mにわたり、クリ種皮・クルミ内果皮が多量に出土したが、トチノキ種皮は微量である。SX1685（SD1420-2a'層）は長さ11.8m、幅4.8mの範囲にわたり、全体的に量は前述の遺構より少なくなるが、クリ果皮・クルミ内果皮が多く、トチノキ種皮はわずかである。SX1684（SD1420-2a'層）は長さ8.8m、幅3.8mの範囲にわたり、全体量は少ないが、クリ・クルミ果皮が多く、トチノキ種皮はわずかである。クリ果皮は完形に近い形で遺存するものが多く、果皮を粉々に破砕しないで果実が取り出され、廃棄されたものと考えられる。各廃棄層では土器・石器の出土量は多くはない。SX1688から漆塗り弓、SX1686から簾状編物、SX1685から赤漆塗り糸玉・漆塗り腕輪が出土した。土壌水洗によりすべての廃棄層から漆塗り糸が採取された。以上から、SD1420-2層期に継続的かつ集中的にクリ果皮が廃棄されたものと考えられる。

7　SD1420左岸地区の遺構

A　概　　要

1）遺構の分布（図面図版14・15）

本地区の遺構は掘立柱建物11棟（柱穴61基）・土坑6基・ピット55基・埋設土器1基・炭化物集中範囲32か所・堅果類廃棄範囲15か所を検出した。本地区は他地区に比べ土層の堆積スピードが速く、遺構の所属層位が明確なものが多いことが特徴である。遺構配置は、掘立柱建物が23Fグリッドに集中し、これらと重なるように炭化物集中範囲が多数検出されたほか、埋設土器1基がある。ほかにも掘立柱建物を構成するとみられる多数の柱穴があるが、試掘トレンチによる遺構滅失により詳細は不明である。掘立柱建物は24～25Fグリッドにも構築されるが、これより南には認められない。掘立柱建物の主軸方位は、西北西（SB46・51）、南西（SB24・26）、南南西（SB25・27・52・53・55・56）、北北東（SB47）に分けることができ、SD1420の上端に平行するものが多いといえる（第32図）。土坑は23Fグリッドに集中が認められ、これを土坑群7とする（第27図）。しかし、全体的には数が少ない。堅果類廃棄範囲はSD1420左岸斜面2の全域に渡り検出されたが、斜



第32図　SD1420左岸地区の掘立柱建物主軸方位

面１ではごくわずかである。

2）遺物出土状況（図面図版36 ・ 37）

本地区の遺物包含層はSD1420-E18 ～ E5層が整然と堆積する。遺物はSD1420-E14層で少量だが、E12層及びE10層で炭化物集中範囲に伴って多くなる。E8層で遺物量が減少する。E6層及びE5層はそれぞれ①～③層に細分が可能で、各層から炭化物集中範囲と多量の遺物が検出された。斜面１では遺物がほとんど出土しないが、斜面２ではE6 ・ E5層で堅果類廃棄範囲に伴って多量の遺物が出土し、E4層からも遺物が出土した。なお、E12 ・ E14層に所属する遺物がE6 ・ E5層出土土器と接合する例が多くみられた。これは、同一地点で遺構が繰り返し築かれたため、下層の遺物が遺構廃土に混入して上層に再堆積したものと考えられる。26Fグリッドから南側は遺物がほとんど出土せず、むしろ東側の調査範囲外に濃密に広がることが明らかである。

B　掘立柱建物

SB24（図面図版124、写真図版87）

位　置　22 ～ 23Fグリッドにあり、SB25 ・ 26と重複する。

分類・規模　柱穴１基を検出していないが、B2類と考えられる。主軸全長7.2m、梁行長2.84mである。

柱　穴　８基に柱根が遺存する。柱根の直径は張り出し側柱P2046が10.4cmと細く、ほかは17 ～ 21.6cmである。底面標高は0.13 ～ 0.44mである。P2046は礎板・根絡みを伴うほか、P2040 ・ 2063 ・ 2080は根絡みを伴う。柱根樹種はP2046がクヌギ節で、ほかはクリである。

重複遺構　SC2354（SD1420-E12a層）、SC2346（SD1420-E10層）、SC2036（SD1420-E6c②層）、SC2033（SD1420-E5c③層）が重なる。

層　序　n-n'セクションでは掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　柱穴から遺物は出土していない。SD1420-E6層及びE5層出土遺物がわずかに重なる。

構築時期　P2080はSC2033を切って構築されていることから、SB24はSD1420-E5c①層期に構築された可能性が高い。重複する炭化物はすべて伴わないと考えられる。

SB25（図面図版125、写真図版88）

位　置　23Fグリッドにあり、SB24 ・ 26と重複する。

分類・規模　A1類である。主軸長3m、梁行長2.26mである。

柱　穴　６基に柱根が遺存する。柱根の直径は8.8 ～ 13cmである。底面標高は-0.13 ～ 0.17mである。柱根樹種はすべてクヌギ節であり、すべてに樹皮が残っている。

重複遺構　SC2354（SD1420-E12a層）、SC2346 ・ SX2366（SD1420-E10層）、SC2036（SD1420-E6c②層）、SC2033（SD1420-E5c③層）が重なる。SC2354 ・ 2346はほぼ同じ位置で濃密な炭化物が認められた。SX2366は微細な骨片が集中して出土した範囲である。

出土遺物　柱穴から遺物は出土していない。SD1420-E6層及びE5層出土遺物がわずかに重なる。

構築時期　P2083は覆土上をSC2036に覆われていることから、SB25はSD1420-E6c③層期に構築された可能性が高い。重複する炭化物はすべて伴わないと考えられる。

SB26（図面図版126 ・ 127、写真図版89）

位　置　23 ～ 24Fグリッドにあり、SB24 ・ 25 ・ 51 ・ 52と重複する。

分類・規模　柱穴１基を検出していないが、B1類と考えられる。主軸全長8.63m、梁行長3mである。

柱　穴　７基に柱根が遺存する。柱根の直径は20.5～27.5cmである。底面標高は0.06～0.5mである。P2060・2089・2374は根絡みを伴う。P2060・2071・2074は地盤変動により柱根が大きく傾斜する。柱根樹種はすべてクリである。

重複遺構　SC2096・2354・2359（SD1420-E12a層）、SC2095・2346（SD1420-E10層）、SX2090・2366（SD1420-E10層）、SC2036・2042（SD1420-E6c②層）、SC2032・2033（SD1420-E5c③層）が重なる。SC2096は濃密な炭化物で、赤漆塗り糸玉片が出土した。SC2042・2032はほぼ同じ位置にあり、SC2042には被熱により変色したとみられる黄褐色粘土が混入する。SX2090は堅果類果皮と共に微細な骨片が出土した。

層　序　a-a'・b-b'・c-c'セクションでは掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　P2074から土器が、P2076から土器・生粘土が出土した。SD1420-E6層及びE5層出土遺物がわずかに重なる。

構築時期　P2374の切り合い関係から、SB26はSD1420-E6c①層期以降に構築された可能性が高い。SC2032・2033が伴うか否かは不明である。

SB51（図面図版125・127、写真図版88）

位　置　23Fグリッドにあり、SB26・52と重複する。

分類・規模　柱穴１基を検出していないが、A2類と考えられる。主軸長4.12m、梁行長2.36mである。

柱　穴　柱根は遺存しない。柱穴の上端長径は14～25cm、底面標高は0.16～0.5mである。P2390の覆土２層にはクリ果皮とみられる植物遺体が含まれる。

重複遺構　SC2096・2359・2360（SD1420-E12a層）、SC2095・SX2090（SD1420-E10層）、SC2042・2043（SD1420-E6c②層）、SC2032（SD1420-E5c③層）が重なる。

層　序　i-i'セクションでは掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　柱穴から遺物は出土していない。SD1420-E6層及びE5層出土遺物がわずかに重なる。

構築時期　P2378の切り合い関係から、SB51はSD1420-E10層期以降に構築された可能性がある。また、いずれの柱穴もSD1420-E10層以下から検出されたこともこれを支持する。

SB52（図面図版126・127、写真図版89）

位　置　23～24Fグリッドにあり、SB26・51と重複する。

分類・規模　柱穴１基を検出していないがA類と考える。主軸長は4.1mと推定され、梁行長2.8mである。

柱　穴　３基に柱根が遺存する。柱根の直径は７～11.5cm、底面標高は-0.07～0.22mである。

重複遺構　SC2096（SD1420-E12a層）、SC2095・SX2090（SD1420-E10層）、SC2042（SD1420-E6c②層）、SC2032（SD1420-E5c③層）が重なる。

層　序　a-a'・b-b'・c-c'セクションでは掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　柱穴から遺物は出土していない。SD1420-E6層及びE5層出土遺物がわずかに重なる。

構築時期　P2375はc-c'セクションによりSD1420-E13a～12a層に所属する可能性が高いことから、SB52も同様の時期と考えられる。

SB27（図面図版128、写真図版91）

位　置　24E～Fグリッドにあり、SB53と重複する。

分類・規模　A2類である。主軸長4.08m、梁行長2.88mである。

柱　穴　6基に柱根が遺存する。柱根の直径は12.5～16cm、底面標高は-0.36～-0.11mである。P2386・2389・2399・2401は根絡みを伴う。

重複遺構　SX2398・ND2402（SD1420-E12a層）が重なる。SX2398は土器・赤漆塗り糸玉片・トチノキ種皮・クルミ内果皮・骨片が出土した。

層　序　q-q'・r-r'セクションでは掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　柱穴から遺物は出土していない。SD1420-E12層出土遺物が多数重なる。

構築時期　P2403はSD1420-E12a層が覆土1層を覆うように堆積していることから、E12a層以降に構築された可能性が指摘できる。また、SD1420-10層より上層で検出された柱穴を含まないことから、SB27はSD1420-E12～E10層に所属する可能性が高いと考える。さらに、E12層期に建物内にのみ遺物が残されていることは、この時期に構築されていたことを示唆する。SX2398はSB27の範囲内にほぼ収まり、所属層位がSD1420-E12a層であることから、SB27に伴う可能性がある。

SB53（図面図版128、写真図版91）

位　置　24Fグリッドにあり、SB27と重複する。

分類・規模　柱穴を1基検出していないが、C類と考えられる。桁行長2.92m、梁行長1.84mである。

柱　穴　3基に柱根が遺存する。柱根の直径は6～12cm、底面標高は-0.06～0.07mである。

重複遺構　SX2398・ND2402（SD1420-E12a層）が重なる。

層　序　q-q'・r-r'セクションでは掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　柱穴から遺物は出土していない。SD1420-E12層出土遺物が多数重なる。

構築時期　P2364・2385はSD1420-E10層以降に構築された可能性があるほか、柱穴の底面標高が低いことから、SD1420-10層期に構築された可能性がある。SX2398はSB53に伴う可能性は低いと考える。

SB46（図面図版129、写真図版92）

位　置　25Fグリッドにあり、本地区の南端に位置する。

分類・規模　A2類である。主軸長2.08m、梁行長1.2mであり、規模が非常に小さい。

柱　穴　7基に柱根が遺存する。柱根の直径は7.5～10.8cm、底面標高は-0.13～0.22mである。P2461では噴砂脈を観察できる。

出土遺物　柱穴から出土していない。SD1420-E6層及びE5層出土遺物が掘立柱建物内部にのみ重なる。

構築時期　柱穴の切り合い関係から、SB46はSD1420-E8層以降に構築されたもの考えられる。また、E5層期に建物内部にのみ遺物が認められることは、E6～E5層期頃に構築されていた可能性を示唆する。

SB47（図面図版129、写真図版92）

位　置　25E～Fグリッドにあり、本地区の南端に位置する。

分類・規模　柱穴を1基検出していないが、A2類と考えられる。北側の梁行中央に柱穴1基を持つ。主軸長5.16m、梁行長1.92mである。

柱　穴　6基に柱根が遺存する。柱根の直径は8～15cm、底面標高は-0.03～0.18mである。P2470とP2471との新旧関係は不明である。

出土遺物　柱穴から出土していない。SD1420-E6層及びE5層出土遺物が掘立柱建物内部にのみ重なる。

構築時期　P2471・2482はSD1420-E8層以降に構築されたものと考えられることから、SB47も同様の時期の可能性が高い。さらに、SD1420-E6層及びE5層出土遺物が建物内にのみ重なることを重視す

れば、SD1420-E6～E5層期に所属する可能性がある。

SB55（図面図版130、写真図版93）

位　置　24Eグリッドにあり、SB56と重複する。

分類・規模　主軸部分を暗渠で削平されたため詳細は不明だが、P1791を除き柱穴規模が類似していたことから掘立柱建物と認定し、便宜的にC類とする。桁行長4.4m、梁行長2.4mである。

柱　穴　3基に柱根が遺存する。柱根の直径は13～18.5cm、底面標高は-1.05～-0.2mである。P1791は柱根の現存長149cmで非常に深いが、f-fセクションではSD1420の層位が大きく変形していることから、地盤変動により沈下した可能性も考えられる。柱根の樹種はP1823がクヌギ節、そのほかがクリである。

重複遺構　SX1776（SD1420-E6b層）、SC1775（SD1420-E4c層）が重なる。

層　序　o-o'セクションは液状化で層序が乱れており、掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　柱穴から遺物は出土していない。SD1420-E6～E4層出土遺物が重なる。

構築時期　柱穴の切り合い関係から、SB55はSD1420-E5層以降に構築された可能性が高い。

SB56（図面図版130、写真図版93）

位　置　24～25Eグリッドにあり、SB55と重複する。

分類・規模　主軸部分を暗渠で削平されたため詳細は不明だが、柱穴規模が類似していたことから掘立柱建物と認定し、便宜的にC類とする。桁行長3.14m、梁行長2.56mである。

柱　穴　3基に柱根が遺存する。柱根の直径は8～17cm、底面標高は-0.17～0.1mである。柱根の樹種はP1793がコナラ節、P1804がトネリコ属、P1824がヤマグワである。

重複遺構　SX1776（SD1420-E6b層）、SC1775（SD1420-E4c層）が重なる。

層　序　o-o'セクションは液状化で層序が乱れており、掘り込み・付属施設などは認められない。

出土遺物　柱穴から遺物は出土していない。SD1420-E6～E4層出土遺物が重なる。

構築時期　柱穴の切り合い関係から、SB56はSD1420-E5層以降に構築された可能性が高い。

C　土　　坑

1）土坑群 7（図面図版131、写真図版94）

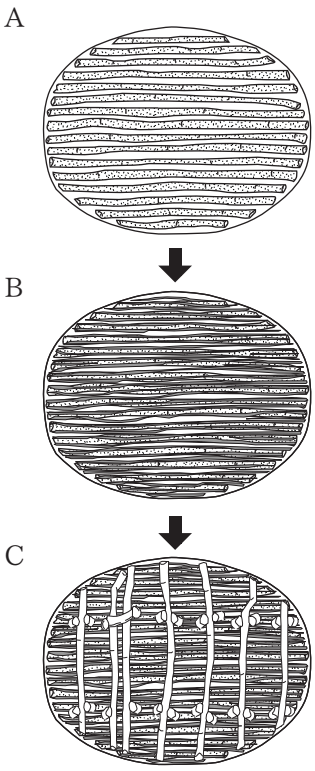
SK2073　23F4グリッドに位置する。上端長径67cm、深度5cmで、上部の大半が失われている。本来はもっと深度があったことを考慮すれば、SD1420-E6～E5層期に構築された可能性が高い。

SK2365　23F3グリッドに位置する。上端長径52cm、深度28cmで、黒褐色土12層が認められる。構築時期はSD1420-E13a層以降だが、深度からSD1420-E13～E10層期に収まる可能性が高い。

SK2371　23F4グリッドに位置する。上端長径72cm、深度3cmで、遺構の大半が失われている。底面上に黒褐色土が堆積するが、遺物は出土していない。構築時期はSD1420-E12a層以降のものだが、深度が浅いことからSD1420-E6～E5層期に構築された可能性が高いと考える。

SK2372　23F2・3・8グリッドに位置する。上端長径120cm、深度46cmで、底面は楕円形を呈す。底に二重に枝材を敷いて固定したいわゆる草敷土坑である。その構造は、第33図のように、A：下段にヤナギ属の枝材を土坑の長軸方向に敷き並べ、B：この上にマタタビ属の2年目の蔓材を同一方向に重ねて敷き詰める。そして、C：これらを固定するために蔓材と直行してヤナギ属の枝材1～2本を15～20cmの間隔に6列置き、これを上から挟み込むように同じ枝材の留め具が打ち込まれている。底面西

側については調査時に削平してしまったが縁辺部にわずかに残ることから底面全面に草材が敷かれていたのであろう。また、下段の枝材は蔓材と同じように底面全面に敷き詰められていたようである。覆土は黒褐色土11層が敷き材の上に堆積し、上位は自然堆積によるシルト層と腐植土層が互層となる堆積パターンをとる。出土遺物は11層からトチノキ種皮がわずかに出土したのみである。覆土の花粉分析によると、ほかの土坑と同様に黒褐色土からクルミ花粉が多量に出土することが指摘されており、土坑機能を検討する上で重要である。クルミなどの果実が貯蔵されていたとすれば、枝材は果実に砂が付着しないように工夫されたものとも考えられる。構築時期はSD1420-E12a層以降だが、深度からSD1420-E13～E10層期に収まる可能性が高いと考える。



第33図　SK2372底面の施設構造

2）その他の土坑（図面図版131・132、写真図版94・95）

SK2015　21F19グリッドに位置する。上端長径105cm、深度53cmである。黒褐色土22層からトチノキ種皮がわずかに出土した。SD1420-E4a層期に構築されたものと考えられる。

SK2077　22F18・23グリッドのセクション断面において検出された。断面形は台形状を呈し、深度は40cmを測る。SD1420の変形に伴う地割れとも考えられ、遺構でない可能性がある。

SK2350　24F17・18グリッドに位置する。上端長径82cm、深度3cmで、上部が失われている。黒褐色土1層から完形のクルミ内果皮が5点出土した。所属層位は深度を考慮するとSD1420-E6層～E5層期の可能性が高い。

P2392　23F5グリッドに位置する。上端長径20cm、深度32cmである。断面形及び底面以下の土層下方に沈んでいることから、掘立柱建物の柱穴を貯蔵穴に再利用したものと考える。断面では底面から10cmほどの間を空けて完形のトチノキ種皮が少なくとも24個を観察できる。また、遺構半截時に手前の覆土半分から18個が出土しており、トチノキ種実とクルミ果実の両者を貯えていたようである。

D　柱　穴　列（図面図版132、写真図版95）

SA2　22Fグリッドにおいて、柱穴9基がSD1420左岸のS1層期の上端に平行するように並んで検出された。これ以外に隣接するP2023・2029も柱根が細く、打ち込み杭の可能性が高いことから、SA2に関連する可能性がある。上端長径は3～24cm、深度は8～42cmである。柱根は2基に遺存し、樹種はP2023がスギ、P2024がエゴノキである。柱穴の間隔は0.2～2mと不規則だが、柱根を検出できなかった可能性もある。所属時期はSD1420-E6b層以降である。機能は不明だが、SD1420右岸2地区にも同様の柱穴列SA1があり、これと対峙するかのように平行に構築されていることが注目される。

E　埋 設 土 器（図面図版133、写真図版96）

SH2088　23F11グリッドに位置する。口径39cmの深鉢形土器（No.1058）が逆位にSD1420-E7

層からE13層にかけて口縁部が埋まった状態で検出された。土器の底部～体部下半が土器内部に崩落しており、完形の状態で埋設されたものと考えられる。b-b'セクションでは、北側に断面U字形の掘形が認められるが、南側は認められず、ピットと重複する可能性もある。構築時期はSD1420-E6c③層期以降である。

F　柱　　穴（図面図版133、写真図版96）

掘立柱建物に認定できなかった主な柱穴を取り上げる。掲載したもののうち、P2075が23Eグリッド、P2038・2064・2078・2079・2081・2084・2356・2476が23Fグリッド、P2469・2478・2483が27Fグリッドに位置する。P2038は地盤の液状化により柱根が横倒しとなったものとみられる。柱根の樹種はトネリコ属である。SB24の内部に位置するが、関連性は不明である。P2064はSD1420の変形に伴って柱根が傾斜したものであろう。柱根の樹種はオニグルミである。P2078・2079は土層断面の観察で検出されたものである。いずれも小規模なものだが、周囲の土層との切り合い関係が明瞭であり、P2078がSD1420-E6c③層期に、P2079がSD1420-E5c③層期以降に所属する。このほかの柱根の樹種は、P2084がトネリコ属、P2469・2476がヤマグワ、P2478がヤナギ属、P2483は不明である。

G　堅果類廃棄範囲（図面図版134～136、写真図版97・98）

SX2018・2020・2035　21～23Fグリッドの SD1420左岸斜面２において、SD1420-E6b層～E5c層に属する堅果類廃棄範囲を検出した。SX2020（SD1420-E6b層）は長さ12.5m、幅4mの範囲にわたる。廃棄層は6層に細分でき、このうち１・２・４層から遺物が出土した。堅果類はトチノキ種皮が多量に出土したほか、クリ果皮・クルミ内果皮が若干含まれる。また、土器・石器・漆糸が出土したほか、樹皮が巻き付けられた瓢箪型の異形礫（図面図版242-570）が出土した。

SX2035（SD1420-E6b層）は長さ13.5m、幅1.35mの範囲にわたって検出されたが、標高0mまでの掘削規制範囲であったことから、北側の下方に続く範囲の調査を行っていない。堅果類はトチノキ種皮が多量で、クリ果皮・クルミ内果皮は微量である。

SX2018（SD1420-E5c層）は長さ9.6m、幅5.6mの範囲にわたるが、堅果類はほとんどなく、土器・石器・漆糸などが出土したのみである。SX2018・2020はトチノキ種皮が多く、クリ果皮が少ない。なお、SD1420左岸地区では赤漆塗り糸玉が出土していないが、土壌水洗により漆糸が多数検出されたことから、本地区においても赤漆塗り糸玉などがあった可能性が指摘される。

SX2092・2353・2370　23Fグリッドの SB24の南東側において、SD1420-E12a層及びE10層に属する堅果類廃棄範囲を検出した。SX2353（SD1420-E12a層）は長さ2.3m、幅1mの範囲にわたり、クリ果皮が多量に出土したほか、トチノキ種皮・クルミ内果皮が出土した。また、土器・石器・漆糸・粘土が出土した。SX2092（SD1420-E10層）はSX2353と平面的に重なるように検出された。長さ1.5m、幅0.8mの範囲にわたる。出土した堅果類は不明である。SX2370（SD1420-E12a層）はSC2359の上に重なって検出された。長さ2.2m、幅1.7mの範囲にわたり、少量のトチノキ種皮・クルミ内果皮が出土した。以上の堅果類廃棄範囲は陸地に形成されたものであり、場の利用状況を推定する上で重要である。

SX1702・1776・1780・1785　22～26Eグリッドの SD1420左岸斜面２で、SD1420-E6b層に属する堅果類廃棄範囲を検出した。SX1702は長さ44.4m、幅4.8mの非常に長い範囲にわたり遺物が多量に

出土した。土器・石器の量が多く、堅果類はSX1776・1780・1785とした範囲から集中的に出土した。SX1776ではクリ果皮が多量に出土し、SX1780はクリ果皮・トチノキ種皮が共に多量に出土した。SX1785はトチノキ種皮がわずかにである。このほか、SX1702からは籠類（図面図版291-315）と網代（図面図版291-314・図面図版292-319）が出土した。SX1702はSX2020と連続するとみられ、SD1420-E6層期に河川へ広範な廃棄活動が行われたことを示す。

SX1835・1837・1841　24～25Eグリッドの SD1420左岸斜面１において、SD1420-E12a層及びE10層に属する堅果類廃棄範囲を検出した。SX1841（SD1420-E12b層）は長さ1.1m、幅0.9mの範囲にわたり、トチノキ種皮・クルミ内果皮がわずかに出土した。また、土壌水洗により漆糸が検出された。SX1835（SD1420-E10a層）は長さ0.9m、幅0.6mの範囲にわたり、トチノキ種皮が出土した。SX1837（SD1420-E10a層）は長さ1.3m、幅0.3mの範囲にわたり、多量のクリ果皮が出土し、トチノキ種皮が若干含まれる。

H　木造施設・木製品（図面図版135～138、写真図版97～98）

草壁材（図面図版136・137）　24E5・10、25E1・2・6・7グリッドのSD1420左岸斜面２のSD1420-E5b層において、長さ3.6m、幅2.3mの範囲から枝材と草材を組み合わせた木造施設を検出した。出土地点は緩やかに西側に傾斜する。斜面部の上位に位置する。東側は標高が高いため、腐蝕が進んでいる。

図面図版137のＡ範囲では、長さ10～60cm、幅１～2cmの竹笹類が約1.3mの幅で並び、これと平行して上に20～25cm間隔でヤナギ属の枝材を４列置き、この枝材と直行して12～14cmの間隔に同じヤナギ属の枝材が６列重なっている。この木造施設は、宮本長二郎氏により掘立柱建物の壁材と推定された（本編第Ⅶ章１参照）。これに基づくと、最下段の草材は建物屋外に面した葺き材、これと平行する枝材が縦小舞、最上段の枝材が横小舞となり、以下、この呼称を用いる。

葺き材はＢ範囲にもＡ範囲と同一方向に並んでおり、トレンチにより２か所に分断されているものの、本来は一体のものと考えられる。よって、現存する葺き材の長さは125cmとなる。また、図面図版136a-a'セクションによる断面観察で、約2cm前後の厚さのなかに２～４段の重なりが認められた。土圧により断面形が筋状につぶれているが、本来は倍以上の厚さであったものと考えられる。なお、葺き材より下はSD1420-E5b層が堆積しており、土壁であった可能性は低いと考える。Ａ範囲の図版右側の葺き材は並ぶ角度が異なっており、小舞から外れた可能性がある。縦小舞は葺き材に密着して並んでいるが、横小舞は図面図版137a-a'断面図のように縦小舞から１～2cm浮いた状態であった。また、縦小舞と横小舞の中間に縦小舞を中心にＶ字状に折れ曲がったエゴノキ属の枝材がある。葺き材と縦小舞、あるいは、縦小舞と横小舞が紐で結ばれたようなか所は認められず、これらがどのように固定されていたかは不明である。Ｃ範囲でも葺き材とみられる草材がＡ・Ｂ範囲とは大きく異なる方向に並んでいるが、小舞は確認できない。

周囲から出土した木材をみると、Ａ範囲の図版左側で、直径6cm、長さ135cmのアカマツの枝材が横小舞と平行して検出された。両端はトレンチにより切断されており、加工痕は認められず、全面に樹皮が残る。また、この枝材と草壁材との間にも板状の木材が散乱しており、草壁材のほかにも木材が廃棄されていたものとみられる。Ｃ範囲では小舞の下に板状のクリ材（No.268）が密着していたほか、弓状木製品（No.249）が葺き材の中間に挟まるように出土した。アカマツ枝材とクリ板材は建築部材であった可能性

もあるが、不明といわざるを得ない。

Ａ・Ｂ範囲の草壁材の規模を推定すると、葺き材と縦小舞を合わせた長さは1.5m、最も長い横小舞は1.12mである。Ａ範囲の最も長い横小舞の図版下端とＢ範囲の葺き材の下端はほぼ直行しており、長方形を呈していた可能性が高い。

丸木舟（図面図版138）　27D～ＥグリッドのS1層期のSD1420左岸斜面部から川底において、丸木舟が検出された。一方の先端が欠損しているが、残存長5.47m、幅0.75mで、トチノキ製である。形状などの詳細は本編Ⅴ章５に譲ることとし、ここでは出土状況について記す。丸木舟は残存する舟端を川底側とし、長軸を南西方向に向けている。斜面部は西側にゆるく傾斜しており、丸木舟の出土標高は欠損する側が-1.7m、残存する舟端側が-2.3mで、北側に傾斜している。両舷側は腐蝕が進み、端部は残っていない。また、欠損する側では標高が高いことから舷側内面の腐蝕が著しい。腐蝕の状態から、長い期間地上に放置されていたものが埋没した可能性が考えられる。a-a'セクションから、丸木舟はSD1420-E6層期に所属するものと考える。丸木舟の内部には残存する舟端近くに削り出しの横帯と、舟底に炭化範囲が認められるほかは、付属施設などは確認できない。また、舟内からほかの遺物も出土していない。一方、丸木舟の欠損する側の下から丸太状の木材が直行するようにして出土し、船体の固定に用いられた可能性がある。また、周辺から自然木とみられる木材が多数出土したが、関連はなかろう。

南側の舷側から1.4m離れた地点にP1849が検出された。加工痕のある木材が直立し、周囲から根絡みとみられる木材が出土した。直立する木材の上半は板状に、下半は丸く加工されている。検出時に上端を動かそうとしたがびくともせず、浅いながらも動かないようにしっかり固定されていた。出土層位は丸木舟と同じSD1420-E6d層であることや、斜面部下位からほかにピットが検出されていないことから、丸木舟との関連性があるものと考える。艫綱を結ぶ杭であった可能性もある。

SX1844（図面図版135）　24EグリッドのSD1420左岸地区の斜面部寄りにおいて、SD1420-E12b層から多量の木材が同一方向に並ぶようにして出土した。これらをSX1844と名付けて記録した。出土標高はM21が-0.1m、M10が-0.7mであり、全体が西側に傾斜する。木材の規模は長さ20～150cm、太さは５～40cmである。ほとんどの木材は腐蝕が著しく明瞭な加工痕が認められないが、M20（図面図版288）のみ加工痕が認められた。また、同一層位のSX1841と接していることから、全体を人為的な可能性を否定できない。樹種同定を行っていないため、ほかの木材との関係は不明である。位置的に木材の集積とは考えにくく、人為ならば廃棄された可能性が高い。

第Ⅴ章　遺　　物

1　土　　器

A　記述の方法

1）方　　針

土器の説明は、本文・観察表・図面図版・写真図版を用いて行う。観察表ですべてについて記載を行い、代表的なものについて本文で解説することとする。本文の記述に当たっては、大別器種分類を行い、各器種について器形と文様を分類し、これらの組み合わせを持って分析を行う。

記述の順序は、地区単位に遺構出土・遺物包含層出土の順とする。遺構出土とは、掘立柱建物・土坑・柱穴などの地面を掘り窪めて構築された遺構の覆土から出土したものとし、炭化物集中範囲及び堅果類廃棄範囲から出土したものは遺物包含層と同列に扱うこととする。遺物包含層出土のものは、下位層から上位層の順に層位別に提示する。土器の接合関係を検討した結果、第９表のように中央地区のS1層出土土器は同一層位内で接合する場合がほとんどであり、S4層及びS3層出土土器はS1層などと接合する場合があるものの、概ね同一層位内でまとまる傾向が確認できた。以上から、異なる層位で接合したものは、本編第Ⅲ章4.Dに従い基本的に最も下位の層位に帰属させた。ただし、一括性が極めて高いと判断した場合は、その出土層位を優先させた。SD19及びSD1420から出土したもののうち、アルファベットで細分された層位から出土したものは、その上位区分層位でまとめて提示した。例えば、SD1420-2層の場合、2c・2b'・2b・2a'・2a層出土土器をまとめて提示するものである。なお、漆要具や器面に鮮やかな漆が塗布された土器は、本編第Ⅴ章7.Hで説明することとする。

2）図化の方法

図の縮尺率は実測図及び拓本図が1/3・1/4・1/5であり、土器の大きさに応じて決定した。口径が推測可能な資料はできるだけ復元したが、算出した口径の確実性が低いものは中心線の両側の水平線を切って表した。実測図の作成は写真実測を用いたため、断面図は土器の右側断面を実測し、土器片が欠ける場合は任意の位置で断面図を作成し合成した。土器の地文である条痕文や縄文は、できるだけ施文単位を明示するよう心がけた。断面図における「輪積み痕」は破線で示し、欠損部は波形で表した。また、実測図及び断面図の実存部分は細線でくくり、推定部分と実存部分の境界は間隔を空けた。

3）観察表の記載

図面図版に掲載したすべての土器について、観察項目に従いその内容を一覧表にした。なお、不明なものは空白とした。出土地点は層位別にすべて記した。器種・器形・分類・浮線文種類は各分類の項を参照していただきたい。法量は器形の外寸を計測し、器高・口縁部径・底部径をcm単位で記した。なお、残存率の低いものは（　）内に数字を記した。残存率は口縁部片から口径を算出し残存している率を％で表した。胎土は肉眼で観察できる鉱物などの混和材を中心に記した。金雲母・雲母・長石が一般的に認められ、稀に石英・角閃石・海綿骨針を含むものがある。また、種類が不明で不透明な白色の粒子は白色粒子

層位＼No.	297	298	300	302	303	306	308	309	311	314	315	316	317	318	320	321	322	324	325	328	329	331	332	333	334	336	337	338	340	342	343	344	345	348
Ⅵ層	1	6												2				1														3		
S1層			6							1																	1			2			1	
S2～S1層																					2													
S2層																																4		
S3～S2層																																		
S3層	1	1	1				1						1	2				1			2			4	1		1		1			2	4	2
S4～S3層												1																				1		
S4層	1	3	1		1			8	1	48	3	2			3		1	4	5	2	3	2	1	4	2	4	1	2	4	1	3	1	1	3
K4層									4					2	2																			
S5層						5	2	4		1	1	4	6			3	3																	
K5層																																		
D層				2	1																		1											

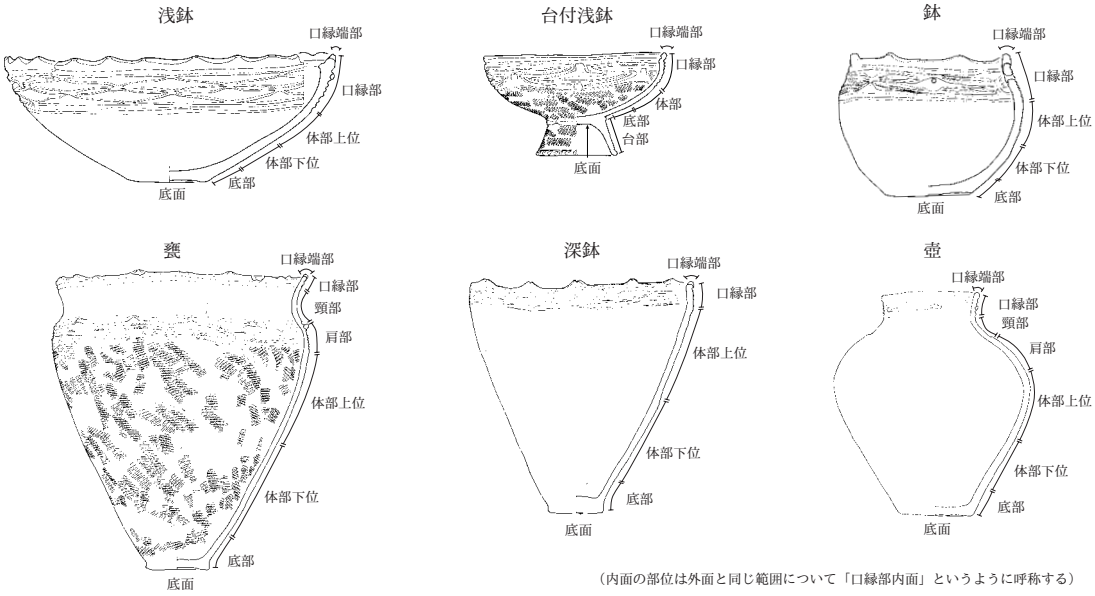
層位＼No.	349	351	353	354	355	358	360	362	363	364	365	366	367	369	370	371	373	374	375	376	377	378	379	380	381	382	383	384	385	386	387	388	389	390
Ⅵ層			3		1															1				6		10	2	1		1	2			
S1層			1																							3						1		
S2～S1層																																		
S2層																																		
S3～S2層																																		
S3層		1			1			2				1					4						3	6	15	1	8	1						
S4～S3層																										3								
S4層	2	8	1	4	1	4	10	1	2	2	2	1	2	2	5	7	4	8	9	7	3	5	4	12	8	18	1	3	3	5	5	3		2
K4層																																	4	
S5層																															1			
K5層																																		
D層																																		

層位＼No.	391	392	393	394	395	397	398	399	400	401	402	403	404	405	407	408	409	410	411	412	413	414	415	416	417	418	419	420	421	422	423	424	425	426
Ⅵ層				1			1			10			3			2		5			15	2				1	1	1	5		3			1
S1層			1							2								1				12	1						2	1				10
S2～S1層																																		
S2層												1						2				2												
S3～S2層																																		
S3層	1		2	1						1		1		1			7	12		3		1			2				6	12	3		1	
S4～S3層		1																																
S4層	2	25	14	2	26	2	13	6	17	2	2	2	7	13	4	1	9	18	38	15	2	1	6	7	7	5	3	2	1	3	1	20	1	6
K4層																																		
S5層																									1									
K5層																																		
D層		1																																

層位＼No.	427	428	429	430	432	434	435	436	437	438	439	440	441	442	443	444	445	446	447	448	449	450	451	452	453	454	457	460	463	464	465	466	467	469
Ⅵ層							1	2			2					6		1			4			1	1	1	11		1		2			7
S1層				1	3	2	1						1								33			1										
S2～S1層							1																						2			1		
S2層																																		
S3～S2層																																		
S3層							4			1		1		1			1	4			8		2	1	1	2	1	2	1	23	3	1	5	2
S4～S3層							1																											
S4層	2	8	6	3	1	1	5	5	2	2	1	1	2	1	4	1	1	12	2	2	1	10									1			
K4層		1																																
S5層																		2																
K5層																																		
D層																																		

層位＼No.	473	474	475	476	478	481	482	483	484	486	487	489	492	493	494	495	496	497	498	500	502	503	504	505	506	507	509	510	511	513	516	517	518	
Ⅵ層	5		3	4	2	2	2		2	6	2	2	2	2	5	24	2	3	2	6		5	12	8	13		2	1	5	5	7	2	7	
S1層	1	1	1	1		1		11													2	2	2		2	27		1						
S2～S1層																																		
S2層																																		
S3～S2層																																		
S3層	1	4																																
S4～S3層																																		
S4層																																		
K4層																																		
S5層																																		
K5層																																		
D層																																		

第９表　中央地区出土土器の層位別ドット数



第34図　器種分類と部位の呼称

として表した。外面及び内面の調整・施文などは部位別に記した。調整及び文様の施された順序がわかるものは「＋」記号を用いて古い順に記した。施文手法は後述する分類についてそれぞれ①～④・浮・沈に省略して記した。色調は内外面の色調を『標準土色帖』［小山・竹原1998］に基づき記した。炭化物は二次焼成による炭化物の付着位置について各器種の部位名称を記した。

4）分　　類

a　器種分類

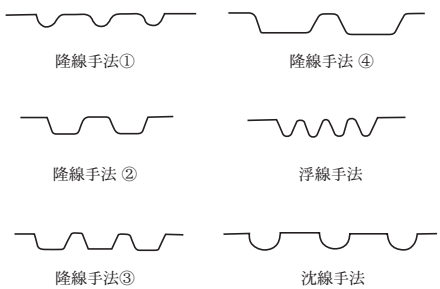
本遺跡の土器は縄文時代晩期終末の鳥屋式土器［磯崎1957；石川1988］を主体とする。当該期の器形の特徴から浅鉢形土器・台付浅鉢形土器・鉢形土器・甕形土器・深鉢形土器・壺形土器（以下「形土器」を省略する）の大別器種を設定した（第34図）。分類基準は、口径と器高の関係（第36図）から、器高/口径が概ね0.6以下のものを浅鉢、0.6～0.8のものを鉢、0.8以上のものを甕・深鉢とした。ただし、この数値から外れるものについても全体の形態から別器種に判断したものもある。なお、浅鉢の中には台付浅鉢も多く含まれると考えられるが、台部を確認できないものは浅鉢に含める。また、全形を知り得るものについて、実測図から容量の算出を行った（第37図）[1)]。

以下で器種ごとに器形分類を行い、さらに文様帯構成と文様種類などにより細分した。また、口縁形態や器形にもいくつか種類があるため、それぞれに基準を設けた。部位の名称は第34図のとおりである。

b　文様の施文方法

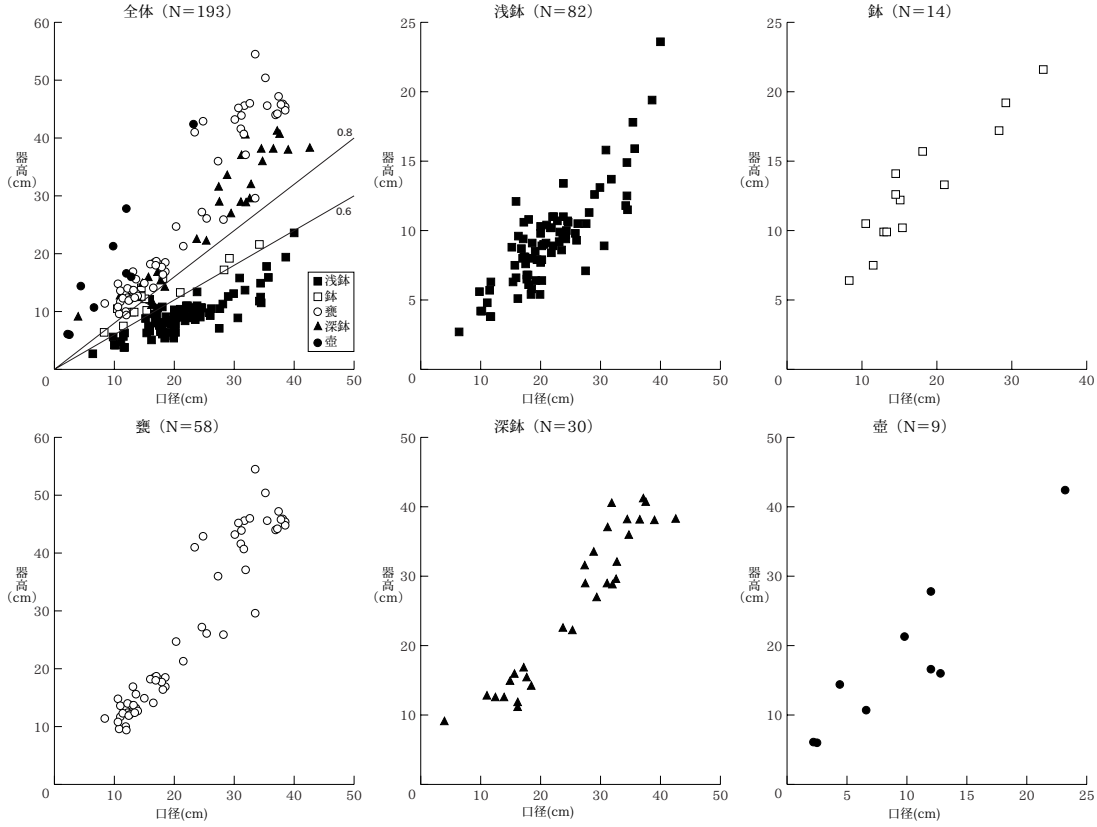
縄文時代晩期終末に典型的な浮線文土器の文様描出には、浮線手法や隆線手法が用いられ、変形工字文は沈線手法が加えられる（第35図）。隆線手法については沈線と隆線との幅の比率から細分した。

隆線手法　文様が隆線により表現される場合に用いられる

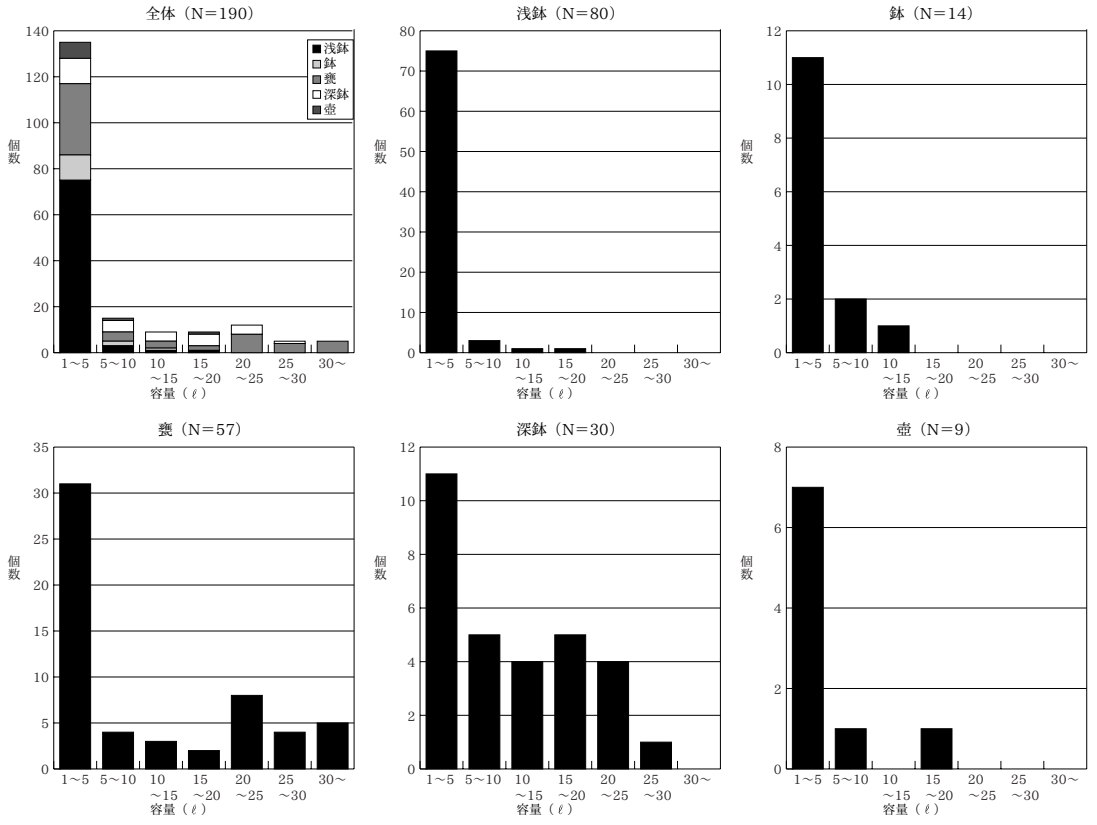


第35図　施文手法の分類

1）富山大学学生 坂野井絵里氏の算出による。算出方法は［小川貴司1993］に従った。



第36図　土器の法量



第37図　土器の容量

施文手法で、隆線と沈線との関係からさらに細分する。

隆線手法①　隆線幅が沈線幅より広いもの。

隆線手法②　沈線幅と２条の沈線に挟まれた隆線幅がほぼ同じもの。隆線の上面は平坦で器面より盛り上がらない。

隆線手法③　隆線が沈線よりやや幅の狭いもの。隆線の上端は平坦で、器面より盛り上がらない。沈線内部にミガキが施されるものが多い。

隆線手法④　隆線は沈線より幅が狭く、沈線部を深く彫去しミガキを加えることで沈線の断面形が深い逆台形状、隆線は台形状形状となるもの。

浮線手法　沈線を広く彫去し、ミガキを加えることにより、頂部幅の狭い浮線を描出するものである。浮線の頂部は丸くなるものや断面三角形状に尖るものがある。

沈線手法　沈線は幅広で深い。沈線内部はミガキが加えられる。沈線同士の間隔が開く。

c　口縁部及び口縁端部形態の分類

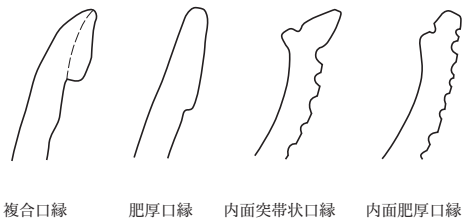
口縁形態の分類（第38図）

複合口縁　口縁部外面に帯状の粘土紐を貼り付けることにより、口縁部以下より一段高く作り出されるもの。

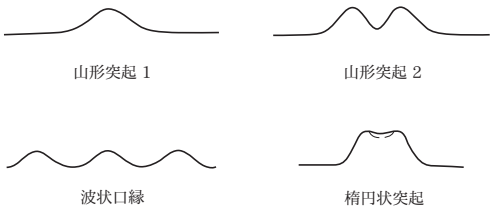
肥厚口縁　口縁部下端をケズリやミガキを加えて削り出すことにより、口縁部上端がそれ以下より高く作り出されるもの。

内面突帯状口縁　口縁部内面が肥厚し、その下端が大きく張り出すもの。下端に粘土紐を貼り付けて作られたものもある。

内面肥厚口縁　口縁部内面が肥厚するが、下端が強く張り出さないもの。



第38図　口縁形態（内外面）



第39図　突起の分類

突起の分類（第39図）

山形突起１　山形の突起が１個のもの。

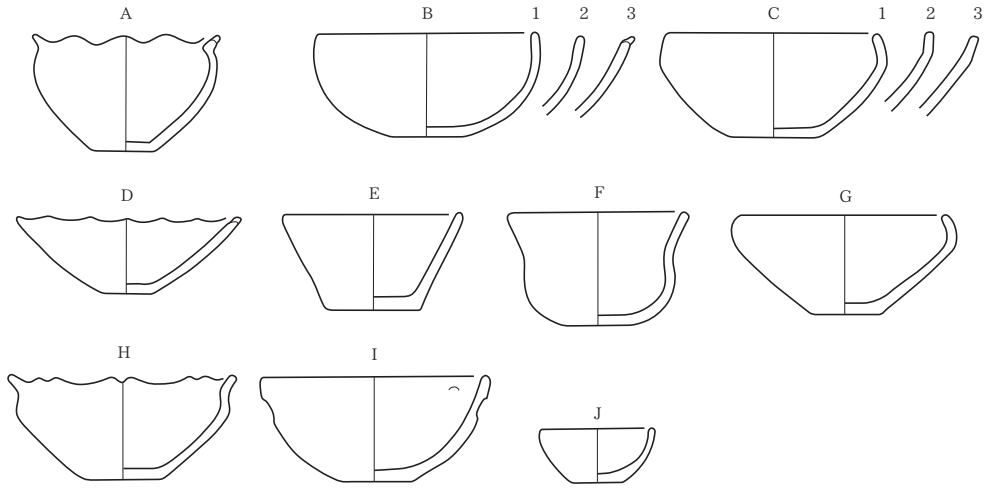
山形突起２　山形の突起が２個１対になるもの。

波状口縁　　山形突起が連続するもので、波底部が平口縁でなく湾曲するもの。

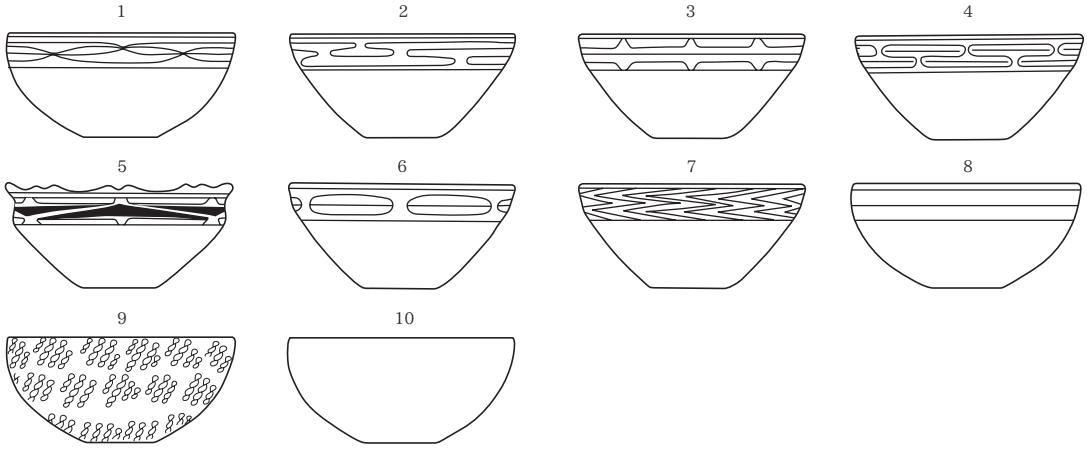
楕円状突起　山形突起の頂部が楕円形にくぼむもの。

d　浅　　鉢

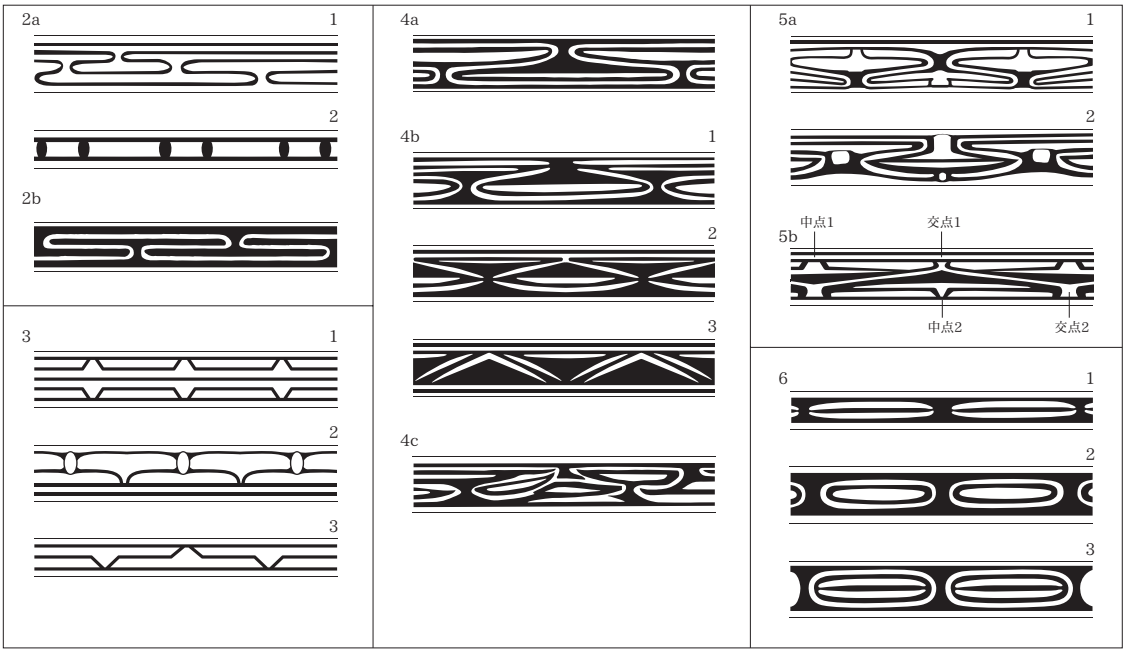
口径が器高を上回るもので、口縁部～体部の屈曲が少ないものである。部位は口縁端部・口縁部・体部上位・体部下位・底部に分かれ、一部頸部を有する（第34図）。法量から口径20cm以下のものを小形、20～30cmのものを中形、30cm以上のものを大形とする。容量は５ℓ以下のものがほとんどである（第36図）。器形は底部から口縁部への立ち上がり方などからＡ～Ｊ類に分類した（第40図）。文様帯は口縁部を主体とし、口縁部に施文される文様種類について１～10類に分類を行った（第41・42図）。そして、器形分類と文様分類とを組み合わせてA1類のように表記し、個々の土器を記述することとする。なお、



第40図　浅鉢の器形分類



第41図　浅鉢の文様分類模式図



第42図　浅鉢文様２～６類の文様模式図

浮線文についてはモチーフが多岐にわたるため、a～h種に分類し、1a類のように末尾に表すこととする。また、変形工字文の部位名称（第42図5b）は［須藤1976］に従った。

器形分類（第40図）

A類　体部から口縁部にかけて鋭く張り出した後に屈曲し、口縁部が直立ないし外傾するもの。

B類　体部から口縁部にかけて明瞭な屈曲点を持たず曲線的に口縁部まで立ち上がるもの。口縁部はやや内傾するもの（1）、ほぼ直立するもの（2）、外傾するもの（3）、を含む。

C類　体部は直線的に外傾し、口体境や口縁部上位に屈曲点を持って、内側に角度を変えて立ち上がるもの。屈曲の度合いは強いものと弱いものがあり、口縁部は若干内傾するもの（1）、直立するもの（2）、外傾するもの（3）、がある。

D類　体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの。

E類　底部から体部にかけてほぼ直線的に立ち上がるもので、底径が口径に比して大きく、全体的に逆台形を呈すもの。

F類　体部下位から上位にかけて強く張り出した後に内傾し、外反する頸部を持つもの。口縁部は直線的に外傾するものが多い。

G類　体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は丸みを帯びながら鋭く内傾するもの。

H類　体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は丸みを帯びて内傾した後に、口縁部上端が「く」の字状に短く外傾するもの。東北地方の大洞A'式の影響がうかがえるものである。

I類　幅広の頸部無文帯を有するもの。信州地方の氷Ⅰ式の影響がうかがえるものである。

J類　小形品をまとめる。

文様の分類（第41・42図）

1類　浮線文が施されるもの。細分は後述する。

2類　工字文が施されるもの。隆線手法で表現するものを2a類、沈線手法で表現のものを2b類とする。2個1対の粘土瘤を貼布するもの（2）も2a類に含める。

3類　東北地方に系譜を求め得る匹字文が施されるもの。対向する匹字文（1）、上下交互の匹字文（2・3）などがある。

4類　沈線により匹字部を持たない横流水状の曲線的な変形工字文が描かれるもの。東北地方に系譜を求め得る。交点や構図の特徴から以下の4a～4c類に細分する。

4a類　三角形内に水平な副文線［石川1985b］が加えられるもの。

4b類　4a類のモチーフと基本的に同じだが、交点の一部ないしすべてが途切れて連続しないもの。

4c類　4a類の構図が乱れるもの。

5類　三角形を交互に配し、中点や交点を持つ変形工字文あるいはそれに類似するモチーフが施されるもの。東北地方に系譜を求め得る。

5a類　三角形内に彫去が施される隆線表現のもので、交点や中点が曲線的に反転するものである。

5b類　三角形内に彫去の施されないもので、直線的な変形工字文が施される。

6類　楕円文のほか「日」字状文や「目」字状文など左右上下に連結しない楕円文系の文様が施されるもの。

7類　綾杉文が施されるもの。

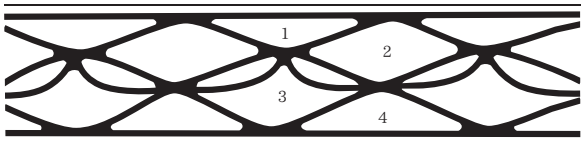
8類　平行沈線文が施されるもの。

9類　斜縄文が施されるもの。

10類　全面無文のもの。

浮線文の分類（第44図）

浮線文の種類は多岐にわたる。石川日出志氏の論考［石川1985a・1988］を参考にa～h種に分類し、さらに文様の段数などを考慮して細分した。文様段数の数え方は第43図のとおりである。同じ種類のものでも直線的なものと曲線的なものがあるが、ここでは区別しない。なお、浅鉢以外の器種についてもこの分類を用いる。



第43図　浮線文の段数の数え方

a種　菱形のモチーフのなかに交点間を結ぶ水平な浮線が加えられるもの。

a1種　2段の菱形モチーフの上下に三角形モチーフが配されて4段構成となるもの。交点を平行沈線文が貫くもの（1）がある。

a2種　3段構成となるもの。

a3種　a2種と同じ3段構成のもので、交点を結ぶ水平線が2～3条になるもの。

a4種　文様帯の上端や下端に匹字状の交点を持つ2段構成となるもの。

b種　1条と2条の浮線で表現されるもので、交点間の水平線がないもの。

b1種　菱形と三角形を組み合わせた4段構成のもの。

b2種　b1種と同様の構図が5～7段と多段になるもの。

b3種　2～3段構成となり、文様帯が狭小なもの。

b4種　b種に交点間を結ぶ水平な浮線が加わるものや、不規則な構成となるもの。

c種　文様の上端に匹字状の交点を持ち、楕円形ないし菱形のモチーフ内に水平線や楕円文が配されるもので、左右のモチーフが連結しないもの。

c1種　楕円形のモチーフを交点で連結せずに横位に連続させるもの。

c2種　菱形と三角形を基本とするモチーフを交点で連結せずに上下交互に連続させるもの。

d種　紡錘形を横に連続させる構図で、紡錘形の内部は1条から数条の浮線が施される。

d1種　2条の浮線による紡錘形のモチーフを連続させるもの。

d2種　3条による紡錘形のモチーフを連続させるもの。

d3種　4条以上の多条による紡錘形のモチーフを連続させるもの。

d4種　2条による紡錘形のモチーフを上下2段に配するもの。

d5種　3条による紡錘形のモチーフを上下2段に配するもの。

d6種　4条やそれ以上による紡錘形のモチーフを上下2段に配するもの。

e種　交点間に水平な浮線を持たない網目状の構図のもの。

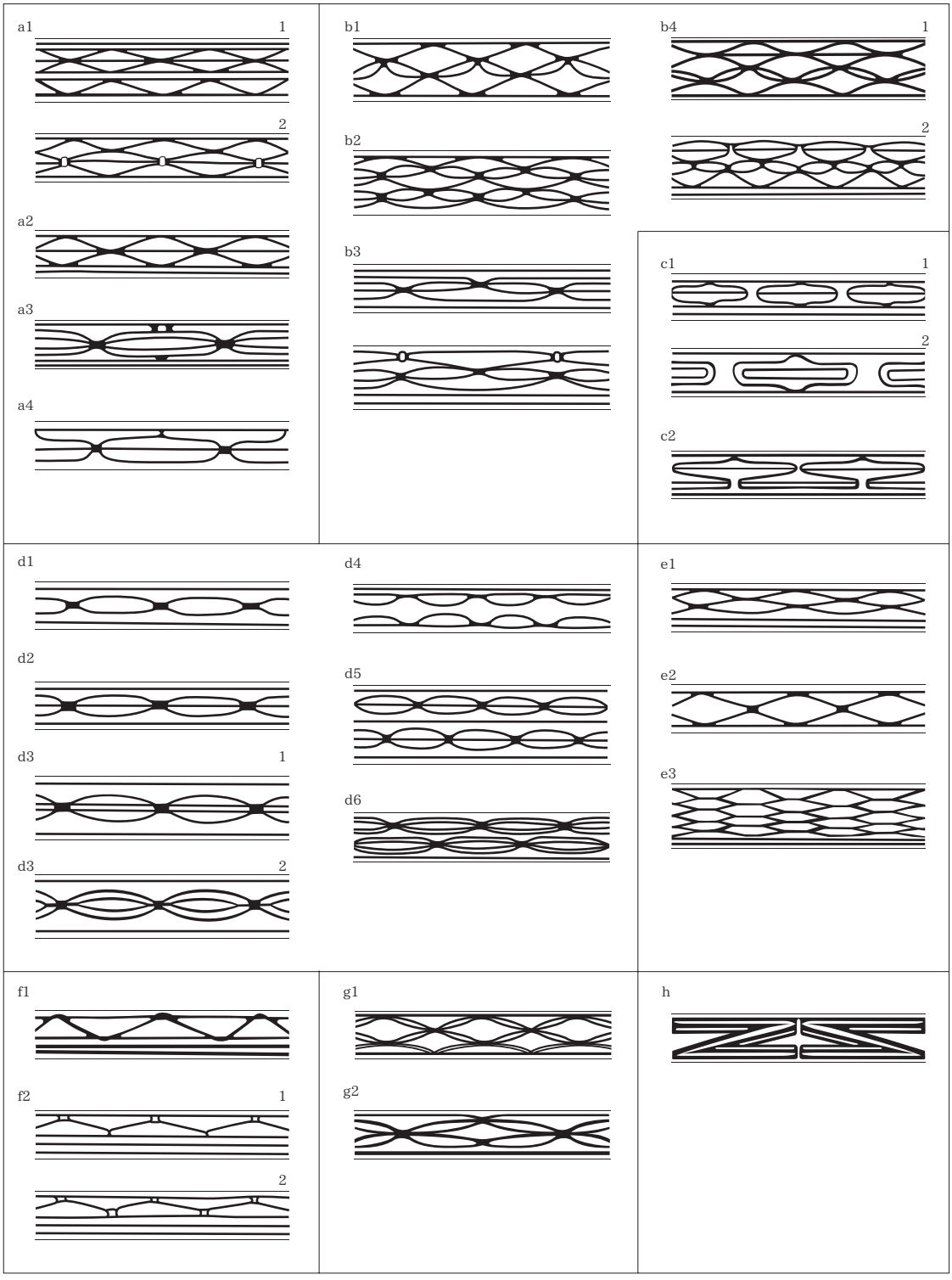
e1種　三角形と菱形を組み合わせた3段構成のもので、文様帯下端の交点が平行隆線に連結しないもの。

e2種　e1種と同様に3段構成だが、下段の交点が文様帯下端の平行隆線に連結させたものである。

e3種　4～8段と多段化するもの。

f種　三角形のモチーフを上下交互に連続させるもの。

f1種　交点にスリットがないもの。



第44図　浅鉢文様1類浮線文の種類模式図

f2種　交点にスリットがあるもの。

g種　2～3条1対の浮線により菱形のモチーフを描くもの。

g1種　4段以上の構成となるもの。

g2種　2～3段構成のもの。

h種　細く直線的な浮線3～4条でZ字状のモチーフを交互に組み合わせるもの。

e　台付浅鉢

浅鉢に高台が付くものである（第34図）。全形を知り得る資料が少なく、分類は行わない。台部資料のみのものが多い。口縁部に変形工字文が施されるものがある。

f　鉢　　形

体部の立ち上がりの角度が浅鉢に類似するものの、口径が器高をやや上回る深めのものである。器形はA～G類に分類した（第45図）。文様は口縁部に施されるもののほか、体部上位に加えられるものがある。容量は5ℓ以下のものが多い（第37図）。

A類　口縁部が緩やかに内傾するもの。

B類　体部は丸く膨らんだ後に内傾し、口縁部が「く」の字状に鋭く屈曲して外傾するもの。浅鉢A類に類似する。

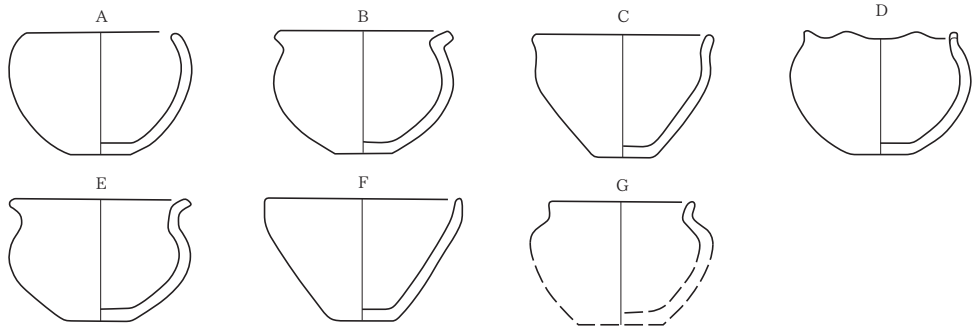
C類　体部が直線的に外傾した後に、口縁部はゆるく外反するもの。

D類　体部上位が丸く張り出した後に内傾し、口縁部はほぼ垂直に立ち上がるもの。

E類　体部上位が丸く張り出した後に外反する頸部を持つもの。口縁部は外傾する。

F類　体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもので、口縁部が直立するものもある。

G類　体部上位が丸く張り出し、口頸部が「く」の字状に屈曲してやや外傾気味に立ち上がるもの。



第45図　鉢の器形分類

g　甕

体部の立ち上がりの角度が大きく、屈曲する頸部を有する器形である。器高が口径を上回るものが主体だが、下回るものもある。部位は上から口縁端部・口縁部・頸部・肩部・体部上位・体部下位・底部に分ける（第34図）。法量（第36図）から口径20cm以下のものを小形、20～30cmのものを中形、30cm以上のものを大形とする。容量（第37図）は小形が5ℓ未満、中形が5～20ℓ、大形が20ℓ以上に概ね対応する。器形は肩部～口縁部の形態によりA～I類に分類した。また、文様帯は口縁部・頸部・肩部・体部上半にあり、文様帯の位置と文様種類には1～3類のパターンが認められる。以上から、器形と文様帯構成・文様種類との組み合わせにより記述することとする。

器形分類（第46図）

A類　体部が直線的に立ち上がった後に肩部が丸く張り出し、頸部は緩やかに内傾して口縁部も内傾するもの。

B類　肩部上端で角張るように強く張り出すもの。頸部は内傾するものから外反するものがあり、口

縁部はほぼ直立するものと外傾するものがある。体部最大径より口径が下回るものが占める。

C類　肩部は丸く強く張り出し、頸部から口縁部にかけて外反するもの。口縁部から肩部にかけてS字形を描くようなものを主とするが、頸肩境の屈曲が著しいものや、頸部がやや長く直線的なものも含めた。

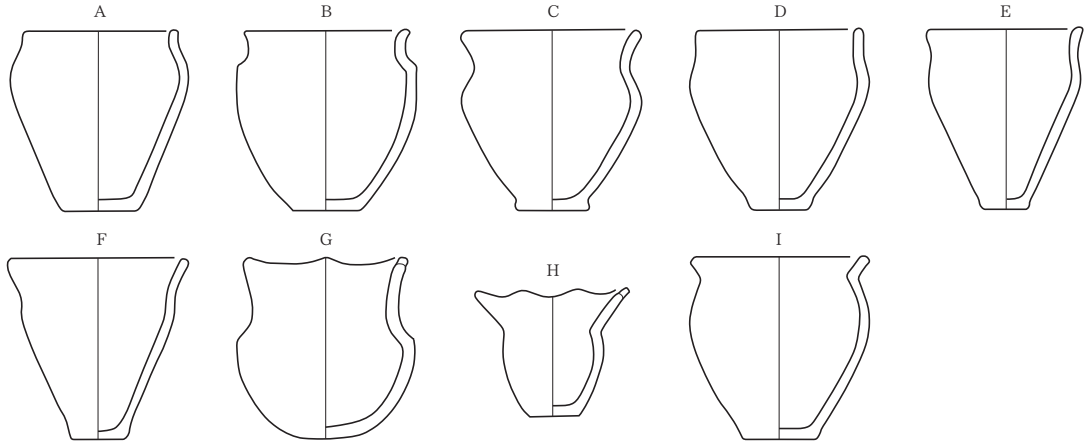
D類　肩部は丸く強く張り出すが、頸部は外反せず、口縁部がほぼ垂直に立ち上がるもの。

E類　肩部の張り出しは弱く、頸部の屈曲も弱く、口縁部が緩やかに外傾するもの。肩部の張り出し位置は肩部下位の場合が多く、全体的に細身のプロポーションとなる。

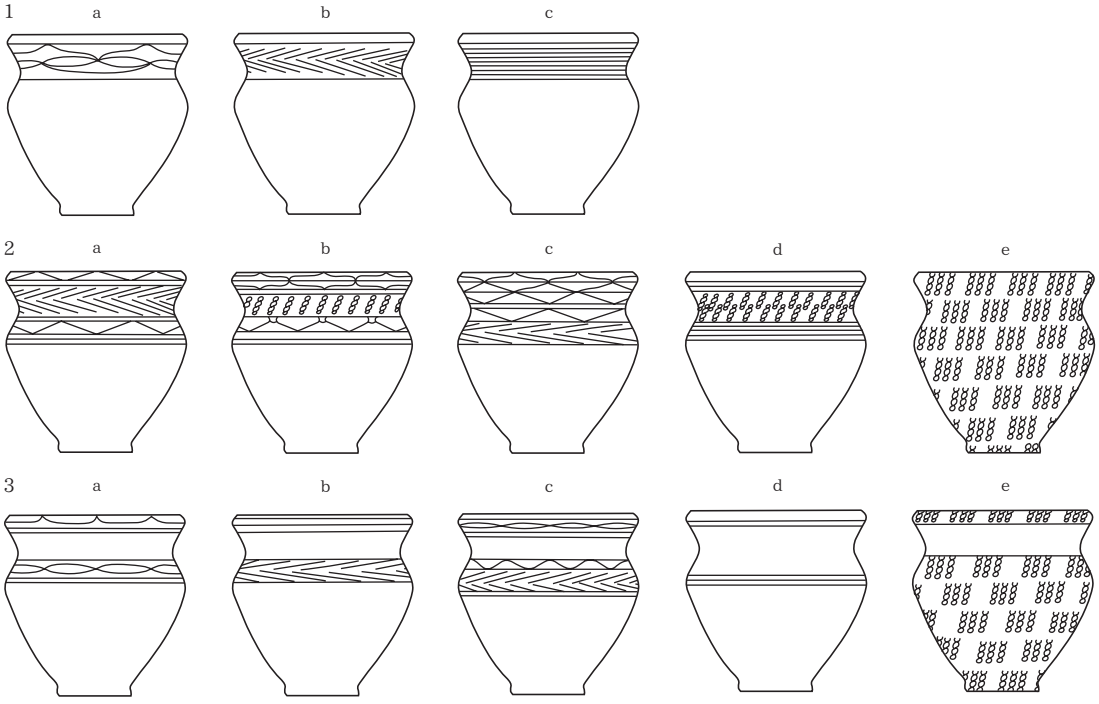
F類　肩部の張り出しはわずかで、頸部の屈曲が不明瞭のまま口頸部が外傾するもの。口径が体部最大径を上回る。

G類　非常に長い頸部を持つもの。肩部は強く張り出すものが多い。

H類　肩部の張り出しは弱く、頸肩境で鋭く屈曲して、長い口頸部が直線的に外傾するもの。口径が



第46図　甕の器形分類



第47図　甕の文様帯構成と文様種類の関係模式図

体部最大径を上回る。

Ⅰ類　体部はやや丸みを帯びて立ち上がり、肩部は強く張り出し、口頸部が「く」の字状に屈曲するもの。

文様帯と文様の組み合わせ（第47図）

1類　頸部を主な文様帯とするもの。

1a類　浮線文が施されるもの。

1b類　後述する綾杉文やこれに関連する沈線文（第48図）が施されるもの。

1c類　頸部に平行沈線文などの上記以外の文様が施されるもの。

2類　口縁部と肩部を文様帯としながらも、頸部にも文様が施されるもの。

2a類　頸部に綾杉文や関連する沈線文が施され、口縁部や肩部に浮線文や工字文が施されるもの。

2b類　口縁部や肩部に浮線文や工字文が施され、頸部は斜縄文などが施されるもの。

2c類　肩部に浮線文や工字文が施され、体部上位に綾杉文が施される2段構成のもの。

2d類　口縁部や肩部に平行沈線文が施されるもの。

2e類　全面に斜縄文などが施される装飾性の低いもの。

3類　頸部を無文帯とし、口縁部と肩部を文様帯とするもの。

3a類　口縁部や肩部に浮線文や工字文が施されるもの。

3b類　口縁部や肩部に綾杉文及び関連する沈線文が施されるもの。

3c類　肩部に浮線文や工字文が施され、体部上位に綾杉文が施される2段構成のもの。

3d類　口縁部や肩部に平行沈線文が施されるもの。

3e類　単位文様が施されず、口縁部や肩部以下に斜縄文や条痕文などが施される装飾性の低いもの。

綾杉文及び関連する沈線文の分類（第48図）

綾杉文は浮線文と共に主要な文様であり、これに関連する文様を以下のように分類する。

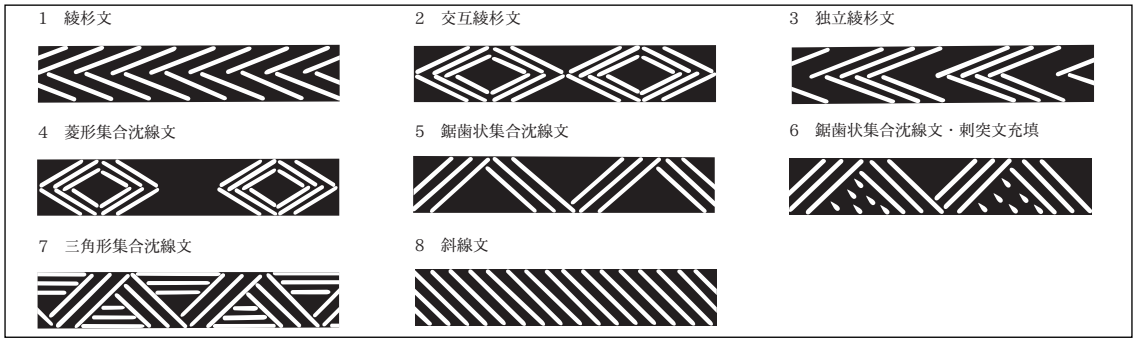
綾杉文（1）　沈線が斜め上・斜め下に交互に連続的に描かれるもの。規則的でないものがある。

交互綾杉文（2）　左右に開放する綾杉文が交互に施されるもの。これにより菱形のモチーフが形成される。鈴木正博氏の「横Ｖ字形交互」［鈴木2003］に相当する。

独立綾杉文（3）　綾杉文が一定の間隔を置いて施されるもの。

菱形集合沈線文（4）　交互綾杉文と同様に形成された菱形モチーフが横位に連結せず独立するもの。

鋸歯状集合沈線文（5）　多条の沈線により右上がりと左上がりが交互に施されるもの。三角形内に刺突文が充填されるもの（6）がある。



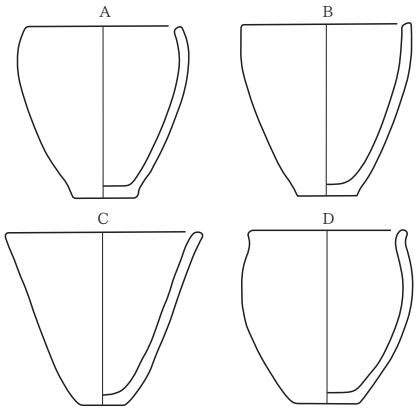
第48図　綾杉文及び関連する沈線文の分類模式図

三角形集合沈線文（7）　鋸歯状集合沈線文の三角形内に水平の沈線文を加えたもの。

斜線文（8）　同じ斜位方向の沈線文が連続的に施されるもの。

h　深　　鉢

器高が口径を上回るもので、口縁部から体部にかけて屈曲が少なく、甕のような頸部を持たないものである。部位は上から口縁端部・口縁部・体部上位・体部下位・底部に分かれる（第34図）。法量（第36図）から口径20cm以下・器高20cm以下のものを小形、口径20cm以上・器高20～30cmのものを中形、器高30cm以上のものを大形とする。容量（第37図）は小形が5ℓ未満、中形が5～15ℓ、大形が15ℓ以上に概ね対応する。器形は口縁部の形態などからA～E類に分類した。また、文様帯は口縁部に限定され、施文される文様により1～8類に分類した。よって、器形と文様種類との組み合わせにより記述することとする。



第49図　深鉢の器形分類

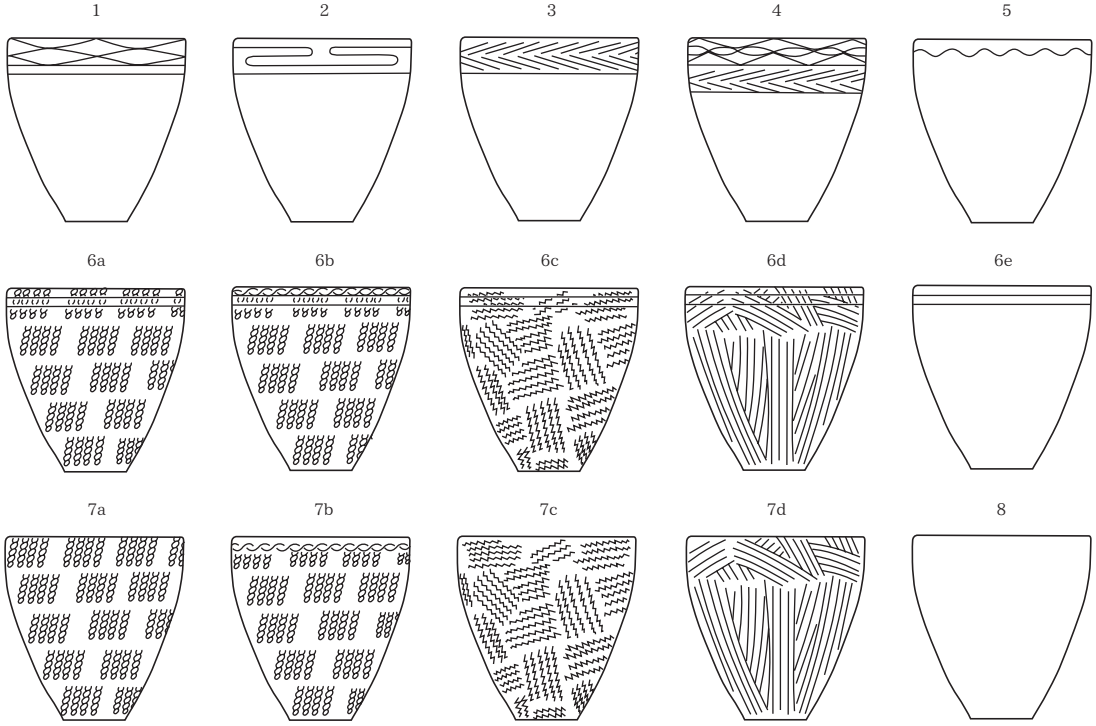
器形分類（第49図）

A類　口縁部が内傾するもの。

B類　口縁部がほぼ直立するもの。

C類　口縁部が外傾するもの。

D類　体部上位から口縁部にかけてやや内傾した後に口縁端部付近が緩やかに外反するもの。口縁部に平行沈線文が施されるものや、体部に平行沈線文が施されるものがある。



第50図　深鉢の文様分類模式図

文様の分類（第50図）

1類　口縁部に浮線文が施されるもの。

2類　口縁部に工字文が施されるもの。

3類　口縁部に綾杉文及び関連する沈線文（第48図）が施されるもの。

4類　口縁部に浮線文、その直下に綾杉文などの文様が施されて2段構成となるもの。

5類　口縁部に波状沈線文が施されるもの。

6類　口縁部に平行沈線文が施されるもの。平行沈線文のほかに各種の文様が施されるものが多く、以下のように細分する。なお、複数の文様がある場合は、最後に施された文様を基準とする。

6a類　斜縄文が施されるもの。

6b類　結節縄文が施されるもの。

6c類　撚糸文や網目状撚糸文が施されるもの。

6d類　条痕文が施されるもの。

6e類　平行沈線文以外の文様が施されないもの。

7類　文様帯を持たず、斜縄文などが施される装飾性の低いもの。

7a類　斜縄文が施されるもの。

7b類　結節縄文が施されるもの。

7c類　撚糸文や網目状撚糸文が施されるもの。

7d類　条痕文が施されるもの。

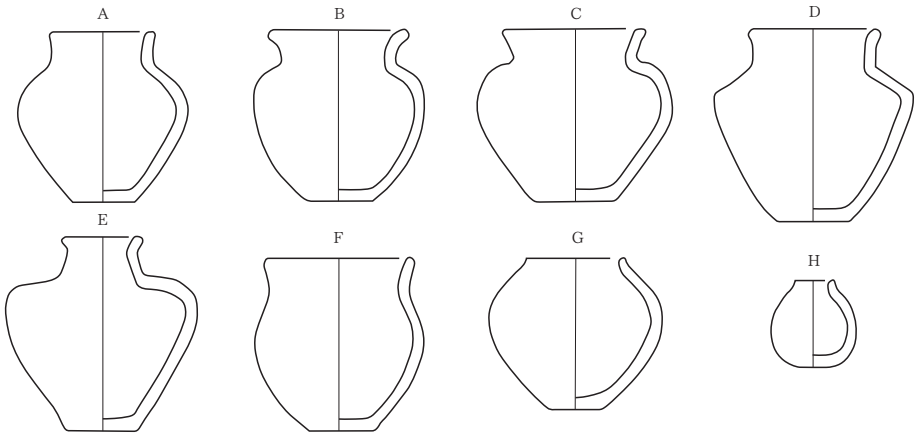
8類　全面無文のもの。

i　壺

肩が張り出して口頸部がすぼまり、口径が体部最大径よりかなり小さいもの。部位は口縁端部・口縁部・頸部・肩部・体部上位・体部下位・底部に分かれる（第34図）。容量は5ℓ以下のものが占める（第37図）。器形と文様により分類した。

器形分類（第51図）

A類　体部は直線的に立ち上がり、肩体境が丸く大きく張り出し、長くなだらかな肩部を持つ。頸部は緩やかに屈曲して立ち上がり、口縁部が直立ないし若干外傾するもの。



第51図　壺の器形分類

B類　体部から肩部は球形状に丸く張り出し、頸肩境に段差を有する。口頸部は外反する。A類に比べ、口径/体部最大径がやや大きい。

C類　肩部から体部上位が大きく張り出すもので、頸肩境はやや高い。頸部は「く」の字状に鋭く屈曲し、口縁部が大きく開く。

D類　肩体境は位置が高く、強く張り出す。肩部は直線的に内傾し、頸部で急激に角度を変えて立ち上がり、口縁部が外傾するもの。

E類　体部は直線的に立ち上がり、肩体境は位置が高く、大きく張り出す。肩部は長くほぼ水平となり、頸部で急激に角度を変えて直線的に内傾した後に、口縁部が「く」の字状に外傾するもの。

F類　肩部の張り出しが弱い一群をまとめた。

G類　体部上位が丸く張り出し、肩部は内傾して明確な頸部を持たずに口縁部が短く直立するもの。

H類　小形の壺で、体部から肩部は球形状や楕円形状に膨らみ、口頸部がほぼ垂直に立ち上がるもの。

B　SD19右岸地区の土器（図面図版143・144、写真図版105・106）

1）土器出土状況（図面図版21・38）

本地区は調査範囲中で土器量が最も少ない。層序はSD19右岸地区S2層・S1層に分かれるが、Ⅶ層として取り上げたものも多いことから、ここでは一括して説明を行う。土器は掘立柱建物内部からの出土は少なく、周囲の炭化物集中範囲などからまとまって出土した。中でもSC82とSK733周辺が多い。No.14のように完形に近い状態で出土したものがあり、接合範囲も他地区に比べ狭い。

2）遺構出土の土器（1～6）

SB1-P50（1）　小形深鉢A6a類で、体部に縄文Lが施される。SC3出土土器とSD19左岸地区のSC111出土土器と接合した。

SK757（2）　甕D2e類で、口縁部に結節縄文が施される。SC82出土土器と接合した。

SH8（6）　中形深鉢B1類で、口縁部に浮線文e3種が施される。体部は条痕文や縄文Lが施されるが、下半が摩滅しており明瞭でない。

SH13（3）　甕B3e類で、肩部に撚糸文が施される。ほかのSH出土土器と同じく外面の剥落が著しい。

SH32（4・5）　鉢A類で、4が5の中に入った入れ子状態で出土した。4の口縁部は弧状の入組文が施される。5は無文で、底部に横位のケズリが認められる。

3）遺物包含層出土の土器（7～23）

浅　鉢（7～9）　浮線文が施されるC1類（7）、D1類（8・9）がある。7は試掘トレンチから出土したもので、隆線手法④で幅広の浮線文a2種が施される。8は波状口縁を持ち、浮線文b1種が施される。9は上下2段に浮線文が配されるd5種である。

甕（10～13）　B類はB2a類（10）、B3e類（13）がある。10は口縁部と肩部に浮線文f1種が配される典型的なB2a類で、体部上位は結節縄文が施される。13は口縁部を欠き、肩体部に斜縄文が施される。E類はE1a類（12）、E2e類（11）がある。12は頸部浮線文e3種の上端が口縁部に連結する。11は全面に半截竹管状の原体により条痕文が施される。

深　鉢（14～16・18～22）　A類はA1類（14）、A8類（21）がある。14は浮線文e3種で、底部は

縄文施文後に横位のナデが加えられる。B類はB1類（15）、B6a類（19）、B7d類（20）がある。15は浮線文a2種が施される。C類はC6e類（16・18）、C7b類（22）がある。22は大形で、口縁部にのみ結節縄文LRが施される。

その他（17・23）　いずれも甕ないし深鉢の下半で、17は綾杉文が2段確認できる。

C　SD19左岸地区・SD19の土器（図面図版145～157、写真図版105～115）

1）土器出土状況（図面図版22～26・39・40・43・44）

本地区ではD層～S1層まで満遍なく出土している。D層は全地区で最もまとまって出土し（図面図版39）、本遺跡の初期の資料として重要である。S5層は少なく、S4層は各器種とも完形品を含み多数出土した（図面図版40）。S3層はS4層に比べやや少なく（図面図版43）、S2層は全地区中最も多く出土したが、量はほかの層に比べ断然少ない。S1層は点数が多いものの、破片資料が大半で全形を知り得るものは少ない。SD19では川底から完形品を含む多量の土器が出土した。これらの資料はSD19の層位の検討からS3層以前に限定されることが分かっており、土器の変遷を検討する上で重要である。また、左岸斜面で確認されたSX112などから層位的な出土資料が得られた。なお、SD19-22～16層はS4～S3層に、15～5層はS2～S1層に相当する。

2）遺構出土の土器（24～30）

SB36-P1860（24）　甕ないし深鉢の底部で、網目状撚糸文が施される。D層出土土器と接合する。

SB37-P710（26）　浅鉢G1類で浮線文f2種が施される。文様帯幅の狭いことが特徴である。

SK121（27）　浅鉢B1類で浮線文a1種の構図に若干の乱れがある。

SK717（25・28・29）　25は浅鉢D1類で浮線文a1種が施されるが、文様帯幅が広く交点間を結ぶ水平線が一部2条となるところがある。28は浅鉢B1種で、D2層出土土器と接合する。29は深鉢D6a類で口縁部上端にミガキが加えられる。

SH118（30）　大形深鉢A6a類で口縁部に平行沈線文が間隔を置いて3条施される。

3）D層出土の土器（31～43）

浅　鉢（31～34）　B1・D1類がある。B1類は33・34である。33は浮線文b1種で交点に縦のスリットが加えられる。34は浮線文b4種としたが、モチーフ上段は浮線が2条1単位となり、下段は浮線文f1種と共通する。交点には縦のスリットが施される。D1類は31・32である。31は浮線文a1種としたが、上段の交点間を結ぶ水平隆線が25と同様に2条となり、隆線間の平行沈線は交点を貫きモチーフが上下に分かれるところがある。器厚が薄めなことも特徴である。32は浮線文a2種で、これも部分的に水平線がないなど構図に乱れがある。また、モチーフの上端は平行沈線を挟まず口縁部上端に連結し、突起を伴う。器厚が厚く、内外面ともミガキが著しい。

鉢（35・36）　35は鳥屋1式から続く眼鏡状文が施されるA類で、口縁部上端に無文帯を有す。

甕（37～39）　B類のみ認められる。38・39はB3d類で、いずれも頸部はナデ調整である。39は大形であるが、器厚が薄いことが特徴である。

深　鉢（40・41）　A4類で口縁部に眼鏡状文と浮線文f1種を配し、体部上位に綾杉文が施される。41は入り組工字文風の沈線文が施される。

その他（42・43）　42は甕ないし深鉢で浮線文が施される。43は底部で底面中央が丸く飛び出す。

4）S5層出土の土器（44～48）

浅　鉢（44）　B1類で浮線文b1種としたが、上下のモチーフは連結している可能性がある。

甕（45・46）　45はE2b類で肩部に浮線文e2種が施される。46はC3d類で、弧状の隆帯が貼付されたものである。

深　鉢（47・48）　47はB1類で浮線文c種が施される。48はB8類である。

5）S4層出土の土器（49～99）

浅　鉢（49～67）　A～D・F・I類が出土しているが、主体はA・B・D類である。波状口縁を持つものが多いほか、内面突帯状口縁も目立つ。全体的に文様帯の幅が広い。A1類は49・50である。49は浮線文f1種で、内面突帯状口縁である。B1類は51～57があり、浅鉢の主体を占める。51は浮線文a1種である。52は浮線文b1種としたが、平行隆線に上下から押圧や抉りを加えて交点を作り出したものであり、交点は平行沈線が貫いている。54は浮線文b1種の典型例である。53は浮線手法により浮線文d3種が施される。55～57は浮線文f1種である。C1類は58・60である。58は口縁部が「く」の字状に内屈する。60は浮線文e3種の典型例であり、モチーフは5段構成で縦幅が狭い。D1類は59・61～63である。61は浮線文e3種の直線的な例である。62は隆線手法④により浮線文f1種が施され、沈線内のミガキが丁寧に加えられる。64はF8類で頸部に丁寧なナデが施される。I1類は65～67である。65・66は氷Ⅰ式に特有な口外帯と無文帯を有し、口外帯には眼鏡状文が施され、体部上位には間延びした浮線文a2種が施される。67は口外帯が波状を呈し、体部上位に浮線文d3種が施されるが、頸部無文帯は65・66より狭い。65～67はモチーフ下端に位置する平行浮線の直下が窪んでおり、氷Ⅰ式の特徴と共通する。65は胎土に石英を含み、66も在地の胎土と異なることから、両者は搬入品の可能性がある。67は焼成・色調の特徴が氷Ⅰ式に類似するものの、口端部に沈線文が施される点は氷Ⅰ式に認められないことから、搬入品とは判断できない。

鉢（68・69）　B類69は体部上位に浮線文b1種が施され、丁寧にミガキが加えられる。C類68は口頸部が短く外反する。

甕（72～84）　A～E・H類が認められる。A類は頸部に斜縄文が施されるA2b類（72）とA2類（73）である。72は口縁部にナデにより幅広の沈線が施され、肩部に浮線文e2種が配される。B類はB2b類（74）、B3a類（75）、B3e類（76）である。74・75は肩部に眼鏡状文と工字文が施される。C類はC2b類（77）、C3a類（79）、C3c類（80）、C3e類（78）である。77は小形で肩部に浮線文e3種が施される。80は肩部に浮線文b3種、体部上位に綾杉文が施される。D1a類81は浮線文a2種が施される。D3a類82は小形で頸部無文帯の位置が肩部にまで下がっている。E1a類83は浮線文e2種である。H3a類84は小形で、口縁部に浮線文b3種が幅広く施され、頸部無文帯は屈曲部にわずかにあるのみである。肩部は幅広い隆帯上に列点文が施され、その下に浮線文f1種が配される。

深　鉢（85～99）　A～D類が認められる。A類はA6a類（86・88）、A6d類（85）、A7b類（87）がある。85は口縁部の平行沈線文が隆線手法③である。86は口縁部に斜縄文が施された後に体部に条痕文が縦位に施される。B類はB6a類（89）、B6e類（90）、B7b類（92）、B8類（93）である。90は口縁部に斜線文が施された後に平行沈線文が描かれる。92は全面に結節縄文が施される。C類はC6e類（94）、

C7c類（98）、C8類（91・95～97）である。98は複合口縁上に指頭状圧痕文が連続施文される。95は口縁部に幅広の沈線帯が施される。D6c類99は体部上位に撚糸文を縦位に施すことが特徴である。

壺（70・71）　B類71は肩部に浮線文f1種が施され、全体的にミガキが加えられる。F類70は口縁部に浮線文f1種が施されるが、その交点は器面から盛り上がっており、工字文とも看取れる。

6）S3層出土の土器（100～140）

浅　鉢（100～119・121）　B～D類があるほか、G類が現れる。主体はB・D類で、A類は認められない。波状口縁はやや少なく、内面突帯状口縁は認められる。B類はB1類（100～109）、B8類（112）があり、浅鉢の主体を占める。100は浮線文a1種の好例で、交点は瘤状に盛り上がる。101は平行沈線文を上下から押圧して交点を作り出した浮線文b1種である。102は浮線文b3種の交点に縦のスリットが施される。104は浮線文b4種で、豊栄市鳥屋遺跡［小出・寺村1958；関ほか1988］に類例がある。105は大形で、狭い文様帯に浮線文b3種が施される。107～109は浮線文f1種だが、107の交点では2条の浮線が交わらない。108・109は内面突帯状口縁である。C類はC1類（110・111・113）である。111は浮線文e3種で、交点では上方からの押圧による隆線の移動を明瞭に観察できる。113は浮線文f2種で、交点上のスリットが長い。D類はD1類（114～116）、D8類（117）、D10類（118）である。114は小形で浮線文d1種が施される。115は数少ない浮線文e1種である。118は内面突帯状口縁だが、通常施される平行沈線文がない。G1類119は浮線文b1種で、交点上に縦のスリットが施される。121は大形浅鉢の底部とみられる。

台付浅鉢（122）　122は底部で、内外面のミガキが著しい。

鉢（120）　E類とみられ、体部上位に浮線文d1種が描かれ、下位に撚糸文が施される。

甕（123～128・130・131）　A～D類がある。A2a類123は頸部に交互綾杉文が施されるものとみられる。B類はB3e類（124・126）で、124は口縁部に結節縄文LRが施される。C類はC1a類（125）、C3a類（127・128）、C3d類（130）である。127は山形突起1の下が山形状に抉られる。D3e類131の複合口縁は短く丸い。

深　鉢（129・132～136）　A～C類がある。A類はA6a類（129）、A7d類（132）である。132の条痕文は体部下位で縦位に施文後、体部上位で斜位に、口縁部で横位に施す。B類はB6a類（133）、B6d類（135）、B7b類（136）である。133は平行沈線文が間隔を空けて3条施される。136は口縁部のみ結節縄文LRが施される。C類はC4類134であり、浮線文b1種の下に斜線文が施される。

壺（137～139）　D類（138）、F類（137・139）である。138は肩部に隆線手法③で匹字文が描かれる。137の口縁部は平行沈線文を上下交互に区切って交点を作ることにより浮線文f1種としている。

その他（140）　140は甕ないし深鉢の下半で、体部に条痕文が施される。

7）S2層出土の土器（141～172）

浅　鉢（141～156）　B・C類のみが認められ、S4・S3層で少なかったC類が増加する。波状口縁は少なくなり、内面突帯状口縁と内面肥厚口縁の両者が認められる。文様帯の幅はS4・S3層のものより狭くなる傾向がうかがえる。B類はB1類（141～149）、B8類（150）である。B1類の浮線文種類はa1種（141）、a2種（142・143）、b1種（144）、b3種（145）、f1種（146・147）、f2種（148・149）で、S4・S3層になかったf2種が認められる。148は大形ながら、狭い文様帯に浮線文f2種が施された例である。

C類はC1類（151～156）で、浮線文種類はb1種（151）、d3種（155・156）、f1種（152～154）である。

甕（157～161・164）　A2a類（157）、C2c類（160）、C3d類（164）、D3類（158・159）、E2b類（161）があり、S4・S3層で主体を占めたB類が認められなくなる。157の頸部交互綾杉文は菱形を呈す。160は肩部の浮線文f1種下に綾杉文が施される。164の頸部は横位のナデ調整である。

深　鉢（162・163・165～172）　B・C類があり、A類は認められない。B類はB6b類（162）、B7b類（165）、B7d類（166・168）である。166・168は体部に条痕文施文後にそれぞれ複合口縁を作り、その上に横位に条痕文が施される。C類はC1類（167・169・170）、C7b類（171）、C7c類（172）である。169は浮線文f2種が施される。172は撚糸文を体部では斜位に、口縁部では横位に施される。

8）S1層出土の土器（173～217）

浅　鉢（173～199）　A・B・C・D・F類があり、C類が圧倒的に多くなる。波状口縁は少なく、内面突帯状口縁より内面肥厚口縁が上回る。文様帯幅が狭いものも多く認められる。A類はA1類173で、波状口縁で内面突帯状口縁を呈し、浮線文b1種が施される。B類はB1類（174～176）、B2類（198）で、浮線文種類はa2種（174）、b1種（175）、b2種（176）である。174は文様帯下端の隆線に連なるべき交点が図面右側の単位にない点は、浮線文a4種との関連を示す。C類はC1類（177～192・194・195）である。浮線文種類はa1種（177）、a2種（178～183）、b1種（184・185）、b2種（186・187）、b3種（188・189）、d1種（191）、d2種（190・192・194）、f1種（195）である。a2種は本層の特徴であり、これらの文様帯幅が狭いことも注目される。177は太い隆線で浮線文が描かれるが、左右のモチーフが交点で連結しない。178は横長のモチーフで、交点間を結ぶ水平線が上下2段になり、水平線が1段の180と位置が逆になっている。b2種186は外面の赤彩が著しい。b3種189は文様帯幅が狭く、浮線文も2段構成であることから、文様帯の狭小化と浮線文モチーフの段数が少なくなることに相関が認められよう。d2種も本層の特徴といえる。いずれも文様帯幅が狭く、交点は隆線を上下から押圧して作り出したもので、その際の粘土の移動痕跡を観察できる。すなわち、沈線内に最終的なミガキが加えられなかったか、あるいは交点末端まで施さなかったことになる。このことは、粘土移動後に沈線内に最終的なミガキを加えていたS4・S3層資料と対照的といえよう[1)]。D類はすべてD1類で、浮線文種類はa2種（197）、d2種（193）、f2種（196）である。F1類199は口縁部に浮線文b4種が施される。

鉢（200）　C類で、口縁部に浮線文b1種が施される。

甕（201～206）　C類が主体となる。C2a類（201）、C2類（203）、C3c類（202）、C3d類（204）、C3e類（205・206）である。201は頸部に浮線文b3種が施され、肩部は斜線文である。202は頸部無文帯が狭く、肩部に浮線文f1種、体部上位に綾杉文が施される。205・206は複合口縁が作られる。

深　鉢（207～212）　B・C類が主体となる。B類はB6a類（207）、B7b類（208・209）である。209は撚糸文上に結節縄文が施される。C類はC1類（210・212）、C2類（211）である。212は浮線文d1種とf1種が混在するモチーフである。

壺（213～217）　A類（214・215）、B類（213）、C類（216）、F類（217）がある。214は口縁部がほぼ垂直に立ち上がるもので、215のような体部を有するものと考えられる。216は底面が正方形を呈す。肩部にやや弧状を呈す隆帯が貼付され、これに連なって正方形底面の頂点に向かって垂直に隆帯が4

1）後に述べる交点A・B手法である（本編第Ⅶ章3第161図参照）。

単位施される。また、肩部隆帯上に沈線が加えられて眼鏡状文となる。なお、縦位隆帯上にも沈線が描かれていたようである。隆帯区画内には「冂」字状の集合沈線文が充填される。底部には平行沈線文が施される。文様などの構成は799に類似する。217の平行沈線文は隆線手法④で施される。

9）SD19出土の土器（219～296）

a　25層出土の土器（277・278）

浅　鉢（278）　B1類で、浮線文d5種の上下のモチーフは半単位ずらして施される。

深　鉢（277）　B6c類で、平行沈線文の上に条痕文・網目状撚糸文の順に重ねて施される。

b　23層出土の土器（219～276）

浅　鉢（219～238・240）　A・B・D類があり、C類は認められない。波状口縁を呈すものと内面突帯状口縁を持つものがあり、口縁部文様帯幅が広い点は、S4層出土資料と共通する。A1類219は内面突帯状口縁で、浮線文b3種が施される。B類はB1類（220～228）、B2類（230）、B8類（229）で、240も口縁を欠くがB類とみられる。浮線文はa3種（220）、b1種（221・224）、b2種（222）、b4種（223）、e2種（225～227）、f1種（228）がある。221はb1種の好例で、交点に縦のスリットが施される。222は5段構成のb2種で、文様帯幅が非常に広い。223は221の構図の上段に水平線を加えたもので、沈線内のミガキが著しい。228は口縁端部から口縁部に楕円形のくぼみを作り波状口縁としている。内面突帯状口縁は粘土紐接合痕を明瞭に観察できる。230は三角形文と呼ぶべきもので、太い隆線が作り出され、上段の反転部は盛り上がる。D類はすべてD1類で、浮線文種類はa2種（231・234）、b2種（235）、b3種（232）、b4種（236）、d1種（233）、e2種（237・238）がある。235は波状口縁を呈すが、その下部を三角形に抉る手法は25層出土の278に共通する。浮線文b4種が施される236は223と共に本層に特徴的な資料である。モチーフ上端の交点が平行沈線を挟まず直接口縁部上端に連結して突起状に盛り上がり、D層出土32に類似する。このように、本層出土土器はD層出土土器（32）と接合関係も認められることから、古い時期の資料が混入している可能性がある。

鉢（239）　A類でb4種とみられる浮線文が施される。

甕（241～264）　A～C・E・H類が認められる。A1a類241は浮線文b3類とみられる。B類はB2b類（242）、B3a類（243）、B3b類（244）、B3d類（245）、B3e類（246）である。247はB3d類の可能性がある。242の肩部文様は沈線の彫去が深く、交点が大きく盛り上がる。C類はC2a類（248・256）、C2b類（249）、C2d類（250）、C2類（251）、C3a類（252～255・257）、C3b類（258）、C3e類（259・260）である。256はC2a類の典型的な例で、体部は撚糸文施文後、体部上位に斜縄文、体部下位に条痕文が施される。E類はE1b類（261）、E2d類（262）、E3a類（263）である。263の口縁部工字文は平行沈線に粘土を貼付して交点を作り出したものである。H類264は口頸部が極めて長い。口縁部に浮線文a1種が施され、頸部は三角形集合沈線文に刺突文を充填したモチーフが2段配される。肩部は網目状の立体的な浮線文e3種が施される。

深　鉢（265～275）　A6a類（265・266）、B2類（268）、B7a類（267）、B7b類（274）、B7d類（272）、C2類（269）、C6a類（270）、C6d類（271）、C7b類（273）、C8類（275）がある。268は口縁部に隆線により反転部を持つ工字文が描かれ、体部に網目状撚糸文が施される。269は口縁部に匹字文が施される。273は口縁部に結節縄文と平行沈線文が施され、体部は条痕文施文後に結節縄文を縦位に

加える珍しい例である。

壺（276）　B類である。肩部の浮線文は、f1種とみられる。

c　22～16層出土の土器（279～281）

浅　鉢（280）　C1類で浮線文e3種が施される。

深　鉢（279・281）　A7a類（281）、C7d類（279）がある。

d　15～5層出土の土器（282～296）

浅　鉢（285～288・292）　C1類（285・292）、D1類（287）、I1類（286）、J類（288）がある。285は文様帯幅が狭く、モチーフは横に間延びする。286は口縁部に眼鏡状文、体部に浮線文b3種が施される。288は口縁部から底面まで帯状の浮線文を十字に配して全体を4分割し、口縁部は浮線文で充填される。口縁端部も上下交互に沈線文が配される。

鉢（283）　B類である。浮線文a2種が施され、内面突帯状口縁となる。

甕（282・291・293・294）　B2b類（291）、C1a類（294）、C3e類（282・293）がある。294の頸部浮線文はd2種とみられる。

深　鉢（284・289・290・295・296）　B1類（284・295）、B6b類（289）、C8類（296）、D6a類（290）がある。289は平行沈線文間に結節縄文が施文される珍しい例である。

D　中央地区の土器（図面図版157～170、写真図版115～125）

1）土器出土状況（図面図版22～30・39～42・44・46）

本地区は掘立柱建物の空白域ながら、多量の遺物が出土した範囲である。D層は少ないものの、S5層からまとまって出土した。S4層及びS3層では炭化物集中範囲から多量の完形土器が出土し、S1層も炭化物集中範囲からまとまって出土した。同一範囲において各層にわたり多量に遺物が出土したのは本地区のみである。また、層位的に出土した状況は図面図版19からも明らかである。本地区の資料は青田遺跡の土器変遷を検討する上で重要である。

2）遺構出土の土器（297～301）

SH2301（300）　S4層に所属する。深鉢B6a類で、肥厚口縁下に平行沈線文が施される。また、縄文Lが口縁部で横位に、体部で縦位に施されることも特徴である。

SH2302（298）　S4層に所属する。深鉢B6a類で、平行沈線文より上位に指頭状圧痕が斜めに施される。

SH2443（297）　S4層に所属する。深鉢A7a類で、薄い複合口縁である。

SH2448（299）　S3層に所属するとみられる。深鉢C7d類で、条痕文が体部で縦位に、口縁部で斜位に施される。

SH2457（301）　S1層に所属する。甕C2a類で、肩部浮線文はa2種である。

3）D層出土の土器（302・303）

浅　鉢（302）　B1類で、浮線文d1種が立体的な隆線で施される。内外面のミガキが顕著で、外面に

赤彩が明瞭に観察できる。

深　鉢（303）　A7b類で、口縁部に結節縄文Rが施される。

4）S5層出土の土器（304～323）

浅　鉢（304～308）　すべてB1類である。浮線文種類はa1種（304）、a2種（305）、b1種（306）、b2種（307）、f1種（308）であり、基本的にS4層と差はない。307は内面突帯状口縁を持つ。308も内面突帯状口縁で、波状口縁を呈す。

台付浅鉢（310）　山形に広がる小さな台を持ち、体部に縄文LRが施される装飾性の低いものである。

鉢（309）　F類309は口縁部に浮線文b4種が施され、体部に浮線文f1種と平行沈線文が加えられる。

甕（311～317）　B・C・E類が認められる。B類はB3a類（314）で、肩部浮線文はf1種ながらe2種となる部分も認められ、交点は大きく盛り上がる。C類はC2b類（311・312）、C3a類（313）である。311は口縁部及び肩部に隆線手法④で浮線文が施される。312の肩部浮線文も立体的で、交点が大きく盛り上がる。313は幅広の平行沈線を２条並べ、その間に浮線を作り出す隆線帯であり、信州地方の氷Ⅰ式に認められる手法である。E類はE2a類（315）、E3a類（316）、E3類（317）である。315は頸部に鋸歯状集合沈線文が施され、刺突文で充填される。316は肩部文様を持たない。

深　鉢（318～322）　A・C類が認められ、A7d類（318）、C1類（319～321）、C7a類（322）である。浮線文が施されるものは小形～中形のC類に限定される。

壺（323）　B類で、肩部に浮線文e2種が施される。

5）SC2266及びS4層出土の土器（324～450）

浅　鉢（324～363）　A～D・F類が認められる。B類が主体を占め、波状口縁を呈するものや内面突帯状口縁を持つものが多い。浮線文は立体的な隆線で表現され、沈線内のミガキが入念に行われる。A類はA1類324で、浮線文a1種が施される。交点間に２条の直線的な水平線が用いられる点は、D層出土31に系譜を求めることができる。B類はB1類（325～345・358）、B8類（346・348）、B10類（347）である。浮線文種類はa1種（325・326）、a2種（327・328）、a3種（329）、b1種（330～333）、b4種（334・335）、d2種（336・337・358）、d5種（338）、e1種（339・343）、e3種（340・341・344）、g1種（342）、g2種（345）である。325は楕円状突起と山形突起１が交互に配される。326は浮線文の上端が直接口縁に連結する例である。328は口縁部に眼鏡状文があり、浮線文a2種は体部上位に施されるが、交点間の長さは上下で異なる。329は浮線文a3種としたが、交点間の水平線が浮線３条の紡錘形が２個連なるモチーフに置き換わっている。330～333は波状口縁や内面突帯状口縁を持ち、文様帯幅が広いB1類b1種の典型であり、本層の特徴を示す。334はモチーフ右端がとなりと連結せずに文様帯上端に連結する。337は狭い文様帯幅のなかに浮線文d2種が施される例である。338の浮線文d5種はSD19-25層出土278と同様の構図であり、本層と時間的並行関係を認めることができよう。341・342・358は文様帯上端に施された平行沈線の幅が広めであり、I類との関連をうかがわせる。344は網目状の構図が８段施されており、広い文様帯に多段構成の浮線文が施されることも本層の特徴である。345は浮線文e2種の隆線上に沈線を加えることによりg1種としたものである。C類はC1類（349～354・357）、C2類（355）である。C類は文様帯の幅がB類より狭く、内面は肥厚口縁や肥厚しないものが多い。浮線文種類はa2種（349・350）、b1種（351）、e3種（352）、f1種（353・354・357）である。

349・350の浮線文は共に横に間延びしており、浮線文d3種の上下に交点だけを付けたようなモチーフである。350は口縁部上端に眼鏡状文が施される。355は平行沈線内に粘土瘤２個を貼り付けて工字文としたもので、東北地方の大洞Ａ式後葉にみられる手法である。胎土には通常含まない石英や白色粒子が含まれることから搬入品の可能性が考えられる。Ｄ類はD1類（356・359～361）、D9類（362）である。360の浮線文は隆線が口縁部上端に直接連結している。Ｆ類はF1類（363）であり、口縁上端から連なる浮線文e2種が施される。

台付浅鉢（366～368）　いずれも小形の台部である。367は匹字文が施される。

鉢（364・365）　Ｂ種364は内面突帯状口縁で、浮線文d4種は一部上下が連結するものである。365は波状口縁と内面突帯状口縁を呈す。

甕（369～408）　Ａ～Ｆ類があり、主体はＡ～Ｃ類である。Ａ類はA1a類（408）、A2a類（374）、A2b類（370～372）、A2d類（373）である。374はA2a類の典型例で、口縁部の浮線文e2種は口縁部上端に直接連結し、その交点は盛り上がる。頸部は交互綾杉文、肩部は浮線文a2種が施される。371は口縁部に浮線文f1種、肩部にe3種が施され、内面にミガキが加えられる。Ｂ類はB1a類（369）、B1b類（375・376）、B2a類（377）、B2b類（378・380～382）、B2e類（383・387）、B3a類（384）、B3e類（385・386）である。376は頸部に斜線文が施される。377の肩部浮線文はa3種であろうか。378は肩部に浮線文a2種が施され、その交点は盛り上がる。380は口縁部上端に接して立体的な浮線文e2種が施される。381は頸部に三角形彫去文が施され、その間は２～３重の楕円形にかたどった刺突文と結節縄文により交互に充填される。382は口縁部と肩部に幅の広い隆線で工字文が描かれる。386は肥厚口縁上に円形の押圧文が連続して施される。Ｃ類はC1a類（379・388・389・391・392）、C2a類（399）C2b類（393～395）、C3a類（398）、C3d類（396）、C3e類（397）である。388は頸部に浮線文b2種が施される。389は平行隆線を上方から押圧して交点が作り出される。392は多段化する浮線文a1種が口縁部から肩部まで施される。398は口縁部に指頭状圧痕が観察できる。Ｄ類はD1a類（400）である。口縁部は縄文LRとし、頸部に浮線文e1種が施される。Ｅ類はE2b類（401・402）、E3a類（403・404）、E3d類（405）、E3e類（406）である。401は肩部に眼鏡状文が施される。403は口縁部に浮線文f1種が描かれ、肩部以下に網目状撚糸文が施される。404は波状口縁を持ち、肩部に三角形に彫去した工字文が施される。406は肩部に結節縄文LR、体部上位に網目状撚糸文、体部下位に条痕文が施される例である。Ｆ類はF2e類（407）である。小形のもので、本遺跡では珍しい縄文RRが施される。

深　鉢（409～438）　Ａ～Ｃ類があり、いずれも量が多い。Ａ類はA1類（409）、A2類（411）、A6a類（410）、A6d類（412・415）、A7b類（413・414・416）、A7d類（417）である。409は浮線文f1種としたが、下段に交点のない部分もあり、匹字文とも関連する。411は口縁部に鋸歯状沈線文が施される。412は口縁部に平行沈線文が間隔を空けて配される。414は条痕文に結節縄文Ｒを加えた例である。416は体部では縄文Ｌを縦位に施されるが、口縁部では結節縄文Ｌを横位に方向を変えて加えたものである。417は口縁端部に楕円形の連続押圧文が施される。Ｂ類はB1類（418）、B2類（420）、B6a類（424）、B6d類（435・421）、B7a類（422）、B7b類（423・426）、B7c類（425）である。420は太い隆線で入り組み状の工字文が施される。424は内面肥厚口縁を持つ珍しい例である。425は複合口縁上に撚糸文Ｒが横位に施される。Ｃ類はC1類（419・427・428）、C6a類（429～432）、C6e類（433・434）、C7b類（436・437）、C7c類（438）である。419は縦位沈線間の隆線を結合することで浮線文d1種を描出している。また、その間には平行沈線３条の中央の沈線を上下に押し広げて浮線文e2種風のモチーフが施

される。縦位の浮線文は田上町保明浦遺跡［田畑1993］などに認められる。427・428は、口縁部上端に浮線文e3種が直接連結する。429は口縁部上端に突起状の粘土瘤が貼付される。434は外面に丁寧なミガキが施される。435は口縁部に指頭状圧痕が観察できる。

壺（439～450）　本層からは壺が豊富に出土した。A類（439～442）、B類（443～445）、D類（446）、E類（449）、F類（447・448・450）である。439は楕円状突起を持ち、口頸部に浮線文a2種が施される。440～442は眼鏡状文が施され、441は肩部に工字文が描かれる。443は外面に丁寧なミガキが加えられる。444は最大径30cmを超えるもので、肩部に幅の広い隆帯を横位に配し、その上下を同様の縦位隆帯で上下交互に連結する。図示した部分より下にも横位の隆帯があると考えられる。隆帯上には細い沈線が施される。胎土に石英を含み、搬入品の疑いがある。445は口縁部が緩やかに外反し、肩部に浮線文f1種が描かれる。446は肩部が直線的で、8段構成の浮線文b2種が施される。頸部や体部にミガキが加えられる。449は唯一のE類である。口縁部から肩部にかけて輪積み位置で割れている。口縁部内面は受け口状にくぼみ平行沈線文が施され、外面は隆線手法④で工字文が施される。頸肩境は一段くぼんだ脇に断面山形の隆帯を貼付し、その頂部に楕円形の押圧を連続的に加える。全面にミガキが顕著である。胎土中の鉱物に白色粒子を多量に含み、焼成は一般的でない。450は甕D類とみることもできるが、甕特有の明瞭な頸部を持たず、口径/体部最大径は約0.7とすぼまることから壺とした。器形の歪みが著しいが、内外面に炭化物が付着しており使用されたものと考えられる。口縁部に浮線文e1種が施される。

6）SC2247及びS3層出土の土器（451～474）

浅　鉢（451～463）　B～D・J類があるが、主体はB1類である。B類はB1類（451～456・458）があり、浮線文種類はa1種（451）、b1種（452・453）、d3種（454）、e2種（455）、f1種（456）である。S4層に比べ波状口縁や内面突帯状口縁を有するものはやや少なく、文様帯幅も狭いものが多い。453は浮線文の交点に縦のスリットが付けられ、底面に明瞭な網代痕を観察できる。454は交点の上下に入念なミガキを加えて、立体的に仕上げている。456の浮線文は上下にf1種を配し、その中間にd2種が施された珍しい例である。C類はC1類（457）、C2類（459）である。浮線文a3種457は454のようなd3種の上下に交点を加えたものであり、両者の近接な関係を推測できる。459は口縁部上端に工字文があり、その下は幅の広い沈線文が施される。胎土は角閃石を含み、一般的でない。D類はD1類（460～462）である。460は大振りの山形突起が1個つき、文様帯は突起に平行するように波状を呈す。浮線文は幅の広い隆線により左右のモチーフが連結しないc1種が施される。462は口縁部上端に眼鏡状文が施され、その下に浮線文b3種が描かれる。J類463は平面形が舟形を呈すとみられるもので、底面も丸く収まる。口縁部に浮線文f2種と焼成前穿孔が施される。

甕（464～469）　A2c類（465）、B2e類（464）、C2b類（466）、C2c類（467）、E2e類（468）、H類（469）がある。466は大形で、肩部に浮線文a2種が施される。467は頸部と体部上位に綾杉文が配され、肩部に浮線文f1種が施される。469は口頸部が長く大きく外傾するもので、口縁部に浮線文e2種と刺突文が施され、頸肩境に平行沈線文2条が描かれる。

深　鉢（470・471・473）　B6a類（470・471）、B7b類（473）がある。470は口縁端部が上方から押すように面取りされて内外に粘土がはみ出す。内面にミガキが加えられる。473は条痕文に結節縄文Lを加えた例である。

壺（474）　B類で、口縁部に平行沈線文が施され、肩部に浮線文e2種が描かれる。内外面ともミガキ

が加えられる。

その他（472）　472は甕ないし深鉢の底部であり、平行沈線文が施される。

7）SC2227及びS1層出土の土器（475～518）

浅　鉢（475～491）　B～D・I類がある。波状口縁や内面突帯状口縁を有するものが少なく、文様帯幅も狭くなる傾向を読み取れる。B類はB1類（475～481・491）、B8類（482・483）である。浮線文種類はa1種（475・476）、a2種（477）、a3種（479）、b3種（480）、d2種（478）、e2種（481）、e3種（491）である。475は4段構成のa1種ながら、上下が詰まり文様帯幅が狭い。476は口縁部の上端に無文帯を持つ。477は浮線文が口縁部上端に直接連結する。481は横に間延びした浮線文e2種で、沈線内のミガキは顕著でない。483は口縁部に幅広の無文帯と内面突帯状口縁を持つ。C類はC1類（484～486・488）であり、浮線文種類はa2種（484）、e2種（486）、f1種（485）、f2種（488）である。484の浮線文a2種もS4・S3層出土のものより横に間延びする。488は上段の交点に縦のスリットが施される。D種はD1類a4種（489）とe3種（487）である。489は左右のモチーフが斜めの浮線で連結されるもので、文様帯下端に連結する部分と「日」字状のモチーフとが交互に描かれる。I1類490は口縁部を面取りして短い口外帯風に作り出し、頸部無文帯を挟み浮線文a2種が描かれる。胎土は角閃石を多量に含み、一般的でない。

台付浅鉢（492）　台付浅鉢の下半で、「ハ」の字状に短く開く台部がつく。

鉢（493・494）　A類493は口縁部上端に眼鏡状文が施され、その下に浮線文d2種が描かれる。D類494は丸底になる可能性がある。

甕（496～509）　A～G類があり、S4・S3層に多かったB類は少なくなり、様々な形態のものが認められる。A3a類497は肩部に眼鏡状文が施される。A3d類499は頸部が横位のナデで仕上げられる。B類はB2e類（500）、B3a類（498）がある。498は肩部に浮線文e1種が施される。C類はC1a類（501）、C2b類（496）、C3a類（503）、C3d類（502）である。503は頸部無文帯の幅が狭く、口縁部に浮線文b3種が施される。E類はE3a類（504・507）、E3d類（505・506）である。504は口縁部内面に2条の平行沈線文が引かれる。507は肩部に工字文が描かれ、体部に本遺跡では珍しい付加条縄文が施される。505は頸部が横位のミガキで仕上げられるが、506の頸部はナデである。F3a類509は口縁部に浮線文f2種が施され、外面のミガキが著しい。G3a類508は頸部が内傾した後に口縁部が外反し、肩部には浮線文a2種が施される。

深　鉢（495・510～514）　A・B・C類があり、A類が少なくなる。A1類495は浮線文e1種が施される。B8類511は全面丁寧なナデ調整である。C類はC1類（510）、C7a類（513）、C7b類（512）である。510は口縁部に浮線文d1種が施される。512は体部に条痕文施文後に縄文Lが加えられる。514は深鉢の底部とみられる。

壺（515～518）　B類515は口縁部と肩部に浮線文f2種が施される。D類516は肩部に眼鏡状隆帯文が施される。G類517は肩部に浮線文f1種が施され、底面に沈線で描かれた円文が認められる。

E　SD1420右岸1地区の土器（図面図版170～188、写真図版125～139）

1）土器出土状況（図面図版27～33・39・42・45・47・48）

本地区は各層から土器が出土した。D層はごくわずかに過ぎないが、S5層は最もまとまって出土した。

S4層も完形土器を含む多量の土器が出土したが、S3層はこれに比べて少ない。S2層もほとんど出土しない。S1層は極めて多量の土器片が出土した。なお、本地区のSD1420右岸斜面１ではS4～S3層期に廃棄された土器が出土しており、SD1420右岸２地区の下に位置するSD1420-21層出土土器は確実にS4～S3層期のものであり、ここで提示する。これらは土器編年において重要な資料である。

2）遺構出土の土器（519～530）

SB6-P919（528～530）　柱根の底面及びその周囲からまとまって出土したものであり、掘立柱建物構築の際に木柱の礎板・根固めとして入れられたものと考えられる。528は大形の深鉢B7a類で、ほぼ全形が残る。条痕文施文後に口縁部に縄文Ｒが施される。529は中形の深鉢B7a類で、山形突起１と２が交互に配される。530は深鉢ないし甕の底部で上半は認められない。

SB7-P948（520）　浅鉢C4c類で、沈線により構図の乱れた変形工字文が施される。

SB41-P1980（521）　甕B3a類で、肩部に工字文が施される。

SB50-P2179（522）　甕C3c類で、口縁部に匹字文、肩部に浮線文e2種が描かれ、肩部に条痕文と綾杉文が施される。

SH1418（523）　小形の甕B3e類で、内外面に炭化物が濃密に付着する。

SK851（524）　浅鉢B1類で、口縁部に浮線文f1種と同一の構図ながら２条単位の隆線で描かれる珍しいものである。

SK914（519）　SB4-P923出土土器と接合したが、SK914がSB4に切られていることからSK914に伴いS4層期に所属するものと考える。甕A2a類で波状口縁を持ち肩部に浮線文a2種が施される。

SK1932（526・527）　526は浅鉢C7類で、口縁部に綾杉文が２段施される。527は壺Ｄ類の肩部で、工字文が施される。

SK2279（525）　甕C2類で、口頸部に浮線文f1種が施され、肩部から体部にかけて２～３条の沈線で雷文風の工字文が描かれる。反転部は鋭角的な部分と曲線的な部分が認められる。

3）Ｄ層出土の土器（531・532）

浅　鉢（531）　D1類であり、浮線文b3種が施される。

深　鉢（532）　C7a類であり、縄文Ｌが施される。

4）S5層出土の土器（533～551）

浅　鉢（533～538）　Ｂ・Ｃ・Ｊ類がある。Ｂ類はB1類（533～535）、B8類（536）がある。浮線文はa1種（533）、d1種（535）、e3種（534）である。534の浮線文交点には縦のスリットが施される。C1類537は幅の狭い文様帯に浮線文d2種が施される。J1類538は丸底で、浮線文f1種が施される。

甕（539～546）　Ｂ～Ｅ類がある。Ｂ類はB3a類（539・540・546）である。539は口縁部が浮線文d1種ながら、肩部は立体的な眼鏡状隆帯文が施される。540は浮線文e1種が口縁部上端に直接連結し、頸部は横位のナデ調整である。546も口縁部の浮線文e2種が口縁部上端に直接連結し、肩部は立体的な浮線文f1種が施される。これらは肩部が強く張り出し、肩部に凹凸のある立体的な眼鏡状隆帯文や工字文が施されることや、口縁部浮線文が上端に直接連結しており、本層の特徴といえよう。浮線文が口縁部上端にＣ類はC2e類（541）、C3a類（542）である。Ｄ類はD2a類（544）、D3e類（545）である。544

は頸部に細い棒状工具で平行沈線文が８～12条引かれ、これを区切るように縦位沈線が一定の間隔で１条ずつ施される。E類はE2e類（543）である。

深　鉢（547・548）　A6a類（547）、B7b類（548）がある。547は複合口縁上に平行沈線文が描かれる。

壺（549～551）　A類（549）、B類（550）、F類（551）がある。549は口縁部上端に工字文が施され、その下に浮線文a2種が描かれる。550は口縁部に浮線文f2種が施される。

5）S4層出土の土器（552～608）

浅　鉢（552～567）　A～D・F・G類があり、主体はB・D類である。A類はA1類（552）で、内面突帯状口縁となる。B類はB1類（553～558・560）で、浮線文種類はa1種（557）、b2種（553）、d3種（554）、d5種（558）、e2種（555・556）、f2種（560）である。554は口縁部内面が受け口状に上方を向く。555・556は波状口縁を持つ。557は浮線文a1種の典型例で、モチーフ下端は体部に直接連結し、交点に縦のスリットが施される。558は浮線文が２段施されるd5種の好例で、丁寧にミガキが加えられる。560は文様帯の上端にやや幅広の沈線が施され、浮線手法でf2種が描かれる。C類はC1類（559）、C10類（561）である。559は波状口縁で浮線文b2種が施される。D類はD1類（562～565）で、浮線文種類はa2種（562）、d1種（563）、f1種（564・565）である。562は皿形に近いもので、口縁部内面の肥厚の仕方はS4層では珍しい。F類567は口縁部以下が無文でミガキが加えられる。G1類566は狭い文様帯に浮線文a4種が施される。

鉢（568～570）　A類（568・569）、F類（570）がある。569は平面形が楕円形を呈するもので、内面口縁部が長く突帯状に伸びる。浮線文e3種は口縁部上端に直接連結する。570は交点間を結ぶ隆線に沈線を加えて２条にしたもので、中央地区出土454などと同じ手法である。

甕（571～589）　A～F・I類があり、主体はB・C類である。A類はA2a類（571・572）で、571は頸部綾杉文の一部が三角形集合沈線となり、刺突文で充填される。572も独立綾杉文が施され、刺突文で充填され、口縁部は一部浮線文e2種となる。B類はB2a類（575）、B2e類（574・576）、B3e類（573・577）である。575はB2a類の好例で、口縁部に浮線文d1種、肩部は幅広の隆帯に下方から抉りを入れた工字文が施される。576は口頸部が内傾するものの、肩部が角張ることからB類とした。573は複合口縁上と肩部隆帯上に刺突文が施される。C類はC1b類（578）、C3a類（581）、C3c類（580・582）、C3d類（579・583・584）である。578はC1b類の好例で、572と同様に頸部独立綾杉文の間隔が空いたところは刺突文で充填される。581は波状口縁で、肩部に眼鏡状文が施される。580は肩部に眼鏡状文と綾杉文が施される。582はC3c類の好例で、肩部に浮線文f1種と綾杉文が施される。D類はD1b類（585）、D3a類（586）である。586の頸部は短く、ミガキが施される。E類はE2a類（587）で、頸部と体部にそれぞれ綾杉文が施される。F類はF3e類588で、体部に半截竹管状工具により条痕文が施される。I類はI3a類589で、口縁部が短く外反し、肩部に浮線文f2種が施される。

深　鉢（590～605）　A～C類があり、いずれも多い。A類はA6c類（590）、A6e類（591）、A7b類（592・594）、A7d類（593）である。B類はB2類（595）、B6a類（596）、B6e類（597）、B7a類（598）、B7b類（599・600）である。595は体部に隆線表現の入り組み状工字文が数段施される。600の体部縄文は条が縦位になるように施される。C類はC1類（601）、C6d類（602）、C7a類（603）、C7b類（604・605）である。601の口縁部浮線文f1種は口縁部上端に直接連結する。605は口縁部に結節部分

のみ回転施文される。

壺（606～608）　A類（606）、B類（607）、H類（608）がある。607は口頸部に浮線文e2種が施され、肩部には浮線文の交点とみられる突起が観察できる。

6）S3層出土の土器（609～625）

浅　鉢（609～612）　B1類（609～611）、C1類（612）がある。611は上段に浮線文f1種、下段にd2種が施される。612は浮線文a3種で、交点間の浮線が3条となる。

甕（613～618・625）　B3e類（613）、C3e類（614）、D2e類（615）、E3a類（616）、E3d類（617）、E3e類（618）がある。613は口縁部に結節縄文L、肩部以下は網目状撚糸文Rが施される。616は隆線手法④で浮線文f1種が描かれる。このほか、625は甕の下半である。

深　鉢（619～622）　A6a類（619）、B1類（620）、B8類（621）、C6c類（622）がある。620は浮線文f1種が施される。622は口縁端部に板状工具による押し引き文が認められる。

壺（623・624）　A類（624）、B類（623）がある。623は肩部に浮線文f2種が施される。

7）S2層出土の土器（626～637）

浅　鉢（626～634）　B1類（626～629・631）、C1類（630）、C3類（632）、C4c類（633）、D1類（634）があり、S4・S3層になかったC3・C4類が認められる。631は平行な浮線を上下に押圧を加えて匹字状の交点を作り出すもので、左右のモチーフが連結しない浮線文c1種である。632は上下交互の匹字文が描かれる。633は細く浅い沈線により変形工字文風のモチーフが描かれる。

甕（635～637）　C2b類（635）、C3a類（636）、E3d類（637）がある。636は幅の狭い頸部無文帯を有す。

8）S1層出土の土器（638～669・671～729）

浅　鉢（638～669・671～680・684）　B～D・F・G・I類があり、バラエティーが豊富になる。主体はC類である。波状口縁や内面突帯状口縁は少なく、口縁部文様帯が狭くなる。B類はB1類（638～641）、B6類（642）、B8類（643）である。浮線文種類はd1種（638）、e2種（639）、f2種（640）、g2種（641）で、これまで認められなかったg2種が現れる。642は2段構成で、上段に「日」字状文、下段に楕円文や「目」字状文が施される。C類はC1類（644～659）で、浮線文種類はa1種（644・645）、a2種（646）、a3種（647）、b1種（648）、b2種（649・651）、b3種（650）、d1種（652）、d2種（653）、d3種（654）、e2種（655～657）、f1種（658・659）である。645は浮線文a1種が器形C類に採用された例で、4段構成ながらS4・S3層出土資料より縦幅が狭くなっていることが分かる。また、交点上に縦のスリットが加えられる。646も文様帯の幅が狭い。651はb2種がC類に採用された好例で、沈線内のミガキは顕著でないため、交点の沈線末端に交点を作り出した際の粘土の移動痕が残る（本編第161図・交点B手法）。654は口縁部上端に浮線文f1種があり、その下に6条からなる浮線文d3種が描かれる。659はf1種が2段描かれる。C類はほかにC2類（661）、C3類（662・663・665）、C4a類（664）、C4b類（666）、C5a類（660）、C6類（667）、C8類（668・669）があり、S4・S3層にはないものが認められる。661は匹字部と反転部を持つ工字文が施される。662は下方に向く匹字文で、胎土に石英を含み一般的でない。665は上下に対向する匹字文で、口縁端部と口縁部内面の上端に沈線文が施される。

口縁端部に沈線文が施される点は東北地方で普遍的に認められる特徴で、胎土に石英を含むことから搬入品の疑いがある。このように本層ではC3類がまとまっており、本地区のS1層の特徴といえよう。664は沈線による工字文である。666は典型的なC4b類だが、沈線は浅く細い。660は交点や中点が曲線的なもので、交点1の抉りは深く、やや盛り上がる。胎土は石英を含み一般的でない。667は沈線で楕円文が上下2段に位置を半単位ずらして施される。D類はD1類（671・672）、D8類（673）がある。F類はF1類（674）、F3類（676）、F8類（677）である。674は下半にふくらみを持ち、浮線文a3種が施される。676は上方に向く匹字文が施され、外面に丁寧なミガキが加えられる。677は甕にみられる鋸歯状集合沈線文と刺突文の充填が浅鉢に採用された例である。F類675は上半を欠くが、欠損部からそのまま外反して口縁部に達する丸底の器形で、底部に平行沈線文が施され、全面ミガキが顕著である。胎土に石英と海綿骨針が混入し、搬入品の疑いがある。山形県天童市砂子田遺跡［森谷・佐竹ほか2003］などに類例があり、大洞A2式土器［鈴木1987］と考えられる。G類はG2類（678）であり、文様帯の上段に隆線による匹字文があり、その下は反転する工字文と考えられる。I類はI1類（679）、I3類（680）である。679は口外帯・頸部無文帯・体部文様帯を持ち、浮線文d3種は沈線部を浅く削り込んで浮線を表現する手法であり、氷Ⅰ式中段階［中沢1998］に相当しよう。胎土に角閃石を含み、搬入品の可能性がある。684は浅鉢の下半で、口縁部に浮線文が施される。

台付浅鉢（681）　「ハ」字状に開く台部を有し、下端に平行沈線文が施される。

鉢（682・683）　いずれもA類で、浮線文は682がa2種、683がd1種である。

甕（685～711）　A～E類があり、C・D・E類が主体となり、S4・S3層で多かったB類が少なくなることが特徴である。A類はA3d類（685）で、肩部の張り出しが弱く細身な器形が特徴である。頸部にミガキが加えられる。B類はB1a類（686）で、口頸部に浮線文d1種が施される。C類はC1a類（687）、C3a類（688・689・710）、C3d類（690・691）、C3e類（692・693）、E3d類（694）である。689は頸部にミガキが施され、肩部に浮線文e2種が描かれる。694は複合口縁上に平行沈線文が加えられる。肩体部の条痕文は下位から上位にかけて縦位→斜位→横位に施文される。710は肩部に「目」字状文と斜線文が描かれ、これらの間に瘤状の突起が貼付される。D類はD1b類（695）、D2b類（696・697）、D3a類（698）、D3d類（699）、D3e類（700）である。696は頸部に3条の刺突列点文が施される。697はD類の典型例で大形である。口縁部に結節縄文L、肩部に浮線文b3種が施される。698は口縁部に沈線で流水状の工字文が描かれるもので、浅鉢文様分類の2b類に相当する。E類はE2e類（701）、E3a類（702～705）、E3b類（706～708）、E3d類（709）である。702は口縁部に上下交互の匹字文が施される。703の肩部匹字文は中央の隆線を下方に押圧を加えて匹字部分が作られる。706は肩部綾杉文の幅と文様が整っていない。708は鋸歯状集合沈線文が施されるが、S4・S3層出土土器のように刺突文による充填はない。I類はI3d類（711）で、肩部の張り出しが弱く全体的に細身である。口縁部は肥厚し、頸部にミガキが施される。肩部は縦位の条痕文に結節縄文LRが加えられる。

深　鉢（712～721）　A～D類があり、C類が目立つようになる。A類はA7a類（715）で、口縁部に輪積み痕4条が明瞭に残る。B類はB6a類（712）、B7a類（718）である。718は口縁端部に算盤玉状の連続押圧文が施される。C類はC1類（716）、C6a類（717）、C7b類（714）、C7d類（713）、C8類（719・720）である。717は縄文LRの条が縦位になるよう斜位に施される。D類はD7d類（721）で、口縁端部に押圧を加えて波状口縁とする。

壺（722～728）　A類（722・725・728）、G類（724）である。722は口頸部が「く」の字状に屈曲

し、口縁部に浮線文d1種が施される。728は口頸部を欠くがA類と考えられる。肩部は変形工字文風の沈線文が認められ、体部は綾杉文が数段施される。724の浮線文は横長のb3種とみられる。また、723は壺の口縁、726・727は壺の底部とみられる。

その他（729）　甕ないし深鉢の底部で、木葉痕が明瞭に観察できる。

9）SD1420右岸斜面1及びSD1420右岸2地区下の川底の土器（735～828）

a　21層出土（S4～S3層期）の土器（735～801）

浅　鉢（735～756・758）　B～D・F類がある。S4・S3層出土土器と同様に波状口縁や内面突帯状口縁を持つものが目立つ。B類はB1類（735～743）であり、浮線文種類はa2種（735・736）、b1種（737）、b2種（738）、d1種（740・741）、d2種（739）、e2種（742）、e3種（743）である。735は浮線文が口縁部上端に直接連結する。738は多条の平行沈線文を区切ることによって作り出された浮線文で反転部は連結しない。739は口縁部上端に眼鏡状文も施される。742は上段の交点が高くつまみ出される。C類はC1類（744～748）で、浮線文種類はa3種（744）、b1種（745・746）、e2種（747）、f1種（748）である。744は典型的な浮線文a3種で、S4～S3層期の特徴を示す。745は沈線内のミガキが交点の末端まで丁寧に施される（本編第161図・交点A手法）。D類はD1類（749～753）、D8類（754・755）であり、浮線文種類はb1種（749）、b3種（750）、d1種（751）、e2種（752）、e3種（753）である。751は浮線文の下に斜線文が施される珍しいものである。753の浮線文は口縁部上端及び体部に直接連結する。754は細い平行沈線文が3条施される。F類はF1類（756・758）である。756は外面のミガキが著しい。758は口縁部が大きく外傾し、内外面にミガキが施される。

鉢（757・759）　A類（757）、E類（759）がある。757は内面全体に炭化物の付着が濃く、内外面とも口縁部～体部上位に赤褐色の漆が付着する。759は肩部に浮線文d1種とf1種が上下に施される。

甕（760～781・795）　A～C・E・I・G類があり、S4・S3層と同様にB類が安定して出土した。A類はA1a類（760）、A3a類（761）である。760は菱形沈線文が縦位沈線により区切られており、菱形内部は刺突文で充填される。761は肩部に眼鏡状文が施され、交点にスリットが加えられる。体部は縦位の条痕文が施される。頸部は濃密な炭化物のため縄文などの施文を確認できない。B類はB1a類（762・766）、B1b類（765）、B2b類（767）、B3a類（763・768）、B3d類（764）である。762の肩部には眼鏡状文が施される。762の口縁部浮線文は2段構成のe3種である。765は頸部独立綾杉文に平行沈線と刺突文が充填される。768も761と同様の眼鏡状文が施される。C類はC1c類（769）、C2a類（770）、C3a類（771・772）、C3b類（773）、C3d類（774）、C3e類（775）である。771は帯状の隆帯に下方から抉りを入れて匹字文に類似したモチーフに整えている。773の肩部は横に間延びした綾杉文が施される。E類はE2e類（776）、E3d類（777）である。I類はI1b類（778）で、肩部は丸く張り出し、短く屈曲する頸部に綾杉文が施される。G類はG3a類（779・780）である。779は頸部が非常に長く、肩部が角張る。780は肩部が丸く張り出し、口縁部に浮線文b3種が施される。781は口頸部を欠く甕である。また、795は口頸部に蛇行する隆帯が貼付され、この上に押し引きによる刻目文が施される。

深　鉢（782～792）　A～C類がある。A類はA6b類（782）で、口縁部の平行沈線文に結節縄文LRが加えられる。B類はB7a類（783）である。C類はC6a類（784・786）、C6d類（785・787）、C6e類（788・790）、C7d類（789）、C8類（791・792）である。786は平行沈線文間に押し引きによる列点文が施される。788は体部のミガキが著しい。

壺（793・794・796～800）　A類（793）、B類（796・797・800）、C類（799）、F類（794・798）があるが、793・794は甕の可能性がある。793は口縁部上端に眼鏡状文があり、これに連続して変形した浮線文a4種が施される。796は口縁端部に沈線文が引かれ、口縁部に細かな縄文LRと平行沈線文が施される。797は口縁部に注口状の張り出しがあったものと推定されるもので、頸部に橋状把手が2個付属する。口縁部に幅の広い平行沈線文が引かれ、これに連続して変則的に浮線文b4種が施される。799はC類の優品である。頸部から肩部にかけて弧状にくぼみ、肩部に平行な隆帯が貼付される。これに連なって体部に逆「U」字状の隆帯が6単位施され、肩部隆帯との交点とその左右下にはスリットが加えられる。体部の隆帯内には「冂」字状の沈線文が充填される。口縁部は浮線文f1種が描かれ、底部は平行沈線文が施される。なお、胎土は一般的なものである。800は口縁部に匹字文が4単位施される。

その他（801）　甕ないし深鉢の底部で、内面と割れ口に赤彩が濃密に認められる。漆要具として転用された可能性がある。

b　18～16層（S4～S3層期）出土の土器（802～817）

浅　鉢（802～807）　B1類（802～804）、C1類（805・806）、G1類（807）がある。802は浮線文a2種の好例である。803の浮線文e2種の交点間を結ぶ水平線が2条であり、中央地区のS4層出土324に類似する。また、804は内面突帯状口縁で、浮線文d3種は交点間を平行沈線が貫く。口縁端部に沈線文が施される。806は浮線文d2種である。807は口縁端部に沈線文が施され、口縁部上端に突起が付く。口縁部浮線文e2種は沈線内に丁寧なミガキが加えられる。

甕（808～812）　C3a類（809）、C3d類（810）、E2d類（812）、E2e類（811）、G3a類（808）がある。809は体部が球形状を呈し、肩部に匹字文が施される。

深　鉢（813～817）　B6d類（814）、B7a類（816）、C6a類（813）、C7b類（815）、C7d類（817）がある。813・816は口縁端部を連続に押圧を加えて波状口縁とする。

c　11～6b層（S2層期）出土の土器（818～828）

浅　鉢（819・821・823～825）　B1類（821）、C1類（819）、C8類（824・825）がある。821は浮線文e3種が口縁部上端に直接連結する。819は浮線文a4種で、交点間の水平線が2条となる。823は浅鉢の下半で、底面に網代痕を観察できる。

甕（820・822）　B2d類（820）、C3e類（822）があり、820は口縁端部が算盤玉状に連続押圧され波状口縁を呈す。

深　鉢（826・827）　A6a類（826）、B7b類（827）がある。827は口縁部に結節回転が2段施文される。

壺（818・828）　B類（818・828）がある。828は口縁部に平行沈線文が加えられる。

10）細別層位不明の土器（670・730～734）

浅　鉢（670・730～732）　B1類（730・732）、D1類（670）、D10類（731）である。670は完形で、浮線文e2種が施される。732は波状口縁を持ち、幅の広い文様帯に浮線文b1種が施される。

甕（733・734）　B2d類（733）、D2b類（734）で、734は口縁部の平行沈線文間に列点文が施される。

F　SD1420右岸２地区の土器（図面図版188～195、写真図版139～144）

1）土器出土状況（図面図版30・31～33・48～52）

ここで提示する土器はすべてS1層期に所属する。17D～Eグリッドや18～19B～Cグリッドでは基本層序のS1層・Ⅵ層・SD1420-6層及び４～３層から多量に出土した。また、SD1420斜面２付近ではSD1420-2層→１層→B9～B7層の順に層位的に出土しており、本地区の土器変遷を知る上で重要である。本地区の土器は、これまでのS1層出土土器と異なる特徴が見出される。すなわち、浅鉢の変形工字文５類が多数出土することと、浮線文が施されるものが少ないという２点である。このことはS1層期のなかの時期差を示している可能性が高いものと考えられる。

2）遺構出土の土器（829～835）

SB15-P1519（831）　甕C3d類で、口縁部内面に平行沈線文が３条施される。

SB15-P1523（829・830）　浅鉢C1類で、浮線文f1種が施される。830は鉢E類で、頸部にミガキが加えられ、体部の張り出し位置に平行沈線文が施される。

SB18-P1578（832）　甕C3d類で、口縁部に縄文LRと平行沈線文が施される。

P1672（833）　浅鉢D6類で、口縁部に楕円文の中に平行沈線が３条引かれる。

SK1691（834）　深鉢A7d類で、体部に条痕文を縦位に施した後に、口縁部に横位に加える。

SK2221（835）　浅鉢C1類で、横に間延びした浮線文e2種が施される。

3）S1層・Ⅵ層・SD1420-6層出土の土器（836～890）

浅　鉢（836～854）　B～D・G・H類があり、C類のほかG・H類が卓越する。波状口縁は認められず、内面突帯状口縁は浮線文１類では激減する。また、口縁部文様帯の幅はS4・S3層期に比べ狭くなる。B類はB1類（836）で、浮線手法により浮線文b3種が施される。C類はC1類（837～840）、C2b類（841・845）、C6類（842）である。浮線文種類はb1種（837）、e2種（838・839）、f1種（840）である。837は口縁部上端に列点文が施され、浮線文の交点は一部連結せずに反転するか所が認められる。841は沈線により流水状の工字文が描かれる。842は「回」字状文が施される。D類はD8類（843）である。G類はG2b類（844）、G5b類（846・851）である。844は沈線により平行な工字文が施される。846は口縁部上端を欠くが、交点２・中点２を確認できる。体部は３条の縦位沈線文が４単位施され、底部にも平行沈線文が加えられる。851はG5b類の好例である。各交点・中点の匹字部分に粘土瘤は貼付されず、抉りもほとんどない。胎土に海綿骨針を含むが、浮線文土器の中にも海綿骨針を含むものが若干あり、搬入品と断定できない。H類はH4a類（847～849）、H5b類（850・852～854）である。847は頂部に沈線文が加えられて前後二股に分かれる大振りな山形突起１を持つ。曲線的に反転する交点と副文線が認められる。848は胎土に石英と海綿骨針を含み、849も海綿骨針を含む。850はミガキが著しく、やや幅広の沈線が施される。中点１の匹字部は鋭角的だが、粘土瘤・抉りは施されない。胎土に石英・海綿骨針を含み、一般的でない。851～853は5b類としたが、4a類の可能性もある。

台付浅鉢（855・857）　855は台部が高く、底台境と台部下端に平行沈線文が施される。857は口縁部と台部を欠き、底台境に平行沈線文が施される。

鉢（856・858・859）　C類858は頸部無文帯を持ち、縄文LRを口縁部で横位に、体部で縦位に施さ

れる。F類856は頸部無文帯を持ち、体部に斜線文が施される。F類859は口縁部に平行沈線文が施される。

甕（860～876）　A・C～F類があり、B類は認められず、D・E類が目立つ。A類はA3a類（860）で、口縁部は平行沈線文を区切るように縦位沈線が突起下に施され、肩部に匹字文風の沈線文を確認できる。ミガキが著しい。C類はC1b類（862）、C1c類（861）、C3b類（864）、C3d類（863・865）である。861は反転部を持つ沈線文が施されるが、詳細は不明である。864は肩部に鋸歯状沈線に平行沈線を加えることで三角形集合沈線文となる例である。頸部はミガキが加えられる。D類はD2e類（866・867）、D3b類（868）、D3d類（869・870）である。866は縦位の条痕文を基調とし、口縁部と肩部にのみ斜位に短く施される。867は口頸部に結節縄文Rが連続的に施される。868は864と同様に肩部に三角形集合沈線文が施される。E類はE2e類（871）、E3a類（872）、E3b類（873・874）である。872は口縁部に浅鉢文様2b類と同じ沈線による流水状の工字文が描かれる。874も三角形集合沈線文が施される。F2d類875は胎土に石英を含み、一般的でない。なお、876は甕ないし深鉢の底部で、底面に網代痕が観察できる。

深　鉢（877～886）　A～D類があり、C類が主体となる。A類はA7b類（877）で、口縁部に結節縄文Rが加えられる。B類はB7b類（878）で、口縁部に結節縄文Lが2段施される。C類はC2類（879）、C3類（880～883）、C6a類（884）、C7b類（885）である。879は隆線表現の工字文である。880・881・883は三角形集合沈線文が深鉢に採用された例である。882は口縁部に幅広く綾杉文が施される。884は縄文LRの条を垂直に表現したものである。885は撚糸文Rに結節縄文Rが加えられた例である。D6e類886は小形のもので、体部が平行沈線文で充填され、縦位沈線文が6単位加えられる。

壺（887～890）　A類（887）、B類（888・889）、H類（890）がある。888は沈線で横長の綾杉文が施されるが、沈線が反転する部分もあり、工字文が描かれている可能性がある。889は匹字文と沈線が反転する工字文が認められる。890は隆線表現の流水状の工字文が施される。H類に特徴的な内部への赤色顔料の付着は確認できない。

4）SD1420-4・3層出土の土器（891～929）

浅　鉢（891～903）　C・E・H類がある。浮線文は狭い文様帯に浮線手法で施されるものが目立つ。また、変形工字文5a・5b類が施されるものがあり注目される。C類はC1類（891～895）、C2b類（899）、C3類（896・897）、C4b類（898）、C6類（900）である。浮線文種類はb3種（891）、c2種（893）、e2種（892）、h種（894・895）である。891はC1類b3種の典型的な例で、幅の狭い文様帯に一部乱れがあるものの2段構成のモチーフが描かれる。893は数少ない浮線文c2種の例で、変形工字文の中点1と交点2に類似する匹字部と反転部を有し、浮線手法により変形工字文風のモチーフが描かれた例として注目される。類似品はほかにSD1420左岸地区出土1085がある。899は沈線により入り組み状の工字文が描かれる。895は多条の浮線でZ字状のモチーフを交互に連続させる浮線文h種だが、上下の交点間を斜線で結ぶ際に左上がりの斜線上に右上がりの斜線が「X」字状に重ねられていることが分かる。894は交点が連結せずに反転する。896は上下交互の匹字文が施される。898は2条の沈線で三角形に施され、その底辺に水平な副文線が加えられる。交点は途切れて反転しない。900は「目」字状の楕円文が施される。E類はE2a類（901）で、弧状沈線を上下交互に入り組ませ、副文線を加えることにより隆線表現の入り組み工字文が描かれる。H類はH5a類（902）、H5b類（903）である。902は文様

5a類の典型で、曲線的な隆線で三角形のモチーフ４単位が施される。三角形内の彫去は隆線沿いに深く、三角形の中央にやや盛り上がりを観察できる。中点１・２は匹字となり、小さな粘土瘤が貼付される。底部に平行沈線文が認められ、台付浅鉢の可能性もある。903は文様5b類の好例で、やや太目の沈線で４単位の変形工字文が描出される。交点・中点の匹字部分は若干盛り上がり、抉りが加えられる。三角形内はミガキが丁寧に施される。胎土は石英と海綿骨針を含み、一般的ではない。科学的な胎土分析によっても本遺跡の一般的な胎土と異なる結果が得られており（関連諸科学編第Ⅳ章参照）、搬入品の可能性が高い。なお、902も胎土に石英を含み、搬入品の疑いがある。

鉢（904・905）　いずれもＣ類である。904は頸部に無文帯を有し、体部上位に浮線文b3種が施される。905は全面に縄文Ｒが施されるが、炭化物が濃密に付着し観察できない。

甕（906～921）　Ｃ～Ｆ類があり、Ａ・Ｂ類は認められない。Ｃ～Ｅ類は頸部を無文とする３類で占められることが注目される。また、口縁部に平行沈線文が施されるものは、隆線部が器面より盛り上がるものが多いことも特徴といえよう。Ｃ類はC3c類（906）、C3b類（907）、C3d類（908～910）である。906は肩部に反転部を持つ工字文が施され、体部上位に綾杉文が加えられる。907は山形突起１の内外面に三角形の沈線文が加えられる。肩部は三角形集合沈線文が施される。910は肩部に条痕文が施された後に結節縄文Ｒと浅い平行沈線文が加えられる。Ｄ類はD3b類（912）、D3d類（911）である。912は体部の縄文LRが縦位ないし斜位に施される。甕Ｅ類はE3a類（913）、E3b類（914）、E3d類（915～919）である。913は口縁部の平行沈線文下に沈線で工字文が描かれる。917・919は口縁部平行沈線文間の隆線の盛り上がりが顕著である。Ｆ類はF2b類（920）で、頸部の屈曲が少ない。921は甕の肩体部で、縦位の条痕文に縄文Ｒが加えられる。

深　鉢（922～927）　A7b類（922）、B7a類（923・924）、B7b類（927）、C3類（926）、C6d類（925）がある。924は口縁部上端にナデが加えられる。927は口縁部の結節縄文上に横位のミガキが加えられる。また、体部の縄文LRは条が縦位になるよう施文される。926は変則的な綾杉文が施される。

壺（928・929）　Ａ類（928）、Ｂ類（929）がある。928は口縁部に浮線文b3種が施される。929は口頸部を欠くもので、肩部が強く張り出す。

5）SD1420-2層出土の土器（930～978）

浅　鉢（930～940・942～946）　Ｂ・Ｃ・Ｈ類が認められる。Ｃ類が主体で、変形工字文H5b類が多い点が注目される。本層は下からSD1420-2c・2b'・2b・2a'・2a層に５細分されるが、H5b類944～946は2a'層ないし2a層から出土し、これ以下では認められないことから、変形工字文5b類はSD1420-2層から出現した可能性もある。一方、浮線文C1類はSD1420-2c～2a層の各層に認められる。以上から、C1類とE5b類は並行するものの、それがSD1420-2a層以降である可能性が指摘できたことは、両者の時間的関係を検討する上で極めて重要である。

Ｂ類はB2a類（930）で、口縁部に隆線による工字文が描かれる。胎土に海綿骨針を含む。Ｃ類はC1類（931～936）、C2b類（937～939）、C3類（940）、C4b類（942・943）である。浮線文種類はa4種（931）、d2種（932・933）、f1種（934）、g2種（935・936）があり、g2種が本層の特徴といえよう。931・932は２段構成の直線的な構図である。932は交点に縦のスリットが加えられる。934は匹字文に類似するが、交点は２条の浮線が離れず連結する。935は２～３条単位で網目状の構図が描かれる。936は上段の交点に大振りな突起が付く珍しいもので、下段の交点では連結せず反転する。937～939

は細い沈線で流水状や入り組み状の工字文が描出される。940は浮線で匹字文が描かれる。942は反転部が途切れ、副文線が２条加えられている。943は三角形内に副文線が施されない単位が認められる。945は外面が研磨される。946は交点・中点の抉りはほとんどなく、粘土瘤が添付されず盛り上がらない。944・946は胎土に石英を含み一般的でない。

鉢（941）　Ｅ類で、体部上位に刺突による列点文が施される。

甕（947～964）　Ｃ～Ｆ類があり、S4・S3層で主体を占めるＢ類は認められない。また、各類共SD1420-4～３層と同様に頸部を無文とする３類で占められる。Ｃ類はC3a類（947）、C3c類（948）、C3d類（949～952）、C3e類（953～955）である。947は肩部に浮線文ｈ種が採用された例である。948は肩部と体部上位に上向きの匹字文が施される。951は肩部の平行沈線文間に列点文が加えられる。952の体部条痕文原体は幅が約7mmである。955は肩部に結節縄文Ｌが施される。Ｄ類はD3d類（956・957）、D3e類（958）である。957は肩部の平行沈線文間に列点文が加えられる。958は複合口縁に条痕文が横位に施文され、体部は条痕文が縦位施文される。Ｅ類はE1b類（959）、E3d類（960～963）である。959は頸部に三角形集合沈線文が施される。960はE3類の好例で、肩部に条痕文→縄文Ｌ→結節縄文Ｌの順に施文される。961は960と同様に頸部が短めである。Ｆ類はF3d類（964）で、頸部が短く、山形突起１下に三角形の沈線文が施される。

深　鉢（965～971）　Ｂ・Ｃ類が認められる。Ｂ類はB7b類（965・966）で、966は条痕文施文後に結節縄文Ｒが２段加えられる。Ｃ類はC2類（967）、C3類（968・969）、C6a類（970）、C7b類（971）である。967は幅の広い隆線で匹字文が描かれる。969は口縁部に三角形集合沈線文が施される。970は小形のもので、底部に横位のケズリが加えられる。

壺（972～977）　本層では壺が豊富に出土し、Ａ類（972～975）、Ｆ類（977）、Ｈ類（976）がある。972は口縁部に平行沈線文が施され、外面にミガキが加えられる。973は口縁部及び肩部以下に縄文LRが施されるもので、頸部にミガキが加えられる。974もミガキ調整で、内面に指頭状のナデ痕を観察できる。977は細身のもので、頸肩境に段を持つ。全面ミガキが加えられる。

その他（978）　甕ないし深鉢の底部で、底面の木葉痕から葉を４枚重ねていた可能性を指摘できる。

6）SD1420-1層出土の土器（979～991）

浅　鉢（979～984）　Ｃ・Ｈ類が認められる。Ｃ類はC1類（979）、C4a類（981）、C4c類（982）、C8類（980）である。979は４条単位の紡錘形モチーフを２段配した構図で、浮線手法で描かれる。982は弧状沈線が施されて三角形の構図が崩れ、図面左側には補助単位文風に平行沈線文が加えられる。Ｈ類はH5b類（983・984）である。984は胎土に海綿骨針を含む。984はＨ類としたがＧ類になる可能性もある。反転する交点が認められる。

台付浅鉢（986）　ほぼ垂直に立ち上がる台部で、台部下端がわずかに外方に開く。「ハ」の字状に短く開くS4・S3層資料と異なるもので、新しい要素と考えられる。

鉢（985）　Ｃ類で、頸部を無文とせず、口縁部に平行沈線文が施される。

甕（987～991）　C3e類（987）、E3b類（988・989）、E3d類（991）、G3e類（990）がある。988・989は口縁部に三角形集合沈線文が施される。990は口縁部と肩部以下に縄文Ｒが施されるもので、頸肩境に段を有す。

7）SD1420-B9～B7層出土の土器（992～997）

浅　鉢（992）　F5b類である。体部上位が強く張り出す器形である。体部上位の変形工字文はほかの変形工字文より若干幅が広く、隆線上にミガキが施されて両端が鋭角的である。中点１は隆線を下方から押し上げて匹字とし、粘土瘤は添付されない。交点２は連結せず、体部下位に弧状沈線と３条の縦位沈線が全体に４単位施される。外面の赤彩を明瞭に観察できる。出土量は少ないが、浮線文土器１類が確認できないことは注目される。

鉢（993）　G類であり、本遺跡中唯一のものである。口頸部は鋭く屈曲し、ミガキが施される。体部上位に直線的な変形工字文が施される。交点１は粘土瘤が貼付され、匹字状に上端の隆線が連続せずに反転する。中点には匹字状となるが、粘土瘤は貼付されない。内外面ともミガキが丁寧に加えられ、外面は赤彩を明瞭に観察できる。

甕（994・995）　C3a類（994）、E3d類（995）である。994は肩部に上下交互の匹字文が施される。

深　鉢（996・997）　B3類（996）、C6e類（997）がある。996は口縁部に綾杉文が施され、体部は条痕文に縄文LRが加えられる。この条痕文の条線内には繊維痕が蛇行する部分が認められ、条線の途中に縄目を観察できる。体部に加えられた縄文LRとは原体が異なるもので、条線間が空いていることから、撚りの弱い撚糸文Lを引きずって条痕文とした、いわゆる撚糸条痕文の可能性がある。

G　SD1420右岸３地区の土器（図面図版196～199、写真図版144～147）

1）土器出土状況（図面図版34・35・53・54）

本地区は全体にわたりSD1420-2層・１層・B9～B5層が整然と堆積しており、S1層期のなかの層位的な出土状況を知り得ることができる。SD1420-2層は最も土器量が豊富で、完形に近いものも含む。1層及びB9～B7層は遺物量が多くはないが、SD1420-2c層から出土していた浮線文土器はB9層以降で破片１点しか認められず、SD1420右岸２地区の状況と共通する。ここでも、浮線文土器の終末はSD1420-1層とすることができよう。また、変形工字文5b類は確認できなかったが、楕円文６類はSD1420-2b'層から出土しており、浮線文土器と一部並行することが確認できた。

2）遺構出土の土器（998）

SK1751（998）　甕H3c類である。口縁部の平行沈線文は隆線が盛り上がり、頸部はミガキが加えられる。肩部は隆帯上に列点文が加えられ、綾杉文の下に刺突文の充填を伴う鋸歯状集合沈線文が描かれる。

3）SD1420-2層出土の土器（999～1040）

浅　鉢（999～1008）　B～E・I類がある。B類はB8類（999）で、頂部が窪む楕円状突起が付属する。C類はC1類（1000・1001）、C2b類（1002）、C3類（1003）、C6類（1005）、C8類（1004）である。1000はSD1420-2c層出土で、浮線文f1種が施される。1001はSD1420-2a'層出土で、浮線手法により浮線文g2種が施される。1002は沈線手法で工字文が描かれるが、交点で一方が反転せず不規則である。1003は上下に向く浮線文が施されるが、下向きが連続して不規則である。1005は沈線手法で横長の楕円文が描かれ、その周囲にミガキが加えられる。体部は細かな節を持つ縄文LRが施される。胎土に石英を含み、一般的でない。D類はD8類（1007）で、撚糸文Rが縦位施文される。E類はE4a類（1006）

で、典型的なものである。器高は低いが底径は大きく上げ底となる。沈線で文様が描かれるが、沈線間の隆線は幅が狭い。底部にも平行沈線文が施される。胎土に石英・海綿骨針を含み一般的でない。Ⅰ類（1008）は体部上位の隆線上に列点文が加えられ、全面ミガキが丁寧である。

甕（1009・1010～1027）　A・C～E類があり、E類が目立ち、B類は認められない。A類はA1b類（1009）で、頸部に粗く綾杉文が施される。C類はC3a類（1023）、C3b類（1010）、C3d類（1011・1012）、C3e類（1022）である。1023は肩部に匹字文が施される。1011は台付甕で新潟県内では珍しい。頸部中央にのみ隆線を配し、その上下にミガキを加えることにより隆線帯風となる。体部から底部にかけてアメ色の漆と思われる付着物を観察できる。1012は条痕文が肩部で横位に、体部上位で縦横に施される珍しい例である。D類はD3a類（1014）、D3b類（1013）、D3d類（1015・1016）である。1014は口縁部に匹字文が施され、肩部に浮線文b3種が描かれる。E類はE3c類（1021）、E3d類（1017・1018・1020・1024・1025）、E3e類（1019）がある。1021は大形のもので、頸部がやや短く、肩部があまり張り出さない。頸部はミガキが加えられ、肩部は匹字文の下に綾杉文が描かれる。1024は体部上位に結節縄文Rが2段施文される。1025も全形の分かるE類の好例で、口縁部と肩部に平行沈線文が施される。底面に幾重に重なるササとみられる圧痕を観察できる。なお、1026・1027はE類ないしC類の甕である。

深　鉢（1028～1036）　A～C類があり、本層にもA類が伴うことが確認できる。A類はA3類（1028）、A6a類（1034）、A7d類（1029）である。1028は大形で、条痕文に綾杉文が加えられる。1034は低い波状口縁で、底部にケズリ痕を観察できる。1029は中形で器高は低く、口縁部は条痕文施文後に横位にミガキが加えられる。B類はB4類（1030）、B6a類（1031）、B6e類（1032）、B7d類（1033）である。1030は体部の上下に綾杉文が2段施される。C類はC3類（1035）、C6e類（1036）がある。

壺（1037～1040）　A類（1037・1038）、B類（1039）、H類（1040）がある。1037は口縁部に施された平行沈線文下端の隆線が1039は口縁部に匹字文が施され、頸部は丁寧なナデ調整である。1040は肩部に浮線文b3種が施されるもので、赤彩は認められない。

4）SD1420-1層出土の土器（1041～1047）

浅　鉢（1041・1042）　C1類（1041）、C6類（1042）がある。1041は浮線文d1種としたが、f1種の可能性もある。1042は口縁部に沈線で「目」字状文が描かれ、口縁部内面には口縁端部から距離を置いて平行沈線文が施される。

甕（1043・1046・1047）　E3e類（1043）、G3d類（1046）がある。1043は口縁部に条痕文が横位に施された後に、横位にナデが加えられて頸部とわずかに段差が生じる。1046は頸部がほぼ垂直で口縁部がわずかに外傾するもので、肩部に結節縄文LRが施される。両者はいずれも頸部にミガキが加えられる。なお、1047はE類の肩部以下と考えられる。

深　鉢（1045）　C1類であり、口縁部に浮線文f2種が施される。

壺（1044）　A類であり、口縁部に浮線文d1種か、あるいは匹字文が施される。

5）SD1420-B9～B5層出土の土器（1048～1057）

浅　鉢（1048・1050・1051）　C1類（1048）、C2a類（1050）、C6類（1051）であり、C類のみの出土である。1048は小破片のため浮線文種類は不明だが、d1種を確認でき、2段になる可能性がある。

1050は幅が広く平らな隆線で流水状の工字文が描かれる。炭化物の付着が顕著である。1051は沈線で「日」字状文が描かれ、体部に縄文LRが施される。

台付浅鉢（1049）　短い高台が付くもので、内外面にミガキが施される。

甕（1052～1055・1057）　D2e類（1052）、D3b類（1057）、E3d類（1053・1054）、E3e類（1055）がある。1052は口縁部から肩部まで均一に縄文LRが施される。1057は頸部にミガキが加えられ、肩部は縄文LRに綾杉文が加えられる。縄文LRは条が縦位になるように施されることが特徴である。1054は口縁部がやや肥厚する。1055は口縁部が肥厚し、頸部は結節縄文LRが施される。

壺（1056）　壺B類の下半とみられ、ミガキが施される。

H　SD1420左岸地区の土器（図面図版200～207、写真図版148～153）

1）土器出土状況（図面図版36・37・55～58）

本地区の土層はSD1420-E16～E5層が整然と堆積し、1420左岸斜面ではこれにE4層が加わる。遺物包含層であるE16・E14・E12・E10・E8・E6・E5・E4層はそれぞれの間に間層を挟んで形成されていることから、層位的な出土状況を確認できる。E16・E14層は出土量がわずかだが、E12層からまとまって出土し、E10層で減少する。E8層は量が極めて少なく、集落が一時衰退したものと考えられる。E6層になると多量に出土するようになり、E5層も引き続き量が多い。このうち陸地のE5c・E6c層はそれぞれ①～③に細分され、各層から遺物が多数出土した。E4層は斜面部にのみ形成され、これより上位層に遺物が出土しないことから本遺跡の最終段階に相当するものと考えられる。E8層以下は浮線文土器が主体で、E6層以上ではこれに変形工字文が加わり、層位的に両者の並行関係を知ることができる。なお、E9層出土土器はSD1420の斜面部からのものであり、E10層から流れ込んだものと理解する。

2）遺構出土の土器（1058）

SH2088（1058）　深鉢A6d類で、SD1420-E6c③層以降に属する。口縁部に平行沈線文が間隔を空けて施される。条痕文は幅約8mmの原体が用いられている。

3）SD1420-E16層出土の土器（1059）

甕（1059）　B3e類で、口頸部はナデ調整で、肩部以下は縦位ないし右上がりの条痕文が施される。

4）SD1420-E14層出土の土器（1060・1061）

深　鉢（1060・1061）　A7a類（1061）、C7d類（1060）がある。1060は条痕文が複合口縁上に施文されず、体部に斜位施文後縦位に加えられる。

5）SD1420-E12層出土の土器（1062～1072）

浅　鉢（1062～1064）　B1類（1062）、B2類（1063）、B3類（1064）があり、B類を主体とする様相はS5～S3層と共通する。1062は口縁部上端に眼鏡状文と浮線文a1種が描かれる。1063は隆線による立体的な三角形の工字文が施される。内面突帯状口縁を有す。1064は口縁端部に沈線文が加えられ、口縁部に匹字文が施される。

鉢（1065）　F類で、口縁部に浮線文b3種が施されるものとみられる。

甕（1066～1068）　B2e類（1066・1067）、B3d類（1068）があり、B類で占められる。浅鉢同様にS5～S3層の様相と共通する。1066は頸部の屈曲が少なくE類とすることもできるが、肩部が角張ることからB類と考える。口縁部に結節縄文RLが施され、肩部以下は条痕文が縦位に施される。

深　鉢（1069～1072）　C1類（1069）、C7a類（1070・1072）がある。1069の浮線文はe3種とみられる。1070は複合口縁上に円形の連続押圧文が加えられる。なお、1071は深鉢の体部片とみられる。

6）SD1420-E10層出土の土器（1073～1075）

鉢（1073）　E類である。幅広の頸部を有すことから甕C3c類に類似する。口縁部は交点で反転する工字文が施され、頸部に横位のミガキが加えられる。肩部は工字文が描かれ、体部上位に綾杉文が施される。

甕（1074）　C3d類であり、頸部に隆線帯が作り出され、隆線上に列点文が加えられる。

壺（1075）　A類とみられ、浮線文f1種が確認できる。

7）SD1420-E9層出土の土器（1076～1080）

鉢（1076・1077）　C類（1076）、F類（1077）がある。1076は頸部にミガキが加えられ、体部上位に浮線文f1種が描かれる。1077は全面に撚糸文Rが施される。

甕（1078・1079）　C3a類（1078）、H1a類（1079）がある。1079は非常に頸部が長く、細身の器形である。口縁部に浮線文e2種とみられるモチーフが施され、交点に縦のスリットが加えられる。また、頸肩境に段差を持つ。

壺（1080）　F類（1080）がある。頸部に丁寧にミガキが加えられ、頸肩境に段差を持つ。肩部は結節縄文LRが施される。1080はSD1420右岸3地区B9層に所属する可能性が高い。

8）SD1420-E8層出土の土器（1081・1082）

浅　鉢（1082）　C1種で、口縁部に浮線文b1種が施される。

鉢（1081）　E類であり、体部上位に綾杉文が施され、体部縄文LRは条が縦位になるよう施される。

9）SD1420-E6層出土の土器（1083～1144）

浅　鉢（1083～1094）　B・C・E・G・H類がある。C類とG・H類が共に出土し、文様帯幅が狭いことや浮線文土器と変形工字文土器が共伴する点はSD1420右岸2地区の様相と共通する。土器量の多いE6c層は③～①層に分かれ、文様5a類はE6c③層から、文様5b類はE6c②層から出土しており、これを時期差と捉えることも可能である。

B類はB8類（1083・1084）で、共に浅い平行沈線文が施される。C類はC1類（1085～1088）で、浮線文種類はc2種（1085）、e2種（1086・1088）、f1種（1087）である。1085は上段の交点が匹字状で、下段の交点では連結せずに反転しており、変形工字文に類似したモチーフである。1088は交点が一部匹字状となる。1087は浮線文が直接体部上位に連結する。E類はE5a類（1089）で、底部がやや外方に張り出す。口縁部には幅が広く平坦な隆線で変形工字文に類似するモチーフが描かれるが、三角形内に彫去が施されており、文様5a類とした。交点1・中点1は縦のスリットが加えられて連結せず反転する。交点2・中点2は共に匹字となる。多条でZ字状の部分がある点は浮線文h種にも類似する。G類はG4b類（1090）、G5b類（1091）である。1090は交点2の沈線がわずかに途切れている。胎土に角閃石と海綿骨

針を含み一般的でない。1091は交点１に低い粘土瘤が貼付されて匹字が作り出されており、小さく抉られる。隆線部は細く浮線に近い。胎土に石英・海綿骨針が含まれて一般的でない。Ｈ類はH4b類（1092）、H5b類（1094）である。1092は交点で反転する沈線が途切れる典型的な4b類である。体部はケズリの後にミガキが加えられる。1093の台部は同一個体の可能性があり、台付浅鉢とも考えられる。1094は交点１・中点１が匹字となるものの、交点２では4b類のように主文線が途切れることが特徴である。

台付浅鉢（1095～1097）　1095は器形Ｈ類に「ハ」の字状に開く高台が付くもので、変形工字文5a類の典型である。交点１は隆線が反転し、交点２・中点２は四角く抉りが入れられる。そして、三角形内が浅く彫去される。台部下端には斜位に押圧が加えられて波状を呈す。1096は体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、短い台部が付属する。口縁部から台部の縄文LRは条が縦位になるよう施される。1097は短い台部が付くもので、台付甕の可能性もある。

鉢（1098）　Ｄ類であり、口縁部に２～３条の浮線で浮線文g2種が描かれる。体部はミガキが加えられ、底面に網代痕を観察できる。

甕（1099～1134・1144）　Ａ～Ｆ類がある。Ｂ類は少なく、Ｃ～Ｅ類が主体なことや、頸部を無文とする３類が多い点などは、SD1420右岸２地区の様相と共通する。Ａ類はA1a類（1099）、A1b類（1101）がある。1099は頸部に稲妻状の沈線文が施される。反転部同士が隣り合うため関東地方の荒海式に組成する菱形連携文とみることもできるが、豊栄市鳥屋遺跡にも甕の頸部に同様のモチーフが描かれる例（[石川1988] No.371・379など）がある。1101は頸部に独立綾杉文が施され、体部は原体幅6mmの条痕文を観察できる。Ｂ類はB3a類（1100）で、肩部に匹字文が施される。Ｃ類はC2a類（1103）、C3a類（1102・1104・1105）、C3b類（1130）、C3c類（1106～1108）、C3d類（1109～1112）、C3e類（1113）である。1103は頸部に交互の綾杉文が施され、肩部に匹字文が描かれる。1102は隆線手法③で上下交互の匹字文が施される。1104は口縁部に上下の匹字文が施される。1105は平行沈線文間の隆線を抉ることにより沈線表現の工字文としている。1106・1107は匹字文と綾杉文の組み合わせである。1108は肩部に工字文と一部弧状となる綾杉文が施される。1109は口縁部に隆線手法④による平行沈線文が施され、隆線部が盛り上がる。1112は肩部に撚糸文Ｒ施文後に結節縄文LRが加えられる。1130は斜線文の上に結節縄文LRが施される珍しい例である。Ｄ類はD3a類（1114）、D3d類（1115～1117）である。1114は口縁部に浮線文f1種が描かれ、頸部と頸肩境に平行沈線文が施される。1116は体部に条痕文が縦位施文された後に結節縄文Ｒが加えられる。頸部はミガキ調整である。Ｅ類はE3a類（1118・1126）、E3b類（1119・1131）、E3c類（1121）、E3d類（1120・1122～1125）、E3e類（1127）である。1118は口縁部に沈線による工字文が施される。1121は肩部に工字文と綾杉文が施される。1124は頸部に幅の広い隆線帯が施される。1127は頸部が横位のナデ調整である。Ｆ類はF3b類（1129）、F3d類（1128）で、1128は口縁部に断面三角形状の隆帯が貼付される。なお、1132～1134は甕とみられ、1133は口頸部に橋状把手が貼付され、口縁端部に沈線文が加えられる。

深　鉢（1135～1140）　Ｂ・Ｃ類がある。Ｂ類はB7d類（1135）で、体部の条痕文施文後に複合口縁が作り出され、条痕文が加えられている。Ｃ類はC3類（1136）、C4類（1138）、C7a類（1139）、C7d類（1137）である。1136は横位と斜位の沈線文を組み合わせることにより平行四辺形を呈す。1138は口縁部に浮線文f1種が施され、体部上位に綾杉文、その下に沈線による工字文が加えられる。1137は複合口縁上に結節縄文LRが施される。

壺（1142～1144）　Ｆ類（1143）、Ｈ類（1142）がある。1142の頸部には波状沈線文が施される。

1143の底部には数条の平行沈線文が加えられる。なお、1144は壺か甕で、綾杉文が2段施される。

10）SD1420-E5層出土の土器（1145～1168）

浅　鉢（1145～1147・1149・1152）　C・G類がある。C類はC1類（1145・1146）、C7類（1147）である。1145・1146は浮線手法でa2種が施される。G類はG1類（1149）があり、モチーフの上下に匹字風の交点を持ち、隆線が左右のモチーフを連結せずに曲線的に反転する浮線文c1種が施される。内部には楕円状の隆線が加わる。左右の交点間には彫去が施される。

台付浅鉢（1150）　「ハ」の字状に開く台部で、下端に平行沈線文が施される。胎土に石英・海綿骨針を含み、口縁部に変形工字文が施される可能性が高い。

鉢（1151）　D類で、口縁部に浮線文f1種が描かれ、体部はミガキが施される。

甕（1153～1160）　C・E・G類があり、E類が主体を占める。C類はC3d類（1153）で、口縁部に隆線手法④で平行沈線文が描かれる。E類はE3a類（1156）、E3b類（1155）、E3d類（1154・1157・1158・1160）である。1154は頸部に1条の隆線を配し、その上下に幅広くナデを加えることにより隆線帯風に仕上げられる。類例は栄町長畑遺跡［荒川1998］に認められる。1156は肩部に浮線文d2種が施されるものとみられる。1158は縄文LRの条が縦位になるように施される。1160は口縁部と肩部の平行沈線文間に列点文が加えられる。G類はG3b類（1159）で、頸部はナデ調整で、肩部に綾杉文が施される。

深　鉢（1148・1161～1166）　B・C類があり、A類は認められない。B類はB7b類（1161）で、口縁部に結節縄文LRが施され、体部は縄文LRの条が縦位になるよう斜位に施文される。C類はC2類（1148）、C3類（1162～1164）、C6a類（1165）、C7d類（1166）がある。1165の平行沈線文は浮線手法で施される。

壺（1167・1168）　D類1168は肩部が直線的で、浅鉢文様6類と同じ沈線による楕円文が施され、その周囲に刺突文が加えられる。F類1167は浮線手法により浮線文g2種が施される。

11）SD1420-E4層出土の土器（1169）

浅　鉢（1169）　B2a類で、隆線により流水状の工字文が施され、体部に縄文LRが加えられる。

12）Ⅵ層出土の土器（1170・1171）

台付浅鉢（1171）　1171は直線的に立ち上がる台部で、縦位のミガキが施された後に平行沈線文が描かれる。

深　鉢（1170）　C7a類で、口縁部に縄文LRが施される。

Ⅰ　SD1420川底の土器（図面図版207～214、写真図版153～158）

1）土器出土状況（図面図版17・18・58）

SD1420は南北約120mの範囲にわたり、川底の21層から土器が多量に出土した。ここでは確実にS4～S3層期に所属するSD1420右岸斜面1及びSD1420右岸2地区下の川底の土器を除く21層出土の土器を提示することとする。21層はd～a層に細分される。21d層が最も土器量が多く、S4～S3層期のものを多く含むと思われる。SD1420右岸1地区出土土器が約100m離れた川底出土土器と接合した

例もある。しかし、図面図版58のとおり21層はS4・S3層とだけでなくS1層出土土器とも接合関係が認められており、21層には各時期の土器が含まれていると考えられる。こうした状況から、本来ならば細分層位別に資料を提示すべきところを21層まとめて説明することとする。なお、本層からは縄文時代晩期以前の土器がわずかに出土している。

2）縄文時代晩期以前の土器（1172・1173）

1172は緩やかな括れを持つ深鉢の体部で、浅い沈線文が2～3条単位で垂下していることから、縄文時代後期前半の南三十稲葉式とみられる。1173は大振りな波状口縁を持つ深鉢で、口縁部上位を無文とし、間隔を空けて平行沈線文が施され、その間に垂下する区切り線があることから、縄文時代後期後半の加曽利B2式であろうか。

3）縄文時代晩期の土器（1174～1340）

浅　鉢（1174～1230・1232）　A～H類がある。A類はA1類（1174・1175）で、浮線文種類はb1種（1174）、d2種（1175）である。1175は波状口縁と内面突帯状口縁を持ち、S4～S3層期の特徴と共通する。また、A2a類（1193）があり、口縁部に平行沈線文を施し、体部上位に眼鏡状隆帯文が施されており、鳥屋1式に系譜を求め得る資料といえよう。B類はB1類（1176～1185・1187～1192）があり、浮線文種類はa1種（1176・1177）、a2種（1178）、a3種（1179）、b1種（1180～1182）、b3種（1183・1184）、b4種（1185）、d3種（1187・1188）、e2種（1189・1190）、f1種（1191）、f2種（1192）である。1177は文様帯幅が広く、少なくとも4段構成である。1178は直線的なモチーフで、平行隆線に押圧を加えることによりモチーフが作られている。1180は波状口縁を持つ浮線文b1種で、交点に縦のスリットが加えられる。1182はモチーフ上段の交点が直接口縁部上端に連結し盛り上がる。1185は口縁部上端に工字文風の沈線文が施され、浮線文は交点間を結ぶ水平線や2～3条単位の斜線を観察できる。1187は紡錘形の内部に2条1単位による浮線が加えられており、中央地区S4層出土324に類似する。1192はモチーフの上端に幅の広い平行沈線文が施される。ほかに、B2a類（1195・1196）がある。C類はC1類（1186・1198～1207）があり、浮線文種類はa4種（1198）、b1種（1199）、b3種（1200～1202）、d2種（1186）、d4種（1203）、e2種（1204～1206）、f2種（1207）である。1200はb3種としたが、一部d1種が並存する。1206は内面突帯状口縁となる。このほか、C2a類（1194・1208）、C2b類（1197）、C3類（1210～1212）、C4c類（1213）、C6類（1209・1214）、C7類（1215）、C8類（1216）がある。1210は上向きの匹字が施され、上段の交点に縦のスリットが加えられる。1212は平行隆線に上下から押圧を加えて三分岐や匹字状の交点を作り出すものだが、交点は階段状に不規則に設けられて4段構成となる。1213は1～3条の沈線で描かれ、上段の交点に抉りが加えられる。1209は左右の楕円文が水平な沈線で連結される。1215は口縁部に綾杉文が施される数少ない例で、沈線で粗く描かれる。1216は底部に横位のミガキが加えられ、外面に赤彩を明瞭に観察できる。D類はD1類（1217・1218）、D2a類（1219）、D10類（1220・1221）がある。1220は口縁端部に4つの押圧を1単位とする部分的な波状口縁を4単位配したものである。県内では類例を知らないが、千葉県成田市荒海川表遺跡［渡辺ほか2001］で荒海式に伴う甕に同様の例がある。E類はE10類（1225）があり、口縁端部は広く沈線文が施され、突起下に橋状把手が4単位貼付される。F類はF1類（1222）、F3類（1223）、F7類（1224）がある。1223は口縁部と体部上位に下向きの匹字文が施される。G類はG2a類（1227）、G2b

類（1226・1228）、G5a類（1229）がある。1226は口縁部に沈線による横長の工字文が描かれ、ミガキが加えられる。1229は中点1と交点2の間に菱形に抉りが入れられる。交点には左右に連結しないと思われる。H類はH4a類（1232）、H8類（1230）がある。1232は底部がすぼまる器形で、交点2の反転部で沈線が途切れる。胎土に石英・海綿骨針を含み一般的でない。

台付浅鉢（1236・1237）　1236は底部から台部にかけて縄文LRに縦位沈線文が5単位描かれ、平行沈線文が加えられる。底部内面は調整が粗いことから、甕などの可能性もある。1237は「ハ」の字状の短い台部が付くもので、体部に縄文LRが施される。

鉢（1231・1233～1235）　A類（1231・1233）、E類（1234・1235）がある。1233は口縁部に浮線文f1種が施される。1231は2条単位で描かれる入り組み状の工字文で、左右のモチーフが斜線で結ばれる。1234は頸部にミガキが加えられ、肩部に結節縄文Lが施される。

甕（1238～1297）　A～F類が認められる。A類はA1a類（1238）、A1b類（1240）、A3e類（1239）である。1238は口縁部に4列の列点文が施され、頸部に浮線文a2種が描かれる。B類はB1b類（1241・1242）、B2a類（1243～1246）、B2b類（1249・1251）、B3a類（1247・1248）がある。1249は2条の隆線で弧状のモチーフが施され、交点は抉りが入れられて匹字状となる。1241は頸部に交互綾杉文が施される。1243は口縁部上端から連なり浮線文e3種が施され、肩部に斜線文が描かれる。1244は典型的なB2a類で、体部は縦位の条痕文が施される。1245は肩部に三角形の彫去が加えられた工字文が施される。1246は肩部隆帯上に刺突列点文が加えられる。C類はC1a類（1252）、C1b類（1250）、C3a類（1253）、C3b類（1254）、C3c類（1255～1257）、C3d類（1258～1261）である。1252は頸部に浮線文e2種が施される。1254は肩部に三角形集合沈線文が施されるが、三角形の底辺は沈線が1条のみである。1257は肩部に工字文と綾杉文が施される例である。1258は肩部に結節回転が2段施される。D類はD1a類（1263）、D3a類（1262）、D3d類（1264～1266）、D3e類（1267）である。1263は頸部に浮線文b4種が施される。1262は肩部に下向きの匹字文が描かれる。1265は口縁部の隆線上に列点文が加えられ、肩部に結節縄文LRが施される。1267は複合口縁の下端に三角形の抉りが入れられる。E類はE1a類（1268）、E1b類（1269～1272）、E2a類（1273）、E2e類（1285・1286・1289）、E3b類（1274・1276）、E3d類（1275・1277～1284）、E3e類（1287・1288・1290）である。1268は上下の浮線にのみ押圧を加えて連結した浮線文である。1269は交互綾杉文に刺突文が充填されたものである。1270・1271は三角形集合沈線文の構図が崩れたものである。1272は三角形集合沈線文に刺突文が充填される。1273は菱形集合沈線文が施される。1274は条痕文施文後に体部下位に左上方向のナデが加えられる。1281は山形突起1の下に橋状隆帯が貼付される。1287は口縁部と肩部に横位の条痕文が施される。1290の頸部は屈曲が少なく、横位のナデ痕を明瞭に観察できる。F類はF1b類（1291）、F3b類（1292）である。1291はF類の典型で、頸部に綾杉文が、肩部は条痕文施文後に縄文LRが加えられる。1292は頸部に擦痕を残す粗いナデが加えられる。なお、1293～1297は甕の体部片などである。1294は口頸部に突帯状の隆帯が網目状に貼付される。1295は肩部に隆線による「日」字文が描かれる。1296は平行沈線文を境として上段から斜線文・縄文RL・条痕文の順に充填施文される。

深　鉢（1298～1326）　A～D類すべてが認められる。A類はA5類（1298）、A7a類（1299）、A7d類（1300）、A8類（1301）である。1298は口縁部上端に棒状工具で波状沈線文が施されるもので、新潟市（旧黒埼町）緒立遺跡を標式とする弥生時代前期～中期の緒立式に顕著に認められるものと共通する。本遺跡ではこれと1349の2点のみの出土だが、緒立式に盛行する波状沈線文が縄文時代晩期終末の段階

に成立していた可能性を指摘できる。Ｂ類はB6a類（1302～1304）、B6d類（1305・1306）、B7a類（1307）、B7b類（1308）、B7d類（1309・1310）である。1306は条痕文が口縁部のみ横位に施文された後に、平行沈線文が４条加えられる。1308は口縁部にのみ結節縄文LRが加えられる。1309は複合口縁の下端に押圧を加えて波状とする。Ｃ類はC1類（1311～1313）、C2類（1314）、C3類（1315）、C6a類（1316・1319）、C6e類（1317）、C7a類（1318・1320）、C7b類（1321・1322）、C7d類（1323）である。1311は隆線手法④で浮線文a2種が施される。1314は隆線上に列点文が加えられる。1319は口縁部に２段の肥厚部を設けて隆線帯風に仕上げられる。1321は口縁部に縦位に条痕文施文後、結節部のみ回転施文される。1323は体部条痕文施文後に複合口縁が作られる。Ｄ類はD7a類（1325）、D8類（1324）である。1324は口縁部内面が肥厚し、平行沈線文が施される。なお、1326は深鉢の下半とみられ、口縁部付近にe2種とみられる浮線文が施される。

壺（1327～1334）　Ａ類（1327～1329）、Ｂ類（1330～1333）、Ｇ類（1334）がある。1327はＡ類の好例で、口縁部に浮線文d1種が施され、頸肩境に段が形成される。1329はミガキ痕を明瞭に観察できる。1331は肩部に沈線による入り組み状の工字文が施される。1332は２条の隆線による入り組み状工字文が描かれる。1333は１単位４条の原体による波状沈線文が上下２段施される。胎土に長石を多く含み、いわゆる東海系胎土にも似ている。1334は低い波状口縁で、浮線文e3種が施される。

その他（1335～1340）　いずれも甕ないし深鉢の底部である。1335は下端がつまみ出されて低い台が作られる。1336・1337は網代痕、1338は木葉痕、1339・1340はササ圧痕が観察できる。

Ｊ　その他の土器（図面図版214・215、写真図版159）

1）SX51出土の土器

a　土器出土状況

ここではSX51の範囲内から出土したものを取り上げる。SX51は縄文時代の遺物包含層を切って形成されており、出土土器の正確な所属層位が不明なものがある。出土量は少ないが、遺構・遺物の集中する範囲よりかなり離れた地点からの出土が認められる。

b　出 土 土 器（1341～1351）

浅　鉢（1341～1344・1347）　B1類（1341・1342）、C2b類（1344）、D1類（1343・1347）がある。1341はS4層出土で、浮線文a1種が施される。1342もS4層から出土しており、浮線文a3種の水平線が交点を貫く点が特徴である。1343もS4層出土で、波状口縁と浮線文a2種の組み合わせである。1344は多条の沈線で工字文風のモチーフが描かれている。1347は口縁部上端に浮線文が連結する。

鉢（1345）　Ａ類で、口縁部に浮線文d1種が施され、交点に縦のスリットが加えられる。

甕（1346・1348）　B3d類（1348）、E2b類（1346）がある。1348は体部に網目状撚糸文が施される好例で、肩部に縄文LRが加えられる。

深　鉢（1349・1350）　C5類（1349）、C7b類（1350）がある。1349は肥厚口縁に棒状工具で波状沈線文が施される。

壺（1351）　Ｃ類で、肩部から底部にかけて逆「U」字形の隆帯が４単位貼付され、その内部は「冂」字状の沈線で充填される。

2）平成11年度用水路工事立会い調査出土の土器

a　土器出土状況

11～14Gグリッドから遺物が多く出土しており、中央地区からSD1420右岸1地区に連続する範囲と想定される。遺物量はこれらの地区と同様に多かったものとみられ、廃土から取り上げたものながら土器は大きな破片が多い。内容は中央地区のS4～S1層のものと共通する。

b　出 土 土 器（1352～1365）

浅　鉢（1352～1355）　B1類（1352）、C1類（1353）、D1類（1354）、D8類（1355）がある。1352・1353は比較的狭い文様帯に浮線文が施される。1354は口縁部に浮線文d1種とe2種が混在するモチーフが施される。

鉢（1356）　E類（1356）があり、体部の平行沈線文を縦位のスリットで区切った工字文が施される。

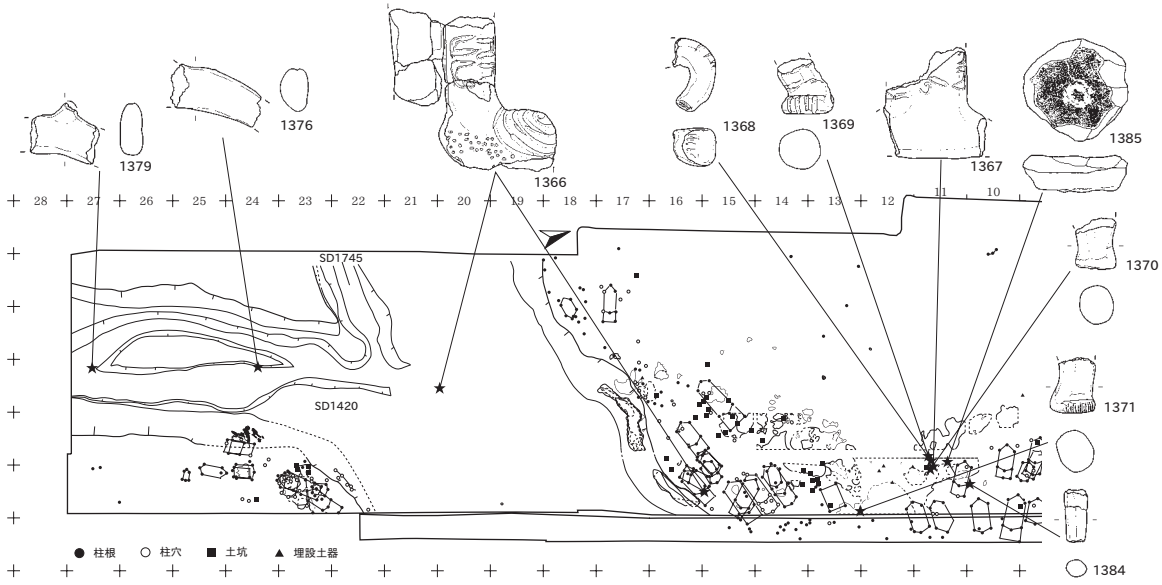
甕（1357～1360・1365）　C3a類（1357）、E2a類（1360）、E3a類（1358・1359）、E3e類（1365）がある。1357は山形突起1の下に橋状把手が貼付される。1360は頸部に交互綾杉文が施され、交点に縦位沈線が加えられる。

深　鉢（1361～1364）　A6d類（1361）、B7a類（1362）、B7d類（1363）、C7a類（1364）がある。1361は幅約8mmの原体で条痕文が施され、口縁部は横位施文後に平行沈線文が加えられる。1365は口頸部にミガキが加えられ、体部は条が縦位になるように縄文LRが施される。

2　土　製　品（図面図版216・217、写真図版160）

A　分布と出土状況

本遺跡からは土偶・独鈷石状土製品・土器片円盤・不明土製品・焼成粘土塊・粘土塊が出土している。各器種によって層位・平面分布に偏りが認められ、土偶はS4～S3層期に、独鈷石状土製品・焼成粘土塊の多くはS1層期に所属する。平面分布は、土偶がSD19左岸地区・中央地区に、独鈷石状土製品はSD1420右岸1・2及び右岸3地区に分布する。焼成粘土塊の多くはSD1420右岸1・2地区に分布し、特に20Cグリッドに集中している（第52図）。



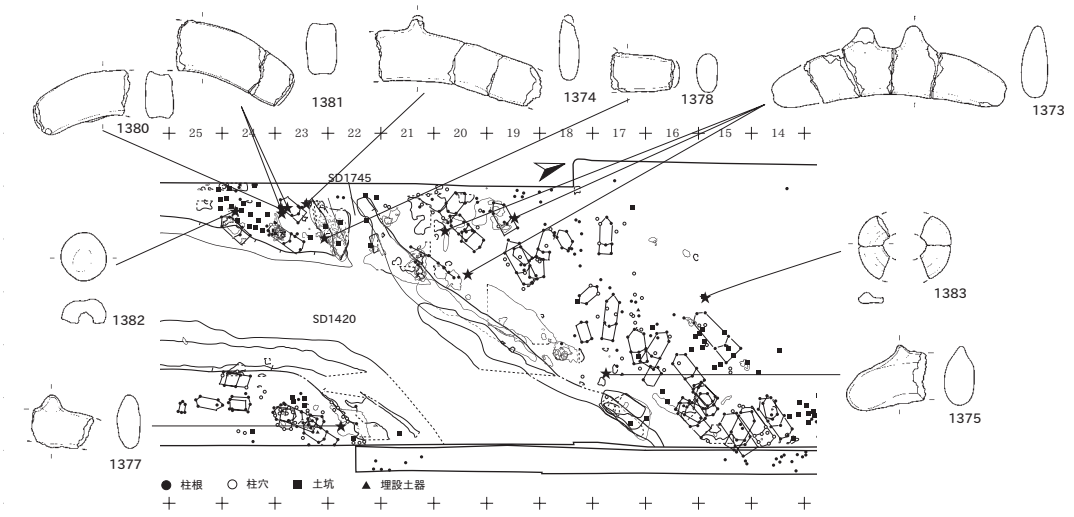
第52図　土製品出土分布状況（S4～S3層期）

B　各器種の説明

1）土　　偶（1366～1372）

7点出土している。胴部2点、腕部1点、脚部4点である。いずれもS4～S3層期に所属し、平面分布は1366の一部がSD1420-21層で認められるほかは中央地区周辺で出土している（第52図）。胴部（1366・1367）は2点とも中空であり、1366は断面の様子から2本の心材が通っていたことが予想される。1366は脚部の張り出し部に渦巻き状の沈線が、胴部下の表裏面には刺突文が施される。表面の胴部中央には正中線が垂下し、胴部右側には二重のコの字状沈線が施される。同様のコの字状沈線は1367にも認められ、沈線内には赤色顔料が付着している。1368は腕部である。外側には長軸方向に沈線が1条巡らされ、それと直交するように4条の沈線が施される。また、沈線によって指が表現されている。1369～1372は脚部である。指を表現しているもの（1369・1371）と表現していないもの（1370・1372）が存在する。1370と1372は形状と焼成の状態から同一個体の可能性がある。

本遺跡出土の土偶は、出土土器から縄文時代晩期後葉に位置付けられる。当該期の土偶は、東北地方を中心に分布する結髪形土偶［会田1979］と、東海地方から東北地方南部に分布する有髯土偶［荒巻・設楽1985］があり、新潟県は両地域の影響を受けている。本遺跡出土の土偶は、頭部及び胸部の調整や文様が明らかではないものの、明瞭な脚部が作出される点と、刺突文と沈線文の配置から結髪形土偶の可能



第53図　土製品出土分布状況（S1層期）

報告No.	器種	出土層位	遺構・層位	所属層位	色調	調整	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	欠損	被熱	備考
1366	土偶（胴部）	15F15 20D15	SD1420-21c	S4～S3	10YR5/1　褐灰色	ナデ・ミガキ	(9.3)	(6.0)	3.4	160.0	○		剥落激しい
1367	土偶（胴部）	11F4	SC2266	S4	7.5YR7/2　明褐灰色	ミガキ	(6.2)	(5.8)	3.5	109.9	○	○	
1368	土偶（腕部）	11E24	SC2266	S4	5YR7/2　明褐灰色		4.1	2.4	2.2	17.1	○	○	
1369	土偶（脚部）	11E24	SC2266	S4	7.5YR5/1　褐灰色	ナデ	(3.1)	3.2	4.3	32.9	○		
1370	土偶（脚部）	11F4	SC2266	S4	7.5YR6/4　にぶい橙色		(2.9)	2.3	3.0	18.2	○	○	
1371	土偶（脚部）	13F21		S5	7.5YR7/4　にぶい橙色		(3.2)	2.1	4.0	23.0	○	○	
1372	土偶（脚部）	12F18		S3～S1	10YR6/3　にぶい黄橙色		(1.9)	2.2	3.4	11.5	○		
1373	独鈷石状土製品	19B18 20B24 20C17	SD1420-1a SD1420-1a	S1	10YR6/2　灰黄褐色	ナデ・ミガキ	(11.5)	3.9	1.5	62.7	○	○	
1374	独鈷石状土製品	23B8	SD1420-1c		7.5YR6/2　灰褐色	ナデ	(9.4)	(3.5)	1.2	38.0	○	○	
1375	独鈷石状土製品	17E14		Ⅵ	7.5YR6/4　にぶい橙色		(4.5)	3.3	1.6	18.9	○	○	
1376	独鈷石状土製品	24D3	SD1420-21d		2.5Y6/1　黄灰色		(5.1)	2.5	1.6	22.7	○	○	
1377	独鈷石状土製品	22F14	SC2019	SD1420-E5c	10YR6/2　灰黄褐色		(3.5)	3.0	1.4	11.8	○		
1378	独鈷石状土製品	23B21	SX1686	SD1420-2a'	7.5YR6/3　にぶい褐色	ナデ	(3.4)	2.2	1.3	11.1	○	○	
1379	独鈷石状土製品	27D2	SD1420-21d		10YR4/1　黒褐色		(3.9)	(2.9)	1.3	14.9	○		
1380	独鈷石状土製品	23B15	SD1420-B7		2.5Y6/1　黄灰色	ナデ・ミガキ	(5.1)	2.8	1.7	31.4	○	○	
1381	独鈷石状土製品	23B13 23B14	SD1420-1 SD1420-1		10YR6/3　にぶい黄橙色	ナデ・ミガキ	(6.7)	2.8	1.7	40.8	○	○	
1382	不明	24B14	SC1768	SD1420-2a	10YR6/2　灰黄褐色		2.8	2.5	1.5	9.6	○		半球状
1383	不明	15D5		Ⅵ	10YR4/2　灰黄褐色		(3.5)	1.7	0.6	2.7	○		円状
1384	不明	10F10		S2～S1	7.5YR6/3　にぶい褐色		(3.0)	1.2	0.9	3.9	○		棒状
1385	土器片円盤	11E22	SC2247	S3	7.5YR6/4　にぶい橙色	円文	5.8	5.8	2.0	60.6	○		台付浅鉢の底部
1386	土器片円盤	10F10			10YR4/2　灰黄褐色	ミガキ・円文	8.4	7.1	3.0	107.4	○		台付浅鉢の底部

第10表　土製品観察表

性が高い。

2）独鈷石状土製品（1373～1381）

二つの突起を持ち、平面形が独鈷石（本章4参照）に類似するものを独鈷石状土製品とした。9点出土している。SD1420-21層で2点出土しているほかはS1層期に所属する。平面分布はSD1420右岸1・2地区に分布し（第53図）、23Bグリッドで4点出土している。完形品は認められないが、突起部から端部までの長さは一様ではなく、大きさにバラエティーがあるものと推定される。断面形は、左右非対称な楕円形（1373～1378）と方形に近いもの（1379～1381）が認められる。調整はナデ・ミガキが認められ、端部は石斧状に作出されている。また、本遺跡とほぼ同時期の土器が出土している長野県氷遺跡［永峯1957；角田1998］・群馬県矢瀬遺跡［三宅1993］で類似資料が出土している点は注目すべきである。

3）土器片円盤（1385・1386）

2点出土している。底部を素材とし、器種は内面に円文が施され、外面には脚部の付着を推定させる剥落痕が認められることから台付浅鉢と考えられる。加工痕は周辺を打ち欠いているのみで、磨りの痕跡は認められない。本遺跡出土のものは、形態的には土器片円盤［藤巻1989］に属するが、従来の胴部片を

素材とするものが出土しておらず、使用方法が異なることも予想される。

4）不明土製品（1382～1384）

1382は半球状の土製品であり、裏面中央部は円形に抉りこまれている。1383は平面形が環状と推定され、断面形は表面が若干盛り上がっている。1384は棒状の土製品である。

5）焼成粘土塊（1387～1407）

被熱した塊状の粘土を焼成粘土塊とした。総数94点を数える。

分　類　5g以上の84点を対象とし、新発田市村尻遺跡を対象とした田中耕作氏の分類［田中1991］と朝日村元屋敷遺跡［八木2002］を参考にした。形状で分類し、更に調整痕・焼成・胎土などを観察した。

【A類】（1387～1392）　不定形で外面に調整が加えられているもの。外面は滑らかなものが多い。

【B類】偏平な板状を呈するもの。平坦面の状態で細分した。

B1類（1393～1400）　1面がなめらかな面を持ち、他方の面には凹凸が認められるもの。滑らかな面の断面形は、平坦なもの（1393・1396など）、内湾するもの（1395）、外反するもの（1397）がある。

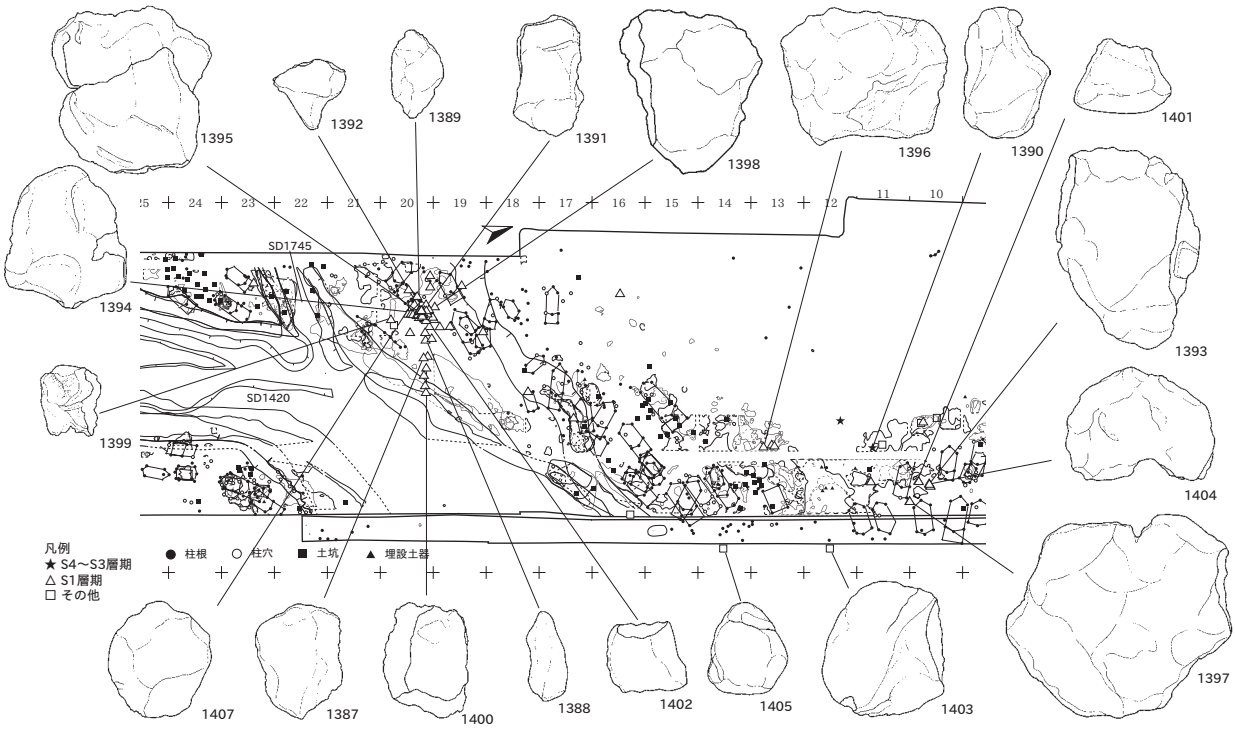
B2類（1401～1403）　両面共に滑らかなもの。

B3類（1404）　両面共に凹凸が認められるもの。

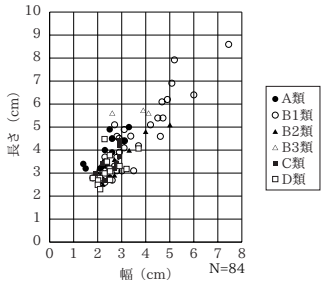
【C類】（1405・1406）　立方体に近い形状のもの。外面は滑らかである。

【D類】（1407）　不定形で外面がザラザラしており、人為的な調整が認められないもの。

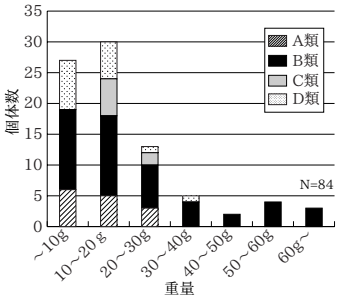
分類の内訳は、A類14点、B1類36点、B2類7点、B3類3点、C類8点、D類16点と、B類が半数以上を占める。総重量は1,754.2gで、分類ごとの重量比はB類が総重量の約7割を示し、点数・重量においてB類が主体を占める。法量は、分類に限らず長さ2～5cm、幅2～4cm程度に集中し、B類は長さ5cm以上のものも認められる（第55図）。重量は、B類以外は30g以下に収まり、特にC類は20～30gの



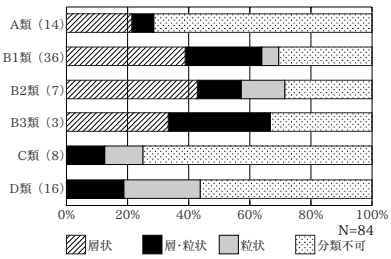
第54図　焼成粘土塊出土分布状況



第55図 焼成粘土塊長幅分布図



第56図 焼成粘土塊重量別個体数



第57図 焼成粘土塊分類別断面状況

範囲にまとまる（第56図）。

分布と出土状況 出土層位は、総数の約９割がS1～Ⅵ層に所属する。平面分布は中央地区周辺とSD1420右岸１・２地区の西側で出土しており、特に20Cグリッドにおいて分布の集中が認められる（第54図）。分類別の分布に明瞭な傾向は認められないが、最も出土数の多いB1類は、36点中20点が20C2グリッドから出土している。

調整痕 明瞭な調整の痕跡が認められるものは30点存在する。ナデや指頭状圧痕が認められるもの（1395・1396など）が24点、刺突痕が認められるもの（1387・1400）が10点である。刺突痕は直径4mm程度の断面円形の棒状工具によって、複数箇所に施されるものが多い。そのほかに、何らかの工具を用いて削り取られたような痕跡が残されているもの（1399）もある。

胎 土 色調は褐色・明褐色のものが多く（86.2％）、そのほかに灰褐色・暗褐色のものがある。また、表面と裏面の色調が異なるものがB1類に半数程度認められ、滑らかな面は褐色、凹凸のある面は灰白色を呈する。断面の状態は層状になっているものと、直径3mm程度の粘土粒が多量に認められるもの、層状になっているが粘土粒も認められるものがある（第57図）。「粘土の練り具合」［八木2002］や焼成状態の差異によるものと考える。分類ごとに断面を観察すると、層状のものはA類・B類に限られる。それに対し、C類・D類は粒状の割合が高い。混和材は、色調が灰褐色のものにはほとんど含まれないが、そのほかは量の差異はあるものの認められる。

接合痕 接合痕が認められるものが15点存在する（1391・1399・1401）。焼成前の段階で粘土が足されるか、折りたたまれた結果と考えられる。分類別にはB1類６点、B2類４点とB類に多い。

小 括 焼成粘土塊の使用方法については、土器製作に伴う「ねかせ状態」［田中1991］や土製品の未成品［田中1999］の可能性が指摘されている。本遺跡出土の焼成粘土塊の中には、ねかせ状態と指摘される「マンジュウ」形を呈するものは出土していない。また、B2類・C類は形状がまとまっており、調整も全面にわたって認められるものが多いことから、土製品の未成品である可能性も否めないが、類似する土製品は出土していない。B類は狭い範囲に集中して出土しているが、同様の出土状況が元屋敷遺跡［八木2002］、岩手県大日向Ⅱ遺跡［田鎖・齋藤1995］においても認められ、注目される。

6）粘 土 塊（1408）

SD1420-21c層から被熱していない粘土塊が出土している。法量は長さ24.0cm、幅21.1cm、厚さ5.5cmであり、平面形は楕円形を呈する。表面は凹凸が認められ、裏面は滑らかに調整されている。胎土分析の結果、珪藻土に同定されている（関連諸科学編第Ⅳ章参照）。調整の施されていない粘土塊（ND）はSD1420右岸１・２地区及びSD1420右岸３地区に多く分布し、ピット・土坑からも出土している。

3　石　　器（図面図版218～239、写真図版161～168）

本遺跡から出土した石器は総数4,214点、石核・剥片類を含めると24,500点を超え、多種類の器種が出土している。石器の所属する時期は、出土土器から縄文時代晩期後葉に比定される。本文の構成として、調査面積が広いこと、SD1420によって層序が異なる地点があることなどから、地区を分割して報告することが有効と考えた。また、地区ごとに資料を提示することにより、各地区の様相を比較することができる。地区の内訳は、地形的な特徴であるSD19とSD1420を境に分割した（本編第Ⅲ章参照）。本報告では北側の地区から説明していくこととする。なお、図面図版・写真図版についても地区ごとに掲載してある。同一器種内における実測図の並び方については、形態分類を基準に置いて掲載した。

A　記述の方法

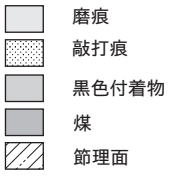
1）資料の表現方法及び記載事項

資料の提示については、図面図版・観察表・写真図版・本文を基本とした。本文については上述のとおり地区ごとに報告する。また、図面図版中に掲載されていない遺物を反映するために各地区ごとに同種の表・グラフを掲載した。ただし出土点数が少ない地区に関しては文章のみ記載し、表・グラフは省略した。

実測図の表現方法　展開図法により図化し、展開面数を器種ごとにある程度統一した。ただし、裏面・側縁部などに加工痕が認められないものに関しては省略している。

①縮尺　縮尺率は器種ごとに統一した。ただし、大きさに著しく隔たりがあるものに関しては縮尺率を変えている。スケールは図面図版中にすべて提示している。

②裏面・表面　剥片及び剥片素材の石器は主要剥離面を、二次加工が両面に及んでいる石器はより平坦な面を裏面とした。礫素材の石器は加工痕が明瞭な面を表面にした。



第58図　スクリーントーン凡例

③図の上側・下側　石鏃は尖頭部を上に、石錐・石匙・篦状石器・磨製石斧・打製石斧・礫器は錐部・刃部を下に、両極剥離痕を有する石器は2極を上下に、磨石類・石皿類・砥石は長軸方向を上下に、不定形石器及び剥片は主要剥離面の打点を上に、石核は最終打点を上にした。

④表現方法　遺物に認められる加工痕をわかりやすく表現するため、実測図中に点描・リング・フィッシャーに加え、スクリーントーン・記号を用いた。以下にその要点を記す。

・外形線・剥離線・リング・フィッシャー・稜線・破損線・推定線などは線の太さを変えた。
・新規の剥離や破損についてはリング・フィッシャーを入れていない。
・時間差のある剥離面には古い剥離線を点線で示した。
・自然面・リング・フィッシャーは石質に関わらず同じような表現に統一した。
・加工痕・付着物については、器種に関わらず同様のスクリーントーンを用いた（第58図）。
・磨石類・石皿類・砥石の断面図の「←」・「→」はそれぞれの使用痕の範囲である。

⑤遺物No.　各実測図の右下に掲載している番号であり、写真図版・観察表と対応する。また、番号の後には出土位置・出土遺構・出土層位などを掲載してある。

観察表の記載方法　実測図掲載遺物の属性を一覧表にした。以下に各項目を説明する。

①報告No.　実測図の番号で、図面図版・写真図版の番号と対応する。

②出土位置　大グリッド・小グリッドで記した。

③遺構No.　左列に遺構種別、右列に遺構番号を記した。

④出土層位　包含層から出土したものは基本土層を、遺構から出土したものは覆土層位を記した。

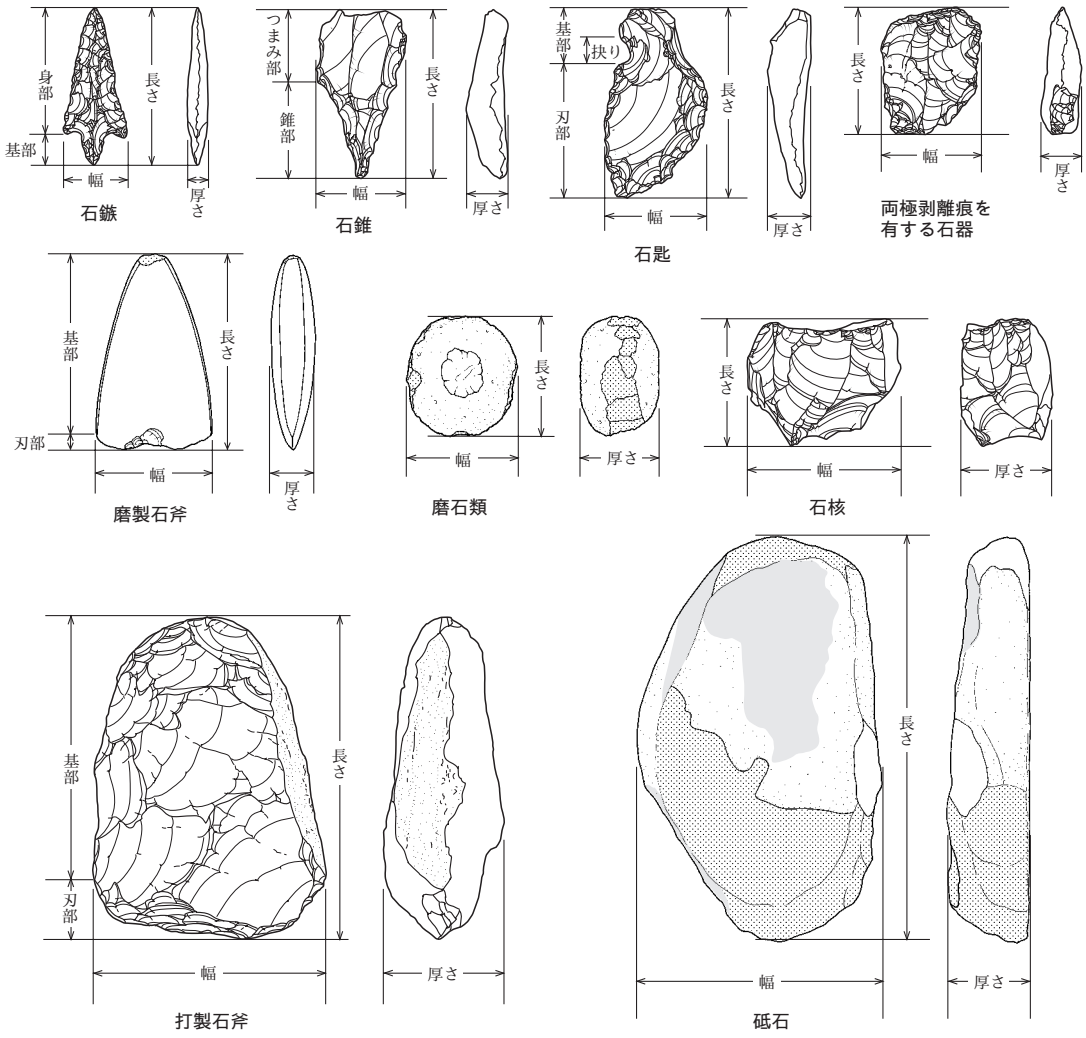
⑤器種・分類　石器器種及び後述する器種分類を記した。

⑥石材　石材の同定については肉眼及びルーペによって観察した。用いた石材名は安山岩・流紋岩・黒曜石・花崗岩・輝緑岩・ホルンフェルス・砂岩・凝灰岩・頁岩・粘板岩・チャート・石英・玉髄・鉄石英である。同一石材の中で細分しているものについて以下に説明する。

【流紋岩】 流理構造を持ち、斑晶を含むものを流紋岩とした。白色で風化の進んだものを流紋岩Ａ類、それ以外を流紋岩Ｂ類とした。流紋岩Ｂ類の色調は、緑色・青灰色・赤褐色などがある。

【凝灰岩】 斑晶が認められず、粉をふいているような表面を持つものを凝灰岩とした。白色・緑色を呈するものを凝灰岩Ａ類、黒褐色・暗灰色を呈するものを凝灰岩Ｂ類とした。

【頁　岩】 色調は黒色・黒褐色のものが圧倒的に多い。透明度のないものを頁岩Ａ類、「半透明の頁岩」［阿部1997］を頁岩Ｂ類とした。



第59図　各器種の計測位置

【鉄石英・玉髄】 透明度の違いで玉髄と区別した。透明・半透明のものを玉髄、不透明なものを鉄石英とした。鉄石英は、赤色を呈するもの（赤玉）を鉄石英Ａ類、黄色または黄緑色を呈するもの（黄玉）を鉄石英Ｂ類とした。

⑦長さ・幅・厚さ・重量　各器種の遺物を正面に置いた際の最大長（cm）・最大幅（cm）・最大厚（cm）・重量（g）を計測した（第59図）。

⑧分類　各器種内での分類である。分類については後述する。

⑨欠損　欠損しているものについては「○」印を記した。また、石鏃・磨製石斧に関しては異なった分類基準を設けた。

⑩被熱　被熱による赤変や黒変、煤の付着、剥落などから判断した。

⑪付着物　黒色付着物（アスファルトもしくは黒漆）、赤色顔料などが付着しているものは記した。

2）出土石器の分類

各器種の分類の基準を以下に記す。分類に当たっては、剥片石器は形態を、礫石器は使用痕を重視して行った。

石　鏃　「扁平で鋭い先端部を持つ」［阿部1979］石器を石鏃とした。鈴木道之助氏の形態分類［鈴木1981］を基本に置き、有茎鏃については尖頭部の長さと最大幅の比率で細分した（第60図）。

Ａ類　有茎鏃

ＡⅠ類　平基有茎鏃

ＡⅠａ類　尖頭部長/最大幅が2.5以上。

ＡⅠｂ類　尖頭部長/最大幅が1.5以上2.5未満。

ＡⅠｃ類　尖頭部長/最大幅が1.5未満。

ＡⅡ類　凸基有茎鏃

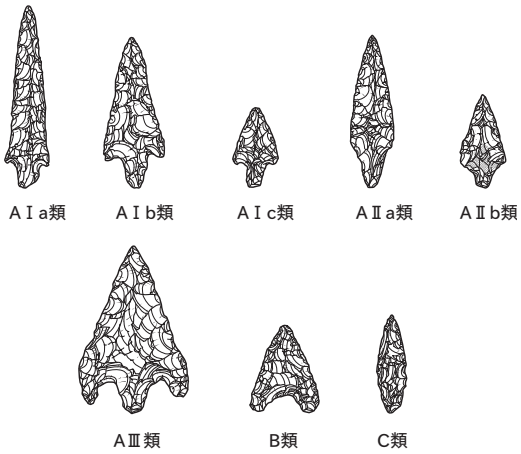
ＡⅡａ類　尖頭部長/最大幅が1.5以上。

ＡⅡｂ類　尖頭部長/最大幅が1.5未満。

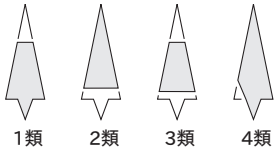
ＡⅢ類　凹基有茎鏃

Ｂ類　無茎鏃

Ｃ類　尖基鏃



第60図　石鏃分類図



第61図　石鏃欠損模式図

欠損については、先端部欠損（1類）、基部欠損（2類）、先端部・基部欠損（3類）、肩部欠損（4類）に分類した（第61図）。

石　錐　石鏃以外の石器で、鋭い先端部が作出されている石器及び先端部に磨耗痕が認められる石器を石錐とした。分類は以下のとおりである（第62図）。

Ａ類　基部と錐部が明瞭に区別されるもの。

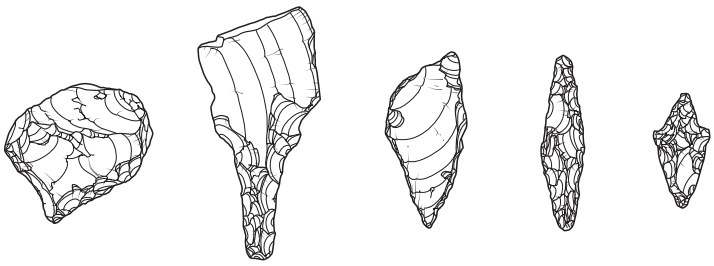
ＡⅠ類　錐部が極端に短いもの。

ＡⅡ類　錐部が長いもの。

Ｂ類　基部と錐部の境が不明瞭なもの。

ＢⅠ類　基部が広がるもの。二次加工が全周しないものが一般的である。

ＢⅡ類　棒状の平面形態を呈するもの。二次加工は全周するものが多い。断面形は方形もしくは多角形になる点で石鏃Ｃ類とはある程度区別される。



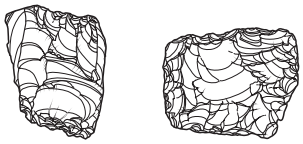
第62図　石錐分類図

Ｃ類　石鏃からの転用品

石　匙　「つまみ状の小突起を持ち、片面からの加撃によって刃部が作られる」［鈴木1981］石器を石匙とした。

箆状石器　「基部側から刃部にかけて両側辺が平行あるいは広がる石器」［阿部1988］を箆状石器とした。

両極剥離痕を有する石器　「向かいあった２辺ないしは４辺の縁辺部に…（中略）…階段状の剥離痕が対になって存在する」［岡村1983］石器である。従来ピエス・エスキーユ、両極石器、楔形石器などと呼称される石器を一括して扱った。また、石器と剥片との区別が困難なため、両極打法を用いた石核・剥片も含める。２極１対のもの（Ａ類）と４極２対のもの（Ｂ類）に分類した（第63図）。なお、挿図・挿表中では「両極石器」を用いる。



第63図　両極石器分類図

不定形石器　上記の器種以外の石器で、二次加工により刃部が作出された石器を不定形石器とした。従来「掻・削器」、「スクレイパー」、「微細剥離のある剥片」などと呼ばれた石器を一括して扱った。分類に当たっては堀之内町清水上遺跡［高橋・鈴木1990］を参考にした。ただし清水上遺跡の分類に当てはまらないものに関しては独自の分類基準を設けている（第64図）。

Ａ類　連続的な押圧剥離により刃部が作り出されているもの。従来スクレイパー・削器と呼ばれているものである。

Ｂ類　連続剥離による鋸歯状刃部を持つもの。

Ｃ類　両面からの連続剥離または連続剥離状の調整によるもの。

Ｄ類　抉入状の刃部を有するもの。

Ｅ類　素材の端部に連続剥離状の刃部を有するもの。従来エンドスクレイパーと呼ばれているもの。

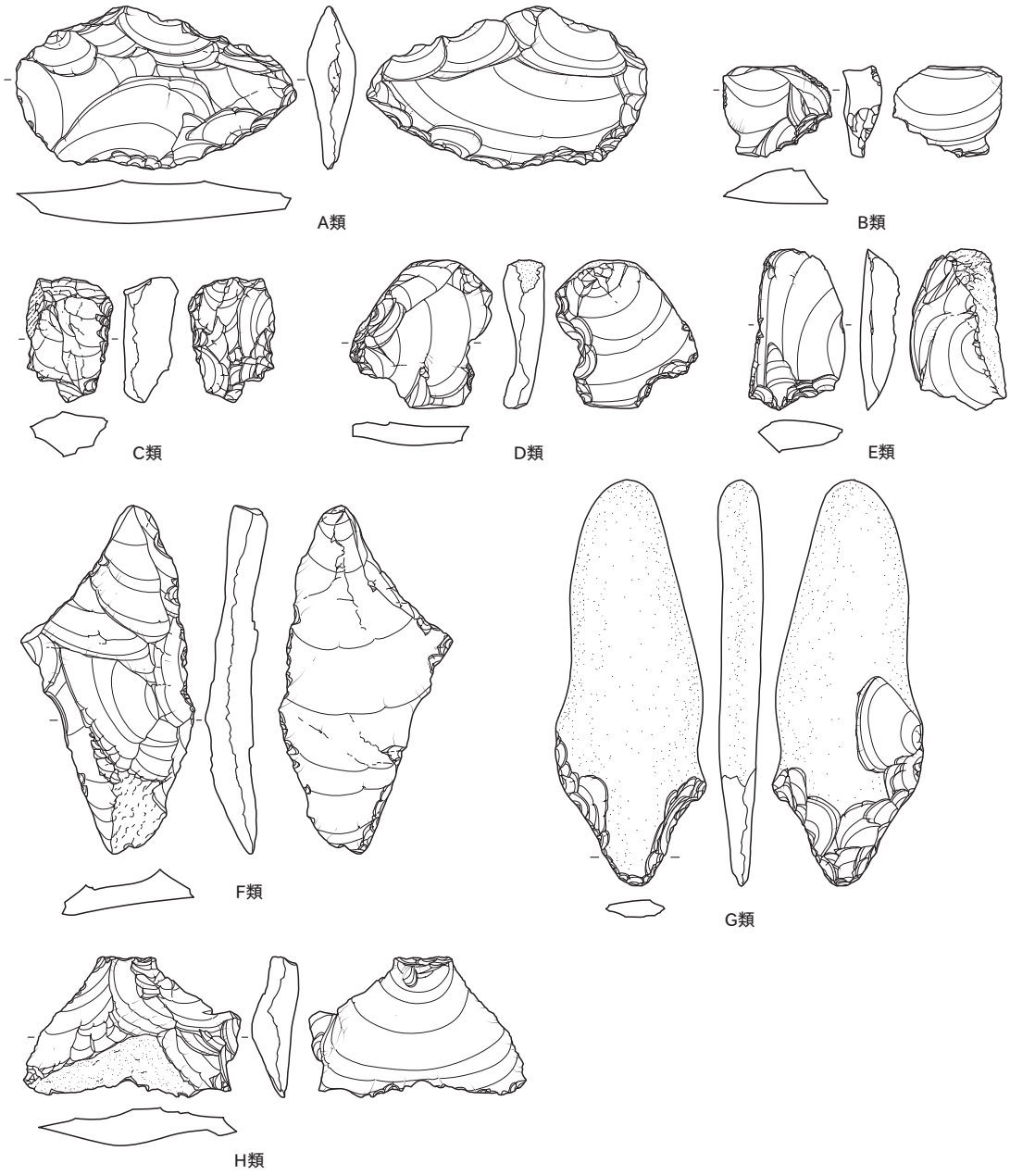
Ｆ類　不連続な剥離の刃部を持つもの。

Ｇ類　鋭利な先端部があり、先端部に連続剥離を有するもの。

Ｈ類　使用の結果生じたと推定される微細剥離痕を有するもの。

礫　器　「礫または大型で厚手の剥片を素材とし、周縁の１部に片面または両面から大きな剥離を連続的に加え刃部とした」［鈴木1996］石器を礫器とした。

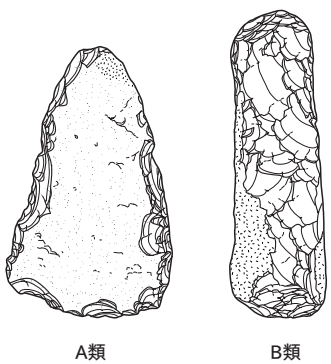
打製石斧　斧形に加工した打製石器を打製石斧とした。撥形（Ａ類）と短冊形（Ｂ類）に分類した（第65図）。



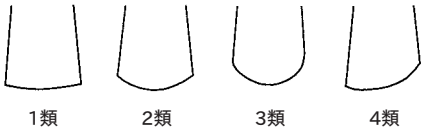
第64図　不定形石器分類図

磨製石斧　研磨により刃部を作り出している斧形の石器を磨製石斧とした。成品と未成品の区別は、研磨がほぼ全体に及んでいるものを成品とし、それ以外のものを未成品とした。未成品は荒割段階のもの（段階1）、敲打段階のもの（段階2）、研磨が部分的に及んでいるもの（段階3）に分類した。

形態分類は、長さ5cm以上を大形、5cm未満を小形とした。破損品に関しては幅・厚さから大きさを推定した。ただし、欠損が大きく推定が不可能なものに関しては分類していない。なお、朝日村元屋敷遺跡において、長幅比と基部幅比（基部幅/最大幅×100）で形態分類がなされており［滝沢2002a］、本遺跡においても、完

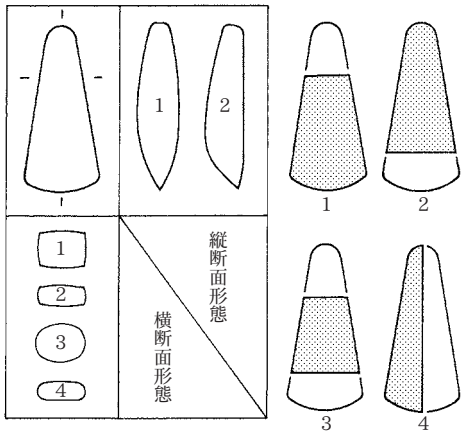


第65図　打製石斧分類図



第66図　磨製石斧刃部平面形模式図

第67図　磨製石斧基部形状模式図



第68図　磨製石斧縦断面・横断面・欠損模式図［加藤1999］

形品に関しては元屋敷遺跡を参考に分類した（第69図）。

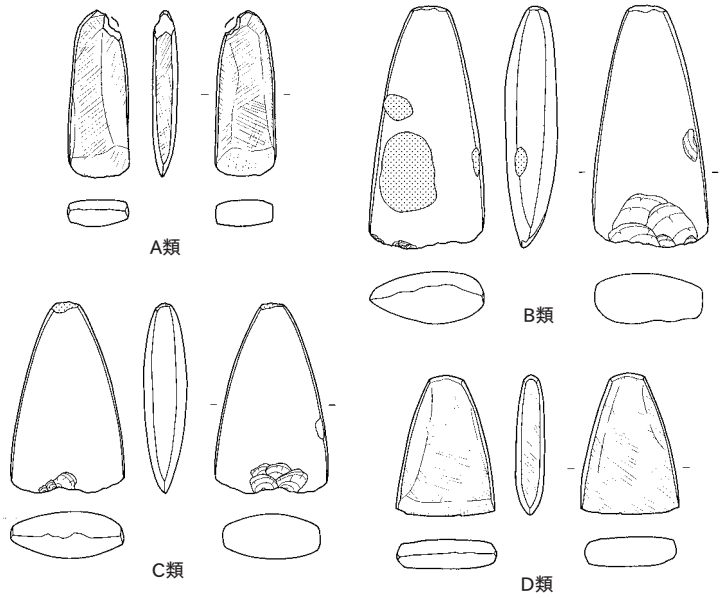
A類　長幅比が37～50未満、基部幅比が35以上。

B類　基部幅比が37～50未満、基部幅比が35未満。

C類　長幅比が50以上、基部幅比が35以上。

D類　長幅比が50以上、基部幅比が35未満。

さらに使用状況・着柄部の推定のために基部平面形・刃部平面形・横断面形・縦断面形に注目した。各分類については中郷村和泉A遺跡［加藤1999］を参考にしている。以下に分類項目の細分を記す。なお観察表では上記の各分類項目を設け分類番号を記した。



第69図　磨製石斧分類図

【刃部平面形】　平刃（1類）、角が角張る円刃（2類）、角が丸まる円刃（3類）、偏刃（4類）に細分した（第66図）。

【基部平面形】　基部幅が狭く、頂部に若干面を持つもの（1類）、基部幅が広く、頂部に広い面を持つもの（2類）、基部が尖るもの（3類）に細分した（第67図）。

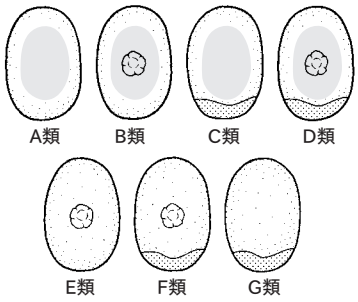
【横 断 面 形】　厚手の長方形（1類）、薄手の長方形（2類）、厚手の円形（3類）、薄手の楕円形（4類）に細分した（第68図）。

【縦 断 面 形】　両刃（1類）と片刃（2類）に細分した（第68図）。

【欠 損 状 態】　基部欠損（1類）、刃部欠損（2類）、刃部・基部欠損（3類）、縦位欠損（4類）に細分した（第68図）。

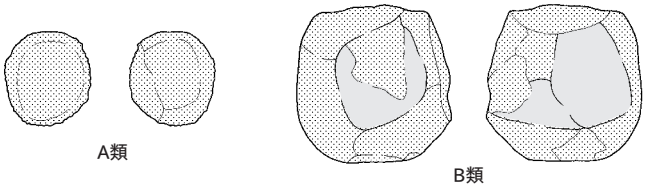
磨石類　円礫または扁平礫に磨痕・凹痕・敲打痕の残る石器を磨石類とした。従来磨石・凹石・敲石と呼称されるものを一括して扱った。清水上遺跡・和泉A遺跡などを参考に、加工痕の組み合わせにより分類した（第70図）。

Ａ類　磨痕のみ認められるもの。
Ｂ類　磨痕と凹痕が認められるもの。
Ｃ類　磨痕と敲打痕が認められるもの。
Ｄ類　磨痕・凹痕・敲打痕すべてが認められるもの。
Ｅ類　凹痕のみ認められるもの。
Ｆ類　凹痕と敲打痕が認められるもの。
Ｇ類　敲打痕のみ認められるもの。



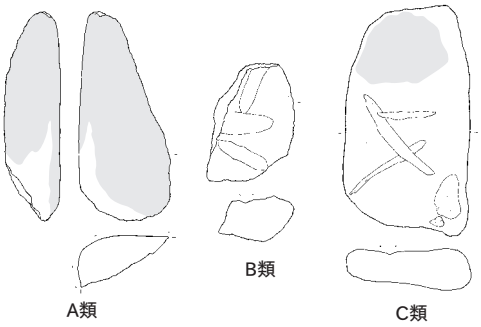
第70図　磨石類分類模式図

多面体を呈する敲石　比較的硬質な円礫で複数に面を持ち、敲打痕が認められるものである。礫全体に加工痕が及ぶこと、石英・チャートなどの硬質な石材を用いる点で磨石類とは区別される。多面体を呈する敲石は、豊栄市鳥屋遺跡において磨製石斧製作に関連することが指摘されている［阿部1984］。敲打痕のみ認められるもの（Ａ類）と、敲打痕と平滑な磨痕のような痕跡が認められるもの（Ｂ類）に分類した（第71図）。なお、挿図・挿表中は、「多面体敲石」を用いる。



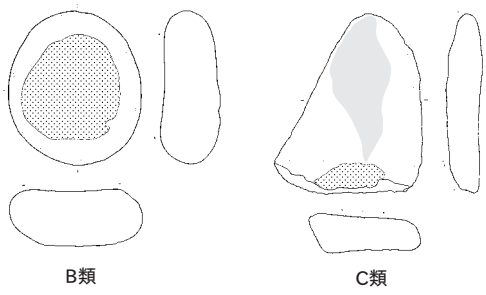
第71図　多面体敲石分類図

砥　石　比較的平坦な礫の１面ないし複数面に使用痕を持つ石器を砥石とした。使用面は平坦な面を持ち、若干内湾するものも認められる。使用痕跡としては局部的な磨痕と溝状のものがある。面状に使用痕が認められるもの（Ａ類）、溝状に使用痕が認められるもの（Ｂ類）、面状と溝状の使用痕が複合されているもの（Ｃ類）に分類した（第72図）。



第72図　砥石分類図

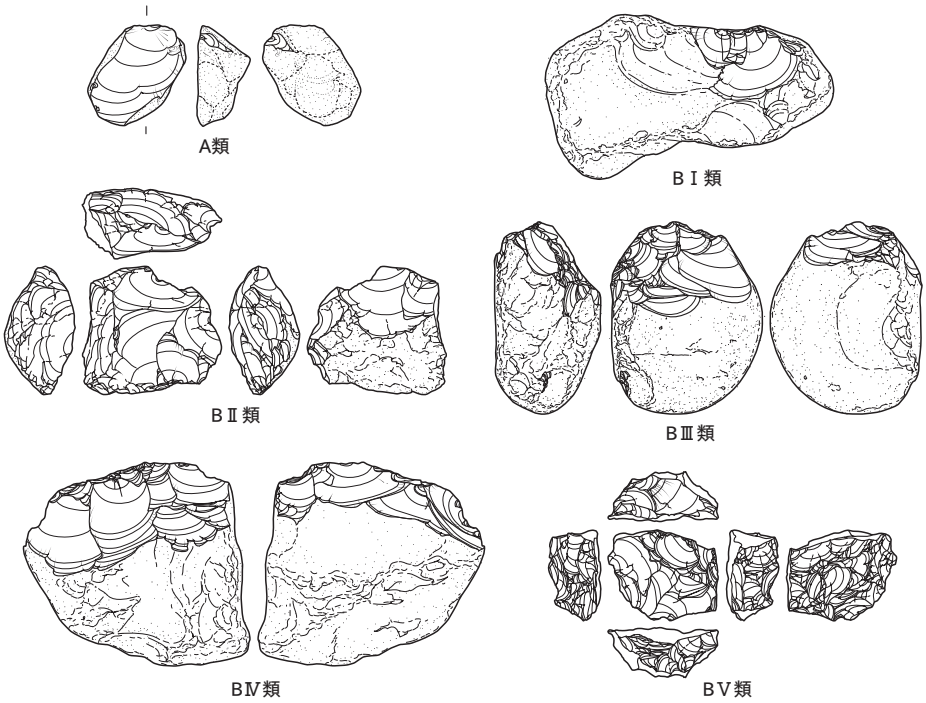
石皿類　円形ないし楕円の大型扁平礫の１面または２面に使用面を持つものを石皿類とした。縄文時代中期に多く認められる縁取りされた石皿は出土しておらず、使用の結果若干窪むものや、広い平坦面を持つものが多い。磨痕と敲打痕が複合しているものが存在するため、従来台石としているものも含める。磨痕が認められるもの（Ａ類）、敲打痕が認められるもの（Ｂ類）、磨痕と敲打痕が認められるもの（Ｃ類）に分類した（第73図）。



第73図　石皿類分類図

軽石製品　火山の噴出物によって形成された石（軽石または浮石）に加工痕が認められるものを軽石製品とした。穿孔の認められるもの（Ａ類）と認められないもの（Ｂ類）で大別し、更に面的な磨痕（Ⅰ類）、溝状の加工痕（Ⅱ類）、磨痕と溝状の加工痕の複合（Ⅲ類）で細別した。

石　核　剥片を作り出すための素材または剥片剥離作業が行われた後の残核を石核とした。塩沢町五丁



第74図　石核分類図

歩遺跡［高橋1992］を参考に分類した（第74図）。

A類　荒割り段階のもの。

B類　剥離作業段階のもの。

BⅠ類　同一打面から同一剥離作業面に同方向から剥離作業が行われるもの。

BⅡ類　同一作業面に別々の打面から剥離作業が行われるもの。

BⅢ類　同一打面から別々の剥離作業面に同方向の剥離作業が行われるもの。

BⅣ類　交互剥離により剥離作業が行われるもの。

BⅤ類　BⅠ～BⅣ類の剥離作業が組み合わさったもの。

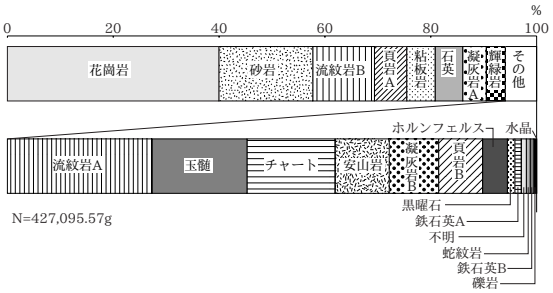
なお、本遺跡においてB類に類似するが打点が認められないものが多数存在する。これらについては石核の可能性があるものとして別途記載している。

B　石器の分布と組成及び石材環境

上述したように本遺跡では多種類の石器が出土している。出土層位は基本層序であるS5～Ⅵ層で出土しているものがほとんどであり、層位別の分布はS1層期で全体の約6割を占める（第11表）。ただし、地区によって各層の石器が出土量には相違が認められ、中央地区より北側ではS4～S3層期の遺物が比較的多く認められるが、南側では少なくなり、特にSD1420右岸3地区及びSD1420左岸地区ではほとんど認められなくなる。平面的分布は、SD19左岸地区・中央地区・SD1420右岸1・2地区のSD19とSD1420の挟まれた地区において多く出土している。

器種組成は、剥片石器の中では不定形石器が4割、両極剥離痕を有する石器が2割程度を占める（第11表）。定形石器では石鏃・石錐が優位であり、石匙・篦状石器は2～3点程度に止まる。礫石器では、磨石類が多く出土している。このような組成は、縄文時代晩期における新潟県周辺の一般的な傾向である［前山2002］。層位別の組成に顕著な変化は認められないが、磨製石斧はS1層期に増加する傾向にある。

石材については、剥片石器は流紋岩が圧倒的に多く、頁岩・玉髄が次ぐ。礫石器は花崗岩が主体を占める（第12表・75図）。特に剥片石器については、荒川流域もしくは加治川流域においてこれらの石材が採取でき、新潟県北部地域の特徴として挙げられる［阿部1997］。黒曜石は75点の産地同定の結果、新発田市板山産と同市上石川産のみで占められることが明らかになった（関連諸科学編第Ⅴ章1参照）。板山及び上石川産出地は本遺跡から直線距離で約12～15kmを測り、直接入手可能な在地石材と考えられる。原産地と遺跡間の距離も考慮に入れなければならないが、周辺遺跡において本遺跡のように在地の黒曜石のみを利用している遺跡は希少である（本編第Ⅶ章4参照）。ただ



第75図　石材重量比

	石鏃	石鏃未成品	石錐	石匙	筌状石器	両極石器	不定形石器	打製石斧	磨製石斧	磨製石斧未成品	礫器	磨石類	多面体	砥石	石皿	小計	石核	剥片	合計
Ⅵ層	206 (11.5)	90 (5.0)	90 (5.0)	1 (0.1)	1 (0.1)	383 (21.3)	785 (43.8)	10 (0.6)	18 (1.0)	9 (0.5)	6 (0.3)	114 (6.4)	35 (2.0)	31 (1.7)	14 (0.8)	1794	60	6112	7966
S1層	182 (15.5)	67 (5.7)	93 (7.9)	1 (0.1)	1 (0.1)	230 (19.6)	453 (38.6)	1 (0.1)	14 (1.1)	4 (0.4)	6 (0.5)	92 (7.8)	12 (1.0)	13 (1.1)	6 (0.5)	1175	39	5968	7182
S2層	23 (17.6)	9 (6.9)	10 (7.6)			31 (23.7)	45 (34.4)			1 (0.8)		8 (6.1)	2 (1.5)	1 (0.8)	1 (0.8)	131	1	458	590
S3層	45 (18.6)	15 (6.2)	13 (5.4)	1 (0.4)		37 (15.3)	107 (44.2)	1 (0.4)	2 (0.8)			14 (5.8)	3 (1.2)	4 (1.7)		242	6	2317	2565
S4層	49 (13.6)	18 (5.0)	33 (9.2)		1 (0.3)	70 (19.5)	143 (39.8)	3 (0.8)	2 (0.6)	3 (0.8)	1 (0.3)	24 (6.7)	2 (0.6)	8 (2.2)	2 (0.6)	359	8	2929	3296
S5層	4 (10.5)	2 (5.3)	5 (13.2)			4 (10.5)	18 (47.4)		1 (2.6)	1 (2.6)		3 (7.9)				38	3	427	468
その他	40	17	20		3	3	65	167	5	7	19		90	6	57	11	446	19	1894	2359
合計	549 (13.1)	218 (5.2)	264 (6.3)	3 (0.1)	3 (0.1)	820 (19.6)	1718 (41.1)	20 (0.5)	44 (1.0)	26 (0.6)	16 (0.4)	345 (8.2)	60 (1.4)	64 (1.5)	34 (0.8)	4185	136	20105	24426

括弧内の数値は%

第11表　石器遺跡全体層位別器種組成表

	石鏃	石錐	石匙	筌状石器	両極石器	不定形石器	打製石斧	磨製石斧	礫器	磨石類	多面体敲石	砥石	石皿	石核	剥片	総点数	総重量（g）
安山岩					7	16	1	22	2	15		3	6	1	113	186	42207.18
花崗岩					1	2			2	255	3	21	13		4	301	171617.71
凝灰岩A	5	15			93	79				13	1	1	5	2	284	498	17762.07
凝灰岩B	1				1	28				1				1	315	347	2002.56
玉髄	71	12	1		140	64					2			11	1646	1946	4068.99
輝緑岩								3		8	1		4			16	14671.03
頁岩A	30	31		1	83	370	1		2	1	1			57	3501	4078	23493.91
頁岩B	10	6			16	48								14	467	561	1796.28
黒曜石	32	3			66	41								2	112	256	347.68
砂岩						3		1	2	24	2	37	5		48	122	62815.54
蛇紋岩								16				1				17	241.01
石英	1				1	10			2	4	33			4	450	506	17576.08
チャート	1	2			3	5				2	1			1	8	23	1287.26
鉄石英A	20	4			10	8					1				71	114	304.88
鉄石英B	3	2			8	7					1				1	22	156.51
粘板岩					2	19	18		6	9	8	1	1	1	257	322	20619.09
ホルンフェルス								1			4					5	640.26
流紋岩A	93	38			62	136				1				7	3688	4026	6494.04
流紋岩B	283	151	2	2	327	881				7	1			35	9132	10820	37413.9
礫岩						1				3	1				5	10	1333.7
水晶															2	2	1.84
不明										2					1	3	244.05
総点数	550	264	3	3	820	1718	20	43	16	345	60	64	34	136	20105	42181	427095.57

第12表　石器遺跡全体石材別器種組成表

し、原産地分析を行った遺跡が少ないため、今後の事例の増加が待たれる。一方、玉類の中には糸魚川・青海産のヒスイや、佐賀県牟田辺遺物群と同質の緑色凝灰岩（産出地は不明）などが認められる（関連諸科学編第Ⅴ章２参照）。

C　SD19右岸地区の石器（図面図版218、写真図版161）

1）分布と出土状況

当該区は本遺跡の最北端に位置しており、SD1とSD19に挟まれている平場である。遺構は掘立柱建物が３棟、炭化物集中範囲（SC）が数か所検出されている。ほかの地区と比較して遺構の密度は低く、層位別にはS1～Ⅵ層及びS2層に遺物が限定される（第13表）。遺物量が少ないため器種組成は把握できないが、不定形石器よりも両極剥離痕を有する石器（7）が多い点が特徴として挙げられ、打製石斧・磨製石斧は認められない。礫石器は礫器（9）と磨石類（10）が出土している。石材は、剥片石器の中では玉髄が多く認められ、礫石器には花崗岩、砂岩が用いられる（第14表）。

	石鏃	石錐	両極石器	不定形石器	礫器	磨石類	砥石	軽石製品	小計	剥片類	石核	合計
Ⅵ層		1	1			2			4	2		6
S1層			1	4					5	28		33
S2～1層			11		1				12	33		45
S2層	1	1	5	2					9	12		21
S3層										1		1
その他	4			2		1	1	2	10	5	1	16
合計	5 (12.5)	2 (5.0)	18 (45.0)	8 (20.0)	1 (2.5)	3 (7.5)	1 (2.5)	2 (5.0)	40	81	1	122

括弧内の数値は%

第13表　SD19右岸地区　層位別器種組成表

	石鏃	石錐	両極石器	不定形石器	礫器	磨石類	砥石	小計	剥片類	石核	合計	総重量（g）
安山岩									1		1	9.60
花崗岩						3		3			3	2062.31
凝灰岩A									1		1	0.90
玉髄	1		17	2				20	36		56	31.68
頁岩A		1		2				3	6		9	11.44
砂岩							1	1	2		3	43.63
石英					1			1	4		5	435.00
粘板岩				1				1			1	22.09
流紋岩A	1			1				2	7		9	5.98
流紋岩B	3	1	1	2				7	24	1	32	505.53

第14表　SD19右岸地区　石材別器種組成表

2）各器種の説明

当該区出土の石器では石鏃に特徴的な形状が認められる。図面図版218-2・３はいずれもＡⅢ類に分類されるが、長幅比は約1.4と長さに比して幅が広い。そのほかにＡＩｂ類（1）、Ｃ類（4）が認められ、点数が少ないものの、形態は多様である。石錐は２点のみの出土である（5・6）。ＢＩ類とＢⅡ類に分類され、特に６は使用痕と考えられる線状痕が明瞭に認められる。

D　SD19左岸地区の石器（図面図版218～221、写真図版161・162）

1）分布と出土状況

当該区はSX51とSD19に挟まれた平場及び斜面である。SD19の上流には掘立柱建物が立地しており、7・8Eグリッドには堅果類廃棄範囲であるSX112が広がる。各層位の遺物点数はS4～Ⅵ層の各層にわたって300～600点程度認められる（第15表）。平面分布は、S4～S3層期では石鏃・不定形石器・剥片が10E、11E・Fグリッドに集中する。両極剥離痕を有する石器は9～11Eグリッドに集中し、石鏃などの分布と若干異なる。磨石類は斜面の8Fグリッドに集中し、剥片石器の分布と差異が認められる。S1層期には、不定形石器・剥片・両極剥離痕を有する石器が9～11Fグリッドに分布が集中し、石鏃・石錐は

	石鏃	石鏃未成品	石錐	両極石器	不定形石器	打製石斧	磨製石斧	磨製石斧未成品	礫器	磨石類	多面体敲石	砥石	石皿類	軽石製品	小計	剥片類	石核	合計
Ⅵ層	14 (13.0)	8 (7.4)	8 (7.4)	13 (12.0)	39 (36.1)	3 (2.8)	3 (2.8)	1 (0.9)	1 (0.9)	11 (10.2)		4 (3.7)	2 (1.9)	1 (0.9)	108	510	3	621
S1層	12 (11.9)	2 (1.98)	12 (11.9)	18 (17.8)	40 (39.6)		4 (4.0)		2 (2.0)	8 (8.0)		2 (2.0)	1 (1.0)		101	520	4	625
S2～S1層	6 (16.2)	3 (8.1)	4 (10.8)	3 (8.1)	17 (46.0)	1 (2.7)				3 (8.1)					37	372	1	410
S2層	12 (18.5)	6 (9.2)	6 (9.2)	12 (18.5)	24 (36.9)					3 (4.6)		1 (1.5)	1 (1.5)		65	262		327
S3層	15 (17.0)	3 (3.4)	2 (2.3)	17 (19.3)	37 (42.0)					9 (10.2)	2 (2.3)	1 (1.1)		2 (2.3)	88	312	2	402
S4～S3層		1		4	6										11	84		95
S4層	11 (11.8)	3 (3.2)	6 (6.5)	14 (15.1)	42 (45.2)	2 (2.2)	1 (1.1)	2 (2.2)		7 (7.5)		1 (1.1)	1 (1.1)	3 (3.2)	93	395	2	490
S5層	1		1	2	4										8	19	2	29
その他	6	2	2	13	25	1	2	2	1	13	1	2	1		71	233	3	307
合計	77 (13.2)	28 (4.8)	41 (7.0)	96 (16.5)	234 (40.2)	7 (1.2)	10 (1.7)	5 (0.9)	4 (0.7)	54 (9.3)	3 (0.5)	11 (1.9)	6 (1.0)	5 (0.9)	582	2707	17	3306

括弧内の数値は%

第15表　SD19左岸地区　層位別器種組成表

	石鏃	石鏃未成品	石錐	両極石器	不定形石器	打製石斧	磨製石斧	磨製石斧未成品	磨石類	多面体敲石	砥石	石皿類	小計	剥片類	石核	合計	総重量（g）
安山岩				1	4		6	1	1				13	12		25	2309.66
花崗岩									36	1	1	2	40			40	22130.24
凝灰岩A	1	1		9	17			1	2			3	34	37	1	72	5562.84
凝灰岩B	1				4								5	42	1	48	231.06
玉髄	7		3	14	8					1			33	124	2	159	328.31
輝緑岩							2	1	2			1	6			6	5079.68
頁岩A	3	3	3	2	38	1				1			51	295	5	351	2190.61
頁岩B	2	1	1	6	11								21	28	1	50	250.36
黒曜石	1			2	1								4			4	4.11
砂岩							1		5		10		16	4		20	10213.4
蛇紋岩							1						1			1	23.63
石英									1				1	40		41	779.16
鉄石英A	6		1		1								8	14		22	37.78
鉄石英B					1								1			1	2.17
粘板岩					8	6			3				17	84		101	3208.02
ホルンフェルス								2					2			2	180.14
流紋岩A	29	12	10	34	63								148	1073	2	1223	1577.18
流紋岩B	27	11	23	28	77				3				169	952	5	1126	4896.49
礫岩					1				1				2			2	360.00
水晶													0	2		2	1.84
琥珀														1		1	0.01

第16表　SD19左岸地区　石材別器種組成表

10・11Fグリッドと前者と比べて狭い範囲に分布の集中が認められる。磨製石斧や磨石類においても、剥片石器の分布する範囲に集中する（第77図）。器種組成は、遺跡全体の組成とほぼ同様であり、層位別の組成にも明確な差異は認められないが、磨製石斧・打製石斧はS1層期において増加する（第15表）。

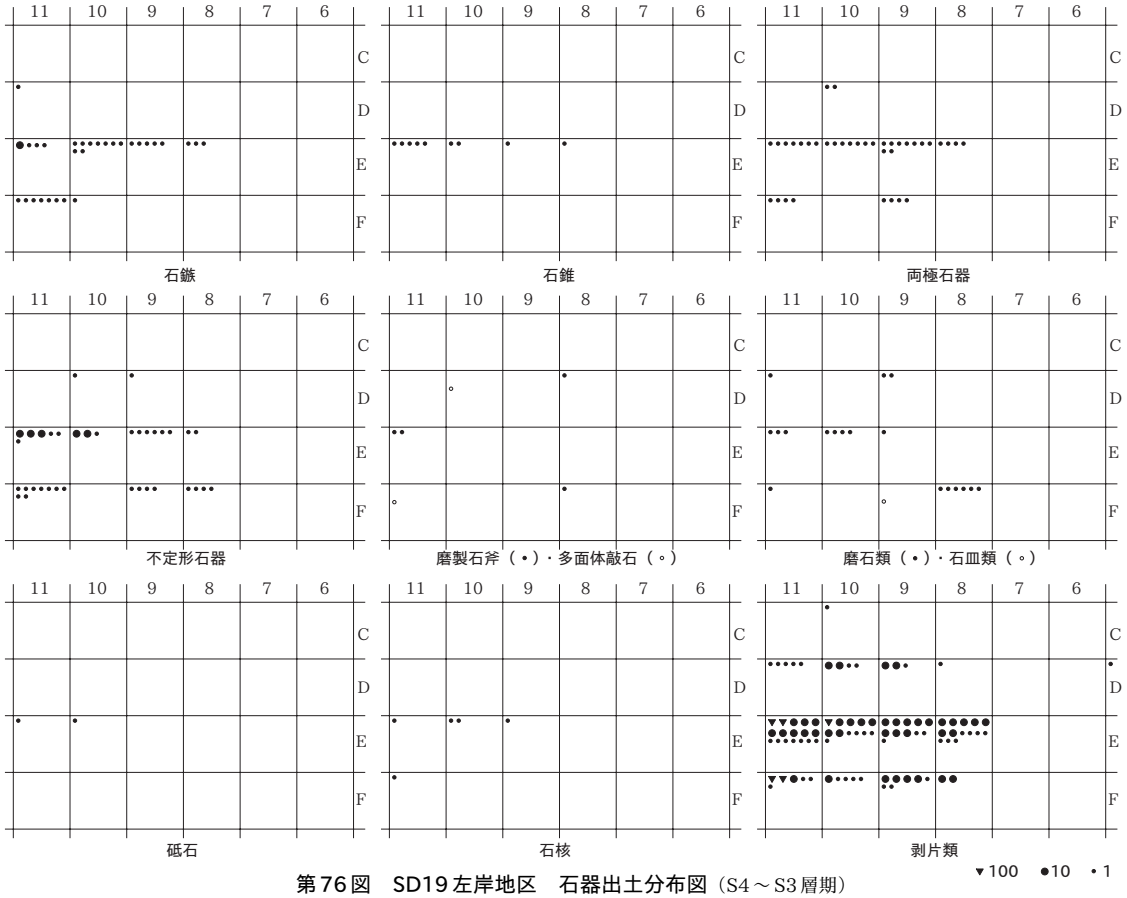
2）石　　鏃（11～29）

総数77点を数える（第15表）。分類別にはＡⅠｂ類（14～17・19・20）、ＡⅡａ類（22～25）、Ｃ類（26～29）が主体を占める。ＡⅠａ類（11・12）はS2層より上層で認められ、Ｃ類はS4～S3層で多く出土している（第17表）。

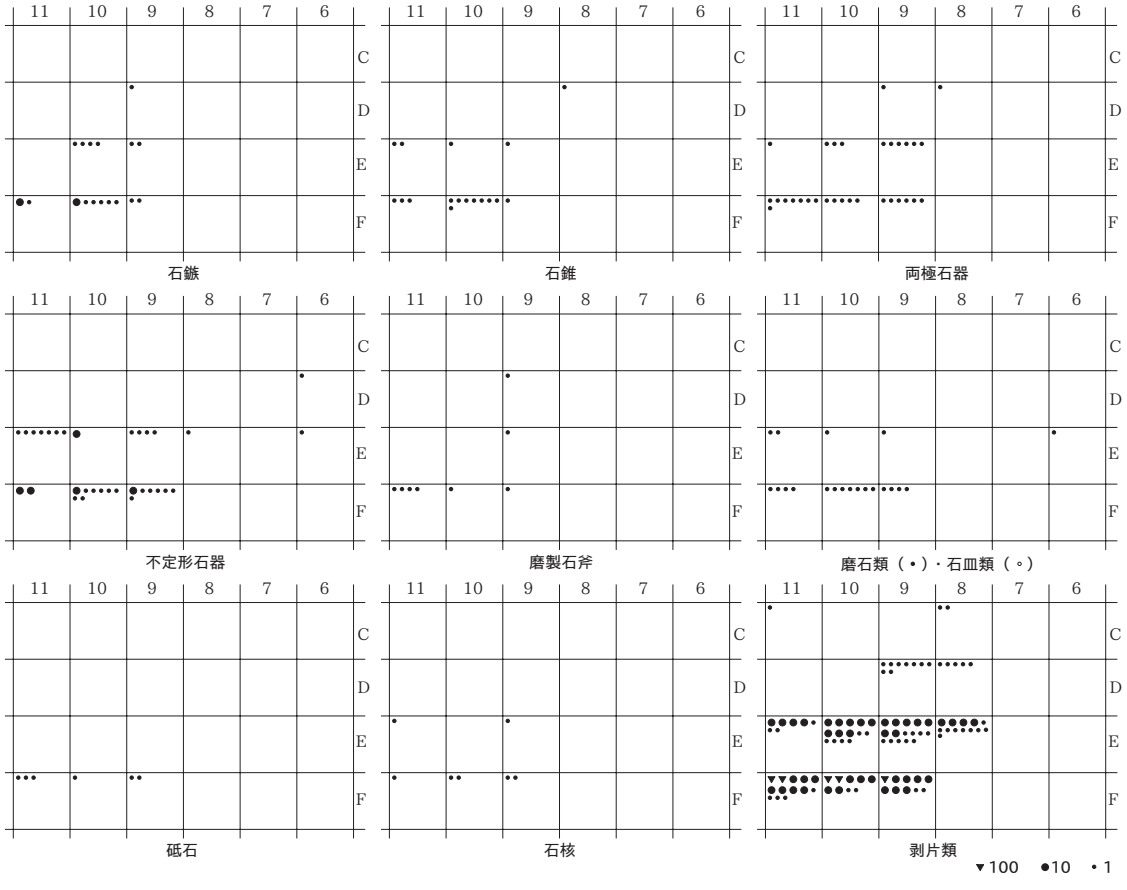
法　量（第78図、18・19表）　完形品・略完形品の43点を対象とする。ＡⅠｂ類は長さ2.5～3.0cm付近にまとまる傾向が認められ

	ＡⅠａ類	ＡⅠｂ類	ＡⅠｃ類	ＡⅡａ類	ＡⅡｂ類	ＡⅢ類	Ｂⅰ類	Ｃ類	合計
Ⅵ層	1	6	1	1				1	10
S1層	1	3		3		2		2	11
S2層	1	3	1		1			1	7
S3層		5		3			1	4	13
S4層		1	1	2		1		2	7
その他		3	1	1				2	7
合計	3	21	4	10	1	3	1	12	56

第17表　SD19左岸地区　石鏃層位別分布表



第76図　SD19左岸地区　石器出土分布図（S4～S3層期）



第77図　SD19左岸地区　石器出土分布図（S1層期）

る。ＡⅡａ類は長さが1.9～3.9cmと分布幅が広い。Ｃ類はまとまりが認められず散在的に分布し、長幅比は２：１～４：１に分布するものが多い（第78図）。厚さは、ＡⅡａ類とＣ類において1cmに近い数値のものが認められるが、総じて0.3～0.6cm以内に収まる（第18表）。重量は、ＡⅠｂ類は1.5g以下に収まるが、ＡⅡａ・Ｃ類は分布の幅が広く、長さと幅、厚さが反映されているものと考えられる（第19表）。

石　材（第16表）　総数77点を対象とする。流紋岩Ａ類（37.7%）、流紋岩Ｂ類（35.1％）、玉髄（9.1％）、鉄石英Ａ類（7.8％）、頁岩Ａ類（3.9％）などが利用されている。S1層では玉髄が比較的多く用いられる。

遺存状態　欠損しているものは総数77点中30点（39.0％）である。分類別には１類７点、２類11点、３類９点、４類３点と、基部が欠損しているものが多く認められる。

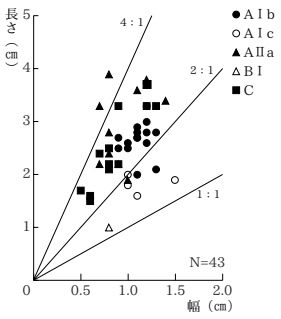
その他　13・19・20は身部中央に張り出し部が作出されている。黒色付着物が認められるものが23点（29.9％）認められる（22・25・27など）。また、20は黒色付着物及び赤色顔料が認められる。

3）石鏃未成品及び失敗品（30～32）

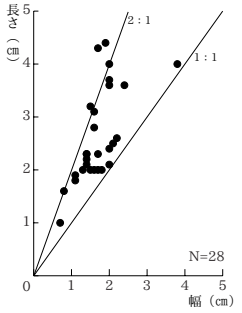
総数28点を数える（第15表）。層位別にはS1～Ⅵ層とS2層において多く出土しており、成品と同様、10・11Fグリッドに集中する。S4～S3層は9・10Eグリッドに分布する（第76図）。

法　量（第79図、20・21表）　長さ1.0～4.5cm、幅0.7～4.0cmに分布する（第79図）。成品と比較すると、幅は大きいものの長さは成品と同規模のものも認められる。長幅比は１：１～２：１にほぼ収まる。厚さは0.4～0.9cm付近にまとまり（第20表）、成品よりも厚いものが多い。重量は0.10～12.44gに分布し、3g以下のものと5g以上のものの２群に分かれる（第21表）。

石　材（第16表）　流紋岩Ａ類（42.8%）、流紋岩Ｂ類（39.3%）が主体を占める。



第78図　SD19左岸地区
石鏃長幅分布図



第79図　SD19左岸地区
石鏃未成品長幅分布図

厚さ（cm）	ＡⅠb類	ＡⅠc類	ＡⅡa類	ＢⅠ類	Ｃ類
～0.3	1	1		1	3
0.4～0.6	13	3	7		7
0.7～0.9	1		2		1
1.0～1.2			1		

第18表　SD19左岸地区　石鏃厚さ分布表

重量（g）	ＡⅠb類	ＡⅠc類	ＡⅡa類	ＢⅠ類	Ｃ類
～0.50	1	2	1	1	5
0.51～1.00	7	2	4		3
1.01～1.50	7		2		1
1.51～2.00					1
2.01～2.50			2		1
2.51～3.00					
3.01～3.50			1		

第19表　SD19左岸地区　石鏃重量分布表

厚さ（cm）	
～0.3	1
0.4～0.6	13
0.7～0.9	10
1.0～1.2	3
1.3～1.5	1

第20表　SD19左岸地区
石鏃未成品厚さ分布表

重量（g）	
～0.50	2
0.51～1.00	1
1.01～2.00	13
2.01～3.00	4
3.01～4.00	1
4.01～5.00	
5.01～6.00	4
6.01～7.00	2
7.01～	1

第21表　SD19左岸地区
石鏃未成品重量分布表

4）石　　錐（33～42）

総数41点を数える（第15表）。分類別にはＢⅡ類（38・39）が圧倒的に多く、ＢⅠ類（36・37）が次ぐ。ＡⅡ類（33～35）・Ｃ類（42）はS1～Ⅵ層に認められる（第22表）。

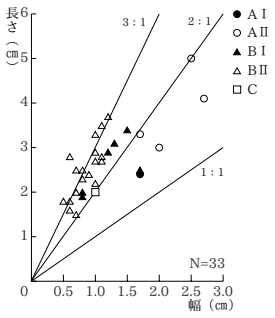
法　量（第80図、23・24表）　完形品・略完形品33点を対象とする。長さと幅は分類によってまとまりが認められ、ＡⅡ類は比較的大形である。長幅比はＡⅡ類が1：1～2：1、ＢⅠ類が2：1～3：1、ＢⅡ類は2：1～4：1の範囲に分布する（第80図）。厚さは0.3～1.1cmに分布し、ＢⅠ類・ＢⅡ類は0.4～1.1cmと分布幅が広い（第23表）。重量は0.4～4.0gの範囲に分布するものが多いが、ＡⅡ類は7gを超えるものも認められる（第24表）。

石　材（第16表）　総数41点を対象とする。流紋岩Ｂ類（56.1%）、流紋岩Ａ類（24.4%）、玉髄（7.3％）、頁岩Ａ類（7.3％）などが利用されている。

遺存状況　基部が欠損しているものが6点、錐部が欠損しているものが1点認められる。

5）両極剥離痕を有する石器（43～50）

総数96点を数える（第15表）。分類別にはＡ類（43～48）が多数を占め、Ｂ類（49・50）は3点のみである。



第80図　SD19左岸地区
石錐長幅分布図

	ＡⅠ類	ＡⅡ類	ＢⅠ類	ＢⅡ類	Ｃ類	合計
Ⅵ層		1		6	1	8
S1層		3	2	7		12
S2層			2	3		5
S3層			2			2
S4層	1		2	2		5
S5層				1		1
その他			1	4		5
合計	1	4	9	23	1	38

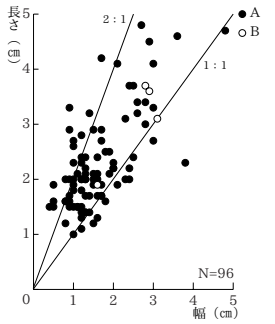
第22表　SD19左岸地区　石錐層位別分布表

厚さ（cm）	ＡⅠ類	ＡⅡ類	ＢⅠ類	ＢⅡ類	Ｃ類
～0.3	1				
0.4～0.6			1	11	1
0.7～0.9		3	4	9	
1.0～1.2		1	1	1	

第23表　SD19左岸地区　石錐厚さ分布表

重量（g）	ＡⅠ類	ＡⅡ類	ＢⅠ類	ＢⅡ類	Ｃ類
～1.00			1	11	
1.01～2.00	1		3	7	1
2.01～3.00			1	3	
3.01～4.00		1	1		
4.01～5.00		1			
5.01～6.00		1			
6.01～		1			

第24表　SD19左岸地区　石錐重量分布表



第81図　SD19左岸地区
両極石器長幅分布図

厚さ（cm）	A類	B類
～0.3	8	
0.4～0.6	24	1
0.7～0.9	39	1
1.0～1.2	13	1
1.3～1.5	4	
1.6～1.8	3	
1.9～2.1	2	

第25表　SD19左岸地区
両極石器厚さ分布表

重量（g）	A類	B類
～ 5.00	73	1
5.01～10.00	12	2
10.01～15.00	1	
15.01～20.00	4	
20.01～25.00		
25.01～30.00	2	

第26表　SD19左岸地区
両極石器重量分布表

法　量（第81図、25・26表）　総数96点を対象とする。長さ1.0～4.8cm、幅0.4～4.8cmに分布する（第81図）。長幅比は1：2～3：1の範囲に収まり、B類は1：1～2：1で正方形に近い形状を呈する。厚さは、A類は0.5～0.9cmの範囲にまとまり、B類は0.6～1.1cmの範囲に分布する（第25表）。重量は10g以下のものが多い（第26表）。

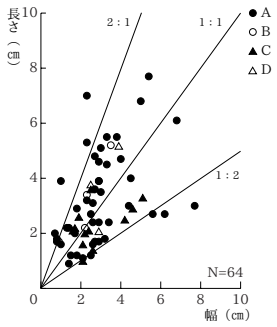
石　材（第16表）　流紋岩A類（35.4%）、流紋岩B類（29.2％）が主体を占め、そのほかに玉髄（14.6%）、凝灰岩A類（9.3％）などが用いられている。なお、B類はすべて流紋岩が利用されている。

6）不定形石器（51～60）

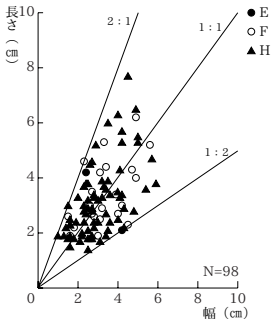
総数234点を数える（第15表）。分類別には、各層共にA類（51・52）・H類（59・60）が主体を占め、C類（53・54）・F類（56～58）はS5層を除いた各層で2～5点程度認められる。D類（55）・E類はS1～Ⅵ層のみで出土している（第27表）。

法　量（第82・83図、28・29表）　分類不明を除く162点を対象とする。長さと幅は、C・D・E類は5cmを超えるものは少なくほかの分類よりも小形である。長幅比は1：2～2：1の範囲に分布するが、A類は分布幅が広い（第82・83図）。厚さはA・H類が1.0cm以下にまとまる（第28表）。重量は0.2～30gの範囲に分布するものが大半を占める（第29表）。C・D・E類の重量は30g以下に収まり、30g以上のものはH類に多く認められる。

石　材（第16表）　総数234点を対象とする。流紋岩A類（26.9%）、流紋岩B類（32.9%）、頁岩A類（16.2%）、凝灰岩A類（7.3%）などが用いられている。



第82図　SD19左岸地区
不定形石器長幅分布図1



第83図　SD19左岸地区
不定形石器長幅分布図2

	A類	B類	C類	D類	E類	F類	H類	合計
Ⅵ層	9		1	2		3	17	32
S1層	10		2	1	1	5	11	30
S2層	4		1			2	9	16
S3層	5	2	2			6	5	20
S4層	4		3			4	14	25
S5層	1						1	2
その他	12	2	3		1	3	16	37
合計	45	4	12	3	2	23	73	162

第27表　SD19左岸地区　不定形石器層位別分布表

厚さ（cm）	A類	B類	C類	D類	E類	F類	H類
～0.5	13	1	4				12
0.6～1.0	16	2	7	2	2	11	43
1.1～1.5	11	1	1	1		11	12
1.6～2.0	4					1	3
2.1～2.5	1						2
2.6～3.0							
3.1～3.5							1

第28表　SD19左岸地区　不定形石器厚さ分布表

重量（g）	A類	B類	C類	D類	E類	F類	H類
～ 5.00	23	2	8	1		6	34
5.01～10.00	5	1	2	1	2	7	22
10.01～15.00	7		2			4	6
15.01～20.00						3	1
20.01～25.00	3	1		1			1
25.01～30.00	2					2	2
30.01～35.00	1					1	3
35.01～40.00							1
40.01～45.00	2						1
45.01～50.00							1
50.01～	2						1

第29表　SD19左岸地区　不定形石器重量分布表

7）打製石斧（61・62）

総数７点を数える（第15表）。分類別にはＡ類３点、Ｂ類３点、不明１点である。法量は完形・略完形品４点（Ａ類３点・Ｂ類１点）を対象とし、長さ6.6～11.3cm、幅4.5～8.6cmに分布し、長幅比は１：１～２：１に収まる。厚さは1.4～2.5cm、重量は88～191gの範囲に分布する。石材は粘板岩６点、頁岩Ａ類１点が用いられている（第16表）。また、354の表面基部側には敲打痕が認められる。

8）磨製石斧（63～68）

成品10点、未成品５点を数える（第15表）。未成品は段階１が２点、段階２が３点認められる。成品は大形（63～65）が７点、小形（66～68）が３点である。形態はＣ類（66）とＤ類（65）が認められる。

法　量　成品は欠損品が多いため、厚さのみをみる。大形が1.7～3.3cm、小形が0.9～1.3cmの範囲に分布し、両者には顕著な差が認められる。

石　材（第16表）　大形は安山岩が５点と多く、そのほかに凝灰岩・輝緑岩・砂岩・ホルンフェルスなど多種類の石材が用いられている。小形は安山岩・輝緑岩・蛇紋岩が利用されている。

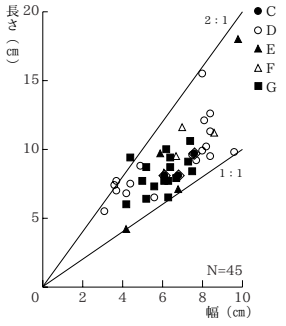
遺存状況　成品10点中９点が欠損している。１類が１点、２類が７点、１類と４類の複合が１点認められ、刃部が欠損しているものが多く認められる。

その他　64は刃部側に複数の面を持つ磨痕が認められ、刃部欠損後の転用品と考えられる。

9）磨　石　類（69～81）

総数54点を数える（第15表）。遺構では、P742・753から出土している。分類別にはＧ類（79～81）・Ｄ類（71～75）が主体を占め、各層位とも同様の傾向が認められる（第30表）。

法　量（第84図、第31・32表）　完形品・略完形品45点を対象とする。長さ６～12cm、幅４～8cm周辺に集中が認められる（第84図）。厚さは３～7cmの範囲に分布する（第31表）。ただし、Ｇ類においては2cm以下のものも認められ、扁平な礫を素材にしているものも存在する。Ｄ類の中には10cmを超える



第84図　SD19左岸地区
磨石類長幅分布図

厚さ（cm）	C類	D類	E類	F類	G類
～2.0		2			2
2.1～4.0	1	6	3		3
4.1～6.0	2	5		4	10
6.1～8.0		4	1		1
8.1～10.0		1			

第31表　SD19左岸地区　磨石類厚さ分布表

	A類	C類	D類	E類	F類	G類	合計
Ⅵ層			3	2	1	5	11
S1層		1			2	5	8
S2層	.		1			2	3
S3層	1	1	3		1	3	9
S4層			3	1		3	7
S5層						4	4
その他	1	2	3	2		4	12
合計	2	4	13	5	4	26	54

第30表　SD19左岸地区　磨石類層位別分布表

重量（g）	C類	D類	E類	F類	G類
～ 100.00		3	1		2
100.01～ 200.00		5			
200.01～ 300.00	1		1		4
300.01～ 400.00	1		1	1	5
400.01～ 500.00				1	2
500.01～ 600.00		2			3
600.01～ 700.00		2		1	
700.01～ 800.00	1	2			
800.01～ 900.00		2		1	
900.01～1000.00		1			
1000.01～		1	1		

第32表　SD19左岸地区　磨石類重量分布表

ものも認められる。重量は500g以下に分布するものが大半を占め（第32表）、ほかの分類と比較してG類が軽く、D類が重い傾向にある。

石　材（第16表）　総数54点を対象とする。花崗岩（66.7％）が多く利用されており、そのほかに砂岩（9.3％）、粘板岩（5.6％）などが認められる。

その他　赤色顔料が付着しているものが4点認められる（72・75・76）。これらはすべて8Fグリッドの SD19の川底から出土している。

10）多面体を呈する敲石（82）

A類（82）2点とB類1点が出土している。S1～Ⅵ層に所属するものは認められない。3点中2点は欠損している。石材は頁岩A類、玉髄、花崗岩が用いられている。

11）砥　　石（83・84）

総数11点を数える（第15表）。分類別にはA類（84）が8点、C類（83）が3点である。S1層期に所属する6点の内訳は、A類5点、C類1点である。

法　量　完形品・略完形品4点を対象とする。長さ11.4～21.6cm、幅5.6～19.5cmに分布する。平面形は不整形のものが多い。厚さは3.2～9.5cm、重量は239～4,180gに分布する。

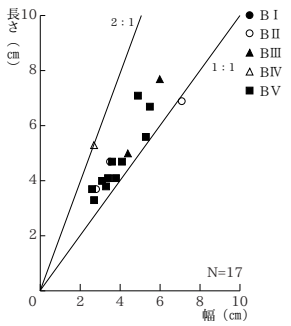
石　材（第16表）　総数11点を対象とする。1点が花崗岩のほかは砂岩が利用されている。

12）石　皿　類（85）

総数6点を数える（第15表）。分類別にはA類2点・B類（85）3点・C類1点である。S1層期に所属する3点はB類2点・A類1点である。法量は長さ16.9～27.1cm、幅12.4～21.8cmに分布する。厚さは4.5～5.4cmと変移幅が狭く、偏平な礫が利用されている。重量は1,170g～4,200gである。石材は凝灰岩・花崗岩・輝緑岩が用いられている（第16表）。

13）軽 石 製 品（86）

総数5点を数える（第15表）。分類別にはAⅢ類1点（86）、BⅠ類4点である。86は全面に磨面が認められ、表裏面に溝状の痕跡が認められる。また
中央上部は穿孔されている。



第85図　SD19左岸地区
石核長幅分布図

厚さ（cm）	BⅠ類	BⅡ類	BⅢ類	BⅣ類	BⅤ類
～1.0					
1.1～2.0	3	1			3
2.1～3.0		1	1	1	3
3.1～4.0	1	1			
4.1～5.0			1		1

第33表　SD19左岸地区　石核厚さ分布表

重量（g）	BⅠ類	BⅡ類	BⅢ類	BⅣ類	BⅤ類
～ 30.00	2	1		1	3
30.01～ 60.00	1	1			3
60.01～ 90.00			1		
90.01～120.00					1
120.01～150.00		1			
150.01～180.00					
180.01～210.00					
210.01～240.00					
240.01～270.00	1		1		

第34表　SD19左岸地区　石核重量分布表

14）石　　核（87～90）

総数17点を数える（第15表）。S4～S3層では4点で、9～11Eグリッドに分布し、S1～Ⅵ層で7点認められ、9～11E・Fグリッドに分布する。（第162図）。

分類別点数　総数17点を対象とする。ＢⅠ類4点、ＢⅡ類（88）3点、ＢⅢ類（87）2点、ＢⅣ類1点、ＢⅤ類（90・91）7点である。出土数の多いS1～Ⅵ層ではＢⅠ類からＢⅤ類まで確認されている。

法　量（第85図、33・34表）　総数17点を対象とする。長さ3.3～7.7cm、幅2.6～7.1cmに分布する（第85図）。長幅比は1：1～2：1の範囲に収まる。また、ＢⅤ類は3～4cm付近にまとまりが認められ、ほかの分類に属するものよりも小形である。厚さは1.5～4.6cmに分布し、ＢⅠ類が比較的薄いことが指摘できるが（第33表）、資料数が少ないため一般的な傾向というには疑問が残る。重量は14.80～250.58gに分布し、ＢⅢ類に属する1点を除いて150g以内に収まる（第34表）。

石　材（第16表）　頁岩Ａ類（29.4%）・流紋岩Ｂ類（29.4%）が主体を占め、そのほかに玉髄・流紋岩Ａ類などが用いられている。

15）琥　　珀

11E14グリッド、S2層から琥珀の剥片が1点出土している。色調は暗赤色を呈し（関連諸科学編第128図）、法量は長さ2.1mm、幅0.1mm、厚さ0.7mmの細長い形状を呈する。県内における琥珀の出土例は中郷村和泉Ａ遺跡などが挙げられる［荒川・加藤1999］。産地は銚子産の可能性が高いが、限定するまでには至っていない（関連諸科学編第Ⅴ章3参照）。

E　中央地区の石器（図面図版221～223、写真図版162・163）

1）分布と出土状況

炭化物集中範囲であるSC2227・2247・2266が分布する、12Fグリッドを中心とした地区である。地形は平坦な平場であり、掘立柱建物は存在しない。当該区は石器に限らず、土偶や糸玉・腕輪などの漆製品なども出土している。層位別には、各遺構が所属するS1～Ⅵ層、S3層、S4層において多量の石器が出土しており、ほかの層からはほとんど出土していない（第35表）。また、出土点数はS4～S3層で全体の7割以上を占め、ほかの地区とは異なった傾向を示す。器種組成は、不定形石器と両極剥離痕を有する石器の比率は全体の組成とほぼ同様であるが、石鏃と両極剥離痕を有する石器の割合はほぼ同率で、石

	石鏃	石鏃未成品	石錐	石匙	筌状石器	両極石器	不定形石器	打製石斧	磨製石斧	磨製石斧未成品	磨石類	多面体敲石	砥石	石皿類	軽石製品	小計	剥片類	石核	合計
Ⅵ層	2 (3.5)	3 (5.3)	1 (1.8)			8 (14.0)	31 (54.4)	2 (3.5)	2 (3.5)		5 (8.8)	1 (1.8)	1 (1.8)	1 (1.8)		57	261		318
S1層	11 (24.4)	2 (4.4)	2 (4.4)		1 (2.2)	4 (8.9)	19 (42.2)				4 (8.9)		1 (2.2)		1 (2.2)	45	755		800
S2層						1	2									3	31		34
S3層	25 (22.7)	10 (9.1)	9 (8.2)	1 (0.9)		16 (14.5)	41 (37.3)	1 (0.9)			3 (2.7)	1 (0.9)	2 (1.8)		1 (0.9)	110	1755	4	1869
S4層	29 (16.1)	13 (7.2)	19 (10.5)		1 (0.6)	39 (21.7)	62 (34.4)			1 (0.6)	9 (5.0)	1 (0.6)	5 (2.8)	1 (0.6)		180	2016	3	2199
S5層	1	2	3				8		1		1					16	124		140
その他	2	1	2			8	16	1			6		1			37	99	2	138
合計	70	31	36	1	2	76	179	4	3	1	28	3	10	2	2	448	5041	9	5498

括弧内の数値は%

第35表　中央地区　層位別器種組成表

	石鏃	石鏃未成品	石錐	石匙	筌状石器	両極石器	不定形石器	打製石斧	磨製石斧	磨製石斧未成品	磨石類	多面体敲石	砥石	石皿類	小計	剥片類	石核	合計	総重量（g）
安山岩						1	2	1	3		1				8	7		15	918.67
花崗岩											17		2	2	21	1		22	14251.22
凝灰岩Ａ	1		2			18	9				2				32	109		141	742.41
凝灰岩Ｂ							17								17	212		229	1022.52
玉髄	10		1			5	6								22	421	1	444	345.23
輝緑岩										1	1				2			2	380.44
頁岩Ａ	1	2	2		1	10	30								46	959	1	1006	1644.38
頁岩Ｂ	3	2	1			1	11								18	232		250	346.82
黒曜石	1					1	1								3	6		9	13.89
砂岩											2		8		10	10		20	7922.74
石英											2	1			3	41		44	2450.47
チャート	1						2					1			4	5		9	147.48
鉄石英Ａ	1	1				2	1								5	37		42	59.90
鉄石英Ｂ	1														1	1		2	2.96
粘板岩							1	3			1	1			6	24	1	31	3077.5
流紋岩Ａ	27	14	15	1		11	24				1				93	1374	2	1469	1781.42
流紋岩Ｂ	24	12	15		1	27	75				1				155	1602	4	1761	3563.11

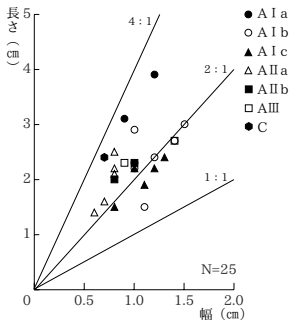
第36表　中央地区　石材別器種組成表

鏃未成品及び失敗品を含めると石鏃の割合の方が高い。層位別の組成は、S4～S3層では磨石類の割合が低く、S1～Ⅵ層では不定形石器の割合が高くなり、若干の変化が認められる。平面分布は、S4～S3層期はあらゆる器種が12Fグリッドに集中し、その傾向は剥片において顕著に認められる。ただし、S1層期もまた12Fグリッドに集中が認められるがS4～S3層ほど集中しておらず、11Fグリッドや12Eグリッドに分散する傾向にある。また、各該層において、12Fグリッドに磨製石斧は分布していない。石材は、遺跡全体の傾向と同様に剥片石器は流紋岩Ｂ類、流紋岩Ａ類、頁岩Ａ類が、礫石器は花崗岩が主体を占める（第36表）。

2）石　　鏃（91～107）

総数70点を数える（第35表）。遺構からは57点で、SC2266から27点、SC2247から21点、SC2227から9点と、SC2266・2247で多く出土している。分類別には、遺跡全体の傾向と同様、ＡＩｂ類（96・98～101）が主体をなし、ＡＩｃ類（102）・ＡⅡａ類が次いで高い割合を占める。また、ＡＩａ類（91・92・95）の3点はS3層に所属する（第37表）。

法　量（第86図、38・39表）　分類可能な完形品・略完形品25点を対象とす



第86図　中央地区
石鏃長幅分布図

	ＡＩａ類	ＡＩｂ類	ＡＩｃ類	ＡⅡａ類	ＡⅡｂ類	ＡⅢ類	Ｃ類	合計
Ⅵ層		2						2
S1層		2	1	1		1		5
S3層	3	2	2	2	2	1		12
S4層		5	3	2			1	11
その他	1			1				2
合計	4	11	6	6	2	2	1	32

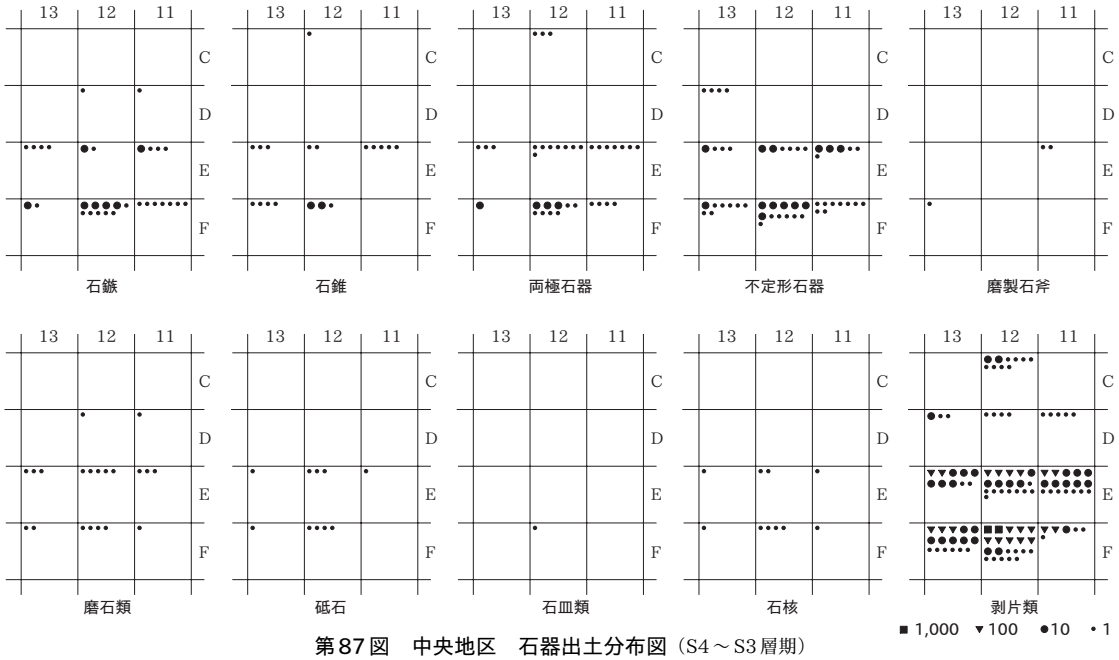
第37表　中央地区　石鏃層位別分布表

厚さ（cm）	ＡＩａ類	ＡＩｂ類	ＡＩｃ類	ＡⅡａ類	ＡⅡｂ類	ＡⅢ類	Ｃ類
～0.3		1	2			1	
0.4～0.6	2	6	3	5	2	1	1

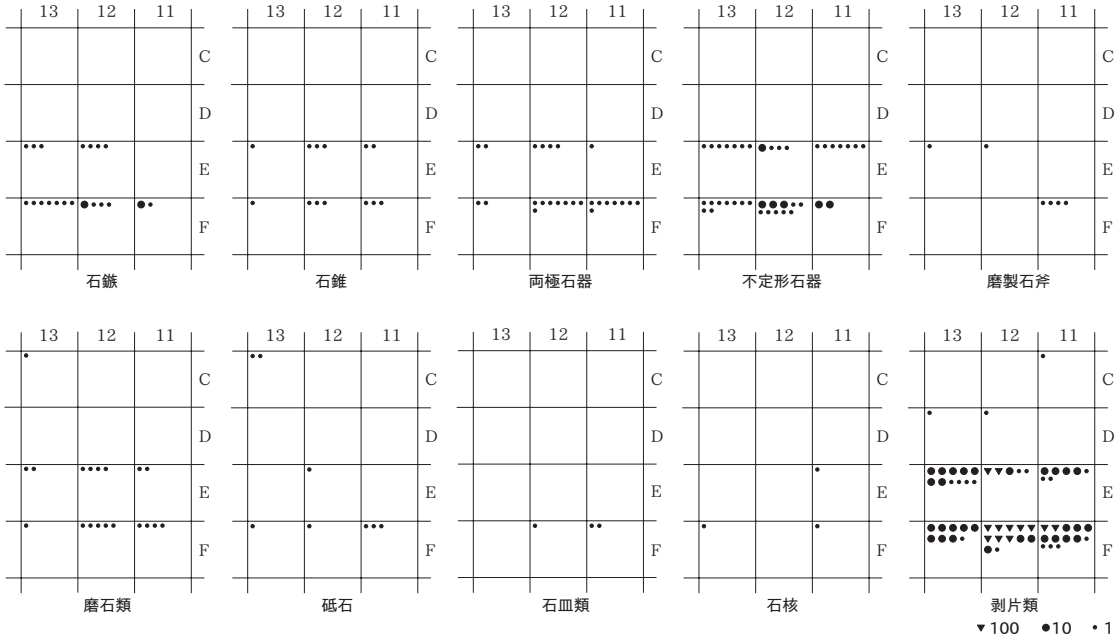
第38表　中央地区　石鏃厚さ分布表

重量（g）	ＡＩａ類	ＡＩｂ類	ＡＩｃ類	ＡⅡａ類	ＡⅡｂ類	ＡⅢ類	Ｃ類
～0.50		1	1	2		1	
0.51～1.00	1	4	4	3	2	1	1
1.01～1.50							
1.51～2.00	1	2					

第39表　中央地区　石鏃重量分布表



第87図　中央地区　石器出土分布図（S4～S3層期）



第88図　中央地区　石器出土分布図（S1層期）

る。長さ1.4～3.9cm、幅0.6～1.5cmに分布する（第86図）。長幅比は多くが2：1～4：1の範囲に収まる。ＡＩｂ類は散在的に分布するが、ＡⅡａ類は比較的まとまっており、長さも2.5cm以下と小形である。厚さは0.3～0.6cmの範囲に分布し、ＡＩａ類・ＡＩｂ類は厚さにおいても大きな数値を示す。また、ＡＩｃ類は0.3～0.4cmに比較的まとまっている（第38表）。重量は、ＡＩａ類とＡＩｂ類では1.5g以上のものが認められ、そのほかは1.0g以内に収まる（第39表）。

石　材（第36表）　総数70点を対象とする。流紋岩Ａ類（38.6%）、流紋岩Ｂ類（34.3%）、玉髄（14.3%）などが用いられている。

遺存状態　総数70点中43点（61.4%）が欠損しており、欠損率はほかの地区よりも高い。1類15点、2類16点、3類6点、4類6点と先端部欠損と基部欠損が高い割合を占める。

3）石鏃未成品及び失敗品（108～114）

総数31点を数える（第35表）。遺構内からは22点で、SC2227から2点、SC2247から7点、SC2266から12点、P2301から1点出土している。

法　量（第89図、40・41表）　総数31点を対象とする。長さ1.3～3.1cm、幅1.0～2.1cmに分布する（第89図）。長幅分布は多くが1：1～2：1に分布する。厚さは0.4～0.9cmのものが多い（第40表）。重量は3g以下のものが多数を占める（第41表）。成品と比較すると、厚さは同規模の数値を示すが、長さと幅、重量は成品と同規模か若干大きな数値を示す。

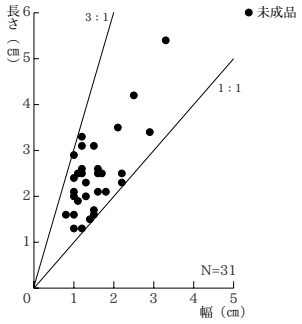
石　材（第36表）　流紋岩Ａ類（45.2％）、流紋岩Ｂ類（38.7%）が主体を占める。そのほかに頁岩、鉄石英などが利用されている。

4）石　　錐（115～124）

総数36点を数える（第35表）。遺構からは29点で、SC2266から19点、SC2247から9点、SC2227から1点出土している。分類別にはＢⅠ類（115～119）、ＢⅡ類（120～122）が主体を占め、各層において同様の傾向を示す（第42表）。

法　量（第90図、第43・44表）　分類可能な完形品・略完形品27点を対象とする。長さ1.4～3.8cm、幅0.5～1.5cmに分布し、長幅比は、ＢⅠ類が2：1付近、ＢⅡ類が3：1付近にまとまる（第90図）。厚さは0.4～0.9cmに分布する（第43表）。重量は0.4～4.6gの広い範囲に分布する（第44表）。

石　材（第36表）　総数36点を対象とする。流紋岩Ａ類（41.7%）・Ｂ類（41.7%）が主体を占める。そのほかに凝灰岩Ａ類・頁岩Ａ類などが用いられている。



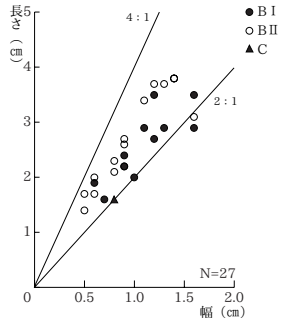
第89図　中央地区
石鏃未成品長幅分布図

厚さ（cm）	未成品
～0.3	4
0.4～0.6	17
0.7～0.9	9
1.0～1.2	1

第40表　中央地区
石鏃未成品厚さ分布表

重量（g）	
～0.50	1
0.51～1.00	11
1.01～2.00	6
2.01～3.00	9
3.01～4.00	
4.01～5.00	1
5.01～6.00	
6.01～7.00	1
7.01～	2

第41表　中央地区
石鏃未成品重量分布表



第90図　中央地区
石錐長幅分布図

	ＢⅠ類	ＢⅡ類	C類	合計
Ⅵ層		1		1
S1層	1			2
S3層	2	5	1	8
S4層	7	9		16
S5層	1	2		3
その他	1	1		2
合計	12	18	1	32

第42表　中央地区
石錐層位別分布表

厚さ（cm）	ＢⅠ類	ＢⅡ類	C類
～0.3		1	
0.4～0.6	5	4	1
0.7～0.9	6	10	

第43表　中央地区
石錐厚さ分布表

重量（g）	ＢⅠ類	ＢⅡ類	C類
～1.00	2	6	1
1.01～2.00	3	4	
2.01～3.00	4		
3.01～4.00	1	4	
4.01～5.00	1	1	

第44表　中央地区
石錐重量分布表

5）石　　匙（125）

SC2247から１点出土している。刃部が横位に位置する。側縁部においても刃部が形成されている。石材は流紋岩Ａ類が用いられている。

6）篦 状 石 器（126・127）

SC2266から１点（126）、S1層から１点（127）出土している。長さは8cm程度、厚さは2cm程度と２点とも同規模であり、幅は126の方が若干広い。いずれも刃部に細かい二次加工が施されている。また、126は側縁及び、刃部よりの中央部に黒色付着物が認められる。

7）両極剥離痕を有する石器（128～134）

総数76点を数える（第35表）。遺構からは53点で、SC2266で38点、SC2247で12点、SC2227で３点出土している。全点Ａ類に分類される。

法　量（第91図、45・46表）　長さ2.0～3.0cm、幅1.0～2.0cm付近にまとまりが認められる（第91図）。長幅比は１：１～３：１の範囲に分布するものが多い。厚さは0.4～1.2cm付近にまとまりが認められる（第45表）。重量は10g以下に分布するものが多い（第46表）。

石　材（第36表）　流紋岩Ｂ類（35.5%）、凝灰岩Ａ類（23.7%）、流紋岩Ａ類（14.5%）、頁岩Ａ類（13.2%）などが用いられている。目立って偏る石材は認められない。

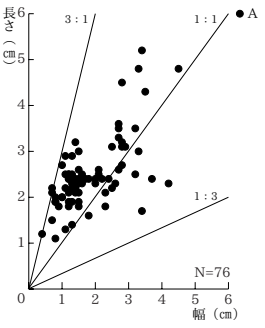
8）不定形石器（135～140）

総数179点を数える（第35表）。遺構からは98点で、SC2266から54点、SC2247から29点、SC2227から14点、SH2457から１点出土している。

分類別点数（第47表）　分類可能な135点を対象とする。Ａ類（138）・Ｆ類（139）・Ｈ類（140）が主体をなす。Ｂ類（135）・Ｃ類（136）はS4～S3層で認められる。

法　量（第92・93図、48・49表）　長さと幅は総じて２～6cm付近に集中して分布するが、Ａ類は若干小形の傾向がある（第92・93図）。厚さは0.2～2.3cmに分布しＨ類以外は2.0cm以内に収まる（第48表）。重量は、多くは40g以内に収まるが、Ｆ類は120gを超えるものも認められる。Ａ類・Ｈ類は5g以下のものが多い（第49表）。

石　材（第36表）　総数179点を対象とする。流紋岩Ｂ類（41.9%）、頁岩Ａ類（16.8%）、流紋岩Ａ類



第91図　中央地区
両極石器長幅分布図

厚さ（cm）	Ａ類
～0.3	2
0.4～0.6	14
0.7～0.9	34
1.0～1.2	16
1.3～1.5	5
1.6～1.8	1
1.9～2.1	1
2.3～2.5	3

第45表　中央地区
両極石器厚さ分布表

重量（g）	Ａ類
～ 5.00	60
5.01～10.00	9
10.01～15.00	1
15.01～20.00	3
20.01～25.00	
25.01～30.00	1
30.01～35.00	1
35.01～	1

第46表　中央地区
両極石器重量分布表

(13.4%)、凝灰岩Ｂ類（9.5%）などが用いられている。

9）打製石斧（141）

４点出土している（第35表）。SC2247から１点出土しているほかは包含層からの出土である。平面分布は12E・Ｆグリッドに分布する。分類別にはＡ類・Ｂ類共に２点ずつ出土している。法量はＡ類が長さ12.8～14.6cm、幅6.8～9.2cm、Ｂ類は長さ6.7～6.8cm、幅5.3～6.1cmとＡ類の方が大形である。石材は粘板岩が３点、安山岩が１点用いられている。

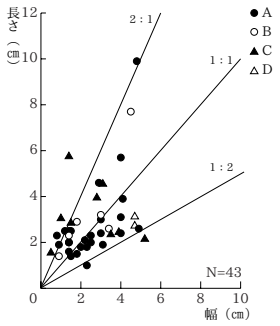
10）磨製石斧

成品３点、未成品（段階2）１点が出土している（第35表）。全点包含層からの出土で、成品はⅥ層から２点、S5層から１点出土している。法量は全点欠損しているため不明であるが、大形に含まれると考えられる。石材は安山岩が３点用いられている。

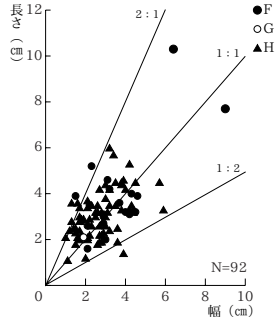
11）磨　石　類（142～148）

総数28点を数える（第35表）。遺構内からは18点で、SC2266で９点、SC2247で３点、SC2227で３点、SB43の柱穴であるP2451から３点出土している。分類別にはＧ類（145～148）が主体を占め、Ｆ類（144）が次ぐ。S1～Ⅵ層ではＣ（142）・Ｄ・Ｅ類（143）が１～２点認められる（第50表）。

法　量（第94図、51・52表）　完形品・略完形品24点を対象とする。長さ5.8～12.7cm、幅3.9～10.1cmに分布する（第94図）。分類ごとに明確なまとまりは認められない。長幅比は大半が１：１～



第92図　中央地区
不定形石器長幅分布図１



第93図　中央地区
不定形石器長幅分布図２

	A類	B類	C類	D類	F類	G類	H類	合計
Ⅵ層	1		1	1	3		15	21
S1層	2				3	1	12	18
S2層							1	1
S3層	6	2	4	1	6		11	30
S4層	14	4	2		7		21	48
S5層					1		5	6
その他	3		2		2		4	11
合計	26	6	9	2	22	1	69	135

第47表　中央地区　不定形石器層位別分布表

厚さ（cm）	A類	B類	C類	D類	F類	G類	H類
～0.5	9	2	1		1	1	9
0.6～1.0	12	2	6	1	11		38
1.1～1.5	5	2	1	1	7		18
1.6～2.0			1		3		3
2.1～2.5							1

第48表　中央地区　不定形石器厚さ分布表

重量（g）	A類	B類	C類	D類	F類	G類	H類
～ 5.00	18	3	4		4		38
5.01～10.00	4	2	4		7		12
10.01～15.00	2			2	4	1	12
15.01～20.00					2		3
20.01～25.00					2		3
25.01～30.00	1		1		1		
30.01～35.00							1
35.01～40.00		1					
40.01～45.00	1						
45.01～50.00							
50.01～					2		

第49表　中央地区　不定形石器重量分布表

2：1の範囲に収まる。厚さは5cm以下が大半であるが、A類・F類に7cmを超えるものが認められる（第51表）。G類の中には3cm以下の扁平な礫を用いているものも認められる。重量は、G類は大半が400g以下に収まり、A類・F類において1,200gを超えるものが認められる。（第52表）。

石　材（第36表）　総数28点を対象とする。花崗岩（60.7%）が主体を占め、そのほかに砂岩・凝灰岩A類・石英などが用いられている。

12）多面体を呈する敲石

総数3点を数える（第35表）。Ⅵ層・S3層・S4層からそれぞれ1点ずつ出土している。A類が1点、B類が2点である。完形品は1点のみである。石材は、石英・チャート・粘板岩が用いられている。

13）砥　　石（149・150）

総数10点を数える（第35表）。遺構からは7点で、SC2266から5点、SC2227から2点出土している。分類別にはA類（149）6点、B類（150）2点、C類2点である。

法　量　完形品・略完形品の8点を対象とする。長さ6.3～23.1cmに分布する。A類は長さ5cm程度のものから20cmを超えるものまで認められる。C類の2点は長さ7～8cm、幅5～6cmと類似した値を示す。重量は、A・B類の中には3,000gを超えるものも認められる。

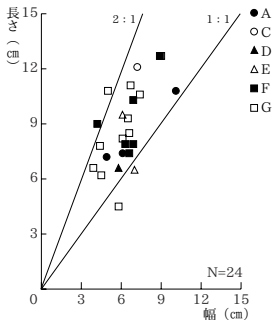
石　材（第36表）　総数10点を対象とする。砂岩8点、花崗岩2点が用いられている。

14）石　皿　類

2点のみの出土で、遺構からはSC2266で1点出土している。分類別には、SC2266出土のものがA類、Ⅵ層出土のものがB類である。石材はいずれも花崗岩が用いられている。

15）軽 石 製 品

SC2247と、包含層のS1層から出土している。いずれもA類である。



第94図　中央地区
磨石類長幅分布図

	A類	C類	D類	E類	F類	G類	合計
Ⅵ層			1	2	1	1	5
S1層					2	2	4
S3層	2					1	3
S4層		1	1		2	5	9
S5層						1	1
その他	1			1	1	3	6
合計	3	1	2	3	6	13	28

第50表　中央地区　磨石類層位別分布表

厚さ（cm）	A類	C類	D類	E類	F類	G類
～2.0						1
2.1～4.0			1		3	2
4.1～6.0	2	1		2	2	7
6.1～8.0	1				1	1

第51表　中央地区　磨石類厚さ分布表

重量（g）	A類	C類	D類	E類	F類	G類
～ 100.00						1
100.01～ 200.00			1		1	3
200.01～ 300.00	2				2	2
300.01～ 400.00				2	1	4
400.01～ 500.00					1	
500.01～ 600.00						1
600.01～ 700.00						
700.01～ 800.00		1				
800.01～ 900.00						
900.01～1000.00						
1000.01～	1				1	

第52表　中央地区　磨石類重量分布表

16）石　　核（151～153）

総数９点を数える（第35表）。遺構からは５点で、SC2266から３点、SC2247から２点出土している。分類別にはＢⅠ類が１点、ＢⅡ類が２点、ＢⅣ類３点、ＢⅤ類が３点である。

法　量　長さ3.4～10.7cm、幅1.9～7.7cmに分布する。長幅比は１：１～２：１の範囲に収まる。ＢⅤ類は比較的まとまっており、ほかの分類の石核よりも小形である。石材は流紋岩が主体を占める（第36表）。

17）剥　片　類

総数5,041点を数える（第35表）。遺構では、SC2266で1,939点、SC2247で1,557点、SC2227で664点出土している。石材は流紋岩Ｂ類（31.8%）、流紋岩Ａ類（27.3%）、頁岩Ａ類（19.0%）、玉髄（8.4%）などで構成される（第36表）。上記の３遺構出土剥片類の石材組成は、流紋岩・頁岩Ａ類が主体を占める点は全体の傾向と変わらないものの、SC2266では凝灰岩Ｂ類が出土重量の約20％を占める。凝灰岩Ｂ類を素材とする石器は不定形石器に限られ、当該区で石器製作が行われた可能性が高い。

F　SD1420右岸１・２地区の石器（図面図版224～235、写真図版163～167）

1）分布と出土状況

当該区はSD1420とSX51に挟まれた平場及び斜面である。SD1420に沿って掘立柱建物が立地し、SD1420右岸１地区の斜面部にはSX958、SD1420右岸２地区の斜面部にはSX1528などの堅果類廃棄範囲が存在する。当該区は本遺跡の中で最も石器の出土量が多い地区である。層位別点数は、S1層期で総数の８割以上を占め、層位によって数量に偏りが認められる。平面分布は、流路幅の変動に伴い分布する地点も異なる。全体的な平面分布の傾向として、S4～S3層期は13～17グリッド付近に、S1層期は15～21グリッド付近に分布する。器種別には、S4～S3層期は出土量が少ないこともあり、各器種とも散在的に分布する。剥片石器は平場に分布するものが多いが、磨石類などの礫石器はSD1420右岸１地区の斜面部及び流路内にも認められる。S1層期には、剥片石器及び磨製石斧は18・19Cグリッド周辺に集中し、特に石鏃・不定形石器は19Cグリッドに加え17Dグリッド周辺に集中が認められる。礫石器は、磨石類が16Dグリッド周辺、砥石が18Cグリッド周辺に集中が認められ、剥片石器とは分布地点が

	石鏃	石鏃未成品	石錐	石匙	筌状石器	両極石器	不定形石器	打製石斧	磨製石斧	磨製石斧未成品	礫器	磨石類	多面体敲石	砥石	石皿類	軽石製品	小計	剥片類	石核	合計
Ⅵ層	185 (11.4)	77 (4.8)	79 (4.9)	1 (0.1)	1 (0.1)	359 (22.3)	707 (43.9)	5 (0.3)	13 (0.8)	8 (0.5)	5 (0.3)	94 (5.8)	33 (2.0)	24 (1.5)	10 (0.6)	10 (0.6)	1161	5190	56	6857
S1層	97 (13.3)	42 (5.8)	59 (8.1)	1 (0.1)		166 (22.8)	304 (41.7)		6 (0.8)		1 (0.1)	40 (5.5)	7 (1.0)	4 (0.5)	1 (0.1)	1 (0.1)	729	2889	22	3640
S2層	10 (20.8)	3 (6.3)	3 (6.3)			13 (27.1)	13 (27.1)			1 (2.1)		4 (8.3)	1 (2.1)				48	147	1	196
S3層	5 (10.9)	2 (4.3)	2 (4.3)			4 (8.7)	29 (63.0)		1 (2.2)			2 (4.3)		1 (2.2)			46	249		295
S4層	9 (10.7)	2 (2.4)	7 (8.3)			14 (1.7)	39 (46.4)	1 (1.2)	1 (1.2)		1 (1.2)	7 (8.3)	1 (1.2)	2 (2.4)			84	486	3	573
S5層	2		1			2	6			1		2					14	284	1	299
その他	16	8	10			22	57	2		3		38	2	2	5	1	166	721	4	891
合計	324 (12.0)	134 (5.0)	161 (6.0)	2 (0.1)	1 (0.1)	580 (21.5)	1155 (42.8)	8 (0.3)	21 (0.7)	13 (0.5)	7 (0.3)	187 (6.9)	44 (1.6)	33 (1.2)	16 (0.6)	12 (0.4)	2698	9966	87	12751

括弧内の数値は%

第53表　SD1420右岸１・２地区　層位別器種組成表

	石鏃	石鏃未成品	石錐	石匙	筐状石器	両極石器	不定形石器	礫器	打製石斧	磨製石斧	磨製石斧未成品	磨石類	多面体敲石	砥石	石皿類	小計	剥片類	石核	合計	総重量（g）
安山岩						5	4	1		8	8	12		3	2	43	80	1	124	23679.72
花崗岩						1	2	1				144	1	14	5	168	1	1	170	93650.40
凝灰岩Ａ	3		11			62	50					4	1		2	133	103		236	7875.11
凝灰岩Ｂ		1				1	7									9	50		59	369.24
玉髄	43	6	7			99	41									196	814	6	1016	2453.24
輝緑岩										1	2	3	1		2	9			9	7885.68
頁岩Ａ	22	15	24			69	273									403	2029	42	2474	15194.47
頁岩Ｂ	3	1	4			5	20									33	162	12	207	1016.16
黒曜石	20	3	3			56	37									119	47	1	167	295.05
砂岩							3	1				12	2	14	5	37	25		62	33841.63
蛇紋岩										11						11			11	85.23
石英	1			1		1	6					1	27	1		38	258	3	299	8085.22
チャート			1			3	3									7	2		9	110.36
チャート質粘板岩												1	5			6			6	637.42
鉄石英Ａ	10	4	2			8	4						1			29	19		48	178.83
鉄石英Ｂ	2	1	2			8	6						1			20			20	153.44
粘板岩						2	4	4	8			4	1	1		24	125		149	7020.62
ホルンフェルス										1	3		3			7			7	871.10
流紋岩Ａ	29	14	11			16	38									108	1047	2	1157	1799.63
流紋岩Ｂ	191	89	96	1	1	244	657					2				1281	5198	19	6498	22461.38
礫岩												2	1			3	5		8	973.70
不明												2				2	1		3	244.05

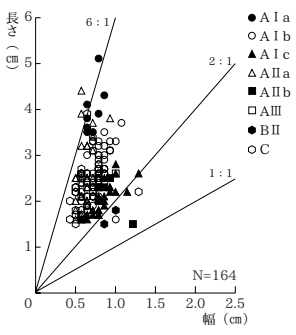
第54表　SD1420右岸１・２地区　石材別器種組成表

異なる。また、砥石・石皿類は散在的に分布し、集中する地点は認められない（第97図）。器種組成は、S1層期は遺跡全体の組成とほぼ同様であるが、S4～S3層期は両極剥離痕を有する石器の割合が低く、石皿類は出土していない。また、S3層期には、不定形石器が６割以上と高い割合を示す（第53表）。石材は、剥片石器は流紋岩Ｂ類が圧倒的に多く、頁岩Ａ類が次ぐ（第54表）。礫石器は全体の傾向と同様、花崗岩が主体を占めるが、砥石に関しては砂岩の割合も高い。多面体を呈する敲石は石英が多用されている。

2）石　　鏃（154～238）

総数324点を数える（第53表）。分類別には、ＡⅠｂ類（164・165・167・168・170～180・182～193）・ＡⅡａ類（200～202・204～210）が主体を占め、ＡⅠｃ類（194～199）・Ｃ類（154～163）が次ぐ。また、ＡⅠａ類（154～163）はS1～Ⅵ層にのみ認められる（第55表）。

法　量（第95図、56・57表）　分類



第95図　SD1420右岸１・２地区　石鏃長幅分布図

	ＡⅠａ類	ＡⅠｂ類	ＡⅠｃ類	ＡⅡａ類	ＡⅡｂ類	ＡⅢ類	ＢⅡ類	Ｃ類	合計
Ⅵ層	8	54	18	28	5		1	22	136
S1層	6	24	10	14	2	2	1	8	67
S2層		3							3
S3層			1	2				1	4
S4層		2	1	1				1	5
S5層				1					1
その他		7	1	3	1				12
合計	14	90	31	49	8	2	2	32	228

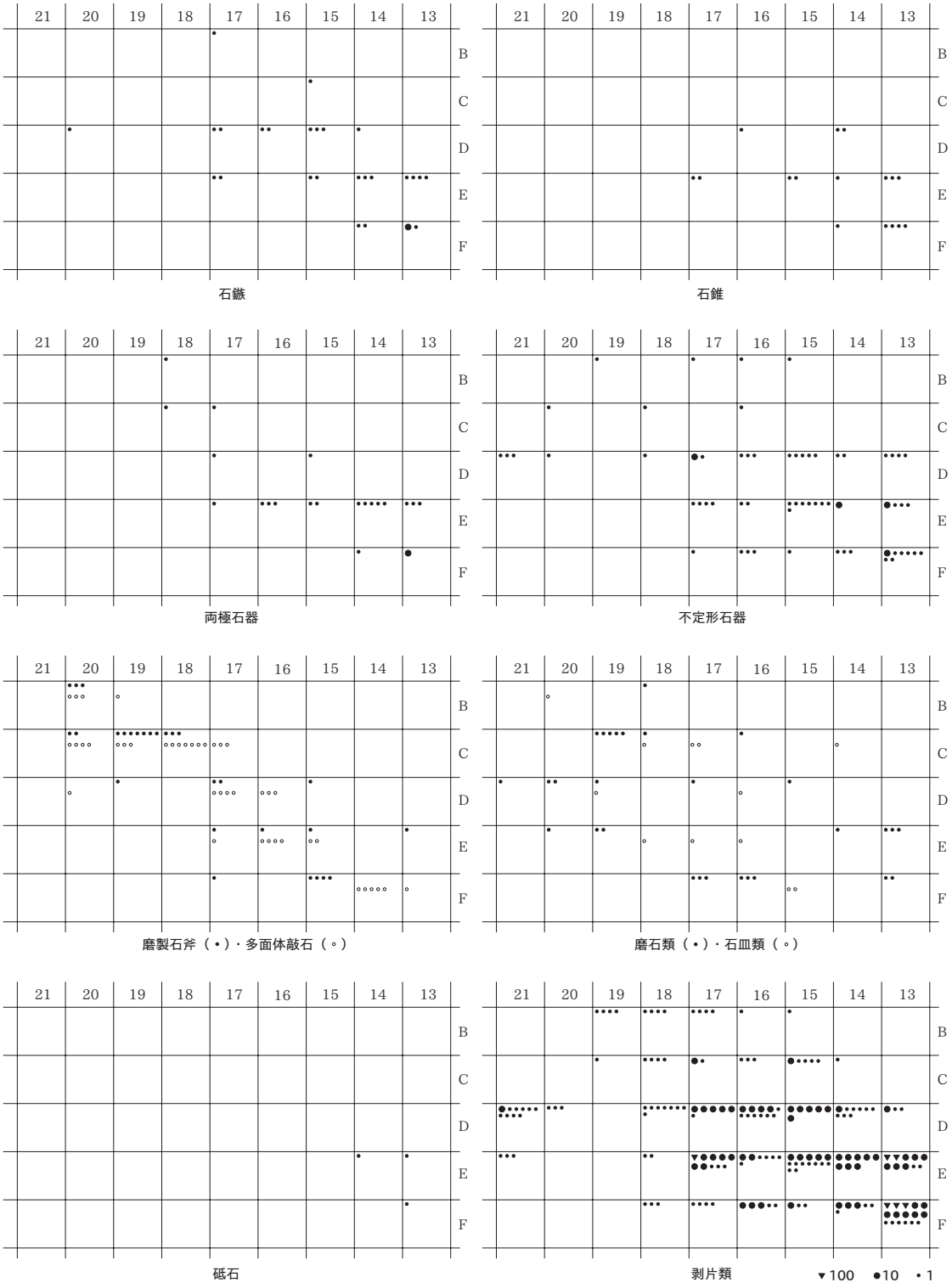
第55表　SD1420右岸１・２地区　石鏃層位別分布表

厚さ（cm）	ＡⅠａ類	ＡⅠｂ類	ＡⅠｃ類	ＡⅡａ類	ＡⅡｂ類	ＡⅢ類	ＢⅡ類	Ｃ類
～0.3		3	4	4	2			7
0.4～0.6	6	61	16	25	2	1	2	17
0.7～0.9	2	2	3	3	2			2

第56表　SD1420右岸１・２地区　石鏃厚さ分布表

重量（g）	ＡⅠａ類	ＡⅠｂ類	ＡⅠｃ類	ＡⅡａ類	ＡⅡｂ類	ＡⅢ類	ＢⅡ類	Ｃ類
～0.50		3	8	5	2			5
0.51～1.00		39	10	13	3		2	17
1.01～1.50	6	22	5	11				3
1.51～2.00	1	2		3	1	1		1
2.01～2.50								
2.51～3.00								
3.20	1							

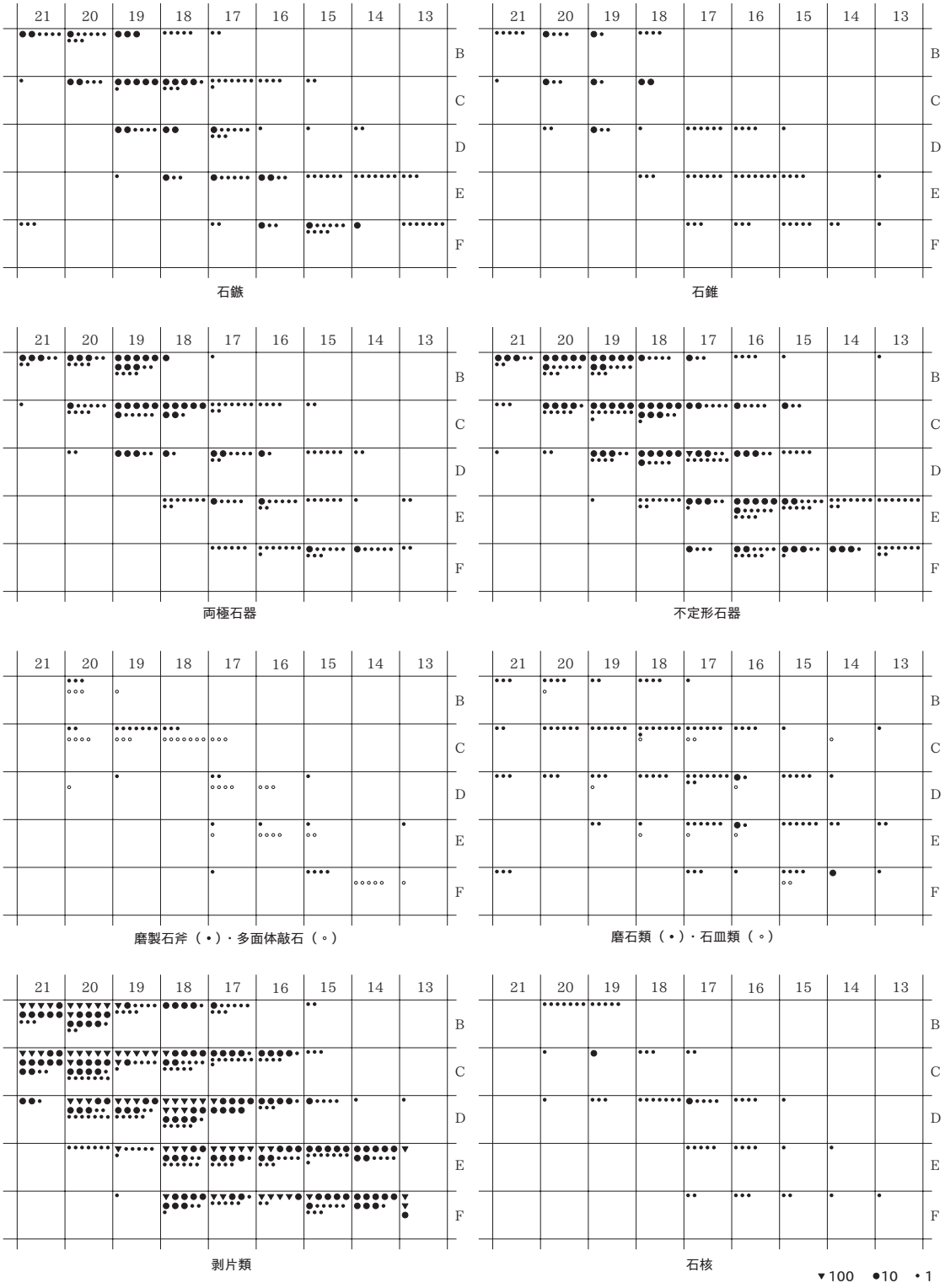
第57表　SD1420右岸１・２地区　石鏃重量分布表



第96図　SD1420右岸１・２地区　石器出土分布図（S4～S3層期）

可能な完形・略完形品の164点を対象とする。長さ1.5～5.1cm、幅0.6～1.8cmに分布し、ＡⅡａ類・Ｃ類は分布範囲が広い（第95図）。厚さは各分類共に0.4～0.6cmに集中する（第56表）。重量は、ＡⅠａ類はばらつきが認められるが、そのほかは2.0g以下に分布する（第57表）。

石　材（第54表）　総数324点を対象とする。流紋岩Ｂ類（59.1%）が主体を占め、そのほかに玉髄



第97図　SD1420右岸1・2地区　石器出土分布図（S1層期）

（13.3%）、流紋岩A類（9.0%）頁岩A類（6.5%）などが利用されている。

遺存状態　324点中152点（46.9%）が欠損品である。欠損部位の内訳は1類36点、2類59点、3類22点、4類34点で、基部欠損が多い。

その他　黒色付着物が付着しているもの（164・181・190・203など）が37点、赤色顔料が付着して

いるもの（157）が１点存在する。ＡＩａ類の中には先端部から基部のラインが湾曲するもの（160・163・172など）が認められる。また、分類に関係なく側縁が急角度で、中央部の加工が粗雑なもの（198・222・231など）も認められる。

3）石鏃未成品及び失敗品（239～258）

総数134点を数える（第53表）。法量は長さ0.7～5.1cm、幅0.6～2.9cmに分布する（第98図）。長幅比は１：１～２：１付近に集中し、成品と比較すると、幅が広い。厚さは0.4～0.9cmの範囲に集中し、成品と同規模である（第58表）。重量は3.0g以下に多数認められる（第59表）。石材は流紋岩Ｂ類（66.4%）、頁岩Ａ類（11.2%）、流紋岩Ａ類（10.4%）などが用いられている（第54表）。

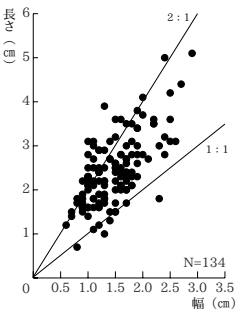
4）石　　錐（259～293）

総数161点を数える（第53表）。ＢＩ類（268～275）・ＢⅡ類（276～289）が主体を占める。層位別には、S4～S3層期はＡⅡ類とＢⅡ類が同数出土しているが、S1層期ではＢⅡ類、ＢＩ類が主体を占めるようになる（第60表）。

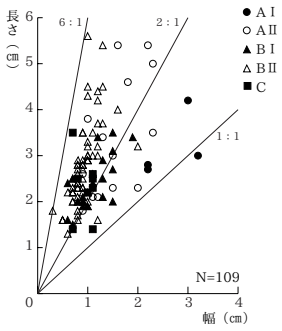
法　量（第99図、61・62表）　ＡＩ類はほかの分類よりも幅が広く、ＢＩ類は長さ1.5～3.0cm付近で分布のまとまりが認められる（第99図）。また、ＢⅡ類は長幅比２：１～４：１に分布するものが多い。厚さは各分類共に0.4～0.9cmに分布するものが多い（第61表）。重量は分類に限らず4g以下のものが多いが、ＡＩａ類・ＡＩｂ類・ＡⅡａ類は6g以上に分布するものも認められる（第62表）。

石　材（第54表）　総数161点を対象とする。流紋岩Ｂ類（59.6%）、頁岩Ａ類（14.9%）、凝灰岩Ａ類（6.8%）、流紋岩Ａ類（6.8%）などが用いられている。

遺存状況　161点中50点が欠損している（31.1%）。基部欠損が34点、錐部欠損が８点、基部・錐部欠



第98図　SD1420右岸１・２地区
石鏃未成品長幅分布図



第99図　SD1420右岸１・２地区
石錐長幅分布図

	ＡⅠ類	ＡⅡ類	ＢⅠ類	ＢⅡ類	C類	合計
Ⅵ層	2	6	16	37	3	64
S1層	2	3	9	34	4	52
S2層		1		1		2
S3層				2		2
S4層		3	1	2		6
その他		1	3	2	1	7
合計	4	14	29	78	8	133

第60表　SD1420右岸１・２地区
石錐層位別分布表

厚さ（cm）	未成品
～0.3	15
0.4～0.6	62
0.7～0.9	42
1.0～1.2	15

第58表　SD1420右岸１・２地区
石鏃未成品厚さ分布表

重量（g）	未成品
～0.50	13
0.51～1.00	27
1.01～2.00	48
2.01～3.00	19
3.01～4.00	7
4.01～5.00	11
5.01～6.00	3
6.01～7.00	3
7.01～	3

第59表　SD1420右岸１・２地区
石鏃未成品重量分布表

厚さ（cm）	ＡⅠ類	ＡⅡ類	ＢⅠ類	ＢⅡ類	C類
～0.3		1	4	3	
0.4～0.6	1	5	13	20	7
0.7～0.9	2	5	6	32	1
1.0～1.2	1	2		3	
1.3～1.5		1		2	

第61表　SD1420右岸１・２地区
石錐厚さ分布表

重量（g）	ＡⅠ類	ＡⅡ類	ＢⅠ類	ＢⅡ類	C類
～1.00		2	10	20	5
1.01～2.00		4	8	19	3
2.01～3.00	1	3	3	12	
3.01～4.00		1	2	6	
4.01～5.00		1			
5.01～6.00	1				
6.01～	2	3		3	

第62表　SD1420右岸１・２地区
石錐重量分布表

損が８点と、基部欠損が多い。

その他　黒色付着物が付着しているもの（279・288・291）が５点認められる。

5）篦状石器（294）

１点のみの出土である。15Fグリッドから出土している。全体の形状は寸詰まりで、基部に緩い括れを持つ。石材は流紋岩Ｂ類が用いられている。

6）石　　匙（295・296）

２点出土している。14E・17Eグリッドから出土しており、S1～Ⅵ層に所属する。いずれも縦長の石匙と考えられるが、295は括れ部を直立させた場合、刃部が斜めに下がる。二次加工は２点ともほぼ全周する。石材は、流紋岩Ｂ類・石英が用いられている。また、296は括れ部付近に黒色付着物が平行して帯状に２本認められ、抉り部に紐状のものを巻き付けた後に黒色付着物を塗布したものと考えられる。

7）両極剥離痕を有する石器（297～320）

総数580点を数え（第53表）、Ａ類が576点、Ｂ類が４点と、Ａ類が主体を占める。

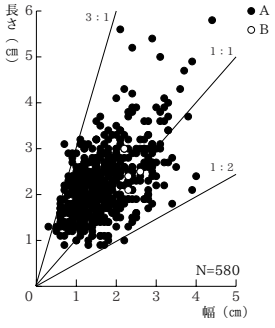
法　量（第100図、63・64表）　総数580点を対象とする。長さ1.0～3.5cm、幅0.5～3.0cm付近に集中し、長幅比は１：２～３：１付近に分布する（第100図）。厚さは、Ａ類は0.4～0.9cmのものが多く認められ、Ｂ類は0.5～0.9cmの間に分布する（第63表）。重量は分類に限らず5g以下に分布するものが多い（第64表）。

石　材（第54表）　流紋岩Ｂ類（42.1%）、玉髄（17.1%）、頁岩Ａ類（11.9%）、凝灰岩Ａ類（10.7%）、黒曜石（9.7%）で、玉髄・黒曜石の割合がほかの器種と比べて高い。

8）不定形石器（321～348）

総数1,155点を数え（第53表）、Ｈ類（346～348）・Ａ類（321～331・334）、Ｆ類（341・342・344・345）が主体を占める。Ｄ類（335～337）・Ｅ類（338～340）・Ｇ類（343）はS1～Ⅵ層にのみ認められる（第65表）。

法　量（第101・102図、66・67表）　分類可能な854点を対象とする。長さ0.6～13.5cm、幅0.3～9.9cmに分布する（第101・102図）。Ｂ類・Ｃ類は比較的まとまっており、長幅比はいずれの分類も１：２～２：１の範囲にほぼ収まる。厚さは0.3～3.0cmに分布する（第66表）。Ａ類・Ｈ類は比較的分



第100図　SD1420右岸１・２地区
両極石器長幅分布図

厚さ（cm）	Ａ類	Ｂ類
～0.3	25	
0.4～0.6	216	2
0.7～0.9	235	2
1.0～1.2	61	
1.3～1.5	24	
1.6～1.8	11	
1.9～2.1	1	
2.2～2.4	2	

第63表　SD1420右岸１・２地区
両極石器厚さ分布表

重量（g）	Ａ類	Ｂ類
～ 5.00	489	2
5.01～10.00	54	2
10.01～15.00	21	
15.01～20.00	8	
20.01～25.00	1	
25.01～30.00		
30.01～35.00	1	
35.01～	1	

第64表　SD1420右岸１・２地区
両極石器重量分布表

布幅が広いが、そのほかは1.5cm以下のものが多い。重量は20g以下に分布するものが多いが（第67表）、厚さ同様Ａ類・Ｈ類の分布幅が広い。

石　材（第54表）　総数1,155点を対象とする。流紋岩Ｂ類（56.9%）、頁岩Ａ類（23.6%）が主体を占め、そのほかに凝灰岩Ａ類、玉髄、流紋岩Ａ類、黒曜石などが利用されている。

9）打製石斧（349・350）

総数８点出土している（第53表）。分類別にはＡ類が３点、Ｂ類が４点である。法量は、完形品・略完形品４点を対象とし（Ａ類３点・Ｂ類１点）、長さ8.5～18.7cm、幅3.5～6.9cm、厚さ1.8～2.3cm、重量66.40～356.40gに分布する。石材は全点粘板岩が用いられている（第54表）。

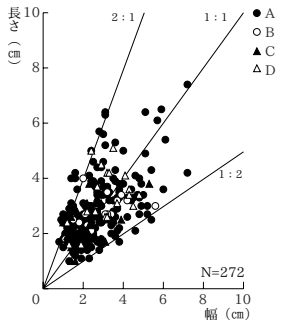
10）磨製石斧（351～369）

成品21点、未成品13点を数える（第53表）。未成品は、段階１（351・352）が２点、段階２（353～355・360・369）が８点、段階３が３点である。成品の中では大形10点、小形９点であるが平面分布に特徴的な傾向は認められない。形態は、分類可能な９点の中でＡ類（362）１点、Ｂ類（356）１点、Ｃ類（363～366）４点、Ｄ類（357・367・368）３点である。

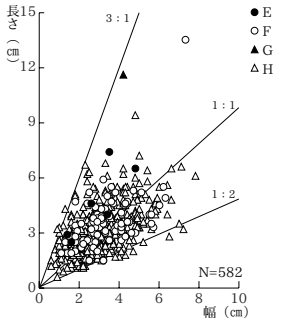
法　量　完形品・略完形品９点を対象とする。大形は長さ5.5～7.7cm、幅4.6～5.5cmに分布する。小形は長さ2.7～4.4cm、幅1.6～2.9cmの範囲に分布する。厚さにおいては大形が2.0～2.3cm、小形が0.7～1.1cmの範囲に分布し、両者の差が顕著である。

石　材（第54表）　総数34点を対象とする。安山岩（47.1%）、蛇紋岩（32.4%）のほかに、輝緑岩、ホルンフェルスが用いられている。Ｂ類は全点蛇紋岩が用いられている。

遺存状態　34点中18点が欠損している。１類８点、２類７点、３類１点、４類１点、３・４類１点と、刃部欠損もしくは基部欠損が多い。欠損品の中で成品は12点である。



第101図　SD1420右岸１・２地区　不定形石器長幅分布図１



第102図　SD1420右岸１・２地区　不定形石器長幅分布図２

	A類	B類	C類	D類	E類	F類	G類	H類	合計
Ⅵ層	121	9	22	14	5	52	1	307	531
S1層	53	4	14	5		26	1	118	221
S2層	1					2		4	7
S3層	3	2				3		15	23
S4層	5	1	1			3		16	26
S5層	1		1			1		1	4
S5層	9		2		1	1		29	42
合計	193	16	40	19	6	88	2	490	854

第65表　SD1420右岸１・２地区　不定形石器層位別分布表

厚さ（cm）	A類	B類	C類	D類	E類	F類	G類	H類
～0.5	57	3	19			7		122
0.6～1.0	102	9	18	8	4	45	1	255
1.1～1.5	27	4	3	9	1	27	1	95
1.6～2.0	6			1	1	7		15
2.1～2.5	1			1		1		2
2.6～3.0						1		1

第66表　SD1420右岸１・２地区　不定形石器厚さ分布表

重量（g）	A類	B類	C類	D類	E類	F類	G類	H類
～ 5.00	110	10	31	5	2	26	1	230
5.01～10.00	37	3	8	2		22		115
10.01～15.00	25	2		6	2	18		64
15.01～20.00	11	1		5		9		36
20.01～25.00	5					3		17
25.01～30.00				1		4		10
30.01～35.00	1		1			2		9
35.01～40.00	1				1			2
40.01～45.00								1
45.01～50.00						1		3
50.01～	3				1	3	1	3

第67表　SD1420右岸１・２地区　不定形石器重量分布表

その他　361は黒色付着物が全体に認められる。

11）礫　　器（370・371）

総数７点を数える（第53表）。遺構ではP1523から１点出土している。包含層出土のものはⅥ層に所属するものが多い。370は左側面に急角度の剥離が連続して施される点で特徴的である。石材は安山岩、花崗岩、砂岩、粘板岩が用いられている（第54表）。

12）磨　石　類（372～402）

総数187点を数える（第53表）。遺構からは、P881・920、SK1463・2228から出土している。G類（393～402）が総数の約半数を占め、F類（383～392）・D類（376・378～381）がそれに次ぐ（第68表）。

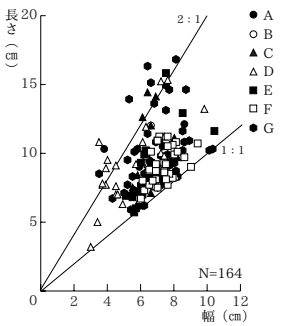
法　量（第103図、69・70表）　完形品・略完形品の164点を対象とする。長さ６～12cm、幅５～9cm付近に分布の集中が認められる（第103図）。長幅比は大半が１：１～２：１付近に分布するが、C類・G類は２：１～３：１に分布するものも認められる。厚さは0.8～8.3cmに分布する（第69表）。G類の厚さはほかのものより分布幅が広く、2.0cm以下の扁平な礫を用いているものが認められる（401・402）。C類・D類はほぼ同様の数値を示す。重量は27.82～1,507.48gに分布し、厚さ同様、G類の分布幅が広い（第70表）。

石　材（第54表）　総数187点を対象とする。花崗岩（77.0%）が主体を占め、そのほかに安山岩、砂岩などが用いられている。

13）多面体を呈する敲石（403～409）

総数44点を数える（第53表）。A類（403～406）18点、B類（407～409）26点である。分類による平面分布及び層位別分布に特徴的な傾向は認められない。

法　量　完形品・略完形品12点を対象とする。長さ4.5～9.3cm、幅3.6～8.1cm、厚さ3.2～6.2cm、重量81.22～613.90g



第103図　SD1420右岸１・２地区
磨石類長幅分布図

	A類	B類	C類	D類	E類	F類	G類	合計
Ⅵ層	7		4	20	5	20	38	94
S1層	2	2	3	4	8	6	15	40
S2層			2	1			1	4
S3層				1			1	2
S4層	1			4			2	7
S5層				1		1		2
その他			3	7	2	8	18	38
合計	10	2	12	38	15	35	75	187

第68表　SD1420右岸１・２地区　磨石類層位別分布表

厚さ（cm）	A類	B類	C類	D類	E類	F類	G類
～2.0				9			3
2.1～4.0	3			6	5	3	10
4.1～6.0	3	1	11	14	9	26	44
6.1～	1			2		4	10

第69表　SD1420右岸１・２地区　磨石類厚さ分布表

重量（g）	A類	B類	C類	D類	E類	F類	G類
～ 100.00				10			2
100.01～ 200.00	1			2	6		7
200.01～ 300.00	2		4	2	1	2	8
300.01～ 400.00	1		2	7	2	9	14
400.01～ 500.00	2	1		4	2	7	10
500.01～ 600.00			1	2		8	9
600.01～ 700.00			1	1		3	5
700.01～ 800.00			2			2	2
800.01～ 900.00			1		2	1	5
900.01～1000.00				2	1		3
1000.01～	1			1		1	2

第70表　SD1420右岸１・２地区　磨石類重量分布表

に分布する。長さと幅・重量においてＢ類の方が大形である。長幅比は、分類に限らず１：１に近く、円形もしくは立方体に近い形状である。

石　材（第54表）　総数44点を対象とする。石英（61.3%）が過半数を占め、そのほかに花崗岩、砂岩、粘板岩、ホルンフェルスなどが用いられている。

14）砥　　石（410～418）

総数33点を数える（第53表）。Ａ類（410～413）25点、Ｂ類（414・416・417）5点、Ｃ類（415・418）3点である。分類による平面的・層位的分布に特徴は認められない。

法　量　完形品・略完形品の12点を対象とする。長さ4.9～17.1cm、幅2.7～16.1cmに分布する。Ａ類は分布幅が広く、大小様々認められる。一方、Ｂ類は1点を除いて長さ7～8cm、幅4～6cm付近に集中する。厚さは2.1～10.4cmに分布し、Ａ類は散在的であるが、Ｂ類は2～5cmにまとまる。重量は37.64～3,450.00gに分布する。長さと幅同様、Ａ類の分布範囲は広い。Ｂ類は1点を除いて300g以内に収まる。

石　材（第54表）　安山岩、花崗岩、砂岩、石英、粘板岩が用いられている。

15）石　皿　類（419～424）

総数16点を数える（第53表）。Ａ類2点、Ｂ類11点、Ｃ類3点である。遺構では、P883から2点（419・424）・P1523から1点（423）出土している。

法　量　完形品・略完形品11点を対象とする。長さ13.2～27.0cm、幅11.1～26.1cm、厚さ4.0～10.0cm、重量1,020～10,238gに分布する。Ｂ類は各計測値共に分布範囲は広く、まとまりは認められない。

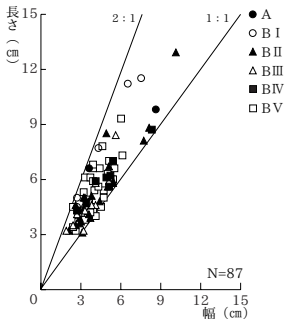
石　材（第54表）　総数16点を対象とする。安山岩、花崗岩、凝灰岩、輝緑岩、砂岩が用いられている。

16）軽 石 製 品（425～427）

総数12点を数える（第53表）。全点包含層からの出土であり、Ⅵ層で多く認められる。分類別にはＡ類（426）1点、ＢⅠ類（425）9点、ＢⅢ類（427）1点である。

17）石　　核（428～447）

総数87点を数える（第53表）。Ａ類2点、ＢⅠ類



第104図　SD1420右岸1・2地区
石核長幅分布図

厚さ（cm）	Ａ類	ＢⅠ類	ＢⅡ類	ＢⅢ類	ＢⅣ類	ＢⅤ類
～1.0				1		
1.1～2.0		4	7	1	2	7
2.1～3.0		1	11	3	2	15
3.1～4.0	2		2	4	2	9
4.1～5.0		1	1	1	1	4
5.1～6.0			2		1	3

第71表　SD1420右岸1・2地区　石核厚さ分布表

重量（g）	Ａ類	ＢⅠ類	ＢⅡ類	ＢⅢ類	ＢⅣ類	ＢⅤ類
～ 30.00		4	8	3	1	10
30.01～ 60.00			5	4	3	11
60.01～ 90.00		2	5	1		6
90.01～120.00	1		1		1	4
120.01～150.00					2	3
150.01～180.00			1	1		1
180.01～210.00			1			
210.01～240.00						1
240.01～270.00				1		
270.01～	1		2		1	2

第72表　SD1420右岸1・2地区　石核重量分布表

（428・429）6点、ＢⅡ類（435）23点、ＢⅢ類10点、ＢⅣ類8点、ＢＶ類38点である。

法　量　総数87点を対象とする。長さ3.1～12.9cm、幅1.9～10.1cmに分布する（第104図）。ＢＶ類は比較的まとまっている。厚さは0.9～5.6cmに分布する（第71表）。分類による特徴は認められない。重量は7.14～770.86gに分布する（第72表）。200g以内に分布するものが多いが、各分類とも200gを超えるものが数点認められる。

石　材（第54表）　総数87点を対象とする。頁岩Ａ類（48.3%）・流紋岩Ｂ類（21.8%）が主体を占め、そのほかに玉髄・頁岩Ｂ類が用いられている。頁岩が多く利用されている点が特徴である。

18）剥　片　類

総数9,966点出土している。遺構では、P1578から流紋岩Ｂ類の剥片が20点まとまって出土している。大きさは長さが0.5～2.6cmで、剥片石器の素材となり得るものも認められる。

G　SD1420右岸３地区の石器（図面図版236、写真図版167）

1）分布と出土状況

当該区は本遺跡の南西部に位置し、SD1420から、SD1745が分岐する地点に接する地区である。当該

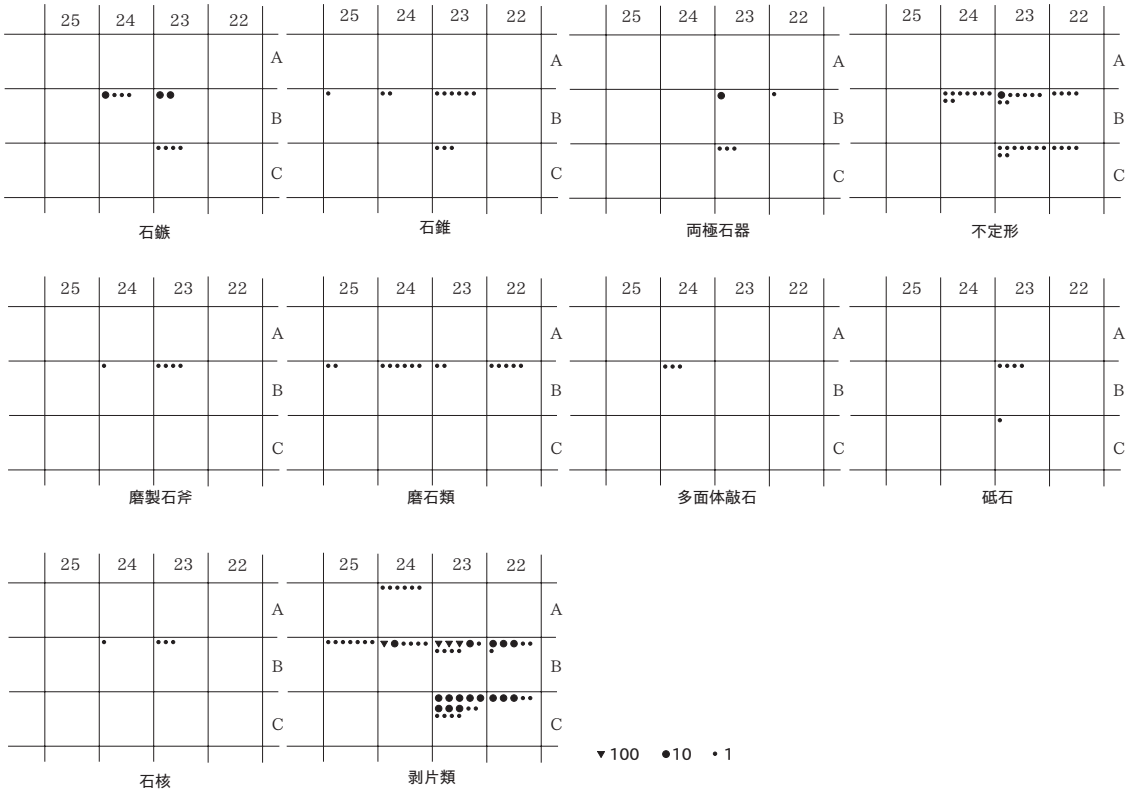
	石鏃	石鏃未成品	石錐	両極石器	不定形石器	磨製石斧	磨製石斧未成品	礫器	磨石類	多面体敲石	砥石	小計	石核	剥片類	合計
SD1420-B6層以上	1		1									2		40	42
SD1420-B9～B7層	5	3	5	3	7	1	1		1	1		26		50	76
SD1420-1層	5		1	3	8	1		1	3	1	1	25	1	65	91
SD1420-2層	15 (19.5)	7 (9.1)	6 (7.8)	7 (9.1)	24 (3.12)		1 (1.3)	1 (1.3)	11 (14.3)	1 (1.3)	4 (5.2)	77	3	412	492
SD1420-3層以下	1				8	1	1		5			16		15	31
その他									5			5		8	13
合計	27 (17.9)	10 (6.6)	13 (8.6)	13 (8.6)	47 (31.1)	3 (1.9)	3 (1.9)	2 (1.3)	25 (16.6)	3 (2.0)	5 (3.3)	151	4	590	745

括弧内の数値は%

第73表　SD1420右岸３地区　層位別器種組成表

	石鏃	石鏃未成品	石錐	両極石器	不定形石器	礫器	磨製石斧	磨製石斧未成品	磨石類	多面体敲石	砥石	小計	剥片類	石核	合計	総重量（g）
安山岩							2	3				5	5		10	1575.5
花崗岩									19		3	22	1		23	9178.85
凝灰岩Ａ		1	1	1	2				1			6	7		13	544.98
凝灰岩Ｂ									1			1	5		6	352.94
玉髄	3		1	4	1							9	37		46	48.02
輝緑岩									2			2			2	834.12
頁岩Ａ	1	2		1	3							7	40	1	48	517.89
頁岩Ｂ					1							1	5		6	18.08
黒曜石	2			1	1							4		1	5	14.00
砂岩									2		2	4	2		6	815.15
蛇紋岩							1					1			1	20.30
石英					2	1				2		5	31		36	1837.3
チャート			1									1			1	2.04
鉄石英Ａ	2		1		1							4			4	14.57
粘板岩					1	1				1		3	2		5	1432.07
流紋岩Ａ	2	1	1		8							12	43	1	56	190.34
流紋岩Ｂ	17	6	8	6	27							64	412	1	477	1081.32

第74表　SD1420右岸３地区　石材別器種組成表



第105図　SD1420右岸３地区　石器出土分布図（S1層期）

区の平場には３棟の掘立柱建物が立地し、SD1745左岸の斜面部には堅果類廃棄範囲であるSX1686・1687・1688・1689が広がり、多量の堅果類が出土している。本地区はSD1420の覆土層位で分割した。層位別の遺物量には偏りが認められ、SD1420-2層において多く出土している。また、S4～S3層期に該当する層から遺物はほとんど出土していない。平面分布は、磨石類が22Dグリッド及び22Bグリッドに集中するほかは、すべての器種が23Bグリッドに集中する（第105図）。器種組成は、全体の傾向と同様、不定形石器の占める割合が高いが、両極剥離痕を有する石器の割合は石鏃よりも低い。礫石器は磨石類が優位であり、石皿類は出土していない。石材は、剥片石器は流紋岩Ｂ類が、礫石器は花崗岩が主体を占める（第74表）。

2）各器種の説明

石鏃はＡＩａ類（448）・ＡＩｂ類（449・450）・ＡＩｃ類（452）・ＡⅡａ類（454）など多様である。また、456のように側縁のみを急角度の剥離により調整しているものも認められる。石錐はＢＩ類が３点と最も多い。両極剥離痕を有する石器はすべてＡ類であり、縦長のもの（460・461）と横長のもの（462）が認められる。不定形石器はＡ類（463）・Ｆ類（464）・Ｈ類のみ出土している。磨製石斧は大形品の468がＢ類、小型品の469がＣ類である。未成品は段階２のものが認められる（466・467）。磨石類はＥ類（472）・Ｆ類（471）・Ｇ類（473・474）が多く認められる。473は長軸の両端部に敲打痕が認められる。多面体を呈する敲石は全点Ｂ類に含まれる。砥石はＡ類（476）が４点、Ｃ類が１点出土している。476は側面を砥面としている。

H　SD1420左岸地区の石器（図面図版237～239、写真図版168）

1）分布と出土状況

当該区は本遺跡の南東に位置し、SD1420左岸の平場及び斜面である。平場には掘立柱建物9棟、斜面には堅果類廃棄範囲であるSX2018・2020などが広がる。当該区はSD1420右岸3地区と同様、SD1420の覆土層位で分割した（第75表）。層位別の出土点数には偏りが認められ、総数の約8割がSD1420-E6～E5層に所属する。器種組成は、不定形石器が約3割と遺跡全体の傾向を下回る。また、石鏃が両極剥離痕を有する石器よりも高い割合を占める傾向はSD1420右岸3地区と同様である。礫石器は磨石類が優位であり、石皿は5点とほかの地区よりも多く出土している。石材は、剥片石器は流紋岩B類が主体で、頁岩A類・黒曜石がそれに次ぎ、黒曜石の比率が高い。礫石器は花崗岩が主体を占める（第76表）。

2）石　　鏃（479～492）

総数46点を数える（第75表）。AIa類（479～482）5点、AIb類（483・484・486・487）12点、

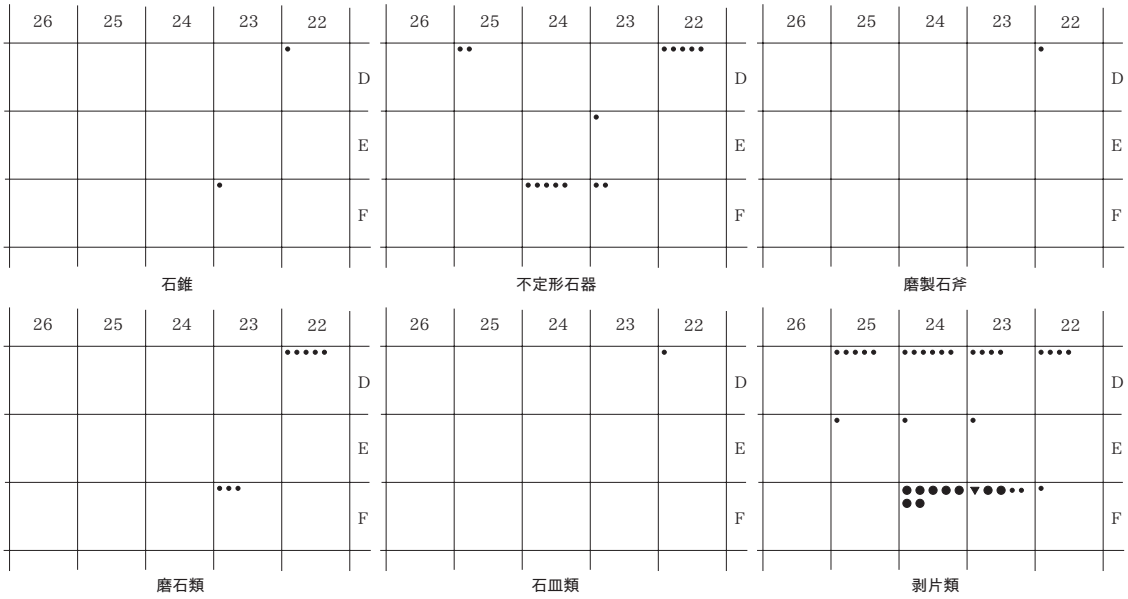
	石鏃	石鏃未成品	石錐	両極石器	不定形石器	打製石斧	磨製石斧	磨製石斧未成品	礫器	磨石類	多面体敲石	砥石	石皿類	軽石製品	小計	剥片類	石核	合計
SD1420-E4層以上	1	1			6			1					1		10	7		17
SD1420-E6～E5層	35 (21.6)	10 (6.2)	8 (4.9)	28 (17.3)	46 (28.2)	1 (0.6)	2 (1.2)	1 (0.6)	1 (0.6)	24 (14.8)	2 (1.2)	1 (0.6)	3 (1.9)	1 (0.6)	163	1202	9	1374
SD1420-E7～E9層	2				2								1		5	18		23
SD1420-E10層	1				6					1	1				9	34		43
SD1420-E12層	2		1		1					2		1			7	161		168
SD1420-E13層以下										3					3	3		6
その他	5	2		1	5		1	1		2	2				19	152	1	172
合計	46 (21.3)	13 (6.0)	9 (4.2)	29 (13.4)	66 (30.6)	1 (0.5)	3 (1.4)	3 (1.4)	1 (0.5)	32 (14.8)	5 (2.3)	2 (0.9)	5 (2.3)	1 (0.5)	216	1577	10	1803

括弧内の数値は%

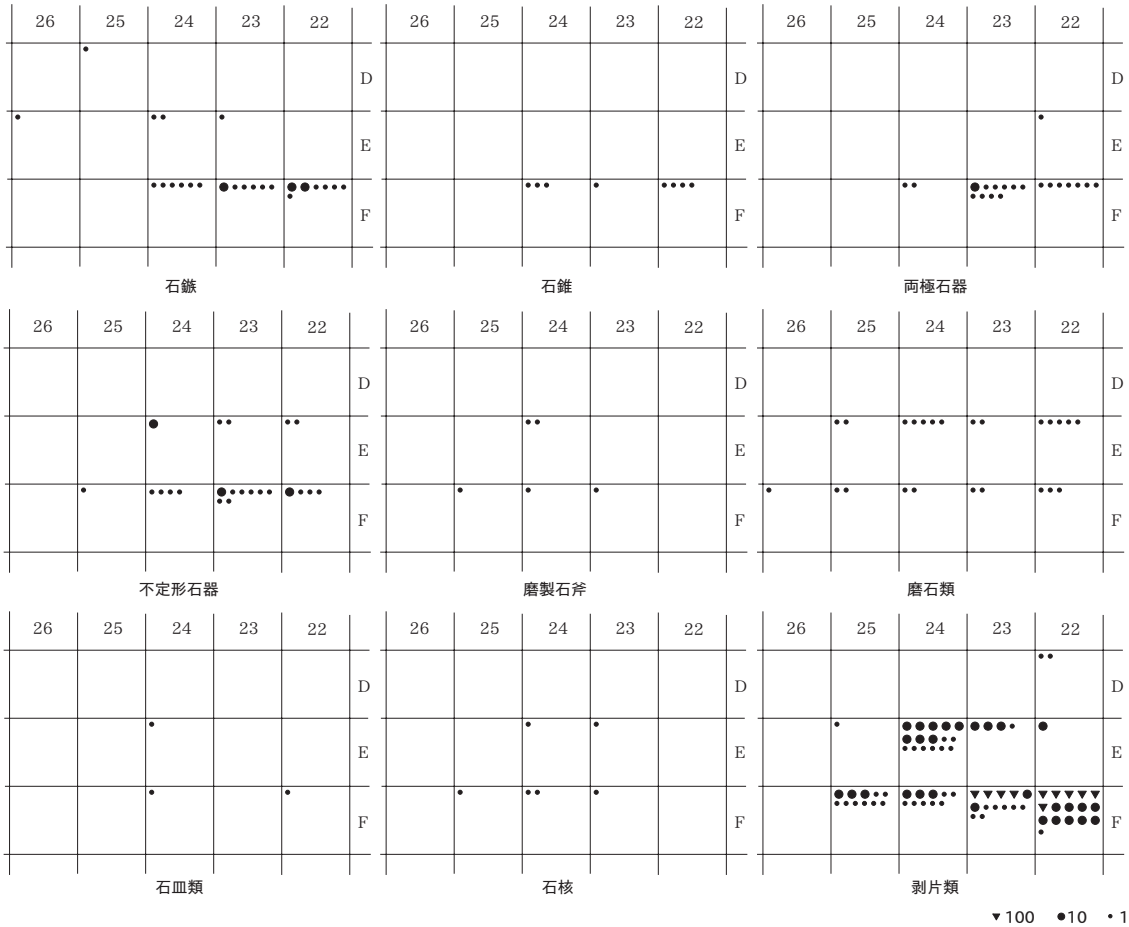
第75表　SD1420左岸地区　層位別器種組成表

	石鏃	石鏃未成品	石錐	両極石器	不定形石器	礫器	打製石斧	磨製石斧	磨製石斧未成品	磨石類	多面体敲石	砥石	石皿類	小計	剥片類	石核	合計	総重量
安山岩					1				2	1			2	6	4		10	7901.84
花崗岩										23	1	1	1	26	1		27	15555.96
凝灰岩A		1	1	3	1					3				9	24		33	1620.81
凝灰岩B														0	6		6	27.4
玉髄	6				4						1			11	204	1	216	751.34
輝緑岩													1	1			1	988.09
頁岩A	3		1	1	21	1								27	162	5	194	2518.99
頁岩B	2			4	5									11	40		51	153.24
黒曜石	8	1		6	1									16	59		75	24.29
砂岩										3		1		4	1		5	6172.52
蛇紋岩								3						3			3	21.61
石英					1						2			3	53	1	57	2721.61
チャート														0	1		1	0.35
鉄石英A	1	1												2	1		3	6.05
粘板岩					1		1		1	1			1	5	13		18	3696.17
ホルンフェルス											1			1			1	122.79
流紋岩A	5		1		1									7	132		139	149.18
流紋岩B	21	10	6	15	30					1				83	876	3	962	2736.99

第76表　SD1420左岸地区　石材別器種組成表



第106図　SD1420左岸地区　石器出土分布図（S4～S3層期）



第107図　SD1420左岸地区　石器出土分布図（S1層期）

ＡＩｃ類（488～489）６点、ＡⅡａ類（490）５点、Ｃ類（491・492）４点、不明14点である。遺跡全体の傾向と同様、ＡＩｂ類が主体を占めるものの、ＡＩｃ類・ＡＩａ類も高い割合を示す。

法　量（第108図、77・78表）　分類可能な完形品・略完形品27点を対象とする。長さ1.7～4.5cm、

幅0.7～1.7cmに分布する（第108図）。厚さは分類に関係なく、0.4～0.6cmに集中する（第77表）。重量は1.50g以下のものが多数を占めるが、ＡＩａ類・ＡⅡａ類の中には1.50g以上のものも認められる。（第78表）。

石　材（第76表）　総数46点を対象とする。流紋岩Ｂ類（45.7％）、黒曜石（17.4％）、玉髄（13.0％）、流紋岩Ａ類（10.9％）などが用いられている。遺跡全体の組成と比較して黒曜石の割合が高い。

遺存状態　46点中17点が欠損している（40.0%）。１類５点、２類７点、３類２点、４類３点と、基部欠損が最も多く、先端部欠損が次ぐ。

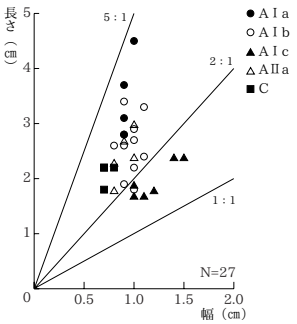
その他　黒色付着物が認められるもの（484・485）が５点、赤色顔料が付着しているものが１点認められる。

3）石鏃未成品及び失敗品

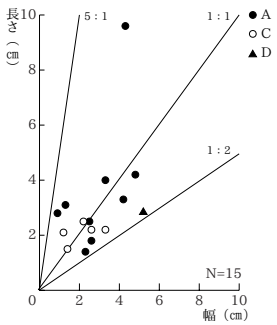
総数13点を数える（第75表）。法量は、長さ0.6～3.9cm、幅0.5～2.6cmに分布する。長幅比は１：１～２：１の範囲に大半が収まる。厚さは0.2～0.7cmに分布し、0.2～0.3cmのものが多い。重量は0.07～4.47gに分布する。石材は主に流紋岩Ｂ類（76.9％）が用いられている（第76表）。

4）石　　錐（493～495）

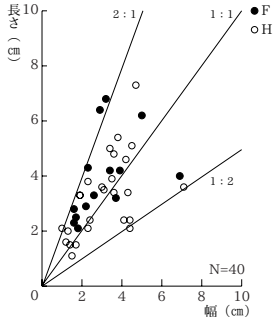
総数９点を数える（第75表）。分類別にはＡⅡ類（493）１点、ＢⅠ類（494）２点、ＢⅡ類（495）５点、不明１点とＢⅡ類が主体を占める。



第108図　SD1420左岸地区
石鏃長幅分布図



第109図　SD1420左岸地区
不定形石器長幅分布図１



第110図　SD1420左岸地区
不定形石器長幅分布図２

厚さ（cm）	ＡＩａ類	ＡＩｂ類	ＡＩｃ類	ＡⅡａ類	Ｃ類
～0.3		2	1	1	
0.4～0.6	4	7	3	3	3
0.7～0.9		1	1	1	

第77表　SD1420左岸地区　石鏃厚さ分布表

重量（g）	ＡＩａ類	ＡＩｂ類	ＡＩｃ類	ＡⅡａ類	Ｃ類
～0.50			1	1	
0.51～1.00	2	6	3	3	3
1.01～1.50	1	4	1		
1.51～2.00	1				
2.01～2.50				1	

第78表　SD1420左岸地区　石鏃重量分布表

厚さ（cm）	Ａ類	Ｃ類	Ｄ類	Ｆ類	Ｈ類
～0.5	5	1		5	7
0.6～1.0	3	3		3	15
1.1～1.5		1	1	6	3
1.6～2.0	1				1

第79表　SD1420左岸地区　不定形石器厚さ分布表

重量（g）	Ａ類	Ｃ類	Ｄ類	Ｆ類	Ｈ類
～ 5.00	6	4		7	10
5.01～10.00	1	1		1	9
10.01～15.00	1				3
15.01～20.00			1	2	2
20.01～25.00				3	
25.01～30.00				1	1
30.01～	1				1

第80表　SD1420左岸地区　不定形石器重量分布表

法　量　完形品・略完形品８点を対象とする。長さ2.0～3.3cm、幅0.5～2.0cmに分布する。長幅比は１：１から４：１に分布し、ＢⅡ類は３：１～４：１の範囲にまとまる。厚さは0.3～0.7cmに分布する。重量は0.40～4.17gに分布する。ＢⅡ類は1.5g以下に認められる。

石　材（第76表）　総数９点を対象とする。主に流紋岩Ｂ類（66.7％）が用いられている。

5）両極剥離痕を有する石器（496～498）

総数29点を数え（第75表）、Ａ類が全点を占める。

法　量　長さ1.3～4.1cm、幅0.5～3.0cmに分布する。長幅比は１：２～２：１に分布するものが大半を占める。厚さは0.3～1.9cmに分布し、0.5～0.7cmに分布するものが多い。重量は0.22～20.06gに分布する。

石　材（第76表）　流紋岩Ｂ類（51.7%）、黒曜石（20.7%）、頁岩Ｂ類（13.8%）などが用いられている。

6）不定形石器（499～504）

総数66点を数える（第75表）。分類別にはＡ類（499）９点、Ｃ類５点、Ｄ類１点、Ｆ類（501・503・504）14点、Ｈ類26点、不明11点である。

法　量（第109・110図、79・80表）　分類可能な55点を対象とする。長さ1.1～9.6cm、幅0.9～7.1cmに分布する（第109・110図）。Ｃ類は長さ・幅共に大きさがまとまっている。長幅比は１：２～２：１の範囲にほぼ収まるが、２：１以上のものも若干認められる。Ｆ類は１：１～２：１に大半が分布し、縦長の素材が利用されているものが多い。厚さは0.2～1.9cmに分布する（第79表）。Ｆ類を除いて1.0cm以下のものが多い。重量は0.62～106.59gに分布する（第80表）。大半は30g以内に収まるがＡ類・Ｈ類に関しては50g以上のものも認められる。

石　材（第76表）　総数66点を対象とする。主に流紋岩Ｂ類（45.5%）、頁岩Ａ類（31.8%）が用いられている。

7）打 製 石 斧（505）

Ａ類が１点出土している。石材は粘板岩が用いられている。風化が激しく剥離が明瞭ではない。

8）磨 製 石 斧（506～510）

成品・未成品共に３点ずつ出土している。未成品は段階１（506）、段階２、段階３（507）が１点ずつ認められ、506は一部に磨痕及び敲打痕が認められる。成品は全点小形品である（508～510）。完形品は508のみでＣ類に属する。509の縦断面形は２類である。石材は安山岩、粘板岩、蛇紋岩が用いられている。成品の３点はすべて蛇紋岩が用いられている（第76表）。また、510の側面には黒色付着物が認められる。

9）礫　　器（511）

１点のみ出土している。側縁の一部の両面に連続した二次加工が施されている。石材は頁岩Ａ類が用いられている。

10）磨　石　類（512～518）

総数32点を数える（第75表）。分類別にはG類（514～516・518）・F類（512）が主体を占めるが、そのほかの分類も1～3点認められる。

法　量　完形品・略完形品27点を対象とする。長さ5.2～14.4cm、幅4.6～12.4cmに分布する。長幅比は1：1～3：1に分布する。G類は長幅比が2：1～3：1に分布するものが多く認められる。厚さは2.2～6.8cmに分布する。各分類とも4cm以上のものが多い。重量は64.01～1,609.30gに分布する。厚さほどまとまりは認められず、特にG類は分布幅が広い。

石　材（第76表）　総数32点を対象とする。主に花崗岩（71.9%）が用いられ、次いで凝灰岩A類、砂岩（9.4%）が多い。

11）多面体を呈する敲石（519・520）

総数5点を数える（第75表）。A類2点、B類（519・520）3点である。法量は長さ4.2～7.5cm、幅3.9～6.2cmに分布する。長幅比はA・B類共に1：1に近く、球体もしくは立方体を呈するものが多い。厚さは3.6～5.8cmに分布し、B類の方が厚い。重量は91.99～383.97gに分布する。長さ・幅・厚さ同様B類の方が大きい数値を示す。石材は石英、花崗岩、玉髄などが用いられている（第76表）。

12）砥　　石（521）

2点出土しており、A類1点（521）、C類1点である。521は3面に使用痕が認められる。石材は花崗岩と砂岩が用いられている。

13）石　皿　類（522・523）

総数5点を数え、分類別にはB類（523）4点、C類（522）1点である。

法　量　完形品・略完形品3点を対象とする。長さ16.4～25.4cm、幅14.2～17.1cm、厚さ5.1～5.3cm、重量1,840～3,340gに分布する。

石　材（第76表）　総数5点を対象とする。安山岩、花崗岩、輝緑岩、粘板岩が用いられている。

14）軽 石 製 品

1点のみの出土で、SD1420-E5c③層で確認されている。分類はBⅠ類である。

15）石　　核（524・525）

総数10点を数える（第75表）。分類別にはBⅠ類1点、BⅡ類（524）2点、BⅢ類（525）1点、BⅣ類1点、BⅤ類5点である。法量は長さ4.2～15.5cm、幅3.1～10.6cm、厚さ2.3～6.7cm、重量29.93～1,168.6gに分布する。石材は頁岩が多く用いられており、そのほかに流紋岩B類、玉髄、石英が認められる（第76表）。

Ⅰ　SD1420川底の石器（SD1420-21層）（図面図版239、写真図版169）

SD1420-21層から出土したものを当該区の遺物として扱った。出土点数が少ないため、全器種をまと

めて述べる。当該区で出土した遺物は、量的には少ないものの、グリッド16～27の広い範囲に分布し、21・22Dグリッドに分布のまとまりが認められる。SD1420-21層は4層に分かれるが、21c・21d層に遺物が多く認められる（第81表）。器種組成は不定形石器や磨石類（532～534）の割合が高く、石鏃（526）・石錐（529）は1点のみ出土している。磨製石斧は2点出土しており、大形の未成品（530）と小形の成品（531）が出土している。磨石類は11点出土しており、D類・E類・F類・G類が認められる。また、534には赤色顔料が付着している。石皿類は3点出土しており、A類2点、B類（536）1点である。536は本遺跡で出土した中で最大の石皿類であり、敲打痕が散在的に認められる。

	石鏃	石鏃未成品	石錐	両極石器	不定形石器	磨製石斧	磨製石斧未成品	礫器	磨石類	石皿類	軽石製品	小計	石核	剥片類	合計
SD1420-21a層	1				5		1				1	8	1	8	17
SD1420-21b層					1				2	1		4			4
SD1420-21c層		1	1	1	5	2		1	8			18	3	13	34
SD1420-21d層				1	9				1	2		13	3	37	53
合計	1 (2.3)	1 (2.3)	1 (2.3)	2 (4.7)	20 (46.5)	2 (4.7)	1 (2.3)	1 (2.3)	11 (25.6)	3 (7.0)	1 (2.3)	43	7	58	108

括弧内の数値は%

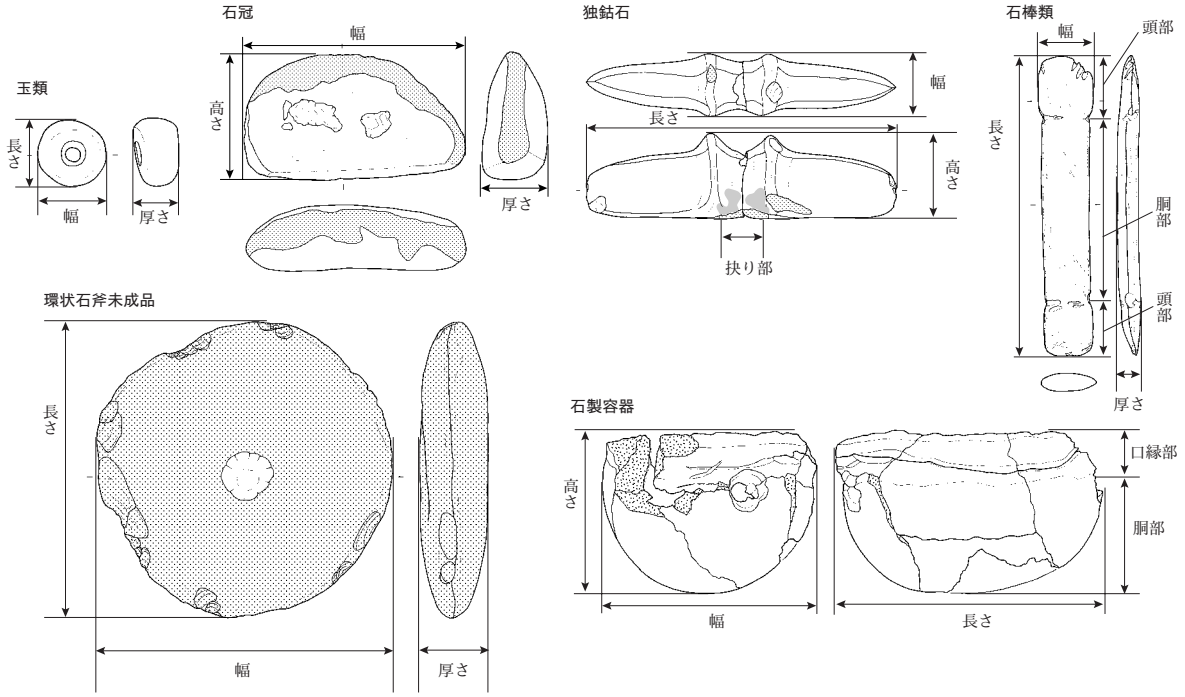
第81表　SD1420川底　層位別器種組成表

	石鏃	石鏃未成品	石錐	両極石器	不定形石器	礫器	磨製石斧	磨製石斧未成品	磨石類	石皿類	小計	剥片類	石核	合計	総重量（g）
安山岩					3		1			2	6	5		11	9843.13
花崗岩						1			9	1	11			11	7602.11
凝灰岩A									1		1	2		3	138.02
玉髄	1				2						3	2	1	6	106.70
輝緑岩								1			1			1	337.00
頁岩A					1						1	2	2	5	872.84
頁岩B											0		1	1	24.65
砂岩									1		1	2		3	131.26
蛇紋岩							1				1			1	26.00
石英					1						1	17		18	346.24
チャート											0		1	1	555.55
鉄石英A					1						1			1	15.87
粘板岩					2						2	5		7	104.80
流紋岩A											0	2		2	2.48
流紋岩B		1	1	2	10						14	21	2	37	992.63

第82表　SD1420川底　石材別器種組成表

4　石製品・自然礫（図面図版240～242、写真図版169）

ここでは、本章3で扱わなかった石製品及び自然礫について述べる。各石製品の部位名称及び計測位置については第111図を参照されたい。



第111図　各器種の計測位置と部位名称

A　分布と出土状況

石製品は玉類、石棒類、石冠、独鉆石、環状石斧未成品、石製容器、異形礫が出土している。所属時期はS1層期において多く認められる。平面分布は中央地区より南側で出土しており、器種によって分布に偏りが認められるものもある。自然礫もまたS1層期において多く出土している。平面分布は、中央地区及びSD1420右岸1・2地区において多く出土しており、石器の分布と概ね同様の傾向を示す。

B　各器種の説明

1）玉　　類（537～555）

未成品を含め19点出土している。

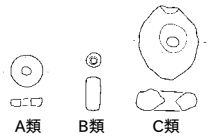
分　類　第112図参照。平面形・断面形で分類した。

【A類】（537～548）　平面形が円形で、断面形が扁平または方形に近いもの。

【B類】（549・550）　平面形が円形で、断面形が長方形（縦長）を呈するもの。

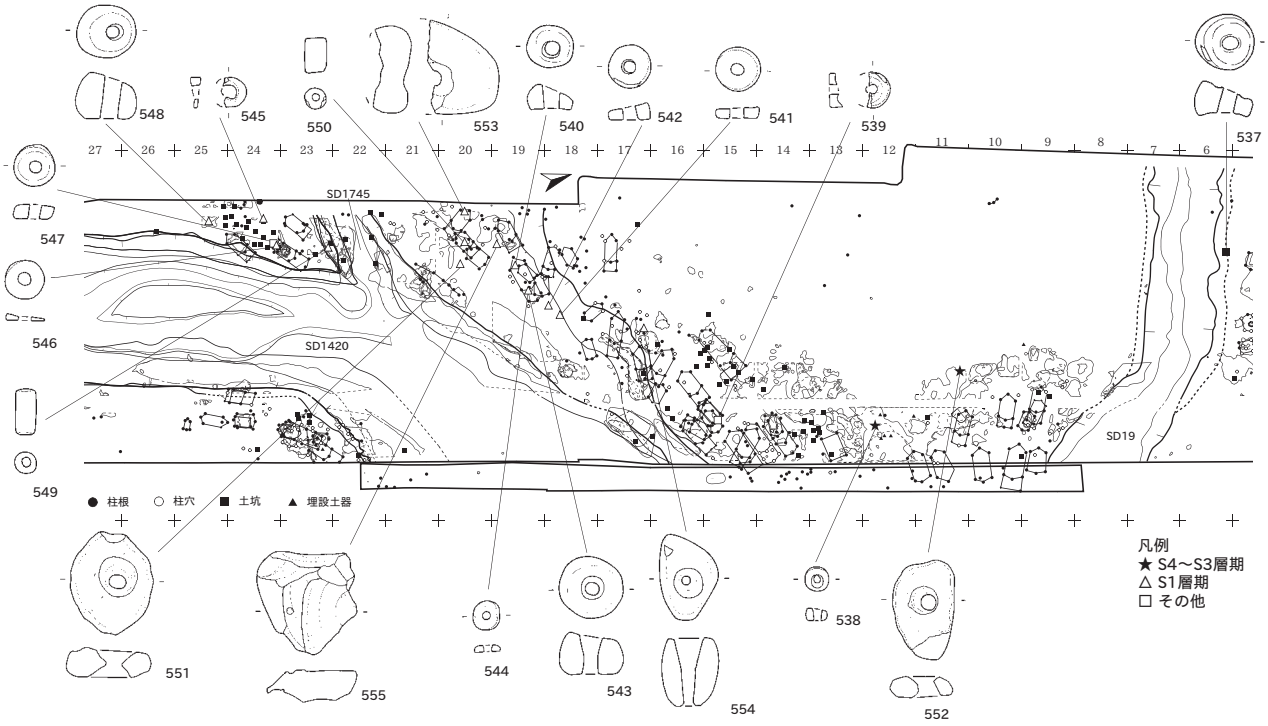
【C類】（551～554）　平面形が不定形を呈するもの。

【未成品】（555）　両面に穿孔途中の痕跡が認められるもの。



第112図　玉類分類図

分布と出土状況（第113図）　遺構ではSK1751から1点出土しているが（547）、SX1717からの流入による覆土に所属し、遺構に伴う可能性は低い。層位別に



第113図　玉類出土分布状況

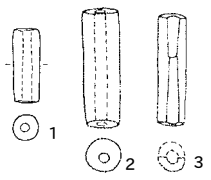
はS4～S3層期に所属するものが2点、S1層期に所属するものが15点である。平面分布はSD1420右岸1・2地区の下流及びSD1420右岸3地区で多く出土しており、同一小グリッドから2点出土しているもの（543・544）も認められる。

法　量　A類は長さ・幅が0.6～1.5cm、厚さが0.2～1.0cm、重量が0.09～3.10gに分布し、大きさにバラエティーが認められる。B類は長さ・幅が0.5cm程度、厚さが1.0cm程度と2点ともほぼ同規模である。C類は長さが2.0～3.3cm、厚さが0.5～1.7cmとA・B類よりも大形であり、断面形が扁平なもの（551～553）と厚みのあるもの（554）が認められる。

石　材　一部の石材については京都大学原子炉実験所 藁科哲男氏に鑑定を依頼した（関連諸科学編第Ⅴ章2参照）。A類には滑石、緑泥石様岩、結晶片岩様岩、結晶片岩様緑色岩、流紋岩A類が、B類は緑色凝灰岩と碧玉が、C類は翡翠と流紋岩A類が用いられており、形態により石材の相違が認められる。

加工痕・使用痕　537・539は片面もしくは両面には隣り合う玉同士が擦れ、磨り減った「玉擦れ」［長沼・畑1998］の凹みが、540・544は擦痕が認められる。

小　括　石材は、産地同定の結果（関連諸科学編第Ⅴ章2参照）から、成品として搬入された可能性もあり、他地域との交流を考える上で重要である。また、未成品が出土していることから、遺跡内での製作も考えられ、在地石材と考えられる流紋岩が用いられている点も注目すべきであろう。また、B類（管玉）の形態は縄文時代の管玉とは異なり、むしろ弥生時代における細形の管玉に類似するといえよう。石材の産出地は現在のところ不明であるが、当時の西日本の情勢を知らせる資料となり得る。なお、東北地方で認められる弥生時代前期の管玉と比較すると、大きさは異なるが平面形は類似する（第114図）。各報告によると、石材は輝緑凝灰岩及び緑泥石が用いられている［小田野1987；高橋1981］。



1. 岩手県上村貝塚［小田野1987］
2・3. 岩手県火行塚遺跡［高橋1981］

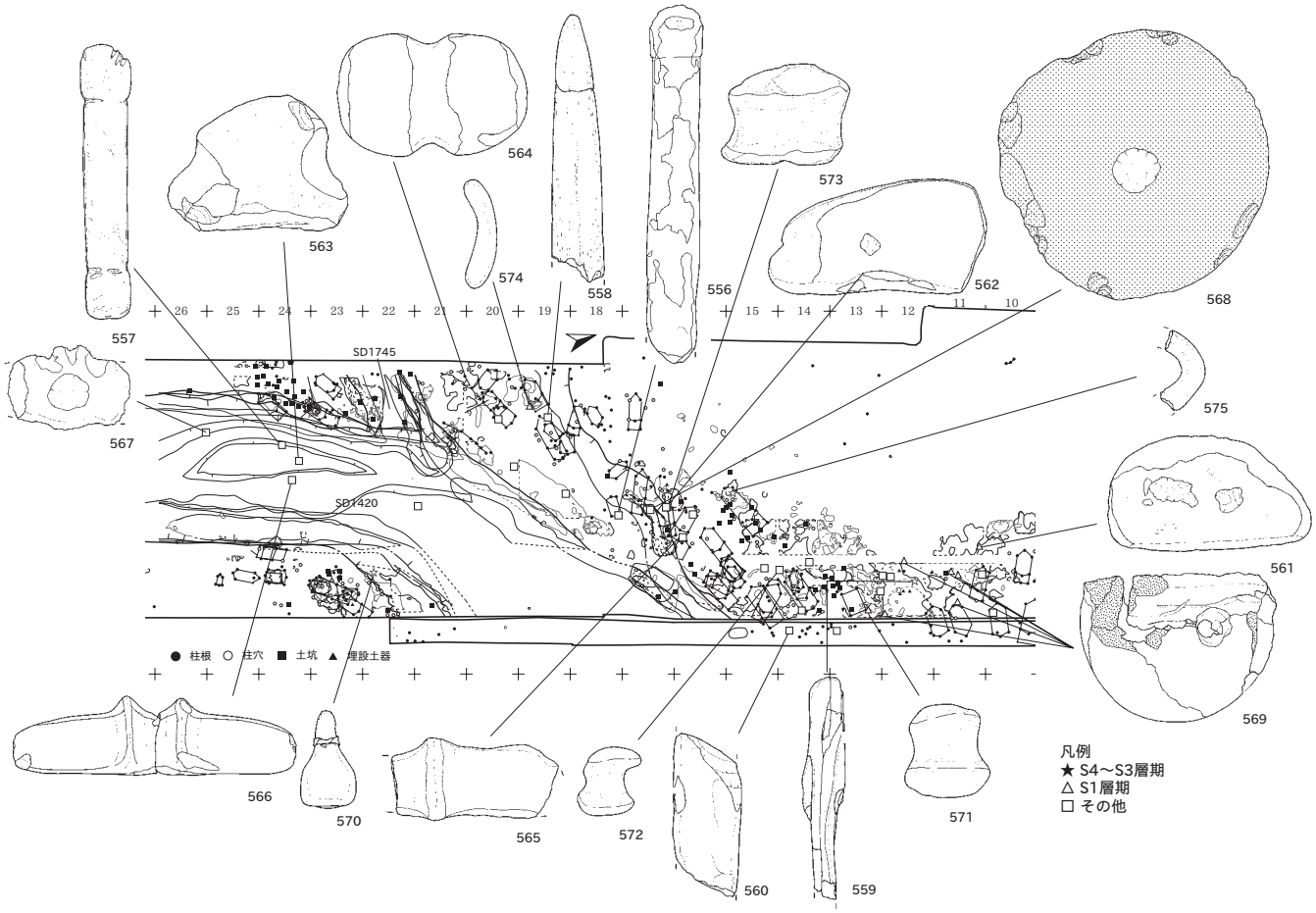
第114図　東北地方の管玉
（S=1/2）

2）石　棒　類（556～560）

従来、石棒・石剣・石刀と呼称されるものを石棒類とし、全体に研磨が及んでいるものを成品とした。総数５点出土している。頭部を持つもの（A類）２点、頭部を持たないもの（B類）１点、未成品の可能性のあるもの２点である。12F・14G・18D・19C・24Cグリッドから出土している。所属時期はS4～S3層期１点（559）、S1層期２点（556・558）、そのほか２点（557・560）である（第115図）。

A類は両側縁の沈線状の刻みによって頭部が作出されており、557は表・裏面付近まで及ぶ。また、557の片方の頭部には長軸とほぼ平行方向に沈線状の刻みが３本認められる。胴部断面形は凸レンズ状または扁平であり、両側縁に稜を持つ。石材は556が安山岩、557が黒色で緻密な粘板岩が用いられている。B類に分類される558は欠損部側から先端部にかけて直線的に尖る形状を呈している。胴部断面形は凸レンズ状を呈しており、A類同様、両側縁に稜を持つ。石材は粘板岩と考えられるが、被熱のため変質している。559は部分的に研磨が及んでいるが、形状が不整形のため未成品の可能性もある。表・裏面及び右側面には沈線状の加工痕が施されている。断面形は不整方形を呈する。石材は粘板岩が用いられている。560は両端とも欠損している。研磨は側縁において顕著に認められるが、裏面は敲打痕が残存しており未成品の可能性が高い。石材は安山岩が用いられている。

本遺跡出土の石棒類は、横断面形が扁平で両側面に稜を持つものが多く、後藤信祐氏の分類［後藤1986・1987］では「石剣」に大別され、型式分類は「熊登型石剣」に類似する。熊登型石剣は新潟県



第115図　石製品出土分布状況

及び東北地方に分布する。また、縄文時代晩期前葉に所属するものが多く、本遺跡の所属時期とは若干異なる。

3）石　　冠（561～563）

底面が平坦もしくは凹痕を有し、縦の断面形が三角形状のものを石冠とした。3点出土しており、S4～S3層期、S1層期のいずれの層からも出土している（第115図）。561・562は「石斧形石冠」・「山形石冠」などと呼称されるものである。表・裏面及び底面の一部には擦痕が認められ、表面中央部に凹痕を有する。石材はいずれも砂岩が用いられている。563は石冠の未成品と考えられる。一部に自然面を残し、剥離痕・敲打痕が認められ、底面には不明瞭であるが凹痕が施される。

561・562は滝沢規朗氏の分類［滝沢2001］の「石斧形石冠ⅡA1類」に所属するものと考えられ、同類の資料は県内のほぼ全域に分布する。当該分類の所属時期は縄文時代中期中葉～後期後葉以降と推定されており、晩期に所属するものは少ない。そのため、本遺跡の出土例は当該分類の存続時期を決定付ける重要な資料となろう。また、凹痕が表・裏面に施される点が特徴であり、県内の類似資料として長岡市馬高遺跡［中村1958］・妙高村葎生遺跡［武井ほか1997］・中郷村籠峰遺跡［小池2000］などが挙げられる。

4）独　鈷　石（564～567）

中央に抉り部もしくは隆帯が作出されたものを独鈷石とした。4点出土している。層位別にはS1層期で2点、SD1420-21層から2点出土している（第115図）。分類は、長軸と直交する中間部に抉り部が一周し、端部が槌状を呈するもの（A類）、中間部に2本の隆帯が作出されているもの（B類）、中間部に凹み痕を持つもの（C類）とした。A類1点（564）、B類2点（565・566）、C類1点（567）である。564はやや扁平な円礫を素材とし、抉り部及び端部には敲打痕が、抉り部と端部の間には磨痕が認められる。石材は安山岩が用いられている。566は2本の隆帯が認められ、全周せずに底部付近で途切れる。全体に研磨が及んでおり、両端部は石斧状を呈する。抉り部の底部付近にアスファルトと考えられる黒色付着物が認められる点と、端部の剥離痕から、利器として使用された可能性が指摘できよう。石材は安山岩が用いられている。565は中間部付近で欠損している。隆帯は全周せず、底面で途切れる。石材はホルンフェルスが用いられている。567は両端部が欠損しており、全形は把握できない。上部には突起が2か所作出されている。また、裏面には溝状の加工が2条認められる。石材は軟質な花崗岩が用いられている。

5）環状石斧未成品（568）

568は扁平な円礫を素材とし、表・裏面の中央部に凹痕が認められるものの、貫通していないため環状石斧の未成品と考えた。SD1420-18層から出土している（第115図）。全体に敲打痕が及んでいるが、周縁には剥離痕が残存している。このことから、周縁の剥離作業後に敲打作業という製作工程を想定できる。また、環状石斧の製作遺跡と考えられる朝日村元屋敷遺跡において同様の製作工程が報告されている［滝沢2002b］。石材は凝灰岩A類が用いられ、環状石斧の素材としては軟質である。

6）石 製 容 器（569）

礫を用いて作られた器状の石製品である。11F及び12Eグリッドから出土しており、S1層期に所属す

る（第115図）。形状は、上面観が楕円形、側面観は胴部から底部にかけて緩やかに湾曲しており、底部は丸底と推定される。外面には胴部と口縁部を区画するように、口縁部下に段が横位に巡らされている。また、全体に研磨が及んでおり、外面・内面共になめらかである。口縁端部は幅2.5cm程度の平坦な面が作出されており、端部は若干外側に傾く。正面の胴部右寄りには外面及び内面からの穿孔が認められる。石材は礫岩が用いられている。

7）異　形　礫（570～576）

特徴的な形状を呈した自然礫を異形礫とした。21点出土しており、S4～S3層期では5点、S1層期では13点で、中央地区及びSD1420右岸1・2地区に散在的に分布している（第115図）。形状はひょうたん形のもの（570）や中央部が括れるもの（571～573）、細長くねじれるもの（574・575）、孔があいているものなどが認められる。570は括れ部に樹皮が巻かれている。二つに折った樹皮を、折れ面を上にして礫に巻き、礫に巻いた樹皮に別の樹皮を螺旋状に巻いている。ただし、遺存状態が悪いためか、螺旋状に巻き付けてある樹皮は全周していない。樹皮の巻き方は樺皮製環状製品（本章5、図面図版290-308参照）と類似している。576は本遺跡で唯一出土した鉄鉱石であり、産地は新発田市赤谷産の可能性が高い[1)]。

異形礫の中で中央部が括れるものは、他遺跡でも報告されており［児玉2002］、県内では朝日村アチヤ平遺跡［長田2002］・同村元屋敷遺跡［潮田2002］で出土している。特に570は自然礫が利用されていた事実と、使用方法をある程度推定させる点で重要である。今後の遺物研究においては、自然礫にも目を向ける必要性があろう。

8）石核類似礫

形状は石核に類似するものの、打点が認められないものである。石核の可能性も否定できないため、自然礫とは別個に報告する。総数239点を数え、S4～S3層期で39点、S1層期で168点出土している。S4～S3層期では中央地区付近に集中し、S1層期ではSD1420右岸1・2地区で多く出土しており、特に17D・19Cグリッドでは10点以上出土している。平面分布は石核の分布とほぼ同様である。さらに、石核類似礫の平均法量は長さ5.7cm・幅4.3cmで、石核の平均法量とほぼ同規模であることから、石核との関連性が指摘できよう。石材は流紋岩Ｂ類（28.0%）・頁岩Ａ類（14.2%）が主体を占める。

9）自　然　礫

本遺跡は沖積地に立地しており、地盤はシルト層を基本とすることから、流路外で出土した礫は人為的な搬入の可能性が高い。重量5g以上のものを対象とすると、総数1,489点を数え、S4～S3層期では359点、S1層期では839点出土している。合計重量は、S4～S3層期出土の礫が30.3kg、S1層期出土の礫が115.2kgである。平面分布は12Fグリッドに集中し、S1層期ではSD1420右岸1・2地区においても集中地点が認められるが、流路によって流されてきた可能性も考えられる。法量は長さ0.5～24.2cm、幅0.2～22.0cmで、円礫や扁平礫が多い。石材は花崗岩（25.7%）・砂岩（22.2%）・流紋岩Ｂ類（13.7%）・粘板岩（11.1%）が主体を占める。また、12Fグリッドは各種石器及び剥片が多量に出土しており、自然礫は石器の素材として持ち込まれた可能性が高い。

1）青田遺跡調査検討委員 高濱信行氏のご教示による。

5　木　製　品（図面図版243～290、写真図版170～195）

A　記述の方法

1）方　　針

木製品の記述には本文（挿図含む）・観察表・図面図版・写真図版を用いる。また本遺跡は広い範囲を調査対象としているため、調査対象範囲を地形的に区分し（SD19右岸地区、SD19左岸地区、SD1420右岸1・2地区、SD1420右岸3地区、SD1420左岸地区）、この区分を基本として記述を行った。同時にⅠ～Ⅹ層に分類された基本層序内に存在する縄文時代晩期の土層であるS5～S1層を記述の基本とする。

2）観　察　表

観察表には、基本的に図示したものを示す。ただし、柱根に限っては全出土品を観察表に示した。また、以下に示す①～⑬の観察・計測項目は基本的な項目であるが、柱根に限ってはこれらとは別の項目をいくつか設定している。これについては「B　柱根・礎板・根絡み」において改めて記述を行う。記載順序は、柱根は地区ごとに、掘立柱建物（SB）単位で、次いでピット（P）出土のものを遺構No.の順に示した。図示した礎板・根絡みは、柱根とは観察・計測項目を共にするものではないが、柱根と同じ観察表中で、同様の記載順序で示した。成品・部材と加工材・加工材片は『木器集成図録 近畿原始篇』［奈良国立文化財研究所1993］などを参考に分類を行い、器種ごとに記述を行った。なお、器種によっては観察・計測項目が多岐にわたるものがあり、観察表を別にして示す場合がある（第116図）。

①報告No.　図面図版・写真図版に対して付された番号を記入した。

②種別　木製品の器種を記入した。また、加工材・加工材片には、以下に示す加工材名を記入し、樹皮製の遺物についても以下に示すように名称を与え、ここで記入する。

角　材　厚さを1とした場合、幅が1より大きく3未満のもの。

板　材　厚さを1とした場合、幅が3以上のもの。

丸木材　主に木口にのみ加工を施されたもの。

分割材　主に分割作業によってのみ得られたもの。

削出棒材　角材や分割材などを削り出し、断面を円形や楕円形に仕上げた棒状のもの。

樹　皮　ある程度厚みを持ち、外皮から木質部に近い内皮までの部分を残すもの。大半は板状を呈する。

樺　皮　厚さ1mmにも満たない外皮のみのもの。大半は丸まっているか、ねじれた状態で出土している。

③木取り　木製品に対してどのような材木を用いたか、木口面に認められる木目の流れで、以下のように分類した（第117～119図）。

丸木取り　木口面にのみ加工が施されているもの。

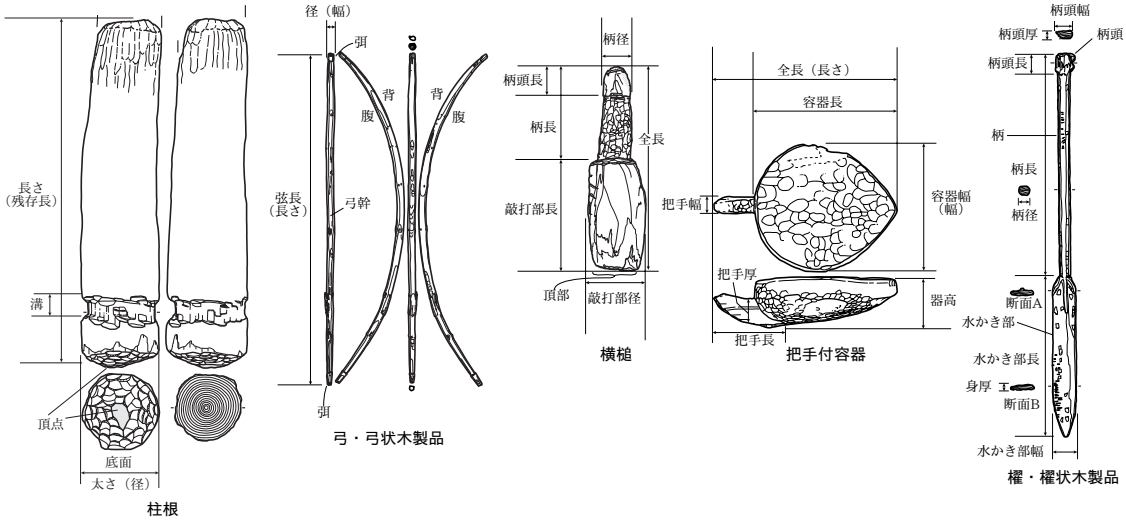
半　割　樹芯を通って、二分割されたもの。

偏半割　樹芯を通らずに、二分割されたもの。芯持ちと芯去りに分けられる。

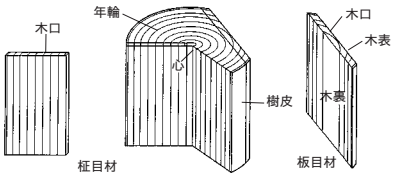
ミカン割　樹芯を通って、1/2以下に分割されたもの。断面は扇形を呈する。

偏ミカン割　樹芯を通らずに分割され、断面が扇形を呈するもの。芯持ちと芯去りに分けられる。

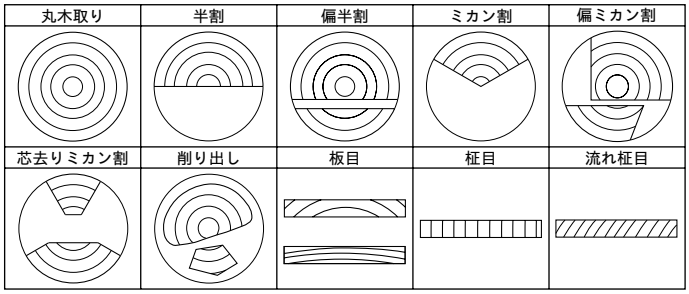
芯去りミカン割　ミカン割りした後、樹芯付近が取り除かれたもの。



第116図　各器種別の部位名称

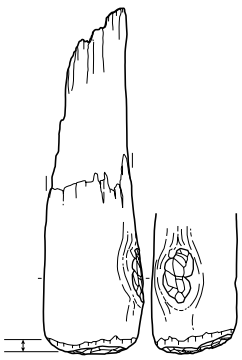


第117図　木取り及び木材一般の部分名称
（[橋本2003]より転載）

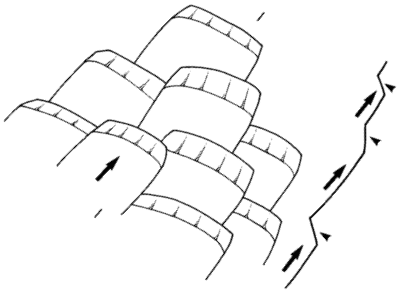


第118図　木取りの分類

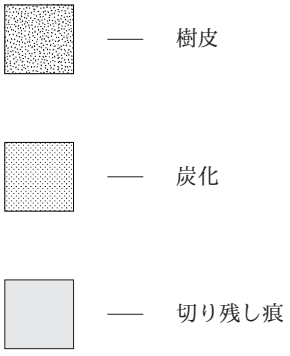
第119図　容器などの木取り
（[若林ほか1993]より転載）



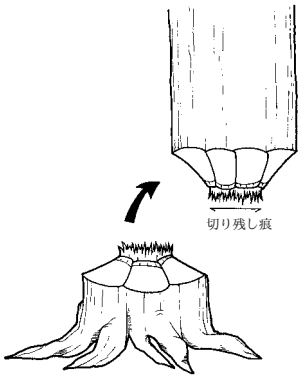
第120図　斧入り付近の腐蝕の図化



第121図　加工痕の図化
（[加藤2003]より転載）



第122図　樹皮・炭化・切り残し痕の表示



第123図　切り残し痕の形成
（[加藤2003]より転載）

削り出し　側面を削り出して、断面が円形や四角形を呈するもの。芯持ちと芯去りに分けられる。

板　目　木口面において、長辺に平行するように木目が認められるもの。板材に対して用いる。

柾　目　木口面において、長辺に直行するように木目が認められるもの。板材に対して用いる。

流れ柾目　木口面において、長辺に斜行して木目が認められるもの。板材に対して用いる。

横木取り　柾目面が容器の口あるいは底になるもの。容器など立体的なものに対して用いる。

縦木取り　木口面が容器の口あるいは底になるもの。容器など立体的なものに対して用いる。

④樹種　木製品に用いられた材の樹種を記入した。

⑤出土地点　木製品の出土したグリッドを記入した。ただし、柱根・礎板・根絡みはＰからの出土なので、出土グリッドは遺構観察表に譲り、記入しない。

⑥遺構　木製品の出土した遺構種別・遺構番号、覆土層位No.を記入した。

⑦層位　木製品の所属する時期を、基本層序であるⅦｄ・Ⅶｃ層を細分した層位名（S1ほか）で示した。

⑧⑨⑩長さ・幅（直径）・厚さ（高さ）　木製品の各部位を計測し、その値を記入した。また、欠損などにより計測時に本来の値を保っていない場合は、括弧書きの値を記入した。

⑪⑫炭化・樹皮　木製品に炭化部があるもの、樹皮の残存するものは、各々の欄に「○」を記入した。

⑬備考　①～⑫の欄に記入すること以外で、特筆すべき事項を記入した。

3）本　　文

基本的には図示したものに対して、観察表では表現し切れない事項について記述を行う。柱根の項では、まず出土状況を明らかにし、次に観察・計測項目とその分類を示し、その後、各説を行う。なお各説では地区ごとにSB単位で記述を行うため、その都度、SBごとの傾向を示しながら記述を進める。一方、成品・部材と加工材・加工材片は柱根同様、まず出土数・分布状況を明らかにし、その後で器種ごとに各説を行う。

4）図 面 図 版

①順　序　図面図版は、本文における各説と同様の記載順序で示しており、大きくは柱根（礎板・根絡みを含む）、そのほかの木製品の順で示す。

②器種名　柱根・礎板・根絡み（1～238）に限っては、No.の隣に、ピットNo.と器種名を示した。「柱」は柱根、「礎」は礎板、「根」は根絡みを表す。なお、236の器種名は「艫綱杭？」となっているが、これは丸木舟に隣接して検出され、丸木舟に関連のあるものと考えたためである。

③図の展開　基本的には展開図法により、正面・側面・断面を図示した。また、柱根は出土状況から上下を設定し、その柱根の側面観をよく表す面を正面とした。これを受けて、側面・底面（木口面）を設定し、これらに断面を加えることを基本とした。なお、必要に応じて図示する面を増減させた。

④断面図（年輪）　断面に描かれた年輪は木製品の木取りを示すため木口面で観察し得る木目から推定復元したもので、実際の木目の流れや年輪数と一致するものではない。

⑤加工痕の表現　基本的には『木器集成』に従い、加工痕以外の情報は極力、図示しない方針を取った。ただし、柱根の上端部の腐蝕部分は、地上に露出していた範囲や加工痕を反映している可能性もあり、簡易に図化した。柱根の側面と底面との境、つまり斧の入り始めの部分が、周辺に比べ腐蝕が進んでいる場合がある。これは、柱材を柱穴に設置するまでに生じた損傷を原因として、周囲よりも腐蝕が進行しやすくなった可能性を考え、その範囲を簡易に図示した（第120図）。加工痕は切り合い関係を意識的

に表現した（第121図）。複数の加工痕の集合は「作業単位」を示すものと考え、単独の加工痕よりも太い線で表した。樹皮・炭化・切り残し痕（第122図）の範囲はスクリーントーンで示した（第123図）。

⑥そのほかの表現　新規の欠損範囲は細い線で、規則的な破線を用いて表現した。また、自然に形成されたと考える「ヒビ」などは、実線で示した。

⑦縮尺　柱根・礎板・根絡みはすべて1/8、そのほかの木製品には、数種類のスケールを採用しているが、できる限り器種ごとに統一するようにした。

5）写 真 図 版

写真図版の遺物番号と図面図版の遺物番号は一致する。基本的には、図示した木製品に対して写真撮影を行ったが、柱根に限っては図示した中から、各観察・計測項目の特徴をよく表すものや、残りの良いものを任意に抽出し、撮影を行った。また、写真図版の展開数は必ずしも図面図版における展開数と一致しない。なお、木製品の細部を表現したい場合は、全形写真とは別に各部位のアップ写真を示した。

B　柱根・礎板・根絡み（図面図版243～279、写真図版170～188）

1）出土・分布状況

柱根は掘立柱建物（SB）57棟分で326点、杭列（SA）2列分で9点である。これに、そのほかの柱穴出土のものを合わせると458点となる。礎板は13か所の柱穴から74点、根絡みは49か所から187点出土している。これらをすべて合わせると本遺跡出土木製品の約6割弱を占める。本来、柱根は建築部材として、ほかの木製品と同列に扱わなければならない。しかし、これほど多くの柱根に対して調査・検討がなされたことはこれまで頻繁にあった訳ではない。そこで、本報告では柱根に、そのほかの木製品とは異なる観察・計測項目を設け、今後の柱根の検討に必要になるであろう基礎データを提示することとした。

2）柱根の観察・計測項目

ここでは、先述した項目と一部重複するが、柱根に対して設定した観察・計測項目の記述を行う。以下に示す項目は、埼玉県寿能泥炭層遺跡から出土した多数の杭材を分類・検討した山田昌久・飯島克己両氏の研究［山田・飯島1984］を基本にしつつ、本遺跡の実態に即して、設定したものである。

樹　種　柱根・礎板・根絡みと判断したものに対して樹種同定を行い、その樹種名を記入した。なお、小片で出土したものについては、同定していないものもある。

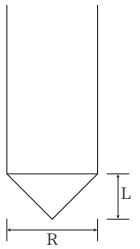
木取り　ここでは先述した木取りの分類を踏まえ、柱根に即した新たな分類を示す。丸木取りで樹皮を残さないもの（A類）、丸木取りで樹皮を残すもの（B類）、半割材のもの（C類）、ミカン割材のもの（D類）、分割後、周囲に加工を施し、厚さを1とした場合、幅が1より大きく3未満の角材状のもの（E類）、分割後、周囲に加工を施し、厚さを1とした場合、幅が3以上の板材状のもの（F類）、角材や分割材などを削り出し、断面を円形や四角形に仕上げたもの（G類）に分類する。なお礎板・根絡みは先述の木取りの分類（第118図）に従う。

長　さ　上端から下端までの値を長さとして計測し、記入した。なお、柱根は土に埋まっている部分が主に残存しているので、柱根の長さは柱を柱穴に設置した際の「根入れの深さ（柱の土に埋まっている部分の長さ）」を反映する可能性も指摘できるが、すべての柱根が今日まで同様の状況・環境で埋没していたわけではなく、単純に長さから「根入れの深さ」を推し量ることは難しいものと考える。

太さ・厚さ　根・節部の張り出した部分以外の最大径を太さとして計測し、記入した。ただし、自然形で断面が極端に楕円形を呈するものや分割材は、長辺を幅、短辺を厚さとした。なお、柱根の太さは（現況では欠失している）地面より上方の太さと大きく変わらない、という前提に立つと、柱根の太さは「柱の規模」を考える際に、最も有効な属性のひとつである。そこで、後の記述では、太さを「柱の規模」を考える際の指標として扱うこととする。

尖　度　柱根下端部の尖り具合を、下の数式を用いて、指数化したものである（第124図）。指数が小さいほど柱根の底面は平坦であり、指数が大きいほど尖鋭である。ただし、同じ尖度の柱根が、必ずしも同様な尖り具合を呈しているわけではなく、底面の形状によって尖り具合は左右されることを考慮に入れたい。また、この指数は伐採・分断時の斧の侵入角も反映する。なお、断面が楕円形のものや分割材を利用した柱根の場合、「材の直径（R）」には長径・長辺の計測値を充てた。

≪尖度＝側面から見た加工面の長さ（L）÷材の直径（R）≫



第124図　尖度

側面形態　底面における頂点の位置を考慮し、柱根下端部の側面形態を分類した（第125図）。

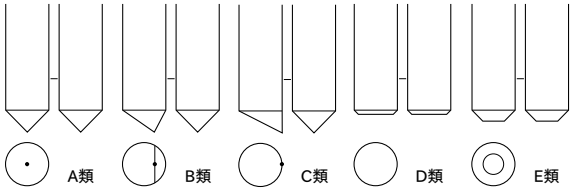
Ａ類　頂点が樹芯部（底面の中央部）に位置し、下端部は逆三角形を呈する。

Ｂ類　頂点が底面において、中央部と縁辺部との中間に位置し、下端部はやや偏った逆三角形を呈する。

Ｃ類　頂点が底面の縁辺部に位置し、下端部は片側に偏った逆三角形を呈する。

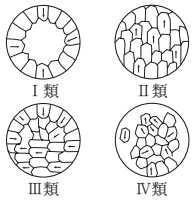
Ｄ類　底面は平坦に仕上げられ、側面と底面はほぼ直角に交わり、下端部は方形を呈する。

Ｅ類　樹芯部付近を中心に平坦に仕上げられ、下端部は逆台形を呈する。



第125図　側面形態の分類

以上のように分類したが、大きくはＡ～Ｃ類とＤ・Ｅ類に二分できる。すなわち、前者は底面に頂点を残すが、後者は頂点を残さず、範囲に差はあるものの、底面に平坦面を持つものである。



第126図　加工配列の分類

加工痕配列　底面における加工痕の配列状況を分類したものである（第126図）。

Ⅰ類　縁辺部から中央部に向かって、求心的に加工痕が配列しているもの。

Ⅱ類　一方向に向かって、加工痕が配列しているもの。

Ⅲ類　基本は求心的な配列だが、部分的に一方向に向かう配列があるもの。

Ⅳ類　加工方向が一定せず、不規則なもの。

加工面構成　底面における加工痕のまとまり（作業単位）を、面数と構成状況で分類した（第127図）。

ａ類　頂点はあるが、加工痕を区画する稜線が不明瞭なもの。

ｂ類　加工面１面で構成するもの。

ｃ類　加工面２面で構成するもの。

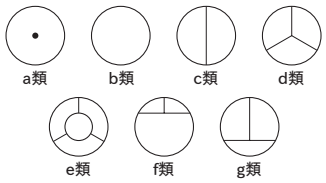
ｄ類　頂点を中央部に置き、加工面３面以上で構成するもの。

ｅ類　加工面３面以上である点はｄ類と共通するが、樹芯部付近に、平坦な面をもう１面追加したもの。

ｆ類　加工面３面で構成され、その加工面は「T」字の稜線を境界とし、T字の縦の稜線が短いもの。

ｇ類　加工面３面で構成され、その加工面は「T」字の稜線を境界とし、T字の縦の稜線が長いもの。

加工痕の形状　底面にある加工痕は互いに切り合っているため、底面の中で最大のものが斧の形状を最もよく反映したものであると予想される。したがって、底面の中で最大のものを計測の対象とした。ただし、同じ斧を用いても、加工対象となる材の形状や硬さ、材に対する刃の角度、加工を施す部位などの諸条件により、加工痕の形状には個体差が表れる。なお計測部位は以下に示すとおりである（第128図）。

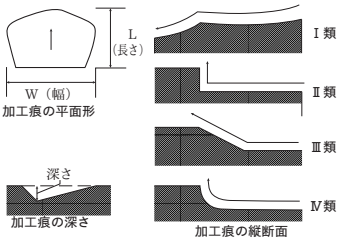


第127図　加工面構成の分類

長さと幅　斧入りの方向に平行する辺を「長さ」、直行する辺を「幅」とした。

深さ　斧の「入り」と「出」を結んだ線から、垂直に降ろした最大値を「深さ」とした。

縦断面　斧入りの方向に平行する断面を「縦断面」とし、模式的にⅠ～Ⅳ類に分類した。



第128図　加工痕の計測部位

側面加工　この分類は側面に人為的に残された加工痕のバラエティーであり、等質な分類ではない。そのため、柱根1点に対して複数存在する場合もある。なお、調査時にできたキズを加工痕と誤認している可能性もあるので、その可能性のあるものはできる限り対象外として削除した。

Ⅰ類　木目に対して直行する加工痕（68など）。

Ⅱ類　木目に対して平行する加工痕（192など）。

Ⅲ類　木目に対して斜行する加工痕（63など）。

Ⅳ類　節や根などにより、張り出していたと思われる部分に残されたケズリの加工痕（188など）。一定した平坦な側面の柱を作ることを目的として施された加工痕で考える。

Ⅴ類　Ⅳ類以外の状況（本来、平らな部分）に残されたケズリの加工痕（150など）。

Ⅵ類　（石器で）原木にキズ（切れ込み）を付け、そこをきっかけに木目に対して平行に木質部を剥ぎ取ったような加工痕（139など）。

Ⅶ類　幹を伐採する前にできた枝の欠失痕で、その後の成長により欠失痕の周囲が隆起しているもの（234など）。ただし、形成要因を自然現象か人為的な行為によるものか判断することは難しい。

溝　本遺跡出土柱根の中には、底面付近の側面に、木目に直行する「溝状の抉り込み」を有するものが認められる。この加工を「溝」と呼称することとする（第129図）。周りを巡る度合いで、分類した。

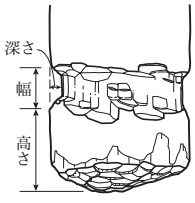
Ⅰ類　全周するもの。

Ⅱ類　3/4周以上、全周未満のもの。

Ⅲ類　1/2周以上、3/4周未満のもの。

Ⅳ類　1/4周以上、1/2周未満のもの。

Ⅴ類　1/4周未満のもの。



第129図　溝にかかる各部名称

樹　皮　本遺跡出土の柱根の中には、樹皮が付いたままのものもいくらか存在する。材木の利用方法を考える上で重要な点であると考え、樹皮の有無を示すこととした。観察表に「○」が記入されているものが、樹皮の残存しているものである。

炭　化　炭化範囲の認められるものには、観察表に「○」を記入した。

切り残し痕　樹木を伐採する際、ある程度まで斧入りが進行すると、樹木は自重で倒れる。あるいは、

径の小さい樹木であれば、ある程度まで斧で加工して、折り取ることがある。この時、木口において斧の及ばなかった部分には、ささくれ立った範囲が形成される（第123図）。この部分を「切り残し」とし、柱根の底面に残された、加工痕の認められない若干ささくれ立った範囲を「切り残し痕」とする。また、本遺跡出土の柱根の中には、樹芯部付近の腐蝕が周囲よりも進行しているものや、樹芯部付近の木質部が抜け落ち、空洞化しているものが認められるが、これは切り残し部がささくれ立つことで、周囲よりも空気に触れる表面積が広いことも原因のひとつである可能性も指摘できる。なお、この項目は観察表に個別の欄を設けたものではなく、以下の記述で用いる用語の説明として示したものである。

タンニン　加工部位に付着している黒色物質で、木材から滲み出た樹液が土や砂と混ざり合って硬質化したものである。概して、粗い加工の施された、広葉樹を利用した木製品に付着している。なお、この項目は観察表に個別の欄を設けたものではなく、以下の記述で用いる用語の説明として示したものである。

3）各　　説

ここでは、上述した観察・計測項目に従って、図示した柱根・礎板・根絡みを中心に記述を行う。なお、図示は、各観察・計測項目の特徴をよく表すものに対して行い、点数は柱根189点、礎板17点、根絡み29点を数える。

観察・計測項目が多岐にわたるため、それらをまとめて、記述を行うこととする。すなわち、【形状】で木取り・太さ・尖度、【底面】で側面形態・加工痕配列・加工面構成、【側面】で側面加工・溝、【まとめ】で以上の各項目を総合した結果を示す。礎板・根絡みが伴う場合は【礎板・根絡み】で図示していないものも含めて示し、樹種は本編第Ⅳ章や木製品観察表において個別に示されているので、【まとめ】で触れる以外は個別の記述は行わない。なお【底面】では、３つの項目を組み合わせて記述を行う。例えば、側面形態Ａ類、加工痕配列Ⅰ類、加工面構成ａ類のものを、ＡⅠａ類と表す。なお、掘立柱建物にかかる各部位名称は、本編第Ⅳ章（第26図）を参照されたい。

SD19 右岸地区（図面図版243、写真図版170）

SB1（1～3）

【形状】木取りはＢ類、太さは10.0cm前後のもの（7.5～12.0cm）、尖度は0.4～0.6のものが主体を占める。太さ・尖度でやや幅を持つが、比較的高い類似性を示す。

【底面】側面形態・加工痕配列はＡⅠ類が主体を占めるが、加工面構成はａ・ｃ・ｄ類が認められ、ばらつきがある。

【側面】側面加工Ⅳ・Ⅵ類が散見できるが、大半は樹皮が残存しており、加工はほとんど認められない。

【礎板・根絡み】P46・50で、15～20cm程のミカン割材を利用した根絡みが各１点伴う。利用樹種は前者がヤナギ属、後者がサワグルミである。

【まとめ】各項目でややばらつきがあるものの、全体として高い類似性を示す。ただし、７点の柱根には５種類の材（イヌエンジュ・キハダ・クヌギ節・ヤナギ属・ヤマザクラ）が用いられ、利用樹種にはばらつきがある。

SB2（4）

【形状】残存した２点は、共に木取りＢ類、太さは10.0cm、尖度は約0.3である。

【底面】切り残し痕の有無に違いはあるが、両者ともＡⅠｄ類である。

【側面】両者共に、樹皮が残存しており、加工は認められない。

【まとめ】残存数が少ないので検討は困難であるが、共に樹皮付柱根で、すべての項目で高い類似性が認められる。ただし、一方がコナラ節、もう一方がクヌギ節で、利用樹種には、相違が認められる。

柱　穴（5）

本地区では、柱根７点が出土している。なお、SD1右・左岸のものもここで記述を行う。

【形状】木取りはＡ類１点、Ｂ類２点であるが、そのほかに木取りは不明であるが、樹皮付きのものが２点認められる。太さは５が27.5cmと傑出した数値を示すが、そのほかは15cmを下回るものである。尖度は0.38、0.67のものが認められるが、不明のものが多い。なお５の斧の侵入角は位置によって異なり、最も浅い所で約45度、最も深い所で約70度である。

【底面】欠損や摩耗により、明確に観察できるのは５のみで、ＡＩｄ類である。

【側面】欠損や摩耗にもよるが、目立った加工痕は認められない。

【まとめ】本地区の柱根の大半は、欠損や摩耗により不明瞭な部分が多いが、概して、樹皮付きで細めの材が多用される傾向にある。また利用樹種はトネリコ属やハンノキ節など水湿生の材が主体である。

SD19 左岸地区（図面図版243～248、写真図版170～173）

SB36（6～11）

【形状】木取りはすべてＡ類である。太さは20cm弱のものと、30cm弱～40cm弱のものに二分できる。尖度は太さに対応して、前者の尖度は0.2を超えるが、後者の尖度は0.2を下回り、平均約0.13である。

【底面】側面形態はＤ類、加工痕配列はＩ類が主体を占めるが、加工面構成はｂ・ｄ・ｅ類が認められ、ばらつきがある。

【側面】すべてに側面加工Ⅳ類が施され、節部は平坦に仕上げられている。また８には炭化が認められる。

【まとめ】太さにより大小二つのグループに分けることができる。太い材は底面がより平坦に仕上げられており、主軸柱・側柱に用いられる傾向がある。利用樹種はクリ５点（11は同定不能であるが、観察からクリの可能性がある）、コナラ節１点である。なお太い材はすべてクリである。

SB37（12～18）

【形状】木取りはすべてＡ類である。太さは約11～16cmのものと、約20cmのものに二分できる。尖度はすべて0.3前後である。太さにのみばらつきが認められる。

【底面】加工面構成でわずかに相違が認められるが、ＡＩｄ類が主体を占め、比較的高い類似性を示す。

【側面】14・17に側面加工Ⅳ類が認められる以外は、特に目立った加工は認められない。

【礎板・根絡み】P852に伴う９点の根絡みは、長さ10～39cmの芯去りの分割材が大半を占める。利用樹種はクリ、コナラ節、トチノキ、ハンノキ節、マユミ、ヤナギ属と多岐にわたっている。

【まとめ】全体に高い類似性を示すが、太さにのみばらつきがあり、そのばらつきは柱位置に反映し、より細い材（12・13）を張り出し側柱に、より太い材（14・16～18）を主軸柱・側柱に用いている。また、利用樹種はコナラ節５点、クヌギ節１点である。

SB38（19～25）

【形状】木取りはすべてＡ類である。太さは20cm以下のものと20cm以上のものに二分できる。尖度は大半が0.2～0.3であるが、25は斧の侵入角が10～15度で、尖度が1.32となる。

【底面】側面形態はＡ類が主体を占めるが、Ｂ・Ｅ類も認められる。加工痕配列はＩ類が主体を占める。加工面構成はｄ・ｇ類が各２点、ｅ類が３点で、ばらつきが認められる。

【側面】24にはⅠ類の溝が巡り、そのほかは各々の節部に狭い範囲で側面加工Ⅳ類が施される程度である。
【まとめ】各項目でわずかにばらつきがあり、また溝付柱根（24）や尖鋭な下端部を持つもの（25）も存在し、全体的にばらつきがある。その中で、太さのばらつきは柱位置に反映し、最も太い材（23）を張り出し側の主軸柱に、最も細い材（22）を張り出し側柱に用いている。また、利用樹種はコナラ節５点、ヤマグワ・クリが各１点である。

SB40（26・27）

【形状】木取りはＡ類、尖度は0.3前後のものが主体を占めるが、太さにのみばらつきがあり、15cm前後のものと20cm弱のものに二分できる。
【底面】ＡⅠｄ類が主体を占めるが、側面形態Ｂ・Ｅ類、加工面構成ｅ類も認められ、ややばらつきがある。
【側面】側面加工Ⅳ・Ⅵ類が散見できる。なお、27の側面加工Ⅳ類は節の凹凸を残した仕上げである。
【まとめ】各項目でわずかにばらつきが認められ、また樹皮付柱根も存在し、全体にややばらつきがある。また、利用樹種もコナラ節５点、ヤナギ属・マツ属が各１点で、ややばらつきが認められる。

SB43（28～31）

【形状】木取りはＡ類が主体を占める。太さは20cm前後のものが主体を占めるが、約15cm・25cmのものも認められる。尖度は0.3弱のものが２点、約0.4のものが１点認められる。
【底面】ＡⅠｄ類が主体を占める。
【側面】29にＶ類の溝が巡っている以外、特に目立った加工は認められない。
【礎板・根絡み】P2451には根絡み１点が伴う。クリを用いた芯去りの偏ミカン割材である。
【まとめ】底面の各項目では、高い類似性を示すが、そのほかの項目では、それぞれに若干の相違を含み、全体的にばらつきが認められる。また、利用樹種はコナラ節４点、ヤマグワ１点で、比較的均一である。ただし、腐蝕や欠損のため、観察・計測可能な柱根は半数ほどであることを考慮したい。

SB48（32）

【形状】木取りはすべてＡ類である。太さは20cm弱のものと25cm前後のものに二分できる。尖度は0.17～0.46と幅があり、ばらつきが認められる。
【底面】加工痕配列はⅠ類が主体を占める。側面形態はＡ・Ｃ・Ｅ類、加工面構成はｄ・ｅ類で構成され、両者にばらつきが認められる。
【側面】大半のものに側面加工Ⅳ類が認められる。なお、32の底面付近の側面加工Ⅳ類は加工痕の切り合い関係から底面の加工以前に施されたことが分かる。
【まとめ】全体にばらつきがある。利用樹種もヤマグワ３点、コナラ節２点、ハリギリ１点でばらつきがある。太さのばらつきは柱位置に反映し、より太い材を側柱に、より細い材を主軸柱に用いている。

SD1420右岸１・２地区（図面図版249～270、写真図版173～186）

SB4（33～57）

【形状】木取りはＡ類が主体を占める。太さは25cm弱のものと約40～50cmのものに二分できる。尖度は太さに対応して、前者の尖度は0.1を上回るが、後者の尖度は0.1を下回るものが大半を占める。
【底面】側面形態はＤ類５点、Ａ・Ｂ類が各１点である。なお、空洞化やタンニンの付着のため、大半の底面における加工痕の観察は困難である。
【側面】側面加工はⅣ～Ⅵ類が認められる。なお、38・54は、側面を面取り加工したようになっている

が、これは取り上げた後、自重により圧迫して形成された面である。

【礎板・根絡み】母屋柱の全柱穴に礎板55点、根絡み65点が伴う。長さは5.0～93.0cmと幅があり、木取りも様々であるが、それらの大半は芯去り材か、丸木取りの棒材である。利用樹種はトネリコ属（約29％）・クリ（約18％）・アカマツ（約17％）・ヤナギ属（約7％）などが多く用いられている。また、炭化しているものは10点（約8％）、樹皮付材あるいは樹皮は18点（約15％）である。

【まとめ】本SBでは、より太い材を側柱・主軸柱（平均45.7cm）に、より細い材を張り出し側柱（24.5cm）に用いている。また、前者の底面は後者より、平坦に仕上げられている。加えて、礎板・根絡みは前者にのみ伴い、後者には伴わない。以上のように、柱位置に応じた材木法量の選択、あるいは加工方法（柱下端部の形状）の相違が想定される。なお、利用樹種はすべてクリである。

SB5（58～66）

【形状】木取りはすべてA類である。太さは15cm前後のものと20cm前後のものに二分できる。尖度は0.4を超えるものが1点認められるが、0.3前後のものが主体を占める。

【底面】加工痕配列・加工面構成はⅠd類が主体を占めるが、側面形態はA・B・E類が認められ、ばらつきがある。

【側面】大半の節部には側面加工Ⅳ類が施され、平坦に仕上げられている。また、58にⅣ類の溝が巡るが、ほかの溝との形状的な比較や加工状況から、側面加工Ⅳ類の延長で形成された可能性も指摘できる。

【まとめ】太さ・側面形態でばらつきがあるが、そのほかの項目では高い類似性を示す。また、利用樹種はコナラ節8点、単維管束亜属1点である。なお、太さのばらつきは柱位置に反映し、より細い材を張り出し側柱に、より太い材を側柱・主軸柱・張り出し主軸柱に用いている。

SB6（67～74）

【形状】木取りはすべてA類である。太さは20cm前後のものと25～30cmのものに二分できる。尖度は太さに対応し、前者が平均0.27、後者が平均0.18である。なお69・72は側面に平坦面が形成され、やや角材状を呈するが、その形状は上方まで継続しないと考え、木取りA類として扱った。

【底面】側面形態はD類、加工痕配列・加工面構成はⅠd類が主体を占める。

【側面】側面加工はⅠ・Ⅳ～Ⅵ類が認められる。また、69・71・74にはⅡ類の溝が巡っている。

【まとめ】底面の各項目では高い類似性を示すが、そのほかの項目ではばらつきが認められる。また、それぞれに大きな差は認められないが、太さのばらつきはおよそ柱位置に反映し、20cm前後の材を外側の主軸柱・内側の側柱、張り出し側柱に、25～30cmの材を外側の側柱・内側の主軸柱に用いている。加えて、後者の底面は前者よりも平坦に仕上げられている。なお利用樹種はすべてクリである。

SB7（75・76）

【形状】木取りはA～C類、太さは6.3～17.0cm、尖度は0.27～0.42で、各項目にばらつきが認められる。

【底面】AⅠd類が4点である。

【側面】側面加工Ⅳ類が半数に認められる。

【礎板・根絡み】P981に根絡み5点、P985に礎板2点が伴う。根絡みには長さ5～10cm前後のクリの板目板材が多用され、礎板には長さ20cm前後のクヌギ節の丸木材が用いられている。

【まとめ】底面・側面の各項目では、比較的高い類似性を示すが、形状の各項目ではばらつきが認められる。また、利用樹種もクヌギ節3点、クリ・トネリコ属が各1点と、若干のばらつきが認められる。

SB8（77～84）

【形状】木取りはすべてＡ類である。太さは9.0～29.5cmと、かなり幅を持つが、主体は20cm前後である。尖度は0.14～0.28で、顕著ではないが太さに対応し、細い材ほど値が高く、太い材ほど低い。

【底面】側面形態はＡ・Ｄ類に二分できるが、加工痕配列・加工面構成はすべてＩｄ類である。

【側面】大半のものに入念な側面加工Ⅳ類が施されている。また、78にのみ溝が巡る。

【まとめ】尖度や側面形態でばらつきがあるが、全体では比較的高い類似性を示す。利用樹種もクリ７点、クヌギ節２点で比較的均一である。また傑出した太さの82（29.5cm）は内側の主軸柱に用いられるが、そのほかの太さに大きな差は認められない。なお、83は分割状態で出土し、分割面（木裏面）に加工痕らしき窪みが認められるため、一旦分割した材を合わせて柱とした可能性もある。ただし、柱として設置後に、自然に割り裂けた可能性も指摘できる。

SB9（85～92）

【形状】木取りはすべてＡ類である。太さは12.0～18.5cmとやや幅を持つが、主体は12.0～15.0cmである。尖度は大きな差は認められないが、0.1～0.2のものと0.2～0.3のものに二分できる。

【底面】側面形態はＤ類が主体を占めるが、加工痕配列・加工面構成はＩａ・Ｉｃ・Ｉｅ・Ⅱｃ・Ⅲｅ類で、ばらつきが認められる。

【側面】側面加工Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ類が散見できる。

【まとめ】底面の各項目でばらつきがあるが、そのほかの項目では比較的高い類似性を示す。利用樹種もクヌギ節７点、コナラ節１点で比較的均一である。なお太さでは、それぞれに大きな差は認められないが、やや太めの材（87）を外側の主軸柱に用いている。

SB11（93）

【形状】木取りはＡ類が主体を占め、太さはすべて10cm前後、尖度は0.27～0.5で、やや幅を持つ。

【底面】ＡＩｄ類が２点、ＢＩｃ類が１点である。

【側面】93には無数のⅠ・Ⅴ類が認められる。

【まとめ】尖度で、やや幅を持つが、そのほかでは比較的高い類似性を示す。利用樹種もすべてクヌギ節で均一である。

SB14（94～98）

【形状】木取りはＡ類が主体を占める。太さは16～20cmに収まる。尖度は0.2前後のものが主体を占める。なお、94は分割後、両柾目面を加工し、角材状に仕上げられている（木取りＥ類）。

【底面】加工痕配列・加工面構成はＩｄ類が主体を占めるが、側面形態はＡ・Ｄ・Ｅ類で構成され、ばらつきが認められる。

【側面】側面加工はⅣ～Ⅵ類が認められる。94は加工痕の切り合いから「節部の平坦化→両柾目面の調整→底面加工」という加工過程が推定できる。なお、分割作業は「底面加工」以前のいずれかの段階に行われている。また、95の節部には側面加工Ⅳ類により明確な稜線が形成されている。

【礎板・根絡み】P1534には形状の類似する礎板・根絡みが６点伴い、利用樹種はクリ・タラノキ・ヤマグワである。

【まとめ】太さ・幅は近い値を示すものの、分割材（94）の利用も認められ、全体的にばらつきが認められる。なお、柱根の利用樹種はヤマグワ４点、クリ３点、タラノキ１点で、礎板・根絡み（P1534）の利用樹種と一致するため、柱の加工の際に出た端材を、礎板・根絡みに利用した可能性も指摘できる。

SB15（99～111）

【形状】木取りはA・E類に、太さは20cm前後のものと26.0～35.0cmのものにほぼ二分できる。尖度はおよそ太さに対応し、前者の尖度が0.14～0.35で平均0.25、後者が0.13～0.23で平均0.15である。なお、101は分割後、側面を削り、横断面形は隅丸の略正方形状を呈する。

【底面】側面形態はD類が主体を占めるが、加工痕配列・加工面構成はⅠb～d・Ⅱc・Ⅲg類が認められ、ばらつきがある。なお108・109は分割後に底面加工が行われている。

【側面】側面加工はⅣ～Ⅵ類が認められ、特に分割材の柱根において入念に施されている。

【礎板・根絡み】P1546に礎板7点、P1519・1524・1542に根絡み10点が伴う。それらはクリを中心に、アカマツ・トネリコ属・スギ・ノリウツギで構成される。また、104は矢板状を呈する。

【まとめ】全体にばらつきがあるが、その中で木取り・太さのばらつきは柱位置にほぼ反映し、太さ30cmを超える材（103・111）を主軸柱に、木取りE類の材（108・109）を張り出し側柱に用いている。利用樹種はクリ6点、ヤマグワ2点、トネリコ属1点である。

SB18（112～119）

【形状】木取りはA類が主体を占める。太さは8.5～21.0cmで幅を持つが、15cm以上のものが主体を占める。尖度は0.17～0.45で、顕著ではないが、太いものほど値は低く（平坦）、細いものほど高い（尖鋭）。

【底面】加工痕配列・加工面構成はⅠd類が主体を占めるが、側面形態はA・D・E類で構成される。

【側面】113には幅広のⅠ類の溝が巡っている。また、116には側面加工Ⅶ類が認められる。

【礎板・根絡み】P1558・1572・1578・1580に根絡み6点、礎板か根絡みか不明のもの1点が伴う。ミカン割材、半割材、丸木材が用いられ、ヤマグワを中心に、アカマツ・ニワトコ・コナラ節で構成される。

【まとめ】樹皮付柱根（112）、溝付柱根（113）も存在し、全体にややばらつきがあり、利用樹種もクリが3点、コナラ節・クヌギ節・ヤマグワが各1点でばらつきがある。なお太さのばらつきは柱位置に反映し、より太い材を主軸柱・側柱に、より細い材を張り出し側柱に用いており、さらに前者の底面は後者より平坦に仕上げられている。

SB19（120～122）

【形状】木取りはA類、尖度は0.3前後のものが主体を占める。太さは13.0～15.5cmに収まる。

【底面】半数は欠損により観察不能であるが、AⅠd・BⅠc・BⅠd類が各1点である。

【側面】120にはV類の溝が巡っている。121には広い範囲で側面加工Ⅳ類が認められる。

【まとめ】形状の各項目では比較的高い類似性を示すが、そのほかの項目ではばらつきがある。利用樹種はコナラ節5点、クリ1点である。なお、観察・計測可能な柱根が半数ほどであることを考慮したい。

SB20（123～129）

【形状】木取りはすべてA類である。太さは10.5cmから19.0cmまで約1cmの間隔で分布する。尖度は0.13～0.86で、かなりの幅を持つ。

【底面】側面形態はA類、加工痕配列はⅠ類、加工面構成はd類が主体を占めるが、側面形態D類、加工痕配列Ⅱ・Ⅲ類、加工面構成はa・c類も認められ、全体にばらつきがみられる。

【側面】側面加工はⅠ・Ⅳ～Ⅵ類が認められる。124にはV類の溝が巡るが、ほかの溝と比較して、浅く、狭いものである。127・128には炭化範囲が認められる。129は先細りの下端部を作出することを考慮しつつ、底部付近の節部に側面加工Ⅳ類を施したようである。

【まとめ】下端部の尖鋭なもの（129）も存在し、全体的にばらつきがある。利用樹種はクリとクヌギ節が

各４点である。なお、太さのばらつきはほぼ柱位置に反映し、より太い材を外側の側柱に、より細い材を張り出し側柱に用いる傾向がある。

SB28（130・131）

【形状】木取りはＡ類が主体を占めつつも、Ｂ・Ｅ類も認められる。太さは10cm台前半のものと20cm弱のものが認められる。尖度は0.18～0.31に大半が収まる。なお、130は底面から約30cm上方の抉り部分を斧の入れ始めとしたため、尖度は1.66となっている。

【底面】側面形態はＡ・Ｅ類、加工痕配列はⅠ・Ⅳ類、加工面構成はｃ～ｄ類で構成され、ばらつきがある。なお、130の底面は木表側と木裏側の二方向から加工が施されている。

【側面】側面加工はⅣ～Ⅵ類が認められる。また130の溝状の抉り込みは、原木分割後に施されたものである。なお、抉り込みの深い方の下半部側面は分割作業のみで形成されたと考える。一方、抉り込みの浅い方の側面には、上下方向の粗い加工痕が認められ、湾曲しながら底面に向かってすぼまっている。131は、底面から上方18cm程の位置より下に向かって斜めに抉り込まれ、それより下位が剥離しており、その剥離面上には一部、上に向かう加工痕も認められる。なお底面の加工と側面の剥離の前後関係は不明である。130・131は、その下端部の形状によって柱としての機能が増すとは考えられないので、本来、別の目的で施された加工を残したまま、柱として利用された可能性も指摘できる。

【まとめ】特異な側面加工を有するもの（130・131）も存在し、全体的にばらつきがある。ただし、利用樹種はクリ６点、コナラ節１点でほぼ均一である。なお、太さのばらつきは、柱位置に反映し、より太い材を側柱・主軸柱に、より細い材を張り出し側柱に用いている。

SB29（132～135）

【形状】木取りはＢ類も認められるが、Ａ類が主体を占める。太さは11～14cmのものと20cm弱のものが認められる。尖度は0.15～0.34で、顕著ではないが太さと対応し、前者の値は高く、後者の値は低い。

【底面】加工痕配列はⅠ類が主体を占めるが、側面形態はＡ・Ｄ・Ｅ類、加工面構成はｄ・ｅ類で構成され、ばらつきが認められる。

【側面】側面加工はⅣ・Ⅴ類が散見できる。

【礎板・根絡み】P1937・1939に各１点根絡みが伴う。２点ともクリで、半割材とミカン割材である。

【まとめ】各項目でばらつきが認められるが、利用樹種はすべてクリで均一である。なお、太さのばらつきは柱位置に反映しており、より太い材を主軸柱に、より細い材を側柱・張り出し側柱に用いている。また、前者の底面は後者よりも平坦に仕上げられている。

SB30（136～142）

【形状】木取りはＡ類が主体であるが、Ｅ類も１点認められる（138）。太さは20～26cmに収まる。尖度は、0.4のものが１点認められるが、大半は0.1～0.2に収まる。

【底面】側面形態はＡ・Ｄ類で二分できる。加工痕配列はⅠ類が主体であるが、Ⅱ・Ⅲ類も認められる。加工面構成はｂ～ｅ類で構成される。

【側面】136・138・139・141にはⅠ類の溝が巡っている。その中で、138は分割後に溝の作出・底面加工が行われている。ただし、溝の作出と底面加工との前後関係は不明である。139は溝の作出後、側面加工Ⅵ類が施されている。逆に、141では側面加工Ⅳ類が施された後で、溝が作出されている。また、137は節部から継続する側面加工Ⅳ～Ⅵ類の後で、底面加工が施されている。

【まとめ】分割材や溝付柱根も存在し、全体的にばらつきがある。ただし、利用樹種はすべてクリで均一

である。なお、木取り・太さのばらつきは柱位置に反映し、分割材を張り出し側柱に、より太い材を主軸柱に用いている。

SB31（143～149）

【形状】木取りはすべてA類である。太さは20cm台前半のものと後半のものに二分できる。尖度は、大きな差は認められないが、約0.1のものと0.2前後のものに二分できる。

【底面】加工痕配列はすべてⅠ類であるが、側面形態はA・B・D・E類、加工面構成はb～e類で構成され、ばらつきが認められる。

【側面】144の溝は、ほぼ相対する位置を抉り込まず、2か所で途切れている。146・148にはⅠ類の溝が巡るが、その深さに差が認められ、前者は0.8cm、後者は2.4cmを測る。また、144の節部には、側面加工Ⅶ類が認められるが、窪みの中、あるいは周囲に加工痕は確認できない。

【まとめ】溝付柱根も存在し、全体的に、ややばらつきがある。利用樹種はクリ5点、コナラ節2点である。なお、太さのばらつきは柱位置に反映し、より太い材を側柱・主軸柱に、より細い材を張り出し側柱に用いている。

SB32（150～158）

【形状】木取りはすべてA類である。太さは20cm前後のものと25～27cmのものに二分できる。尖度は、大きな差は認められないが、0.21～0.27のものと約0.34のものに二分できる。なお、150・157の底面付近の木取りはE類であるが、その形状は上部に継続しないため、両者の木取りはA類とした。

【底面】側面形態はA・B・D・E類、加工痕配列はⅠ～Ⅲ類、加工面構成はa・c・d・e類で構成され、ばらつきが認められる。なお、150の底面には、樹芯を起点にして放射状に幅約1cmの枝が認められた。人為的に柱穴底面に敷かれた可能性も否定できないが、判断は難しい。

【側面】およそ半数のものに側面加工Ⅳ～Ⅵ類が認められる。その中で、150・157は底面付近の側面加工Ⅴ類により、150の横断面は方形状を呈し、157は底面に向かって若干すぼまる。また、152・153・157にはⅤ類の溝が巡るが、153の溝はほとんど深さのないものである。

【礎板・根絡み】P1964には、礎板1点、根絡み2点が伴う。丸木材や板状の分割材を用いている。また利用樹種はハンノキ節・クリ・ヤナギ属である。

【まとめ】全体的にばらつきがある。利用樹種もコナラ節6点、クヌギ節2点、アカマツ1点で若干ばらつきがある。なお、太さのばらつきは柱位置に反映し、より太い材を側柱・張り出し主軸柱に、より細い材を主軸柱・張り出し側柱に用いている。

SB33（159・160）

【形状】木取りはA・B類が2点ずつ認められ、太さは11.0～23.0cmで、約4cm間隔に分布する。尖度は0.29のものも1点認められるが、そのほかはすべて1.0以上の値を示す。

【底面】加工痕配列・加工面構成はすべてⅠd類であるが、側面形態はA・B・E類で構成され、ばらつきがある。160の側面の削り込みは先端部にまで及んでいる。なお尖度1.0以上のものは、側面の削り込みを、底面を構成する1つの加工面と考えたためである。

【側面】側面加工はⅣ～Ⅵ類が認められる。159などの削り込みは下端部に向かって施されている。この削り込みは側面加工Ⅳ類から派生したわけではなく、単に尖度を高めるための加工と考える。

【まとめ】各項目で若干ばらつきが認められるが、4点中3点の下端部を尖鋭に仕上げており、その点では高い類似性を示す。なお、下端部が尖鋭なものはすべてクリ、そのほかのもう1点はコナラ節である。

SB34（161）

【形状】木取りはＢ類も認められるが、Ａ類が主体を占める。太さはおよそ10～14cmに収まる。尖度は0.3前後のものが主体を占める。

【底面】ＡⅠｄ類が半数を占め、ＡⅠｅ類が１点、不明が２点である。

【側面】側面加工はⅣ～Ⅵ類が散見できる。

【まとめ】各項目で比較的高い類似性を示す。利用樹種はクヌギ節が４点、ヤマグワが２点である。

SB35（162～164）

【形状】木取りはＡ類１点、Ｅ類２点である。太さは15～19cmに収まる。尖度は0.27～0.6で幅を持つ。

【底面】ＢⅢｄ・ＢⅢｆ・ＤⅠｄ類が各１点である。なお、163・164の底面は分割後に加工されている。

【側面】163・164は、ほぼ分割作業によってのみ形成されている。

【まとめ】観察・計測可能な柱根が少なく、全体の検討は困難であるが、分割材（163・164）を、主軸を挟んで相対する位置の側柱に用いており、木取りのばらつきは柱位置に反映している可能性もある。なお、利用樹種はすべてクリである。

SB49（165・166）

【形状】木取りはＥ類も認められるが、Ａ類が主体を占める。太さは15cm前後のものと約20～25cmのものに二分できる。尖度は0.18～0.55と幅を持つが、大半は0.2前後の値を示す。

【底面】側面形態はＡ・Ｃ・Ｄ類、加工痕配列はⅠ～Ⅲ類、加工面構成はｂ～ｄ類で構成され、各項目でばらつきが認められる。なお、166は分割後、底面加工を行っている。

【側面】側面加工はⅣ～Ⅵ類が認められる。また、166は分割により側面に平坦面が作出されているが、このほかにも側面に同様な平坦面を有するものが認められる（P1601・1660の柱根）。

【まとめ】全体的にばらつきが認められる。ただし、利用樹種はすべてクリで均一である。

柱　穴（167～181）

本地区には、柱根71点、礎板１点、根絡み19点、そのほか（不明のもの）６点が出土している。

【形状】木取りは、若干Ａ類が上回るが、Ａ・Ｂ類で全体の約７割を占める。また、Ｃ・Ｅ類はそれぞれ１割強認められる。太さは3.0～22.5cmと幅を持つ。尖度は0.15～0.78と幅を持つが、特に、0.2～0.3、0.4～0.5にピークがみられる。なお、174は出土状況から柱根と判断したが、削出棒材（木取りＧ類）で、側面には約5cmごとに段が作出されており、何らかの成品の一部である可能性も指摘できる。

【底面】側面形態はＡ類が半数以上を占め、次いでＢ・Ｅ類となる。加工痕配列・加工面構成はⅠｄ類のものが最も多い。

【側面】側面加工はⅣ～Ⅵ類が約15％のものに認められる。

【礎板・根絡み】長さ15～25cmの芯去りの分割材が多く用いられている。利用樹種はクリが約４割、次いでトネリコ属とクヌギ節が同数で合わせて約４割である。また、168～171は溝付きの原木を分割し、板状あるいは角材状に仕上げたものである。175はＹ字材を用いた根絡みである。

【まとめ】本地区の柱根は、利用樹種を含めた各項目において全体の傾向から大きく逸脱するものではないが、木取りＡ類以外のもの（分割材）や樹皮の残存するものの割合がやや高めである。

SD1420右岸３地区（図面図版271～274、写真図版186・187）

SB21（182～187）

【形状】木取りはA類が主体を占めるものの、B・C類も認められる。太さは11.0～15.0cmを測る。尖度は0.2～0.4のものと0.6前後のものが認められる。なお、木取りC類（半割材）の182と183は同一原木から得られた柱である（184）。

【底面】側面形態はA類が主体を占めるものの、B～D類も認められる。加工痕配列・加工面構成は、Ⅰd類が主体を占めるが、Ⅱc類も認められる。各項目に若干ばらつきが認められるが、比較的高い類似性を示す。なお、185の上端部は平坦であるが、明確な加工は確認できず、人為か否かの判断は難しい。

【側面】側面加工はⅣ～Ⅵ類が認められる。また、183の木表側には斧の入り始めから上方へ向かって、側面加工Ⅴ・Ⅵ類が認められる。なお、182・183とP1720の柱根は、分割によってのみ形成されている。

【まとめ】木取りA・B類（丸木材）とC類（半割材）が合わせて用いられるなど、全体にばらつきがある。ただし、利用樹種はクヌギ節が８点、クリ・ハンノキ節が各１点で、ほぼ均一である。なお、182と183が接合したことで、同一SB内で、柱穴を別にする柱が同じ原木から得られたことが確認できた。

SB22（188～195）

【形状】木取りはA類、尖度は0.2～0.3のものが主体を占めるが、太さは20cm前後のものと20cm台後半のものに二分できる。

【底面】側面形態はA・B類が各３点で、C・D類も各１点認められる。加工痕配列はⅡ類も認められるが、Ⅰ類が主体を占める。加工面構成はc・e類も認められるが、d類が主体を占める。

【側面】195以外に側面加工Ⅳ～Ⅵ類が施される。また194・195にⅠ類、192にⅤ類の溝が巡る。

【まとめ】溝付柱根も認められ、全体的にややばらつきがある。一方で、大半のものに共通して丁寧な側面加工が施される。利用樹種もすべてクリで均一である。なお太さのばらつきは柱位置に反映し、より太い材を主軸柱に用いている。

SB23（196～199）

【形状】木取りはすべてA類である。太さはすべて15cm前後である。尖度は0.24～0.34の範囲に収まる。なお198の底面付近は側面加工Ⅴ・Ⅵ類によって横断面がやや方形を呈するが、全体に及ばないので、木取りA類とした。

【底面】側面形態・加工痕配列はAⅠ・EⅠ類で二分し、加工面構成はc・e類が認められるが、d類が主体を占める。なお196の切り残し痕が２か所に分かれるが、これは伐採・分断後、切り残しを一部除去したためである。

【側面】側面加工は、Ⅳ～Ⅶ類が認められる。ただし、199の側面加工Ⅶ類は、人為か否かの判断は難しい。

【まとめ】形状の各項目は比較的高い類似性を示すが、底面ではばらつきがある。利用樹種もクヌギ節３点、クリ２点、コナラ節１点で、ばらつきが認められる。

SD1420左岸地区（図面図版275～279、写真図版187・188）

SB24（200～207）

【形状】木取りはすべてA類である。太さは10.4～21.6cmで、やや幅を持つが、20cm前後のものが主体を占める。尖度は0.2～0.3のものと、0.4～0.5のものに二分できる。尖度ではばらつきが認められ

るものの、木取り・太さでは比較的高い類似性を示す。

【底面】側面形態はＢ・Ｃ類も認められるが、Ａ類が主体を占める。加工痕配列はⅠ・Ⅲ類でちょうど二分できる。加工面構成はｃ・ｅ類も認められるが、ｄ類が主体を占める。

【側面】側面加工Ⅳ・Ⅵ類が散見できる。207の側面には側面加工Ⅵ類による平坦面が形成されている。

【まとめ】底面の各項目ではばらつきが認められるが、形状では比較的高い類似性を示す。利用樹種もクリ７点、クヌギ節１点でほぼ均一である。なお、太さのわずかなばらつきは柱位置に反映しており、最も細い材を張り出し側柱に、より太い材を側柱・主軸柱に用いている。

SB25（208～213）

【形状】木取りはすべてＢ類、太さはすべて10cm前後である。尖度は0.29～0.61と、やや幅を持つ。

【底面】側面形態・加工痕配列は、ＥⅠ類も認められるが、ＡⅠ類が主体を占める。加工痕配列はｄ類が最も多いが、ａ・ｃ・ｅ類も認められる。

【側面】すべてに樹皮が残存しており、一部に側面加工Ⅳ類が認められるのみである。

【まとめ】尖度・加工面構成にばらつきがあるが、全体では高い類似性を示す。利用樹種もすべてクヌギ節で均一である。

SB26（214～230）

【形状】木取りはＡ類が主体を占めるが、Ｃ・Ｅ類も認められる。太さは、大きな差は認められないが、20～22cmのものと、25～28cmのものに二分できる。尖度は0.14～0.32とやや幅が認められる。

【底面】側面形態・加工痕配列はＤⅠ類も認められるが、ＡⅠ類が主体を占める。加工面構成はｂ～ｅ類が認められる。

【側面】側面加工Ⅳ～Ⅵ類が認められる。215は加工痕の切り合いから「原木→溝の作出→分割→（炭化）→柱への利用」という加工過程を復元できる。220は分割して出土したため、分割したものを合わせて用いた可能性もあるが、自然に割り裂けた可能性も考えられる。224は側面の削り・剥ぎ取り加工によって、底面に向かってややすぼまり気味である。

【礎板・根絡み】P2060・2089・2374には、それぞれ根絡みが９・２・３点伴い、長さ10～30cmのクリの分割材が主体をなす。また長さ60.0cmの板目板材（アカマツ）がP2060の根絡みに認められる。

【まとめ】丸木材と分割材が合わせて用いられるなど各項目でばらつきが認められる。一方で、利用樹種はすべてクリで均一である。なお、木取りのばらつきは柱位置に反映しており、丸木材を側柱・主軸柱に用い、分割材（214・215）を張り出し側柱に用いている。

SB46（231・232）

【形状】木取りはＡ・Ｂ類で二分できる。太さはすべて10cm前後である。尖度は2.0を超えるものも認められるが、およそ0.3～0.5の範囲に収まる。なお、232の下端部は相対する２方向から削り込まれている。

【底面】ＡⅡｃ類も認められるが、ＡⅠｄ類が主体を占める。

【側面】232の底面加工を側面加工と考えると、下端部に向かう側面加工Ⅴ･Ⅵ類である。

【まとめ】太さや底面では比較的高い類似性を示すが、木取りがＡ・Ｂ類に二分したり、特異な形状のもの（232）が存在したり、ばらつきも認められる。利用樹種もトネリコ属２点、クリ・ハンノキ節・ミズキ・ヤマグワ各１点で、均一ではない。

SB55（233・234）

【形状】木取りはA・C・E類が各１点である。太さは13.0～18.5cmと、やや幅を持つ。尖度も0.24～0.39と、やや幅を持つ。

【底面】AⅡc類が２点である。なお、234の底面加工は一部、分割面からなされている。

【側面】Ⅴ～Ⅶ類が認められる。なお、234には側面加工Ⅶ類が認められる。

【まとめ】底面の各項目では比較的類似した傾向を示すが、木取りがすべて異なるなど、そのほかの項目ではばらつきが認められる。なお、利用樹種はクリ２点、クヌギ節１点である。

SB56（235）

【形状】木取りはA類が主体を占める。太さは8cm前後のものと、17.0cmのものが認められる。尖度は0.33のものと1.35のものが認められる。

【底面】AⅠc・CⅡb類が各１点である。

【側面】側面における加工は確認できない。

【まとめ】残存数が少ないので、判断が難しいが、全体的にばらつきが認められる。また、利用樹種もコナラ節・トネリコ属・ヤマグワが各１点で、ばらつきが認められる。

柱　穴（236～238）

本地区では、柱根15点が出土している。

【形状】木取りはA・B・D類がほぼ同数認められ、E類も散見できる。太さは15～17cmのものも認められるが、５～10cmのものが大半を占める。尖度は、およそ0.1から0.7の範囲に、約0.1間隔で分布が認められる。なお、236の下部が丸味を帯びるのは原木の根・節により分割面が湾曲したためである。

【底面】側面形態はA類が３点、B類が２点、C～D類が各１点である。加工痕配列はⅠ類が主体を占める。加工面構成はc～e（・f？）類が認められ、バラエティーに富んでいる。なお、236は両柾目面が下端部に向かって収束するため、底面（木口面）が認められない。

【側面】側面加工はⅣ類が散見できる。なお、236はほぼ分割作業のみで形成されており、木表側には節や根の凹凸が残っている。238は枝を除去しているが、その根元は残したままで、平坦には仕上げていない。

【まとめ】本地区の柱根は、全体的にやや細めである。また、各項目において数量的に主体を占めるものは少なく、それぞれの柱根はバラエティーに富む。利用樹種も数量的に特に主体を占めるものは認められないが、その中でトネリコ属が最も多い。なお、236は一般的な柱根とはかなり形状を異にしており、丸木舟に近接して出土したことから、艫綱杭（舟を繋ぎ止めておくための杭）の可能性も指摘できる。

C　成品・部材と加工材・加工材片（図面図版280～290、写真図版189～195）

ここでは先述した柱根・礎板・根絡み以外の木製品の記述を行う。記述の順序としては、まず全体的な出土数・分布状況を把握し、その後で、『木器集成』などを参考に、用途・機能を考慮に入れ、分類（器種）ごとに記述を行う。また、成品・部材の中には「限定された機能をもつと推定できる入念で複雑な加工を施した」木製品で、「何に使ったのかわからない」［奈良国立文化財研究所1993］用途不明品も含まれる。これを便宜上、その形状の特徴から○○状木製品などと呼称している。また、樹皮製品は本項で扱うこととし、漆塗り弓は「本章７漆製品・漆要具」において記述を行う。なお、以下の記述において、器種によって計測位置や各部位名称が様々である。第116図を参照されたい。

1）出土・分布状況

木製品は総点数1,182点である。この内、ここで扱う成品・部材、加工材・加工材片は全体の約４割に当たる463点である。さらに、その中の７割弱が加工材・加工材片である。それらは、主にSD1420やその斜面の堅果類廃棄範囲（SX）から出土している。一方、成品・部材は全体の１割弱を占めるに過ぎないが、加工材・加工材片同様、SD1420内やその斜面を中心に出土している。また樺皮はSXから集中的に出土しており、特にSX1689からの出土数は傑出している（第130図）。

2）各　　説

丸木舟（239）　本丸木舟は長軸上の一端を欠いているが、ほぼ全形の分かるもので、いわゆる鰹節形の平面形を呈し、側面観で舟体中央部をほぼ平坦（水平）に保ち、両舟端に向かって緩やかに立ち上がる（以下、舳先あるいは艫の形状の残る側を舟端側、欠損している側を欠損側とし、仮に舟端側を舳先として、左舷側、右舷側とする）。ただし、舟底を下に向け、欠損側を高くしていたため、舟底ほど遺存状態は良好で、内面は欠損側ほど腐蝕が進んでいる。また、左舷側の中央付近が抉れているが、これは調査時の欠損である。

現存長は547.4cmを測る。舟端側は端部から約230cmの位置より緩やかに立ち上がる。欠損側も同様に立ち上がって端部へ至ると考えると、欠損側はあと100cmほど延び、本来の全長は約650cmに達すると想定できる。最大幅は中央部で約75cmを測り、両舟端へ向かって緩やかに幅を狭める。ただし、欠損側は舟端側に比べ、やや直線的に細くなる。深さの最大もほぼ中央部にもとめられ、約14.5cmを測る。舟底の厚さは中央部やや舟端側よりで、約6cmを測る。深さも厚さも欠損側に向かってその値を徐々に減じるが、これは腐蝕の影響によるものと考える。

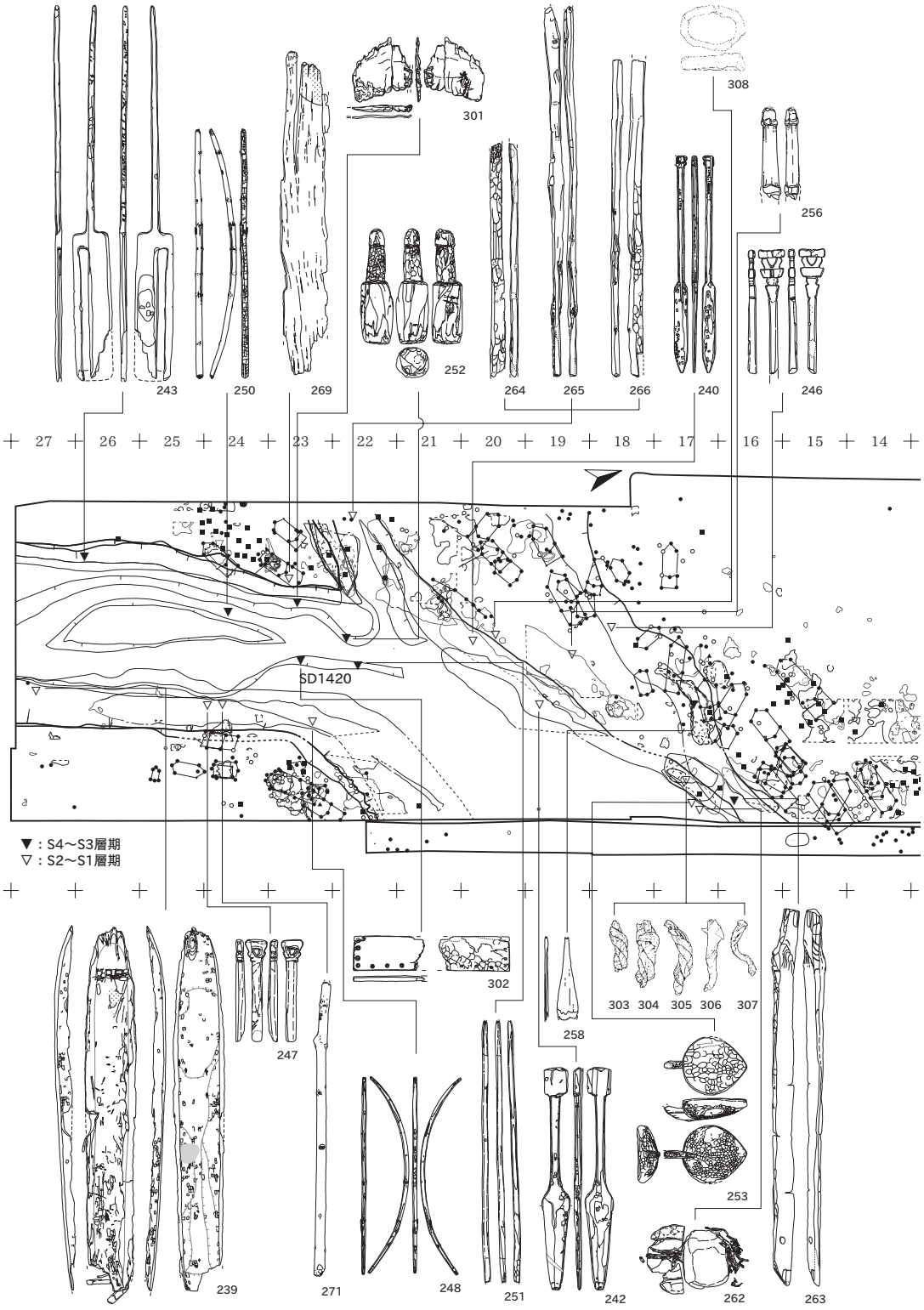
舟体内部は弧状に抉られ、両舷側と床面の境は不明瞭である。一方、舟体外部の両舷側と舟底はほぼ平坦に削り出され、両者の境には明確な稜線が形成される。なお、舟底の中央から欠損側にかけての中軸線上がわずかに張り出すため、横断面形は若干山形を呈する。舟体に前後の区別があった可能性も想定し得る。

また舟体内部には、舟端側の端部から約70cmの位置に、抉り込まれた範囲とそうではない範囲を区画するように、幅約10cmの突帯が長軸方向に直行して認められる（以下、横帯）。この横帯上には、10×10cm程の低い立方体が約5cmの間隔を空けて、３か所に配置されている。それらの上面は現況で欠損・摩滅しているため、本来はさらに凹凸が明瞭であったと考える。舟底からの厚さは、現況で約12cmである。

舟体の表面には様々な痕跡が認められる。加工痕の大半は浅く、幅4cm程で長軸方向に施されているが、内面は腐蝕や当時の使用のためか、観察が困難である。加工痕以外では、数か所の炭化範囲や、舟底の中央よりやや欠損側に周囲よりも摩耗した範囲がある。摩耗範囲は、浅瀬を航行の際、舟底と河底が接触して形成されたものであろうか。また、舟体の内外には直径約1.5cmの細長い穴が数か所に認められる[1)]。

本丸木舟の欠損側の横断面において、舟体の横断面形にほぼ沿う年輪の流れが観察できた。同時に、舟底の舟端側に同心（楕）円状の年輪の流れが観察でき、舟体内側中央部の表面に木目が観察できないことから、本丸木舟は樹芯を含む原木の樹芯付近を利用し、ほぼ年輪に沿って内部は抉られたようである（第131図）。ただし、舟底の舟端側の年輪を樹芯付近の年輪とし、欠損側の年輪との放射距離を考慮すると、

1）赤羽正春氏（現 朝日村立小川小学校教頭）のご教示によれば、穴はフナムシに食われた痕の可能性があり、そうであれば、海洋での使用の証拠となり得るそうである。

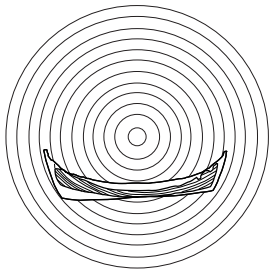


第130図　木製品の分布状況（図の縮尺は不同、遺跡平面略図は1/1000）

欠損側の年輪は想定される木目よりも直線的である。年輪の流れを見誤った可能性もあるが、「拡幅作業[2)]」が行われた結果、両舟端付近を除く舟体の年輪が大きく開いた（歪んだ）可能性もある。

2）石川県チカモリ遺跡の報告［南ほか1983］において、向 一陽氏がアマゾンで目撃した丸木舟の拡幅作業の様子を描いた文章［向1978］が引用されている。それによれば、丸木舟は内部を刳り抜いたあと、内部に突っ張り棒をはめ、2時間ほど火で焙ることで、舷側先端同士の幅が約30cmから約85cmに拡がった、となっている。

また、舟底に接して、舟端側に１点、欠損側に６点の材が長軸方向に直行するように認められた。それらは長さ40～60cm、幅（径）10～15cmを測り、６点は丸木材であるが、欠損側の１点は板状分割材である。出土状況から、人為的に丸木舟の舟底に敷かれた可能性はあるが、判断は難しい。



（外側の断面図は舟体中央部付近、内側の断面図は欠損側のものである。）

第131図　丸木舟の木取り

櫂・櫂状木製品（240～245）　240は柄頭の一部が欠損したほぼ完形の櫂である。欠損により全形は明らかでないが、柄頭部は側面を山形に削り残し、装飾的に仕上げられている。柄の断面形は四隅を落とした略方形を呈し、水かき部との境に至るまで大きな変化はない。水かき部の中軸線上には突線が削り出されており、この突線を挟むように両肩の縁に１本ずつ突線が削り出されている。水かき部は肩から先端に向かって一定の身幅、身厚を保つが、先端から約13cmの位置よりすぼまり始め、尖鋭な先端を呈する。以上のような柄頭の形状と水かき部の突線は東日本における縄文時代後・晩期の櫂の特徴である［奈良国立文化財研究所1993］が、尖鋭な水かき部はほかに類のない特徴である。スギ製である。241は櫂の水かき部である。付け根部分の欠損のため明確ではないが、欠損部側で山形の断面形は先端に向かって徐々に扁平な隅丸の長方形となる。また、中央部付近の片面は若干窪んでいる。加えて、片肩部の木裏側には縁に沿って、幅1.5～2cm、長さ約15cmの溝が作出されている。平面形は全体的に緩やかなカーブを描き、先端に向かって収束している。スギ製である。242は完形の櫂である。柄頭は平面略正方形の板状で、柄頭長は柄長の約1/4を占める。柄の断面形は隅丸方形で、水かき部に向かって徐々に径を大きくし、柄部から水かき部へは比較的スムーズに移行する。水かき部は、柄部との境から先端に向かって約12cmの位置で最大幅を測る。ここから先端に向かって、直線的に幅を減じ、先端はやや角をもって収まる。また、身厚も先端に向かって徐々にその値を減じ、断面形は最大幅の位置では顕著な山形であるが、先端に向かって徐々に扁平な長方形へ移行する。なお、本木製品に施された加工は全体的にやや粗いため、未成品の可能性も指摘できる。ただし、現状に整形加工を施したとしても、法量は大きく変化しないと考える。クリ製である。243は水かき部に透かしを有する櫂である。水かき部は一部欠損しているが、水かき部先端の観察から、現存長と本来の全長に大きな差はないものと考える。柄の断面形はやや丸味を帯びた方形を呈し、水かき部に近づくにつれ、厚さに変化はないが、幅を5cm程に増し、楕円形を呈する。端部は柄頭を備えず、丸く収めている。なお、柄部全体にわたって、幅3cm程度の加工痕が認められる。水かき部は平面隅丸長方形で、断面形は頂点をほぼ中軸線上におく緩い山形を呈する。そして、中軸線を境に左右に二分された片側に平面隅丸長方形の透かしを設けている。透かしがある側の身厚は、ない側と比較して極端に薄いつくりとなっている。なお、透かしがない側の木裏側の水かき中央部には、周囲よりも摩耗している範囲がある。クリ製である。244は全体的に粗い加工が施されているので、櫂の未成品と考える。柄部から水かき部へは、一方の側面では緩やかな肩部を作り出し、もう一方の側面では直線的に移行し、左右対称形ではない。水かき部中央には横長の孔が認められるが、明瞭な加工痕が認められず、人為か否かの判断は難しい。木取りは柾目取りである。クリ製である。245はややなで肩を呈する水かき部と考える。両端が欠損し、片面が剥離しているため全形はもとより幅・厚さも不明である。クリ製である。

飾り把手付木製品（246・247）　246・247は細かい彫刻の施された柄頭（把手）部を持つ柄部と考える。欠損部から先の形状は判断できないが、櫂の柄部である可能性も指摘できる。なお、両者とも木目に

直行する刻みを境界線として、上端から１段目、２段目…というように記述を行う。246の１段目は平面横長の立方体である。摩耗のため不明瞭であるが、上端部の左右両端は若干突出しており、緩く湾曲している。２段目は、張り出し部が上方に偏った算盤玉形を呈する。逆三角形の透かしは１段目に接して穿たれている。３段目は１段目とほぼ同じ規模を測り、逆台形を呈する。中軸線上に縦長の突出部を削り出している。４段目は平面やや膨らみ気味の算盤玉形を呈する。中軸線上には緩い張り出しが認められる。５段目は４段目との境から両側面に刻み込まれた溝状の抉りまでを逆三角形状に削り出し、その後、柄部へスムーズに移行する。柄部は断面隅丸の略正方形で、徐々に太さを増す。ケンポナシ属製である。247の１段目は平面逆三角形を呈し、逆三角形状の透かしは２段目寄りに穿たれている。透かしの周囲には放射状に横長の加工痕が認められる。側面には、２段目寄りの位置に削り込まれた山形の突出部が認められる。１段目と２段目、２段目と３段目を区画する刻みは側面では明瞭であるが、正・裏面では不明瞭である。柄部の断面形は略円形である。ケヤキ製である。

弓・弓状木製品（248～250）　248は完形の弓である。弓背には細かい削りにより幅2cm程の平坦面が形成されており[3)]、両方の弭はこの面取り加工の後で作出されている。なお、末弭（うら）・本弭（もと）の判断ができないので、実測図の上下に従い、上端の弭・下端の弭として記述を行う。上端の弭は端から3cm程の位置に刻みを一周させた後で刻みを境に弓幹側を削り、端部側をわずかに高く削り残し、弭としている。下端の弭も刻みの位置が端から5.5cm程の位置である以外は、上端の弭と同じつくりである。弓幹表面には全体的に削り加工が施され、丁寧な仕上げとなっている。なお、下端から36cm程の位置で折れている。249は弓背に幅約2.5cmの平坦面が作出されているが、弓幹全体には及ばない。また樹皮が残存しており、先端部には削り込みも刻みも認められない。250は弓背に弓幹全体に及ぶ幅約3cm平坦面が作出されている。両端部には、周囲からの樹芯に向かう削り込みが認められるが、刻みは認められない。また、弓幹は枝が除去されている以外、削りなどは認められない。３点ともイヌガヤ製である。なお、249・250は弭が削り出されていないため未成品の可能性も指摘できるが、特に250は中央部の「折れ」が当時の使用による破損であれば、弓以外の利用を目的とした木製品という可能性も指摘できる。

掘り棒状木製品（251）　直線的な丸木材である。全体的に顕著な加工痕は認められないが、下端は端から12cm程までの範囲を断面形が扁平になるように仕上げてある。上端は、端に向かって徐々に細くなるが、顕著な加工は認められない。カマツカ製である。

横　槌（252）　ほぼ完形の横槌である。敲打部は樹皮を剥ぎ、枝を落とす程度で、原木の形をほぼそのまま利用している。断面は略円形である。最大径は中央付近にあり、やや中膨らみな敲打部である。側面と頂部の境、あるいは頂部が最も摩滅・損傷しており、側面に目立った凹み・摩滅などは認められない。柄部は敲打部からほぼ直角に削り出され、断面略円形の棒状に整形されている。端から4cm程の位置に刻みを一周させ、ここを境に端までを若干太目に削り残し、柄頭としている。なお、柄頭部を除く柄部には幅５～10mmの敲打部に向かう加工痕が無数に認められる。マツ属製である。

把手付容器（253）　把手の付いた浅鉢型の刳物容器の未成品である。容器部と把手部の一部が欠損しているが、ほぼ全形を把握できるものである。容器部は平面観で水滴形を呈し、長軸方向に把手が付き、その向かい側の先端部は注ぎ口となる部分である。容器部の上面には長軸方向に幅２～3cmの加工痕が残され、ほぼ水平な面が形成されている。容器部の側面と底面は、把手部の付け根上端部の高さに巡る稜

3）弓幹の面取りは同時期の事例にもみられるが、大抵は滋賀県滋賀里遺跡例のように［湖西線関係遺跡調査団1973］、面取り後、その中軸線上に溝（樋）が切られている。

線で区分されている。底面は、把手部の付け根下端部付近を頂点として、全体に丸味を帯びたつくりとなっている。把手部は付け根において最大厚を測り、先端に向かって徐々に厚さを減じながら、上方に向かって湾曲する。把手部の下側の面は容器部底面とスムーズに連結している。なお、上面を水平にした状態が正位とすると、把手部の一部が接地するのみで安定した姿勢ではない。そこで、底面側の接地面積を広げ、安定した姿勢にすると、上面は注ぎ口側に傾斜する。トチノキ製である。

柄頭状木製品（254）　先端が柄頭状に削り出された角材状の木製品である。3つの破片からなっており、木取り・加工状況・材質から同一個体と考えるが、接合は不可能である。柄頭状の部分は、端から3.5cm程の位置で側面から斜めに削り込まれている。柄部状の部分は断面長方形から徐々に正方形へと移行する。側面は長軸方向の削りで、正・裏面は主に分割により形成されている。キハダ製である。

刻み付木製品（255～257）　255は端から5cm程の位置に刻みが巡らされ、そこを境に端部までの範囲が瘤状に削り出されている。なお、2つの破片からなっており、木取り・材質から同一個体と考えるが、接合は不可能である。また、現状では半割状態だが、本来は丸木取りのものであったと考える。ムラサキシキブ属製である。256は断面楕円形の削出棒材で、端から約2cmと約19cmの位置に、木目に直行して幅1.2cm、1.8cmの一周する隆帯が削り出されている。残存部側の端は丸く収められている。アカマツ製である。257は幅約2cmの溝を巡らせた丸木材である。両端が欠損しているが、溝に近いほうの端部は本来の端部とほぼ変わらないものと考える。クリ製である。

杓文字状木製品・箆状木製品（258・259）　258は板目板材を用いた杓文字状の木製品である。幅の狭い方の端部には、不明確ではあるが、径4～5mmの孔が穿たれていたようである。厚さは、全体的に大きくは変わらないが、幅の狭い方の端から6cm程の位置が最も薄くなっており、そこから両端に向かって徐々に厚くなっている。現状から杓文字状木製品としたが、幅の広い方の端部は欠損しており、本来の形状を把握することはできない。スギ製である。259は先端の薄く仕上げられた箆状木製品である。端から7cm程の位置より削り込まれ、箆状の端部を呈する。正・裏両面から削り込まれているが、片側からやや強く削り込まれているため、側面観でやや一方に偏っている。また、薄く仕上げられた範囲の最大幅は端から4cm程の位置にあると予想される。端部は丸く収められている。柄部は断面隅丸方形の角材状を呈する。柄端部は、一部のみであるが、浅く斜めに削り込まれている。クリ製である。

杭状木製品（260）　樹皮の付いた原木を分割し、一方の端を杭状に尖らせた木製品である。先端部の加工は、木表側と木裏側の二方向からなされている。杭状の端部とは反対側の端部には、木目にほぼ直行する平坦面が形成されている。この面に明瞭な加工痕は認められない。ナシ亜科製である。

抉り入り板状木製品（261）　片面の中央部を抉ることで両端が厚く削り残され、もう一方の面は平坦に整形された板状の木製品である。厚く削り残された部分は、両方とも厚さ1cm程である。また、欠損部側の厚く削り残された部分からは、さらに厚さ約7mmの抉り込まれた板状の部分が延長するようである。本木製品は、その形状から縄状のものを引っ掛ける部位を削り出したもののようである。ただし、表面に擦痕などは認められない。樹種は未同定である。

紐で繋がれた木器と石器（262）　262は磨痕のある花崗岩に隣接して出土した。さらに、両者にはそれぞれ紐状の物質が巻き付いていた。そこで、ここでは三者を互いに関連のあるものと考え、262を「木器」、磨痕のある花崗岩を「石器」、紐状の物質を「紐」とする。木器は、上下左右に対称な形態であると予想される。すなわち、端部を弧状に仕上げ、厚く削り残された両端部と、両端部より一段低く仕上げられた平面算盤玉形の中央部からなる。中央部には推定2.9cm×3.5cm程のやや横長の孔が、両面から穿

たれている。段差のある正面・側面とは対照的に、裏面は平坦に仕上げられている。ムクロジ製である。石器は長さ10.3cm、幅不明、厚さ8.0cmを測り、相対する2面に磨痕が認められる。また、磨痕の認められる面に直行する面には凹凸が認められるが、人為的な加工か否かの判断は難しい。紐は、直径5mm程の針葉樹枝材を分割して、幅4mm程の紐状に仕上げたものである。この紐は、木器には中央部の孔を通して横方向に巻き付けられ、石器においては、主に両磨面を繋ぐ方向に残存しているが、一部、この方向に直行するものも認められる。

加工材・加工材片（263～300）　263～272は、いずれも長さ100cm以上の加工材である。なお264～266は近接して出土している。263は約1/8のミカン割材の樹芯部を払ったものである。断面は先端付近で細長い三角形、先端部側の端から離れるに従って、幅のある多角形状を呈する。先端部は木表側から樹芯部に向かって斜めに加工され、尖鋭な形状を示す。また、先端部から25cm程の片側柾目面に径4cm、深さ1.6cm程の窪みがある。明確な加工痕は観察できず、人為的か否かの判断は難しい。クヌギ節製である。264は断面台形の角材である。木表側の面には、一部樹皮を残すが、それ以外の範囲には無数の明瞭な削り痕が認められる。クヌギ節製である。265は径の大きくなる位置が2か所認められるが、これは、分割面にあった節が原因でできた形状である。クヌギ節製である。266は先端部側の端から150cm程までの断面は扁平な菱形であるが、徐々に断面長方形に変化する。先端部は木表・木裏の二方向から斜めに削り込み、尖らせていたようである。クヌギ節製である。267は節部で若干幅を広げるが、ほとんど断面形を変えずに延びる薄いつくりの角材である。断面形は木裏側の辺が短い扁平な台形を呈する。先端部は、木表側から木裏側に向かって斜めに削り込んでいる。クヌギ節製である。268は先端に向かって徐々に先細る角材である。尖らせた部位に明瞭な加工痕が確認されず、意図的な形状ではない可能性も指摘できる。クリ製である。269は本遺跡中最大規模の板目板材である。年輪の観察から径50cm以上の原木から得た材であることが分かる。一方の端の片側表面が薄く炭化している。炭化している側の端から割り裂かれたような隙間があるが、これは乾燥による収縮が原因であると考える。クリ製である。270は樹芯部に向かって周囲から均等に加工された木口面を端部とする直線的な丸木材である。その端部から、10cm程の位置に幅約3cmの浅い溝が一周している。溝部は摩滅のため、加工痕は不明瞭である。トネリコ属製である。271は両端部を丸く収めた直線的な丸木材である。両端からほぼ中間の位置に、縦2cm×横2cmで、深さ5mm程の窪み状の加工が施されている。なお、わずかに樹皮を残す。ムラサキシキブ属製である。272は、幹から枝分かれした部分を利用した、いわゆるＹ字材である。幹の下端部は、腐蝕により加工痕が不明瞭であるが、大きくは相対する2方向から分断されている。中央部にある節は、枝は落とされているが、平坦には仕上げられていない。Ｙ字に開く部分は内側を中心に加工が施されており、幹から継続して上方に延びる部分の断面は、略半円形を呈している。また、Ｙ字に開く部分の内側に擦痕などは認められない。クリ製である。

273～283は30cm以上100cm未満の加工材である。273は全体に丸みを帯びた板目板材である。長軸方向で端から端へ、徐々に厚さを減じ、薄く仕上げられた側の縁辺に細かく加工を施し、角を丸く仕上げている。また薄く仕上げられた側の一部が周囲よりも一段低くなっているが、欠損による可能性もある。ヤナギ属製である。274は両端部の欠損した細長い三角形状の板目板材である。各面同士の稜線が明瞭で、断面は長方形から、徐々に幅を減じながら正方形に近くなる。木表側の面と柾目の面の一部は削り加工により整形され、それ以外の面は分割作業により形成されている。クリ製である。275は厚さの揃えられた板目板材である。全体に目立った加工痕は確認されず、両柾目面、木裏側の面は分割されたままで

ある。木口面は欠損・摩滅により不明瞭であるが、一部に加工痕が確認できる。本木製品はSX1844から出土した約60点の木材の中で、唯一加工材としたものである。樹種は未同定である。276は平面細長い台形状の、厚さの揃えられた板目板材である。全体に目立った加工痕は認められないが、節部は平坦に仕上げられており、全体に丁寧な加工が施されたと考える。また木表側の面は全面炭化しており、柾目面と木裏側にも一部及んでいる。クリ製である。277は平面細長い三角形状で、厚さの揃えられた板目板材である。全体に目立った加工痕は認められない。木表側の面はほぼ自然面で、両柾目面と木裏側の面は分割作業によるものと考える。ブナ属製である。278は端部を丸く仕上げた柾目板材である。平面観では幅の均一な板材であるが、側面観では扁平な平行四辺形のようである。すなわち、一方の面では残存部側へ、もう一方では欠損部側へ、互い違いに端部に向かって斜めに削り込んでいる。また、削り込まれた範囲とそうではない範囲との境界線は、長軸方向に対して、両面とも同様の傾きで斜行している。ブナ属製である。279の両木口面は大きく三方向から樹芯部に向かって加工されている。加えて、一方の端部に偏って、幅は約4.5cm、深さは約1cmの溝が一周している。トネリコ属製である。280の一方の木口面は、相対する二方向から樹芯部に向かって加工が施されており、樹芯部には細長い切り残し痕が残る。もう一方は、腐蝕により明確ではないが、前者と比較すると、平坦に仕上げられている。クリ製である。281は伐採・分断後、分割した半割材である。コナラ節製である。282は約1/6のミカン割材である。端に向かって徐々に幅を狭める。幅の広い方の柾目面に、木目に対して斜めに粗い加工が施されている。なお木表側の面はほぼ自然面である。トネリコ属製である。283は端部と側面が欠損しているため、全形を確認できないが、木表側の面と残存部側の側面で形成する縁辺部は、緩やかに湾曲している。また断面においても残存部側の側面は、若干外に膨らむように湾曲している。ハンノキ節製である。

284～290は30cm未満の加工材である。284は全体に丸みを帯びた板目板材である。全体にねじれているが、人為か否かの判断は難しい。コナラ節製である。285は欠損により全形を確認できないが、断面偏三角形の板目板材である。キリ製である。286は断面偏三角形の板目板材である。端部は木表側と木裏側の両面から均等に加工が施されている。クリ製である。287は樹皮の付いた丸木材である。両端とも周囲から樹芯部に向かって加工されている。タラノキ製である。288は伐採・分断後、分割した半割材である。ナシ亜科製である。289は全面に加工が施された分割材である。木表・木裏側の面、柾目面は分割により形成され、両木口面は木表側から木裏側に向かって、斜めに加工されている。クリ製である。290は伐採・分断後に分割された、芯去りの偏半割材である。原木径は16cm程である。トネリコ属製である。

291～296はスギを用いた角材や削出棒材などである。291は主に分割作業によって形成された、断面略正方形の角材である。なお一部側面に段が認められるが、これは分割時に自然に形成されたと考える。292は柾目面を主に削り込んだ、断面略六角形の削出棒材である。なお、本製品は、地面に対し、斜めに突き刺さった状態で出土した。293は断面が扁平な台形状を呈する、板状の棒材である。表面に削り痕が認められる。294は主に分割作業により形成された、幅・厚さ共に均一な角材である。295は断面略楕円形の削出棒材である。一方の端部はわずかに幅広で薄く仕上げられている。296は木目に沿って剥ぎ取られたような薄い板材である。若干湾曲している。

297～300は炭化材である。297は厚みのある板目板材が全体的に強く炭化したものである。なお炭化により不明確であるが、柄部と身部に分かれるような木製品であった可能性もある。トネリコ属製である。298は断面が偏った長方形の角材である。端部は炭化によりすぼまっている。アカマツ製である。299は断面略正方形の角材である。先端は断面扁平に削り込まれており、その後で炭化している。アカ

マツ製である。300は炭化後に周囲を削り込んで、先端部を瘤状に削り残している。マツ属製である。

樹皮製容器（301・302） 301は樹皮同士を樺皮によって綴り合わせたものである。以下、大きいほうの樹皮を「樹皮A」、小さいほうの樹皮を「樹皮B」、両者を綴じ合わせている樺皮を「綴じ紐」とする。樹皮Aは残存長16.1cm、残存幅16.5cm、厚さ0.9cmを測る。欠損により全形を把握できないが、厚みがほぼ均一な板状の樹皮である。樹皮Bは残存長6.3cm、残存幅1.2cm、厚さ0.9cmを測る。樹皮A同様、全形を把握できないが、細長い板状の樹皮である。樹皮A・Bは共にケヤキの樹皮製である。綴じ紐は幅4～6mm、厚さ1mm以下を測る。綴じ紐を通す孔は、樹皮Aでは縁辺から1.5cm程の位置に穿たれている。全形の確認できる孔は2か所で、各々8mm×3mmほどの切れ込み状のものである。さらに、その2か所の孔を結ぶ延長線上に、2つの孔の痕跡が確認できた。これら4か所の孔は約2cmの間隔をもって、ほぼ直線上に配置されている。一方、樹皮Bには孔ではなく、浅い窪みが作出されている。それらの間隔は樹皮Bとほぼ同じである。樹皮Bは樹皮Aの縁辺上に斜め、あるいは垂直方向に接しており、1本の綴じ紐を同じ孔・窪みに2回通し、隣の孔・窪みに移ることの繰り返しで綴じ合わされている（実測図隣の模式図参照）。なお、樹皮Bに作出された窪みは、本来樹皮Aのような孔であったが、樹皮の一部が剥落した結果、現状で窪み状を呈している可能性もある。302はほぼ直角なコーナーを有し、幅・厚さをほぼ均一に揃えた板状の樹皮で、箱状の容器の一部と考えられる。短辺と長辺の二辺の縁には、ほぼ等間隔で平面略円形の孔が穿たれており、断面形はすべてロート状を呈している。また、8か所中1か所の孔に樺皮片が認められ、対象物は不明であるが、紐状の樺皮で綴じられていたと予想される。なお孔の径が小さい方の面には、幅1.0cm前後の加工痕が無数に認められる。ケヤキ樹皮製である。

縄（303～307） 303～305は右撚りの条（径約2mm）が3本束ねられて、左撚りに撚られた、いわゆるL$\left\{\begin{matrix}r\\r\\r\end{matrix}\right.$の縄である。撚られた状態では、（残存）長1.5～2.2cm、径0.4～0.5cmを測る。306・307は、303～305のような状態からほつれた条である。原体の表面に、やや光沢が認められることから、樺皮が素材に用いられている可能性がある。なお、図示した5点と、それ以外のほつれた条10点は、同一遺構の同一小グリッドから出土しており、撚り方・径も共通しているので、すべて同一個体であると考える。

樺皮製環状成品（308） 平面楕円形の環状に湾曲させた芯材に、幅0.7cm程の樺皮を隙間なく螺旋状に巻き付けたものである。身は最大で0.3cm×0.5cmの断面楕円形を呈する。なお欠損箇所からの観察で不明確ではあるが、芯材には幅1cm前後の樺皮を二つ折りにしたものを用いているようである。また、現段階では、芯材とそれに巻きつく樺皮を別個体と考えているが、それらは同一個体である可能性もある。

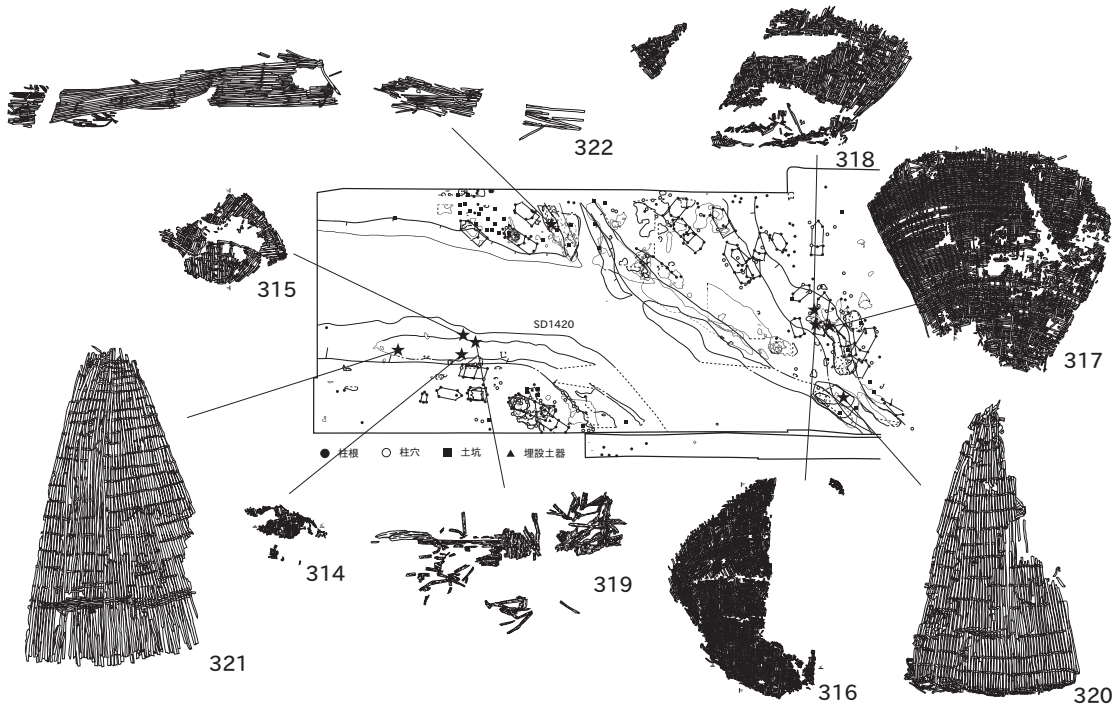
樺皮素材（309～313） 309は幅1cm以上の樺皮を一重結びした際に形成された結び目の部分である。310は幅5mm程の3本の樺皮を重ね、それを同じく幅5mm程の樺皮で束ねたものである。ただし、両者は別個体ではなく一連のものであった可能性もある。311は螺旋状に丸まっているものである。312・313は、幅に差はあるが、同様に丸まっているものである。

樺皮素材としたものは、総点数で80点以上出土しており、特にSXからの出土が目立つ。形状は311～313のように、ねじれたり、丸まったりしているものが多くみられる。これは、上下方向に螺旋を描きながら、樹木から剥ぎ取られた［名久井1999］ためであろうか。長さは1cm程から60cm以上まで認められ、幅は0.5～1.0cmのものが大半を占め、最大で3.6cmのものもある。なお、肉眼観察で光沢の強いものと弱いものが認められ、概して、前者は幅が広く板状で、後者は幅が狭くねじれたり、丸まったりしている。

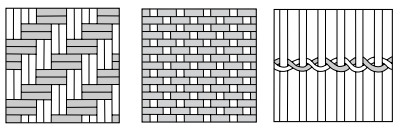
6　編物製品（図面図版291～294、写真図版196～198）

A　はじめに

本遺跡では、竹笹類や針葉樹材などを籤（ひご）状・蔓状に加工し、それらを用いて編み込まれた遺物が9点出土している。これらを編物製品と呼称する。また、土器底部には網代痕を有するものが認められ、それらについても本項で述べることとする。編物製品の出土地点は、SD1420右岸斜面1・2、SD1420右岸斜面3、SD1420左岸斜面の各地区に分布し、籠類は、SD1420右岸斜面1に位置するSX958やSD1420左岸斜面に位置するSX1702から、筌状編物はSD1420右岸斜面2及びSD1420左岸斜面から、また、簾状編物はSD1420右岸斜面3に位置するSX1686から出土している。所属時期はS4～S3層期が3点、S2層期及びS1層期が6点である。



第132図　編物製品出土分布



第133図　編み方模式図

編物製品は、形状の違いから籠類・網代・筌状編物・簾状編物に分類した。籠類は口縁部もしくは材が放射状に開く方向を上、網代は最大長を上下、筌状編物は口縁部を下、簾状編物は主材と直交する方向を上下とし、法量を計測した。材の名称は、網代編みについては遺物の上下方向に平行する材を縦材、直交する材を横材とした。また、もじり編みについては、製品の主体となる材を主材、編んでいる材を組紐とした（第133図）。編み方の名称は『竹編組技術資料』［大分県別府産業工芸試験所1991・1992］を参考とし、網代編みについては「越え・潜り・送り」の本数を記した。

B 各編物製品の説明

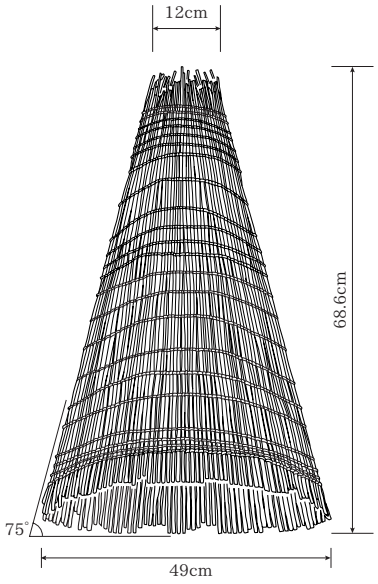
籠 類（315～318） 容器状の形状を呈するものを籠類とした。4点出土している。口縁部が認められるものは316のみであり、いずれも底部は欠損している。ただし、315・317・318は、縦材が放射状に開く状態から、容器状を呈する可能性が高いと考え籠類に含めた。315はSX1702-3層から一部2段に重なって出土している。長さ19.4cm、幅27.6cmで、平面形は概ね扇形を呈する。材の幅は縦材が0.4～0.5cm、横材が0.3～0.4cmである。「網代編み」で編まれており、2本越え・2本潜り・1本送りを基本とする。また、横材は2本で1単位となり、横材同士の間隔は1～1.5cm程度空いている。樹種は、縦材は不明であるが横材はイネ科？が用いられている。316はSX958-8層から2段に重なって出土している。長さ40.1cm、幅32.8cmであり、平面形は、右半分は欠損しており不明であるが、上方に向かって放射状に広がり、逆台形状もしくは扇形を呈すると推定される。材の幅は縦材が0.3cm、横材は0.1～0.2cmである。編み方は、縦材を並べて横材を編み込んでいく「ござ目編み」で、縦材同士は3～5cm程度の間隔が空いている。1本越え・1本潜り・1本送りを基本に編まれている。右半分は大半が欠損しているが、口縁部が右端上部に認められ、「巻き縁」によって仕上げられている。縦材には竹笹類が用いられ、横材は不明である。317は17D23グリッドのSX958-1層から2段に重なって出土している。長さ48.3cm、幅52.8cmで、平面形は逆台形状を呈する。材の幅は縦材・横材共に0.3cm程度である。編み方は、横材に対して縦材を内外に交互に配置し、横材に沿って巻かれる1本の組紐によって縦材と横材が固定される。1本の組紐を螺旋状に巻いて材を固定することを「縢（かが）る」といい、上述した縦材の配置と縢りを用いた材の固定により、編物の強度が増すという[1)]。縦材・横材がスギ、組紐はアスナロが用いられている。318は17D19グリッドのSD1420-16層から2段に重なって出土している。長さ30.3cm、幅60.6cmであり、平面形は左側の一部が欠損しているが、概ね逆台形状を呈すると考えられる。材の幅は縦材が0.3～0.5cm、横材が0.2～0.3cmである。編み方は、「二本とび網代編み」と呼称される2本の材を1単位とした、2本越え・2本潜り・2本送りを基本とするものであるが、下部付近は4本越え・4本潜りも認められる。樹種は、縦材は不明であるが、横材は竹笹類が用いられている。

網 代（314・319） 編み方は籠類に類似するが、平面的な形状を呈すると推定されるものである。2点出土しているが、いずれも残存状態が不良であり、籠類の可能性も考えられる。314はSX1702-3層から出土している。長さ12.8cm、幅18.0cmで、材の幅は縦材0.2～0.3cm、横材0.2cm程度である。網代編みと考えられるが、越え・潜りなどは不明である。樹種も不明である。319もまたSX1702-3層から出土している。大きさは、長さ30.4cm、幅55.0cmで、材の幅は縦材が0.6～1.0cm、横材は0.9～1.2cmであり、ほかの編物製品よりも幅の広い材を用いている。編み方は不明である。縦材には単子葉類が用いられ、横材は不明である。

筌状編物（320・321） 平底を有さず、先端部が収束し、口縁部が広がる筒状と推定されるものを筌状編物とした。編み方は、主材を2本の組紐によって挟み込むように編まれる「もじり編み」を基本とする。2点出土している。320は17F7グリッドのSD1420-1d層から出土しており、口縁部の観察から6段に折り重なっている状態と推定されるが、土ごと取り上げたため、最下段の口縁部は確認できない。長さ63.8cm、最大幅36.8cmであり、平面形は上端部から口縁部に向かって直線的に広がる三角形状を呈する。復元すると口径約55cmと推測されるが、上端部径は右側が大きく欠損しており不明である。材の幅は、

1） 大分県竹工芸・訓練センターのご教示による。

主材が0.5～0.8cm、組紐は0.3～0.5cm程度である。主材の本数は胴部の途中から先端部にかけて減少しているため、主材同士の間隔は一定している。組紐は13条認められ、2.5～4cm程度の間隔を置きながら主材と直交するように編まれている。また、口縁部は2条の組紐によって仕上げられており、内部にカエシは認められない。主材は竹笹類、組紐は分割された針葉樹枝材（関連諸科学編第Ⅱ章3参照）が用いられている。321は26E8グリッドのSD1420-E6b層から出土しており、表・裏面の観察から6段に折り重なった状態と考えられる。また、X線写真からも3か所の折れ面を確認できる（写真図版197）。長さ68.6cm、最大幅36.9cmで、320同様、上端部から口縁部に向かって直線的に広がる。復元すると口径約49cm、先端部径約12cmの筒型で、口縁部から側縁までの内角は約75°と推定される（第134図）。また、先端部は欠損している可能性も考えられる。主材の幅は0.5～0.8cm、組紐は0.3～0.5cmである。法量は320とほぼ同規模であるが、組紐の本数が23条と320よりも10条多い。組紐は1～4cmの間隔で編まれており、先端部に進むに従って狭くなる。最も口縁部寄りの組紐は3条連接して編まれており、主材はこれらの組紐から10cm程度突出する。また、突出した主材の2本に、組紐がコイル状に巻き付けられている部分が認められ、組紐の余った部分を巻き付けたものと考えられる（写真図版198）。320同様、カエシは付属しない。内部にはハンノキ果実とトチノキ種子？が認められる。主材は竹笹類、組紐は分割された針葉樹材が用いられている。



第134図　筌状編物（321）復元図

筌状編物の類例は、東京都下宅部遺跡［千葉2001］・大阪府山賀遺跡［中西1985］・福岡県辻田遺跡［井上ほか1979］で出土している。所属時期は、下宅部遺跡が縄文時代後期、山賀遺跡・辻田遺跡が弥生時代である。完存している山賀遺跡例（長さ78cm、最大径30cm）と比較すると本遺跡出土の筌状編物の口径が広いことが指摘できる。編み方は、下宅部遺跡例は主材を密に配し、組紐は1本の材によって1本越え・1本潜りで編まれている。山賀遺跡例・辻田遺跡例は、主材と直交するように材を渡し、組紐を用いて2材を固定しており、いずれも本遺跡出土のものとは異なる編み方を用いている。また、山賀遺跡例はカエシが付属する点と、先端部が完全に閉塞している点で本遺跡出土のものとは構造的に大きく異なる[2)]。主材の樹種は、山賀遺跡出土例がカヤ、辻田遺跡出土例が広葉樹であるという。

参考として民俗事例を挙げておく。筌は主に河川や湖沼で用いられ、形態は砲弾型、円筒型、箱型などがある［山本1989］。山形県庄内地方では、「筏（ドウ）」と呼称され、ヤツメドウ、コイドウ、サケドウなどがあり、それぞれの対象物の習性や棲息地を考慮に入れた形態を呈している［犬塚1985］。

本遺跡出土320・321を筌と仮定すると、法量からコイやフナなどの魚類などを対象として作られたことが予想される。もじり編みである点は、法量とも関連するが、隙間を空けて水流の抵抗をできるだけ受けないようにするためとも捉えられる。また、先端部が大きく開口する点では、別の製品と組み合わせて用いられた可能性もある。

簾状編物（322）　編み方は筌状編物に類似するが、平面的な形状を呈すると推定されるものを簾状編物とした。SX1686から出土している。長さ27.3cm、幅348.0cmの長方形状で、左側で捩じれて重なっ

2）下宅部遺跡例も先端部が閉塞するようであるが、残存状況が不良のため、カエシは確認されていない。

ている。材の幅は主材が1.5cm、組紐は1.0～1.2cm程度である。もじり編みによって編まれており、組紐は中央部左側において20～25cmの間隔で6条認められる。複数段に折り重なっており、最も多く重なっている中央部付近では5段に重なっている。重なりを広げた長さは75cm程度と推定される（図面図版294）。主材は竹笹類、組紐は樹皮が用いられている。簾状編物の類例は神奈川県池子遺跡［山本・谷口1999］において認められる。所属時期は弥生時代中期に位置付けられ、2枚に折り重なった状態で出土している。大きさは、長さ60cm、幅135cm程度である。編み方はもじり編みではなく、2本で1単位の材が、主材に対して直交に2本越え・2本潜りで編まれている。

遺物番号	分類	樹種（縦材･主材）	樹種（横材･編み紐）	地区	遺構No.	覆土層位	所属層位	長さ（cm）	幅（cm）	縦材・主材の太さ（cm）	横材・組紐の太さ（cm）	編み方	越え	潜り	送り
314	網代	不明	不明	24E9	SX1702	3	S1	12.8	18	0.3	0.2	網代編み	不明	不明	不明
315	籠類	不明	イネ科？	24D25・25D5	SX1702	3	S1	19.4	27.6	0.5	0.4	網代編み	2	2	1
316	籠類	竹笹類	不明	17D14	SX958	8	S4～S3	40.1	32.8	0.3	0.2	ござ目編み	1	1	1
317	籠類	スギ	アスナロ	17D23	SX958	1	S4～S3	48.3	52.8	0.3	0.3	縢り	-	-	-
318	籠類	不明	竹笹類	17D19	SD1420	16	S4～S3	30.3	60.6	0.5	0.3	二本飛び網代編み	2	2	2
319	網代	単子葉類	不明	24E4	SX1702	3	S1	55.0	30.4	1.0	1.2	不明	不明	不明	不明
320	筌状編物	竹笹類	針葉樹枝材	17F7	SD1420	1d	S1	63.8	36.8	0.8	0.5	もじり編み	-	-	-
321	筌状編物	竹笹類	針葉樹材	26E8	SD1420	E6b	S1	68.6	36.9	0.8	0.5	もじり編み	-	-	-
322	簾状編物	竹笹類	樹皮	23B11	SX1686	1	S1	27.3	348.0	1.5	1.2	もじり編み	-	-	-

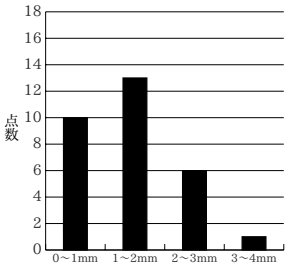
※全点保存処理済

第83表　編物製品観察表

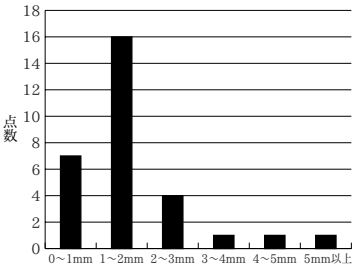
C　網　代　痕

時間の都合上、出土した土器底部を全点観察することはできず、図面図版に掲載されている土器底部のみを観察した。その結果、網代痕[3]は34点認められ、器種は甕14点、浅鉢9点、深鉢4点、鉢3点、壺・甕もしくは深鉢が各2点である。編み方は、ござ目編み及びござ目編みの可能性のあるものが33点（97.0%）認められ、主体を占める。編み方は1本越え・1本潜り・1本送りを基本とする。材の幅は縦材・横材共に0.15～0.4cmの範囲であり、0.15～0.2cm程度のものが多く認められる。縦材同士の間隔は、0～4mm程度であり、1～2mm程度のものが多く認められる（第135図）。一方、横材同士の間隔は、0～16mmと、縦材同士の間隔よりも分布幅が広く、1～2mm程度の間隔のものが突出して多い（第136図）。なお、間隔が16mmのものは網代編みである。

底部圧痕をみる限りでは、出土した編物製品以外にも多くの編物製品が用いられたことが推定される。また、土器製作時に用いられた編物製品は「ござ目編み」によるものの利用頻度が高かったことが指摘できよう。ただし、これらは出土した底部の一部に過ぎず、本遺跡全体の傾向は今後の検討課題としたい。



第135図　縦材同士の間隔



第136図　横材同士の間隔

3）編物製品の可能性のある底部圧痕を網代痕とした。

7　漆製品・漆要具（図面図版295～300、写真図版18～24・199）

A　はじめに

本遺跡からは豊富な漆製品、及びその製作に関する要具と材料が出土した。なかでも、赤漆塗り糸玉は総数44点があり、国内の類似した資料のなかでも極めて多い。また、結歯式縦櫛4点、腕輪状漆製品13点、漆塗り弓1点などがある。漆要具は、土器には漆液や赤色顔料を貯えたものや漆と赤色顔料を調合するのに用いられたもの、パレットとして使われたものがある。さらに赤色顔料は塊のほか、粒状のものが多数出土している。以上から、本遺跡では漆製品の製作が行われていたものと考えられる。本文ではこれらの製作技法などについて述べ、計測値などは観察表に委ねる。なお、詳細な分析結果は関連諸科学編第Ⅵ章を参照願いたい。

B　赤漆塗り糸玉（1～25）

1）はじめに

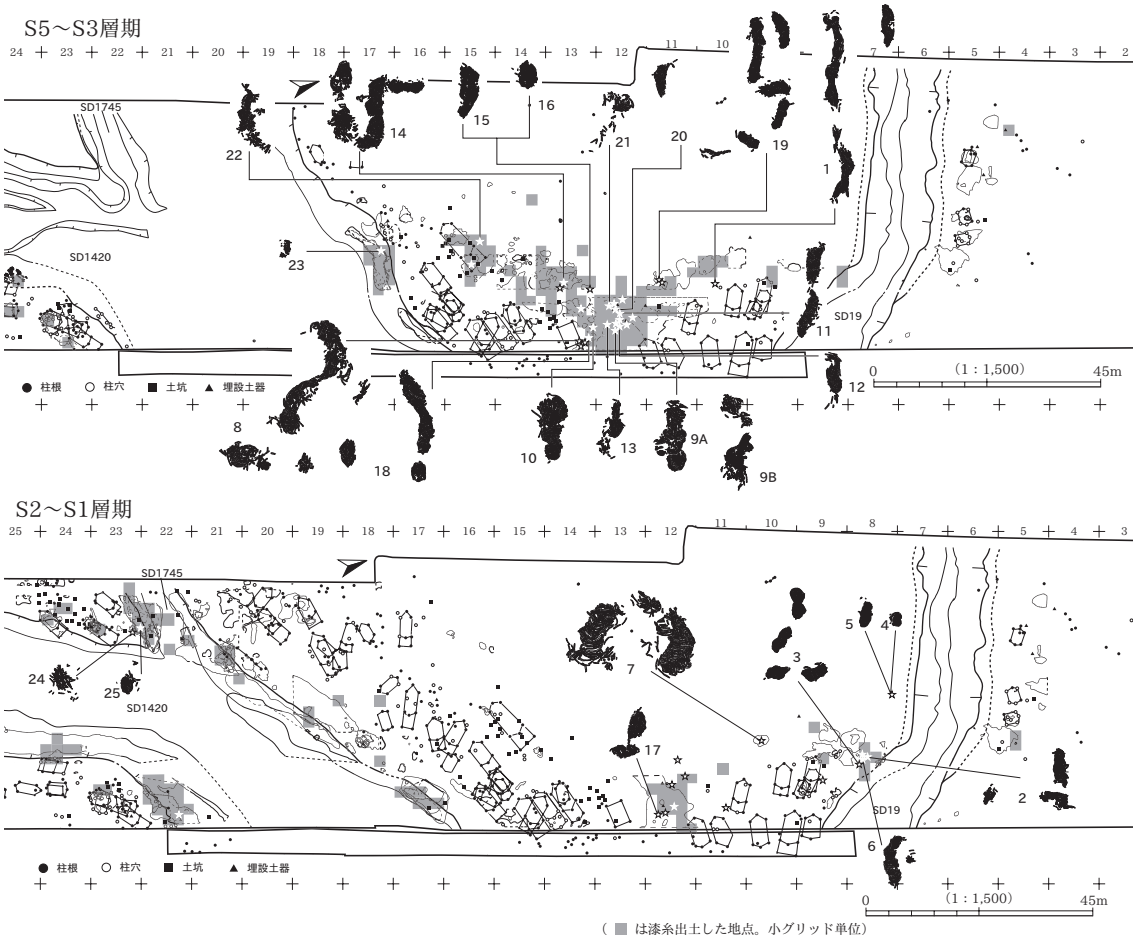
本遺跡では、細い植物繊維を右撚りし糸状にしたものにベンガラ漆を塗り、それらを十数本以上束ねて結んだもの［永嶋2002］が出土しており、これを「赤漆塗り糸玉（以下、糸玉）」とした。漆の塗られた糸は径1mm程で、大半は2本の植物繊維を撚り合わせているが、中には3本を撚り合わせたものも認められた。また、ウォーター・セパレーション（本章10参照）によって、径約1mm、長さ約0.5～2.0cmで、漆の塗られた右撚りの糸が出土しており、これを糸玉と区別して「漆糸」とした。

糸玉は総数44点（出土位置不明1点を含む）を数える。内、29点が中央地区（10～13E・Fグリッド）、8点がSD19左岸地区（8・10Eグリッド）、4点がSD1420右岸1・2地区（15D・Eグリッド）、2点がSD1420右岸3地区（23Bグリッド）から出土した（第137図）。層位別ではS5～S3層期では中央地区を中心に分布するが、S2～S1層期では中央地区を中心にしながらも、SD19左岸・SD1420右岸3地区からも出土し、S5～S3層期と比較すると散在的である。出土量もS5～S3

		SD1420左岸		SD1420右岸3		SD1420右岸1・2		中央		SD19左岸		SD19右岸	
遺構種別	層期	遺構No.	点数	遺構No.	点数	遺構No.	点数	遺構No.	点数	遺構No.	点数	遺構No.	点数
SC	S5							2424	×				
	S4	2096	×			813	×	767	×				
						859	△	801	☆				
						864	△	2266	☆				
	S3					777	×	740	△	708	×		
						838	△	773	×	735	○		
						950	×	776	△	737	×		
								2247	☆				
	S2									125	×	82	×
	S1	1755	△	1697	×	824	×	2227	◎	111	×		
		2032	×	1710	×	934	×			712	△		
		2042	×	1768	○	1482	×						
						1486	×						
						1517	△						
						1600	×						
						1644	×						
						1645	×						
						1703	×						
SX	S4～S3	1841	△			958	○	2251	○	763	×		
		2398	◎										
		2353	△										
	S2～S1	1776	△	1685	○	1529	×			112	◎		
		1780	×	1686	☆	1596	×						
		2018	○	1687	☆	1684	×						
		2020	☆	1688	△	1987	△						
		2035	×	1689	△	2182	×						
						2184	×						
						2185	×						
その他	S4					SK914	×			SK717	×		
	S2～S1	SD1420	×	SK1801	×	SK1463	△			P710	△		
	不明			P16	△	P5	×					SH13	×
	包含層							S4	×				
								S3	△				
								S2	×				

×：～10、△：～50、○：～100、◎：～200、☆：201～　ただし、漆糸の長さはまちまちである。

第84表　各地区における遺構・層位別の漆糸出土量



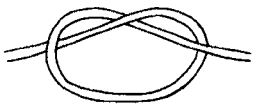
第137図　赤漆塗り糸玉の分布

層期では27点、S2～S1層期では16点と開きが認められる。遺構別では炭化物集中範囲（SC）から23点、堅果類廃棄範囲（SX）から11点、ピット（P）から1点出土した。なお、糸玉の出土したピットはSB4を構成するP827であり、そのほかに糸玉1点と漆糸がSB4と重なる範囲から出土している。

漆糸の分布は糸玉の状況とほぼ類似している（第137図）。しかし、漆糸は糸玉の出土しない地点からも出土する場合があり、S4～S3層期ではSD1420左岸地区（23・24Fグリッド）、S2～S1層期ではSD1420左岸地区（21～24E・Fグリッド）、SD1420右岸1・2地区、SD1420右岸斜面1・2、SD19右岸地区（5Eグリッド）を挙げることができる。遺構別では糸玉同様、SCからの出土が大半だが、SD1420右岸3地区ではSXからの出土量がSCからの出土量を大幅に上回る。また少量ではあるがPや土坑（SK）からの出土も認められる（第84表）。

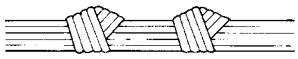
糸玉は長さ・幅・結び目の数・一束の本数を計測した。長さは糸の束の流れに沿って計測し、途切れていても一連のものである可能性が高い場合は、その間隔も含めて計測した。この場合、およその値を示すに留めた。幅は、長さの方向に直行する距離を計測し、位置によって顕著な差がある場合は最大値と最小値を示した。原形を留めない場合は、その範囲の長軸・短軸を長さ・幅とした。結び目の数は、糸玉1点における数、あるいは各まとまりの数を示した。一束の本数は、糸同士の重なりや土中に埋まっていて観察不能な場合が大半なので、およその値を示すに留めた。なお、図示に際して、1つの番号を付した糸玉が途切れて複数のまとまりで構成される場合、各まとまりに①、②…と枝番号を付けて示した。

糸玉の結び目はすべて同じ方向からの「一重結び」である（第138図）。結び目の連続性を考慮し、結び目同士がほぼ無間隔で連続するもの（A類）、結び目同士に間隔があり、結び目が連続しないもの（B類）、結び目以外が欠損しているもの（C類）、結び目を含めて欠損しているもの（D類）に分類した（第139図）。分類別では、本来の形状が判別不能なC・D類が29点、A類が12点、B類が3点である。C類の中には本来A・B類であったと考えるものもあるが、それらを加えても、B類の総数がA類の総数を上回ることはないと考える。またA・B類に限ってみた場合、平面・層位的な分布に顕著な差は認められない。



第138図　結び方

A類



B類

第139図　赤漆塗り糸玉の分類

2）各　　説

SD19左岸地区（1～7）　8点が出土した。S3層から1点（1）、遺構別ではS1層期のSX112から6点（2～6）、同じくSC712から1点（7）出土した。分類別ではA類が5点、B・C・D類が各1点である。

1はB類である。本来①と②は一連で、長さは16cm以上になると考える。①・②において結び目間の束の長さは、図の上側から約3.5cm－0.8cm－4.0cm－0.5cmであり、間隔の長短を交互に繰り返している。2・3・5～7はA類で、幅約1.0cmのもの（2・3・5・6）と、約2.0cmのもの（7）に二分できる。前者の内、3は長さ約2cmの4つのまとまり（①～④）で構成されており、本来の形状が不明確であるが、①～③における結び目同士の重なり具合がほかのA類のものと類似しており、本来A類であった可能性が高いと考える。7は、長さ約15cm、幅2.1cmを測り、本遺跡中最大で傑出した太さを有する。そのため、分類に関係なくほかの大半は一束に用いられる糸の本数が15～20本であるところ、7の本数は30本以上を数える。また平面弧状で出土したが、これが本来の形状を反映しているか否かの判断は難しい。

中央地区（8～21）　29点が出土した。包含層からはD1層から1点、S4層から3点（15・16）、S3層から1点（18）、S1層から2点出土した。遺構別ではS5層期のSC2424から2点（8A・8B）、S4層期のSC801から1点（14）、同じくSC2266から8点（9A・B～13）、S3層期のSC740から1点（19）、同じくSC2247から5点（20・21）、S1層期のSC2227から4点（17）、同じくSX2018から1点出土した。分類別ではA類が7点、B類が2点、C・D類が各10点である。

8A・9AはB類である。8A①は結び目を3つ有し、中の結び目は図の上側の結び目に寄っており、下側の結び目とは5cmほど離れている。また①は中央付近でねじれているが、人為か否かの判断は難しい。9A①も結び目を3つ有し、中の結び目と図の下側の結び目を繋ぐ束のねじれにより不明確であるが、本来、図の上側と中の結び目は接近しており、図の下側と中の結び目は4～5cmほど離れている。10・11・14・15・17～20はA類である。7のように突出した幅を有するものはなく、大半は幅1.0～1.5cm程である。ただし、14・18・19のように完存であれば長さ15～20cmに達するような比較的長いものは認められる。また、11・14・19の結び目同士にほとんど隙間は無く、重なりながら連続していることが分かる。なお、18は平面弧状と推定されるが、これが本来の形状を反映しているかの判断は難しい。9B・12・13・16・21はC類である。これらは、本来、現状より長いものであったと考えられる。9Bは結び目から直線的な束が認められるのでB類の可能性があり、12は結び目から延びる束が、結び目のすぐ近くで湾曲しており、ここを結び目と考えれば、A類かB類の可能性がある。

SD1420右岸1・2地区（22・23）　4点が出土した。遺構別ではS4層期のSC859から1点（22）、

同じくSC864から１点、S4～S3層期のSX958から１点（23）、S3層期以降のP827から１点出土した。分類別ではＣ類が３点、Ｄ類が１点である。

22はＣ類であるが、確認できる１つの結び目から両側に束が延びており、Ｂ類の可能性がある。

SD1420右岸３地区（24・25）　２点が出土した。遺構別ではS1層期のSX1687から１点（24）、同じくSX1685から１点（25）出土した。分類別ではＣ・Ｄ類が各１点である。なお、SX1687から出土した漆糸の中には、少数ながら、通常２本のところ、３本の植物繊維を右撚りしたものも認められた。

3）小　　結

本遺跡出土の糸玉を、結び目の連続性・不連続性を中心に分類を試みた。結果、結び目の連続するもの（Ａ類）と、結び目の連続しないもの（Ｂ類）に二分でき、出土量でＡ類がＢ類を圧倒した。また、Ａ類は結び目を順次重なるように連続させているため、幅はほぼ一定している。一方で、Ｂ類は結び目と束の部分が明確に独立しているため幅は一定せず、１・8Ａ・9Ａの観察から、結び目同士の間隔を長・短・長・短…と交互に繰り返し、結び目を２個単位で配置していた可能性があろうが不明確である。両者には共通点もあり、７を除けば、大半は一束の糸の本数15～20本、幅1.0～1.5cmで、両者に用いられる糸の束は類似している。なお、７・8Ａ・14は屈曲した状態で出土している。これは糸に漆を塗布した後、ある程度の期間は、糸玉の形状を自在に変化させることができた（可塑性が高い）ことを示唆している。

本遺跡出土の糸玉に類似する漆塗りの糸状製品は、県内では和島村大武遺跡（縄文時代前期）［春日1997］、黒川村分谷地Ａ遺跡（後期）［伊東2002・2003］、新発田市中野遺跡（後・晩期）[1)]、県外では北海道伊茶仁チシネ第一竪穴群（前期）［椙田ほか1992］、同忍路土場遺跡（後期）［種市1988］、青森県上尾駮（1）Ｃ地区遺跡（晩期）［福田ほか1987］、宮城県山王囲遺跡（晩期）［伊東・須藤1985］、山形県小山崎遺跡（後期）［山形県立博物館2002］、福島県荒屋敷遺跡（晩期）［小柴ほか1990］、滋賀県粟津湖底遺跡（中期）［中川1997］で出土している。それらは装飾性を有するもの、あるいは結び目の数や配置や間隔の長短などに特定の意味を持たせ、意思伝達の手段とする「結縄」の一種［小林2001］などと想定されている。また小林達雄氏は塗彩されていない結束のある紐にも同様な意味を想定している。なお荒屋敷遺跡例は時期的に本遺跡と近く、ベンガラを顔料に用い、結び目の連続する糸玉（本遺跡のＡ類）が大半を占める点でも、本遺跡の糸玉の様相に類似している。

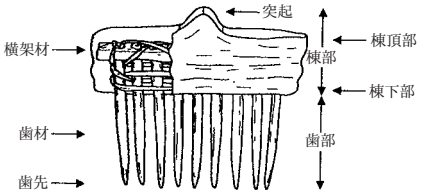
本遺跡出土の糸玉は、結び目・形状から二分でき、一部を除いて、規格性の高いものである。それらの機能・用途として、装飾品や結縄の可能性もあるが特定は難しい。ただし、糸玉は中央地区を中心とした局所的な分布を示すため、決して普遍的なものではなく、特別な性格を有するものであったことは想像に難くない。

また、漆糸が糸玉の出土しない地点から出土する場合は、漆糸を「糸玉の一部」とすれば糸玉の出土地点を補足し、「糸玉の材料」とすれば糸玉の製作場所を想定し得る。ただし、どちらでもなく「糸玉とは別の漆製品」である可能性も否定できない。

C　結歯式竪櫛（26～29）

ここでは、結歯式竪櫛の分類及び部位名称（第140図）について小林正氏の研究［小林2001］に準拠して説明を行う。合計４点が出土した。26・27はSD19右岸地区のⅦ層下位から出土した。26は長方形の

1）未発表であるが、新発田市教育委員会 田中耕作氏よりご教示頂いた。



第140図　結歯式竪櫛の各部位の名称と位置
［小林2001］より転載

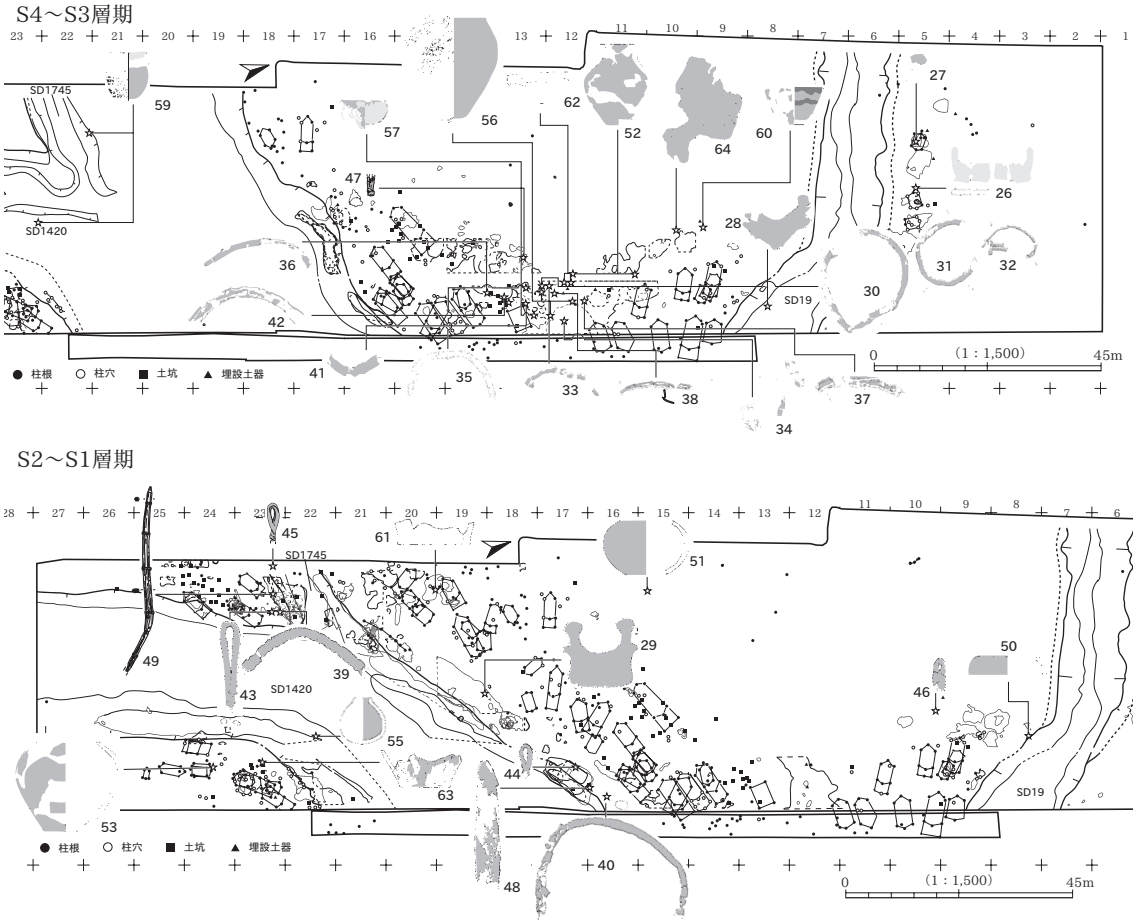
棟部を持ち、平坦な棟頂部の両端に柱状突起が付くが、一方は現存しない。歯材痕が10本現存する。表裏面は顔料を混ぜない黒色の漆塗りで、縮み皺とみられる凹凸が著しい。構造はX線写真をみると、棟部の上下に歯材を縛り付けた横架材が認められる。また、突起は歯材の延長を芯材としている可能性があり、樹皮と思われる細い材を横に巻き付けて作り出している。27も長方形の棟部を持ち、棟頂部は丸みを帯びる。表裏面は赤色顔料を混ぜた漆が塗られ、26と同様に縮み皺とみられる細かな凹凸が著しい。歯材痕は5本確認できる。また、これと直行して図の左側に断面三角形のキャタピラ状の凹凸が3条認められ、素地材の痕跡とみられる。28はSD19左岸地区のⅥ層から出土し、S1層期に所属する。棟部はV字形を呈し、平坦な棟頂部の両端に円柱状の突起が付属するが、一方が欠けている。歯材痕は11本現存し、いずれも棟部に対して垂直に固定されている。棟頂部と棟下部及び棟部中央に合計4条のV字状隆帯があり、棟部両側縁の突出部を経由して表裏面を巡っている。上から1段目と2段目の隆帯間は棟部中央で2条の楕円を呈する隆帯で連結される。また、上から3段目の隆帯は棟下部に連結する。表面は赤色顔料を混ぜた漆が塗られ、縮み皺とみられる凹凸はあるものの、ほかの3点に比べると滑らかである。X線写真をみると、棟頂部及び棟下部に横架材が認められ、上から2段目の隆帯は樹皮とみられる細い材で表裏面を縛った後に、漆をパテ状に貼り付けたものと考えられる。上から3段目の隆帯には材を明確に観察できないことから、漆のみで作り出したのかもしれない。なお、突起は棟部にソケット状の穴を開けて円柱状の素地材を差し込み、樹皮などで縛った後に漆で固めたものと考えられる。図左側の欠損部は突起が素地材ごと外れた結果であろう。29はSD1420右岸2地区のSC1517から出土したもので、S1層期に所属する。棟部は長方形で、平坦な棟頂部両端に先端が楕円形に膨らむ円柱状の突起が付属する。歯材痕は25本で、ほかのものより細く断面形が楕円形を呈す。棟部中央をV字状の隆帯が巡り、棟下部の水平な隆帯に連結する。表面は赤色顔料を若干混ぜたような黒褐色の漆塗りで、縮み皺とみられる凹凸が著しい。X線写真では、これら2条の隆帯は樹皮とみられる細い材で歯材を縛り、その上に漆をパテ状に貼り付けたものと考えられ、この隆帯自体が横架材の役目を果たしていた可能性がある。突起は円柱材を差し込んだ様子が認められないことから、歯材を延長して素地材とし、漆などで作り出した可能性がある。

D　腕輪状漆製品（30～42）

直径0.3～1cmほどの管状の素材で環状や弧状を呈し、赤色顔料を混ぜた漆が塗られたものを腕輪状漆製品と呼ぶこととする。本遺跡では13点が出土し、その地点の多くが赤漆塗り糸玉の出土範囲と重なる（第137・141図）。全形が残るものが少ないが、大きさ・形状・素地材などにバラエティーを認めることができる。以下、出土層位別にみることとする。

30～32は13E21グリッドのS5層からまとまって出土したものである（写真図版21）。直径は30が7cm、31が4.5cm、32が3.4cmで、大中小のセットであったかもしれない。いずれも表面は平滑で、断面は扁平で薄い。また、内面に凹凸の明瞭な細い筋を多数観察できる。これらは素地材のネガ文と考えられ、環状に平行に走ることが特徴である。こうしたネガ文を付ける素地材を素地材A類と呼ぶこととする。

33～36・41は中央地区とSD1420右岸地区のS4層から出土したものである。33は弧状に残存するもので、赤漆塗り糸玉と共に出土した。断面形は円形に近く、表面に不規則に瘤状の突起が認められるこ



第141図　漆製品・漆要具の分布

とが特徴である。瘤の頂部は若干くぼみ、赤漆が欠落する場合が多い。内面は軸と直行して繊維状に密集した非常に細かな筋を観察できる。以上のような特徴を持つ素地材を素地材Ｂ類と呼ぶこととする。34は素地材Ｂ類のものと赤彩された貝殻が一括に出土したものである。34aが腕輪状漆製品で、細かく分割している。35は表面が欠け内面が露出しているが、素地材Ａ類である。36も素地材Ａ類のもので、表面の凹凸は少なく、幅が一定である。41はＶ字状にカーブするもので、断面形は楕円形を呈す。外側に工字文風の彫刻が施される。素地材は木材だが、樹種は同定していない。

37・38・42は中央地区のS3層から出土したものである。37は素地材Ａ類である。38は赤漆塗り糸玉と近接して出土したものである。S5層出土32のように非常に細い素地材Ａ類である。42は幅が1.1cmと広く、断面は楕円形を呈し、本来は太さ5mm程あったものとみられる。表面は平滑で、図面右端に素地材とみられる木片が残る。樹種は同定していない。内面を観察すると、この木片のネガ文とみられる浅く細かい木目が軸と平行して残っている。これを素地材Ｃ類と呼ぶこととする。

39・40はS1層期に所属するものである。39は断面が横長の楕円形を呈し、両側縁に２個１対の規則的な突起が認められる。突起の頂部は若干窪み、素地材Ｂ類と同様に赤漆が欠落する。内面は観察できず、Ｘ線写真においても素地材を推定することができない。規則的に突起が並ぶ点と断面形の特徴からこれを素地材Ｄ類と呼ぶこととする。40は断面が縦長の楕円形を呈す。表面に5mm前後の間隔で軸に対し直行ないし若干斜行する割れ目を観察できる。内面は繊維状の細かな筋が軸に対しやや斜行し、その内側に軸と平行する同様の筋を観察できる。このように断面が縦長の楕円形で軸に対し斜行するネガ文を持

つものを素地材Ｅ類とする。

以上のように、本遺跡の腕輪状漆製品には内面のネガ文を観察することにより５種類の素地材を認めることができた。これらの材質は一体何であろうか。Ｃ類は素地材の木材が残っていることから、材質は木材であることが分かる。Ａ類は断面形が扁平につぶれ筋の凹凸が深いことから、木材とは考えにくく、草本類などであろうか。Ｂ類は断面が円形に近く、不規則に突起があることから、枝など細い木材の可能性もある。しかし、軸に対する直行する繊維状の筋が観察できることから、樹皮などが巻き付けられているかもしれない。Ｄ類は断面が横長の楕円形で規則的に突起が並ぶことから、枝とは考えられない。可能性としては、魚の背骨であれば両側縁に規則的に並ぶ枝骨を折ればＤ類と同様の形態にはなる。Ｅ類は断面形が縦長の楕円形で、軸に対して平行な素地材に加えてさらに斜めに樹皮などを巻き付けたものと考えることができる。漆が塗られない樹皮製品のなかに折りたたんだ樹皮を芯材とし樹皮を斜めに巻き付けた指輪状のものがあり（図面図版290-308）、Ｅ類はこれと同様の手法と考えられる。

Ｅ　赤彩された貝殻（34）

腕輪状漆製品34aと共に出土したものである。34b～dはヤマトシジミガイと考えられる。34bは殻頂部に赤彩が認められる。34cは殻の内面がみえているが、縁辺や亀裂部分に赤彩が確認できることから、殻の外面に赤彩されているものと考えられる。図下の漆膜は対をなす殻の外側に塗られていた漆膜のみが残存した可能性が高い。34dは赤彩が認められないが、褐色の光沢を帯びており、赤色顔料の混じらない漆が塗られている可能性もある。

Ｆ　漆塗り弓（49）

SD1420右岸３地区（23B16グリッド）において、S1層期に所属するSX1688-1層から出土した。片方の弭は欠損しており、残存長54.6cmである。上下の区別はできない。弓幹は削り出しにより形成され、断面形は幅2.3cm、厚さ1.6cmで楕円形を呈する。弭は先端部2cm程の部分を円錐形に削り出したもので、溝や段は認められない。弓幹には長軸に直行して１～２周に巻かれた幅5mm程の樺皮が５か所で認められる。最も弭に近いもので先端から約4cmの位置に、そのほかのものはそこから10～12cmのほぼ等間隔に巻かれている。樺皮の巻かれた後、素黒目漆が全体に塗られている。弭にも漆は付着しているが、弓幹の表面が光沢を持ち平滑であることと比較すると、弭の表面には光沢が無く凹凸がある。そのため、先端部には弭としてキャップ式の部材が装着されていた可能性がある（本編第Ⅶ章２参照）。ニシキギ属製である。

Ｇ　その他の漆製品（43～48、写真図版23-65）

43は一材を折り曲げたヘアピン状のものである。44・45は一材を折り曲げて交点を漆で固め、長さ6mm程の輪を作り出したものである。46は結び目を持つ輪で、47も同様のものと考えられる。48は漆膜のみ残存するが、先端がやや尖る棒状のものであったと推測されるもので、表面は平滑で、内面は腕輪状漆製品の素地材Ｃ類に類似することから木胎であったと考えられる。写真図版23-65は縮み皺のない平滑で光沢のある赤漆の塗膜である。長さ6.7cm、幅5.4cmで、規則的な浅い溝を７条観察できる。

Ｈ　赤彩土器・漆容器（50～63）

ここでは彩色を目的とした赤色の漆塗土器と、土器内部に赤色顔料が付着するものや漆が付着する土器

について述べる。50～53は外面に厚く漆が塗られたものである。50は土器分類でいう壺Ｂ類で、S2～S1層期に所属する。肩部に平行沈線文が施され、外面に赤黒色で光沢のある漆が塗布される。51も壺Ｂ類で、S1層期に所属する。極暗赤褐色の漆が塗られる。52は典型的な壺Ａ類で、S4層に属する。口縁部及び肩部に浮線文が施され、暗赤色で光沢のある漆が外面すべてに塗布される。53も壺Ａ類で、SD1420-E6層に属する。極暗赤褐色で光沢のある漆が外面すべてに塗布される。

54～56は内面全体に赤色顔料が付着するものである。54は小形壺Ｇ類で、SD1420-21d層から出土した。口頸部が直立し、体部が下半でふくらみ、底部は丸底となる。55も壺Ｇ類で、SD1420-E6c層から出土した。短い口縁部がわずかに内傾し、体部下半でふくらみ、底部は丸底となる。54・55の内面を観察すると、粉状の赤色顔料がわずかに残存することから、顔料を貯えた容器と考えられる。56は大形の壺Ａ類で、S4層に属す。内面に濃密に赤彩が施され、破片となった割れ面にも部分的に付着する。赤彩は器面に密着していることから、顔料を混ぜた漆が塗られた可能性がある。

57～63は漆塗作業に用いられた漆容器とみられるものである。57は鉢Ａ類で、S5層に所属する。内面全体から口縁端部まで厚く黒褐色の漆膜が付着し、その表面は凹凸が著しい。口縁部の一点が打ち欠かれており、この割れ口とこれを中心として外面に黒褐色の漆が付着することから、注ぎ口であったのかもしれない。赤色顔料は混じっていたとしても少量であり、漆を貯えたり精製したりするのに用いられた可能性がある。58は深鉢とみられ、内面ににぶい赤褐色の漆が付着した後に、さらに濃い色の漆が縦位に塗り重ねられている。重ねられた部分には幅2.5mmほどのハケ状工具による縦位方向の擦痕を観察でき、さらに上端の割れ面から外面にかけて同じ範囲に漆が重なっており、漆塗作業時にハケ先を整えた跡と考えられる。漆と顔料の調合やパレットとして用いられたのであろう。59は甕D2c類で、SD1420-21c層から出土した。内面の肩部以下に光沢の少ない赤彩が観察でき、口頸部は漆の可能性がある炭化物が濃密に付着する。外面に漆の付着は認められない。60は深鉢の下半とみられ、S3層から出土した。内面にやや光沢のある暗赤褐色を呈す厚い漆膜が付着する。その表面は凹凸が著しく、赤色の濃淡が帯状の範囲で異なるほか、黒褐色部分と赤色部分とが混在しており、漆と顔料を調合するのに用いられたかもしれない。外面にも一部赤彩が認められる。61は深鉢ないし甕の底部で、内面全体に光沢の少ない暗赤褐色の赤彩が施される。58と同様なハケ状工具による擦痕を観察できる。上端の割れ面の一部にも赤彩が認められることから、図のように割れた状態で使用された可能性がある。62はS3層から出土したもので、浅鉢B1類で浮線文b1種が施される。内面の底面を中心に赤彩され、一部顔料を含まない漆塊のようなものも付着する。ハケ状工具による擦痕が観察できる。63は深鉢ないし甕の底部で、SD1420-E6c層から出土した。内面全体に光沢のある極暗赤褐色の漆が付着し、先端の平らな幅2.5mmのハケ状工具による擦痕を多数観察できる。また、上端の割れ面の一部から外面にかけて液垂れしたように同様の漆が付着する。58のようにハケ先を整えたために付着した可能性があり、パレットとして用いられたものと考えられる。

Ⅰ　赤色顔料塊（64）

10E4グリッドのS4層から出土したもので、SX754と名付けて取り上げた。原料はベンガラである。長さ31.6cm、幅23.9cm、厚さ2.5～3.0cmを測る。全体が不整形を呈し、一部トレンチで切られる。表面は凹凸が著しい。土坑や何らかの入れ物に入っていた形跡は観察できない。

8　植物遺体

本遺跡では、地形的・地質的な特徴から、有機質遺物もしくは植物遺体が良好な状態で出土している。堅果類廃棄範囲（SX）ではクリ・トチノキ・オニグルミを主体とする植物遺体が、炭化物集中範囲（SC）では漆製品が出土している。これらの特徴的な地点の性格の把握と、通常の発掘調査では発見が困難な骨などの微細な遺物の取り上げを目的として、ウォーター・セパレーションによる土壌内遺物及び自然遺物の選別を行った。ここでは、ウォーター・セパレーションの方法について説明した後に、主にウォーター・セパレーションによって選別されたクリ・トチノキ・オニグルミについて述べる。

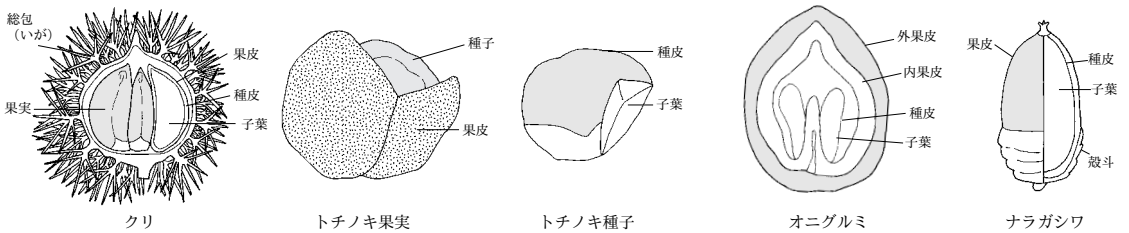
A　ウォーター・セパレーション

選別の方法　調査段階において、主要な土坑内覆土やSC、SX内の土を小グリッド1/4単位で層位ごとに土嚢で取り上げた[1)]。平成12・13年度の調査終了後、取り上げた土嚢の重量（以下土量）を計測し、5mm・2.5mm・1mmメッシュが設置してある容器に入れ、水を注入して土を洗い流し、メッシュサイズごとに遺物を選別した。水洗した土量は、総取り上げ土量18,557kgのうち9,762kg（52.6%）である。また、SXは全体が把握できるように、各グリッドを均一に選別を行った。水洗を行わなかった土については一部を新潟県立歴史博物館に提供し、残りは廃棄した。なお、ウォーター・セパレーション用以外に取り上げたものもあり、種実が集中して出土した地点では、土ごと取り上げ（以下「種実取り上げ」）、これも水洗選別し、ウォーター・セパレーションで選別した種実に加えた[2)]。遺物の分類は土器・石器・漆糸及び漆片・炭化物・骨・種実・そのほかの有機物とした。

各遺物の出土分布　ウォーター・セパレーションで出土した骨、漆糸・漆片、植物遺体の分布を概観してみる。骨は中央地区に位置するSC2227・2247・2266、SD1420右岸斜面3に位置するSX1687・1722・1768などで多く出土している。漆糸・漆片は中央地区で多量に出土しており、赤漆塗り糸玉・腕輪などの分布とほぼ一致するが、そのほかの地区からも出土している（本章7参照）。植物遺体はほぼ全地区に分布するが、特にSD1420右岸斜面2・右岸斜面3からの出土が顕著である。

B　植物遺体（写真図版201）

出土状況　本遺跡では、SXからクリ・トチノキ・オニグルミの種実を主体とする多量の植物遺体がまとまって出土している。クリ・トチノキは、果皮及び種皮の縁辺もしくは一部が破損しているのみで、原



第142図　各種実の部位名称

1）これとは別に、花粉分析用の柱状の土サンプルを採取した。
2）ただし、土量計測及びメッシュ単位による水洗は行っていない。

形を保つものが潰れた状態で出土した。これらの種実は、後述する破損の観察により子葉を取り出す方法を推定し得る。一方、オニグルミは大半が半割の状態で出土している。また、土坑（SK）・ピット（P）及びSD1420の川底（SD1420-21層）からは完形の種実が出土している。

種実の分類　ウォーター・セパレーションによる選別後、グリッドごとに種実をクリ・トチノキ・オニグルミ・そのほかの種実に分類した。整理作業時には、選別した種実の確認と各種実の重量計測を行った[3)]。クリとトチノキの判別については、古代の森研究舎 吉川純子氏の指導のもと、果皮もしくは種皮の内側に繊維状の線が認められるものをクリ、繊維状の線が認められず凹凸が認められるものをトチノキとした。また、破片・砕片のためクリ・トチノキの判別がつかないものは、そのほかの有機物に含めた。そのほかの種実については、吉川純子氏に同定を依頼し、個数を数えた。選別されたクリ・トチノキ・オニグルミの総重量は約13kgを測る。

SX内出土種実個体数の算出方法　上述したように、ウォーター・セパレーションにより選別した各種実は、SX内で出土した種実すべてを対象としている訳ではない。全体量を把握するためには、各SXにおけるすべての種実を取り上げた場合の推定個体数を求める必要がある。算出方法は、最初に各種実1個体の平均重量を求めた。クリは完形に近い果実、トチノキは完形に近い種子（いずれも子葉の残存しないもの）を、オニグルミは半割の内果皮を選び出した。なお、トチノキ・オニグルミについては、SD1420-21層からも多数出土していることから、SX出土の種実とほぼ同数を加えて平均値を求めた。各種実の計測点数は、クリ19点、トチノキ50点、オニグルミ50点である。計測の結果、平均重量はクリ2.59g、トチノキ5.95g、オニグルミ9.22g（オニグルミは平均重量×2）となった。ウォーター・セパレーションで選別した各種実の重量を平均重量で割ることにより推定個体数が算出される。次に各SXの取り上げ総土量に対する水洗した土量の割合（ウォーター・セパレーション比率）を求める。＜ウォーター・セパレーション比率＝各SXの総土量÷水洗済土量＞となり、各SX内における推定個体数は、＜ウォーター・セパレーションの推定個体数×ウォーター・セパレーション比率＋種実取り上げの推定個体数＞で求めることができる。

各種実の大きさ（第143図）　本遺跡出土の完形・略完形の種実を対象に、大きさを計測した[4)]。そして、自然堆積の可能性があるSD1420-21層出土の種実とP・SK・SX出土の種実との大きさの比較を行った。クリ・トチノキ・オニグルミのほかに、残存状態が良好なクヌギ・ナラガシワ・ブナについても大きさを計測した。

【クリ】　本遺跡出土の種実の中で最も多く出土している。平均重量算出に用いた19点に、幅が計測可能なSX出土の100点を加えた。最大幅43.4mm、最小幅20.9mm、最大長41.3mm、最小長15.3mmである。幅25～30mmをピークとし、数値が大きくなるに従って階段状に減少している。

【トチノキ】　平均重量計測に用いた個体を含む75点を対象とした。幅は30～35mm付近にピークを持つ。また、SX出土の個体の中には40mmを超えるものも認められる。最大幅41.5mm、最小幅23.8mmである。縄文時代後期～晩期に所属する朝日村元屋敷遺跡で出土したトチノキの「平均最大径」は28～30mmであり［村本2002］、本遺跡出土のトチノキの方が若干大形である。

【オニグルミ】　完形の50点を対象とする。最大幅31.4mm、最小幅16.5mm、最大長33.6mm、最

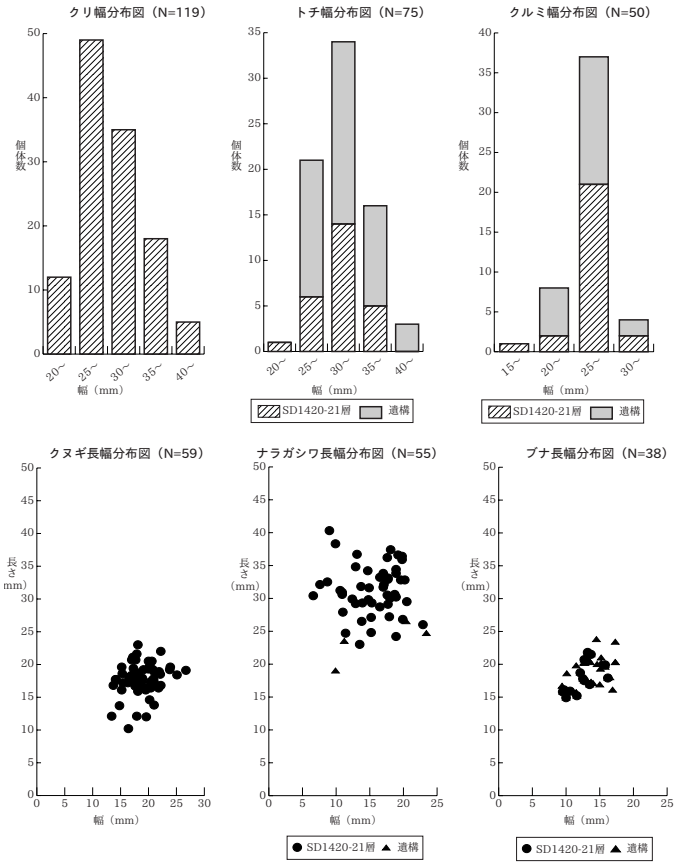
3）種実の重量には若干の水分の重量も含まれる。ただし、後述する各種実の平均重量算出の際も同様の条件で計測しているため、個体数に換算した場合の誤差は大きくないと考える。
4）クリ・ナラガシワ・ブナ・クヌギは果皮、トチノキは種皮、オニグルミは内果皮の大きさを計測した。

小長16.8mmである。幅は25～30mmに集中する。縄文時代晩期に所属する巻町御井戸遺跡［前山1996］や、朝日村元屋敷遺跡［村本2002］出土のオニグルミ（クルミ）とほぼ同規模である。

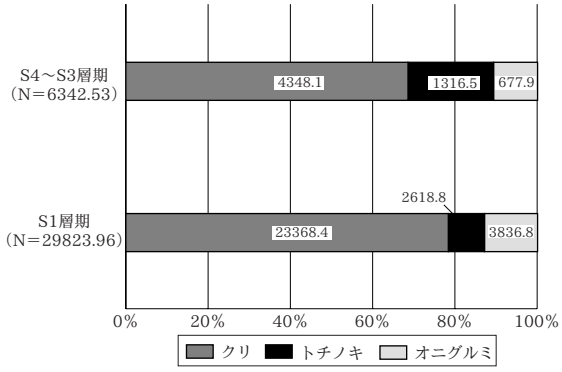
【クヌギ】　SD1420-2a層から35点、SX1987から24点出土している。長さ15～25mm、幅15～20mm付近に集中する。

【ナラガシワ】　SD1420-21層出土4点、SK1786・2276、SX1986から計49点出土している。なお、SK2276からは半割分で18点出土している。長さ25～40mm、幅7～20mm付近に分布する。

【ブ ナ】　SD1420-21層出土29点、SX82・958・1596・1686・1702から計9点出土している。長さ15～25mm、幅10～17mm付近に分布し、両者の大きさに明瞭な差異は認められない。



第143図　各種実の大きさ

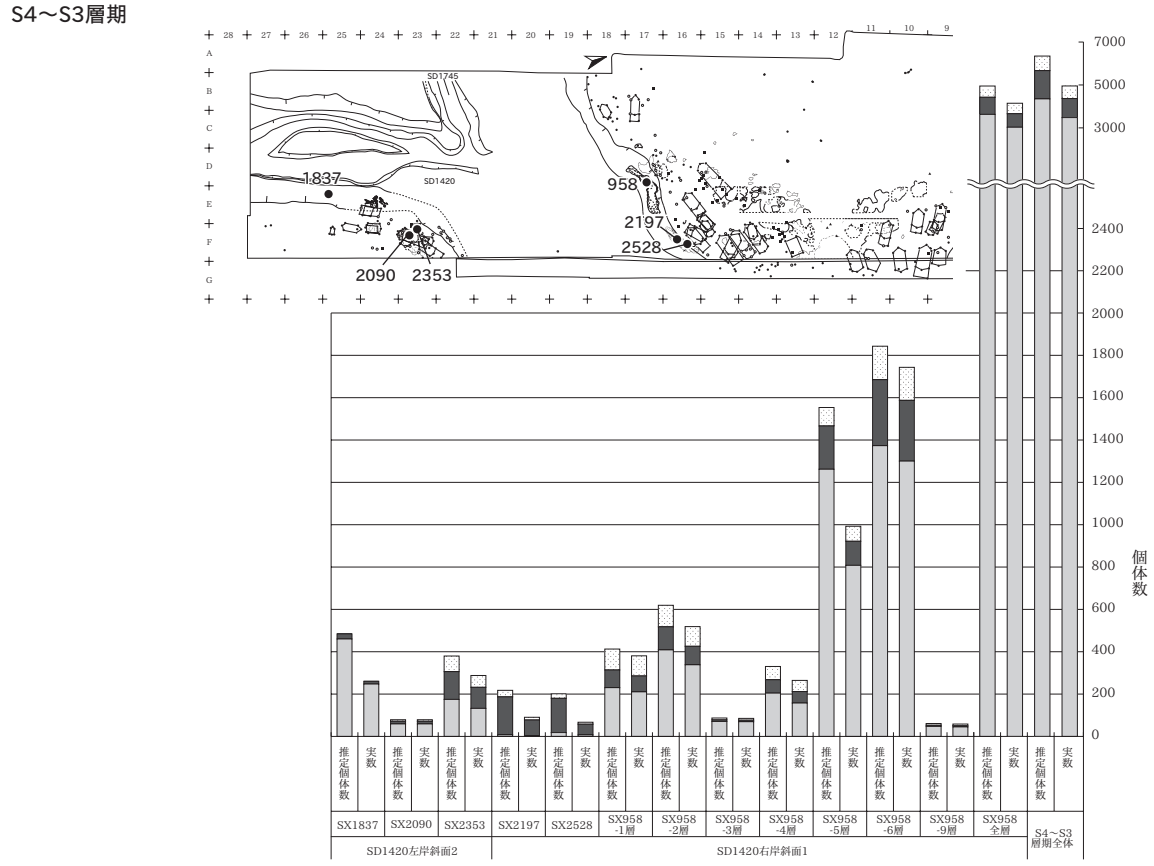


第144図　遺跡全体層位別種実組成（推定個体数）

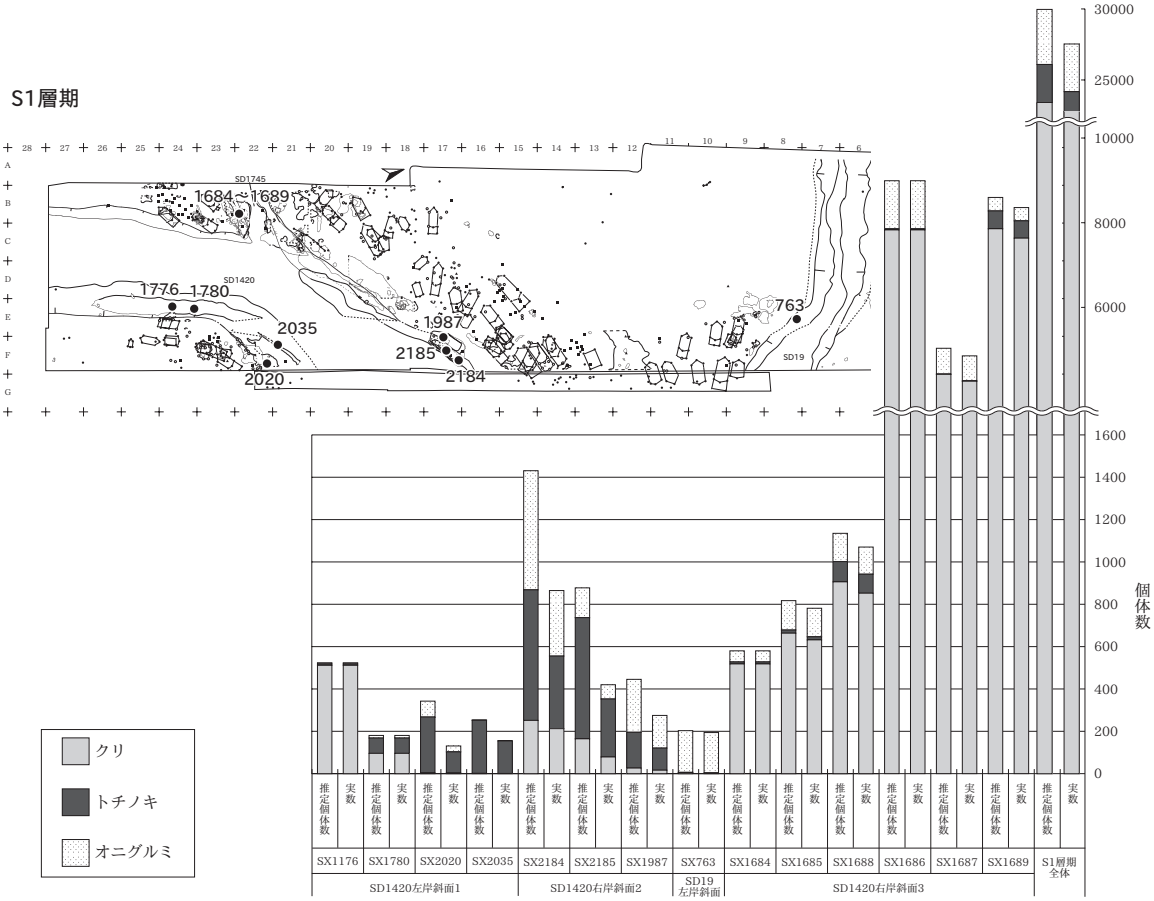
遺跡内における分布と組成（第144・145図）　層位別にみるクリ・トチノキ・オニグルミの推定個体数の合計は、S4～S3層期が約6,300個、S1層期が約29,800個と大きな差異が認められる（第144図）。種実の組成は、S4～S3層期、S1層期ともクリが7～8割程度と主体を占め、S1層期の方がトチノキの割合が低くなる。層位別における数量的な変化は著しいが、組成に大きな変化は認められない。S4～S3層期ではSD1420右岸斜面1に位置するSX958において各種実が多量に出土しており、クリは推定個体数で約3,600点と当該期全体の約8割を占める。そのほかのSXで出土した種実は、いずれも500点以下である。SD1420右岸斜面1の東側でトチノキを主体とするSX2197・2528などが、SD1420左岸斜面ではクリを主体とするSX1837・2090が認められる。S1層期には、SD1420右岸斜面3に位置するSX1684～1689出土のクリが、当該期全体の9割以上を占める。一方、SD1420左岸斜面ではトチノキを主体とするSX2020・2035などが認められる。また、SD1420右岸斜面2では、トチノキ及びオニグルミを主体とするSX2184が、SD19左岸斜面部では、オニグルミを主体とするSX763が認められる。

SX内における種実の分布（第146図）　SD1420右岸斜面1に分布するSX958は、1～9層にわたって

S4～S3層期



S1層期

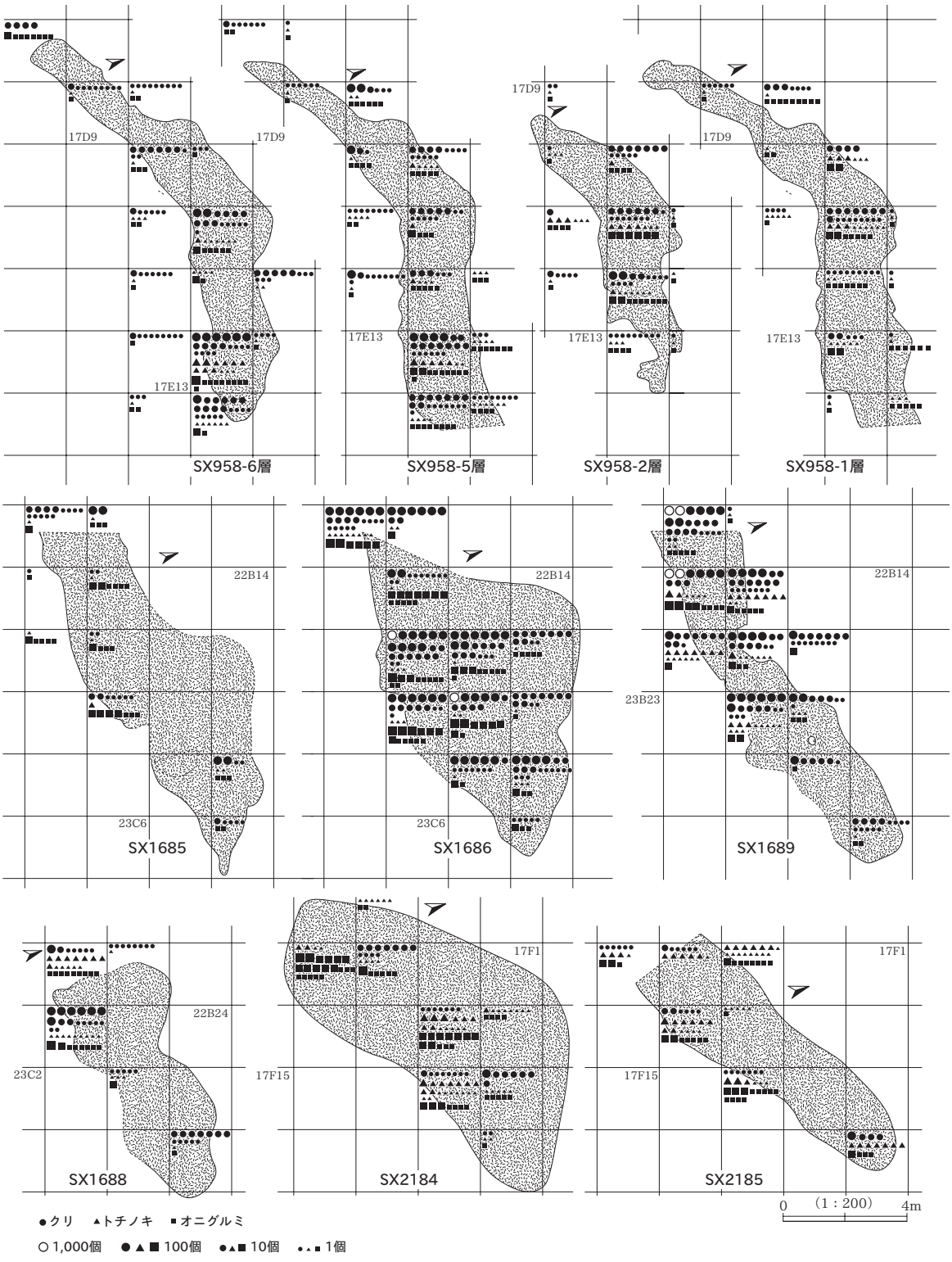


第145図　堅果類推定個体数

第85表　SX出土種実一覧

遺構No.	大グリッド	WS比率	クリ					トチノキ					オニグルミ					そのほかの有機物（g）	炭化物（g）
			取り上げ重量（g）	WS重量(g)	総重量（g）	推定重量(g)	推定個体数	取り上げ重量（g）	WS重量(g)	総重量（g）	推定重量(g)	推定個体数	取り上げ重量（g）	WS重量(g)	総重量（g）	推定重量(g)	推定個体数		
S1層全体		−	3216.7	56013.7	59230.4	60831.5	23486.9	784.4	9671.4	10455.8	16259.8	2732.7	12722.5	19653.0	32375.5	37473.3	4064.3	126034.8	10367.7
S4～3層全体		−	3570.4	6304.2	9874.6	12240.6	4726.1	1026.5	4402.9	5329.4	7916.6	1330.5	4484.0	2745.6	7229.6	8349.0	905.5	21784.2	2870.6
SX112（S2～S1層）	7・8E	1.29	1.5	29.2	30.7	39.2	15.1	4.7	58.8	63.5	80.6	13.5	262.3	60.9	323.2	340.9	37.0	876.0	1392.5
SX763	8E	2.24	0.0	6.3	6.3	14.1	5.4	0.0	2.0	2.0	4.5	0.8	1724.6	40.5	1765.1	1815.3	196.9	611.0	79.1
SX958-全層	17DE	1.36	3536.8	4308.9	7845.7	9396.9	3628.1	1017.5	2741.3	3758.8	4745.7	797.6	3514.5	974.3	4488.8	4839.5	524.9	21462.2	2693.2
SX958-1層	17DE	1.20	289.5	256.0	545.5	596.7	230.4	197.3	249.0	446.3	496.1	83.4	699.0	177.9	876.9	912.5	98.9	1959.0	774.9
SX958-2層	17DE	1.30	270.1	606.7	876.8	1058.8	408.8	86.6	432.3	518.9	648.6	109.0	594.5	263.5	858.0	937.1	101.6	4086.5	781.0
SX958-3層	17DE	2.50	178.2	2.0	180.2	183.2	70.7	39.7	2.0	41.7	44.7	7.5	77.2	1.7	78.9	81.5	8.8	36.0	0.9
SX958-4層	17DE	1.50	166.3	242.5	408.8	530.0	204.6	213.5	108.4	321.9	376.1	63.2	303.0	182.7	485.7	577.1	62.6	2447.7	431.7
SX958-5層	17DE	2.20	1091.3	1001.5	2092.8	3264.6	1262.0	226.3	450.0	676.3	1216.3	204.4	529.4	125.0	654.4	804.4	87.2	3229.0	231.0
SX958-6層	17DE	1.10	1481.0	1887.3	3368.3	3557.0	1373.4	223.0	1483.2	1706.2	1854.5	311.7	1251.1	187.1	1438.2	1456.9	158.0	7517.0	387.4
SX958-8層	17DE	1.00	0.0	89.6	89.6	89.6	34.6	0.0	2.6	2.6	2.6	0.4	0.0	5.7	5.7	5.7	0.6	796.8	16.6
SX958-9層	17DE	1.10	57.3	59.3	116.6	122.5	47.3	28.5	3.3	31.8	32.1	5.4	60.3	15.0	75.3	76.8	8.3	989.2	4.2
SX1528	18E、19・20DE、21D	1.00	59.4	0.0	59.4	59.4	22.9	34.6	0.0	34.6	34.6	5.8	2463.4	0.0	2463.4	2463.4	267.2	0.0	0.0
SX1583	19DE、20・21CD	0.00	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.0	0.0	6.0	6.0	1.0	274.4	0.0	274.4	274.4	29.8	0.0	0.0
SX1596	21・22BC	1.00	113.3	3.7	117.0	137.0	52.9	103.4	9.4	112.8	112.8	19.0	141.1	5.0	146.1	146.1	15.9	641.2	7.1
SX1684	22BC	1.00	41.4	1301.0	1342.4	1342.4	518.3	45.5	10.5	56.0	56.0	9.4	168.5	315.0	483.5	483.5	52.4	1023.0	68.4
SX1685	22BC、23B	1.05	0.1	1636.4	1636.5	1718.3	663.4	54.6	32.8	87.4	89.0	15.0	464.5	776.4	1240.9	1279.7	138.8	6951.0	631.9
SX1686	22・23BC	1.00	1097.1	19183.3	20280.4	20280.4	7830.3	53.4	99.3	152.7	152.7	25.7	3984.0	6486.0	10470.0	10470.0	1135.6	39990.4	1131.3
SX1687	22・23BC	1.04	522.5	10502.0	11024.5	11444.6	4418.8	6.1	34.2	40.3	41.7	7.0	1673.6	3789.1	5462.7	5614.3	608.9	13922.0	673.3
SX1688	22BC	1.07	219.7	1987.8	2207.5	2346.6	906.0	62.9	471.6	534.5	567.5	95.4	448.8	733.0	1181.8	1233.1	133.7	15188.0	1099.2
SX1689	22BC	1.03	612.7	19163.3	19776.0	20350.9	7857.5	24.8	2406.8	2431.6	2503.8	420.8	1384.5	1506.0	2890.5	2935.7	318.4	38739.4	15577.0
SX1702	22・23B	0.00	2.3	0.0	2.3	2.3	0.9	91.4	0.0	91.4	91.4	15.4	466.9	0.0	466.9	466.9	50.6	0.0	0.0
SX1776	24E	1.00	0.0	1325.0	1325.0	1325.0	511.6	0.0	38.1	38.1	38.1	6.4	0.0	53.7	53.7	53.7	5.8	3738.0	1381.0
SX1780	24E	1.00	0.0	248.0	248.0	248.0	95.8	0.0	431.0	431.0	431.0	72.4	0.0	113.0	113.0	113.0	12.3	631.0	245.9
SX1785	25D	1.00	0.0	0.6	0.6	0.6	0.2	0.0	97.0	97.0	97.0	16.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	9.0	4.0
SX1837	25E	1.86	0.0	641.0	641.0	1192.3	460.3	0.0	77.0	77.0	143.2	24.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	123.0	0.0
SX1841	24E	1.00	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.0	4.0	4.0	0.7	0.0	3.0	3.0	3.0	0.3	0.0	125.0
SX1986	17EF	2.21	2.5	0.4	2.9	3.4	1.3	21.5	64.9	86.4	164.9	27.7	4.3	32.1	36.4	75.2	8.2	399.0	676.0
SX1987	16・17EF	1.62	0.0	42.2	42.2	68.4	26.4	0.0	621.0	621.0	1006.0	169.1	0.0	1422.2	1422.2	2304.0	249.9	1584.0	329.7
SX2018	22EF	1.81	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.2	0.0	915.0	1649.0
SX2020	21F、22・23EF	2.74	7.6	0.5	8.1	9.0	3.5	32.7	561.4	594.1	1570.9	264.0	7.2	249.7	256.9	691.4	75.0	3226.2	3648.9
SX2035	21F、22EF	1.63	0.0	2.0	2.0	3.3	1.3	0.0	915.0	915.0	1491.5	250.7	0.0	7.4	7.4	12.1	1.3	488.0	35.3
SX2090	23F	1.00	0.0	153.0	153.0	153.0	59.1	0.0	73.0	73.0	73.0	12.3	0.0	69.0	69.0	69.0	7.5	264.0	47.0
SX2120	8EF	0.00	104.5	0.0	104.5	104.5	40.4	120.6	0.0	120.6	120.6	20.3	87.6	0.0	87.6	87.6	9.5	325.0	41.3
SX2182	17F	2.10	0.0	6.5	6.5	13.7	5.3	0.0	169.4	169.4	355.7	59.8	0.0	99.2	99.2	208.3	22.6	368.0	94.0
SX2184	17F	1.85	432.1	118.5	550.6	651.3	251.5	120.7	1918.3	2039.0	3669.6	616.7	106.5	2746.7	2853.2	5187.9	562.7	4601.3	660.6
SX2185	17EF	2.09	0.0	204.0	204.0	426.4	164.6	0.0	1629.0	1629.0	3404.6	572.2	0.0	621.1	621.1	1298.1	140.8	4258.0	639.0
SX2196	15F	3.78	0.0	2.0	2.0	7.6	2.9	0.0	7.0	7.0	26.5	4.5	0.0	1.0	1.0	3.8	0.4	66.0	34.0
SX2197	15F	2.41	0.0	8.5	8.5	20.5	7.9	0.0	442.0	442.0	1065.2	179.0	0.0	117.7	117.7	283.7	30.8	639.0	105.0
SX2251	13・14EF	1.67	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	19.5	19.5	32.6	5.5	0.0	54.3	54.3	90.7	9.8	536.0	684.5
SX2278	14F	1.29	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.5	1.5	1.9	0.3	0.0	32.0	32.0	41.3	4.5	67.0	5.0
SX2282	13F	1.00	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.9	4.9	4.9	0.5	0.0	244.0
SX2318	13F	1.00	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0	2.0	2.0	0.3	0.0	2.0	2.0	2.0	0.2	97.0	52.0
SX2353	23F	1.32	0.0	343.0	343.0	452.8	174.8	0.0	592.0	592.0	781.4	131.3	0.0	515.0	515.0	679.8	73.7	1693.0	396.0
SX2355	24F	1.00	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.3
SX2370	23F	1.00	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.3	2.3	2.3	0.4	0.0	44.0	44.0	44.0	4.8	113.6	116.5
SX2398	24EF	1.10	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.3	3.3	3.6	0.6	0.0	26.6	26.6	29.3	3.2	322.0	177.4

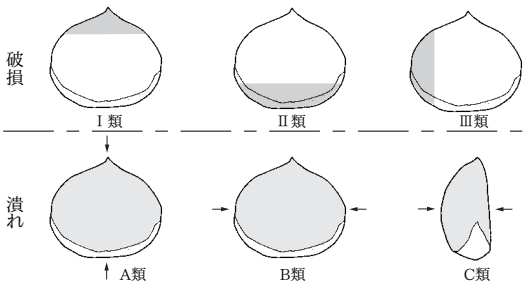
※WS=ウォーター・セパレーション



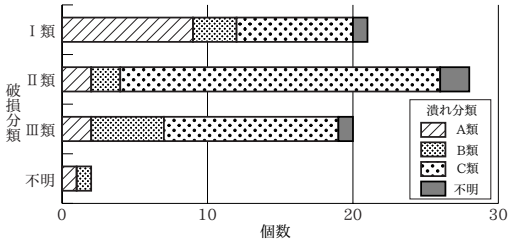
第146図 SX内出土種実平面分布

種実が堆積している。出土した種実の量は層位によって差異が認められ、６・５・２・１層において多く出土している。各層ともクリが主体を占めるが、小グリッド単位で区切った場合、2、3か所に集中する。また、種実の集中する地点は層位によって異なる。クリを例に取ってみると、６・５層では17E9グリッド付近で最も多く出土しているが、２層では17E8グリッド、１層では17E7グリッド付近に集中している。また、クリ・トチノキ・オニグルミの集中地点はほぼ一致する。SD1420右岸斜面３に位置するSX1685・1686・1689出土のクリもまた、SX958と同様に小グリッド2、3か所に集中して分布するが、集中地点とそれ以外の地点の差はSX958ほど顕著ではない。SD1420右岸斜面２に位置するSX2184・2185はトチノキを主体とするが、クリを主体とするSXと同様、集中地点が1、2か所に偏る。また、SX2184は種実の種類によって集中する地点が異なる。

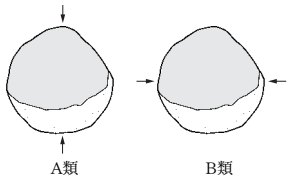
SX内における各種実の割れ方　出土状況で述べたように、SXからは良好な状態で各種実が出土している。選別の結果、種皮もしくは果皮が半分以上残存しているクリ・トチノキの個数はそれぞれ250個程度認められる。これらの個数は最低個数であり、土の堆積の過程や選別作業中に壊れてしまったものも少なからず存在すると考えられる。また、クリは片面のみ残存しているものも多く認められ、本来は表・裏



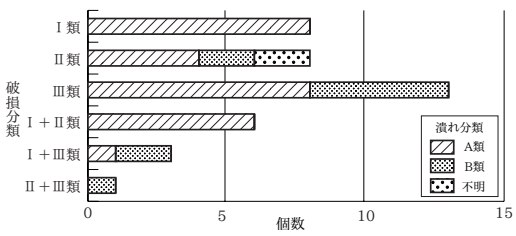
第147図　クリ破損・潰れ模式図



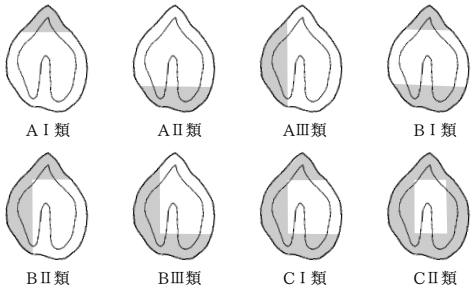
第148図　クリ破損と潰れの関係（N=71）



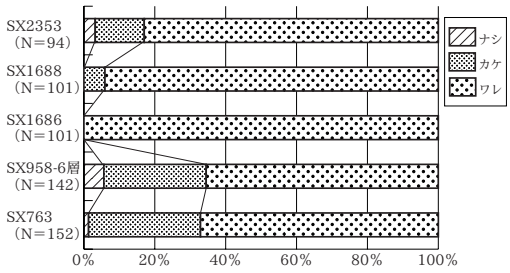
第149図　トチノキ潰れ模式図



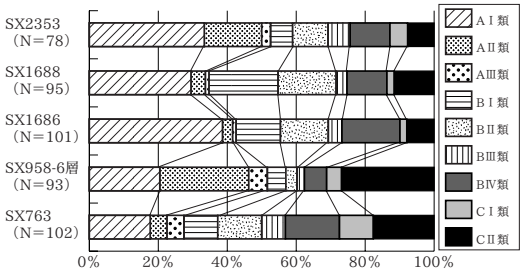
第150図　トチノキ破損と潰れの関係（N=39）



第151図　オニグルミ破損分類模式図



第152図　オニグルミ破損比



第153図　オニグルミワレ分類比

面が繋がっていた可能性もある。本遺跡のように、残存状態の良好な種実が出土することは稀であり、子葉を取り出す方法を推測する手がかりとして重要な資料と考える。以下に各種実の割れ方について記す。

クリは、SX2184の種実集中地点を土ごと取り上げたもの（縦28cm×横25cm×深さ15cmの直方体）を、整理作業時に水洗しながら取り上げた。その中で、果皮の半分以上が残存しているものは117点で、内71点（60.7％）が両面とも残存しており、この71点を計測対象とした。破損部位（頂部破損－Ⅰ類・下部破損－Ⅱ類・側部破損－Ⅲ類）と潰れている状態（上下方向－A類・左右方向－B類・前後方向－C類）で分類した（第147図）。その結果、破損部位は下部破損（Ⅱ類）がやや多いが、ほかの分類との差は大きくない。潰れの状態は、分類に限らず前後方向のもの（C類）が多く認められる（第148図）。トチノキもクリと同様の観察を行った。ただし、潰れの状態については、前後と左右の区別が難しいため、上下方向（A類）と横方向（B類）の２種類に分類した（第149図）。SX内から出土した39点を対象とする。破損部位は側部破損（Ⅲ類）が最も多く、次いで頂部（Ⅰ類）、下部（Ⅱ類）、頂部＋下部（Ⅰ＋Ⅱ類）の破損しているものがほぼ同数認められる（第150図）。潰れの状態は上下に潰れているもの（A類）が７割程度を占め、頂部破損（Ⅰ類）と頂部＋下部破損（Ⅰ＋Ⅱ類）は全点Ａ類に分類され、破損部位と潰れの方向が一致する。オニグルミは、まず破損の程度で３分類した。すなわち、破損のないもの（ナシ）・破損が内果皮まで及ばないもの（カケ）・破損が内果皮に及ぶもの（ワレ）である。また、「ワレ」に関しては、破損箇所を大きく上下左右の４か所に分け、破損箇所の数（1か所-A類、2か所-B類、3か所以上-C類）で大別し、さらに破損箇所でⅠ～Ⅳ類に細別した（第151図）。SX763・958-6層・1686・1688・2353の半割のものを対象とする（第152図）。破損の程度は、全体的な傾向として「ワレ」が主体を占める。また、「カケ」はSX763・958において多く認められる。「カケ」に分類されるクルミは頂部のみ破損しているものが多く、SX958では60.4％、SX763では75.6％を占める。「ワレ」の中での細分は、各SXともＡ類が３～５割程度を占め、SX958-6層を除いて先端部のみ破損しているもの（ＡⅠ類）が主体を占める。Ｂ類は２～５割程度を占め、遺構によって占有率が大きく異なる（第153図）。

クリは破損部位に明瞭な傾向は認められなかったが、縁辺のみが破損していることは注目される。一方、トチノキは破損部位と潰れの方向が一致しており、両者に関連性が認められる。オニグルミは、「ワレ」が主体を占める傾向が、対象としたSX出土のクルミすべてに該当する。また、「ワレ」の中で頂部破損が比較的安定した数を示すことと、「カケ」の部位が頂部に多く認められることは関連性があると考えた

遺構番号	地区	層位	オニグルミ					クリ	トチノキ	炭	備考	遺構番号	地区	層位	オニグルミ					クリ	トチノキ	炭	備考
			完形	半割（ナシ）	半割（カケ）	半割（ワレ）	合計点数								完形	半割（ナシ）	半割（カケ）	半割（ワレ）	合計点数				
P766	10E	3	2				2					SK914	15E	12				12	6				
P825	15E	4		1	1	5	3.5	○	○			SK1714	23B	8	7	6	2	10	16	○	○		
P948	17B	5				1	0.5				SB7ピット	SK1734	23BC	5	6	2		1	8.5				
P1663	20B	1				1	0.5				単層	SK1751	24B	10				6	3				
SK717	9E	4				1	0.5					SK1760	24B	6	1				1				
SK733	5D	4	2				2	○	○	○		SK1763	24B	9	7(6)			1	7.5				
SK757	5・6E	2		4	3	16	11.5			○		SK1764	24B	14	1			2	2				
SK817	15E	8				2	1					SK1766	24B	11				2	1				
SK851	15D	4	1				1					SK1770	24B	11	1				1				
SK854	14E	5	2				2					SK1781	24AB	9	5				5	○		○	
SK873	15D	1		1		4	2.5				単層	SK1784	24B	12				1	0.5				
SK887	15E	3				1	0.5					SK1786	26B	2	9(5)	7	6	421	226.0			○	
SK893	15E	3	2				2					SK1807	24B	8	1			2	2				
SK899	16E	4	1				1					SK1932	16E	9	1				1				
SK909	15D	2	1				1			○		SK2221	16・17F	11		1	5	27	16.5		○	○	
												SK2350	24F	1	5(1)				5				単層

※1 合計点数は、完形を１個、半割を0.5個として算出した。
※2 完形の括弧内の数値は齧歯類による食害品を表す。

第86表　P・SK最下層出土オニグルミ一覧

い。クルミの破損については、破損の状態から「叩く」作業が予想される。他遺跡の類例として、御井戸遺跡出土の半割のクルミは、8割弱が本遺跡分類の「ワレ」に含まれると考えられ、廃棄層から出土している点も本遺跡と共通する［前山1996］。

民俗事例では、クリを乾燥させた後に棒で突いて果皮を剥くものがある［名久井2002］。この場合、表・裏面に亀裂が入り、本遺跡のような状態では残らないと考える。また、礫を用いて叩く場合も果皮・種皮は破片となる可能性がある。果皮及び種皮の一部のみを破損させ、子葉を取り出す方法としては、「切る（裂く）」作業による子葉の取り出しが予想される。また、トチノキについて「トチオシ」・「ネジキ」などと呼称される木製の道具で挟み込んで種皮を割り、子葉を取り出す民俗事例があり［渡辺1981ほか］、本遺跡出土例に対して同様の方法が用いられた可能性もある。ただし、これらを実証するためには、実際に実験的研究を試みる必要があろう。いずれにしても完形に近い子葉の獲得を目的とした可能性がある点は注目したい。

P・SK内出土の種実について　ここではP・SK内から出土したオニグルミに注目した。オニグルミが出土しているP・SK46基中18基の遺構の最下層から、完形のものが出土している（第86表）。完形品のみか、完形品が破損品を上回る遺構が多数を占める。また、クリ・トチノキが伴う遺構は4基に止まり、ほかの種実が混入することは少ない。これらのP・SKは貯蔵穴の可能性が高く、種実を選択していたことも考えられるが、クリ・トチノキは遺存しにくいことも考慮に入れなければならない。完形のオニグルミが出土したP・SKの平面分布は、主にSD1420右岸3地区及びSD1420右岸1・2地区に分布する。また、最下層からの出土ではないが、P2392からは完形のオニグルミ・トチノキが、SK2276からはナラガシワ・トチノキがまとまって出土している。

9　動物遺体・昆虫遺体（図面図版301、写真図版24 ・ 201）

本遺跡では動物遺体の出土量は極めて少ない。これは遺物包含層の酸性度が高めなため、骨が残りにくい条件であったと考えられる[1)]。生のものは貝類以外ほとんど出土しないが、焼骨は若干出土した。その多くは川岸の堅果類廃棄範囲や炭化物集中範囲の土壌をウォーター・セパレーションした結果、検出できたものである。特に、中央地区の12Fグリッドの遺物包含層については、土壌をすべて層位単位に取り上げてウォーター・セパレーションを行い、動物遺体の検出に努めた。この結果、骨角器のほか、貝類・魚類・爬虫類・鳥類・哺乳類を確認できた。これらは国立歴史民俗博物館の西本豊弘氏に分析を依頼し、その結果報告を関連諸科学編第Ⅲ章に掲載している。ここでは、骨角器と調査中に検出した貝類について述べる。なお、昆虫遺体は現地調査あるいはウォーター・セパレーションで認められたが、少数で、いずれも小片である。種は同定しておらず、肉眼観察による特徴の記述に留めた。

A　動 物 遺 体

1）骨　角　器（65～67）

65は骨、または鹿角製の可能性があり、SX2018-1層（S4層期、22F14-1グリッド）から出土した。残存長1.4cm、幅0.35cm、厚さ0.25cm、重さ0.12gを測る。正面観で、一方の側面に向かって緩く湾曲し、非対称な形状を呈する。側面観でも緩く湾曲して先端に達する。断面は裏面の浅い窪みにより、一面の窪んだ隅丸の五角形状を呈する。全体によく研磨されており、特に先端部の研磨は側縁に平坦面を形成するほど入念である。釣り針や刺突具のような尖った先端を有する製品の一部と考える。

66は鹿角製で、SD19-23層（S1層期、8F3-4グリッド）から出土した。残存長3.4cm、幅1.35cm、厚さ0.85cm、重さ4.11gを測る。鹿角を縦に分割したものであるが、欠損のため全形は把握できない。断面は扁平な隅丸五角形で、裏面は鹿角の内側部分のため海綿状で窪んでいる。風化・摩耗のため、加工・使用痕跡は不明確であるが、組織方向に斜行する線状の痕跡が正面に認められる。

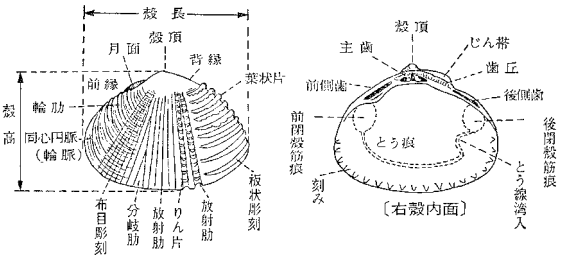
67は骨製で、用水路工事立会い調査（層位不明、11G2-1・3、11G7-1・3グリッド）により破片状態で出土したもので、ある程度の大きさを有するものにａ～ｆの枝番を付した。ａ～ｆは、まとまって出土したため同一個体の可能性も否定できないが、特にｃとｄは側面に抉りが施されており、同一個体の可能性が高い。また、風化により不明確ではあるが、大半のものは全体によく研磨されているようである。ｄの抉り部には長軸方向に直行する擦痕が認められる。ｅでは内側の窪みが浅くなり、断面は略三角形状を呈する。一端が長軸方向に直行してほぼ平坦であるが、人為か否かは判断できない。ｆは正面の長軸方向に直行する剥離により、尖鋭な端部を呈する。裏面の浅い窪みは組織に沿った剥離によるもので、また窪みの右側の面には長軸方向の擦痕がみられる。なお、ｃ・ｄのような抉りを有する類例としてやや形状は異なるが、神奈川県称名寺Ｂ貝塚と千葉県鉈切洞穴で出土した「結合鉤」を挙げることができる［金子・忍沢1986；（財）千葉県史料研究財団2000］。

2）貝　　類（写真図版201-1～25）

SD19の川底から土器と共にシジミガイ・イシガイ・カラスガイ？がまとまって出土したほか、SD19

1）岡山理科大学 富岡直人氏による本遺跡の土壌ph値調査時にご教示いただいた。

右岸斜面やSD1420右岸斜面２・SD1420左岸斜面１などで出土した。カルシウム分が流出し、殻皮のみのものがほとんどである。詳細は観察表を参照願いたい。なお、貝殻各部の呼称は第154図［波部・小菅1967］に従う。



第154図　貝殻各部の名称（［波部・小菅1967］から転載）

シジミガイ科ヤマトシジミガイ（1～12）　S4～S3層期のSD19の川底（23層）から土器とイシガイ・カラスガイ？に伴ってまとまって出土した。全形を残すものは少なく、１枚になっているものや破片が多い。種類はヤマトシジミガイと考えられる。幅（殻長）が計測できたものをみると、平均値は約3.5cmだが、3cm以下のものは少なく、稚貝が含まれていないことが特徴である。残存率から26個体分がある。このほか、SD1420右岸斜面２の19E7グリッドSX1528（SD1420-B7層）からもヤマトシジミガイが一括で出土した。殻長の平均値は約2.3cmで、SD19出土のものより小振りだが、大きさが揃っていることが注目される。合計10個体分が認められる。

イシガイ科イシガイ（13～23）　SD19-23層及びSX1528でヤマトシジミガイと共に出土した。SD19-23層出土のものは殻長の平均値が約5.2cmで、4cm以下のものはわずかに過ぎない。合計20個体分が認められる。SX1528出土のものは殻長の平均値が約3cmで、SD19-23層出土のものよりかなり小さい。合計11個体分が認められる。SD1420右岸斜面３のSX1688（SD1420-2b'層）からは大きめのものが合計６個体分出土した。このほか、SD19左岸斜面のSX763（SD19-10層）、SD1420右岸斜面３のSX1686（SD1420-2a'層）、SD1420左岸斜面２のSX2020（SD1420-E6b層）からもSD19-23層出土のような大き目のものが少量出土した。

イシガイ科カラスガイ？（24・25）　全形を知り得るものがほとんどなく、種類は特定できない。SD19-23層から多くが出土し、SD19左岸斜面のSX112-9層からも破片が出土した。正確な殻長を計測できないが、10cmを超えるものが多く含まれる。SD1420右岸３地区のSX1688（SD1420-2b'層）においても類似した貝が出土しているが、後側歯が明瞭でないことから同科ドブガイの可能性もある。

以上から、本遺跡ではヤマトシジミガイ・イシガイ・カラスガイ？が食されていたものと考える。そして、ヤマトシジミガイとイシガイは大きさが均一で稚貝がないという特徴を見出すことができた。ヤマトシジミガイは汽水域に生息し、イシガイとカラスガイないしドブガイは河川などに生息する［波部・小菅1967］。当時の遺跡周辺は淡水域であり、ヤマトシジミガイは本遺跡よりさらに西側の阿賀野川や加治川の河口域か、北方を流れる荒川河口周辺で獲得された可能性がある。また、いずれの貝も稚貝が含まれず、一定の大きさであることから、選択的に獲得・消費されたものと考えられる。検出された貝はごくわずかだが、本遺跡と同時期の豊栄市鳥屋遺跡においても多量のヤマトシジミガイが出土しており［関・石川ほか1980］、沖積地における貝の利用形態を考える上で重要な資料である。

B　昆虫遺体（写真図版201-26・27）

26はSX1528-3層から出土し、長さ1.2cm、幅0.5cmを測る。濃い緑色で、全体にごく薄いため土圧で潰れている。27はSX1689から出土し、長さ0.3cm、幅0.26cmを測る。光沢のある青みがかった緑色で、全体に浅い窪みが無数に認められる。26と比べると厚みがあり、高い硬度を有する。

10　アスファルト（図面図版301、写真図版24）

A　アスファルト塊・アスファルト入り土器（68～71）

本遺跡からはアスファルトの塊が出土している。アスファルト塊はいずれも包含層から出土している。68は10F2グリッドのS1層に所属する。長さ10.2cm、幅8.0cm、厚さは1.9cm、重量48.2gで、扁平な半円形に近い形状を呈し、表面は比較的なめらかである。本来は1個体であったが、取り上げ時に2つに割れてしまった。69は15E1グリッドのS3層に所属する。長さ10.6cm、幅7.1cm、厚さ1.4cm、重量69.5gの扁平な長方形状を呈し、それに長さ6cm、幅1.5cm程度の棒状のものが付属する。68とは異なり表面には凹凸が認められる。そのほかに、17D21グリッドのS3層から大きさ3～5cm程度の小塊状のアスファルトが出土している。なお、68は産地同定の結果、新潟県内で採取された可能性が高い（関連諸科学編第Ⅴ章4参照）。本遺跡から近距離に位置するアスファルトの産出地として、黒川村黒川油田や新津市大入地区が挙げられる。なお、朝日村元屋敷遺跡で出土したアスファルト塊は、新津市大入産のほかに、秋田県二ツ井産の可能性のあるものも出土している［小笠原ほか2002］。70はアスファルト入り土器であり、出土地点は17Eグリッドの S1層から出土している。土器は底部の立ち上がりから5cm程度残存しており、深鉢または甕と考えられる。内部に5mm程度の厚さで、表面がなめらかなアスファルトが付着している。アスファルト入り土器及び土器内部にアスファルトが付着している類例として、津川町大坂上道遺跡［滝沢1995］、朝日村元屋敷遺跡［滝沢ほか2002］などが挙げられる。

B　黒色付着物（アスファルト）が認められる石器・石製品

石器及び石製品の中にはアスファルトと考えられる黒色物質が付着しているものも認められる（第88表）。石器の中では石鏃に多く付着しており、550点中77点（14.0％）に認められる。付着部位は基部に付着するものが大半を占め、中には2～3mm程度の厚さで付着しているものもある（図面図版224-181）。なお、朝日村元屋敷遺跡［酒井2002］は石鏃6,143点中1,565点（25.5％）、新発田市舘ノ内遺跡［田中ほか1992］では94点中13点（13.8％）に付着している。石匙は、抉り部に平行する2本の黒色付着物が認められる（図面図版226-296）。また、磨製石斧では、刃部を除くほぼ全面に付着しているもの（図面図版229-361）や、側縁部を中心に付着しているもの（図面図版238-510）がある。石製品では、独鈷石のくびれ部付近に付着している（図面図版241-566）。アスファルトは膠着材として用いられたと推定される。石鏃は矢柄、磨製石斧は斧柄と固定させるために用いられたと考えられ、独鈷石もまた柄状のものが装着されていたことが予想される。石匙はアスファルトの痕跡から、紐状のものを巻き付けた後に塗布されたものと考えられる。

遺物番号	種別	地区	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	平面形	断面形	備考
68	アスファルト塊	10F2	S1	10.2	8.0	1.9	48.24	半円形	扁平	
69	アスファルト塊	15E1	S3	10.6	7.1 (10.5)	1.4 (2.4)	69.47	長方形	扁平	括弧内の数値は棒状の部分を含めた数値
71	アスファルト塊	17D 21	S3	4.9	4.4	1.9	28.82	円形	肉厚	複数個に壊れて出土。法量は最大個体の数値
70	アスファルト入り土器	17E	S1	3.4	4.6	0.7	56.76 （土器含む）			数値はアスファルト塊部分の最大値

第87表　アスファルト塊・アスファルト入り土器観察表

器種	点数	器種	点数
石鏃	77	不定形石器	4
石鏃未成品	4	磨製石斧	2
石錐	6	磨石類	1
石匙	1	剥片類	1
筺状石器	1	石製品	1

第88表　黒色付着物が認められる石器

第Ⅵ章　弥生時代以降の遺構・遺物

1　遺　　構

A　遺構の検出状況

本遺跡の主体時期である縄文時代晩期終末より新しく、紫雲寺潟形成より以前の、つまり弥生時代～平安時代の遺構がいくつか検出された。SD19付近では両岸に小規模な柱穴が多数あり、何らかの構造物があったものと考えられえる。また、SX51は縄文時代晩期終末の遺物包含層を切って形成された泥炭層の範囲で、その上面からⅥ層が堆積する直前のヒトの足跡が多数検出された。また、SX51周辺に性格不明の土坑などがある。このほか、調査区北端のSD1は縄文時代晩期終末の遺物包含層を切って形成されたものであり、SD1420左岸地区で検出されたSX2016は縄文時代晩期終末の包含層を切って形成された泥炭層の範囲である。なお、SD1については本編第Ⅲ章4.Cを参照願いたい。

B　遺 構 各 説

1）SD19周辺の柱穴（図面図版302、写真図版202）

6～8A～Dグリッドにおいて小規模なピットを多数検出した。これらは上端長径が20cm以下で、断面形はV字状ないしU字状である。検出面からの深度は35cm以下と浅めのものである。柱根は残っていない。覆土はいずれも暗灰黄色粘土を主体とする褐色系のもので共通しており、縄文時代晩期終末の遺構覆土には認められないものである。SD19の覆土上位から掘り込んでいるものがいくつか認められることから、縄文時代晩期終末以降と判断した。底部は鋭く尖るものが多いことから打ち込み式の柱と考えられるが、配置から建物とは考えにくく杭列などがあったものと推測される。

2）土坑・性格不明遺構（図面図版303、写真図版202・203）

SK759　13Dグリッドで検出されたもので、平面形は楕円形を呈し、底面には不規則な凹凸が認められる。覆土はSX51の2・3層に類似する。人為的に構築されたものでない可能性が高い。

SK760　13Dグリッドで検出されたもので、平面形は楕円形を呈す。覆土はSX51-2層が堆積しており、人為的に構築されたものでない可能性が高い。

SK761　13Dグリッドで検出されたもので、平面形は楕円形を呈す。S3層を切り、覆土はSX51に類似する褐灰色粘土を含む。人為的に構築されたものでない可能性が高い。

SK861　15～16C～Dグリッドで検出されたもので、平面形は不整形を呈す。覆土は西側からの流入が認められ、1層はSX51-1層に類似する。出土遺物はほとんどなく、性格は不明である。

SX146　8～9Cグリッドで検出された長径10.7m、短径2.8mの不整形の大形のものである。断面形は弧状で浅く、底面に不規則な凹凸が多数認められる。覆土は腐植土が多く、SX51-1層に類似する。

3）足　　跡（図面図版305・306、写真図版203）

SX51のほぼ全面にわたり足跡とみられる遺構が検出された。これを遺構略名SFとし、ほかの遺構と

同様に番号を付して記録した。総数は1,225基である。検出はすべて平安時代の洪水砂層であるⅥ層直下のSX51の上面であり、覆土は図面図版306、SF1296セクション図のとおりこのⅥ層が流入したものである。したがって、足跡が形成されてまもなくⅥ層が堆積し窪みに流入したために今日まで残ったものと考えられる。

足跡をすべて掘り上げた結果、①足跡の単位が同一方向に向かって右左交互に連続して残ること、②図面図版306、P480のように足の指や土踏まずの跡が残っていること、③足跡の下部の地層が押されて変形していること、の３点からヒトの足跡と判断した[1)]。足跡の方向は不規則で、多方向から直線的あるいは蛇行して進んだことが観察できる。規模は大きいもので長さ約18cmであり、後に収縮したことを考慮しても現代の成人男性よりは小さいといえる。水田跡で検出されるような直線的な足跡が並列する状況や、同一方向に複数が進んだことは確認できず、水田や畑の可能性は低いと考えられる。SX51から古代の土錘が出土していることなどから、潟などにおける漁を目的として訪れたヒトが残した可能性もある。

4）泥炭層範囲（図面図版304・308、写真図版203・204）

SX51　８～17A～Ｆグリッドの広範囲にわたり検出されたもので、主に未分解の腐植土を主体とする泥炭層が堆積する範囲である。各セクションから縄文時代晩期終末の遺物包含層を切って形成されていることが分かる。西側に向かって深くなるが、Ⅶｄ層以下に変化は認められず、地盤沈下により形成されたとは考えにくい。底面は大小の凹凸が著しいほか、覆土中にⅦ層土がブロック状に混在することから、樹木の根や倒木による撹乱の影響が推測される。覆土は腐植土を含む粘土層であり、特に１層は腐植土の占める割合が高く、同じようにⅥ層直下に形成されたSX2016-1層の状態と共通する。花粉・種実・樹種の各分析から古代の周辺の植生は湿地性の植物が繁茂していたことが明らかになっており、SX2016-1層に堆積する多量の腐植土中にも湿地を好むエゴノキ種子が含まれることから、SX51も同じように湿地性の樹木の影響を受けて形成されたものと考えられる。遺物は縄文土器と古代の木製品が少量出土した。

なお、SX51の東端にSX741を検出した（図面図版304）。内部に周辺の土層が乱れず吸い込まれるように堆積することから、地盤変動などによって陥没した可能性がある。この周辺では縄文時代晩期終末の遺物包含層もほかより厚く堆積することから、縄文時代晩期から陥没が始まった可能性がある。

SX2016　23～27E～Ｆグリッドで検出した。縄文時代晩期終末の遺物包含層であるSD1420-E5層を切って形成される。南側に向かって深くなり、深度約40cmを測る。c-c'セクションをみると、SD1420-E18層～E8層は層厚が一定なまま南側に傾斜しているが、SX2016の覆土は南側に向かって層数を増しながら堆積していることから、縄文時代晩期終末以降に地盤が南側に緩やかに傾斜し始めたことによりSX2016が形成された可能性が高い。覆土は灰褐色シルトなどが堆積し、部分的に大形の自然木が混入する。１層はエゴノキ種子を含む未分解の植物が多量に混入する。出土遺物は縄文時代晩期の土器がごくわずかに認められるほかはほとんどない。

なお、このエゴノキ種子について年代測定を行ったところ紀元790年ないし紀元770～890年という結果が得られた。直上に平安時代の洪水砂層Ⅵ層が堆積することから、Ⅵ層の形成年代は８世紀末～９世紀末以降であることが分かり、出土土器を考慮すると９世紀末ないし10世紀初頭であろう。

1）独立行政法人 産業技術総合研究所 長森英明氏から現地でご指導・ご教示いただいた。

2　遺　　物（図面図版309～316、写真図版205～210）

本遺跡では本編第Ⅴ章で示した縄文時代晩期の遺物以外にも、Ⅵ・Ⅴ・Ⅳ層より弥生時代以降の遺物が出土している。種類としては土器・土製品・金属製品・木製品である。木製品の大半は16グリッドより北側に偏り、そのほかも調査区の北側に偏る傾向にある。層位的には大半がⅥ層から出土しており、Ⅴ・Ⅳ層からはわずかである。なお、後で詳しく述べるが、Ⅵ層からは9～10世紀頃（平安時代）のものが大半を占め、Ⅴ・Ⅳ層からは時期の特定は難しいが、Ⅵ層出土のものより新しい時期（中世？）のものが出土している。

A　土　　器（1～19）

土器・土器片は合わせて20点出土し、その内の18点を図示した。なお、3～19に対して用いた時期は春日真実氏の土器編年案［春日1999］によったもので、Ⅲ期は8世紀初頭～前葉、Ⅳ期は8世紀後葉～9世紀初頭、Ⅴ期は9世紀前葉～中葉、Ⅵ期は9世紀後半～10世紀初頭前後に相当する。

弥生土器（1）　口縁部は直立気味に緩く内湾する。外面では、口縁部と体部を区画するように2条の沈線が施され、口縁部には縁に沿って2条の沈線が施されている。さらに、それら横位の沈線に挟まれた口縁帯には、沈線に囲まれた刺突紋が施されている。体部外面には不明瞭であるがLRの縄文が認められる。一方、内面はナデかミガキにより仕上げられ、口縁部には縁に沿って浅い窪みが認められるが、厚く付着した炭化物により不明瞭である。また、口縁部の残存率が低く不明確ではあるが、波状口縁を呈する可能性がある。時期は不明であるが、弥生時代中期から後期にかけての所産であろうか。

古墳時代土師器（2）　口縁部は緩く湾曲しながら外に開く。口縁端部は若干つまみ上げられ、外傾する面が形成されている。古墳時代前期に所属する甕の口縁部と考える。

須恵器（3～7）　3は有台杯である。底部外面にヘラ削り痕及び削り残しが認められる。また、台と身の接合痕も明瞭に認められる。4は無台杯である。口縁端部に向かって体部厚を徐々に減じ、端部付近で外方に軽く屈曲する。底部外面にはヘラ切り痕が明瞭に認められ、底部と体部との境にはヘラ切り後に軽いナデが施される。5は杯の口縁部片である。口縁端部内面は肥厚し、体部よりも厚みを持つ。胎土は精緻で、細かい黒色粒子を含むことから、佐渡小泊窯産の可能性を指摘できる。6・7は杯蓋である。6は外面では体部から口縁部に向かってスムーズに移行し、内面には弱い返りが付く。7は、内外面共に、体部と口縁部の境に明確な稜が認められ、口縁端部の断面は逆三角形状を呈する。なお時期は、（6・）7がⅣ期、3・4がⅤ期、5がⅥ期の所産と考える。

土師器（8～18）　8～10は椀で、9・10の内面は黒色処理されている。8は全体的に摩耗しているため不明瞭であるが、底部外面には糸切りの痕が認められる。9はロクロナデにより外面に凹凸が認められる。10は全体的な摩耗のため不明瞭であるが、底部外面には回転運動による砂粒の動きが認められる。11～18は小甕の口縁部、底部、体部片である。11の体部外面には、不規則な方向のハケ目が認められる。13・14は体部の張りに若干の相違があるものの、同じような器形・法量のものである。15は13・14のようなものの下半部となるものである。16の外面は摩耗・剥離のため不明瞭であるが、丸底を呈するようである。なお時期は、11（・16）がⅢ期、12が（Ⅳか）Ⅴ期、そのほかがⅥ期の所産と考える。

表採資料（19）　調査区の南東に位置する調査区外の畦畔上で採集された須恵器の甕（体部片）である。

外面にはタタキ痕、内面には同心円状の当て具痕が明瞭に残る。胎土の状況から佐渡小泊窯産である可能性を指摘できる。小泊窯産であればⅥ期以降の所産となる。

B 土 製 品（20～22）

土 錘（20～22） 全出土品を図示した。すべてⅥ層に所属するSX51内の接近した位置（10Cグリッド）から出土している。3点とも細型の管状土錘［小池ほか1993］であるが、両端に向かってすぼまるもの（20・21）と、ほとんどすぼまらないもの（22）に分けられる。前者の表面はほぼ平滑であるが、後者の表面は雑なナデ調整のため、凹凸が目立つ。なお、孔径は3～5mm、重量は10～15g前後である。

C 金 属 製 品（23・24）

金属製品は8点出土したが、大半が破片であったので、種類の判別できる2点を図示した。

鏃（23） 先が二股に分かれた、いわゆる雁又の鏃である。庇状の部分を境に、二股の鏃身と角釘状の茎からなる。鏃身の二股部の断面形は左右共に、頂点を外側に向け、内側を平らにした略正三角形を呈し、先端に向かって徐々に幅・厚さを減じる。茎も先端に向かって徐々に幅・厚さを減じる。Ⅴ層からの出土である。雁又の鏃は奈良時代以降に盛行するようである［津野1990］が、それらの大半は、本例のように立体的な鏃身ではなく、扁平な鏃身を有する。本例の詳細な時期は不明である。

短 刀（24） 全長40cm前後、刀身の幅は3cm前後と推測される平棟平造りの短刀である。茎部には、植物質で幅5～6mmの紐状のものが螺旋状に巻き付けられ、その外側に木質部が残存し、柄部をなしている。目釘穴は径5mm程で斜めに穿たれ、中軸線上からやや外れている。Ⅳ層からの出土である。中世の所産であろうか。なお柄の木質部は調査後の保管により、収縮・破損状態にある。

D 木 製 品（25～137）

弥生時代以降の木製品は総数2,238点で、加工材・加工材片は2,027点、成品・部材は211点を数える。平面的には調査区北側、特にSD19やSX51を中心に分布し、層位では大半がⅥ層から出土している。これらの内、成品・部材を中心に113点を図示した。また、それらを中心に樹種同定を行った結果、約60％の木製品にスギが用いられていることが判明した（関連諸科学編第Ⅶ章3参照）が、本遺跡から出土した弥生時代以降の木製品全体に占めるスギの割合は、さらに高くなると考えられる。このことを踏まえて、以下の各説ではスギ以外の材を用いている場合に限り、その樹種名を記すこととした。

田下駄（25） 縦長の板目板材に、直径1.5cm程の鼻緒孔3孔が穿たれた田下駄の足板である。長軸方向の両木口面には浅い段が作り出されており、ここにほかの部材を組んだものと考える。前方の孔を挟んで両脇に摩耗した箇所が認められるが、これを足の指の痕と考えると、右脚用である可能性が指摘できる。

鍬（26～29） 出土したすべてを図示した。欠損により全形を確認できないが、形状から二分できる。すなわち、26は上部（孔部）から下部（刃部）にかけてスムーズに移行するが、27～29は中央部に上部と下部を分ける明瞭な段を有する。加えて、前者は板目板材を、後者は柾目板材を利用している。木取り・形状に差異が認められるが、利用樹種はすべてアサダである。なお、27のみⅣ層からの出土である。

浮 子（30） 断面長方形の細い角材の両柾目面において、両端部付近を刻み込んだものである。県内では、新潟市的場遺跡［小池ほか1993］において類似品が多量に出土している。

弓（31・32） 両者共に片方の弭のみが残存した丸木取りの弓である。両者の弭は、相対する方向から

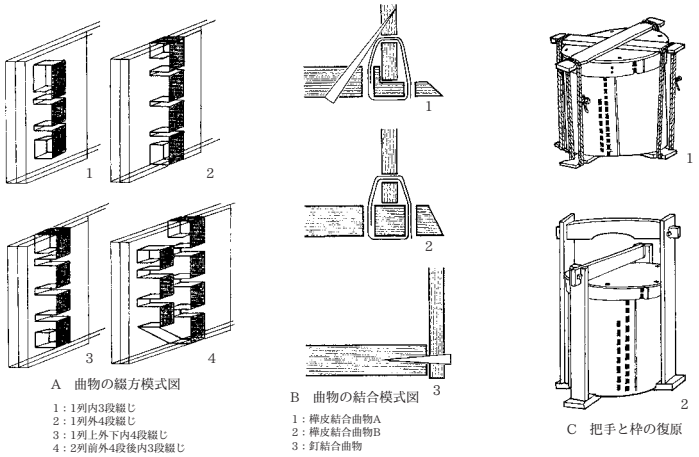
扁平な板状に削り残され、その先端を周囲から削って収める点で共通するが、31の弓幹の径は32の約1.5倍であり、31の弦長は少なくとも32よりは大きなものになると考える。両者ともイヌガヤ製である。

草履芯（33）　左右対称のもう一枚を合わせて、片足分として利用される。厚さ4mm程の板目板材を三日月形に仕上げ、弧を描く側の縁辺に、幅8mm程の方形の切込みを作出している。両面には長軸方向に直行して、線状の加工痕が無数に認められる。Ⅳ層からの出土である。中世の所産であろうか。県内では、白根市馬場屋敷下層遺跡［遠藤ほか1983］・浦廻遺跡［本間ほか2003］、新津市上浦遺跡［坂上2003］で類例が認められる。

下　駄（34）　前後に削り出しの歯を持つ一木造りの下駄である。全体的に摩滅しており、本来は現況よりも、ひと回り大きいものと考える。孔の位置から左脚用であることが分かる。Ⅳ層からの出土である。

沓（35）　爪先部外面から底部外面にかけて、緩やかなカーブを描き、一面で形成されており、この面と、甲部を含む側面との境にのみ明確な稜線が認められる。側面はやや内湾、内傾しつつ、立ち上がる。爪先部内面には刳り抜いた際の長軸に直行する加工痕が明瞭に残る。また、爪先側の底部内面には、径1.0～1.5cmの窪みが横に並んでおり、一番左側の窪みが最も大きかったことから、右脚用の可能性も指摘できる。ケヤキ製である。県内では、新潟市的場遺跡［小池ほか1997］で2点出土している。

円形曲物（36～50）　36～41は曲物の側板、あるいはその一部である。側板の綴じ方は、外側に現れる樺皮の列で「1列」、「2列」に分け、それぞれの列を構成する段数で「2段」、「3段」などとする。そして、綴じ始めと綴じ終わりが上下縁の内側か外側かで、「内綴じ」、「外綴じ」あるいは「上外下内綴じ」、「上内下外綴じ」とする。これらを組み合わせて、「1列内3段綴じ」、「1列外4段綴じ」、「1列上外下内4段綴じ」などとする（第155-A図）［奈良国立文化財研究所1985；春日2000］。36は内面にケビキ（切れ目）が刻まれていない唯一の例である。40は高さ11.4cmを測る大型の曲物の側板である。綴じ部に接して「工」の焼印が押されている。41は側板のみ完存のものである。釘穴は5か所に均等に配され、3か所で綴じられている。42は綴じ部が欠失し、側板と底板が遊離していたが、出土状況から同一個体と判断したものである。側板内面には縦方向と斜め方向のケビキが刻まれ、斜格子状を呈する。また、底板は外面の径が内面の径より大きく、断面台形を呈する。43～50は柾目板材を主体とした円形の板材（以下、円形板）である。底、蓋の判断は難しいが、円形曲物に係る部材の可能性が指摘できるため、ここで記述を行う。43～45は周囲に釘孔が認められず、摩滅のためか、端部は丸みを帯びている。なお、45は片面の全残存範囲に黒漆が付着している。その漆は、付着面側から非付着面側へ流れ落ちるように縁辺に付着しているため、本来、付着面側が上面であったと考える。46～50は縁辺部に釘孔、あるいは木釘の残存しているものである。46・47は摩滅のためか、端部が丸みを帯びている。一方、48～50は縁辺部に明確な稜線を有するものである。50は直径32.2cmを測り、



第155図　曲物（［奈良国立文化財研究所1985］より転載）

本遺跡出土中で最大のものである。ほかのものと比較すると明らかに釘孔が多く、1か所に対して2本以上の釘で留めていた箇所も認められる。なお、43・45がⅤ層、47がⅣ層からの出土である。

方形（楕円形）**曲物**（51）　欠損により全形をとどめないが、1か所のみ残存していた綴じ部から方形（楕円形）曲物の底板の一部と考える。側板との結合方法は「樺皮結合曲物B」である（第155-B図）。ヒノキ製である。

曲物部材（52・53）　52・53は曲物に係る部材と考える。前者は板目板材の両柾目面の端部付近を刻み込んだもので、蓋と身を固定する把手・枠の部材と考える（第155-C図）。アカマツ製である。後者は両面に窪みを持つ「柄」部と、湾曲し先端にいくに従って薄くなる「身」部を持つ篦状木製品である。これは、柄部を上に、身部の内湾した面を曲物の側板に接して、同形のものを相対する位置に装着し、それらの間に棒材などの部材をわたして、曲物の把手として用いたものと考える[1)]。

蓋（54）　半分のみ残存した円形の蓋と考える。中央部には一辺2cmの方形の窪みが作出されており、ここにつまみを取り付けたと考える。

挽　物（55～76）　55～59は無台盤である。56は場所によって体部の傾きが異なる。57は全体的に身に厚さがあり、しっかりしたつくりである。口縁端部に狭い面を持つ。58の体部は口縁端部に向け、徐々に厚さを減じる。59は残存率が低く、全形を確認できないが、器高1.1cmと浅いつくりである。60～65は有台盤である。60は底面に一部黒漆が付着しており、全面に黒漆が塗られていたものと考える。61・62は明瞭な台が作り出されたものでなく、底部寄りの体部外面に溝を巡らし、台部を意識したものと考える。なお、前者の体部中位には不明瞭ながら、屈曲点が認められ、後者の底面には一部炭化範囲が認められる。63・64は明瞭な台部を作り出したものである。前者の器高は4.1cm、後者は1.5cmで、両者の身の深さには差が認められる。65は残存率が低いため確実ではないが、底径が40cm前後の大型のものである可能性がある。66はほぼ全形の確認できる稜椀である。底面に十字方向に残る長さ1cm弱の痕は轆轤（ろくろ）の爪痕と考える。67は欠損によりつまみ部付近の形態は確認できないが、推定つば径20cmの蓋である。66のような稜椀とセット関係となるものであろうか。Ⅴ層からの出土である。68は体部の高さと台部の高さが約1：1の有台椀である。69は上部の形態が不明であるが、椀の高台部と考える。70は上部外面からほぼ垂直に体部外面が作り出され、上部と体部の境を面取りした蓋である。なお、天地逆で盤状の容器の可能性も指摘できる。71・72は黒漆塗り容器の一部である。71は口縁部径推定13cmの椀の体部である。口縁端部に向かって徐々に厚さを減じる。72は皿状容器の底部である。内外面には、轆轤による同心円状の削り痕が明瞭に残る。なお、71はⅣ層からの出土である。73・74は柾目取りの円形板で、先述の円形板（43～50）と形態的に類似するが、ケヤキ材が用いられているので、簡易な蓋、あるいは縁辺に若干の高まりがあることから、盤の未成品か失敗品の可能性も指摘できる。75・76は柾目取りで厚さ約2.5cmの円形板である。両者は形態的に類似するが、75はケヤキ製、76はスギ製なので、前者は椀などの容器の粗型、後者は径の小さい曲物の底板の可能性を指摘できる。

刳　物（77）　体部が外側に斜めに立ち上がる平面長方形の槽（ふね）である。長軸方向では内外面共に体部と底部の境に不明瞭ながら稜を有するが、短軸方向では年輪に沿うように削り込まれており、体部から底部へスムーズに移行し、断面形は弧状を呈する。また、体部厚は底部の約2倍である。ケヤキ製である。

木釘状木製品（78）　両端をほぼ同じように尖らせた削り出しの棒状成品である。箸にしては、細く、

1）東京都立大学 山田昌久氏よりご教示いただいた。

短いため、曲物の側板と底板を繋ぐ留め具に使用する木釘のようなものの可能性も指摘できる。

箸状木製品（79～83）　径0.5～1.0cm程で先鋭な端部を持つ削出棒材を箸状木製品とした。約40点出土しており、断面形が長方形や六角形のものが主体を占める。79は断面偏六角形で、両端部とも端部に近い位置から斜めに削り込んでいるため、さほど先鋭ではない。81は一端を丸く収めるものである。82・83は両端が先鋭なものである。なお80がⅤ層、82・83がⅣ層からの出土である。

火錐棒状木製品（84～86）　断面略円形で、径1.5cm前後の削出棒材を火錐棒状木製品とした。84・85は径がほぼ一定し、両端を丸く収め、一端が炭化している。86は84・85とは異なり、両端で径に差があり、端部も炭化していない。したがって、86は火錐棒ではない可能性も指摘できる。

形　代（87～100）　87は馬形である。鞍の表現は認められない。88・89は全形を確認できないが、何らかの形代の可能性も指摘できる。90～100は斉串である。90～92は側面に切れ込みを入れないものである。90は両端部をほぼ同様の圭頭状に収めているが、91・92は一端を圭頭状に、もう一端を先鋭にしている。93～97は両側面に切れ込みを入れ、ささくれ立たせたものである。大半は一端を圭頭状に、もう一端を先鋭にしている。98は両側面の相対する4か所2組をⅤ字形に切り欠いたものである。100は頭部を欠失しているが、ほかのものと比較して明らかに傑出した長さを有する。なお、92のみⅣ層からの出土である。

器具部材（101～119）　101～104は棒状の器具部材である。102は断面略円形の削出棒材である。中央部にのみ長軸方向に直行する細かい線状の加工痕が認められる。103は一端を周囲から削り込んで、四角錐状の先端を削り出し、その先端から5～6cmの位置に2～3条の浅い溝を巡らせている。104は端から約1cmの位置に刻みを入れ、端部をコブ状に削り残した断面略三角形の棒材である。なお、104はⅤ層からの出土である。105～108は板材の両側面の端部付近に、Ⅴ字の抉り込みを一側面に当たり2か所、合計4か所配したものである。105・106は中軸線上に、均等に配置された孔を有する。なお105の一方の柾目面には、端側の抉り込みに比べて小さなⅤ字の抉り込みが、4か所に認められる。107は中央部に8.4cm×1.8cmの長方形の孔が穿たれている。108は穿孔されておらず、片面が木目に対して斜めの面を形成しており、両板目面は並行ではない。先述した52のような曲物に伴う把手・枠の部材である可能性もある。109・110は中軸線上に方形の孔が穿たれた板目板材である。109の二つの孔は均等に配されている。110は109に比べ、薄い板材を利用しており、貧弱なつくりである。111は両柾目面中央部に台形状の抉り込みが施された板目板材である。112は断面方形の角材の両端を相対する両柾目面から削り込んで、ほぞ状に削り残したものである。113は断面長方形の角材の両柾目面を削り込んで、両端を尖らせており、中央部に直径約1.2cmの孔が穿たれている。特に使用痕などは認められない。114は断面半円形の削出棒材で、端から約2cmの位置に刻みを入れ、そこを境に端部側をコブ状に削り残したものである。115は断面略正方形の角材を、端から約4.5cmの位置を境に周囲から削り込んで、徐々に細く仕上げている。116～118は箱状の容器の側板・部材と考える。116は片面にのみ、約1cm間隔でケビキが刻まれている。117には径5mm前後の孔が3か所に穿たれており、1か所に木釘の一部が残存している。118は一端を段状に削り残している。119は角材の一端を周囲から削り込み、一回り小さい角材状に削り残し、ほぞ状にしたものである。なお114・119はⅤ層からの出土である。

建築部材（120～124）　120は先端を尖らせるように削り込んだ断面多角形の角材である。全表面に加工が施されており自然面は残らないが、全体的に摩滅を受けており加工痕は不明瞭である。先端部に近い位置に、30cm×10cm程のゆるやかな窪みが認められる。トネリコ属製である。121は3段以上の梯子

である。径20cm前後の原木を半割し、木表側を削り込み、段を作出している。また下端部は尖らせ、樹芯部付近を抉り込み、逆凹形を呈している。コナラ節製である。122は角材の両木口面を径4cm程の棒状に削り残したもので、部材同士を繋ぎ合わせる部材の可能性がある。123・124は建築部材を製材する際に出た端材の可能性がある。123の一方の木口面には明瞭な手斧の痕が認められる。なお124はⅤ層からの出土である。

用途不明品（125～136）　125・126は栓状木製品である。125は断面が扁平な三角形の角材を、端から約8cmの位置を境に、棒状と板状の部分に分けている。ブナ属製である。126も端から約10cmの位置を境に、板状と棒状の部分に分けている。また棒状の部分の先端は削り込みにより、やや尖鋭である。127は断面略正方形の角材で、両端を均等に2～3cm残して、長軸方向に平行する全稜線を弧状に抉り取っている。また柾目面と木口面で形成される稜線を1か所のみ面取りしている。128・129は断面偏三角形の柾目板材で、片面には中軸線上の稜線を切るように浅い窪みが抉り込まれている。両者ともクリ製である。130は断面略楕円形の板目板材で、先端は鋭く、端から約12cmの位置より抉り込み、そこを境に段が形成されている。131は板目板材の端から約11cmの部分を境に角材状と板材状の部分に分かれている。132は板目板材を用いた篦状、あるいは櫂状のものである。残存部側の側面は緩やかに外に開くが、もう一方はより急角度で開いており、完形であれば幅広の部分は左右非対称の形状を呈する。また、幅広の部分は片面にのみ段が形成されている。133は一端がⅤ字に抉り込まれた柾目板材である。1か所の角に偏って、径4～5mmの孔が2つ穿たれている。134は一端が平たく、もう一端が尖鋭な削出棒材である。135は断面略円形の削出棒材で、所々炭化しており、その部分が窪んでいる。136は断面偏三角形の加工材片である。不明瞭ではあるが、波状文のような文様が彫り込まれているようである。トネリコ属製である。なお134がⅤ層、126がⅣ層からの出土である。

木　簡[2]（137）　上端部を圭頭状につくり、下端部は横一文字に折れているが、人為か否かは判断し難い。幅は一定しているが、3文字目付近から緩く湾曲し、平面観で蛇行した形状を示す。厚さは一定して1mm程である。また両面には不明瞭ながら長軸方向に直行する線状の加工痕が認められる。

墨痕は正面にのみ認められる。摩耗により肉眼での観察は難しいため、赤外線を用いて判読を行った。なお、墨痕による文字は、1文字目と2文字目の間隔が2文字目以降の文字間の間隔よりも広いため、1文字目と2文字目以降で構成されているようである。

【釈文】

〔梵字ヵ〕

「□　南無阿弥陀佛」

2）本木簡の解釈について、相沢央氏（長岡技術科学大学講師）からご教示をいただき、田中一穂（埋文事業団 嘱託員）の協力を得た。

第Ⅶ章　ま　と　め

1　青田遺跡の住居と集落

宮本　長二郎（東北芸術工科大学）

A　はじめに

青田遺跡は新潟平野を北東から南西方向に流れる旧河川の両岸に営まれた縄文時代晩期末の集落遺跡である。現在の海抜高で０～1.5mの低地集落で、平安時代（9世紀）以降は紫雲寺潟の中央湖底に埋没したために、集落遺構の残存度は極めて良好である。

遺構は掘立柱建物57棟（SB58を除く）、土坑79基などである。当地方の縄文時代晩期末の時期は、西日本では弥生時代が始まる時期でもあるが、縄文時代から弥生時代への転換期における青田遺跡の住居形式と集落構成の復元考察を行うことによって、この遺跡の歴史的な位置付けを行うことにしたい。

B　青田遺跡の住居形式と集落構成

平面類型　57棟の掘立柱建物の平面形式は、A・B・C・D型の４形式がある（第156図）。桁行が長く梁行の短い方形平面の梁行両側面中央柱が外に張出す亀甲形平面を身舎として、その一方の張出側面に桁行の短い落棟が付き、落棟の妻側中央柱が張出すA型は12棟、落棟中央柱がないB型は15棟、落棟のないC型は26棟、長方形平面のD型は４棟である。ただし、B型には落棟中央柱を柱筋に立てる例（SB4・40）と、落棟側柱を１本のみ検出している例もB型に含めた。

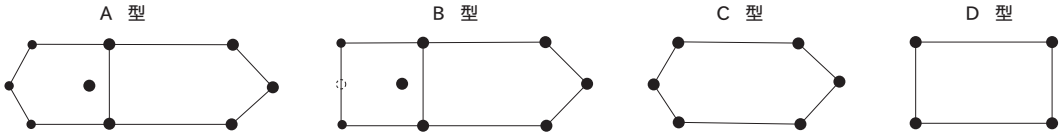
亀甲型住居遺構の規模・面積・柱径・柱深さなどについて、分析した一覧表（第89表）によって考察を進める。

住居規模　亀甲型住居の類型と規模の関係をみるために、各類型の身舎の平面積を９㎡、11㎡、14㎡、20㎡を境にして、類型別の住居棟数を示したのが第90表である。

この表で明らかなようにA・B型とC・D型は平均面積で４㎡程の差がある。両形式の規模差は特に９㎡を境にして顕著で、落棟付きのA・B型は最小8.1㎡の１棟であるのに対して、C・D型は９㎡以下が18棟で、C・D型の過半数（58％）を占め、機能的にA・B型とは使い分けていたことがうかがえる。

A型とB型の差は、11㎡を境にして傾向を異にするが、平均面積は大差なく20㎡以上の大形住居はB型の３棟（SB4・31・36）であるが、11～20㎡の中規模住居はA型の方が平均規模大であり、B型は大形と中形で規模の差が拡がっている状況を示す。

A・B型とC・D型の規模・形式差は機能的な差、すなわち、家族の主従関係による住み分けを示す



第156図　青田遺跡掘立柱住居平面類型

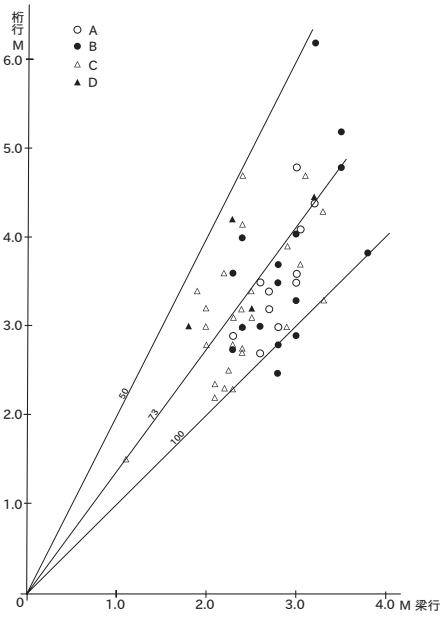
SB	母　屋（m）			落　棟		母屋面積（㎡）	平面類型	母屋柱（cm）		母屋妻柱（cm）		落棟柱（cm）		落棟妻柱（cm）		柱掘形	添杭数	残存柱根
	桁行	梁行	棟持	桁行	梁間			径	深さ	径	深さ	径	深さ	径	深さ			
1	2.5	2.3	3.4	-	-	6.6	C	10～13	45～70	12	50・60	-	-	-	-	混	2	6
2	2.35	2.1	3	-	-	5.7	C	12	40～45	12	(25)・45	-	-	-	-	半	-	2
3	2.3	2.3	3.2	-	-	6.3	C	6	35	12	40・25	-	-	-	-	半	-	2
4	6.2	3.2	8.2	3.4	2.5	23	B	45～50	55～65	45・40	70・40	23	55・60		(55)	掘	-	8
5	3.5	3	5	2.6	2.2	12.8	A	18～23	95～115	15・23	133・85	12	98・100	15	68	半	-	9
6	3.7	2.8	5.5	2.4	-	12.9	B	21～23	60	18・25	60・65	15・20	42・55	-	-	掘	-	8
7	3.6	2.3	5.2	2		10.1	B	10	55～75	12	55・60	6	20	-	-	半	4	5
8	4	2.4	6.1	3.1	-	12.1	B	14～24	75	28	70・75	13・20	55・68	-	-	半	1	8
9	2.9	3	4.5	2.4	-	11.1	B	10	45～74	15・9	60・78	13	30・42	-	-	半	-	8
10	(3.2)	2	3.9	-	-	7.1	C	9	31	10・12	30・50	-	-	-	-	半	-	3
11	3	2.4	(3.8)	-	-	8.2	C	10～12	47～62	8	30	-	-	-	-	半	-	4
12	2.8	2	(4.4)	-	-	7.2	C	8～11	24～63	14	22	-	-	-	-	混	-	5
13	2.3	2.2	(4.1)	-	-	7	C	9～11	44～60			-	-	-	-	打	-	4
14	3.6	2.2	4.5	-	-	8.9	A	10～19	50～80	18	48	-	-	-	-	半	1	6
15	4.4	3.2	6.6	2.6	2.5	17.6	A	18～26	50～70	30・34	74・80	23・26	48・60	17	38	掘	3	8
16	3	2	3.7	-	-	6.7	C	6	28	11	26・35	-	-	-	-	半	-	4
17	3.2	2.7	4.2	-	-	10	C	8～30	21～45	13	43・60	-	-	-	-	混	-	6
18	2.8	2.8	4.7	2.2		10.4	B	11～18	70～135	16・15	74・45	7	38	-	-	混	2	6
19	3	2.9	3.9	-	-	10.7	C	11～13	43～70	10・12	48・55	-	-	-	-	半	1	6
20	2.5	2.8	4.1	1.8	-	9.2	B	10～14	40～116	12・13	42・39	9	38	-	-	半	-	8
21	2.75	2.3	4.3	1.7		8.1	B	9～11	80～90	12	68・123	10	72	-	-	半	3	6
22	2.9	2.3	4.9	3	3	9	A	17～20	63～90	25・24	90・80	17	40	11	88	混	1	8
23	3	2.4	5	2.4		9.6	B	13～16	77～140	15・11	80	12	96	-	-			6
24	3.4	2.7	4.9	2.65	2.4	11.2	A	14～20	51～72	11・15	62・76	16	42	15	48	混	3	8
25	2.2	2.1	3	-	-	5.5	C	11～12	65～78	11	55・63	-	-	-	-	打	-	6
26	3.6	3	(5.9)	3	(2.7)	14.2	A	12～22	68～126	21	70	11	60			混	4	7
27	3.1	2.5	4.1	-	-	9	C	10～17	61～79	15・16	73・74	-	-	-	-	半	-	8
28	3.5	2.8	5.3	2.6	-	13.3	B	13～20	80～94	12・18	33・78	15	36	-	-	混	-	7
29	3	2.8	4.2	1.95	1.7	10.1	A	9～12	35～55	14・17	78・92	9・12	41・46			混	-	8
30	4.05	3	6.05	2.65	-	15.2	B	16～21	78～97	20	77・98	24	55	-	-	半	-	7
31	5.2	3.5	6.85	2.5	-	20.1	B	21～28	70～110	26	98・120	22	100	-	-	混	-	7
32	4.1	3.1	6.1	2.95	2.6	15.6	A	16～30	75～100	17・18	100・135	11・18	63・84	27	55	混	-	9
33	3.4	2.5	4.7	-	-	10.1	C	12～19	38～65	18	50	-	-	-	-	打	-	4
34	4.15	2.4	5.3	-	-	11.3	C	10～12	36～78	8・12	38・52	-	-	-	-	打	-	6
35	3.2	2.4	(4.5)	-	-	9.2	C	15～19	59～68	13	32	-	-	-	-	打		4
36	4.8	3.5	6.8	1.8	-	20.3	B	31～34	68～70	26・28	99・64			-	-	掘	-	7
37	3.5	2.6	4.9	2.4	2.3	10.9	A	16	100～130	16・20	130	8	38		(35)	半	-	6
38	3.2	2.7	4.8	2.2	1.95	10.8	A	16～18	90～130	10・18	115・150	9	56		(20)	半	-	7
39	3.7	3.05	(4.8)	-	-	13	C	12	80～54	10	75	-	-	-	-	半	-	5
40	3.3	3	5	1.8	1.3	12.5	B	14～18	100～80	10・11	115・100		(40)	20	48	半	-	7
41	4.45	3.2				14.2	D	12～23	41～66	-	-	-	-	-	-	掘	-	4
42	2.75	2.4	4.4	-	-	8.6	C	10～11	45～84	15・10	32・44	-	-	-	-			5
43	3.9	2.9	6.2	-	-	14.6	C	22～17	75～130	23	135	-	-	-	-	混	-	5
44	4.7	3.1	6.5	-	-	17.4	C	20～28	32～63	28	45	-	-	-	-	掘	-	6
45	2.8	2.3		-	-	6.4	C	10	40～75	15	55	-	-	-	-	半	-	5
46	1.5	1.1	2.1	-	-	2	C	7～12	20～64	8・6	35・66	-	-	-	-	打	-	6
47	3.4	1.9	4.1	-	-	7.1	C	8～10	24～70	11・6	30・34	-	-	-	-	打	1	5
48	4.3	3.3	5.2	-	-	15.7	C	14～22	67～80	27・17	80	-	-	-	-	掘	-	6
49	2.7	2.6	4.5	2.1	1.8	9.4	A	12～24	36～56	21・14	190・66			21	100	混	4	8
50	4.8	3	6.1	2.5	2.4	16.4	A	24	(46～56)		(33)				(30)	掘		1
51	2.7	2.4	6	-	-	8	C		(40)		(58)・(40)	-	-	-	-			0
52	3.1	2.3	4.4	-	-	8.6	C	12	50	12	43	-	-	-	-	半	-	3
53	3	1.8		-	-	5.4	D	6～10	40～62	-	-	-	-	-	-	打	-	3
54	(4.7)	2.4	(5.4)	-	-	12.1	C		(65)		(45)	-	-	-	-			0
55	4.2	2.3	-	-	-	9.7	D	8～13	48～93	-	-	-	-	-	-	半	-	3
56	3.2	2.5	-	-	-	8	D	7～15	70～148	-	-	-	-	-	-	半	-	3
57	3	2.6	5	2.4	-	10.4	B		77～140	15・11	80	12	96	-	-	半	1	2

（注）空欄は不明、（　）内数値は柱根のない掘形を計測、柱掘形欄は混合式、半打込式、掘立式、打込式の略

第89表　亀甲形住居分析一覧表

ものと考えられるが、A型とB型の差は、落棟の構造形式の差、すなわち時期差を示すものと思われる。当遺跡ではA・B型の柱穴の重複関係がないため、両者の時期差は分からない。A型は縄文時代後・晩期に出現する先行形式であったと仮定すると、住居形式がB型に変化したのちは、この集落の大形住居、すなわち首長住居の規模が拡大し、かつ、首長住居とほかの住居との格差が大きくなったことを示すものと思われる。

なお、D型は遺構数が4棟で少なく、平均面積もC型とほぼ同じであることから、D型遺構はC型の妻柱が欠失したものである可能性が大きい。



第157図　住居類型別規模分布図

平面形式の変化　　第157図は縦方向を桁行寸法、横方向を梁行寸法とする住居規模の類型別分布図、第91表は梁行寸法÷桁行寸法×100＝柱間比、及び桁行寸法、梁行寸法の分布範囲を示したものである。ただし、A型のSB14とSB50の柱間比62％余はA型の柱間比分布範囲から大きく外れるために表記から除いている。

柱間比の分布からみたA・B・C型の傾向は、A型の分布範囲が狭く、A型を核にしてB・C型は柱間比の幅が拡がり、桁行が長くなる長棟化傾向が顕著である。前記のようにA型からB型に変化したとする仮説が成立するものとすれば、A型からB型への変化に伴って、B型の長棟化傾向が加速し、A型のSB14・50は新しい傾向を示すものと考えられる。

集落の住居構成　　亀甲型住居の規模と類型による以上のような仮定のもとに、青田遺跡集落の住居構成について考察を進めよう。

A型からB型に住居形式が変化し、それぞれにC型（D型を含む、以下同じ）が伴うものとして第90表の類型別住居規模から、A型の大形住居は14～20㎡の4棟、中形住居は9～14㎡の8棟、B型の大形住居は14㎡以上の4棟、中形住居は8～14㎡の11棟、C型の中規模住居は9～20㎡の13棟、小型住居は9㎡以下の17棟である。第90表のA・B型住居の面積は落棟を加えると3～4割増え、C型の中形住居はA・B型の中形住居とほぼ同規模である。

C型住居をA・B型に伴う付属屋として振り分けることができないため、全期を通して大形住居8棟、落棟付き中形住居19棟、落棟なしの住居30棟に分け、この住居規模・形式別棟数を単純に大形住居1

類型	9㎡	11㎡	14㎡	20㎡	最小（㎡）	最大（㎡）	平均（㎡）	棟数
A	1	5	2	4	0	8.9	17.6	12.5	12
B	1	5	5	1	3	8.1	23	13.2	15
C	15	5	3	3	0	2	17.4	9	26
D	2	1	0	1	0	5.5	10.1	9.3	4
合計	19	16	10	9	3			10.8	57

第90表　亀甲形住居類型別・母屋規模別棟数

類型	柱間比（％）	桁行寸法（m）	梁行寸法（m）
A	75～96	2.7～4.8	2.3～3.2
B	60～110	2.5～6.2	2.3～3.8
C	50～100	1.5～4.7	1.1～3.3

第91表　住居類型別柱間比・柱間寸法分布範囲

棟を１時期とみなせば、８時期の変遷があり、１時期には大形住居１棟に対しＡ型期は中規模住居２棟、Ｂ型期は中規模住居３棟、落棟なしのＣ型住居はＡ・Ｂ型期共４棟の構成となる。

ただし、Ｃ型住居の規模別棟数は14～20㎡の大型４棟、９～14㎡の中形９棟、９㎡以下の小型17棟あり、大形１棟に対して中形２棟、小型４棟の構成となる。つまり、身舎９㎡以上の住居規模をみる限りでは、Ａ・Ｂ・Ｃ型はほぼ同様の規模別構成を示していることが指摘でき、Ｃ型住居をＡ・Ｂ型住居の付属建物とするよりも、時期を異にしてＡ・Ｂ型よりも古い住居形式である可能性もある。亀甲型平面の住居は縄文時代中期に発生し、同時代後期の新潟県下に普及することから、Ｃ型住居は当遺跡に最も早く進出し、次いでＡ型住居からＢ型住居に変化したとすれば、その住居構成は大形住居１棟、中形住居２～３棟、小型住居はＣ型がＡ・Ｂ型にも存続するものとして１～２棟の集落構成となる。

なお、住居域には２本１対と考えられる柱根や柱痕が数10組想定され、主柱２本の伏屋根式平地住居が成立するものと考えられる。青田遺跡と同じ縄文時代晩期の福岡県江辻遺跡には主柱２本の松菊里型竪穴住居がある［新宅1994］。鳥取県上菅荒神原遺跡では２本１対の柱穴群のみで集落を構成しており、松菊里型の平地住居が同時代に成立していたと考えられ［宮本1999］、青田遺跡においても亀甲型住居に伴う付属建物として作業小屋・物置・産屋などに使われたとすれば、大・中・小形住居に数棟の付属屋が加わって単位集団を構成していたといえる。

この単位集団が１時期１集団とすれば、12期に亘って集落を営んだことになるが、初期と盛期では単位集団の構成を異にし、１期の単位集団も１単位とは限らず、この点は別の視点からの分析が必要である。

C　掘立柱形式（第92表）

掘立柱建物の構造形式は、同じ平面形式でも柱径、掘立深さの違いによって平屋と高床の差が生じ、構造柱と壁体の間柱、壁小舞、床束などの機能的な違いを見分けることが可能である。第89表では母屋（身舎）と落棟に分けて柱径と柱の遺構面からの深さを示して、各住居形式の住居構造を読み取る資料とした。

掘立形式　　掘立柱建物は特殊な構造物を除いて、一般的に柱の掘立深さの３～４倍を地上高として、同じ建物では掘立深さをほぼ揃えるのが、縄文時代以来の通例である。しかし、当遺跡の場合の掘立深さは全体で20～150cmのばらつきと、住居ごとに10cm前後から80cm近い差があり、掘立柱建物の一般的なあり方とは全く異なる傾向を示す。その理由は、この遺跡がシルト上に立地した軟弱地盤であることから、柱は打込式を主としているためと考えられる。

第89表には各住居遺構の柱掘立形式を示し、その形式は掘形式（掘）、打込式（打）、掘形の底から打込式とする半打込式（半）、掘立式と打込式または半打込式を併用する混合式（混）がある。第92表はこれら４形式別に遺構面からの柱深さ、住居別柱の深さの差、柱径、住居別柱径差の幅を示し、それぞれの住居類型の棟数を示した。

柱深さと柱径差　　柱深さは４形式とも最低値が20～30cmで大差ないが、最大値は掘立式と打込式

	柱深さ（cm）	深さ差（cm）	柱　径（cm）	柱径差（cm）	住居数			
					A	B	C	計
掘立式	32～99	13～35	12～50	7～16	2	3	3	8
打込式	20～78	16～46	6～19	3～7	0	0	8	8
半打込式	25～140	9～78	6～28	2～14	4	8	12	24
混合式	21～134	25～64	8～30	3～14	6	3	4	13

第92表　柱掘形分析表

はSB36（深さ99cm）を除いてすべて80cm以下であるのに対して、半打込式と混合式はそれぞれ最大値が140cm、134cmの深さを示し、最大値で90cmを超す例は半打込式11棟（SB5・8・20・21・30・37・38・40・55・56・57）46％、混合式8棟（SB22・26・28・29・31・32・43・49）61％の高い割合を示す。したがって、掘立式と打込式深さの限界は80cmであり、半打込式は80cmを超す柱深さの場合に80cm以下の掘形を設けて、その底から打込式にしていることを示している。

住居ごとの柱深さの差についても、掘立・打込式が半打込・混合式よりも少ないのは、柱住居類型別の差として当然である。類型別にみる差は、掘立式では20～30cmが多く、ほかの遺跡の一般的な掘立柱建物遺構と変わらない。打込式ではその差が掘立式よりやや開いて、40cm前後の差を持つ例が8棟中4棟で半数を占める。半打込式では30cm以上の差がある例は24棟中14棟の過半数、混合式では13棟中9棟で、内7棟が50cm以上の差がある。

柱径についても柱深さに比例して太くなる傾向が認められる。掘立式の柱径は深さに比例せず、住居規模に比例して20cm前後から30余とする例が多いのに対し、打込式と半打込式の柱径は6～20cmにほぼ集中して細く、混合式の柱径は掘立式と打込式の中間を示している。

柱径差については最小2～3cmから最大16cmの間に分布するが、10cm以上の開きがある住居数は掘立式8棟中4棟、打込式なし、半打込式1棟、混合式2棟で少なく、掘立式に差が大きく打込式に差が少ない傾向が認められる。

掘立柱の特徴　柱深さと柱径からみた亀甲型住居の特徴は打込式を主流として、住居内での深さと径のバラツキが大きいことが指摘できる。掘立柱建物の場合、80cm以上の深さがあれば高床建築と考えられるが、本例の場合、打込式柱を持つ住居の多くは30cm以上、最大78cmの柱深さの差があって不揃いであることは、高床式建築として不適当であり、平屋建物として必要な深さを最小として、なるべく深く掘立てる必要性があったものと思われる。

当住居遺構は柱根の残存率が高く、その多くは根腐れによって廃絶し、地中に残されたものと考えられる。また、柱根には直立する住居と傾斜する柱根を持つ住居があり、後者は洪水によって押された結果を示すものと思われる。この洪水を予測して、住居の一部またはなるべく多くの柱を深く打込式にすることによって、洪水に対する抵抗力を強める工夫であると考えられる。

掘立形式と住居類型　掘立柱形式別の住居類型の内訳は、打込式がC型にのみ分布し、掘立式、半打込式、混合式にはA・B・C型が混在する。しかし、A・B型に限ってみると、A型には混合式が多く、B型に半打込式が多くなり、A型からB型への時期変遷をうかがわせる。

掘立式の8棟の身舎平均面積は17.1㎡のうち1棟（SB6）を除いて14㎡以上の大形である。また、ほかの大形住居は混合式であるから、大形住居はすべて掘立式を採用している。大形住居の柱径は柱間寸法に比例して太く、地上高も高いことから打込式にはできなかったことを示している。

打込式8棟の面積は最小2㎡、最大11.3㎡、平均6.1㎡である。C型住居にも大・中形住居に掘立式・半打込式が採用され、9㎡以下のC型小形住居の掘立形式は、半打込式9棟、平均面積7.6㎡、混合式2棟、平均面積6.9㎡であるから、小形住居の場合も住居規模に比例して打込式と半打込式に使い分けていることが分かる。

以上のことから、青田遺跡の集落成立期のC型住居には掘立式を大形住居に、混合式は大・中型住居に、半打込式と打込式は中・小型住居に使い分ける形式が成立し、A型住居には混合式が、B型住居には半打込式が主流となる傾向を示している。

落棟の柱深さと柱径　以上は母屋のみを対象として考察を進めたが、母屋と落棟の柱深さと柱径を比較すると、A・B型のすべての遺構において母屋柱よりも落棟柱の方が柱深さが浅く、柱径は細い（第89表）。その比率は母屋柱の50％前後から100％近いものまでバラツキは大きいが、母屋の各柱と同様の傾向を示している。

このような母屋柱との差は落棟柱の地上高が母屋柱よりも低いことを示し、屋根の高さが母屋よりも低い落棟とする理由である。

D　壁　構　造（図面図版137）

図面図版137の建築部材出土状況は、青田遺跡集落が洪水によって流され、壁体の一部がほぼ原形に近い形で川岸に埋没したかの如くである。北トレンチ北辺の丸太材は径6cmの桁材、これと平行して等間隔に並ぶ径2cm余りの細い材を横桟、横桟の下に直行して組み合い、等間隔に並ぶ同径の材を縦桟、その下面に縦桟と同方向に敷き詰めたように並ぶ径1～1.5cmの材を簀子状材とする。

これらの材の上面の一部は草材で覆われ、その繊維方向が簀子状材と同じであることから、横桟に草束を結わえ付けて外壁草材とし、簀子状材は屋内の内装材としたものと考えられる。

南トレンチにある全長155cm、径3～4cmの長材は湾曲しているが、その一部に伴う簀子状材の長さが南トレンチ北端の簀子状材と等しく、かつ長材は横桟とほぼ平行することから壁下端部の横桟であると考えられる。長材の径はほかの横桟より太いが、桁材の南方25cmに平行する横桟も径3cmでほかの横桟より太いことから、壁面の上端と下端の横桟を太くして格子状パネルを造り、その上・下枠材とする。上枠材は桁に結わえて固定し、下枠材は地表面（屋内床面）に接していたものと思われる。

横桟は北トレンチ内では上枠材を含めて6本が70cmの幅を5等分して平行に配り、1段は約14cmである。南トレンチの簀子状材は北トレンチの簀子状材とは縁が切れて、やや南に位置がずれた状態で残存しているが、北トレンチ南端横桟から50～60cmの長さがある。横桟を残さないが横桟4段分となり、全体では9段分の約126cmとなる。ただし、簀子状材の上端部は上枠より1段分余り南にずれており、壁体が河岸に漂着した時点で縦・横桟と簀子状材、桁と上枠材の縁が切れて位置がずれたと思われる。壁下端部ほど残存状態が悪く、下枠材が大きく位置を変えているのは漂着後の水流に晒された結果と思われ、壁の高さは横桟9段以上、11～12段であったと想定される。

縦桟は北トレンチ内に5本が25cm間隔に平行し、うち1本の上部はY字形に横桟上枠材と中央縦桟を結ぶ斜材がある。この斜材は格子状に組まれた縦・横桟がねじれないように直角を保つための材である。伝統的な木造建築などでは筋交に相当する構造材のようにみえるが、構造的な役割よりは、縦・横桟材を格子状に組む作業を地上で行い、パネル状にしたのちに柱間に建て込んだと考えられ、縦・横桟が細く、捩れ易いパネルを安定させるためにパネルの4隅と中央縦桟の上下に設けたものと思われる。

青田遺跡の平面形式は母屋桁行1間で、その長さは大形住居で4～5m、中・小形住居で2.3～3.5mとする。落棟の桁行は2m前後から3mの間にあり母屋桁行より狭い。

Y字形縦桟と側桁材の位置関係は25cmほどずれているが、桁行方向のずれはないとみなせば、桁材のY字縦桟からの長さは120cm以上を測り、Y字縦桟を壁面中央として折り返せば桁行240cm以上となる。この長さと桁材径が細いことからみて、この壁体は小規模住居の母屋側壁、または中規模住居の落棟側壁と考えられる。

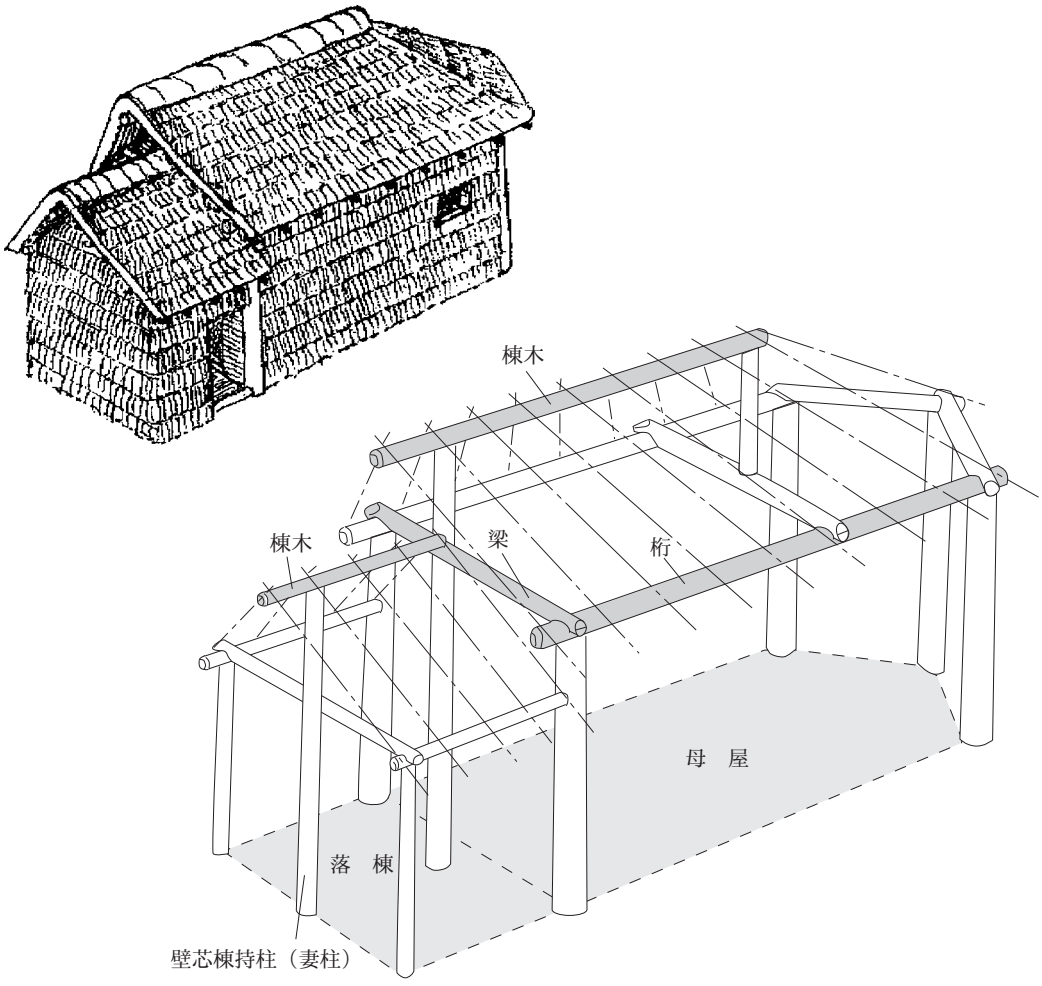
E　亀甲型住居の復元

A・B・C型住居の母屋妻柱の側柱筋からの張出長さは、一方が短く他方を長くして、A・B型では短い方を落棟側とするのが特徴的である。母屋の屋根形式は落棟側を切妻造り、他方を寄棟造りとして、A・B型は落棟側面に、C型は切妻側面に出入口を設けたものと仮定する。

既述のように亀甲型住居は、新潟県下では縄文時代中期以後に出現している（五丁歩・清水上・城之腰・籠峰遺跡など）。これらの遺跡には亀甲型と共に、一方のみ妻柱を張出す片亀甲形がある。中・後期の亀甲形は対称形で、屋根形式は切妻造りまたは寄棟造りの両形式の可能性はあるが、豪雪地帯では一方を切妻屋根として、積雪期には妻部に出入口を設ける形式が妥当である。片亀甲形住居の場合は張出部を切妻造り、他方を寄棟とし、炉は張出部寄りに設けていることから、切妻側は炉上部に天井を張って積雪期の出入口とし、ほかの季節は張出しのない妻側から出入りしたものと考えられる。

C型は縄文時代中期以来の片切妻造り住居の伝統を受け継いで、青田遺跡の集落に出現し、次いで、切妻屋根側に落棟屋根の台所棟が付加されて、母屋の落棟側妻柱は台所内に独立し、台所棟と母屋を間仕切る形式のA型が新たに出現する。

A型の落棟妻側面は浅く張出しているが、C型と同様に妻柱を棟持柱とする切妻屋根で、草壁を棟持柱



第158図　青田遺跡の掘立柱住居復元図

と隅柱の間に設ける形式で、積雪期の出入口をその妻壁面に設けたと考えられる。

Ｂ型は落棟の妻柱を省略または棟持柱を隅柱を結ぶ線上に立てる形式で、妻柱のない場合は、梁上束立てとして切妻屋根をつくる形式である。Ｂ型はＡ型よりも梁行の狭い例が多くなって、Ａ型の突出妻壁面よりも造作が簡単な柱間１間に改めたものと考えられる。

落棟付き住居は青田遺跡が初現であるが、縄文時代中期の大・中規模の亀甲型住居には、棟通りに屋内棟持柱を持つ例が多く、棟持柱を境にして間仕切っていた可能性もある。また、北海道アイヌの住居や北陸地方山間部の根葺民家には落棟を台所棟として、出入口を設け、冬期には薪を収納する場としており、青田遺跡のＡ・Ｂ型住居はそのルーツとみなし得る。

第158図はＢ型棟持柱付き住居の復元図であるが、落棟に妻柱を持たない形式は梁中央に束を立てる形式で、Ａ型はこの図の落棟側切妻側面中央を浅く突出する違いがあるのみで、構造形式はＡ・Ｂ型に違いはない。

Ｆ　ま　と　め

以上の考察により青田遺跡の集落構成と住居形式について多くの新知見を得ることができた。第１点は、縄文時代から弥生時代への転換期にあって、それまでは新潟県を中心に東北地方に広く普及していた亀甲形平面の住居から発展して、落棟付き住居が発生していたことである。落棟付き住居は富山・岐阜県下の根葺民家、北海道アイヌや東北アジア少数民族の住居に伝わる住居と同じルーツを持つものとして極めて重要な資料である。

第２点は、掘立柱の諸形式のうち掘立式や打込式は古くから存在するが、両形式を併せた半打込式が低湿地住居に発生したことである。弥生時代の沖積平野の集落では、高床建築や平地住居の主柱に礎板や枕木を用いて掘立柱深さを均一にする例と、打込式や半打込式を併用する例があり、後者は平屋建物に多く、青田遺跡は軟弱地盤における平屋建物の掘立工法の初現例である。

第３点は、草壁構造を具体的に明らかにし、かつ縦横の木舞による近代壁工法に繋がる最古例であること、特に、筋交を用いる構造力学的概念は中世以後に出現したとされ、高度な建築技術を持っていたことをうかがわせる。また、簀子状材を壁体として用いる例は、奈良県纏向遺跡［橋詰1988］、岡山県津島遺跡［宮本2003］に弥生時代の例があり、その最古例である。

以上の３点はいずれも弥生時代以後の建築に継承される新形式であり、青田遺跡は時代の変換期において、縄文時代の伝統を継承しつつ、弥生時代の新文化をも吸収していたことを示しているといえよう。

なお、集落の住居構成について二とおりの仮説を立てたが、いずれの説にしても住居の規模・形式に差をつけて機能的に使い分けていたと考えられ、この点についても縄文時代の一般集落よりも進んだ社会構造を示して、弥生時代の先駆けとなっているものと思われる。

引用文献

新宅信久　1994　「渡来系稲作集落江辻遺跡で発見された大型建物について」『月刊考古学ジャーナル』9
宮本長二郎　1999　「上菅荒神原遺跡の住居遺構」『上菅荒神原遺跡』 鳥取県教育文化財団
2003　「津島遺跡出土建築材の復原」『津島遺跡４』 岡山県教育委員会
橋詰清孝　1988　「纏向遺跡南飛塚地区発掘調査概報」『桜井市埋蔵文化財発掘調査概報1987-11』 桜井市教育委員会

2　青田遺跡の木質遺物から議論できること

……西紀前一千年紀における木・繊維製品関連技術系の交錯……

山田　昌久（東京都立大学）

A　調査成果と西紀前一千年紀研究の課題

青田遺跡発見の木・繊維製品は、「縄文時代晩期」終末の人類が、日常生活を営むための施設や器具に関する、いくつかの新情報を提供した。発見品の主たるもの、それらから議論可能なことは、以下の４群に整理される。

①施設単位を特定できる柱根群、組み手法の分かる壁面材群、底面をイネ科植物で敷き詰めた土坑。これらは、掘削痕跡研究から施設研究へと考古学の研究スタイルを転換させ、施設構築技術や具体的機能を議論する情報を増加させた。

②平底で浅い船体薄造り丸木舟、櫂、浮と縄で繋げた石錘。これらからは、舟体軽量化（輸送量の増加）、浅水域の航行を考えた船底平面化がうかがえた。また、河岸への乗り上げ時の底面摩滅は丸木舟の操作情報を伝えた。

③籠笊類（木本籤材などを使用した難変形物）、袋（草本材などを使用した可編形物）、平面編みの簾などの編組み製品。「縄文時代晩期」には、これら編組み製品に類型が存在し、その類型に沿った素材選択と編み方が出来上がっていたことを示した。

④所々に結び目を作った赤塗り糸束（紐）、樹皮製曲げ物容器、黒漆塗り弓、結歯式の漆塗り櫛など。これらは、「縄文時代」の人類の日常生活や習俗、そして技術の交錯転換に関する、具体情報を提供した。

日本列島に居住した人類は、考古学者が「縄文時代早期・前期」と呼んでいる時間に、自然界には無い形や大きさの構造体（居住や捕獲などの各種施設）を類型的に作成すること、用途に合わせて素材を選択して器具（日常生活用具）作成することなどの、生活方式の基礎部分を作り上げた。「縄文時代中期」と呼んでいる時期には、同一地居住の長期化と連動する人口増が生じ、資源摂取量を増加させる必要から、周辺環境の開発が進んだ。同一地居住の長期化は、居住者に墓地空間の形成・固定的な祭祀施設の構築を生じさせた。土地保有に関して、他集団との境界確認や入り会い許容そして共同作業空間などの調整が必要となった。血統、帰属村（集団）意識が醸成され、集団の恒常的接触の仕組みが出来上がった（例えば各集落間連絡路の成立）。周辺環境との関係が恒常化し、自然界の資源供給量や再生サイクルを認識するようになった。そして周辺環境の再生を見込んだ資源利用、器具の耐久性向上が測られるようになった。さらに、「縄文時代後期・晩期（厳密には中期後半を含む）」には、未使用・不活発使用だった資源の開発、祭祀施設大型化と恒常的祭祀器具使用、がみられるようになった。

「縄文時代後期・晩期」のこのような動向の背後にあるものは、空間（土地）・周囲の自然（山川海草木獣魚貝）と関わる仕組みを改変する必要性の出現、環境変化・摂取資源の切り替え、適材産地での器具製作、石斧生産地遺跡の存在であった。それに対して、器具の用途別製作の拡大（器具の増種増量）、資源化装置の構築（水利施設に資源処理用構造の出現）、などが図られた。その結果、運用に関わる器具や施設の長期使用に関する制度、集団帰属意識の安定化を図る儀式制度、が生み出された。

現在の日本考古学では、この「縄文時代晩期」終末という時期の研究は、年代観や文化認識について、既存の枠組みに対して根本的な再検討が求められている。青田遺跡に残された新潟県域の土器型式である鳥屋2a式～鳥屋2b式の時期は、東北地方の大洞A2式～大洞A'式の時期と同期であり、「縄文時代晩期末」のものとして位置付けられてきた。その年代は西紀前４世紀から３世紀と考えられてきた。同年代は、近畿地方では、長原式～畿内弥生第Ⅰ様式の土器が使用された時期であるが、前者は「縄文時代」最終末の土器型式、後者は「弥生時代」の土器型式と、時代の異なるものとして整理されてきた。北西部九州で同年代と考えられる土器は、板付Ⅰ式後半～板付ⅡＡ・Ｂ式であり、「弥生時代前期」とされてきた。北西部九州では、それに先行する山ノ寺式～夜臼式土器の時期は、かつて「縄文時代晩期」として認識されていた。しかし、現在では「稲作技術の確認」を根拠に、「弥生時代早期」という時期を設定する意見が出された。その時期は、これまで西紀前６世紀後半から５世紀と考えられていた。

２つの時代は、北海道を除いたどの小地域にも存在すると考えられるようになった。また、稲作の伝播に時間がかかっていることから、地域によって２つの時代の境界は西紀前６世紀に引かれたり、西紀前２世紀に引かれたりと、400年ほど差異を持たせて考えるようになっていた。現在日本国の範囲とされる島嶼群に生息した人類を、日本史として常に一文化として整理する視点が、この各地域の人類生活を何処のものでも「縄文」－「弥生」のそれぞれの文化に収斂させ整理し、それを移行させる構図を描かせてきた。考古学者はこれまで、そうした構想を当然のこととして主張→受容し続けてきた。最近示された「縄文系弥生」「大陸系弥生」という考え方も、結局は「弥生」として大枠を括る考え方を踏襲していることに変わりはない。

また、最近、年代測定法の改変や較正年代の提出などによって、これまで西紀前６～５世紀と考えられてきた「弥生時代早期」の開始年代が、じつは西紀前10世紀にさかのぼるのではないか、という見解が表明された。この考え方の当否について、ここで本格的な議論を行うことはできない。しかし、この弥生時代開始期の遡上説も、依っているところは「縄文－弥生」二分枠の堅持する構想内のものである。確かに、「西紀前一千年紀の日本列島の人類社会変化について、中国の春秋戦国から漢の時期の動向が関係して、『縄文時代』から『弥生時代』へと移行した」という従来の考古学的画期について、再検討をする機会が与えられたことは意味のあることではあった。しかしそれは、「２つの時代の移行時期」が古くなるか否かということが問題なのではなく、古くするとしたら文化移転の構図そのものを見直し、つまり中国稲作農法影響下で「縄文文化」にとって替わる「弥生文化」が成立する、という考え方そのものの妥当性が問題とされるべきなのである。

B　社会論未成熟の「縄文時代→弥生時代」接続法の限界

「縄文時代」と「弥生時代」ついての研究蓄積は、どのようになされ、その背景にはどのような人類社会認識があったのだろうか。「縄文（式土器）時代」という用語は、本来は「縄文式土器の範疇として認定した土器が使用されていた時間」といったくらいに考えられたものであった。やがて、①同じ仲間として区分する「縄文土器」の使用、に加えて、②石器磨製の技術（磨製石斧・石剣石棒）、③居住地遺跡の存在（竪穴式住居址）、④漁労技術の発達（貝塚・獣魚骨）など、証拠が積み重なった。「弥生（式土器）時代」も元々は弥生式土器の使用されていた時間の意であったのが、稲作や金属技術の存在が指摘されるようになった。日本の考古学者は、遺跡研究の先行地であった西アジアやヨーロッパの先史遺跡の区分認識と比較した。ヨーロッパの考古学者が提出した「中石器時代」や「新石器時代」とされた人類社会との近似性か

ら、「縄文時代は日本列島の新石器時代」と説明されることが多くなった。しかし、定住集落は存在するものの、食料生産の技術は未発達な社会とされた。「弥生時代」こそが「農耕社会」であるとされた。

ヨーロッパ世界では、近代考古学成立期である19世紀から20世紀という時期は、キリスト教影響下の世界観が進化論の影響を受けた近代科学による世界観へと大転換した時期であった。近代の価値観に沿って、始原段階の人類足跡も人類「発展」史の初期の動向として整理された。ヨーロッパ・地中海世界とは異なる土地に存在した人類の存在を確認した大航海の時代を経ていたヨーロッパの人類は、アジア・アフリカ・南北アメリカ大陸の人類を自らの文明に比較して、遅れた未開・野蛮なものと考えた。また、時間をさかのぼった遠い過去の人類も未開・野蛮とされ、文明化以前の存在と整理された。このような現在の自分たちの社会が進化の最先端にあるという発想でもあった「発展段階論」的な考え方は、考古学の社会認識にも浸透した。

第２次世界大戦の後、日本考古学に強い影響を与えたG. V. チャイルドの始原社会論などはその産物であった。日本考古学でも、経済発展図式を借用して、狩猟採集経済段階の「縄文時代」から食糧生産段階の「弥生時代」への移行が語られるようになった。経済と社会はどの時間においても固定的に対応させられるものではない。農耕を行う人類社会を、すべて農耕社会と括る事ができないのは、現在の日本社会を「農耕社会」と呼ばないことからも容易に理解できる。同様に、農耕を行っているが経済的な構造化がなされず、社会組織も階層化・制度化されない社会も想起できる。また、稲作の有無で新時代の開始を考える「弥生時代」起源論は、東アジアの先史社会の中で考えるならば、西紀前五～六千年紀により近隣に存在した麦や雑穀類の栽培社会との接触を、全く不問にした農耕社会起源論である。雑穀栽培や堅果・根茎類利用の組織（管理）化を行う社会でも、階層化・制度化が出現することは十分可能である。

人類（史）学のなかでも、先史人類学について技術蓄積期や社会形成期を研究する位置に先史考古学者がいる。考古学はそれぞれの組織化（制度化）を語る立場にいる。それなのに、日本考古学は近代人類学の理論・用語の借用を積み重ね、遺跡事象を未成熟な社会認識下で説明してきたのではないのだろうか。

また、20世紀の終わり、人類は地球資源の有限性を共有し始めた。「発展」としてきたものは実は有用資源の取り崩しであり、それはやがて消滅へと向かう可能性を持っているものであることを知った。人類は発展し続けると考える楽観主義はもはや過去のものであり、人類という存在がやがては終わることも知覚されるようになった。地球が有限であれば、人類もまた有限なのである。人類の課題が「発展」ではなく「生存」となったことと、史観の見直しが必要となったことは連動している。

にもかかわらず、三内丸山遺跡をはじめとする近年の縄文遺跡を一般に説明する機会の多い特定研究者の論調は、「縄文都市」であったり、「縄文文明」であったりと、「先進性や高度に発達した人類文明」として描く旧来の価値観をひきずったものが多い。現代日本の行き詰まりを励ますようなきらいもあるこの評価は、一旦は地域社会を活気付けるかもしれない。しかし、そうした評価は人類の未来に責任のある発言とはいえないだろう。「都市」や「文明」という言葉で「縄文時代」を説明することは、結局は私たちの価値観で過去を測るだけで、「縄文時代」人類の特質部分に対する評価を外してしまっているのである。一方で、そうした論調と一線を画する研究者の中には、「縄文文化（人）」は「（中緯度森林帯）の狩猟採集社会（民）」であると説明しようとする者もいる。しかし、これも前述のように近代人類学の社会観を過去に当て嵌めたに過ぎない。日本列島という空間の「縄文時代」として区分した時間の人類は、社会（＝民）形成の中にある存在であるから、経済システムと環境条件の説明だけではその歴史的特質を捉えるものにはならないのである。人類は、何時どのようにして狩猟採集「民」になったのか。また個別の「狩猟

採集民」化時の特徴はなにか。それを研究する存在である考古学者が、「縄文時代」人は「温帯森林」の「狩猟採集民」であったというのでは、それは科学者として立場を見失った態度でしかない。

C　人類・社会の認識と考古学者の仕事

人類は、①個及び親子関係で生きた時間、②血縁関係や地縁関係を過去や未来に広げて理解して生きた時間、③制度をもとに組織化を図って生きた時間、を経て、現在また制度・組織の弛緩と共に、④個の時間に向かおうとしている。そして、「縄文時代」「弥生時代」は、①②そして③の動向が、日本列島の環境下で始まった時間なのである。

「縄文時代」という時間には、最初から同じ「狩猟採集社会」があって、それが１万年以上続いたのではない。家族・村・地域社会なるシステムを次第に試行錯誤しながら創出したその流れこそが、「縄文時代」という時間に人類が行ったことなのである。①施設構築技術の取得、②空間と施設の保有権の熟成、③保有権を受け継ぐしくみ＝継承権の生成、④家屋に共住することで生じる新たな人間関係の生成、⑤複数の家屋単位の人類が集住することで生じる新たな人間関係の生成、⑥資源獲得や男女の関係構築によって生じる、村を結び付ける人間関係の構築…。考古学者の仕事は、人類学者の創出した社会分類に遺跡情報を当て嵌めるのではなく、以上のような社会化始原期の人類動向を解明することなのである。そうした研究活動によって、考古学者は先史人類学という部分に関わる人類学者としての位置を獲得できるが、現状は遺跡研究への人類学的見解の密輸者に近い存在である。

現在の考古学に必要なのは、「移動・定住」といった生活形態や「採集経済・生産経済」といった資源入手形態を位置付けるような過去の（19～20世紀）尺度とは異なる、社会生成過程を整理する尺度による遺跡研究の創出である。生活物資を整え、各種施設を整備した居住地空間や資源との交渉空間、墓地空間や祭礼空間を作り上げた「縄文時代」の人類は、資材・施設・土地を「所有する」ということについての意識を深めた。また、人類の営みを過去として記憶すること、未来に渡すことといった「継承する」ということについての感覚も養った。血縁関係や男女関係の固着化、またそうしたグループが集まった村のなかでの人間関係の調節システムの創出、固着化した各グループの村空間を配分するシステムの創出。おそらくそうしたことが積み重なって、「縄文時代」のなかで人類は「種族」「部族」という概念に近い社会を形成していったのであろう。

「モノ」を研究対象とする考古学は、まさに「所有」「継承」の対象物を議論する存在である。そうした動向を考える時、青田遺跡の遺物群を含めた「縄文時代晩期」とそれと同時期の「弥生時代早・前期」の木・繊維製品は、日本列島の過去の人類社会にとって、ひとつの大きな社会転換を示す、重要な資料群となるのである。

D　西紀前一千年紀の木・繊維製品

20世紀第四四半期から21世紀初頭にかけて、青田遺跡の資料以外にも、西紀前一千年紀の木・繊維製品が続々と増加した。青森県是川中居遺跡・八幡崎遺跡・土井１号遺跡・石郷遺跡・亀ヶ岡遺跡、岩手県大日向Ⅱ遺跡、秋田県中山遺跡・戸平川遺跡、宮城県山王囲遺跡、山形県高瀬山遺跡、福島県荒屋敷遺跡、栃木県寺野東遺跡、埼玉県寿能遺跡、東京都下宅部遺跡、新潟県御井戸遺跡・大武遺跡・寺地遺跡、富山県桜町遺跡、石川県真脇遺跡・米泉遺跡・チカモリ遺跡・中屋サワ遺跡、福井県四方谷岩伏遺跡、三重県納所遺跡、滋賀県滋賀里遺跡、奈良県唐古鍵遺跡、大阪府安満遺跡・池島福万寺遺跡・山賀遺跡・鬼虎川

遺跡、兵庫県丁柳ヶ瀬遺跡、島根県西川津遺跡・タテチョウ遺跡、岡山県百間川原尾島遺跡、香川県永井遺跡・林･坊城遺跡・川田鴨部遺跡・長池遺跡、愛媛県船ヶ谷遺跡・阿方遺跡、高知県居徳遺跡、福岡県拾六町ツイジ遺跡・橋本一丁田遺跡・雀居遺跡・比恵遺跡・下稗田遺跡、佐賀県菜畑遺跡、長崎県里田原遺跡、大分県下郡遺跡などの遺物である。

これらの遺跡・遺物は、「縄文時代晩期」あるいは「弥生時代早・前期」に色分けされている。しかし、現在多くの考古学者が考えるような、「縄文時代」･「弥生時代」の２つの時代に一文化類型ずつが存在すると考える視点で議論する事は、もはや限界にきている。木・繊維製品資料の蓄積と人類社会理解の深まりは、２つの文化のどちらであるのかといった形では整理できない、新たな社会形相・技術交錯を示し始めているのである。

1）鋤　鍬　類

鍬では九州の菜畑遺跡、橋本一丁田遺跡、里田原遺跡、下郡遺跡、下稗田遺跡、四国の居徳遺跡、林・坊城遺跡、阿方遺跡、山陰の西川津遺跡、タテチョウ遺跡、山陽の百間川原尾島遺跡、近畿の唐古鍵遺跡、東海の納所遺跡、などで出土している鍬身中央部に柄孔をあけた「諸手鍬」と呼称されている鍬は、最古例の居徳遺跡例は西紀前８世紀、最新例の下郡遺跡例、下稗田遺跡例、西川津遺跡例、唐古遺跡例、納所遺跡例などは西紀前３世紀の資料である。この鍬は縦に使用して打ち鍬として使用するだけでなく、横に使用して均し鍬として使用することもあったようで、いわば１本だけで多様な作業を行う「万能鍬」的な器具であった。平面長円形の居徳遺跡例や橋本一丁田遺跡例は、平面長方形の諸手鍬の古形態と考えられるかというと、断定するのはなかなか難しい。そうした使用法で使用して使い減りした最終的な形と考えることもできるであろう。しかし、西紀前８世紀くらいの年代が考えられる居徳遺跡例に対し、橋本一丁田遺跡例は西紀前４世紀くらいのものであるから、時間差としてだけでは解決できない。

しかし、「諸手鍬」は新しくなるにつれてまた東進するにつれて、縦方向使用に偏った刃付けが行われている。この鍬は「縄文時代晩期」に九州・四国など日本列島西部に登場し、「弥生時代前期」に東海地方まで広まる。しかし、日本列島の水田稲作移入後の器具として、鍬はこの形のままでは展開した訳ではない。北西部九州では、青田遺跡の存続が終わる頃（西紀前３世紀末＝板付２新式期）に、新たに出現した鍬身上位に方形柄孔をあけた鍬が再移入された。また、北西部九州以外の地では「弥生時代中期」には鍬身上位に円形柄穴を持つ鍬に変化している（後述）。

この鍬は縦長鍬・横長鍬・又鍬など、打ち鍬・曳き鍬・破砕鍬など機能分化したもので、体系立った水田農耕技術（もちろん畑作も含めた複合的な農耕）の移入を物語る資料といっていいだろう。従来漠然と考えられてきた、中国戦国～漢時代の技術の体系的移入は、この方形柄孔鍬の出現を指標として説明できるのであろう。

そうであるとするならば、居徳遺跡の鍬例のように西紀前８世紀（最新の年代観では西紀前一千年紀初頭くらいになる）から展開する、鍬身中央柄孔の「万能鍬」の使用期は、どのような経緯で日本列島にもたらされたものなのだろうか。従来のように中国側社会の側の、人と技術の拡散要因ではこの時期の動向は説明できない。そもそも、西紀前一千年紀前半の人類動向を、従来型の「弥生時代開始期の遡上」という論理のなかに組み込むことは、必然性のあることなのだろうか。

一方、東日本のこの時期の鍬は、また異なる形状で展開していることが推測される。居徳遺跡例とほぼ同時期の西紀前８世紀例と考えられる大日向Ⅱ遺跡の鍬は、鍬身上部に柄を緊縛固定するための突起部を

つくった例で、屈曲柄と組み合う別形態の資料である。同時期のこの鍬の確認例は少ないが、屈曲柄のほうは先行する縄文時代後期には複数の遺跡からかなりまとまった例が確認されている。この鍬は西紀前二千年紀以前からの使用があった類型とすることができるし、その使用範囲は東日本に限定されるものではなく、日本列島さらに東アジアへと広がっていた可能性も十分考えられる。また、この鍬は必ずしも雑穀類との関係で捉えるだけでなく、土木事業との関係を見逃してはならない器具とすることができる。

そして３世紀末以降における北西部九州以外の地域の鍬は、円形柄孔を鍬身上位に移行？させた鍬と緊縛固定鍬であるから、「弥生時代」の農耕技術を支えた器具は、いわゆる漢式農法の鍬ではなく、西紀前二千年紀以前から系譜をたどる事ができる鍬と、西紀前一千年くらいからの流れが確認される鍬とが混交したものと説明することができる。

つぎに鋤であるが、林・坊城遺跡、橋本一丁田遺跡など西紀前４世紀～３世紀の鋤は鋤身肩部が撫で肩の資料である。この鋤形態は、３世紀末以降の柄の端に把手を持ち肩部を真横にのばし足掛けして踏み込む作業ができる、「弥生時代」を通して九州から東北に分布する形態とは異なる。このような鋤は、東日本の群馬県下田遺跡、千葉県下大田遺跡、富山県桜町遺跡などで、西紀前三千年紀・二千年紀の資料が確認されている。鋤の確認できる最古例は「縄文時代中期」で、画期は３世紀末に存在する。以上のように鍬・鋤共に、その出現をもって従来の「縄文時代」「弥生時代」二分図式で画期する説明は現在ではできない。

2）容　　器

この時期の木胎漆器は大きく３分類される。その１つ目は、北西部九州で確認されている菜畑遺跡、里田原遺跡例は、連続三角紋や格子眼紋の高杯で西紀前４世紀くらいの年代が考えられる。そして２つ目は、瀬戸内地方から近畿地方で確認できる資料で、唐古遺跡で最初に確認された「木の葉紋」を持つ浅鉢とされたものの属する類型である。現在では、縁辺部のつくりと装飾の付く部位から、蓋と考える見解が提出されている。西紀前８世紀の居徳遺跡例、西紀前３世紀の丁・柳ヶ瀬遺跡例、池島・福万寺遺跡例、山賀遺跡例、そして木の葉紋の崩れた西紀前２世紀の岡山県南方遺跡例がある。２つ目の類型の漆器は、西紀前一千年紀前半から使用され、西紀前２世紀には無くなる。つまり、従来の時代・時期区分でいうと、「縄文時代晩期」に出現し「弥生時代中期前半」には消える遺物である。３つ目の類型は、東日本で多くの確認例がある西紀前四千年紀から複数の器種として展開する漆器群の流れにあると考えられるものである。西紀前二千年紀からは、彩文あるいは彫刻装飾が付けられるようになり、西紀前一千年紀の東北地方では、高杯脚部などに透かしを切り込んだ漆器が登場する。

このように漆器の様相は、３種の類型が日本列島を３分して存在するような傾向をみせる。ただし、西紀前３世紀末か２世紀初頭をほぼ境として漆器容器は姿を消す。替わって西紀前２世紀からは、鳥取県青谷上寺地遺跡や石川県八日市地方遺跡・西念南新保などで確認できる柿渋を使用したと考えられる、光沢や乾燥縮みの認められない赤彩容器が山陰から北陸地方を中心に使用されるようになる。

青田遺跡でも出土したケヤキ製の樹皮を使用した曲げ物風容器は、是川中居遺跡、戸平川遺跡、中屋サワ遺跡など、北陸・東北地方で西紀前一千年紀の類例が急増している。九州の凸帯文期の資料には確認例がない。素材として樹皮を使用できる木は、シナノキなどケヤキ以外でもありそうだが、地域が限られるのは文化的な背景と植生的な背景の両者からの検討が必要である。また是川中居遺跡には側板が幅広の深い容器で漆塗りの資料があるが、そうしたつくりの事例は、底部と側部をかがる糸も極細で、かがり方も

三方止めになっている。青田遺跡や戸平川遺跡の１本のふと糸で単純にかがっていく手法の事例は、側板が浅く漆も塗られていない傾向にある。この樹皮製曲げ物は「弥生時代・古墳時代」の出土例もあり、木釘留め、あるいは樺属の樹皮留め技術が始まる薄板曲げ物の製作開始後も、用途によって、あるいは針葉樹材の確保が困難な場合の使用があったことが分かっている。

大武遺跡で出土した、長方形あるいは匙様平面形の脚付きの皿もしくは大型浅鉢は、３脚と４脚の例があり、北海道忍路土場遺跡（４脚例）、岩手県萪内遺跡（３脚例）、埼玉県後谷遺跡（４脚例）、下宅部遺跡（３脚例）などから、西紀前二千年紀にこれらの形態の器物が類型的に存在していたことが分かっている。しかし、西紀前３世紀末以降では匙様平面形の３脚皿は消え、長方形の４脚大型皿（浅鉢）がひとつの器具類型として定型化する。この木製容器は西紀前二千年紀「縄文時代後期」から続き、西紀前３世紀「弥生時代前期」になって（再移入された可能性もあるが）形状と用途（複数）が固定化したものと考えられる。

3）結歯式漆塗櫛

青田遺跡の結歯式漆塗櫛は、横断面円形の歯材を結合わせたものである。この形状の櫛は、西紀前二千年紀の「縄文時代後期中葉」（北海道忍路土場遺跡例など）以降から、西紀前３世紀の「弥生時代前期」「（三重県納所遺跡、京都府太田遺跡、島根県西川津遺跡・タテチョウ遺跡例など）と一部「弥生時代中期」（石川県野本遺跡、愛知県朝日遺跡など）までの時期に使用されている。後者は青田遺跡と同じ時期といえるから、横断面円形の歯材による結歯式漆塗櫛は「縄文時代晩期」を認定していた社会でも、「弥生時代前期」と認定していた社会でも、共通した技術で造られたものであったといえる部分があることになる。青田遺跡の漆塗櫛は、頭部両端が上部に突出する形状をみせるが、西紀前３世紀の櫛はこの形態のもの（静岡県下野遺跡例、米泉遺跡例、太田遺跡例、福岡県下徳力遺跡例など）、頭部上端が直線的なもの（戸平川遺跡例、岐阜県宮ノ前遺跡例、タテチョウ遺跡例、西川津遺跡例など）、両端の結い糸を結び合わせ上部に輪状の装飾部を作ったもの（納所遺跡例、タテチョウ遺跡例など）、の３類に区分できる。ただし、最初の例は頭部端中央にも突起を持つものとそれが無いものとに細分できる。

結歯式の櫛は、タケ・ササ類の断面長方形歯からムラサキシキブなどの木を利用した断面円形歯へと変化する西紀前二千年紀後半から、頭部を両面から削っての厚みを減少させる傾向が認められる。関東地方以北では西紀前二千年紀末から一千年紀前半期に、北海道御殿山遺跡・柏木Ｂ遺跡・美沢１遺跡・美々４遺跡・カリンバ３遺跡、是川中居遺跡、後谷遺跡などで、その薄く作った頭部に切り込みを入れて透かし文様を作り出すことが流行する。青田遺跡の櫛は、頭部の厚みを薄くする加工は無く、両端の突起は結束糸の端部をその突起を利用して固定する仕組みになっている。

「弥生時代前期」でも西紀前３世紀末の資料（大阪府安満遺跡例）や「弥生時代中期」の資料（大阪府若江北遺跡、鳥取県青谷上寺地遺跡、岡山県南方遺跡）の櫛の中には、「縄文時代前期」の鳥浜貝塚例とは異なった、おそらく中国・朝鮮半島の起源と考えられる一木造り削り出し歯の櫛・簪が確認できる。それらの中には、漆が塗られていない資料もある。そして、４～５世紀には鋸挽きの横櫛が登場する。装身具類からみると、画期は西紀前３～２世紀と４～５世紀ということになる。

4）赤塗り結束部付きの糸束

赤塗り結束部付きの糸束は、西紀前二千年紀の忍路土場遺跡例や、西紀前一千年紀の中山遺跡、荒屋敷遺跡、大武遺跡など、近年「縄文時代後・晩期」の遺跡からの発見が続いている資料である。細い糸を赤

漆塗りしたものを20～30本まとめ、所々を結節したところであることまでが確認できることが多い。結節部が丈夫で残存することが多かったため、「糸玉」と呼ばれたこともある資料であるが、本質的には「糸玉」を作った訳ではなく、糸束を結んだものなのである。

光沢もあり漆塗り製品といわれているが、結束可能なやわらかさがあることから、その塗料が漆であるとするならば柔軟化技術についての追求が望まれる。カリンバ3遺跡の墓坑内から発見された紐輪は、こうした糸束の使用状態を物語る一資料となっている。編布製の衣服を留める腰紐などの身体装飾としての使用例である。現在のところこの糸束は、西紀前3世紀以前の「縄文文化」と理解されている範囲で確認できる遺物である。

5）黒漆塗りの弓

西紀前一千年紀には、弓の構造に大きな変化が起こった時期である。①瘤や溝を利用して弦を筈に結ぶ方法から、②弦端に輪を作り筈の突起に輪がけして固定する方法、へ移行するのがこの時期である。その中でも「縄文時代晩期」前半以前の資料は、寿能遺跡例のように①の筈形態をみせ、「縄文時代晩期後半」の荒屋敷遺跡例は、②の筈形態を示していた。「弥生時代」の筈は基本的に②の形態を採るものとなっている。

青田遺跡の黒漆塗り弓は、①②のいずれとも異なるもので、筈の部分に別部材が着けられる構造で、それが外れたような痕跡が見受けられる。どうやら、①から②への移行の間に、③キャップ式の筈に弦を結び、弓の一端か両端に嵌めこんで固定する手法、が存在する可能性が指摘できそうである。①から②への移行は、張りを強くすること、使用時以外は簡単に外して弓の反発力を保つこと、といったメリットが考えられる。③の手法も②に準じた効果が見込まれる。「縄文時代後晩期」に事例の多い、「浮き袋の口」「筈形骨角器」などと呼ばれてきた資料が、③の着脱式筈部材と考えられ、②への移行に先立って西紀前二千年紀に登場し、「縄文時代晩期」と整理されていた地域では一千年紀後半にまで存続していたことを示していると考えられる。

6）丸　木　舟

青田遺跡の丸木舟の特徴は、①舟底部が平坦にカットされているということ、②舟体の作りが薄いということ、の2点である。発掘調査による丸木舟の発見例が増加し、「縄文時代」の細分時期、時には土器型式単位の時期まで限定できる事例が蓄積した結果、「縄文時代前期から晩期」丸木舟の特徴を比較できるようになった。青田遺跡例の2特徴のうち、舟底部が平坦にカットされている点は、同じ「縄文時代晩期」の福井県ユリ遺跡例と共通するものである。西紀前四千年紀の丸木舟は全体を刳り抜いた作りであるが、西紀前三千年紀の中頃以降から舟底部内側に横梁のような削り残し部を作り出すようになり、「縄文時代後期」とされる西紀前二千年紀にはその類型の丸木舟が一般化する。この傾向は舟体の大きさや深さ用材の違いを越えて確認できるから、大枠では時期的な傾向と考えて良いだろう。そして西紀前一千年紀の事例にのみ、舟底部カット例が確認されるのが現状である。しかし、丸木舟のこの作りを時期的な傾向として理解することができるかどうかについては、まだ結論を出す事はできない。内水面で浅瀬走行の必要のある近年の舟（川舟）も平底に作られているが、だからといって「縄文時代」例を同様だと結論付けるのは早急である。用材法や木工技術の違いの部分を議論した上で、判断することが要求される。

その用材法や木工技術と関わる部分があるのが、舟体の薄作りという特徴である。青田遺跡の丸木舟の

舟体は、「縄文時代」のほかの丸木舟が一般的に４～５cmの厚さに仕上げられているのと異なり、約3cmの厚さまで削り込まれていた。これは冒頭に記したように、「縄文時代晩期」に舟体軽量化が図られたためである。しかし、それでは何故、多くの「縄文時代」の丸木舟はより厚いつくりで使用されていたのだろうか。加工対象の材が薄くなっていくと、磨製石斧自体の重量・打撃圧力などを受け止められるだけの強度を保てなくなる。木材の強度、通直性、乾燥容易性などの違いによって、この加工限界は変化する。そして、大型の両刃磨製石斧と小型の扁平磨製石斧あるいは片刃磨製石斧など、保有器具の加工特性によっても、加工限界は変化する。「縄文時代後～晩期」は楔や槌を使った分割技術の出現した時期で、大径材利用が増加し、木材組織の違いによる割裂性の差の認識、収縮・変形への対処法も生まれた。例えば、樹芯を残す広葉樹材は丸太のまま舟体を刳り抜いて行くとひびが入り使用の障害となる。舟体の薄作りを可能にした技術的背景には、木の加工との関係が希薄になった現代人が見逃してしまう、あるいは技術を失いかけている、以上のような工夫が存在していたのであろう。

7）柱　根　群

青田遺跡の成果のなかで際立つものは、この柱根群の発見である。施設単位の柱が実際に確認できるということは、従来柱穴をもとにしか議論してこなかった日本考古学の「縄文時代」住居論を、大きく転換させることになった。一棟ごとの用材同定や、その柱根の年輪解析は、施設構築時の用材獲得法や、同時建設（同時存在）の施設特定という、考古学の集落論研究長年の関心を満たすものとなる可能性がみえてきた。

青田遺跡では、主に、クリ材とクヌギ節・コナラ節材の柱根群が確認できる。東日本の西紀前四千年紀以降の「縄文時代」の建築材は、基本的にクリ材を用材としていた。また西紀前一千年紀以降の「弥生時代・古墳時代」の建築材はクヌギ節・コナラ節材であることが多いとされてきた。その移行期の事例である青田遺跡の柱根群に、両者が存在することは、用材法の変化の時期がみえてきたと考えることができる。また、さらに重要なことはクリ材の成長速度とクヌギ節・コナラ節材の成長速度には違いがあるという点である。材成長の速いクリは20年ほどで柱材に使用できる太さになっている。一方クヌギ節・コナラ節は50～60年ほどかかっている。この状況の解釈として、管理林で初期成長が速くなる開地からの成育か、自然状態の森林化で成長が日陰から始まったかといった違いを考えることが必要となる。その次に樹種ごとの成長速度の違いも考慮する必要がある。2.5～3倍の成長速度差があるとすると、クリの場合であれば1世代の時間で同じ土地で建築資源の再生が見込まれるのに対し、クヌギ節・コナラ節の場合は次世代・次々世代は建築資源をほかの土地に求める必要が生じる。そのようなことから更に、人類の周辺森利用方法の変容や、土地保有意識や保有面積の変容の議論が必要となる。

また、建築材が残存するということで、年輪比較によって同時（近時建設）の施設が説明できるようになってきた。この研究法は、土器の研究が究極まで進められたとしても議論不可能な、同年建設の状況や同時入植者数などを考えることができるものとして、さらに類例の積み重ねが切望される。

8）籠　笊　類

籠笊類の素材と編み方については、青田遺跡の現報告段階では、まだ十分な検討がすすんでいない。ただ、2002年のシンポジウムの際笙として説明した資料は、一見笙のような形状で出土してその形で保管されるようになったが、細部を観察すると、笙と確定するための最低限の条件を確認する事は出来ていな

い。この正式報告で事実誤認であったことを認め、訂正とお詫びをしておきたい。

E　小　　結

以上のように「縄文時代晩期」の木・繊維製品をめぐって、研究状況を概観してきた。その結果説明できることは何かといえば、「縄文時代」「弥生時代」と境界が何処かという確定の議論が困難であること、いやむしろその議論自体の妥当性への疑義である。では、「縄文時代」「弥生時代」の間に、例えば西紀前一千年紀初頭あるいはそれ以前に鍬鋤の伝播「畑作・焼畑」を行った人間－土地関係の時代が存在したといった、別の「移行期」あるいは「新時代」を設定すべきかというと、実はそれだけでも解決できない問題点がある。

むしろこの時間の文化変容は、経済・制度・社会的価値観などの変化が短期間に連鎖するという近世～近現代（日本の場合）の変化とは異なり、諸分野が必ずしも連鎖を起こして変容するものではない時間も存在するという認識での理解が必要とされるのであろう。これまでの日本考古学の行ってきた、土器の時代区分に稲作の有無を重ね、先祖子孫を長期に考えることができる血縁関係や社会組織、時には社会制度も含めて重ねて設定しようとする時代区分観からの離脱こそが、望まれているのである。山ノ寺式土器・夜臼式土器の時期を「弥生時代早期」にするという発想での議論は、結局「稲作農耕技術伝播と農耕社会という社会変容」についての短期連鎖性という認識を超えないでいるのだろう。個人や血族意識、帰属集団意識の蓄積し始めた社会であっても、「制度社会」以前の人類にとって、諸項目の変容は、必ずしも連鎖を起こして変容するとは限らないのである。

「縄文時代晩期」とは、旧石器時代から縄文時代前期までが相当する「個あるいは同時期での血縁・地縁認識社会の時代」から、「血縁・地縁の長期的認識が深まった時代」へと変化した時間の中にある。人類はこの時期に、斧などの個人保有器具の使用期間長期化、用途別器具の多種多量保有化を図った。人類は土地やモノを保有するという意識を蓄積し、また継承するシステムを構築した。そういう歴史的一回性の時間では、稲作農耕の存在を根拠とした、どこまでが「縄文文化」どこからが「弥生文化」という課題設定での議論では、人類社会変化の本質部をはずした理解となってしまうのだろう。「系統社会」の登場を説明する本質は、「保有」「継承」を物語るための「更新システム」や器具の耐久性向上の論議なのである。

引用文献

静内町教育委員会　1959 『静内町字目名御殿山遺跡発掘調査報告書』
北海道教育委員会　1977 『美沢川流域の遺跡群Ⅰ－新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
柏木Ｂ遺跡発掘調査会　1981 『北海道恵庭市柏木Ｂ遺跡発掘調査報告書』
恵庭市教育委員会　2003 『カリンバ３遺跡（1）発掘調査報告書』
恵庭市教育委員会　2003 『カリンバ３遺跡（2）詳細分布調査報告書』
八戸市教育委員会　2001 『是川中居遺跡１』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第91集
尾上町教育委員会　1988 『八幡崎遺跡（1）』 尾上町調査報告書第６集
板柳町教育委員会　1993 『土井１号遺跡』
平賀町教育委員会　1995 『石郷（1）遺跡発掘調査報告書』 平賀町埋蔵文化財報告書第21集
青森県立郷土館　1984 『亀ヶ岡石器時代遺跡』 青森県立郷土館調査報告書第17集
岩手県埋蔵文化財センター　1995 『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第225集

秋田県教育委員会　2000 『戸平川遺跡』 秋田県文化財調査報告書第294集
五城目町教育委員会　1984 『中山遺跡発掘調査報告書』
一迫町教育委員会　1996 『国史跡山王囲遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
一迫町教育委員会　1997 『国史跡山王囲遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
小林圭一　2003 「山形県高瀬山遺跡の水場遺構」『縄文人の台所・水さらし場遺構を考える』 青森市教育委員会
三島町教育委員会　1990 『荒屋敷遺跡Ⅱ』 三島町文化財報告書第10集
栃木県教育委員会　1998 『寺野東遺跡Ⅳ（縄文時代谷部編）』 栃木県埋蔵文化財調査報告第208集
埼玉県教育委員会　1984 『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書（人工遺物・総括編）』
東村山市遺跡調査会　1998～2001 『下宅部遺跡（1997年度～2000年度調査概報）』
新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会　2002 『川辺の縄文集落－シンポジウム「よみがえる青田遺跡」』
新潟県埋蔵文化財調査事業団　1997 「大武遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報－平成8年度』
前山精明　1996 「縄文時代晩期後葉集落の経済基盤」『考古学と遺跡の保護』 甘粕健先生退官記念論集刊行会
青梅町　1987 『史跡・寺地遺跡－新潟県西頸城郡青梅町寺地遺跡発掘調査報告書』
桜町遺跡発掘調査団　2001 『桜町遺跡調査概報』 学生社
能登町教育委員会　1986 『石川県能登町真脇遺跡－農村基盤総合整備事業能登東地区真脇工区に係る発掘調査報告書』
金沢市教育委員会　1983 『チカモリ遺跡－遺構編－』 金沢市文化財紀要34
金沢市教育委員会　1984 『チカモリ遺跡－石器編－』 金沢市文化財紀要41
石川県埋蔵文化財センター　1989 『金沢市米泉遺跡』
谷口宗治　2003 「中屋サワ遺跡における縄文時代の川跡について」『縄文時代後晩期の低湿地集落－生業の視点で考える－』 石川県埋蔵文化財センター
小松市教育委員会　2003 『八日市地方遺跡－小松駅東土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』
山本孝一　1997 「福井県鯖江市四方谷岩伏遺跡」『日本考古学年報』48
山本孝一　2003 「福井県の縄文時代の低湿地集落の概要」『縄文時代後晩期の低湿地集落－生業の視点で考える－』 石川県埋蔵文化財センター
三重県教育委員会　1980 『納所遺跡－遺構と遺物－』 三重県埋蔵文化財調査報告35-1
湖西線関係遺跡発掘調査団　1973 『湖西線関係発掘調査報告書』
田原本町教育委員会　1978～1997 『唐古・鍵遺跡発掘調査概報』
高槻市史編纂委員会　1973 「安満遺跡」『高槻市史第6巻－考古編－』
大阪文化財センター　1983 『山賀（その1）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』
大阪文化財センター　1983 『山賀（その2）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』
大阪文化財センター　1992 『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅶ』
東大阪市文化財協会　1988 『鬼虎川遺跡の木質遺物』 第7次発掘調査報告書第4冊
兵庫県教育委員会　1985 『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』 兵庫県文化財報告第30冊
鳥取県教育文化財団　2001 『青谷上寺地遺跡3』 鳥取県教育文化財団調査報告書72
鳥取県教育文化財団　2002 『青谷上寺地遺跡4』 鳥取県教育文化財団調査報告書74
島根県教育委員会　1987 『朝汲川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
島根県教育委員会　1987 『朝汲川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
島根県教育委員会　1990 『朝汲川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
岡山県教育委員会　1995 『百間川原尾島遺跡4－旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査X』 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97
岡山市教育委員会　1996 「上伊福・南方遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要1994年度』
岡山市教育委員会　1997 「上伊福・南方遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要1995年度』
香川県教育委員会　1990 『永井遺跡』 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第9冊
香川県教育委員会　1993 『林・坊城遺跡』 高松東自動車道建設に伴う埋蔵文化財は沓調査報告第2冊

高松市教育委員会　1993『浴・長池遺跡』 高松市埋蔵文化財調査報告第21集
香川県埋蔵文化財調査センター　2000『鴨部・川田遺跡Ⅱ』 高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第9集
愛媛県教育委員会　1984『松山市船ヶ谷遺跡－愛媛県青果農業協同組合連合会関連埋蔵文化財調査報告書－』
愛媛県埋蔵文化財センター　2000『阿方遺跡・矢田八反坪遺跡埋蔵文化財調査報告書』 来島海峡大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6集
高知県文化財団埋蔵文化財センター　2001『居徳遺跡群1』 高知県文化財団埋蔵文化財センター調査報告第62集
福岡市教育委員会　1986『比恵遺跡－第6次調査遺物編』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第130集
福岡市教育委員会　1987『拾六町ツイジ遺跡－福岡市公民館建設関係埋蔵文化財調査報告』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第162集
福岡市教育委員会　1994『雀居遺跡2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第406集
1994『雀居遺跡3』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第407集
福岡市教育委員会　1998『橋本一丁田遺跡－福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告書5』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第582集
下稗田遺跡調査委員会　1985『豊前下稗田遺跡』 行橋市文化財調査報告書第17集
唐津市教育委員会　1982『菜畑遺跡』 唐津市文化財調査報告第5集
長崎県教育委員会　1975『里田原遺跡』 長崎県文化財調査報告第21集
田平町教育委員会　1992『里田原遺跡』 田平町文化財調査報告書第5集
大分県教育委員会　1989『下郡桑苗遺跡』 大分県文化財調査報告第80輯
大分県教育委員会　1992『下郡桑苗遺跡Ⅱ』 大分県文化財調査報告第89輯
大分市教育委員会　1992『下郡遺跡群』 下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報（3）

3　青田遺跡における縄文時代晩期終末の土器編年

A　はじめに

青田遺跡で出土した縄文時代晩期終末の土器は総数750箱に上り、各地区において層位別に取り上げることができた。本土器群は県内の編年では鳥屋2a式～2b式［石川1988］を主体とするものであり、当該期の資料としては極めて膨大な量といえる。各地区における層位別出土土器の詳細は既に本編第Ⅴ章1で述べたとおりである。ここでは、全地区を通じて層位別の土器変遷を確認し、編年的位置付けを検討したい。なお、ここで用いる分類・用語などもすべて本編第Ⅴ章1に準じる。また、すべての土器を対象とした統計的な作業を行っておらず、厳密な器種組成比や分類別組成比を算出できないが、器形の分かるものをできるだけ図化し、特徴的な文様を持つものはほとんど掲載していることから、本書に掲載した土器内での各種組成比は本遺跡の土器様相をある程度反映するものと考える。よって、以下に提示する組成比率などは断りのない限り本書掲載の土器から算出したものであることをあらかじめ断っておく。

B　時間軸の設定

本遺跡の層位は本編第Ⅲ章4で述べたように、SD19左岸地区・中央地区・SD1420右岸1地区ではD層→S5層→S4層→S3層→S2層→S1層の順に堆積しており、これを基本的な時間軸として設定する。また、SD1420右岸2・3地区ではS1層に相当する土層が厚く堆積し、遺物包含層はSD1420-6・4・3・2・1層及びB9～B7層に細分される。S1層期における時間軸の設定については、各地区の出土状況ならびに編年の基本となる浅鉢の特徴から判断することとする。SD19右岸地区・中央地区・SD1420右岸1地区では浮線文1類が圧倒的に多く、その種類もバラエティーに富んでいる。これらに匹字文3類が共伴するものの、変形工字文5類はほとんど認められないことが特徴である。一方、SD1420右岸2地区の6・4・3・2・1層では変形工字文4・5類が安定して出土するようになり、これと反比例するように浮線文1類が減少する傾向を認めることができる。SD1420右岸3地区の2・1層も同様である。さらに、両地区のB9～B7層では浮線文1類が認められなくなり、工字文2類と変形工字文4・5類で占められるようになる。こうした状況は浮線文から変形工字文への変遷を示すものと理解できる。よって、S1層期はSD19左岸地区・中央地区・SD1420右岸1地区のS1層→SD1420右岸2・3地区のSD1420-6・4・3・2・1層→SD1420右岸2・3地区のSD1420-B9～B7層という時間軸を設定することができよう。なお、本編第Ⅲ章4で述べたように、SD1420-6・4・3層はSD1420-2～1層と同じ時間幅を持つ可能性が高く、土器様相も共通することから、ここではSD1420-2～1層として同列に扱うこととする。また、SD1420左岸地区の層位については本編第Ⅲ章4で述べた対応に従うが、SD1420-E6層では浮線文1類が少なく、変形工字文4・5類が安定して出土していることから、SD1420-2～1層と共通する様相とみなし同列に扱うこととする。E5層は浅鉢が少ないものの、浮線文1類が出土していることからB9～B7層に対比できず、これも2～1層と同列に扱うこととする。

以上から、土器分析に当たり、時間軸をD層→S5層→S4層→S3層→S2層→SD19左岸地区・中央地区・SD1420右岸1地区のS1層（以下、S1層とする）→SD1420-2～1層→SD1420-B9～B7層の8時期に設定する。

C　各器種の変遷

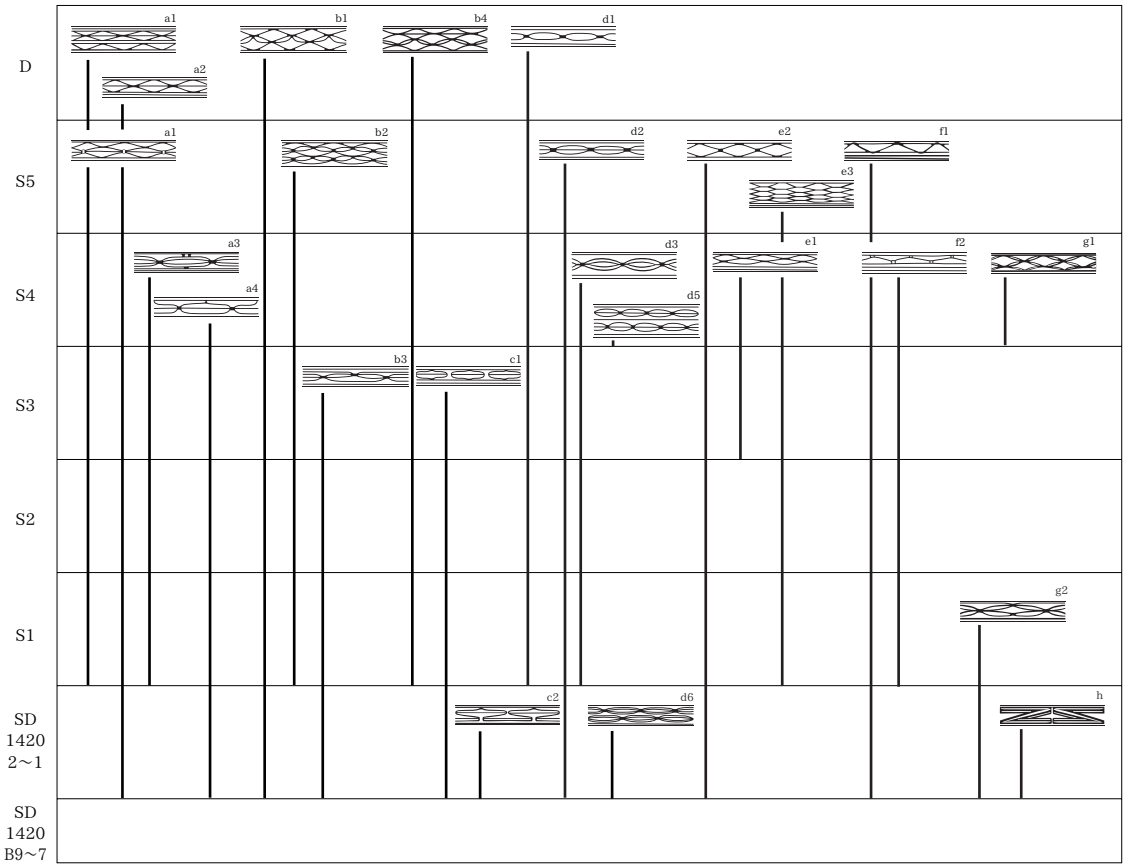
設定した時間軸に従い、各器種の層位別の変遷について述べる。

浅鉢・鉢・台付浅鉢　第161図に層位別の代表的な土器を掲載した。また、浮線文種類の消長については第159図に示してある。

D層は出土量が少ないものの、浅鉢A・D類で占められる。口縁部文様帯幅が広いことが特徴である。浮線文はa1・a2・b1・b3・b4・d1種があり、交点間を平行沈線が貫くもの（31）や文様上段の交点が口縁部上端に直接連結するもの（32）がある。鉢35は器形の特徴と眼鏡状文が施される点から鳥屋1b式ともみなせる古相を示す資料である。

S5層も浅鉢A・D類が主体である。文様帯幅は広く、波状口縁や内面突帯状口縁を持つものが目立つようになる点が特徴である。浮線文種類はa1・a2・b1・b2・d1・d2・e2・e3・f1種が認められ、浮線文の基本的な種類が揃う。533は上段の交点が口縁部上端に直接連結しており、D層と同様に古相を示す特徴と考えられる。また、308や537のように文様帯幅の狭いものも認められるが、これはd1種やf1種が広い文様帯を必要としないためであろう。310の台付浅鉢は「ハ」の字状に開く短い台が付属する。

S4層は出土量が非常に多く、本遺跡の画期を為す時期である。浅鉢B・D類を主体としながらも、A・C・F・G・I類が現れるようになり、器形の多様化が認められる。A類は鳥屋1式に特徴的な頸部無文帯を有する浅鉢の系譜を引くものと考えられ、古相を示す資料といえよう。文様帯幅は広く、大振りな浮線文が目立つ。また、波状口縁や内面突帯状口縁が盛行し、本層の資料を見分ける上で重要な観察点



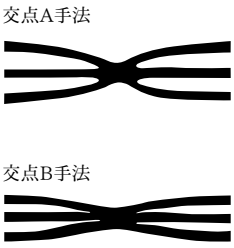
第159図　浅鉢の浮線文種類の消長

といえる。557・360・363のように文様帯の上下端が口縁部上端や体部に直接連結する点もS5層から続く古相を示す特徴である。浮線文種類は新たにa3・a4・d3・d5・e1・f2・g1種が加わり、バラエティーに富む。この中で主体となるのはa2・b1・e3・f1種である。なお、d5種はS4層以降に認められない。搬入品の疑いがあるI1類65・66は、口外帯と明確な頸部無文帯を有する点と横に間延びした浮線文a2種が施される特徴から信州地方の氷Ⅰ式（古段階）［中沢1998］と考えられる。また、C2a類355は平行隆線間に小さな粘土瘤２個を貼付した工字文で、岩手県中神遺跡［須藤ほか1997］の層位に基づく型式変遷によれば縄文時代5b～5c期に認められ、大洞A1式新段階に比定できよう。鉢はA・B・C・F類があり、浅鉢と共通する浮線文が施される。台付浅鉢は「ハ」の字状に開く小形の台部が出土している。

S3層ではS4層と同様に浅鉢B・D類を主体としてC・G・J類が加わるが、A類が欠落する点は注目される。また、内面突帯状口縁は引き続き多いものの、波状口縁の減少傾向が認められる。文様帯幅は依然として広いものがある一方で、狭小化傾向も認められる。S4層330のような大振りの浮線文は認められなくなる。浮線文種類は新たにb3種とc1種が加わり、b3種は文様帯の狭小化と連動したものと推定される。多段化するb2・e3種は減少傾向が認められる。

S2層は出土量が少なく、浅鉢B類を主体としてC・D類が認められるが、D類は少ない。波状口縁や内面突帯状口縁を持つものがほとんど認められず、文様帯幅も狭いものが主体である。浮線文種類はS3層の特徴を継承する。C3類632は東北地方で盛行する上下交互の匹字文が施されるものである。また、C4c類633は沈線で三角形モチーフが描かれたものである。いずれもS3層では認められない新しい特徴といえよう。

S1層は出土量が多く、本遺跡の画期をなす層位である。浅鉢B・C・D・F・G・I類があり、S3層まで主体だったB・D類に代わりC類が主体となる点が大きな変化として注目される。なお、A類が１点（173）出土しているが、これは下層からの混入とみられる。波状口縁や内面突帯状口縁を持つものは１割にも満たず、大きく減少する。また、文様帯は狭小化したものが主体となり、広いものはほとんど認められなくなる。浮線文種類は基本的にS3層までのバラエティーに富む種類が用いられ、新たにg2種が加わる可能性が高い。ただし、同じモチーフながらS3層とS1層では文様帯幅の変化により識別することが可能である。例えば、S3層100とS1層645は同じ浮線文a2種だが、文様帯幅が変化していることが看取できよう。また、浮線文の描出方法にも大きな変化が認められる。それは、第160図のように浮線文の交点における沈線末端の調整について、S3層以前のものは最終的に沈線の末端まで丁寧にミガキが加えられ、幅の広いはっきりした沈線が描かれる。これを「交点A手法」と呼ぶ。一方、S1層では沈線末端のミガキが顕著でなく、交点を作り出す際に隆線を上下から押圧してできた粘土の移動痕が残ったままのものが多く、沈線末端がいびつで狭くなるものが多く認められる。これを「交点B手法」と呼ぶ[1)]。こうした違いはS1層に文様帯の狭小化が進んだことと連動して沈線末端の調整が省略されたためと考えられる。なお、この調整方法の差は浅鉢に認められるものであり、甕・

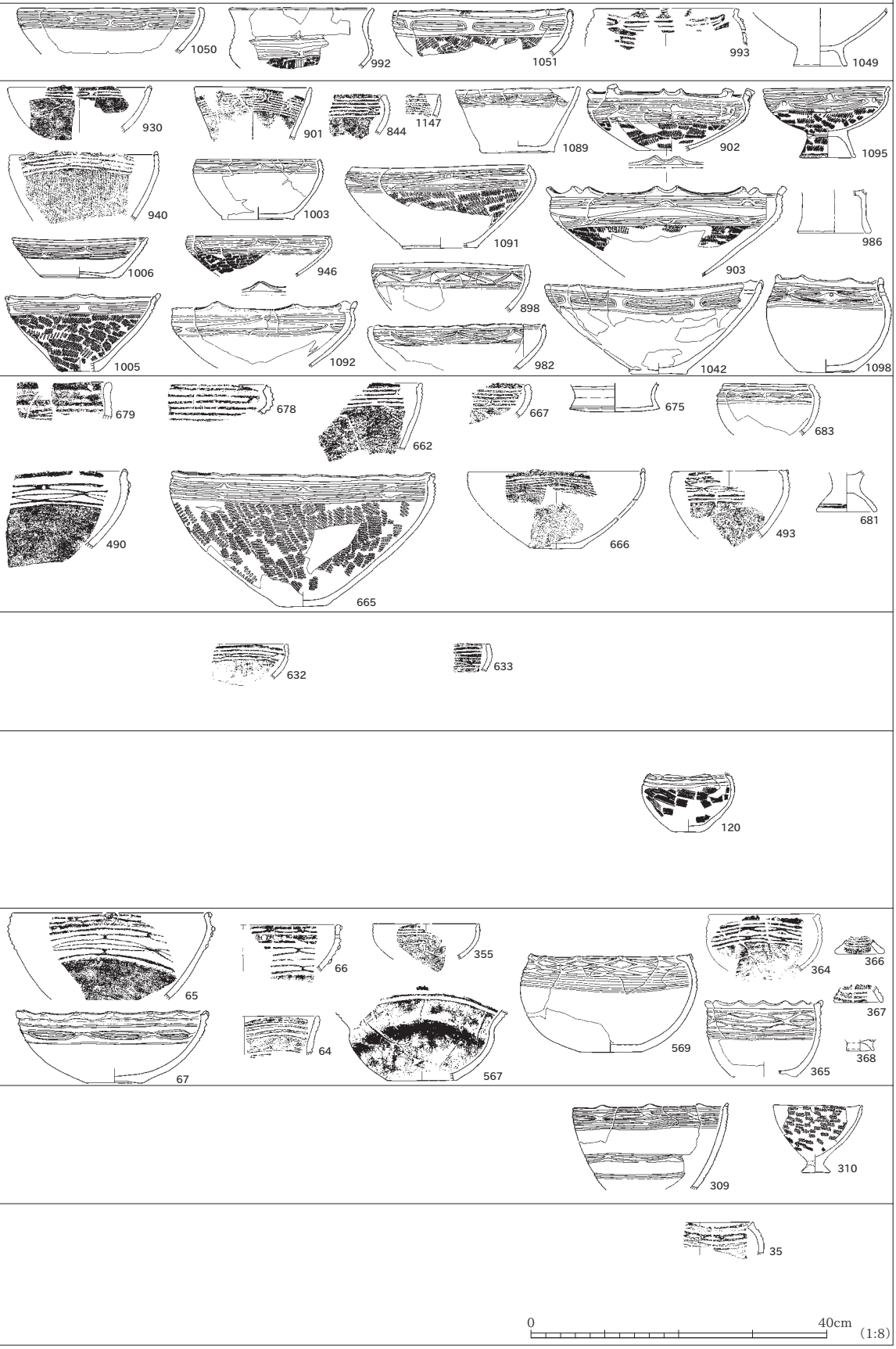


第160図　浮線文交点の調整手法模式図

1）交点A・B手法はそれぞれ小林正史氏による「沈線文A手法」「沈線文B手法」［小林1991］に対応する可能性がある。ただし、小林氏の指摘するとおり沈線文B手法は交点上のミガキなどにより隆線の移動痕跡を残さない場合があり、認定できないものも多い。このことから、沈線内の調整に着目して分類することとした。

第161図　浅鉢・鉢・台付浅鉢の変遷

浅鉢Ⅰ1類　浅鉢2～7類　鉢　台付浅鉢



深鉢には沈線内のミガキが顕著でないものが多く適用できないことを加えておく。このほか、I1類490・679は口外帯・頸部無文帯を持つ氷Ⅰ式であり、搬入品の疑いがある。いずれも口外帯・頸部無文帯を持ち、体部文様帯には沈線部が浅く削り込まれて描かれた沈線文d3種が描かれていることから、氷Ⅰ式中階段［中沢1998］に相当しよう。浮線文1類のほかで注目されるのは匹字文3類（662・665・678）が出土した点であり、本層の編年的位置付けを検討する上で重要である。また、F類675は丸底の底部資料だが、いわゆる大洞A_2式［鈴木1987］に採用される器形であり、搬入品の可能性が高い。このほか、沈線で三角連携文が描かれるC4a類やその交点が途切れるC4b類（666）が認められる。さらに、隆線により横に間延びした変形工字文が描かれるC5a類（660）が1点ある。楕円文6類（667）もわずかに認められる。鉢はD類が出現し、B類が認められなくなる。台付浅鉢は「ハ」の字状に開く台部が出土している。以上のように、S1層では浮線文と匹字文や三角連携文などS3層以前にない新しい要素が認められる。

SD1420-2～1層も土器量が多く、本遺跡の画期をなす層位である。浅鉢B・D類はごくわずかとなり、C類が主体となる。また、E・H類が新たに加わり、変形工字文4・5類が盛んに施される点が本層の特徴である。文様帯の狭小傾向はS1層より顕著で、波状口縁・内面突帯状口縁もほとんどなくなる。浮線文1類はS1層が75％に施されていたのに対し、本層では32％に過ぎず、大幅に減少する。浮線文種類はc2・d3・h種が新たに加わる点が注目される一方で、S3層以前から続いていたa1・a3・b2・b4・d1・e3・f2種が認められなくなり、浮線文種類が半減することも大きな特徴である。本層で施される浮線文種類は文様帯の狭小化に適応し得る2・3段のものが多く、S1層と同様に交点B手法が用いられる。また、文様の描出方法は浮線手法の割合がS1層より倍増する。浮線文c2種（893・1085）は変形工字文に近い文様構成であり、5類との関係をうかがわせる。さて、本層では浅鉢の6割に浮線文以外の文様が施されるようになる。工字文は隆線による2a類（901・930）に比べて沈線による2b類（844）が多くなる。匹字文3類も認められるが、胎土は一般的なものが多く、浮線手法によるもの（940）があるなど在地化したものと評価できる。変形工字文4類も4a類（1006）、4b類（1092）、4c類（898・982）が多く認められる。曲線的な変形工字文が描かれる5a類（902・1095）も安定的に出土し、直線的な変形工字文5b類（903・1091）は交点2が連結するいわゆる連結型で占められる。交点は匹字となる点が特徴である。なお、1095と1091の交点には方形の抉りを入れる手法が用いられる。このほか、楕円文が施される6類（1005・1042）が多数認められ、綾杉文7類（1147）は本層から出現する。鉢はC・D・E・F類が認められ、S1層に引き続きC・D類が主体となる。台付浅鉢は台部が高く垂直に立ち上がるもの（986）が認められる。

SD1420-B9～B7層は土器量が少ないものの、浮線文1類が認められない点で大きな画期をなす。浅鉢はC・F類が認められるが、量は少ない。隆線による流水状の工字文2a類（1050）が残存する。F類992は口縁部文様が喪失し、体部上位にSD1420-2～1層のものより幅が広く深い沈線で変形工字文5b類が描かれる。楕円文6類は引き続き確認できる。鉢はH類（993）が新たに出現する点が注目される。口縁部から体部上位にかけて変形工字文が施されるが、交点1は匹字とならず粘土瘤が貼付される点でSD1420-2～1層のものと異なる。また、モチーフが多段化する可能性も考えられる。台付浅鉢はやや内傾する台部が付くもの（1049）がある。

以上のように、浅鉢に施される浮線文種類は一部を除きほぼ全時期にわたって用いられているほか、石川日出志氏が鳥屋2b式の特徴とされた交点上に加える点刻［石川1993］も古い段階から認められる。

このため、浮線文種類のみで細かな時期を比定することは難しく、器形と文様帯幅などを加味して検討する必要があろう。

甕　次に甕についてみることとする。層位別変遷図は第162図に示してある。

D層では出土量が少なく、B類しか認められない。文様帯と文様の構成は2e類と39のように頸部を無文帯とする3d類がある。

S5層ではB類に加え、C・D・E類が認められる。B類は肩部の張り出しが先鋭で、口頸部が内傾した後に直立するものが目立ち、頸部を無文として口縁部や肩部に浮線文が施される3a類に限定される。肩部に眼鏡状隆帯文の名残をとどめる立体的な眼鏡状文を持つものもあり、古相を示す。C類（311）の口縁部浮線文の上下端は口縁部上端と頸部に直接連結しており、浅鉢と同様の特徴を示す。E類（315）では頸部に鋸歯状集合沈線文が採用されている。

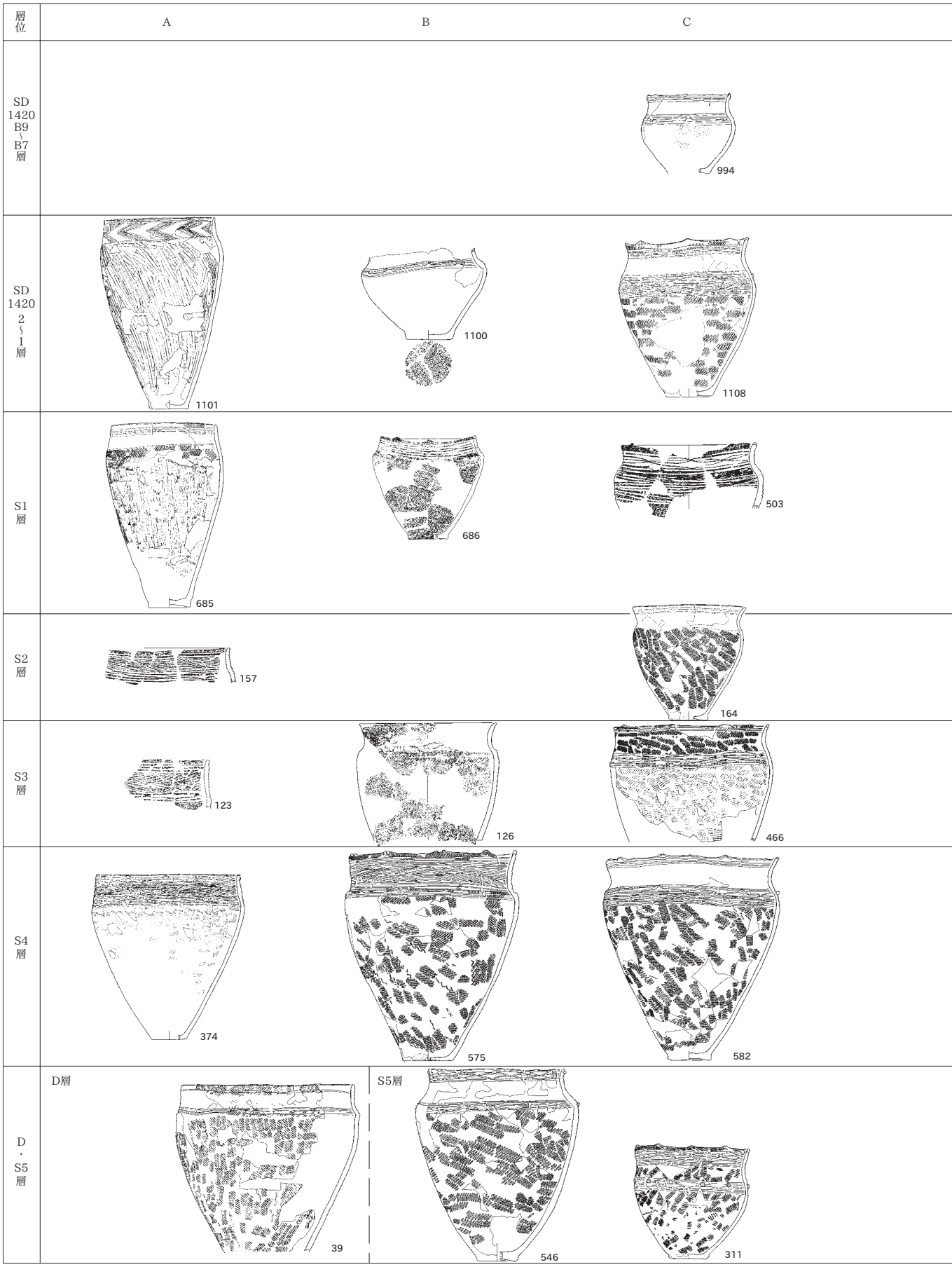
S4層ではG類を除くすべての器種が出揃うが、G類（779）もS4～S3層相当層から出土しており、本層に伴う可能性がある。主体はB類とC類である。A類は1・2類に限定され、浮線文や綾杉文が施されるなど加飾性が高い。B類は頸部に綾杉文や斜線文などが施される2類が増加し、S5層に引き続き古相を示す立体的な眼鏡状文や浮線文が加えられる。C類は頸部を無文とする3類が主体を占めるが、口縁部に浮線文が施されるものが減少し、肩部に浮線文と綾杉文が2段配される3c類（582）が出現するなど、肩部への装飾性が高まる。D・E類は1～3類が認められるが、量は少ない。H類は小形のもので、口縁部から体部に広く文様が施される。三角形集合沈線文が2段施される264も本層に属す可能性が高い。I類は遺跡全体で3例しか確認できず、系統的な説明が難しい。589はA類や深鉢D類との関連がうかがえる。

S3層はA・B・C・D・E・H類が認められる。S4層まで主体を占めたB類が減少し、C類が優勢となる。これに伴い、頸部に浮線文・綾杉文が施される1a・1b類、2a・2c類が減少する。C類はS4層と同様に3a類の口縁部に浮線文が施されるものがほとんど認められなくなる。H類469は口縁部に文様が集中し、装飾性が低くなる。H類はS2層以降に認められないことから、S4～S3層に主体を置くものと考えられる。

S2層では出土量が少ないが、A・C・D・E類が認められる。A類では頸部に交互綾杉文が施される2a類（157）がある。ほかはS3層に引き続き口縁部浮線文が施されない。

S1層ではH類を除きすべて確認できる。B類はごくわずかとなり、C類とE類が主体となる。全体的に口縁部への浮線文の施文率が低く、S3層で認められた肩部への加飾が中心となる。また、S4層では3類のうち頸部にミガキが加えられるものが4割足らずであったのに対し、本層ではほぼすべてにミガキが加えられるようになる。A類は685のように全体的に細身のプロポーションとなる。B類は中形（686）のものが認められる。C類は3類で占められるようになる。また、「目」字状文（710）や、沈線による工字文（698）など、本層の浅鉢と同じ文様が認められる。D類は697のような大形のものが認められる。E類も3類で占められ、706のように肩部に綾杉文が施される3b類が目立つようになる。G・H類は数が少ない。I類711は細身の体部に「く」の字状に屈曲する口頸部が付くもので、ほかに例がない。

SD1420-2～1層ではA・B・C・D・E・F・G類が認められ、S1層に引き続きC・E類が主体となり、E類の方が優勢となる。全体的に頸部を無文とする3類が主体を占め、S1層に引き続きほぼすべての頸部にミガキが加えられる。条痕文の施文率は28％で、10％程度であったS4・S1層より増加する傾向が認められる。A類はS1層と同様に1101のような細身のプロポーションのものが認められる。B


層位
A
B
C
SD 1420 B9〜B7層
994
SD 1420 2〜1層
1101
1100
1108
S1層
685
686
503
S2層
157
164
S3層
123
126
466
S4層
374
575
582
D・S5層
D層
39
S5層
546
311

第162図　甕の変遷

D
E
F
G
H
I
1057
1055
868
1021
998
990
697
706
509
508
711
159
161
131
468
469
779
588
264
589
84
586
401
545
315
（39,126,164,374,466,545,546,575,582,586,685,
697,706,711,1021,1055,1057,1101,1108）
0
60cm
(1:12)
0
（その他）
50cm
(1:10)

類は1100がある程度である。C類は3類が主体で、そのうち綾杉文が施される3b・3c類が増加する点が特徴である。D類も3類が主体で、肩部に三角形集合沈線文が施されるもの（868）などがある。E類は1～3類が認められ、3類が主体となる。いずれも頸部ないし肩部に綾杉文や三角形集合沈線文が施されるものが増加する点が本層における特徴といえよう。F類にも綾杉文が採用される（998）。

SD1420-B9～B7層ではC・D・E類のみ認められる。全体では頸部を無文とする3類が多い。C類994は肩部に匹字文が描かれ、D3b類1057は幅の広い肩部文様帯に綾杉文が施される。

深　鉢　次に深鉢についてみることとする。層位別変遷図は第163図に示してある。

D層ではA・B・C類が認められる。浮線文と綾杉文を2段に配すA4類（40）が確認できる。

S5層もA・B・C類が認められる。A類は装飾性の低い6・7類のみである。B類は浮線文が施される1類（47）が認められるほか、B7b類548は口縁部の上端にのみ結節回転が施されるものである。C類は浮線文1類が多い。

S4層はA～D類すべてが認められ、A・B・C類はほぼ同数確認できる。A類は1類（409）がわずかで、6・7類が主体である。6類のうち間隔を空けて平行沈線文が施されるもの（412）が特徴的である。B類も同様で、浮線文1類（420・620）のほか、B6a類（596）などがある。C類は1類（428）が比較的多く認められる点でほかと異なる。A～C類はいずれも口縁部にのみ結節縄文が施される7b類が増加し、本層の特徴といえる。D類は少ない資料ながら、29・99とも口縁部上端の無文帯にミガキが加えられる特徴は東北地方の当該期の深鉢に一般的に認められる。

S3層はA・B・C類が認められ、A・B類は6・7類が主となる。C類では浮線文と斜線文が2段に施されるD類（134）が確認できる。

S2層はB・C類が認められる。B7d類168は体部条痕文施文後に複合口縁が作り出される阿賀北地域の特徴を有する。C類は浮線文が施される1類が多く認められる。

S1層ではA・B・C・D類が認められ、A類が少なくB・C類が主体となる傾向を読み取れる。B・C類とも7類が主体となる。C類は引き続き浮線文1類が多数ある。

SD1420-2～1層ではA・B・C・D類が認められ、C類が主体となる。A類はS1層に引き続き少なく、B類も減少傾向にある。A～C類は1034のように全体が細身のものも目立つようになり、甕と同様の傾向がうかがえる。また、A・B類では浮線文1類がほとんどなくなり、C類にも少なくなる。これに代わり、工字文や匹字文が施される2類が多くなるほか、1028・832・881のような綾杉文3類などが施される3類が多数出現することが本層の大きな特徴である。さらに、結節縄文7b類も安定的に認められる。

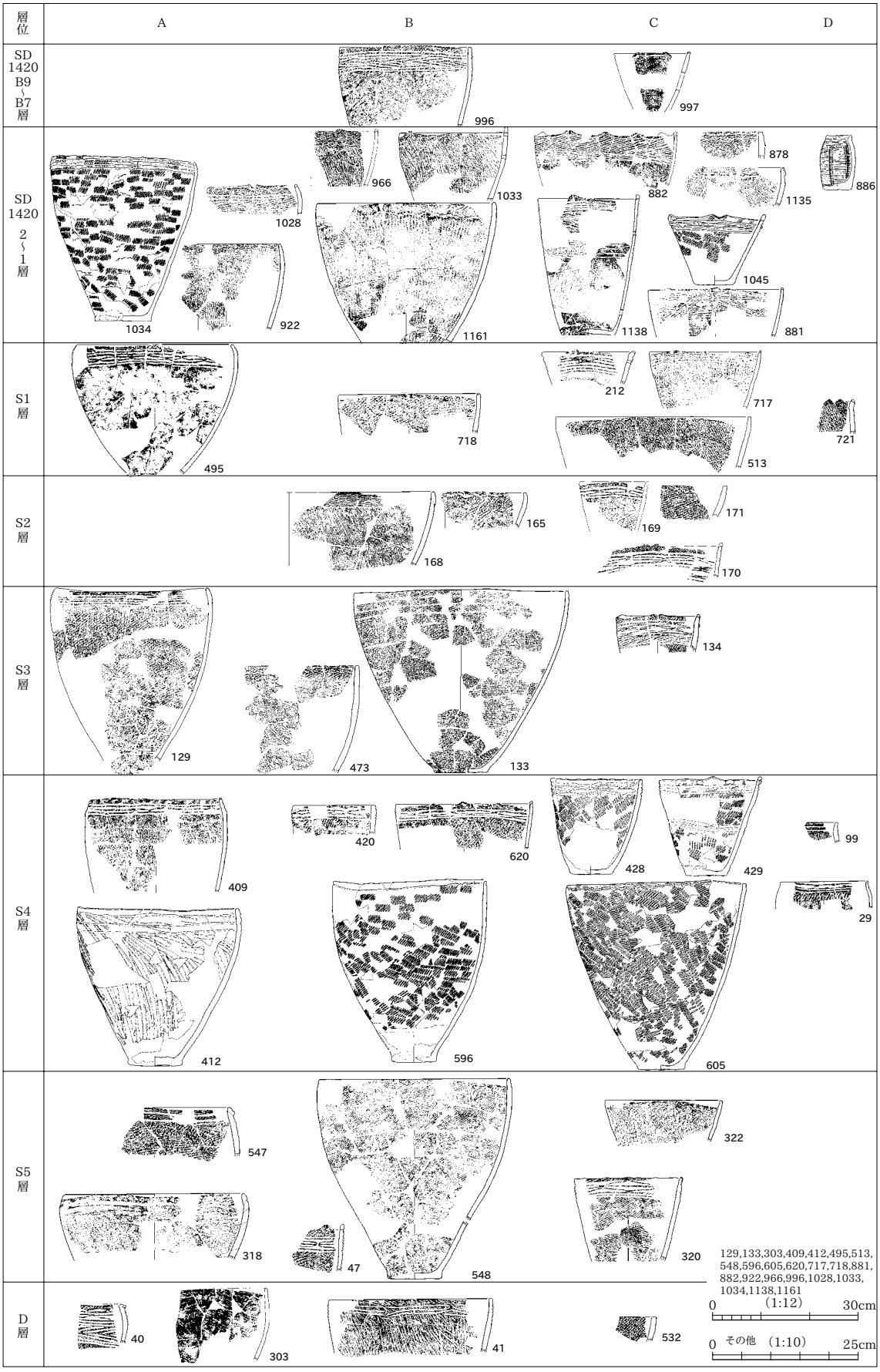
SD1420-B9～B7層では、綾杉文B3類（996）が引き続き認められる。ほかにC6e類997がある。

壺　最後に壺について述べる。層位別変遷図は第164図に示してある。

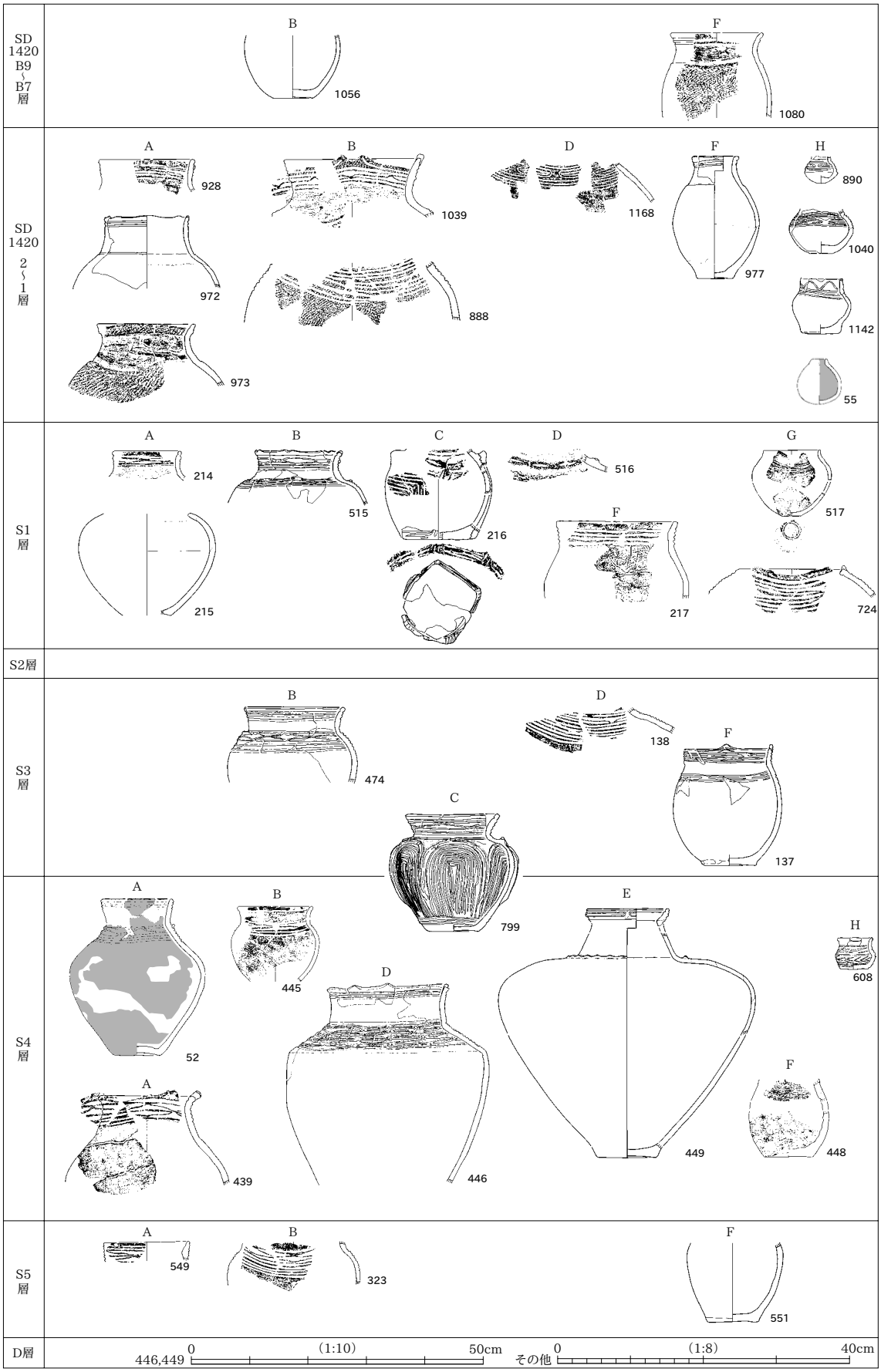
D層では壺を明確に確認できなかった。

S5層ではA・B・F類が認められる。A類549は口縁部上端に眼鏡状文が施され古相を示す。

S4層ではA・B・D・E・F・H類が認められ、A・B類が主体を占める。C類798も本層に伴う可能性がある。C類（798）に施される隆帯は、鳥屋1式の浅鉢や甕に認められる口縁部と体部を連結する縦位隆帯が壺に採用されたものと解釈したい。大形壺のD類446は村尻遺跡B地点の鳥屋1b式の大形壺［石川1991］に系譜を辿ることができる。E類449も大形で、肩が高い位置で張り出す点など大洞A_1式の影響がうかがえるものである。


層位
A
B
C
D
SD 1420 B9～B7層
SD 1420 2～1層
S1層
S2層
S3層
S4層
S5層
D層
996
997
966
1033
878
882
886
1135
1028
1045
1034
922
1161
1138
881
212
717
718
721
495
513
165
169
171
168
170
134
129
473
133
420
620
428
429
99
409
29
412
596
605
547
322
318
47
548
320
40
303
41
532
129,133,303,409,412,495,513,
548,596,605,620,717,718,881,
882,922,966,996,1028,1033,
1034,1138,1161
0 (1:12) 30cm
0 その他 (1:10) 25cm

第163図　深鉢の変遷


SD 1420 B9 ～ B7 層
SD 1420 2 ～ 1 層
S1 層
S2層
S3 層
S4 層
S5 層
D層
A
B
C
D
E
F
G
H
1056
1080
928
1039
1168
890
1040
972
977
888
1142
973
55
214
515
516
517
216
215
217
724
474
138
137
799
52
445
608
439
446
449
448
549
323
551
446,449
0
(1:10)
50cm
その他
0
(1:8)
40cm

第164図　壺の変遷

S3層ではB・D・F類が認められる。F類137は口縁部と肩部に浮線文が施されるものである。

S1層はA・B・C・D・F・G類が認められ、A類が主体となり、G類が新たに認められる。C類216は底面が正方形となるのが特徴で、SX51出土1351も同様である。F類217は肩部文様が施されない。

SD1420-2～1層ではA・B・D・F・H類が認められる。A類が主体となるが、浮線文が施されるものは減少し、平行沈線文や斜縄文が施されるようになる。D類1168は浅鉢にみられる楕円文が採用される。F類は977のように細身のものが認められる。H類は波状沈線文が施されるもの（1142）があり注目される。

SD1420-B9～B7層ではB・F類が認められる。F類1081はS1層に引き続き口縁部に平行沈線文が施されるものである。

D　変遷の画期

各器種について、器形や文様帯構成・文様種類、及びこれらの組み合わせについて層位別の変遷が認められた。検討の結果、本遺跡の土器群について大きく５つの画期を見出すことができる。それぞれⅠ～Ⅴ期とし、以下に概要を述べる。

Ⅰ期はD層・S5層・S4層の時期であり、古相を示す浮線文が施される段階である。D層及びS5層は出土量が少なく、浅鉢の特徴がS4層とほぼ同様であることから、Ⅰ期に含めることとする。また、SD19-23層出土土器もⅠ期のものが多く含まれる。浅鉢は古相を示すA類のほかB・D類が主体となり、波状口縁や内面突帯状口縁が特徴となる。浮線文は幅の広い文様帯に施され、交点A手法が用いられる。浮線文はa2・b1・e3・f1種を主体としながら多種類のモチーフが施される。甕は鳥屋１式（第165図30）に祖形を求め得るB類が特徴的で、頸部に綾杉文などが施される２類が主体となる。また、肩部に立体的な眼鏡状文や浮線文が施される点も特徴である。深鉢はA～C類の口縁部に結節縄文が施される7b類が増加する点が特徴である。壺は鳥屋1b式の大形壺を祖形とするものが認められる。

Ⅱ期はS3層及びS2層の時期である。S2層は出土量が少ないが、S3層の様相にほぼ共通することからⅡ期に含めた。浅鉢の浮線文種類は基本的にⅠ期と変わらないが、A類が認められないほか、波状口縁が減少し、文様帯の狭小化傾向が認められるようになる。甕はB類が減少し、C類が主体となる。また、１・２類が減少するほか、口縁部への浮線文施文率が低下する。

Ⅲ期はS1層の時期である。浅鉢はC類が主体となり、波状口縁や内面突帯状口縁を持つものがわずかとなる。文様帯は狭く、交点B手法が用いられる。甕はC・E類が主体となり、頸部にミガキが加えられるものが増加する。また、肩部に綾杉文が施される3b類が出現する。深鉢はA類が減少する。

Ⅳ期はSD1420-2～1層の時期である。浅鉢はC類のほかE・H類が増加する。浮線文はc2・d3・h種が新たに加わるが、種類は半減し、沈線文自体の数が減る。そして、変形工字文４・５類が出現する。甕はE類が主体となり、肩部に綾杉文や三角形集合沈線文が施される3b・3c類が増加する。深鉢も同様に綾杉文３類が目立つほか、結節縄文7b類も多い。壺は浮線文が施されるものが減少し、細身のプロポーションのものが認められる。また、波状沈線文が施されるものがあり、深鉢５類が本期に伴う可能性が示唆される。

Ⅴ期はSD1420-B9～B7層の時期である。浅鉢に浮線文１類が認められなくなる点が大きな特徴である。浅鉢や鉢にⅣ期のものより幅の広い沈線で描かれる変形工字文が認められる。甕・深鉢は綾杉文が施されるものが認められる。

E　県内出土の縄文時代晩期終末の土器との並行関係

次に県内の縄文時代晩期終末の土器群について、青田遺跡の分類に照らし合わせることにより、両者の並行関係について考えたい。対象とする遺跡は、豊栄市鳥屋遺跡、新発田市村尻遺跡、山北町上山遺跡、安田町六野瀬遺跡、栄町長畑遺跡であり、本遺跡に関連する時期の代表的な土器を取り上げた。

第165図1～30は鳥屋遺跡で1979年に行われた発掘調査資料であり［関・石川ほか1980・1988］、石川日出志氏により鳥屋1式・2式が設定された標式資料である［石川1988］。浅鉢はA1類（6）、B1類（8・10・11）、C1類（2～4・9）、D1類（1・5）、F1類（7）がある。浮線文種類はa1種（1）、a2種（6・9）、b1種（2・4・5）、b4種（10・11）、e2種（3・7）、f1種（8）である。波状口縁を持つ5と、内面突帯状口縁を持つ6はⅠ～Ⅱ期の可能性があるが、鳥屋遺跡では波状口縁・内面突帯状口縁を有するものが少ないといえる。文様帯幅の広い1もⅠ期に並行する可能性がある。3は浮線文の上下端の交点が口縁部上端及び体部に直接連結しており、Ⅰ期の特徴を有する。7・8は交点A手法が認められ、Ⅰ～Ⅱ期とみられる。2・4・9～11は文様帯の狭小化が認められることや交点B手法からⅢ期の可能性が高い。12は隆線で「日」字状文が施されるB6類で、Ⅲ～Ⅳ期に相当しよう。14・15は粘土瘤が貼付される工字文C2a類で青田遺跡Ⅰ期にも認められるもので、大洞A1式新段階に比定できる。13は下向きの匹字文C3類で、Ⅲ期に並行する可能性がある。16・17は菱形工字文C4a類であり、これもⅢ～Ⅳ期に属する。甕をみると、A3a類（27）、B2a類（19）、B3a類（20）、C3b類（22）、E3a類（25）、E3b類（21）、F3c類（24）があり、18～19・27はⅠ～Ⅱ期、21・22・29はⅢ～Ⅳ期と考えられる。18は石川日出志氏が西日本の刻目突帯文土器との関連を指摘した資料で、器形はB類である。また、24は頸部に稲妻状の沈線文が描かれるもので、青田遺跡に類例がある。深鉢はB1類（28）がⅠ～Ⅱ期、C3類（23）がⅣ期の可能性がある。壺26はB類で、肩部に入り組み状の工字文が施される。以上から、本土器群は青田遺跡Ⅰ～Ⅳ期にほぼ並行するものの、浮線文1類には明らかにⅣ期のものが少ないことと、変形工字文5b類が確認できないことから、Ⅰ～Ⅲ期と考えられる。さらにⅠ期の特徴を有するものも少なく、Ⅱ・Ⅲ期が主体となろう。

次に、第165図31～48は磯崎正彦氏の論文に掲載された鳥屋遺跡の資料である［磯崎1957］。発掘調査資料ではないものの、青田遺跡の土器群と比較する上で重要である。浅鉢はB1類（34・35・37）、C1類（31・32・36）があり、浮線文種類はc1種（37）、e2種（31・32・36）、h種（34・35）である。h種はⅣ期に特徴的な文様であり、全体的に文様帯が狭いことからⅢ～Ⅳ期のものと考える。また、C2a類（42）、C3類（3）はⅢ期、C7類（38・39）、H5b類（40・41）はⅣ期に並行するであろう。甕はC7a類（45）、E3d類（16）、F3d類（43）、G3d類（45）、E3b類（18）が認められ、Ⅲ～Ⅳ期の特徴を有す。特に18はⅣ期に特有の三角形集合沈線文が施されている。深鉢はB7d類（47）がある。以上から、本土器群はⅢ～Ⅳ期に主体をおく可能性が高い。

第165図49～54は新発田市村尻遺跡第126号土坑出土土器［田中ほか1982；石川1985a］で、石川氏が鳥屋2b式の標式資料としたことで著名である［石川1988・1993］。浅鉢はC1類（49・50）、I1類（51）、浮線文種類はf2種（49）、g2種（50）、h種（51）である。h種は青田遺跡Ⅳ期に出現することを重視すればⅣ期に並行するといえよう。甕はC3b類（83）とF3a類（52）があり、Ⅲ～Ⅳ期の特徴を備える。54は斜縄文が施される注口土器である。以上から、本土器群は浅鉢の特徴からⅣ期に位置付けられるものと考える。

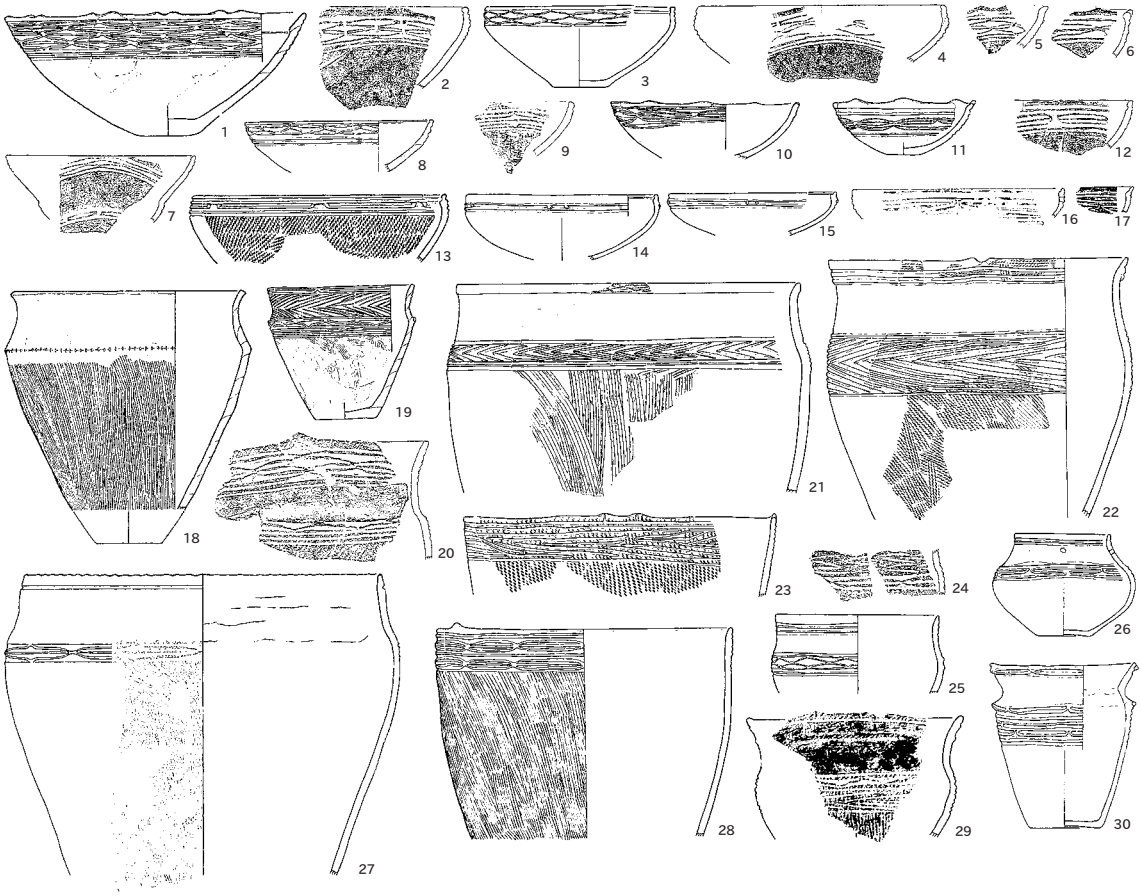
第165図55～62は山北町上山遺跡出土土器である［小林1988］。発掘調査資料ではないものの、本遺跡に関連する良好な資料が認められる。浅鉢はC2a類（55）、C3類（56）、C4a類（57・58）、D4a類（5）、H5a類（60）を確認できる。55はⅠ期に伴い、上下交互の匹字文56はⅡ期以降に伴うものとみられる。57～59はⅢ～Ⅳ期に特徴的なものである。60は青田遺跡902と同様のモチーフになるものと考えられ、Ⅳ期に並行するものとみられる。甕はD2b類（61）、D3b類（62）があり、61はⅠ期から認められ、62はⅣ期に盛行するものである。以上から、本土器群はⅠ～Ⅳ期に並行するものを確認できたが、浮線文1類が認められない一方で、変形工字文4a類と変形工字文5a類がある点は青田遺跡と共通しており、青田遺跡における東北地方からの影響を検討する上で重要であろう。

第166図63～87は安田町六野瀬遺跡出土土器［石川・渡邊ほか1992］であり、石川日出志氏により鳥屋2b式の標式資料とされた土器群である［石川1988・1993］。浅鉢はB1類（63・69・74）、C1類（64～66・68・70・71）、D1類（73）、G1類（67）、I1類（72）があり、浮線文種類はa4種（69）、b3種（63）、c1種（73）、d1種（68）、d3種（74）、e2種（72）、e3種（64～65）、f2種（66）、h種（70・71）で、67はd4種とd5種が混在するものである。63・64は石川日出志氏により鳥屋2a式に位置付けられているように古相を示すとみられるが、青田遺跡に照らし合わせると63のb3種はⅡ期に出現しており、Ⅱ期の可能性もある。64はⅡ～Ⅲ期に収まるものと考える。また、多段化する65もⅡ～Ⅲ期とみられる。66～69・72～74はⅢ～Ⅳ期で、70・71はⅣ期であろう。75・76はC7類で、Ⅳ期のものである。77は丸底のF類とみられる。甕はC3b類（78）、C3c類（79）、C3e類（80）、D3d類（81）、E3a類（83）があり、Ⅲ～Ⅳ期の特徴が認められる。深鉢はA7d類（84）、C7d類（85）などがある。84は体部の条痕文施文後に複合口縁を作り出しており、阿賀北地域の特徴を示す。壺は口縁部に縄文が施される大形A類（87）と無文のA類（86）、肩部に浮線文a3種が施されるB類（82）がある。以上から、本土器群は一部Ⅰ～Ⅱ期のものを含むが、Ⅲ～Ⅳ期を主体とするものと考える。

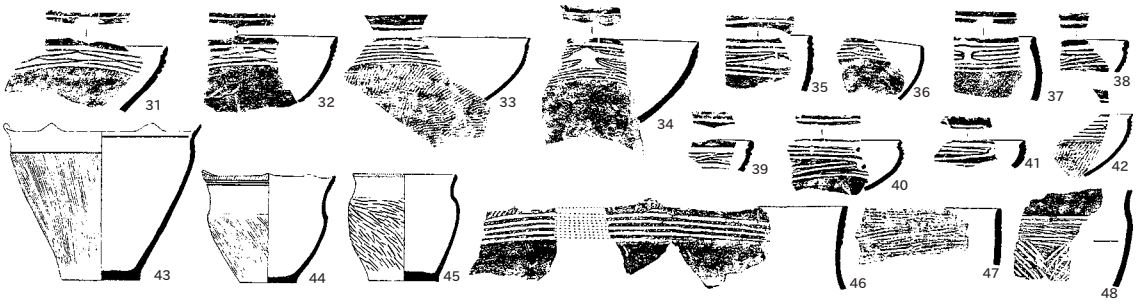
第166図88～115は栄町長畑遺跡出土土器［本間・戸根ほか1975；荒川1998］であり、これも石川日出志氏が鳥屋2b式設定の根拠とした土器群である。浅鉢はC1類（88～91・93～94・96）で、浮線文種類はa2種（91）、b2種（88）、c1種（96）、e2種（89）、e3種（90）、d2種（93）、h種（92・94）である。88・90は文様帯が狭くⅢ期に並行する可能性がある。89・91・93・96はⅢ～Ⅳ期、92・94はⅣ期であろう。97は肩部に綾杉文が施されるⅠ類で、Ⅳ期の可能性がある。これらに伴うものとして、C4b類（101・102）、G3類（98・99）、G5b類（103・104）を確認でき、青田遺跡と同様に98・99はⅢ期、101・102はⅢ～Ⅳ期、103・104はⅣ期にそれぞれ伴うであろう。甕はB3e類（105）、C3b類（106）、C3d類（107）、E3b類（110・115）、F3b類（108）、F3d類（114）がある。105はⅠ～Ⅱ期に特徴的である。106～108・114・115はⅢ～Ⅳ期で、110は三角形集合沈線文が施されておりⅣ期に属する可能性が高い。106はE3a類とみられるもので、肩部に浮線文g2種が施されておりⅢ～Ⅳ期であろう。深鉢はC3類（111）があり、Ⅳ期とみられる。壺はA類とみられる112・113が伴う。以上から、本土器群はⅢ期とⅣ期を主体とし、これに匹字文と変形工字文が伴うことが確認できる。

このほか、県内では朝日村元屋敷遺跡［野田2002］で青田遺跡Ⅰ～Ⅳ期に並行する各器種が散見され、変形匹字文（報告書図面図版312の4263）や匹字文・変形工字文を持つ土器が出土しており、青田遺跡と同様に浮線文土器群に大洞式土器が伴う点で注目される。巻町御井戸遺跡［前山1994］では青田遺跡Ⅰ～Ⅲ期を中心とした土器群が出土している。出雲崎町乙茂飯田遺跡［寺村1957］では、寺村光晴氏が大洞A'式との関連を指摘した浮線文h種がまとまっており、青田遺跡Ⅳ期に並行するものと考える。

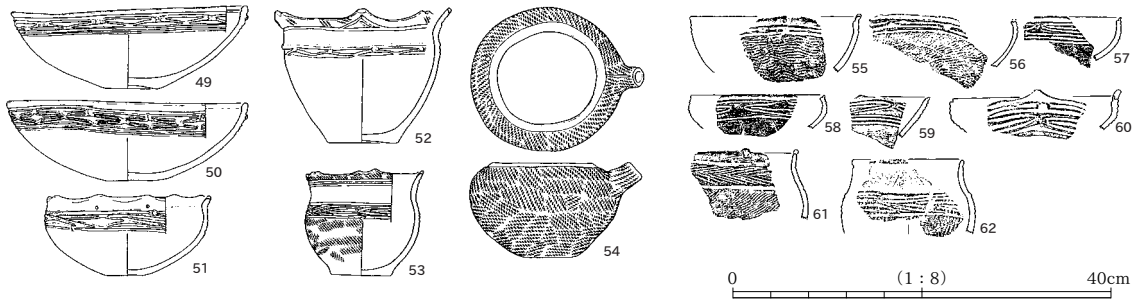
豊栄市鳥屋遺跡出土土器［関・石川ほか1980・1988］



豊栄市鳥屋遺跡出土土器［磯崎1957］

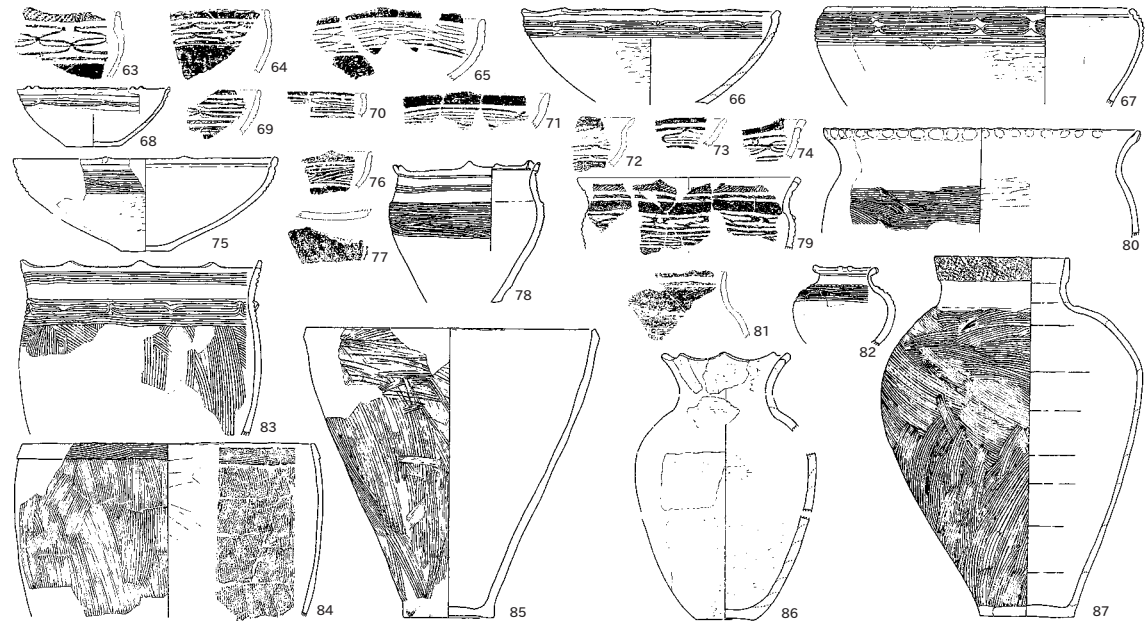


新発田市村尻遺跡第126号土坑出土土器［田中ほか1982；石川1985a］山北町上山遺跡出土土器［小林1988］



第165図　県内出土の縄文時代晩期終末の土器（1）

安田町六野瀬遺跡出土土器［石川・渡邊ほか1992］



栄町長畑遺跡出土土器［本間・戸根ほか1975；荒川1998a］

第166図　県内出土の縄文時代晩期終末の土器（2）

以上のように、青田遺跡の各器種における分類は各遺跡においても認められ、その有効性が確められた。そして、これらの遺跡が青田遺跡Ⅰ～Ⅳ期に並行することが明らかになった。

F　編年的位置付けと地域性

はじめに述べたように、青田遺跡は晩期終末の浮線文が施される土器群を中心とし、県内の土器型式に照らし合わせると「鳥屋２式土器」に相当する。「鳥屋式土器」は、磯崎正彦氏が鳥屋遺跡の甕をメルクマールとし、「明らかに大洞A'式に比定できるもの」が資料中にあるとしながらも当該期の資料数が少ないとして編年的位置付けを明言せずに晩期終末の土器型式として提唱したものである［磯崎1957］。その後、緒立式の設定に伴い新潟県中下越地域の縄文時代晩期後半の土器として「大洞C_2式古（朝日式）→大洞C_2式新（上野原）→大洞Ａ式古（藤橋式）→大洞Ａ式新（鳥屋式）→大洞A'（緒立式）式」という序列を示し、鳥屋式土器は大洞Ａ式新に並行するとされた［磯崎・上原1969］。一方、1957年に小出義治氏・寺村光晴氏によって鳥屋遺跡の発掘調査が行われ、土器の層位データを加味して「工字文Ａ→工字文Ｂ→浮線工字文Ａ→浮線工字文Ｂ」の順に推移することを明らかにした［小出・寺村1958］。これは石川日出志氏が評価するように今日の鳥屋１式→２式という序列を示す層位的な出土事例として重要である。さらに、小出・寺村両氏は磯崎正彦氏が公表した鳥屋遺跡資料が時期的に新しいものが多いことを認め、その理由を調査地点の違いによるものと推定している。石川日出志氏は1978・79年に行われた鳥屋遺跡の発掘調査資料をもとに鳥屋式土器の吟味を行い、工字文を特徴とする鳥屋１式と浮線文を特徴とする鳥屋２式を設定した。そして、鳥屋２式については工字文との系譜関係を追える浮線文を2a式に、これらの構図が乱れたものや紡錘形の構図の一部を2b式に細分した。さらに、2a式の浅鉢の中に頸部無文帯を持つものや眼鏡状隆帯文の痕跡をとどめる古相を示す一群の存在を認め、その代表例として福島県下谷ヶ地平Ｃ遺跡を挙げている。以上の編年的位置付けについては、鳥屋２式に後続する緒立式が青木畑式と接点を持つことと、鳥屋2b式を主体とする長畑遺跡と磯崎正彦氏が報告した鳥屋遺跡資料が大洞A'式を含みながら緒立式を混じえないことから、鳥屋2b式が大洞A'式と接点を持つとし、鳥屋2a式は大洞Ａ式後半期、鳥屋１式は大洞Ａ式前半に並行するとした。その後、鳥屋１式については前半と後半の細分がなされ、浮線文土器が鳥屋１式後半に出現するとした［石川1991］。また、鈴木加津子氏も鳥屋1a・1b式に細分し［鈴木1991］、最近ではこの呼称が用いられている［田中1992；石川2002］。鳥屋2b式については石川日出志氏が六野瀬遺跡資料を新たに標式資料として再考し、左右が連結しない浮線文（第166図73など）を鈴木正博氏の大洞A_2式の変形匹字文が採用された例とみなし、鳥屋2b式が大洞A_2式とも接点を持つと修正した。渡邊朋和氏は緒立遺跡の土器群を緒立１・２期に設定し、１期を1a・1b・1c期に３細分して1a期が大洞A'式並行とした上で、鳥屋2b式と緒立式に伴う大洞A'式に区別のできない一群があるとし、両者が接点を持ち、一部並行する可能性を指摘した［渡邊朋1998］。

このように、鳥屋式土器は各遺跡の土器群の構成とそれに伴う大洞諸型式を検討し、現在の編年的序列が構築されているといえよう。しかしながら、鳥屋2a・2b式の根幹となる浮線文の変遷は型式学的検討に因るところが大きく、一括資料や層位別資料に恵まれていない。また、大洞諸型式との並行関係についても未だ未確定の部分があると考える。

以上を踏まえ、青田遺跡Ⅰ～Ⅴ期の編年的位置付けについて述べたい。編年試案を第93表に示した。

青田遺跡Ⅰ期はD・S5・S4層の時期である。浅鉢の口縁部文様帯が広く古相を示す浮線文が施されることや、鳥屋１式に系譜関係を認められる甕Ｂ類が主体をなすことから、鳥屋2a式の古相の特徴を示

青田遺跡		県内の主要土器群	新潟	東北	中部高地
Ⅴ	SD1420-B9～B7層	緒立	緒立1a期	大洞A'式（古）	氷Ⅰ式（新）
Ⅳ	SD1420-2～1層	六野瀬・村尻第126号土坑・長畑・上山	鳥屋2b式（新）		
Ⅲ	S1層	鳥屋・長畑	鳥屋2b式（古）	大洞A2式	氷Ⅰ式（中）
Ⅱ	S2層	鳥屋	鳥屋2a式（新）	大洞A1式（新）	氷Ⅰ式（古）
	S3層				
Ⅰ	S4層	鳥屋	鳥屋2a式（古）		
	S5層				
	D層				離山式

第93表　青田遺跡と周辺の並行関係

す。ただし、青田遺跡では下谷ヶ地平C遺跡のように頸部無文帯や眼鏡状隆帯文の痕跡を留める浅鉢が少なく、下谷ヶ地平C遺跡では青田遺跡に認められる波状口縁や内面突帯状口縁を持つものが少ない点でやや様相が異なるが、浮線文a1・a2・b1種を基本とする点は共通する。県内ではⅠ期のものは鳥屋遺跡に散見される程度であったが、青田遺跡でまとまりが確認できたことからⅠ期を鳥屋2a式（古段階）とする。本期は大洞A1式新段階に比定できる浅鉢が出土しているほか、氷Ⅰ式（古段階）［中沢1998］が伴っており、これらと並行するであろう。なお、氷Ⅰ式（古段階）の前段階に位置付けられる離山式土器［中沢1998］は青田遺跡で認められないため並行関係は明瞭でないが、本期の初頭に位置付けられる可能性がある。

青田遺跡Ⅱ期はS3・S2層の時期である。Ⅰ期と浮線文種類がほとんど変化しないものの文様帯の狭小化傾向がうかがえるほか、甕C類が増加する点が特徴である。鳥屋遺跡の鳥屋2a式は本期のものを多く含む。以上から本期を鳥屋2a式（新段階）と呼びたい。なお、青田遺跡でⅡ期の土器がⅠ期に比べ少ないのは、集落がS2層期に一時衰退するためと考えられる。本期は他地域との並行関係を示すものは少ないが、Ⅲ期が大洞A2式と接点を持つことから、大洞A1式（新段階）に並行しよう。ただし、大洞A2式とも一部並行する可能性も残される。

青田遺跡Ⅲ期はS1層の時期である。浅鉢C類が主体となり、狭小化した文様帯に様々な浮線文が施される段階であり、鳥屋2b式に比定されよう。本期と並行する鳥屋遺跡・長畑遺跡は石川日出志氏により鳥屋2b式の指標とされていることからも妥当と考える。ただし、次のⅣ期と浮線文の比率や種類において差異が認められることから、本期を鳥屋2b式（古段階）とする。本期は鈴木正博氏の変形匹字文は認められないものの、大洞A2式期に伴うとみられる匹字文や丸底の浅鉢が出土している。大洞A2式の単純資料とみられる山形県砂子田遺跡［森谷・佐竹ほか2003］では、変形匹字文と対向する匹字文が共伴しているほか、浅鉢5類の変形工字文を含まずに変形工字文4b類が確認でき、本期と共通する様相と評価できる。一方、氷Ⅰ式（中段階）に比定できる浅鉢も伴う。よって、鳥屋2b式（古段階）―大洞A2式－氷Ⅰ式（中段階）という並行関係を認めることができる。

青田遺跡Ⅳ期はSD1420-2～1層の時期である。浮線文が減少しながらも新たに浮線文h種が加わる段階であり、鳥屋2b式（新段階）とする。本期は村尻遺跡第126号土坑・六野瀬遺跡・長畑遺跡が並行するほか、鳥屋遺跡の磯崎正彦氏報告分と乙茂飯田遺跡も本期の好例である。本期の浅鉢は変形工字文5a・5b類が伴うが、5a類とした三角形内の一部に彫去が施される曲線的な変形工字文の多くは変形工字文の中でも古相を示すものであり、鈴木正博氏の大洞A'式（古古段階）［鈴木1987］に相当するものとみられる。そして、直線的な変形工字文5b類は東北北部の剣吉荒町Ⅱ群［工藤1995］に比定でき、大洞A'式（古段階）に位置付けられる。しかし、青田遺跡では5a・5b類がまとまって出土しており、両者に時期差を認めることが難しい。高瀬克範氏が指摘するように［高瀬2000］、ここでは大洞A'式（古古段階）を大洞A'式（古段階）に含めて考えたい。よって、本期は大洞A'式（古段階）に並行しよう。それでは、

氷式との関係はどうであろうか。青田遺跡ではⅣ期に伴う氷式土器は認められない。この点については、福島県滝ノ口遺跡１号住居跡出土資料［高田1987］の変形工字文に伴う浮線文土器の解釈が問題となる。これを典型的な氷Ⅰ式に対比させる見解［設楽1991；高瀬2000］と氷Ⅰ式より後出するものとする見解［田部井1993］がある。筆者は前者を支持した上で、この土器が左右に連結しないモチーフに加えて青田遺跡のＸ字状を呈す浮線文ｈ種（第159図895）の施文手法が採用されている点（報文p144 PL42の写真6）を重視し、青田遺跡Ⅳ期に並行するものと考える[2)]。そして、鳥屋2b式（新段階）―大洞A'式（古段階）―氷Ⅰ式（新段階）［中沢1998］が並行すると考える。本期に浮線文の減少傾向が認められる点は、氷Ⅰ式（新段階）の指標となる長野県石行遺跡［竹原1987］にも共通する傾向であり、以上の並行関係を支持しよう。

青田遺跡Ⅴ期はSD1420-B9～B7層の時期である。浮線文が欠落し、変形工字文のみが認められる段階であり、鳥屋2b式直後に位置付けられる。しかし、砂沢式や青木畑式に並行する緒立1b・1c期［渡邊朋1998］を含んでおらず、この編年的位置が問題となる。本期とⅣ期の変形工字文の違いは前述したとおり器形や施文手法の点に違いが認められる。一方、渡邊朋和氏が設定した緒立1a期に伴う変形工字文も青田遺跡Ⅳ期のものに比べ沈線幅が広めで、文様帯幅が広く多段化する可能性のあるものも認められる。さらに、緒立遺跡ではⅣ期に比定される浮線文土器は認められず、緒立1a期が浮線文土器を伴わない段階と考えてよかろう。以上から、青田遺跡Ⅴ期は緒立1a期に相当し、緒立1a期は鳥屋2b式に後続するものと考える。なお、中部高地との並行関係を示す土器は出土していないが、浮線文系の甕が残存する時期であることから氷Ⅰ式（新段階）と引き続き並行する可能性がある。

以上のように、青田遺跡の土器群は浮線文が盛行する鳥屋2a式（古段階）～鳥屋2a式（新段階）を経て、大洞A_2式の影響が認められる鳥屋2b式（古段階）、浮線文土器が減少しこれに変わるように大洞A'式が増加する鳥屋2b式（新段階）、浮線文が認められず大洞A'式が主体となる緒立1a期の段階に変遷することが明らかになった。大洞A_2式の段階から大洞式土器の影響が強まることを確認できたことは、渡邊朋和氏が指摘するように、緒立式以前に緒立式に繋がる系譜があったもの［渡邊朋1998］と評価できよう。

次に青田遺跡の地域性について述べたい。第一に甕・深鉢にみられる複合口縁の少なさを挙げることができる。甕では全体の３％あまりにしか複合口縁を確認できない。一方、信濃川流域の長畑遺跡［荒川1998］では甕の66%に複合口縁が認められ、両者の差は明らかである。また、長畑遺跡の深鉢は複合口縁を作り出す以前に条痕文は施文されないが、青田遺跡では体部から口縁部にかけて条痕文を施文した上に複合口縁が作られている（図面図版152-168）。これは鳥屋遺跡や六野瀬遺跡などの阿賀北地域や会津地方で確認でき、これらの地域の特徴といえよう。

また、甕・深鉢の口縁部には結節縄文が施されるものが多数認められており、これを石川日出志氏は結節縄文が多用される信濃川流域との密接な関係と評価された［石川2002］。信濃川流域の結節回転について筆者は阿賀北地域阿賀野川以北と異なる地域性と考え［荒川1998］、渡邊裕之氏は保明浦遺跡［田畑ほか1996］の結節回転を「保明浦タイプ」と呼んで地域性を明らかにした［渡邊裕1998］。一方、青田遺跡で注目されるのは、各時期に結節縄文が施される深鉢が目立つ点である。阿賀北地域では鳥屋１式の深鉢の口縁部～体部にかけて結節縄文が数段施される例があり、さらに山形県砂子田遺跡では大洞A_2式の深鉢の口縁部下に１条を加えるものが多数認める。したがって、結節縄文が施される深鉢は、阿賀北

2）郡山市教育委員会の高田勝氏・押山雄三氏のご配慮により滝ノ口遺跡資料を拝見させていただき確認した。

地域～東北地方南部においても普遍的に存在していたといえよう。青田遺跡のものもこうした地域の状況を示すものと考える。また、こうした深鉢は浮線文土器特有の甕が減少する弥生時代前期の緒立遺跡にも多数確認でき、緒立式にも継続する。緒立式には波状沈線文が施される特有の深鉢が伴うが、波状沈線文は結節縄文と施文位置や文様効果が共通していて密接な関係がうかがえ、関雅之氏が指摘するように結節縄文の文様効果を棒状工具で表した可能性が高い［関1973］。青田遺跡では波状沈線文が施された深鉢が認められるほか、Ⅳ期の壺（第164図1142）に波状沈線文が採用されていることを重視すれば、この時期に波状沈線文が誕生した可能性があり、緒立式に先駆けて結節縄文と波状沈線文のセットが完成していたものと考える。さらに、緒立遺跡で甕・深鉢の複合口縁が欠如する点は前述した青田遺跡の特徴と共通しており、両者の密接な関係を認めることができよう。したがって、緒立式の結節縄文と波状沈線文は青田遺跡をはじめとする阿賀北地域の影響下に発達したものとも理解できよう[3)]。さらに、本県南部の中郷村和泉Ａ遺跡［荒川・加藤1999］の弥生時代前期の土器にみられる波状沈線文には、こうした北からの影響が関与した可能性が高い。

青田遺跡の土器群は信濃川流域の土器群と器形・文様種類の点で共通性が高い一方、甕・深鉢の細部に明確な地域性を認めることができる。そして、Ⅳ期に東北地方の強い影響下で変形工字文が普及すると共に、青田遺跡で認められた阿賀北地域の地域性が緒立式の成立に深く関与したものと推察される。

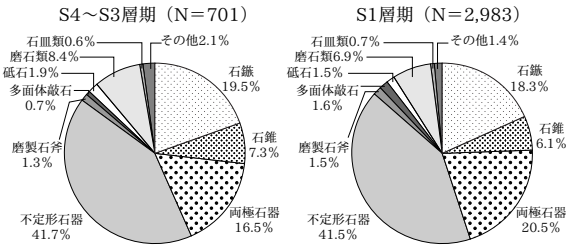
3）渡邊裕之氏は緒立遺跡の結節縄文を信濃川流域の「保明浦タイプ」が深く関係したとする［渡邊裕1998］。

4　青田遺跡出土石器群の器種組成と石材組成

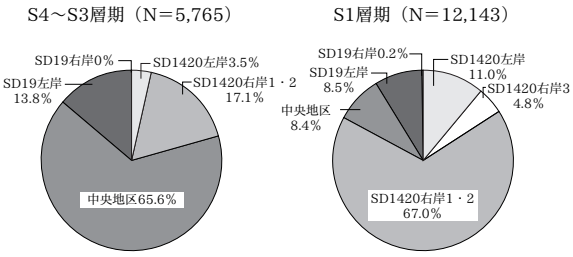
事実記載では、地区ごとに区切って各器種の説明を行った。ここでは、それらを総括し、遺跡内全体の器種組成や、石材組成からみる石材獲得範囲、各器種の特徴などを述べる。また、本遺跡の特徴を明確にするために、各項目中で当該期における周辺遺跡との比較を行ったものもある。

A　器種組成

本遺跡では、層位別の石器の出土量に大きな差異が認められ、S1層期に出土した石器は2,983点とS4～S3層期の約4倍であり、数量的増加が著しい（第167図）。このような増加傾向は、土器や植物遺体にも認められる（本編第Ⅴ章1・8参照）。層位別に見る平面的分布は、S4～S3層期には中央地区に、S1層期にはSD1420右岸1・2地区において最も多く出土している。また、石核や剥片類についても同様の平面的集中を見ることができ（第168図）、石器製作地と廃棄場所が一致する。層位別の器種組成に大きな変化は認められず（第167図）、不定形石器及び両極剥離痕を有する石器が6～7割を占める。定形石器に注目すると、石鏃の割合が最も高く、磨石類・石錐がそれに次ぐ。また、地区別の器種組成を見ると、S4～S3層期では、中央地区において石鏃・石錐の占有率が高くなる（第169図）。また、当該期における磨製石斧・多面体を呈する敲石については各地区共に占有率は低い。S1層期では地区ごとの組成に際立った特徴は認められず、石鏃・磨石類・石錐が主体の含有率が高い（第170図）。なお、SD1420右岸3地区では、石皿類は出土していない。

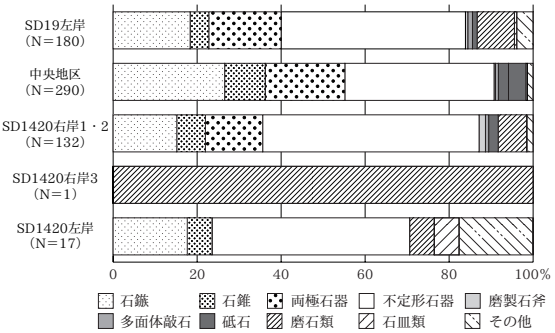


第167図　層位別器種組成

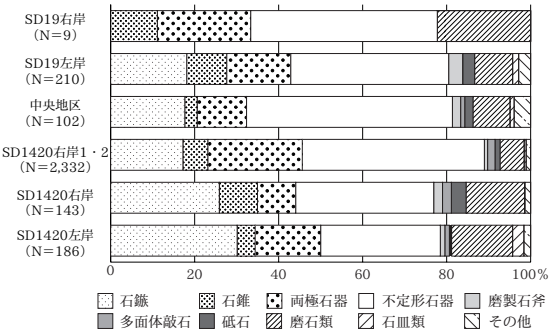


第168図　層位別剥片類分布

定形石器を、狩猟具（尖頭器・石鏃）、採取・加工具（石錐・打製石斧・磨製石斧・篦状石器）、調理具（磨石類・石皿類・石匙）と大別した場合［鈴木1999］、本遺跡は狩猟具が40.7%と優勢であり、採取・加工具が31.1%、調理具が28.2%とほぼ同率を占める。同様に、県内の縄文時代後期～晩期遺跡に所属する主



第169図　S4～S3層期　地区別器種組成



第170図　S1層期　地区別器種組成

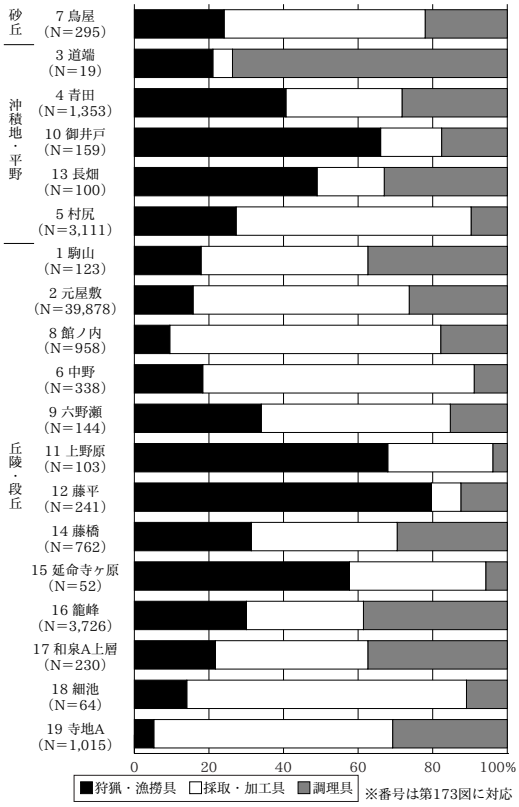
第171図　層位別出土遺物　　※縮尺はすべて図面図版の1/2

要遺跡を見てみる（第172・173図）。立地を砂丘、沖積低地・平野部、丘陵・段丘に分類すると、砂丘上に立地する豊栄市鳥屋遺跡では採取・加工具が53.9%と過半数を占め、狩猟具が24.1%と次ぐ。沖積低地・平野部に立地する巻町御井戸遺跡・栄町長畑遺跡などは狩猟具が優勢であり、5～7割程度を占める。丘陵・段丘上に立地する遺跡では採取・加工具優勢の遺跡が多く認められる。特に阿賀北地域に位置する朝日村元屋敷遺跡・同村駒山遺跡・新発田市館ノ内遺跡、糸魚川地域に位置する青海町寺地遺跡などは磨製石斧生産遺跡という性格上、採取・加工具の占める割合が多くなったものと考えられる。なお、三条市上野原遺跡は丘陵地と平地の変換地点に立地しているため、沖積地・平野部に類似した組成を示すと考えたい。このように、大まかにではあるが立地によって共通性が認められ、本遺跡は県内の沖積地・平野に立地する遺跡と共通する器種組成を示す。ただし、同じ立地でもほかの環境条件（例えば同じ沖積地・平野部に立地していても、海に近い遺跡と山に囲まれている遺跡では組成に変化が生じよう）により差異が認められることも予想される。

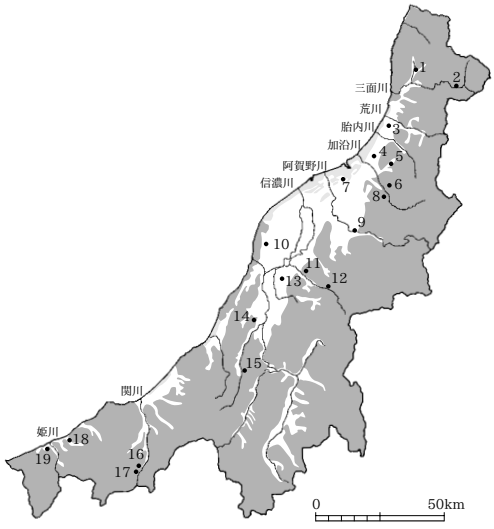
B　石材について

本遺跡で出土した石器石材は、流紋岩を主体とし、S4～S3層期は石器総数の55.6%、S1層期は50.7%を占める（第174図）。次いで頁岩A類が多く、玉髄・凝灰岩A類・花崗岩は5～10％程度認められる。S1層期は黒曜石が比較的割合が高いが、層位別の石材組成に大きな変化は認められないと言って良いだろう。

本遺跡は胎内川と加治川のほぼ中間地点に位置しており、それぞれの流域で採取される石材が、本遺跡で用いられた石器の素材となる可能性が高い。胎内川では剥片石器に適する石材は分布していないが、加治川流域では流紋岩が豊富に分布する［阿部1995］。また、加治川中流域の程近くには黒曜石の産地である新発田市板山・上石川地区や、鉄鉱石の産地である同市赤谷地区がある。鉄鉱石が出土していることや黒曜石の産地同定の結果を踏まえると、本遺跡出土の石材は加治川流域との関連性が強いと考えられる。また、頁岩B類は「半透明の頁岩」［阿部1997］と呼称される珪質頁岩で、現在のところ、荒川流域の関川村獅子舞岩でのみ露頭が確認されている［秦2001］。このことから荒川流域へも石材獲得のための行動範囲を広げていたと考えられる。本遺跡から荒川流域までは直線距離で約20kmである（第173図）。また、礫石器は花崗岩・安山岩が主体を占め、本遺跡周辺で容易に獲得できる石材である。

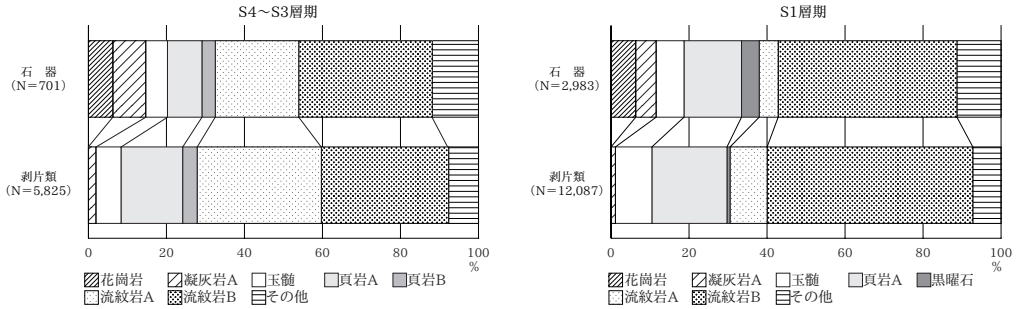


第172図　縄文時代後期～晩期遺跡器種組成



第173図　縄文時代後期～晩期遺跡分布図

黒曜石製の石器・剥片類は262点出土しており、石器総数の1.1%と低い割合である。黒曜石の利用頻度は後期以降低下することが指摘されており［土橋1999］、本遺跡も例外ではない。石鏃のみを見ても、550点中32点（5.8%）が利用されているに過ぎず、鳥屋遺跡では77点中3点（3.9%）、元屋敷遺跡では1,318点中93点（7.1%）［酒井2002］といずれも1割に満たない。出土した黒曜石のうち75点を産地同定したところ、64点（85.0%）が新発田市板山、11点（15.0%）が同市上石川という分析結果が得られた（関連諸科学編第Ⅴ章1参照）。いずれの産地も本遺跡から直線距離で10～15km程度と近距離に位置しており、直接獲得が可能であろう。縄文時代後期～晩期に所属する周辺遺跡で出土した黒曜石の産地を挙げると（第94表）、巻町御井戸遺跡では長野県星ヶ塔や、山形県月山、北海道赤井川など、遠隔地から搬入された石材が目立つ［金山ほか1995］。新発田市村



第174図　層位別石器・剥片類石材組成

遺跡名	所在地	所属時期	分析点数	新潟		長野			山形	秋田	宮城	北海道		長崎	不明
				板山	上石川	星ヶ塔	和田峠	霧ヶ峰	月山	男鹿	湯倉	置戸	赤井川	淀姫	
青田	加治川村	晩期末葉	75	64	11										
村尻	新発田市	後期末～晩期前葉	4					1	3						
村尻	新発田市	後期末～晩期中葉	3	1	1				1						
御井戸	巻町	後期～晩期	10	1		3	1		2				2	1	
上ン原	巻町	後期～晩期（a層）	1									1			
元屋敷（下段）	朝日村	後期～晩期	8					1	6						1
元屋敷（上段・斜面）	朝日村	後期～晩期	50	10				3	11	2	1				23
籠峰	中里村	後期	4					4							

（[土橋1999]を一部改正）

第94表　周辺遺跡出土黒曜石産出地

尻遺跡では月山のものも認められる［藁科ほか1996］。朝日村元屋敷遺跡では、板山と月山が同率で最も多く、それに加え長野県霧ヶ峰、秋田県男鹿、宮城県湯ノ倉のものも認められる［藁科2002］。周辺遺跡で出土した黒曜石の産地は一か所に偏ることはなく、遠隔地の石材が含まれるのが一般的である。その点で本遺跡の産地同定結果は特異な傾向を示していると言えよう。

また、本遺跡では蛇紋岩製の磨製石斧が出土しており、糸魚川地域からの搬入品と考えられる。蛇紋岩製の磨製石斧は阿賀北地域に位置する遺跡では一般的に認められ、本遺跡も蛇紋岩の交易経路の範疇に含まれていたものと考えられる。また、ヒスイ製の玉類が1点出土しており、同定の結果から青海・糸魚川地域に原産地を求めることができ（関連諸科学編第Ⅴ章2参照）、蛇紋岩と同様のルートで搬入されたと考えられる。一方で、石材産地は不明であるものの、弥生時代における細形の管玉に類似するものが出土している点（本編第Ⅴ章4）では他地域との交易経路が存在する可能性もあろう。

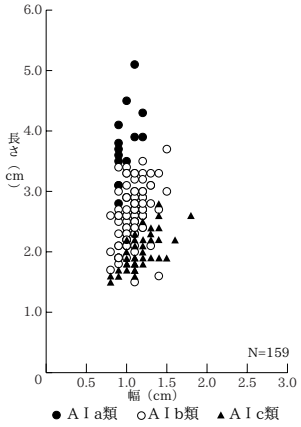
剥片類と石器の出土量の関係から搬入品と考えられるものも存在する。遺跡内で各石材が製作されていた場合、石器の製作工程上、石器よりも剥片類の数量が上回ると考える。石器と剥片類の数量に差がそれほど大きくない場合、もしくは石器の数量が上回る場合は、遺跡外で製作され、持ち込まれた可能性が高い。このような傾向は、両時期の凝灰岩A類とS1層期の黒曜石に認められる（第174図）。具体的に点数を挙げると、S4～S3層期の凝灰岩A類は剥片類111点、石器63点、S1層期の凝灰岩A類は剥片類134点、石器162点、黒曜石は剥片類96点、石器138点である。S1層の凝灰岩A類・黒曜石は石器の点数が剥片類の点数を上回っている。このことから凝灰岩A類及び黒曜石製の石器は他地域で製作され搬入された可能性を指摘できる。特に黒曜石は、比較的容易に素材を獲得できるにも関わらず、製品として遺跡内に持ち込まれている可能性が高い点は注目すべきであろう。

C　各器種の特徴

【石鏃】　S4～S3層期100点、S1層期389点である。S4～S3層期は中央地区においてAⅠ類（平基有茎鏃）が6割以上を占め、ほかの地区よりも高い割合を占める。その中でもAⅠa類が出現している

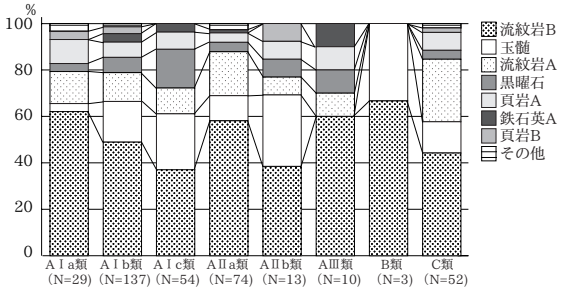
点はほかの地区には認められない特徴である。S1層期には、各地区ともＡＩ類が６～７割程度と主体を占め、ＡＩａ類も認められるようになり、ＡＩａ類の増加は時期的な特徴と捉えることもできよう。また、SD1420右岸３地区でＡＩｃ類が高い割合を占める点でほかの地区とは異なる。

有茎鏃が主体を占めることは、当該期における県内の一般的な傾向である。本遺跡出土の平基有茎鏃は大きさが多様であり、身部長と最大幅の比率でＡＩａ～ＡＩｃ類の３分類を行った。ＡＩ類の中茎を含めた長さと最大幅の長幅分布は各分類によってまとまりが認められる（第175図）。すなわち、身部長と最大幅の比率が大きくなるに従って、全体長が大きくなる傾向を指摘できる。また、幅は分類に限らず0.7～1.5cm付近に分布する。第175図において各分類にまとまりが認められる点は、分類に関わらず中茎の長さが一定であることを示している。



第175図　石鏃ＡＩ類長幅分布

石鏃に用いられる石材は、各分類とも流紋岩Ｂ類が主体を占める（第176図）。ＡＩ類は、身部長と最大幅の比率が小さくなるに従って流紋岩Ｂ類の占有率は低くなり、それに代わって玉髄・黒曜石の比率が高くなる。この傾向はＡⅡ類においても認められ、大きさ（長さ）による石材の選択性を示唆している可能性もある。ただし、幅が長さに関わらず一定の数値を示す点では、再生の可能性も否定できない。



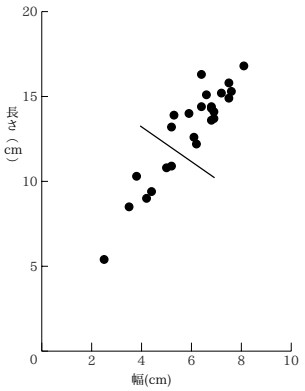
第176図　石鏃分類別石材組成

【石錐】　S4～S3層期51点、S1層期183点である。両時期ともＢＩ類及びＢⅡ類が主体を占める。各地区での出土点数の差が大きいため単純な比較はできないが、S1層期のSD1420右岸３地区は、ＢＩ類及びＣ類の割合が高い。

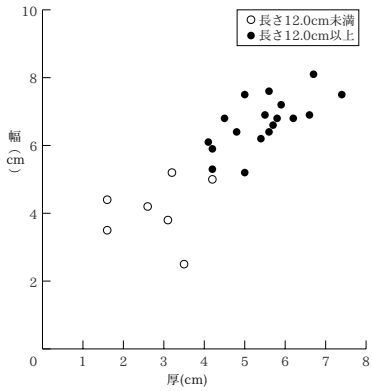
【不定形石器】　S4～S3層期292点、S1層期1,283点である。時期に関わらず、各地区共にＨ類が５～６割程度を占める。Ｈ類を除くほかの不定形石器は主にＡ・Ｃ・Ｆ類によって構成される。また、時期的な特徴として、S4～S3層期においてＢ類が１～２割程度、S1層期にはＤ類が１割程度認められる。

【磨石類】　S4～S3層期59点、S1層期206点である。両時期・各地区共にＧ類が４割程度と安定した数値を示す。時期的な特徴として、S4～S3層ではＡ類、S1層期ではＦ類の占有率が高くなる。ただし、S4～S3層期のSD19左岸地区では、Ｇ類が２割程度と低くなる一方で、Ｄ類が５割以上を占める点で特徴的な組成を示している。

磨石類は石皿類と共に食料の加工という観点から、堅果類廃棄範囲の分布との関連が注目される。堅果類は、S4～S3層期はSD1420右岸斜面１に位置するSX958に、S1層期はSD1420右岸斜面３に位置す



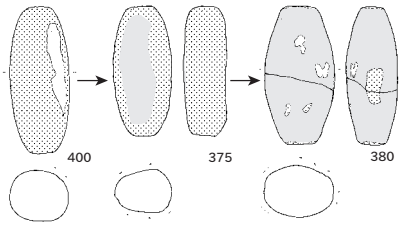
第177図　磨石類（長幅比2.0以上）**長幅分布**



第178図　磨石類（長幅比2.0以上）**幅厚分布**

るSX1686～1689に集中する（本編第Ⅴ章８参照）。しかし、これらの分布と磨石類の分布に明瞭な対応関係は認められない。

本遺跡出土の磨石類の中には、平面形が紡錘形もしくは長楕円形を呈したものが認められる。最も形状が整っている図面図版230-380の長幅比（2.0）を基準にすると、長幅比2.0以上の磨石類は25点認められる。これらは長さ12cm付近に断絶があり（第177図）、この長さを境に厚さにも差異が認められ、12.0cm以上が厚さ4.1～7.4cmと肉厚になり（第178図）、これらが紡錘形・長楕円形の磨石類と捉えられる。これらはほかの磨石類とは異なり、加工痕がほぼ全面に及んでいるものが認められる。図面図版232-400はほぼ全面に敲打が、380は、両端部以外はほぼ全面に磨痕が及んでおり、磨製石斧の製作工程と同様に、敲打の後に研磨（？）という段階を設定することも可能であろう（第179図）。このことから、紡錘形・長楕円形の磨石類は大きさ・形状を意識して製作されていた可能性が指摘できよう。上記の磨石類は、層位別にはS1層期が13点と多数を占め、SD1420右岸１・２地区以南に分布する。



第179図　紡錘形磨石類推定製作工程

【石皿類】　S4～S3層期４点、S1層期20点である。S1層期はSD1420右岸１・２地区において11点出土している。なお、S1層期において堅果類が集中する、SD1420右岸３地区では出土しておらず、堅果類廃棄範囲と石皿類の分布に対応関係は認められない。分類別にはS4～S3層期はＡ類主体、S1層期はＢ類が主体となる。

D　磨製石斧について

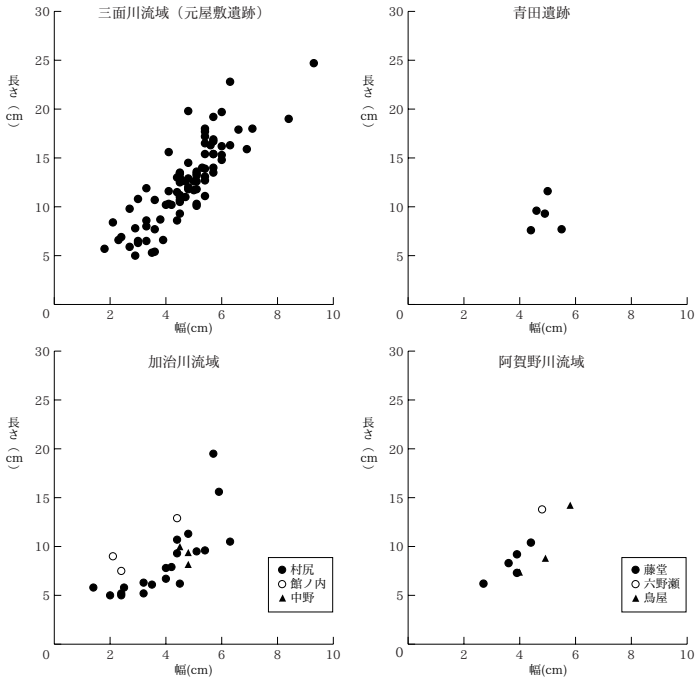
本遺跡からは69点（成品42点・未成品27点）の磨製石斧が出土している。層位別には、S4～S3層期９点、S1層期60点である。単位面積（100㎡）当たりの磨製石斧の本数は、S4～S3層期が0.1本、S1層期が0.5本である。成品は長さ5cmを基準に大形（24点）・小形（17点）に分類した。大形と小形には、用いられている石材に相違が認められる。すなわち、大形は主に安山岩を、小形は主に蛇紋岩を素材として製作されている。また、大形は剥離・敲打・研磨の各段階の遺物が認められ、剥離段階において生じた剥片も出土していることから、遺跡内で製作されていた可能性が高い。一方、小形は蛇紋岩の未成品や、原石及び剥片類は出土しておらず、成品として搬入されたものと考えられる。

阿賀北地域における磨製石斧生産遺跡は４地域[1)]が認められ、各地域で製作された磨製石斧が流通し、各地で消費されていたことが指摘されている［滝沢1999］。これらの生産遺跡はいずれも石材の獲得が容易な河川の流域に立地しており、未成品の点数が成品を上回る遺跡が認められる。これに対し、低地に立地する磨製石斧の生産遺跡は、本遺跡のほかに豊栄市鳥屋遺跡、荒川町道端遺跡［渡邉ほか2003］が挙げられる。ただし、低地に立地する遺跡の磨製石斧の生産量は自給の域を出るものではない。

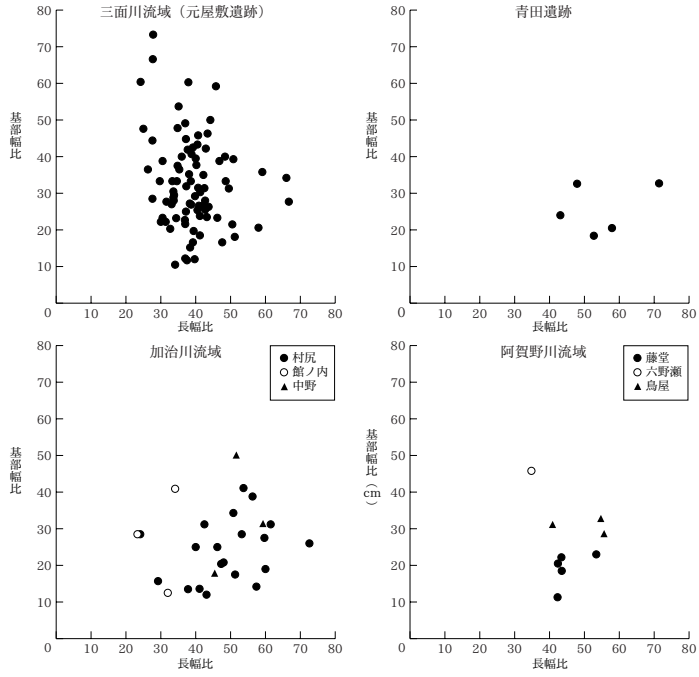
磨製石斧の形態は、Ｃ類（長幅比50以上、基部幅比35以上）７点、Ｄ類（長幅比50以上、基部幅比35未満）６点と撥形を呈するものが多く、大形・小形共に基部幅比は40未満に収まる。また、小形については長幅比60以上が主体を占め、大形のものよりも寸胴であり、形態に若干の差異が認められる。次に阿賀北地域に位置する縄文時代後期～晩期（一部弥生時代を含む）の主要遺跡で出土した大形磨製石斧と本遺跡出

1）三面川上流の奥三面地区、三面川中流及び高根川流域、加治川流域、阿賀野川支流のツベタ川流域の４地域である。

土の磨製石斧の関係を見てみる[2)]。周辺遺跡は三面川・加治川・阿賀野川の各流域に分布する遺跡で出土した磨製石斧の計測値をまとめてグラフ化した。まず長幅分布を見てみると（第180図）、本遺跡出土の磨製石斧は長さ7～12cm、幅4～6cm付近に分布する。他遺跡では元屋敷遺跡は長さ5～20cm付近と分布幅が広い。加治川流域では村尻遺跡で長さ20cm程度のものが認められるが、15cm以下のものが大半を占め、特に中野遺跡はまとまった分布を示す。阿賀野川流域に分布する遺跡もまた長さ15cm以下に収まる。本遺跡出土の磨製石斧の大きさは他遺跡とほぼ同じ分布範囲に収まる。次に長幅比と基部幅比の関係を見てみる（第181図）。本遺跡では基部幅比35未満、長幅比40以上の範囲に分布する。元屋敷遺跡出土の磨製石斧は、長幅比34～50、基部幅比38未満のものが全体の6割以上を占め［滝沢2002］、本遺跡と比べて細長いものが多い。加治川流域では、村尻遺跡が長幅比40以上、基部幅比40以内の範囲に散在的に分布し、館ノ内遺跡は長幅比20～35、基部幅比12～41と、村尻遺跡とは異なった傾向を示す。また、中野遺跡では、長幅分布ではまとまりを示していたものの、基部幅比においては散在的である。阿賀野川流域では、長幅比40～60、基部幅比10～30付近までにまとまるが、さらに出土遺跡によってもまとまりが認められる。すなわち、安田町藤堂遺跡出土例は長幅比40～55、基部幅比10～25の範囲に分布し、鳥屋遺跡出土例は、長幅比は藤堂遺跡とほぼ同じ範囲に分布するが、基部幅比は30付近に分布する。安田町六野瀬遺跡では、完形品は1点しか出土していないが、藤堂遺跡例や鳥屋遺跡例とは異なる基部幅比・長幅比を示す。このように、長幅分布では



第180図　周辺遺跡出土磨製石斧長幅分布



第181図　周辺遺跡出土磨製石斧基部幅比・長幅比

2）計測は報告書に掲載されている実測図及び観察表を基に行った。よって報告外の遺物は計測しておらず、各遺跡の全体的な把握については報告外遺物の観察も必要と考える。

各遺跡とも共通した分布を示していたが、長幅比と基部幅比との関係では相違が認められる。つまり、法量には差が認められないが、形状にバラエティーがあることを指摘できよう。本遺跡出土の磨製石斧の形状は、村尻遺跡・鳥屋遺跡・藤堂遺跡出土例などとほぼ同じ分布範囲内に収まる。

本遺跡出土磨製石斧（成品）の破損状況は、43点中27点（62.8%）に破損が認められ、大形は1類（基部破損）5点、2類（刃部破損）9点、3類（基部・刃部破損）2点、その他3点である。小形は1類7点、2類1点であり、大形は刃部破損、小形は基部刃損が多く認められる。集落遺跡において、伐採用と考えられる大形の磨製石斧は「外部での使用・破損に伴う回収行為によって基部破片が多数を占める」［前山2002］。回収目的は、破損した磨製石斧の再生にほかならないが、基部破損（刃部破片）は再生が困難であることが予想され、使用された場所で廃棄される可能性が高い。一方、小形の磨製石斧は、遺跡内で加工に用いられたため、破損した際も遺跡内に残存すると解釈できよう。法量別による破損状況の差異は、磨製石斧の使用場所が異なる可能性を指摘できる。

次に磨製石斧の数量について考えてみたい。出土した大形磨製石斧のみで、本遺跡で出土した柱根総数458本を伐採したと仮定すると、磨製石斧1本当たり19.0本の柱を伐採したことになる。梁材・桁材・棟木などの上部構造を考慮に入れると、磨製石斧1本当たりの伐採樹木数は更に増加する。伐採実験によると、直径15～20cm程度[3]のクリであれば500～1,000ストローク程度で伐採できる［工藤ほか2002］。また、磨製石斧の耐久性は、17回の実験結果［三山ほか2002］の平均値が7,638.8ストロークとなり[4]、7～15本程度のクリ材を伐採すると磨製石斧が破損する計算になる。当然ながら、柱根の太さ・樹種は多様であり、分断によって切断された柱根も存在することも予想され、それらを考慮に入れなければならない。しかし、それらを考え合わせたとしても本遺跡で出土した磨製石斧の数量的な少なさは否めないだろう。ただし、本遺跡は集落の一部であり、集落全体の傾向とは異なることも予想される。

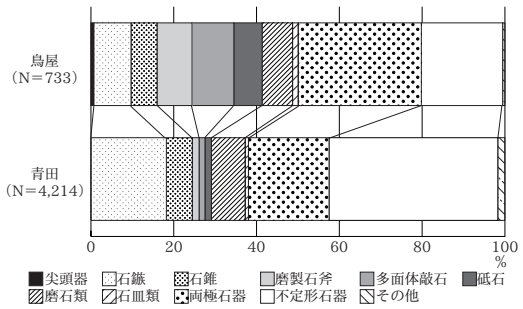
E　鳥屋遺跡との比較

鳥屋遺跡は本遺跡から南西約15kmの阿賀野川右岸の砂丘上に立地し、所属時期は縄文時代晩期後葉～末葉（鳥屋1a～2b式期）と本遺跡とほぼ同時期であるが、若干時期幅がある。検出された遺構は土坑のみで、掘立柱建物の存在も推定されており［荒川2002c］、本遺跡との類似性が認められる。本遺跡と近距離に位置していることや、石材獲得が困難な場所に立地している共通性から、本遺跡との関連が注目される。そこで器種組成・石材・石鏃・磨製石斧について本遺跡との比較を行った。

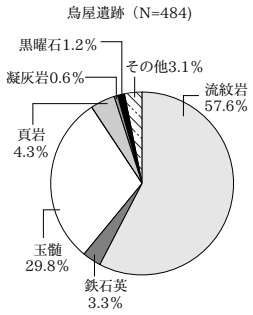
【器種組成】　鳥屋遺跡の出土石器点数は737点と本遺跡の約5分の1である。鳥屋遺跡が本遺跡よりも時期幅が広いことを考えると、一時期における数量的差異は更に広がる。器種組成は不定形石器・両極剥離痕を有する石器が組成の過半数を占める点では本遺跡と共通している。定形石器では、磨製石斧・砥石・多面体を呈する敲石の割合に大きな差異が認められる。また、尖頭器・石錘が出土している点も特徴的である。それと比較して本遺跡は石鏃・磨石類の割合が高い（第182図）。

【石材】　剥片石器の石材は、流紋岩が主体を占める点で本遺跡と共通する（第183図）。ただし、鳥屋遺跡の流紋岩の中には、本遺跡ではあまり認められない赤褐色もしくはピンク色を呈するものが含まれており、産出地が異なることも予想される。同様の色を呈した流紋岩は安田町六野瀬遺跡においても認め

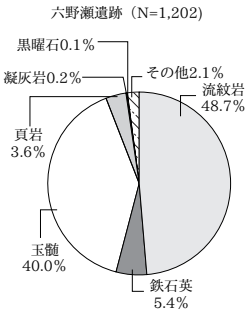
3）本遺跡で出土したクリ材の柱根のピーク値である（本編第Ⅴ章5参照）。
4）伐採実験では、最少で60ストローク、最多で27,000ストローク以上と大きな幅がある。磨製石斧の耐久性には、石材の強度、斧柄との関係、使用者の熟練度など様々な要因に左右されるものと考える。



第182図　鳥屋遺跡と青田遺跡の器種組成



第183図　鳥屋遺跡石材組成



第184図　六野瀬遺跡石材組成

られ、阿賀野川流域特有の色調である可能性も指摘できよう。また、頁岩については、本遺跡は約３割程度に対し、鳥屋遺跡では１割以下であり、それに代わって玉髄が３割と比較的多く用いられている。頁岩については荒川流域に産地を求められる可能性が高いが、鳥屋遺跡から荒川流域までは本遺跡よりも更に遠くなるため、利用頻度が低下したものと考える。なお、流紋岩と玉髄が主体を為す石材組成は六野瀬遺跡［阿部1997］に類似する（第184図）。

【石鏃】　鳥屋遺跡出土の石鏃は、分類可能な78点中57点（73.1%）が本遺跡のＡ類（有茎鏃）を主体とする[5)]。長幅分布を見ると、長さ1.5～4.0cm、幅1.0～2.0cmの範囲に分布し、本遺跡出土石鏃の分布範囲内にほぼ収まる。

【磨製石斧】　本遺跡出土磨製石斧との形態の類似性は上述したが、数量には差異が認められる。鳥屋遺跡の単位面積（100㎡）当たりの磨製石斧の本数は5.26本、土器型式を基準にすると（鳥屋1a・1b・2a・2b式の４期）、一型式期に1.32本存在したことになり、本遺跡のS1層期の約2.6倍である。器種組成でも述べたように、磨製石斧を製作する器種は揃っている。ただし、剥離段階に生じる調整剥片が出土していない点は注目される。これはほかの地域から剥離作業もしくは敲打作業が完了している素材が搬入されたものと考えられる。

以上、鳥屋遺跡との比較を行ってきたが、石器から見る両遺跡の性格には相違が認められる。特に器種組成は顕著であり、これに加え砂丘上に立地している点から、本遺跡とは生産活動が異なることが予想される。また、使用されている石材が阿賀野川流域に関連性を認められる点では石材獲得の活動領域にも相違があると考える。

F　結　　語

これまで本遺跡における石器の特徴を述べてきた。要点をまとめると、①器種組成は沖積地・平野部に立地する遺跡に共通する、狩猟具を優位とする組成を呈する。②石材は加治川流域を中心とする、在地的なものが多用されているが、器種によっては遠隔地から搬入されたものも認められる。③平面分布は、石器の廃棄域と製作場所が一致するという特徴があり、S4～S3層期とS1層期では分布地区が異なる。④S4～S3層期とS1層期では、量的な変化は著しいが組成に大きな変化は認められない。⑤ただし、各器種内においては時期的な変化が認められるものもある。

本遺跡は縄文時代晩期終末というごく限られた時期に営まれた集落でありながら、石器の出土量は多く、器種も豊富である。石材環境から見ると決して良好ではない沖積低地において、これまで述べてきたような特徴を持った石器により、多様な生業活動が行われてきたことは注目されて良いだろう。

5）全点は確認できなかったが、本遺跡のＡⅠ類（平基有茎鏃）が多いようである。

5　青田遺跡における柱根から見た木材利用と木製品の様相

A　柱根の各項目の傾向と掘立柱建物との関係

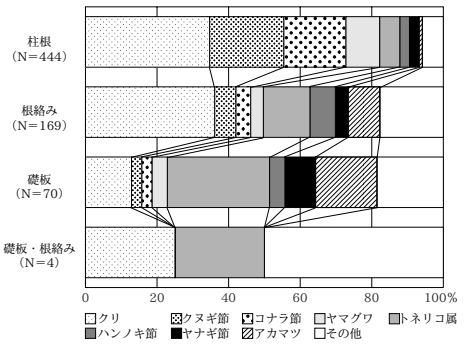
本編第Ⅴ章５で、柱根に対する各観察項目の説明を行ったが、ここでは、まず柱根に対して設けた各項目の集計結果・項目同士の関係を示しつつ、特に掘立柱建物の平面形態（以下、SB平面形）・規模（以下、SB規模）との関連が想定される項目についてはその相互関係を示す。

なお、SB平面形・規模の分類と計測値、柱の位置名称は本編第Ⅳ章で示したものを用いる。ただし、SB平面形Ｂ類の側柱は、落棟から遠い方を「側柱①」、近い方を「側柱②」と細分し、主軸柱・側柱①・側柱②を「母屋柱」、張り出し主軸柱・張り出し側柱を「張り出し柱」とする。また、柱根の各項目と掘立柱建物との関係を検討する際には、柱根の残存数が総数の半数以上のもののみを対象とした。さらに、掘立柱建物は落棟を持つもの（SB平面形Ｂ類）と、持たないもの（SB平面形Ａ・Ｃ類）に分けられるため、柱の太さ・尖度との関係を検討する際には、母屋・母屋柱の計測値をその対象とした。

1）樹　　種

集計結果　ここで扱うデータは関連諸科学編第Ⅱ章３で提示されたものと同じものである（第185図）。柱根はクリ・クヌギ節・コナラ節・ヤマグワで全体の約８割を占め、トネリコ属・ハンノキ節・ヤナギ属・アカマツ・その他（低率の26種）で残りを占める。根絡みでは、柱根で約８割を占める４樹種とそれ以外はほぼ同率となる。ただし、クリの割合は柱根で占める割合と大差はない。礎板では、柱根での割合がほぼ逆転し、特にトネリコ属とアカマツの割合が高い。

以上のように、柱根・根絡み・礎板は、それぞれ利用樹種組成を異にする。これは、それぞれに対する樹種選択の必要性の差が反映した結果と考えられる（関連諸科学編第Ⅱ章３参照）。また、根絡みと礎板でみられる樹種組成の差は、掘立柱建物の建築計画において当初から予定されていたか否かが反映した結果と考える。つまり、礎板はその設置が当初から予定されていたため、柱材に多用するクリなどの使用を避け、周辺に生育し容易に獲得できるトネリコ属などを用いたとみられるのに対して、根絡みはトネリコ属などを用いつつも、部材を調整する際に出たクリ・クヌギ節・コナラ節などの端材を臨機応変に用いたことから、両者の樹種組成に差が生じたものと考える。



第185図　柱根・根絡み・礎板の利用樹種組成

掘立柱建物との関係　掘立柱建物１棟における柱の利用樹種構成を樹種数で、１樹種で構成されるもの（以下、SB樹種Ⅰ）、２樹種で構成されるもの（以下、SB樹種Ⅱ）、３樹種以上で構成されるもの（以下、SB樹種Ⅲ）に分け、さらに優先樹種（数の多い樹種）で細別した（第95表）。

		SB樹種Ⅰ		SB樹種Ⅱ					SB樹種Ⅲ						
		クリ	クヌギ節	クリ	クヌギ節	コナラ節	ヤマグワ	その他	クリ	コナラ節	クヌギ節	ヤマグワ	その他	コナラ節・ヤマグワ・その他同数	計
SB平面形	A1		1								1				2
	A2			1	2	2	2					2	1		10
	A	1	2		1	1	1								6
	B1	4			2				1	2					9
	B2	1		2		1				1					5
	B3	1		3		2			1		3				10
	B	1		1											2
	C			1				1		1				1	4
	計	8	3	8	5	6	3	1	2	4	4	2	1	1	48
		11		23					14						

※表中のSB平面形Ａ・Ｂは、それぞれ細分不可であったものである。

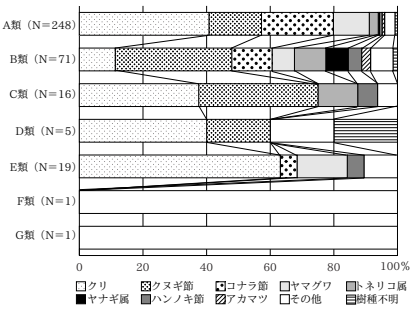
第95表　樹種構成とSB平面形の関係

利用樹種数でみると、SB平面形Ａ・Ｂ類は共に、SB

樹種Ⅱが約半数で、SB樹種Ⅰ・Ⅲが残りをほぼ二分する同様な傾向を示す。一方、各SB平面形の優勢樹種には相違が認められる。すなわち、SB平面形A類はクヌギ節が最も多いものの、ヤマグワ・コナラ節・クリもある程度みられ、優勢樹種に大きな偏りはない。一方、SB平面形B類はクリが半数以上を占め、クヌギ節・コナラ節で残りをほぼ二分する。またSB平面形C類は対象数がわずかで不明確ではあるが、優勢樹種に偏りはないようである。

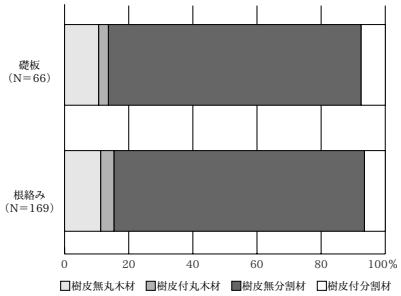
2）木　取　り

集計結果　木取りはA～G類に分類したが、丸木材のA・B類は約9割を占め、丸木材以外のC～G類は残りの1割を占めるに過ぎず、掘立柱建物の大半の柱には丸木材が用いられている。木取り別の樹種組成では、A類とB類でクリとクヌギ節がほぼ逆の割合を示す。またB類の利用樹種は12種で最も多い。C～E類はクリ・クヌギ節で大半を占める。F・G類は共に1点ずつで、スギを用いている（第186図）。



第186図　柱根の木取り別樹種組成

また、礎板・根絡みに用いられている材は法量に差はあるものの、丸木材と分割材に二分でき、樹皮の有無を考慮すると4種類に分けられる。結果、樹皮無しの分割材がそれぞれの約8割を占める（第187図）。



第187図　礎板・根絡みの木取り組成

掘立柱建物との関係　掘立柱建物1棟における柱の木取りの構成を、木取りA類のみのもの（以下、SB木取りⅠ）、木取りB類のみのもの（以下、SB木取りⅡ）、木取りA・B類で構成されるもの（以下、SB木取りⅢ）、木取りA類、B類、C～G類が混在するもの（以下、SB木取りⅣ）に分けた。なお、SB木取りⅢは、木取りA類が多いもの（SB木取りⅢa）、木取りB類が多い（SB木取りⅢb）、木取りA・B類が同数のもの（SB木取りⅢc）に、SB木取りⅣは、木取りA類が多いもの（SB木取りⅣa）、木取りC～G類が多いもの（SB木取りⅣb）、木取りA類とC～G類が同数のもの（SB木取りⅣc）に細分した（第96表）。

SB平面形	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲa	Ⅲb	Ⅲc	Ⅳa	Ⅳb	Ⅳc	計
A1		2							2
A2	4		2		3	1		1	11
A	2	1	1	1			1		6
B1	5		1			3			9
B2	2		1				1		4
B3	6		1			3			10
B	1					1			2
C	2	1					1		4
計	22	4	6	1	3	8	3	1	48
			10			12			

※表中のSB平面形A・Bは、それぞれ細分不可であったものである。

第96表　木取り構成とSB平面形の関係

結果、全体では木取りA類のみ、あるいは木取りA類を多用する掘立柱建物が多いことがわかる。ただし、SB平面形別では、木取り構成に相違が認められる。すなわち、木取りB類（樹皮付丸木材）の柱はSB平面形A類には多用されるが、SB平面形B類には少ない。また、SB平面形B類には木取りC～G類（分割材など）の柱がよく利用されている。なおSB平面形C類は対象がわずかで不明確ではあるが、SB木取りⅡのものもみられ、比較的SB平面形A類に近い傾向を示す可能性がある。

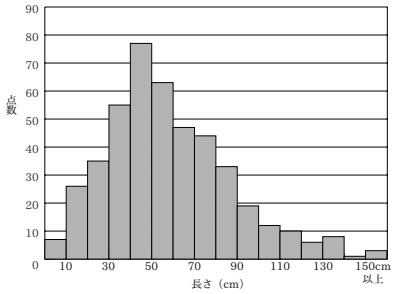
またSB木取りⅣの掘立柱建物は、いずれかの柱に分割材（木取りC～G類）が用いられたものである[1)]。

1）石川県チカモリ遺跡・同県真脇遺跡でも多数の柱根が出土しており、その大半は分割材を用いた「半截柱」で、分割材の利用は経済性を考慮した結果と想定されている［加藤1986・1989］。

分割材が用いられた柱位置をみると、SB平面形Ａ・Ｃ類ではランダムであるが、SB平面形Ｂ類では張り出し側柱によく用いられている（SB15・21・26・30・49）。第191図に示すように、SB平面形Ｂ類の張り出し側柱には、ほかの位置のものに比べ細い材が用いられる傾向にある。またSB平面形Ｂ類の復元案（本章1参照）によれば、落棟の上屋構造を支える張り出し柱は母屋柱よりも細い材で事足りると考えられる。つまり、SB平面形Ｂ類の張り出し側柱に用いられた分割材は、細い丸木材と同等のものとして用いられていたと考えられる。また分割材を利用した理由は、短絡的ではあるが、１本の原木から２本以上の柱（建築部材）が得られることを考えると、原木を節約的に利用した結果である可能性がある。なお、張り出し側柱に分割材を用いたSB平面形Ｂ類の掘立柱建物は、S2～S1層期にのみ認められるため、時期的な建築技法の変化、あるいは資源量の変化などが影響している可能性も考えられる。

3）長　　さ

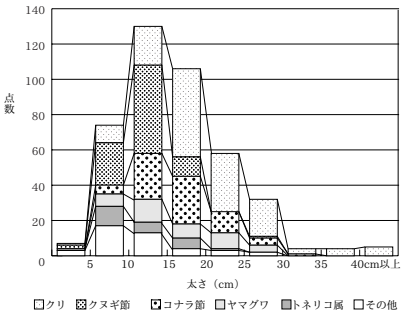
集計結果　40～50cmをピークに10～90cmでほぼ山形に分布し、10cm未満と90cm以上のものは少数である（第188図）。なお本編第Ⅴ章５で述べたとおり、本遺跡では掘立柱建物などの構築物は廃絶後の環境により、それらの柱根の残存状況は様々で、単純に長さ（残存長）とSB平面形・規模とを検討することは難しいと考える。



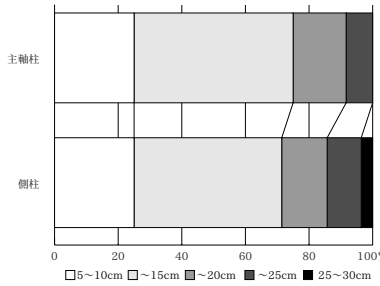
第188図　柱根の長さの分布（N=446）

4）太　　さ

集計結果　10～15cmをピークに５～30cmでほぼ山形に分布し、5cm未満と30cm以上のものは少数である（第189図）。樹種別では、トネリコ属とその他（低率の15種）は５～10cm、クヌギ節・ヤマグワは10～15cm、コナラ節は10～15・15～20cm、クリは15～20cmにピークを有し、ヤマグワ・クリ以外は山形の分布を示す。ヤマグワは10～15cmにピークを有するものの、各範囲において数量に大差はない。クリは５～30cmで山形に分布するが、30cm以上では各範囲で５点以下と横ばいになり、最大52.0cmを測る（SB4のP868）。以上のことから、細い順に柱の利用樹種を概観すると、【トネリコ属・その他】→【クヌギ節・トネリコ属】→【クヌギ節・コナラ節・ヤマグワ】→【クリ・コナラ節・ヤマグワ】→【クリ】となる。また10～15cmを境に、より細いものは利用樹種数が多く、より太いものは利用樹種数が少ない。したがって、柱材の太さによって利用樹種は選択されていた可能性が考えられる。



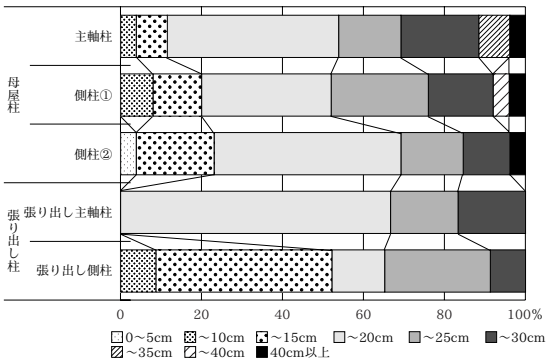
第189図　柱根の樹種別太さの分布
（N=441）



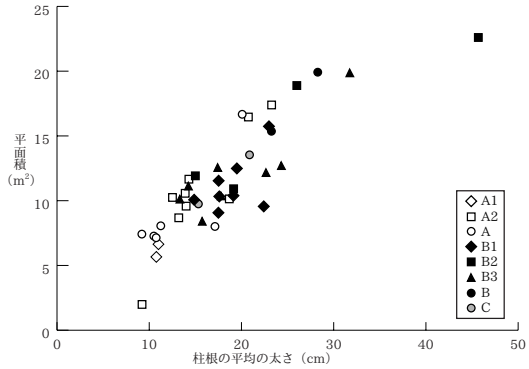
第190図　位置別の柱根の太さ
（SB平面形Ａ・Ｃ類）

掘立柱建物との関係　SB平面形Ａ・Ｃ類では、側柱にのみ25～30cmの材がわずかに認められる以外は、側柱と主軸柱に用いられる材の太さに大差はない（第190図）。

SB平面形Ｂ類では、まず15cm未満の占める割合をみてみると、張り出し側柱のみが約半数に達する



第191図　位置別の柱根の太さ（SB平面形B類）



※SB平面形A・Bは、それぞれ細分不可であったものである。

第192図　母屋における柱根の太さと平面積の関係

が、そのほかの位置では多くとも2割を超えるほどである。次いで25cm以上の占める割合をみると、主軸柱では最も多い3割ほどを占め、側柱①、張り出し主軸柱、側柱②、張り出し側柱の順にその割合が減少する（第191図）。つまり、SB平面形B類の掘立柱建物においては、母屋柱は張り出し柱よりも太く、同時に主軸上の柱は主軸外の柱よりも太い。

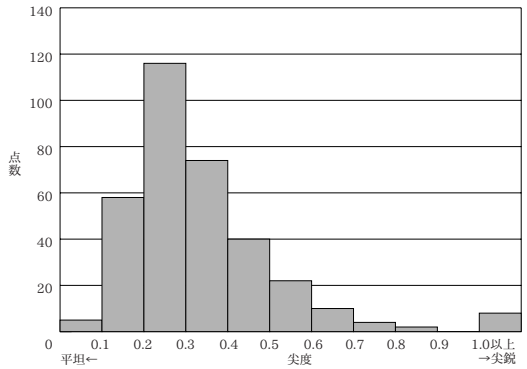
ついで、柱の太さとSB規模の関係では、SB平面形に関わらず、両者は比例関係を示す（第192図）。つまり、SB規模が小さいほど柱は細く、SB規模が大きいほど柱は太い。

5）尖　　度

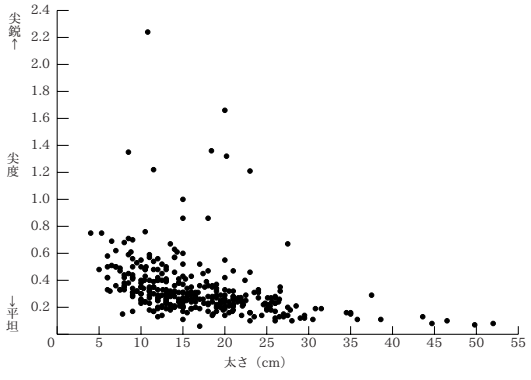
集計結果　0.2～0.3をピークに0.1～0.6でほぼ山形に分布し、0.1未満はわずかで、0.6以上は合わせて約1割を占めるに過ぎない（第193図）。また太さとの関係をみると、太さ30cmまではやや幅を持ちつつも尖度は徐々にその値を減じ、太さ30cm以上では大半が0.2以下に収まり、大きくみれば両者は反比例関係にあるといえる（第194図）。つまり、細い柱の下端部は尖鋭に、太い柱の下端部は平坦に仕上げられており、柱の太さに応じて、下端部形状（尖り具合）を調整していた可能性が考えられる。

掘立柱建物との関係　SB平面形A・C類では、主軸柱で0.4未満のものが約7割、一方側柱では約5割で（第195図）、主軸柱よりも側柱の下端部の方が尖鋭である。

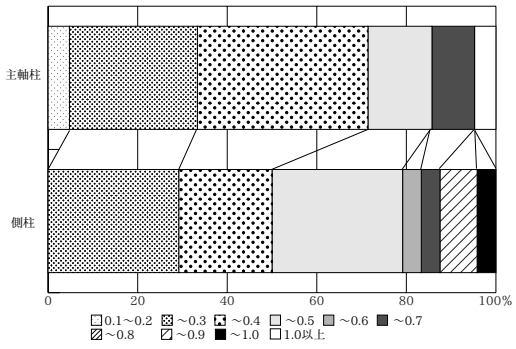
SB平面形B類では、いずれの母屋柱でも0.3未満のものが7割前後であるのに対して、張り出し柱はいずれも4割前後である。また、母屋柱では、主軸柱にはない0.6以上のものが、わずかであるが側柱①・②にはみられ、張り出し柱では、主軸柱にはない0.6～0.7のものが側柱には約1割みられる（第196図）。つまり、母屋柱の下端部は張り出し柱よりも平坦で、同時に主軸上の柱は主軸外の柱よりも平坦で



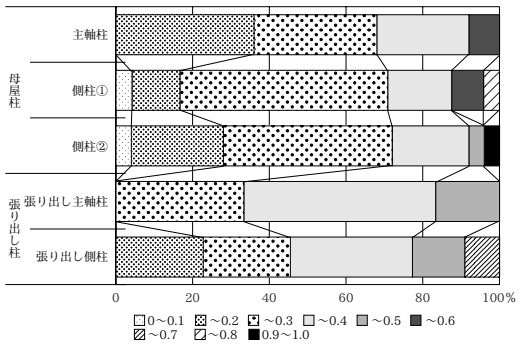
第193図　柱根の尖度の分布（N=339）



第194図　尖度と太さの関係



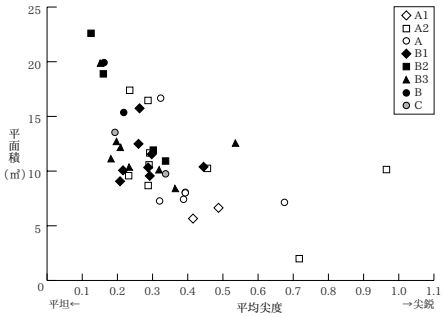
第195図　位置別の柱根の尖度（SB平面形Ａ・Ｃ類）



第196図　位置別の柱根の尖度（SB平面形Ｂ類）

ある。ただし、張り出し主軸柱と張り出し側柱にみられる差はわずかなものである。

ついで、柱の尖度とSB規模との関係をみる（第197図）。SB平面形Ａ・Ｃ類では、母屋面積10～18㎡のものは尖度0.2～0.3であるが、母屋面積10㎡未満のものには尖度0.3以上のものがみられ、不明瞭ながら両者は反比例関係にある。SB平面形Ｂ類では、母屋面積18㎡以上のものの尖度は0.2未満であるが、18㎡未満のものは尖度0.6まで徐々にその値が大きくなり、両者はほぼ反比例関係にある。つまり、SB平面形に関わらず、SB規模が小さいほど柱の下端部は先鋭、大きいほど平坦である。



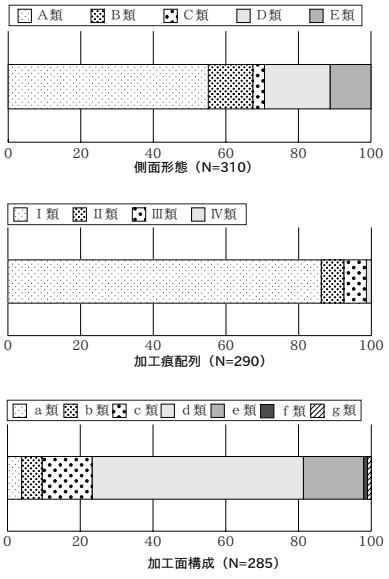
※SB平面形Ａ・Ｂは、それぞれ細分不可であったものである。

第197図　母屋における柱根の平均尖度と平面積の関係

6）側面形態・加工痕配列・加工面構成

集計結果　側面形態はＡ類が最多で半数を超え、ついでＢ・Ｄ・Ｅ類はほぼ同数で、Ｃ類はわずかである。加工痕配列はⅠ類が大半を占め、Ⅱ・Ⅲ類は同数、Ⅳ類はわずかである。加工面構成はｄ類が大半を占め、ついでｅ、ｃ、ｂ、ａ類の順となり、ｆ・ｇ類はわずかである（第198図）。

側面形態・加工痕配列・加工面構成の３項目は、いずれも底面加工にかかるものなので、それらを組み合わせ、数量の分布を示すこととした。さらに尖度も底面（下端部）の状況に左右されるものなので、３項目を組み合わせた上で、側面形態の分類別に尖度の分布を示した（第97表）。



第198図　側面形態・加工痕配列・加工面構成の類別組成

結果、各側面形態において、一様ではないが、いずれも加工痕配列Ⅰ類を基本として、側面形態Ａ・Ｂ・Ｄ（・Ｃ）類は加工面構成ｃかｄ類と、側面形態Ｅ類は加工面構成ｅ類との組み合わせとなる。また、側面形態Ａ～Ｃ・Ｅ類における各組み合わせの尖度は0.1～0.9の範囲に認められ、0.2～0.5に大半が分布するが、Ｄ類は0.1～0.3の範囲に分布するに止まる。

ところで、山田昌久氏は当時の伐採・加工状況あるいは伐採環境を復元するため、柱根の下端部の加工

尖度＼加工痕配列	I						II	III			
加工面構成	a	b	c	d	e	g	c	c	d	e	g
0～0.1											
～0.2			3	6	1			1		1	
～0.3	2	1	3	44	3		1		1		1
～0.4	3		3	35	1	1	2				
～0.5	1			19			2	1			
～0.6			2	8			1				
～0.7	1		1	2							
～0.8							1				
～0.9				2							
～1.0											
1.0以上				1			1				

側面形態Ａ類（N=156）

尖度＼加工痕配列	I					II	III			IV
加工面構成	b	c	d	e	f	c	d	f	g	e
0～0.1										
～0.2										1
～0.3		4	8	1		1	1			
～0.4			2			1	1		1	
～0.5			2		1					
～0.6		1	1							
～0.7		1	1					1		
～0.8	1	1								
～0.9										
～1.0										
1.0以上			1							

側面形態Ｂ類（N=32）

尖度＼加工痕配列	I	II		III		
加工面構成	d	b	c	f	c	e
0～0.1						
～0.2						
～0.3	1			1		
～0.4	2				1	
～0.5			1			1
～0.6			2			
～0.7						
～0.8						
～0.9						
～1.0						
1.0以上		1				

側面形態Ｃ類（N=10）

尖度＼加工痕配列	I			II		III		IV	
加工面構成	a	b	c	d	e	b	c	b	d	e	b	e
0～0.1												
～0.2	2	8		9	2	1	1	1		2	1	1
～0.3	1	1	1	10	1				2	2		
～0.4												
～0.5												
～0.6												
～0.7												
～0.8												
～0.9												
～1.0												
1.0以上												

側面形態Ｄ類（N=46）

尖度＼加工痕配列	I			IV
加工面構成	c	d	e	e
0～0.1				
～0.2			6	1
～0.3		1	7	
～0.4			4	
～0.5			6	
～0.6			3	
～0.7			1	
～0.8				
～0.9				
～1.0				
1.0以上	1	1	1	

側面形態Ｅ類（N=32）

※側面形態・加工痕配列・加工面構成の３者が同時に確認できるものを対象とした。

第97表　側面形態・加工痕配列・加工面構成の組み合わせとその尖度

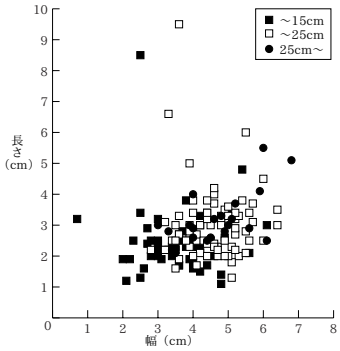
状況から、本遺跡出土の柱根を「伐採時の加工痕跡をそのまま残すもの（木の重量を支えきれずに折れた部分があるもの）」・「長さを限る分断加工の痕跡を残すもの（木の自重で折れることがなくなり、最後まで斧を打ち付けた加工痕が残る）」・「平らに加工し座りや沈みに対する配慮をしたもの」に分類している（以下、この分類を、「伐採加工」・「分断加工」・「底面調整加工」とする）［山田2002］。

この分類を踏まえると、側面形態Ａ～Ｃ・Ｅ類のものを伐採・分断加工、側面形態Ｄ類のものを底面調整加工に対応させ、さらに切り残しのあるものを伐採加工、切り残しの除去されているものを分断加工に対応させることができそうである。

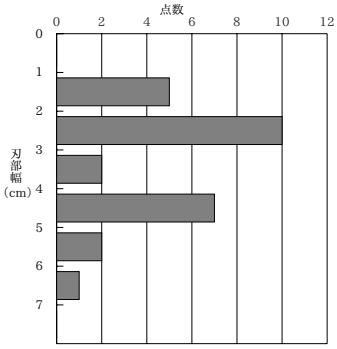
しかしながら、樹木の生育する場所は平地や斜面、別の樹木が隣接するか否かなど、樹木を伐採する周辺環境は一様ではなく、また分断する場合も一方向から斧を入れる場合、樹を回しながら均等に周囲から斧を入れる場合など複数の状況が考えられるため、側面形態から伐採加工と分断加工を区別することは難しい。また、伐採加工が施された底面には切り残し痕が形成される場合が多いと考えられるが、分断加工によっても切り残し痕が形成される可能性も考えられ、切り残し痕の有無で伐採加工と分断加工を区別することも難しい。一方、底面調整加工は、伐採加工・分断加工に比べれば、下端部の尖り具合、底面における加工痕の方向や大きさ、切り残し痕の除去状況などから、比較的判断が可能である。今後、柱根下端部の加工状況から、伐採加工・分断加工・底面調整加工の区別を試みるのであれば、加工部位に占める切り残し痕の割合やその位置の観察も追加し、次項の加工痕の大きさ・形状も合わせて検討する必要がある。また蓄積された実験的なデータと照合することも必要かと考える。

7）加工痕の大きさ・形状

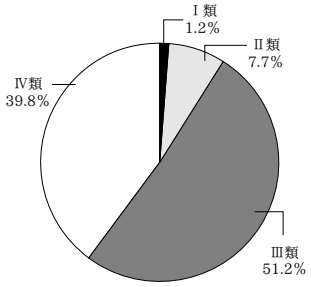
集計結果　底面の加工痕は、幅３～6cm、長さ２～4cmの範囲に集中し、大半が横長のものである。柱根の太さ別にみると、太さ15cm以下では幅２～4cm、長さ1.5～3cmの範囲、太さ15～25cmでは



第199図　加工痕の長さと幅（太さ別）



第200図　本遺跡出土の磨製石斧の刃部幅（N=27）



第201図　加工痕縦断面の類別組成（N=246）

幅３～6cm、長さ２～4cmの範囲、25cmより太いものでは幅３～5cm、長さ２～3.5cmの範囲に分布し、加工痕の長さ・幅は柱根の太さによって、その分布範囲をやや変化させる傾向にある（第199図）。また加工痕の幅の分布範囲は、本遺跡出土の磨製石斧の刃部幅の分布範囲内に収まるものである（第200図）。加工痕縦断面は、Ⅲ・Ⅳ類で約９割を占め、Ⅰ・Ⅱ類はわずかである（第201図）。

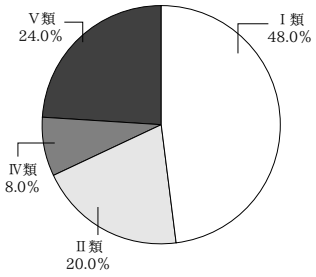
なお、１本の柱根の底面には伐採時の加工痕だけでなく、分断・調整時のものも遺される可能性があり、さらにはその段階に応じて、器種・大きさの異なる加工具（石器）が用いられた可能性もある。したがって、加工痕の大きさ・形状から材木の加工方法や加工具を復元しようとするのであれば、計測対象とした加工痕の底面における位置を踏まえ、柱根１本につきできる限り多くの加工痕を計測対象とする必要があるのではないかと考える。

8）溝

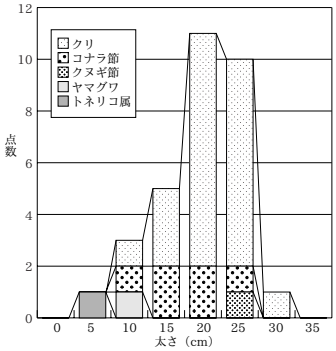
集計結果　側面を巡る度合いで機械的にⅠ～Ⅴ類に分けたが、Ⅲ類は認められず、Ⅰ類が約半数を占め、次いでⅤ類、Ⅱ類、Ⅳ類の順となる（第202図）。利用樹種別ではクリが約７割を占め、コナラ節・クヌギ節・ヤマグワを合わせると９割を超え、太さ別では20～25cm、25～30cmがほぼ同数でピークとなる（第203図）。また、太さにかかわらず、高さ（底面から溝までの距離）は10～14cmに集中しており、およそ一定した位置に溝が施されていることがわかる（第204図）。なお、溝が施された後で分割されたもの（168・169・171・215）や、溝の上から加工が施されたもの（139）も認められる。

溝は、先述したように、柱材下端部側面に施された後、その上からさらに加工されているものや、溝付の材を分割して根絡みとしていることもあるので、建築に際しては不要な加工であったと考えられる。

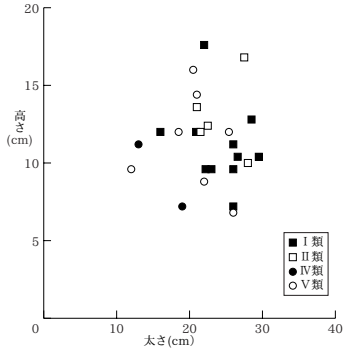
したがって、類似例によって、その用途・機能を探る手がかりとしたい。本遺跡例のような下端部に溝



第202図　溝の類別組成（N=25）



第203図　溝付柱根の樹種別太さの分布（N=31）

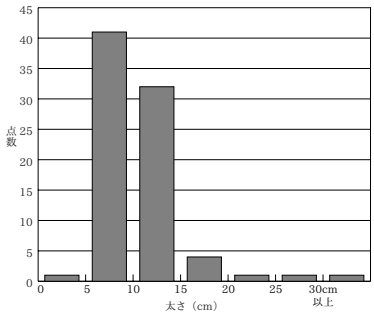


第204図　溝付柱根の太さと高さ

状加工の施された柱材は、県内では巻町御井戸遺跡［前山1996］、青海町寺地遺跡［寺村ほか1987］、県外では石川県真脇遺跡［南ほか1986］、同県チカモリ遺跡［南ほか1983］、群馬県矢瀬遺跡［西東社出版部2000］に認められ、それらの中には横方向の溝だけではなく、横溝に縦溝を組み合わせたものや、穿孔したものも認められる。そして、チカモリ遺跡・真脇遺跡例において、その用途・機能は主に材の運搬にあると想定されている。また、立柱させる際の支点と想定する説もある［加藤1989］。したがって、本遺跡例も材の運搬に要する加工とするのが妥当かと思われ[2)]、さらに伐採された木材は伐採現場から建築現場まで一度は陸地を通過しなければならないので、陸上運搬との関連が想定される。ただし、溝はほぼ一定の太さの材の一定の位置に施されることと、本遺跡の立地を合わせて考えると、溝付の材木同士を筏状に組んで河川を流すような運搬も想定できるのではないだろうか[3)]。しかしながら溝付柱根は柱根全体の約７％を占めるに過ぎない。原因として、溝部が地上に出ていたために遺存しなかったことや、溝付の部分が端材となり利用されなかったこと（279が良い例か？）などが考えられるが、それにしても少ないように思える。希少性を考慮すれば、溝を施すことで、柱材に対して何か非実用的な意味合いを持たせていたことも考えられるか。また、溝は比較的太いクリ材に施される傾向があるにもかかわらず、平均40cmを超えるSB4を構成する８本の柱根には全く認められない。したがって、溝はごく限られた太さ・樹種の材にのみ施されるもので、仮に溝が運搬用の加工であったとすると、溝の施されない材は、溝付の材とは異なった状況で運搬されていた可能性も指摘できようが、推論の域を出るものではない。

9）樹　　皮

集計結果　樹皮付柱根（木取りＢ類）は、樹種別ではクヌギ節が最高率の４割弱を占め、柱根全体では少数派のトネリコ属やヤナギ属なども約３割と比較的高率を占める（第186図）。太さ別では、５～10cm、10～15cmが近い値を示し、両者で約９割を占める（第205図）。なお、太さ20cm以上のものもわずかながら認められるが、それらは表面のごく一部に樹皮を残すもので、削り残しや剥ぎ残しの可能性もある。以上のことから、樹皮付柱根は比較的細く、クヌギ節またはトネリコ属やヤナギ属などに多いと言える。



第205図　樹皮付柱根の太さの分布
（N=81）

10）ま　と　め

ここまで、柱根・礎板・根絡みの各項目の傾向と、柱根の各項目とSB平面形・規模との関係をみてきたが、柱根の各項目と掘立柱建物との関係をまとめる前に、本遺跡出土の柱根・礎板・根絡みの観察から想定し得る、原木の伐採から建物の構築までの流れをみてみることとする。

まず、建築予定の掘立柱建物の規模・平面形態に見合った樹木の選定から始まる。柱材にはクリ・コナラ節・クヌギ節が多用されるが、クリは人為的な管理の可能性があり、コナラ節・クヌギ節とは異なる環境で生育していたらしく（関連諸科学編第Ⅱ章１・２、第Ⅶ章２参照）、必要な材の大きさや木の実の確保を考

2）チカモリ遺跡・真脇遺跡を含む文化圏は、本遺跡を含む文化圏とは異なり、決して同等に比較できるものではないことを考慮したい。
3）ただし、チカモリ遺跡の報告において、生木のクリの比重は1.0より大きく、水に浮かないが、１～２年の乾燥を経たものは比重0.6程になる、とされている。

SB平面形	樹種		木取り	太さ		尖度	
	構成樹種数	優先樹種		位置別	SB規模との関係	位置別	SB規模との関係
A（・C）	2樹種で構成するものが半数、1・3樹種で構成するものは残りを二分する。	クヌギ節・ヤマグワ・コナラ節・クリ→一定しない	樹皮付材を多用	大差なし	比例	主軸：側－平：尖	ほぼ反比例
B		クリ	樹皮無し丸木材を多用。落棟柱にのみ分割材を用いるものもみられる。	母屋：落棟－太：細、（張出）主軸：（張出）側－太：細		母屋：落棟－平：尖（張出）主軸：（張出）側－平：尖	

第98表　柱根の各項目と掘立柱建物との関係

慮して、その都度、選定対象の林叢を変えていたかもしれない。選定後、伐採された樹木は、枝を払い適当な長さに分断されたり、溝が刻まれたりした。樹種により様々であろうが、伐採・加工用と考えられる石斧では乾燥材の加工は困難なので、伐採後すぐに予定の掘立柱建物を考慮した加工が材に施されたのであろう。次は建築予定地までの運搬作業となるが、運搬・建築時の効率を考えれば、ある程度の期間、伐採地で乾燥させてから運搬したのであろう。運搬を終えると、簡単に調整された材は柱として柱穴に立てられるが、大規模な掘立柱建物の場合、柱穴の底に礎板を敷設するものもあり、周辺に生えるトネリコ属などが集められ用いられた。また柱材を埋設する際、土と共に周りに落ちている棒切れや不要な端材も柱穴に投げ込まれていった。そうして樹木は掘立柱建物の骨格となるのだが、中には廃絶した建物から転用された材が新たな掘立柱建物の骨格として加わるものもあった。

ついで、第98表に柱根の各項目と掘立柱建物との関係を示したが、これをみると当時の人々は掘立柱建物を建てる際、各柱位置に応じた太さ・尖度に材を調整することを重視していたことが予想される。一方で、利用樹種のバラツキ、SB平面形による木取りのバラツキは認められる。

利用樹種のバラツキは、食糧の確保が反映した可能性を考える。樹木を伐採することは、当時の主要な食糧であった木の実をもたらす樹木を減らすということである。本遺跡の柱根に占めるクリ材の割合は最も高いものであるが、それに次ぐクヌギ節、コナラ節、ヤマグワの材と比較して傑出しているわけではない。山田昌久氏によれば、この柱根の樹種組成は、クリ材建築の縄文時代からクヌギ材建築の弥生時代への移行期に本遺跡が位置するためと想定されている（本章2参照）が、本遺跡では、その出土量から各時期を通じてトチノキよりもクリが主な食糧であったと考えられ（本編第Ⅴ章8参照）、食糧であるクリの確保を優先したためにクリ材が不足し、その不足をクヌギ節などの材で補完した可能性も考えられる。

また、平面形態によって柱の木取りが異なるのは、その掘立柱建物の利用目的・性格を反映している可能性が考えられる。SB平面形A・C類の掘立柱建物には樹皮付材が多用されるが、SB平面形B類にはほとんど用いられない。木材は樹皮の有無で腐蝕の進行に差はなく、建物としての存続期間にも差は生じないが、建築時の手間やその見た目において両者には大きな差が生じる。また、SB平面形A・C類の掘立柱建物は利用樹種の面で、SB平面形B類よりも統一性に欠ける（多樹種を用いる）傾向が認められる。これらのことから、SB平面形A・C類とSB平面形B類の掘立柱建物は、単に平面形態が異なるだけでなく、両者の利用目的・性格も異なっていた可能性も考えられるのではないか。

いずれにせよ、当時の人々は、掘立柱建物に用いる樹木の選定から運搬、建築に至るまで、ある程度の計画性をもって行動し、その計画を具現化できるだけの知識、建築・土木技術を持っていたと考えられる。

B　木製品の様相

移動・運搬・交流　　本遺跡からは丸木舟（239）と、その推進具であろう櫂・櫂状木製品（240～245）が出土している。本遺跡の丸木舟は両舷側と舟底が明瞭に面取りされた平坦なつくりで、これは近現代の

日本各地で用いられている川舟にもみられるつくり［出口2001］で、当時の周辺環境に適した形状であったと考えられる。櫂・櫂状木製品はすべて丸木舟に伴うものだとすると、それらの形状・大きさは様々で、それぞれは機能・用途を異にしていた可能性がある[4)]。特に240の尖鋭な先端は、川岸や川底に突き刺しながら進むための形状とも考えられ、丸木舟と同様に周辺環境に適したつくりとなっている。

土木・建築　本遺跡からは、柱根・礎板・根絡み（1～238）、壁材（図面図版137）のほかに、掘立柱建物の梁材や桁材として充分に利用可能な、長さ150～200cmほどの角材・板材・丸木材（263～272）も出土している。これらの大形材にはクヌギ節やクリが多用され、柱根の樹種組成との共通性がうかがえる。269の板材は推定径50cm以上の原木から得られたもので、当時大きな板材を獲得し得た証拠でもある。また、材同士を組み合わせる際の仕口を有する可能性のあるものは、丸木材に溝の施された270のみである。

本遺跡からは樹木の伐採・調整に必要な斧の柄と確実に言えるものは出土していないが、抉り入り板状木製品（261）が組み合わせ式斧柄の一部であれば、斧柄の唯一の出土例となる。また飾り把手付木製品（246・247）は、装飾的な把手を有する何らかの木製品の一部であるが、主に弥生時代からみられる鋤の柄の把手部分に類似しており、当該期に鋤の存在を示唆し得る木製品である［山田2002］。

食糧の獲得・加工　本遺跡からは多量の堅果類と、コイ科やサケの骨が出土していることから、人々は山林から得た木の実と、すぐ近くを流れる河川から得た魚類を主な食糧としていたことがわかる。木製品の中にもこれらの採集・漁撈活動に関連のありそうなものがいくつかみられる。

横槌（252）は、様々な目的に対して利用される可能性があるが、側面よりも頂部の摩滅・欠損が著しいので、縦にして小形の杵のように利用されていた可能性も考えられる。紐で繋がれた木器と石器（262）は、木器と石器を繋いでいる紐がある程度の長さを有していたと考えられるため、筌などの仕掛けと共に川底に沈められ、木器の部分が浮子となり、仕掛けの目印として用いられていた可能性がある［山田2002］。狩猟との関連が考えられる、丸木取りの弓・弓状木製品（248～250）は、その利用樹種・形状の面で同時期のほかの事例と共通するものである。また、ニシキギ属製の漆塗り弓（図面図版299-49）も出土している。漆塗り弓は、その装飾性から非実用的な面での使用が想定される［鈴木1984］が、弓幹への漆の塗布や樹皮の巻き付けは、装飾的効果だけでなく、弓の強化にも繋がるとし、高い実用性を有するものとも考えられている［渡辺1985；楠1986；奈良国立文化財研究所1993］。

樹皮の利用　樹木の外側を覆う樹皮には、その内側の木質部とは異なる様々な利用がうかがえる。樹皮は、板状の利用と紐状の利用に大きく二分できる。板状の利用とは、容器（301・302）などとして、ある程度の硬度・強度が必要とされる場合である。樹皮製の容器は、青森県是川遺跡［小久保2003］、秋田県戸平川遺跡［高橋ほか2000］で出土しており、それらは樹皮同士の結合方法を異にする（本章2参照）が、側板と底板からなる曲げ物状の容器とされている。ついで、紐状の利用とは、樹皮製容器の製作において板状樹皮同士の結合に用いられたり、撚り合わせることで縄（303～307）として部材同士の緊縛に用いたり、漆塗り弓（図面図版299-49）や異形礫（図面図版243-570）に巻き付けられたりする場合である。また、樺皮素材（309～313）とした樹皮は主にまるまった状態で各所から多量に出土しており、当時、あらゆる面で利用されていたと想定できる。なお、板状の利用にはケヤキの樹皮、紐状の利用にはサクラと思われる樹皮が用いられており、樹皮利用における素材の選択がうかがえる。

4）赤羽正春氏のご教示によれば、240は手櫂（パドル・手漕ぎ櫂）、242は練櫂（舟体に固定する櫂）、243は方向舵（水流を利用するカジ）の可能性がある。

6　青田遺跡の集落と生業

A　はじめに

青田遺跡の発見は、軟弱で洪水などの災害に遭う確率の高い沖積平野のいわゆる低湿地帯に縄文人が大規模集落を営んでいたことを示す点で重要である。こうした沖積地埋没型［寺崎2001］の遺跡発見例は少ないものの、中条町野地遺跡［小田2002a］や道端遺跡［渡邊ほか2003］など発見例が相次いでおり、沖積平野における縄文人の活動及び生業の解明が必要である。青田遺跡は有機質遺物の遺存状態が良好なほか、土層の堆積スピードが速く当時の生活面をいくつも抑えることができる、といった低湿地遺跡特有の良好な条件を備えていることから、様々な関連諸科学と連携して調査・分析を行い、こうした課題の解明に取り組んだ。ここでは、そうした分析結果と遺跡発掘調査におけるデータとを突き合わせることにより、青田遺跡の具体像に迫りたいと思う。

B　集落の立地

青田遺跡周辺の地質構造は関連諸科学編第１図のようになっていることが明らかになった。また、珪藻分析によると、約5,000年前の縄文時代中期初頭以降は汽水域から淡水域に変化し、河川や自然堤防が形成される河川氾濫原となり、埋積が進んだ。青田遺跡の土層を観察すると、Ｘ～Ⅷ層は粗い砂層で形成されるが、Ⅶｄ層はシルト層と腐植土層の互層となり、比較的穏やかな埋積状況となっていたことを示す。青田縄文人が進出したのはこの段階であり、生活するための立地条件が整ったものと理解できる。それでは、青田縄文人が生活していた地表面はどのような状態であったのだろう。地質学的な分析から、遺物包含層のＳ層と間層のＫ層はSD1420などの河川の洪水により供給された堆積物であり、Ｋ層は１回の洪水により堆積したものと推定されている。SD1420の遺物包含層の形成も同じ仕組みによるものであったのだろう。また、土壌分析によると、遺物包含層であるS4・S3・S1層はＫ層より全炭素・全窒素量が多いことが確認され、これらの層がＫ層より長い期間生活面となっていたことが裏付けられている。土層断面を観察すると、これらＳ・Ｋ層はほぼ水平に堆積しており、波状を呈するのはⅥ層下面やSX51覆土といった縄文時代晩期以降に形成した土層のみである。つまり、当時の地表面は人間が歩いただけでぬかるむような軟弱な状況は認められず、ある程度の硬さをもっていたものと推定される。かつて中島栄一氏は平野の埋積が進んだ結果、栄町長畑遺跡のように縄文時代晩期終末に沖積平野に縄文人が進出したとされたが［中島1986］、青田遺跡はまさにこうした状況を示すものである。

C　集落の変遷

1）掘立柱建物の構築時期

青田遺跡では58棟の掘立柱建物を検出し、各所属時期については本編第Ⅳ章で推定している。青田遺跡はS4～S3層期とS1層期の大きく２時期に分かれ、SD1420右岸２・３地区に立地する建物はすべてS1層期に属する。さらに、柱穴構築の際の遺物包含層との切り合い関係から掘立柱建物の所属時期を推定した。しかし、遺物包含層が薄いため構築層位を特定できなかったり、柱穴検出面が低く切り合い関係を確認できなかったりしたため、細かな所属時期を特定できたものは少ない。

一方、113本の柱根を切断して年輪を観察・計測して行う年輪年代学的解析が試みられた（関連諸科学

編第Ⅶ章2)。コナラ節・クヌギ節の柱根を用いた解析の結果、ほぼ同時期に建てられた2グループの掘立柱建物群が認められた（関連諸科学編第150図、本編第206図)。木村勝彦氏によれば、これらは建物間の年輪パターンの相関関係が高く信頼性が認められるとされ、掘立柱建物の所属時期を考察する上で極めて重要なデータと考える。この結果について、発掘調査成果に基づき検討したい。

はじめにグループ1について見ることとする。グループ1はSB5・27・32・37・38・39・40・43の8棟である。このうち、SB5はS4～S3層期、SB32・37・39・40・43はS3層期以降に構築された可能性があり、SD1420左岸地区のSB27もSD1420-E12～E10層期でS4～S3層期に対応するとみられる。よって、SB5・27がS4～S3層期に収まる可能性が高いことと、S1層期に特定できる建物を含まないことから、グループ1はS4～S3層期のものと考える。そして、SB32・37がS4層所属の炭化物集中範囲を切って構築されていることをはじめとし、S3層期以降に構築されたものを多く含むことから、グループ1はS3層期に構築された可能性が考えられる。SD19左岸地区では10棟のうち5棟が該当し、この地区に盛んに掘立柱建物が築かれていたとみられる。図面図版17をみると、このうちSB37・38・40は陸地側に並び、これらの西側に炭化物集中範囲が隣接し、同じ範囲に多数の遺物が廃棄されていることが読み取れる。つまり、掘立柱建物の構築と炭化物集中範囲・遺物廃棄との関係が示唆される。また、炭化物集中範囲・遺物ともS4層期より明確に増加していることからも、これらの掘立柱建物がS3層期に構築された可能性を指摘できよう。

しかしながら、S3層期とするには1つ問題が存在する。それは、SB4とSB5の年輪試料を用いた放射性炭素年代測定による^{14}Cウイグルマッチングの結果についてである（関連諸科学編第Ⅶ章3)。SB4は層位との切り合い関係やS3層期の噴砂が確認されたことから、S3層期に構築されたものと推定している。これら両者の^{14}Cウイグルマッチングの結果、SB5の最外年輪はBC543年、SB4の最外年輪はBC411年と推定され、両者に132年の開きが認められた。同じS3層期にこれほどの年代差は認めにくく、グループ1をS3層期に位置付けることをためらわせる。しかし、中村俊夫氏が認めるように、今回の^{14}Cウイグルマッチングは全体的に試料数が少なく、^{14}C年代がほとんど変化しないいわゆる「縄文－弥生ミステリー・ゾーン」[辻2002]に位置することから、正確な暦年代を求めるにはさらに多くの年輪の測定が必要である。したがって、ここでは発掘調査成果を優先させ、グループ1をS3層期と推定したい。

次に、グループ2について見てみよう。グループ2はSB7・9・10・11・20・21・23・24・34の9棟である。SB34がS3層期以降とした以外、すべてがS1層期に所属することから、グループ1はS1層期に構築されたものと考える。このうち、SB21はSD1420-2b層期に構築され、SD1420-1層期には廃絶した可能性が高いことから、グループ2はS1層期のなかでもSD1420-2b～1層期に構築された可能性が高い。グループ2の多くがSD1420右岸2・3地区に位置することも、SD1420-2～1層期の土器出土傾向と合致する。

以上から、年輪年代学的解析による結果と調査データは整合することがわかり、年輪年代学的解析の有効性が認められたと言えよう。よって、これを基に集落の変遷を考察していきたい。ただし、年輪年代学的解析には次のような問題がある点を指摘しておきたい。それはSB37・50のように明らかに木柱が抜き取られたとみられる掘立柱建物がいくつか確認されており、これらの木柱が掘立柱建物に再利用された場合、その掘立柱建物が構築時期より古い結果を示すことになる。この点を考古学的に判断することは容易ではなく、今後の検討課題としたい。

2）各時期における集落の様子

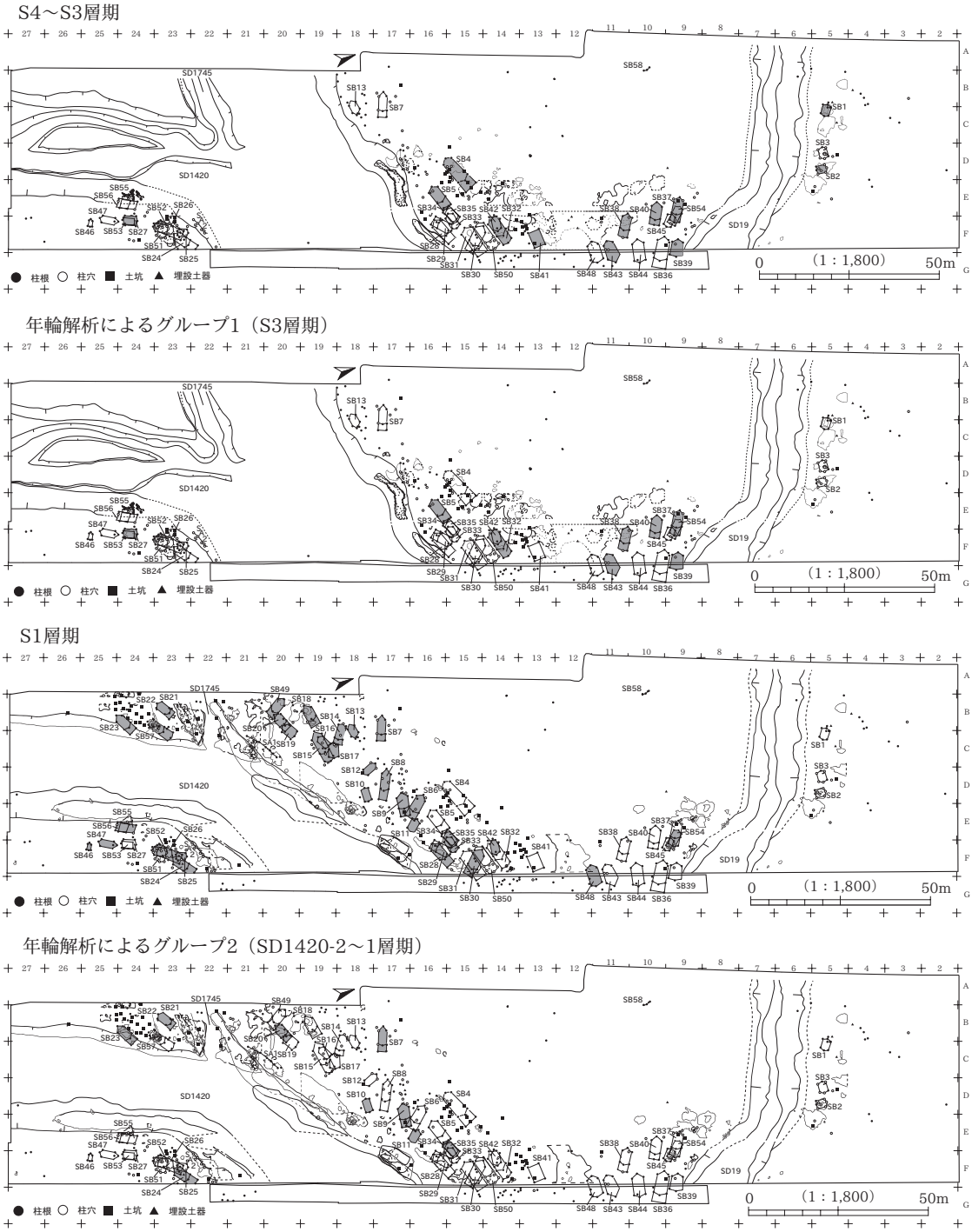
次に、各時期における集落の様子を明らかにしていきたい。

D層期　青田遺跡に初めて縄文人が登場した時期である。9～10Fグリッドを中心にわずかに遺構・遺物が検出される程度であり（図面図版32）、これに伴う掘立柱建物は明確でないことから、集落を形成するまでは至っていない。また、SD1420左岸における状況は不明である。魚骨が出土していることから、SD19左岸を活動拠点として漁撈活動を主体とした短期的な生業活動を行っていたものと推測する。

S5層期　12～14Fグリッドを中心に遺構・遺物が検出されたが、その量は少ない（図面図版22・27）。本期の掘立柱建物は明確ではなく、集落が形成されたかどうかは不明である。しかし、本期の遺物廃棄範囲はS4層期と同様に中央地区を中心とし、赤漆塗り糸玉や腕輪状漆製品が出土するなど、S4層期との共通点が認められる。以上から、S4層期と同様に居住域はこの中央地区とSD19・SD1420との中間と想定され、本期が本格的な集落形成の開始時期に当たるものと考える。また、SC・SXからはトチノキ・オニグルミなどの堅果類果皮が出土しているほか、底面に竹笹類が敷かれた草敷土坑SK2453は本期に属する可能性があり、堅果類などの貯蔵施設を備えていた可能性がある。SD1420左岸ではSD1420-E14層をS5層相当と見なした場合、少量の遺物を確認できることから右岸と同様に集落が形成され始めていたものと推定される。

S4層期　青田集落が盛んに営まれた時期である。SD19左岸地区・遺物集中地区・SD1420右岸1地区に多数の炭化物集中範囲と遺物が検出され、遺物集中地区の遺物量は極めて多い。しかし、掘立柱建物は前述したようにS4～S3層期としたもののうち、多くがS3層期に構築された可能性が高いことから、これらを除いたものが本期に属す可能性が考えられる。また、調査区外の東側にも集落が広がることが推測される。このほか、SD19右岸地区のSB1・2がS4～S3層期に属す可能性があることから、この地区も同時に機能していたものとみられる。さらに、SD1420左岸地区ではSD1420-E12層所属の炭化物集中範囲・遺物が多数認められており、この地区においても活発な生業活動が行われていた。本期に属することが明らかな土坑は土坑群2のSK2253や土坑群3のSK914のみだが、掘立柱建物に付随して土坑群2・3の一部が貯蔵施設として機能していたのであろう。SD19右岸地区の2基の土坑もS4～S3層期に属すことから、掘立柱建物1棟に土坑1基が伴うことも考えられる。炭化物集中範囲は多くが掘立柱建物群より陸地側に隣接して検出されており、掘立柱建物と重なるものはわずかに過ぎないことから、屋外炉などとして機能していたのであろう。また、炭化物集中範囲には生粘土（ND）が重なって検出されることが多く、両者に何らかの関係があったとみる。土器・焼成粘土塊・生粘土（ND）の胎土分析により、これら3者の鉱物片・岩石片の組成が類似し、加治川水系による堆積物に由来する可能性が高いことが明らかになった（関連諸科学編第Ⅳ章）。したがって、炭化物集中範囲において土器の製作・焼成が行われていた可能性も指摘できよう。

青田集落ではいずれの時期も明確な墓域が検出されていないが、中央地区では青田集落特有の埋設土器4基が集中する。元屋敷遺跡では縄文時代晩期中葉～後葉にそれまで正位が優位だったものに加えて逆位のものが認められており［古沢2002］、青田集落の埋設土器もこうした状況下において築かれた沖積地特有の埋設土器と考える。中央地区では完形の土器が多量に出土したほか、多数の赤漆塗り糸玉や腕輪状漆製品と土偶もわずかに出土しており、祭祀に関連した「場」の可能性もある。なお、東側用水路工事範囲からヒトの可能性のある焼骨が骨角器と共に出土しており、墓域が存在する可能性もある。堅果類廃棄



第206図　掘立柱建物の構築時期

範囲はSD1420右岸斜面1の16Fグリッドと17D～Eグリッドの2か所で認められる。

S3層期　S4層期に引き続き青田集落が盛んに営まれ、さらに拡大した時期である。第206図のようにS3層期に構築された可能性が高い掘立柱建物が9棟確認され、このうちSB4を除く8棟が年輪年代学的解析により5年以内に構築されたと考えられている（関連諸科学編第149図）。SD19左岸地区ではSB37・38・39・40の主軸が同じ西北西を指し、SD1420右岸1地区ではSB4・5・32が西南西を指すことから、河川の流路方向にほぼ主軸を平行にする規則性が認められる。また、SB30・50はSB32と同じ方位で並んでいることを重視すれば、S4～S3層期に属すことが推測される。炭化物集中範囲はS4層期と

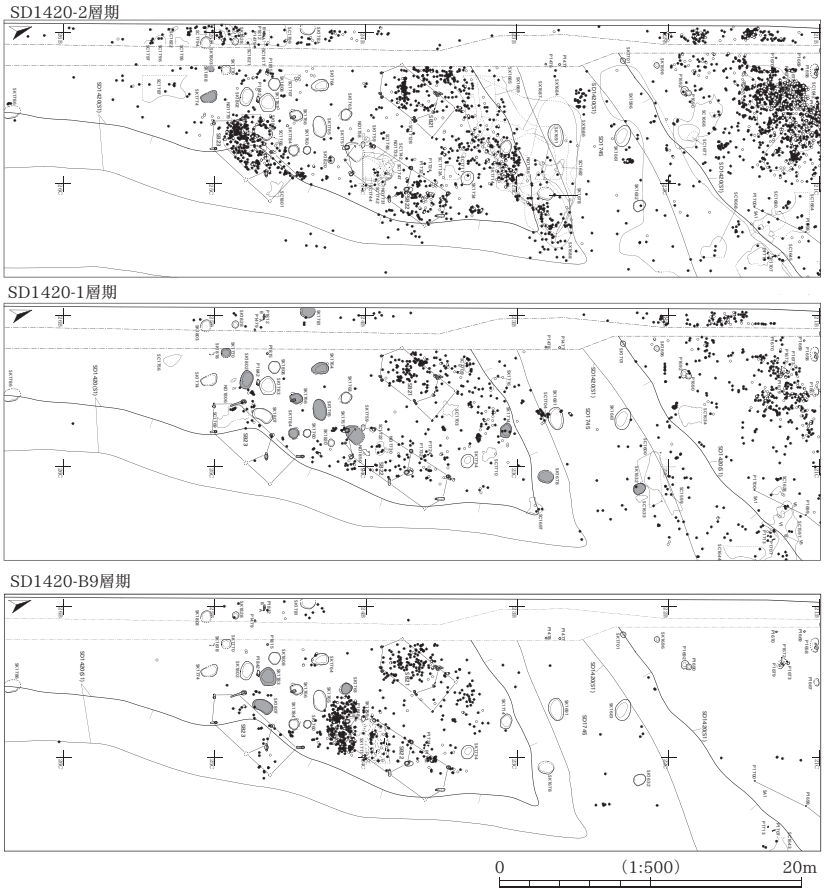
概ね同じ範囲に確認されることから、間層のK3層は地質学的分析から指摘されるようにごく短期間に堆積したものであり、S4層期とS3層期はほとんど時間を置かず連続的に営まれたと推察される。また、SD1420左岸地区にも同時に掘立柱建物が構築されていたことは、集落が河川の両岸に展開していたことを裏付けるものである。掘立柱建物で注目されるのは青田集落で最も大きなSB4が構築されたことである。ほかの掘立柱建物に比べ明らかに平面規模・柱根の太さ・建築工法が異なり、掘立柱建物Ｂ類のなかでも特異な機能があったのかもしれない。SD1420右岸斜面１にはS4層期と同様に堅果類廃棄範囲が形成されるが、本期に伴う土坑・埋設土器は明確ではない。本期の終わりにはSB4で確認されたように地震による液状化現象の被害を受けており、この後に集落は急速に衰退したものと考えられる。

S2層期　青田集落から一時縄文人が姿を消した時期と考えられる。SD19左岸地区で炭化物集中範囲・遺物がわずかに検出されただけである。S2層はほかの遺物包含層より厚く、SD1420においてもほとんど遺物を含まない土砂が厚く堆積しており、ある程度の時間間隙が推測される。年輪年代学的解析ではグループ１・２の年代差について少なくとも40年以上は離れているとされており、前述の土層堆積状況を裏付ける結果となっている。また、SD1420左岸地区においてもSD1420-E9～E7層が厚く堆積し、わずかに遺物が出土しただけであることから、右岸と同様に衰退したものとみられる。

S1層期　S2層期の土砂堆積により形成されたSD1420右岸２地区を中心として集落が再び盛んに営まれる時期である。S1層期の掘立柱建物は第206図のとおりS4～S3層期に比べて南側に展開する。S1層期に属する掘立柱建物は34棟を確認し、そのうち年輪年代学的解析により９棟が５年程度の短期間に構築されたことが明らかとなっている。これらがS1層期を細別したうちのSD1420-2b～１層期に該当することは前述したとおりである。本章３の土器編年に従うと、これ以前のⅢ期に属す掘立柱建物は、土器の出土傾向からSD19左岸地区及びSD1420右岸１地区を中心に構築されていたものと推測される。また、SD19右岸地区もS1層期の遺構・遺物が若干含まれるものとみられる。なお、SD1420右岸３地区ではSD1420-2層は2c－2b'－2b－2a'－2a層に細分でき、最下層の2c層は変形工字文土器が出土していないことなどからⅢ期に含まれることも考えられる。この場合、SB22はSD1420-2c層期に構築されていることからⅢ期に属すことになるが、調査データからは明らかにできない。Ⅳ期はSD1420右岸２・３地区及び左岸地区で遺構・遺物が最も多く検出された時期であり、掘立柱建物の多くが含まれるものと推測される。なお、Ⅴ期に属する掘立柱建物は明確にできない。本期の掘立柱建物はS4～S3層期と同様にその主軸方位を河川の流路方向に合わせるものに加えて、別方位を向くものが多数認められる。また、掘立柱建物Ｂ類とＡ類が同時存在することも注目される。炭化物集中範囲は掘立柱建物とSD1420との中間に認められるようになり、S4～S3層期と集落構造が異なる。堅果類廃棄範囲は各斜面に認められたが、22～23Bグリッドでほかに比べ極めて多量のクリ果皮が出土している。

さて、S1層期に属す土坑は土坑群３・４の多くが該当し、掘立柱建物より陸地側と斜面側とに分かれている。また、土坑群５・６もS1層期に属すが、各所属時期を検討すると第207図のようになる。SB21～23が属し最も遺物量の多いSD1420-2層期では、土坑はわずかに過ぎず、SX1689～1685のクリ果皮廃棄が目立つ。ところがSD1420-1層期になると土坑群５・６の多くが築かれる一方で、SB21～23は廃絶した可能性が高く、堅果類廃棄範囲も認められなくなる。SD1420-B9～B7層期も引き続き土坑が築かれるが、掘立柱建物・堅果類廃棄範囲とも認められず、遺物も減少する。一見、掘立柱建物に土坑群が伴うようだが、土坑群５・６は土坑のみが集中的に構築された可能性が高い。SD1420-B7層期以降は遺構・遺物が検出されなくなる。以上から、S1層期の集落はSD1420-2層期をピークとして

SD1420-1層期に衰退し始め、SD1420-B7層期に廃絶するものと考える。廃絶の要因については、花粉及び珪藻分析により集落周辺が湿地化したことが明らかになったほか、SD1420の埋積が進み河川としての機能が低下したため、居住域に適さなくなったことが考えられる。また、SD1420-B7層期に再び地震の被害に遭った可能性があり（本編第Ⅲ章6）、地震に伴う環境変化も一因となり得る。さらに、集落が衰退すると共にクリ果皮の廃棄が認められなくなり、クリ花粉も減少することから、主要な食料資源の枯渇も大きな要因と考える。



第207図　土坑群5・6の変遷

3）集落の暦年代

青田遺跡では、①層位単位で取り上げた堅果類果皮や木材を試料とした放射性炭素年代測定、②柱根から取り出した年輪試料の^{14}Cウイグルマッチング、③土器に付着した炭化物と漆膜を試料とした放射性炭素年代測定、の3種類が行われ、それぞれで暦年代が推定されている（関連諸科学編第Ⅶ章）。①は集落成立以前から廃絶後までについて関連諸科学編第64表のような結果が得られた。このうち試料番号青田-33は集落形成以前の基盤層のX層であり、紀元前8世紀前半の可能性が高い。青田-6・29・27・24・20はS4～S3層期に該当し、紀元前8世紀代の年代値も得られているが、X層の年代値を考慮すれば紀元前6世紀代～紀元前5世紀の可能性が示されている。②のウイグルマッチングでは、S3層期と推定したSB5の最外年輪がBC543年とする結果が得られていることから、紀元前6世紀代を中心とする可能性が高い。青田-13・12・11・19・10・18・17・7はS1層期に該当する。年代値はかなり幅を持つが、紀元前6世紀～紀元前4世紀初頭の年代位置が得られている。特に、青田-12・19はいわゆる「縄文－弥生ミステリー・ゾーン」を脱した値を示しており、これに左右されない値の可能性が認められよう。よって、S3層期を紀元前6世紀代とすれば、S1層期は紀元前5世紀～紀元前4世紀初頭の可能性があろう。青田-3・2は青田集落廃絶後にSD1420に堆積した層位の試料である。青田-2は紀元前4世紀初頭～紀元前2世紀初頭の値が得られており、青田集落が紀元前4世紀前半までに廃絶したことを示し、S1層期の年代値と矛盾はない。青田-9は紫雲寺潟形成直前の試料で、紀元8世紀後半～9世紀末葉の値

が得られた。以上から、青田集落はS4～S3層期が紀元前６世紀を中心とし、S1層期が紀元前５世紀から紀元前４世紀初頭と推定される。なお、③の土器試料による分析結果により推定された年代値ついては、S4～S3層期は概ね合致するが、S1層期は土器試料の方が古い年代幅で推定されており、弥生時代前期の年代値から検討する必要があろう。

D　掘立柱建物の構造と機能

次に、掘立柱建物の構造と機能について、調査データを基に検討したい。掘立柱建物の上屋構造は宮本長二郎氏により復元案が示され、掘立柱建物Ｂ類は落棟（下屋）を持つ二間構造の建物であることが明らかになった（本編第Ⅶ章1）。本編第Ⅳ章では青田集落で検出された掘立柱建物について、亀甲形で張り出し柱のないＡ類、張り出し柱が付属するB1～３類、方形のＣ類に分類した。Ａ類は27棟検出した。このうち、A1類は３棟で、平均面積は6.2㎡と小さいことが特徴である。A2類は13棟を確認し、平均面積は10.2㎡でA1類よりやや大きい。なかでもSB44・48は平均を大きく上回るが、用水路工事立会い調査範囲にまたがり正確性に欠けることを考慮すれば、A2類の最大はSB34の11.6㎡となる。Ｂ類は27棟を検出し、平均面積は19.2㎡であり、Ａ類のほぼ倍の面積となる。Ｂ類の面積は12～33㎡の開きがあるが、最大のSB4を除き面積は漸移的に変化しピークは認められない。ただし、Ａ類より明らかに大きいことが言える。Ｃ類は４棟だが、明らかに長方形のものはSB41・53の２棟であり主体的ではない。

これらの掘立柱建物の柱構造についてみることとする。宮本長二郎氏は柱穴断面から打ち込み式や半打ち込み式と判断され、掘立柱建物がこれらを併用するなどして構築された点を指摘された。筆者の柱穴と柱根の関係分類（本編第Ⅳ章第25図）に照らせば、掘形式がA、半打ち込み式はB、打ち込み式はＡとＣが含まれるようである。木柱の多くは同規模の柱穴に立てられており、打ち込み式と見ることもできよう。しかし、柱根底面の分析によれば、多くの柱根底面の尖度は0.1～0.6に収まり、柱径が大きくなるほど底面の尖度が下がる傾向が読み取れる（本章５第193、194図参照）。すなわち、掘立柱建物の規模が大きくなれば尖度が下がるということである。ほぼ同時期の遺跡である福島県荒屋敷遺跡［小柴ほか1990］においても掘立柱建物の柱根が出土しているが、底面の尖度は0.15～0.5のものがあり、青田集落と同様に柱径の小さいものは尖り大きいものは平らになる傾向を認めることができる。ところが、荒屋敷遺跡は砂礫層を基盤層とするため、木柱はすべて掘形式で、大きな柱穴に礫を根固石として木柱を固定したものが多い。一方、青田集落では地盤がシルトや粗砂のため、大きな掘形を穿った場合、湧水で壁面が脆くなるほか、木柱を固定する礫を容易に確保できず安定性に欠けることが考えられる。このため、なるべく木柱と同程度の掘形を穿ち、その中に木柱を立てることによって掘形との隙間を少なくし、密着・固定したものと考える。また、半打ち込み式はいくつか認められるものの、柱根断面の観察からその多くは構築後の上屋の加重による地盤沈下によるものと考えられる。掘立柱建物Ｂ類の大きな柱根の底面が平らなのは、構造を安定させるのと同時に地盤沈下しないように加工が施されたのであろう。柱径の最も太いSB4の柱根底面が平らで礎板が敷かれるのはこのためであろう。一方、掘立柱建物Ａ類は柱径が細く底面尖度が高い上、多種類の樹種が用いられており、樹皮をそのまま残すものも認められる。Ｂ類に比べ明らかに簡易に構築されたことが推察できる。

それでは床構造はどうなっていたのであろうか。掘立柱建物を横切る土層断面は水平で、床面の掘形・土間・盛り土・周堤は確認できない。また、明確な炉跡や床面の痕跡は認められない。炭化物集中範囲と

重なるものについては、SB1・2とSB27ないし53といったA・C類がわずかにある程度で、B類はSB22に可能性が残るものの明確なものは認められない。つまり、B類は地表面を床面としていない可能性が高く、高床であったものと推測する。一方、A類は前述したように簡易な構造であった可能性があり、炭化物集中範囲と重なるものがあることから、その一部は地表面を床面としていた可能性が高い。

以上から、B類とA類の一部は恒久的な建物とした可能性が認められることから住居であったものと考える。また、A類のうち小規模なものは炭化物集中範囲と重なることから、何らかの作業を行う施設であった可能性が指摘できよう。

青田集落の掘立柱建物の廃絶について述べておきたい。多くの掘立柱建物は柱根が残存した状態で検出されており、建物同士が平面的に重複するにもかかわらず柱根が存在することは、当時から柱根を残したまま新規に掘立柱建物を構築していたものと考えられる。SB50のように柱が抜き取られたものはわずかに過ぎず、縄文人が木柱をどう処理していたかが問題となる。ここで、SB22のP1846に注目したい。SK1751と平面的に重複するが、それぞれの構築時期と柱根上端の形状からSK1751構築時に木柱が切断されたものと推測した。おそらく、ほかの掘立柱建物の木柱も抜き取らずに切断されていたものと推察する。ただし、柱根上端面において切断の痕跡は腐蝕のため明確ではない。

E　青田集落の生業

青田集落では土壌水洗をつうじ多量の大形種実を得ることができたほか、動物骨などもわずかに回収できた。また、花粉・木材樹種などの分析が行われ、当時の周辺環境や植生が明らかになった。これらの分析結果について調査データを基に青田縄文人の生業について検討したい。

1）植物質食料

河川斜面に堆積した堅果類廃棄範囲ではクリ・トチノキ・オニグルミの主要3種類の堅果類果皮が出土した。その比率は本編第145図に示すとおり、S4～S3層期はクリが約7割、トチノキ2割、オニグルミ1割、S1層期ではクリが約8割、トチノキ1割弱、オニグルミ1割強であり、クリがほかを圧倒する。ただし、S4～S3層期では17D～EグリッドのSX958で推定約3,600個のクリが出土しており、全体の8割を占める。一方、16Fグリッドではむしろトチノキが多く、地点により比率が異なる。同様にS1層期も22～23BグリッドのSX1689～1684だけで推定22,000個あまりのクリが検出され、全体の9割以上を占めるが、トチノキはごくわずかに過ぎない点が注目される。他方、17Fグリッドではトチノキがクリを逆転し、オニグルミも多いと言える。以上のように、S4～S3層期・S1層期ともクリが同一地点に複数層が重なって多量に出土する状態は、集中的なクリ加工作業が行われた可能性を示すものといえよう。クリは果皮の縁辺を鋭利な道具で切って果実が取り出されたと推定され（本編第Ⅴ章8）、収穫後まもなく剥かれたものと考えられる。また、クリのほかに遺物がほとんど含まれない点は、巻町御井戸A遺跡の「トチ塚」［前山1996］と共通する。一方、クリとトチノキ・オニグルミとの比率が接近ないし逆転する廃棄状況は、小規模な加工や通常の消費による廃棄状況を示す可能性がある。しかしながら、青田集落では植物質食料の中でクリが圧倒的に多く、これをメジャーフードとしていたことは明らかである。青田集落で出土したクリのサイズは、最大幅56.8mmを測り、平均約3cmである。吉川純子氏によれば、サイズが現生の栽培種に匹敵することは安定した栽培の可能性を示すとされた。また、吉川昌伸氏の花粉分析によると、S1層期のSX1689～1684においてクリ属が多産し、トチノキ属も増加することから、

この付近にクリ林やトチノキ林があった可能性が示唆された。さらに、年輪年代学的解析によれば、木柱として利用されたクリ材の成長スピードが現生の自然林や二次林より速いものがあることから、クリが人為的な管理下にあったことは間違いないと断定された。これらを総合すると、青田集落では周辺にメジャーフード及び主建築材となるクリ林を備えられ、人為的に管理していたものと考えられる。ただし、鈴木三男氏はクリの自然木が少ないことを挙げて数本程度のクリが生えていたとみる。しかし、青田集落は同時期に10棟ほどの掘立柱建物が構築されていた大規模集落であり、1棟に4人と仮定しても集落構成員は40人いた計算になり、これを支える食料が効率的に確保される必要がある。また、堅果類廃棄層1層当たりに推定7,857個ものクリが集中的に剥かれていた事実は、新美倫子氏によるクリ採集量［新美2002］を参考にすると、かなりの本数があったものと考えられる。そして、集中加工がなされたSX1689～1684でクリ花粉が多産したことは、両者が近接した位置関係にあったことが推測される。S4～S3層期のSX958もこれと同様に集落の西端に位置することから、両時期ともクリ林が集落の西側に形成されていた可能性を指摘できよう。

また、青田集落で検出された土坑は、花粉分析や土坑内の種実の検討からオニグルミが貯蔵されていた可能性が指摘されており、土坑群5・6などのように集中的な貯蔵が行われていた可能性もある。このほか、食料として注目されるものにヒエがあり、日常的に利用されていることが指摘された。栽培の有無は今後の検討課題である。また、ナラガシワ・クヌギ・ブナの果皮が少量出土しているが、利用の有無は不明である。なお、青田集落ではプラント・オパール分析の結果、イネは検出されず、稲作は行われていないことが明らかである。

2）動物性食料

関連諸科学編第Ⅲ章によれば、最も多いのは魚類である。フナ・ニゴイ属・ウグイ属といった淡水性で河川下流域に生息するものが多く出土しており、SD1420など集落周辺で捕獲されたものと考えられる。また、大形のシロザケの可能性があるサケ科も確認され、青田縄文人が多量にサケを捕獲していた可能性が指摘されている。ほかに、タイ科・スズキ・ブリ・カサゴ類など内湾性～汽水性のものも確認されている。フナ・ウグイ属などの小形魚類は釣り漁・網漁・筌漁などが、大形のサケは銛やヤス・簗立て漁などで捕獲されたと推測されるが、こうした漁撈具は明確でない。丸木舟を利用して網羅状となっていたであろう河川を移動して漁撈活動が行われていたのであろう。

貝類は淡水性のイシガイとカラスガイないしドブガイ、汽水性のヤマトシジミガイがある。前者は青田集落周辺で捕獲されたものとみられるが、ヤマトシジミガイは阿賀野川河口域などで捕獲されたものと考える。ここで注目したいのはヤマトシジミガイのサイズである。出土地点ごとにサイズにそれほど大小がなくまとまりが認められる点は、滋賀県粟津湖底第3貝塚［伊庭・瀬口ほか1997］などの貝塚遺跡と異なる特徴である。青田縄文人が直接捕獲したというよりもむしろ選択的に捕獲されたものが持ち込まれたことを検討する必要があろう。

哺乳類は少なく、ニホンシカ・アナグマないしカワウソ・ニホンオオカミ？などの陸獣と、クジラ類ないしアシカ類の海獣が認められた。また、鳥類はカモメ類・カモ類があり、爬虫類ではヘビ類がある。

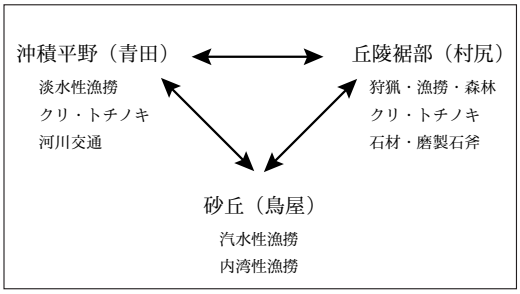
以上のように、青田集落ではシカ・イノシシがほとんど認められないことから、淡水性のフナなどのコイ科とサケなどの漁撈活動が中心であったことが推察された。

F　阿賀北地域における縄文時代晩期の生業活動

青田集落は一時期に10棟ほどの掘立柱建物が構築される大規模な集落であり、河川漁撈を中心とする一方で、周辺にメジャーフードとなるクリ林やトチノキ林を備えていた可能性が高まった。多量の土器・石器はここを舞台とした生業活動の結果であり、沖積地における中心的な集落と考える。阿賀北地域では東側の丘陵裾部と西側の砂丘列上に縄文時代晩期の遺跡が確認されていたが、青田遺跡の発見によりこれらの中間に当たる沖積地にも大規模集落が存在することが明らかになった。それでは、こうした立地の異なる集落の生業活動とはいかなるものであったのだろう。

沖積地型の集落では、青田集落や中条町野地遺跡のように周辺にクリ林やトチノキ林を備えていた可能性が高く、これらを管理ないし栽培することで多量の堅果類と木材を確実に効率よく獲得していたのであろう。また、コナラやクヌギの柱根は成長スピードが遅いことから、周辺の丘陵部で伐採された可能性がある。さらに石材獲得のために加治川流域や荒川流域まで行動範囲を広げていたことが指摘されている（本章４参照）。そして、丸木舟を利用して周辺の河川や潟で淡水性魚類・貝類を対象とした漁撈が行われていたとみられる。しかし、青田集落で出土したヤマトシジミガイは前述したとおり選択的に捕獲され、持ち込まれた可能性を指摘した。阿賀野川河口域に近い砂丘型の豊栄市鳥屋遺跡では大小のヤマトシジミガイが土坑から多量に出土しているが［関・石川ほか1980］、貝を観察するとサイズにバラツキが認められ、貝塚遺跡の特徴と共通する。また、1957年の発掘調査では時期は特定できないものの鳥屋遺跡の内陸側低地部において貝塚が確認されており［小出・寺村1958］、周辺にヤマトシジミガイの生息域があったことが推測される。このほか、種類不明の魚骨片も認められている。青田集落に比べ河口部に近い砂丘型の集落は、汽水性や内湾性の魚貝類の獲得に適しており、これを主要な生業としていた可能性が高いと考える。こうした砂丘型の集落から沖積地型や丘陵型の集落に魚貝類がもたらされた可能性もあろう。また、鳥屋遺跡では炭化クリ・クルミがわずかながら出土しており、堅果類も利用されていた。しかし、クリやトチノキなどの堅果類は砂丘上に生育しにくいとみられることから、沖積地ないし丘陵で獲得したか、あるいはこれらの集落から持ち込まれた可能性もあろう。

一方、丘陵裾部の集落では堅果類の利用のほか、狩猟や河川漁撈などが推測される。また、山菜や森林資源が豊富である。そして、大きな特徴は、磨製石斧の生産が盛んに行われている点である。加治川中流域には黒曜石の産地や鉄鉱石の産地もあり、石材を豊富に抱える点も特徴である。青田集落では石材を加治川流域に求めて自家消費的な磨製石斧の生産が行われている。ところが、青田集落と同様に石材資源を持たない鳥屋遺跡では、磨製石斧が多数出土するものの、原石や剥離調整過程を示すものが認められず、敲打作業が終了した素材が搬入された可能性が指摘された（本章４参照）。こうした製品ないし製品に近い状態の磨製石斧が搬入される例は縄文時代晩期の宮城県中沢目貝塚［須藤・富岡ほか1995］でも認められており、縄文時代晩期には磨製石斧の流通環境が整っていたとみられる。よって、磨製石斧生産遺跡＝丘陵裾部の集落と砂丘型集落との流通関係が推測される。さらに、青田集落では産地同定を行った黒曜石のすべてが新発田市板山・上石川産であることがわかり（関連諸科学編第Ⅴ章1）、しかも黒曜石製



第208図　阿賀北地域の平野部における生業モデル

の石器は製品として搬入された可能性も指摘されている。このことは、青田集落と丘陵裾部の集落との関連を示す重要な手がかりとなろう。

以上から、丘陵裾部・沖積地・砂丘にそれぞれ立地する集落の間には、第208図に示したような食料や石材資源及び石器などの流通＝ネットワークが存在していたものと推測される。特に阿賀北地域は海岸線から丘陵までの距離が短いことから、緊密なネットワークが形成されていた可能性がある。ただし、想定した生業モデルは同一集団による季節的な移動の結果、いわゆる季節的循環モデル［赤澤1988］とみなすこともできよう。しかし、これら3地域で推測される生業には堅果類の採集など季節的に重なるものがあるほか、石器・石材組成に差が認められることを考慮すれば、同一集団とは考え難い。よって、阿賀北地域では丸木舟を利用した河川交通により、網の目状に張り巡らされたネットワークが維持されていたと考える。生業活動の解明には、各立地における生業を明らかにすることが重要である。

要　　約

1　青田遺跡は、新潟県北蒲原郡加治川村大字金塚字青田に所在し、越後平野北部の沖積地に位置する。旧河川に沿って遺跡が検出され、標高は-1m～+1.6m、旧河川の最深部は-4.1mを測る。

2　発掘調査は、日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、平成11年4月12日～12月27日、平成12年2月29日～4月21日、平成12年6月1日～12月9日、平成13年4月9日～9月21日に実施した。二次調査対象面積は合計14,160㎡であり、複数層による調査面積は延48,260㎡である。発掘調査は地質学・土壌学・植物学・建築学・年代学などの関連諸科学と連携し、調査検討委員会を組織して行われた。

3　遺跡は、縄文時代晩期終末の大規模な集落跡と平安時代の遺構・遺物が検出された。

4　縄文時代晩期終末の集落は、低湿地を流れる河川の両岸に沿って営まれ、南北210mにわたり検出された。河川の影響により遺物包含層が複数層に分かれて堆積しており、遺構・遺物が層位的に検出された。

5　検出遺構は掘立柱建物58棟（ピット374基）・土坑79基・杭列2基・ピット257基・埋設土器11基・炭化物集中範囲269か所・堅果類廃棄範囲59か所などである。

6　集落は、S4～S3層期（鳥屋2a式）とS1層期（鳥屋2b式・大洞A'式）の大きく2時期に分かれる。集落はS2層期に地震により一時衰退し、S1層期は周辺の湿地化や地震による環境変化などにより廃絶したものと推測される。

7　掘立柱建物の柱根の年輪年代学的解析が行われ、集落は各期ともほぼ同じ時期に8～9棟の掘立柱建物が構築されていたことが明らかになった。

8　掘立柱建物は、柱根の配置や太さから、本遺跡を初現とする落棟付平屋建物と復原された。ただし、床面や炉跡が検出されず、高床の可能性がある。また、掘立柱建物のものとみられる草壁材の一部が出土した。掘立柱建物の周囲から検出された炭化物集中範囲は、屋外炉や土器焼成の痕跡と推定された。

9　土坑の一部は、花粉分析の結果や大形種実の観察からオニグルミの貯蔵穴と推定した。また、土坑底面にヤナギ属とマタタビ属の枝材を敷いて固定したものや、竹笹類が敷かれた草敷土坑が検出された。

10　出土遺物は土器750箱、土製品21点、石器24,426点、石製品54点、木製品1,185点、編物類9点、漆製品68点などである。土器は鳥屋2a式～2b式の変遷が認められ、鳥屋2b式（新段階）に大洞A'式が伴うことが明らかとなった。石器は、S4～S3層期とS1層期の器種組成に大きな変化は認められない。器種組成を狩猟具、採取・加工具、調理具に分けた場合、狩猟具が約4割、採取・加工具と調理具がそれぞれ3割程度を占める。木製品は柱根458本があり、樹種や加工方法から当時の伐採方法・建築技術が推定された。また、県内初の縄文時代の丸木舟や櫂・丸木弓などがある。編物類には籠類・筌状編物・簾状編物がある。漆製品には赤漆塗り糸玉・腕輪状漆製品・漆塗櫛のほか、漆容器・顔料粉砕具・赤色顔料塊が出土し、漆製品の製作が行われていたものと推定される。

11　堅果類廃棄範囲には多量のクリ果皮が廃棄されており、鋭利な刃物で皮を剥いて果実を取り出す加工が集中的に行われた可能性が高い。また、クリ果皮は最大幅5.6cmのものを含む大粒のもので、花粉分析や年輪年代学的解析から、周辺にクリ林が形成され、人為的な管理・栽培が行われていた可能性がある。

12　動物遺体の分析から、フナ・コイ・サケなどの淡水性漁撈が盛んに行われていたものと推測される。

13　平安時代の遺構は足跡が多数検出された。また、遺物は洪水により運ばれてきた多量の木製品がある。これらの遺物から紫雲寺潟は9世紀末～10世紀初頭に形成されたことが明らかになった。

引用・参考文献

会田容弘　1979　「東北地方における縄文時代終末期以降の土偶の変遷と分布」『山形考古』第３巻第２号　山形考古学学会

赤澤　威　1988　「縄文人の生業－その生態的類型と季節的展開」『畑作文化の誕生 縄文農耕論へのアプローチ』日本放送出版協会

赤羽正春ほか 1991　『朝日村文化財報告書 第６集 下クボ遺跡』朝日村教育委員会

阿部朝衛　1979　「第Ⅱ章１石鏃」『峠下聖山遺跡』北海道七飯町教育委員会

阿部朝衛　1984　「多面体を呈する敲石について」『豊栄市史研究』第２号　豊栄市

阿部朝衛　1995　「新潟県北部地域における石器材料の調査」『帝京史学』第10号　帝京大学

阿部朝衛　1997　「新潟県北部地域における縄文時代の石材利用とその背景」『帝京史学』第12号　帝京大学

甘粕　健　1999　「第３章１総論」『新潟県の考古学』新潟県考古学会

甘粕　健ほか 1983　『新潟県史 資料編１ 原始・古代－考古編』新潟県

荒川隆史　1998　「新潟県南蒲原郡栄町長畑遺跡出土の土器について－縄文時代晩期終末の様相－」『研究紀要』第２号　埋文事業団

荒川隆史　2000　「青田遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成11年度　埋文事業団

荒川隆史　2002a　「青田遺跡発掘調査概要」『シンポジウム「よみがえる青田遺跡」資料集 川辺の縄文集落』埋文事業団・県教委

荒川隆史　2002b　「新潟県における縄文晩期のムラ・墓・建物」『シンポジウム「よみがえる青田遺跡」資料集 川辺の縄文集落』同上

荒川隆史　2002c　「沖積地の遺跡（2）阿賀北（胎内川以南）」『新潟考古』第13号　新潟県考古学会

荒川隆史・加藤　学　1999　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第93集 和泉Ａ遺跡』県教委・埋文事業団

荒巻　実・設楽博己　1985　「有髯土偶小考」『考古学雑誌』第71巻第１号　日本考古学会

家田順一郎ほか　1981　『豊浦町文化財調査報告３ 曽根遺跡Ⅰ』豊浦町教育委員会

家田順一郎ほか　1982　『豊浦町文化財調査報告４ 曽根遺跡Ⅱ』豊浦町教育委員会

石川日出志　1985a　「中部地方以西の縄文時代晩期浮線文土器」『信濃』第37巻４号　信濃史学会

石川日出志　1985b　「関東地方初期弥生式土器の一系譜」『論集日本原史』吉川弘文館

石川日出志　1988　「一、土器」「二、鳥屋式土器の構成と意義」『豊栄市史 資料編１ 考古編』豊栄市

石川日出志　1991　「縄文時代晩期浮線文土器出現期の編年と諸様相」『北越考古学』第４号　北越考古学研究会

石川日出志　1993　「鳥屋2b式土器再考」『古代』第95号　早稲田大学考古学研究会

石川日出志　2002　「青田遺跡の土器を読む」『シンポジウム「よみがえる青田遺跡」資料集 川辺の縄文集落』埋文事業団・県教委

石川日出志・渡邊裕之ほか　1992　『六野瀬遺跡1990年発掘調査報告書』安田町教育委員会

磯崎正彦　1957　「新潟県鳥屋の晩期縄文式土器（予報）」『石器時代』第４号　石器時代研究会

磯崎正彦・上原甲子郎　1969　「亀ヶ岡式文化の外殻圏における終末期の土器型式－新潟県・緒立遺跡出土の土器をめぐって－」『石器時代』第９号　石器時代研究会

伊藤　貞ほか 1985　「縄文時代」『加治川村誌』加治川村

伊東　崇　2001　『分谷地Ａ遺跡 平成12年度概要報告書』黒川村教育委員会

伊東　崇　2002　『分谷地Ａ遺跡 平成13年度概要報告書』黒川村教育委員会

伊東　崇　2003　『新潟県北蒲原郡黒川村埋蔵文化財調査報告書 第８集 分谷地Ａ遺跡Ⅱ』黒川村教育委員会

伊東信雄・須藤　隆　1985　『山王囲遺跡調査図録』宮城県一迫町教育委員会

伊庭　功・瀬口眞司ほか　1997　『粟津湖底遺跡第３貝塚』滋賀県教育委員会・財団法人 滋賀県文化財保護協会

犬塚幹士　1985　「最上川水系のドウ」『日本民俗文化大系 第13巻 技術と民俗（上）』小学館

井上裕弘ほか 1979　『山陽新幹線関係埋蔵文化調査報告 第12集 春日市大字上白水所在辻田遺跡の調査』福岡県教育委員会

潮田憲幸　2002　「第Ⅴ章.5.C.（36）自然礫」『朝日村文化財報告書 第22集 元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』朝日村教育委員会

遠藤孝司ほか 1983　『白根市文化財調査報告書（2）馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書』白根市教育委員会

大分県別府産業工芸研究所　1991　『竹組技術資料 基礎技術編』佐伯印刷
大分県別府産業工芸研究所　1992　『竹組技術資料 応用技術編』佐伯印刷
小笠原正明ほか 2002　「7 元屋敷遺跡及びその周辺地域出土天然アスファルトの成分分析」『朝日村文化財報告書 第22集 元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』朝日村教育委員会
大熊　孝　1979　「4 信濃川治水の歴史」『URBAN KUBOTA』No.17　久保田工業株式会社
岡村道雄　1983　「ピエス・エスキーユ、楔型石器」『縄文文化の研究』第7巻　道具と技術　雄山閣
小川貴司　1993　「土器容量の計測方法と器体積」『二十一世紀への考古学 桜井清彦先生古稀記念論文集』雄山閣
長田友也　2002　「第Ⅴ章.6.B'自然石」『朝日村文化財報告書 第21集 アチヤ平遺跡上段』朝日村教育委員会
小田野哲憲 1987　「Ⅴ.4 土製品・石製品」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第158集 上村貝塚発掘調査報告書』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
小田由美子 2002a「推定地3（野地遺跡）一次調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成13年度　埋文事業団
小田由美子 2002b「沖積地の遺跡（1）阿賀北（胎内川以北）」『新潟考古』第13号　新潟県考古学会
角田　学　1998　「Ⅴ.3 土製品」『長野県小諸市氷遺跡発掘調査資料図譜』第一分冊　氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会
春日真実　1997　「大武遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成8年度　埋文事業団
春日真実　1999　「第4章.2 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
春日真実　2000　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第97集 大武遺跡Ⅰ（中世編）』県教委・埋文事業団
加治川村役場　1986　『加治川村誌』
加藤　学　1999　「第Ⅴ章.2.C 石器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第93集 和泉Ａ遺跡』県教委・埋文事業団
加藤　学　2003　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第128集 仲田遺跡』県教委・埋文事業団
加藤三千雄 1986　「第5章.1 晩期の巨大木柱列」『真脇遺跡』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
加藤三千雄 1989　「北陸における縄文晩期の木柱列」『縄文時代の木の文化』富山考古学会縄文時代研究グループ
金山喜昭ほか 1995　「（4）縄文時代の日本海沿岸部における黒曜石の交流」『日本考古学協会第61回総会研究発表要旨』日本考古学協会
金子浩昌・忍沢成視　1986　『考古民俗叢書22 骨角器の研究 縄文篇Ⅰ』慶友社
川上貞雄ほか 1997　『豊浦町文化財調査報告6 曽根遺跡Ⅲ』豊浦町教育委員会
川上貞雄ほか 1981　『安田町文化財調査報告（5）横峯Ａ遺跡・横峯Ｂ遺跡』安田町教育委員会
川村三千夫ほか　1993　『朝日村文化財報告書 第8集 前田遺跡（下ゾリ・下クボ遺跡道路部分）』朝日村教育委員会
木村勝彦ほか 2002　「青田遺跡の柱根を用いた年輪年代学的研究」『シンポジウム「よみがえる青田遺跡」資料集 川辺の縄文集落』埋文事業団・県教委
楠　正勝　1986　「考察の部.4 弓について」『金沢市文化財紀要60 金沢市新保本町チカモリ遺跡』金沢市教育委員会
工藤竹久　1995　「東北北部における亀ヶ岡式土器の終末」『考古学雑誌』第72巻 第4号　日本考古学会
工藤雄一郎ほか　2002　「木器・木材加工」『季刊 考古学』第81号　雄山閣
熊倉信夫　1992　『中条町史 資料編 民俗・文化財』第5巻　中条町
小池邦明ほか 1993　『新潟市的場遺跡』新潟市教育委員会
小池義人　2000　「第Ⅱ章.4 石製品」『籠峰遺跡発掘調査報告書Ⅱ』中郷村教育委員会
小出義治・寺村光晴　1958　『鳥屋遺跡発掘調査報告書』北方文化博物館研究叢書2　財団法人 北方文化博物館
小出義治・寺村光晴　1961　「鳥屋遺跡発掘調査報告」『越佐研究』17集　新潟県人文研究会
小久保拓也 2003　「東北地方」『平成15年度 環日本海交流史研究会「縄文後晩期の低湿地集落－生業の視点で考える－」発表レジュメ集』（財）石川県埋蔵文化財センター
小柴吉男ほか 1990　『三島町文化財報告 10集 荒屋敷遺跡Ⅱ』三島町教育委員会
湖西線関係遺跡調査団　1973　『湖西線関係遺跡調査報告書』新陽社
児玉大成　2002　「くびれ石考－縄文人の好奇心をくすぐる自然石－」『海と考古学とロマン－市川金丸先生古稀記念献呈論文集－』市川金丸先生古稀を祝う会
後藤信祐　1986　「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究（上）」『考古学研究』第33巻3号　考古学研究会
後藤信祐　1987　「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究（下）」『考古学研究』第33巻4号　考古学研究会
小林　正　2001　「縄文時代の結歯式竪櫛について－新潟県を中心に－」『新潟考古学談話会会報』第23号　新潟考古学談話会

小林 正史　1988　「新潟県山北町上山遺跡出土の縄文時代終末期の土器群」『北越考古学』創刊号　北越考古学研究会
小林正史　1991　「縄文時代終末期における東北地方中・南部間の地域差」『北越考古学』第４号　北越考古学研究会
小林達雄　2001　「紐を手繰りて縄文世界－縄文時代における紐・糸・縄・綱－」『考古学の学際的研究－濱田青陵賞受賞者記念論文集Ⅰ－』昭和堂
小林達雄　2002　「縄文世界の青田遺跡」『シンポジウム「よみがえる青田遺跡」資料集 川辺の縄文集落』埋文事業団・県教委
小山正忠・竹原秀雄　1998　『新版 標準土色帖』21版　日本色研事業株式会社
（財）千葉県史料研究財団　2000　『千葉県の歴史 資料編 考古１（旧石器・縄文時代）』千葉県
齋藤秀平　1917　「越後國北蒲原郡金塚村大字貝塚石器時代遺跡」『考古學雜誌』第八巻第二號　日本考古學會
齋藤秀平　1937　『新潟縣史跡名勝天然記念物調査報告』第七輯　新潟県
酒井亜紀　2002　「第Ⅴ章.5.C.（1）石鏃」『朝日村文化財報告書 第22集 元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』朝日村教育委員会
酒井和男ほか 2002　「新潟砂丘における居住の初源」『新潟考古』第13号　新潟県考古学会
坂井秀弥　1990　「新潟県三島郡与板町の製鉄遺跡」『新潟考古』第１号　新潟県考古学会
坂井秀弥ほか 1989　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第53集 山三賀Ⅱ遺跡』県教委・埋文事業団
坂井陽一　1991　「第Ⅰ章 地形」『新潟市史 資料編12 自然』新潟市
坂上寛一　2002　「土壌分析からみる地表環境と人為の痕跡」『シンポジウム「よみがえる青田遺跡」資料集 川辺の縄文集落』埋文事業団・県教委
坂上有紀　2003　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第118集 上浦遺跡』県教委・埋文事業団
塩原知人・竹内　裕　2001　『村上市文化財調査報告書 高平遺跡』村上市教育委員会
設楽博己　1991　「最古の壺棺再葬墓－根古谷遺跡の再検討－」『国立歴史民俗博物館研究報告』36　国立歴史民俗博物館
霜鳥正道ほか 2002　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第115集 蔵ノ坪遺跡』県教委・埋文事業団
新宅信久　1994　「渡来系稲作集落江辻遺跡で発見された大型建物について」『月刊ジャーナル』9
椙田光明・椙田美枝子　1992　『伊茶仁チシネ第一竪穴群遺跡』北海道標津町教育委員会
鈴木加津子　1991　「安行式文化の終焉（2）」『古代』第91号　早稲田大学考古学会
鈴木公雄　1984　「Ⅵ.1 寿能泥炭層遺跡の調査の意義－特に木製品・漆製品を中心に－」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書－人工遺物・総括編（遺構・遺物）－』埼玉県教育委員会
鈴木俊成　1996　「第Ⅳ章.2.C石器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第72集 清水上遺跡Ⅱ』県教委・埋文事業団
鈴木俊成　1999　「第２章.5.2 早期から晩期の石器組成」『新潟県の考古学』高志書院
鈴木正博　1987　「続大洞A_2式考」『古代』84　早稲田大学考古学研究会
鈴木正博　2003　「「遠賀川式」文様帯への型式構え－埼玉における「綾杉文帯系土器群」の位相と「綾杉文帯系土器群」への「文様帯クロス」－」『埼玉考古』第38号　埼玉県考古学会
鈴木道之助　1981　『石器の基礎知識 Ⅲ縄文』柏書房
鈴木三男ほか 2002　「青田遺跡の植物的自然と縄文人の植物資源」『シンポジウム「よみがえる青田遺跡」資料集 川辺の縄文集落』埋文事業団・県教委
須藤　隆　1976　「亀ヶ岡式土器の終末と東北地方における初期弥生土器の成立」『考古学研究』第23巻第２号　考古学研究会
須藤　隆・富岡直人ほか　1995　『縄文時代晩期貝塚の研究２ 中沢目貝塚Ⅱ』東北大学文学部考古学研究室
須藤　隆ほか 1997　『中神遺跡の調査』 岩手県花泉町教育委員会
西東社出版部編　2000　『写真と図解 日本の古墳・古代遺跡』西東社
関　雅之　1973　「下金田遺跡調査報告」『水原博物館研究報告』第４号　水原町立水原博物館
関　雅之・石川日出志ほか　1980　『鳥屋遺跡Ⅰ』豊栄市教育委員会
関　雅之ほか 1988　『豊栄市史 資料編１ 考古編』豊栄市
高瀬克範　2000　「東北地方における弥生土器の形成過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』第83集　国立歴史民俗博物館
高田　勝　1987　「郡山市熱海町滝ノ口遺跡１号住居跡出土の土器」『西片前遺跡Ⅱ 土製品・石製品編』建設省三春ダム工事事務所・三春町教育委員会

高橋義介　1981　「火行塚遺跡Ⅲ.5その他」『岩手県埋文センター文化財調査報告書 第23集 二戸市上田面遺跡・大渕遺跡・火行塚遺跡』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
高橋忠彦ほか 2000　『秋田県文化財調査報告書 第294集 戸平川遺跡』秋田県教育委員会
高橋保雄　1992　「第Ⅵ章.4.B 石器類」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第57集 五丁歩遺跡・十二木遺跡』県教委
高橋保雄　1998　『朝日村文化財報告書 第15集 落合い向い遺跡・坂巻遺跡・沼ノ沢遺跡』朝日村教育委員会
高橋保雄・鈴木俊成　1990　「第Ⅳ章.2 石器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第55集 清水上遺跡』県教委
高濱信行・卜部厚志　2002　「湖底に沈んだ縄文遺跡－青田遺跡の立地環境－」『シンポジウム「よみがえる青田遺跡」資料集 川辺の縄文集落』埋文事業団・県教委
滝沢規朗　1995　「第Ⅴ章.4.A 縄文土器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第68集 大坂上道遺跡・猿額遺跡・中棚遺跡・牧ノ沢遺跡』県教委・埋文事業団
滝沢規朗　1999　「第２章.6.3.2 阿賀野川以北の磨製石斧生産」『新潟県の考古学』高志書院
滝沢規朗　2001　「新潟県の石冠」『新潟考古学談話会会報』第23号　新潟考古学談話会
滝沢規朗　2002a　「第Ⅴ章.5.C.（10）磨製石斧」『朝日村文化財報告書 第22集 元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』朝日村教育委員会
滝沢規朗　2002b　「第Ⅴ章.5.C.（25）環状石斧・多頭石斧・環石」『朝日村文化財報告書 第22集 元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』朝日村教育委員会
滝沢規朗・池田淳子　1998　「元屋敷遺跡」『日本考古学年報49（1996年度版）』日本考古学協会
滝沢規朗ほか 2002　『朝日村文化財報告書 第22集 元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』朝日村教育委員会
滝沢規朗・富樫秀之　1998　『朝日村文化財報告書 第14集 アチヤ平遺跡中・下段』朝日村教育委員会
田鎖寿男・齋藤邦雄　1995　『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第225集 大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
武井則道ほか 1997　『葎生遺跡』妙高村教育委員会
竹原　学　1987　『松本市赤木山遺跡群Ⅱ』松本市教育委員会
田中耕作　1991　「村尻遺跡出土の「ねかせ」状態の焼粘土塊について」『北越考古学』第４号　北越考古学研究会
田中耕作　1992　「2.縄文晩期後半の土器群」『館ノ内遺跡Ｄ地点の調査』新発田市教育委員会
田中耕作　1999　「新発田市村尻遺跡出土の焼粘土塊（続）」『北越考古学』10号　北越考古学研究会
田中耕作　2001　「縄文中・後期新発田市轟貝塚の発見」『北越考古学』第12号　北越考古学研究会
田中耕作・鈴木　暁　2000　「新発田市二タ子沢Ａ遺跡の調査概要」『新潟県考古学会第12回大会 研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
田中耕作ほか 1980　『新発田市埋蔵文化財調査報告 第２石田遺跡発掘調査概報』新発田市教育委員会
田中耕作ほか 1982　『新発田市埋蔵文化財調査報告 第４村尻遺跡Ⅰ』新発田市教育委員会
田中耕作ほか 1992　『館ノ内遺跡Ｄ地点の調査』新発田市教育委員会
田中耕作ほか 2003　『新発田市埋蔵文化財調査報告 第25 二タ子沢Ｃ遺跡発掘調査報告書』新発田市教育委員会
田中久夫ほか 1996　「新潟砂丘の形成史」『第四紀研究』第35巻 第３号　日本第四紀学会
種市幸雄　1988　『北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第53集 忍路土場遺跡・忍路５遺跡（第４分冊）』（財）北海道埋蔵文化財センター
田畑　弘　1993　『田上町埋蔵文化財調査報告書 第３集 保明浦遺跡』田上町教育委員会
田畑　弘ほか 1996　『保明浦遺跡Ⅱ』田上町教育委員会
田部井　功　1993　「大洞A2式に関する覚書」『古代』第95号　早稲田大学考古学研究会
千葉敏朗　2001　「第Ⅲ章.2.（7）下宅部（No.149）遺跡」『東村山市史 ５資料編 考古』東村山市
立木由里子　1999　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第91集 牛道遺跡発掘調査報告書』県教委・埋文事業団
辻　誠一郎　2002　「青田遺跡の暦年代を知るために－放射性炭素年代の測定ー」『シンポジウム「よみがえる青田遺跡」資料集 川辺の縄文集落』埋文事業団・県教委
津野　仁　1990　「古代・中世の鉄鏃」『物質文化』（54）　物質文化研究会
出口晶子　2001　『ものと人間の文化史　98・丸木舟』法政大学出版局
寺村光晴ほか 1987　『史跡 寺地遺跡』青海町
寺崎裕助　2001　「新潟平野の遺跡」『新潟考古学談話会会報』第24号　新潟考古学談話会
寺村光晴　1957　「新潟県乙茂飯田遺跡と出土遺物について」『石器時代』第４号　石器時代研究会
富樫秀之ほか 2002　『朝日村文化財報告書 第21集 アチヤ平遺跡上段』朝日村教育委員会

戸根与八郎　1982　「1.二.（1）宝塔山遺跡」『中条町史 資料編第一巻 考古・古代・中世』中条町
土橋由理子　1999　「第２章.6.1 黒曜石」『新潟県の考古学』高志書院
中川正人　1997　「付論５ 粟津湖底遺跡出土漆製品の材質と技法」『粟津湖底遺跡 第３貝塚』滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会
中沢道彦　1998　「「氷Ｉ式」の細分と構造に関する試論」『氷遺跡発掘調査資料図譜』第三冊　氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会
中島栄一　1986　「第７節 縄文文化の終末」『新潟県史 通史編１原始・古代』新潟県
永嶋正春　2002　「青田遺跡の漆製品・漆要具」『シンポジウム「よみがえる青田遺跡」資料集 川辺の縄文集落』埋文事業団・県教委
中西靖人　1985　「7.4 筌」『弥生文化の研究』第５巻道具と技術Ⅰ　雄山閣
長沼　孝・畑　宏明　1998　「日本国北海道ピリカ・湯の里４遺跡出土の旧石器時代玉類の研究」『東亞玉器鄧聰編』香港中文大学中國古藝術考古学資料館
永峯光一　1957　「長野県小諸市氷發見の土製品について」『考古学雑誌』第42巻第２號　日本考古學會
中村孝三郎　1958　『馬高』長岡市立博物館
名久井文明　1999　『樹皮の文化史』吉川弘文館
名久井文明　2002　「第Ⅶ章.1 現代まで受け継がれた縄文時代の技術」『青森県史 別編三内丸山遺跡』青森県
波部忠重・小菅貞男　1967　『標準原色図鑑全集３貝』保育社
奈良国立文化財研究所　1985　『奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所
奈良国立文化財研究所　1993　『奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇』奈良国立文化財研究所
新潟県統計協会　2003　『2004年版 新潟県民手帳』
新潟古砂丘グループ　1974　「新潟砂丘と人類遺跡－新潟砂丘の形成史Ⅰ」『第四紀研究』第３巻第２号　日本第四紀学会
新美倫子　2002　「縄文時代遺跡出土のクリの再検討－大きさの問題を中心に－」『動物考古学』第19号　動物考古学研究会
野田豊文　2002　「第Ⅴ章.2.B.（4）晩期中葉～末葉の土器様相」「第Ⅴ章.2.B.（8）晩期後葉～末葉」『朝日村文化財報告書 第22集 元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』朝日村教育委員会
芳賀英一　1986　「下谷ヶ地平Ｂ・Ｃ遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告書Ⅳ』福島県教育委員会
橋詰清孝　1988　「纒向遺跡南飛塚地区発掘調査概報」『桜井市埋蔵文化財発掘調査概報1987-11』桜井市教育委員会
橋本正博　2003　「第Ⅶ章 木製品」『八日市地方遺跡Ⅰ（第２分冊 遺物報告編）』石川県小松市教育委員会
秦　昭繁　2001　「新潟県北部地域の石器石材環境（2）－関川村獅子舞岩の珪質頁岩分析と石材流理構造－」『北越考古学』第12号　北越考古学研究会
福田友之ほか 1987　『青森県埋蔵文化財調査報告書 第113集 上鮫尾（1）遺跡Ｃ地区発掘調査報告書』青森県教育委員会
藤巻正信　1989　「土器片円盤について」『新潟考古学談話会会報』第３号　新潟考古学談話会
古沢妥史　2002　「第Ⅶ章.5.A埋設土器について」『朝日村文化財報告書 第22集 元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』朝日村教育委員会
本間克成ほか 2003　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第126集 浦廻遺跡』県教委・埋文事業団
本間信昭・戸根与八郎ほか　1975　『埋蔵文化財緊急調査報告書第4』県教委
埋文事業団　2000　『青田遺跡現地説明会～潟底から甦った縄文時代晩期の掘立柱建物～』
前山精明　1994　「御井戸遺跡」『巻町史 資料編１考古』巻町
前山精明　1996　「縄文時代晩期後葉集落の経済基盤－新潟県御井戸遺跡出土植物性食料残渣の計量分析から－」『考古学と遺跡の保護－甘粕 健先生退官記念論集－』甘粕 健先生退官記念論集刊行会
前山精明　2002　「青田遺跡の石器群」『シンポジウム「よみがえる青田遺跡」資料集 川辺の縄文集落』埋文事業団・県教委
馬目順一・古川 猛　1970　『福島県郡山市一人子遺跡の研究－所謂亀ヶ岡式土器終末期の吟味－』南奥考古学研究叢書Ⅰ
水澤幸一　1996　『中条町埋蔵文化財調査報告 第９集 下町・坊城遺跡・中倉遺跡ほか』中条町教育委員会

水澤幸一　1998　『中条町埋蔵文化財調査報告 第15集 兵衛遺跡・四ツ持遺跡』中条町教育委員会
水澤幸一　1999a『中条町埋蔵文化財調査報告 第16集 中倉遺跡3次』中条町教育委員会
水澤幸一　1999b『中条町埋蔵文化財調査報告 第17集 町内遺跡Ⅴ』中条町教育委員会
水澤幸一　2000　『中条町埋蔵文化財調査報告 第20集 下町・坊城遺跡Ⅳ』中条町教育委員会
水澤幸一　2002　『中条町埋蔵文化財調査報告 第24集 船戸川崎遺跡4次』中条町教育委員会
水澤幸一　2003a『中条町埋蔵文化財調査報告 第27集 二軒茶屋遺跡』中条町教育委員会
水澤幸一　2003b「塩津潟に流れ込む河川沿いの遺跡群 ～草野遺跡を中心にして～」『新潟県考古学会第15回大会研究発表要旨』新潟県考古学会
水澤幸一・吉村光彦　2001　『中条町埋蔵文化財調査報告 第22集 船戸桜田遺跡2次』中条町教育委員会
水澤幸一ほか 1997　『中条町埋蔵文化財調査報告 第12集 下町・坊城遺跡Ⅱ』中条町教育委員会
水澤幸一ほか 2001　『中条町埋蔵文化財調査報告 第21集 下町・坊城遺跡Ⅴ』中条町教育委員会
水澤幸一ほか 2002　『中条町埋蔵文化財調査報告 第25集 船戸桜田遺跡4・5次 船戸川崎遺跡6次』中条町教育委会
南　久和ほか 1983　『金沢市文化財紀要60 金沢市新保本町チカモリ遺跡－遺構編－』金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会・金沢市新保本町第1土地区画整理組合
南　久和ほか 1986　『石川県能都町 真脇遺跡（本編）』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
三宅敦気　1993　「縄文時代後・晩期のムラ－群馬県月夜野町矢瀬遺跡－」『東国史論』第8号　群馬考古学研究会
三山らさほか 2002　「磨製石斧」『季刊 考古学』第81号　雄山閣
宮本長二郎　1998　「掘立柱建物の出現と展開」『先史日本の住居とその展開』同成社
宮本長二郎　1999　「上菅荒神原遺跡の住居遺構」『上菅荒神原遺跡』鳥取県教育文化財団
宮本長二郎　2002　「青田遺跡の住居と集落」『シンポジウム よみがえる青田遺跡資料集 川辺の縄文集落』埋文事業団・県教委
宮本長二郎　1999　「津島遺跡出土建築材の復元」『津島遺跡4』岡山県教育委員会
村本恵一郎　2002　「第Ⅶ章.3 植物遺体について」『朝日村文化財報告書 第22集 元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』朝日村教育委員会
森本六爾・小林行雄 編集　1938　『弥生式土器集成図録』東京考古学会
森谷昌央・佐竹圭一ほか　2003　「砂子田遺跡第2次・第3次発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財センター報告書』第113集　財団法人 山形県埋蔵文化財センター
八木勝枝　2002　「第Ⅴ章.4.C 焼成粘土塊」『朝日村文化財報告書 第22集 元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』朝日村教育委員会
山形県立博物館　2002　『企画展 小山崎遺跡 発掘調査速報展（パンフレット）』山形県立博物館
山崎忠良　2000　『朝日村文化財報告書 第20集 本道平遺跡』朝日村教育委員会
山田昌久　2002　「木器・木造施設に見る青田縄文人のくらし」『シンポジウム「よみがえる青田遺跡」資料集 川辺の縄文集落』埋文事業団・県教委
山田昌久・飯島克己　1984　「Ⅴ.12 杭の加工痕について」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書－人工遺物・総括編（遺構・遺物）－』埼玉県教育委員会
山本暉久・谷口肇　1999　『かながわ考古学財団調査報告 46 池子遺跡群Ⅹ』（財）かながわ考古学財団
山本恵一　1989　「Ⅳ.5 陥穽漁関係用具」『沼津市歴史資料館資料集7 沼津周辺の漁撈用具（Ⅰ）』沼津市歴史民俗資料館
横山勝栄ほか 2000　『長者屋敷遺跡・中貝遺跡発掘調査報告書』鹿瀬町教育委員会
吉川純子・鈴木三男・荒川隆史　2000　「縄文時代後晩期における堅果類の形態と割り方」『日本植生史学会 2000年大会 講演要旨集』日本植生史学会
吉村光彦　2002　『中条町埋蔵文化財調査報告 第23集 大塚遺跡第2次』中条町教育委員会
若林邦彦ほか 1993　『河内平野遺跡群の動態Ⅳ－南遺跡群－』（財）大阪文化財センター
渡辺一雄　1985　「7.6 弓・矢」『弥生文化の研究』5　道具と技術Ⅰ　雄山閣
渡辺修一ほか 2001　『千葉県史編さん資料 成田市荒海川表遺跡発掘調査報告書』千葉県
渡邊朋和　1998　「三、緒立遺跡B地区出土土器（2）弥生土器」『黒崎町史 資料編一 原始・古代・中世』黒崎町
渡邊朋和・荒川隆史　1999　「第2章.2.6 晩期」『新潟県の考古学』高志書院
渡邊裕之　1998　「新潟県における縄文晩期後半の組成土器－鳥屋式土器の理解にむけて－」『新潟考古学談話会会報』第18号　新潟考古学談話会

渡邊裕之ほか 2003　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第127集 道端遺跡』県教委・埋文事業団
渡辺　誠　1981　「トチのコザワシ」『物質文化』(36) 物質文化研究会
藁科哲男　2002　「第Ⅵ章.13 元屋敷遺跡出土石器、剥片の原材産地分析」『朝日村文化財報告書 第22集 元屋敷遺跡Ⅱ（上段)』朝日村教育委員会
藁科哲男・東村武信　1996　「新潟県下遺跡出土の黒曜石製遺物の石材産地分布」『新潟考古』第7号　新潟県考古学会

遺構観察表（1）掘立柱建物

長さ：m、（ ）：推定値

掘立柱建物	分類	A 主軸長	B 桁行長右	C 桁行長左	D 梁行長①	E 梁行長②	F 突出長①	G 突出長②	H 主軸全長	I 桁行全長右	J 桁行全長左	K 張り出し梁間長③	L 突出長③	張り出し主軸長	方位	母屋（㎡）	全体（㎡）	飛出し前後比率（G/F）	推定所属時期
SB1	A1	3.36	2.48	2.36	2.28	2.32	0.46	0.48							N59W	6.64		1.04	S4～S3層期
SB2	A2	2.92	2.20	2.32	2.12	2.16	0.48	0.16							N6E	5.57		0.33	S4～S3層期
SB3	A1	3.20	2.48	2.24	2.28	2.36	0.44	0.40							N86W	6.41		0.91	不明
SB4	B2	8.25	6.15	6.28	3.00	3.36	1.06	0.75	10.68	9.65	9.85	3.75	0.00	2.43	N117W	22.60	33.25	0.71	S3層期
SB5	B1	5.00	3.32	3.56	2.92	3.04	0.96	0.56	7.24	6.04	6.08	2.88	0.24	2.24	N112W	12.49	19.50	0.58	S5～S3層期
SB6	B3	5.36	3.64	3.88	2.68	2.96	1.16	0.41	7.20	6.04	6.16	3.16		1.84	N43W	12.71	19.16	0.35	S1層期
SB7	B3	5.32	3.56	3.60	2.32	2.20	1.32	0.36	(7.06)		5.60			1.74	N75W	10.12	(14.56)	0.27	S1層期
SB8	B3	6.24	4.08	4.00	2.44	2.36	1.52	0.72	8.64	7.32	6.92	2.20		2.40	N65W	12.17	18.44	0.47	S1層期
SB9	B3	4.52	2.86	2.88	3.12	2.92	1.28	0.36	6.56	5.40	5.20	2.64		2.04	N87W	11.13	17.37	0.28	S1層期
SB10	A	3.80				2.04		0.28							N94W	(7.27)			S1層期
SB11	A	(3.80)		2.80	2.40		0.50								N45W	(8.06)			S1層期
SB12	A	(4.40)	2.88	2.76	2.06	1.92	0.80								N28W	(7.23)			S1層期
SB13	A	(4.20)	2.32	2.32	2.20	2.24		0.96							N101W	(7.14)			S1層期
SB14	B1	4.48	3.20	3.80	2.36	2.26	0.60	0.32	5.88		5.32		0.12	1.40	N57W	9.07	(12.17)	0.53	S1層期
SB15	B1	6.84	4.40	4.40	3.20	3.56	1.74	0.64	9.36	7.15	6.92	2.75	0.68	2.52	N106W	18.89	26.69	0.37	S1層期
SB16	B2	3.72	2.96			2.04	(0.60)	0.16							N124W	(6.97)		(0.27)	S1層期
SB17	A2	4.20	3.16	3.16	2.76	2.84	0.70	0.32							N77W	10.25		0.46	S1層期
SB18	B3	4.75	2.76	2.48	2.80	2.92	1.68	0.44	(6.36)	4.92				1.61	N107W	10.37	(15.80)	0.26	S1層期
SB19	A2	4.48	2.84	3.08	2.92	2.76	1.04	0.44							N126W	10.57		0.42	S1層期
SB20	B3	4.00	2.48	2.26	2.80	2.52	1.44	0.24	5.44	4.24	3.88	2.36		1.44	N119W	8.41	12.38	0.17	S1層期
SB21	B3	4.28		2.88		2.48	(0.64)	0.55	(5.24)		4.60			0.96	N127W	(8.72)	(11.70)	(0.86)	S1層期
SB22	B1	4.88	2.92	3.08	2.32	2.60	1.32	0.52	7.80	5.85			(0.64)	2.92	N130W	9.56	(17.33)	0.39	S1層期
SB23	B3	4.76	3.33		2.24		1.00	(0.56)	(6.33)	5.44				1.57	N121W	(9.37)	(13.98)	(0.56)	S1層期
SB24	B2	4.96	3.36	3.44	2.84	2.32	1.28	0.40	7.20	5.96				2.24	N127W	10.92	(16.88)	0.31	S1層期
SB25	A1	3.00	2.28	2.28	2.00	2.26	0.40	0.36							N154W	5.66		0.90	S1層期
SB26	B1		3.36	3.64	3.00	2.96	1.96		8.63	6.48	6.76	2.72	0.14	8.63	N142W	(13.95)	21.91		S1層期
SB27	A2	4.08	3.00	3.12	2.44	2.88	0.64	0.40							N161W	9.58		0.63	S4～S3層期
SB28	B3	5.24	3.72	3.46	2.84	2.88	1.06	0.60	(7.40)		6.36			2.16	N115W	12.56	(19.12)	0.57	S1層期
SB29	B1	4.16	3.04	2.92	2.92	2.72	0.76	0.45	5.86	5.04	4.84	2.60	0.12	1.70	N43E	10.07	14.91	0.59	S3層期以降
SB30	B	6.06	4.04	4.04	3.16	2.88	1.36	0.68	(7.92)	6.60				1.86	N47W	15.36	(21.39)	0.50	S2～S1層期
SB31	B	6.80	5.20	5.08	3.48	3.30	0.92	0.76	(8.48)		7.60			1.68	N109W	19.92	(26.75)	0.83	S4層期以降
SB32	B1	6.28	4.12	3.88	3.16	3.00	1.32	1.04	8.88	7.08	6.84	2.80	0.64	2.60	N112W	15.74	23.75	0.79	S3層期以降
SB33	A2	4.65	3.46	3.32	2.48	2.55	0.70	0.56							N107W	10.14		0.80	S1層期
SB34	A2	5.20	4.16	4.04	2.32	2.64	0.76	0.40							N122W	11.66		0.53	S3層期以降
SB35	A	(4.00)		3.12		2.40		0.32							N113W	(8.01)			S1層期
SB36	B3	6.80	4.72	4.88	3.32	3.56	1.33	0.60	(8.76)	7.40				1.96	N63W	19.87	(28.26)	0.45	S3層期以降
SB37	B1	4.92	3.48	3.45	2.60	2.84	0.80	0.68	7.12	5.92	5.72	2.76	0.56	2.20	N63W	11.54	17.67	0.85	S3～S1層期
SB38	B1	4.84	3.32	3.12	2.60	2.56	0.96	0.64	6.74	5.40			(0.44)	1.90	N64W	10.39	(15.66)	0.67	S4～S2層期
SB39	A2	4.78		3.56	3.08		0.88	(0.36)							N70W	(13.85)		(0.41)	S3層期以降
SB40	B2	(5.04)	3.36	3.08	2.86	3.00	1.28	0.56	6.32	5.32			-0.08	11.36	N71W	11.92	(16.57)	0.44	S3層期以降
SB41	C		4.40	4.36	3.24	3.15									N98W	13.54			S4～S3層期
SB42	A2	4.36	2.56	2.80	2.68	2.28	1.12	0.56							N87W	8.68		0.50	S2～S1層期
SB43	A	6.54		4.04	2.80		0.96	(1.62)							N100W	(16.67)		(1.69)	S3層期以降
SB44	A2	6.40	4.64	4.68	3.08	3.16	1.12	0.60							N82W	17.39		0.54	S3層期以降
SB45	A	(3.80)	2.80	2.76	2.32	2.18		0.48							N52W	(7.42)			S4層期以降
SB46	A2	2.08	1.60	1.52	1.00	1.20	0.40	0.12							N69W	1.99		0.30	S2層期以降
SB47	A2	5.16		3.38		1.92	1.14	0.56							N14E	(8.41)		0.49	S1層期
SB48	A2	6.08	4.36	4.56	3.26	3.08	1.04	0.60							N91W	16.46		0.58	S2～S1層期
SB49	B1	5.16	2.56	2.68	2.55	2.84	1.28	1.20	6.28	4.56	4.84	2.72	0.28	1.12	N32W	10.33	14.56	0.94	S1層期

遺構観察表（2）掘立柱建物

長さ：m、（ ）：推定値

掘立柱建物	分類	A 主軸長	B 桁行長右	C 桁行長左	D 梁行長①	E 梁行長②	F 突出長①	G 突出長②	H 主軸全長	I 桁行全長右	J 桁行全長左	K 張り出し梁間長③	L 突出長③	張り出し主軸長	方位	母屋（㎡）	全体（㎡）	飛出し前後比率（G/F）	推定所属時期
SB50	B1	6.08	4.62	4.72	2.91	2.92	(0.9)	0.48	8.56	7.14			(0.44)	2.48	N111W	(15.58)	(22.95)	(0.53)	S4層期以降
SB51	A2	4.12		2.84		2.36	(0.92)	0.36							N63W	(8.35)		(0.39)	S4層期以降
SB52	A	(4.10)	3.12	2.84	2.36	2.80	0.80								N155W	(9.02)			S4～S3層期
SB53	C			2.92	1.84										N160W	(5.28)			S4～S3層期
SB54	A	(5.40)				2.38		0.16							N48W	(12.11)			S2～S1層期
SB55	C		4.40	4.15	2.40	2.24									N156W	9.75			S1層期
SB56	C		3.14			2.56									N155W	(7.57)			S1層期
SB57	A				1.68		0.56								N160W				S1層期
SB58	A				1.60		0.24								N74E				不明

遺構観察表（3）掘立柱建物（P）

（ ）：推定値

掘立柱建物	遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	覆土			柱根				出土遺物	切り合い	備考
					平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度		堆積形状	覆土	掘形と柱根の関係	柱根の有無	掘形の有無	方位	傾斜角度			
SB1	40	5C3	Ⅶd層	S2～S1層	円形	U字状	垂直	(17)	(13)	10	7	60	0.85		A	B	○	○	N170E	12	土器		
SB1	43	5C9	Ⅶd層		楕円形	U字状	垂直	27	19			56	0.98		A	A	○	○	0	0			
SB1	44	5C4	Ⅶd層		円形	U字状	垂直	(20)	(17)			40	1.04		A	A	○	○	0	0			
SB1	45A	5B24	Ⅶd層		楕円形	漏斗状	急斜度	23	16			34	0.9		A	A	○	○	N32W	10	土器		
SB1	45B	5B24	Ⅶd層		円形	漏斗状	急斜度	23	16			28	0.98		A	A	○	○	0	0	土器		
SB1	46	5B23	Ⅶd層		円形	U字状	急斜度	16	15	8	7	26	1.02		A	A	○	○	0	0			
SB1	47	5B23	Ⅶd層		円形	箱状	垂直	16	16			16	1.3		A	A	○	○	N84E	7			
SB1	50	5C8	Ⅷ層		楕円形	U字状	急斜度	23	19	12	7	21	0.98		A		×				土器・根絡み		
SB2	701	5D14	Ⅷ層		楕円形	漏斗状	急斜度	19	13	(6)	(4)	26	1.04	A	A		×						
SB2	702	5D18	Ⅷ層		楕円形	階段状	垂直	18	14	10	(7)	27	1.048	A	A		×						
SB2	703	5D19	Ⅷ層		楕円形	袋状	内傾	18	13	(11)	(9)	14	1.06	A	A		×						
SB2	704	5D25	Ⅷ層		楕円形	階段状	急斜度	17	14	7	6	20	1.027	A	A		×						
SB2	705	5D20	Ⅷ層									24	0.966				○	×	S	20			
SB2	706	5D20	Ⅷ層									24	0.98				○	×	S	17			
SB3	725	5D5	Ⅷ層		円形	U字状	垂直	7	6	(7)	(5)	20	0.954	D	H		×						
SB3	726	5D4	Ⅷ層		円形	漏斗状	急斜度	14	12			32	0.96		A	A	○	○	N170W	12			
SB3	727	5D4	Ⅷ層		円形	漏斗状	急斜度	8	(5)	(5)	(3)	22.5	1.071	A	A		×						
SB3	728	5D8	Ⅷ層		楕円形	漏斗状	急斜度	18	(14)			35	0.966		A	B	○	○	0	0			
SB3	729	5D14	Ⅷ層		楕円形	漏斗状	急斜度	(20)	(14)	(5)	(4)	22	1.034	A	A		×						
SB3	730	5D14	Ⅷ層		楕円形	V字状	急斜度	10	7	(3)	(2)	14	0.98	D	A		×						
SB4	825	15E4	Ⅵ層		不整形	階段状	垂直	125	104			44	0.7		A	A	○	○	N120E	0	土器・礎板・根絡み・クリ・トチ・クルミ		
SB4	826	15E1･2	S2層	S3層	円形	漏斗状	急斜度	33	(31)			43	0.91				○	○	N47W	5			
SB4	827	15E8	Ⅴ層	S3層以降	楕円形	U字状	急斜度	30	(26)	26	—	43	0.98		A	B	○	○	N77E	8	土器・粘土・クルミ		糸玉
SB4	828	15D23,15E3	Ⅶ層上部	S4～S3層	楕円形	袋状	内傾	90	71			61	0.83		H	A	○	○	0	0	礎板・根絡み・クリ	〈SK914	
SB4	868	16D11･16	S1層	S4層以降	不整形	箱状	緩やか	(152)	95			82	0.6		H	A	○	○	0	0	礎板・根絡み・クリ・クルミ		礎板・根絡みあり
SB4	907	15D10･15	Ⅶ層	S4～S3層	不整形	弧状	緩やか	150	92			80	0.58		H	A	○	○	0	0	礎板・根絡み・クリ・クルミ		
SB4	920	15D17･18･22･23	K5層		楕円形	弧状	緩やか	136	108			68	0.65		H	A	○	○	0	0	土器・根絡み・礎板・磨石類・クリ・トチ・クルミ		
SB4	923	16D6･11	S1層	S4～S3層	不整形	弧状	緩やか	103	84			86	0.52		H	A	○	○	0	0	土器・礎板・根絡み・不定形石器		
SB5	24	15E20	Ⅴ層									68	0.605				○		0	0			暗渠工事で出土
SB5	879	16E8	Ⅴ層	S4層以降	円形	U字状	垂直	30	24			102	0.38		H	A	○	○	0	0			
SB5	880	16E3	Ⅴ層		円形	U字状	垂直	24	20			120	0.16		A	B	○	○	0	0			
SB5	884	16E2	Ⅴ層		円形	漏斗状	急斜度	28	26			102	0.434		H	B	○	○	0	0			
SB5	885	16E11	Ⅵ層	S3層以降	円形	U字状	垂直	25	23			85	0.53		A	B	○	○	0	0			

遺構観察表（4）掘立柱建物（P）

（ ）：推定値

掘立柱建物	遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	覆土			柱根				出土遺物	切り合い	備考
					平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度		堆積形状	覆土	掘形と柱根の関係	柱根の有無	掘形の有無	方位	傾斜角度			
SB5	886	15E20	V層	S3層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	22	17			80	0.52		A	A	○	○	N81E	4			
SB5	917	16E11	S5層		円形	U字状	垂直	21	20			86	0.39		A	B	○	×	0	0			
SB5	922	16E17	V層	S4層以降	楕円形	U字状	垂直	(45)	(35)			110	0.29		H	A	○	○	N70E	1.5	土器		
SB5	2284	16E21	V層	S5層以降	円形	U字状	垂直	(19)	(18)			89	0.25		A	A	○	○		3			
SB6	881	16E9	V層		不整形	U字状	急斜度	(48)	40			48	0.88		A	A	○	○	N53W	8	磨石類		
SB6	882	16E5·10	V層		円形	U字状	急斜度	35	34			40	0.88		A	A	○	○	N25W	9			
SB6	883	16E5	V層	S4層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	44	30			55	0.86		A	A	○	○	N60E	7	土器・石皿・石皿類		
SB6	902	16D23	K4層		円形	U字状	急斜度	37	32			41	0.9		A	A	○	○	N37W	15			
SB6	913	16E15	K4層		楕円形	U字状	急斜度	32	24			35	0.97		A	A	○	○	0	0			
SB6	919	16D18·19	Ⅶ層		不整形	階段状	急斜度	52	(40)			25	1.05		A		○	○	N110W	17	土器・樹皮		柱根周囲・底面に土器。覆土中に別に柱根Bあり
SB6	932	16D19·20·24·25	Ⅶ層		楕円形	U字状	急斜度	36	26			45	0.87		A	A	○	○	N160E	19			
SB6	961	17E6	SD1420-10層	S1層	楕円形	U字状	垂直	24	16			51	0.881		A	A	○	○	0	0			
SB7	948A	17B19	K4層		楕円形	U字状	垂直	50	(32)			54	0.75	E	D	B	×				土器・樹皮・粘土・クルミ		
SB7	948B	17B19	K4層		楕円形	U字状	垂直	50	(32)			48	0.787		H	B	○		0	0	土器・クルミ		
SB7	955	17C4	S1層	S2層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	32	27			75	0.58		A	A	○	○	N80E	3			
SB7	981	17B14·19	K4層		楕円形	漏斗状	急斜度	40	29			54	0.712		H	A	○	○	N114E	17	土器・根絡み		礎板・根絡みあり
SB7	985	17C10	S5層		円形	箱状	垂直	30	28			23	1.04				○	○	N35E	13	礎板・根絡み		
SB7	992	17C5	K4層		楕円形	漏斗状	急斜度	36	23	(16)	(7)	43	0.83	A	A		×						
SB7	1402	17C4	Ⅶd層		円形	漏斗状	急斜度	26	25			47	0.68		H	B	○	○	0	0			
SB7	1409	17B20	Ⅶ層		円形	漏斗状	急斜度	32	32	(12)	(8)	40	0.63	D	H		×				根絡み		
SB8	937	17D13·18	SD1420-Ⅵa層	SD1420-6a層以降	円形	U字状	垂直	25	23			70	0.58		A	B	○	×	0	0			
SB8	938	17D3·4	S1層	S2層以降	楕円形	U字状	急斜度	40	23			56	0.755		A	B	○	○	N35E	18			
SB8	952	17D14	SD1420-4層	SD1420-4層以降	楕円形	U字状	垂直	38	36			70	0.67		A	B	○	○	N91W	5			
SB8	953	17D19	SD1420-5層	SD1420-5層以降	不整形	漏斗状	急斜度	67	43			90	0.32		A	A	○	○	N7E	47	土器・不定形石器		
SB8	954	17D25	Ⅵ層	SD1420-6層以降	楕円形	V字状	垂直	28	24			65	0.6		A	A	○	○	N42E	5	クリ・トチ・クルミ		
SB8	962	17D3·8	S1層	S2層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	32	25			58	0.8		A	A	○		N11E	26			
SB8	963	17D4	S1層	S1層	円形	U字状	垂直	32	30			74	0.68		A	A	○		N75W	9		＝P1447	
SB8	977	17D24	SD1420-3b層	SD1420-4層以降	楕円形	U字状	急斜度	26	20			53	0.681		A	A	○	○	N45E	2			
SB8	1447	17D4	S1層	S3層以降	円形	U字状	垂直	20	20			54	0.82		A	B	○	×	N44E	4		＝P963	
SB9	930	16E10		S3層以降	楕円形	U字状	急斜度	22	15			45	0.961				○		N90W	15			
SB9	964	17E1	SD1420-11b層	SD1420-11b層以降	楕円形	U字状	垂直	22	16			70	0.651		A	B	○	○	0	0			
SB9	972	17D17	K3層	S3層以降	円形	U字状	垂直	20	20			60	0.683		A	A	○	○	0	0			
SB9	1407	17D22	Ⅵ層	SD1420-5層以降	楕円形	U字状	垂直	24	21			76	0.54		A		○	○	0	0			
SB9	1435	17E7	SD1420-10層	SD1420-10層以降	円形	袋状	垂直	15	15			30	0.976		A	A	○	○	N58W	5			
SB9	1438	17E2	SD1420-11b層	SD1420-11b層以降	円形	U字状	垂直	16	16			43	0.83		A	B	○	○	0	0			
SB9	1441	17D16			楕円形	U字状	垂直	20	16			47	0.759		A	A	○	○	N16E	9			
SB9	1456	16E5,17E1	Ⅵ層		楕円形	U字状	垂直	(20)	(15)			68	0.74				○		0	0			
SB10	986	18D21	SD1420-3b層	SD1420-3a層以降	楕円形	漏斗状	垂直	20	15			54	0.86		A	A	○	○	N105E	5			
SB10	987	18D22	SD1420-4層	SD1420-4層以降	楕円形	漏斗状	垂直	20	15			28	0.950		A	A	○	○	N8E	10			
SB10	999	18D21	SD1420-8a層	SD1420-3a層以降	円形	台形状	急斜度	21	20			13	1.042		A	A	○	○	N65W	14	樹皮		
SB10	1455	18D12	SD1420-11a層	SD1420-3a層	楕円形	漏斗状	垂直	23	18			26	0.784		A	B	○		N103W	10			
SB11	904	16E14	K4層		円形	袋状	急斜度	20	18			55	0.78		A	A	○	○	N90W	10			
SB11	929	16E14	K4層		楕円形	U字状	急斜度	25	20			28	1.04		A	A	○	○	N40W	6			
SB11	931	16E10·15	K5層		楕円形	U字状	急斜度	15	10			53	0.77		A	C	○	×	N37W	21			
SB11	1461	17E16	K5a層		楕円形	U字状	急斜度	25	15			45	0.756		A	B	○		N96E	18			
SB12	951	17D5	Ⅶd層	S3層	円形	半円状	急斜度	13	12			7	0.94				×				樹皮		

遺構観察表（5）掘立柱建物（P）

（ ）：推定値

掘立柱建物	遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	覆土			柱根				出土遺物	切り合い	備考
					平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度		堆積形状	覆土	掘形と柱根の関係	柱根の有無	掘形の有無	方位	傾斜角度			
SB12	976	18C21	K4層		円形	V字状	急斜度	17	15	4	4	49	0.82	A	A		×						
SB12	980	17C25	K3層	S3層以降	楕円形	袋状	垂直	21	17			30	0.918		A	A	○	○	0	0	礎板		
SB12	1432	18D2	SD1420-14b層	SD1420-14a層以降	楕円形	U字状	垂直	17	15			59	0.45		A	B	○	×	0	0			
SB12	1462	18D6	SD1420-15層	SD1420-14c層以降								20	0.792			C	○	×	0	0			
SB13	1496	18C2	SD1420-6a層	SD1420-6a層以降	不整形	U字状	垂直	(24)	(13)			43	0.52		A	B	○		0	0			
SB13	1499	18C3	SD1420-6b層	SD1420-6b層以降	楕円形	U字状	垂直	(19)	(15)			55	0.44		A	B	○		N142W	4			
SB13	1500	18C3·8	SD1420-6a層	SD1420-6a層以降	不整形	U字状	急斜度	36	20	9	9	55	0.47	E	A	A	×		N74W	36		〈P1498	
SB13	1533	18B24	SD1420-6a層	SD1420-6a層以降								58	0.36		A	A	○	○	N134E	2			
SB13	1576	18B23	S2層	S2層以降	円形	U字状	垂直	10	8			44	0.598		A	B	○	○	0	0	土器		
SB14	1471	18B24	Ⅵ層	SD1420-6b層以降	楕円形	U字状	垂直	(26)	(20)			72	0.25		A	B	○	×	N103W	17			
SB14	1501	18C10	SD1420-9b層	SD1420-9b層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	33	20			33	0.56		A	A	○	○	N130W	37			
SB14	1505	18C10	SD1420-9b層	SD1420-9b層以降	楕円形	U字状	垂直	(25)	(18)			48	0.38		A	B	○		0	0			
SB14	1511	19C6	SD1420-9b層	SD1420-9b層以降	楕円形			18	15	(16)	(12)		0.736	D	A		×						
SB14	1534	18B24·25	SD1420-6a層	SD1420-6a層以降	楕円形	U字状	垂直	36	20			33	0.54	A	A		×				礎板・根絡み		
SB14	1535	18B25	SD1420-6a層	SD1420-6a層以降	楕円形	U字状	急斜度	(25)	(22)			52	0.38		A	B	○	×	S	20			
SB14	1553	18C10·15	SD1420-6a層	SD1420-6a層以降	楕円形	U字状	急斜度	(30)	(20)	(16)	(12)	34	0.688	A	E		×				土器・クルミ		
SB14	1555	19C1·6	SD1420-9b層	SD1420-9b層以降								48	0.339		A	A	○	○	N148W	10			
SB15	1507	19C16	SD1420-6b層	SD1420-6b層以降	楕円形	U字状	垂直	33	26			40	0.281		A	B	○	×	N55W	8			
SB15	1518	19C2	SD1420-6b層	SD1420-6b層以降	楕円形	U字状	垂直	30	25			50	0.191		A	B	○		N37W	8			
SB15	1519	19B23·24 19C3·4	SD1420-6b層	SD1420-6b層以降	円形	U字状	垂直	76	48			73	-0.25		A	A	○		0	0	土器・根絡み		
SB15	1520	19C9	SD1420-6b層	SD1420-6b層以降	円形	U字状	垂直	32	28			75	-0.17		A	A	○		0	0	トチ・クルミ	＝P1521	
SB15	1523	19C18	SD1420-6b層	SD1420-6b層以降								55	0.02		A	A	○		N51W	7	土器・礎板（石皿類）		礫を礎板とする
SB15	1524	19C12·17	Ⅵ層	SD1420-6a層以降	楕円形	台形状	急斜度	141	(48)			85	-0.08		A	A	○	○	N152W	10	土器・石鏃・根絡み		
SB15	1526	19C22	SD1420-6a層	SD1420-6a層以降								55	0.119		A	A	○		0	0	根絡み		
SB15	1531	19C12	SD1420-4b層	SD1420-4b層以降	楕円形	U字状	急斜度	(48)	(30)			85	-0.28		A	B	○	×	N84E	10			
SB15	1542	19C21	SD1420-9a層	SD1420-9a層以降								46	0.28		A	A	○		N120W	18			
SB15	1546	19C11·12	SD1420-4a層	SD1420-4a層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	40	26			71	0.14		A	A	○	○	N171W	48	土器・礎板・土器・両極石器		礎板あり。底面から土器出土
SB16	1513	19C11·12	SD1420-6b層	SD1420-6b層以降								26	0.4		A	B	○	○	N10E	10			
SB16	1514	19C2	SD1420-6b層	SD1420-6b層以降	楕円形	U字状	急斜度	19	13.5	8	(8)	22	0.499	A	A		×						
SB16	1530	19C3	SD1420-6b層	SD1420-6b層以降	円形	U字状	急斜度	(16)	(15)			44	0.37		A	A	○	○	0	0			
SB16	1532	19C6	SD1420-6b層	SD1420-6b層以降	円形	U字状	急斜度	9	9			29	0.487		A	B	○	○	N38W	10	土器		
SB16	1582	19C12	SD1420-9a層	SD1420-9a層	円形	U字状	垂直	15	13				0.463				○		0	0	土器		
SB17	1502	18C10	SD1420-9b層	SD1420-9b層以降	楕円形	U字状	急斜度	27	20			31	0.5	E	A	A	○	○	0	0			
SB17	1508	19C6·7·11·12	SD1420-6b層	SD1420-6b層以降	楕円形	階段状	急斜度	(32)	(19)			39	0.375		A	B	○	○	N42W	22			
SB17	1509	19C16·17	SD1420-6b層	SD1420-6b層以降	楕円形	U字状	垂直	15	14			31	0.445		A	A	○	○	0	0			
SB17	1512	19C6	SD1420-6a層	SD1420-6a層以降	円形	U字状	垂直	20	20			41	0.425		A	A	○	○	N60W	15	土器・不定形石器		
SB17	1547	18C20	SD1420-9b層	SD1420-9b層以降	円形	U字状	急斜度	17	(16)			22	0.49		A	A	○	○	N152E	18			
SB17	1589	19C16	SD1420-6b層	SD1420-9b層	楕円形	U字状	垂直	15	13			43	0.226		A	C	○	×	0	0			
SB18	1538	19B18	SD1420-6b層	SD1420-6b層以降	楕円形	U字状	垂直	22	16			36	0.230				○	○	N150W	9			
SB18	1557	19B13	SD1420-9a層	SD1420-9a層以降	楕円形	U字状	急斜度	(37)	(24)			46	0.11		A	A	○	○	N143W	51	土器・不定形石器		
SB18	1558	19B10	SD1420-6b層		不整形	袋状	急斜度	(42)	32			71	-0.15				○	○	N155W	6	添え木・根絡み		
SB18	1572	19B319	SD1420-11a層	SD1420-9a層	不整形	U字状	急斜度	45	21			50	-0.06		A	A	○	○	N128W	29	根絡み		
SB18	1573	19B15	SD1420-9b層	SD1420-9b層以降								45	0		A		○	×	N113W	80			
SB18	1578	19B19	SD1420-6a層	SD1420-6a層	楕円形	漏斗状	急斜度	(65)	(45)	(20)	(10)	54	0.09				×				土器・不定形石器		
SB18	1580	19B9	SD1420-9b層	SD1420-9b層以降								34	0.20		A		○	×	N126W	75	根絡み・木製品		
SB19	1616	20B23	SD1420-6a層	SD1420-6b層以降	楕円形	V字状	急斜度	28	19			55	-0.28		A	A	○	○	0	0			
SB19	1617	20B22	SD1420-9a層	SD1420-6b層以降	楕円形	U字状	急斜度	46	25			46	-0.157		A	A	○	○	N106E	20	土器		

遺構観察表（6）掘立柱建物（P）

（ ）：推定値

掘立柱建物	遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	覆土			柱根				出土遺物	切り合い	備考
					平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度		堆積形状	覆土	掘形と柱根の関係	柱根の有無	掘形の有無	方位	傾斜角度			
SB19	1622	20C1	SD1420-11a層	SD1420-11a層以降	楕円形	U字状	垂直	20	12			50	-0.27		A	A	○	○	S	9			
SB19	1627	20C7	SD1420-11a層	SD1420-9a層								54	-0.366		A	A	○		N127E	32			
SB19	1629	20C3	SD1420-9a層	SD1420-9a層以降	楕円形	U字状	急斜度	19	15			39	-0.263		A	A	○	○	0	0			
SB19	1631	20B21,20C1	SD1420-9a層	SD1420-9a層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	40	(20)			48	-0.053		A	A	○	○	N104E	45	石錐・根絡み		
SB20	1604	20B19	SD1420-6a層	SD1420-6b層以降								47	-0.22		A		○	○	N140W	78			
SB20	1608	20B13	SD1420-9a層	SD1420-6b層以降								43	-0.12		A	C	○	○	N172W	35			
SB20	1618	20B22	SD1420-9a層	SD1420-6b層以降	楕円形	U字状	垂直	10	6			36	-0.09		A	B	○	○	0	0			
SB20	1636	20B17	SD1420-9a層	SD1420-9a層								32	-0.048		A	C	○	○	N160W	60	クリ・クルミ		
SB20	1646	20C2·3	SD1420-9b層	SD1420-9b層以降	円形	袋状	急斜度	(28)	(24)			32	-0.139		A	A	○	○	0	0			
SB20	1647	20B23	SD1420-6b層	SD1420-6b層以降	不整形	弧状	緩やか	72	26			11	0.118		A		○	×	N166W	90			
SB20	1662	20B23	SD1420-6b層	SD1420-6b層以降								40	-0.151		A	A	○	○	N130W	10			
SB20	1681	20B14	SD1420-9a層	SD1420-9a層以降	楕円形	袋状	垂直	22	19			38	-0.168		A	A	○	○	0	0	根絡み		
SB21	1718	23B18	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降	楕円形	U字状	垂直	17	10			68	-0.68		A	B	○	○	0	0			
SB21	1719	23B14	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	(18)	(14)			79	-0.925		A	B	○	○	0	0			
SB21	1720	23B14	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	(18)	(14)			52	-0.675		A	B	○	○	N30E	8			
SB21	1721	23B13	SD1420-2c層	SD1420-2b～2a層	楕円形	漏斗状	急斜度	20	17			90	-0.843		A	B	○	○	N14W	5			
SB21	1725	23B8·13	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降	楕円形	U字状	急斜度	35	27			67	-0.78				○	○	N157W	14		>P1736	
SB21	1726	23B8·13	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降	円形	V字状	急斜度	18	18			109	-1.05		A	B	○	○	N125W	13		<P1736	
SB21	1736	23B13	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降	楕円形	U字状	急斜度	35	27			74	-0.720		A	B	○	○	S	10		P1725> P1736> P1726	
SB21	1740	23B15	SD1420-2c層	SD1420-2b層以降	楕円形	U字状	垂直	25	19			60	-0.55		A	A	○	○	0	0			
SB21	1741	23B15·10	SD1420-2c層	SD1420-2b層以降	楕円形	U字状	垂直	23	15			88	-0.834		A	B	○		N40E	3	土器		
SB21	1743	23B10	SD1420-2c層	SD1420-2b層以降	円形	U字状	急斜度	16	15			65	-0.700		A	B	○	×	N173E	4			
SB22	1723	23B24	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降	円形	U字状	垂直	26	25			64	-0.75		A	A	○	○	N115W	9			
SB22	1727	23C3	SD1420-2d層	SD1420-2d層以降	円形	U字状	急斜度	25	23			36	-0.68		A	A	○	○	N155W	17			
SB22	1728	23C4	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降	楕円形	U字状	垂直	60	33			78	-1.02		A	A	○	○	N160W	6	根絡み		
SB22	1729	23C5	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降								67	-1.045		A	B	○	○	N76W	26			
SB22	1739	23B20	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降	楕円形	U字状	急斜度	37	(30)			64	-0.745				○	○	0	0			
SB22	1750	23C8	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降								61	-1.33			C	○		N166W	45			
SB22	1811A	24B21	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降	不整形	U字状	垂直	30	28			68	-0.79		A	A	○	○	N164E	4			
SB22	1846	24B16	SD1420-2c層	SD1420-2c～2a層	楕円形	U字状	垂直	50	24			99	-0.97		A	A	○	○	0	0	土器	<SK1751	
SB23	1810	24B19	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降	楕円形	U字状	急斜度	32	23			70	-0.692		A	A	○	○	N145W	5			
SB23	1816	24B14·15	SD1420-2c層	SD1420-2b層以降	楕円形	階段状	急斜度	36	28			93	-0.72		A	A	○	○	N	45	根絡み		
SB23	1830	24B23	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降	楕円形	袋状	急斜度	24	20			64	-0.850		A		○	○	N15E	34			
SB23	1831	24B15·20 25B11·16	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降								68	-0.62		A	A	○	○	N107E	14			
SB23	1832	24B20 25B16	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降	円形	U字状	急斜度	12	12			71	-1.128		A	A	○	○	N9E	28			
SB23	1833	24B24	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降	円形	U字状	急斜度	30	30			52	-0.98		A		○	○	N104E	32			
SB24	2040	23F16	SD1420-E6c②層	SD1420-E6c②層以降	楕円形	U字状	急斜度	34	17			51	0.21		A	A	○	○	N83W	17	根絡み		
SB24	2045	23F16	SD1420-E6c②層	SD1420-E6c②層以降	楕円形	U字状	垂直	19	16			70	0.29		A	A	○	○	N60W	18			
SB24	2046	22F19·20	SD1420-E6c②層	SD1420-E6c②層	円形	U字状	急斜度	25	24			43	0.37		A	A	○	○	0	0	根絡み・礎板		
SB24	2059	23F12	SD1420-E6c②層	SD1420-E6c②層以降	円形	U字状	急斜度	29	27			63	0.13		A	A	○	○	N140W	17			
SB24	2063	23F18	SD1420-E6c③層	SD1420-E6c③層以降	楕円形	U字状	垂直	(28)	(22)			56	0.26		A	A	○	○	N87W	12	根絡み		
SB24	2080	23F13	SD1420-E5c③層	SD1420-E5c③層以降	円形	U字状	垂直	(25)	(24)			74	0.15		A	A	○	○	0	0	根絡み		
SB24	2087	23F21	SD1420-E6c②層	SD1420-E6c②層以降	楕円形	U字状	垂直	32	25			60	0.29		A	A	○	○	0	0			
SB24	2416	22F25	SD1420-E9層	SD1420-E9層以降	楕円形	U字状	垂直	(24)	(14)			45	0.44		A	A	○	○	0	0			
SB25	2072	23F6	SD1420-E8層	SD1420-E9層以降	円形	漏斗状	急斜度	(26)	(24)			64	0.04		A	A	○	○	N75W	11			

遺構観察表（7）掘立柱建物（P）

（ ）：推定値

掘立柱建物	遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	覆土			柱根				出土遺物	切り合い	備考
					平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度		堆積形状	覆土	掘形と柱根の関係	柱根の有無	掘形の有無	方位	傾斜角度			
SB25	2083	23F12	SD1420-E6c①層	SD1420-E6c③層	楕円形	漏斗状	急斜度	(32)	(24)			79	0.09		A	B	○	○	N67W	13			
SB25	2094	23F11	SD1420-E10層	SD1420-E10層以降	円形	U字状	急斜度	18	16			65	0.05		A	B	○	○	N85W	12			
SB25	2347	23F7･12	SD1420-E10層	SD1420-E10層以降	楕円形	U字状	垂直	17	14			55	0.17		A	A	○	○	N32W	4			
SB25	2368	23F11	SD1420-E11層	SD1420-E11層以降								63	0		A	A	○	○	N72W	27			
SB25	2417	23F7	SD1420-E12a層	SD1420-E12a層以降	楕円形	袋状	急斜度	24	18			64	-0.13		A	A	○	○	N75W	23			
SB26	2060	23F13･14	SD1420-E6c③層	SD1420-E6c③層以降	円形	袋状	急斜度	(45)	(43)			54	0.33		A	A	○	○	N115W	56	根絡み		
SB26	2070A	23F7･12	SD1420-E8層	SD1420-E8層以降	円形	漏斗状	急斜度	26	25			60	0.12		A	B	○	○	N70W	2			
SB26	2070B	23F7･12	SD1420-E8層	SD1420-E8層以降	円形	漏斗状	急斜度	26	25			31	0.41		A		○		N40E	20			
SB26	2071	23F10･15	SD1420-E8層	SD1420-E7層以降	楕円形	台形状	緩やか	(84)	(29)			32	0.44		A		○	○	N112W	73			
SB26	2074	23E25,23F5	SD1420-E7層	SD1420-E6c③層	不整形	漏斗状	緩やか	108	26			56	0.09		D	A	○	○	N110W	70	土器		
SB26	2076	23F12	SD1420-E6c②層	SD1420-E6c②層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	52	45	(14)	(13)	40	0.5	F	E		×				土器・粘土		
SB26	2089	23F17	SD1420-E10層	SD1420-E6c③層以降	楕円形	袋状	垂直	(39)	(32)			59	0.27		A	A	○	○	0	0	根絡み		
SB26	2374	24F1･6	SD1420-E6c①層	SD1420-E6c①層以降	方形	U字状	急斜度	(53)	52			70	0.09		A	A	○	○	N77W	21	根絡み		
SB26	2379	23F8	SD1420-E15層	SD1420-E14a層以降	楕円形	半円状	緩やか	(42)	(36)			28	0.06		A	A	○	○	N75W	22			
SB27	2386	24F3	SD1420-E12a層	SD1420-E12a層以降	楕円形	U字状	急斜度	23	20			60	-0.18		A	B	○	○	N87W	30	根絡み		
SB27	2389	24F5	SD1420-E12a層	SD1420-E12a層以降	楕円形	袋状	急斜度	36	31			72.5	-0.36		A	A	○	○	N70W	11	根絡み		
SB27	2399	24F10	SD1420-E12a層	SD1420-E12a層以降								60	-0.24				○	○	N90W	13	根絡み		
SB27	2401	24F8	SD1420-E12a層	SD1420-E12a層以降	楕円形	袋状	急斜度	22	12			62	-0.11		A	A	○	○	N82W	34	根絡み		
SB27	2403	24E25	SD1420-E10層	SD1420-E12層以降	円形	袋状	急斜度	(16)	(14)			73	-0.3		A	A	○	○	N115W	12			
SB27	2405	24E23,24F3	SD1420-E11層	SD1420-E12層以降	楕円形	U字状	急斜度	25	18			51	-0.31		A	A	○	○	N70W	11			
SB28	1936	16F1	Ⅴ層	S1層	楕円形	U字状	急斜度	(29)	19			86	0.52		A	A	○	○	N108E	9			
SB28	1940	15F10	Ⅵ層	S4層以降	方形	U字状	垂直	25	24			80	0.57		A	A	○	○	0	0			
SB28	1979	16F11	Ⅵ層	S2層	楕円形	U字状	急斜度	(28)	(24)			66	0.71				○	○	N46E	41			
SB28	1988	16F7	S1層	S2～S1層	楕円形	袋状	急斜度	(46)	(37)			83	0.52		A	A	○	○	N85E	29			
SB28	1989	16F11		S4層以降	楕円形	U字状	垂直	31	(24)			78	0.38		A	A	○	○	N20E	25			
SB28	2195	16F2	Ⅶd層		円形	V字状	急斜度	23	22			33	0.93		A	A	○	○	0	0			
SB28	2210	15E20	S4層	S4層以降								29	0.95		A	A	○	○	N12W	21			
SB29	1935	16F1	Ⅴ層	S4層以降	円形	U字状	垂直	16	15			41	0.94		A	A	○	○	0	0			
SB29	1937	16F2	Ⅴ層	S4層以降	楕円形	U字状	垂直	39	25			86	0.47		A	A	○	○	N40W	10	根絡み		
SB29	1939	15F10･15	Ⅴ層	S3層以降	楕円形	U字状	急斜度	(47)	(36)			75	0.62		A	A	○	○	0	0	根絡み		
SB29	1957	16E22,16F2	K2層	S2層以降	楕円形	U字状	急斜度	27	22			42	0.87		A	B	○	○	N41W	8			
SB29	2014	16F8	K1層	S4層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	25	20			45	0.84		A	B	○	○	N57W	5			
SB29	2194	16F7	S4～S3層	S3層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	25	19			42.5	0.9		A	A	○	○	0	0			
SB29	2199	16F2	S5層	S5層以降	円形	半円状	緩やか	20	20			10	1.16		A	A	○					〈P2195	
SB29	2201	15F10	S1層	S1層	円形	U字状	垂直	(16)	(15)			52	0.91		A	A	○	○	0	0			
SB29	2525	15F15,16F11	K3層	S4層以降	円形	U字状	急斜度	26	(24)			43	0.88		A		○	○	N47W	17			
SB30	1942	15F17	Ⅴ層	S3層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	33	27			85	0.58		A	B	○	○	0	0			
SB30	1943	15F22	Ⅴ層	S4層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	41	36			91	0.45		A	A	○	○	N10E	3			
SB30	1944	15F16･21	Ⅴ層	S2～S1層	楕円形	漏斗状	垂直	35	(23)			93	0.47		A	B	○	○	0	0	土器・両極石器		
SB30	1946	15F6･7	Ⅵ層	S2～S1層	楕円形	U字状	垂直	(30)	25			77	0.68		A	A	○	○	0	0			
SB30	1955	14F10,15F6	Ⅴ層	S3層以降	円形	U字状	垂直	27	25			77	0.64		A	A	○	○	0	0			
SB30	1976	14F15	S3層									81	0.59		A		○	○	0	0	土器		
SB30	9833	15G2											0.767				○						98年度用水路立会い、旧柱№33
SB31	1941	15F13･14	Ⅵ層	S4層以降	円形	袋状	垂直	46	(42)			96	0.42		A	A	○	○	0	0			
SB31	1945	15F21	Ⅵ層	S4層以降	楕円形	U字状	急斜度	(51)	(38)			110	0.21		A	A	○	○	N41W	5			
SB31	1951	15F7	S1層	S4層以降	楕円形	U字状	急斜度	(49)	(41)			73	0.62		A	A	○	○	N57W	5			
SB31	2292	15F8	Ⅴ層	S4層以降	方形	階段状	急斜度	52	48			92	0.47		A	A	○	○	0	0	土器・根絡み		

遺構観察表（8）掘立柱建物（P）

（ ）：推定値

掘立柱建物	遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	覆土			柱根				出土遺物	切り合い	備考
					平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度		堆積形状	覆土	掘形と柱根の関係	柱根の有無	掘形の有無	方位	傾斜角度			
SB31	2506	15F22	Ⅵ層	S4層以降	楕円形	階段状	急斜度	（56）	（40）			103	0.26		A	A	○	○	0	0			
SB31	9831	15G1											0.347				○						98年度用水路立会い、旧柱№31
SB32	1948	14F13	Ⅴ層	S3層以降	楕円形	階段状	急斜度	85	48			127	-0.1		A	A	○	○	N126W	4	土器	＞SC2225	
SB32	1964	14F18	Ⅵ層	S4層以降	円形	U字状	急斜度	24	20			63	0.75		A	A	○	○	N97E	10	土器・礎板・根絡み		
SB32	1978	14F5	Ⅵ層	S4層以降	楕円形	階段状	急斜度	39	27			99	0.32				○	○	N130E	6			
SB32	2001	14F7･8	S1層									72	0.49		A	A	○	○	N50E	8	土器	＜SK2257	
SB32	2226	14F14	Ⅵ層		円形	U字状	急斜度	（30）	（25）			77	0.51		A	A	○	○	0	0			
SB32	2248	14F5･10	Ⅵ層	S4層以降	円形	U字状	垂直	（39）	（36）			97	0.43		A	A	○	○	N130E	4			
SB32	2338	14F17	S5層		楕円形	U字状	垂直	38	30			55	0.64		A	A	○	○	0	0			
SB32	2421	14F12･17	D1層	S3層以降	楕円形	U字状	垂直	31	26			79	0.37		A	A	○	○	0	0			
SB32	2439	14E24,14F4	S5層		楕円形	階段状	急斜度	58	47			102	0.21		A	A	○	○	N166W	9			
SB33	1953	15F9	Ⅵ層	S1層	楕円形	U字状	急斜度	14	11			46	0.9		A	B	○	○	N60W	12			
SB33	2006	16F1	Ⅶd層									39	0.77		A	A	○	○	0	0			
SB33	2186	15F9	Ⅶd層	S4層以降	円形	U字状	垂直	23	23			52	0.79		A	A	○	○	N40W	8	土器		
SB33	2193	15E25	Ⅶd層		楕円形			24	20								○						水害により柱根等を滅失
SB33	2198	15F10	Ⅵ層	S1層	楕円形	U字状	急斜度	56	21			62	0.74		A	A	○	○	N28W	29			
SB33	2208	15E25	Ⅶd層		楕円形			29	25								○						水害により柱根等を滅失
SB34	25	16E16	Ⅴ層									47	0.807				○		0	0			暗渠工事で出土
SB34	26	15E20	Ⅴ層									74	0.659				○		S	90			暗渠工事で出土
SB34	1934	16E21	Ⅵ層									42	0.3		A	A	○	○	N166E	36			
SB34	1938	15F5･10	Ⅵ層	S1層	円形	U字状	急斜度	16	14			39	0.93		A	A	○	○	N22W	10			
SB34	1952	15F4	S1層	S3層以降	円形	U字状	垂直	11	10			42	0.9		A	B	○	○	0	0			
SB34	2010	15F4	Ⅵ層	S3層以降	楕円形	U字状	垂直	15	（14）			51	0.81		A	A	○	○	N17E	8			
SB35	2009	15E24	S1層	S3層以降	楕円形	U字状	急斜度	27	19			54	0.76		A	A	○	○	N140E	23			
SB35	2011	15F5	K2層	S2～S1層	楕円形	U字状	急斜度	29	19			54	0.80		A	A	○	○	N175E	26			
SB35	2202	15F4	S5層		円形	漏斗状	急斜度	22	22			31	0.87		A	B	○	○	N70W	16			
SB35	2205	16E21	Ⅵ層	S1層								43	0.81		A	A	○	○	N170W	46			
SB36	1852	10F11	Ⅵ層	S3層以降	不整形	袋状	垂直	53	（46）			97	0.42		H	A	○	○	0	0	土器		
SB36	1858	10F17	Ⅵ層	S3層以降	不整形	U字状	垂直	55	48			76	0.64		A	A	○	○	0	0			
SB36	1860	9F20	Ⅵ層	S4層以降	円形	U字状	急斜度	（74）	（71）			73	0.66		A	A	○	○	0	0	土器		
SB36	9802	9G5															○						98年度用水路立会い、旧柱№2、柱根2本
SB36	9803	10G1･6											0.785				○						98年度用水路立会い、旧柱№3
SB36	9804	10G2															○						98年度用水路立会い、旧柱№4
SB36	9842	9G10,10G6															○						98年度用水路立会い、旧柱№42、出土位置は不明。9G～10Gの範囲に存在する
SB37	710	9E13･18		S2～S1層	不整形	U字状	急斜度	100	50	（32）	（25）	60	0.88	A	E･D		×				土器・粘土・漆糸・クリ・トチ・クルミ		底面まで完掘していない。覆土下部に堅果類多数
SB37	716	9E14･15	S4層	S2～S1層	楕円形	V字状	急斜度	（60）	（54）	（40）	（24）	47	0.85	A	E		×				土器・不定形石器・クルミ		底面まで完掘していない
SB37	852	9E14	Ⅴ層		不整形	漏斗状	急斜度	40	（29）			114	0.22		H	B	○	○	0	0	土器・根絡み		
SB37	1853	9E23	Ⅴ層	S4層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	39	25			122	0.01		H	B	○	○	0	0			
SB37	1854	9E24	Ⅴ層	S4層以降	不整形	漏斗状	急斜度	51	46			116	0.09		H	A	○	○	N60W	5	根絡み		
SB37	1855	9E25	Ⅴ層	S3層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	（36）	（32）			91	0.29		A	B	○	○	N22E	10			
SB37	2103	9F4	Ⅶd層		楕円形	U字状	急斜度	24	19	（14）	（12）	18	0.84	A	D		×						堅果類出土
SB37	2105	9F4	S4層	S4層以降	楕円形	U字状	垂直	（20）	（12）			36	0.95		A	A	○	○	0	0			
SB37	2113	9F5	S1層	S1層	楕円形	漏斗状	急斜度	（22）	（21）			54	0.77		A	A	○	○	0	0			
SB38	1862	10F5	Ⅴ層	S4層以降	不整形	U字状	急斜度	（33）	（24）			114	0.26		H	A	○	○	N31E	9			

遺構観察表（9）掘立柱建物（P）

（ ）：推定値

掘立柱建物	遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	覆土			柱根				出土遺物	切り合い	備考
					平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度		堆積形状	覆土	掘形と柱根の関係	柱根の有無	掘形の有無	方位	傾斜角度			
SB38	1890	11E21	Ⅵ層	S4～S2層	楕円形	U字状	急斜度	36	16			143	-0.21		E	A	○	○	N100E	4			
SB38	1891	11E21	Ⅵ層	S4～S2層	不整形	漏斗状	急斜度	49	22			129	-0.04		H	B	○	○	N89E	8	土器		
SB38	1892	11F7	S1層	S4層以降	楕円形	U字状	急斜度	(24)	(20)			98	0.32		A		○	○	N63E	8			
SB38	1894	11F11	Ⅵ層									48	0.9		A	A	○	○	N60E	26			
SB38	2442	11F11	D4層		円形	袋状	垂直	18	16	(16)	(15)	18	1.11	A	E		×						
SB38	2505	11F6	Ⅵ層	S3層以降	楕円形	U字状	急斜度	32	(23)			115	0.3		H	A	○	○	N19E	8			
SB38	2523	10F10,11F6	Ⅵ層	S4層以降	不整形	U字状	急斜度	(31)	(18)			89	0.46		H	A	○	○	N21E	9			
SB39	1851	9F20	Ⅵ層	S2～S1層	楕円形	U字状	急斜度	23	14			72	0.71		A	A	○	○	N112W	7			
SB39	1908	9F19	S2～S1層	S4層以降	楕円形	U字状	垂直	(23)	(21)			75	0.65		A	A	○	○	0	0			
SB39	1910	9F18	D2層		楕円形	U字状	急斜度	(16)	(15)			50	0.7		A	A	○	○	N112W	11			
SB39	9801	9G4															○						98年度用水路立会い、旧柱No.1
SB39	9806	9G5											0.855				○						98年度用水路立会い、旧柱No.6
SB40	20	10E16	Ⅴ層									88	0.584				○		0	0			暗渠工事で出土
SB40	21	10E17･18	Ⅴ層		楕円形			25	16			43	0.747				○						暗渠工事で出土
SB40	790	10E12･17	Ⅶ層		楕円形	漏斗状	急斜度	36	24			100	0.244	H	A		○	○	N72E	13			
SB40	1856	10F1	Ⅴ層	S4層以降	楕円形	U字状	急斜度	(26)	(23)			98	0.34		H	A	○	○	N60E	7			
SB40	1857	10F2	Ⅴ層	S2～S1層	不整形	U字状	急斜度	(24)	20			98	0.32		H	A	○	○	N53W	5			
SB40	2109	10F3	K3層	S3層以降	円形	U字状	急斜度	(38)	(35)			79	0.44		A	A	○	○	N60E	19			
SB40	2115	10F7	D2層		楕円形	U字状	垂直	27	24			42	0.76		A	A	○	○	0	0			
SB40	2118	10F6	Ⅵ層	S4層以降	楕円形	U字状	急斜度	(35)	(21)	12	(8)	42	0.94	F	A		×						
SB41	1949	13F14	Ⅵ層	S3層以降	楕円形	V字状	急斜度	(45)	(36)			60	0.79		A	A	○	○	N53W	8			
SB41	1950	13F23･24	S5層	S4層以降	楕円形	U字状	垂直	20	17			55	0.84		A	A	○	○	0	0			
SB41	1980	13F17	S4層	S4～S3層	楕円形	U字状	急斜度	(31)	(26)			61	0.78		H	A	○	○	N53W	8	土器		
SB41	2277	13F8	K4層	S4層以降	円形	U字状	垂直	33	30			42	0.83		A	A	○	○	0	0			
SB42	1947	14F3	Ⅵ層	S2～S1層	楕円形	U字状	急斜度	41	25			44	0.89		A	A	○	○	N155W	57			
SB42	1974	14F4･5	S4層		楕円形	漏斗状	急斜度	(38)	(24)			44	0.86		A	A	○	○	N157W	38			
SB42	1999	14F8･9･13･14	S1層	S1層	方形	U字状	急斜度	23	19			48	0.87		A	A	○	○	N25E	10			
SB42	2280	14E24	S5層		不整形	U字状	垂直	20	18			38	0.8		A	A	○	○	0	0			
SB42	2283	14F8	K4層	S4層以降	楕円形	U字状	垂直	16	14			39.5	0.94		A	A	○	○	0	0			
SB42	2285	14F9	S3層	S3層	楕円形	弧状	緩やか	22	18	10	10	4	1.18				×		N74W				
SB43	1896	11F18	Ⅴ層	S2～S1層	楕円形	U字状	急斜度	35	29			102	0.41		A	A	○	○	N65E	20			
SB43	1897	11F19	Ⅴ層	S2～S1層	不整形	漏斗状	急斜度	39	24			132	0.09		H	A	○	○	N65E	9	土器		
SB43	2451	11F19･24	S3層	S3層以降	円形	U字状	急斜度	(27)	22.5			92	0.4		A	A	○	○	N73E	12	磨石類・粘土・根絡み		粘土塊、根固め石含む
SB43	9812	11G3･4											0.126				○						98年度用水路立会い、旧柱No.12
SB43	9838	11G7															○						98年度用水路立会い、旧柱No.38だが、位置は推定となっている。また、柱根の有無は不明
SB44	1861	10F19	Ⅴ層	S3層以降	楕円形	U字状	垂直	(22)	20			39	0.99		A	A	○	○	0	0			
SB44	1863	10F18･19	Ⅴ層	S4層以降	円形	U字状	急斜度	(43)	(43)			60	0.81		A	A	○	○	0	0			
SB44	1888	10F20	S1層	S4層以降	楕円形	U字状	急斜度	47	28			44	0.89		A	A	○	○	N1E	7	土器		
SB44	9805	10G3											1.535				○						98年度用水路立会い、旧柱No.5
SB44	9808	10G9											0.795				○						98年度用水路立会い、旧柱No.8
SB44	9810	10G10											0.885				○						98年度用水路立会い、旧柱No.10
SB45	1911	9F4	S3層									44	0.700			C	○	×	N25E	2			
SB45	2097	9F10	K4層	S4層以降								74	0.54		A	A	○	○	0	0			
SB45	2098	9F25	S4層	S4層以降	楕円形	U字状	垂直	16	(13)			59	0.61		A	B	○	○	N49E	4			
SB45	2110	9F10	Ⅴ層	S5～S4層	不整形	漏斗状	急斜度	(26)	(25)			73	0.52		A	A	○	○	0	0	根絡み		

遺構観察表（10）掘立柱建物（P）

（ ）：推定値

掘立柱建物	遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	覆土			柱根				出土遺物	切り合い	備考
					平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度		堆積形状	覆土	掘形と柱根の関係	柱根の有無	掘形の有無	方位	傾斜角度			
SB45	2111	10F1･6	K4層	S4層以降	円形	漏斗状	垂直	17	(16)			38	0.78		A	B	○	○	N23W	5			
SB46	2418	25F4	SD1420-E8層	SD1420-E8層以降	円形	U字状	垂直	9	8			64	-0.12		A	A	○	○	N99E	8			
SB46	2420	25F9	SD1420-E8層	SD1420-E8層以降	円形	U字状	垂直	(13)	(12)			58	-0.03		A	A	○	○	0	0			
SB46	2461	25F9	SD1420-E8層									45	0.11			C	○	○	N127E	7			
SB46	2462	25F4	SD1420-E8層	SD1420-E9層以降	円形	漏斗状	急斜度	(20)	(18)			57	-0.13		A	A	○	○	N9W	4			
SB46	2463	25F4	SD1420-E8層	SD1420-E8層以降	円形	漏斗状	急斜度	(14)	(13)			34	0.13		A	A	○	○	N81E	3			
SB46	2474	25F10	SD1420-E10層	SD1420-E10層以降	楕円形	U字状	垂直	16	10			16	0.22		A	A	○	○	0	0			
SB47	2470	25F1	SD1420-E8層	SD1420-E8層以降	円形	U字状	急斜度	10	9			70	-0.16		A	B	○	○	N19W	5			
SB47	2471	25F1	SD1420-E8層	SD1420-E8層以降	楕円形	U字状	急斜度	(13)	(8)			35.5	0.16		A	A	○	○	N23W	5			
SB47	2472	25F1	SD1420-E14a層	SD1420-E14a層以降	楕円形	U字状	垂直	12	10			33	-0.03		A	A	○	○	0	0			
SB47	2473	25E23	SD1420-E13a層	SD1420-E13a層以降	楕円形	U字状	急斜度	16	12			21	0.05		A	A	○	○	N63W	23			
SB47	2475	24F5	SD1420-E8層	SD1420-E8層以降	楕円形	U字状	急斜度	22	20			35	0.14		A	A	○	○	N143W	3			
SB47	2479	25F3	SD1420-E10層	SD1420-E10層以降	楕円形	U字状	急斜度	(24)	(16)			37	0.13		A	B	○	○	N103W	12			
SB47	2482	25F3	SD1420-E8層	SD1420-E8層以降	楕円形	袋状	急斜度	22	(16)			28	0.18		A	A	○	○	N157W	43			
SB48	2310	12F16	K4層	S4層以降	円形	袋状	急斜度	25	22			77	0.53		H	A	○	○	N101E	29			
SB48	2460	11F20	K2層	S2～S1層	不整形	U字状	急斜度	(39)	(30)			78	0.57		E	A	○	○	N129E	19			
SB48	2524	12F21	S3層	S3層以降	円形	U字状	急斜度	30	29			65	0.66		A	A	○	○	N73E	36	土器		
SB48	9813	11G4											0.497				○						98年度用水路立会い、旧柱№13
SB48	9835	11G10,12G6											0.637				○						98年度用水路立会い、当初柱№14であったが、取り上げ時に柱№35とされた
SB48	9836	11G10											0.642				○						98年度用水路立会い、旧柱№36
SB49	1466	20B2･3	Ⅶ層										0.452				○	×	N3W	90			西側暗渠
SB49	1467	20B3	Ⅶ層										0.141				○	×	N145E	90			西側暗渠。P1466の根絡み
SB49	1468	20B3	Ⅶ層										0.164				○	×	N113W	20			西側暗渠。P1466の根絡み
SB49	1469	20B3･4	Ⅶ層										0.13				○	×	N173W	40			西側暗渠
SB49	1601	20B8	SD1420-4a層	SD1420-4a層以降								50	-0.01		A	A	○	○	N40W	23	土器・根絡み		根絡みあり
SB49	1602	20B14	SD1420-9a層	SD1420-9a層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	(32)	(26)	(10)	(9)	42	-0.21		H		×	○	N30W	24	土器・根絡み		P1675と同一の可能性あり
SB49	1603	20B20	SD1420-6b層	SD1420-6b層以降	楕円形	半円状	急斜度	25	22	16	(15)	12	0.148	A	E		×				土器		
SB49	1607	20B19	SD1420-6b層	SD1420-6b層以降	不整形	漏斗状	急斜度	47	30			32	-0.122		A	A	○	○	N52W	21	土器		
SB49	1609A	20B13	SD1420-9a層	SD1420-9a層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	25	20			40	-0.124		A	A	○	○	N28W	19		〈B1609	
SB49	1656	20B9	SD1420-11a層	SD1420-11a層以降	不整形	U字状	急斜度	25	24			28	-0.078		A	A	○	○	N131E	5			
SB49	1660	20B15	SD1420-6b層	SD1420-6b層以降	楕円形	階段状	急斜度	34	26			59	-0.45		D	A	○	○	N20E	12			
SB49	1675	20B14	SD1420-9a層	SD1420-9a層以降								38	-0.27		H		○	○	N27W	85			P1602と同一の可能性あり
SB50	1977	15F7	S1層	S4層以降	楕円形	U字状	急斜度	(66)	46			57	0.77	A	E		○	○	0	0	土器		
SB50	1985	14F14	S1層	S4層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	45	40	26	(18)	55	0.8	A	E		×						
SB50	1998	14F20	K2層	S4層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	52	36	16	12	58	0.75	A	E		×				土器・粘土		
SB50	2179	14F19･20	S1層	S4層以降	楕円形	V字状	急斜度	45	33	26	18	33	0.97	A	E		×				土器		
SB50	2189	15F1	S4～S3層		楕円形	漏斗状	急斜度	32	27	10	10	32	0.967				×						
SB50	2220	14F18	K4層	S4層以降	円形	漏斗状	急斜度	47	(41)	28	(25)	48	0.86	A	D		×						
SB50	2337	14F24	K5層		方形	階段状	急斜度	(24)	(21)	(20)	(17)	31	0.78	A	D								
SB50	2511	14F5,15F1	Ⅶ層		楕円形			45	31								×						
SB51	2369	23F10	SD1420-E12a層	SD1420-E12a層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	14	10	(5)	(4)	21	0.36	A	C		×						
SB51	2373	23F14	SD1420-E12a層	SD1420-E12a層	円形	漏斗状	急斜度	20	19	7	(5)	21	0.49	D	A		×						
SB51	2376	23F4	SD1420-E13a層	SD1420-E13a層以降	楕円形	袋状	急斜度	(25)	(16)	(8)	(5)	29	0.16	D	A		×						
SB51	2378	23F15	SD1420-E10層	SD1420-E10層以降	楕円形	U字状	急斜度	(23)	(17)	(12)	(7)	22	0.5	D	A		×						
SB51	2390	23F15	SD1420-E15層	SD1420-E15層以降	楕円形	台形状	急斜度	15	12	7	6	21.5	0.41	F	A		×				クリ		

遺構観察表（11）掘立柱建物（P）

（ ）：推定値

掘立柱建物	遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	覆土			柱根				出土遺物	切り合い	備考
					平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度		堆積形状	覆土	掘形と柱根の関係	柱根の有無	掘形の有無	方位	傾斜角度			
SB52	2357	23F14	SD1420-E9c層									42	0.226				○		0	0			
SB52	2375	23F9	SD1420-E12a層	SD1420-E13a～12a層	円形	袋状	垂直	(6)	(5)	(6)	(5)	25	0.17	D	A		×						
SB52	2391	23F15	SD1420-E15層	SD1420-E15層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	22	17			42	-0.07		A	A	○	○	N60W	11			
SB52	2393	23F5	SD1420-E15層	SD1420-E15層以降	楕円形	袋状	急斜度	26	21	10	(10)	30	0.19	D	A		×						
SB52	2400	24F6	SD1420-E15層	SD1420-E15層以降	楕円形	U字状	急斜度	(25)	20			42	0.12		A	A	○	○	0	0			
SB53	2364	24F5	SD1420-E10層	SD1420-E10層以降	楕円形	U字状	垂直	11	(7)			38	0.07		A	A	○	○	0	0			
SB53	2385	24F8	SD1420-E10層	SD1420-E10層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	19	17			60	-0.065		A	A	○	○	N93W	2			
SB53	2407	24F10	SD1420-E14a層	SD1420-E16a層以降	楕円形	U字状	急斜度	(14)	(11)			32.5	-0.05		A	A	○	○	N121W	17			
SB54	1913	9F9	S4層	S4層以降	不整形	漏斗状	急斜度	(30)	26	(10)	10	81	0.51	B	E		×	○	0	0	根絡み・礫		礫・木製品出土
SB54	2108	9F5	S2～S1層	S2～S1層	楕円形	U字状	垂直	20	14	6	5	65	0.64	B	E		×						
SB54	2112	9F5·10	S2～S1層	S3層以降	方形	V字状	急斜度	(39)	(34)	(24)	(9)	46	0.88	F	E		×				土器		
SB55	1777	24E13·18	SD1420-E5a層	SD1420-E5a層								83	-0.580				○	○	N12W	3			
SB55	1791	24E15	SD1420-E5c層	SD1420-E5c層								145	-1.05				○	○	N32W	12			
SB55	1823	24E20	SD1420-6c層	SD1420-6c層	楕円形	漏斗状	急斜度	(28)	(16)			70	-0.26				○	○	0	0			
SB55	1825	24E18·23	SD1420-6c層	SD1420-6c層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	20	18	(11)	(10)	52	-0.2				×						
SB56	1793	24E14	SD1420-E5c層									52	-0.171				○	○	N99E	24			
SB56	1804	24E15	SD1420-E5c層	SD1420-E5c層								35	0.08				○	○	N120E	13			
SB56	1824	24E19	SD1420-6c層	SD1420-6c層以降	円形	漏斗状	急斜度	(12)	(11)			34	0.1				○	○	N12E	15			
SB57	1811B	24B21	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降								7	-0.27			C	○	×	0	0			
SB57	1847	24B21	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降	円形	U字状	垂直	(15)	(11)			20	-0.368		A	A	○	○	0	0			
SB57	1848	24B16	SD1420-2c層	SD1420-2c～2a層	楕円形	U字状	垂直	(12)	10	(4)	4	12	-0.33	A	D		×					<SK1751	
SB58	896	10A23	Ⅶd層		楕円形	U字状	急斜度	18	14			13	0.76		A	A	○	○	0	0			
SB58	897	10A23	SX51-2b層									36	0.663		A	A	○	○	0	0			
SB58	898	10A23·24 10B3·4	Ⅶd層		不整形			29	23							C	○						

遺構観察表（12）土坑（SK）

（ ）：推定値

遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	覆土		出土遺物	切り合い	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度		堆積形状	覆土			
121	9E18	S2層	S2層以降	楕円形	弧状	緩やか	50	36	30	16	10	1.339	G	E	土器		炭化物多量
717	9E14	S4層	S4層以降	楕円形	半円状	緩やか	59	51	40	35	20	1.13	A	A	土器・粘土・漆糸・クリ・トチ・クルミ		
733	5D7	Ⅶ層	S2層	楕円形	半円状	緩やか	106	(80)	49	(36)	40	1.07	G	I	クリ・トチ		底に黒褐色土あり。旧SK709
757	5E10,6E6	S2層	S2層	楕円形	台形状	急斜度	(73)	(67)	34	21	25	1.27	A	D	土器・クルミ・不定形石器		底面からクルミ多数出土
817	15E2·7	S1層	S2層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	113	57	21	12	55	0.85	C	E	クルミ		
851	15D5	S2層	S2層以降	楕円形	弧状	緩やか	51	45	26	25	9	1.3	A	I	土器・クルミ		底に黒褐色土あり、植物遺体を多量に含む
853	14E3	K4層	S4層以降	楕円形	弧状	緩やか	50	43	25	21	13	1.19	A	E			底に黒褐色土あり
854	14E15	K4層	S4層以降	楕円形	弧状	緩やか	73	64	31	28	21	1.14	G	D	クルミ		黒褐色土層からクルミ出土
873	15D25	K4層	S4層以降	円形	弧状	緩やか	62	60	44	34	11	1.246	D	A	粘土・クルミ		
874	15E8	S4層	S4～S3層	円形	弧状	緩やか	42	39	26	24	12	1.25	A	H			S3層期の噴砂が覆う
875	15D20	K4層		楕円形			42	38	23	20	5	1.305	A	A	クルミ	>P876	底面からクルミ出土
878	15D20·25	K4層	S2～S1層	楕円形	弧状	緩やか	59	48	45	34	16	1.251	A	D	クルミ		S3層期の噴砂を掘り込む。底に黒褐色土あり。
887	15E9·14	S4層	S4層以降	円形	弧状	急斜度	56	52	42	37	14	1.24	A	E	土器・クルミ		
893	15E5	K4層	S4層以降	円形	半円状	緩やか	(40)	(40)	(31)	(30)	9	1.277	A	D	クルミ		底に黒褐色土あり
899	16E1	K4層	S4層以降	円形	弧状	緩やか	82	81	61	48	13	1.241	A	D	クルミ		底に黒褐色土あり
900	16D21	K4層	S4層以降	円形	弧状	緩やか	38	35	23	20	2	1.385	A	B			底に黒褐色土あり
909	15D8·23	K4層	S2層以降	楕円形	台形状	急斜度	72	60	57	46	20	1.232	B	D	土器・クルミ・粘土		底に黒褐色土あり

遺構観察表（13）土坑（SK）

（ ）：推定値

遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	覆土		出土遺物	切り合い	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度		堆積形状	覆土			
910	15E6	K4層	S4層以降	楕円形	台形状	急斜度	62	46	34	25	19	1.162	B	D	土器・クルミ		底に黒褐色土あり
914	15E3	K4層	S4層	不整形	階段状	急斜度	104	92	86	56	55	0.7	C	H	土器・クリ・トチ・クルミ・漆糸	＜P828	クリ多量
941	16D20	K4層	S4層以降	円形	弧状	緩やか	53	47	32	28	15	1.221	A	D	土器・粘土・クルミ		底に黒褐色土あり
946	17E6	K4層	S4層以降	楕円形	台形状	垂直	52	44	28	25	30	0.868					
983	17B7·12	Ⅶd層		円形	弧状	緩やか	31	30	20	19	7	1.096	A	D			底に黒褐色土あり
1463	18D2	SD1420-9b層	SD1420-9b層以降	楕円形	弧状	緩やか	80	(45)	40	(25)	15	1.079	A	E	土器・磨石類・漆片・漆糸・クルミ		
1632	22C1·2	SD1420-1b層	SD1420-1b層以降	楕円形	台形状	急斜度	84	72	78	64	24	0.2	B	D			底に砂層・黒褐色土あり
1661	22B17	SD1420-2b層	SD1420-2b層以降	楕円形	台形状	急斜度	144	100	104	58	26	-0.66	A	H	土器・クリ・トチ・クルミ		
1678	22C4·5	SD1420-2a層	SD1420-1層以降	楕円形	箱状	垂直	105	(84)	93	(62)	27	-0.14	G	D	土器・クリ		
1691	22B19	SD1420-2a層	SD1420-2a層以降	楕円形	箱状	垂直	147	99	132	76	35	-0.63	G	D	土器・クリ・トチ・クルミ		
1696	22B6·1	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降	円形	弧状	緩やか	40	37	20	17	5	-0.123	D	B	粘土		底に黒褐色土あり
1701	22B2·7	SD1420-2d層	SD1420-2d層以降	円形	弧状	緩やか	40	34	28	15	5	-1.08	D	B	粘土		底に黒褐色土あり
1714	23B16·21	SD1420-1d層	SD1420-1d層以降	楕円形	半円状	急斜度	100	73	80	63	43	-0.541	A	D	土器・磨製石斧・クリ・トチ・クルミ		底に黒褐色土あり
1734	23B22,23C2	SD1420-2d層	SD1420-2c層以降	円形	弧状	緩やか	94	83	51	39	12	-0.27	A	D	クルミ		底に黒褐色土あり
1751	24B16·21	SD1420-1層	SD1420-1層	楕円形	半円状	急斜度	(140)	(106)	(110)	(90)	33	-0.17	A	D	土器・多面体敲石・玉類・クルミ		底に黒褐色土あり
1759	24B16	SD1420-1層	SD1420-1層	楕円形	V字状	急斜度	45	26	12	10	41	-0.32	A	D			トレンチにより削平
1760	24B17·18·22·23	SD1420-2a層	SD1420-2a層以降	楕円形	袋状	内傾	56	49	47	40	23	-0.16	B	D	土器・クルミ		底に黒褐色土あり
1763	24B11	SD1420-B9層	SD1420-B9層	楕円形	袋状	内傾	75	70	72	58	40	-0.192	B	D	土器・樹皮・クルミ	＞SX1717	底に黒褐色土あり
1764	24B7	SD1420-1層	SD1420-1層	楕円形	袋状	急斜度	115	72	75	44	36	-0.12	B	D	クルミ		底に黒褐色土あり
1765	24B12·17	SD1420-1層	SD1420-1層以降	楕円形	台形状	急斜度	145	88	135	76	18	-0.021	B	D	クルミ		底に黒褐色土あり
1766	24B13	SD1420-1層	SD1420-1層	楕円形	袋状	内傾	86	68	71	56	37	-0.12	B	D	木製品・漆片？・クリ・トチ・クルミ		底に黒褐色土あり
1770	24B10	SD1420-1層	SD1420-1層	円形	台形状	垂直	65	(45)	50	(36)	24	0.17	B	D	クルミ		底に黒褐色土あり
1774	24B10·15,25B6·11	SD1420-2b層	SD1420-2b層	楕円形	袋状	急斜度	114	(72)	95	(52)	25	0.15	B	D			底に黒褐色土あり
1781	24A22·23,24B2·3	SD1420-1層	SD1420-1層以降	楕円形	袋状	内傾	(100)	(78)	(80)	(60)	29	0.0	B	D	土器・クリ・クルミ		底に黒褐色土あり
1783	24B14	SD1420-B9層	SD1420-B9層	楕円形	半円状	急斜度	120	105	87	80	28	0.0	B	D	トチ・クルミ		底に黒褐色土あり
1784	24B18·23	SD1420-1層	SD1420-1層	円形	袋状	内傾	68	65	60	54	37	-0.294	B	D	クルミ		底に黒褐色土あり
1786	26B12	SD1420-2a層	SD1420-2a層以降	楕円形	弧状	緩やか	(120)	(80)			8	-0.097	B	D	土器・石器・クルミ		底に砂層・黒褐色土あり
1802	24B9·10·14·15	SD1420-1層	SD1420-1層	楕円形	台形状	急斜度	128	84	98	64	34	0.027	B	D	磨石類・クルミ		底に黒褐色土あり
1803	25B1	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降	楕円形	箱状	垂直	(80)	(72)	(60)	(56)	32	0.0	B	D	クルミ		底に黒褐色土あり
1807	24B19	SD1420-B9層	SD1420-B9層	楕円形	台形状	急斜度	143	80	115	69	32	0.05	B	D	土器・クルミ	＞SC1768	底に砂層・黒褐色土あり
1808	24B8·9	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降	円形	台形状	急斜度	80	80	72	71	15	-0.04	B	D	クルミ		底に黒褐色土あり
1818	25B6	SD1420-2b層	SD1420-2b層								14	0.20	B	D			底に黒褐色土あり
1820	24B22	SD1420-2b層	SD1420-2b層以降	円形	弧状	緩やか	50	45	33	32	8	-0.17	D	A			底に黒褐色土あり
1828	24B5	SD1420-2b層	SD1420-2b層以降	円形	弧状	緩やか	49	43	29	26	10	0.18	D	A	土器		底に黒褐色土あり
1872	9F20·25,10F16·21	S1層	S3層以降	楕円形	弧状	緩やか	161	136	142	97	18	1.23	A	E	土器		
1932	16E24	S1層	S1層	楕円形	弧状	緩やか	84	64	60	46	40	0.87	A	I	土器・両極石器・不定形石器・トチ・クリ・クルミ		底に黒褐色土あり
2015	21F19	SD1420-E4c層	SD1420-E4a層	楕円形	袋状	急斜度	105	95	99	83	53	0.25	G	D	トチ・クルミ		底に黒褐色土あり
2073	23F4	SD1420-E7層	SD1420-E7層以降	楕円形	弧状	緩やか	67	(39)	56	34	5	0.55	A	A		＞SK2371	
2077	22F18·23	SD1420-E7層	SD1420-E8層以降	楕円形	半円状	緩やか	131	(116)	59	(39)	40	0.64	C	D			
2190	16F3·4	S4～S3層	S3～S4層以降	楕円形	袋状	急斜度	71	59	71	59	30	0.93	B	A			
2221	16F10·15,17F6·11	SD1420-2a層	SD1420-2a～1層	楕円形	袋状	急斜度	122	72	103	54	29	0.71	B	D	土器・クリ・トチ・クルミ・石鏃		底に黒褐色土あり
2228	13E24	S1層		楕円形	袋状	急斜度	72	48	(67)	(41)	22	0.93	G	I	磨石類・不定形石器		底に黒褐色土あり
2235	13F9·10	S3層	S4層	楕円形	弧状	緩やか	(92)	(63)	(46)	(39)	15	1.3	A	I	土器・石核・生粘土		
2253	13F15	K4層	S4層以降	不整形	弧状	緩やか	66	34	28	25	17	1.11	B	D	土器		底に黒褐色土あり
2257	14F7	K4層	S2～S1層	楕円形	弧状	緩やか	72	57	37	28	18	1.14	A	E	土器	＞P2001	
2272	13F5	K4層	S4層以降	楕円形	袋状	急斜度	45	33	(28)	(18)	22	0.96	G	D	土器・クルミ		底に黒褐色土あり
2276	17F12	SD1420-1c層	SD1420-1c層以降	楕円形	弧状	急斜度	38	31.5	19	17	15	0.56	D	B	ナラガシワ・クリ		ナラガシワ多量
2279	13F10	K4層	S4層以降	楕円形	半円状	緩やか	(56)	(38)	(31)	(22)	18	1.06	G	I	土器		底に黒褐色土あり
2287	14F1	S5層		楕円形	弧状	緩やか	34	25	(21)	(12)	3.5	1.1	A	D			底に黒褐色土あり

遺構観察表（14）土坑（SK）

（ ）：推定値

遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	覆土		出土遺物	切り合い	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度		堆積形状	覆土			
2319	13F18･19	S5層		楕円形	台形状	急斜度	50	46	(35)	29	35	0.89	A	I	土器		底に黒褐色土あり
2350	24F17･18	SD1420-E10層	SD1420-E10層以降	楕円形	弧状	緩やか	82	55	55	30	3	0.76	B	B	クルミ		底に黒褐色土あり
2365	23F3	SD1420-E13a層	SD1420-E13a層以降	円形	台形状	垂直	52	48	45	43	28	0.08	B	I	土器		底に黒褐色土あり
2371	23F4	SD1420-E12a層	SD1420-E12a層以降	楕円形	弧状	緩やか	72	57	30	24	3	0.31	D	B		＜SK2073	底に黒褐色土あり
2372	23F2･3･8	SD1420-E12a層	SD1420-E12a層以降	不整形	袋状	緩やか	120	115	103	54	46	-0.01	G	I	トチ		木材敷土坑、底に黒褐色土あり
2423	13F10	S5層		円形	半円状	急斜度	31	28	21	18	13	0.98	A	I			底に黒褐色土あり
2441	14F16･17･21･22	S4層	S4層以降	楕円形	弧状	緩やか	108	87	71	64	16	1.17	G	A			
2453	14F6･7･11	K5層		不整形	袋状	急斜度	180	162	128	(92)	52	0.57	G	D			木材敷土坑、下位に黒褐色土あり
2516	11F4	S4層	S4層以降	不整形	半円状	緩やか	69	38	37	15	12	1.11	A	A	土器・石器		

遺構観察表（15）柱穴列（SA）

（ ）：推定値

掘立柱建物	遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	覆土			柱根				出土遺物	切り合い	備考
					平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度		堆積形状	覆土	掘形と柱根の関係	柱根の有無	掘形の有無	方位	傾斜角度			
SA1	1623	20C15	SD1420-2c層	SD1420-2c層	円形	U字状	垂直	10	10			34	-0.33				○	○	N50W	9			
SA1	1624	20C19	SD1420-2b層	SD1420-2b層								34	-0.36				○	○	N68W	30			
SA1	1625	20C15	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降	円形	U字状	垂直	(15)	11			24	-0.42		A	A	○		N40W	7			
SA1	1640	20C18･19	SD1420-2b層	SD1420-2b層								17	-0.22				○	×	N160W	62			
SA1	1683	20C18	SD1420-2d層	SD1420-2d層								20	-0.51				○	×	N169E	65			
SA1	1699	21C6	SD1420-2c層	SD1420-2c層	円形	V字状	急斜度	8	7	3	3	27	-0.32	A	H		×						覆土上部にSD1420-2b'層が覆っている
SA1	1700	21C3	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降	楕円形	U字状	急斜度	11	8	4	3	15	-0.25	A	H		×						
SA1	1707	21C12	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降								52	-0.603			C	○	×	N171E	23	土器		杭列
SA1	1713	21C12	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降								43	-0.57			C	○	×	N135E	10			杭列
SA2	2021	22F9	SD1420-E6b層	SD1420-E6b層以降	楕円形	V字状	急斜度	24	19	6	4	20	0.5	A	D		×						
SA2	2023	22F3	SD1420-E6b層	SD1420-E6b層以降	楕円形	U字状	垂直	4	3	2	2	21	0.07		A	C	○	○	N100W	5			
SA2	2024	22F13	SD1420-E7層	SD1420-E7層以降	円形	U字状	垂直	14	14			19	0.2			C	○	○	0	0			
SA2	2025	22F9	SD1420-E6b層	SD1420-E6b層以降	円形	漏斗状	急斜度	9	9	2	2	22	0.41	D	E		×						
SA2	2026	22F9･14	SD1420-E6b層	SD1420-E6b層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	17	14	3	2	30	0.34	A	E		×						
SA2	2027	22F14	SD1420-E6b層	SD1420-E6b層以降	円形	半円状	急斜度	9	8	5	4	8	0.58	D	E		×						
SA2	2028	22F5	SD1420-E7層	SD1420-E7層以降	円形	U字状	急斜度	10	8	4	4	15	0.32	A	E		×						根絡みあり
SA2	2029	22F10	SD1420-E7層	SD1420-E7層	楕円形	U字状	急斜度	13	10	5	5	20	0.33	A	E		×						根絡みあり
SA2	2030	22F5	SD1420-E7層	SD1420-E7層以降	楕円形	U字状	垂直	10	8	3	3	14	0.17	A	D		×						
SA2	2031	22F14	SD1420-E6b層	SD1420-E6b層以降	楕円形	U字状	急斜度	11	9	2	2	42	0.22	D	A	C	×				木		
SA2	2124	22F9	SD1420-6b層	SD1420-6b層	円形	U字状	垂直	3	3	2	2	13	0.52	D	C		×	○	0	0			

遺構観察表（16）埋設土器（SH）

（ ）：推定値

遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	出土遺物	切り合い	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度				
8	5B23	S1層											深鉢		
13	4B15	Ⅶ層上部											甕・漆糸・クルミ		
32	5C12	Ⅶ層		楕円形	半円状	緩やか	42		22		10	1.38	土器・入り子状に浅鉢2個		
118	9D20	S1層	S3層以降										深鉢		
1418	17D6	K4層	S4層以降	円形	弧状	緩やか	39	37	14	12	5	1.15	甕		小形甕を逆位に埋設
2088	23F11	SD1420-E6c③層	S1層										埋甕		
2301	12F8	S3層	S4層										埋甕・石鏃		
2302	12F13･14	S3層	S4層										埋甕		

遺構観察表（17）埋設土器（SH）

（ ）：推定値

遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	出土遺物	切り合い	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度				
2443	12F8	S3層	S4層										土器		
2448	12F1	Ⅴ層	S3層										土器		
2457	12E24	SX51-3層	S1層										土器・不定形石器		

遺構観察表（18）ピット（P）

（ ）：推定値

遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	覆土		柱根				出土遺物	切り合い	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度		堆積形状	覆土	掘形と柱根の関係	柱根の有無	掘形の有無	方位	傾斜角度			
5	3C10	Ⅶd層									10	1.298			C	○		0	0			柱根でない可能性高い
6	3C14	Ⅶd層									7	1.287			C	○		0	0			
7	3B17	Ⅶd層									13	1.38	D	F	F	×						
14	4B18	Ⅷ層									32	1.02			C	○	×	N20E	24			
15	4B19	Ⅷ層						6			28	1.085			C	○	×	0	0			
16	4B23	Ⅴ層									13	1.308				○	×	N70E	25			
17	4B23	Ⅶc層下部									10	1.347			C	○	×	N80W	15			
28	18B21·22	Ⅴ層									69	0.54				○		N60W		土器		暗渠工事で出土
29	18C7	Ⅷ層									50	0.705				○		N60W	12			暗渠工事で出土
30	18C12	Ⅴ層									42	0.911				○		N55W	26			暗渠工事で出土
38	4E2	Ⅶd層									7	1.433			C	○		0	0			
39	2D17	Ⅶd層									32	0.9			C	○		0	0			
41	5C3	Ⅶ層	S2～S1層	楕円形	U字状	垂直	5	3			36	1.36			C	○	○	0	0			
42	5C3	Ⅶ層	S2～S1層	円形	U字状	垂直	(5)	5			37	1.37			C	○	○	0	0			
49	4E3	Ⅶd層									12	1.07				○		N178E	22.5			
83	6B2	SD19覆土上部									20	1.09			D	○	×	N112W	35			
93	6A21	Ⅶ層									67	0.75			D	○		N153W	10			
96	5D19	SX36-1層下部	S1層	不整形	U字状	急斜度	22	19	6	5	18	1.353	A	C		×						
98	5B1	Ⅶ層									15	1.2			A	○	○	0	0			
99	5D8	Ⅶ層									40	1.16			C	×				木製品		
109	5E5·10	SX82底面	S2～S1層	円形	半円状	急斜度	35	35	20	20	16	1.328	A	E		×						
126	9E12	S3層	S3層以降	円形	半円状	急斜度	23	23	12	(9)	12	1.297	A	E		×						
714	9E6	S4層	S4層以降	円形	半円状	急斜度	16	13	10	9	8	1.271	A	A		×						
724	5D20	Ⅷ層		楕円形	V字状	急斜度	12	6	4	2	5	1.23	D	A		×						
758	5E13	S1層		楕円形			14	10	10	8	35	1.109			C	×						柱根の樹皮のみ残存
765	10E16	K4層	S4層以降	円形	半円状	緩やか	(48)	(34)	(31)	(12)	17	1.13	A	A		×				土器		土坑の可能性あり
766	10E18	K4層	S4層以降	楕円形	V字状	急斜度	(36)	(22)	(10)	(4)	15	1.18	A	E		×				クルミ		
862	16D4·19	S1層	S1層	円形	弧状	緩やか	38	36	23	20	5	1.366				×						
869	16E5	S4層	S4層以降	楕円形	弧状	緩やか	32	27	18	14	5	1.362	A	E		×						
871	16D23	K4層	S4層以降	楕円形	U字状	垂直	(26)	21	17	16	25	1.1	D	A	A	×						柱根の樹皮のみ残存
876	15D20	K4層	S4層以降	楕円形			35	(23)	13	13	6	1.297				×				クルミ	＜SK875	
877	16E8	K4層	S4層以降	円形	弧状	緩やか	24	21	16	12	8	1.28	A	A		×						
892	15D20	K4層	S4層以降	円形	弧状	緩やか	9	9			3	1.38	A	E		×						
901	15E12·13	K4層	S4層以降	方形	弧状	緩やか	32	31	15	15	9	1.285	A	D		×				クルミ		
905	16E14	K4層	S4層以降	円形	半円状	急斜度	20	17	10	9	8	1.269	A	A		×						
908	15D25	K4層		円形	U字状	急斜度	23	19	13	9	9	1.246	D	A		×						
911	15E1·13	K4層	S4層以降	円形	弧状	緩やか	50	46	12	11	6	1.272	D	A		×						
918	16D13	Ⅶd層		円形	U字状	急斜度	12.5	12	15	10	18	1.006		A	A	○	○	0	0			
924	13C14	Ⅷ層		楕円形	漏斗状	急斜度	40	30			42	0.703			C	○		N90E	12			
926	13B22	Ⅷ層		円形	U字状	垂直	16	13			26	0.77			C	○	×	N62E	9			

遺構観察表（19）ピット（P）

（ ）：推定値

遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	覆土			柱根				出土遺物	切り合い	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度		堆積形状	覆土	掘形と柱根の関係	柱根の有無	掘形の有無	方位	傾斜角度			
927	13B6	Ⅷ層									62	0.398			C	○	×	N42E	9			
928	14B2	Ⅶd層		円形	U字状	急斜度	21	17			74	0.596			C	○	×	N76W	9			
942	16D25	Ⅶd層		円形	台形状	急斜度	22	21			13	0.748		A	A	○		N90E	10			
943	16D24	Ⅶd層		円形	U字状	垂直					45	0.679		A	A	○		0	0			
947	17B23	K4層	S4層以降	円形	弧状	緩やか	22	19	12	10	6	1.264	A	E		×						
960	17C17	K4層	S4層以降	楕円形	半円状	急斜度	27	22	14	12	37	1.2	A	D		×						
965	16D12	Ⅶd層		楕円形	U字状	垂直	11	9			23	1.123		A	A	○	○	N10E	10	樹皮		
966	17D1	K3層	S3層以降	円形	箱状	垂直	12	10	7	6	9	1.275	D	A		×						
967	17D1･6	K3層	S3層以降	円形	半円状	急斜度	14	13	4	4	9	1.260	A	E		×						
968	17D2	K4層	S4層以降	不整形	U字状	急斜度	16	15	6	5	24.5	1.050			C	○	×	0	0			
970	17D12	K3層	S3層以降	楕円形	U字状	垂直	17	12	11	8	30	1.13		A	A	×				樹皮		
973	17D12	K3層	S3層以降	円形	半円状	急斜度	10	9	6	5	7	1.265	D	F		×						
974	17D11･12	K3層	S3層以降	円形	半円状	急斜度	28	26	9	8	15	1.177	D	F		×						
978	17D8	SD1420-11a層	SD1420-11a層以降	方形	U字状	急斜度	14	13			40	0.849		A	B	○		N94W	12			
979	17D11	K4層	S4層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	16	10			81	0.582		A	B	○	○	N108E	5			
982	17B20	K4層	S4層以降	円形	V字状	急斜度	13	13	3	3	15	1.015	D	B		×						
984	17C4	S5層	S5層以降	円形	U字状	垂直	11	11	4	3	30	0.97	D	E		×						
989	17E13	SD1420-5層	SD1420-5層以降	楕円形	U字状	急斜度					30	0.951		A	A	○		N170E	15			
994	17E3	SD1420-6a層	SD1420-6a層	楕円形	U字状	急斜度					20	0.96		A	A	○		0	0			
995	17D2	K4層	S4層以降	円形	弧状	緩やか	(22)	21	6	4.5	8	1.22	D	A		×						
998	17A23	Ⅷ層		楕円形	U字状	急斜度	24.5	21			33	0.674			C	○	○	0	0			
1000	17C20	Ⅶd層		円形	U字状	急斜度	16	15			17	1.054		A	A	○		0	0			
1403	18B17	Ⅶd層		楕円形	U字状	急斜度	(24)	(20)			18	0.878		A	A	○	○	N50W	10			
1404	18B17	Ⅶd層		楕円形	U字状	垂直	14	11			40	0.62		A	B	○	×	N50W	28			
1410	17B17･18	Ⅷ層		楕円形	半円状	急斜度	23	18	10	8	9	0.98	A	H		×						
1412	17D16	K4層	S4層以降	円形	弧状	緩やか	10	9	5	5	3	1.232	D	A		×						
1413	17D16	K4層	S4層以降	円形	弧状	緩やか	9	8	5	3	2	1.236	D	A		×						
1414	17D16	K4層	S4層以降	円形	弧状	緩やか	8	7	5	4	2	1.237	D	A		×						
1415	17D16	K4層	S4層以降	円形	半円状	急斜度	10	10	5	4	5	1.226	D	A		×						
1416	17D16	K4層	S4層以降	円形	弧状	緩やか	10	8	5	3	2	1.254	E	H		×						
1417	17D15	K4層	S4層以降	円形	半円状	急斜度	10	10	6	5	6	1.182	D	A		×						
1421	17E8	SD1420-3層	SD1420-3層以降	楕円形	弧状	緩やか	18	12	7	6	6	1.226	D	A		×						
1434	17C24	K3層	S3層以降	楕円形	漏斗状	垂直	17	14			18	0.968		A	B	○	○	0	0			
1445	17E7	SD1420-8a層	SD1420-8a層以降								36	1.09		A	B	○	×	N174W	0			
1449	17D13	SD1420-8層	SD1420-8層	円形	V字状	急斜度	14	13	6	5	8	1.183	D	A		×						
1451	17D11･12･16･17	K5層		円形	半円状	急斜度	32	31	15	13	12	1.14	D	A		×				土器		
1454	18E11･16	SD1420-1a層	SD1420-1a層	楕円形	漏斗状	垂直	(34)	(28)	7	5	44	0.822	D	A		×						
1458	17E11	K4層	S4層以降	不整形	弧状	緩やか	53	32	15	6	10	1.133	A	E		×						
1459	17D9	K5層		楕円形	袋状	急斜度	30	28	14	10	32	0.784	A	A		×						
1464	19B1	Ⅶd層							15	11		0.394				○						西側暗渠
1465	19B2	Ⅶd層		不整形			30	28				0.106				○						西側暗渠
1470	20B5	Ⅶ層		不整形			67	(63)				0.408				×				土器・両極石器・クルミ		西側暗渠。柱が抜き取られたピットの可能性あり
1472	18B4	K2層	S1層	楕円形	U字状	垂直	24	18			60	0.34		A	A	○	○	0	0	礎板（石）・根絡み		
1477	22B9			円形			14	14				-0.742				○						西側暗渠
1478	22B10			円形			12	12				-0.752				○						西側暗渠
1479	24B4											-0.301				○		N100E				西側暗渠
1495	18C7	SD1420-6a層	SD1420-6a層以降	楕円形	U字状	急斜度	30	24			55	0.5		A	A	○		N29W	22	土器		

遺構観察表（20）ピット

（ ）：推定値

遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	覆土			柱根				出土遺物	切り合い	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度		堆積形状	覆土	掘形と柱根の関係	柱根の有無	掘形の有無	方位	傾斜角度			
1497	18C2	SD1420-6a層	SD1420-6a層以降	円形	U字状	垂直	9	9			15	0.882			C	○		0	0			
1498	18C8	SD1420-6a層	SD1420-6a層以降	楕円形	半円状	垂直	15	14			18	0.83		A	A	○	○	0	0		P1500	
1521	19C9	SD1420-6a層	SD1420-6a層以降	円形	U字状	垂直	(20)	15	12	12	32	0.449	A	A		×					P1520	
1525	19C22	SD1420-6a層	SD1420-6a層以降	円形	U字状	垂直	15	13	5	4	14	0.516	E	E	D	×						
1541	19C7	SD1420-9b層	SD1420-9b層以降	楕円形	弧状	緩やか	10	7	4	2	4	0.577	A	A		×						
1543	19B3･8	SD1420-6b層	SD1420-6b層以降	不整形	U字状	垂直	11	11			26	0.274		A	A	○		N80W	10			
1544	19B2･7	SD1420-6a層	SD1420-6a層以降	楕円形	U字状	急斜度	(35)	(24)			51	0.180		A	B	○	○	N35W	20			
1552	18B20	SD1420-11c層	SD1420-11c層以降	楕円形	U字状	垂直	20	10			23	0.245		A	B	○		N3E	8			
1556	18B10	V層	SD1420-6a層以降								60	0.400		A	A	○	○	N170W	20	礎板		
1559	18C5	SD1420-9b層	SD1420-9b層以降	楕円形	U字状	垂直	20	17	15	10	27	0.55	A	A		×				根絡み		
1562	19C9	SD1420-11c層	SD1420-11c層以降	楕円形	半円状	急斜度	22	16	13	7	6	0.214	D	A		×						
1563	19C13	SD1420-11c層	SD1420-11c層以降	楕円形	半円状	急斜度	12	9	6	4	6	0.250	D	A		×						
1568	19B3	SD1420-6a層	SD1420-6a層以降	楕円形	U字状	垂直	15	13	5	4	36	0.05		A	B	○		N70E	4			
1574	18D22	SD1420-2b層	SD1420-2a層以降	円形	U字状	垂直	20	18	11	10	30	0.450		A	A	○	×	0	0			
1575	18D23	SD1420-2b層	SD1420-2b層以降	楕円形	U字状	垂直	20	15			68	0.05		A	A	○	○	N160E	6			
1579	19B15	SD1420-9b層	SD1420-9a層以降								36	0.114	C	H		○	×	N130W	11			
1581	18B24	SD1420-6b層	SD1420-6b層以降	楕円形	U字状	垂直	15	(9)			31	0.671		A	A	○	○	N43W	10			
1591	19B19	SD1420-11a層	SD1420-11a層以降	楕円形	U字状	垂直	15	13			17	0.06		A	C	○		N178E	14			
1592	19C17	P1524-3層	SD1420-6a層以降												C	×					＞P1524	
1606	20B19	SD1420-6b層	SD1420-6b層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	18	11			32	-0.078		A	A	○	○	N175E	78			
1609B	20B13	SD1420-9a層	SD1420-9a層以降								10	0.17		A	A	○	○	N173E	18		＞1609A	
1611	20B6	SD1420-9b層	SD1420-9b層以降	不整形	U字状	急斜度	20	10			48	0.057		A	A	○	○	N65W	30			
1614	20B18	SD1420-9a層	SD1420-9a層以降	楕円形	U字状	垂直	15	8			37	0.03		A	A	○	○	0	0			
1615	20B22･23	SD1420-6b層	SD1420-6b層以降	楕円形	U字状	垂直	(24)	(20)			42	-0.16		A		○	○	N78W	33	根絡み		
1620	20B11	SD1420-9b層	SD1420-9b層以降	楕円形	台形状	急斜度	15	13			10	0.26	D	A		×						
1626	20C7	SD1420-11a層	SD1420-6b層以降								34	0.198		A	A	○	○	N127E	11			
1635	20B6･7	SD1420-9a層	SD1420-9a層以降								29	0.097		A	A	○	○	N108E	57			
1637	20B11	SD1420-9a層	SD1420-9a層以降								10	0.51				○	○	N92W	84			
1638	20B16	SD1420-9a層	SD1420-9a層以降	楕円形	弧状	緩やか	17	11	9	(4)	7	0.21	A	F		×						
1658	21B6	SD1420-4a層	SD1420-4a層以降	不整形	台形状	急斜度	(90)	(52)	(60)	(32)	86	-0.453	F	E		○		N140W	90	根絡み		
1663	20B4	SD1420-6b層	SD1420-6b層以降	不整形	階段状	急斜度	(36)	(32)	(23)	10	36	-0.210	C	A		×				石錐・クルミ		柱抜き取り後埋め戻された可能性高い
1667	21B11	SD1420-11a層	SD1420-11a層以降	楕円形	台形状	急斜度	(60)	(35)	(37)	(30)	31	-0.237	A	D		×						柱抜き取り後埋め戻された可能性高い
1669	21B1	SD1420-9b層	SD1420-9b層以降	不整形	U字状	急斜度	13	11	5	2	16	0.05	A	D		×						
1670	21B2	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降	楕円形	U字状	垂直	12	10	7	5	20	0.198	A	D		×						
1672	21B7	SD1420-2d層	SD1420-2d層	不整形	V字状	急斜度	50	33	14	10	20	-0.07	C	B		×				土器・不定形石器・トチ		柱抜き取られた可能性高い
1673	21B7	SD1420-2d層	SD1420-2d層以降	楕円形	U字状	急斜度	25	10	16	8	13	0.143	D	B		×				土器		P1672と同一
1679	21B7･12	SD1420-2c層	SD1420-2c～2b層	楕円形	漏斗状	急斜度	(57)	(48)	(40)	(30)	60	-0.250	D	H		○		N100W	90	土器・根絡み		柱抜き取り後埋め戻された可能性高い。根絡み出土
1690	21B10･15	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降	円形	弧状	緩やか	40	39	24	23	11	-0.16	D	D		×						
1692	21B10･15	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降	不整形	弧状	緩やか	55	(40)	34	25	16	-0.133	D	H		×				土器		
1724	23B23	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降								10	-0.070			C	○	×	0	0			
1732	23B24	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降	楕円形	U字状	急斜度	11	9			13	-0.293			C	○	×	0	0			
1790	24E14	SD1420-E5c層	SD1420-E5c層	楕円形	U字状	垂直	13	11	9	8	37	-0.04				×						
1805	24E15,25E11	SD1420-E7層	SD1420-E6c層	不整形	半円状	急斜度	(31)	(26)			45	-0.13				×						
1812A	24B4	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降								70	-0.4	D	A	A	○	○	N124E	12			
1812B	24A24,24B4	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降								67	-0.36	D	A	A	○	○	N121E	15			
1815	24B9	SD1420-2a'層	SD1420-2a層								27	-0.032		A	C	○	○	0	0			
1842	24B14	SD1420-2c層	SD1420-2c層以降								25	-0.1		A	A	○	○	N118E	53			

遺構観察表（21）ピット（P）

（ ）：推定値

遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	覆土			柱根				出土遺物	切り合い	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度		堆積形状	覆土	掘形と柱根の関係	柱根の有無	掘形の有無	方位	傾斜角度			
1849	27D19	SD1420-E6d層	SD1420-E6d層								22	-2.460				○	×	0	0	根絡み		丸木舟の近くで検出
1859	9F20	Ⅵ層	S3層以降	楕円形	U字状	垂直	18	14			86	0.53		A	A	○	○	N123W	3			
1870	9F19	S1層	S1層	楕円形	袋状	内傾	13	11	7	(4)	19	1.2	B	E		×						
1916	9F8	S3層	S3層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	17	(17)	7	(4)	26	1.08	A	E		×						
1918	9F7	S3層	S3層以降	楕円形	弧状	緩やか	25	(18)	9	(8)	4	1.27	D	H		×						
1958	16F1	S2層	S2層以降	円形	台形状	急斜度	27	27	(16)	13	30	0.99	E	A		×						
1959	16E2	K2層	S2層以降	円形	U字状	急斜度	35	32	20	(17)	59	0.725	B	D		×				土器・樹皮		
1963	14F14	S3層	S2層以降	円形	箱状	垂直	20	19			57	0.64		H	A	○	○	N45E	13	クリかトチ		
2002	15F7	K5層	S5層以降	円形	弧状	緩やか	19	19	8	8	8	1.18	A	A		×						
2012	15F10	K4層	S3層以降	円形	漏斗状	急斜度	20	18			35	0.96		A	A	○	○	N45W	10			
2013	15F25			円形			21	12								○						水害により柱根等滅失
2038	23F16･17	SD1420-E6c②層	SD1420-E6c③層以降	楕円形	台形状	急斜度	(90)	42			55	0.36	C	E		○	○	N40W	72	土器		
2044	23F6	SD1420-E6c②層	SD1420-E7層以降	円形	弧状	緩やか	41	(35)	(21)	(15)	8	0.69	A	A		×						
2053	23F10	SD1420-E6c②層	SD1420-E6c③層以降	円形	漏斗状	急斜度	(18)	(18)	(4)	(4)	14	0.69	A	E		×				土器		
2054	23F10	SD1420-E6c③層	SD1420-E6c③層以降	円形	半円状	緩やか	16	14	(7)	(5)	6	0.7	A	E		×						
2057	23F5	SD1420-E6c③層	SD1420-E6c③層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	18	15			72	-0.02		E	C	○	○	N13E	5			
2064	23F3	SD1420-E6c①層	SD1420-E7層以降								33	0.36				○	○	N118W	58			
2067	23F18	SD1420-E8層	SD1420-E8層	円形	弧状	緩やか	(20)	(20)	5	4	10	0.68				×						
2075	23F23	SD1420-E9層	SD1420-E10層以降		U字状	急斜度					45	-0.05		A	A	○	○	0	0			
2078	23F7･8	SD1420-E6c③層	SD1420-E6c③層	円形	弧状	緩やか	19	19	11	11	7	0.66	A	A		×						
2079	23F7･8	SD1420-E5c③層	SD1420-E5c③層	楕円形	弧状	緩やか	24	19	11	6	14	0.72	A	A		×						
2081	23F14	SD1420-E6c③層	SD1420-E6c③層以降	楕円形	V字状	急斜度	25	(17)	(6)	(3)	37	0.46				×				土器		
2082	23F9	SD1420-E6c③層	SD1420-E6c②層	楕円形	台形状	緩やか	(49)	(29)	(16)	(9)	15	0.63	A	A		×						
2084	23F12	SD1420-E7層	SD1420-E7層以降								54	0.23		B	C	○	○	N78W	24			
2085	22F22	SD1420-E7層	SD1420-E7層以降	不整形	弧状	緩やか	26	8	20	(7)	5	0.76	A	A		×						
2107	9F4	S4層	S4層以降	楕円形	漏斗状	垂直	(17)	(13)	(8)	(4)	30	1.005	C	E		×						
2119	9F2	Ⅶd層		円形	U字状	垂直	11	11	7	7	20	0.6				○						調査中に柱根を紛失
2121	9F13	K5層	S5層以降	円形	U字状	垂直	15	(14)			77	0.48		A	A	○	○	N115E	3			
2122	9F7		S4～S3層	円形	U字状	垂直	16	14	8	8	54	0.79	B	A		×	○	0	0			
2123	9F6		S1層	円形	U字状	垂直	16	15	12	10	21	1.12	B	A		×	○	0	0			
2233	17E24	SD1420-1b層	SD1420-1c層以降	円形	U字状	垂直	(15)	(15)	5	4	41	0.55	B	A		×						
2237	13F10･15	S3層	S4層以降	楕円形	半円状	垂直	36	29	22	20	14	1.15		A	A	○	○	0	0			
2238	14F9	K4層	S4層以降	円形	U字状	急斜度	16	15	8	6	19	1.105	A	A		×						
2244	13F19	S5層	S4層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	28	22			95	0.28		A	A	○	○	N140E	21			
2294	15F1･2	K5層	S5層以降	楕円形	弧状	緩やか	18	15	(8)	(5)	6	1.22	A	H		×						
2306	12F3	S1層	S1層	楕円形	U字状	垂直	14	10			25	0.97			C	○	○	N55W	18	土器		
2330	14F9	S4層	S4層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	20	(17)			46	0.71		A	A	○	○	0	0			
2336	14F25	K5層	S5層以降	円形	V字状	緩やか	(44)	(41)	(33)	(27)	15	1.04	A	H		×				土器		
2341	23F9･10	SD1420-E12a層	SD1420-E12a層	円形	漏斗状	急斜度	(21)	(20)	(6)	(4)	28	0.22	E	E		×						
2342	23F10	SD1420-E12a層	SD1420-E12a層	楕円形	漏斗状	急斜度	(20)	10	7	3	23	0.32	D	A		×						
2349	23F5	SD1420-E6c③層	SD1420-E6c③層以降	円形	U字状	垂直	20	19	7	7	13	0.37	A	E		×						
2356	23F14	SD1420-E6c②層	SD1420-E6c②層以降	円形	漏斗状	急斜度	13	10	(3)	(3)	31	0.55	A	A		×						
2358	24E22	SD1420-E12a層	SD1420-E12a層以降	楕円形	半円状	急斜度	14	11	8	4	11	0.4	A	B		×						
2362	24F18	SD1420-E12a層	SD1420-E12a層以降	円形	弧状	緩やか	22	21	16	(11)	5	0.64	A	B		×						
2377	23F9	SD1420-E12a層	SD1420-E12a層	円形	U字状	急斜度	7	6	3	3	21	0.29	A	A		×						
2381	23F10,24F6	SD1420-E15層	SD1420-E15層以降	円形	台形状	垂直	21	19	(9)	(9)	32	0.24	C	H		×						
2384	24F19	SD1420-E15層	SD1420-E15層以降	楕円形	弧状	緩やか	29	24	(13)	(13)	9	0.36	D	A		×						
2388	24E21･22	SD1420-E14a層	SD1420-E14a層以降	楕円形	V字状	急斜度	24	15	(5)	(4)	19	0.19	D	A		×						

遺構観察表（22）ピット（P）

（ ）：推定値

遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	覆土			柱根				出土遺物	切り合い	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度		堆積形状	覆土	掘形と柱根の関係	柱根の有無	掘形の有無	方位	傾斜角度			
2392	23F5	SD1420-E15層	SD1420-E15層以降	楕円形	U字状	急斜度	(20)	14	(7)	(7)	32	0.1	C	F		×				トチ・クルミ		柱抜き取り後にトチノキ種実貯蔵として利用
2394	23F5	SD1420-E6c③層	SD1420-E6c③層以降	楕円形	U字状	垂直	20	18			18	0.24		A	A	○	○	0	0			
2396	23F3	SD1420-E15層	SD1420-E15層以降	方形	半円状	緩やか	21	12	6	4	11	0.19	D	H		×						
2411	24E23	SD1420-E18層	SD1420-E18層以降	楕円形	漏斗状	急斜度	14	12			28.5	-0.2		A	A	○	○	N109W	27			
2414	22F23	SD1420-E14a層	SD1420-E13a層	円形	U字状	急斜度	13	(13)	5	(4)	14	0.47	D	A		×						
2415	22F23	SD1420-E11層	SD1420-E12a層	円形	U字状	急斜度	15	(14)	10	(8)	19	0.44	D	A		×						
2430	15F11·12	S5層	S1層	楕円形	U字状	垂直	(25)	(20)			70	0.63		A	A	○	○	N47E	19			
2469	27F3	SD1420-E6c③層	SD1420-E6c③層以降	楕円形	V字状	急斜度	17	15			62	-0.29		A	A	○	○	N43W	7			
2470	25F1	SD1420-E8層	SD1420-E8層以降	円形	U字状	急斜度	10	9			70	-0.16		A	B	○	○	N19W	5			
2476	23F22	SD1420-E8層	SD1420-E8層以降	楕円形	U字状	垂直	10	7			27	0.49		A	A	○	○	N120E	27			
2478	27F2	SD1420-E8層	SD1420-E8層以降	楕円形	U字状	垂直	11	9			34	-0.3		A	A	○	○	N14E	8			
2483	27F16	Ⅵ層	SD1420-E6c③層								67	-0.6		A	A	○	○	N64W	5			
2515	11F4	S4層	S4層以降	楕円形	半円状	急斜度	36	25	11	11	12	1.1	A	A		×				土器		
2522	15F11	Ⅶ層		楕円形	階段状	急斜度	15	11			22	0.8	A	A		○	○	N58E	12			
2530	11F23	Ⅵ層	S2～S3層	楕円形	半円状	急斜度	(24)	(15)	(15)	(10)	10	1.24	A	A		×						
2531	11F24	S2層	S2～S3層	楕円形	U字状	急斜度	(11)	(8)	(4)	(3)	6	1.28	A	A		×						
2532	11F1	S3層	S3層	楕円形	漏斗状	急斜度	(25)	(20)			18	1.11	A	A		×						
2534	23F9															○						23Fトレンチ埋め土から出土した柱根。図面等なし
2535																○						24Fトレンチ埋め土から出土した柱根。図面等なし
2536																○						24Fトレンチ埋め土から出土した柱根。図面等なし
2537																○						24Fトレンチ埋め土から出土した柱根。図面等なし
9807	10G2											0.605				○						98年度用水路立会い、旧柱No.7
9809	10G4·9											0.355				○						98年度用水路立会い、旧柱No.9
9811	10G5															×						98年度用水路立会い、旧柱No.11、柱根不明
9814	12G8															×						98年度用水路立会い、柱根はあるが壁に入り込んでいたため取り上げず。旧柱No.なし
9815	12G1·6											1.057				○						98年度用水路立会い、旧柱No.15
9816	12G1											0.827				○						98年度用水路立会い、旧柱No.16
9817	12G4											0.912				○						98年度用水路立会い、旧柱No.17
9818	13G1											0.667				○						98年度用水路立会い、旧柱No.18
9819	13G3											0.822				○						98年度用水路立会い、旧柱No.19
9820	13G5											0.757				○						98年度用水路立会い、旧柱No.20
9821	14G1											1.167				○						98年度用水路立会い、旧柱No.21
9822	14G1															×						98年度用水路立会い、旧柱No.22、柱根不明
9823	14G2·7											0.887				○						98年度用水路立会い、旧柱No.23
9824	14G3											0.657				○						98年度用水路立会い、旧柱No.24
9825	14G8											1.062				○						98年度用水路立会い、旧柱No.25
9826	14G3															×						98年度用水路立会い、旧柱No.26、柱根不明
9827	14G3											0.537				○						98年度用水路立会い、旧柱No.27
9828	13G5															×						98年度用水路立会い、旧柱No.28、柱根不明
9829	15G1·6											0.757				○						98年度用水路立会い、旧柱No.29
9830	15G3											0.897				○						98年度用水路立会い、旧柱No.30
9832	15G6															○						98年度用水路立会い、旧柱No.32
9834	15F22,15G2											0.577				○						98年度用水路立会い、旧柱No.34
9837	11G9											0.297				○						98年度用水路立会い、旧柱No.37

遺構観察表（23）ピット（P）

（ ）：推定値

遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	覆土			柱根				出土遺物	切り合い	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度		堆積形状	覆土	掘形と柱根の関係	柱根の有無	掘形の有無	方位	傾斜角度			
9839	11G8															○						98年度用水路立会い、旧柱No.39だが、位置は推定となっている
9840	14G6											0.669				○						98年度用水路立会い、旧柱No.40
9841	14G8											0.387				○						98年度用水路立会い、旧柱No.41
9843	13G3･4															○						98年度用水路立会い
9901	22G6															×						99年度用水路立会い、旧柱1、柱根不明
9902	21G10															×						99年度用水路立会い、旧柱3、柱根不明
9903	21G10															×						99年度用水路立会い、旧柱4、柱根不明
9904	22G1															×						99年度用水路立会い、旧柱5
9905	21G8											0.167				○						99年度用水路立会い、旧柱6
9906	21G2											-0.177				○						99年度用水路立会い、旧柱7

遺構観察表（24）炭化物集中範囲（SC）

（ ）：推定値

遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	出土遺物	切り合い	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度				
2	5C6･7･11･12･16･17	Ⅶ層	S2～S1層	不整形	弧状	緩やか	240	135			4	1.5	土器・クルミ		
3	5B23･24,5C3･4･8	S2層	S2層	方形	弧状	緩やか	305	265			3	1.49	土器・石鏃・両極石器・クルミ		
4	5C7～9･12～15・18～20･24	Ⅶ層	S2層	不整形	弧状	緩やか	590	425			3	1.52	土器・石錐・不定形石器・両極石器・クルミ		
9	2B12･13	Ⅶc層	Ⅶc層	楕円形	弧状	緩やか	177	37			3	1.37			
10	5C15･20	S2層	S2層	楕円形			40	30				1.54			
12	5B6･7･11･12	S2～S1層	S2～S1層	楕円形			292	266				1.48			
35A	5D14･18～20･23～25	S1層	S1層	円形	弧状	緩やか	295	290			1	1.51	土器・クルミ		
35B	5D12～15･18～20･23	S2層	S2層	不整形	弧状	緩やか	470	280			1	1.46	土器・クルミ		
37	5C21･22,5D1～3･6	S1層	S1層	不整形	弧状	緩やか	350	(210)			3	1.46	土器・不定形石器・トチ・クルミ		
82	5D24･25,5E4･5･9･10･15 6D21･22,6E1･2･6･11	S1層	S2～S1層	不整形	弧状	緩やか	720	560			1	1.43	土器・石核・砥石・漆糸・クリ・クルミ		
100	5D4	Ⅶ層	S2～S1層	円形			18	15				1.546			
101	5D4	Ⅶ層	S2～S1層	円形			16	13				1.516			
104	5D5･9･10	S2層	S2層	不整形	弧状	緩やか	160	145			1	1.46			
105	5D11	S1層	S1層	不整形			132	131				1.44			
110	5E19･20	S2層	S2層	不整形			58	34				1.41	土器		
111	8D24･25,8E4･5･9･10 9D21,9E1･6	S1層	S1層	不整形	弧状	緩やか	485	485			3	1.44	土器・石鏃・石錐・漆糸・クルミ		
113	8E14･15	S1層	S1層	方形			57	50				1.46	土器		
114	8E10･15･20,9E6･11･16	S1層	S1層	不整形	弧状	緩やか	313	246			2	1.41			
119	9D21～23,9E1～3	S2～S1層	S2～S1層	不整形	弧状	緩やか	415	192			1	1.415	土器・石鏃・両極石器・トチ・クルミ		
120	9E4･6～9･11～15	S2～S1層	S2～S1層	不整形	弧状	緩やか	685	370			1	1.38	土器・不定形石器・クリ		
122	9E9	S2層	S2層	円形	弧状	緩やか	34	31			1	1.42			
123	8E2･7	S1層	S1層	不整形	弧状	緩やか	111	102			1	1.45			
124	6E2	S1層	S1層	楕円形	弧状	緩やか	50	34			1	1.46			
125A	9D19･20･24･25	S2層	S2層	長方形	弧状	緩やか	(240)	160			1	1.44	土器・不定形石器・両極石器・漆糸・クルミ		
125B	9D19･20･24･25	S3層	S3層	楕円形	弧状	緩やか	(285)	190			1	1.34	土器・石核・磨石類		
127	9E14	S2層	S2層	楕円形	弧状	緩やか	38	23			1	1.41			
135	9D25	S2層	S2層	円形	弧状	緩やか	53	52			1	1.45	粘土		
136	9D18･23	S2層	S2層	円形	弧状	緩やか	63	56			1	1.38			
137	9D22･23	S2層	S2層	楕円形	弧状	緩やか	73	54			1	1.42			
142	7C14	Ⅶc層	S4～S1層	長方形	弧状	緩やか	56	24			1	1.44			

遺構観察表（25）炭化物集中範囲（SC）

（ ）：推定値

遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	出土遺物	切り合い	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度				
143	7C19	Ⅶ層	S4～S1層	不整形	弧状	緩やか	65	30			1	1.44			
144	7D25	Ⅶ層	S4～S1層	楕円形	弧状	緩やか	98	32			2	1.4			
708	9E3·4·8·9	S3層	S3層	不整形	弧状	緩やか	270	235			1	1.34	土器・両極石器・漆糸		
711	9E5·10	S3層	S3層	不整形	弧状	緩やか	(318)	(134)			3	1.36	土器・石鏃・石核		
712	10E3～5·8～10	S1層	S1層	楕円形	弧状	緩やか	304	211			1	1.35	土器・不定形石器・焼成粘土塊・漆糸・糸玉・クルミ		
713	9E1～3·6·7	S4層	S4層	不整形	弧状	緩やか	200	118			2	1.34			
719	9D18·19·23·24	S3層	S3層	不整形	弧状	緩やか	115	(70)			3	1.33	土器		
723	9E1·2	S5層	S5層	長方形	弧状	緩やか	90	35			1	1.2			
734	10D22,10E1～3·6·7	S3層	S3層	不整形	弧状	緩やか	418	(390)			3	1.32	土器・両極石器		
735	10E3～5·8～10	S3層	S3層	不整形	弧状	緩やか	472	250			2	1.32	土器・石鏃・不定形石器・漆糸・クルミ		
736	10E8·9·14	S3層	S3層	長方形			168	(111)				1.36	土器・クルミ		
737	10E9·10·14·15·19·20 11E11·16	S3層	S3層	不整形	弧状	緩やか	548	320			2	1.29	土器・石鏃・不定形石器・石製品・漆糸		
740	11E1～3·6～20	S4層	S4層	不整形	弧状	緩やか	1082	490			2	1.21	土器・石鏃・不定形石器・両極石器・打製石斧・磨製石斧・石核・漆糸・漆片・糸玉・クルミ		
755	10D21·22,10E1～3·6～8	S4層	S4層	方形	弧状	緩やか	508	448			2	1.3	土器・不定形石器・両極石器・クルミ		
764	12C20·25	S4層	S4層	楕円形	弧状	緩やか	46	35			1	1.06	土器・石錐・両極石器		
767	10E3～5·8～10	S4層	S4層	不整形	弧状	緩やか	528	300			1	1.3	土器・石錐・不定形石器・漆糸・漆片・クルミ		
770	14E3·4	S4層	S4層	不整形	弧状	緩やか	230	118			3	1.36	土器・不定形石器・両極石器		
771	13E9·14	S2層	S2層	楕円形	弧状	緩やか	152	(55)			1	1.26	土器		
773	13E8·12～14·18·19	S3層	S3層	不整形	弧状	緩やか	350	158			1	1.24	土器・石鏃・漆糸		
774	13E3·4·9	S3層	S3層	円形	弧状	緩やか	72	71			1	1.25	土器・不定形石器・粘土		
775	13E14·15	S3層	S3層	円形	弧状	緩やか	38	34			1	1.29			
776	13E10·15·20 14E1·2·6·7·11·12	S3層	S3層	不整形	弧状	緩やか	688	420			1	1.29	土器・石鏃・不定形石器・粘土・漆片・漆糸・クルミ		
777	14D16·21	S3層	S3層	不整形	弧状	緩やか	167	98			1	1.3	土器・漆糸		
800	13E16·17	S4層	S4層	不整形	弧状	緩やか	188	92			2	1.25	土器		
801	13E7～10·12～15·18～20 14E6·7·11·12·16·17	S4層	S4層	不整形	弧状	緩やか	1058	(420)			1	1.21	土器・石錐・不定形石器・両極石器・砥石・粘土・赤漆塗り糸玉・漆片・クリ・クルミ		
802	13E3·4·8·9	S4層	S4層	不整形	弧状	緩やか	282	142			2	1.22	土器・クルミ		
803	13D25,13E5,14D21,14E1	S4層	S4層	楕円形	弧状	緩やか	195	114			2	1.27			
804	14E1·2·6·7	S4層	S4層	不整形	弧状	緩やか	225	175			1	1.28	土器・粘土・トチ		
805	14E2·7	S4層	S4層	円形	弧状	緩やか	65	53			1	1.33	土器		
806	14E2	S4層	S4層	不整形	弧状	緩やか	(66)	(30)			1	1.32	土器		
807	14E2·3	S4層	S4層	楕円形	弧状	緩やか	60	43			1	1.34	土器		
808	14E2·3	S4層	S4層	楕円形	弧状	緩やか	108	47			1	1.33	土器		
809	14E2·3	S4層	S4層	楕円形	弧状	緩やか	50	(34)			1	1.34	土器		
810	14E2·3·7·8	S4層	S4層	不整形	弧状	緩やか	69	42			1	1.34	土器		
811	14E3·4·8·9	S4層	S4層	不整形	弧状	緩やか	217	144			2	1.33	土器・不定形石器		
812	14E8·9·13·14	S4層	S4層	楕円形	弧状	緩やか	96	68			2	1.34	土器		
813	14E8·13·14·17～20	S4層	S4層	不整形	弧状	緩やか	(618)	(342)			1	1.28	土器・漆糸・クルミ		
814	14E15	S4層	S4層	楕円形	弧状	緩やか	37	26			1	1.34			
815	14E15	S4層	S4層	円形	弧状	緩やか	13	13			1	1.39			
816	14E4·5·9·10	S4層	S4層	不整形	弧状	緩やか	352	210			1	1.36	土器・石鏃・不定形石器・磨製石斧・石核・磨石類・クルミ		
818	15E6·7·11	S1層	S1層	不整形	弧状	緩やか	122	104			1	1.39			
819	15E6·11	S1層	S1層	不整形	弧状	緩やか	118	85			1	1.4			
820	14D24	S4層	S4層	楕円形	弧状	緩やか	130	70			1	1.33	クルミ		
821	14D19·24	S4層	S4層	楕円形	弧状	緩やか	110	80			1	1.32			
822	14D18·19	S4層	S4層	楕円形	弧状	緩やか	80	45			1	1.3			
823	14D18	S4層	S4層	楕円形	弧状	緩やか	35	24			1	1.29			

遺構観察表（26）炭化物集中範囲（SC）

（　）：推定値

遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	出土遺物	切り合い	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度				
824	16D11·12·16	Ⅴ層	S1層	不整形	弧状	緩やか	235	120			1	1.41	土器・漆糸		SB4-P868と重なる
831	14C19·24	S4層	S4層	楕円形	弧状	緩やか	70	24			1	1.31			
832	15C11·16	S4層	S4層	不整形	弧状	緩やか	100	63			1	1.3			
833	16B25,16C4·5	S1層	S1層	楕円形	弧状	緩やか	160	103			2	1.35	土器		
834	16C4·5	S1層	S1層	楕円形	弧状	緩やか	43	20			1	1.35	石鏃		
838	15E2～4·7～9·12·13·16～19	S3層	S3層	不整形	弧状	緩やか	(672)	500			3	0.92	トチ・クルミ		
839	16C6·11	S1層	S1層	楕円形	弧状	緩やか	126	95			2	1.3	土器		
840	16C6·7	S1層	S1層	楕円形	弧状	緩やか	165	116			1	1.27	土器・磨石類		
846	15C24	S4層	S4層	楕円形	弧状	緩やか	83	60			1	1.32			
847	16C19	S2層	S2層	楕円形	弧状	緩やか	127	70			1	1.36	土器		
856	13E5,14E1	S4層	S4層	楕円形	弧状	緩やか	90	62			1	1.25	土器・磨石類		
857	16B16·21	S2層	S2層	円形	弧状	緩やか	40	34			1	1.29			
859	15D3～15·18～20·24·25	S4層	S4層	不整形	弧状	緩やか	1010	525			1	1.34	土器・石鏃・不定形石器・両極石器・磨石類・漆糸・糸玉・クリ・トチ・クルミ		
863	16D4·5·9·10	S4層	S4層	不整形	弧状	緩やか	345	255			1	1.32	土器・粘土・クルミ		
864	15E1～4·6～9·12～14	S4層	S4層	不整形	弧状	緩やか	(688)	560			1	1.35	土器・石錐・不定形石器・粘土・漆糸・漆片・クリ・トチ・クルミ		
865	15D25	S4層	S4層	楕円形			34	21				1.38			
867	16D8	S4層	S4層	方形			147	56				1.34			
870	16E7·8	S4層	S4層	不整形	弧状	緩やか	100	95			1	1.35			
872	16D18	S4層	S4層	円形			40	37				1.37			
906	15D12	Ⅶd層上部	D2層	楕円形			100	90				1.271			
912A	16D15·20·24·25 17D11·12·16·17·21	S3層	S3層	不整形	弧状	緩やか	(540)	355			3	1.36	土器・石鏃・不定形石器・磨製石斧・粘土・クリ・クルミ		
912B	16D15·20·25 17D11·12·16·21	S4層	S4層	不整形	弧状	緩やか	385	290			2	1.391	土器・磨製石斧・クルミ		
933	17E8·9·13·14	SD1420-1a層	SD1420-1a層	不整形	弧状	緩やか	165	(90)			1	1.33			
934	18E6·17	SD1420-1b層	SD1420-1b層	不整形	弧状	緩やか	105	60			4	1.15	漆糸・クルミ		
935	17E9·20	SD1420-1a層	SD1420-1a層	不整形	弧状	緩やか	170	135			5	1.308	不定形石器		
936	18E1·2·6·7	SD1420-1a層	SD1420-1a層	不整形	弧状	緩やか	(275)	95			4	1.316	土器		
944	17E1·2	S4層	S4層	不整形			145	80				1.35			SB9と重なる
945	17E6	S4層	S4層	円形			40	35				1.352			SB9と重なる
950	16E15·20,17E11·16	S3層	S3層	不整形	弧状	緩やか	283	170			3	1.307	土器・両極石器・粘土・漆糸・クルミ		
956	17D6·7·11·12	S4層	S4層	不整形			110	60				1.371			
957	17D2·7～9·12～14·17·18	S4層	S4層	不整形	弧状	緩やか	510	405			2	1.326			
959	17C23·24	S4層	S4層	不整形			200	94				1.34	土器		
1401	18B2	S1層	S1層	不整形			145	90				1.2	土器		
1433	17E4·5	SD1420-5層	SD1420-5層	不整形	弧状	緩やか	125	54			1	1.2			
1436	17E13	SD1420-5層	SD1420-6a層	不整形	弧状	緩やか	60	(42)			1	1.18			
1480	18D15	SD1420-3層	SD1420-3層	不整形	弧状	緩やか	70	(37)			1	0.85			
1481	18D20	SD1420-3層	SD1420-3層	不整形	弧状	緩やか	63	31			3	0.77	土器		
1482	18E2～4·8·9	SD1420-2a層	SD1420-2a層	不整形	弧状	緩やか	355	260			1	0.95	土器・石鏃・石錐・不定形石器・両極石器・磨製石斧・石核・漆片・漆糸		
1483	18DE23·24, 2～4·7～9	SD1420-2c層	SD1420-2c層	不整形	弧状	緩やか	(450)	330			1	0.91	土器・石鏃・不定形石器・両極石器・クルミ		
1486	19B9·10·14·15 20B6·7·11·12·16·17	SD1420-4b層	SD1420-4b層	不整形	弧状	緩やか	680	424			1	0.56	土器・石鏃・石錐・不定形石器・両極石器・磨製石斧・石核・焼成粘土塊・漆糸・トチ・クルミ		
1487	19C16·21·22	Ⅵ層	SD1420-6a層	不整形	弧状	緩やか	200	(25)			1	0.6	土器・石鏃		
1489	19E3	SD1420-B7層	SD1420-B7層	方形	弧状	緩やか	110	(105)			3	0.17	土器・トチ・クルミ		
1492	19B15·19·20·24·25	SD1420-4b層	SD1420-4b層	不整形	弧状	緩やか	255	175			3	0.56	土器・石鏃・石錐・不定形石器・両極石器・玉類・石製品		
1493	19B18·19·23·24	SD1420-4b層	SD1420-4b層	楕円形	弧状	緩やか	165	130			3	0.61	土器・石鏃・石錐・不定形石器・両極石器・磨製石斧		
1515	19D24	SD1420-1a層	SD1420-1a層	長方形			85	(37)				0.18			

遺構観察表（27）炭化物集中範囲（SC）

（ ）：推定値

遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	出土遺物	切り合い	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度				
1516	19D15·17～20·22～24	SD1420-1a層	SD1420-1a層	不整形	弧状	緩やか	810	150				0.18			
1517	18D15·19·20·24·25 19CD25,3～5·6～24	SD1420-2a層	SD1420-2a層	不整形			1700	660				0.06	土器・石鏃・石錐・不定形石器・両極石器・磨製石斧・磨石類・漆糸・櫛・クルミ		
1529	18D23·24,18E3·4·8·9	SD1420-2a層	SD1420-2a層	不整形	弧状	緩やか	350	330			1	0.92	土器・石鏃・漆糸・トチ		
1550	18E5·9·10·14	SD1420-2a層	SD1420-2a層	楕円形			260	125				0.56	土器・不定形石器・両極石器		
1560	20B14·18～20·23·24	SD1420-3a層	SD1420-2a層	楕円形	弧状	緩やか	425	225			3	0.31	土器・不定形石器・多面体敲石・玉類		
1561	20B2·3·7·8	SD1420-4a層	SD1420-3a層	不整形	弧状	緩やか	340	(170)			3	0.56	土器・不定形石器・磨石類		
1564	20B24·25,20C4·5·9·10	SD1420-3a層	SD1420-3a層	不整形	弧状	緩やか	415	90			3	0.11	土器		
1565	20D2·3	SD1420-1c層	SD1420-1c層	円形	弧状	緩やか	93	85			3	0.06	土器		
1567	20C14·18·19·23·24	SD1420-2a層	SD1420-2c層	不整形	弧状	緩やか	350	260			3	0.01			
1584	23C2	SD1420-6a層	SD1420-6a層	円形			54	50				0.1			
1586	20B25,20C5	SD1420-1a層	SD1420-1a層	楕円形	弧状	緩やか	(105)	(50)			1	0.25	土器		
1587	20B19·20·25	SD1420-1a層	SD1420-1a層	不整形	弧状	緩やか	225	(210)			3	0.26	土器・石鏃・不定形石器・両極石器		
1588	20C14	SD1420-1a層	SD1420-1a層	楕円形			100	(70)				0.05			
1590	20C14·15·19·20,21C11	SD1420-2c'層	SD1420-2c'層	不整形	弧状	緩やか	(245)	(200)			3	0.02	土器・不定形石器		
1593	19B5,20B1	SD1420-4a層	SD1420-4a層	円形			25	25				0.75			
1594	20B5	SD1420-4a層	SD1420-4a層	長方形			113	(65)				0.58	土器		
1595	21B25	SD1420-B5層	SD1420-B6層	不整形			60	(50)				0.05			
1597	21C6·7·11·12·16·17·21·22	SD1420-1c層	SD1420-1c層	不整形	弧状	緩やか	580	225			6	0.03	土器・粘土		
1598	20B5·9·10·14·15 21B1～3·6～8·11	SD1420-3c層	SD1420-3c層	不整形			610	330				0.39	土器・石鏃・石錐・不定形石器・両極石器・石核・磨石類・クルミ		
1599	21C5·10 22B21,22C1·6	SD1420-1a層	SD1420-1a層	不整形	弧状	緩やか	445	145			2	0.14			
1600	22B21·22,22C1·6	SD1420-1b層	SD1420-1b層	不整形	弧状	緩やか	337	(145)			2	0.3	漆糸		
1628	21C2	SD1420-1d層	SD1420-1d層	楕円形			70	40				0.02			
1633	22C1·2·6·7	SD1420-1b層	SD1420-1b層	不整形			80	50				0.359			
1634	21B15·19·20	SD1420-1b層	SD1420-1b層	不整形			(165)	(110)				0.052			
1642	21B6～8·11～13·16～18·21·22	SD1420-2a層	SD1420-2a層	不整形			725	(395)				-0.01	土器・石鏃・石錐・不定形石器・両極石器・石核・クルミ		
1643	21C12·16·17	SD1420-B9層	SD1420-B9層	不整形	弧状	緩やか	(210)	125			3	-0.72			
1644	21C12～14·17·18	SD1420-1a層	SD1420-1a層	不整形			250	95				-0.12	漆糸		
1645	21C12·13·16～18	SD1420-2a層	SD1420-2a層	不整形	弧状	緩やか	385	282			6	-0.3	土器・漆糸・クリ・トチ・クルミ		
1664	21C1·2·6～8	SD1420-2b層	SD1420-2b層	不整形	弧状	緩やか	(342)	276			5	-0.13	クルミ		
1665	21B14	SD1420-2a層	SD1420-2a層	不整形			(76)	28				-0.51	クリ・トチ・クルミ		
1666	21B14·15·19·20	SD1420-2a層	SD1420-2a層	不整形	弧状	緩やか	428	200			6	-0.11	粘土・クリ		
1668	21C9·14	SD1420-2a層	SD1420-2a層	不整形			167	(140)				-0.57	トチ		
1677	21B20	SD1420-2a層	SD1420-2a層	楕円形			74	63				0.09	クリ・クルミ		
1680	21C2·7	SD1420-2c層	SD1420-2c層	不整形	弧状	緩やか	153	150			12	-0.06	土器		
1682	22B24·25	SD1420-2a層	SD1420-2a層	不整形			224	96				-0.5	クルミ		
1697	22C10	SD1420-1b層	SD1420-1b層	不整形			105	95				-0.22	土器・不定形石器・漆糸・クリ		
1703	23B12·13·17·18	SD1420-1a層	SD1420-1a層	不整形			(100)	90				0.01	土器・漆糸		
1704	22B20	SD1420-1c層	SD1420-1c層	不整形			75	(20)				-0.27	磨石類		
1709	23C7	SD1420-1a層	SD1420-1a層	長方形			(92)	32				-0.13	土器		
1710	23B21·22	SD1420-1c層	SD1420-1c層	不整形			110	73				-0.46	漆糸・クリ・クルミ		
1711	23B17·22	SD1420-2b層	SD1420-2b層	楕円形			38	26				-0.53			
1712A 1712B	23B14·22·23	SD1420-2c層	SD1420-2c層	不整形			106	(97)				0.01			
1722	23B25	SD1420-1層	SD1420-1層	楕円形	弧状	緩やか	90	75			2	-0.09	土器・漆片・漆糸・クルミ		
1742	23BC20·25,5	SD1420-2a層	SD1420-2a層	不整形	弧状	緩やか	173	(210)			3	-0.01	土器・粘土・クリ		
1744	23B15	SD1420-2a層	SD1420-2a層	不整形	弧状	緩やか	150	(140)			1	-0.06	土器		

遺構観察表（28）炭化物集中範囲（SC）

（　）：推定値

遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	出土遺物	切り合い	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度				
1747	23B20·25	SD1420-2a層	SD1420-2a層	不整形	弧状	緩やか	250	205			1	0.04	土器・クルミ		2層に褐色粘土層あり
1748	23B25,23C5	SD1420-2c層	SD1420-2c層	不整形	弧状	緩やか	205	170			1	-0.01	土器・不定形石器・粘土・トチ・クルミ		
1756	25B7	SD1420-1層	SD1420-1層	不整形	弧状	緩やか	140	80			2	0.29	クルミ		
1761	26E3·4·8·9	SD1420-E5c層	SD1420-E5d層	不整形	弧状	緩やか	85	47			1	0.03	トチ		
1762	24E11·12	SD1420-E4c層	SD1420-E4c層	不整形			143	28				0.26	土器		
1767	24B8	SD1420-2b'層	SD1420-2b'層	楕円形	弧状	緩やか	107	(35)				0.23	クルミ		
1768	24B14·15·18～20·24·25	SD1420-2a層	SD1420-2a層	不整形			369	(362)			8	0.10	土器・石鏃・不定形石器・磨石類・多面体敲石・土製品・漆糸・漆片・クリ・トチ・クルミ		褐色粘土含む（骨）
1769	24B15·19·20	SD1420-1層	SD1420-1層	不整形			(235)	128				0.04	土器		
1771	26E8·13	SD1420-E5c層	SD1420-E6a層	不整形	弧状	緩やか	(54)	53			2	0.46			
1772	26E13·14	SD1420-E5c層	SD1420-E5c層	不整形	弧状	緩やか	56	35			3	0.47			
1775	24E13～15	SD1420-E4c層	SD1420-E4c層	不整形	弧状	緩やか	330	(83)			9	0.34	土器・石鏃・漆糸・クリ・クルミ		
1787	25B6·7·8·11～13	SD1420-2b層	SD1420-2c層	不整形	弧状	緩やか	380	(210)			2	0.1	土器・粘土・クリ・クルミ		
1788	25E17·18·22·23	SD1420-E10層	SD1420-E10a層	不整形	弧状	緩やか	(168)	(108)			1	0.4	クリ・トチ		
1789	25E17·18	SD1420-E11a層	SD1420-E11a層	不整形	弧状	緩やか	(173)	(92)			2	0.36	クリ		
1794	24A25,24B5,25A21,25B1	SD1420-2a層	SD1420-2a層	不整形	弧状	緩やか	210	136			1	0.28	土器・粘土・クルミ・骨片		褐色粘土含む（骨）
1795	25B1·2	SD1420-2b層	SD1420-2b層	不整形	弧状	緩やか	82	(45)			1	0.31			
1796	25B2·3	SD1420-2c層	SD1420-2c層	不整形	弧状	緩やか	(80)	(56)			1	0.22	土器		
1797	25B3	SD1420-2c層	SD1420-2c層	不整形	弧状	緩やか	50	(24)			1	0.22	土器		
1799	24A23～25,24B3～5	SD1420-2a層	SD1420-2a層	不整形			420	(150)				0.27			
1801	24B23·24,24C3·4	SD1420-2b層	SD1420-2b層	不整形			125	80				0.2	漆糸		
1817	24A24,24B4	SD1420-2b層	SD1420-2b層	不整形			72	42				0.27			
1821	24B4	SD1420-2d層	SD1420-2c層	円形			(46)	42				0.04			
1822	25A22	SD1420-2e層	SD1420-2e層	不整形			70	25				0.05			
1826	24E17	SD1420-E6c層	SD1420-E6c層	不整形			83	(26)				0.49			
1829	27E12·13·17	SD1420-E10層	SD1420-E10b層	不整形	弧状	緩やか	160	(106)			3	0.11			
1840	27E12·17	SD1420-E10層	SD1420-E10c層	不整形	弧状	緩やか	98	(55)			2	0.01			
1864	8E25,8F5,9F1	S1層	S3層	不整形	弧状	緩やか	203	35			28	1.244	土器		
1865	8E25 9E21·22,9F1·2	S1層	S3～S1層	不整形	弧状	緩やか	(390)	(144)			6	1.176	土器		
1866	9F2·3·7·8	S1層	S4～S1層	長方形	弧状	緩やか	185	93			9	1.27	土器・不定形石器		
1867	9E25,9F5·10	S1層	S3～S1層	不整形	弧状	緩やか	303	(176)			11	1.241	土器・不定形石器・クルミ		
1874	9F1·2·6·7,10F16·21	S1層	S2～S1層	不整形	弧状	緩やか	175	(70)			5	1.276			
1875	9E23,9F2·3	S1層	S4～S1層	長方形	弧状	緩やか	165	50			6	1.271	土器・石鏃		
1877	10E23,10F2·3·7·8	S3層	S3層	不整形	弧状	緩やか	(280)	(104)			9	1.233			
1878	10E24	S3層	S3層	不整形	弧状	緩やか	34	(27)			1	1.195			
1880	10F9	S3層	S4層	楕円形	弧状	緩やか	107	64			1	1.302			
1881	10F5·10	S3層	S3層	楕円形	弧状	緩やか	91	40			1	1.295	土器		
1882	10E24·25,10F3～5	S1層	S3層	不整形	弧状	緩やか	(410)	200			8	1.202			
1898	7F18·23	SD19-5層 (S2～S1層)	SD19-5層 (S2～S1層)	円形	弧状	緩やか	30	30			1	0.785			
1899	7F16	SD19-5層 (S2～S1層)	SD19-5層 (S2～S1層)	楕円形	弧状	緩やか	75	35			2	1.275			
1900	6F14·15·19·20	SD19-5層 (S2～S1層)	SD19-5層 (S2～S1層)	楕円形	弧状	緩やか	105	78			2	1.356			
1901	9F7·12	S1層	S2～S1層	不整形	弧状	緩やか	230	111			2	1.333			
1909	8F5,9F1	S3層	S4層	不整形	弧状	緩やか	128	50			4	1.256			
1919	9F10	D2層	D2層	不整形	弧状	緩やか	73	(65)			3	1.164			
1933	16E24·25,16F3～5·7～9	S1層	S1層	不整形	弧状	緩やか	575	160			9	1.25	土器		
1954	17F2·3	S1層	S1層	長方形	弧状	緩やか	163	66			6	1.15			

遺構観察表（29）炭化物集中範囲（SC）

（ ）：推定値

遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	出土遺物	切り合い	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度				
1961	16F6·7·11·12	SD1420-3a層	SD1420-3a層	不整形	弧状	緩やか	235	(175)			4	1.317	土器		
1962	16E21,16F1·6	SD1420-3a層	SD1420-3a層	不整形	弧状	緩やか	280	(35)			6	1.294			
1966	15E24·25,15F5	K2層	S3層	不整形	弧状	緩やか	197	70			3	1.315			
1968	15E22·23,15F2·3	K2層	S2～S1層	不整形	弧状	緩やか	245	37			3	1.311			
1969	15F17	S4層	S4層	楕円形	弧状	緩やか	31	29			4	1.3			
1971	15F7·8·12·13		S4～S3層	楕円形	弧状	緩やか	173	132			3	1.32			
1972	15F13·14·18·19	S1層	S1層	不整形	弧状	緩やか	210	(140)			2	1.34			
1973	15F17～20·22～25	S1層	S1層	不整形	弧状	緩やか	468	(60)			3	1.319			
1975	15F19	Ⅵ層	S2～S1層	方形	弧状	緩やか	64	56			2	1.335			
1981	14F9	S3層	S3層	不整形	弧状	緩やか	80	(30)			2	1.321			
1982	14F9·14	Ⅵ層	S1層	楕円形	弧状	緩やか	39	24			3	1.3			
1992	14F16·17·21·22	S1層	S1層	不整形	弧状	緩やか	(143)	(104)			3	1.3			
1993	14F17	S1層	S1層	楕円形	弧状	緩やか	73	58			1	1.30			
1995	14F23	S1層	S1層	不整形	弧状	緩やか	45	(22)			1	1.322			
1997	14F19·20	S1層	S1層	楕円形	弧状	緩やか	36	33			1	1.315			
2000	14F8·9	K4層	S5層	楕円形	弧状	緩やか	25	23			1	1.329			
2004	14F15	S4層	S4層	円形	弧状	緩やか	48	46			1	1.329	土器		
2005	14F5·10	S1層	S1層	不整形	弧状	緩やか	(65)	(7)			1	1.342			
2017	22F11	SD1420-E4c層	SD1420-E4c層	不整形	弧状	緩やか	(83)	(38)			2	0.63			
2019	22F14	SD1420-E5c層	SD1420-E5c層	不整形			165	70				0.776	土製品		
2022	22F19·20	SD1420-E8層	SD1420-E8層	不整形	弧状	緩やか	73	(36)			5	0.814			
2032	23F4·5·9·10	SD1420-E5c③層	SD1420-E5c③層	不整形	弧状	緩やか	155	(83)			2	0.76	土器・漆糸・クルミ		
2033	23F7·8·12·13	SD1420-E5c③層	SD1420-E5c③層	不整形	弧状	緩やか	243	(160)			12	0.804	土器		
2034	22F1·2·6·7	SD1420-E5c③層	SD1420-E5c③層	不整形	弧状	緩やか	105	88			7	0.68	土器		
2036	23F12·13	SD1420-E6c②層	SD1420-E6c②層	不整形	弧状	緩やか	(180)	154			11	0.811	土器		
2042	23F4·5·9·10	SD1420-E6c②層	SD1420-E6c②層	不整形	弧状	緩やか	160	(85)			9	0.705	土器・漆糸		
2043	23F15	SD1420-E6c②層	SD1420-E6c②層	楕円形	弧状	緩やか	114	64			6	0.854			
2066	23F11	SD1420-E8層	SD1420-E8層	不整形	弧状	緩やか	71	(53)			3	0.747			
2095	23F4·5·9·10·14·15	SD1420-E10層	SD1420-E10層	不整形	弧状	緩やか	305	(205)			3	0.53	土器・トチ・クルミ		
2096	23F4·5·9·10·14·15	SD1420-E12a層	SD1420-E12a層	不整形	弧状	緩やか	303	(235)			4	0.58	土器・漆糸・トチ・クルミ		
2104	9F15	D2層	D2層	楕円形	弧状	緩やか	72	50			2	1.182			
2180	16E23	S4～S3層	S4～S3層	不整形	弧状	緩やか	106	(41)			5	1.241			
2187	15F10	S2層	S2層	不整形	弧状	緩やか	80	(24)			1	1.325			
2188	14F3·4·8·9	S1層	S1層	不整形	弧状	緩やか	94	(35)			2	1.311			
2223	14F6·7	S4層	S4層	不整形			167	(110)				1.28			
2224	14F7·8·12	S4～S3層	S4～S3層	不整形			(180)	60				1.3			
2225	14F13·14	S4層	S4層	方形	弧状	緩やか	180	145			3	1.28	土器		
2227	12·13EF	S1層	S1層	不整形	弧状	緩やか	(1030)	(920)			8	1.231	土器・石鏃・石錐・不定形石器・両極石器・磨石類・砥石・粘土・漆糸・漆片・糸玉・クリ・トチ・クルミ		
2229	13E23·24	S1層	S1層	楕円形			82	(54)				1.18			
2247	11～13EF	S3層	S3層	不整形	弧状	緩やか	(2620)	(1000)			2	1.058	土器・石鏃・石錐・不定形石器・両極石器・石匙・打製石斧・石核・磨石類・砥石・玉類・粘土・漆糸・漆片・糸玉・腕輪・トチ・クルミ		
2252	13F9·10·14·15	S4層	S4層	不整形			60	36				1.26			
2266	10～13EF	S4層	S4層	不整形	弧状	緩やか	(2900)	(1050)			2	1.014	土器・石鏃・石錐・不定形石器・両極石器・石篦・磨製石斧・石核・磨石類・石皿類・砥石・土製品・粘土・漆糸・漆片・糸玉・腕輪・クリ・トチ・クルミ		
2343	23F13·18·19·20	SD1420-E10層	SD1420-E10層	不整形			450	210				0.66	土器		
2346	23F6·7·11·12	SD1420-E10層	SD1420-E10層	不整形	弧状	緩やか	230	(135)			2	0.62	土器		
2354	23F6·7·11·12	SD1420-E12a層	SD1420-E12a層	不整形	弧状	緩やか	248	(105)			2	0.58	土器・石鏃・磨石類・砥石		
2359	23F13～15·18～20	SD1420-E12a層	SD1420-E12a層	不整形	弧状	緩やか	343	(262)			3	0.62	土器・磨石類		
2360	23F15	SD1420-E12a層	SD1420-E12a層	楕円形			105	67				0.71			

遺構観察表（30）炭化物集中範囲（SC）

（ ）：推定値

遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	出土遺物	切り合い	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度				
2361	23E23,23F3･4･8	SD1420-E12a層	SD1420-E12a層	不整形	弧状	緩やか	(300)	240			3	0.326	土器		
2424	13F11･16･17･21～23	S5層	S5層	不整形			(445)	(300)				1.226	土器・石鏃・石錐・不定形石器・磨製石斧・石核・磨石類・石製品・粘土・漆糸・糸玉・トチ・クルミ		
2425	13F11	S5層	S5層	楕円形			125	(75)				1.251	土器・不定形石器		
2426	13F17	S5層	S5層	不整形			85	(48)				1.255	土器・不定形石器		
2427	13F17･18	S5層	S5層	楕円形			68	55				1.258	土器		
2477	27F14･19･20	SD1420-E6c③層	SD1420-E6c③層	不整形			102	60				0.213			
2480	27E21･22,27F1･2	SD1420-E8層	SD1420-E8層	不整形			264	(73)				0.028	土器		
2481	27E24	SD1420-E8層	SD1420-E8層	不整形			114	35				-0.119			
2533	15F20	Ⅵ層	S1層	楕円形	弧状	緩やか	36	26	33	25	1	1.36			
9907	22G2･3														99年度用水路立会い、旧SX1
9908	22G7														99年度用水路立会い、旧SX2
9909	20G2														99年度用水路立会い、旧SX3

遺構観察表（31）堅果類廃棄範囲・性格不明遺構（SX）

遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					出土遺物	切り合い	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度			
36	5D8･9	S1層	S2層	不整形	弧状	緩やか	85	40	130	90	6			盛土状遺構
112	7E3～5･9･10･15 8E1･2･6･7･11～13･18	S1層	S4～S1層	不整形	弧状	緩やか	1150	440			1	土器・石鏃・石錐・不定形石器・両極石器・打製石斧・石核・磨石類・粘土・漆糸・糸玉・クリ・トチ・クルミ		
743	10E10	S2層	S4層	不整形	弧状	緩やか	23	15	30	25	3	磨石類	SC767中	盛土状遺構
754	10E4	S3層	S4層	楕円形	弧状	緩やか	37	27			10		SC767中	赤色顔料塊
763A 763B	8E12･13 8E7･12･13･17･18	SD19-10層	S2～S1層	不整形	弧状 弧状	緩やか 緩やか	210 150	60 45			8 12	土器・不定形石器・漆糸・クリ・トチ・クルミ		
855	14E17	S4層	S4層	不整形	弧状	緩やか	14	10	25	17	2			盛土状遺構
958	17D14･15･17～24 17E1～3･6～8･11～13･16･17	S4～S3層	S4～S3層	不整形	弧状	緩やか	(1440)	250			32	土器・石錐・不定形石器・漆糸・糸玉・籠・クリ・トチ・クルミ		
1446	17D19	SD1420-8層	SD1420-8層	方形			46	37				土器・石器		
1528	19～21D,18～20E	SD1420-B7層	SD1420-B7層	不整形	弧状	緩やか	(2320)	(640)			30	土器・石鏃・不定形石器・石核・磨石類・櫂・クリ・トチ・クルミ		B5層からB7層に変更
1583	20～21C,19～21D,19E	SD1420-2c～2a層	SD1420-2c～2a層	不整形	弧状	緩やか	(2640)	(380)			10	土器・石鏃・不定形石器・両極石器・石核・櫂・トチ・クルミ		
1596	21～22B,21～22C	SD1420-2c層上面	SD1420-2c層	不整形	弧状	緩やか	2020	700			22	土器・漆糸・クリ・トチ・クルミ		
1684	22BC	SD1420-2b層	SD1420-2a'層	不整形	弧状	緩やか	(880)	(380)			2	土器・漆糸・クリ・トチ・クルミ		
1685	22BC 23B	SD1420-2a'層	SD1420-2a'層	不整形	弧状	緩やか	(1184)	(480)			8	土器・石鏃・両極石器・石核・不定形石器・漆糸・漆片・糸玉・腕輪・クリ・トチ・クルミ		
1686	22BC 23BC	SD1420-2a'層	SD1420-2a'層	不整形	弧状	緩やか	(1172)	(680)			8	土器・不定形石器・砥石・土製品・籠状編物・漆糸・クリ・トチ・クルミ		籠出土
1687	22BC 23BC	SD1420-2b層	SD1420-2b層	不整形	弧状	緩やか	(694)	(400)			8	土器・石鏃・両極石器・不定形石器・砥石・玉類・漆糸・糸玉・クリ・トチ・クルミ		
1688	22BC	SD1420-2b'層	SD1420-2b'層	不整形	弧状	緩やか	(792)	(384)			6	土器・石鏃・石錐・不定形石器・磨石類・砥石・粘土・漆塗り弓・漆糸・クリ・トチ・クルミ		
1689	22BC	SD1420-2b'層	SD1420-2c層	不整形	弧状	緩やか	(1296)	(372)			8	土器・石鏃・不定形石器・磨製石斧・磨石類・粘土・漆糸・クリ・トチ・クルミ		
1702	24～26D,22～26E	SD1420-E6b層	SD1420-E6b層	不整形	弧状	緩やか	(4440)	(480)			14	土器・石鏃・磨石類・多面体敲石・籠・クリ・トチ・クルミ		
1716	23B11	SD1420-1c層	SD1420-1c層	不整形			(116)	(64)				土器		
1717	23B20･25	SD1420-B9層	SD1420-B9層	不整形	弧状	緩やか	(495)	(170)			22	土器・石鏃・石錐・両極石器・石核・不定形石器・多面体敲石・クルミ		
1757	24B16	SD1420-B4層上	SD1420-B4層	不整形	弧状	緩やか	445	(55)			6	土器		
1776	24E8･9･13～15	SD1420-E6b層	SD1420-E6b層	不整形	弧状	緩やか	(380)	(160)			8	土器・石皿類・漆糸・漆片・クリ・トチ・クルミ		
1780	24E6	SD1420-E6a層	SD1420-E6b層	不整形	弧状	緩やか	(122)	(116)			3	土器・漆糸・クリ・トチ・クルミ		
1785	25D24	SD1420-E6b層	SD1420-E6b層	不整形	弧状	緩やか	150	47			6	クリ・トチ		トチノキ種皮多数出土
1835	25E12	SD1420-E10a層	SD1420-E10a層	不整形	弧状	緩やか	93	(68)			1	トチ		

遺構観察表（32）堅果類廃棄範囲・性格不明遺構（SX）

（ ）：推定値

遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					出土遺物	切り合い	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度			
1836	25E18･19	SD1420-E10a層	SD1420-E10a層	不整形	弧状	緩やか	52	40			3	土器・粘土		褐色粘土含む（骨）
1837	25E9	SD1420-E10a層	SD1420-E10a層	不整形	弧状	緩やか	130	36			6	クリ・トチ		
1841	24E13･14	SD1420-E12b層	SD1420-E12b層	不整形	弧状	緩やか	112	（90）			6	漆糸・トチ・クルミ		
1844	24E8～10･12～15	SD1420-E12b層	SD1420-E12b層											
1986	17E22･23,17F1～3･6～9	SD1420-B8層	SD1420-B8層	不整形	弧状	緩やか	520	450			4	土器・石鏃・石錐・両極石器・石核・トチ・クルミ		
1987	16F,17EF	SD1420-1a層	SD1420-1a層	方形	弧状	緩やか	（920）	（696）			12	土器・石鏃・不定形石器・磨石類・漆糸・クリ・トチ・クルミ		
2018	22F5･7～10･12～15･17～20	SD1420-E5c層	SD1420-E5c層	不整形	弧状	緩やか	（960）	（560）			8	土器・石鏃・石錐・不定形石器・両極石器・磨石類・漆糸・トチ・クルミ		糸玉出土
2020	21F15･20,22E22～25,23E21 22F2～5･8･9･11～14･16～18	SD1420-E6b層	SD1420-E6b層	不整形	弧状	緩やか	（1250）	（400）			13	土器・石鏃・石錐・不定形石器・両極石器・打製石斧・石核・磨石類・石製品・漆糸・漆片・トチ・クリ・クルミ		瓢箪形石器出土
2035	21F5･8～10･12～14･17･18 22E22,22F1･2	SD1420-E6b層	SD1420-E6b層	不整形	弧状	緩やか	（1350）	（135）			20	土器・漆糸・クリ・トチ・クルミ		
2090	23F14	SD1420-E10層	SD1420-E10層	不整形	弧状	緩やか	35	28			4	クリ・トチ・クルミ・骨片		
2092	23F17･18･22･23	SD1420-E10層	SD1420-E10層	不整形	弧状	緩やか	（155）	88			4			
2120	8E24,8F4		SD19-16層	不整形			（112）	（66）				土器・石核		
2182	17F3･4･8･9	SD1420-1b層	SD1420-1b層	不整形	弧状	緩やか	180	（165）			2	漆糸・クリ・トチ・クルミ		
2183	17F3･4･8･9	SD1420-1c層	SD1420-1c層	不整形			（356）	（140）						
2184	16F5･10･15･20 17E22～25,17F1～9･11～13･16･17	SD1420-2a層	SD1420-2a層	不整形	弧状	緩やか	1200	510			8	土器・石錐・不定形石器・両極石器・磨製石斧・石核・磨石類・漆糸・クリ・トチ・クルミ		
2185	17E24,17F3～5･7～13･16･17	SD1420-2b層	SD1420-2b層	不整形	弧状	緩やか	（980）	（300）			11	土器・不定形石器・両極石器・石核・漆糸・クリ・トチ・クルミ		
2196	16F4･8･9･11～14･16･17	S4～S3層	S4～S3層	不整形	弧状	緩やか	916	180			6	土器・クリ・トチ・クルミ		
2197	16F4･5･8～14･16～18	S4～S3層	S4～S3層	不整形	弧状	緩やか	1070	200			8	土器・不定形石器・クリ・トチ・クルミ		
2218	14F4･9･10･14	S5層上	S5層	不整形	弧状	緩やか	452	235			6	土器		
2246	14E24･25,14F4･5･9	S5層下	S5層	不整形	弧状	緩やか	370	194			1			
2249	13E25,13F5 14E21～24,14F1～3	S3層	S3層	不整形	弧状	緩やか	738	270			3	土器・腕輪		
2251	13E23･24,13F4･5･9･10 14E21～23,14F1～3	S4層	S4層	不整形	弧状	緩やか	（820）	（200）			2	土器・石錐・砥石・漆糸・トチ・クルミ		
2278	14F6･11･16	S5層	S5層	不整形	弧状	緩やか	290	110			4	トチ・クルミ		木の実集中
2282	13F6	S4層	S4層	楕円形		急斜度	140	（96）			4	土器・打製石斧・石核・クルミ	SC2266中	
2315	14F6･11	S5層	S5層	不整形	弧状	緩やか	（57）	（40）			9			
2318	13F19･24	S5層	S5層	不整形			（175）	（90）				土器・両極石器・トチ・クルミ		
2335	13E25	S5層	S5層	不整形			105	45						
2353	23F17･18･22･23	SD1420-E12a層	SD1420-E12a層	不整形	弧状	緩やか	233	104			7	土器・石鏃・石錐・不定形石器・粘土・漆糸・クリ・トチ・クルミ		
2355	24E22	SD1420-E8層	SD1420-E8層	楕円形	弧状	緩やか	（43）	（38）			1	骨片		
2366	23F12	SD1420-E10層	SD1420-E10層	楕円形	弧状	緩やか	23	15			1	骨片		
2370	23F18･19･23･24	SD1420-E12a層	SD1420-E12a層	方形	弧状	緩やか	228	179			7	土器・不定形石器・トチ・クルミ		
2398	24E23･24,24F3～5･8･9	SD1420-E12a層	SD1420-E12a層	不整形	弧状	緩やか	278	219			4	土器・漆糸・トチ・クルミ・骨片		
2428	13F21	S5層	S5層	円形	弧状	緩やか	8	8			5			骨集中範囲
2429	13F21	S5層	S5層	楕円形	弧状	緩やか	（24）	（16）			1			骨集中範囲
2454	11E24,11F4	S4層	S4層	楕円形			70	38					SC2266中	骨集中範囲
2455	11E24	S4層	S4層	楕円形			30	24					SC2266中	骨集中範囲
2459	10F15	D2層	D2層	不整形	弧状	緩やか	120	90			1	土器		骨集中範囲
2501	10F9･10･14･15	D2層	D2層	不整形	弧状	緩やか	275	215			4	土器・磨製石斧		腐植物集中範囲
2502	10F3	D2層	D2層	楕円形	弧状	緩やか	（88）	（60）			5	土器		腐植物集中範囲
2528	16F4･5･8～18	S4～S3層	S4～S3層	不整形	弧状	緩やか	（980）	（280）			10	土器・石核・クリ・トチ・クルミ		
9844	15G3～5･8～10													98年度用水路立会い、旧SX1

遺構観察表（33）生粘土（ND）

（ ）：推定値

遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	出土遺物	切り合い	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度				
108	5E4·9	S1層	S1層	不整形			40	24				1.45			
778	13E15	S3層	S3層	不整形			39	35			1	1.29	粘土	SC776直上	
779	14E1	S3層	S3層	不整形			45	20			1	1.3	粘土	SC776直上	
835	14E11	S4層	S4層	不整形			64	17			2	1.29	粘土	SC801直上	
836	15D14·19	S3層	S3層	不整形			49	20			2	1.37	粘土		
837	15D19	S3層	S3層	不整形			97	72			2	1.38	粘土		
971	17E9	SD1420-1a層	SD1420-1a層	不整形			40	20			1	1.387	粘土		
1488	18E3·8	SD1420-2a層	SD1420-2a層	方形			75	56			1	0.966	粘土		
1494	18E3·8	SD1420-2a層	SD1420-2a層	不整形			113	104			1	0.97	粘土		褐色粘土
1537	18E3·4·8·9	SD1420-2a層	SD1420-2a層	不整形			90	85			1	0.956	粘土		
1730	23B25	SD1420-1層	SD1420-1層	不整形			34	24				0.94	粘土		
1731	23B25	SD1420-2a層	SD1420-2a層	楕円形			54	40				0.03	粘土		
1733	23B25	SD1420-2a層	SD1420-2a層	不整形			95	60			4	0.006	粘土		
1746	22B25	SD1420-2b'層	SD1420-2c層	不整形			26	24			1	-0.88	粘土	SX1689直下	
1755	24B15	SD1420-1層	SD1420-1層	不整形			38	13			13	0.23	粘土		
1758	23B20,24B16	SD1420-2b層	SD1420-2b層	不整形			60	27				0.02	粘土		
1779	24B20	SD1420-2a層	SD1420-2a層	円形			34	30			5	0.23	粘土		
1806	24B15	SD1420-1層	SD1420-1層	不整形			25	12			7	0.13	粘土		
1850	23B25,24B21	SD1420-1層	SD1420-1層	不整形			59	33			4	0.83	粘土		
1931	14F21		S4～S3層										粘土		
2254	14E22·23,14F2	S3層	S3層	不整形			68	47			1	1.209	粘土	SX2249直上	
2267	14E21	S3層	S3層	楕円形			31	24			3	1.175	粘土		
2275	14F6	S3層											粘土		
2322	12E24·25	S3層	S4層	不整形			61	30				1.219	粘土		
2402	24F4	SD1420-E12a層	SD1420-E12a層	不整形			20	16			2	0.355	粘土		
2447	12E24·25	S3層	S3層	楕円形			32	20				1.24	粘土	SC2247直上	
2510	11F5	S4層	S4層	不整形			62	30			1	1.817	粘土	SC2266直上	
2526	12E22	S4層	S4層	楕円形			47	17				1.072	粘土	SC2266直上	
2527	12F20	S4層	S4層	不整形			49	22				1.292	粘土	SC2266直上	

遺構観察表（34）噴砂（FS）

（ ）：推定値

遺構No.	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	出土遺物	切り合い	備考
				平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度				
849	15D17·18·22～24 15E3·4	S3層	S3層	不整形	弧状	緩やか	526	116			3	1.35	クルミ		
866	15D9·10·14·15	S3層	S3層	不整形			350	133				1.33	土器		
1834	24E19·20,25E16	SD1420-E10層		不整形			(310)	16			84	-0.22			
2340	11E21·22,11F1·2	S2層	S3～S2層	不整形			260	135				1.211			

土器観察表（1）

胎土の略称　雲母…雲、金雲母…金、黒雲母…黒、石英…英、長石…長、角閃石…角、海面骨針…海骨、白色粒子…白
部位の略称　口縁端部…端、口縁部…口、頸部…頸、肩部…肩、体部…体、体部上位…体上、体部下位…体下、底部…底、台部…台、底面…面
施文手法の略称　隆線手法①…①、隆線手法②…②、隆線手法③…③、隆線手法④…④、浮線手法…（浮）、沈線手法…（沈）
突起の略称　山形突起…山形1、山形突起2…山形2

報告№	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
1	P50-1-5C8,SC3-2-5B24,SC111-8E10,Ⅶ-5B24・5C10		深鉢	A6a			(12.0)	5.8	0.063	金・雲・長	口：平行沈線文・縄文L、体：縄文L・ミガキ、底：ケズリ	ナデ・ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	体底・面濃い	体底・面	1.06ℓ
2	SK757-5E10,SC82-5E9・6E6,S1-5E10・6E6,Ⅵ-6E6		甕	D2e			23.0		0.313	金・雲・長	口：結節縄文LR、頸体：縄文LR	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口～肩		
3	SH13-7・Ⅶ-4B15,Ⅵ-4E12		甕	B3e					0.000	金・雲・長	頸：ナデ、肩：撚糸文L	ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	頸肩	頸肩	外面剥落
4	SH32-7-5C12		鉢	A		8.9	(14.2)	6.4	0.188	金・雲・長	口：弧状入組沈線文、体：ケズリ・ナデ	ナデ	2.5Yにぶい黄色	2.5Yにぶい黄色			
5	SH32-7-5C12		鉢	A		9.9	13.3	6.5	0.438	金・雲・長	口～体：ケズリ・ナデ、底：ケズリ左	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色			1.13ℓ
6	SH8・Ⅶ-5B23,Ⅵ-5B22		深鉢	B1	e3	29.0	27.5	6.8	0.875	金・雲・長	山形1、口：浮線文④、体：条痕文・部分的に縄文L	ケズリ+ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口～体上スス濃い	口体下、体下やや濃い	埋設土器SHのため体下の器面が摩滅している、7.35ℓ
7	45トレンチ（5C13・16～18・21～24）		浅鉢	C1	a2	9.8	20.0	6.8	0.313	金・雲・長	山形2、口：浮線文④、体：ミガキ	口：平行沈線文、ナデ・ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～底	口	45トレンチ
8	S1-5B5,Ⅶ-4B15・5B11		浅鉢	D1	b1	7.9	20.2	9.8	0.813	金・雲・長	波状口縁、口：浮線文④、体：ミガキ、底：ナデヨコ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口体上	口	0.98ℓ
9	SC82-5E4		浅鉢	D1	d5	6.3	15.4	5.8	0.250	金・雲・長	山形2、口体：浮線文③、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	2.5Y暗灰黄色	10YR灰黄褐色	口～底・面	口体上	0.40ℓ
10	S1-5E5		甕	B2a	f1		(29.4)		0.063	金・雲・長	口：浮線文④、頸：綾杉文、肩：浮線文、体上：結節縄文LR	ナデ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口～体上	口～体上	
11	SC82-5E4・5・6E6,S2-5E3		甕	E2e			22.0		0.250	雲・長	口～体上：条痕文（櫛歯状）か半截竹管	丁寧なナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～体上濃い	体上	
12	Ⅶ-5B3,Ⅵ-5B3・4		甕	E1a	e3	(17.0)	14.0	6.8	0.313	金・雲・長	口頸：浮線文（浮）・縄文LR、体：縄文LR	口：平行沈線文、ナデ	10YR褐灰色	10YR黒褐色	口～体上濃い	口～体上濃い	1.80ℓ
13	S1・Ⅵ-5B5,Ⅶ-5B5・6B1		甕	B3e				10.0	0.000	雲・長	頸：ナデヨコ、肩体：縄文LR、ナデ	ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄橙色	肩体上濃い	体下濃い	
14	SC82-5E3～5・8・9,S1-5E5・8		深鉢	A1	e3	15.4	17.7	7.8	0.500	雲・長	山形1・2、口：浮線文④、体：縄文LR、体下底：ナデヨコ	丁寧なナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～体下濃い	口～底	吹きこぼれ痕あり、2.07ℓ
15	SC82-5E4・5,S1-5E8		深鉢	B1	a2	15.0	14.8	6.8	0.313	金・雲・長	口：浮線文④+縄文LR、体：縄文LR	ミガキ	10YR黒色	10YR灰黄褐色	口～体	口～底	1.38ℓ
16	SC3-2・SC3-1・Ⅶ-5C3		深鉢	C6e		12.8	11.0	5.3	0.688	金・雲・長	口：平行沈線文、体：ナデ、底：ナデヨコ	ナデ	7.5YR黒色	7.5YR灰褐色	口～体下濃い	口～底	0.56ℓ
17	SC35・SC35A-5D19		甕・深鉢					6.2	0.000	金・雲・長	体：綾杉文	ナデ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄橙色	体下	底	
18	Ⅶ-5C1		深鉢	C6e			27.8		0.625	金・雲・長	口縁3単位にくぼむ、口：平行沈線文、体上：ナデ左上、体下：ナデタテ	ナデ	2.5Y浅黄色	10YRにぶい黄橙色		口	
19	SC35-5D25,SC82-5E9・10,S1-5E8		深鉢	B6a			36.0		0.313	金・雲・長	口：平行沈線文・縄文LR	ナデ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄褐色			
20	Ⅶ・Ⅵ-5B15		深鉢	B7d		40.6	31.9	9.2	0.875	雲・長多い	ゆるい波状口縁、口体：条痕文	ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～体上濃い、体下底	体下コゲ	18.11ℓ
21	SC82-5D25,S1-5E14・15		深鉢	A8		29.0	31.0	12.0	0.563	金・雲・長	口体：ナデ・ミガキ、底：ケズリ・ナデヨコ	ナデ・ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口体		内側器面剥落、埋設土器の可能性あり、8.78ℓ
22	S2-5D7・5E3,S1-5D1・2,Ⅶ-5C15・22		深鉢	C7b			34.2		0.375	金・雲・長	口：結節縄文LR、体：縄文LR	ナデ	7.5YR褐灰色	7.5YR黒褐色	体下		
23	SC82-5E4,S1-5E3		甕・深鉢					10.0	0.000	金・雲・長	体：撚糸文R、底：ナデヨコ	ナデ	2.5Y浅黄色	2.5Y浅黄色	体上下	体上下	
24	P1860-1-9F20,D2-9F15		甕・深鉢					9.5	0.000	金・雲・長	体下：網目状撚糸文R、底：ナデヨコ	ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	体下濃い	体下	
25	SK717-1-9E14,S2・S1-9E9		浅鉢	D1	a1	13.7	31.8	7.1	0.063	金・雲・長	波状口縁、口：浮線文④、体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	2.5Y灰黄色	2.5Y暗灰黄色	口～底・面	口～体下・面	4.86ℓ
26	P710-7-9E12・13		浅鉢	G1	f2		20.0		0.250	金・雲・長	口：浮線文③、ミガキ	ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR黒褐色	体	口～体	外面赤彩
27	SK121-2-9E18		浅鉢	B1	a1		(18.0)		0.125	金・雲・長	波状口縁、口：浮線文（浮）	ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄橙色	口	口	
28	SK717-2-9E14,D2-9E24		浅鉢	B1	a1		?		?	金・雲・長	波状口縁、口：浮線文（浮）、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口	口	
29	SK717-3-9E14,S4-9F5,S3-9E4・9		深鉢	D6a			15.2		0.375	金多い・雲・長	口：平行沈線文・ミガキヨコ、体：縄文LR	ナデヨコ+ミガキヨコ	7.5YR褐色	7.5YRにぶい褐色	口体上	口体上	焼き良く硬質
30	SH118-9D20		深鉢	A6a		(43.0)	37.4	11.0	0.563	金・雲・長	口：縄文LR・平行沈線文・条痕文ヨコと左上、体：条痕文タテ	ナデ	2.5Y灰黄色	10YRにぶい黄橙色	口～体上濃い底	体下バンド状	30.71ℓ
31	SX2459・SX2501・D2・S1-10F15,S5-10F20	D	浅鉢	D1	a1	11.8	34.2	7.8	0.563	金・雲・長	山形1、口：浮線文④、体：ナデ+ミガキ	口：平行沈線文、丁寧なナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			胎土分析、4.96ℓ
32	SD19-23-8F19,D4-9E23	D	浅鉢	D1	a2		(31.0)		0.188	雲・長	口：浮線文・上位に突起、ミガキ	ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～体下濃い	口～体	6.90ℓ
33	D2-8F5	D	浅鉢	B1	b1		(24.6)		0.063	雲・長	口：浮線文④・ミガキ	ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口	口	
34	SX2501-10F9,SD19-23-8F19	D	浅鉢	B1	b4	6.1	18.0	4.6	0.313	金・雲・長	口：浮線文（浮）、体：ミガキ	口：肥厚・平行沈線文、ミガキ	7.5Yにぶい褐色	7.5YR灰褐色	口～底・面	口～底・面	0.80ℓ
35	D2-11F11,S1-10F19,Ⅵ-10F15・11F2・12・16	D	鉢	A			14.4		0.375	雲・長	口：無文帯・眼鏡状文④、ナデ	口：肥厚・平行沈線文、ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			内外面赤彩
36	D2-9F9,S2-9F5	D	鉢	A				7.8	0.000	金・雲・長	口：平行沈線文、体：ミガキ	ミガキ	7.5YR灰褐色 10YR黒褐色	10YR灰黄褐色 10YR黒褐色	体上～底・面	体上下	
37	D2-10F19	D	甕	B2e			(33.2)		0.063	海骨・雲・長	口頸：条痕文	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～肩	口	
38	SX2459・SX2501-10F15	D	甕	B3d			30.6		0.625	金・雲・長	山形1、口：平行沈線文・縄文LR、頸：ナデ、肩：平行沈線文	ナデ・ミガキ	2.5Yにぶい黄色	2.5Yにぶい黄色	口～肩	口～肩	
39	D2-9F15・10F2・3	D	甕	B3d			38.8		0.250	金・雲・長	口：縄文Lヨコ・平行沈線文、頸：ナデ、肩：平行沈線文、体：縄文Lタテ	ナデ	2.5Yにぶい黄色	2.5Y暗灰黄色	口～体上濃い	体下バンド状	32.42ℓ
40	SD19-23-8F9・19,D2-10F2・8,Ⅵ-10F8	D	深鉢	A4	f1		(28.4)		0.125	金・雲・長	口：眼鏡状文・浮線文（浮）、体上：綾杉文・縄文LR	ナデ	10YR黒色	10YRにぶい黄橙色	口体上濃い	体上	
41	D2-9F10・10F6	D	深鉢	B2			28.2		0.313	金・雲・長	口：条痕文+沈線による工字文	ナデ	10YR黒色	10YRにぶい黄橙色	口体上濃い	口体上	

土器観察表（2）

報告No.	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
42	D2-10F3･9･10	D	甕･深鉢						0.000	金･雲･長	体：浮線文④･縄文LR	ナデ	10YR黒色	10YRにぶい黄褐色	体上下	体下	
43	D2-9E23	D	壺					4.9	0.000	金･雲･長	底：ケズリ･ナデヨコ	ナデ･ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	底･面		
44	S5-10F8	S5	浅鉢	B1	b1		(19.5)		0.125	金･雲･長	口：浮線文③、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口	口	外面赤彩
45	SC740･S2-11E7,S5-11D25,S4-11D25･11E8,S3-11E1･8,S2-11E7	S5	甕	E2b	e2		31.8		0.688	金･雲･長	口：縄文LR+平行沈線文、頸：縄文LR,肩：浮線文④、体：縄文LR	ナデ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄褐色	口～肩濃い	口～肩	
46	S5-10E22	S5	甕	C3d			?		?	金･雲･長	口：弧状隆帯･縄文LR･斜線文、頸：浮線文?	口：平行沈線文、ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口	口	
47	S5-10F10	S5	深鉢	B1	c		(21.6)		0.063	金･雲･長	山形1、口：浮線文④、体：縄文LR	ナデ	10YRにぶい黄橙色	7.5YR灰褐色	口体上	口体上	トレンチ
48	S5･Ⅵ-8E25	S5	深鉢	B8			(25.6)		0.125	金･雲･長	山形1、口：ナデ	ナデ･ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色			
49	SC767-10E4	S4	浅鉢	A1	f1		21.6		0.563	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文④、ミガキ	口：突帯状･平行沈線文､ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YR灰黄褐色	口～体	口～体	内外面赤彩
50	SC740-11E20	S4	浅鉢	A1	e3		(20.6)		0.063	金･雲･長	肩：浮線文③、ミガキ	口：突帯状･平行沈線文､ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR灰褐色	体上	口～体	
51	S4-11E11	S4	浅鉢	B1	a1		(24.4)		0.063	雲･長	波状口縁、口：浮線文③	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YR褐灰色	10YR灰黄褐色	口	口	外面赤彩
52	SC737･S4-10E15,S4～S3･S1-10E25	S4	浅鉢	B1	b1		9.0		0.313	金･雲･長	山形1、口：浮線文②、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
53	S4-10D19	S4	浅鉢	B1	d3		(21.9)		0.063	金･雲･長	端：沈線文、口：浮線文（浮）	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口		外面口縁赤彩
54	SC740-11E15･20,S4-11E15･12F13,S1-12F11	S4	浅鉢	B1	b1	12.5	34.4	8.6	0.375	金･雲･長	口：浮線文③、体：ミガキ	口：肥厚･平行沈線文	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色			一括、4.96ℓ
55	SC740-11E18	S4	浅鉢	B1	f1		(18.8)		0.063	金･雲･長	口：浮線文③･ミガキ	口：肥厚･平行沈線文･ミガキ	7.5YR褐灰色	7.5YR灰褐色			
56	S2-10D24	S4	浅鉢	B1	f1		(15.4)		0.125	金･雲･長	口：浮線文④、体：ミガキ	ナデ･ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YRにぶい褐色	口体上	口	
57	SC740-11E20,SC2227-12F3	S4	浅鉢	B1	f1		(24.4)		0.188	金･雲･長	山形1、口：縄文LR、浮線文③	丁寧なナデ	7.5YR褐灰色	7.5YRにぶい褐色	口		
58	S4～S3-10F5	S4	浅鉢	C1	f1		(15.6)		0.063	海骨･雲･長	口：浮線文④、ナデ･ミガキ	ナデ･ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口体上	口体上	
59	SC740-11E6･7･12	S4	浅鉢	D1	b1	7.6	(25.2)	6.0	0.063	雲･長	山形1、口：浮線文③、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色			1.53ℓ
60	S4-11F13,S1-11F8･18,Ⅵ-11F8･13･15	S4	浅鉢	C1	e3	13.4	23.8	6.6	0.500	金･雲･長	口：浮線文③、体：ミガキ	ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	体下底濃い	体下バンド状	外面口縁赤彩、2.77ℓ
61	S4-10D21	S4	浅鉢	D1	e3		(24.0)		0.063	雲･長	山形2、口：浮線文③、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口	口	
62	SC740･S2-11E20	S4	浅鉢	D1	f1		(20.2)		0.188	金･雲･長	山形1･2、口：浮線文④、体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR褐灰色	7.5YR黒褐色	口体上	口体上	1.08ℓ
63	SC735･SC767-10E4	S4	浅鉢	D1				?	0.000	金･雲･長	体上：平行沈線文、ミガキ	ミガキ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	体上下	体上下	外面赤彩、丸底
64	SC740-11E18,Ⅶ-11E17･18	S4	浅鉢	F8			20.6		0.313	雲･長	口：平行沈線文④、頸：丁寧なナデ、肩：平行沈線文④	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR黒褐色	口	口	
65	SC740-11E11	S4	浅鉢	I1	a2		(26.6)		0.188	英･雲･白	口：口外帯･眼鏡状隆帯、頸：ミガキ、体上：浮線文（浮）･ミガキ、ケズリ著しい、文様下端をナデ･ケズリ	ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR灰褐色	口～体下		焼成硬質、4.65ℓ
66	S4～S3･S1-9F12	S4	浅鉢	I1	a2		(26.6)		0.125	雲･白	口外帯、頸：ナデ、浮線文④、ミガキ	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色			
67	SC740-12E16,S4-11E15	S4	浅鉢	I1	d3	9.8	25.8	7.9	0.563	金･雲･長	波状口縁、口：面取り、体上：浮線文（浮）･隆線帯、体下：ミガキ、面：網代痕	口：肥厚･平行沈線文	7.5YR灰褐色	10YRにぶい黄褐色	体下底	底･面	内外面口縁赤彩、2.62ℓ
68	SC812･S1･Ⅵ-8D10	S4	鉢	C		10.1	(14.6)	7.0	0.063	金･雲･長	口：平行沈線文、体：ミガキ、底：ミガキヨコ	口：肥厚･平行沈線文、ナデ	7.5YR灰褐色	10YRにぶい黄褐色	口～体下	口～体上	
69	S4～S3-10F10･15,S1-10F15･9E25	S4	鉢	B	b1	14.4	(16.8)	11.4	0.125	金･雲･長	口：浮線文④、ミガキ	ナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～底		外面赤彩、2.66ℓ
70	S4-11E15,S3-11E11	S4	壺	F	f1		7.6		0.750	金･雲･長	口：浮線文④、頸：ミガキヨコ、肩：眼鏡状隆帯文	粗いナデ	10YR褐灰色	10YR褐灰色			
71	SC767-10E9,S2-10E9･10	S4	壺	B	f1				0.000	金･雲･長	口：平行沈線文、頸：ミガキヨコ、肩：浮線文④、体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR褐灰色	10YR褐灰色	口～体下	口	
72	SC740-11E20,Ⅶ上-11E19･20･12E16	S4	甕	A2b	e2		30.3		0.313	金･雲･長	山形1、口：ナデによる沈線･平行沈線文、頸：縄文LR、肩：浮線文④	ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口～肩	口～肩	
73	SC740-11E19	S4	甕	A2			?		?	金･雲･長	口：複合口縁･縄文LR+平行沈線文、頸：平行沈線文･縄文LR	ナデ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色			
74	SC740･S3･S2･S1-11E12	S4	甕	B2b			(40.8)		0.125	金･雲･長	口頸：縄文LR、肩：工字文、眼鏡状文体：縄文LR	ナデ	10YR褐灰色	10YR褐灰色	口～肩濃い	口	
75	SC734･SC755-10E2,S4-11E7,S3-10E2,S2-10E1,S1-10E2･10F17,Ⅵ-10F6･10	S4	甕	B3a					0.000	金･雲･長	頸：ミガキ、肩：眼鏡状文･平行沈線文③、体：縄文LR	丁寧なナデ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄橙色	肩体上		一括
76	SC740-11E1	S4	甕	B3e			(37.0)		0.063	金･雲･長	口：縄文LR、頸：ナデ、肩：縄文LR	ナデ	7.5YRにぶい褐色	7.5YRにぶい褐色	口体		
77	SC737･SC740･S3･S2-11E11,S4-11E11･15	S4	甕	C2b	e3	16.4	18.1	5.8	0.188	金･雲･長	山形1･2、頸：縄文LR、肩：浮線文、体：結節縄文LR	口：平行沈線文、ミガキ	2.5Y灰黄色	2.5Y黄灰色	口～体面	口～体	2.14ℓ
78	SC734･SC755･S4-10D22,S3-10D22･23	S4	甕	C3e			36.2		0.313	金･雲･長	口：複合口縁、頸：ナデ、肩：縄文LR	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
79	S4-11E20	S4	甕	C3a					0.000	金･雲･長	頸：ミガキヨコ､肩：浮線文④､体：ナデ	ナデ･ミガキ	5YR黒褐色	5YR灰褐色	肩体上	肩体上	
80	S4･S3･S2-10E4	S4	甕	C3c	b3	12.1	12.6	6.0	0.188	雲･長	口：縄文LR･平行沈線文、頸：ナデヨコ、肩：浮線文、体上：綾杉文･縄文LR	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	2.5Y暗灰黄色	2.5Y暗灰黄色	口～体下･面	口～体下	0.76ℓ
81	SC740-11E12･13,Ⅶ-11E18･19	S4	甕	D1a	a2		10.0		0.125	金･雲･長	口頸：浮線文③、体：縄文LR	丁寧なナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～体上	体上	

土器観察表（3）

報告No.	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
82	S4-10E1	S4	甕	D3a		11.4	8.4	5.2	0.063	雲・長	口：浮線文④・縄文R、頸：ナデ、肩：浮線文、体：ナデ・ミガキ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口～底・面	体下底	0.40ℓ
83	SC740-11E13	S4	甕	E1a	e2		(28.4)		0.063	金・雲・長	口：浮線文②	ナデ	10YR褐灰色	10YR灰黄褐色	口濃い		
84	SC740-11E18	S4	甕	H3a	b3・f1	10.0	11.9	5.0	0.375	金・雲・長	山形1、口：浮線文④、肩：列点文・浮線文、体：ミガキ	口：平行沈線文、ナデ・ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～体下	口	0.37ℓ
85	SC740-12E16,S4-12E9,S3-12E14,VI-12E20	S4	深鉢	A6d		(33.0)	30.0	8.0	0.625	雲・長	口：平行沈線文③、体：条痕文（8㎜・5条）、底：ケズリ・ナデ	ナデ	10YR褐灰色	10YRにぶい黄橙色	口～体下		15.76ℓ
86	SC737-11E11,SC740-11E1・11・14・19,S4-11E11・12E10・15・19・20,S3-11E11・15	S4	深鉢	A6a			38.1		0.750	金・雲・長	口：条痕文（幅1.5㎝）タテ+縄文LR+平行沈線文	丁寧なナデ	10YR褐灰色	10YRにぶい黄橙色	口体上濃い		23.10ℓ
87	SC735・SC767-10E10,SC740-11E20,S2-10E1	S4	深鉢	A7b			36.2		0.250	金・雲・長	口～体：条痕文風のナデ+結節縄文LR	口～体：条痕文と同じ原体によるナデ（1㎝）+ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄褐色		口体上	
88	S4-11E20	S4	深鉢	A6a			(42.0)		0.125	金・雲・長	口：縄文LR+平行沈線文、体：縄文LR	丁寧なナデ	10YR黒色	10YR灰黄褐色	口体上濃い		
89	SC740-11E13・19	S4	深鉢	B6a			(35.4)		0.063	金・雲・長	山形2、口：平行沈線文②、頸：ナデ、体：条痕文	ナデ	7.5YR灰褐色	7.5YR黒褐色	口		
90	SC740-11E14	S4	深鉢	B6e			(13.6)		0.063	金・雲・長	山形2、口：斜線文+平行沈線文	ナデ	10YR褐灰色	10YR灰黄褐色			
91	SC740・S2-11E19	S4	深鉢	C8			(40.8)		0.188	金・雲・長	ナデ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色	口体上		
92	S4-11E14,S3-10E4,S2-11E6	S4	深鉢	B7b			30.0		0.313	金・雲・長	口：結節縄文LR、体：縄文LR	ナデ	10YR黒褐色	10YR灰褐色	口体上	体上	
93	SC712・S4-10E4・9,SC735-10E4・9・10,SC767-10E9,S3-10D24・10E1・4・8・9・15,S2-10E1・9・15	S4	深鉢	B8			26.0		0.563	金・雲・長	無文、丁寧なナデ	丁寧なナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口	体上下	9.23ℓ
94	SC740-11E7	S4	深鉢	C6e			(36.8)		0.125	金・雲・長	山形1、口：平行沈線文、ナデ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色			
95	SC740-11E20	S4	深鉢	C8			29.4		0.250	金・雲・長	口：ナデヨコ・沈線帯、体：ナデ・ミガキタテ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～体上		
96	SC740-11E7,S2-13E2	S4	深鉢	C8			23.4		0.500	金・雲・長	口体：ナデ・ミガキ	ナデ	10YR灰黄褐色 10YR褐灰色	10YRにぶい黄橙色	口体上濃い	口体上	
97	SC740-11E7,S4～S3-10F15	S4	深鉢	C8			(27.0)		0.125	雲・長	ナデ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～体上		
98	SC740-11E7・12	S4	深鉢	C7c			?		?	金・雲・長	端：ミガキ、口：複合口縁・指頭状連続圧痕、体：撚糸文R	口：ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口		
99	SC767-1-10E4	S4	深鉢	D6c			(18.0)		0.063	金・雲・長	口：平行沈線文、体上：撚糸文r	丁寧なナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色			
100	S3・S2・S1-10E15	S3	浅鉢	B1	a1	10.6	24.6	5.4	0.750	金・雲・長	口：浮線文④、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色	底・面	口	2.88ℓ
101	S3-9D18,S2・S1・VI-9E14	S3	浅鉢	B1	b1		(34.0)		0.125	金・雲・長	口：浮線文③、体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	5YR黒褐色	10YRにぶい黄褐色	口～体下	口～体下	外面口縁赤彩
102	SC125B・SC719-9D19	S3	浅鉢	B1	b3		(10.8)		0.188	金・雲・長多い	口：浮線文（浮）	口：突帯状・平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄褐色	口	口	外面赤彩
103	SC737-10E15	S3	浅鉢	B1	b3		(26.0)		0.125	金・雲・長	波状口縁、口：工字文②、ミガキ	口：突帯状・平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄褐色	口	口	内外面赤彩
104	S3-10E10	S3	浅鉢	B1	b4				0.000	金・雲・長	口：浮線文②、ミガキ	ナデ・ミガキ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色			
105	SC735・S2-10E10	S3	浅鉢	B1	b3	23.6	40.0	10.3	0.500	金・雲・長	口：浮線文③、体：ミガキ	口：突帯状・平行沈線文、ミガキ	2.5Yにぶい黄色	2.5Y灰黄色			18.51ℓ
106	S3-10E5	S3	浅鉢	B1	d3	11.0	22.2	6.3	0.125	雲・長	口：浮線文③、体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	2.5Y暗灰黄色	2.5Y暗灰黄色	口～底	体下	外面赤彩、2.33ℓ
107	S3-8D11	S3	浅鉢	B1	f1	7.9	19.4	7.0	0.250	金・雲・長	口：浮線文④、体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR褐灰色	口～底	口～底	焼成前穿孔、外面赤彩、1.31ℓ
108	S3-8D20,S2-8D15・20	S3	浅鉢	B1	f1		(23.8)		0.125	金・雲・長	端：沈線文、口：浮線文④、体：ミガキ	口：突帯状、ミガキ	10YR褐灰色	10YR灰黄褐色	口		端・外面口縁赤彩
109	SC735-10E9,S2-10E14	S3	浅鉢	B1	f1		(11.2)		0.063	金・雲・長	端：平行沈線文、口：浮線文④、ミガキ	口：突帯状、ミガキ	7.5YR褐灰色	7.5YR褐灰色	口	口	外面口縁赤彩
110	S3-10E15	S3	浅鉢	C1	a2		(16.0)		0.063	金・雲・長	口：浮線文③、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口		
111	S2-9D25	S3	浅鉢	C1	e3		(22.0)		0.188	金・雲・長	口：浮線文④、体：ナデ	口：肥厚・平行沈線文	10YR黒褐色	7.5YRにぶい褐色	口体上	口	内外面赤彩
112	SC735-10E3・10,S2-10E15	S3	浅鉢	B8			23.0		0.313	金・雲・長	波状口縁、口：平行沈線文、ナデ・ミガキ	平行沈線文・突起にも沈線、ナデ・ミガキ	7.5YRにぶい褐色	7.5YR灰褐色	口		
113	S3-11E18,S2-11E7	S3	浅鉢	C1	f2		(22.4)		0.188	金・雲・長	山形2、口：浮線文④、ナデ	口：肥厚・平行沈線文、ナデ	7.5YR灰褐色	7.5YR灰褐色	口	口	
114	S3-11E8	S3	浅鉢	D1	d1	5.1	16.2	5.2	0.188	金・雲・長	口：浮線文④、体：ミガキ	口：平行沈線文2条、ミガキ	2.5Y黄灰色	2.5Y黄灰色	口～底・面	口～底	0.42ℓ
115	SC735-10E9,S3-10E3・9	S3	浅鉢	D1	e1		(26.4)		0.063	金・雲・長	口：浮線文③、体：ミガキ	ミガキ	10YR褐灰色	10YR灰褐色	口体上	口体上	
116	S3・S2・S1-10E3	S3	浅鉢	D1	f1		22.2		0.250	雲・長	口：工字文・彫去深い、体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口体上		内外面口縁赤彩
117	S3-9C16	S3	浅鉢	D8		5.4	19.9	5.0	0.063	金多い・雲・長	波状口縁、口：平行沈線文、体：ナデ・ミガキ	口：平行沈線文、ナデ・ミガキ	2.5Y黄灰色	2.5Y黄灰色			0.41ℓ
118	SC712-10E9,S3-10E11,S2-10E1・11	S3	浅鉢	D10		8.9	30.6	6.2	0.375	金・雲・長	口～底：ケズリ・ナデ	口：突帯状、ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	体下～面	面	外面凹凸あり、2.92ℓ
119	SD19-23-7F25,S3-9F18	S3	浅鉢	G1	b1		(26.6)		0.063	金・雲・長	口：浮線文④、体：ミガキ	ナデ・ミガキ	7.5YR黒色	7.5YR褐灰色	口体	体	内面漆？
120	S3-11E15	S3	鉢	E	d1			4.2	0.000	金・雲・長	肩：工字文（浮）、体：撚糸文R	ナデ・ミガキ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄褐色	肩～底・面	肩～体上	
121	S3-10D21,VI-10F21	S3	浅鉢					8.8	0.000	金・雲・長	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色			
122	S3-10E14	S3	台付浅鉢						0.000	金・雲・長	ミガキ	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	体下		
123	S3-8D25	S3	甕	A2a			(39.0)		0.125	金・雲・長	口：平行沈線文、頸：交互綾杉文、肩：浮線文④、体：条痕文	ナデ・ミガキ	10YR褐灰色	10YR灰黄褐色	口～体上	口～体上	
124	SC737-10E15	S3	甕	B3e			(14.0)		0.125	金・雲・長	口：結節縄文LR、頸：ミガキ	ミガキ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄褐色	口頸	口	

土器観察表（4）

報告№	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
125	S3-10E1	S3	甕	C1a	b1		?		?	金･雲･長	口：浮線文④	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR褐灰色	口		
126	SC708-9E9,SC711-9E5,S4-9E4,S3-9E4･5･10,S2-9E4･5･9･10,Ⅵ-9E5･9･14	S3	甕	B3e			(31.0)		0.188	金･雲･長	口：縄文LR、頸：ナデ、肩体：縄文LR	ナデ･ミガキ	10YR黒色	10YRにぶい黄橙色	口～体下濃い	口体下	
127	SC120･SC708-9E8,S3-9E9･13,S1-9E8･13,Ⅵ-9E9･14	S3	甕	C3a	f1		20.8		0.500	金･雲･長	山形1、口：縄文LR･平行沈線文、頸：ナデヨコ、肩：浮線文④+縄文LR	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR褐灰色	口～肩	口～肩	
128	S3-10E5	S3	甕	C3a	b1			8.0	0.000	金･雲･長	体上：浮線文④、体：縄文LR	ナデ･ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	体上～底･面	体下	
129	SC711-9E5,Ⅶ-9E19･20	S3	深鉢	A6a			30.8		0.250	雲･長	口：平行沈線文、体：結節縄文LR	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口～体上濃い	口～体下濃い	17.64ℓ
130	SC125-9D24,S4-10E2,S3-10E2･7,S2-10E1･7	S3	甕	C3d			?		?	金･雲･長	山形1、口：平行沈線文④、頸：ナデヨコ	ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口頸		
131	S4-10E3,S3-10E2	S3	甕	D3e			(25.2)		0.125	金･雲･長	口：複合口縁、頸：ナデヨコ、肩：縄文LR	ナデ	2.5Y灰黄色	2.5Y灰黄色	口頸		
132	SC120-1･2･SC708-9E8,S2-9E13,S1-9E8･13,Ⅵ-9E8･14･18	S3	深鉢	A7d			31.5		0.875	雲･長	口：条痕文ヨコ、体上：左上、体下：タテ	ナデ	5YR黒褐色	7.5YRにぶい橙色	口～体上濃い	口～体上	
133	SC712･S3-10E9	S3	深鉢	B6a			43.8	11.0	0.813	金･雲･長	口：縄文LR･平行沈線文、体：縄文LR	ナデ	2.5Y灰黄色	2.5Y灰黄色	口～体上濃い	体下濃い	29.24ℓ
134	S3-9C16	S3	深鉢	C4	b1		14.1		0.813	金･雲･長	山形2、口：浮線文④+縄文LR、体上：斜線文･縄文LR	口：平行沈線文、ナデ	10YR黒色	10YRにぶい黄橙色	口体上濃い	口体上	
135	S3-10E9,Ⅵ-10E21	S3	深鉢	B6d			?		?	金･雲･長	口：指頭状圧痕･条痕文+平行沈線文	口：指頭状圧痕、ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口	口	
136	SC119-2-9E2,SC708･S2-9E8,S1-9E25	S3	深鉢	B7b			22.0		0.250	金･雲･長	口：結節縄文LR、体：縄文LR	ナデ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口～体上濃い	口～体上	
137	S3･S2-10E8	S3	壺	F	f1	16.6	12.0	7.4	0.625	金･雲･長	山形1が3単位、口：浮線文、肩：浮線文、ナデ+ミガキ	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YR暗灰黄色	口～底	口～体上	1.53ℓ
138	S3-11D11,Ⅶ上-11E19･20,Ⅵ-11F15･20･12E21･22･12F1	S3	壺	D					0.000	雲･長	肩：匹字文③	ナデ	N灰色	10YR黒褐色			
139	S3-10E17	S3	壺	F				4.0	0.000	雲･長	ミガキ	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			内面に縄目風の凹凸あり
140	S3-10E9	S3	甕･深鉢					9.2	0.000	金･雲･長	体：条痕文、底：ケズリ･ナデヨコ、面：ササ痕？	ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	体上濃い	体下濃い	
141	S2-8D11	S2	浅鉢	B1	a1		(16.2)		0.063	金･雲･長	山形1、口：浮線文④、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR褐灰色	口	口	
142	S2-11E7	S2	浅鉢	B1	a2		(16.6)		0.063	金･雲･長	口：浮線文④、ミガキ	ミガキ	10YR褐灰色	10YR褐灰色			焼成後穿孔、外面赤彩
143	S2-9E12	S2	浅鉢	B1	a2		(13.4)		0.063	金･雲･長	口：縄文LR･浮線文（浮）	ナデ	10YR黒色	10YRにぶい黄橙色	口濃い	口	
144	S2-9E3	S2	浅鉢	B1	b1		(36.9)		0.188	金･雲･長	口：浮線文④	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YR浅黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
145	S2-9D19･25	S2	浅鉢	B1	b3		(20.2)		0.063	金･雲･長	口：浮線文④、体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10R赤黒色	7.5YR灰褐色	口体上	口体上	外面口縁赤彩
146	S2-9D12	S2	浅鉢	B1	f1		(17.0)		0.125	雲･長	山形1、口：浮線文④、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文	10YRにぶい黄褐色	10YR灰黄褐色	口	口	
147	SC120-2-9E7,S2-9D24,Ⅵ-9E3･7･8	S2	浅鉢	B1	f1		40.6		0.250	金･雲･長	口：浮線文④	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄褐色	口	口	
148	S2-9F23,Ⅵ-9F20	S2	浅鉢	B1	f2		32.0		0.250	金･雲･長	口：浮線文③	ナデ	10YR褐灰色	10YR褐灰色			外面赤彩、器面摩滅
149	S2-9E10	S2	浅鉢	B1	f2		(16.8)		0.125	金･雲･長	山形1、口：浮線文（浮）	口：平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口	口	
150	S1-9E7･13･15,Ⅶ-9E18･19,Ⅵ-9E8･9･13～15･18	S2	浅鉢	B8			24.1		0.375	金･雲･長	口：平行沈線文、体：ミガキ	ナデ･ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR灰褐色	体上	体上	
151	S2-11F24,S1-11F25	S2	浅鉢	C1	b1		(17.6)		0.188	金･雲･長	口：無文帯･浮線文（浮）	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	7.5YR褐灰色	7.5YR黒色	口	口	
152	S2-10E4	S2	浅鉢	C1	f1		(20.0)		0.063	金･雲･長	口：浮線文④、体：ミガキ	ミガキ	10YR褐灰色	10YR褐灰色	口体上	口	
153	S2-11E15	S2	浅鉢	C1	f1		(20.2)		0.063	金･雲･長	口：浮線文④	ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR灰褐色	口	口	
154	S1-12E21,Ⅶ-11･12E16	S2	浅鉢	C1	f1		(22.6)		0.125	雲･長	口：浮線文③･刺突文	口：平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口	口	
155	S2-11E2	S2	浅鉢	C1	d3		(30.0)		0.125	金･雲･長	山形1、口：浮線文③、体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒色			4.09ℓ
156	S2～S1-11E25	S2	浅鉢	C1	d3		(26.6)		0.125	金･雲･長	口：浮線文③、ミガキ	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR黒色	口～底		5.09ℓ
157	S2～S1-11F25,Ⅶ･Ⅷ上-11E19･20,Ⅵ-11F10･15･20	S2	甕	A2a	f1		31.4		0.313	金･雲･長	口頸：綾杉文･縄文LR、肩：浮線文④	ナデ	10YR黒色	10YR褐灰色	口～肩	口～肩	
158	S2-8E20	S2	甕	D3			(19.4)		0.125	金･雲･長	口：平行沈線文･縄文LR、頸：ナデヨコ	ナデ･ミガキ	5YR黒褐色	7.5YRにぶい褐色	口頸	口頸	
159	S2-9D25	S2	甕	D3			(28.2)		0.125	金･雲･長	口：平行沈線文･縄文LR、頸：ナデヨコ	ナデ	7.5YR黒褐色	10YRにぶい黄橙色	口頸濃い		
160	S2-8D20,S1-8D20･25･9D16	S2	甕	C2c	a1･f1		14.0		0.563	金･雲･長	山形1、口頸：縄文LR･浮線文（浮）、肩：浮線文･綾杉文、体：縄文LR	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口～体上	肩体上	
161	S3-10E11,S2-8D25･9C14･10E4	S2	甕	E2b			16.2		0.250	金･雲･長	口：平行沈線文･列点文、頸：縄文LR、肩：浮線文④	ナデ	7.5YRにぶい褐色	7.5YRにぶい褐色	口～肩	口～肩	
162	S2-8C23	S2	深鉢	B6b			(32.7)		0.063	金･雲･長	口：平行沈線文･結節縄文LR	ナデ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口	口	
163	S2～S1-10F3･10	S2	深鉢				(35.6)		0.063	雲･長	口：結節縄文LR、体：縄文LR	ナデ･ミガキ	7.5YR黒褐色	N暗灰色	口体上	口体上	
164	S2-11E2･8･9･11･14･20,S1-11E3･6･9･14,Ⅶ-11E14	S2	甕	C3d		26.1	25.4	8.6	0.563	金･雲･長	ゆるい波状口縁、頸：縄文施文後ナデヨコ、体：縄文LR、底：ササ痕？	ナデ	2.5Y灰黄色	2.5Y黄灰色	口～肩体下	体中コゲ	6.80ℓ
165	SC712-10E3,S2-10E4	S2	深鉢	B7b			27.6		0.250	金･雲･長	口：結節縄文LR	ナデ	2.5Y灰黄色	2.5Y暗灰黄色	口	口	
166	S2-9D18	S2	深鉢	B7d			?		?	金･雲･長	口：体部条痕文施文後に複合口縁作出	ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YR灰黄褐色	体上	体上	
167	SC119-2-9D23	S2	深鉢	C1			(22.0)		0.125	金･雲･長	口：縄文LR+工字文（隆線幅広い）	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口		

土器観察表（5）

報告№	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
168	S2-10E2,S1-10E12･15	S2	深鉢	B7d			(50.0)		0.063	金･雲･長	口：体部の条痕文施文後複合口縁作出	丁寧なナデ	2.5Y灰白色	2.5Y灰白色			
169	S2-9E7,S1-9E12･13,VI-9E14	S2	深鉢	C1	f2		(11.8)		0.125	金･雲･長	口：浮線文（浮）、体：縄文LR	ナデ･ミガキ	2.5YR赤黒色	10YRにぶい黄橙色	口体上濃い	口体上	
170	S2-10E6･7,VI-9E15･24･9F3	S2	深鉢	C1			24.6		0.250	金･雲･長	山形2、口：縄文LR･浮線文④	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR黒褐色	10YRにぶい黒褐色	口	口	
171	S2-10E13	S2	深鉢	C7b			(29.2)		0.063	金･雲･長	口：結節縄文LR	ナデ	10YRにぶい黄色	10YRにぶい黄色	口体上		
172	S2-9D8	S2	深鉢	C7c			(20.2)		0.063	雲･長	口体：撚糸文R	ナデ･ミガキ	7.5YRにぶい褐色	10YR褐灰色	口体上	口体上	
173	VI-9E13	S1	浅鉢	A1	b1		(24.6)		0.125	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文④、体：ミガキ	口：突帯状･平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口体上		外面赤彩
174	S1･VI-8D10	S1	浅鉢	B1	a2	11.0	22.0	7.2	0.250	金･雲･長	口：浮線文（浮）、体：ミガキ	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	7.5YR灰褐色	10YR灰黄褐色	口～底濃い	体下	外面口縁赤彩、2.60ℓ
175	S1-9F18･24･10F12･16･17･21,VI-9F20･24･25･10F17	S1	浅鉢	B1	b1		?		?	雲･長	山形1、口：浮線文③	口：平行沈線文	2.5Y黄褐色	2.5Y灰黄色			
176	VI･S1-9E12	S1	浅鉢	B1	b2		(19.6)		0.125	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文④	ミガキ	7.5YRにぶい褐色	7.5YRにぶい褐色	口	口	
177	VI-11F1	S1	浅鉢	C1	a1		(22.0)		0.125	金･雲･長	口：浮線文④	口：肥厚･平行沈線文	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口	口	
178	S1-10F21	S1	浅鉢	C1	a2		(32.3)		0.063	雲･長	山形1、口：浮線文②、体：ナデ	口：肥厚･平行沈線文	2.5Y灰白色	N灰色			トレンチ、内面口縁赤彩
179	S1-9F5	S1	浅鉢	C1	a2		(23.8)		0.188	金･雲･長	山形1、口：浮線文④、体：ミガキ	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口体上	口	
180	VI-11F19･25	S1	浅鉢	C1	a2		(23.8)		0.063	金･雲･長	口：浮線文④、体：ナデ	ナデ	2.5Y灰黄色	2.5Y灰黄色	口体上濃い	口体上	
181	VI-10F14･17･22	S1	浅鉢	C1	a2			4.8	0.000	英･雲･白	口：浮線文（浮）、体：ミガキ	ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄褐色			
182	VI-10F16	S1	浅鉢	C1	a2		(30.6)		0.063	金･雲･長	山形1、口：浮線文④	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
183	VI-11F6	S1	浅鉢	C1	a2		(18.6)		0.125	金･雲･長	口：浮線文（浮）	口：肥厚･平行沈線文、ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色			
184	VI-10F15	S1	浅鉢	C1	b1		(16.2)		0.063	金･雲･長	口：浮線文④	口：肥厚、ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
185	VI-11F1	S1	浅鉢	C1	b1		?		?	雲･長	口：浮線文③	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			一括
186	S1-9F25･10F21,VI-9F25･10F16	S1	浅鉢	C1	b2		(27.6)		0.188	雲･長	山形1、口：浮線文④	口：肥厚･平行沈線文、ナデ	10YR灰白色	10YR灰白色			外面赤彩濃い
187	S1-10E9	S1	浅鉢	C1	b2		(17.4)		0.125	金･雲･長	口：浮線文④、体：ミガキ	ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色	口		
188	S1-10F9	S1	浅鉢	C1	b3		(18.5)		0.125	金･雲･長	口：浮線文（浮）	口：平行沈線文、ミガキ	10YR褐灰色	7.5YRにぶい褐色	口	口	外面口縁赤彩
189	S1-10F10	S1	浅鉢	C1	b3		(26.6)		0.063	金･雲･長	口：浮線文④	口：肥厚･平行沈線文	7.5YRにぶい褐色	7.5YRにぶい褐色			外面赤彩
190	S1-9F5	S1	浅鉢	C1	d2		(15.6)		0.188	金･雲･長	口：浮線文④、体：ナデ･ミガキ	ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～体下	口	
191	VI-11F13	S1	浅鉢	C1	d1		(14.6)		0.125	金･雲･長	口：工字文、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口体上		
192	VI-10F5	S1	浅鉢	C1	d2		(19.6)		0.125	雲･長	端：沈線文、口：浮線文④	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YR褐灰色		口	外面口縁赤彩
193	VI-11F17	S1	浅鉢	D1	d2		(20.0)		0.063	金･雲･長	口：浮線文④･縄文LR、体：縄文LR	ナデ･ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
194	VI-10F15･20	S1	浅鉢	C1	d2		(13.8)		0.125	金･雲･長	山形1、口：浮線文③、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	2.5Y暗灰黄色	2.5Y暗灰黄色			焼成後穿孔
195	S1-10E6	S1	浅鉢	C1	f1		(13.0)		0.063	金･雲･長	口：浮線文④、体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR褐灰色	7.5YR褐灰色	口体上	口体上	内外面口縁赤彩
196	S1-10E10	S1	浅鉢	D1	f2	7.1	27.5	5.6	0.125	金･雲･長	山形1、口：浮線文（浮）、体：ミガキ	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	2.5Y暗灰黄色	2.5Y暗灰黄色	口体上	体下底	外面口縁赤彩、1.68ℓ
197	S1-10E5	S1	浅鉢	D1	a2		(28.4)		0.063	金･雲･長	山形1、口：縄文LR･浮線文（浮）	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR黒褐色	口	口	
198	VI-11F3	S1	浅鉢	B2			?		?	雲･長	体上：工字文･刺突文、ミガキ	ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄褐色			
199	S1-9F10･20･25,VI-9F25	S1	浅鉢	F1	b4		22.6		0.438	雲･長	山形1、口：浮線文④、頸：ナデヨコ、肩：平行沈線文	口：平行沈線文	2.5Y灰黄色	2.5Y黄灰色			器面摩滅、2.62ℓ
200	S1-9F21･25･10F21,VI-9F25･10F21	S1	鉢	C	b1		32.0		0.250	雲･長	山形1、口：浮線文③、体：ナデ･ミガキ	口：平行沈線文、ナデ、摩滅著しい	10YRにぶい黄橙色	10YR褐灰色			口縁赤彩、9.08ℓ
201	S1-10F8,VI-10F9	S1	甕	C2a	b3	9.4	12.0	6.0	0.500	金･雲･長	山形2、口頸：縄文LR･浮線文（浮）、肩：斜線文、体：縄文LR、面：擦痕	口：平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR暗灰黄色	口～底	口体上下	0.51ℓ
202	S1-10F20･11F3･16･22,VI-10F20	S1	甕	C3c	a1･f1		(29.4)		0.125	金･雲･長	口：縄文LR+浮線文（浮）、頸：ミガキヨコ、肩：浮線文･綾杉文	口：平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR黒褐色	口～肩	口～肩	
203	VI-10F15･11F11･12･16･25	S1	甕	C2			30.4		0.250	金･雲･長	口：眼鏡状文･平行沈線文、ナデ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口		
204	S1-10F5･10･13,VI-10F5･9･10･11F1	S1	甕	C3d			37.0		0.375	金･雲･長	口：複合口縁･縄文L+平行沈線文、頸：ミガキ	ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色	口頸		一括
205	VI-9E13	S1	甕	C3e			?		?	金･雲･長	口：複合口縁･ナデ	口：平行沈線文･ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
206	VI-9E12	S1	甕	C3e			?		?	金･雲･長	口：複合口縁、口体：網目状撚糸文R	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色			
207	S1-11E12	S1	深鉢	B6a			(32.0)		0.125	金･雲･長	口：平行沈線文･縄文LR、体：条痕文	ナデ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色	口体上		
208	S1-9F15	S1	深鉢	B7b			(32.6)		0.063	雲･長	口：結節縄文LR	ナデ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口	口	
209	S1-10F16	S1	深鉢	B7b			?		?	金･雲･長	口：結節縄文RL、体：撚糸文R	ナデ	7.5YR灰褐色	10YR褐灰色	口体上	口体上	
210	VI-9E13･14	S1	深鉢	C1			(14.4)		0.188	金･雲･長	口：浮線文④、体：縄文LR	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口体上	口体上	
211	S1-9F11	S1	深鉢	C2			(32.0)		0.188	雲･長	山形1、口：肥厚･平行沈線文･一部斜線文、体：条痕文	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口体上		内面口～体上に赤彩
212	S1-11F18,VI-12F11	S1	深鉢	C1	d1･f1		(16.0)		0.125	金･雲･長	山形1、口：浮線文（浮）	口：肥厚･平行沈線文、ナデ	7.5YRにぶい褐色	7.5YRにぶい橙色	口		焼成前穿孔
213	S1-11E15	S1	壺	B			14.4		0.250	金･雲･長	山形2、口：撚糸文R･平行沈線文、頸：ナデヨコ	口：平行沈線文、ナデ	7.5YRにぶい褐色	7.5YRにぶい褐色	口	口	
214	VI-9E13～15	S1	壺	A	f1		(9.4)		0.125	金･雲･長	口：浮線文（浮）、頸：ミガキヨコ	口：平行沈線文、ミガキ	5YR灰褐色	7.5YR灰褐色			
215	S1-9E14～16･18,VI-9E14･15･19	S1	壺	A				6.7	0.000	金･雲･長	肩～底：ミガキ	ミガキ	2.5Y暗灰黄色	2.5Yにぶい黄色			

土器観察表（6）

報告№	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
216	Ⅵ-10F7	S1	壺	C				10.2	0.000	金･雲･長	肩：眼鏡状隆帯、体：「冂」字状沈線文･縦位隆帯、底：平行沈線文、面：正方形を呈す	丁寧なナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	肩		一括
217	S1-9E13,Ⅵ-9E10	S1	壺	F			16.6		0.250	金･雲･長	口：平行沈線文④、頸肩：ミガキ	ナデ･ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口		
218	Ⅶ-11E18･19		甕	C1c			(31.0)		0.125	金･雲･長	山形1･2、口頸：平行沈線文、肩：縄文LR	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	2.5Yにぶい黄色	2.5Yにぶい黄色	口頸濃い	口～肩	暗渠
219	SD19-23-8F8	SD19-23	浅鉢	A1	b3		(10.0)		0.063	雲･長	山形1、口：浮線文、ミガキ	口：突帯状･平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒色			内外面赤彩
220	SD19-23-8F2	SD19-23	浅鉢	B1	a3		(21.0)		0.125	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文④、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口体上	口体上	内外面赤彩
221	SD19-23-7F25	SD19-23	浅鉢	B1	b1		18.0		0.250	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文③、研磨	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR黒色	7.5YR黒褐色			内外面赤彩
222	SD19-23-8F8･24	SD19-23	浅鉢	B1	b2		(28.0)		0.125	金･雲･長	波状口縁、端：沈線文、口：浮線文③	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR褐灰色	7.5YR黒褐色			外面赤彩
223	SD19-23-7F25･8F19	SD19-23	浅鉢	B1	b4	8.5	19.1	6.5	0.875	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文④、体：ミガキ、底：網代痕	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色 10YR黒	10YR黒褐色	口～底	口体上	内外面赤彩、1.01ℓ
224	SD19-23-8F9	SD19-23	浅鉢	B1	b1		(30.8)		0.063	金･雲･長	口：浮線文（浮）	ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色			外面赤彩
225	SD19-23-7F25	SD19-23	浅鉢	B1	e2		(14.0)		0.063	金･雲･長	口：浮線文③、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR灰褐色	口体上	口	トレンチ
226	SD19-23-8F19	SD19-23	浅鉢	B1	e2		(22.8)		0.063	金･雲･長	口：浮線文（浮）、ナデ	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口	口	内外面赤彩
227	SD19-23-8E22	SD19-23	浅鉢	B1	e2		(21.0)		0.063	金･雲･長･白	山形1、口：浮線文③･ミガキ	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒色			
228	SD19-23-8F24	SD19-23	浅鉢	B1	f1		(22.0)		0.188	金･雲･長	波状口縁、口：押圧文･浮線文、体：ミガキ	口：突帯状･平行沈線文、ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YRにぶい褐色	口～体	体	外面赤彩
229	SD19-23-8F22･9F21	SD19-23	浅鉢	B8			(9.6)		0.125	金･雲･長	山形1、口：平行沈線文、体：縄文RL	口：肥厚、ナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	口体	口体	
230	SD19-23-8F14	SD19-23	浅鉢	B2			(12.0)		0.188	金･雲･長	波状口縁、口：工字文･三角形文、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色			内外面赤彩
231	SD19-23-8F25	SD19-23	浅鉢	D1	a2		?		?	金･雲･長	口：浮線文③、ミガキ	口：わずかに肥厚、ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口	口	焼成後穿孔
232	SD19-23-8F20	SD19-23	浅鉢	D1	b3		(17.0)		0.125	金･雲･長	山形1、口：浮線文、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
233	SD19-23-8F12	SD19-23	浅鉢	D1	d1		(17.0)		0.063	金･雲･長	山形1、口：浮線文（浮）、体：ミガキ	口：平行沈線文、ナデ	10YR灰黄褐色	10YR褐灰色			
234	SD19-23-7F25･8F21	SD19-23	浅鉢	D1	a2	14.4	(34.2)	(9.0)	0.125	金･雲･長	口：浮線文②･突起、ミガキ	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒色	口～底	口～底	トレンチ、6.37ℓ
235	SD19-23-8F13･14	SD19-23	浅鉢	D1	b2	10.4	21.0	7.0	0.375	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文④、体：ミガキ	ミガキ	10YR褐灰色	10YR褐灰色	口～底	口～底･面	1.39ℓ
236	SD19-23-8F18･19･21･24･25	SD19-23	浅鉢	D1	b4		33.9		0.313	雲･長	口：浮線文④、体：ミガキ	ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口体上	口体上	外面口縁赤彩
237	SD19-23-8F18	SD19-23	浅鉢	D1	e2		(20.0)		0.188	金･雲･長	口：浮線文④、体：ナデ	ナデ･ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～体下	口～体下	1.45ℓ
238	SD19-23-8F14	SD19-23	浅鉢	D1	e2	10.2	21.6	5.6	0.188	金･雲･長	山形1、口：浮線文④、体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～底	口～体上濃い	1.54ℓ
239	SD19-23-8F18	SD19-23	鉢	A	b4			7.2	0.000	金･雲･長	体上：浮線文④、ミガキ	ケズリ･ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	体～底･面	体～底･面	
240	SD19-23-8F13･14･19･22, Ⅵ-10F11	SD19-23	浅鉢	B				11.2	0.000	金･雲･長	ミガキ	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	体下底	体上	焼成後穿孔
241	SD19-23-8F25	SD19-23	甕	A1a	b3		(32.0)		0.063	金･雲･長	口頸：浮線文④･ミガキ	ナデ･ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口頸	口頸	
242	SD19-23-8F14･18･19･22･24･9F21	SD19-23	甕	B2b			(27.2)		0.125	金･雲･長	口：縄文LR+平行沈線文、頸：縄文LR、肩：工字文④	ナデ･ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
243	SD19-23-8F12･18･21	SD19-23	甕	B3a			(39.0)		0.125	金･雲･長	山形1、口：平行沈線文、頸：ナデ	ナデ	7.5YR黒色	7.5YR黒褐色	口～頸濃い	口頸	
244	SD19-23-8F14	SD19-23	甕	B3b			(30.0)		0.125	金･雲･長	山形1、口：平行沈線文、頸：ナデ、肩：浮線文②	口：平行沈線文、ナデ	N黒色	7.5YR黒褐色	口～肩濃い	口～肩	
245	SD19-23-8F8	SD19-23	甕	B3d			(14.8)		0.063	金･雲･長	口：縄文LR･平行沈線文、頸：ナデ、肩：縄文LR	口：平行沈線文、ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～肩濃い	口～肩	
246	SD19-23-8F12･18	SD19-23	甕	B3e			(34.0)		0.125	金･雲･長多い	口：結節縄文LR、頸：ナデ、肩：縄文LR･尖鋭	ナデ	10YR黒色	10YR黒色	口～肩濃い	口～肩濃い	
247	SD19-23-8F18･19	SD19-23	甕	B					0.000	金･雲･長	肩：平行沈線文･刺突列点文･条痕文（5㎜）+縄文LR	丁寧なナデ	10YR黒色	10YR黒色	肩濃い	肩	
248	SD19-23-8F14･18	SD19-23	甕	C2a			(38.0)		0.125	金･雲･長	山形1、口：平行沈線文、頸：交互綾杉文	ナデ･ミガキ	7.5YR黒色	7.5YR黒褐色	口頸濃い	口頸	
249	SD19-23-8F12	SD19-23	甕	C2b			?		?	金･雲･長	口：工字文④･縄文LR	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR灰褐色	口濃い		
250	SD19-23-7F25	SD19-23	甕	C2d			(30.7)		0.063	金･雲･長	口頸：平行沈線文+縄文L、肩：縄文L	丁寧なナデ	7.5YRにぶい褐色	7.5YR褐灰色	口～肩	口～肩	トレンチ
251	SD19-23-7F25･8F18	SD19-23	甕	C2				7.0	0.000	金･雲･長	頸体：縄文LR、体下：ケズリ左上、底：ケズリヨコ	丁寧なナデ	2.5Yにぶい黄色	2.5Y黒褐色	頸～体下スス濃い吹きこぼれもあり	体上～下横にすじ状の濃密なコゲ	
252	SD19-23-7F25	SD19-23	甕	C3a			(33.0)		0.125	金･雲･長	山形1、口：浮線文④･縄文LR、頸：ナデ	口：平行沈線文、ナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	口頸	口	トレンチ
253	SD19-23-8F14	SD19-23	甕	C3a			(17.4)		0.063	金･雲･長	山形1、口頸：ミガキ、肩：浮線文③	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口頸	口頸	外面赤彩
254	SD19-23-8F19･24	SD19-23	甕	C3a			(38.2)		0.125	金･雲･長	口：縄文LR･平行沈線文③、頸：ナデ	ナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	口頸濃い	口頸	
255	SD19-23-8F18･19	SD19-23	甕	C3a			(24.0)		0.188	金･雲･長	口：平行沈線文③、頸：ナデ、肩：平行沈線文	ナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～頸濃い	口～頸濃い	
256	SD19-23-8F2･3･8･13～15･18･19･21	SD19-23	甕	C2a		45.2	30.7	9.3	0.125	雲･長	山形1、口肩：浮線文、頸：綾杉文、体上：撚糸文R+縄文LR、体下：撚糸文R+条痕文	ナデ+ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～体上濃い	口～体上コゲ、体下濃い	21.45ℓ
257	SD19-23-8F18･19	SD19-23	甕	C3a					0.000	金･雲･長	肩：工字文（上下交互凸字文似）、体：条痕文	ナデ･ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	肩体上	体上	

土器観察表（7）

報告No.	遺構·層位·グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
258	SD19-23-8F18	SD19-23	甕	C3b			(17.0)		0.125	雲·長	山形1、口：浮線文③·縄文LR、頸：ミガキ、肩：縄文LR+綾杉文	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～肩	口～肩	
259	SD19-23-8F18	SD19-23	甕	C3e			(28.0)		0.063	金·雲·長	口：結節縄文LR、頸：ナデ	ナデ·ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR灰褐色	口頸濃い	口頸	
260	SC735-10E9,SD19-23-8F7,S4-9E4·10E9,S3·S2-9E4	SD19-23	甕	C3e			32.0		0.250	金·雲·長	山形1、口：複合口縁·縄文LR、頸：縄文LR+下端ナデ	ナデ·ミガキ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口～頸		
261	SD19-23-8F8·14·19·24·9F22	SD19-23	甕	E1b			(32.0)		0.063	金·雲·長	山形1、口：平行沈線文+縄文LR、頸：綾杉文、体：縄文LR	丁寧なナデ	10YR黒色	10YRにぶい黄橙色	口～肩濃い	肩	
262	SD19-23-8F13	SD19-23	甕	E2d			?		?	金·雲·長	口頸：条痕文+平行沈線文、肩：平行沈線文	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色		頸	トレンチ
263	SD19-23-7F25·8F12·13·19	SD19-23	甕	E3a			(14.8)		0.188	金·雲·長	山形1、口：工字文、頸：ナデヨコ、肩：平行沈線文、体：条痕文	ナデ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口～体上濃い	口～体上	1.88ℓ
264	SD19-23-8F18	SD19-23	甕	H	a1·e3	13.7	12.8	6.6	0.063	金多い·雲·長多い	口：浮線文④、頸：三角形集合沈線文·刺突文、肩：浮線文、体：ナデ	ナデ	10YR灰黄褐色	2.5Y灰黄色	口～体		0.80ℓ
265	SD19-23-8F18·24	SD19-23	深鉢	A6a			(20.8)		0.125	金·雲·長	口：平行沈線文+縄文LR、体：縄文LR	ナデ·ミガキ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口体上濃い	体下	
266	SD19-23-8F7	SD19-23	深鉢	A6a			(32.0)		0.063	金·雲·長	口：平行沈線文、口～体：縄文L	ナデ	10YR黒色	10YR灰黄褐色	口体上濃い	口体上	
267	SD19-23-8F7	SD19-23	深鉢	B7a			(32.0)		0.125	金·雲·長	口体：縄文LR	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR黒褐色	口体濃い	口体	
268	SD19-23-8F13	SD19-23	深鉢	B2			?		?	金·雲·長	口：肥厚·縄文LR+工字文②、体：網目状撚糸文R	ナデ·ミガキ	10YR褐灰色	10YR褐灰色			トレンチ
269	SD19-23-8F13	SD19-23	深鉢	C2			(18.4)		0.063	金·雲·長	口：匹字文、体：結節縄文LR	ナデ	7.5YR黒色	7.5YR黒褐色	口濃い	口	
270	SD19-23-8F13	SD19-23	深鉢	C6a			?		?	金·雲·長	口：縄文LR+平行沈線文	ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口	口	
271	SD19-23-7F25	SD19-23	深鉢	C6d			(14.0)		0.125	金·雲·長	口体：条痕文（8mm·細密）+平行沈線文	ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR黒褐色	口体上濃い	口体上濃い	トレンチ
272	SD19-23-8F19	SD19-23	深鉢	B7d			?		?	雲·長	口：複合口縁·条痕文、体：条痕文タテ	ナデ	7.5YR黒褐色	7.5YR灰褐色	口体上濃い	口体上	
273	SD19-23-8F20	SD19-23	深鉢	C7b			(30.0)		0.125	金·雲·長	口：結節縄文LR+平行沈線文、体：条痕文+結節縄文LRタテ	ナデ·ミガキ	7.5YR黒色	7.5YR黒褐色	口体上濃い	口体上	
274	SD19-23-8F8·18·21·25·9F21	SD19-23	深鉢	B7b			26.0		0.375	金·雲·長	口：結節縄文LR、体：縄文LR	ミガキ	10YR黒色	10YR褐灰色	口～体		
275	SD19-23-8E8·8F3·8·13	SD19-23	深鉢	C8			26.0		0.313	金·雲·長	ナデ	ナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～体上	口～体上	
276	SD19-23-8F20	SD19-23	壺	B	f1				0.000	金·雲·長	肩：浮線文、ミガキ	ケズリ、ナデ	7.5YR灰褐色	7.5YR灰褐色	肩	肩	外面赤彩
277	SX112-15-9F22,S1-9F18	SD19-25	深鉢	B6c			(32.0)		0.125	金·雲·長	口：平行沈線文+条痕文+網目状撚糸文L	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
278	SX112-15-8E23·8F23,SX2120-8F4,SD19-23-8F3·8·12·13	SD19-25	浅鉢	B1	d5		28.2		0.250	金·雲·長	山形1、口：浮線文③·紡錘形モチーフ2段半単位ずれる、ミガキ顕著、光沢あり	ミガキ顕著	10YR黒色	10YR黒褐色	体下		
279	SD19-19-7F13·14,同15-7F18	SD19-19	深鉢	C7d		27.0	29.4	8.0	0.313	金·雲·長	口～体：条痕文タテ、底：ケズリ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR黒褐色	口～体上濃い	口～底濃い	10.49ℓ
280	SD19-19-7F14	SD19-19	浅鉢	C1	e3		(28.0)		0.063	雲·白	口：浮線文、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	2.5YR灰白色	2.5YR黄灰色	口体上	口体上	
281	SX112-14·11-8E8	SD19-17	深鉢	A7a		22.3	25.3	10.2	0.250	金·雲·長	縄文LR、口：結節縄文LR·指頭押圧状の凹凸あり	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～体下濃い、底、黒色及び白色の吹きこぼれ痕あり	体上～中に濃いバンド状	7.55ℓ
282	SD19-14-7D3	SD19-14	甕	C3e			(18.0)		0.125	雲·長	口：肥厚、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口頸濃い	口頸	
283	SX112-11-8E7	SD19-13	鉢	B	a2		(13.6)		0.063	雲·長	口：浮線文③、体：ミガキ	口：突帯状·平行沈線文、体：ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～体濃い	口～体濃い	内外面口縁赤彩、0.90ℓ
284	SX112-10-8E13	SD19-12	深鉢	B1			(21.8)		0.063	雲·長	口：浮線文④、体：結節縄文LR	ナデ·ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
285	SX112-9·4-8E13,同8-8E13·17	SD19-11	浅鉢	C1	a3		24.6		0.188	金·雲·長	山形1、口：浮線文（浮）、体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	2.5Y黒褐色	2.5Y黒色	口～底	口	外面口縁赤彩、2.10ℓ
286	SX112-9b-8E24	SD19-11	浅鉢	I1	b3		(16.0)		0.125	雲·長	口：眼鏡状文·沈線文③、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口	口	内外面赤彩
287	SX112-9·8-8E19	SD19-11	浅鉢	D1	b3		(23.0)		0.063	金·雲·長	山形1、口：浮線文②、ミガキ	ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい灰黄褐色			外面赤彩
288	SX112-9-8E19,同8-8E13	SD19-11	浅鉢	J		2.7	6.4	4.0	0.688	雲·長	口体面：浮線文③	ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～底·面	口～底	焼成前穿孔
289	SX112-9-8E24	SD19-11	深鉢	B6b			(30.0)		0.125	金·雲·長	口：結節縄文LR2段+平行沈線文、体：縄文LR	丁寧なナデ	10YR黒色	10YRにぶい黄橙色	口～体上濃い	体上下	
290	SX112-9·8-8E13	SD19-11	深鉢	D6a			13.8		0.313	金·雲·長	口：平行沈線文、体：縄文L	ナデ	2.5Yにぶい黄色	2.5Y黒褐色	口～体上濃い	口～体上	1.24ℓ
291	SX112-9-8E14,同4-8E13	SD19-11	甕	B2b			(24.0)		0.125	金·雲·長	山形2、口：縄文LR+平行沈線文、頸：縄文LR、肩：縄文LR+浮線文④	ナデ·ミガキ	10YR黒色	10YRにぶい黄褐色	口～肩濃い	口～肩	
292	SX763-11-8E17	SD19-10	浅鉢	C1	b1		(20.4)		0.125	雲·長	口：浮線文（浮）、ミガキ	口：肥厚·平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口	口	外面赤彩
293	SX112-8·2-8E13,同4-8E12·13	SD19-10	甕	C3e			(25.0)		0.375	金·雲·長	口：複合口縁·縄文L、体上：ミガキ	丁寧なナデ	10YR黒色	10YRにぶい黄褐色	口濃い		
294	SX112-4-8E14	SD19-8	甕	C1a	d2		(18.6)		0.063	金·雲·長	口：縄文LR、頸：浮線文③	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR褐灰色	口頸濃い	口頸	
295	SX112-4-8E18	SD19-8	深鉢	B1	d2		?		?	金·雲·長	山形1、口：縄文LR·浮線文	口：平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YR黒色			
296	SX112-1·S1·VI-8E7,S2-8E3	SD19-5	深鉢	C8		28.9	32.0	10.2	0.438	金·雲·長	擬縄文ないし縄文RL、丁寧なナデ、底：ケズリ、面：ササ痕？	丁寧なナデ	2.5Yにぶい黄色	2.5Y暗灰黄色	口～体上濃い	体下濃い	10.95ℓ
297	SH2443·S3-12F8,S4-12F13,VI-12F11		深鉢	A7a			29.0		0.250	金·雲·長	口：複合口縁·縄文LR、体：平行沈線文·縄文LR	丁寧なナデ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄橙色	口		一括、埋設土器SH2443

土器観察表（8）

報告№	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
298	SH2302-12F13･14,SC2266･S4-12F8･13,S3-12F13,Ⅵ-12F8･9･14		深鉢	B6a		36.0	34.7	9.6	0.875	雲･長	口：指頭状圧痕･平行沈線文、体：縄文LR、底：ケズリ	ナデ	2.5Y灰黄色	2.5Y暗灰黄色	口～体底	体下	一括、埋設土器SH2302、19.23ℓ
299	SH2448-6･5･4･3･1-12F1		深鉢	C7d			37.9		0.875	雲･長	口～体：条痕文（幅8㎜）板状、口に輪積みと指頭状圧痕あり	丁寧なナデ	2.5Y浅黄色	2.5Y浅黄色	口～体上濃い	体下濃い	一括、19.50ℓ
300	SH2301･S4･S3-12F8,S1-12F8･13		深鉢	B6a			34.2		0.750	金･雲･長	口：肥厚、下端：平行沈線文･縄文Lヨコ、体：縄文Lタテヨコ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口体上		一括、埋設土器SH2301
301	SH2457-12E24		甕	C2a	a2		15.9		0.500	金･雲･長	山形1、口：平行沈線文③･縄文LR、頸：綾杉文、肩：浮線文④、体：縄文LR	口：平行沈線文、丁寧なナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口～体上	体上下	一括、2.69ℓ
302	D-12F8･15	D	浅鉢	B1	d1		(16.0)		0.125	金･雲･長	口：浮線文④、体：ミガキ	ミガキ	7.5YR黒色	7.5YR褐灰色	口体上	口体上	外面赤彩
303	SC2266･D2-12F21	D	深鉢	A7b			26.3		0.188	金･雲･長	口：結節縄文R、体：縄文R	丁寧なナデ	7.5YR褐灰色	7.5YR褐灰色	口～体上	口～体上	
304	S5-12F20	S5	浅鉢	B1	a1		?		?	金･雲･長	山形1、口：浮線文④、ミガキ	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色	口		
305	S5-11F6	S5	浅鉢	B1	a2		(17.8)		0.125	金･雲･長	山形1、口：浮線文④	口：平行沈線文、ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口		
306	SC2424-13F16	S5	浅鉢	B1	b1		19.0		0.250	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文③、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口	口	
307	S5-12F20,11G4･5･9･10	S5	浅鉢	B1	b2		(29.4)		0.063	雲･長	山形1、口：浮線文④、ミガキ	口：突帯状･平行沈線文、ミガキ	7.5YRにぶい褐色	7.5YRにぶい褐色	口		用水路工事立会い、内外面赤彩
308	SC2424･S5･S3-13F22	S5	浅鉢	B1	f1		22.0		0.250	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文④、ミガキ	口：突帯状･平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YR黒褐色	体上	口～体上	内外面赤彩
309	SC2266-1-12F17･13F2･11･16･21,SC2266-V4-3,SC2425･S4-13F11,SC2424-13F21,S5-13F11･22	S5	鉢	F	b4･f1		(21.0)		0.125	金･雲･長	山形1、口：浮線文③、体：浮線文･平行沈線文、ミガキ	ミガキ	10YR褐灰色	10YR褐灰色			一括･外面赤彩、2.56ℓ
310	SC2424-13F21	S5	台付浅鉢			12.1	15.9	4.8	0.125	金･雲･長	口体：縄文LR、台：ミガキタテ	丁寧なナデ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色	口～体上	体上バンド状、底	0.77ℓ
311	SC2266･S5-12F25	S5	甕	C2b	a2･f2	21.3	21.5	6.5	0.813	金･雲･長	山形1、口肩：浮線文④、口頸体：縄文RL	丁寧なナデヨコ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～面、体濃い	口～底、口～頸濃い	一括、4.53ℓ
312	S5-13F22	S5	甕	C2b	e3				0.000	金･雲･長	頸：縄文LR、肩：浮線文④、体：縄文LR	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	頸～体上濃い	頸～体上	
313	S5-13F21	S5	甕	C3a			?		?	金･雲･長	口：隆線帯、頸：ナデ	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YR黒褐色			
314	SC2266-12F12･14～17･20･13F11･12･16,SC2424-13F16,S1-12F15	S5	甕	B3a	f1	44.2	37.2	9.7	0.500	金･雲･長	口：平行沈線文、頸：ナデ、肩：浮線文④、体：条痕文、底：ナデヨコ	ナデ･ミガキ	2.5Yにぶい黄色	10YR灰黄褐色			一括、29.06ℓ
315	SC2266-13F1･17,S4･S5-13F17,13G1～4･6～9	S5	甕	E2a	f1･e2		35.0		0.375	金･雲･長	山形1、口：浮線文④、頸：鋸歯状集合沈線文･刺突文、肩：浮線文	ミガキ	10YR灰白色	7.5YR灰褐色	口～肩		用水路工事立会い
316	S5･S4～S3-14F11,S4-13F15	S5	甕	E3a	a3				0.000	金･雲･長	頸：浮線文、ミガキ	ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	頸～体上		外面赤彩
317	SC2247･SC2425-13F11	S5	甕	E3					0.000	雲･長	肩：平行沈線文･列点文、体：縄文L	丁寧なナデ	10YR にぶい黄橙色	10YR灰黄褐色	肩～体上濃い	肩体下	
318	S5-13F12･17,S3-13F23,Ⅵ-11F11･16	S5	深鉢	A7d			30.6		0.750	金･雲･長	口：肥厚･ナデ、体：条痕文（ケズリ状）	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色			
319	S5-13F21	S5	深鉢	C1	d1		?		?	金･雲･長	口：浮線文④、ナデ	ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口	口	一括
320	SC2424-13F22,S4-12F13,S5-12F24,12F23	S5	深鉢	C1	a2	14.3	18.4		0.375	金･雲･長	口：浮線文④、体：縄文Lヨコ	ミガキヨコ	2.5Y灰黄色	2.5Y灰黄色			一括、2.58ℓ
321	S5-12F15･13F11･13F16	S5	深鉢	C1	e2		22.0		0.250	金･雲･長	口：浮線文③、体：縄文LR	口：ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			一括
322	SC2425･S4-13F11	S5	深鉢	C7a			20.0		0.375	金･雲･長	口体：縄文LR	ナデ･ミガキ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口体上濃い	口体上	
323	S5-13F22	S5	壺	B	e2				0.000	金･雲･長	頸：ナデ･ミガキタテ、肩：浮線文（浮）、体上：ミガキ	ナデ	2.5Y暗灰黄色	2.5Y灰黄色	頸～体上		
324	SC2247-12F12,SX2251-14F1,S4-14E21,Ⅵ-14F6	S4	浅鉢	A1	a1		21.0		0.250	金･雲･長	山形1、口：浮線文③、ミガキ	口：突帯状･平行沈線文、ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR褐灰色	口	口	
325	SC2266-11F9･10･12F16,SC2266-V9-11F10	S4	浅鉢	B1	a1		17.0		0.250	金･雲･長	山形1と楕円状突起、口：浮線文③、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	7.5YRにぶい橙色	10YRにぶい黄橙色			外面赤彩
326	SC2266-12E22	S4	浅鉢	B1	a1		(22.0)		0.125	雲･長	口：浮線文④･ミガキ	ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄褐色	口	口	
327	S4-12F13	S4	浅鉢	B1	a2		(12.2)		0.188	金･雲･長	山形1、口：浮線文④、体：ミガキ	ナデ	7.5YRにぶい橙色	7.5YRにぶい橙色			
328	SC2266-11F25	S4	浅鉢	B1	a2		(20.2)		0.125	金･雲･長	口：眼鏡状沈線文、体上：浮線文③、ミガキ	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色	口		
329	SC2247-11F3,SC2266-11E23･11F4,S4-9E4,S3-13E10,S2～S1-11F3,11F24	S4	浅鉢	B1	a3		19.0		0.625	金･雲･長	山形1、口：浮線文（浮）、ミガキ	口：突帯状･平行沈線文、ミガキ	5YR黒褐色	5YR黒色	口	口	内外面口縁赤彩
330	SC2266-12F1	S4	浅鉢	B1	b1	9.7	24.2	8.8	0.313	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文④、体：ミガキ	口：突帯状･平行沈線文2条、ミガキ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄橙色・灰黄褐色	口～体下	体下にバンド状、口	内外面口縁赤彩、1.97ℓ
331	SC2266-11F15	S4	浅鉢	B1	b1		21.6		0.375	雲･長	波状口縁、口：浮線文③、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色			内外面赤彩
332	SC2266-12F8,Ⅶd-14F2	S4	浅鉢	B1	b1	9.3	26.0	6.4	0.688	金多い･雲･長	山形1、口：浮線文④、ミガキ	口：突帯状･平行沈線文、ミガキ	2.5Yにぶい黄色	2.5Yにぶい黄色			一括、2.32ℓ
333	SC2266-12F9,S4-12F13,S3-12F8	S4	浅鉢	B1	b1	15.8	30.9	7.3	0.500	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文④、ミガキ	口：突帯状･平行沈線文、ナデ+ミガキ	10YR灰黄褐色	2.5Y灰黄色	口～底	口	一括、3.96ℓ

土器観察表（9）

報告No.	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
334	SC2266-11F5,S3-12F1	S4	浅鉢	B1	b4	7.5	15.7	6.0	0.313	金･雲･長	波状口縁、端：沈線文、口：浮線文③、体：ミガキ	口：突帯状、ミガキ	2.5Y灰黄色	2.5Y灰黄色	口～面		0.59ℓ
335	SC2266-12F11	S4	浅鉢	B1	b4		(27.0)		0.125	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文③、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR褐灰色	口～体濃い		外面沈線に赤彩
336	SC2266-12E21･22	S4	浅鉢	B1	d2		(27.0)		0.188	金･雲･長	口：浮線文③、体：ナデ･ミガキ	口：突帯状･平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色	口	口	3.35ℓ
337	SC2247-12E24,S4-11E3,S1-12E25	S4	浅鉢	B1	d2	6.4	19.2	6.0	0.313	金･雲･長	口：浮線文（浮）、体：ミガキ、面：ササ痕？	口：平行沈線文、ミガキ	10YR褐灰色	10YR黒褐色			内外面口縁赤彩、0.86ℓ
338	SC2266-V9-11F5･10	S4	浅鉢	B1	d5		(23.4)		0.063	雲･長	山形1、口：浮線文③、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色		口体	
339	SX2282-13F6	S4	浅鉢	B1	e1		(23.4)		0.063	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文③、ミガキ	ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口体上	口体上	外面赤彩
340	SC2247-11E23,SC2266-11E22･23･25	S4	浅鉢	B1	e3	3.8	11.7	5.0	0.375	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文④、体：ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	2.5Y暗灰黄色	2.5Yにぶい黄色	口～底	口～底	0.18ℓ
341	S4-13F2	S4	浅鉢	B1	e3		?		?	金･雲･長	口：浮線文④、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色			トレンチ
342	S4-12E19,S1-12E24	S4	浅鉢	B1	g1		(22.0)		0.188	英･角･金･雲･長	端：平坦に面取り、口：浮線文（浮）、ミガキ	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口	口	外面赤彩
343	SC2266-12F10･14	S4	浅鉢	B1	e1	8.6	23.5	4.8	0.188	金･雲･長	口：浮線文④、体：ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YR褐灰色	10YR褐灰色		口	一括･器面剥落、1.71ℓ
344	SC2266-11E23,S4～S3-10F10,S3-10E2,S2-10E2･3･15,VI-11F8･11･18	S4	浅鉢	B1	e3	6.6	15.9		0.500	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文（浮）、体：ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色・褐灰色	10YR灰黄褐色	口～底	口～底	0.57ℓ
345	SC2227-12F14,SC2247-11F3･12E21･12F8,SC2266-13F11	S4	浅鉢	B1	g1		24.6		0.250	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文④、ミガキ	口：肥厚・平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～体		内外赤彩、3.43ℓ
346	SC2266-12F18	S4	浅鉢	B8			(12.8)		0.063	金･雲･長	口：平行沈線3条②	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR褐灰色			
347	SC2266-12F18	S4	浅鉢	B10			12.4		0.750	金･雲･長	ケズリ･ナデ	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			一括、0.335ℓ
348	SC2247･S4-12F4,SC2266-12F4･24	S4	浅鉢	B8			37.0		0.500	金･雲･長	口：平行沈線文、体：縄文LR	ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	2.5Y黒褐色	口	口体	9.32ℓ
349	SC2266-13F7･8	S4	浅鉢	C1	a2		(24.0)		0.125	英･雲･長	口：浮線文③、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR灰褐色	口体上濃い	口体上	外面赤彩
350	SC2266-12E25	S4	浅鉢	C1	a2		(20.0)		0.125	金･雲･長	口：眼鏡状沈線文･浮線文③	口：平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR黒褐色			
351	SC2247-12F11,SC2266-11F15･12F11･16	S4	浅鉢	C1	b1		30.2		0.313	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文④、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YR黒褐色	口体上	口	内外面赤彩
352	SC2266-12F3	S4	浅鉢	C1	e3		(14.8)		0.125	金･雲･長	口：浮線文④、網目多段	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口		
353	SC2266･S1-12F7,VI-12F7･10･12	S4	浅鉢	C1	f1		25.0		0.375	金･雲･長	口：浮線文④、体：ナデ･ミガキ	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口体		2.43ℓ
354	SC2266-13F16	S4	浅鉢	C1	f1		(20.0)		0.063	金･雲･長	口：浮線文④、体：ミガキ	口：突帯状･平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
355	SC2247-12F1,SC2266-12F2,VI-11E24	S4	浅鉢	C2			(14.4)		0.188	英･雲･白	口：工字文③･粘土瘤貼付、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口		外面口縁赤彩
356	S4-13F11	S4	浅鉢	D1	a2		(20.0)		0.063	金･雲･長	山形1、口：浮線文③、ミガキ	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口	口	トレンチ、外面赤彩
357	SC2266-12F23	S4	浅鉢	C1	f1	9.9	23.2	6.0	0.375	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文④、体：ミガキ	ミガキ	2.5Y黄灰色	2.5Y黄灰色	体上～底		外面口縁赤彩、1.84ℓ
358	SC2266-13F3･7･12･17	S4	浅鉢	B1	d2		(17.4)		0.063	角･雲･長	口：沈線帯･浮線文④、ミガキ	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～体濃い		外面赤彩
359	SC2266-12F5	S4	浅鉢	D1	e2		(23.6)		0.063	金･雲･長	口：浮線文④、ミガキ	口：突帯状･平行沈線文、ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色			
360	SC2266-11E5･25･11F5･9	S4	浅鉢	D1	e3		26.0		0.500	金･雲･長	山形1、口：浮線文④、体：ケズリ･ミガキ	ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色			2.29ℓ
361	S4-12F14	S4	浅鉢	D1	f1		(21.0)		0.125	金･雲･長	口：浮線文･ミガキ	ナデ･ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR褐灰色			外赤彩
362	SC2247-12F15,SC2266-12F14	S4	浅鉢	D9			13.0		0.313	金･雲･長	条痕状の擦痕あり、ケズリ	ナデ	7.5YRにぶい褐色	7.5YRにぶい褐色			0.44ℓ
363	SC2266-11E22,12F24	S4	浅鉢	F1	e2		22.1		0.250	雲･長	山形1･2、口：浮線文②、頸：ミガキ	ナデ･ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YR黒色	口～頸	口頸濃い	
364	S4-12F13	S4	鉢	B	d4		15.0		0.250	金･雲･長	口：浮線文③、ミガキ	口：突帯状･平行沈線文、ミガキ	7.5YR褐灰色	7.5YR褐灰色			一括、1.02ℓ
365	SC2266-12F13	S4	鉢	B	a2	10.2	15.4	8.6	0.313	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文③、体：ミガキ	口：突帯状、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	体下		一括･外面赤彩、1.16ℓ
366	SC2247-10F5,SC2266-11F12	S4	台付浅鉢					6.6	0.000	雲･長	台：平行沈線文	ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YR灰黄褐色	台	台	外面赤彩
367	SC2266-10F5･11E21	S4	台付浅鉢					6.6	0.000	金･雲･長	台：匹字文	丁寧なナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
368	SC2266-12F12	S4	台付浅鉢					3.6	0.000	金･雲･長	台：ケズリ･ミガキ	ケズリ	10YRにぶい黄橙色	10YR黒褐色			
369	SC2266-12F16	S4	甕	B1a	f1		(12.0)		0.063	金･雲･長	口頸：浮線文④、肩：刺突文･縄文LR	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR褐灰色	口頸		
370	SC2266-12F14･19	S4	甕	A2b	f1		(35.2)		0.063	金･雲･長	口：浮線文④、頸：縄文R、肩：平行沈線文	ナデ･ミガキ	7.5YR褐灰色	7.5Y灰褐色	口～頸	口～頸	
371	SC740-11E11,SC2266-11E23･25･11F4	S4	甕	A2b	f1･e3		12.2		0.563	金･雲･長	山形1、口肩：浮線文④、頸体：縄文LR	口：平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YR灰黄褐色	口～体上	口頸	
372	SC2266-12F25	S4	甕	A2b			(33.2)		0.063	金･雲･長	口：浮線文④、頸：縄文LR	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR黒褐色	口頸	口頸	
373	SC2247-12F5･10,SC2266-12F15,S4-12F5	S4	甕	A2d			16.6		0.250	金･雲･長	山形1･2、口：平行沈線文、口～体：縄文RL	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～肩濃い	口～体上濃い	一括
374	SC2266-12F10	S4	甕	A2a	e2･a2	37.1	31.9	8.0	0.750	雲･長	口：浮線文④+縄文R、頸：交互綾杉文、肩：浮線文、体上：縄文R+結節縄文R	ナデ･ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄褐色	口～体上濃い、底	体下濃い	一括、17.96ℓ

土器観察表（10）

報告No.	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
375	SC2266-11F10･15･20	S4	甕	B1b		24.7	20.3	10.2	0.813	雲･長	山形2が6単位、頸：綾杉文、体：縄文R、底：ミガキ	ナデ+ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YR黒褐色	口～体上濃い	体上下	5.41ℓ
376	SC740-12E16,SC2266-11F4･12F20,Ⅵ-11F12	S4	甕	B1b			(43.0)		0.125	金･雲･長	口：平行沈線文、頸：斜線文、肩：網目状撚糸文RL	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口～肩		
377	SC2266-11F9･14･20	S4	甕	B2a	a3		(21.8)		0.188	金･雲･長	山形1、口：平行沈線文、頸：綾杉文、肩：浮線文（浮）	ナデ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色	口～肩	口～肩	
378	SC2266-12F4･14･17,S4-12F4,13G	S4	甕	B2b	a2		39.6		0.375	金･雲･長･白	山形1、口：縄文LR+平行沈線文、頸：縄文LR、肩：浮線文④･交点突起、体：縄文LR	ナデ･ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR灰褐色	口～体上濃い	口～体上	用水路工事立会い
379	SC2247-12E25,SC2266-12F10･23･13E21,SC2266-V6-13F6,S5-12F5,S3-12F10･12	S4	甕	C1a	b3		(27.0)		0.125	金･雲･長	口：縄文LR、頸：浮線文④、肩：縄文L	ナデ･ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR灰褐色	口～肩濃い	口～肩	一括
380	SC2247-12F14･19･20･25,SC2266-12F12･15･25･13F7,Ⅵ-12F24･25	S4	甕	B2b	e2		(37.4)		0.188	金･雲･長	口：浮線文④、頸体：縄文LR	ナデ･ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YR黒色	口	口～体下	一括
381	SC2247-12F12～14･17･18,SC2266-11E5･12F5･12･13･19･13F17,S3-12F12	S4	甕	B2b	d1		37.2		0.750	金･雲･長	山形1、口肩：縄文LR、頸：三角形彫去文、刺突文・結節縄文充填、体：撚糸文R（幅約1.5㎝･6条）	ナデ	2.5Yにぶい黄色	2.5Y暗灰黄色	口～肩	体上、体下バンド状	一括、28.60ℓ
382	P2515-5-11F4,SC2247-12E22,SC2266-11F14･15･20･24･25･12F12,S4-11F4･14,S4～S3-11F4･14,S1-11E25･11F19･24,Ⅵ-11F14･25	S4	甕	B2b			35.2		0.500	金･雲･長	口：工字文、頸：縄文LR、肩：工字文、体：縄文LR･撚糸文R	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～体上	口～体下	
383	SC2247-12F10･14･15,SC2266-12F15,Ⅵ-13F11	S4	甕	B2e			43.2		0.438	金･雲･長	口：複合口縁･縄文LR、頸：縄文LR、肩体：条痕文	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	体上		
384	SC2266･Ⅵ-11E23,S4-11E1,S3-11E21	S4	甕	B3a	f1		24.5		0.375	金･雲･長	山形1、口：浮線文④、頸：ナデ、肩：平行沈線文･縄文LR	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色			
385	S4-13F17･18	S4	甕	B3e		44.0	36.9	9.2	0.250	金･雲･長	口頸：ナデ+ミガキ、肩体：条痕文（幅1.1㎝）	ナデ+ミガキ	2.5Y灰黄色	2.5Y灰黄色	口～体上	体下コゲ	一括、24.25ℓ
386	SC2266-11E25･11F9･15,SC2266-V4-3-13F6,Ⅵ-10F18	S4	甕	B3e			(28.0)		0.188	金･雲･長	口：肥厚･連続押圧文、頸：ナデ、肩：結節縄文LR	口：平行沈線文、丁寧なナデ	10YRにぶい黄橙色	10YR黒褐色	口～肩	肩	
387	SC2266･S5･Ⅵ-12F19	S4	甕	B2e		27.2	24.6	9.0	0.688	金･雲･長	山形1、端：突起の両側に沈線、口：平行沈線文、口～体：縄文LR、底：ナデヨコ	口：平行沈線文、丁寧なナデ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色	口～体下濃い	口･体下～底濃い	一括、6.91ℓ
388	SC2227･SC2266･S4-12E24	S4	甕	C1a	b2	14.9	15.0	8.2	0.250	金･雲･長	波状口縁、頸：浮線文④、体：縄文LR、底：ミガキヨコ	ナデ+ミガキ、山形突起の内面に山形の彫去あり	2.5Y灰黄色	2.5Y暗灰黄色	口～体上濃い、底	全面、口濃い	1.46ℓ
389	K4-13F10	S4	甕	C1a	d2		11.2		0.375	金･雲･長	波状口縁、口頸：浮線文④、ミガキ	口：平行沈線文、ナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	口頸濃い	口頸	
390	SC2266-11F4	S4	甕	C1b			?		?	金･雲･長	口：撚糸文L･平行沈線文	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色	口		
391	SC2247-11E25,SC2266-11E24･11F24,10G3～5･8～10,11G3･4･8･9	S4	甕	C1a	a1		34.4		0.313	金･雲･長	波状口縁、口：縄文LR+浮線文③、頸：縄文LR	丁寧なナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～頸		用水路工事立会い
392	SC2266-11E21～25･11F9･15･12E22,D2-11E22,S4～S3-11E23	S4	甕	C1a	a1	18.0	16.9	8.6	0.313	金･雲･長	口：縄文LR、頸：浮線文④、体：縄文LR	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	2.5Y暗灰黄色	2.5Y灰黄色	口～体上濃い、底･面		3.03ℓ
393	SC2247-13F1,SC2266-12F5･10･13F1･4･6･8･15,SC2266-V6-13F6,SX2282-12F12,S5･S1-13F6,S4-13F2,S3-12F5	S4	甕	C2b	e2		29.4		0.500	金･雲･長	山形1、口：平行沈線文、頸：縄文LR、肩：浮線文④、体：縄文LR	ナデ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄褐色	口～体上濃い	口～体上	一括、16.29ℓ
394	SC2266-11E25,S3-10D18,Ⅵ-11F6,12G2･3･7･8	S4	甕	C2b	e2				0.000	金･雲･長	頸：縄文LR、肩：浮線文④	ナデ	10YR黒色	10YRにぶい黄褐色	肩濃い、頸		用水路工事立会い
395	SC2266･S4-12F14	S4	甕	C2b			41.8		0.500	金･雲･長	山形1、口：複合口縁･平行沈線文+縄文LR、頸：縄文LR、肩：工字文	ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄褐色			一括
396	SC2266-12E23	S4	甕	C3d			(18.0)		0.125	金･雲･長	山形1、口：撚糸文R、頸：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口	口	
397	SC2266-12F10,S4-13E6	S4	甕	C3e			(28.0)		0.188	金･雲･長	口：縄文LR、頸：ナデ	ナデ	7.5YR黒褐色	7.5YR灰褐色	口頸濃い		
398	SC2266-12F13･18･23,Ⅵ-12F23	S4	甕	C3a	f1		32.6		0.313	金･雲･長	口：平行沈線文･指頭状圧痕、頸：ナデヨコ、肩：浮線文、体：縄文L	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	体上		一括
399	SC740-11E14,S4-12F8･13	S4	甕	C2a	d2		14.0		0.625	金･雲･長	山形1、口：浮線文④･縄文L、頸：綾杉文、体：縄文L	丁寧なナデ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄橙色	口～体上濃い	体上～体下	一括、2.41ℓ
400	SC2266-12F5･13F11･16,S4-12F5･13F16	S4	甕	D1a	e1	29.6	33.5		0.250	金･雲･長	口～体：縄文LR、頸：浮線文	丁寧なナデ体上ヨコ･体下タテ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色	口～体	体上～下コゲ	一括、24.21ℓ
401	SC2227-12F15,SC2247･SC2266-12F3,Ⅵ-12F4･9･10･14･23･13E21	S4	甕	E2b			37.0		0.250	金･雲･長	山形1、口：平行沈線文、頸：結節縄文LR、肩：眼鏡状文、体：条痕文	ナデ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口～体上	口～体上	
402	SC2266-12F12	S4	甕	E2b	e2		(28.8)		0.125	金･雲･長	山形1、口：縄文L+浮線文④､頸：縄文L	ナデ	10YR黒褐色	10YR褐灰色	口頸		
403	SC802-13E8,SC2266-13E21,S3･S2-13E3	S4	甕	E3a	f1		(23.0)		0.125	金･雲･長	山形1、口：浮線文④、頸：ナデ、肩体：網目状撚糸文R？	ナデ･ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR黒褐色	口～体上濃い	口～体上	

土器観察表（11）

報告No.	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
404	SC804-14E2,SC2266-12F15･18･13F3,S4-12F13･14･13D22,Ⅵ-12F9･14,12G2･3･7･8	S4	甕	E3a			30.6		0.375	金･雲･長	波状口縁、口：平行沈線、頸：ナデ、肩：平行沈線+工字文	ナデヨコ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色			一括、S4層所属、用水路工事立会い
405	S4･S3-12F8	S4	甕	E3d		41.6	31.1	9.6	0.625	金･雲･長	口：平行沈線文･縄文L、体：縄文L、頸：ナデ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～体上ス ス	体下コゲ	一括、底部が丸く自立しない、19.74ℓ
406	SC740-12E16,SC2227-12E23･12F4,SC2247･S3-12F4,SC2266-12F1,SD19-23-8F18,S2-13E3･12,Ⅵ-12E24･12F4･5･9･14･15	S4	甕	E3e			(34.8)		0.188	金･雲･長	口：網目状撚糸文R、頸：ナデ、肩：結節縄文LR、体上：網目状撚糸文R、体下：条痕文	ナデ	10YR褐灰色	2.5Y黄灰色			
407	SC2266-12F11	S4	甕	F2e			(18.2)		0.125	金･雲･長	口～体：縄文RR	ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YR灰黄褐色	口～体上	口～体下濃い	1.75ℓ
408	SC2266-12F9,Ⅵ-12F8･13	S4	甕	Ala	b1		(30.0)		0.125	金･雲･長	口：縄文LR･浮線文④	ナデ	10YR黒褐色	10YR褐灰色	口	口	
409	SC2266-12F5･8･10･14,S3-12F5･10	S4	深鉢	A1	f1		27.0		0.875	金･雲･長	口：浮線文④･指頭状圧痕、体：条痕文タテ	ナデ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口体上濃い	口体上	一括
410	SC2266･S1-13F8,S4-13F4･9･13･14･22,S3-13F5･8･9･13･14,S2-13F9･14,Ⅵ-13F14･15･19	S4	深鉢	A6a			35.5		0.938	雲･長	口：平行沈線文④、体：縄文RL	ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄橙色	口～体下濃い	口～体下	
411	SC2266-11E25･11F4･14･15･19･20･24･25･12F14	S4	深鉢	A2			34.9		0.375	金･雲･長	口：縄文LR+鋸歯状沈線文、体：縄文LR	丁寧なナデ	2.5Yにぶい黄色	2.5Yにぶい黄色	口～体上底	体下	18.60ℓ
412	SC2247-12F14,SC2266･S4･S3-12F13	S4	深鉢	A6d		32.1	32.7	10.9	0.813	金･雲･長多い	口：条痕文（幅約7㎜）+平行沈線文、底：ササ痕？	ナデ	2.5Y灰黄色	2.5Y暗灰黄色			一括、15.43ℓ
413	SC2266V6-1-13F1,S4-14F2,Ⅵ-14F1･2･6･7･17･18	S4	深鉢	A7b		(40.8)	32.6	12.6	0.750	金･雲･長	口：結節縄文L、体：縄文L、底：ナデヨコ	ナデ･ミガキ	2.5Y灰黄色	2.5Y灰黄色	口～体上濃い	口～底･面濃い	一括、25.30ℓ
414	SC2247･SC2266･S2･Ⅵ-11E23,S1-11E23･25	S4	深鉢	A7b			34.9		0.688	雲･長	口：条痕文+結節縄文R、体：条痕文タテ	ナデ	10Y黒褐色	10YR灰黄褐色	口～体下濃い	体下濃い	
415	SC2266-12E22･12F12	S4	深鉢	A6d			(40.0)		0.125	金･雲･長	口：ナデ･平行沈線文、体：条痕文（8㎜･4条）	ミガキ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄橙色	口～体		
416	SC2266-12F8,S4-12F13	S4	深鉢	A7b			(31.0)		0.125	金･雲･長	口：結節縄文Lヨコ、体：縄文Lタテ	ナデ	7.5YR灰褐色	7.5YR灰褐色	口体上		一括
417	SC2247-12F3･8,SC2266-12F3～5,S5-12F21	S4	深鉢	A7d			?		?	金･雲･長	端：連続押圧文、口：条痕文	丁寧なナデ	7.5YR灰褐色	7.5YRにぶい褐色	口		
418	SC2266-11E23･24,Ⅵ-11E23	S4	深鉢	B1	f1		(15.0)	(6.0)	0.188	金･雲･長	山形2、口：浮線文（浮）、体：縄文LR	ナデ･ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～体上濃い	口～底	1.61ℓ
419	SC2266-11F25･12F17･Ⅵ-11F19	S4	深鉢	C1	d1		(10.0)		0.188	金･雲･長	山形1、口：縦位の浮線文･沈線文、ナデ	丁寧なナデ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色			
420	SC2266-12F19,Ⅶ-13E19･20,Ⅵ-15F7	S4	深鉢	B2			14.0		0.250	金･雲･長	口：縄文L+浮線文④、反転部あり	ナデ･ミガキ	7.5YR褐灰色	7.5YR黒褐色	口	口	
421	SH2301-12F8,SC2247-12F9･12～14,SC2266･S1-12F13,S3-12F12･13,Ⅵ-12F7･8･20	S4	深鉢	B6d			(34.0)		0.125	雲･長	口：条痕文･幅広のナデ痕+平行沈線文	丁寧なナデ	7.5YRにぶい褐色	7.5YR灰褐色	口	口	一括
422	SC2227-12F4,SC2247-12E21･22･25･12F2,SC2266-12E21,S3-11F5	S4	深鉢	B7a			39.2		0.375	金･雲･長	口：縄文L	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口		
423	SC2247-12F1･13,S4-12F13,S3-12E16,Ⅵ-12F13･14	S4	深鉢	B7b			28.2		0.438	金･雲･長	口：結節縄文R、体：縄文R	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口体上		一括
424	SC2266-12F1･6･7･12	S4	深鉢	B6a		41.3	37.1	10.4	0.438	雲･長	口：平行沈線文、口～体：縄文LR+ナデ、底：ナデ	口：肥厚、ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色	口～体上濃い		一括、22.88ℓ
425	SC2247･SC2266-12F12	S4	深鉢	B7c			(26.0)		0.125	金･雲･長	口：複合口縁･撚糸文R	ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR褐灰色	口		
426	SC2266-10F5,S4-10F4,S1-10E10･24･25,Ⅵ-10E25	S4	深鉢	B7b		38.3	42.6	11.2	0.813	金･雲･長	口：結節縄文LR、体：縄文LR、底：ナデヨコ	丁寧なナデ	10YR灰黄褐	10YR灰黄褐	口～体上濃い	体上コゲ、体下バンド状	27.83ℓ
427	SC2266-11F10･12F16	S4	深鉢	C1	e3		20.6		0.313	雲･長	山形1、口：浮線文②、体：縄文LR	ナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～体上	口～体上	
428	SC2266･S5-12F15	S4	深鉢	C1	e3	16.0	15.6	7.0	0.438	金･雲･長	小波状口縁、口：浮線文④、体：縄文RL	丁寧なナデ	10YR灰黄褐色	10YR黒色	口～底濃い	口～底	一括、1.69ℓ
429	SC2266-13F11･16,SX2282-13F12,S4-13F11･21	S4	深鉢	C6a		16.9	17.2	7.2	0.250	金･雲･長	山形1、口：瘤状突起･平行沈線文、体･底：平行沈線文･縄文LR	ナデ+ミガキ	2.5Y灰黄色	2.5Y暗灰黄色	口～体濃い	口～底濃い	1.55ℓ
430	SC712-10E4,SC740-11E20,SC2266-11F4	S4	深鉢	C6a			14.0		0.688	金･雲･長	山形2、口：縄文LR+平行沈線文、体：縄文LR	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR黒褐色	口	口体上	
431	SC2266-12E25	S4	深鉢	C6a			(19.0)		0.188	金･雲･長	楕円状突起、口：平行沈線文･縄文LR	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YR褐灰色	口上		
432	SC2266-12E23,S1-11E23･25･12E23,Ⅶ-12E18･19	S4	深鉢	C6a			26.3		0.375	金･雲･長	口：縄文LR･平行沈線文、体：条痕文タテ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口体上	口	
433	SC2266-12F25	S4	深鉢	C6e			11.8		0.250	金･雲･長	山形1、口体底：平行沈線文、ナデ･ミガキ	ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～底濃い	口～体上濃い	0.44ℓ
434	SC2227-2-12F14,S4-13C25,S1-15D20	S4	深鉢	C6e			(19.8)		0.063	金･雲･長	口：細い平行沈線、ナデ･ミガキ	ナデ･ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口体上	口～体上	
435	SC740-11E13,SC2266-V-11-11F1･6,S4-9D9,S4～S3-11E21,S3-8D3･6･9C8･9D17,S2～S1-11E22,S1-11E24,Ⅵ-11E21,11G4･5･9･10,12G1･6	S4	深鉢	B6d			34.0		0.375	金･雲･長	口：平行沈線文･指頭状圧痕、体：条痕文	ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色			用水路工事立会い

土器観察表（12）

報告No.	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
436	SC801-13E19,SC2266-13F16, S4-13F6·8·10·11,VI-13F11	S4	深鉢	C7b			32.6		0.250	金·雲·長	口：結節縄文RL、体：縄文RL	ナデ·ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～体上濃い	口～体下	12.01ℓ
437	SC2266-11F4·10	S4	深鉢	C7b			(30.0)		0.125	金·雲·長	口：結節縄文LR	ナデ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄橙色	口		
438	SC2247-12F24,SC2266-12F25, 12G2·3·7·8	S4	深鉢	C7c			(30.0)		0.188	金·雲·長	山形1、口：撚糸文R	ナデ·ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR褐灰色	口		用水路工事立会い
439	SC2266-V11-11F1,VI-11F1·6	S4	壺	A	a2		(13.2)		0.125	金·雲·長	楕円状突起、口頸：浮線文（浮）、 肩体：ナデヨコ	口：平行沈線文、ナデ	2.5Y灰黄色	2.5Y灰黄色	肩	頸	一括
440	SC2247-12E24,S4-12F13	S4	壺	A			7.4		0.375	雲·長	口：眼鏡状文、頸：ミガキ	ミガキ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄褐色			
441	SC2266-12F13·22,S1-12F22	S4	壺	A			(5.2)		0.125	雲·長	口：眼鏡文、頸：ミガキ、 肩：工字文④	口：ナデ、肩：ケズリ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色			外面赤彩
442	SC2247-12F13,SC2266-12F18	S4	壺	A			(4.4)		0.063	雲·長	口：眼鏡文、頸：ナデ·ミガキ	口：平行沈線文、ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄橙色	口頸		
443	SC2266-12F15·24·13F2·7	S4	壺	B			17.8		0.313	金·雲·長	口：平行沈線文、口～肩：ミガキ	ナデ·ミガキ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色	肩		一括
444	SC2266-12F22,VI-11F25·12F17· 22·25,12G2·3·7·8	S4	壺	B					0.000	英·雲	肩：隆帯上に平行沈線文·縦位隆帯、ミガキ	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			一括、用水路工事立会い
445	S4·S3-12F9	S4	壺	B	f1		(13.0)		0.125	金·雲·長	口：平行沈線文、頸：ミガキ、 肩：浮線文④、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR灰黄褐色			トレンチ、1.43ℓ
446	SC2247·SC2266-12F13,S5-12F19, S4-12F13·14,VI-12F14	S4	壺	D	b2		20.7		0.188	金·雲·長	山形1、口：平行沈線文、頸：ミガキヨコ、肩：浮線文④、体：ミガキ	ナデヨコ	2.5Y灰黄色	2.5Y暗灰黄色	体上～体下濃い		一括、20.16ℓ
447	SH2302-12F13·14,SC2266· S4-12F8	S4	壺	F	f1		(6.0)		0.125	雲·長	口：平行沈線文、頸：ミガキ、 肩：匹字文	ミガキ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄褐色	口～肩		一括
448	SC2266-12F19,S4-12F11	S4	壺	F				6.4	0.000	金·雲·長	ナデ·ミガキ	ケズリ·ナデ	10YR黒色	10YRにぶい黄橙色	体上～下底濃い	体下	
449	SC2266-12F5,S3-12E25·12F4·5, S1-12E25·12F5,VI-12E25	S4	壺	E		(42.8)	14.2	10.0	0.313	金·雲·長· 白	口：工字文④、肩：隆帯·ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	2.5Y黒色	全体	全体	一括、外面口赤彩、 輪積明確
450	SC2266-13F4,SX2251-13E24· 13F4·5,SX2282-13F6	S4	壺	F	e1	42.4	23.2	8.8	0.688	雲·長	口：浮線文④、頸～体：縄文LR	ナデ+ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～体上	体	15.98ℓ
451	SC2247-12E25	S3	浅鉢	B1	a1		?		?	金·雲·長	波状口縁、口：浮線文④、ミガキ	口：突帯状·平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色			
452	SC2247·VI-11E23,S1-11E21	S3	浅鉢	B1	b1		(27.8)		0.125	金·雲·長	山形1、口：浮線文③、体：ミガキ	ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR褐灰色	口～体下	口～体下	
453	SC2247·VI-11E24	S3	浅鉢	B1	b1	7.5	(20.4)	5.4	0.063	金·雲·長多い	山形1、口：浮線文③、体：ミガキ、 面：網代痕	口：肥厚·平行沈線文、ミガキ	10YR褐灰色	10YR褐灰色	口～底·面	口～底	外面口縁赤彩、 0.67ℓ
454	SC2247-12E21·24,VI-12F1	S3	浅鉢	B1	d3		22.0		0.250	金·雲·長	山形1、口：浮線文（浮）·上下沈線幅広い、ミガキ	口：突帯状·平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～体下	口～体下	内外面赤彩、1.77ℓ
455	SC2247-12F13	S3	浅鉢	B1	e2		(16.0)		0.063	金·雲·長	口：浮線文④	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色			
456	S3-12F7	S3	浅鉢	B1	d2·f1		(21.0)		0.063	雲·長	山形1、口：浮線文（浮）、ミガキ	口：突帯状、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口	口	外面赤彩
457	SC2247-13E21,VI-12E25·13E21· 13F1·12	S3	浅鉢	C1	a3	10.7	22.8	5.5	0.813	雲·長	山形1、口：浮線文（浮）、体：ミガキ	ナデ·ミガキ	2.5Y黄灰色	2.5Y灰黄色			一括、2.25ℓ
458	SC2247-12F12	S3	浅鉢	B1	d1		(10.0)		0.125	雲·長	山形2、口：浮線文③·ミガキ	口：肥厚·平行沈線文、ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR褐灰色	口	口	内外面赤彩
459	SC2247-12F14	S3	浅鉢	C2			(17.6		0.063	角·雲·長	口：工字文·幅広沈線文、ミガキ	ミガキ	7.5YRにぶい褐色	7.5YR褐灰色	口		外面赤彩
460	SC2247-12F8	S3	浅鉢	D1	c1	9.2	23.1	6.0	0.313	海骨·金· 雲·長多い	大形山形突起1、口：浮線文④、 体：ナデ·ミガキ	ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色	口～底·面	口	外面口縁赤彩、焼成前穿孔、1.43ℓ
461	SC2247-12F14	S3	浅鉢	D1	e1		?		?	金·雲·長	山形2、口：浮線文①、ミガキ	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色			
462	S3-12F16	S3	浅鉢	D1	b3		(20.0)		0.125	金·雲·長	口：工字文·粘土貼付·浮線文④	口：肥厚·平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色		口	トレンチ
463	SC2247-11E23,S2～S1-11E25, VI-11F2	S3	浅鉢	J	f2		6.6 11.2		0.375	雲·長	口：浮線文④、ナデ	ナデ	7.5YR灰褐色	7.5YR 褐灰色			焼成前穿孔、外面赤彩
464	SC2247-12E21·12F2·4	S3	甕	B2e			39.8		0.750	金·雲·長	口：肥厚、口～体：縄文L	ナデ·ミガキ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口～体下濃い	口～体下	一括
465	SC2247-12F3,S4-13F18,VII-10E20, VI-12E23·12F7	S3	甕	A2c					0.000	金·雲·長	頸：綾杉文、肩：突起·眼鏡状文·綾杉文	ナデ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄橙色	頸肩		
466	SC2247-12E24,S2～S1-11F3· 12E24	S3	甕	C2b	a2		34.5		0.625	金·雲·長	山形1、口～肩：縄文LR、体：縄文L	ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい灰黄褐色	口～底	口～体上	一括
467	SC2247-12E22·12F4,S3-12E22	S3	甕	C2c	f1		(21.0)		0.188	金·雲·長	口：縄文LR、頸：綾杉文、 肩：浮線文·綾杉文、体：縄文LR	口：平行沈線文、丁寧なナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～肩	口～体上	
468	SC2247-12F3	S3	甕	E2e			(31.0)		0.063	金·雲·長	口：複合口縁、口頸：縄文LR	ナデ	7.5YR灰褐色	7.5YR褐灰色	口頸濃い	口頸	
469	SC2247-12F5,S3-12F10,VI-12F4· 5·10	S3	甕	H	e2	16.9	18.5	7.4	0.625	金·雲·長	山形1、口：浮線文·刺突文、 頸体：縄文LR、肩：平行沈線文	ミガキヨコ	2.5Y黄灰色	2,5Y灰黄色	体下	体下底	一括、1.91ℓ
470	SC2247-12F11	S3	深鉢	B6a			22.4		0.313	金·雲·長	山形1、端：面取り·外方に膨らむ、 口：平行沈線文、体：縄文LR	ミガキ	7.5YRにぶい褐色	7.5YR黒褐色	口体上	口～体下	3.79ℓ
471	SC2247-12F15	S3	深鉢	B6a			?		?	金·雲·長	口：縄文L+平行沈線文·指頭状圧痕	ナデ	7.5YRにぶい褐色	7.5YRにぶい褐色			
472	SC2247-12F7	S3	甕·深鉢					6.9	0.000	金·雲·長	底：平行沈線文·ミガキ	ナデ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	底		
473	SC2247·S1-12E22,VI-12F2·3·7· 8·17	S3	深鉢	B7b			32.6		0.313	金·雲·長	口：条痕文ヨコ+結節縄文L、 体：条痕文	ナデ·ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色		体	一括
474	SC2227-12F2·7,SC2247-12F6·7, S3-12E22	S3	壺	B	e2		13.8		0.063	金·雲·長	口：平行沈線文、頸：ミガキヨコ、 肩：浮線文（浮）、体：ミガキ	口：平行沈線文、ナデ·ミガキ	10YR灰黄褐色	2.5Y黒褐色	口～体上	口～体上	

土器観察表（13）

報告No.	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
475	SC2227-12E24,Ⅶ-12E18･19, Ⅵ-12E24･13F13	S1	浅鉢	B1	a1		(32.0)		0.125	金･雲･長	口：浮線文④、ナデ	口：平行沈線文、ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～体上	口～体上	6.20ℓ
476	SC2227-12F12,Ⅵ-12E12･12F12	S1	浅鉢	B1	a1		?		?	金･雲･長	口上：無文帯･浮線文（浮）	口：肥厚･平行沈線文、ナデ･ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			S1
477	Ⅵ-12F5	S1	浅鉢	B1	a2		(28.6)		0.063	金･雲･長	山形1、口：浮線文④、体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR褐灰色	10YR褐灰色			
478	Ⅵ-11F3･15	S1	浅鉢	B1	d2		(14.8)		0.063	金･雲･長	波状口縁、端：沈線文、 口：浮線文④、ミガキ	ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
479	Ⅵ-12F20	S1	浅鉢	B1	a3		(20.8)		0.063	金･雲･長	口：浮線文③	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口	口	内外面赤彩
480	Ⅵ-12F24	S1	浅鉢	B1	b3		(20.8)		0.125	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文③	ナデ･ミガキ	2.5Y黄灰色	2.5Y黄灰色	口	口	
481	S1-12E24,Ⅵ-12E21･23	S1	浅鉢	B1	e2		33.0		0.250	金･雲･長	口：浮線文③、体：ミガキ	口：突帯状･平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口～体上	口～体上	内外面赤彩
482	Ⅵ-12F23	S1	浅鉢	B8			(16.0)	4.0	0.063	金･雲･長	口：浮線文②、体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口～底	口～底	外面口縁･内面口縁～面赤彩、0.41ℓ
483	SC2227-12E22･23･25･12F22	S1	浅鉢	B8		19.4	38.6	8.8	0.125	金･雲･長･白	口：平行沈線文、ナデ+ミガキ	口：突帯状、ナデ+ミガキ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄褐色	口～体上濃い		13.16ℓ
484	Ⅵ-12F8	S1	浅鉢	C1	a2		(25.8)		0.188	金･雲･長	山形1、口：浮線文④、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～体下	口～体下	外面口縁赤彩、 1.96ℓ
485	Ⅵ-12F7	S1	浅鉢	C1	f1		(32.6)		0.125	金･雲･長	山形1、口：浮線文③、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	2.5Y黄灰色	2.5Y黄灰色	口	口	
486	Ⅵ-11F3･4･18	S1	浅鉢	C1	e2	6.8	17.9	5.8	0.875	金･雲･長	山形1、口：浮線文③、体：ミガキ	ミガキ	2.5Y黄灰色	2.5Y暗灰黄色	口～底	口～体下	外面口縁赤彩、 0.69ℓ
487	Ⅵ-12F17･22	S1	浅鉢	D1	e3		13.6		0.375	金･雲･長	山形1、口：浮線文④、体：ミガキ	口：肥厚、ミガキ	10YR褐灰色	10YR灰黄褐色	口体上	体上	一括
488	Ⅵ-12E24	S1	浅鉢	C1	f2		(29.2)		0.063	金･雲･長	山形1、口：浮線文④、体：ミガキ	ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR灰褐色	口～体下濃い	体上バンド状、 体下	3.29ℓ
489	Ⅵ-12F14	S1	浅鉢	D1	a4	5.8	18.5	6.0	0.625	金･雲･長	口：浮線文④、体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR灰褐色	10YR灰黄褐色	口～体下･面	口	外面口縁赤彩、 0.59ℓ
490	SX51-4-12E22,S1-12E23,Ⅵ-13F2	S1	浅鉢	I1	a2		22.5		0.313	角･雲	山形1、口：無文帯･浮線文（浮）、 体：ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～体上濃い		内外面口縁赤彩、焼成良好
491	Ⅵ-12F14	S1	浅鉢	B1	e3		(18.6)		0.063	金･雲･長	口：浮線文④、ミガキ	ミガキ	2.5Y灰黄色	2.5Y黄灰色			
492	Ⅵ-12F16	S1	台付浅鉢					5.0	0.000	金･雲･長	ナデ	ナデ	7.5YRにぶい橙色	10YRにぶい黄橙色			一括、外面摩滅
493	Ⅵ-12F9	S1	鉢	A	d2		(15.2)		0.125	金･雲･長	端：沈線文、口：浮線文④、ミガキ	口：突帯状、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄褐色	体上下	体下	外面口縁赤彩、 0.98ℓ
494	Ⅵ-12F19･20･24	S1	鉢	D		14.1	14.5		0.500	金･雲･長	口：平行沈線文、頸：ナデヨコ、 体：ナデ	ナデ	10YR にぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口～底	口～底	2.08ℓ
495	Ⅵ-13F7･11･12･16	S1	深鉢	A1	e1		(32.0)		0.125	金･雲･長	口：浮線文④、ナデ･ミガキ	丁寧なナデ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口～体上		一括、14.97ℓ
496	Ⅵ-12F17	S1	甕	C2b			(21.2)		0.125	金･雲･長	口：縄文R･平行沈線文、頸：縄文R、 肩：浮線文④	ナデ	10YR褐灰色	10YR灰黄褐色			
497	Ⅵ-12F12	S1	甕	A3a			(37.2)		0.063	雲･長	口：平行沈線文、頸：ナデヨコ、 肩：眼鏡状文④･結節縄文LR	口：平行沈線文、ナデ	2.5Y黄灰色	2.5Y黄灰色	口～肩		
498	Ⅵ-12F23	S1	甕	B3a	e1		(33.2)		0.063	金･雲･長	口：平行沈線文、頸：ナデヨコ、 肩：浮線文④	ナデ･ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	頸肩		一括
499	Ⅵ-12F23	S1	甕	A3d			(28.0)		0.125	金･雲･長	口：平行沈線文、頸：ナデヨコ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色	口頸		一括
500	Ⅵ-12F4	S1	甕	B2e			(36.4)		0.063	金･雲･長	端：連続押圧による波状口縁、 口肩：結節縄文LR、頸：縄文LR	ナデ	10YRにぶい黄橙色	7.5YRにぶい褐色	口～肩	肩	
501	SC2227-12F14	S1	甕	C1a					0.000	金･雲･長	肩：浮線文（浮）、体：縄文LR	ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	肩	肩	
502	SC2227･S1-12E25	S1	甕	C3d			(41.2)		0.125	金･雲･長	波状口縁、口：平行沈線文+縄文L、 頸：ミガキ、肩：結節縄文L	口：平行沈線文、ナデ	7.5YR黒褐色	7.5YR灰褐色	口～肩	口～肩	
503	SC2227-12F3,Ⅵ-12F2･5	S1	甕	C3a	b3		19.0		0.438	金･雲･長	山形2、口：浮線文（浮）･縄文R、頸： ミガキ、肩：綾杉文、体上：縄文LR	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒色	口～体上	口～体上	
504	S1-11F19,Ⅵ-11F8･15･20･23･25･ 12F11,12F22	S1	甕	E3a	e2		26.6		0.625	雲･長	口：無文帯、ナデヨコ、体上：浮線文④	口：平行沈線文2条	2.5Y黄灰色	2.5Y黄灰色	口体上	口体上	内外面赤彩
505	Ⅵ-12F18･19･23	S1	甕	E3d			26.0		0.250	金･雲･長	山形2、口：平行沈線文、頸：ミガキヨコ、肩：縄文LR	ナデ･ミガキ	10YR黒褐色	10YRにぶい褐色	口～肩濃い	口～肩	
506	S1-11F14･12E21,Ⅵ-11F15･20･ 12F11･16･21	S1	甕	E3d			28.4		0.688	金･雲･長	口：複合口縁、頸：ナデ、 肩：結節縄文LR	ナデ	5Y灰色	5Y灰色			一括、器面摩滅
507	SC2227-12F2	S1	甕	E3a			39.6		0.063	金･雲･長	波状口縁、端：面取り、口：平行沈線文 +縄文LR、頸：ミガキヨコ、肩：縄文 LR+工字文、体：付加条縄文（LR+RL）	ナデ･ミガキ	2.5Y灰黄色	10YR灰黄褐色	口～体上濃い	底バンド状	一括、34.87ℓ
508	S1-11F6	S1	甕	G3a	a2		(14.0)		0.125	金･雲･長	口：平行沈線文④、頸：ミガキヨコ、 肩：浮線文④、体：ミガキ	ナデ	10YRにぶい黄褐色	2.5Y暗灰黄色	口～体上	口～体上	外面赤彩
509	Ⅵ-12F8	S1	甕	F3a	f2		(11.5)		0.188	金･雲･長	口：浮線文（浮）、頸～体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR灰褐色	10YR灰褐色	口～体上		焼成前穿孔
510	S1-13E12,Ⅵ-12F7	S1	深鉢	C1	d1		(18.0)		0.125	金･雲･長	口：浮線文（浮）、 体：縄文LR+結節縄文RL	ナデ	7.5YR褐灰色	7.5YRにぶい褐色	口体上濃い	体上	
511	Ⅵ-12F7	S1	深鉢	B8			29.8		0.250	雲･長	口～体：丁寧なナデ	丁寧なナデ	10YR黒色	10YRにぶい黄橙色	口体上		10.21ℓ
512	S1-12E22	S1	深鉢	C7b			(22.8)		0.063	金･雲･長	口：結節縄文L、体：条痕文+縄文L	ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口体上		トレンチ

土器観察表（14）

報告№	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
513	Ⅵ-12F14･17･21･22	S1	深鉢	C7a			40.2		0.313	金･雲･長	口体：縄文RL	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口	口～体上	一括
514	Ⅵ-11F14	S1	深鉢					6.6	0.000	金･雲･長	体下：平行沈線文、ナデ	ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YR黒褐色	底	底･面濃い	
515	Ⅶ上-12E16･17	S1	壺	B	f2		11.8		0.313	金･雲･長	山形2、口：浮線文（浮）、頸：ミガキヨコ、肩：浮線文交点盛り上がる、ミガキ	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口体上		暗渠
516	Ⅵ-11F3･15,12F22	S1	壺	D					0.000	金･雲･長	肩：眼鏡状隆帯文、ナデ	ナデ	2.5Y黒褐色	2.5Y灰黄色	肩		
517	Ⅵ-12F22･23	S1	壺	G	f1	(12.0)	(10.3)	3.4	0.125	金･雲･長	肩：浮線文、面：円文	ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YR褐灰色			外面器面摩滅
518	Ⅵ-12F11･12,12F23	S1	壺	G					0.000	英多い･雲･白	頸：平行沈線文、ミガキ	ナデ	10YR黒色	10YR黒色	頸～体下	頸～体下	
519	SK914-9･8･6-15E3,P923-4･2-16D6,SC2227-12F15,Ⅵ-12E10･12F14･15		甕	A2a	a2		31.6		0.688	金･雲･長	波状口縁、頸：綾杉文、肩：浮線文（浮）、体：結節縄文L	ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口～体下濃い	口～体下濃い	
520	P948-1-17B19		浅鉢	C4c		8.4	21.8	6.0	0.438	金･雲･長	口：菱形工字文、体：ミガキ、底：網代痕	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YR褐灰色	10YR褐灰色	口～底濃い	口～体下	漆？、1.80ℓ
521	P1980-13F17,S3-12F11		甕	B3a			(21.0)		0.125	雲･長	口：平行沈線文③、頸：ナデ、肩：工字文④、体：縄文LR	丁寧なナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～体上		
522	P1998-4･1･P2179-2･S1-14F20		甕	C3c	e2		(19.6		0.125	海骨･雲･長	口：匹字文、頸：ミガキヨコ、肩：浮線文、体上：条痕文+綾杉文	ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	肩		
523	SH1418-17D6		甕	B3e		11.7	11.0	6.0	0.813	金･雲･長	山形1、口：縄文LR、頸：ナデヨコ、肩：結節縄文LR、底：ナデヨコ	ナデ	10YR褐灰色	10YR黒色	口～体上濃い、面	口～体上濃い、体下～面	0.49ℓ
524	SK851-3-15D5,SC912A-17D16,SC912B･S4-17D11･16,S3-17D11･12,S2-17D2		浅鉢	B1	f1		(22.0)		0.063	金･雲･長	山形1、口：浮線文④･彫去著しい、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR褐灰色	10YR褐灰色	口～体下	口～体下	2.01ℓ
525	SK2279･K4-13F10,SC2266-13F7,S4-13E3		甕	C2	f1	12.4	13.4	6.5	0.313	雲･長	山形2、口：縄文L、頸：浮線文④、体：三角連繋沈線文	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～体下濃い	口～体下濃い	
526	SK1932-4-16E24		浅鉢	C7			(15.0)		0.125	雲･長	山形2、口：綾杉文2段	口：やや肥厚、丁寧なナデ	10YR黒色	10YR黒色	口濃い	口濃い	トレンチ
527	SK1932-4-16E24		壺	D					0.000	金･雲･長	肩：工字文②･刺突列点文	ナデ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄褐色	肩		トレンチ
528	P919-1-16D18･19･24		深鉢	B7a		40.8	37.5	10.8	0.813	雲･長	口：条痕文（幅1.5㎝）+縄文R、体：条痕文	ナデ	2.5Yにぶい黄色	2.5Y黄褐色	口～体上濃い、底	口～体上、体下厚いコゲ	一括、23.93ℓ
529	P919-1-16D23		深鉢	B7a			23.4		0.563	雲･長多い	山形1･2、口～体：縄文R	ナデ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口～体上濃い	体下濃い	6.21ℓ
530	P919-1-16D18･19･23･24,Ⅵ-16D19		深鉢･甕					10.4	0.000	金･雲･長	体：縄文LR、底：ナデヨコ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色	体下底濃い	体下濃い	
531	Ⅶd-17E16	D	浅鉢	D1	b3		(19.4)		0.063	金･雲･長	口：浮線文③、ミガキ	ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			外面赤彩
532	Ⅶd-14F5	D	深鉢	C7a			?		?	雲･長	口：縄文L	ミガキ	2.5YR黒褐色	2.5YR暗灰黄色	口濃い		
533	S5-13F13	S5	浅鉢	B1	a1		?		?	英･雲･長	口：浮線文③、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口	口	外面赤彩
534	S5-14F5	S5	浅鉢	B1	e3		(20.0)		0.063	金･雲･長	口：浮線文④	ミガキ	7.5YRにぶい橙色	7.5YR橙色			
535	S5-14F6,Ⅵ-14F18	S5	浅鉢	B1	d1		(8.8)		0.188	金･雲･長	山形1、口：浮線文④、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR黒褐色	口	口	内外面赤彩
536	S5-14F2	S5	浅鉢	B8			(10.4)		0.063	雲･長	山形1、口：平行沈線文、体：ミガキ	ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR黒褐色	口	口	
537	S5-13F23	S5	浅鉢	C1	d2		(15.8)		0.063	金･雲･長	口：浮線文④	口：平行沈線文、ミガキ	2.5YR灰黄色	2.5YR灰黄色	口	口	トレンチ
538	S5-13F18･25	S5	浅鉢	J1	f1	5.6	9.8		0.438	金多い･雲･長	口：浮線文、ナデ	口：平行沈線文、ナデ	7.5YR灰褐色	10YR灰黄褐色			0.17ℓ
539	S5-14F13	S5	甕	B3a	d1		(24.2)		0.188	雲･長	口：浮線文④、頸：ナデヨコ、肩：工字文･突起、体：縄文LR	ナデ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄橙色	口～体上濃い	口～体上	
540	S5-14F13,S4-14F19	S5	甕	B3a	e1		30.0		0.875	金･雲･長	口：浮線文④、頸：ナデヨコ、肩体：縄文LR	ナデ	10YRにぶい黄褐色	2.5Y暗灰黄色	口～体下濃い	口～体下	胎土分析、19.22ℓ
541	S5･S4-13E25	S5	甕	C2e			(33.8)		0.125	金･雲･長	口頸：縄文LR	ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口頸	口頸	
542	S5-16F18	S5	甕	C3a					0.000	英･雲･白	頸：ミガキヨコ、肩：工字文④、体：ミガキ	ナデ･ミガキ	N黒色	2.5Y黒色	頸～体上濃い	頸～体上	
543	S5-16F4	S5	甕	E2e			?		?	雲･長	口頸：縄文LR	ミガキ	10YR褐灰色	10YR黒色	口頸濃い	口頸	
544	K5-14F24,S5-14F20･25	S5	甕	D2a			28.0		0.250	金･雲･長	山形1、口：浮線文④、頸：平行沈線文に縦位短沈線、肩：浮線文	丁寧なナデ	10YR黒色	10YRにぶい黄褐色	口～肩	頸	
545	D1･S4･S1-13F25,S5-13F10･12･18･19･21･25,Ⅵ-13F24･25	S5	甕	D3e			34.0		0.313	金･雲･長	端：連続押圧文、口：縄文LR、頸：ナデヨコ、肩体：結節縄文LR	ナデ	10YR黒色	10YRにぶい黄褐色	口体上濃い	体上下	27.61ℓ
546	S5-14F3～5,S4-13E17･14E24･14F1･2･4･14,S3-13E23･14E20･24,S2～S1-14E23,S1-14E23･24,Ⅵ-14E23･14F4	S5	甕	B3a	e2･f1	43.2	30.1	9.3	0.438	金･雲･長	口：浮線文、頸：丁寧なナデ、肩：浮線文、体：縄文LR	ナデ	2.5Y黄灰色	2.5Y暗灰黄色	口～体上濃い	体下バンド状、体上	一括、26.50ℓ
547	S5-13F20,13G5･10,14G1･6	S5	深鉢	A6a			25.6		0.250	金･雲･長	口：複合口縁･平行沈線文･縄文L、体：縄文L	ナデ	2.5Y黄灰色	2.5Y灰黄色	口体上	口	用水路工事立会い
548	S5-13F24･25,Ⅵ-13F24	S5	深鉢	B7b		(41.3)	39.0	10.6	0.625	雲･長	口：結節縄文LR、体：縄文LR	ナデ･ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口～体上	底	24.52ℓ
549	S5-13E24	S5	壺	A	a2		(11.5)		0.125	金･雲･長	口：工字文･浮線文③、ミガキ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR黒褐色			外面赤彩
550	S5-13E25･14F21	S5	壺	B	f2		15.0		0.250	金･雲･長	口：浮線文（浮）、頸：ミガキヨコ	口：平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
551	K5-14F7	S5	壺	F				6.8	0.000	金･雲･長	体：ナデ･ミガキ	ケズリ･ナデ	10YR灰黄褐色	10YR褐灰色	体上下		
552	SC801-13E10	S4	浅鉢	A1	b1		(24.0)		0.125	金･雲･長	山形1、口：浮線文④、ミガキ	口：突帯状･平行沈線文、ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR灰褐色	口濃い	口	

土器観察表（15）

報告No.	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
553	S4-14F6	S4	浅鉢	B1	b2		(14.0)		0.125	金･雲･長	山形2、口：浮線文④、体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄橙色	口体上	口体上	一括
554	SC801-13E13	S4	浅鉢	B1	d3		(15.1)		0.063	雲･長	口：浮線文③、ミガキ	口：突帯状･平行沈線文、ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR黒褐色			
555	SC816-14E4	S4	浅鉢	B1	e2		(21.0)		0.063	雲･長	波状口縁、口：浮線文②	ミガキ	10YR明黄褐色	10YR黒色	口	口	外面赤彩
556	SC864-15E1	S4	浅鉢	B1	e2		(23.6)		0.063	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文③、ミガキ	ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR褐灰色	口		外面赤彩
557	SC801-13E7･8	S4	浅鉢	B1	a1	9.1	20.9	6.5	0.813	金･雲･長	口：浮線文（浮）、体：ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、丁寧なナデ	10YRにぶい黄橙色	2.5Y暗灰黄色	口～面	体	内外面口縁赤彩、1.81ℓ
558	SC859-15D14	S4	浅鉢	B1	d5	9.6	16.3	6.0	0.188	金･雲･長	山形2、口体上：浮線文③、ミガキ、体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～底	口～底	内外面口縁赤彩、0.99ℓ
559	S4-13C18,S3-13E4,S2-13E3･4	S4	浅鉢	C1	b2		37.8		0.250	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文④、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～体上	口～体上	外面赤彩
560	SC802-13E9,Ⅶ-13E20･14E16	S4	浅鉢	B1	f2	8.9	22.1	5.5	0.375	金･雲･長多い	口：浮線文（浮）、体：ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～底･面	口～底	1.93ℓ
561	SC800-13E7,SC801-14E11･15･16	S4	浅鉢	C10		3.8	11.6	7.2	0.188	金･雲･長	ミガキ	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色			0.18ℓ
562	SC813-14E13,S4-14C25･14D8･13,15C16	S4	浅鉢	D1	a2		(30.0)		0.125	雲･長	口：浮線文②、ミガキ	口：肥厚、ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒色	口濃い	口～体上濃い	
563	S4-13F13･17	S4	浅鉢	D1	d1	5.7	(14.4)	4.9	0.063	金･雲･長	口：浮線文③、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	全体	全体	0.38ℓ
564	S4-15D9	S4	浅鉢	D1	f1		(24.6)		0.063	金･雲･長	口：浮線文④、体：ミガキ	ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色		口体上	内外面口縁赤彩
565	SC912A-16D15,SX958-4･1-17E2,同2-17E2･7	S4	浅鉢	D1	f1		31.0		0.500	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文④、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄色	10YR黒褐色	体上	口～体上	
566	SC863-16D9･10,S4･S4～S3･S4～S1･S2～S1-16D10,S2-16C4,Ⅵ-16D15,12G4･9	S4	浅鉢	G1	a4		20.0		0.625	雲･長	口：浮線文④、ミガキ	ナデ･ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口	口	用水路工事立会い、焼成前穿孔
567	SC801-13E13･15･14E16	S4	浅鉢	F				9.4	0.000	金･雲･長	口：平行沈線文③、ミガキ	ナデ･ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YR灰黄褐色			
568	SC813-14E20	S4	鉢	A	e3			5.0	0.000	金･雲･長	口：浮線文③、ミガキ	丁寧なナデ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色	体上下		
569	S4-13F4･9･10･14･17,S4～S3･S2-13F9,S3-13F8･9･13,Ⅵ-13F14	S4	鉢	A	e3	13.3	21.0	8.4	0.500	雲･長	端：沈線文、口：浮線文④、体：ミガキ	口：長い突帯状、ミガキ	2.5YR灰黄色・黄灰色	2.5Y黄灰色	口～体下	口～体下	外面赤彩、3.30ℓ
570	SX2251-14E21,S1-14E24,Ⅵ-14E23･24	S4	鉢	F	d3		(31.0)		0.188	金･雲･長	口：浮線文③、ミガキ	ナデ･ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～体下	口～体下	7.95ℓ
571	SC816-14E4･5,S4-14D10･19,S3-13E4･10,S2･S1-14D25,Ⅵ-14E5	S4	甕	A2a	f1		27.8		0.438	金･雲･長	山形2、口：縄文LR、頸：綾杉文･三角形集合沈線文に刺突文充填、肩：浮線文、体：縄文LR	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	2.5Y黄灰色	2.5Y暗灰黄色	口～体上濃い	肩、体下濃い	16.09ℓ
572	SC816-14E5,S2･Ⅵ-14E10	S4	甕	A2a	e2		36.0		0.375	金･雲･長	口：眼鏡状文･一部浮線文④、頸：独立綾杉文に刺突文充填	ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄橙色	口頸		
573	S4～S3･S3-14F5,Ⅵ-12E24･25･14F5,14F3	S4	甕	B3e			13.8		0.750	金･雲･長	口：複合口縁、口肩：刺突文、体：縄文RL	ナデ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口～底濃い	口･体上濃いコゲ	
574	S5-14F14,S4-14F13	S4	甕	B2e		25.9	28.2	9.0	0.563	雲･長	口～体：縄文L、口縁に輪積痕あり	ナデ	2.5Y暗灰黄色	2.5Y暗灰黄色	口～体上濃い	体下濃い、口	一括、7.79ℓ
575	S4-14F7･8,S3-14F2･7･12･20	S4	甕	B2a	d1	47.2	37.4	11.4	0.750	雲･長	山形1･2、口：浮線文･縄文LR、頸：綾杉文、肩：工字文、体：結節縄文LR、面：ササ痕？	ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YR灰黄褐色	肩～体上底濃い、口	体下濃い	一括、30.50ℓ
576	S4-8D8･13	S4	甕	B2e			(26.0)		0.125	海骨･雲･長	口～体：条痕文	ナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～体上濃い	体下濃い	13.94ℓ
577	SC801-13E19･20	S4	甕	B3e			(22.0)		0.188	金･雲･長	口頸：ナデ、体：縄文LR	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～体上下濃い	体下濃い	
578	SK2253-4-13F15,SX2249-14F2,K4-14F13,S4-14F6･13･18,Ⅵ-14F6･13･17･18	S4	甕	C1b		44.8	38.5	11.9	0.813	金･雲･長	口：縄文L、頸：独立綾杉文･刺突文充填、肩体：撚糸文R（幅約1.6㎝）	ナデ+ミガキ	2.5Y灰黄色	2.5Y暗灰黄色	全面		一括･胎土分析･体下一部赤彩、31.94ℓ
579	S4-13E14･21,S1･Ⅵ-13E21	S4	甕	C3d			27.0		0.313	金･雲･長	山形2、口：縄文R+平行沈線文③、頸：ミガキ、肩：平行沈線文･縄文R	ナデ･ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR灰褐色	口～肩	口肩	
580	SC801-13E8･15	S4	甕	C3c	d1		16.7		0.500	金･雲･長	山形2、口：浮線文（浮）、頸：ナデヨコ、肩：眼鏡状文･綾杉文、体：縄文LR	口：平行沈線文、ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口～体下濃い	口～体下	1.61ℓ
581	SC777-14D21,SX2249-14F1･2,S4-14D16･21･14F1･3･6,S3-14D14･16･14F2,Ⅵ-14F17･22	S4	甕	C3a			32.4		0.625	金･雲･長	波状口縁、口：平行沈線文、頸：ナデ、肩：眼鏡状文、体：縄文LR	丁寧なナデ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色			一括、21.54ℓ
582	S4･S2-14D22,S3-14E2･8	S4	甕	C3c	f1	45.4	38.5	9.8	1.000	金･雲･長	山形1･2、口：平行沈線文、頸：ナデ、肩：浮線文･綾杉文、体：縄文LR、面：網代痕？	ナデ	2.5Yにぶい黄色	2.5Yにぶい黄色	口～体上濃い	体下～底バンド状	29.23ℓ
583	SC800-13E17,S4-13E12･17	S4	甕	C3d			21.0		0.375	金･雲･長	山形1･2、口：平行沈線文、頸：ナデ･ミガキヨコ	口：平行沈線文、ナデ	10YR褐灰色	7.5YR灰褐色	口頸	口頸	
584	SC776･SC801-13E10,S4-13E1･5･6･10･19･14D1,S3-13E10･12･14D5･13･21,S2-14D16･17,S1-13E19,Ⅵ-13E14･16	S4	甕	C3d			43.2		0.875	金･雲･長	口：平行沈線文、頸：ミガキ、肩：平行沈線文･条痕文	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	2.5Y灰黄色	2.5Y暗灰黄色	口頸	口頸	
585	SC777-14D21,S4-14D21･14F1,S3-14D1･10･16,14F2,S1-14F25,Ⅵ-14E3	S4	甕	D1b			38.3		1.000	雲･長	口体：縄文LR、頸：綾杉文	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			一括、33.85ℓ

土器観察表（16）

報告No.	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
586	S4-14F1·2·4·6·7,S3-14F2·6, S1-14F6,Ⅵ-13F14·14F6	S4	甕	D3a	f1	(46.6)	38.8	9.8	0.750	金·雲·長	山形1、口：浮線文·縄文LR、頸：ミガキヨコ、肩：平行沈線文、体：縄文LR、底：ケズリ、面：ササ痕？	ナデ+ミガキ	2.5Yにぶい黄色	10YRにぶい黄褐色	口肩～体上濃い	体下コゲ	一括、34.09ℓ
587	SC806-14E2,S4-14D11,Ⅵ-14E3	S4	甕	E2a			10.0		0.250	金·雲·長	山形1、口～体：綾杉文2段	口：平行沈線文、丁寧なナデ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口～体下		
588	S4-13F10	S4	甕	F3e		12.4	12.2	6.4	0.688	金·雲·長	山形1·2と楕円状突起の4単位、 口肩：結節縄文L、体：条痕文（3㎜·2条）、頸底：ミガキ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色			0.71ℓ
589	SC912A-16·17D19,S4·S1-17D11, S3～S2-17D15	S4	甕	I3a	f2		(20.0)		0.188	雲·長	口：平行沈線文、口頸：ミガキ、 肩：浮線文、体上：条痕文	ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口～肩濃い	口～肩	
590	SC801-13E20·14E11·16,S4- 13E20·14E11,S2-14E17,Ⅵ-15F5	S4	深鉢	A6c			34.0		0.500	金·雲·長	口体：撚糸文R+平行沈線文	ナデ、棒状の擦痕あり	10YR褐灰色	10YR褐灰色	口	口	
591	SC770·Ⅵ-14E3,SC801-13E12, S4-13E6·14D23,S3-14D23	S4	深鉢	A6e			44.0		0.313	金·雲·長	口：平行沈線文、体：ミガキ	ナデ·ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR褐灰色			焼成前穿孔
592	SX2251·S4-13F4,S3-14D17	S4	深鉢	A7b			(34.0)		0.125	金·雲·長	口：結節縄文L、体：縄文L	ナデ	7.5YR黒色	7.5YR灰褐色	口体上濃い		
593	S4-14E4～6,S2-14E4	S4	深鉢	A7d			(36.0)		0.125	金·雲·長	口：縄文LR+結節縄文LR、体：縄文LR	ナデ·ミガキ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄橙色	口～体下濃い	口～体上、底バンド状	25.19ℓ
594	SX2251·S1-14E22,S4-14D8· 14E24,Ⅵ-15E11·12·16	S4	深鉢	A7b			29.0		0.625	金·雲·長	口：撚糸文R+結節縄文LR	口：指頭状圧痕、ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色	口	口	
595	S4-14F13·18,S1-15F18·19, Ⅵ-14E12·14F13·14·16～19·23· 15E22·15F9·19·24	S4	深鉢	B2			?		?	雲·長	口：平行沈線文④、 体：幅広沈線による入組状工字文·一部浮線文化	丁寧なナデ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色	口体	口体	一括
596	SC801-13E7·14	S4	深鉢	B6a		37.1	31.2	9.2	0.250	金·雲·長	口：平行沈線文、体：縄文LR、 底：ケズリ、面：ササ痕？	ナデ	2.5Y灰黄色	2.5Y黄褐色	口～体上濃い、体下	口～体上コゲあり、体下濃い	16.78ℓ
597	S4-14F22	S4	深鉢	B6e			(35.6)		0.125	金·雲·長	口：平行沈線文、体：ナデ·ミガキ	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口	口体上	
598	S4-14F12·20,S1-14F12,S3-14E13· 14F7·12	S4	深鉢	B7a		12.6	12.4	5.2	0.375	金·雲·長	波状口縁、口～体：縄文LR、 底：ナデヨコ	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			0.78ℓ
599	SC801-13E19,S4·S4～S3-13F10	S4	深鉢	B7b			36.0		0.750	金·雲·長	口：結節縄文LR、体：縄文LR	ナデ	5Y黒褐色	7.5YRにぶい褐色	口～体上濃い	体上下濃い	
600	SX2528-16F13	S4	深鉢	B7b			(28.4)		0.125	雲·長	口：結節縄文LR、体：縄文LR	ナデ	N黒色	7.5YR黒褐色	口体上濃い	口体上	
601	S4-12E19	S4	深鉢	C1	f1		?		?	金·雲·長	口：浮線文④、体：縄文L	ナデ·ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口体上濃い	口体上	
602	S4-14F15	S4	深鉢	C6d			(29.0)		0.125	雲·長	口：平行沈線文、体：条痕文タテ	ケズリ·ナデ	7.5YR黒色	7.5YRにぶい褐色	口体上濃い	口体上	
603	SX2197-16F13	S4	深鉢	C7a			?		?	金·雲·長	口：複合口縁·縄文LR、 体上：条痕文+縄文LR	ナデ	7.5YR黒色	7.5YR黒褐色	口体上濃い	口体上	
604	S4-14F7	S4	深鉢	C7b			(12.0)		0.063	雲·長	波状口縁、口：結節縄文L、体：縄文L	ナデ·ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
605	S4-13F10	S4	深鉢	C7b		38.2	36.5	9.6	0.438	金·雲·長	口：結節縄文LR、体：縄文LR	ナデ	2.5Y暗灰黄色	10YR灰黄褐色	口～体上濃い	体下バンド状	一括、19.95ℓ
606	S4-13E24	S4	壺	A	f1		(12.8)		0.125	金·雲·長	口：浮線文（浮）、頸：ミガキヨコ	口：平行沈線文、ナデ·ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口頸	口頸	外面口縁赤彩
607	S4-12E18	S4	壺	B	e2		14.4		0.313	金·雲·長	山形1·2、口：浮線文（浮）·縄文LR、 頸：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口頸濃い	口濃い	
608	SC802-13E4	S4	壺	H	f1	(4.3)	(4.5)	3.6	0.063	金·雲·長	頸：ナデ、肩：浮線文④、体：綾杉文	ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	体	体	
609	S3-13E9	S3	浅鉢	B1	a2		(20.8)		0.063	金·雲·長	口：浮線文④、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色·褐灰色	10YR灰黄褐色·褐灰色	口体上	口体上	
610	S3-13E17	S3	浅鉢	B1	f1		(13.2)		0.188	金·雲·長	波状口縁、口：浮線文③、体：ミガキ	口：突帯状·平行沈線文、ミガキ	7.5YRにぶい褐色	7.5YRにぶい褐色	口体	口体	内外面赤彩、0.49ℓ
611	S3-13E24,S3～S1-12F18,Ⅵ-15F8	S3	浅鉢	B1	f1·d2		21.6		0.250	金·雲·長	波状口縁、口：浮線文④	口：突帯状·平行沈線文、ナデ	7.5YRにぶい褐色	7.5YRにぶい黄橙色			器面摩滅
612	S3-12E4	S3	浅鉢	C1	a3	13.1	29.9	6.2	0.250	金·雲·長	口：浮線文③、体：ミガキ	口：肥厚·平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～底·面	体下底	外面赤彩、4.05ℓ
613	S3-11D13·13E4,S1-13E18, Ⅵ-13E18·14F17	S3	甕	B3e			(36.6)		0.188	金·雲·長	口：結節縄文L、頸：ナデヨコ、 肩体：網目状撚糸文R	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口～体上濃い	口	一括
614	S4-12C3,S3-12D19·25·13E1·13, S2-13E2·11·13	S3	甕	C3e		43.9	31.2	10.0	0.375	金·雲·長	口：複合口縁、口体：縄文LR、 頸：ナデヨコ、原体結束部あり	ナデ	2.5Y灰黄色	2.5Y灰黄色	口～体上ス多い、底	体下コゲ濃い	胎土分析、焼成後穿孔、20.81ℓ
615	S3-12E14	S3	甕	D2e			(34.0)		0.188	金·雲·長	口：肥厚、口～肩：縄文LR、 体上：条痕文+結節縄文LR	ナデ·ミガキ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口～体上濃い	体上	
616	S3-13E3	S3	甕	E3a	f1		(24.8)		0.063	金·雲·長	山形1、口：浮線文④、頸：ナデヨコ	ナデ	7.5YR黒色	7.5YR灰褐色	口頸	口頸	
617	S3-14D24,S1-14D24·14E13, Ⅵ-14D24·14E3·7·8·17·15C15	S3	甕	E3d			30.0		0.625	金·雲·長	山形1、口：縄文L·平行沈線文、 頸：ナデ·ミガキヨコ	口：平行沈線文2条、ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口頸	口	
618	S3～S2-17D22	S3	甕	E3e			(13.0)		0.063	金·雲·長	波状口縁、口～肩：ミガキヨコ	ナデ·ミガキ	2.5Yにぶい黄色	2.5Y灰黄色	口～肩濃い	口	
619	S3-13E23,Ⅶ-13E19·20,Ⅵ-13E23· 14E22·14F6·22	S3	深鉢	A6a			26.0		0.375	金·雲·長	口：平行沈線文+縄文R	ナデ	2.5Y黒色	10YRにぶい黄橙色	口	口	
620	SC774-13E3,Ⅵ-14E5·12·14F6· 12·19·22	S3	深鉢	B1	f1		28.0		0.375	金·雲·長	山形1、口：浮線文（浮）、体：縄文LR	ナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	口体上	口体上	一括
621	SC773-13E13·17,SC774-13E3, S1-13F20,Ⅵ-12F9·16·14F11·12· 16·17·21·22	S3	深鉢	B8			27.2		0.813	金·雲·長	口～体上：ナデ·ミガキ	ナデ·ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄褐色	口体上		一括、外面器面摩滅
622	S3-14D6,Ⅶ上-14E18·19,Ⅵ-14E19· 15F6·11·12	S3	深鉢	C6c			30.0		0.438	金·雲·長	端：板状工具による押引文、 口：撚糸文R+平行沈線文	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			

土器観察表（17）

報告No.	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
623	S3-17D17･18	S3	壺	B	f2				0.000	金･雲･長	頸：ミガキヨコ、 肩：浮線文（浮）、ミガキ	ミガキ	10YR灰黄褐色	2.5YR灰黄色	頸肩		
624	S3-14D14	S3	壺	A			(8.6)		0.063	金･雲･長	口：平行沈線文、頸：ミガキヨコ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口頸	口頸	
625	S3-13E8	S3	甕					8.8	0.000	金･雲･長	体：縄文LR、底：ナデヨコ	ナデ	2.5Y灰黄色	2.5Y灰黄色	体上濃い		
626	S2-13E14	S2	浅鉢	B1	b1		?		?	金･雲･長	口：浮線文④	口：平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR褐灰色			
627	S2-13E12	S2	浅鉢	B1	d1		(13.0)		0.188	金･雲･長	口：浮線文④	ミガキ	2.5Y灰黄色	2.5Y灰黄色	口	口	
628	S2-13E9	S2	浅鉢	B1	d2		?		?	金･雲･長	山形1、口：浮線文④	ナデ	7.5Yにぶい褐色	7.5Y灰褐色			
629	S2-14D23	S2	浅鉢	B1	f1		?		?	金･雲･長	口：浮線文④	ナデ	10Yにぶい黄橙色	7.5YRにぶい褐色	口濃い	口	
630	S2-13E19,S1-13E10	S2	浅鉢	C1	f1		19.4		0.250	金･雲･長	口：浮線文④	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口	口	
631	S2-13E13,S1-13E12･14	S2	浅鉢	B1	c1		(20.8)		0.188	英･金･雲･長	口：浮線文③、ミガキ著しい	口：突帯状･平行沈線文、ミガキ著しい	7.5YR黒褐色	7.5YR褐灰色	口～体下	口	外面赤彩、1.92ℓ
632	S2-14D14	S2	浅鉢	C3			(18.2)		0.125	英･金･雲･長	口：匹字文（浮）、体：ミガキ	口：肥厚、ミガキ	10Yにぶい黄橙色	10YRにぶい黄褐色	口体上	口	
633	S2-15C5	S2	浅鉢	C4c			(30.0)		0.063	雲･長	端：沈線文、口：変形工字文、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄褐色	口	口	
634	S2-14E3,S1-14E21	S2	浅鉢	D1	f1		(25.6)		0.125	雲･長	山形1、口：浮線文④、体：ミガキ	ミガキ	10Yにぶい黄橙色	7.5YRにぶい褐色	口体上	口体上	
635	S2-15E16,S1-15E11･16	S2	甕	C2b	f1		(15.0)		0.125	金･雲･長	山形1、口：平行沈線文+縄文LR、 肩：浮線文（浮）、体上：縄文LR	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	体上	口～肩	
636	S2～S1-18C11,S1-18C11･16	S2	甕	C3a	b3		(32.0)		0.188	金･雲･長	山形1、口：浮線文②･縄文L、 頸：ナデ、肩：結節縄文L	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～肩		
637	S2･S1-15C14,VI-15C14･19	S2	甕	E3d			10.5		0.625	金･雲･長	山形2、口：縄文R+平行沈線文、 頸：ミガキヨコ、肩：縄文R	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	2.5Y暗灰黄色	2.5YR灰黄色	口～肩	口～肩	
638	VI-13E21	S1	浅鉢	B1	d1		?		?	金･雲･長	口：浮線文③、ミガキ	口：平行沈線文、ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口		
639	S1･VI-17C10	S1	浅鉢	B1	e2	6.4	20.2	6.2	0.125	金･雲･長	山形1、口：浮線文③、体：ミガキ	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	2.5Y黒褐色	2.5Y黄褐色	口～底		0.87ℓ
640	VI-14D10	S1	浅鉢	B1	f2		?		?	金･雲･長	口：浮線文④、ミガキ	ナデ･ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口	口	
641	S1-13E13	S1	浅鉢	B1	g2		?		?	雲･長	口：浮線文④、ミガキ	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR褐灰色			
642	VI-16D15･23･25･16E3･17D1･16･17･21	S1	浅鉢	B6			17.0		0.375	英･海骨･雲･砂粒少ない	山形1、口：楕円文2段（沈）	口：平行沈線文2条、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口	口	内外面赤彩
643	VI-14F18	S1	浅鉢	B8			(12.0)		0.125	金･雲･長	口：平行沈線文、ミガキ	ミガキ	2.5Yにぶい黄色	2.5Yにぶい黄色			
644	VI-14E21･23･24	S1	浅鉢	C1	a1		23.2		0.250	金･雲･長	口：浮線文④、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR黒褐色	口	口	
645	S1-14D25･15D21,VI-14D25･15D21･22･15E9	S1	浅鉢	C1	a1	10.5	26.2	6.6	0.688	英･海骨･雲･長	山形2、口：浮線文③、体：ミガキ、面：網代痕	口：肥厚･平行沈線文、ナデ･ミガキ	2.5Y黄褐色	2.5Yにぶい黄色	口～底濃い、面	口～体上	外面赤彩、2.42ℓ
646	S1-13E14,VI-13E13	S1	浅鉢	C1	a2		(37.0)		0.188	金･雲･長	口：浮線文（浮）、体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口体上	口体上	8.25ℓ
647	VI-16F2	S1	浅鉢	C1	a3		(33.0)		0.063	金･雲･長	口：浮線文④、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文	10YR褐灰色	2.5Y黄灰色			内外面口縁赤彩
648	S1-15E14,VI-15E14･15･16D11･16	S1	浅鉢	C1	b1		28.6		0.438	金･雲･長	口：浮線文④、体：ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YR褐灰色	10YR褐灰色	口体上	口体上	外面口縁赤彩
649	VI･S1-15F21	S1	浅鉢	C1	b2		(27.7)		0.125	金･雲･長	山形1、口：浮線文④、体：ミガキ	口：突帯状･平行沈線文、ミガキ	7.5YRにぶい褐色	7.5YR褐灰色	口～体	口～体	外面赤彩
650	S1-17C24,VI-17C15	S1	浅鉢	C1	b3		(27.0)		0.063	金･雲･長	口：浮線文④、体：ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
651	VI-14F2･7･8･11～13	S1	浅鉢	C1	b2	15.9	35.7	7.6	0.563	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文④、 体：ミガキ、面：ササ痕?	口：肥厚･平行沈線文	2.5Y暗灰黄色	2.5Y黄褐色	口～底	口	胎土分析･外面口縁赤彩、5.87ℓ
652	S1-16E2,VI-15D8･13･16D12･16D･16E2･3･4	S1	浅鉢	C1	d1		26.2		0.688	金･雲･長	山形1･2、口：浮線文（浮）、 体：ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YR褐灰色	10YR灰黄褐色	口～体上濃い	口～体上濃い	
653	VI-15D10･17D16･22	S1	浅鉢	C1	d2		24.0		0.438	雲･長	山形1、端：沈線文、口：浮線文（沈）	口：肥厚	2.5Y暗灰黄色	2.5Yオリーブ褐色	口～体下		1.91ℓ
654	VI-14E5	S1	浅鉢	C1	f1･d3		(30.0)		0.063	海骨･金･雲･長	口：浮線文2段③	口：肥厚･平行沈線文、ナデ	2.5Y暗灰黄色	10YRにぶい黄橙色	口		
655	S1-14E21	S1	浅鉢	C1	e2		(14.6)		0.125	金･雲･長	口：浮線文④、	ナデ	10Yにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色	口		
656	VI-15D7	S1	浅鉢	C1	e2		(21.2)		0.125	雲･長	山形1、口：浮線文④、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口		
657	S1-13E25	S1	浅鉢	C1	e2	6.5	17.7	5.0	0.188	金･雲･長	口：浮線文③、体：ミガキ、面：ササ痕	口：平行沈線文、ミガキ	10YR褐灰色	10YR6灰黄褐色			内外面口縁赤彩、0.85ℓ
658	S1-15D9･15E3･7,VI-15D8･25･15E4	S1	浅鉢	C1	f1		(25.8)		0.125	雲･長	口：浮線文④、体：ナデ	口：肥厚･平行沈線文	7.5Yにぶい橙色	N暗灰色			内外面口縁赤彩
659	VI-13E25	S1	浅鉢	C1	f1		(21.4)		0.063	雲･長	口：浮線文④	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口濃い	口濃い	外面赤彩
660	VI-16D19･24･16E3･17D6･12	S1	浅鉢	C5a			18.0		0.500	英･雲･白･砂粒少ない	口：変形匹字文②	口：肥厚･平行沈線文、丁寧なナデ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口		
661	S1-15C5	S1	浅鉢	C2			(26.0)		0.125	金･雲･長	口：工字文②、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口～体	口	
662	VI-17B24	S1	浅鉢	C3			(33.8)		0.063	英･雲･長	口：匹字文④･ミガキ、体：縄文LR	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口体上濃い	口体上	
663	VI-17B3･4	S1	浅鉢	C3			(17.8)		0.188	雲･長	口：匹字文	ミガキ	10Yにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色			外面摩滅
664	S1-16C4	S1	浅鉢	C4a			(26.6)		0.063	金･雲･長	山形2、端：沈線文、 口：工字文、ミガキ	口：突帯状･平行沈線文、ミガキ	10Yにぶい黄橙色	10YRにぶい黄褐色			
665	S1-14E12･16･17,VI-14E11･12･16･17･17C3	S1	浅鉢	C3		17.8	35.4	7.1	0.875	英･雲･長	山形2、端：沈線文、 口：匹字文･ミガキ、体：縄文LR	口：肥厚･平行沈線文	7.5YR黒褐色	7.5YR灰褐色	口～底･面濃い	口～体上濃い	内外面口縁赤彩、7.95ℓ

土器観察表（18）

報告No.	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
666	S1-14F11・16E23,Ⅵ-15E20・16D13・16E17・18・21・22,15F25,16F1・21	S1	浅鉢	C4b		(10.7)	24.0	7.0	0.250	雲・白	山形1、口：工字文④、ミガキ	口：肥厚・平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口～底	体下	2.54ℓ
667	Ⅵ-17C24	S1	浅鉢	C6			(21.0)		0.063	雲・長	端：沈線文、口：楕円文、ミガキ	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口		外面赤彩
668	S1-13E22	S1	浅鉢	C8		4.2	10.0	4.6	0.188	金・雲・長	口：平行沈線文、体：ミガキ	口：肥厚、ミガキ	2.5Y暗灰黄色	2.5Y暗灰黄色	口～底・面	底・面	トレンチ、0.19ℓ
669	S1-16D6	S1	浅鉢	C8			(24.8)		0.125	金・雲・長	山形2、口：平行沈線文	口：平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色	口体上	口体上	外面摩滅
670	S4～S1-13E11	Ⅶ	浅鉢	D1	e2	9.4	24.2	7.6	1.000	英・雲・長	波状口縁、口：波状に面取り・浮線文(浮)、体：ミガキ、面：網代痕	ミガキ	N黒色	10YR黒色	口～底・面濃い	口～底	1.52ℓ
671	Ⅵ-14E21	S1	浅鉢	D1	f1		(29.2)		0.063	金・雲・長	山形1、口：浮線文④、体：ミガキ	ミガキ	10YRにぶい黄橙色	7.5YRにぶい褐色	口	口体上	内外面赤彩
672	Ⅵ-16E8	S1	浅鉢	D1	f1		(21.0)		0.063	金・雲・長	口：浮線文④、ナデ	口：平行沈線文、ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口体上	口体上	
673	Ⅵ-14F17	S1	浅鉢	D8			(16.4)		0.063	金・雲・長	口：平行沈線文、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	7.5YR灰褐色	口体		一括
674	D1・S1・Ⅵ-15F7,15F21	S1	浅鉢	F1	a3	10.8	18.0	8.2	0.438	金・雲・長	山形1、口：浮線文（浮）、体：ミガキ	口：平行沈線文、丁寧なナデ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口～面	口	内外面赤彩、1.44ℓ
675	S1-16C9・17C18,Ⅶ上-15E19・20,Ⅵ-17C6・9・10,Ⅴ-16D13	S1	浅鉢	F				12.0	0.000	英・海骨・雲・長	底：平行沈線文・ミガキ、面：丸底	丁寧なナデ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄橙色			
676	S1-15E25・16E21,Ⅵ-15E24・25・15F4・5,15F16	S1	浅鉢	F3		8.8	15.2	5.4	0.375	金・雲・長	山形1・2、口：匹字文、頸～体：ミガキ、面：網代痕	口：平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～体下	口～底・面	内外面口縁赤彩、1.62ℓ
677	S4-14F1,S1-13F19,Ⅵ-13F11・14	S1	浅鉢	F8			(34.0)		0.188	雲・長	口：平行沈線文、頸：鋸歯状集合沈線文・刺突文	口：平行沈線文、ミガキ	10YR褐灰色	10YR灰黄褐色	口頸	口頸	
678	Ⅵ-16C24・16D19	S1	浅鉢	G2			(28.0)		0.188	英・雲・白	端：沈線文、口：匹字文④	口：肥厚・平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口	口	
679	Ⅵ-15E9・16D18・20	S1	浅鉢	I1	d3		(25.4)		0.125	角・雲	頸：ミガキ、体上：浮線文（浮）	ミガキ	7.5YRにぶい褐色	7.5YRにぶい褐色			
680	Ⅵ-14E13	S1	浅鉢	I3			(26.2)		0.063	金・雲・長	口：縄文L、体上：匹字文	口：突帯状・平行沈線文、ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YR褐灰色	口	口	
681	S1-17B25	S1	台付浅鉢					8.0	0.000	雲・長	台：平行沈線文、ミガキ	ナデ	10YR褐灰色	10YRにぶい黄褐色			
682	S1-16E2,Ⅵ-15E10・16D23・16E1・2・6,16E12	S1	鉢	A	a2		(35.8)		0.125	金・雲・長	口：幅広沈線文・浮線文④	ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄橙色	口		
683	Ⅵ-13E22	S1	鉢	A	d1		12.1		0.375	金・雲・長	口：浮線文④、ミガキ	ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色			焼成前穿孔、0.67ℓ
684	Ⅵ-15F7～9・13・14・16・18・19	S1	浅鉢					6.5	0.000	金・雲・長	口：浮線文、ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒色	体底	体底	
685	S4・Ⅵ-17B4・6,S3-17B3・6,S2-17B6・16,S1-17B6・7	S1	甕	A3d		41.0	23.4	9.6	0.375	雲・長	口：縄文LR・平行沈線文、頸：ミガキ、肩：縄文LR、体：条痕文（幅9㎜）	ナデ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄褐色	肩～体上濃い		一括、11.89ℓ
686	SC2229-13E23,S3-13E22,S1-13E13～15・23,Ⅵ-13E4・5・15・19・22～25・14F17	S1	甕	B1a	d1	(25.6)	23.9	10.0	0.375	金・雲・長	山形1、口：縄文LR、頸：浮線文④、肩～体：撚糸文R	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～体上	肩～体下	一括、焼成後穿孔8.34ℓ
687	Ⅵ-14F6・11・12・16	S1	甕	C1a	e2		23.8		0.250	金・雲・長	山形2、口：縄文LR・浮線文④	口：平行沈線文	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口頸	口頸	内面器面摩滅
688	Ⅵ-14E6	S1	甕	C3a	d2		(18.6)		0.063	金・雲・長	口：縄文L・浮線文④、頸：ナデヨコ	口：平行沈線文、ナデ	2.5Y黄灰色	10YR褐灰色	口頸		
689	Ⅵ-16E1・6・7・11・12	S1	甕	C3a	e2		(38.4)		0.125	金・雲・長	山形1、口：平行沈線文・縄文LR、頸：ミガキ、肩：浮線文④、体：縄文LR	ナデ・ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	頸肩	口	
690	S1-13D23	S1	甕	C3d			?		?	金・雲・長	口：肥厚・縄文LR+平行沈線文、頸：ナデ、肩：縄文LR+平行沈線文、体上：条痕文	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口体上		
691	Ⅵ-13F6～8・11・12・16	S1	甕	C3d			(22.0)		0.125	金・雲・長	山形1、口：平行沈線文、頸：ナデ	ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄橙色	頸	口	
692	S1-14F12,Ⅵ-13F19・14F17・18・20～23	S1	甕	C3e			31.0		0.750	金・雲・長	口：結節縄文LR、頸：ナデ、肩：結節縄文LR	ナデ	10YR黒色	10YRにぶい黄褐色	口～肩	口	一括
693	Ⅵ-15D7・16B10	S1	甕	C3e					0.000	金・雲・長	頸：ナデヨコ、肩：結節縄文LR	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	頸肩		
694	Ⅵ-13F2～4・13・17	S1	甕	E3d		46.0	32.6	9.4	0.313	英・金・雲・長	口：複合口縁・縄文R+平行沈線文、頸：ミガキ、肩体：条痕文、底：ナデヨコ、面：網代痕	ナデ	10YR黒色	10YR黒色	口～体上	体下バンド状	22.95ℓ
695	Ⅵ-14F16	S1	甕	D1b	f1		(10.6)		0.188	金・雲・長	口：縄文LR・浮線文④、頸：綾杉文	ナデ・ミガキ	2.5Y黒色	2.5Y黒褐色	口頸	口頸	一括
696	S1-14E22,Ⅵ-14E21・14F2・6・11・13・17・15F5・8	S1	甕	D2b	e2		(24.6)		0.063	金・雲・長	口：縄文LR・平行沈線文、頸：浮線文④・刺突文・列点文、肩：浮線文	口：平行沈線文、ナデ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色	口～肩	口～肩	
697	Ⅵ-14F17・22	S1	甕	D2b	b3	54.5	33.5	9.9	0.750	雲・長	口：結節縄文L・平行沈線文、頸：縄文L、体：縄文L	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口～体上濃い、底	体下バンド状	一括、胎土分析、41.86ℓ
698	S1-16D24・25・16E3,Ⅵ-16D23～25	S1	甕	D3a			25.1		0.375	金・雲・長	山形1、口：工字文、頸：ミガキヨコ、肩：ナデ・ミガキ	口：平行沈線文2条、ナデ・ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色			内外面口縁赤彩
699	Ⅵ-16D1	S1	甕	D3d			(32.4)		0.125	金・雲・長	口：縄文LR+平行沈線文③、頸：ナデ、肩：平行沈線文・縄文LR	ナデ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄橙色	口～肩		
700	Ⅵ-14F22・23	S1	甕	D3e			(38.0)		0.125	金・雲・長	口：縄文LR、頸：ナデヨコ	ナデ・ミガキ	10YR褐灰色	10YR褐灰色	口頸	口頸	一括
701	Ⅵ-15F7・11・16	S1	甕	E2e			(28.4)		0.188	金・雲・長	口：結節縄文LR、頸：縄文LR	ナデ・ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口頸	口	
702	Ⅵ-16E11	S1	甕	E3a			(16.0)		0.063	海骨・雲・長	口：匹字文、頸：ミガキ、肩：綾杉文	口：平行沈線文、丁寧なナデ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口～肩	口	
703	S1-15E24,Ⅵ-15E14・21・24・25・15F3・4・21,14E25	S1	甕	E3a			28.0		0.438	英・雲・長	口：平行沈線文、頸：ミガキ、肩：匹字文④	口：平行沈線文、ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～肩	口～肩	
704	S1-17B25,Ⅵ-17B3・20・25	S1	甕	E3a	f1		(16.4)		0.063	英・雲・白	口：縄文LR+浮線文④、頸：ミガキヨコ	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YR黒色	口頸	口頸	
705	Ⅵ-16F4・5	S1	甕	E3a	d1		(20.0)		0.063	金・雲・長	山形1、口：浮線文③、頸：ミガキヨコ	口：平行沈線文、ナデ・ミガキ	7.5YR褐灰色	7.5YR褐灰色	口頸	口頸	外面口縁赤彩

土器観察表（19）

報告No.	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
706	S4-17B6·7,S1-17B7·17C9, Ⅵ-17B6·17C3～5·8·9·13·17·19·20·23·25	S1	甕	E3b			(36.4)		0.188	金·雲·長	口：縄文LR+平行沈線文、 頸：ナデ·ミガキ、肩：縄文LR+綾杉文、 体：条痕文+縄文LR	丁寧なナデ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄褐色	口～体上	体下濃い	一括、24.42ℓ
707	Ⅵ-16C3·22	S1	甕	E3b			(9.8)		0.063	雲·長	口：縄文LR+平行沈線文、頸：ナデ、 肩：三角形集合沈線文	ナデ·ミガキ	10YR褐灰色	2.5Y黒褐色	口～肩	口	
708	S3-14D24,S1-15E7,Ⅵ-14E4·5· 15E2·6～8·10·13·16F3	S1	甕	E3b					0.000	金·雲·長	頸：ナデヨコ、肩：縄文R+鋸歯状集合沈線文、体：条痕文タテ	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄褐色	頸～体上	肩体上	
709	S1-15C16,Ⅵ-15C14·15·20· 16C11·20	S1	甕	E3d			28.0		0.375	金·雲·長	口：平行沈線文④、頸：ナデ、 肩：縄文LR	ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～肩	口～肩	
710	S2-14C13,Ⅵ-15F4·5	S1	甕	C3a					0.000	雲·長	肩：目字状文·斜線文·突起、体：縄文L	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
711	S3-14E3,S1-14E4,Ⅵ-14E4·5·12	S1	甕	I3d			(32.5)		0.125	金·雲·長	口：縄文LR·肥厚、頸：ナデ+ミガキ、 肩：条痕文+結節縄文LR、 体：条痕文（8mm·4条）	ナデ	2.5Yにぶい黄色	2.5Y黄褐色	口～体上濃い	体下底バンド状	20.18ℓ
712	S1-14E7	S1	深鉢	B6a			(29.4)		0.063	金·雲·長	口：縄文LR+平行沈線文	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口	口	
713	Ⅵ-15D16·16D14	S1	深鉢	C7d			(25.3)		0.063	雲·長	口：体部条痕文施文後に複合口縁作出·条痕文	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口体上		
714	S1-14E12·17,Ⅵ-14E12·13	S1	深鉢	C7b			(35.0)		0.188	金·雲·長	口：結節縄文LR、体上：条痕文	丁寧なナデ	7.5YR灰褐色	10YR灰黄褐色	口体上		
715	Ⅶ-14D13	S1	深鉢	A7a		38.2	34.5	9.8	0.563	金·雲·長	縄文LR、面：ナデ	ナデ	2.5Y灰黄色	2.5Y灰黄色			底面が丸く自立しない、21.43ℓ
716	Ⅵ-13F19	S1	深鉢	C1	e2		(15.2)		0.125	金·雲·長	山形1、口：浮線文④、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR褐灰色	10YR褐灰色	口	口	
717	Ⅵ-15E20,16E11	S1	深鉢	C6a			22.6		0.875	金·雲·長	口：平行沈線文、縄文LR	ナデ·ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口体上	口体上	
718	Ⅵ-14E3	S1	深鉢	B7a			29.2		0.313	金·雲·長	端：算盤玉状押圧文、体：縄文LR	ナデ	10YR灰黄褐色	2.5Y暗灰黄色	口体上	口	
719	Ⅵ-14F22	S1	深鉢	C8			(28.0)		0.125	金·雲·長	ゆるい波状口縁、ナデ	ナデ	10YR褐灰色	10YRにぶい黄橙色	口		一括
720	Ⅵ-14E21·22	S1	深鉢	C8			(20.4)		0.188	金·雲·長	口体上：ミガキ	ナデ·ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色	体上	口	一括
721	S1-15E21·25,Ⅶd-16F14, Ⅵ-15E21·24·25·15F4·24	S1	深鉢	D7d			?		?	雲·長	波状口縁、口：条痕文	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口濃い		
722	Ⅵ-15F4·7～9·16	S1	壺	A	d1		14.6		0.500	金·雲·長	口：浮線文④、頸：ミガキヨコ	ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YR灰黄褐色	口頸	口頸	
723	Ⅵ-14F20	S1	壺	B？	f1		(16.6)		0.125	雲·長	口：縄文LR·浮線文（浮）	口：平行沈線文、ナデ	2.5Y浅黄色	10YR灰黄褐色	口	口	
724	Ⅵ-14F16·22	S1	壺	G	b3		14.0		0.250	金·雲·長	山形1、口：浮線文③	ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			一括
725	Ⅵ-16E11·13·17	S1	壺	A				7.0	0.000	雲·長	ミガキ、面：線条痕	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
726	Ⅵ-15F5	S1	壺					4.0	0.000	雲·長	底：沈線状痕、ナデ	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄褐色			
727	Ⅵ-15F8	S1	壺					5.5	0.000	金·雲·長	底：平行沈線文·縄文LR？、面：線状痕	ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄橙色	底		
728	S1-17A20	S1	壺	A				6.0	0.000	金·雲·長	体下：縄文LR+綾杉文	ナデ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄褐色	体下		暗渠
729	S1-16D20	S1	甕・深鉢					9.7	0.000	金·雲·長	底：ナデ、面：木葉痕	ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄橙色	底·面		
730	Ⅶ上-14E20·15E16	Ⅶ	浅鉢	B1	a2		21.0		0.500	金·雲·長	口：浮線文④	口：突帯状·平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄褐色	口	口	内外面赤彩
731	Ⅶ-14E4	Ⅶ	浅鉢	D10		6.3	11.7	3.8	0.438	金·雲·長	口～底：ミガキ	口：肥厚、ナデ·ミガキ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口～底	口	0.22ℓ
732	不明		浅鉢	B1	b1	9.7	23.7	6.0	0.375	金·雲·長	波状口縁、口：浮線文（浮）、 体：ミガキ	口：突帯状·平行沈線文、ミガキ	2.5Y浅黄色	10YR灰黄褐色	口～体下·面	口～底·面	外面口縁赤彩、1.84ℓ
733	Ⅶ上-15E18～20	Ⅶ	甕	B2d			33.1		0.313	金·雲·長	波状口縁、口～体：縄文LR+結節縄文LRの回転のみ	ナデ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口～体上濃い	体上濃い	暗渠、25.20ℓ
734	Ⅶ上-13E16·17	Ⅶ	甕	D2b	f1		31.1		0.563	金·雲·長	口：平行沈線文·列点文·縄文LR、 頸：縄文LR、肩：浮線文④、 体上：結節縄文LR、体：縄文LR	ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～体上濃い	体下濃い、口～体上	暗渠、18.41ℓ
735	SD1420-21c-22B23	SD1420-21	浅鉢	B1	a2		(22.0)		0.125	雲·長	口頸：浮線文③、 体：平行沈線文·丁寧なナデ	口：肥厚·浅い平行沈線文、丁寧なナデ	10YRにぶい黄橙色	10YR褐灰色			
736	SD1420-21c-22C2	SD1420-21	浅鉢	B1	a2		(11.6)		0.063	金·雲·長	口：浮線文③、器面光沢あり、漆塗布か？	丁寧なナデ	10YR黒色	10YR黒色	口	口～体上	外面赤彩
737	SD1420-21a-20D3	SD1420-21	浅鉢	B1	b1		(26.0)		0.125	金·雲·長	山形1、口：浮線文	口：突帯状·平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口～肩濃い		内外面赤彩
738	SD1420-21a-16F20·17F11	SD1420-21	浅鉢	B1	b2		(22.4)		0.125	金·雲·長	波状口縁、口：浮線文③、ミガキ	口：突帯状·平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR褐灰色			
739	SD1420-21a-17F11	SD1420-21	浅鉢	B1	d2		?		?	金·雲·長	口：眼鏡状文·浮線文③、ミガキ	口：肥厚、ナデ·ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口	口	外面赤彩
740	SD1420-21a-17F8	SD1420-21	浅鉢	B1	d1		(23.0)		0.063	雲·長	口：浮線文④、ミガキ	口：肥厚·平行沈線文、ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR灰褐色			内外面赤彩
741	SD1420-21a-17F11	SD1420-21	浅鉢	B1	d1		(11.0)		0.063	金·雲·長	口：浮線文④、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR黒色	7.5YR黒褐色	口	口	内外面赤彩
742	SD1420-21c-22B22	SD1420-21	浅鉢	B1	e2		(24.4)		0.125	金·雲·長	山形1、口：浮線文（浮）、ミガキ	口：突帯状·平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口体上	口	
743	SD1420-21a-17F11	SD1420-21	浅鉢	B1	e3		?		?	雲·長	口：浮線文③、ミガキ	口：肥厚、ナデ·ミガキ	7.5YR黒色	7.5YR黒色	口	口	内外面赤彩
744	SD1420-21a-17E4·8·13	SD1420-21	浅鉢	C1	a3		(28.0)		0.125	金·雲·長	山形1、口：浮線文（浮）、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～底	口～底	内外面赤彩、3.50ℓ
745	SD1420-21a-17E4,同20-17E7·8, 同18-17E8	SD1420-21	浅鉢	C1	b1		(32.0)		0.125	金·雲·長	山形1、口：浮線文④、体：ミガキ	口：肥厚·平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～体下濃い	口～体下濃い	内外面口縁赤彩
746	SD1420-21a-17E9,同20·19-17E8	SD1420-21	浅鉢	C1	b1		26.8		0.250	金·雲·長	山形1、口：浮線文④、体：ミガキ	口：突帯状·平行沈線文、ミガキ	7.5YR褐灰色	7.5Y黒褐色	口体上	口体上	内外面口縁赤彩
747	SD1420-21a-16F19	SD1420-21	浅鉢	C1	e2		(10.0)		0.063	金·雲·長	口：浮線文（浮）、ナデ	口：肥厚·平行沈線文、ミガキ	10YR褐灰色	10YR褐灰色			
748	SD1420-21c-22C2	SD1420-21	浅鉢	C1	f1		(19.8)		0.125	金·雲·長	山形1、口：浮線文③、丁寧なナデ	口：突帯状·平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄褐色		口体上	
749	SD1420-21c-22B15,22C2·13·23	SD1420-21	浅鉢	D1	b1		25.0		0.250	金·雲·長	山形1、口：浮線文④、ミガキ	ミガキ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄橙色	口		

土器観察表（20）

報告No.	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
750	SD1420-21c-22B22	SD1420-21	浅鉢	D1	b3		(16.0)		0.125	雲・長	山形2、口：浮線文③、ミガキヨコ	口：平行沈線文、ナデ・ミガキ	10YR褐灰色	10YRにぶい黄橙色	口	口	内外赤彩
751	SD1420-21c-22C3	SD1420-21	浅鉢	D1	d1		(22.0)		0.125	金・雲・長	波状口縁、口：浮線文+斜位沈線文、ナデ	口：平行沈線文、ミガキ・ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	体上	口～体上	
752	SD1420-21a-16F15	SD1420-21	浅鉢	D1	e2		(23.0)		0.063	雲・長	口：浮線文（浮）、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR褐灰色	10YRにぶい黄橙色	口	口	内外面赤彩
753	SD1420-21c-22D17,同21a-16F20,VI-12F4	SD1420-21	浅鉢	D1	e3		(29.6)		0.188	金・雲・長	波状口縁、口：浮線文④、体：ミガキ	口：肥厚・平行沈線文、ナデ・ミガキ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色	体下	口	3.83ℓ
754	SD1420-21a-16F15	SD1420-21	浅鉢	D8			(35.0)		0.125	金・雲・長	波状口縁、口：平行沈線文（細かい）、ミガキ	ミガキ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄褐色	口体上	体上	
755	SD1420-21c-16F24,同21a-16F20	SD1420-21	浅鉢	D8		4.3	(14.0)	4.8	0.125	金・雲・長	口：平行沈線文、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR褐灰色	7.5YR褐灰色	口～底・面	口～底・面	0.23ℓ
756	SD1420-21a-17E4,同20-17E3	SD1420-21	浅鉢	F1	a2	8.1	17.2	7.2	0.375	金・雲・長	口：浮線文（浮）,頸～体：ミガキ著しい	口：平行沈線文、ミガキ著しい	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～面	口～体下	1.04ℓ
757	SD1420-21d-22D4・14,同21C-21D5・22D4・9・18	SD1420-21	鉢	A		19.2	29.2	9.0	0.688	雲・長	口：結節縄文LR、体：縄文LR	ミガキ	7.5YR黒色	7.5YR黒色	口～底濃い	体上バンド状、口	内外面とも口～体上に赤褐色の漆付着、7.84ℓ
758	SD1420-21a-17E4・9	SD1420-21	浅鉢	F1			(28.4)		0.125	金・雲・長	波状口縁,口：浮線文④,頸：ミガキヨコ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口頸	口	
759	SD1420-21c-21D24,VI-20B22	SD1420-21	鉢	E	d1・f1				0.000	金・雲・長	頸：ミガキヨコ、肩：浮線文（浮）、体：縄文LR	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	底～体下濃い	体下	外面全面赤彩
760	SD1420-21d-25D8,同21a-17F11	SD1420-21	甕	A1a			(37.0)		0.188	金・雲・長	口頸：縄文RL・菱形沈線文・刺突文、肩：結節縄文LR	丁寧なナデ	10YR黒色	10YRにぶい黄褐色	口～肩		
761	SD1420-21c-20B25,同21a-20B21	SD1420-21	甕	A3a			(20.0)		0.188	金・雲・長	山形1、口：平行沈線文、肩：眼鏡状文、体：条痕文タテ	丁寧なナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～体上濃い	口～体上	
762	SD1420-21d-22B24,同21C-21D20	SD1420-21	甕	B1a	e3		(32.8)		0.063	金・雲・長	山形1、口：刺突列点文、頸：浮線文、肩：眼鏡状文・突起・条痕文+縄文LR	丁寧なナデ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色			
763	SD1420-21a-16F19・17F12・19D14	SD1420-21	甕	B3a			(30.6)		0.188	金・雲・長	山形1、口：縄文L・浮線文④、頸：ナデヨコ、肩：結節縄文L	ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～肩濃い	口～肩	
764	SD1420-21c-22C3	SD1420-21	甕	B3d			(24.0)		0.125	金・雲・長	山形1、口：撚糸文R+平行沈線文、頸：ナデ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口頸	口頸	
765	SD1420-21d-22D4,同21c-22C9・23・25・22D4	SD1420-21	甕	B1b			(26.4)		0.125	金・雲・長	山形1、口：縄文LR+平行沈線文、頸：綾杉文・刺突列点文、肩：指頭状圧痕・撚糸文R	丁寧なナデ	10YR褐灰色	10YR灰黄褐色	肩		
766	SD1420-21d-22C6,同21c-21D20,同21a-22D21	SD1420-21	甕	B1a	e2		(16.0)		0.125	雲・長	山形1、口：縄文L、頸：浮線文（浮）、肩：縄文L+結節縄文L	ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～肩	口～肩	
767	SD1420-21c-22C2	SD1420-21	甕	B2b			(26.2)		0.125	金・雲・長	波状口縁、口：平行沈線文、頸：縄文LR、肩：浮線文④	ナデ・ミガキ	10YR褐灰色	10YR灰黄褐色	口～肩		
768	SD1420-21d-22C3・26D6,同21c-21D20,同21b-21D2,同21a-16F15・22D12	SD1420-21	甕	B3a			(36.8)		0.125	金・雲・長	口：平行沈線文、頸：ナデヨコ、肩：眼鏡状文・突起、体：条痕文	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄色			
769	SD1420-21a-17F11	SD1420-21	甕	C1c			(19.1)		0.063	雲・長	波状口縁,口：肥厚・縄文RL,頸：匹字文	ミガキ	7.5YR褐灰色	7.5YR灰褐色	口頸濃い	口頸濃い	
770	SD1420-21c-22B22	SD1420-21	甕	C2a			(21.0)		0.125	雲・長	口：縄文L、頸：綾杉文、肩：浮線文	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～肩濃い	口肩	
771	SD1420-21d-22C7,同21c-21C15・22C3・11・23・22D1	SD1420-21	甕	C3a			(40.0)		0.063	金・雲・長	口：縄文LR・平行沈線文、頸：ナデヨコ、肩：匹字文風の隆帯文・縄文LR、体：撚糸文R+縄文LR	丁寧なナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色		体下	
772	SD1420-21a-16F25	SD1420-21	甕	C3a				10.2	0.000	金・雲・長	頸：ナデヨコ、肩：眼鏡状文④、体：縄文L、底：ナデヨコ	丁寧なナデ	10YR灰黄褐色	10YR黒褐色	頸～体下濃い	頸～底	
773	SD1420-21d-22D4	SD1420-21	甕	C3b		14.1	16.5	6.0	0.688	金・雲・長	山形1・2、口：縄文LR+平行沈線文（浮）、頸：ナデ・ミガキ、肩：綾杉文、体：縄文LR、底：ミガキヨコ	ナデ・ミガキ	N黒色	10YR黒色	口～底・面濃い	口～底・面濃い	1.53ℓ
774	SD1420-21d-27C18・23・24	SD1420-21	甕	C3d			(30.3)		0.063	金・雲・長	口：縄文LR+平行沈線文、頸：ナデ、肩：平行沈線文・結節縄文LR	ナデ・ミガキ	10YR黒色	10YR褐灰色	口～肩濃い	口～肩	
775	SD1420-21a-17F5	SD1420-21	甕	C3e			?		?	金・雲・長	口：複合口縁・縄文LR、頸：ナデヨコ	ナデ・ミガキ	10YR褐灰色	10YR黒褐色	口頸濃い	口頸濃い	
776	SD1420-21d-27D8,同21c-16F24	SD1420-21	甕	E2e			(22.6)		0.125	金・雲・長	口～肩：縄文LR	ナデ・ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
777	SD1420-21d-22C3	SD1420-21	甕	E3d			(37.0)		0.063	金・雲・長	口：撚糸文R+平行沈線文、頸：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口頸	口頸	
778	SD1420-21c-22C3,同21a-20C16	SD1420-21	甕	I1b			(20.0)		0.125	金・雲・長	口：縄文LR、頸：綾杉文、肩：縄文LR	ナデ・ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR灰褐色	口～肩濃い	口～肩	
779	SD1420-21a-17E8・12・13	SD1420-21	甕	G3a	f1		16.8		0.313	金・雲・長	山形1、口：浮線文（浮）・縄文LR、頸：ミガキヨコ、肩～体：縄文LR	口：平行沈線文、ナデ・ミガキ	2.5YR灰黄色 N黒色	10YR黒色	口～体上濃い	口～底濃い	2.88ℓ
780	SD1420-21c-21C10	SD1420-21	甕	G3a	b3		(11.0)		0.125	金・雲・長	山形1、口：縄文LR+浮線文③、頸：ミガキ、肩：縄文LR	口：平行沈線文、ナデ・ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～体下	口～肩	0.61ℓ
781	SD1420-21d-22B24・22C1～4,同21c-21E8・22B9・20・22・23・22C2・7・13・21・22	SD1420-21	甕					10.3	0.000	金・雲・長	体：縄文LR、底：ナデヨコ	ナデ・ミガキ	2.5Y灰白色	10YRにぶい黄橙色	体上		
782	SD1420-21d-22D13,同21c-22C2・21・23・25・22D1・16・18・23D6	SD1420-21	深鉢	A6b			34.4		0.313	金・雲・長	口：結節縄文LR・平行沈線文、体：撚糸文R	ナデ・ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR褐灰色			
783	SD1420-21c-22C3	SD1420-21	深鉢	B7a			(14.0)		0.125	金・雲・長	端：ミガキ、口：条痕文+縄文LR	ナデ・ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR褐灰色	口体上	口	
784	SD1420-21a-17F11	SD1420-21	深鉢	C6a		12.6	13.8	6.6	0.875	金・雲・長	口：平行沈線文、口～体：縄文LR	ナデ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口～体濃い、面は内側に丸くスス付着	口～底濃い	1.07ℓ

土器観察表（21）

報告No.	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
785	SD1420-21d-22C3	SD1420-21	深鉢	C6d			(24.0)		0.125	金・雲・長	口：条痕文ヨコ+平行沈線文、 体：条痕文タテ	ナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	口体上濃い	口体上	
786	SD1420-21d-24D4・25D14, 同21a-19D3	SD1420-21	深鉢	C6a			(30.4)		0.188	金・雲・長	口：条痕文+縄文LR・平行沈線文・列点文、体：条痕文（1㎝・3条）	ナデ・ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～体上	口～体上	
787	SD1420-21c-22B13	SD1420-21	深鉢	C6d			(30.0)		0.125	雲・長	口：条痕文（細密・5㎜）+平行沈線文	丁寧なナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～体上		
788	SD1420-21d-22C6,同21c-16F24	SD1420-21	深鉢	C6e			(24.1)		0.063	雲・長	口：平行沈線文、体：ミガキ	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒色	口体上	口体上	外面口縁赤彩
789	SD1420-21d-22C2,同21a-16F20	SD1420-21	深鉢	C7d			(23.0)		0.063	金・雲・長	口：結節縄文LR+条痕文	ナデ	7.5YR灰褐色	7.5YR黒褐色	口体上濃い	口体上濃い	
790	SD1420-21c-16F24,同21a-16F23・ 24	SD1420-21	深鉢	C6e			(25.0)		0.125	金・雲・長	口：平行沈線文④、体上：条痕文	ナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	口体上濃い	口体上	
791	SD1420-21c-16F24,同21a-16F19・ 25・17F11	SD1420-21	深鉢	C8			(26.0)		0.125	金・雲・長	ミガキ	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR褐灰色	口体	口体	
792	SD1420-21c-22B9,同21a-18F1	SD1420-21	深鉢	C8			(42.4)		0.125	金・雲・長	口体上：ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	10YR褐灰色	10YR灰黄褐色	口体上濃い	口体上	
793	SD1420-21a-17F5	SD1420-21	壺	A	a4		(16.0)		0.125	金・雲・長	口：眼鏡状文・浮線文④、頸：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR灰褐色	口	口	内外面口縁赤彩
794	SD1420-21a-17F11	SD1420-21	壺	F	e2		(14.6)		0.063	雲・長	口：浮線文④、頸：ナデ	ナデ	10YR褐灰色	10YRにぶい黄橙色	口頸濃い	口頸	
795	SD1420-21a-19B20	SD1420-21	甕				(20.4)		0.063	金・雲・長	口：蛇行する隆帯貼付・刻目文	ナデ	10YR黒色	10YRにぶい黄褐色	口濃い		
796	SD1420-21a-17F11	SD1420-21	壺	B			(12.0)		0.125	金・雲・長	端：沈線文、口：縄文LR+平行沈線文、頸：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口頸	口頸	内外面赤彩
797	SD1420-21a-17F5	SD1420-21	壺	B	b4		12.8		0.438	金・雲・長	山形1・2、口頸：浮線文④・橋状把手2単位・注ぎ口状の張り出しあり、 肩体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	肩体上濃い		内外面赤彩
798	SD1420-21a-17F8	SD1420-21	壺	F			(11.0)		0.125	金・雲・長	口：平行沈線文、ミガキ	口：平行沈線文、ナデ・ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
799	SD1420-21a-17E4	SD1420-21	壺	C	f1	16.0	12.8	6.6	0.250	金・雲・長	口：浮線文（浮）、頸：ミガキヨコ、 肩：平行隆帯、体：逆「U」字状隆帯6単位・「冂」字状沈線文、 底：平行沈線文	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～底濃い	口～底濃い	内外面口～底赤彩、 1.81ℓ
800	SD1420-21a-16F15	SD1420-21	壺	B		14.4	4.4	7.0	0.938	雲・長	口：匹字文、ケズリヨコ+ミガキヨコ	ナデヨコ	2.5Y灰白色	2.5Y灰白色		体下コゲ	焼成良好、0.79ℓ
801	SD1420-21c-23B11	SD1420-21	甕・深鉢					9.5	0.000	金・雲・長	ナデ・ミガキ	ケズリ・ナデ	7.5YRにぶい橙色	10YRにぶい黄橙色			内面と割れ口赤彩濃い
802	SD1420-21c-18F11,同17b-17F11	SD1420-17	浅鉢	B1	a2	9.1	18.6	5.4	0.188	金・雲・長	口：浮線文④、体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口～体下	口～底	内外面赤彩、1.31ℓ
803	SX958-6-17E2・12	SD1420-16	浅鉢	B1	e2		?		?	雲・長	山形1、口：浮線文④、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口	口	外面赤彩
804	SX958-9-17E12, SD1420-21a-17F11	SD1420-16	浅鉢	B1	d3		(19.3)		0.125	金・雲・長	波状口縁、口：浮線文③、ミガキ	口：突帯状・平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR灰褐色	口	口	内外面赤彩
805	SX2528-16F13・17,SD1420-17b- 16F17,同6b-16F9・16,S5-16F13, 16F22	SD1420-16	浅鉢	C1	e3	11.5	34.5	7.4	0.375	金・雲・長・ 白	山形1、口：浮線文③、体：丁寧なナデ	口：肥厚・平行沈線文、ナデ	10Yにぶい黄橙色・ 黒色	10YR黒色	口～底・面	口～底・面	胎土分析、4.11ℓ
806	SD1420-17b-17F21	SD1420-17	浅鉢	C1	d2		(20.6)		0.063	雲・長	口：浮線文（浮）、体：ミガキ	口：肥厚・平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口体上濃い	口体上濃い	
807	SX958-4-17E1,同6-17E7,S1- 16D19,Ⅵ-15E23・15F10・16D25	SD1420-16	浅鉢	G1	e2		25.4		0.625	雲・長	端：沈線・突起、口：浮線文④・ミガキ	ナデ	10YR灰黄褐色・黒色	10YR黒褐色・灰黄褐色	口体上濃い	口体上	外面赤彩
808	SX2528-16F13	SD1420-16	甕	G3a			(18.6)		0.063	金・雲・長	口：浮線文（浮）、頸：ミガキ、 肩：結節縄文LR	口：平行沈線文、ナデ・ミガキ	7.5YR黒色	7.5YR黒褐色	口頸	口頸	
809	SX958-6-17E12	SD1420-16	甕	C3a					0.000	雲・長	頸：ナデ、肩：匹字文、体：条痕文	ナデ	10YR黒色	10YR黒色	肩～体下濃い	頸～体下	
810	SX2197-16F16,SD1420-21d-26D7, Ⅵ-16E22・16F4・13・17・18・22	SD1420-16	甕	C3d		18.5	16.7	8.5	0.313	金・雲・長・ 白	山形1、口：平行沈線文、 肩体：縄文LR、頸：ナデ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR褐灰色	口～体下濃い	口～体下面	2.14ℓ
811	SD1420-17b-16F20	SD1420-17	甕	E2e			(40.8)		0.063	金・雲・長	口～肩：縄文LR	ナデ	10YR褐灰色	10YR褐灰色	口～肩	口～肩	
812	SX2197-16F13, SD1420-21a-17F11	SD1420-16	甕	E2d			(33.0)		0.063	雲・長	口：平行沈線文+条痕文ヨコ、 頸～体：条痕文タテ（8㎜・細密）	ナデ・ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR灰褐色	口～体上濃い	体下	
813	SX985-8-17E12,同6-17E7・13,同5・ 2・1-17E7,同4-17E7・8・13,SD1420- 20-17E3,同19-17E8,同10・9-17E16	SD1420-16	深鉢	C6a		31.6	27.4	9.4	0.813	金・雲・長	端：連続押圧による波状口縁、 口：平行沈線文、口～体：縄文LR、 面：木葉痕	丁寧なナデ	2.5Y灰黄色	10YR黒褐色	口～体上濃い、 底	口～体下濃い	9.85ℓ
814	SX2528-16F13,SD1420-23-18D5, 同21a-17F11,同8-16F8,同-16F13、 S5-16F18	SD1420-16	深鉢	B6d			(21.0)		0.188	雲・長	口：平行沈線文、体：条痕文（櫛歯状）	ナデ・ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口体上濃い	口体上濃い	
815	SX958-6・4-17D23, SD1420-21a-17D24	SD1420-16	深鉢	C7b			39.2		0.250	金・雲・長	口：結節縄文LR、体：縄文LR	丁寧なナデ	7.5YR黒色	7.5YR黒褐色	口～体上濃い	口～体上	
816	SD1420-18-17D24	SD1420-18	深鉢	B7a			(29.1)		0.125	雲・長	端：連続押圧による波状口縁、 口～体：縄文LR	ナデ・ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口～体上濃い	口～体上	
817	SX2528-16F13,SD1420-11e・6b- 16F17,S4～S3-16F12	SD1420-16	深鉢	C7d			35.2		0.313	金・雲・長	口体上：撚糸文R	ナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	口体上濃い	口体上	
818	SD1420-21a-17D25・17E8・9,同20・ 19-17E8,同18-17E14,同13-17E4, 同11-17D23	SD1420-11	壺	B					0.000	金・雲・長	肩体上：ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	肩体上濃い	肩体上	
819	SD1420-9a-18C3,Ⅵ-18B21	SD1420-9	浅鉢	C1	a4		(31.0)		0.063	雲・長	口：浮線文④、体：縄文LR	口：突帯状・平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口体上濃い	口体上濃い	内外面漆？

土器観察表（22）

報告No.	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
820	SD1420-9a-18C9	SD1420-9	甕	B2d			?		?	金・雲・長	端：連続押圧による波状口縁、 口～肩：縄文LR	ナデ・ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰褐色	口～肩		
821	SD1420-9a-20B1	SD1420-9	浅鉢	B1	e3	11.3	28.1	5.0	0.188	金・雲・長	口：浮線文④、体：ミガキ	口：突帯状・平行沈線文、ミガキ	10YR褐灰色	10YR黒褐色	口～体上濃い	口～面	内外面赤彩、3.49ℓ
822	SD1420-9b-19B24,VI-18C3・7・9・10・15・21・19B20・19C6	SD1420-9	甕	C3e			22.8		0.500	金・雲・長	山形1、口：縄文LR+平行沈線文、頸：ミガキヨコ、肩：結節縄文LR・条痕文	口：平行沈線文、ナデ・ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口～肩	口～肩	
823	SD1420-21b-17E21, 同6b-17E22,17E2	SD1420-6b	浅鉢					5.6	0.000	角・雲	体：ミガキ、面：網代痕	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	面	体下底・面	
824	SD1420-21d-22C1, 同6b-16F17,16F21	SD1420-6b	浅鉢	C8			24.2		0.313	金・雲・長	波状口縁、口：平行沈線文・ミガキ、 体：ミガキ	ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～体下	口～体下	
825	SD1420-6b-16F12～14	SD1420-6b	浅鉢	C8			(13.6)		0.188	金・雲・長	口：平行沈線文、ミガキ	ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
826	SD1420-21c-22B9,同21a-22D21, 同6b-16F18	SD1420-6b	深鉢	A6a			(20.0)		0.125	金・雲・長	口：平行沈線文（深）、体：縄文LR	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
827	SX1446-17D24,SD1420-12-16F9, 同10・8-16F8,同6b-16F17, S2～S1-16F1	SD1420-6b	深鉢	B7b			22.0		0.250	金・雲・長	口：結節縄文L2段	ナデ	10YR黒色	10YRにぶい黄褐色	口濃い	口	
828	SD1420-13-16F13,同6b-16F18	SD1420-6b	壺	B			(14.4)		0.125	金・雲・長	口：平行沈線文、ミガキ	口：平行沈線文、ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
829	P1523-19C18		浅鉢	C1	f1		(22.4)		0.063	金・雲・長	口：浮線文③、ミガキ	ナデ・ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口体上	口体上	外面赤彩
830	P1546-1-19C11,SX1583-20D13		鉢	E				5.4	0.000	雲・長	頸：ミガキヨコ、 肩～体：平行沈線文・縄文LR	ミガキ	2.5Y黒褐色	2.5Y黒褐色	頸～底・面	頸～体上	
831	P1519-3-19C4		甕	C3d			?		?	金・雲・長	山形1、口：平行沈線文	口：平行沈線文3条	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口	口濃い	
832	P1578-2-19B19,VI-19B20		甕	C3d			?		?	金・雲・長	口：縄文LR+平行沈線文、頸：ミガキ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口	口	
833	P1672-2-21B7		浅鉢	D6				5.2	0.000	金・雲・長	口：楕円文・ミガキ	ナデ・ミガキ	10YR褐灰色	10YR灰黄褐色	口～底	口～底	外面赤彩
834	SK1691-7-22B19,SD1420-21a-22D12,同6a-19D7,同1b-22B20, VI-20C1・2・11、19B13		深鉢	A7d			35.0		0.563	金・雲・長	口～体：条痕文	ナデ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口体上濃い	口体上	
835	SK2221-7-16F10,SK2221-6・ SD1420-2a-16F15		浅鉢	C1	e2		22.6		0.438	雲・長	口：浮線文②、ミガキ	口：肥厚・平行沈線文、ナデ・ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～体下	口～体下	外面赤彩、2.14ℓ
836	S1-19B13,VI-19B8・17・22・23	SD1420-6a・S1	浅鉢	B1	b3		22.0		0.313	金・雲・長	口：浮線文（浮）、体：ミガキ	口：肥厚・平行沈線文、ミガキ	10YR褐灰色	10YR褐灰色	口体上	口体上	内外面口縁赤彩
837	VI-17D14・17・24・18D7・11・16	SD1420-6a・S1	浅鉢	C1	b1		24.6		0.500	金・雲・長	口：浮線文③・列点文	ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口	口	内面漆
838	SD1420-6a-20C2,同3c-20C3・4・8, 同3a-20C2・3・7	SD1420-6a・S1	浅鉢	C1	e2		30.0		0.375	金・雲・長	山形1、口：浮線文③、ミガキ	口：肥厚・平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口	口	外面赤彩
839	VI-18B1	SD1420-6a・S1	浅鉢	C1	e2		(17.8)		0.063	金・雲・長	口：浮線文③、ミガキ	ミガキ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄褐色	口	口	
840	VI-18C10・25	SD1420-6a・S1	浅鉢	C1	f1		(21.0)		0.063	金・雲・長	口：浮線文（浮）、ナデ	口：肥厚・平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色			
841	VI-17D19・20・22	SD1420-6a・S1	浅鉢	C2b			(26.0)		0.188	雲・長	口：縄文R+変形工字文	口：肥厚・平行沈線文	7.5YR灰褐色	7.5YR褐灰色			外面摩滅
842	VI-18C19	SD1420-6a・S1	浅鉢	C6			(26.8)		0.063	金・雲・長	山形1、口：回字状文③、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口	口	
843	S1-17B20,VI-17B25	SD1420-6a・S1	浅鉢	D8		8.0	18.6	7.0	0.563	金・雲・長	口：平行沈線文、ミガキ	ナデ・ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	全体	全体	1.12ℓ
844	VI-18D2・9	SD1420-6a・S1	浅鉢	G2b			18.2		0.188	雲・長	端：沈線文、口：工字文、ミガキ	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口体上	口体上	内外面赤彩
845	SD1420-6a-19D11	SD1420-6a・S1	浅鉢	C2b			(14.0)		0.063	金・雲・長	口：工字文	ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR灰褐色			外面赤彩
846	VI-19C24・20C11・13・19・20D2	SD1420-6a・S1	浅鉢	G5b				5.0	0.000	金・雲・長	口：変形工字文、体：縦位沈線文4単位・縄文LR、底：平行沈線文	ミガキ	2.5Y暗灰黄色	2.5Y暗灰黄色	体上下	体上下	外面口縁赤彩
847	VI-18A21・18C10・20・19C12・16・17	SD1420-6a・S1	浅鉢	H4a			28.0		0.250	金・雲・長	山形1・2、端：沈線文、 口：変形工字文③、ミガキ	口：肥厚・平行沈線文	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色			内外面口縁赤彩
848	VI-18D12	SD1420-6a・S1	浅鉢	H4a			(29.7)		0.063	海骨・英・雲・長	山形1、口：変形工字文②、ミガキ	口：突帯状・平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄褐色	口	口	
849	VI-17D4	SD1420-6a・S1	浅鉢	H4a			(18.0)		0.125	海骨・雲・砂粒少ない	口：変形工字文③、ミガキ	口：突帯状・平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口	口	外面赤彩
850	VI-19B23	SD1420-6a・S1	浅鉢	H5b			(29.4)		0.063	海骨・英・雲	端：沈線、口：変形工字文④、ミガキ	口：肥厚・平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口	口	
851	S1-17E2,VI-16D22・16E14・17D16・25・18D16	SD1420-6a・S1	浅鉢	G5b			23.6		0.688	海骨・雲	山形1、端：沈線文、 口：変形工字文④、ミガキ	口：肥厚・平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YR褐灰色			
852	VI-19B21	SD1420-6a・S1	浅鉢	H5b			(18.0)		0.125	海骨・雲	口：変形工字文、ミガキ	口：肥厚、平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YR黒褐色	口	口	
853	VI-18D22	SD1420-6a・S1	浅鉢	H5b			(21.4)		0.063	海骨・雲	端：沈線文、口：変形工字文・ミガキ	口：平行沈線文・ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口		内外面赤彩
854	VI-18C8	SD1420-6a・S1	浅鉢	H5b			(24.0)		0.125	海骨・雲・砂粒少ない	山形1、端：沈線文、 口：変形工字文③、ミガキ	口：突帯状・平行沈線文・ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口	口	
855	VI-18D14	SD1420-6a・S1	台付浅鉢					8.0	0.000	海骨・金・雲・長	台：平行沈線文（沈）、ナデ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色	台		
856	VI-19C5	SD1420-6a・S1	鉢	F			?		?	雲・長	端：沈線、口：縄文LR・無文帯、ミガキ、 体上：縄文LR+斜線文	口：肥厚・平行沈線文、ミガキ	7.5YR褐灰色	7.5YR褐灰色	口体上	口	
857	VI-17D15	SD1420-6a・S1	台付浅鉢						0.000	金・雲・長	体下：縄文LR・平行沈線文	ナデ・ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YR黒褐色	体下	体下	
858	VI-20B22・23	SD1420-6a・S1	鉢	C		12.2	15.1	7.4	0.625	雲・長	山形1、口：縄文LRヨコ、 頸：丁寧なナデ、体：縄文LRタテ	ナデ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口～底濃い	口～底	1.29ℓ
859	VI-18C3・4	SD1420-6a・S1	鉢	F		17.2	28.3	9.5	0.500	金・雲・長	口：平行沈線文、体：縄文LR、 面：木葉痕	丁寧なナデ	10YR灰褐色	10YRにぶい黄褐色	口～底	体上下	5.73ℓ

土器観察表（23）

報告№	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
860	Ⅵ-18C5·9·10·19C1·10	SD1420-6a·S1	甕	A3a			20.4		0.438	雲·長	山形1、口：平行沈線文④、 頸：ミガキヨコ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口頸	口頸	焼成後穿孔
861	Ⅵ-20B20	SD1420-6a·S1	甕	C1c			?		?	雲·長	口：平行沈線文、頸：弧状沈線文、ミガキ	口：平行沈線文2条、ミガキ	2.5Y黄灰色	2.5Y黄灰色	口		
862	Ⅵ-19C22	SD1420-6a·S1	甕	C1b			?		?	雲·長	口頸：縄文R+綾杉文	口：平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口頸	口頸	
863	SD1420-6a-16F9,同2a-16F10·14·15,Ⅵ-16F2·3·8	SD1420-6a·S1	甕	C3d			25.0		0.250	雲·長	口：平行沈線文④、頸：ミガキ	ナデ·ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色		口	
864	Ⅵ-19C8·12·15·17～20·23·24·20C21	SD1420-6a·S1	甕	C3b			(27.6)		0.063	金·雲·長	口：平行沈線文、頸：ミガキ、 肩：縄文L+三角形集合沈線文	ナデ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口～肩	肩	
865	Ⅵ-15C10·17D19·20·24·25·17E2	SD1420-6a·S1	甕	C3d			(14.0)		0.063	雲·長	口：縄文LR+浮線文（浮）、頸：ナデ、 肩：縄文LR+平行沈線文	ナデ·ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～肩	口～体上	
866	S1-19B23,Ⅵ-18B1·19B4·13·16～18·20～23·25	SD1420-6a·S1	甕	D2e			33.0	10.2	0.438	雲·長	山形1、口肩：縄文R、頸肩：条痕文、 底：ナデ斜め、面：ササ痕？	ナデ	10YR黒色	10YRにぶい黄褐色	口～体上濃い	体下濃い	19.85ℓ
867	SD1420-6a·S1-19B24,Ⅵ-18C4·18·19B17·18·20·24·19C4·5	SD1420-6a·S1	甕	D2e			28.4		0.375	金·雲·長	口～肩：結節縄文R	ナデ	10YR灰黄色	10YRにぶい黄橙色	口～頸		
868	SD1420-6a·2b-16F10,同2a-16F10·14·15,同1a-16F13,同B8-16F22,Ⅵ-16F3～5·9·10·22	SD1420-6a·S1	甕	D3b			29.0		0.375	雲·長	口：指頭圧痕状のくぼみ、 頸：丁寧なナデ、肩：三角形集合沈線文	丁寧なナデ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口～体上濃い		
869	Ⅵ-19B16	SD1420-6a·S1	甕	D3d			(16.8)		0.063	雲·長	口：平行沈線文④、頸：ミガキヨコ、 肩：結節縄文LR·縄文LR·条痕文	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口頸	口～肩	
870	S2-16C2,S1-16C2·17D24,Ⅵ-16C2·17E7·11	SD1420-6a·S1	甕	D3d			17.4		0.438	金·雲·長	口：縄文R+平行沈線文、頸：ミガキヨコ、肩：縄文R	口：平行沈線文2条、ミガキ	7.5YR褐灰色	10YR灰黄褐色	口～肩		
871	S4-17D19,Ⅵ-17D15·18～20·23·25	SD1420-6a·S1	甕	E2e			34.0		0.625	雲·長	口：結節縄文R、頸肩：縄文R、 体：条痕文（7㎜·5条）	ナデ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄褐色	口～体上		
872	S4-16C6,Ⅵ-16C4·17D5	SD1420-6a·S1	甕	E3a			(13.6)		0.125	海骨·雲·砂粒少ない	口：変形工字文（沈）、頸：ナデ·ミガキ、 肩：平行沈線文	口：平行沈線文	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄褐色			
873	SD1420-6a·1a-22B1	SD1420-6a·S1	甕	E3b			22.0		0.250	金·雲·長	口：条痕文+平行沈線文、頸：ミガキ、 肩：綾杉文	ナデ	10YR黒色	10YRにぶい黄橙色	口～肩濃い	口～肩	
874	Ⅵ-17C10·18C7·9·10·20	SD1420-6a·S1	甕	E3b					0.000	金·雲·長	頸：ナデヨコ、 肩：縄文LR+三角形集合沈線文	ナデ	10YR褐灰色	10YR褐黄灰色	頸肩濃い	頸肩	
875	Ⅵ-19C6·7·14·16	SD1420-6a·S1	甕	F2d					0.000	英·雲·長	頸～体上：縄文LR、体上：平行沈線文	ナデ·ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	頸～体上	頸～体上	
876	SD1420-21c-21D24·21E8,Ⅵ-20B17	SD1420-6a·S1	甕·深鉢					10.4	0.000	雲·長	体：縄文LR、底：ナデヨコ、 面：網代痕	ナデ·ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	体上底	体下バンド状	
877	Ⅵ-18D20	SD1420-6a·S1	深鉢	A7b			(39.4)		0.063	雲·長	口：縄文R+結節縄文R	ナデ·ミガキ	10YR黒色	10YR褐灰色	口体上濃い	口体上	
878	S1-17D25,Ⅵ-17B20	SD1420-6a·S1	深鉢	B7b			(28.4)		0.125	金·雲·長	口：縄文L+結節縄文L	ナデ·ミガキ	10YR褐灰色	10YR褐灰色	口	口	
879	SD1420-1a·6a-20D8	SD1420-6a·S1	深鉢	C2			(14.0)		0.125	雲·長	口：縄文L+工字文①	ミガキ	7.5YR黒色	7.5YR黒褐色	口	口	
880	S3-17B5,Ⅵ-17B7·11·25·18C4·7～10·21·19B22·19C6	SD1420-6a·S1	深鉢	C3			(27.0)		0.188	金·雲·長	口：縄文LR+三角形集合沈線文	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口濃い		
881	Ⅵ-18C24·19C8·12～14·16～18	SD1420-6a·S1	深鉢	C3			27.8		0.500	金·雲·長	山形1·2、口：縄文R+横位三角形沈線文、体：縄文R	口：平行沈線文、ナデ	7.5YR灰褐色	7.5YR灰褐色	口体上	口	
882	Ⅵ-18C4·10·14·15·18·18D3·7·19C6·11·12	SD1420-6a·S1	深鉢	C3			39.0		0.875	雲·長	山形1、口：綾杉文、体：縄文LR	ナデ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄橙色	口～体上		
883	Ⅵ-18C4·10	SD1420-6a·S1	深鉢	C3			?		?	金·雲·長	口：縄文LR+三角形集合沈線文·刺突文	ナデ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄褐色	口体上		
884	19B14	SD1420-6a·S1	深鉢	C6a			(21.7)		0.063	雲·長	口：縄文LR+平行沈線文	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口体上	口体上	カクラン
885	Ⅵ-18D2·9	SD1420-6a·S1	深鉢	C7b			(17.0)		0.063	雲·長	口：撚糸文Rタテ+結節縄文R	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口体上		
886	Ⅵ-20C11	SD1420-6a·S1	深鉢	D6e		9.2	4.0	4.5	0.875	雲·長	口～体：平行沈線文+縦位沈線文6単位	ナデ	2.5Y暗灰黄色·にぶい黄色	7.5YR灰褐色	口～底		内外面赤彩、ベンガラ容器？、0.10ℓ
887	Ⅵ-20C1	SD1420-6a·S1	壺	A			(6.4)		0.125	金·雲·長	口：平行沈線文③、頸：ミガキヨコ	ナデ·ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口頸	口	
888	Ⅵ-20D8	SD1420-6a·S1	壺	B					0.000	金·雲·長	肩：縄文LR+綾杉文·反転部あり	ナデ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄褐色	肩		
889	Ⅵ-18D15·19D4	SD1420-6a·S1	壺	B					0.000	金·雲·長	肩：匹字文·工字文	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	肩濃い		
890	Ⅵ-18B19	SD1420-6a·S1	壺	H				1.0	0.000	雲·長	肩：工字文④、ナデ	ナデ	2.5Yにぶい黄色	2.5Yにぶい黄色			
891	SD1420-21a-21D10,同4a-20B12,同1a-20C13·17·18,Ⅵ-20C12	SD1420-4～3	浅鉢	C1	b3	10.0	24.3	6.6	0.688	海骨	山形1·2、口：浮線文（浮）、 体：ミガキ	口：肥厚·平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～底·面	口～底·面	内外面口縁赤彩、1.88ℓ
892	SC1492-19B20·25	SD1420-4～3	浅鉢	C1	e2		(16.0)		0.188	金·雲·長	山形2、口：浮線文（浮）	口：肥厚·平行沈線文、ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR褐灰色	口	口	内外面赤彩
893	SD1420-3a·Ⅵ-20B4	SD1420-4～3	浅鉢	C1	c2		(15.0)		0.125	雲·長	口：変形工字文（浮）·縄文LR	口：肥厚、ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口濃い	口濃い	
894	SC1598-20B10·21B2·6·7·10	SD1420-4～3	浅鉢	C1	h			8.2	0.000	雲·長	口：Z字状の浮線文④、ミガキ	丁寧なナデ	10YRにぶい黄褐色	7.5YRにぶい橙色	口～底	口～底	
895	SD1420-3c-20C9,同2b-23C4,同2d·1a-23B17,同2a-23B12,同1·B7-23B24,同B9-23B20·24	SD1420-4～3	浅鉢	C1	h		28.0		0.375	海骨·金·雲	口：浮線文③·交点突起状	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口	口	外面赤彩
896	SC1486-20B16·17,SD1420-3c-20C4,Ⅵ-20B17·21	SD1420-4～3	浅鉢	C3			(10.8)		0.125	雲·長	口：匹字文③、体：ミガキ	ミガキ	2.5Y黒褐色	2.5Y黄灰色	口体上		
897	SD1420-4a-20C1,同3a-20C3,同3c-20C4,同2c-20C5,同2a-20C9,Ⅵ-19B23·20B15·21	SD1420-4～3	浅鉢	C3			26.0		0.313	金·雲·長	山形1、口：縄文LR+匹字文③	ミガキ	7.5YRにぶい褐色	7.5YRにぶい褐色	口	口	

土器観察表（24）

報告No.	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
898	SD1420-3c-20C3,同3a-20C4	SD1420-4～3	浅鉢	C4b			20.9		0.750	金･雲･長	口：変形工字文、ミガキ	口：肥厚、ミガキ	10YR 黒褐色	10YR灰黄褐色	口～体上	口～体上	
899	SD1420-3a-20B24･20C3, 同2c-20C15	SD1420-4～3	浅鉢	C2b			16.0		0.250	海骨･雲･長	口：楕円文、ミガキ	口：肥厚、ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR灰褐色	口	口	
900	SD1420-4a-20C6	SD1420-4～3	浅鉢	C6			(21.0)		0.188	雲･長	口：楕円文	ナデ	10YR褐灰色	10YR褐灰色	口	口	外面赤彩
901	SC1486-20B17,SD1420-6a･4a･ Ⅵ-20B17,SD1420-1-20B17･ 24B23、20B15	SD1420-4～3	浅鉢	E2a			15.8		0.500	金･雲･長	口：入組工字文②、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR褐灰色	7.5YR黒褐色	口体上	口体上	内外面赤彩
902	SC1486-20C2,SC1493-19B18, SD1420-6a-20c2,同3a-20B23,S1-19B24, Ⅵ-19B13･19･23～25･20C2,19c2	SD1420-4～3	浅鉢	H5a			21.0		0.688	英･雲･白	山形2、端：柱状突起･沈線文、 口：変形工字文、体：縄文LR	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	2.5Yにぶい黄色	2.5Y黄褐色	口～体下濃い	口～体上濃い	1.51ℓ
903	SC1486･SD1420-4a-20c2,SD1420- 3a-20B10･20C3･7･8,Ⅵ-19B20･23 ～25･19C4･5･20C1～3	SD1420-4～3	浅鉢	H5b			31.6		0.500	英･海骨･ 雲･白	山形2、端：沈線文、 口：変形工字文、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄褐色	口～体下濃い	口～体上濃い	胎土分析、内面漆か？、4.71ℓ
904	SD1420-3c-20C3,同3a-20B18･23	SD1420-4～3	鉢	C	b3		22.8	7.6	0.250	金･雲･長	口：平行沈線文②、頸：ミガキ、 肩：浮線文（浮）	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～体上	肩	外面赤彩、3.78ℓ
905	SD1420-4a-20B23,同3c-20C8, 同3a-20C8･21B14,同2C-20C9, 同2a-20C9･13, 同1a-20C8･13･21B11･12	SD1420-4～3	鉢	C		21.6	34.2	8.0	0.750	雲･長	ゆるい波状口縁、口～体：縄文R、 面：ケズリ	ナデ+ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～体厚さ1 ～3㎜と厚くススだけでなく吹きこぼれと見られる	全体にありコゲは体上で厚い	ススのため文様見えない、11.57ℓ
906	SC1486-20B22･20C2,SD1420-6a- 19B25,同3c-20C3･4,同3a-20B23･ 20C3,同2a-20C4･5	SD1420-4～3	甕	C3c			16.0		0.688	金･雲･長	口：縄文L+平行沈線文、 頸：ミガキ、肩：工字文･縄文L+綾杉文	口：平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR褐灰色	口～肩	口～肩	
907	SD1420-4a-18E3	SD1420-4～3	甕	C3b			(21.2)		0.125	雲･長	山形1、口：縄文LR+平行沈線文、 頸：ミガキヨコ、 肩：縄文LR+三角形集合沈線文	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～肩	口～肩	
908	SD1420-3a-20C3･8	SD1420-4～3	甕	C3d			16.0		0.313	雲･長	山形1、口：縄文R+平行沈線文③、 頸：ミガキ、肩：縄文R	口：平行沈線文、ナデ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口～肩濃い	口～肩	
909	SC1486-19B10･20B5･6･11, SD1420-3c-19B5･10,Ⅵ-19B10	SD1420-4～3	甕	C3d			(29.0)		0.125	金･雲･長	山形2、口：平行沈線文③、頸：ミガキ、 肩体：条痕文+縄文L	ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～体上		
910	SC1486-20B6･11･17	SD1420-4～3	甕	C3d			41.2		0.688	金･雲･長	山形2、口：縄文RL+平行沈線文、 頸：ナデ･ミガキ、 肩：条痕文+結節縄文R･平行沈線文	口：平行沈線文、丁寧なナデ	7.5YR黒褐色	7.5YR灰褐色	口～肩	口	
911	SD1420-3a-20B23･20C4,Ⅵ-20B23	SD1420-4～3	甕	D3d			(30.8)		0.125	金･雲･長	山形1、口：縄文RL+平行沈線文、頸： 丁寧なナデ、肩：縄文RL+平行沈線文	ナデ･ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR灰褐色	口～体上	口体上	
912	SD1420-3a･1a-19D11,Ⅵ-18D14･ 21･19D11	SD1420-4～3	甕	D3b			19.6		0.313	雲･長	山形1、口：縄文LR+平行沈線文、頸： ミガキヨコ、肩：綾杉文、体：縄文LR	ナデ･ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～体上濃い	口～体上濃い	
913	SC1598-20B10	SD1420-4～3	甕	E3a			?		?	金･雲･長	口：肥厚･縄文LR、 頸：縄文LR+工字文（沈）、ナデ	ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄褐色			
914	SD1420-3a-20C3,同3c-20C10, 同2c-20c5･10	SD1420-4～3	甕	E3b		(15.1)	11.4	6.0	0.250	雲･長	山形1、口：平行沈線文、頸：ミガキ、 肩：変形工字文風綾杉文、体：縄文LR、 底：ミガキヨコ	ミガキ	5YRにぶい赤褐色	5YRにぶい橙色			0.86ℓ
915	SD1420-4a-20B12,同3a-20C3, Ⅵ-18D25･19B14･16･20B12･22	SD1420-4～3	甕	E3d			22.6		0.750	雲･長	山形1、口：平行沈線文③、 頸：ミガキ、肩：条痕文	ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR灰褐色	口～肩	口～肩	
916	SC1486-19B10･20B6	SD1420-4～3	甕	E3d			31.0		0.250	金･雲･長	山形2、口：縄文LL+平行沈線文③、 頸：ナデ･ミガキ	ナデ･ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
917	SD1420-3c-20C4,同3a-20B23, Ⅵ-20B15･19･23･20C4	SD1420-4～3	甕	E3d			26.0		0.250	金･雲･長	口：縄文RL+平行沈線文、 頸：丁寧なナデ	丁寧なナデ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口頸	口	
918	SC1492-19B20,SC1493-1-19B18, 同4-19B23,S1-19B13･19･25, Ⅵ-19B13･24･25	SD1420-4～3	甕	E3d			24.0		0.625	金･雲･長	山形2、口：縄文R+平行沈線文、 頸：ナデ、肩：縄文R	口：平行沈線文2条、ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～肩	口～肩	
919	SD1420-4a-20C6･7･12,同3c-20C7, 同3a-20C6･7･12,同1a-20C17	SD1420-4～3	甕	E3d			25.0		0.375	雲･長	口：縄文R+平行沈線文、 頸：ミガキ、肩：縄文R	ナデ･ミガキ	7.5Y黒色	7.5YRにぶい褐色	口～肩濃い		
920	SD1420-4a･1a･S1-18E2, 同B5-19D24･25,Ⅵ-18E1･2･8	SD1420-4～3	甕	F2b			(31.2)		0.125	金･雲･長	山形1、楕円状突起、口：平行沈線文、 頸：縄文L、肩：綾杉文、体：縄文L	丁寧なナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
921	SC1493･SD1420-6a･Ⅵ-19B20	SD1420-4～3	甕						0.000	金･雲･長	肩：条痕文+縄文R	丁寧なナデ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄褐色	肩体上濃い	体下濃い	
922	SC1598-21B1･2,SC1642-21B7･ 11･12･16,SD1420-21b-20B16, 同2c-20B20･21B13･18, 同2a-21B13･14,同1d-21B13	SD1420-4～3	深鉢	A7b			33.5		0.688	金･雲･長	口：条痕文（1㎝）+結節縄文RL	ナデ･ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口体上濃い	口体上	
923	SC1486･Ⅵ-20B12, SD1420-4a-20B12･17	SD1420-4～3	深鉢	B7a			34.6		0.313	雲･長	口：縄文LR	ナデ	7.5YR黒褐色	7.5YR灰褐色	口	口	
924	SD1420-4a-20B16･20C1, 同3c-20C2･6,同3a-20C3, 同2c-20C9･10,同2a-20C9･13･19, 同1a-20C4･12～14･17	SD1420-4～3	深鉢	B7a			28.0		0.375	雲･長	口：ナデ、体：縄文LR	ナデ･ミガキ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄橙色	口	口	

土器観察表（25）

報告No.	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
925	SD1420-21a-23D5,同3c-20B9・23・24,同3a-20B23,同2c-20C9,S1-19B19・24,Ⅵ-19C19	SD1420-4～3	深鉢	C6d			?		?	金・雲・長	山形1、口：条痕文タテ+平行沈線文	ナデ・ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色		口頸	
926	SD1420-4a-20B4	SD1420-4～3	深鉢	C3					0.000	雲・長	体：縄文R+綾杉文、ミガキタテ	ナデ・ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	体下	体下	
927	SC1486-20B21・22・20C2,SD1420-4a-20B21,同3a-20C6,Ⅵ-19C10・20C1～3・7	SD1420-4～3	深鉢	B7b			35.6		0.563	雲・長	口：結節縄文LR、ミガキヨコ 体：縄文LR	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口体上	口体上	
928	SD1420-3c-20B25,同2c-20B20	SD1420-4～3	壺	A	b3		(13.0)		0.188	金・雲・長	口：浮線文（浮）、頸：丁寧なナデ	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
929	SC1486-20B6・11	SD1420-4～3	壺?	B				7.8	0.000	雲・長	肩～底：ミガキ	ケズリ・ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	肩～底		
930	SC1560-6-20B9・24,SC1586-20B24,SC1587-20B25,SD1420-2a-21B21,同1c-21B16	SD1420-2	浅鉢	B2a			19.4		0.250	海骨・金・雲・白	山形1、口：縄文LR+工字文③、体：ミガキ	口：肥厚・平行沈線文、ミガキ	2.5Y暗灰黄色	2.5Y暗灰黄色	口体上下	口体上下	外面口縁赤彩
931	SC1517-19D9	SD1420-2	浅鉢	C1	a4		(30.0)		0.125	雲・長	口：浮線文③、ミガキ	口：肥厚・平行沈線文、ミガキ	7.5YR灰褐色	10YR灰黄褐色	体上		
932	SX1596-2c-21C17	SD1420-2	浅鉢	C1	d2		(19.0)		0.125	雲・長	口：浮線文③、丁寧なナデ	口：突帯状・平行沈線文、丁寧なナデ	10YR黒色	10YR黒色	口	口	内外面赤彩
933	SD1420-2b'-21C2	SD1420-2	浅鉢	C1	d2		?		?	金・雲・長	口：浮線文③、ミガキ	口：肥厚・平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口		内外面赤彩
934	SX1583-20D4,SD1420-2e-21C15,同2c-22D1,同2a-21C14	SD1420-2	浅鉢	C1	f1		22.0		0.250	雲・長	口：浮線文（浮）、ミガキ	口：突帯状・平行沈線文、ミガキ	7.5YR黒色	7.5YR黒褐色	口	口	
935	SD1420-2b・2a-17F8	SD1420-2	浅鉢	C1	g2		26.0		0.250	金・雲・長	口：浮線文④、ミガキ	口：肥厚・平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口	口	
936	SX2184-17F1・3・4・6,S2-9E2	SD1420-2	浅鉢	C1	g2		(24.0)		0.125	海骨・雲・砂粒少ない	口：浮線文（浮）・突起大	ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口	口	外面赤彩
937	SD1420-2-18D22	SD1420-2	浅鉢	C2b			(13.7)		0.063	金・雲・長	山形1、口：工字文、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口		外面赤彩
938	SD1420-2a-20D16	SD1420-2	浅鉢	C2b			?		?	雲・長	端：沈線文、 口：工字文（沈）、ミガキ著しい	ミガキ	7.5YR黒色	7.5YR黒褐色			外面赤彩光沢あり
939	SD1420-2a-22B16	SD1420-2	浅鉢	C2b			(22.0)		0.125	雲・長	楕円状突起、口：工字文（沈）、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～体下	口～体下	2.91ℓ
940	SD1420-21a-21D9・22D12,同2a-20D10	SD1420-2	浅鉢	C3			19.8		0.375	金・雲・長	山形1、口：匹字文（浮）、体：縄文LR	ミガキ	7.5YR黒色	7.5YR黒褐色	口体上濃い	口体上	
941	SD1420-21a-21D9,同2b'・2b-22B22	SD1420-2	鉢	E				6.6	0.000	金・雲・長	肩：刺突列点文、体：ケズリ・ミガキ	ケズリ・ナデ	10YR黒褐色	10YR褐灰色	肩～体下	肩面	
942	SC1517-18D24・25・19D17,SD1420-3a-18E4	SD1420-2	浅鉢	C4b			16.0		0.250	海骨・雲・砂粒少ない	山形1、口：工字文③、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ著しい	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色			
943	SX2185-17F9,SD1420-21a-21D10,Ⅵ-16C3	SD1420-2	浅鉢	C4b			21.0		0.250	雲・長	山形1、口：弧状沈線文・変形工字文（沈）、ミガキ	口：肥厚・平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～体上	口～体上	
944	SD1420-2a・同1c-21B3,S1～Ⅵ・Ⅶ-21B4	SD1420-2	浅鉢	H5b			(22.0)		0.125	英・海骨・金・雲	口：変形工字文④、ミガキ、体：縄文LR	口：肥厚・平行沈線文、ミガキ	2.5Yにぶい黄色	2.5Yにぶい黄色	口～体上濃い	口	
945	SX1685-22B18,SD1420-21d-27C17	SD1420-2	浅鉢	H5b			(16.0)		0.125	海骨・雲・砂粒少ない	山形1、口：変形工字文③、研磨	口：突帯状・平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口	口	
946	SD1420-2a-21B7・11・16,同1a-21B12・17,同1-21B11・16・17・24B11	SD1420-2	浅鉢	H5b			25.5		0.375	英・海骨・金・雲	口：変形工字文、体：縄文RL	口：突帯状・平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口～体	口	外面赤彩、2.44ℓ
947	SD1420-2a・1a-22B22,同1d-22B6,同B9・B8-22B21,22B16	SD1420-2	甕	C3a	h	12.7	13.9	6.9	0.563	雲・長	口：平行沈線文・縄文LR、頸：ナデ、肩：浮線文④、体：縄文LR、底：ナデヨコ、面：網代痕	ナデ	2.5Yにぶい黄色	2.5Y黒褐色	口～底・面	口～底・面	1.01ℓ
948	SC1550-18E10,SX1528-3-20D16・21,同1-18D25,SD1420-3c-20C4	SD1420-2	甕	C3c					0.000	金・雲・長	頸：ミガキ、 肩：匹字文帯2段、縄文LR	ナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	頸～体上濃い	体下濃い	
949	SC1517-19D7,SD1420-1a-19C3・4・19D8	SD1420-2	甕	C3d			(21.6)		0.125	雲・長	山形2、口：平行沈線文・刺突列点文・縄文L、頸：ミガキヨコ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口頸	口頸	
950	SX2184-1-16F10・17F1～3,SX2185-1-17F4,SX1987-17F6,SD1420-2a-17F7	SD1420-2	甕	C3d			16.6		0.563	金・雲・長	口：平行沈線文③、頸：ナデヨコ、肩：平行沈線文、体：ミガキ	ナデ・ミガキ	2.5Y黒色	2.5Yにぶい黄色	口～体上濃い	口～体上	
951	SC1517-18D20・24・25,SD1420-6a-18D13・17,同1a-18D20・19D16	SD1420-2	甕	C3d		18.7	17.0		0.313	雲・長	山形2、口：条痕文+平行沈線文、頸：ナデヨコ、肩：平行沈線文・列点文、体：条痕文タテ、底：平行沈線文	口：平行沈線文、ナデ・ミガキ	2.5Y灰黄色 10YR黒色	2.5Y黄褐色 2.5Y黒色	口～体上濃い	肩～体下底	2.33ℓ
952	SD1420-2a-20C14,同1a-20C19・23～25	SD1420-2	甕	C3d			39.4		0.250	雲・長	口：肥厚・平行沈線文③、頸：ミガキ、肩：平行沈線文、 体上：条痕文（7㎜・4条）+縄文LR	丁寧なナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～体上	口～体上	
953	SD1420-2c-21C1	SD1420-2	甕	C3e			(17.0)		0.125	雲・長	口：縄文LR、頸：ナデ、肩体：縄文LR	ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口～体上濃い	口～体上	
954	SC1517-19D4・8・9・12,SD1420-11a-18D9,同6a-18D4,Ⅵ-18D4・19C6	SD1420-2	甕	C3e			20.0		0.500	金・雲・長	口：肥厚・条痕文（細密）、頸：ナデ、肩：条痕文	ケズリ・ナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～肩濃い	口肩	
955	SX1583-20D4,SD1420-2c-21C21,同2a-20C18・25,同1a-20C24	SD1420-2	甕	C3e			(31.8)		0.125	海骨・金・雲・長	山形2、口：縄文L、頸：ナデ・ミガキ、肩：結節縄文L	ナデ・ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	肩	肩	
956	SX2184-V1-17F1	SD1420-2	甕	D3d			(12.0)		0.125	雲・長	口：撚糸文R+平行沈線文④、頸：ミガキ	頸：ナデ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色			

土器観察表（26）

報告No.	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
957	SC1550-18E10,SC1600-21C5, SD1420-21c-21D9,同3a-18E10, 同2b-21C8,同2a-21C14,同1b-22C1, 同1a-19D23・22C1	SD1420-2	甕	D3d			(20.0)		0.188	雲・長	口：縄文LR+平行沈線文、 頸：ミガキ、 肩：平行沈線文・縄文LR・列点文	ナデ・ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口～体上	頸～体上濃い	
958	SC1517-19D4,SD1420-21d-25D8, 同21c-22E2	SD1420-2	甕	D3e			26.6		0.250	金・雲・長	口：複合口縁・条痕文ヨコ、頸：ナデ、 肩体：条痕文タテ	ナデヨコ	7.5YR黒色	7.5YR黒褐色	口～肩濃い	口～肩	
959	SC1517-19D8・10,SX1583-20D9, SD1420-21a-22D10・14,同2b・同1d- 21B23,同2a-21C5,上-21C3～5	SD1420-2	甕	E1b		10.8	10.6	7.2	1.000	海骨・雲	山形2、頸：三角形集合沈線文、 口～体：縄文R、面：ササ痕	ナデ・ミガキ	2.5Y黒褐色	2.5Y黒色	口～底濃い、 面、光沢をもつ	口～底濃い	0.50ℓ
960	SX1583-20C25・20D1・5・13・21D1, SD1420-11b-20D1	SD1420-2	甕	E3d			35.1		0.438	金・雲・長	山形1、口：縄文L・平行沈線文、 頸：ナデ+ミガキ、肩：条痕文+縄文L+ 結節縄文L、体：条痕文+縄文L	丁寧なナデ	2.5Y黄灰色	2.5Y灰黄色	口～体下濃い	口～体下	23.15ℓ
961	SX1583-20D10,SD1420-21c-21E8	SD1420-2	甕	E3d			(14.0)		0.125	雲・長	山形1、口：条痕文+平行沈線文、 頸：ミガキ、肩：条痕文+結節縄文LR、 体：条痕文	口：平行沈線文、丁寧なナデ	10YR黒色	10YR黒色	口～体下濃い	口～体上濃い	
962	SX1596-2d-21C18,SD1420-2b- 23B14,Ⅵ-19C3	SD1420-2	甕	E3d			(11.6)		0.063	金・雲・長	口：縄文R+平行沈線文・円形刺突文・押 し引き文	ナデ	10YR黒色	10YR灰黄褐色	口濃い	口	
963	SX2184-17F3,SX2185-17F8・9, SD1420-2b・2a-17F8	SD1420-2	甕	E3d			(23.2)		0.188	雲・長	口：撚糸文R+平行沈線文、 頸：ミガキヨコ	ミガキ	10YR褐灰色	10YR褐灰色	口頸	口頸	
964	SX2185-17F17	SD1420-2	甕	F3d			(13.8)		0.063	雲・長	山形1、口：縄文LR・平行沈線文、 頸：ミガキ、肩：条痕文+結節縄文LR、 体：条痕文	口：平行沈線文、ナデ・ミガキ	2.5Y黒褐色	2.5Y黒褐色	口～体上濃い	口～底	1.01ℓ
965	SC1642-21B16・21,SD1420-2a- 21B19・21	SD1420-2	深鉢	B7b			30.0		0.813	金・雲・長	山形1、口体：結節縄文LR	ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～体上濃い	口～体上	
966	SC1517-19D4・9,Ⅵ-18C8・9・12・22	SD1420-2	深鉢	B7b			27.0		0.438	金・雲・長	山形1、口：条痕文+結節縄文R、 体：条痕文	ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口体上濃い	口体上	
967	SC1642-21B6・7・11, SD1420-3a-20B15・20C3, 同1C-20C8,同1a-21B12	SD1420-2	深鉢	C2			(16.0)		0.188	雲・長	山形1、口：条痕文+縄文LR・匹字文、 体：条痕文	ナデ・ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～体上	体上	
968	SX2185-17F8,SD1420-2c-17F7	SD1420-2	深鉢	C3			(13.8)		0.125	雲・長	口：縄文LR+綾杉文、体：縄文LR	ナデ	10YR黒色	10YR黒色	口体上濃い	口体上濃い	
969	SD1420-2c-21B3	SD1420-2	深鉢	C3			?		?	雲・長	山形1、口：縄文R+三角形集合沈線文	ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口	口	
970	SD1420-2c-17F6	SD1420-2	深鉢	C6a		12.2	(15.0)	(7.0)	0.188	雲・長	口：縄文R+平行沈線文、 体：縄文R、底：ケズリヨコ	ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～底・面	口～底	0.90ℓ
971	SD1420-21a-22D9・13・23D6, 同2e-20B17,同2c-21C16	SD1420-2	深鉢	C7b			23.0		0.250	金・雲・長	口：結節縄文LR	ナデ・ミガキ	10YR褐灰色	10YRにぶい黄橙色	口		
972	SC1517-19D4・9,Ⅵ-19C5	SD1420-2	壺	A			11.5		0.250	金・雲・長	山形1、口：平行沈線文、頸肩境に平行 沈線文、ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	10YR黒褐色	10YRにぶい灰黄褐 色	口～肩	口	
973	SX1689-22C5,SD1420-2b'-22B22	SD1420-2	壺	A			13.5		0.313	金・雲・長	口：肥厚・縄文LR、頸：ナデ・ミガキ、 肩：結節縄文L	ナデ	2.5Y黄灰色	2.5Y浅黄色			
974	SC1642-21B22	SD1420-2	壺	A				5.6	0.000	雲	頸肩境に段あり、ミガキ	肩：指頭状ナデ痕、丁寧なナデ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄褐色	肩～体下	体下	
975	SD1420-2a-21B16	SD1420-2	壺	A	d1		(18.0)		0.125	金・雲・長	口：浮線文（浮）、頸：ミガキ	ミガキ	7.5YR褐灰色	7.5YR褐灰色			
976	SD1420-2d-21C6	SD1420-2	壺	H			1.5		1.000	雲・海骨	口：眼鏡状沈線、頸：ミガキ	ナデ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄橙色			内面赤彩
977	SD1420-21a-22D7,同2b'-22B12	SD1420-2	壺	F		(16.7)	(6.2)	5.0	0.188	金・雲・長	口：平行沈線文、頸肩境に段あり、 肩～体下：ミガキ、底：ケズリヨコ+ミ ガキ、面：網代痕	ナデ	10YRにぶい黄褐 色・黒色	10YR灰黄褐色	口～底	口～体上	
978	SX1583-20D5	SD1420-2	甕・深鉢					10.8	0.000	雲・長	底：縄文LR、面：木葉痕・葉を4枚重ね ている可能性あり	ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	底・面	底・面濃い	
979	SX1987-17F7	SD1420-1	浅鉢	C1	d6		(26.0)		0.063	雲・長	口：浮線文（浮）、ミガキ	口：肥厚、ミガキ	7.5YR黒色	7.5YR黒褐色	口～体上濃い	口～体上濃い	内外面黒漆？
980	SX1987-17F6	SD1420-1	浅鉢	C8			(11.5)		0.125	雲・長	口：平行沈線文④、ミガキ	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色			外面赤彩
981	SD1420-1a-19D22	SD1420-1	浅鉢	C4a					0.000	金・雲・長	口：変形工字文	ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄褐色	口	口	外面赤彩
982	SD1420-B8-20D1,同1a-20D3	SD1420-1	浅鉢	C4c			24.0		0.313	雲・長	口：変形工字文風（沈）、体：ミガキ	口：突帯状・平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR 黒褐色	口～体上濃い	口～体上濃い	内面漆？
983	SD1420-21a-22D15,同1a-17E25	SD1420-1	浅鉢	H5b					0.000	英・雲・長	口：変形工字文?、体：縄文LR、ミガキ	ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	体	体	
984	SD1420-1a-19D8	SD1420-1	浅鉢	H5b			?		?	海骨・雲	口：変形工字文、ミガキ	口：突帯状・平行沈線文、ミガキ	2.5Yにぶい黄色	2.5Yにぶい黄色	口	口	
985	SD1420-1c-22C13,Ⅵ-20B23	SD1420-1	鉢	C		11.2	(15.8)	6.6	0.063	金・雲・長	口：平行沈線文③、頸～体：縄文LR、 底：ナデヨコ	ナデ・ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～底	口～底	1.39ℓ
986	SD1420-1d・1b-21B25	SD1420-1	台付浅鉢					9.7	0.000	雲・長	ナデ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR褐灰色			
987	SX1986-17F7,SX1987-17F12	SD1420-1	甕	C3e			(32.8)		0.188	雲・長	口：複合口縁・縄文LR、頸：ミガキ、 肩：縄文LR・条痕文であるかも	条痕文風、ナデ+ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒色	口～肩濃い	口肩	
988	SD1420-1a-16F10,同B8-16F9・14・ 15	SD1420-1	甕	E3b			32.7		0.313	雲・長	山形2、口頸：条痕文タテ+三角形集合 沈線文	口：平行沈線文、ナデ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口頸	口	
989	SX1987-17F2	SD1420-1	甕	E3b			(14.0)		0.188	金・雲・長	山形1、口：縄文R+三角形集合沈線文、 頸：ミガキ、肩：縄文R	口：平行沈線文、ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～肩	口～肩	
990	SD1420-1a-20D3・4・6,Ⅵ-20D6・7	SD1420-1	甕	G3e			14.0		0.625	金・雲・長	口肩：縄文R、頸：ナデ	ナデ・ミガキ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄橙色	口～肩	口	

土器観察表（27）

報告No.	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
991	SC1587-17F6,SX1986-17F1･6, SD1420-2a-17F7･8,同1a-17F6･9･11	SD1420-1	甕	E3d		20.3	15.5	7.9	0.125	金･雲･長	山形1、口：平行沈線文、 口体：縄文R、頸：丁寧なナデヨコ、 肩：平行沈線文	丁寧なナデヨコ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色	口～底濃い、 体下に吹きこぼれのあとあり白くススが抜けている	体下濃い	2.09ℓ
992	SX1528-3-19E5･25	SD1420-B9～B7	浅鉢	F5b			(19.6)		0.188	金･雲･長	口頸：ナデ･ミガキヨコ、肩：変形工字文、体：縄文LRタテ+弧状沈線文･縦位沈線文	ナデ･ミガキ	7.5Y黒色	7.5Y灰褐色	口～体	口	外面赤彩
993	SX1528-3-19E3･7,SD1420-6a-18D19,Ⅵ-19D7･8	SD1420-B9～B7	鉢	G			(19.6)		0.063	雲･微細な白･硬質	端：沈線文、 体上：変形工字文･粘土瘤、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口	口	外面赤彩
994	SD1420-B7-21B14,Ⅵ-18B19･24･18C6	SD1420-B9～B7	甕	C3a			15.4		0.250	雲･長	山形1、口：平行沈線文④、肩：匹字文、 体：縄文LR	ナデ･ミガキ	10YR褐灰色	10YR黄褐色	口～体下	口～体上	外面摩滅、1.99ℓ
995	SX1986-17F6･12	SD1420-B9～B7	甕	E3d			11.6		0.375	海骨･雲･長	山形1、口：縄文RL+平行沈線文、 頸：ミガキ、肩：沈線文	口：平行沈線文、ナデ	7.5YR黒褐色	7.5YRにぶい褐色	口頸濃い		外面赤彩
996	SX1528-3-19D24･19E4･5,SD1420-21c-22D12	SD1420-B9～B7	深鉢	B3			26.6		0.313	金･雲･長	口：綾杉文･縄文LR、 体：条痕文（撚糸条痕文？）+縄文LR	ナデ･ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口体上濃い	口体上濃い	
997	SX1528-3-19E4･5	SD1420-B9～B7	深鉢	C6e			13.0		0.250	雲･長	山形1、口：平行沈線文、ミガキ	ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～底	口～底	
998	SK1751-5-24B16,SX1717-24B16･21,SD1420-2a-23B15･24B4･20, 同1a-23B17,同B9-24B6･24, 同B7-24B11･16･20･22, 同B5-24B16,23B9		甕	H3c		18.5	18.5	9.0	0.563	金･雲･長	山形1･2、楕円状突起、口：縄文R+平行沈線文④、頸：ミガキヨコ、肩：列点文･綾杉文･鋸歯状集合沈線文に刺突文充填、体：平行沈線文	ミガキ	2.5Y灰黄色	2.5Y暗灰黄色	口～肩	口体上～底	2.34ℓ
999	SD1420-2a-26B1	SD1420-2	浅鉢	B8			(16.2)		0.125	雲･長	楕円状突起、口：平行沈線文④、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR褐灰色	7.5YR褐灰色	口～体	口～体	
1000	SX1686･SD1420-2c-23B17, SD1420-2a-23B9･14,同B9-23B14	SD1420-2	浅鉢	C1	f1	7.6	17.5	6.1	0.438	海骨･金･雲	口：浮線文④、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色			胎土分析、内外面口縁赤彩、0.87ℓ
1001	SD1420-2a'-24B6	SD1420-2	浅鉢	C1	g2		(30.6)		0.063	雲･長	口：浮線文（浮）、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR灰褐色	口	口	
1002	SX1686-22C10,SX1688-22C9	SD1420-2	浅鉢	C2b			(20.0)		0.188	金･雲･長	口：平行沈線文、一部反転あり、ミガキ	口：突帯状･平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口濃い	口	
1003	SD1420-21a-23C21, 同2a･1･B9-24B23,同B7-24B13	SD1420-2	浅鉢	C3		8.0	17.0	9.6	0.250	金多い･雲･長	口：縄文LR+匹字文③、体：ミガキ、 面：ナデ	ナデ･ミガキ	2.5Y暗灰黄色	2.5Y灰黄色	口体		外面赤彩、1.18ℓ
1004	SD1420-2b-22C15,同2a-22C9･10	SD1420-2	浅鉢	C8			?		?	海骨･雲･砂粒少ない	口：平行沈線文（浮）、ミガキ著しい	ミガキ著しい	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色			
1005	SD1420-2b'･B9-23B18,同2a'･1a-23B8,同2a-23B12,同B7-23B13	SD1420-2	浅鉢	C6		10.3	20.0	5.4	0.563	英･雲	山形2、口：楕円文（沈）、体：縄文LR	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	7.5YR黒色	7.5YR黒色	口～底	口～底濃い漆か？	内外面赤彩、1.34ℓ
1006	SD1420-2a-24B7,同B9-23B18	SD1420-2	浅鉢	E4a		5.4	18.4	10.6	0.625	英･海骨･雲･長	口：変形工字文（沈）、 底：平行沈線文、ミガキ	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	2.5Y黒褐色	2.5Y暗灰黄色	口～面	口～体上	口縁赤彩、0.57ℓ
1007	SD1420-2a-23C3	SD1420-2	浅鉢	D8			?		?	雲･長	口：撚糸文R+平行沈線文	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口	口	
1008	SC1768-24B24,SC1769-24B18	SD1420-2	浅鉢	I			(17.4)		0.125	金･雲･長	口頸：ミガキ、体上：列点文	口：平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
1009	SC1768-24B24,SD1420-21d-26C14･27C9,同13c-24C4, 同2b-25B10	SD1420-2	甕	A1b			(23.0)		0.125	金･雲･長	山形1、口：縄文LR、頸：綾杉文	口：平行沈線文（2条）、ナデ	10YR褐灰色	10YRにぶい黄橙色			
1010	SD1420-2c･2a'-24B23	SD1420-2	甕	C3b			(15.0)		0.125	金･雲･長	山形1、口：縄文R+綾杉文、頸：丁寧なナデ+ミガキ、肩：縄文R+綾杉文	口：平行沈線文、丁寧なナデ	10YR黒色	10YR灰黄褐色	口～肩	口	
1011	SD1420-2a-24B18	SD1420-2	台付甕	C3d		14.8	10.6	6.8	0.813	雲･長	山形1、口：縄文LR、頸：隆線帯、 体～台：縄文LR、ミガキ	ナデ+ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR黒褐色	口～体上濃い	口～体上コゲ	体～底にアメ色の漆、0.53ℓ
1012	SC1768-24B14･15･18～20･24･25, SD1420-21d-25C13･26C9･27C11･23,同21c-22B23, 同11e-26C12,同2b-24B19･24, 同2a-24B4･14･19,同1-24B15･19, 同B9-24B18･20	SD1420-2	甕	C3d			37.4		0.438	雲･長	山形1･2、口：縄文LR+平行沈線文、 頸：ミガキヨコ、肩：条痕文ヨコ、 体：条痕文タテ･ヨコ	ナデ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口～体上濃い	体下バンド状、口	胎土分析、 に吹きこぼれ痕、33.61ℓ
1013	SD1420-2b-23B9･14,同2a-23B14, 同1-23B9･10,同B9-23B9･14･24, 同B7-23B9	SD1420-2	甕	D3b		(37.5)	28.0	10.2	0.500	金･雲･長	山形1、口：平行沈線文、口体：縄文LR、 肩：綾杉文、面：ササ痕？	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄褐色	口～体上	体上	14.48ℓ
1014	SD1420-21d-24C20･26C7, 同2b①･2b-23B22,同1b-23B12, 同1a-23B11,同B7-23B13	SD1420-2	甕	D3a	b3	15.6	13.6	6.8	0.750	雲･長	口：撚糸文R･匹字文、頸：ミガキヨコ、 肩：浮線文、肩～体下：撚糸文R、 底：ナデヨコ、面：網代痕	口：平行沈線文2条、ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR黒褐色	口～体上濃い、 体下底	口～底濃い	1.68ℓ
1015	SC1768-24B14,SD1420-2a-24B15, 同1-24B9	SD1420-2	甕	D3d			18.0		0.250	雲･長	口：縄文LR+平行沈線文③、頸：ミガキ、 肩：結節縄文LR	丁寧なナデ	7.5YR黒色	7.5YR灰褐色	口～頸		
1016	SC1768-24B20,SD1420-21d-27D8, 同21c-22D9,同2b-24B22	SD1420-2	甕	D3d			(11.0)		0.125	金･雲･長	山形2、口：縄文R+平行沈線文、 頸：ミガキヨコ	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口頸	口頸	
1017	SD1420-2a･1-23B17,同1a-23B17･23B	SD1420-2	甕	E3d			36.8		0.313	金･雲･長	山形1、口：縄文R+平行沈線文、 頸：ミガキ	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色		口	
1018	SC1794-25A21,SD1420-1-24B5	SD1420-2	甕	E3d			(15.6)		0.125	雲･長	丁寧なナデ、平行沈線文	丁寧なナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
1019	SD1420-2c-24B6,同2b'-25B6･11	SD1420-2	甕	E3e		12.3	11.4	6.1	0.500	金･雲･長	口頸：ナデ、肩：結節縄文LR、体：縄文LR、底：ナデヨコ、面：木葉痕	ナデ	2.5Y灰黄色	2.5Y灰黄色	口～底･面	体上バンド状	0.78ℓ

土器観察表（28）

報告№	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
1020	SD1420-2a･1-23C4,同B9-23B8･13･21･23･23C3,同B7-23B25･23C1･3,B5-23B20	SD1420-2	甕	E3d			34.0		0.625	金･雲･長	口：縄文LR+平行沈線文②、頸：ナデ、肩：縄文LR+平行沈線文	ナデ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄褐色	口～肩濃い		
1021	SC1794-25A20･21･25B1,SD1420-1-25B1	SD1420-2	甕	E3c		45.9	38.1	11.3	0.188	雲･長	山形2、楕円状突起、口：平行沈線文･縄文LR、頸：ミガキ、肩：綾杉文･匹字文、体：条痕文+縄文LR	ミガキヨコ	2.5Y黒褐色	10YR黒褐色	口～体上濃い	口体下	27.13ℓ
1022	SX1688-22C9,SD1420-2b'-22C8･9	SD1420-2	甕	C3e				6.4	0.000	雲･長	頸：ミガキ、体：縄文LR、底：ナデ	ナデ	10YR黒色	10YR黒色	口～面濃い	口～面濃い	
1023	SX1689-23B12,SD1420-2b･1･B9-23B8,同2a-23B12･15	SD1420-2	甕	C3a					0.000	金･雲･長	頸：ナデ･ミガキ、肩：匹字文･列点文、体：縄文R	ナデ･ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	頸～体上	体上	
1024	SD1420-21d･21a-27B20,同2c-23B3,同2b-23C9,同2a-23C2･7･23	SD1420-2	甕	E3d			29.0		0.375	金･雲･長	山形1･2、口：縄文R+平行沈線文、頸：ミガキヨコ、肩：平行沈線文･結節縄文R	ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～肩濃い	口～肩	
1025	SC1709･SD1420-2b'-2b-24B23,SC1768-24B14･19･23･24,SD1420-2a-24B23･24	SD1420-2	甕	E3d		45.6	31.7	10.8	0.938	雲･長	山形1、口：平行沈線文･縄文LR、肩：平行沈線文、体上：条痕文（幅約9㎜）+縄文LR+平行沈線と同じ工具でヘラミガキ、面：ササ痕？	ナデ	2.5Y灰黄色	2.5Yにぶい黄色	口～体上濃い	体下バンド状、肩	21.08ℓ
1026	SX1689-22B25	SD1420-2	甕	E･C				6.0	0.000	金･雲･長	肩：平行沈線文（浮）、体：縄文LR、底：ナデ･ミガキヨコ	ナデ･ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒色	肩～底面	肩～底面	
1027	SX1689-23B7,SD1420-B8-23B12	SD1420-2	甕	E･C					0.000	雲･長	肩：縄文LR+綾杉文･列点文､体：条痕文	ナデ･ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	肩体上濃い	肩体上濃い	
1028	SD1420-2a-23B2･24,同1-23B18･24･25,同B9-23B14･15･24,同B7-23B9･14･24,同B6-23B24	SD1420-2	深鉢	A3			38.0		0.563	金･雲･長	山形2、口：条痕文･縄文L+綾杉文	丁寧なナデ	10YR黒色	10YRにぶい黄橙色	口濃い		
1029	SD1420-2b'-25B13	SD1420-2	深鉢	A7d		22.6	23.7	9.8	0.063	金･雲･長	口：条痕文（幅6㎜･3条）+ミガキ（一部）	丁寧なナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄褐色	口～体下濃い	体上バンド状	6.25ℓ
1030	SD1420-2b･B9-23B23,同2a-23B23･23C2,同B7-23B22	SD1420-2	深鉢	B4			(10.0)		0.188	雲･長	口：縄文L+平行沈線文、体：綾杉文2段	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒色	口～体	口～体	
1031	SD1420-2b-23B9･14,同2a･1･B7-23B9,同B9-23B9･23C3	SD1420-2	深鉢	B6a			32.2		0.313	金･雲･長	口：縄文LR+平行沈線文③	ナデ･ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口体上濃い	口体上	
1032	SD1420-2c-25B21	SD1420-2	深鉢	B6e			(7.2)		0.125	金･雲･長	山形1、口：平行沈線文③、ケズリ	ナデ	10YR黒色	10YR灰黄褐色	口～体		
1033	SX1689-22C5,SD1420-11e-26C12	SD1420-2	深鉢	B7d			22.2		0.500	金･雲･長	山形1･2、口体：条痕文（幅5㎜のヘラ状のものと幅6㎜の櫛歯状のものとの併用）	ナデ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄褐色	口～体上濃い	体上～下濃い	焼成後穿孔
1034	SX1686･SD1420-2a'②-23B21,SD1420-2a-22B25	SD1420-2	深鉢	A6a		33.6	28.8	11.5	0.688	雲･長	波状口縁、口：平行沈線文、体：縄文LR、底：ケズリ、面：網代痕	ナデ	2.5Y灰黄色	2.5Y暗灰黄色	口～体上濃い	口～体上、体下～底濃い	12.31ℓ
1035	SX1685-22B20･23B11･16･17･21,SX1686-23B11･21	SD1420-2	深鉢	C3			31.0		0.250	金･雲･長	山形1･2、口：縄文LR+綾杉文、体：縄文LR	ナデ･ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR黒褐色	口体上濃い	口～体下	
1036	SD1420-2b-23B17	SD1420-2	深鉢	C6e			(13.8)		0.063	雲･長	波状口縁、口：･平行沈線、体上：ナデ	口体上：ミガキヨコ	10YR黒褐色	10YR黒色	口体濃い	口体濃い	
1037	SX1685-23B21,SX1687-23B16,SD1420-11e-26C12,同2a'-23B17	SD1420-2	壺	A			(14.0)		0.125	雲･長	口：平行沈線文③･下端の隆線はとびだす、頸：ミガキヨコ	ナデヨコ	10YR黒色	10YR黒色	口頸	口頸	
1038	SC1768-24B19	SD1420-2	壺	A			(13.4)		0.063	金･雲･長	山形1、口：平行沈線文④、頸：ミガキ、肩：浮線文	口：平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口		
1039	SD1420-2b-23B22	SD1420-2	壺	B			(18.4)		0.125	金･雲･長	山形2、口：縄文LR+匹字文④、頸：丁寧なナデ、肩：匹字文？④	ナデ･ミガキ	10YR黒色	10YRにぶい黄橙色	口～肩濃い		
1040	SD1420-2b･13c-24C6,同11e-26C12	SD1420-2	壺	H	b3			3.0	0.000	金･雲･長	肩：浮線文③、体：ナデ･ミガキ	ナデ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	頸～底･面		
1041	SD1420-1-23B14･23D9,同B9-23B9	SD1420-1	浅鉢	C1	d1		(16.0)		0.125	金･雲･長･白	口：浮線文③、網目	口：肥厚･平行沈線文、ナデ･ミガキヨコ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
1042	SD1420-1･B9-24A25,同B7-24B16	SD1420-1	浅鉢	C6		12.6	29.0	7.4	0.625	金多い･雲･長多い	山形1、ナデ･ミガキ、一部変形工字文風	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	2.5Yにぶい黄色	2.5Yにぶい黄色	口～体上	口～体上	2.85ℓ
1043	SD1420-1b･1a-22B20	SD1420-1	甕	E3e			34.4		0.250	金･雲･長	口：条痕文+ナデ、頸：ミガキ、肩体上：条痕文	ナデ･ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR灰褐色	口～体上濃い	口～体上	
1044	SD1420-1-24B23	SD1420-1	壺	A	d1		(11.0)		0.125	雲･長	山形1、口：浮線文、頸：ミガキ	ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色			
1045	SD1420-1-23B23	SD1420-1	深鉢	C1	f2	11.9	16.2	6.4	0.500	雲･長	山形2、口：浮線文④･縄文LR、体：縄文LR、底：ナデヨコ	丁寧なナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～体下濃い	口～底	0.95ℓ
1046	SD1420-1-24B4,同B9-24A22･24,同B7-24A22･24･24B2	SD1420-1	甕	G3d			(15.6)	7.6	0.063	雲･長	山形1、口：縄文LR･平行沈線文③、頸：ミガキ、肩：結節縄文LR、体：縄文LR	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～体上濃い	体下濃い、口肩	3.34ℓ
1047	SD1420-1-25B15	SD1420-1	甕	E					0.000	金･雲･長	肩：縄文LR、体：条痕文（7㎜･5条）、底：ナデヨコ	ナデ	2.5Yにぶい黄色	2.5Yにぶい黄色			
1048	SD1420-B7-24B24	SD1420-B7	浅鉢	C1	d1		(16.2)		0.063	金･雲･長	山形1、端：沈線文、口：浮線文③･ミガキ	口：肥厚･平行沈線文･ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			焼成前穿孔
1049	SD1420-B6-22B17	SD1420-B6	台付浅鉢					7.2	0.000	雲･長	ミガキ	ナデ･ミガキ	10YR褐灰色	10YR灰黄褐色	体下底	底	
1050	SD1420-B5-23B19	SD1420-B5	浅鉢	C2a			25.0		0.250	金･雲･長	口：工字文②、体：ナデ･ミガキ	ナデ･ミガキ	2.5Y黒色	2.5Y黒褐色	口～体上濃い	口～体上濃い漆か？	外面赤彩

土器観察表（29）

報告№	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
1051	SX1717-23B25,SD1420-21d-26C15,同21c-23C9,同2a-23C4,同1・B5-23B20,同B9-23B17・18,同B7-23C5	SD1420-B9	浅鉢	C6			24.0		0.375	金・雲・長	口：縄文LR・日字文、体：縄文LR	口：肥厚、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口体上濃い	口体上濃い	
1052	SD1420-B9-23B11・12・17	SD1420-B9	甕	D2e			35.6		0.250	金・雲・長	口～肩：縄文LR	ナデ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄褐色	口～肩濃い	口～肩	
1053	SD1420-B7-25B7・8	SD1420-B7	甕	E3d			8.0		0.250	雲・長	山形1、端：沈線文、口：縄文LR+平行沈線文、頸：ナデ・ミガキ	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口	口	
1054	SD1420-B7-24B21	SD1420-B7	甕	E3d			(14.2)		0.125	金・雲・長	山形2、口：縄文L+平行沈線文、頸：丁寧なナデ	丁寧なナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
1055	SX1717-24B11・16・17・22,SD1420-2b-25B3	SD1420-B9	甕	E3e		(34.6)	27.0	10.0	0.625	金・雲・長	口：肥厚・縄文LR、頸：ナデ、肩：結節縄文LR、体：条痕文、底：ケズリ・ナデヨコ	ナデ・ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～体上濃い	体下濃い	12.06ℓ
1056	SD1420-1b-23B11,同B9-23B17	SD1420-B9	壺	B				5.4	0.000	雲・長	体底：ミガキ	ナデ	2.5Y黒褐色	2.5Y暗灰黄色	体底		
1057	SX1717-23B25・24B16・21・22,SD1420-2b-23B9	SD1420-B9	甕	D3b			36.6		0.188	金・雲・長	山形1、口：縄文LR+平行沈線文、頸：ミガキヨコ、肩：縄文LR+綾杉文、体：縄文LR	ナデ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄褐色	口～体上濃い	体下濃い、肩	38.19ℓ
1058	P2038-1-23F16,SH2088-3・2-23F11,SD1420-E14a-23F17,同E10-23F16・17,同E8-23F11・12・16		深鉢	A6d		38.1	39.0	10.1	0.813	雲・長	口：平行沈線文、口～体：条痕文（幅約8㎜）、面：ササ痕？	ナデ	2.5Y浅黄色	2.5Y灰黄色	口～体上濃い	体上	SH2088、24.68ℓ
1059	P2038-1-23F17,P2038-23F13,SH2088-1-23F11,SC2354-23F12,SC2359-23F18・19,SX2370-23F18・19,SD1420-E16a-23F13,同E14a-23F12,同E12a-23F10～13・16・17,同E10-23F11・12・16・17,同E8-23F16,同E6c②-23F15,同5c③-23F10	SD1420-E16	甕	B3e			34.0		0.250	金・雲・長	口：ナデ、肩～体：条痕文	ナデ	10YR黒色	10YRにぶい黄橙色	口～体上濃い	体下に線状	一括、20.51ℓ
1060	SD1420-E14a・E10-24E23,同E12a-24E23・24・24F9・14,同E6c-24E19	SD1420-E14	深鉢	C7d			30.0		0.375	金・雲・長	口：複合口縁、体：条痕文	ナデ+ミガキ	10YR黒色	10YRにぶい黄橙色	口～体上濃い	口体下	
1061	SD1420-E14a-24E23,同E12a-24E23・24F3,同E10-24F6・9	SD1420-E14	深鉢	A7a			25.0		0.375	金・雲・長	口：縄文L	ナデ	10YR黒色	10YRにぶい黄褐色	口濃い	口	
1062	SC2096-23F14	SD1420-E12	浅鉢	B1	a1		(11.2)		0.063	金・雲・長	口：眼鏡状文・浮線文（浮）	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
1063	SC2359-23F19,SX2370-23F18・19	SD1420-E12	浅鉢	B2			(27.0)		0.188	金・雲・長	口：工字文④、体：ミガキ	口：突帯状・平行沈線文、ミガ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～体上	口～体上	
1064	SD1420-E12a-23F10,同E5C-22F21	SD1420-E12	浅鉢	B3			(15.4)		0.125	金・雲・長	口：縄文LR+匹字文②	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口体上	口体上	
1065	SD1420-E12a-23F10・16	SD1420-E12	鉢	F	b3				0.000	金・雲・長	口：浮線文④、体：縄文LR	ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR灰褐色	口体上	口～底	
1066	SH2088-1-23F11,SC2354-23F12・13,SC2359-23F13・14・18,SD1420-E13a-23F12,同E12a-23F3・13・18,同E10-23F7・18	SD1420-E12	甕	B2e		45.8	37.8	10.0	0.500	金・雲・長	口：結節縄文RL、頸：縄文RL・ミガキ、肩体：条痕文	ナデ・ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口～体上	口頸	一括、34.18ℓ
1067	SD1420-E12a-23F7	SD1420-E12	甕	B2e			(28.0)		0.125	金・雲・長	口肩：結節縄文LR	ナデ	10YR黒色	10YR灰黄褐色	口～肩濃い	口～肩	
1068	SC2359・S4-23F20,SD1420-21d-24E1	SD1420-E12	甕	B3d					0.000	金・雲・長	頸：ナデ、肩：縄文LR+平行沈線文	ナデ・ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	頸～肩濃い	頸～体上濃い	
1069	SD1420-E12a-23F2,同E10-23F10	SD1420-E12	深鉢	C1	e3			6.0	0.000	金・雲・長	体上：浮線文（浮）、体：ミガキ	ナデ	10YR黒色	10YR灰黄褐色	体上下		
1070	SC2359-1-23F19・20	SD1420-E12	深鉢	C7a			(30.0)		0.125	金・雲・長	口：複合口縁・円形の連続押圧文、頸：縄文LR	ナデ・ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒色	口頸	口頸	
1071	SX2398-2・1-24F4・9,SD1420-E12d-25E17	SD1420-E12	深鉢						0.000	金・雲・長	体：縄文LR	ナデ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄橙色	体		
1072	SC2354-23F12・13,SC2361-23F8,SX2020-22F21,SX2353-23F18,SD1420-E10-23F7・12・13・24	SD1420-E12	深鉢	C7a			31.4		0.375	金・雲・長	口～体：縄文LR	ナデ・ミガキ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口体上濃い		
1073	SX2016-3-24F6・8・11・12・17,同2-24F2・11・12,SD1420-E10-24F11,同E8-24F11・12・17,同E7・E6c①-24F11・12,同E6c③-24F7・8	SD1420-E10	鉢	E			16.2		0.313	雲・長	山形2、口：縄文LR+工字文③、頸：ミガキヨコ、肩：工字文+綾杉文、体：縄文LR	口：平行沈線文、体：ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～体下	口～体下	一括、3.01ℓ
1074	SD1420-11e-26C15,同E10a-27D11	SD1420-E10	甕	C3d			(13.4)		0.063	雲・長	口：縄文LR+平行沈線文、頸：隆線帯上に刺突列点文	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR黒色	7.5YR灰褐色	口～頸濃い	口頸	
1075	SD1420-E10-23F12	SD1420-E10	壺	A	f1				0.000	金・雲・長	肩：浮線文③・ミガキ	ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	肩		
1076	SD1420-E9f-27D2・8	SD1420-E9	鉢	C	f1		17.8		0.250	海骨・雲・砂粒少ない	口：平行沈線文、頸：ミガキ、肩：浮線文③・ミガキ	ミガキ著しい	7.5YR灰褐色	7.5YR黒褐色	口～肩	口～肩	外面赤彩
1077	SD1420-21d-25D8,同E9c-25E3	SD1420-E9	鉢	F			19.2		0.313	金・雲・長	山形1、口体：撚糸文R	ナデ・ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口濃い、体上下	口～体下	2.16ℓ
1078	SD1420-E9f-27D8	SD1420-E9	甕	C3a			(34.2)		0.125	金・雲・長	山形1・2、口：平行沈線文③、頸：ナデ、肩：平行沈線文・浮線文	ナデ	10YR褐灰色	10YR褐灰色	口～肩	口～肩濃い	
1079	SD1420-E9f-27D5	SD1420-E9	甕	H1a	e2				0.000	雲・長	口：浮線文（浮）頸肩：縄文RL	ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	体濃い	体濃い	内外面赤彩

土器観察表（30）

報告№	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
1080	SD1420-B9-23B8,同E9f-27D2	SD1420-E9	壺	F			(12.6)		0.063	金・雲・長	口：縄文LR+平行沈線文、 頸：ミガキヨコ、肩：結節縄文LR	ナデ・ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～体濃い	口～体	SD1420-B9層に所属する可能性あり
1081	SD1420-E8-24E23,同E5c-24E18	SD1420-E8	鉢	E					0.000	金・雲・長	肩：縄文LR+綾杉文、体：縄文LR	ミガキ	7.5YR褐灰色	7.5YR黒褐色	肩～体下	肩～体下	
1082	SD1420-E8-23F3・4,同E7-23F13, 同E6c③-23F4	SD1420-E8	浅鉢	C1	b1		?		?	金・雲・長	口：浮線文（浮）、ミガキ	口：肥厚・平行沈線文、ミガキ	7.5YRにぶい褐色	7.5YRにぶい褐色			
1083	SX1702-3-22E20	SD1420-E6	浅鉢	B8			(7.6)		0.125	金・雲・長	山形2、口：平行沈線文浅い、ナデ・ミガキ	丁寧なナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～体	口～体下	0.16ℓ
1084	SD1420-E6a-22F3	SD1420-E6	浅鉢	B8			(18.0)		0.125	金・雲・長	口：平行沈線文・2条のみ浅い、ミガキ	ミガキ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口	口	外面赤彩
1085	SX2020-1-22F5,同2-22F4,SD1420- E6a-22F5,同E5c-22F4・5,Ⅵ-22F14	SD1420-E6	浅鉢	C1	c2		(17.6)		0.188	金・雲・長	山形1、口：浮線文（浮）・縄文LR、 体：縄文LR	口：肥厚、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒色	口	口	
1086	SX2020-22F22	SD1420-E6	浅鉢	C1	e2		(19.0)		0.125	海骨・金・雲	口：匹字文②、ミガキ	口：肥厚、ミガキ	10YR褐灰色	10YR灰黄褐色	口	口	外面赤彩
1087	SD1420-E6c②-22F18,Ⅵ-22F13	SD1420-E6	浅鉢	C1	f1		(7.0)		0.125	金・雲・長	山形1、口：浮線文④、ミガキ	口：肥厚、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色	口		
1088	SD1420-E6c②-25F9	SD1420-E6	浅鉢	C1	e2		17.6		0.375	金・雲・長	波状口縁、口：浮線文③、体：ミガキ	口：突帯状・平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	2.5Y灰黄色・黄灰色	口～底	口～底	0.73ℓ
1089	SD1420-E6c③-25F4	SD1420-E6	浅鉢	E5a	h	8.7	16.8	9.8	0.250	金・雲・長	口：変形工字文、体・面：ミガキ	ミガキ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口～底・面	口～底	外面赤彩、0.89ℓ
1090	SX1702-2-23E16,SD1420-E5c①- 23F12,Ⅵ-23F18・20	SD1420-E6	浅鉢	G4b			(20.0)		0.188	角・海骨・雲	口：変形工字文③、ミガキ、 体：縄文RL	口：肥厚・平行沈線文、研磨	10YR黒色	10YR黒色	口～体濃い	口～体濃い	
1091	SD1420-E6c②-25F6,同E5c-26E16	SD1420-E6	浅鉢	G5b		11.0	23.8	10.0	0.438	英・海骨・ 雲・白	口：変形工字文（浮）、ミガキ、 体：縄文RL、底：平行沈線文	口：肥厚・平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄褐色	口～底濃い	口	一括、2.97ℓ
1092	SD1420-E6c②-23F8, 同E6c①-23F2,同E5c③-23F19, 同E5c①-23F16,同E5c-23F24, Ⅵ-23F12・17・18	SD1420-E6	浅鉢	H4b			24.8		0.375	海骨・白	山形1、口：変形工字文（沈）、ナデ、 体：ケズリ+ミガキ	口：肥厚・平行沈線文、ケズリ +ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口～体上	口体上	外面赤彩
1093	SX2020-22E25	SD1420-E6	台付浅鉢							海骨・白	体台境に平行沈線文、ミガキ	面：ケズリ+ミガキ	2.5Y黒褐色	2.5Y暗灰黄色	底台		内外面赤彩、外面漆
1094	SX1702-3-22E22,SX2020-2・ SD1420-E5c-22F4	SD1420-E6	浅鉢	H5b			19.8		0.250	雲・砂粒少ない	山形1、口：変形工字文③、ミガキ著しい		10YR黒色	10YR黒色	口～体下	口～体下	外面赤彩、1.43ℓ
1095	SX2035-21F18,SD1420-E5c③- 23F19	SD1420-E6	台付浅鉢	H5a		9.4	17.1	7.4	0.625	英・雲・長	口：変形工字文④、体台：縄文LR、 底：匹字文風、台：連続押圧文、ミガキ	ミガキ、面中央に「円文」あり	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口～台・面濃い	口～面	外面口縁部と台部に赤彩あり、0.76ℓ
1096	SD1420-E6c③-23E24・23F15, 同E5c③-23E25・23F4・5・19, 同E5c-25E2	SD1420-E6	台付浅鉢	D8		11.1	(16.4)	6.7	0.125	雲・長	口：平行沈線文・縄文LR、体：縄文LR、 台：ナデヨコ	口：平行沈線文、ナデ・ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口～台・面	体下	0.67ℓ
1097	SX2020-2-22E25	SD1420-E6	台付浅鉢					6.8	0.000	金・雲・長	体下：縄文LR、底：ナデヨコ	ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	体下面	体下面	
1098	SD1420-E6d-24D15	SD1420-E6	鉢	D	g2	12.6	14.5	7.9	1.000	雲・長	山形1、口：浮線文（浮）、体：ミガキ、 面：網代痕	ミガキ	2.5Y暗灰黄色 N黒色	N黒色	口～底・面濃い	口～底・面濃い	焼成後穿孔、1.55ℓ
1099	SX1702-3-22E20,SX2020-4- 22E25,同2-22E24・25, SC1768-24B20	SD1420-E6	甕	A1a			30.9		0.250	金・雲・長	口：縄文L、頸：縦位稲妻状沈線文、 肩：縄文L	ナデ・ミガキ	7.5YR黒色	7.5YR黒褐色	口～肩濃い	口～肩	
1100	SD1420-E6c-26E8	SD1420-E6	甕	B3a				8.5	0.000	雲・長	頸：ミガキヨコ、肩：匹字文・縄文L、 体：ミガキ、面：網代痕	ミガキ	10YRにぶい黒褐色	10YRにぶい黒褐色	頸～体下	体上	
1101	SD1420-E10-24F15, 同E6c③-24F9・19・25	SD1420-E6	甕	A1b		42.9	24.8	8.9	0.875	金・雲・長	口体：条痕文（6㎜・3条）、 頸：独立綾杉文	ナデ	2.5Y暗灰黄色	10YR黒褐色	口～体濃い	体下バンド状	13.65ℓ
1102	SX2020-4-22F12	SD1420-E6	甕	C3a			(26.6)		0.063	金・雲・長	口：縄文L+匹字文③、頸：ナデ	口：平行沈線文、ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口		
1103	SD1420-E6c①-25F11	SD1420-E6	甕	C2a			16.0		0.250	雲・長	山形1、口：縄文LR、頸：交互綾杉文、 肩：匹字文・結節縄文LR	ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR灰褐色	口～体上濃い	口～体下濃い	1.93ℓ
1104	SX1702-3-22E23,SX2020-2-22F3, SD1420-21c-22E2,同E6a-22F3・8, 同E5c-22F3・17,同E4c-22F7	SD1420-E6	甕	C3a			20.0		0.375	雲・長	山形1、口：縄文LR・匹字文、 頸：ミガキ、肩：縄文LR、体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ、ナデ	10YR黒色	10YR黒色	口頸濃い	口～体濃い	
1105	SX1702-3-22E10	SD1420-E6	甕	C3a				9.4	0.000	海骨・金・ 雲・長	頸：ミガキヨコ、肩：工字文（沈）、 体：ミガキ	ナデ・ミガキ	2.5Y灰黄色・黒色	2.5Y暗灰黄色	頸～底濃い	体下底	外面肩赤彩
1106	SD1420-E6b-21F17・22F21, 同E6a-21F17,同E5c-21F18・19	SD1420-E6	甕	C3c			(21.0)		0.188	雲・長	口：縄文LR+平行沈線文（浮）、頸：ナデ・ミガキ、肩：匹字文・縄文LR+綾杉文	口：平行沈線文、ナデ・ミガキ	7.5YR黒色	7.5YR黒褐色	口～体上	口～体上	
1107	SD1420-E6c③-25F18	SD1420-E6	甕	C3c		17.7	17.9	8.6	0.375	雲・長	山形1・2、口：縄文R+平行沈線文、 頸：ナデヨコ、肩：匹字文・綾杉文、 体：縄文R、面：ササ痕？	口：平行沈線文、ナデ・ミガキ	2.5Y灰黄色	2.5Yにぶい黄色	口～体上濃い	口～体上	一括、2.40ℓ
1108	SD1420-E6c③-24F5・9・15・20・21・ 24,同E6c①-24F3	SD1420-E6	甕	C3c		36.0	27.3	10.0	0.813	金・雲・長	山形1、口：平行沈線文・縄文LR、 頸：ミガキ、肩：眼鏡状文・綾杉文、 体：縄文LR、面：網代痕	ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄橙色	口肩～体上濃い、底バンド状	体下濃い、口体上	14.18ℓ
1109	SD1420-E6c③-27F18・20	SD1420-E6	甕	C3d			28.0		0.250	金・雲・長	口：平行沈線文④・縄文L、 頸：ナデ、肩：結節縄文L	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
1110	SD1420-E6c③-25F4,同E5c③-25F1	SD1420-E6	甕	C3d		13.2	13.6	5.9	0.375	金・雲・長	山形1・2、口：縄文R+平行沈線文、 頸：ミガキヨコ、 肩：縄文R+平行沈線文、体：縄文R	丁寧なナデ	5YR灰褐色	7.5YR灰褐色・黒色	口～体下	体上～底	0.88ℓ
1111	SD1420-E6c③-24F22	SD1420-E6	甕	C3d		13.6	11.0	8.0	0.063	金・雲・長・ 白	山形2、口：平行沈線文・縄文L、頸：ミガキ、体：縄文L、底：ミガキヨコ	ナデ+ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YR黒褐色	口～底	口頸・底	0.82ℓ

土器観察表（31）

報告№	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
1112	SX1702-3-22E18･19,同1-22E19	SD1420-E6	甕	C3d			(22.8)		0.125	金･雲･長	山形2、口：平行沈線文③、頸：ミガキ、肩：撚糸文R+結節縄文LR	ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～肩濃い	口～肩濃い	
1113	SD1420-E6c①･E5c③･E5c②-25F2	SD1420-E6	甕	C3e				11.2	0.000	雲･長	頸：ナデ、肩～体：条痕文（幅8㎜）、面：網代痕	ナデ	2.5Y灰黄色	2.5Y灰黄色			一括
1114	SC2036-23F12, SD1420-E6c②-23F11	SD1420-E6	甕	D3a	f1		(10.2)		0.125	金･雲･長	口：縄文LR+浮線文（浮）、頸：平行沈線文、ミガキ、肩：縄文LR	ナデ	10YR黒色	10YR黒色	口～肩	口～肩	
1115	SD1420-E6a-21F10	SD1420-E6	甕	D3d			(20.0)		0.125	雲･長	口：平行沈線文、頸：ナデ、 肩：平行沈線文、体上：撚糸文R	ナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～肩濃い	口～肩	
1116	SX2018-1-22F7･8･17,SX2020-2-22F8･13,同1-22F13,SD1420-E6b-22F15,同E5c-22F4･7･8･13･17,E4c-21F24	SD1420-E6	甕	D3d			33.8		0.313	金･雲･長	口：平行沈線文、頸：ミガキ、 肩：結節縄文R、 体：条痕文（幅7㎜細密）	ナデ+ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口～体上濃い	口～体上	
1117	SX2016-3-22F9･24F9,SX2020-4-22F9,同2-23E21,SD1420-E6c③-23F10･14･15･19･20･24E22･23･24F4･5･9,同E6c②-24E25,同E6c①-22F4･9･24F6･9,同E5c③-23F14･19･24E21,同E5c-25E9	SD1420-E6	甕	D3d		40.7	31.6	9.8	0.375	雲･長	山形1、口：縄文LR+平行沈線文、 頸：ミガキ、肩：縄文LR、 体：条痕文（1㎝･細密）	ナデ	10YR黒色	10YRにぶい黄褐色	口～体上濃い	体下バンド状濃い	22.26ℓ
1118	SD1420-E6c-24E15,同E5c-24E14	SD1420-E6	甕	E3a			(12.6)		0.188	雲･長	口：工字文③、頸：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口	口	
1119	SD1420-E6c③-25F12, 同E6c②-25F16,同E6c①-25F11, 同E5c-24E19	SD1420-E6	甕	E3b			26.0		0.375	金･雲･長	山形1、口：縄文LR+平行沈線文、 頸：ナデ、 肩体：縄文LR+綾杉文	ナデ	7.5YR黒褐色	7.5YR灰褐色	口～肩濃い	口～肩	一括
1120	SD1420-E6a-21F11･12,同E5c-21F19･20,同E4c-21F16･19･25	SD1420-E6	甕	E3d		16.9	13.1	7.5	0.563	金･雲･長	山形1、口：縄文R+平行沈線文、 頸：ナデヨコ、体：縄文R	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄褐色	口～体上	口体下	1.45ℓ
1121	SD1420-E6c②-24F1, 同E6c①-23F20,同E5c③-23F10･14･20,E5c①-23F10･19	SD1420-E6	甕	E3c			(27.4)		0.063	金･雲･長	山形1、口：平行沈線文③、 頸：ナデ、肩：眼鏡状沈線文、 体：縄文LR	ナデ･ミガキ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄橙色	口～体上濃い	口	
1122	SX1702-3-24E1～3･6～8,SD1420-E6a-24E2･6,同E5c-24E9･13･14･17,同E5a-24E2･3,同E4c-24E8･13･17,同E9f-24E17,同E8b-24E17	SD1420-E6	甕	E3d			32.0		0.313	金･雲･長	山形2、口：縄文LR+平行沈線文、 頸：ナデ･ミガキ、 肩：条痕文+結節縄文LR	ナデ･ミガキ	10YR灰白色	10YRにぶい黄橙色			
1123	SD1420-21a-23D2,同E6b-24D24	SD1420-E6	甕	E3d			(24.6)		0.188	雲･長	口：縄文R+平行沈線文、頸：ナデ、 肩：結節縄文R	ナデ	7.5YR黒色	7.5YR黒色	口～肩濃い	口濃い、頸体	焼成後穿孔
1124	SX1702-3-22E18,SD1420-21d-27C24	SD1420-E6	甕	E3d			(31.2)		0.063	雲･長	山形2、口：平行沈線文④･縄文LR、 頸：ミガキ、肩：隆線帯･沈線帯、 体：縄文LR	ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～体上濃い	口～体上	
1125	SX1702-3･SX1776-24E10, SD1420-E6c③-27F21,同E6c-24E10,同E6a-24E4,同5c-24E10･15	SD1420-E6	甕	E3d			36.0		0.313	金･雲･長	山形1、口：条痕文+縄文LR+平行沈線文、頸：ミガキ	口：突起部に縦位沈線	10YR黒色	10YR灰黄褐色	口頸	口頸	
1126	SX1702-3-24E2,SD1420-21d-26C9･10･15,同E6b'-26C12	SD1420-E6	甕	E3a					0.000	雲･長	口：縄文LR+浮線文？③、頸：ナデ、 体：縄文LR	ナデ	10YR黒色	10YR黒色	口～体上濃い	口～体上	
1127	SD1420-E6c②-23F19･25, 同E5c③-23F19,同E5c①-23F5･19, 同E5c-23F25,Ⅵ-23F24･25	SD1420-E6	甕	E3e			25.2		0.438	雲･長	口頸：ナデヨコ、肩：条痕文	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口～肩	口～肩	
1128	SD1420-E6c①-25E22･23･25F22, 同E5c③-25F3	SD1420-E6	甕	F3d			28.0		0.375	金･雲･長	口：下端のみ肥厚、頸：ミガキ	ナデ･ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YRにぶい褐色	口頸濃い		
1129	SX2020-2-21F20,同1-21F20･25,SD1420-E6a･E5b-22F21,同E5c-21F15･20･22F17,同E4c-21F15	SD1420-E6	甕	F3b		13.7	13.2	5.6	0.500	金･雲･長多い	口：平行沈線文、頸：ナデ、 体：綾杉文+条痕文タテ、 面：ササ痕	ナデ	2.5Y暗灰黄色	2.5Y暗灰黄色	口～底	口～底	0.96ℓ
1130	SD1420-E6c③-25F22,同E6c②-25F16,同E6c①･Ⅵ-25F11	SD1420-E6	甕	C3b					0.000	金･雲･長	頸：結節縄文LR、肩：斜線文、 体上：条痕文（9㎜･5条）+縄文LR	ナデ･ミガキ	10YR黒色	10YRにぶい黄褐色	頸～体上	体上	一括
1131	SD1420-E6c②-25F16	SD1420-E6	甕	E3b					0.000	金･雲･長	肩：綾杉文、体：条痕文（6㎜･3条）	丁寧なナデ	10YR灰黄褐色	7.5YR灰褐色	肩体上	体下	一括
1132	SD1420-E6c①-25F6･11	SD1420-E6	甕					6.8	0.000	金･雲･長	肩：平行沈線文、体：条痕文、 底：ナデヨコ、面：木葉痕2枚重ね	ナデ･ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	肩～底	肩～底	
1133	SD1420-E7-24F11,同E6c①-24F12	SD1420-E6	甕				(16.8)		0.063	金･雲･長	端：沈線文、口：平行沈線文･把手	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒色	口	口	
1134	SX2016-2･SD1420-E6c③-24F2	SD1420-E6	甕					7.5	0.000	金･雲･長･白	肩：浮線文、体：縄文LR	ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	体上～底	体上コゲ	一括
1135	SD1420-21b-22D25,同E6c-22E15	SD1420-E6	深鉢	B7d			(22.0)		0.063	金･雲･長	口：体部条痕文施文後に複合口縁作出･条痕文ヨコ	ナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	口体上濃い	口体上	
1136	SX1702-2-22E25,SD1420-E5c-22E25,同E4c-22F5	SD1420-E6	深鉢	C3			21.0		0.375	金･雲･長	山形1、口：綾杉文	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
1137	SD1420-21a-22E9･10, 同E6C-22E15	SD1420-E6	深鉢	C7d			(24.6)		0.125	金･雲･長	口：複合口縁･結節縄文LR･条痕文、 体：条痕文	ナデ･ミガキ	10YR黒色	10YR灰黄褐色	口体上濃い	口体上	
1138	SD1420-E6c③･E6c①-23F19･20, 同E6c②-23F2･20,同E5c①-23F19	SD1420-E6	深鉢	C4	f1		(20.6)	10.6	0.125	金･雲･長	山形1、口：匹字文（浮）･楕円文･縄文LR、体上：綾杉文･工字文･縄文LR、体下：条痕文、面：網代痕	口：平行沈線文、ナデ･ミガキ	10YR黒色	10YRにぶい黄褐色	口～体上濃い、底	口～体下	5.51ℓ

土器観察表（32）

報告No.	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
1139	SD1420-E6c③-25F11, 同E6c①-25F6	SD1420-E6	深鉢	C7a		29.6	32.6	9.6	0.750	雲・長	口～体：縄文LR	ナデ	2.5Yにぶい黄色	10YR灰黄褐色	口～体上底吹きこぼれあり	口～体下	11.23ℓ
1140	SX1702-3-23E10・24E6	SD1420-E6	深鉢					10.6	0.000	金・雲・長	体下：条痕文、底：ケズリ・ナデヨコ、 面：ササ痕	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YR黒色	体下濃い	底濃い	
1141	SD1420-21d-26C14,同E6b-26D5	SD1420-E6	甕					10.6	0.000	金・雲・長	底：ミガキ、面：網代痕	ケズリ・ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	底	底・面	
1142	SX1702-23E15	SD1420-E6	壺	H				5.1	0.000	雲・長	頸：波状沈線文、肩：平行沈線文、 体：ナデ・ミガキ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	頸～底・面	頸～底・面	外面赤彩
1143	SD1420-E6c②-25F9	SD1420-E6	壺	F				6.9	0.000	雲・長	縄文LR、底：平行沈線文・ミガキヨコ	ケズリヨコ+ナデ	10YR褐灰色	10YR灰黄褐色	体上～底・面	体上下	
1144	SX2020-4-22E9・22F4,同1-22E5	SD1420-E6	壺・甕					10.8	0.000	金・雲・長	体上：縄文LR+綾杉文、 体下：縄文LR、面：網代痕+木葉痕	ナデ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	体上～底	体上下	外面赤彩
1145	SD1420-E5c-25E7	SD1420-E5	浅鉢	C1	a2		(34.4)		0.125	雲・長	口：浮線文（浮）、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口	口	
1146	SD1420-E5c-22F16・17	SD1420-E5	浅鉢	C1	a2		?		?	海骨・金・ 雲・長	口：浮線文③、ミガキ	口：肥厚、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口	口	トレンチ
1147	SD1420-E5c-23F23	SD1420-E5	浅鉢	C7			(8.0)		0.063	海骨・金・ 雲・長	口：列点文・綾杉文・縄文LR	口：平行沈線文、ナデ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄橙色	口		
1148	SX2018-1-22F17	SD1420-E5	深鉢	C2			(20.8)		0.063	金・雲・長	山形1、口：眼鏡状沈線文、体：縄文R	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR灰褐色	口体上底	口体下	
1149	SX2018-22F17,SD1420-E5c③- 24F1,同E4c-22F11	SD1420-E5	浅鉢	G1	c1		(17.5)		0.125	金・雲・長	山形1、口：浮線文④、ミガキ	口：肥厚、ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～体上濃い	口～体上濃い	
1150	SC2034-23F1・7,SD1420-E6c①- 23F1,同E5c①-23F12	SD1420-E5	台付浅鉢					11.2	0.000	英・海骨・雲	台：平行沈線文、ミガキ	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	台	台	
1151	SD1420-E5c-24E	SD1420-E5	鉢	D	f1	10.5	10.5	5.8	0.313	金・雲・長	口：浮線文（浮）、体～底：ミガキ	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～底	口～底	トレンチ、0.89ℓ
1152	SD1420-E5c③-23F5・10	SD1420-E5	浅鉢					5.8	0.000	雲・長	体：縄文LR、面：網代痕	ミガキ	7.5YRにぶい褐色	10YR灰黄褐色	体底・面		
1153	SD1420-E5c③-23F19, 同E5c①-23F19・24F6	SD1420-E5	甕	C3d			24.0		0.375	金・雲・長	山形1、口：平行沈線文④、頸：ミガキ	ナデ・ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口頸濃い	口	
1154	SD1420-E5c③-23F21, 同E5c①-23F25,同E5b-24F25	SD1420-E5	甕	E3d					0.000	雲・長	頸：隆線帯・丁寧なナデ、肩：縄文LR	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YR黒色	頸	頸	
1155	SD1420-E5c③-23E25	SD1420-E5	甕	E3b			(28.0)		0.125	金・雲・長	山形1、口：縄文L+平行沈線文、 頸：ミガキ、肩：縄文L+綾杉文	ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色		口	
1156	SD1420-E5c-22F2～4・7～9, 同E5b-22F7・8,同E4c-22F8	SD1420-E5	甕	E3a	d2		?		?	雲・長	山形1、口：縄文R+平行沈線文、 頸：ミガキ、肩：縄文R+浮線文	ナデ	7.5YR黒褐色	7.5YR灰褐色	口～肩濃い	口～肩	
1157	SD1420-E5c-22F3	SD1420-E5	甕	E3d			(10.0)		0.125	金・雲・長	山形1、口：平行沈線文・短沈線文、 頸：ミガキ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR褐灰色	口頸	口頸	
1158	SD1420-E5c③-24F1,同E5c①-24F6	SD1420-E5	甕	E3d					0.000	雲・長	頸：ミガキ、肩：平行沈線文、 体：縄文LR	ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	頸～体濃い	頸肩	
1159	SD1240-E5c-21F12・17, 同E4c-21F7・17	SD1420-E5	甕	G3b				(5.5)	0.000	金・雲・長	頸：ナデ、肩：綾杉文、体：縄文R、 底：ミガキ	ナデ	10YR黒褐色	10YR黒色	頸～体上濃い	体上底コゲ濃い	
1160	SD1420-E5c-24E15・17	SD1420-E5	甕	E3d			37.2		0.500	雲・長・他の 砂粒多い	口体：条痕文（幅6㎜・2条）・縄文LR、 口肩：平行沈線文・列点文、頸：ナデ	丁寧なナデ	2.5Y灰黄色	2.5Yにぶい黄色	口～体上濃い		20.79ℓ
1161	SX2016-3-24F12,SD1420-21d- 26c15,同E5c③-24F1,同E5c①-23F5	SD1420-E5	深鉢	B7b			29.0		0.375	雲・長	口：結節縄文LR、体：縄文LR	ナデ・ミガキ	10YR黒色	10YRにぶい黄褐色	口～体上濃い	口体下	9.93ℓ
1162	SD1420-E5c①-23F19, 同E4c-24E14,Ⅵ-23F14	SD1420-E5	深鉢	C3			15.2		0.313	雲・長	山形2、口：縄文LR+綾杉文	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口	口	焼成後穿孔
1163	SD1420-E5c③-23E22・23F9, 同E5c-21F24・25,同E5b-21F24	SD1420-E5	深鉢	C3			19.0		0.313	雲・長	山形2、口：縄文LR+綾杉文	口：平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YR明黄褐色	口		
1164	SD1420-E5c③-23E21・23F4・5・14	SD1420-E5	深鉢	C3			(12.4)		0.063	雲・長	口：縄文LR+綾杉文	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒色	口濃い	口	
1165	SC2032-23F1,SD1420-E5c③- 23E24・23F4,同E5c①-23F12	SD1420-E5	深鉢	C6a			(12.0)		0.125	雲・長	口：平行沈線文（浮）、体：縄文LR	口：平行沈線文、ナデ・ミガキ	7.5YRにぶい褐色	5YRにぶい橙色			
1166	SD1420-E5c③-23E24・23F12	SD1420-E5	深鉢	C7d			(9.6)		0.063	金・雲・長	口：条痕文+縄文R	ナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	口濃い	口	
1167	SD1420-E5c①-23F16	SD1420-E5	壺	F	g2				0.000	金・雲・長	頸：ミガキ、 肩：浮線文（浮）、彫去大きい	ナデ・ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR黒褐色			
1168	SD1420-21a-22D8・10,同E5c- 22F2・3・8・25,同E5b-22F2・7・8	SD1420-E5	壺	D					0.000	金・雲・長	肩：楕円文・刺突文	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
1169	SD1420-E4c-21F14	SD1420-E4	浅鉢	B2a		12.5	(28.6)	(8.0)	0.063	金・雲・長	口：縄文LR+工字文③、体：縄文LR	ナデ・ミガキ	10YR黒色	10YR褐灰色	口～体下	口体上	4.75ℓ
1170	Ⅵ-23F13	Ⅵ	深鉢	C7a			(9.6)		0.125	金・雲・長	口：縄文LR	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR黒褐色	口	口	
1171	Ⅵ-24F1・16	Ⅵ	台付浅鉢					7.0	0.000	金・雲・長	台：ミガキタテ・平行沈線文	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄褐色	底・面		
1172	SD1420-21a-23E10	SD1420-21	深鉢						0.000	金・雲・長	体：縦位沈線文+縄文L	ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	体		
1173	SD1420-21d-26D6	SD1420-21	深鉢				?		?	角・雲・長	波状口縁、口：ナデ・縄文LR・沈線文	ナデ	7.5YR灰褐色	10YR灰黄褐色	口		
1174	SD1420-21d-25D18	SD1420-21	浅鉢	A1	b1		(24.0)		0.125	金・雲・長	山形1、口：浮線文④、ナデ	口：肥厚・平行沈線文、ナデ・ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YR暗褐色	口	口濃い	内外面赤彩
1175	SD1420-21c-22D16・20	SD1420-21	浅鉢	A1	d2	10.6	17.2	5.9	0.375	金・雲・長	波状口縁、口：浮線文④、体：ミガキ	口：突帯状・平行沈線文、ナデ・ ミガキ	7.5YR褐灰色	7.5YR褐灰色	口～底	口～底	内外面口縁赤彩、 1.29ℓ
1176	SD1420-21d-25D13	SD1420-21	浅鉢	B1	a1		(25.0)		0.125	金・雲・長	山形1、口：浮線文（浮）、ミガキ	口：肥厚・平行沈線文、ミガキ	10YR褐灰色	10YR灰黄褐色			内外面赤彩
1177	SD1420-21d-22D14	SD1420-21	浅鉢	B1	a1		?		?	金・雲・長	口：浮線文④	口：平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口		

土器観察表（33）

報告No.	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
1178	SD1420-21d-26C7･8･27C24	SD1420-21	浅鉢	B1	a2		(17.6)		0.125	雲･長多い	山形2、口：浮線文③･縄文LR、丁寧なナデ	口：肥厚･平行沈線文、丁寧なナデ･ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒色	口～体上	口～体上	
1179	SD1420-21a-21E9	SD1420-21	浅鉢	B1	a3		(28.0)		0.125	金･雲･長	山形1、口：浮線文③、ナデ	ナデ+ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口	口	
1180	SD1420-21c-21D25	SD1420-21	浅鉢	B1	b1		19.0		0.250	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文④、ミガキ	口：突帯状･平行沈線文、ミガキ	7.5YR褐灰色	7.5YR褐灰色	口体上	口	内外面赤彩
1181	SD1420-21a-21E9	SD1420-21	浅鉢	B1	b1		(25.0)		0.125	金･雲･長	口：浮線文（浮）	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒色	口	口	
1182	SD1420-21a-22D9	SD1420-21	浅鉢	B1	b1		(26.6)		0.125	金･雲･長	山形1、口：浮線文④	口：肥厚、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR黒褐色	口	口	
1183	SD1420-21c-22D21	SD1420-21	浅鉢	B1	b3		(34.0)		0.125	金･雲･長	口：浮線文（浮）、体：ミガキ	ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄褐色	口体上	口体上	
1184	SD1420-21a-21D9	SD1420-21	浅鉢	B1	b3		(17.0)		0.188	金･雲･長	口：浮線文②	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口	口	
1185	SD1420-21b-22D14	SD1420-21	浅鉢	B1	b4		(20.2)		0.125	金･雲･長	山形2、口：浮線文③	丁寧なナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口		
1186	SD1420-21c-21D20	SD1420-21	浅鉢	C1	d2		(20.8)		0.063	雲･長	口：浮線文③、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～体上	口～体上	内外面赤彩
1187	SD1420-21d-25D8,同21a-22D12	SD1420-21	浅鉢	B1	d3		(29.0)		0.125	金･雲･長	口：浮線文（浮）、ナデ	ナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	口濃い	口濃い	
1188	SD1420-21d-24C23	SD1420-21	浅鉢	B1	d3		(19.0)		0.125	金･雲･長	口：浮線文（浮）、ナデ	口：突帯状･平行沈線文、丁寧なナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口	口	赤彩
1189	SD1420-21c-22D17	SD1420-21	浅鉢	B1	e2		(16.8)		0.063	金･雲･長	口：浮線文④、体：ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口体上	口体上	
1190	SD1420-21d-24C13･15･23	SD1420-21	浅鉢	B1	e2		?		?	金･雲･長	口：浮線文③、体：縄文RL	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR黒褐色	口～体上	口～体上	
1191	SD1420-21d-25D14	SD1420-21	浅鉢	B1	f1		(25.0)		0.125	金･雲･長	口：浮線文④、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR黒色	7.5YR黒色	口～体上	口～体上	
1192	SD1420-21c-21D20･22D16	SD1420-21	浅鉢	B1	f2		(24.0)		0.125	金多い･長	口：幅広沈線･浮線文（浮）、体：ミガキ	ミガキ	10YR黒色	10YR黒色			2.70ℓ
1193	SD1420-21d-25D8	SD1420-21	浅鉢	A2a			(26.0)		0.063	金･雲･長	口：平行沈線文、顎：ミガキ、体上：眼鏡状隆帯文	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	2.5Y黒色	10YR黒色	口～肩濃い	口～肩濃い	
1194	SD1420-21a-21D9	SD1420-21	浅鉢	C2a			(20.0)		0.063	金･雲･長	口：縄文R+浮線文④	口：肥厚、ナデ･ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口濃い	口	
1195	SD1420-21d-26C16	SD1420-21	浅鉢	B2a			(17.0)		0.063	金･雲･長	山形2、端：沈線･ミガキ、口：浮線文②	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄褐色	口～体上	体上	赤彩
1196	SD1420-21a-21D9	SD1420-21	浅鉢	B2a			(15.0)		0.063	雲･長	口：平行沈線文･反転部あり、ミガキ	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口体上	口	
1197	SD1420-21a-21D9	SD1420-21	浅鉢	C2b			(17.8)		0.125	雲･長	口：工字文④、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口	口	外面赤彩
1198	SD1420-21c-21D20	SD1420-21	浅鉢	C1	a4		(20.6)		0.063	金･雲･長	口：浮線文③、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YR褐灰色	10YR灰黄褐色	口体上	口体上	内外面赤彩
1199	SD1420-21a-21E9	SD1420-21	浅鉢	C1	b1		(25.0)		0.125	金･雲･長	口：浮線文（浮）	口：肥厚･平行沈線文、丁寧なナデ	10YRにぶい黄橙色	10YR褐灰色			内面赤彩
1200	SD1420-21d-26D4	SD1420-21	浅鉢	C1	b3	10.7	24.5	6.6	0.688	金･雲･長	口：浮線文（浮）、体：ミガキ、面：網代痕	口：肥厚、ナデ･ミガキ	2.5Y暗灰黄色	10YR黒褐色	口～底	口～底･面、体上バンド状	2.44ℓ
1201	SD1420-21a-21･22D9･21E9	SD1420-21	浅鉢	C1	b3･d1		(17.0)		0.063	金･雲･長	口：浮線文③、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ナデ+ミガキ	10YR黒色	10YRにぶい黄橙色	口～体		0.95ℓ
1202	SD1420-21c-21D20	SD1420-21	浅鉢	C1	b3		17.0		0.250	金･雲･長	山形2、口：浮線文･ミガキ	口：平行沈線文、丁寧なナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	体上	口	内外面赤彩
1203	SD1420-21a-22D14	SD1420-21	浅鉢	C1	d4		(26.4)		0.063	金･雲･長	口：浮線文③、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口	口	内外面赤彩
1204	SD1420-21a-22D7	SD1420-21	浅鉢	C1	e2		(20.3)		0.063	海骨･雲･長	口：浮線文④、ナデ･ミガキ	ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口体上	口体上	
1205	SD1420-21a-22D10･14	SD1420-21	浅鉢	C1	e2		(25.6)		0.063	金･雲･長	口：浮線文（浮）、体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YR黒褐色	口	口～体下	
1206	SD1420-21c-22D17	SD1420-21	浅鉢	C1	e2	9.0	20.5	6.0	0.563	金･雲･長	口：浮線文④、体：ミガキ	口：突帯状･平行沈線文、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～肩	口～底･面	1.23ℓ
1207	SD1420-21c-21D20	SD1420-21	浅鉢	C1	f2		(22.0)		0.125	雲･長	口：浮線文④、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR黒褐色	口	口	内外面赤彩
1208	SD1420-21c-23D1	SD1420-21	浅鉢	C2a					0.000	雲･長	口：楕円文（浮線）	ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YR灰黄褐色			
1209	SD1420-21c-21D9･22D15	SD1420-21	浅鉢	C6			(14.0)		0.188	雲･長	口：楕円状沈線文	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口	口	外面赤彩
1210	SD1420-21d-26C6～8･27C11	SD1420-21	浅鉢	C3		10.2	21.8	7.2	0.188	金･雲･長	口：匹字文（浮）･交点突起に縦位スリット、ミガキ	ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR黒褐色	口体濃い	口	2.14ℓ
1211	SD1420-21c-21D5,同21a-21D5･22D10	SD1420-21	浅鉢	C3		8.9	20.2	6.3	0.063	雲･長	山形1、口：匹字文③、ミガキ、体：ミガキ	ナデ･ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～底	口～底･面	外面口縁赤彩、1.15ℓ
1212	SD1420-21d-25C13･26C8･27C8,同11e-26C12	SD1420-21	浅鉢	C3			26.5		0.313	海骨･金･雲	口：匹字文③、ミガキ	口：平行沈線文	7.5YR灰褐色	7.5YR黒褐色	口体上	口体上	内外面赤彩
1213	SD1420-21d-24C14･25C6･26C9,同21c-22D7･16,同21a-21D5･9	SD1420-21	浅鉢	C4c			25.0		0.500	海骨･雲･砂粒少ない	山形1、口：工字文（沈）、ミガキ	口：平行沈線文･ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒色			
1214	SD1420-21c-22D7	SD1420-21	浅鉢	C6			(22.8)		0.125	金･雲･長	口：目字状文、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口濃い	口濃い	外面赤彩
1215	SD1420-21c-21D25	SD1420-21	浅鉢	C7			(19.8)		0.063	金･雲･長	口：綾杉文、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR黒褐色	口体上	口体上	内外面赤彩
1216	SD1420-21d-27C19	SD1420-21	浅鉢	C8		6.8	17.7	6.4	0.750	雲･長	口：平行沈線文（浮）、体：ミガキ、底：ナデ･ミガキヨコ	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒色	口～底	口～体下	外面口縁赤彩、0.85ℓ
1217	SD1420-21d-24D4	SD1420-21	浅鉢	D1	a1		?		?	金･雲･長	口：浮線文④、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～体上	口～体上	
1218	SD1420-21c･21a-22D16	SD1420-21	浅鉢	D1	f2		(20.0)		0.063	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文④、体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YR黒褐色	口体上	口体上	内外面赤彩
1219	SD1420-21c-21D25	SD1420-21	浅鉢	D2a			(26.8)		0.163	金･雲･長	口：工字文②、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR灰褐色	口	口	
1220	SD1420-21c-21D25	SD1420-21	浅鉢	D10		5.7	11.5	7.0	0.250	金･雲･長	端：4個の押圧文4単位、体：ケズリ、面：ナデ	ナデ、面：ケズリ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			0.21ℓ
1221	SD1420-21a-21D9	SD1420-21	浅鉢	D10		4.8	11.1	5.6	1.000	海骨･雲	口～底：ナデ+ミガキヨコ	ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR褐灰色		口	外面口縁～底･内面口縁赤彩、0.17ℓ
1222	SD1420-21c-21D11	SD1420-21	浅鉢	F1	e1		(20.4)		0.063	金･雲･長	口：浮線文、ナデ	ミガキ	10YR褐灰色	10YR灰黄褐色	口体上	体上	
1223	SD1420-21a-22D8	SD1420-21	浅鉢	F3			22.2		0.375	雲･長	口：匹字文+縄文LR、顎：ミガキヨコ、肩：匹字文、体：縄文LR	ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～体下濃い	口～体下濃い	内面漆？、2.44ℓ

土器観察表（34）

報告No.	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
1224	SD1420-21c-22D25	SD1420-21	浅鉢	F7				4.8	0.000	雲・長	肩：鋸歯状沈線文、体：ナデ、 面：ササ痕？	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色		体	
1225	SD1420-21c-22D1	SD1420-21	浅鉢	E10		7.7	20.0	12.0	0.375	金・雲・長多い	端：沈線文、ナデ+ミガキヨコ	口：突帯状、ミガキ	2.5Y淡黄色	2.5Y暗灰黄色	口～底	口～底	1.29ℓ
1226	SD1420-21d-27D1,同21a-26C19	SD1420-21	浅鉢	G2b			25.0		0.250	英・雲	口：工字文（沈）、ミガキ、体：縄文RL	口：肥厚・平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～体下	口～体下	内外面赤彩、焼成硬質、2.89ℓ
1227	SD1420-21c-22C13	SD1420-21	浅鉢	G2a			(14.4)		0.125	金・雲・長	口：沈線を途切って工字文とする、ミガキ	ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄褐色			
1228	SD1420-21a-22D5	SD1420-21	浅鉢	G2b			(16.0)		0.125	海骨・雲	口：工字文、ミガキ	ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口体上	口体上	内外面赤彩
1229	SD1420-21c-21E8	SD1420-21	浅鉢	G5a			(26.0)		0.125	雲・長	口：変形匹字文	口：突帯状・平行沈線文	10YR褐灰色	10YR黒褐色	口	口	
1230	SD1420-11e-26C12	SD1420-21	浅鉢	H8			(16.4)		0.063	海骨・雲・砂粒少ない	口：平行沈線文③、隆帯上は列点文、ミガキ	口：突帯状・平行沈線文、ナデ・ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～体	口～体	
1231	SD1420-21a-22D10	SD1420-21	鉢	A			(14.8)		0.125	金・雲・長	口：工字文、体：ミガキ	口：肥厚、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口体上	口	
1232	SD1420-21c-21D9・22D11, 同21a-21D9・23D4	SD1420-21	浅鉢	H4a		14.9	34.4	8.4	0.250	英・海骨・雲・砂粒少ない	山形2、口：工字文（沈）、ミガキ	口：肥厚・平行沈線文、ミガキ著しい	10YR黒色	10YR黒色	口～底	口体上	7.24ℓ
1233	SD1420-21c-21D9,同21a-21D9・ 21E9	SD1420-21	鉢	A	f1	6.4	8.3	6.0	0.500	金・雲・長	口：浮線文③、体：ミガキ	ミガキ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口～底	口～底・面	外面口縁赤彩、0.22ℓ
1234	SD1420-21d-24D7・25D6	SD1420-21	鉢	E		15.7	18.1	8.8	0.188	金・雲・長	山形1、口：平行沈線文、口体：縄文L、肩：結節縄文L、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	2.5Y暗灰黄色	2.5Y黒褐色	口～底スス		外面口縁赤彩、3.22ℓ
1235	SD1420-21a-23D11	SD1420-21	鉢	E		9.9	12.9	6.4	0.438	金・雲・長	山形1、口：縄文LR・平行沈線文、 頸：ミガキヨコ、体：縄文LR	ミガキ	2.5YR黒褐色	2.5YR黒褐色	口～底・面濃い	口～底・面濃い	0.72ℓ
1236	SD1420-21c-21D	SD1420-21	台付浅鉢					7.8	0.000	雲・長	台：縄文LR・平行沈線文・縦位沈線文5単位	ミガキ	2.5Y灰黄色	2.5Y黒褐色	台	面	
1237	SD1420-21d-24D8	SD1420-21	台付浅鉢					5.5	0.000	金・雲・長	体下：縄文LR、台：ナデ	ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YR黒褐色	体下	底・面	
1238	SD1420-21C-21E4・8	SD1420-21	甕	A1a	a2		(27.0)		0.188	金・雲・長	口：刺突列点文、頸：浮線文（浮）、 肩：縄文R	ナデ・ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
1239	SD1420-21d-25C8,同21c-23D1, 24C22	SD1420-21	甕	A3e			(13.4)		0.125	金・雲・長	山形1、口：条痕文、頸：ナデ、 肩：撚糸文R	ナデ	10YR黒色	10YR黒色	口～肩	口～肩	
1240	SD1420-21d-26C7	SD1420-21	甕	A1b		18.2	16.0	7.8	0.250	金・雲・長	口頸：縄文LR+綾杉文、体：縄文LR、 底：ナデヨコ	ナデ・ミガキ	10YRにぶい黄色	10YR灰黄色	口頸		2.83ℓ
1241	SD1420-21c-22D21,同21a-22D16	SD1420-21	甕	B1b			(27.0)		0.125	金・雲・長	口頸：交互綾杉文、体：縄文LR	ナデ・ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～体上濃い	口～体上	
1242	SD1420-21c-22D12	SD1420-21	甕	B1b			(15.4)		0.125	金・雲・長	口頸：綾杉文、肩体：縄文LR	ナデ・ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～体上濃い	口～体上濃い	
1243	SD1420-21d-24D3	SD1420-21	甕	B2a	e3		(32.0)		0.125	金・雲・長	口：浮線文（浮）、頸：斜線文、 肩体：縄文LR	丁寧なナデ	10YR黒色	10YR黒色	口～肩濃い	頸肩濃い	
1244	SD1420-21d-25D14	SD1420-21	甕	B2a	a2・e2		(14.0)		0.063	金・雲・長	口：浮線文④、頸：綾杉文、肩：浮線文、 体：条痕文	丁寧なナデ	7.5YR黒色	7.5YR黒褐色	口～肩濃い	口～肩濃い	
1245	SD1420-21c-22D22	SD1420-21	甕	B2a			(16.2)		0.125	金・雲・長	山形1、口頸：縄文LR+綾杉文、 肩：工字文、体：縄文LR	ナデ	10YR黒色	10YR黒色	口～肩濃い	口～肩	外面漆？
1246	SD1420-21c-23D5	SD1420-21	甕	B2a					0.000	金・雲・長	頸：綾杉文、肩：平行沈線文+刺突列点文、体：条痕文	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
1247	SD1420-21d-25D10	SD1420-21	甕	B3a	e1		(37.2)		0.125	金・雲・長	山形1、口：平行沈線文・縄文LR、 頸：ナデ、肩：浮線文④、体：縄文LR	ナデ・ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	体上		
1248	SD1420-21d-27D8	SD1420-21	甕	B3a	e1				0.000	金・雲・長	頸：ナデ、肩：浮線文④	ナデ	10YR黒褐色	10YR褐灰色	頸肩		
1249	SD1420-21a-22D21	SD1420-21	甕	B2b					0.000	雲・長	頸：縄文L、肩：縄文R+弧状沈線文④、 平行沈線文	ナデ	10YR黒色	10YR黒色	頸肩濃い	頸肩濃い	
1250	SD1420-21d-27D7	SD1420-21	甕	C1b			(28.4)		0.063	金・雲・長	口：縄文L+平行沈線文、頸：斜線文	ナデ・ミガキ	10YR黒色	10YR灰黄褐色	口頸	口頸	
1251	SD1420-21d-27D3	SD1420-21	甕	B2b	f1		(35.4)		0.125	雲・長	口：平行沈線文・縄文LR、頸：縄文LR、 肩：浮線文④+縄文LR	ナデ	10YR黒色	10YR黒色	口～肩濃い	口～肩濃い	
1252	SD1420-21d-26D4	SD1420-21	甕	C1a	e2		(19.0)		0.063	金・雲・長	山形1、口頸：浮線文④、肩体：縄文LR	ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～体上濃い	体上濃い、口	
1253	SD1420-21d-24D4・25D14・ 27C16・22	SD1420-21	甕	C3a	d1		(15.0)		0.125	雲・長	口：縄文LR+浮線文④、頸：ミガキ、 肩：浮線文、体：縄文LR	口：平行沈線文、ナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～体下	口～体下	1.63ℓ
1254	SD1420-21a-22D14	SD1420-21	甕	C3b			(11.0)		0.063	雲・長	山形1、口：縄文LR+平行沈線文、 頸：ミガキヨコ、肩：三角形集合沈線文、 体：縄文LR	ミガキ	10YR褐色	10YR褐灰色	口～体下	口～体下	
1255	SD1420-21d-26C9・25・27C24, 同11e-26C15	SD1420-21	甕	C3c			35.6		0.375	金・雲・長	山形1、口：条痕文、頸：ナデ、 肩：眼鏡状文・綾杉文	ナデ・ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口～肩		
1256	SD1420-21c-21D21・24, 同21a-22D16	SD1420-21	甕	C3c				6.7	0.000	雲・長	肩：浮線文・綾杉文、体：縄文LR	ナデ・ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	肩～体下	肩～底	
1257	SD1420-21c-22D16・21	SD1420-21	甕	C3c		9.6	10.8	5.0	0.125	金・雲・長	口：平行沈線文、頸：ナデヨコ、 肩：工字文・綾杉文、体：ナデ・ミガキ	口：平行沈線文、ナデ・ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口～体下濃い	口～底濃い	0.48ℓ
1258	SD1420-21d-26C10・15, 同11e-26C15	SD1420-21	甕	C3d			(18.0)		0.125	金・雲・長	山形1、口：縄文LR+平行沈線文、頸： ナデ、肩：結節縄文LR、体：条痕文	丁寧なナデ・ミガキ	10YR黒褐色	10YRにぶい黄橙色	口～体上		2.46ℓ

土器観察表（35）

報告№	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
1259	SD1420-21d-26C8	SD1420-21	甕	C3d			(12.0)		0.063	金･雲･長	口：縄文LR+平行沈線文、頸：ナデヨコ、肩：平行沈線文+列点文	口：平行沈線文、ミガキヨコ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～肩濃い	口～肩	
1260	SD1420-21d-27D2	SD1420-21	甕	C3d			(18.0)		0.063	雲･長	口：平行沈線文、頸：ミガキ	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口頸	口頸	
1261	SD1420-21d-24C15,同21c-22D13,同21a-18F1	SD1420-21	甕	C3d			(39.1)		0.125	金･雲･長	山形1、口：平行沈線文、頸：ナデヨコ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口頸		
1262	SD1420-21a-22D7	SD1420-21	甕	D3a			(24.0)		0.125	金･雲･長	口：縄文R+平行沈線文、頸：ミガキヨコ、肩：縄文R+匹字文	口：指頭状圧痕、ミガキ	10YR黒褐色	10YR褐灰色	口～肩濃い	口～肩	
1263	SD1420-21a-22D14	SD1420-21	甕	D1a	b4		(28.0)		0.125	雲･長	山形1、口頸：縄文LR･浮線文（浮）、肩：縄文LR	口：平行沈線文、ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口頸濃い	口頸濃い	
1264	SD1420-21b-23D1	SD1420-21	甕	D3d			(20.4)		0.125	雲･長	楕円状突起、口：平行沈線文②･縄文LR、頸：ナデ･ミガキ、肩：縄文LR･結節縄文LR	ナデ･ミガキヨコ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～肩	口～肩	
1265	SD1420-21c-21D25	SD1420-21	甕	D3d			31.0		0.250	金･雲･長	山形1、口：縄文LR･列点文･平行沈線文、頸：ナデ、肩：結節縄文LR、体：縄文LR+条痕文（9㎜）	丁寧なナデ	10YR黒色	10YR黒色	口～体上	口～体下	
1266	SD1420-21a-22D12･13	SD1420-21	甕	D3d			15.0		0.375	金･雲･長	山形2、口：縄文L+平行沈線文、頸：ミガキ、肩：条痕文+縄文L	ナデ･ミガキ	7.5YR黒色	7.5YR黒褐色	口～体上濃い	口～体上濃い	
1267	SD1420-21a-17F13	SD1420-21	甕	D3e			(33.0)		0.063	金･雲･長	口：複合口縁･弧状･肥厚、肩：結節縄文LR	ナデ	10YRにぶい黄褐色	10YR褐灰色			内外面摩滅
1268	SD1420-21a-23D3	SD1420-21	甕	E1a	d3		(12.0)		0.063	雲･長	口：浮線文（浮）、頸：ナデ	ナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～頸	口～頸濃い	
1269	SD1420-21c-20E10	SD1420-21	甕	E1b			(32.0)		0.125	金･雲･長	山形1･2、口頸：交互綾杉文･刺突文、肩：撚糸文R	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR褐灰色	口～肩	口～肩	
1270	SD1420-21d-24C14,同21c-22C22,同21a-22C25･23D4	SD1420-21	甕	E1b			22.0		0.313	雲･長	口頸：縄文R+三角形集合沈線文	ナデ	10YR黒色	10YR黒色	口～肩	口～肩	
1271	SD1420-21d-24D7	SD1420-21	甕	E1b			(20.0)		0.063	金･雲･長	山形2、口：三角形集合沈線文	ナデ･ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒色	口濃い	口	
1272	SD1420-21c-21D20,同21a-23D6	SD1420-21	甕	E1b			(26.0)		0.125	金･雲･長	口：縄文LR+平行沈線文、頸：三角形集合沈線文+刺突文	ナデヨコ	10YR黒色	10YR灰黄褐色	口頸		
1273	SD1420-21c-22D11	SD1420-21	甕	E2a	e3		(42.0)		0.125	金･雲･長	山形1、口：平行沈線文、頸：交互綾杉文、肩：浮線文④、体：撚糸文R	ナデ･ミガキ	10YR褐灰色	10YR褐灰色	肩体上		
1274	SD1420-21d-26C23･27D1	SD1420-21	甕	E3b		18.1	17.7	6.6	0.625	金･雲･長	山形2、口：縄文L･平行沈線文③、頸：ナデヨコ、肩：綾杉文、体：条痕文、体下：ナデ左上、底：ケズリ左、面：ササ痕？	ナデ	2.5Y黒褐色	2.5Y黒褐色	口～底	口体下底濃い	焼成後穿孔、2.25ℓ
1275	SD1420-21c-22D2･6･7,同21a-22D12･15	SD1420-21	甕	E3d			18.6		0.438	金･雲･長	山形1･2、口：縄文R+平行沈線文、頸：ミガキ、肩体：縄文R	ナデ	7.5YR灰褐色	7.5YR灰褐色	口～体上	口	
1276	SD1420-21d-24D6･7	SD1420-21	甕	E3b			(37.0)		0.188	金･雲･長	山形1、口：縄文LR？+平行沈線文、頸：丁寧なナデ、肩：綾杉文？	ナデ･ミガキ	10YRにぶい黄褐色	10YR暗褐色	口		
1277	SD1420-21d-27C8	SD1420-21	甕	E3d			(24.0)		0.063	金･雲･長	口：縄文LR+平行沈線文、頸：ミガキ、肩：結節縄文LR	ナデ･ミガキ	10YR褐灰色	10YR褐灰色	口～肩	口～肩	
1278	SD1420-21a-23D2･15	SD1420-21	甕	E3d			(30.0)		0.125	金･雲･長	口：縄文LR+平行沈線文②、頸：ミガキヨコ、肩：平行沈線文②	ナデヨコ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～肩濃い	口	
1279	SD1420-21d-24C15	SD1420-21	甕	E3d			(14.0)		0.063	金･雲･長	山形1、口：縄文R+平行沈線文、肩：縄文R	ナデ+ミガキ	10YR黒色	10YR灰黄褐色	口～肩	口～肩	
1280	SD1420-21d-24C22･26C8	SD1420-21	甕	E3d			(10.8)		0.125	雲･長	山形2、口頸：平行沈線文、ナデ、肩体：ナデタテ	ナデヨコ	2.5Y黒色	10YR黒褐色	頸～体	口～体上	
1281	SD1420-21d-27D1	SD1420-21	甕	E3d			(12.0)		0.188	雲･長	山形1、口：平行沈線文③･橋状隆帯、頸：ナデ、肩：平行沈線文（浮）	口：平行沈線文、ケズリ	10YR黒色	10YR黒色	口～肩濃い	口～肩濃い	
1282	SD1420-21d-26C7･8	SD1420-21	甕	E3d			(16.0)		0.063	金･雲･長	口：平行沈線文③、頸：丁寧なナデ、肩：平行沈線文･条痕文+波状沈線文	ナデヨコ	2.5Y黒色	10YR黒色	口～肩	口～肩	
1283	SD1420-21d-25D9	SD1420-21	甕	E3d		11.9	12.4	7.3	0.813	金･雲･長	山形1･2、口～体：縄文R、頸：ミガキ、面：ササ？	ナデ+ミガキ	2.5Y暗灰黄色	10YR黒色	口～底、吹きこぼれもあり	口～底	0.78ℓ
1284	SD1420-21d-26C6･7	SD1420-21	甕	E3d			31.9		0.250	雲･長･白多い	山形1、口：縄文LR･平行沈線文、頸：丁寧なナデ、肩：縄文LR、体：条痕文（5㎜･3条）	丁寧なナデ	2.5Y灰色	2.5Y暗灰黄色	口～底濃い	口～底濃い	
1285	SD1420-21d-26C8	SD1420-21	甕	E2e			(27.6)		0.063	金･雲･長	口～体：縄文LR	ナデヨコ	2.5Y黒色	2.5Y黒色	口～体	口～体	
1286	SD1420-21d-26C21	SD1420-21	甕	E2e			(20.0)		0.063	金･雲･長	口～体：縄文RR？	ミガキ	10YR黒褐色	10YR褐灰色	口～体	体下	3.33ℓ
1287	SD1420-21d-24C2,同21a-22D15,同17b-17F21	SD1420-21	甕	E3e			(32.5)		0.125	金･雲･長	口：肥厚、口肩：条痕文、頸：丁寧なナデ	丁寧なナデ	10YR黒褐色	10YR灰黄褐色	口～肩	口～肩	
1288	SD1420-21d-25C10	SD1420-21	甕	E3e			(25.0)		0.125	金･雲･長	口：複合口縁･縄文L、頸：ミガキ	ミガキ	2.5Y黒色	10YRにぶい黄橙色	口頸濃い		
1289	SD1420-21c-21D24･25	SD1420-21	甕	E2e			(33.0)		0.125	雲･長	口：結節縄文R、頸：縄文R	ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口頸濃い	口頸濃い	
1290	SD1420-21c-21D20,同21a-21D9	SD1420-21	甕	E3e		14.0	12.2	6.8	0.625	金多い･長	口体：縄文R、頸：ナデヨコ、面：網代痕	ナデ、体下：ケズリ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口～体上、底：スス	体上下オコゲ状	0.91ℓ
1291	SD1420-21d-26C3･4･7～9･14･15･27C8･9･11･16･20･21	SD1420-21	甕	F1b		45.6	35.5	10.8	0.250	金･雲･長	口：平行沈線文、頸：綾杉文、口～肩：縄文LR、肩体：条痕文（幅約1㎝）	丁寧なナデ	2.5Y黄灰色	2.5Y暗灰黄色	肩～体上濃い、底バンド状	口～体上、体下バンド状	21.64ℓ

土器観察表（36）

報告No.	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
1292	SD1420-21C-20D18・21D9・13・22D11・22,同21a-21D4・9・13・22D5・12・15	SD1420-21	甕	F3b			36.0		0.500	金・雲・長	山形2、口：平行沈線文・縄文R、頸：丁寧なナデヨコ+粗いナデ左上、肩：縄文R+綾杉文	口：平行沈線文2条、丁寧なナデ	2.5Y暗灰褐色	2.5Y灰黄色			
1293	SD1420-21d-25D8	SD1420-21	甕		e2？				0.000	金・雲・長	頸：楕円文？、肩：浮線文、体：条痕文	丁寧なナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい灰黄褐色	体		
1294	SD1420-21d-19E15,同21b-19E12,同21a-22D10	SD1420-21	甕				(12.0)		0.125	雲・長	口：隆帯貼付による三角文、ナデ	口：平行沈線文、ナデ	10YR褐灰色	10YRにぶい黄褐色			
1295	SD1420-21d-25D14	SD1420-21	甕						0.000	金・雲・長	肩：「日」字文④、体：条痕文	ナデ	2.5Y黒色	2.5Y黒褐色	肩体	肩体	
1296	SD1420-21d-27D2	SD1420-21	甕						0.000	金・雲・長	肩：平沈間に斜線文・結節縄文RL、体：条痕文	ナデ	10YR褐灰色	10YR灰黄褐色			
1297	SD1420-21d-25D13	SD1420-21	甕		f2			9.2	0.000	金・雲・長	頸：縄文L、肩：浮線文④、体：縄文L	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色	頸～体下	体下	
1298	SD1420-21c-22D6	SD1420-21	深鉢	A5			(34.0)		0.063	金・雲・長	口：条痕文+波状沈線文・平行沈線文、体：条痕文	ナデ・ミガキ	10YR黒色	10YRにぶい黄褐色	口体上濃い	口体上	
1299	SD1420-21c-21D20	SD1420-21	深鉢	A7a			(25.0)		0.188	雲・長	口：ナデ、体：縄文LR	ナデ	10YR褐灰色	10YR黒褐色	口濃い	口	
1300	SD1420-21d-25C13・26C16	SD1420-21	深鉢	A7d			30.6		0.250	金・雲・長	口：条痕文	ナデ・ミガキ	7.5YR黒色	7.5YR黒褐色	口濃い	口	
1301	SD1420-21a-22D16	SD1420-21	深鉢	A8			(26.6)		0.125	金・雲・長	口：指頭状圧痕・平行沈線文、体上：ケズリ・ナデ	ナデ・ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色	口体上		
1302	SD1420-21c-21D24	SD1420-21	深鉢	B6a			(39.4)		0.063	雲・長	口：平行沈線文+縄文LR	ナデ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口体上濃い	口体上濃い	内外面赤彩
1303	SD1420-21d-27D1	SD1420-21	深鉢	B6a			(27.6)		0.063	金・雲・長	端：連続押圧、口：平行沈線文、体：縄文LR	ナデ・ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
1304	SD1420-21c-22D16	SD1420-21	深鉢	B6a			(28.0)		0.063	金・雲・長	山形1、口：平行沈線文・縄文LR	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR黒色	口体上		
1305	SD1420-21d-25D13・26C6,同21c-21D24・22C1,同21a-25D13・22D14	SD1420-21	深鉢	B6d			13.8		0.563	金・雲・長	山形1、楕円状突起、口：平行沈線文、口～体：縄文R	ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口体上濃い	口体上濃い	
1306	SD1420-21d-24D3	SD1420-21	深鉢	B6d			(26.0)		0.063	雲・長	口：条痕文+平行沈線文、体：条痕文	ナデ・ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～体上	口～体上	
1307	SD1420-21d-26C7・15	SD1420-21	深鉢	B7a			(27.0)		0.188	金・雲・長	山形2、端：ミガキ、口体：縄文Rヨコ	ナデ・ミガキヨコ	2.5Y黒色	2.5Y黒褐色	口～体上	口～体上	
1308	SD1420-21c-21D24	SD1420-21	深鉢	B7b			(27.1)		0.125	金・雲・長	口：結節縄文LR、体：縄文LR	ナデ・ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色	口体上濃い	口体上	
1309	SD1420-21c-21D20	SD1420-21	深鉢	B7d			(32.0)		0.063	金・雲・長	口：複合口縁・下端押圧により波状・撚糸文RヨコR、体：撚糸文Rタテ	丁寧なナデ	10YR灰黄褐色	10YR黒褐色	口	口	
1310	SD1420-21c-21D25,同21a-22D17	SD1420-21	深鉢	B7d			(25.0)		0.125	雲・長	口体：条痕文タテ	ナデ・ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口体上濃い	口体上濃い	
1311	SD1420-21c-22D23	SD1420-21	深鉢	C1	a2		(10.0)		0.063	金・雲・長	口：浮線文④、体：ミガキタテ	ナデ	10YR黒褐色	10YR褐灰色	口～体下	口～体下	
1312	SD1420-21c-21D20	SD1420-21	深鉢	C1	e2		23.0		0.250	雲・長	山形1、口：浮線文④、体：縄文RR	丁寧なナデヨコ	10YR黒色	10YR黒色	口～体	口～体	
1313	SD1420-21d-24D2・27D8	SD1420-21	深鉢	C1	a2		(38.0)		0.188	金・雲・長	口：浮線文	ミガキ	10YR黒色	10YR灰黄褐色	口	口	
1314	SD1420-21b-23D1	SD1420-21	深鉢	C2			(19.0)		0.125	金・雲・長	山形1、口：縄文LR・平行沈線文・列点文	ナデ	10YR黒色	10YRにぶい黄橙色	口	口	
1315	SD1420-21a-22D13	SD1420-21	深鉢	C3			(14.0)		0.125	雲・長	口：縄文LR+綾杉文	ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口体上濃い	口体上	
1316	SD1420-21a-22D16	SD1420-21	深鉢	C6a			(22.8)		0.063	金・雲・長	山形1、口：縄文LR+平行沈線文	口：平行沈線文、ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
1317	SD1420-21d-24D7	SD1420-21	深鉢	C6e		11.2	16.2	5.4	0.625	金・雲・長	山形1、口：平行沈線文、体：ナデ・ミガキ、底：ケズリヨコ・ナデ	口：平行沈線文、ナデ・ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR黒色	口～底	面濃い、口～底	0.87ℓ
1318	SD1420-21c-20D22・21E8,同21a-21D10	SD1420-21	深鉢	C7a			(14.0)		0.125	海骨・雲・長	口体：縄文LR	ナデ	7.5YR黒色	7.5YR黒褐色	口体上濃い	体上濃い	
1319	SD1420-21d-24C21	SD1420-21	深鉢	C6a					0.000	金・雲・長(多い)	口：隆線帯、体：縄文LR	ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口～体	口～体	
1320	SD1420-21c-21D4・23C20・23D1,同21a-21D10	SD1420-21	深鉢	C7a			(22.0)		0.188	金・雲・長	口体：縄文RR	ミガキ	10YR黒色	10YR黒褐色	口～体上	口～体上	
1321	SD1420-21c-21E8・22D18	SD1420-21	深鉢	C7b			(35.0)		0.125	金・雲・長	口：条痕文タテ+結節縄文LR	ナデ	10YR黒色	10YR黒褐色	口体上濃い	口体上	
1322	SD1420-21d-27D2	SD1420-21	深鉢	C7b			(26.0)		0.125	金・雲・長	口：結節縄文L、体：縄文L	ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口濃い	口	
1323	SD1420-21d-26D8	SD1420-21	深鉢	C7d			(21.2)		0.125	英・雲	口：複合口縁・条痕文ヨコ、体：条痕文タテ	ナデ・ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口体上濃い	口体上	
1324	SD1420-21d-24C24	SD1420-21	深鉢	D8			(18.1)		0.063	金・雲・長	丁寧なナデ	口：突帯状・平行沈線文、丁寧なナデ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色	口～体上	口	
1325	SD1420-21c-21D24	SD1420-21	深鉢	D7a			(25.4)		0.188	金・雲・長	端：縄文LR、頸：ナデ、体：縄文LR	口：肥厚、ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口体上		
1326	SD1420-21d-25D9・10	SD1420-21	深鉢		e2？			7.6	0.000	金・雲・長	肩：浮線文、底：平行沈線文、ミガキ	ナデ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	体下～面	体下～面	
1327	SD1420-23d-26D10	SD1420-21	壺	A	d1	27.8	12.0	9.0	0.375	金・雲・長	口：浮線文④、頸肩境に段あり、面：網代痕	ミガキ	2.5Y黒褐色	10YRにぶい黄褐色	口～底・面	口・底・面	外面口縁赤彩、5.72ℓ
1328	SD1420-21c-22D16	SD1420-21	壺	A	f1		11.2		1.000	雲・長	山形2、口：浮線文④、頸：ミガキ	ナデ・ミガキ	10YR黒色	10YR黒色	口頸	口頸	
1329	SD1420-21d-22D13	SD1420-21	壺	A				5.2	0.000	金・雲・長	頸肩に段あり、頸：ナデ、肩～底：研磨	ナデ・ケズリ	10YRにぶい黄色・黒色	10YR褐灰色			
1330	SD1420-21a-21D9	SD1420-21	壺	B		10.7	6.6	5.5	1.000	金・雲・長	口：平行沈線文・列点文・縄文LR、頸底：ミガキヨコ、肩：結節縄文LR、体：縄文LR、面：ササ圧痕？	ナデ、体下：ケズリ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色	口～底		0.35ℓ
1331	SD1420-21c-22D16,同21a-21D9	SD1420-21	壺	B					0.000	金・雲・長	頸：ミガキヨコ、肩：工字文、体：ミガキ	ナデ	10YR褐灰色	10YR黒褐色	頸～体上	頸～体上濃い	外面赤彩
1332	SD1420-21c-21D11	SD1420-21	壺	B					0.000	金・雲・長	頸：ミガキ、肩：工字文②、ミガキ	ミガキ	7.5YR黒褐色	7.5YR黒褐色			外面赤彩

土器観察表（37）

報告№	遺構-層位-グリッド	所属層位	器種	分類	浮線文	器高	口径	底径	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備　考
1333	SD1420-21c-22C11	SD1420-21	壺	B					0.000	金･雲･長多い	肩：上下の波状沈線文	器面剥落	10YRにぶい黄褐色	10YRにぶい黄褐色	肩		
1334	SD1420-21d-24D7	SD1420-21	壺	G	e3		(17.0)		0.125	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文③	ナデ	10YR褐灰色	10YR褐灰色	口		
1335	SD1420-21a-22D9･13	SD1420-21	甕･深鉢					10.8	0.000	金･雲･長	体下：縄文LR、底：ナデヨコ	ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	2.5Y黒褐色	底･面	底･面	
1336	SD1420-21d-26C6	SD1420-21	甕･深鉢					11.8	0.000	雲･長	体下：縄文LR、底：ケズリ･ナデヨコ、面：網代痕	ナデ･ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	体下	体下面	
1337	SD1420-21c-22D16	SD1420-21	甕･深鉢					6.8	0.000	金･雲･長	体：平行沈線文･縄文LR、面：網代痕	ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	2.5Y黒褐色	体下底･面	体下底･面	
1338	SD1420-21c-21D20	SD1420-21	甕･深鉢					7.8	0.000	雲･長	体：縄文L、底：ナデヨコ、面：木葉痕	ナデ･ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YR黒褐色	体下	体下～面	
1339	SD1420-21a-21D2	SD1420-21	甕･深鉢					10.2	0.000	金･雲･長	体下：縄文R、底：ナデヨコ、面：ササ痕	ナデ	2.5Y灰黄色	2.5Y灰黄色	底	面濃い	
1340	SD1420-21a-21D9	SD1420-21	甕･深鉢					10.0	0.000	金･雲･長	底：ミガキヨコ、面：ササ痕	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			
1341	S4-14C2		浅鉢	B1	a1		(24.8)		0.063	金･雲･長	山形1、口：浮線文④、ミガキ	口：肥厚･平行沈線文	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口	口	内外面赤彩
1342	SX51-3-12E6･11～13,S4-12E11		浅鉢	B1	a3		21.0		0.500	金･雲･長	山形1、口：浮線文④、ミガキ	口：突帯状･平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色	口～体上	口	内外面赤彩、1.76ℓ
1343	S4-11D12･14,S3-11D17		浅鉢	D1	a2	10.5	27.6	8.0	0.375	金･雲･長	波状口縁、口：浮線文④、体：ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	10YR灰黄褐色	2.5Y灰黄色	口～底	口～底	外面口縁赤彩、2.05ℓ
1344	S3-16B1		浅鉢	C2b					0.000	金･雲･長	口：工字文（沈）、ミガキ	ミガキ	7.5YR褐灰色	10YR黒褐色	口体上	口体上	
1345	Ⅶ-11C14		鉢	A	d1		(12.0)		0.125	金･雲･長	口：浮線文④、体：ミガキ	ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR褐灰色			
1346	S4-14B19		甕	E2b	f1				0.000	金･雲･長	頸：刺突文、肩：浮線文④、ナデ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色		頸肩	
1347	SX51-2b-13D1		浅鉢	D1	e3		(31.0)		0.125	金･雲･長	山形1、口：浮線文④、ミガキ	口：平行沈線文、ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR灰褐色	口体上	口体上	
1348	SX51-3-13D18･19,同2-13D10,S2-13D17･18･23		甕	B3d		50.4	35.2	12.2	0.313	金･雲･長	波状口縁、口：縄文LR･平行沈線文、肩：網目状撚糸文R+縄文LR、体：網目状撚糸文	ナデ	2.5Yにぶい黄色	2.5Y暗灰黄色	口～体上底	体上、体下バンド状	35.30ℓ
1349	S4-10C24		深鉢	C5			?		?	金･雲･長	口：波状沈線文、下端に幅広沈線を施し肥厚させている	ナデ	7.5YRにぶい橙色	7.5YRにぶい褐色			
1350	S3-12C7		深鉢	C7b			?		?	雲･長	口：複合口縁･結節縄文R、体：縄文R	ナデ	10YRにぶい黄橙色	10YR灰黄褐色	体上	口体上	
1351	SX51-3-11A8		壺	C				8.0	0.000	金･雲･長	肩～底に逆「U」字状の隆帯4単位、「冂」字状沈線文で充填	ケズリ･ナデ	10YR灰黄褐色	10YRにぶい黄橙色	体下底		外面赤彩
1352	13G3･4･8･9		浅鉢	B1	a3		(11.0)		0.063	金･雲･長	口：浮線文②	口：平行沈線文、ナデ	7.5YR褐灰色	7.5YR褐灰色			用水路工事立会い、外面赤彩
1353	12G2･3･7･8		浅鉢	C1	b1		(27.0)	9.2	0.125	金･雲･長	口：浮線文（浮）、ミガキ	口：肥厚、ミガキ	10YR黒褐色	10YR黒褐色	口体上	口～面	用水路工事立会い、外面赤彩、4.17ℓ
1354	11G4･5･9･10,12G2･3･7･8		浅鉢	D1	d1・e2		(26.0)		0.125	金･雲･長	口：浮線文③	ミガキ	7.5YR灰褐色	7.5YR灰褐色	口	口	用水路工事立会い
1355	11G4･5･9･10,12G1～3･6～8		浅鉢	D8		4.2	10.2	3.8	0.500	海骨･雲	口：平行沈線文、ナデ	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口体上	底･面	用水路工事立会い、0.14ℓ
1356	12G2･3･7･8		鉢	E					0.000	金･雲･長	頸：ミガキ、体：平行沈線文･縦位沈線文	ミガキ	7.5YRにぶい褐色	7.5YRにぶい褐色			用水路工事立会い
1357	12G2～4･7～9		甕	C3a			15.0		0.313	雲･長	山形1･2、口～頸：橋状把手、口：縄文LR+平行沈線文③､頸：ミガキ、肩：縄文LR+工字文	ナデ	10YR黒色	10YR灰黄褐色	口～肩濃い	肩	用水路工事立会い
1358	14G2･3･7･8		甕	E3a	f2				0.000	雲･長	頸：ミガキ、肩：浮線文、体上：縄文LR	ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	7.5YR灰褐色	頸肩濃い	肩体上濃い	用水路工事立会い、外面赤彩
1359	11G4･5･9･10,12G1～3･6～8		甕	E3a	a2		(27.0)		0.125	金･雲･長	山形1、口：縄文LR+浮線文④	ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口		用水路工事立会い
1360	12G2～4･7～9		甕	E2a	f1		?		?	金･雲･長	山形1、口：匹字文、頸：交互綾杉文、肩：工字文、体上：縄文LR	ナデ･ミガキ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色	口		用水路工事立会い
1361	10G3～5･8～10,11G1･6		深鉢	A6d			37.0		0.313	金･雲･長	口：平行沈線文、体：条痕文（8㎜･2～7条）	ナデ+ミガキ	10YRにぶい黄橙色	10YRにぶい黄橙色			用水路工事立会い
1362	12G2･3･7･8		深鉢	B7a			32.0		0.375	金･雲･長	口：条痕文+縄文LR、体：条痕文	ナデ	7.5YR黒褐色	7.5YR灰褐色	口体上濃い		用水路工事立会い
1363	12G2･3･7･8		深鉢	B7d			(30.0)		0.125	金･雲･長	口体上：条痕文	ナデ	10YR褐灰色	10YR灰黄褐色			用水路工事立会い
1364	14G4･5･9･10		深鉢	C7a			(30.0)		0.125	金･雲･長	口：縄文LR	ナデ	10YR灰黄褐色	10YR灰黄褐色			用水路工事立会い
1365	11G3･8,12G4･9		甕	E3e			12.0		0.438	雲･長	山形2、口頸：ミガキ、体：縄文LR	丁寧なナデ	2.5Y黒褐色	2.5Y黒色	口～体下濃い	口～体下	用水路工事立会い

石器・石製品観察表（1）

報告No.	出土位置	遺構-層位	所属層位	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量（g）	欠損	被熱	付着物	備考
1	5C3	SC3-2		石鏃	ＡⅠb	玉髄	3.7	1.5	0.6	2.02	2		黒色付着物	
2	5E22		Ⅶa	石鏃	AⅢ	流紋岩B	3.3	2.2	0.6	2.65	2			
3	5F25			石鏃	AⅢ	流紋岩B	3.5	2.3	0.6	3.19				
4	5B20		Ⅶd	石鏃	C	流紋岩A	2.6	0.9	0.6	1.10			黒色付着物	
5	5C13	SC4-2		石錐	ＢⅠ	頁岩A	2.4	1.5	0.5	1.40				
6	5D20		Ⅵ	石錐	ＢⅡ	流紋岩B	2.5	1.0	0.6	1.40				
7	5B24		Ⅶ	両極石器	A	玉髄	2.4	1.4	1.0	3.11				
8	6E6		S1	不定形石器	H	頁岩A	3.5	2.1	0.7	3.73				
9	5C16	SC2-2		礫器	A	石英	8.4	7.6	5.1	413.55				
10	6E6		Ⅵ	磨石類	A	花崗岩	5.9	7.0	4.7	309.80	○			
11	11F23		Ⅵ	石鏃	ＡⅠa	頁岩A	3.2	1.2	0.5	1.05	2			
12	11F1		S1	石鏃	ＡⅠa	流紋岩B	3.7	1.2	0.5	1.26	2			
13	10E7		S2	石鏃	不明	凝灰岩A	3.3	0.9	0.5	1.08				
14	8E24	SX112-9		石鏃	ＡⅠb	頁岩A	3.2	1.2	0.5	1.44	2			
15	8E9		S3	石鏃	ＡⅠb	流紋岩A	2.6	1.2	0.5	0.80			黒色付着物	
16	8E15		S3	石鏃	ＡⅠb	鉄石英A	2.8	1.0	0.5	1.00	2			
17	9E9		S2	石鏃	ＡⅠb	玉髄	2.8	1.3	0.6	1.46				
18	9F8		S5	石鏃	不明	流紋岩B	2.6	1.2	0.5	1.00	1		黒色付着物	
19	11F19		S1	石鏃	ＡⅠb	鉄石英A	2.4	1.1	0.3	0.79	1		黒色付着物	
20	11E	SC740		石鏃	ＡⅠb	流紋岩B	2.2	0.8	0.4	0.45	1		黒色付着物 赤色顔料	
21	11E7	SC740		石鏃	ＡⅠc	流紋岩A	1.9	1.5	0.3	0.50				
22	10E5	SC735		石鏃	ＡⅡa	流紋岩A	1.9	1.0	0.4	0.43			黒色付着物	
23	8B25		Ⅶa	石鏃	ＡⅡa	流紋岩A	3.9	0.8	0.5	1.10				
24	10E7		S1	石鏃	ＡⅡa	凝灰岩B	3.6	1.1	0.8	2.50			黒色付着物	
25	9B22		S3	石鏃	ＡⅡa	流紋岩B	2.8	0.8	0.6	1.00			黒色付着物	
26	10F10		S1	石鏃	C	流紋岩A	2.4	0.7	0.3	0.46				
27	9E4		S3	石鏃	C	流紋岩A	2.2	0.9	0.5	0.80			黒色付着物	
28	9C1		S2	石鏃	C	玉髄	2.2	0.8	0.4	0.60			黒色付着物	
29	10E13		S1	石鏃	C	玉髄	1.5	0.6	0.5	0.40			黒色付着物	
30	11F16		Ⅵ	石鏃未成品		流紋岩B	3.6	2.0	0.9	5.09				
31	11E17	SC740		石鏃未成品		流紋岩A	3.6	2.4	1.3	6.40				
32	10E20		S4	石鏃未成品		流紋岩A	4.0	2.0	1.0	5.50				
33	8E4	SC111-2		石錐	AⅡ	流紋岩B	4.1	2.7	0.9	7.64				
34	11E8		S1	石錐	AⅡ	流紋岩B	5.0	2.5	0.7	5.60				
35	10F7		Ⅵ	石錐	AⅡ	流紋岩B	3.3	1.7	0.8	3.44				
36	10F16		S1	石錐	ＢⅠ	流紋岩B	3.1	1.3	0.8	2.41				片面加工
37	9E3		S3	石錐	ＢⅠ	流紋岩B	3.4	1.5	1.1	3.90				
38	11E7	SC740		石錐	ＢⅡ	流紋岩A	2.5	0.8	0.7	1.52				
39	8C21		S2	石錐	ＢⅡ	流紋岩B	2.5	0.7	0.6	0.90				
40	11E17		S1	石錐	ＢⅡ	玉髄	2.0	0.7	0.4	0.60				片面加工
41	9F15		S5	石錐	ＢⅡ	流紋岩A	1.8	0.6	0.4	0.42				
42	10E22		Ⅵ	石錐	C	流紋岩B	2.0	1.0	0.6	1.02				
43	10E14		S2	両極石器	A	流紋岩A	2.3	1.0	0.9	1.75				
44	11F15・20		Ⅵ	両極石器	A	流紋岩B	4.0	3.2	1.5	21.78		○		
45	10F20		Ⅵ	両極石器	A	流紋岩A	3.7	2.4	1.0	9.83				
46	11E8		S3	両極石器	A	流紋岩B	4.6	3.6	1.1	25.25				
47	9E12		S1	両極石器	A	流紋岩A	3.1	3.1	1.0	7.24				
48	9E25		S1	両極石器	A	頁岩A	2.0	2.3	0.9	4.37				
49	11E7		S4	両極石器	B	流紋岩A	3.7	2.8	1.1	7.03				
50	11E20		Ⅶ	両極石器	B	流紋岩B	3.6	2.9	0.9	9.09				
51	10E10		S3	不定形石器	A	流紋岩A	5.5	3.8	1.3	20.25				
52	10F19		S1	不定形石器	A	凝灰岩A	8.0	4.5	1.3	40.10				
53	9D24		S2	不定形石器	C	頁岩B	3.6	2.5	1.3	11.72				
54	10E10	SC737		不定形石器	C	頁岩B	2.9	4.6	0.8	7.81				
55	11F12		Ⅵ	不定形石器	D	流紋岩A	5.2	3.9	1.4	23.20				
56	11F6		S1	不定形石器	F	流紋岩B	5.2	5.6	1.2	28.73				
57	11E20	SC740		不定形石器	F	頁岩A	3.0	4.2	1.2	12.79				
58	11E19・20		S1	不定形石器	F	流紋岩B	2.7	6.2	1.0	13.54				
59	11F22		S1	不定形石器	H	頁岩A	2.8	4.8	0.9	9.93				
60	11F12		Ⅵ	不定形石器	H	流紋岩B	3.6	5.4	1.2	18.94				
61	8E22	SD19-23		打製石斧	A	頁岩A	10.7	6.5	2.2	191.00				
62	10F10		Ⅵ	打製石斧	A	粘板岩	7.9	4.4	2.5	88.20				
63	8G5・10			磨製石斧	不明　4023	輝緑岩	10.0	5.5	3.4	314.60	2			大形
64	9F5		S1	磨製石斧	D　4011	安山岩	9.3	4.9	2.8	203.83				大形　転用
65	9E25		S1	磨製石斧	D　4212	砂岩	7.6	4.4	1.7	82.40				大形　転用
66	11F18		Ⅵ	磨製石斧	C　4122	蛇紋岩	4.8	3.0	0.9	23.63				小形
67	8D17		S4	磨製石斧	不明　4202	安山岩	4.3	3.4	1.3	32.10	1			小形
68	11F11		Ⅵ	磨製石斧	不明　4024	輝緑岩	3.0	2.2	1.0	9.69	2			小形
69	10E9		S3	磨石類	C	花崗岩	9.7	7.6	6.0	757.19				
70	10F22		S1	磨石類	C	花崗岩	8.1	6.1	3.9	292.14				
71	9F15		Ⅵ	磨石類	D	花崗岩	9.6	7.5	6.1	653.62				
72	8F8	SD19-23		磨石類	D	花崗岩	9.2	7.7	5.1	564.11			赤色顔料	
73	8G5・10			磨石類	D	凝灰岩A	11.3	8.4	5.7	887.35		○		
74	11E15	P742		磨石類	D	砂岩	12.6	8.4	6.9	1112.20				
75	8F6	SD19-23		磨石類	D	花崗岩	9.9	8.0	5.5	683.12			赤色顔料	
76	8F8	SD19-23		磨石類	E	花崗岩	4.2	4.2	3.5	77.94			赤色顔料	
77	10E23		S1	磨石類	F	礫岩	8.3	6.1	5.1	334.77				
78	9D23		S3	磨石類	F	花崗岩	11.6	7.0	5.6	680.35				
79	9E17・18		Ⅶ	磨石類	G	砂岩	9.4	6.4	6.3	538.62				
80	8F14	SD19-23		磨石類	G	安山岩	10.0	6.2	5.9	588.96		○		
81	11F11		Ⅵ	磨石類	G	砂岩	6.4	5.2	4.9	245.98				
82	11F25		S3	多面体敲石	A	頁岩A	5.9	5.9	5.0	261.27				

石器・石製品観察表（2）

報告No.	出土位置	遺構-層位	所属層位	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量（g）	欠損	被熱	付着物	備考
83	12E11		S4	砥石	C	砂岩	10.1	7.2	3.5	320.64				
84	10F1		Ⅵ	砥石	A	砂岩	21.6	13.0	4.3	1692.24				
85	9D25		S2	石皿類	B	凝灰岩A	23.4	21.0	5.8	2460.00				
86	11E10		S3	軽石製品	AⅢ	凝灰岩A	9.0	8.2	4.1	86.10				
87	10F1		S1	石核	BⅢ	頁岩A	7.7	6.0	4.2	250.58				
88	9F14		S5	石核	BⅡ	流紋岩B	6.9	7.1	3.3	124.61			黒色付着物	
89	9E5	SC711		石核	BⅤ	流紋岩B	7.1	4.9	4.6	114.97				
90	9F10		S1	石核	BⅤ	流紋岩A	4.1	3.4	2.2	34.32				
91	12F1	SC2247		石鏃	AⅠa	流紋岩A	3.9	1.2	0.6	1.80			黒色付着物	
92	12F8	SC2247		石鏃	AⅠa	流紋岩B	3.3	0.8	0.4	0.82	2			
93	12F18		S5	石鏃	AⅠa	流紋岩A	3.6	1.1	0.6	1.62	2			
94	12E24	SC2247		石鏃	不明	鉄石英B	3.3	1.3	0.5	1.87	1		黒色付着物	
95	12F1	SC2247		石鏃	AⅠa	流紋岩B	3.1	0.9	0.5	0.63				鋸歯状
96	12E25	SC2247		石鏃	AⅠb	流紋岩A	2.9	1.0	0.6	1.00				
97	12F17	SC2266		石鏃	不明	チャート	2.6	1.0	0.5	1.15	3			
98	12E25	SC2266		石鏃	AⅠb	流紋岩B	2.4	1.2	0.3	0.74				
99	12F17	SC2266		石鏃	AⅠb	鉄石英A	2.2	1.2	0.3	0.74				
100	13F1	SC2227		石鏃	AⅠb	流紋岩B	2.2	1.0	0.6	0.85				片面加工
101	12F4	SC2227		石鏃	AⅠb	流紋岩A	1.5	1.1	0.4	0.38				
102	12E25	SC2247		石鏃	AⅠc	流紋岩B	2.2	1.0	0.5	0.76				
103	12F2	SC2266		石鏃	不明	流紋岩A	2.6	0.8	0.6	0.90	1			
104	12F9	SC2247		石鏃	AⅡb	玉髄	2.0	0.8	0.5	0.87				
105	12F3	SC2227		石鏃	AⅢ	黒曜石	2.7	1.4	0.4	0.95				
106	13F1	SC2266		石鏃	C	流紋岩A	2.4	0.7	0.5	0.53				
107	12F5	SC2227		石鏃	不明	頁岩A	2.0	0.9	0.4	0.74	2			片面加工
108	12F10	SC2247		石鏃未成品		流紋岩A	2.1	1.8	0.7	2.08				
109	12F15		S3	石鏃未成品		鉄石英A	2.3	2.2	0.4	2.39				
110	12F2		S5	石鏃未成品		頁岩B	4.2	2.5	0.8	10.10				
111	13F17		S3	石鏃未成品		流紋岩B	3.5	2.1	0.4	2.36				
112	12F9	SC2247		石鏃未成品		流紋岩B	3.1	1.5	0.7	2.46			付着物	
113	11E24	SC2266		石鏃未成品		流紋岩B	3.3	1.2	0.6	2.13				
114	12F25	SC2247		石鏃未成品		流紋岩A	2.5	1.6	0.7	2.66				
115	12F19	SC2266		石錐	BⅠ	流紋岩A	3.5	1.6	0.9	4.56				
116	12F2	SC2266		石錐	BⅠ	玉髄	2.7	1.2	0.6	2.09				
117	12F17	SC2247		石錐	BⅠ	流紋岩A	2.4	0.9	0.6	1.06				
118	12F15	SC2266		石錐	BⅠ	流紋岩A	3.5	1.2	0.8	2.37				
119	13F12	SC2266		石錐	BⅠ	流紋岩B	2.9	1.1	0.9	2.47				
120	12F3	SC2266		石錐	BⅡ	頁岩A	3.7	1.2	0.8	3.43		○		
121	12F13	SC2266		石錐	BⅡ	凝灰岩A	2.0	0.6	0.4	0.55				
122	12F2	SC2247		石錐	BⅡ	流紋岩B	1.4	0.5	0.4	0.35				片面加工
123	12F11	SC2266		石錐	C	流紋岩A	2.2	0.9	0.7	0.85				
124	12F1	SC2247		石錐	C	流紋岩B	1.6	0.8	0.4	0.41				
125	12E25	SC2247		石匙		流紋岩A	3.8	4.7	1.1	13.03				
126	12E25	SC2266		筌状石器		流紋岩B	7.9	4.0	2.2	49.41			黒色付着物	
127	12F13		S1	筌状石器		頁岩A	7.7	3.2	2.0	42.80				
128	12F6	SC2266		両極石器	A	流紋岩B	4.8	4.5	1.6	32.93				
129	12F18	SC2266		両極石器	A	凝灰岩A	4.8	3.3	2.2	16.75				
130	12F4	SC2266		両極石器	A	頁岩A	2.5	1.1	1.1	2.56				
131	12F10	SC2247		両極石器	A	玉髄	2.2	1.1	0.8	1.87				
132	12F17	SC2247		両極石器	A	頁岩A	1.7	3.4	1.0	4.97				
133	12E22	SC2247		両極石器	A	流紋岩B	4.5	2.8	1.0	12.25				
134	12F10	SC2227		両極石器	A	凝灰岩A	2.3	4.2	1.0	7.23				
135	12F24	SC2266		不定形石器	B	流紋岩B	2.3	1.4	0.4	1.75				
136	12F15	SC2247		不定形石器	C	流紋岩B	2.2	5.2	0.8	6.15				
137	12F22		Ⅵ	不定形石器	D	凝灰岩B	2.8	4.7	1.5	13.56				
138	12E25	SC2247		不定形石器	A	頁岩B	9.1	3.7	1.2	40.07				
139	12F19		Ⅵ	不定形石器	F	凝灰岩B	9.9	4.8	0.9	26.02				
140	12F23		Ⅵ	不定形石器	H	凝灰岩B	5.3	4.2	1.2	13.45				
141	12F10		Ⅵ	打製石斧	A	粘板岩	12.8	9.2	4.4	730.88				
142	11E23	SC2266		磨石類	C	花崗岩	12.1	7.2	5.6	758.73				
143	12F5		Ⅵ	磨石類	E	花崗岩	9.5	6.1	4.7	393.77				
144	12F20	SC2266		磨石類	F	安山岩	9.0	4.2	2.6	144.76				
145	12E25	SC2247		磨石類	G	流紋岩A	12.7	9.0	6.9	1132.31				
146	11F24	P2451	3	磨石類	G	花崗岩	11.1	6.7	5.3	545.61		○		
147	12E22	SC2266		磨石類	G	砂岩	10.6	7.4	3.1	370.28				
148	12F7	SC2227		磨石類	G	流紋岩B	6.6	3.9	1.7	61.56		○		
149	12F5	SC2266		砥石	A	花崗岩	19.3	13.8	4.9	1266.02	○			
150	12F3	SC2247		砥石	B	花崗岩	20.3	13.5	9.5	2920.00				
151	11E24	SC2266		石核	BⅤ	玉髄	4.5	3.8	2.4	45.75				
152	12F18	SC2266		石核	BⅣ	流紋岩B	7.9	4.6	4.0	106.13				
153	12E23	SC2247		石核	BⅣ	流紋岩B	6.2	4.6	4.1	95.60				
154	17C24		S1	石鏃	AⅠa	頁岩A	5.1	1.1	0.9	3.20				
155	15E25		Ⅵ	石鏃	AⅠa	流紋岩A	4.3	1.2	0.7	1.98				
156	15F12		Ⅵ	石鏃	AⅠa	流紋岩B	4.2	1.1	0.6	2.07	2			
157	19B13		S1	石鏃	AⅠa	流紋岩B	3.6	1.3	0.5	1.70	2		赤色顔料	
158	18C12		Ⅵ	石鏃	AⅠa	玉髄	3.7	1.0	0.6	2.10	2	○		
159	20B3	SD1420-4c		石鏃	AⅠa	流紋岩B	3.6	0.9	0.6	1.24				
160	18D24	SX1583		石鏃	AⅠa	流紋岩B	3.9	1.1	0.5	1.10				
161	21B11	SC1642		石鏃	AⅠa	流紋岩A	3.8	0.9	0.5	1.22				
162	19C25		Ⅵ	石鏃	AⅠa	流紋岩B	3.0	0.9	0.4	0.80	4			
163	20C10	SD1420-2c		石鏃	AⅠa	流紋岩B	3.1	1.0	0.4	0.56	2			
164	14D25		Ⅵ	石鏃	AⅠb	玉髄	3.7	1.5	0.5	1.50		○	黒色付着物	鋸歯状
165	15E10		S4	石鏃	AⅠb	凝灰岩A	3.1	1.3	0.4	1.00				
166	18C7		S1	石鏃	不明	流紋岩B	3.1	1.1	0.5	1.04	1			

石器・石製品観察表（3）

報告No.	出土位置	遺構-層位	所属層位	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量（g）	欠損	被熱	付着物	備考
167	19C7		Ⅵ	石鏃	AⅠb	流紋岩B	3.0	1.3	0.6	1.20	4		黒色付着物	
168	20C2	SC1486		石鏃	AⅠb	流紋岩A	3.4	1.0	0.4	0.90	1			
169	13F9		Ⅵ	石鏃	不明	鉄石英A	2.9	1.0	0.4	1.05	3			
170	14D25		Ⅵ	石鏃	AⅠb	流紋岩B	3.1	1.3	0.5	1.20			黒色付着物	
171	16F14	SD1420-1c		石鏃	AⅠb	玉髄	3.4	1.0	0.6	1.76				
172	20B11	SC1486		石鏃	AⅠa	流紋岩B	3.2	0.9	0.3	0.86				
173	17D18		Ⅵ	石鏃	AⅠb	流紋岩B	3.3	1.0	0.7	1.13				
174	17E16	SD1420-13		石鏃	AⅠb	流紋岩B	2.7	1.1	0.5	0.84				
175	18D24	SX1583		石鏃	AⅠb	玉髄	2.9	1.2	0.5	1.30				
176	18E2	SC1483		石鏃	AⅠb	流紋岩B	3.0	1.1	0.7	1.50				
177	17F6	SX1987		石鏃	AⅠb	玉髄	2.6	1.2	0.4	0.96				
178	19D23	SC1517		石鏃	AⅠb	流紋岩B	2.6	0.9	0.6	1.00				
179	18E2	SD1420-5a		石鏃	AⅠb	流紋岩B	2.5	1.1	0.4	0.64				
180	17D23	SD1420-11b		石鏃	AⅠb	凝灰岩A	2.9	1.1	0.5	1.03				
181	17E17	SD1420-11		石鏃	不明	玉髄	2.8	1.1	0.9	1.58			黒色付着物	
182	19C4		Ⅵ	石鏃	AⅠb	流紋岩B	2.3	1.0	0.6	1.00	2			
183	13F16		Ⅵ	石鏃	AⅠb	頁岩A	2.3	1.1	0.4	0.64			黒色付着物	
184	13F20		S4	石鏃	AⅠb	頁岩A	2.1	1.3	0.4	0.65	2			
185	15D12		S2	石鏃	AⅠb	流紋岩A	2.2	1.0	0.6	0.90	2	○		
186	18C8		Ⅵ	石鏃	AⅠb	玉髄	2.2	0.8	0.4	0.50	2			
187	21B6	SC1642		石鏃	AⅠb	玉髄	2.3	1.0	0.5	0.90				
188	18D19	SD1420-6a		石鏃	AⅠb	頁岩A	2.1	1.0	0.3	0.50				
189	16E1		Ⅵ	石鏃	AⅠb	流紋岩A	3.3	1.0	0.6	0.90	2			
190	19C10		Ⅵ	石鏃	AⅠb	流紋岩B	1.9	0.9	0.5	0.60			黒色付着物	
191	21B6	SC1598		石鏃	AⅠb	黒曜石	1.8	0.9	0.4	0.40				
192	18D17		S4～S2	石鏃	AⅠb	玉髄	1.7	1.1	0.4	0.60	2			
193	19C16		Ⅵ	石鏃	AⅠb	流紋岩B	2.2	1.0	0.5	0.80				
194	17E10		Ⅵ	石鏃	AⅠc	玉髄	2.2	1.6	0.5	1.20				
195	19D12	SC1517		石鏃	AⅠc	黒曜石	1.8	1.2	0.5	0.80	1			
196	21B12	SC1642		石鏃	AⅠc	玉髄	1.7	1.0	0.5	0.50				
197	18D22	SD1420-3a		石鏃	AⅠc	黒曜石	1.7	0.9	0.5	0.50				
198	18C5		Ⅵ	石鏃	AⅠc	黒曜石	1.6	0.9	0.3	0.25				
199	18D17		S4～S2	石鏃	AⅠc	流紋岩B	0.9	0.9	0.5	0.30	2	○		
200	16F15・10	SK2221-9		石鏃	AⅡa	流紋岩B	2.4	0.9	0.6	0.89	1			
201	21B7	SC1642		石鏃	AⅡa	流紋岩B	3.8	1.3	0.6	2.40				
202	21B15	SD1420-1d		石鏃	AⅡa	流紋岩A	3.7	0.8	0.6	1.10	2		黒色付着物	
203	14E12	SX776		石鏃	不明	流紋岩B	3.1	1.1	0.6	1.20			黒色付着物	
204	18C7		Ⅵ	石鏃	AⅡa	流紋岩B	3.4	1.0	0.6	1.20				
205	21B11	SD1420-3a		石鏃	AⅡa	流紋岩B	3.2	0.9	0.7	1.30				
206	18C15		Ⅵ	石鏃	AⅡa	流紋岩B	2.5	1.1	0.6	1.20				
207	19C3	SD1420-6b		石鏃	AⅡa	流紋岩B	2.5	0.8	0.4	0.60				
208	19B23		Ⅵ	石鏃	AⅡa	黒曜石	2.3	0.7	0.5	0.70	2			
209	17D16	SC912A		石鏃	AⅡa	流紋岩B	2.1	0.8	0.3	0.40				片面加工
210	19C20		Ⅵ	石鏃	AⅡa	流紋岩B	2.0	0.9	0.4	0.70				
211	19B21		Ⅵ	石鏃	AⅡb	頁岩B	2.0	1.1	0.7	1.00				
212	17D6		S3～S1	石鏃	AⅡb	流紋岩B	2.3	1.1	0.3	0.60				周縁加工
213	16E12		Ⅵ	石鏃	AⅡb	流紋岩B	1.8	0.9	0.3	0.40	1		黒色付着物	
214	19B15		S1	石鏃	AⅡb	玉髄	1.6	0.8	0.3	0.40			黒色付着物	
215	19C1		Ⅵ	石鏃	AⅡb	黒曜石	1.5	1.7	0.4	0.33				
216	18E3	SD1420-2a		石鏃	AⅢ	流紋岩B	2.6	1.4	0.5	1.68				
217	19B14	SC1486		石鏃	AⅢ	流紋岩B	1.9	1.4	0.4	0.80	3			
218	15F9		Ⅵ	石鏃	BⅡ	流紋岩B	1.8	1.4	0.4	0.83				
219	18C21		S1	石鏃	BⅡ	流紋岩B	1.5	1.2	0.4	0.60				
220	19C22		Ⅵ	石鏃	C	頁岩B	3.9	0.9	0.6	1.30				
221	19C11		Ⅵ	石鏃	C	流紋岩B	2.8	1.1	0.5	1.40	2			片面加工
222	18C15		Ⅵ	石鏃	C	頁岩A	2.7	1.1	0.3	1.10				周縁加工
223	18C14		Ⅵ	石鏃	C	流紋岩B	2.6	0.8	0.5	0.90				
224	21B2	SC1598		石鏃	C	流紋岩B	2.7	0.8	0.5	0.90				
225	19C17		Ⅵ	石鏃	C	頁岩A	2.6	0.8	0.5	0.80				
226	16E9		Ⅵ	石鏃	C	頁岩A	2.6	0.9	0.6	1.10			黒色付着物	衝撃剥離痕
227	18C9		Ⅵ	石鏃	C	石英	2.2	0.7	0.5	0.70				
228	19C24		Ⅵ	石鏃	C	頁岩A	2.5	1.0	0.4	0.90				
229	15D18	SC859		石鏃	C	流紋岩A	2.3	0.7	0.5	0.60			黒色付着物	
230	13E13	SX773		石鏃	C	流紋岩A	2.0	0.6	0.3	0.30				
231	19B14	SC1486・V2		石鏃	C	流紋岩B	2.2	0.7	0.4	0.50				周縁加工
232	16F2		Ⅵ	石鏃	C	玉髄	1.7	0.8	0.4	0.52				
233	19C14		Ⅵ	石鏃	C	流紋岩B	2.4	0.8	0.3	0.60				
234	18C22		Ⅵ	石鏃	C	流紋岩B	2.1	0.8	0.3	0.40				
235	18B21		Ⅵ	石鏃	C	黒曜石	1.5	0.8	0.3	0.10	2			
236	16C2		Ⅵ	石鏃	C	黒曜石	1.7	0.7	0.5	0.60			黒色付着物	
237	21B8	SC1598		石鏃	C	玉髄	1.5	0.7	0.3	0.10				
238	17D3		Ⅵ	石鏃	C	流紋岩B	1.6	0.6	0.3	0.30				周縁加工
239	16E4		Ⅵ	石鏃未成品		流紋岩B	4.4	2.7	1.0	8.00				
240	20B11		Ⅵ	石鏃未成品		流紋岩B	4.1	2.0	1.2	6.30				
241	19C17	SC1487		石鏃未成品		流紋岩B	3.4	1.9	0.9	3.70				
242	18C11		Ⅵ	石鏃未成品		流紋岩B	5.0	2.4	1.0	11.40				
243	19B21		Ⅵ	石鏃未成品		流紋岩B	3.5	2.2	1.0	4.50				
244	20C2	SD1420-1a		石鏃未成品		流紋岩B	4.2	2.5	0.9	6.00	○			
245	19D6		Ⅵ	石鏃未成品		頁岩A	3.5	1.8	1.1	4.80				
246	19B25		Ⅵ	石鏃未成品		流紋岩B	3.2	1.5	0.9	2.70				
247	20C17	SD1420-1a		石鏃未成品		流紋岩B	2.7	2.1	0.8	4.60				
248	18D24	SX1583		石鏃未成品		流紋岩B	2.7	1.7	0.7	2.10				
249	19C17	P1524-2		石鏃未成品		流紋岩B	2.6	1.9	1.1	3.20				
250	13F11		S1	石鏃未成品		流紋岩A	3.6	1.6	0.5	1.80				

石器・石製品観察表（4）

報告No.	出土位置	遺構-層位	所属層位	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量（g）	欠損	被熱	付着物	備考
251	20C6	SD1420-3a		石鏃未成品		流紋岩B	2.7	1.1	0.5	1.30				
252	17B15		S2	石鏃未成品		流紋岩B	3.0	1.7	0.7	2.50				
253	19D5	SD1420-1a		石鏃未成品		流紋岩B	2.4	1.8	0.5	1.90		○		
254	19B11		Ⅵ	石鏃未成品		流紋岩B	2.8	2.4	1.1	5.20				
255	14E10		S3	石鏃未成品		流紋岩B	2.9	1.2	0.6	1.70				
256	21B4		Ⅶ	石鏃未成品		流紋岩A	2.7	1.7	0.9	2.40				
257	21B4	SD1420-1c		石鏃未成品		流紋岩B	2.4	1.6	0.7	1.80	○			
258	19C7		Ⅵ	石鏃未成品		流紋岩B	2.4	1.2	0.6	1.60				
259	22C7	SD1420-B8		石錐	AⅠ	流紋岩B	2.8	2.2	0.8	6.38				
260	15E8	SC864		石錐	AⅡ	流紋岩B	5.4	1.6	1.3	9.00				
261	20B4	P1663		石錐	AⅡ	流紋岩A	5.4	2.2	1.0	9.70				
262	13E9		S4	石錐	AⅡ	流紋岩B	4.6	1.8	1.0	4.70				
263	20B2	SD1420-4a		石錐	AⅡ	頁岩A	3.4	1.3	0.8	2.60				
264	16D24		Ⅵ	石錐	AⅡ	流紋岩B	3.8	1.0	0.8	2.50				
265	13E25	SX2251		石錐	AⅡ	流紋岩B	2.6	0.9	0.5	1.22				
266	20B12	SC1486		石錐	AⅡ	流紋岩B	3.0	1.5	0.8	1.80				
267	18D18		Ⅵ	石錐	AⅡ	流紋岩B	2.1	1.1	0.5	1.10				
268	19C25	SD1420-1a		石錐	BⅠ	頁岩B	2.6	1.1	0.6	1.57				
269	19D12	SC1517		石錐	BⅠ	流紋岩B	3.4	1.9	0.7	3.90				片面加工
270	13E12		S1	石錐	BⅠ	流紋岩B	3.2	1.5	1.1	4.60	錐部			
271	15D18		S1	石錐	BⅠ	頁岩A	2.9	1.3	0.9	2.60				
272	16E6		Ⅵ	石錐	BⅠ	流紋岩B	3.1	1.5	0.9	3.50				
273	15E20		S4	石錐	BⅠ	流紋岩B	2.4	1.1	0.4	1.10				片面加工
274	17E3		Ⅵ	石錐	BⅠ	頁岩A	2.7	1.5	0.9	2.90				
275	16F2		Ⅵ	石錐	BⅠ	黒曜石	1.9	0.9	0.4	0.81				片面加工
276	19C16		Ⅵ	石錐	BⅡ	凝灰岩A	5.4	1.3	1.2	7.60				
277	18C11		S2	石錐	BⅡ	流紋岩B	4.5	1.3	1.3	6.60				
278	20B10	SD1420-3a		石錐	BⅡ	流紋岩B	4.5	1.0	0.9	3.40				
279	20C7	SD1420-3a		石錐	BⅡ	流紋岩B	2.4	0.8	0.7	2.01			黒色付着物	
280	18C13		Ⅵ	石錐	BⅡ	流紋岩B	3.7	1.3	1.0	3.40				
281	18E9	SD1420-3a		石錐	BⅡ	流紋岩B	2.8	0.8	0.6	1.49				
282	19C11		Ⅵ	石錐	BⅡ	流紋岩B	3.3	1.0	0.8	2.50				
283	19B7		Ⅵ	石錐	BⅡ	流紋岩B	3.5	0.9	0.8	1.80				
284	18C16		Ⅵ	石錐	BⅡ	流紋岩B	2.9	0.9	0.7	1.60				
285	19B9		S1	石錐	BⅡ	流紋岩B	2.3	0.7	0.6	0.95				
286	20C22	SD1420-1a		石錐	BⅡ	流紋岩B	2.4	0.8	0.8	1.71				
287	18C8		Ⅵ	石錐	BⅡ	流紋岩B	2.2	0.7	0.7	0.90				
288	20B10	SC1598		石錐	BⅡ	流紋岩B	2.2	0.7	0.5	0.70			黒色付着物	片面加工
289	18B25		Ⅵ	石錐	BⅡ	流紋岩B	2.9	1.0	0.6	1.30				
290	17D17		S4～S2	石錐	C	流紋岩B	2.3	1.1	0.6	1.00				
291	16D25		Ⅵ	石錐	C	流紋岩B	1.4	1.1	0.6	1.00			黒色付着物	
292	18C4		Ⅵ	石錐	C	頁岩A	2.2	1.0	0.7	1.20				
293	15E15		S1	石錐	C	流紋岩B	1.4	0.7	0.5	0.40				
294	15F11		Ⅵ	筺状石器		流紋岩B	5.3	4.0	1.5	25.15		○		
295	14E4		Ⅵ	石匙		流紋岩B	5.1	2.6	1.0	11.23				
296	17E11		S1	石匙		石英	3.1	1.9	0.6	4.11			黒色付着物	
297	20B20		Ⅵ	両極石器	A	流紋岩B	5.0	3.1	1.5	18.97				
298	20C3	SD1420-3a		両極石器	A	流紋岩B	3.4	3.3	1.1	10.84				
299	19B25	SD1420-9a		両極石器	A	流紋岩B	3.6	2.7	0.8	6.96				
300	21B21	SC1642		両極石器	A	頁岩A	3.2	2.7	1.0	8.75				
301	17D19		Ⅵ	両極石器	A	頁岩A	3.4	3.3	1.3	13.43				
302	14F16		Ⅵ	両極石器	A	黒曜石	2.9	1.8	0.9	4.05				
303	17C11		Ⅵ	両極石器	B	流紋岩B	3.0	2.2	0.8	5.12				
304	14F17		Ⅵ	両極石器	A	玉髄	3.2	1.5	1.3	6.55				
305	15E7		Ⅵ	両極石器	A	流紋岩B	3.2	1.1	0.6	2.60				
306	15E24		Ⅵ	両極石器	A	黒曜石	3.2	1.5	0.5	2.97				
307	21B22	SD1420-2a		両極石器	A	頁岩A	2.6	1.7	0.9	3.06				
308	13F25		S1	両極石器	A	玉髄	2.6	1.5	1.4	5.70				
309	19D11	SC1517		両極石器	A	流紋岩B	2.0	1.5	0.8	2.68				
310	19B17		S1	両極石器	A	黒曜石	2.0	1.1	0.7	1.62				
311	14E9		S4	両極石器	A	流紋岩B	2.0	1.2	1.1	3.27				
312	20B20	SC1587		両極石器	A	鉄石英A	2.4	1.0	0.4	1.34				
313	20B20	SC1587		両極石器	A	鉄石英A	1.8	0.9	0.4	0.85				
314	13E25	SX2251		両極石器	A	鉄石英A	0.6	0.4	0.2	0.02				
315	13E25	SX2251		両極石器	A	鉄石英A	0.7	0.5	0.1	0.04				
316	13E25	SX2251		両極石器	A	鉄石英A	0.6	0.5	0.4	0.13				
317	18D24	SX1583		両極石器	B	流紋岩B	2.5	2.6	0.9	5.42				
318	14F20		Ⅵ	両極石器	B	凝灰岩A	2.4	2.3	0.5	3.12				
319	19B19	SD1420-6a		両極石器	A	流紋岩B	2.4	3.0	0.7	4.98				
320	16F17		Ⅵ	両極石器	A	玉髄	5.8	4.4	1.9	49.70				
321	15C4		S1	不定形石器	A	流紋岩B	3.9	3.6	0.8	10.85				
322	20B12		Ⅵ	不定形石器	A	頁岩A	4.3	3.6	0.8	14.98				
323	15E24		Ⅵ	不定形石器	A	流紋岩B	3.7	3.2	0.8	8.64				
324	20C7	SC1486		不定形石器	A	流紋岩B	2.8	2.6	0.6	4.73				
325	18D24	SX1583		不定形石器	A	頁岩B	2.7	2.0	0.6	3.39				
326	15F4		Ⅵ	不定形石器	A	流紋岩B	2.4	1.2	0.8	2.39				
327	13F23		Ⅵ	不定形石器	A	凝灰岩B	1.6	2.9	0.5	3.26				
328	16F17		Ⅵ	不定形石器	A	黒曜石	2.5	1.1	0.7	2.00				
329	17E12	SX958-6		不定形石器	A	流紋岩B	2.7	1.0	0.9	10.80				
330	17D7		Ⅵ	不定形石器	A	流紋岩B	2.5	5.4	0.9	11.71				
331	14F15		Ⅵ	不定形石器	A	凝灰岩A	3.0	5.2	1.3	13.88				
332	15E3	SC864-1		不定形石器	B	頁岩A	2.7	3.2	0.9	4.48				
333	21B16	SD1420-2a		不定形石器	C	流紋岩B	3.8	2.3	0.8	6.35				
334	17D18		Ⅵ	不定形石器	A	頁岩A	3.3	4.8	1.0	15.89				

石器・石製品観察表（5）

報告No.	出土位置	遺構-層位	所属層位	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量（g）	欠損	被熱	付着物	備考
335	15C5		Ⅵ	不定形石器	D	流紋岩B	3.6	4.3	1.1	26.43				石匙未成品？
336	16D20		Ⅵ	不定形石器	D	頁岩A	4.2	3.2	1.3	15.41				
337	20D16	SX1528-3		不定形石器	D	流紋岩B	3.4	4.8	1.0	13.37				
338	16E6		Ⅵ	不定形石器	E	流紋岩B	6.5	4.8	1.8	53.18				
339	18D17		Ⅵ	不定形石器	E	流紋岩B	7.4	3.5	1.0	36.58				
340	17E1		S4～S1	不定形石器	E	頁岩A	4.6	2.6	1.0	13.52				
341	17D22		Ⅵ	不定形石器	F	頁岩A	4.6	2.4	1.3	12.76				
342	18C5		Ⅵ	不定形石器	F	頁岩B	4.1	3.4	0.9	9.84				
343	13F16		Ⅵ	不定形石器	G	流紋岩B	11.6	4.2	1.2	59.64				
344	14F13		Ⅵ	不定形石器	F	頁岩A	4.0	2.9	1.5	13.66				
345	19C12		Ⅵ	不定形石器	F	頁岩A	5.3	4.7	2.1	45.22				
346	16E5		Ⅵ	不定形石器	H	流紋岩B	4.0	6.4	1.1	20.43				
347	15F3		Ⅵ	不定形石器	H	頁岩A	6.2	2.4	1.4	20.68				
348	19E7	SX1528-3		不定形石器	H	流紋岩B	4.3	1.3	0.8	3.18				
349	14G2・3・7・8			打製石斧	B	粘板岩	12.2	3.8	2.2	141.75				
350	15E14		Ⅵ	打製石斧	A	粘板岩	18.7	6.9	2.3	356.40				
351	15G1～3・6～8		8	磨製石斧未成品	1000	安山岩	13.3	5.5	4.2	453.40				
352	17D11		Ⅵ	磨製石斧未成品	1000	安山岩	15.3	8.9	4.3	988.40				
353	15G1～3・6～8		8	磨製石斧未成品	2000	安山岩	12.1	6.2	3.5	404.30				
354	19C10		Ⅵ	磨製石斧未成品	3000	安山岩	10.2	5.6	2.9	235.80				
355	19C14		Ⅵ	磨製石斧未成品	2000	ホルンフェルス	10.3	4.0	3.2	206.10				
356	18C13		Ⅵ	磨製石斧	B 4012	安山岩	9.6	4.6	2.0	139.40				大形
357	17D8		Ⅵ	磨製石斧	D 4224	安山岩	7.7	5.5	2.3	134.10				大形
358	15F18		Ⅵ	磨製石斧	不明 4302	安山岩	6.9	4.3	2.0	98.80	1			大形
359	15D7		Ⅵ	磨製石斧	不明 4011	輝緑岩	6.6	4.8	3.4	174.60	2			大形
360	17E3		Ⅵ	磨製石斧未成品	2000	安山岩	6.4	4.5	2.8	122.90	2			
361	20B12		Ⅵ	磨製石斧	不明 4424	安山岩	6.3	3.7	2.2	77.40			黒色付着物	大形
362	18C4		Ⅵ	磨製石斧	A 4312	蛇紋岩	4.3	1.6	0.7	8.90				小形
363	17D16	SC912A		磨製石斧	C 4122	蛇紋岩	3.7	2.6	0.7	13.10				小形
364	16E21		Ⅵ	磨製石斧	C 4122	蛇紋岩	3.8	2.6	0.7	10.81				小形
365	20B11	SC1486		磨製石斧	C 4114	蛇紋岩	2.7	1.6	0.5	4.30				小形
366	19C18		Ⅵ	磨製石斧	C 4202	蛇紋岩	2.7	1.9	0.6	4.80	1			小形
367	15F4		Ⅵ	磨製石斧	D 4112	蛇紋岩	4.4	2.9	0.9	18.06				小形
368	19C1		Ⅵ	磨製石斧	D 4104	蛇紋岩	2.8	2.1	0.6	5.20	1			小形
369	17F11	SX2184		磨製石斧	不明 2302	蛇紋岩	2.3	2.3	0.7	6.46	1			小形
370	19C18	P1523		礫器		安山岩	31.9	17.6	7.3	3560.00				
371	18C8		Ⅵ	礫器		砂岩	27.3	22.2	7.8	5090.00				
372	19C16		Ⅵ	磨石類	A	花崗岩	8.7	6.4	6.0	458.04				
373	16D23		Ⅵ	磨石類	A	安山岩	12.1	8.6	8.3	1507.48				
374	13G5・10		8	磨石類	C	花崗岩	11.1	8.0	4.2	584.19			赤色顔料	
375	20B12		Ⅵ	磨石類	C	花崗岩	14.4	6.4	4.8	807.71				
376	16F18		S5	磨石類	D	凝灰岩A	9.1	7.3	5.4	566.97				
377	16E17・18		Ⅶ	磨石類	C	花崗岩	7.9	6.4	4.6	334.46				
378	13F25		Ⅶd1	磨石類	D	花崗岩	7.7	7.0	4.2	353.09		○		
379	20B5	SD1420-3c		磨石類	D	礫岩	10.0	7.2	6.2	516.35				
380	20C3	SD1420-3a		磨石類	D	花崗岩	15.3	7.6	5.6	957.21				
381	16F11		S2	磨石類	D	花崗岩	15.2	7.2	5.9	966.49				
382	15F3		Ⅵ	磨石類	E	花崗岩	5.7	5.6	3.2	129.93				
383	15F10		Ⅵ	磨石類	F	花崗岩	8.7	6.8	4.4	360.60				
384	19C14		Ⅵ	磨石類	F	花崗岩	8.2	7.9	4.3	436.39				
385	15E12		Ⅵ	磨石類	F	凝灰岩A	11.2	7.1	4.7	503.54				
386	17D14		Ⅵ	磨石類	F	花崗岩	10.8	8.1	4.6	644.36				
387	16E9	P881		磨石類	F	花崗岩	10.7	9.4	6.5	1002.60				
388	20B7	SC1561		磨石類	F	花崗岩	7.3	6.2	5.1	304.43				
389	18C2		S1	磨石類	F	花崗岩	9.3	7.4	5.6	591.63				
390	13F17	SC2424		磨石類	F	花崗岩	9.2	7.5	5.3	506.36		○		
391	16F20	SD1420-17a		磨石類	F	花崗岩	7.5	7.0	5.1	400.46				
392	17C16		Ⅵ	磨石類	F	花崗岩	8.7	6.5	3.9	312.99		○		
393	18D20	SC1517		磨石類	G	安山岩	10.2	8.5	6.6	806.33				
394	16D8		S1	磨石類	G	花崗岩	9.9	8.0	5.4	612.00				
395	16C14		Ⅵ	磨石類	G	花崗岩	9.8	7.2	5.3	585.96				
396	15E7		Ⅵ	磨石類	G	花崗岩	7.1	5.0	4.6	246.77				
397	17F11	SD1420-17a		磨石類	G	流紋岩B	8.8	7.1	5.5	438.29				
398	19C8		Ⅵ	磨石類	G	花崗岩	13.1	7.5	6.5	808.43				
399	16F12		Ⅵ	磨石類	G	花崗岩	13.6	6.8	6.2	812.89				
400	16F11		S2	磨石類	G	砂岩	16.3	6.4	5.6	956.23				
401	17C14		Ⅵ	磨石類	G	砂岩	6.7	4.3	2.0	83.08				
402	16E12		Ⅵ	磨石類	G	凝灰岩A	10.1	5.6	1.7	117.69				
403	18B24	SD1420-9a		多面体敲石	A	石英	6.3	5.7	5.6	289.10				
404	15E20		S1	多面体敲石	A	ホルンフェルス	5.5	5.3	3.5	156.60				
405	14F3		Ⅵ	多面体敲石	A	鉄石英A	4.5	3.6	3.4	81.22				
406	18C8		Ⅵ	多面体敲石	A	ホルンフェルス	4.9	4.5	4.5	164.50				
407	17E22		Ⅵ	多面体敲石	B	石英	6.1	5.5	4.5	184.04				
408	18C13		Ⅵ	多面体敲石	B	砂岩	7.0	6.4	5.6	348.50				
409	17D25		Ⅵ	多面体敲石	B	石英	8.5	8.1	6.2	613.90				
410	19C7		Ⅵ	砥石	A	安山岩	22.0	9.8	5.2	1046.96				
411	13F18		Ⅵ	砥石	A	花崗岩	15.4	13.1	7.3	1853.81				
412	17D23		Ⅵ	砥石	A	砂岩	14.3	7.5	3.5	322.34				
413	17F13	SD1420-1a		砥石	A	花崗岩	13.6	8.6	5.8	622.68				
414	17C25		S1	砥石	B	砂岩	24.1	12.3	4.5	2050.00				
415	14F9		Ⅵ	砥石	C	花崗岩	14.1	8.6	5.8	719.99				
416	16D10		Ⅵ	砥石	B	花崗岩	8.0	3.5	2.1	63.19				
417	18C6		Ⅵ	砥石	B	花崗岩	6.5	6.4	2.9	107.25				
418	17B4		Ⅵ	砥石	C	砂岩	12.5	7.2	6.0	829.35				

石器・石製品観察表（6）

報告No.	出土位置	遺構-層位	所属層位	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量（g）	欠損	被熱	付着物	備考
419	16E5	P883		石皿類	C	安山岩	17.6	14.0	9.2	3300.00				
420	16D23		Ⅵ	石皿類	B	花崗岩	19.9	18.2	4.2	2390.00				縁辺敲打
421	16E10		Ⅵ	石皿類	B	凝灰岩A	20.7	18.0	7.8	4060.00				
422	16E11		S4～S1	石皿類	B	砂岩	17.3	17.1	4.1	1990.00				
423	19C18	P1523		石皿類	C	凝灰岩A	20.4	18.5	6.4	1340.00				
424	16E5	P883		石皿類	B	安山岩	22.3	15.8	5.3	2630.00				
425	14F13		Ⅵ	軽石製品	BⅠ	凝灰岩A	10.2	7.8	4.3	161.47				
426	14D5		Ⅵ	軽石製品	A	凝灰岩A	9.8	7.2	4.5	99.46				
427	18B1		S2	軽石製品	BⅢ	凝灰岩A	7.1	6.0	4.0	56.43				
428	17D5		Ⅵ	石核	BⅠ	頁岩A	11.2	6.5	4.8	382.93				
429	17D13		Ⅵ	石核	BⅠ	頁岩A	11.5	7.5	5.6	641.39				
430	20B2	SC1598		石核	BⅤ	頁岩A	4.5	3.8	2.3	42.53				
431	16D9		Ⅵ	石核	BⅣ	頁岩A	8.7	8.3	5.6	471.59				
432	19C8		Ⅵ	石核	BⅢ	頁岩A	5.9	5.1	3.6	165.07				
433	16F7		Ⅵ	石核	BⅣ	頁岩A	6.2	5.2	1.9	58.80				
434	14E10	SC816		石核	BⅢ	頁岩A	4.1	2.7	2.4	30.63				
435	18D16		Ⅵ	石核	BⅡ	頁岩A	5.6	5.0	2.6	65.01				
436	19D3		Ⅵ	石核	BⅣ	玉髄	4.3	2.7	2.1	25.91				
437	16F7		Ⅵ	石核	BⅣ	頁岩A	7.0	5.4	3.4	131.77				
438	18C5		Ⅵ	石核	BⅤ	流紋岩B	6.1	3.3	2.6	62.94				
439	19D8	SD1420-1a		石核	BⅤ	頁岩A	4.5	4.5	3.2	73.11				
440	18C9		Ⅵ	石核	BⅢ	頁岩B	4.6	4.1	2.9	54.56				
441	16F11		Ⅵ	石核	BⅢ	流紋岩B	4.3	3.3	3.1	45.69				
442	13G1・2・6・7			石核	BⅣ	流紋岩A	8.1	4.5	3.3	99.11				
443	17D20		Ⅵ	石核	BⅤ	頁岩B	5.3	3.2	2.6	36.18				
444	17F4	SX2184		石核	BⅢ	頁岩A	4.6	3.8	2.4	44.04				
445	19B12		S1	石核	BⅣ	流紋岩B	5.6	5.1	4.6	142.46				
446	17D22		Ⅵ	石核	BⅤ	玉髄	4.9	3.5	1.8	30.30				
447	19C1		Ⅵ	石核	BⅤ	頁岩A	6.0	5.3	4.6	112.50				
448	23B8	SD1420-1a		石鏃	AⅠa	流紋岩B	3.7	1.1	0.7	1.70	2			
449	23B10	SD1420-2a		石鏃	AⅠb	玉髄	2.9	1.2	0.5	1.10				
450	24B16	SX1717		石鏃	AⅠb	玉髄	2.7	1.1	0.5	1.00				
451	24B18	SD1420		石鏃	不明	流紋岩B	2.4	1.1	0.4	0.90	1	○		
452	24B21	SD1420-2a		石鏃	AⅠc	頁岩A	1.6	1.1	0.4	0.40				
453	24B16	SK1751-9		石鏃	不明	流紋岩B	2.7	0.8	0.5	1.10	1			
454	23B16	SX1687		石鏃	AⅡa	流紋岩B	2.8	0.9	0.6	1.00				
455	23B21	SX1689		石鏃	不明	流紋岩B	2.1	0.8	0.5	0.70	2		黒色付着物	
456	23C4	SD1420-2a		石鏃未成品		頁岩A	1.9	1.6	0.6	1.20				
457	23B25	SX1717		石錐	BⅡ	流紋岩B	2.0	0.9	0.7	0.90				片面加工
458	22C9	SX1688		石錐	不明	流紋岩B	2.4	0.9	0.7	1.50				
459	24B23	SD1420-2a		石錐	C	流紋岩A	2.7	1.4	0.6	1.10				
460	23B9	SD1420-2a		両極石器	A	黒曜石	2.7	1.6	1.1	2.79				
461	23B20	SX1717		両極石器	A	玉髄	3.1	1.7	0.7	4.14				
462	23B16	SX1685		両極石器	A	流紋岩B	3.3	3.4	0.8	10.57				
463	23B25	SD1420-5b		不定形石器	A	頁岩A	4.3	6.0	1.5	40.12				
464	23C5	SD1420-7b		不定形石器	F	流紋岩B	5.6	4.0	1.2	16.65				
465	22B17	SD1420-2b'		礫器		石英	10.8	10.9	2.6	342.65				
466	24C5	SD1420-6b		磨製石斧未成品	2000	安山岩	13.0	6.7	3.9	454.90				
467	23B8・13	SD1420-B9		磨製石斧未成品	3014	安山岩	15.6	4.9	2.8	302.60				
468	24C21	SD1420-6b		磨製石斧	B 4323	安山岩	11.6	5.0	2.8	255.60				大形　基部敲打
469	23B20	SD1420-1		磨製石斧	C 4132	蛇紋岩	4.7	3.0	1.0	20.30				小形
470	23B11	SX1689		磨製石斧未成品	3304	安山岩	6.8	5.6	2.7	173.20	1			
471	25B21	SD1420-2b		磨石類	F	花崗岩	7.4	6.4	4.0	294.25				
472	24B24	SC1768		磨石類	E	花崗岩	6.0	5.2	2.9	116.61				
473	23B21	SD1420-2a'		磨石類	G	輝緑岩	8.5	6.0	5.3	459.40				
474	24C23	SD1420-6b		磨石類	G	砂岩	7.8	5.8	5.1	287.27				
475	24B16 24B20	SC1751-10 SC1768-1		多面体敲石	B	石英	6.3	7.1	4.8	286.80				
476	23C3	SD1420-1a		砥石	A	砂岩	11.9	8.8	2.5	306.30				
477	23B5	SD1420-2a		石核	BⅤ	頁岩A	8.4	7.5	6.0	413.82				
478	24B24	SD1420-2c		石核	A	黒曜石	3.0	1.9	1.2	8.34				
479	22F25		Ⅵ	石鏃	AⅠa	流紋岩B	4.5	1.0	0.5	1.95				
480	23F10	SD1420-E5c③		石鏃	AⅠa	流紋岩B	3.7	0.9	0.5	1.21				
481	24F24	SD1420-E6c③		石鏃	AⅠa	頁岩A	3.1	0.9	0.4	0.94				
482	23F18	SD1420-E5c①		石鏃	AⅠa	黒曜石	2.8	0.9	0.5	0.93				
483	23F7	SD1420-E6c②		石鏃	AⅠb	黒曜石	2.9	1.0	0.6	1.14				
484	23F12	SC2354		石鏃	AⅠb	流紋岩B	2.5	1.1	0.4	0.51			黒色付着物	
485	25D18	SX1702-3		石鏃	AⅡa	流紋岩A	2.4	1.0	0.5	0.80			黒色付着物	
486	26E8	SD1420- E6d		石鏃	AⅠb	頁岩A	2.4	1.5	0.5	1.10	2			
487	22F13	SX2018		石鏃	AⅠb	黒曜石	1.8	1.0	0.4	0.57	3			
488	22F13	SX2018		石鏃	AⅠc	流紋岩A	1.9	1.0	0.3	0.59				
489	22F10	SX2018		石鏃	AⅠc	黒曜石	1.7	1.1	0.5	0.60				
490	22F9	SX2018		石鏃	AⅡa	黒曜石	2.3	0.8	0.4	0.55				
491	23F7	SD1420-E5c③		石鏃	C	黒曜石	2.2	0.7	0.5	0.69				
492	22F22	SX2018		石鏃	C	流紋岩A	2.2	0.7	0.3	0.51	2			
493	22F9	SX2018		石錐	AⅡ	流紋岩B	2.9	2.0	0.5	2.08	1			
494	23F17	SD1420-E5c①		石錐	BⅠ	凝灰岩A	2.3	1.5	0.5	1.41				
495	24F1	SD1420-E5c③		石錐	BⅡ	流紋岩B	2.0	0.5	0.3	0.40				
496	23F11	SD1420-E5c③		両極石器	A	黒曜石	2.6	1.6	0.8	2.71				
497	23F10	SD1420-E6c③		両極石器	A	頁岩B	1.8	2.7	0.8	4.07				
498	23F18	SD1420-E5c③		両極石器	A	流紋岩B	2.2	2.4	1.0	4.85				
499	23F13	SD1420-E5c③		不定形石器	A	頁岩A	3.3	4.2	0.7	5.37				
500	23F4	SD1420-E5c③		不定形石器	不明	流紋岩A	4.3	6.4	1.5	29.96				
501	23F16		Ⅵ	不定形石器	F	頁岩A	3.3	2.6	0.7	4.99				
502	23F8	SD1420-E6c③		不定形石器	A	流紋岩B	4.2	4.8	0.9	12.55				

石器・石製品観察表（7）

報告No.	出土位置	遺構-層位	所属層位	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量（g）	欠損	被熱	付着物	備考
503	24E21		Ⅵ	不定形石器	F	流紋岩B	4.3	2.3	0.5	4.85				
504	21G		Ⅶ1-1	不定形石器	F	頁岩A	6.8	3.2	1.1	19.79				
505	22F17	SX2020-2		打製石斧	A	粘板岩	11.5	5.7	2.1	158.63				
506	24E8	SD1420-E4c		磨製石斧未成品	1000	安山岩	14.0	7.8	3.1	380.90				一部磨り痕あり
507	24D17			磨製石斧未成品	3021	粘板岩	11.1	6.1	3.8	424.43				
508	23F15	SD1420-E5c③		磨製石斧	C 4412	蛇紋岩	3.3	1.9	0.7	7.71				小形
509	24E14	SD1420-E5a		磨製石斧	不明 4102	蛇紋岩	3.0	1.9	0.7	7.10	1			小形
510	24E18			磨製石斧	不明 4202	蛇紋岩	2.7	2.2	0.8	6.80	1		黒色付着物	小形
511	23E25	SD1420-E6c③		礫器		頁岩A	11.4	9.6	4.9	603.01				
512	22E18	SX1702-3		磨石類	F	花崗岩	12.2	6.2	5.4	645.35				
513	22E18	SX1702-5		磨石類	E	花崗岩	8.6	7.5	5.0	484.81				
514	22F3	SD1420-E5c		磨石類	G	花崗岩	11.0	7.6	5.9	752.85		○		
515	23E10	SX1702-3		磨石類	G	花崗岩	10.3	7.4	6.6	760.60				
516	24E5	SX1702-3		磨石類	G	花崗岩	14.4	6.8	4.5	721.08				
517	25F8	SD1420-E6c③		磨石類	C	砂岩	13.7	6.9	6.6	1077.88			黒色付着物	
518	23F18	SD1420-E5c①		磨石類	G	粘板岩	9.5	4.6	2.4	115.55				
519	25F9	SD1420-E6c①		多面体敲石	B	石英	7.5	6.2	5.8	383.97				
520	21G		Ⅶ2-2	多面体敲石	B	石英	6.4	6.2	4.7	262.11				
521	21F10	SD1420-E6a		砥石	A	花崗岩	8.6	5.9	3.5	265.47				
522	24E4	SX1776		石皿類	C	安山岩	25.0	18.5	6.6	3060.00				
523	27E4	SD1420-E6d		石皿類	B	花崗岩	16.4	14.2	5.1	1840.00				
524	23E	SX2020-2		石核	BⅡ	頁岩A	8.2	4.1	3.7	114.90				
525	22E25	SX2020		石核	BⅢ	頁岩A	6.4	5.0	4.8	224.60				
526	23C21	SD1420-21a		石鏃	AⅠc	玉髄	1.9	1.4	0.5	1.00			黒色付着物	
527	21E9	SD1420-21c		両極石器	A	流紋岩B	4.1	2.6	1.3	9.60				
528	20D21	SD1420-21c		石鏃未成品		流紋岩B	5.0	2.2	1.1	8.40				
529	22D25	SD1420-21c		石錐	AⅠ	流紋岩B	4.2	3.7	1.4	14.88				
530	18D23	SD1420-21a		磨製石斧未成品	2000	輝緑岩	10.3	5.7	3.3	337.00	2			
531	21D11	SD1420-X		磨製石斧	D 4232	蛇紋岩	4.9	2.9	1.1	26.00				小形
532	22D4	SD1420-21c		磨石類	D	花崗岩	9.8	8.5	6.1	798.97				
533	21D20	SD1420-21c		磨石類	F	凝灰岩A	6.2	5.6	4.2	123.39				
534	22D14	SD1420-21c		磨石類	E	砂岩	5.6	4.6	4.3	92.09			赤色顔料	
535	23E25	SD1420-21a		軽石製品	BⅡ	凝灰岩A	4.1	3.5	2.8	13.88				
536	22D10	SD1420-21d		石皿類	B	安山岩	41.5	19.0	6.4	8370.00	○			
537	6B21		Ⅶ	玉類	A	滑石・緑泥石様	1.4	1.4	0.8	2.07				
538	12F9	SC2247		玉類	A	流紋岩A	0.6	0.6	0.3	0.09				
539	15F4		S4～S1	玉類	A	滑石・緑泥石様	0.8	0.5	0.3	0.12	○			
540	19C8		Ⅵ	玉類	A	結晶片岩様緑色岩	1.1	1.1	0.6	0.81				
541	18D4		Ⅵ	玉類	A	滑石・緑泥石様	1.0	1.0	0.2	0.46				
542	18C25		Ⅵ	玉類	A	滑石・緑泥石様	1.0	1.0	0.4	0.65				
543	19C17		Ⅵ	玉類	A	結晶片岩様岩	1.5	1.5	1.0	3.10				
544	19C17		Ⅵ	玉類	A	滑石・緑泥石様	0.7	0.6	0.2	0.14				
545	24B7	SD1420-B9		玉類	A	滑石・緑泥石様	0.7	0.5	0.2	0.11	○			
546	24B21	SX1717		玉類	A	滑石・緑泥石様	0.9	0.9	0.2	0.17				
547	24B16	SK1751-5		玉類	A	滑石・緑泥石様	1.0	1.0	0.4	0.62				
548	25B7	SD1420-B9		玉類	A	結晶片岩様岩	1.3	1.3	1.0	2.66				
549	23B21	SX1687		玉類	B	緑色凝灰岩	1.0	0.5	0.5	0.27				
550	20B18	SC1560		玉類	B	碧玉	0.8	0.5	0.5	0.34				
551	20C8	SD1420-3c		玉類	C	流紋岩A	3.3	2.3	4.3	5.30				
552	11E6	SC740		玉類	C	流紋岩A	2.4	1.5	0.5	1.92				
553	20B3		S1～Ⅵ	玉類	C	流紋岩A	2.2	1.7	1.0	4.12	○			
554	17D11		Ⅵ	玉類	C	ヒスイ	2.0	1.7	1.4	8.12				
555	19B20	SC1493-Ⅴ1-2		玉類	未成品	碧玉	2.4	2.3	1.0	6.02				
556	18D21		Ⅵ	石棒類	A	安山岩	20.8	3.1	2.1	204.72				
557	24C			石棒類	A	粘板岩	15.9	2.6	1.1	88.08				
558	19C3		Ⅵ	石棒類	B	粘板岩	15.7	2.9	1.8	102.38	○			
559	12F2		S3	石棒類	未成品？	粘板岩	12.8	2.3	1.2	49.30	○			
560	14G4・5・9・10			石棒類	未成品	安山岩	9.2	3.9	2.0	102.40				
561	11E11	SC737		石冠		砂岩	11.7	6.6	3.4	293.35				
562	17D16		Ⅵ	石冠		砂岩	12.6	6.6	3.5	375.30				
563	24C22	SD1420		石冠		流紋岩A	10.3	7.5	5.4	400.35				
564	20B10	SC1598		独鈷石	A	安山岩	11.0	7.1	5.6	673.22				
565	16E9		Ⅵ	独鈷石	B	ホルンフェルス	9.5	4.8	4.2	275.94	○			
566	24D7	SD1420-21d		独鈷石	B	安山岩	4.5	16.2	3.0	266.31			黒色付着物	
567	26C6	SD1420-21d		独鈷石	C	花崗岩	6.9	4.7	3.1	130.69	○			
568	17D23	SD1420-18		環状石斧未成品		凝灰岩A	15.8	15.7	3.2	830.29				
569	11F3 12F23 11F4・18 12F25		S1 S1 Ⅵ Ⅵ	石製容器		礫岩	14.0	8.7	2.7	253.87	○			
570	22F4	SX2020-4		異形礫	くびれ石	頁岩A	3.7	2.2	1.2	10.13				樹皮巻き
571	13F22	SC2424		異形礫	くびれ石	粘板岩	3.6	3.3	2.5	32.28				
572	14E25		Ⅵ	異形礫	くびれ石	粘板岩	2.7	2.4	1.1	6.13				
573	17D16		Ⅵ	異形礫	くびれ石	流紋岩B	4.6	4.0	2.3	58.23				
574	19B24	SC1492		異形礫	細長	流紋岩A	4.4	1.3	0.5	2.52				
575	15D15		S4	異形礫	細長	流紋岩A	3.1	1.6	1.0	3.70				
576	13G5・10			異形礫	その他	鉄鉱石	5.8	4.6	4.4	225.42				

木製品観察表（1）柱根・礎板・根絡み

（「備考」の ㊟ は、2004年3月時点で保存処理済みであることを示す。）

報告No.	種別	樹種	木取り	ピットNo.	遺構No.	法量 長さ(cm)	法量 太さ(cm)	法量 厚さ(cm)	尖度	側面形態	加工痕配列	加工面構成	加工痕の計測 平面形(長さ/幅)	加工痕の計測 深さ(mm)	加工痕の計測 縦断面形	側面加工	溝	炭化	樹皮	備考
1	柱根	クヌギ節	B	43	SB1	52.0	10.5		0.49	A	I	a	0.75	4	Ⅳ	×			○	NIG - 587
2	柱根	クヌギ節	B	45B	SB1	54.5	11.0		0.57	A	I	c	1.07	3	Ⅳ	×			○	NIG - 585
3	柱根	ヤマザクラ	B	44	SB1	31.5	11.5		0.54	A	I	d	0.80	3	Ⅳ	×			○	NIG - 589
	柱根	キハダ	B	40	SB1	34.0	12.0		-	-	-	-	-	-	-	×			○	破損のため分割状態。NIG - 586
	柱根	イヌエンジュ	A	45A	SB1	48.0	7.5		-	A?	-	-	-	-	-	Ⅳ・Ⅵ		○		側面一部炭化。側面一部面取り。NIG - 1304
	柱根	クヌギ節	B	46	SB1	33.0	10.0		0.35	A	I	d	-	-	-	×			○	底面摩耗。NIG - 588
	柱根	ヤナギ属	B	47	SB1	21.5	9.0		0.44	A	I	d	1.00	1	V	×			○	NIG - 1698
4	柱根	コナラ節	B	706	SB2	38.5	10.0		0.26	A	I	d	0.47	2	Ⅳ	×			○	切り残し痕除去。NIG - 1319
	柱根	クヌギ節	B	705	SB2	38.5	10.0		0.30	A	I	d	0.56	1	Ⅳ	×			○	切り残し痕あり。NIG - 584
	柱根	-	-	726	SB3	39.0	6.0		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	法量は遺構図から計測
	柱根	-	-	728	SB3	31.0	6.0		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	法量は遺構図から計測
	柱根	-	-	41		27.0	6.0		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	法量は遺構図から計測
	柱根	-	-	42		25.0	6.0		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	法量は遺構図から計測
	柱根	ハンノキ節	B	39		33.0	8.0		0.38	C?	-	-	-	-	-	×			○	底面摩耗。NIG - 1674
	柱根	-	-	14		45.0	13.0		-	-	-	-	-	-	-					打ち込み式か。法量は遺構図から計測
5	柱根	ヤナギ属	A	16		40.0	27.5		0.67	A	I	d	1.00	3	V	×				底面を上にして出土。NIG - 1305
	柱根	-	-	5		15.0	11.0		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	法量は遺構図から計測
	柱根	-	-	6		8.0	10.0		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	法量は遺構図から計測
	柱根	-	-	15		7.0	15.0		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	法量は遺構図から計測
	柱根	-	-	17		8.0	9.0		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	法量は遺構図から計測
	柱根	-	-	38		7.0	5.0		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	法量は遺構図から計測
	柱根	-	-	49		16.0	4.0		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	法量は遺構図から計測
	柱根	クリ	-	83		11.0	5.5	5.0	-	-	-	-	-	-	-	-				全体に摩耗。NIG - 1686
	柱根	トネリコ属	B	93		50.0	15.0		-	-	-	-	-	-	-	×			○	底面破損。NIG - 2111
	柱根	トネリコ属	-	98		8.8	2.6	2.5	-	-	-	-	-	-	-	-			○	全体に破損。NIG - 1687
	柱根	ハンノキ節	-	758		-	-		-	-	-	-	-	-	-	-			○	破片。NIG - 1700
6	柱根	クリ	A	1852	SB36	97.5	27.0		0.13	D	I	d	0.71	3.5	V	Ⅳ				NIG - 1530
7	柱根	コナラ節	A	9802	SB36	97.1	19.6		0.24	A	I	d	0.79	4	I	Ⅳ				NIG - 1428
8	柱根	クリ	A	9842	SB36	44.3	18.3		-	-	I?	-	-	-	-	Ⅳ		○		底面付近の側面が一部炭化。NIG - 1419
9	柱根	クリ	A	9803	SB36	65.0	35.0		0.16	D	I	b	0.66	2	V	Ⅳ				底面摩耗。NIG - 1392
10	柱根	クリ	A	1858	SB36	80.2	38.6		0.11	D	Ⅳ	e	0.67	5	V	Ⅳ・V・Ⅵ				NIG - 1493
11	柱根	同定不能	A	1860	SB36	66.2	35.8		0.11	D	Ⅲ	e	1.00	1	Ⅲ・Ⅳ・V	×				樹種はクリか？NIG - 1503
	柱根	クリ	A	9804	SB36	69.5	34.5		0.16	D	I	e?	-	-	-	Ⅳ				樹芯部は空洞化。NIG - 1407
12	柱根	クヌギ節	A	2105	SB37	41.0	11.0		0.27	A	I	d	0.52	3.5	Ⅲ	×				側面は腐蝕が激しい。NIG - 1620
13	柱根	コナラ節	A	2113	SB37	41.1	13.3		0.30	A	I	c	0.95	1	V	-				側面は腐蝕が激しい。NIG - 1623
14	柱根	コナラ節	A	852	SB37	126.5	20.5		0.32	A	I	d	0.65	3	Ⅳ	Ⅳ				NIG - 1322
15	根絡み	ヤシャブシ節	ミカン割	852	SB37	18.9	6.3	5.4												1/4のミカン割材。NIG - 1784
16	柱根	コナラ節	A	1855	SB37	97.0	14.0		0.31	A	I	d	0.43	4	Ⅳ	×				NIG - 1469
17	柱根	コナラ節	A	1853	SB37	131.6	15.6		0.30	A	I	d	0.38	3	Ⅳ	Ⅳ・V				NIG - 1495
18	柱根	コナラ節	A	1854	SB37	130.8	20.0		0.26	A	I	d	0.66	4	Ⅳ	×				NIG - 1505
19	柱根	コナラ節	A	1892	SB38	102.8	15.4		0.25	A	I	d	0.69	3	V	×				NIG - 1487
20	柱根	コナラ節	A	2523	SB38	91.0	17.6		0.35	A	I	g	0.75	2	Ⅳ	×				NIG - 1662
21	柱根	コナラ節	A	1890	SB38	155.2	14.5		0.26	A	I	e	0.73	3	Ⅳ	Ⅳ				NIG - 1470
22	柱根	コナラ節	A	1894	SB38	55.6	13.0		0.26	A	Ⅲ	g	0.49	4	V	×				NIG - 1514
23	柱根	ヤマグワ	A	2505	SB38	115.3	25.1		0.22	E	I	e	0.60	4	Ⅳ	Ⅳ				NIG - 1474
24	柱根	クリ	A	1862	SB38	114.6	22.0		0.27	B	I	d	0.42	4	Ⅳ		I			NIG - 1500
25	柱根	コナラ節	A	1891	SB38	128.6	20.2		1.32	E	I	e	2.64	-	Ⅳ	×				底面は相対する2方向からの加工。NIG - 1483
	柱根	コナラ節	A?	1851	SB39	80.0	15.0		0.37	A	I	d	0.53	4	Ⅳ・V	-				底面（樹芯部）腐蝕。NIG - 1508
	柱根	コナラ節	A	1908	SB39	80.0	12.5		0.29	E	I	e	1.28	2	V	Ⅵ				側面一部面取り。NIG - 1527
	柱根	クヌギ節	A	1910	SB39	55.0	13.5		0.28	A	I	d	0.67	1	V	×				底面は4加工面で構成。NIG - 1490
	柱根	コナラ節	A	9801	SB39	72.5	16.0		0.31	E	I	e	0.61	1.5	V	Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ				底面は5加工面で構成。NIG - 1390
	柱根	コナラ節	A?	9806	SB39	41.0	18.5		-	-	-	-	-	-	-	Ⅳ				全体に破損。NIG - 1728
26	柱根	コナラ節	A	20	SB40	97.0	16.0		0.30	B	I	d	0.38	6	V	×				NIG - 1306
27	柱根	コナラ節	A	790	SB40	117.0	13.5		0.32	A	I	d	0.45	1	V	Ⅳ				節部は平坦でない。NIG - 1320

木製品観察表（2）柱根・礎板・根絡み

（「備考」の ㊓ は、2004年3月時点で保存処理済みであることを示す。）

報告No.	種別	樹種	木取り	ピットNo.	遺構No.	法量			尖度	側面形態	加工痕配列	加工面構成	加工痕の計測			側面加工	溝	炭化	樹皮	備考
						長さ（cm）	太さ（cm）	厚さ（cm）					平面形（長さ/幅）	深さ（mm）	縦断面形					
	柱根	ヤナギ属	B	21	SB40	79.0	14.5		-	-	-	-	-	-	-	×			○	側面一部面取り?底面欠損。NIG - 1307
	柱根	コナラ節	A	1856	SB40	105.0	18.0		0.36	A	I	d	0.88	1以下	V	Ⅳ・Ⅵ				NIG - 1484
	柱根	コナラ節	A	1857	SB40	104.0	14.0		0.21	A	I	d	-	-	-	×				NIG - 1513
	柱根	コナラ節	A	2109	SB40	87.0	14.0		0.32	E	I	e	-	-	-	×				底面摩耗。NIG - 1519
	柱根	マツ属	A	2115	SB40	40.0	19.0		0.37	EかA	I	eかa	-	-	-	×				底面腐蝕。NIG - 1624
28	柱根	コナラ節	A	9812	SB43	131.1	18.8		-	A?	-	-	-	-	-	×				底面及び底面付近側面は欠損・摩耗。NIG - 1398
29	柱根	コナラ節	A	1897	SB43	135.6	21.0		0.28	A	I	d	0.70	3	Ⅳ		V			NIG - 1488
30	柱根	ヤマグワ	A	2451	SB43	76.8	20.0		0.42	A	I	d	0.73	3	Ⅳ	×				NIG - 1535
31	柱根	コナラ節	A	1896	SB43	111.7	25.1		0.27	A	I	d	-	-	-	×				底面（樹芯部）腐蝕。NIG - 1533
	柱根	コナラ節	A?	9838	SB43	115.5	15.5		-	-	-	-	-	-	-	-				全体に欠損。側面一部面取り?NIG - 1430
	柱根	コナラ節	A?	1861	SB44	46.0	15.5		0.16	AかE	I？	dかe	-	-	-	-				側面・底面は欠損。NIG - 1569
	柱根	クリ	A	1863	SB44	68.0	31.5		0.19	EかA	Ⅳ?	e?	0.72	-	-		○			底面（樹芯部）腐蝕。側面一部破損。NIG - 1485
	柱根	クリ	A	1888	SB44	44.0	25.6		-	-	-	-	-	-	-	×				樹芯部は腐蝕のため空洞化。NIG - 1570
	柱根	カツラ	C	9805	SB44	32.0	24.0	10.5	0.27	A?	I	-	0.57	3	Ⅳ	-				ほぼ半割材。NIG - 1394
	柱根	クリ	C?	9808	SB44	43.0	19.0	10.5	0.32	A	-	-	0.66	3	V	-				側面欠損。NIG - 1396
	柱根	クリ	A?	9810	SB44	26.0	24.0		-	D?	-	-	-	-	-	-				破損のため分割状態。NIG - 1729
	柱根	クヌギ節	B	1911	SB45	36.5	8.0		0.68	E	I	e	0.75	1	V	×			○	NIG - 1571
	柱根	クヌギ節	B	2097	SB45	48.0	10.0		0.40	A	I	d	1.00	3	V	×			○	NIG - 1478
	柱根	クヌギ節	A	2098	SB45	52.0	9.0		0.34	A	I	d	1.00	3	Ⅳ	×				NIG - 1468
	柱根	クヌギ節	B	2110	SB45	49.0	10.0		0.23	B	I	d	0.90	1.5	V	×			○	NIG - 1486
	柱根	クヌギ節	B	2111	SB45	33.5	9.0		0.29	A	I	d	-	-	-	×			○	底面摩耗。NIG - 1622
32	柱根	ヤマグワ	A	9835	SB48	67.0	23.0		0.46	A	I	d	0.86	3	V	Ⅳ				底面付近側面を削り。NIG - 1413
	柱根	コナラ節	A	2310	SB48	83.0	18.5		0.27	E	I	e	0.96	1.5	V	Ⅳ				NIG - 1499
	柱根	ヤマグワ	A	2460	SB48	78.0	24.0		0.33	C	I	d	-	-	-	×				底面は破損・摩耗。NIG - 1515
	柱根	ヤマグワ	A	2524	SB48	73.0	25.0		0.18	EかA	I？	eかd	-	-	-	Ⅳ				NIG - 1501
	柱根	ハリギリ	A	9813	SB48	74.0	18.0		0.17	E	I？	dかe	-	-	-	Ⅳ				NIG - 1668
	柱根	コナラ節	A	9836	SB48	78.5	16.0		0.31	A?	-	-	-	-	-	Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ				側面に石器（斧）の痕が明瞭に残る（幅3cm）。側面一部面取り。NIG - 1414
	柱根	トネリコ属	-	896	SB58	18.0	7.5	6.0	-	-	-	-	-	-	-	-				両端加工か?全体に破損・摩耗が激しい。NIG - 2112
	柱根	トネリコ属	E?	897	SB58	38.0	7.0	6.0	0.62	A	I？	c?	-	-	-	-				分割材か？NIG - 1711
	柱根	トネリコ属	A	898	SB58	64.0	18.0		-	-	-	-	-	-	-	Ⅳ・Ⅴ				底面破損。側面一部面取り。NIG - 1325
	柱根	コナラ節	A	1859		86.0	10.5		0.24	A	I	d	-	-	-	Ⅳ				NIG - 1494
	柱根	エゴノキ属	B	2121		57.0	12.0		0.42	B	I	d	1.00	3	V	×			○	切り残し痕あり。NIG - 1543
	柱根	クリ	A?	9802		44.0	19.0		-	-	-	-	-	-	-		○			全体に破損。溝は破損のため分類不可。NIG - 1391
	柱根	クリ	A	9807		77.0	21.0		0.22	A	I	d	1.08	3	V	Ⅳ				底面付近側面（根）削り。NIG - 1395
	柱根	ヤマグワ	A	9809		88.0	20.0		0.33	E	I	e	-	-	-	Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ				底面摩耗。側面一部面取り。NIG - 1397
	柱根	ハンノキ節	C?	9815		27.0	8.5	5.5	-	-	-	-	-	-	-					半割材か?破損。NIG - 1401
	柱根	コナラ節	A?	9837		84.0	24.0		0.31	A?	-	-	-	-	-	-				側面・底面破損。側面一部面取りか?NIG - 1415
	柱根	ヤマグワ	A	9839		115.0	23.5		0.13	E	I	e	0.67	-	-	Ⅳ				NIG - 1416
	柱根	クリ	C?	9905		57.0	16.5	12.0	-	-	-	-	-	-	-	-				半割材か?破損。NIG - 1429
	柱根	ヤナギ属	B	9906		108.5	11.0		0.32	B?	-	-	-	-	-	×			○	NIG - 1665
33	柱根	クリ	A	828	SB4	50.0	37.5	33.1	0.29	B	I？	dかf	-	-	-	V?				NIG - 526。㊓
34	礎板	トネリコ属	板目	828	SB4	13.8	5.7	4.0												角材状。一端欠損。NIG - 1906
35	礎板	トネリコ属	丸木取	828	SB4	15.0	5.0													側面加工痕あり。両端加工痕なし。NIG - 1782
36	礎板	トネリコ属	丸木取	828	SB4	34.0	4.5												○	NIG - 1780

木製品観察表（3）柱根・礎板・根絡み

（「備考」の㊓は、2004年3月時点で保存処理済みであることを示す。）

報告No.	種別	樹種	木取り	ピットNo.	遺構No.	法量			尖度	側面形態	加工痕配列	加工面構成	加工痕の計測			側面加工	溝	炭化	樹皮	備考
						長さ（cm）	太さ（cm）	厚さ（cm）					平面形（長さ/幅）	深さ（mm）	縦断面形					
37	礎板	クリ	偏ミカン割	828	SB4	17.0	19.0	10.0										○		両端加工痕あり。一部炭化。NIG－1967
38	柱根	クリ	A	907	SB4	53.5	44.7	42.7	0.08	D	I？	e	-	-	-	Ⅳ・Ⅴ				側面の平坦面は保管時の自重によるつぶれ。NIG－529。㊓
39	礎板	ブナ属	偏半割	907	SB4	48.5	19.0	12.8											○	一端加工痕あり。NIG－1289
40	礎板	ブナ属	板目	907	SB4	24.0	28.0	6.0												一端加工痕あり。湾曲は自然形。NIG－1885
41	礎板	クリ	板目	907	SB4	21.5	14.5	5.5												板状分割材。両端加工痕あり。NIG－1869
42	柱根	クリ	A	923	SB4	72.4	43.6	37.3	0.13	D	I	b	0.60	4	Ⅳ	Ⅴ				NIG－528。㊓
43	礎板	ヤナギ属	柾目	923	SB4	36.5	14.0	4.5												板状分割材。NIG－1891
44	根絡み	ヤナギ属	丸木取	923	SB4	44.5	18.0		0.29	B	I	d							○	NIG－583
45	根絡み	イヌシデ節	丸木取	923	SB4	20.8	3.7													丸木棒材。節部加工。NIG－1788
46	礎板	ヤナギ属	ミカン割	923	SB4	25.0	18.0	5.5												一端加工痕あり。NIG－1940
47	礎板	クリ	偏ミカン割	923	SB4	18.0	13.5	7.5												分割面3面。両端加工痕あり。NIG－1937
48	柱根	クリ	A	825	SB4	67.0	49.8		0.07	D	I？	d?	-	-	-	Ⅳ				空洞化。NIG-524。㊓
49	柱根	クリ	A?	920	SB4	58.0	46.5	40.0	0.10	D	I？	b?	-	-	-	Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ				大部分が欠損。NIG－525。㊓
50	礎板	クリ	分割	920	SB4	20.0	24.0	18.0												両端加工痕あり。角材状。NIG－1965
51	根絡み	マツ属	板目	920	SB4	25.0	7.0	3.0												分割後、年輪に沿って剥離させた？NIG－1785
52	礎板	アカマツ	丸木取	920	SB4	28.0	9.0													丸木材から51のようなものが剥離した？NIG－1770
53	礎板	アカマツ	板目	920	SB4	41.0	5.8	1.9												分割後、年輪に沿って剥離させた？NIG－1786
54	柱根	クリ	A	868	SB4	58.0	52.0	36.0	0.08	D	I？	dかe	-	-	-	Ⅳ・Ⅴ				大部分が欠損。側面の平坦面は保管時の自重によるつぶれ。NIG－527。㊓
55	礎板	ヤナギ属	板目	868	SB4	38.0	10.0	3.7												板状分割材。木表側に削り。NIG－1298
56	柱根	クリ	A	826	SB4	57.0	24.4		0.14	D	Ⅳ	b	-	-	-	×				側面腐蝕。側面の平坦面は保管時の自重によるつぶれ。NIG－530
57	柱根	クリ	A	827	SB4	53.3	24.6		0.22	A	I	d	-	-	-	×				側面腐蝕。NIG－531
58	柱根	コナラ節	A	880	SB5	137.5	19.0		0.29	A	I	d	0.85	-	Ⅳ	Ⅴ	Ⅳ			NIG－575
59	柱根	コナラ節	A	922	SB5	117.5	20.0		0.19	A	I	c	0.87	-	Ⅳ	I・Ⅳ				NIG－578
60	柱根	コナラ節	A	884	SB5	109.5	20.5		0.21	B	I	d	0.63	-	Ⅳ	I？・Ⅳ				側面の平坦面は自然形か？NIG－579
61	柱根	単維管束亜	A	24	SB5	89.5	23.5		0.31	A	I	d	0.45	10	Ⅳ	×				NIG－1310
62	柱根	コナラ節	A	885	SB5	80.0	21.0		0.32	B	I	d	0.67	-	Ⅲ	×				底面摩耗・腐蝕。NIG－581
63	柱根	コナラ節	A	879	SB5	120.0	21.0		0.26	A	I	d	0.50	-	Ⅳ	Ⅲ・Ⅳ				NIG－576
64	柱根	コナラ節	A	2284	SB5	105.4	15.3		0.41	E	I	e	0.46	2	Ⅴ	Ⅳ				NIG－1517
65	柱根	コナラ節	A	886	SB5	102.0	14.0		0.28	A	I	d	0.60	-	Ⅴ	×				NIG－580
66	柱根	コナラ節	A	917	SB5	91.0	15.5		0.30	B	I	d	0.45	-	Ⅳ・Ⅴ	Ⅳ				NIG－577
67	柱根	クリ	A	883	SB6	61.0	19.5		0.29	D	I	d	0.67	-	Ⅳ	I				NIG－1247
68	柱根	クリ	A	919	SB6	36.0	23.0		0.16	A	I	d	0.46	-	Ⅳ	I				NIG－1243
69	柱根	クリ	A	881	SB6	68.0	21.0		0.28	D	I	d	0.77	-	Ⅴ		Ⅱ			NIG－1245
70	柱根	クリ	A	932	SB6	63.0	27.0		0.15	D	I	d	0.77	-	Ⅳ	Ⅳ・Ⅵ				NIG－1241
71	柱根	クリ	A	902	SB6	62.0	27.5		0.20	D	Ⅲ	d	0.73	3	Ⅴ		Ⅱ			伐採後に底面加工。NIG－1244
72	柱根	クリ	A（E）	913	SB6	44.0	25.5		0.27	D	I	b	0.65	-	Ⅴ	Ⅴ				NIG－1242
73	柱根	クリ	A	961	SB6	59.0	17.0		0.36	C	I	d	0.62	1	Ⅴ	Ⅳ				NIG－1246
74	柱根	クリ	A	882	SB6	64.5	28.0		0.10	D	I	d	0.58	-	Ⅳ		Ⅱ			NIG－574
75	柱根	クヌギ節	A	981	SB7	48.5	14.5		0.41	A	I	d	0.53	2	Ⅳ	×				NIG－1237
76	柱根	クリ	A	955	SB7	80.0	15.5		0.28	A	I	d	0.77	2	Ⅳ	Ⅳ				NIG－1240
	柱根	樹皮	B?	948A	SB7	18.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-				○	木質部が腐蝕し、樹皮のみ残存。NIG－1703
	柱根	クヌギ節	B	948B	SB7	41.0	6.3		0.32	A	I	d	0.87	1	Ⅴ	Ⅳ			○	NIG－1329
	柱根	トネリコ属	C	985	SB7	23.0	9.0	7.5	0.42	A?	I？	a?	-	-	-		○?			溝あり？NIG－1238
	柱根	クヌギ節	A	1402	SB7	61.5	17.0		0.26	A	I	d	-	-	-	Ⅳ				NIG－572
77	柱根	クリ	A	963	SB8	78.0	22.0		0.25	A	I	d	0.72	3	Ⅳ	×				NIG－1235
78	柱根	クリ	A	938	SB8	73.0	22.5		0.25	A	I	d	0.69	2	Ⅴ	Ⅳ・Ⅴ	Ⅱ			NIG－571
79	柱根	クリ	A	954	SB8	69.0	19.0		0.17	A	I	d	0.75	5	Ⅳ	Ⅳ				NIG－1234
80	柱根	クリ	A	962	SB8	69.0	23.0		0.16	D	I	d	0.74	3	Ⅴ	I・Ⅳ・Ⅴ				NIG－1233
81	柱根	クリ	A	952	SB8	74.0	21.0		0.22	D	I	d	0.55	3	Ⅳ	Ⅳ				NIG－569
82	柱根	クリ	A	953	SB8	126.5	29.5		0.14	D	I	d	0.63	5	Ⅳ	Ⅳ				NIG－568

木製品観察表（4）柱根・礎板・根絡み

（「備考」の ㊙ は、2004年3月時点で保存処理済みであることを示す。）

報告No.	種別	樹種	木取り	ピットNo.	遺構No.	法量			尖度	側面形態	加工痕配列	加工面構成	加工痕の計測			側面加工	溝	炭化	樹皮	備考
						長さ（cm）	太さ（cm）	厚さ（cm）					平面形（長さ/幅）	深さ（mm）	縦断面形					
83	柱根	クヌギ節	A	937	SB8	78.0	18.0		0.23	A	I	d	0.25	2	Ⅳ	Ⅳ・Ⅴ				NIG－1236
84	柱根	クリ	A	977	SB8	58.0	20.0		0.21	D	I	d	0.41	2	Ⅳ	×				NIG－567
	柱根	クヌギ節	B	1447	SB8	56.0	9.0		0.28	A	I	d	-	-	-	×			○	底面摩耗。NIG－570
85	柱根	クヌギ節	A	1441	SB9	49.5	13.0		0.29	B	Ⅱ	c	0.89	2	Ⅴ	×				NIG－1227
86	柱根	クヌギ節	A	1438	SB9	46.0	13.5		0.18	D	Ⅲ	e	0.73	-	Ⅴ?	×				NIG－1230
87	柱根	クヌギ節	A	972	SB9	49.5	18.5		0.14	D	I	e	0.86	1	Ⅴ	I				NIG－565
88	柱根	コナラ節	A	930	SB9	42.5	15.0		0.24	D	I	a	0.68	-	Ⅳ	Ⅲ・Ⅳ				底面摩耗。NIG－1232
89	柱根	クヌギ節	A	1435	SB9	30.5	12.0		0.20	D	I	a	0.67	-	Ⅴ?	Ⅳ				NIG－1229
90	柱根	クヌギ節	A	1456	SB9	73.5	12.5		0.14	E	I	e	1.07	-	Ⅲ	I・Ⅲ・Ⅳ				NIG－566
91	柱根	クヌギ節	A	1407	SB9	72.0	13.0		0.23	D	I	c	0.66	-	Ⅲ	×				NIG－1231
92	柱根	クヌギ節	A	964	SB9	75.5	15.0		0.11	D	I	a	0.45	-	Ⅳ	×				NIG－1228
	柱根	クヌギ節	B	986	SB10	60.5	11.0		0.32	A	-	-	-	-	-	×			○	底面付近は破損が激しい。NIG－564
	柱根	クヌギ節	B?	987	SB10	21.0	(8.0)		-	-	-	-	-	-	-				○	樹皮のみ。NIG－1226
	柱根	樹皮	B?	999	SB10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				○	樹皮のみ。NIG－1715
	柱根	コナラ節	B	1455	SB10	32.5	10.0		-	A?	-	-	-	-	-	×			○	全体的に破損。NIG－1225
93	柱根	クヌギ節	A	931	SB11	61.0	12.0		0.27	B	I	c	0.68	1	Ⅴ	I・Ⅴ				NIG－563
	柱根	クヌギ節	A	904	SB11	47.0	13.0		0.50	A	I	d	-	-	-	×				NIG－562
	柱根	クヌギ節	A	929	SB11	28.5	9.0		0.41	A	I	d	0.64	4	Ⅴ	×				NIG－2108
	柱根	クヌギ節	B	1461	SB11	49.5	11.0		-	-	-	-	-	-	-	Ⅳ			○	NIG－1224
	柱根	クヌギ節	A	980	SB12	22.0	9.0		-	-	-	-	-	-	-	-				底面は摩耗・破損。NIG－1679
	柱根	-	-	1432	SB12	58.0	10.0		-	-	-	-	-	-	-				○	法量は遺構図から計測
	柱根	クヌギ節	B	1462	SB12	24.0	11.5	7.5	0.48	B	-	-	-	-	-	Ⅳ			○	底面は加工痕不明瞭。NIG－1222
	柱根	ヤマグワ	A	1496	SB13	46.0	11.5		1.22	A	I?	cかd	0.80	1	Ⅴ					NIG－1249
	柱根	タラノキ	A	1499	SB13	58.0	9.0		0.50	A	I?	c?	-	-	-	×				NIG－590
	柱根	-	-	1500	SB13	(14.0	(3.0)	(1.5)	-	-	-	-	-	-	-					破片
	柱根	ヤマグワ	A	1533	SB13	58.5	11.0		0.59	B	I	c	-	-	-	×				底面は摩耗・破損。NIG－1250
	柱根	ヤマグワ	A	1576	SB13	46.5	11.5		0.39	A	I	d	0.67	3	Ⅳ	×				切り残し痕あり。NIG－1357
94	柱根	タラノキ	E	1471	SB14	87.5	20.0	11.5	0.24	D	I	d	0.41	2	Ⅲ	Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ				原材径約25cm。無数の穴は虫食い穴。NIG－591
95	柱根	クリ	A	1555	SB14	41.5	19.0		0.20	D	I	d	0.66	2	Ⅳ	Ⅳ				底面付近側面（根）は丁寧な削り。NIG－1251
96	礎板	ヤマグワ	分割	1534	SB14	18.0	6.2	4.5												角材状。両端加工痕あり。NIG－1898
97	礎板	ヤマグワ	分割	1534	SB14	18.1	6.8	4.3												角材状。両端加工痕あり。NIG－1899
98	礎板	ヤマグワ	分割	1534	SB14	19.7	6.0	4.2												角材状。両端加工痕あり。NIG－1903
	柱根	クリ	-	1501	SB14	50.5	16.0		-	-	-	-	-	-	-	-				NIG－1342
	柱根	クリ	A	1505	SB14	47.0	16.0		0.19	E	I	e	-	-	-	Ⅳ				NIG－1716
	柱根	ヤマグワ	A	1535	SB14	57.0	16.5		0.20	A	I	d	0.71	3	Ⅳ	Ⅴ・Ⅵ				側面一部面取り。NIG－1346
99	柱根	クリ	E	1546	SB15	62.0	20.0	13.0	0.14	D	I	d	0.47	5	Ⅲ	Ⅴ・Ⅵ				原材径約21cm。NIG－1261
100	礎板	ノリウツギ	ミカン割	1546	SB15	19.6	6.0	4.0											○	1/4のミカン割材。NIG－1794
101	柱根	クリ	E	1520	SB15	64.5	18.5	18.0	0.28	B	I	c	0.53	-	Ⅴ	Ⅳ・Ⅴ				原材径約25cm。NIG－1260
102	柱根	クリ	A	1523	SB15	58.0	26.0		0.12	D	I	b	0.41	-	Ⅴ	×				底面は腐蝕・摩耗。NIG－1262
103	柱根	クリ	A	1524	SB15	92.5	30.5		0.11	D	I	b	0.92	-	Ⅴ	Ⅴ				NIG－1256
104	根絡み	スギ	板目	1524	SB15	94.0	12.5	3.3										○		NIG－2109
105	根絡み	クリ	偏ミカン割	1524	SB15	11.2	8.8	4.8												両端加工痕あり。木表側やや削り。NIG－1896
106	根絡み	クリ	分割	1524	SB15	8.9	9.4	4.1												両端加工痕あり。角材状。NIG－1943
107	根絡み	クリ	板目	1524	SB15	9.8	6.3	2.2												両端加工痕あり。板目板材。NIG－1909
108	柱根	ヤマグワ	E	1526	SB15	52.0	26.0	17.5	0.23	D	I	d	1.00	2	Ⅲ	Ⅴ・Ⅵ				原材径約32cm。NIG－1343
109	柱根	ヤマグワ	E	1507	SB15	60.0	26.5	15.0	0.13	D	Ⅱ	c	0.57	1	Ⅳ	Ⅴ				原材径約29cm。NIG－1255
110	柱根	クリ	A	1542	SB15	38.5	18.5		0.35	B	Ⅲ	g	0.97	2	Ⅳ		Ⅴ		○?	樹皮は一部に残存? NIG－1347
111	柱根	クリ	B	1519	SB15	64.0	35.0		0.15	D	I	b	0.71	1	Ⅴ	×			○	NIG－1264
	柱根	-	-	1518	SB15	49.0	20.0		-	-	-	-	-	-	-					法量は遺構図から計測
	柱根	トネリコ属	A?	1531	SB15	58.5	23.0		-	-	-	-	-	-	-	-				全体に破損。NIG－1344

木製品観察表（5）柱根・礎板・根絡み

（「備考」の ㊗ は、2004年3月時点で保存処理済みであることを示す。）

報告No.	種別	樹種	木取り	ピットNo.	遺構No.	法量			尖度	側面形態	加工痕配列	加工面構成	加工痕の計測			側面加工	溝	炭化	樹皮	備考
						長さ（cm）	太さ（cm）	厚さ（cm）					平面形（長さ/幅）	深さ（mm）	縦断面形					
	柱根	コナラ節	A?	1513	SB16	30.0	10.0		-	-	-	-	-	-	-					底面近く削り？ 法量は遺構図から計測。 NIG - 1705
	柱根	クヌギ節	B?	1530	SB16	22.7	9.0		-	-	-	-	-	-	-	×			○	全体に破損・腐蝕。 NIG - 1265
	柱根	クヌギ節	D?	1532	SB16	21.0	3.9	3.0	-	-	-	-	-	-	-	×				1/4のミカン割？全体に破損。NIG - 1267
	柱根	クヌギ節	-	1582	SB16	7.0	6.0	3.4	-	-	-	-	-	-	-	-			○	破片。NIG - 1706
	柱根	クリ	A	1502	SB17	41.5	12.5		0.40	E	I	e	-	-	-	×				底面摩耗。 NIG - 1273
	柱根	ヤマグワ	A	1508	SB17	46.5	13.0		0.41	E	I	e	-	-	-	×				底面（樹芯部）腐蝕。 NIG - 1266
	柱根	ヤマグワ	A	1509	SB17	31.5	12.5		0.52	E	I	e	0.53	1	V	×				底面（樹芯部）腐蝕。 NIG - 1271
	柱根	ヤマグワ	A	1512	SB17	50.0	14.3		0.61	B	I	c	1.00	2	Ⅳ	Ⅳ				切り残し痕あり。 NIG - 1270
	柱根	ヤマグワ	A	1547	SB17	24.5	10.3		0.34	AかE	I	dかe	0.78	3	Ⅳ	Ⅳ				底面（樹芯部）腐蝕。 側面一部面取り。 NIG - 1272
	柱根	クリ	A	1589	SB17	38.0	7.0		0.50	A	I	d	0.93	2	V	Ⅳ				切り残し痕あり。 NIG - 1268
112	柱根	クリ	B	1557	SB18	70.5	16.0		0.26	A	I	d	0.55	2	Ⅳ	×			○	NIG - 592
113	柱根	クリ	A	1573	SB18	163.0	16.0		0.35	A	I	d	0.42	8	Ⅳ		I			NIG - 1285
114	柱根	コナラ節	A	1558	SB18	74.5	15.0		0.17	D	I	b	0.61	1以下	V	×				NIG - 593
115	柱根	クリ	A	1572	SB18	47.5	21.0		0.21	D	I	d	0.62	2	Ⅳ	×				NIG - 1354
116	柱根	ヤマグワ	A	1580	SB18	131.0	21.0		0.18	A	I	d	0.65	2	V	Ⅳ・Ⅶ				NIG - 1275
117	根絡み	ヤマグワ	偏半割	1580	SB18	9.8	9.5	3.9												板状分割材。両端加工痕あり。NIG - 1942
118	根絡み	ヤマグワ	偏ミカン割	1580	SB18	9.8	5.1	3.1												両端加工痕あり。 NIG - 1760
119	根絡み	ヤマグワ	偏ミカン割	1580	SB18	12.0	9.5	3.0												NIG - 1900
	柱根	クヌギ節	A?	1538	SB18	39.0	8.5		0.45	E	I	e	0.94	1.5	Ⅳ	-				側面破損。 NIG - 1276
120	柱根	コナラ節	A	1616	SB19	57.0	13.0		0.24	B	I	d	0.71	2	V		Ⅳ			NIG - 595
121	柱根	クリ	A	1627	SB19	67.0	15.0		0.26	B	I	c	0.38	3	Ⅳ	Ⅳ・V				NIG - 1367
122	柱根	コナラ節	A	1622	SB19	46.0	13.0		0.32	A	I	d	0.86	1	Ⅳ	×				NIG - 597
	柱根	コナラ節	A?	1617	SB19	53.0	13.0		-	-	-	-	-	-	-	Ⅳ		○		一部炭化。全体に破損。 NIG - 1277
	柱根	コナラ節	A（E）	1629	SB19	53.0	15.5		-	-	-	-	-	-	-	Ⅳ				側面一部面取り。全体に破損。NIG - 598
	柱根	コナラ節	A	1631	SB19	71.0	13.0		-	-	-	-	-	-	-	Ⅳ				底面破損。比較的鋭い侵入角度で伐採・分断？NIG - 596
123	柱根	クヌギ節	A	1618	SB20	35.5	10.5		0.76	A	Ⅱ	c	0.52	3	Ⅳ	×				NIG - 599
124	柱根	クリ	A	1647	SB20	40.5	12.0		0.13	D	-	-	0.57	-	Ⅳ		V			NIG1280
125	柱根	クヌギ節	A	1662	SB20	35.5	14.0		0.46	A	I	d	0.47	-	Ⅳ	I				NIG - 1374
126	柱根	クヌギ節	A	1681	SB20	44.5	16.5		0.31	A	I	d	0.43	1	Ⅳ	×				NIG - 1378
127	柱根	クリ	A	1604	SB20	113.0	19.0		0.22	D	Ⅲ	d	0.61	1	Ⅲ	Ⅳ・Ⅵ		○		NIG - 1284
128	柱根	クリ	A	1636	SB20	67.0	15.0		0.21	A	I	a	0.39	3	Ⅲ	V・Ⅵ		○		NIG - 1279
129	柱根	クリ	A	1608	SB20	50.5	18.0		0.86	A	I	d	0.71	3	V	×				NIG - 1281
	柱根	クヌギ節	A	1646	SB20	39.0	13.0		0.48	A	Ⅱ	c	0.89	1	Ⅳ	Ⅳ				側面破損。 NIG - 1282
130	柱根	クリ	E	1940	SB28	85.6	20.0	10.0	1.66	E	I	c	0.91	-	Ⅳ	V・Ⅵ	Ⅱ?			尖度は抉り部から計測。 NIG - 1472
131	柱根	コナラ節	B	1989	SB28	79.6	16.8		0.31	A	I	d	0.35	4	Ⅳ		Ⅳ?		○	NIG - 1525
	柱根	クリ	A	1936	SB28	90.0	18.0		0.22	A	I	e	-	-	-	Ⅳ				底面摩耗。 NIG - 1524
	柱根	クリ	A	1979	SB28	82.0	19.8		0.18	E	Ⅳ	e	0.57	-	-	Ⅳ				NIG - 1477
	柱根	クリ	A	1988	SB28	95.0	16.0		0.31	A	I？	d	0.67	-	-	Ⅳ				側面の平坦面は保管時の自重によるつぶれ。 NIG - 1473
	柱根	クリ	-	2195	SB28	32.0	14.0		-	-	-	-	-	-	-					全体に破損。 NIG - 1627
	柱根	クリ	A?	2210	SB28	30.0	12.0		-	C?	-	-	-	-	-					側面一部面取りか？ 全体に破損。 NIG - 1631
132	柱根	クリ	B	1935	SB29	46.8	12.6		0.33	A	I	d	0.60	3	Ⅲ	×			○	実測図には樹皮が表現されていない。 NIG - 1574
133	柱根	クリ	B	1939	SB29	80.0	19.5		0.20	A	I	d	0.40	5	Ⅳ	×			○	NIG - 1507
134	柱根	クリ	A	1937	SB29	96.0	18.6		0.15	D	I	e	0.49	4	Ⅳ	Ⅳ・V				底面（樹芯部）腐蝕。 NIG - 1489
135	根絡み	クリ	偏ミカン割	1937	SB29	12.5	7.3	4.0												両端加工痕あり。 NIG - 1897
	柱根	クリ	A	1957	SB29	41.0	11.5		-	A?	I？	d?	-	-	-	×				底面破損。 NIG - 1585
	柱根	クリ	A	2014	SB29	45.0	11.0		0.34	AかE	I？	dかe	-	-	-	-				全体的に破損。 NIG - 1597
	柱根	クリ	A	2194	SB29	35.0	12.5		0.20	A	I	d	-	-	-	Ⅳ				全体的に破損。 NIG - 1626

木製品観察表（6）柱根・礎板・根絡み

（「備考」の ㊗ は、2004年3月時点で保存処理済みであることを示す。）

報告No.	種別	樹種	木取り	ピットNo.	遺構No.	法量			尖度	側面形態	加工痕配列	加工面構成	加工痕の計測			側面加工	溝	炭化	樹皮	備考
						長さ（cm）	太さ（cm）	厚さ（cm）					平面形（長さ/幅）	深さ（mm）	縦断面形					
	柱根	クリ	-	2201	SB29	52.0	12.0		-	-	-	-	-	-	-				○	底面破損。NIG - 1506
	柱根	クリ	A	2525	SB29	41.0	14.0		0.20	EかA	I	eかd	-	-	-	×				底面はタンニン付着。NIG - 1663
	柱根	-	-	2195	SB29	29.0	14.0		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	法量は遺構図から計測
136	柱根	クリ	A	1942	SB30	91.0	20.9		0.17	A	I	d	0.71	4	V		I			NIG - 1482
137	柱根	クリ	A	1946	SB30	82.0	22.4		0.40	A	I	d	0.50	4	Ⅳ	Ⅳ・V				NIG - 1577
138	柱根	クリ	E	9833	SB30	56.0	26.0	14.0	0.17	D	Ⅱ	b	0.63	1	Ⅲ	V・Ⅵ	I			原材径30cm以上。NIG - 1411
139	柱根	クリ	A	1944	SB30	97.1	22.2		0.22	A	I	c	1.60	3	V	Ⅳ・V・Ⅵ	I			
140	柱根	クリ	A	1943	SB30	98.8	25.0		0.19	D	I	d	0.55	5	Ⅳ	Ⅳ				NIG - 1475
141	柱根	クリ	A	1976	SB30	86.1	23.0		0.10	A	Ⅲ	c	0.86	-	V	Ⅳ・V・Ⅵ	I			NIG - 1590
142	柱根	クリ	A	1955	SB30	80.0	26.0		0.23	D	I	e	0.60	4	Ⅳ	×				NIG - 1497
143	柱根	クリ	A	1941	SB31	99.3	26.5		0.26	E	I	e	0.71	4.5	Ⅳ・V	×				NIG - 1516
144	柱根	クリ	A	9831	SB31	105.0	21.5		0.24	B	I	d	0.64	6	Ⅳ	V・Ⅶ	Ⅱ			NIG - 1410
145	柱根	コナラ節	A	1945	SB31	121.6	29.0		0.12	A	I	d	0.67	1.5	V	Ⅰ・Ⅵ				NIG - 1498
146	柱根	クリ	A	1951	SB31	76.4	29.5		0.12	D	I	b	0.52	8	Ⅳ		I			NIG - 1581
147	柱根	クリ	A	2292	SB31	100.8	27.8		0.18	E	I	e	0.45	2	V	V・Ⅵ				NIG - 1492
148	柱根	クリ	A	2506	SB31	113.1	26.0		0.10	E	I	e	0.89	3	V	Ⅳ	I			NIG - 1496
149	柱根	コナラ節	A	2299	SB31	88.2	30.8		0.19	A	I	c	1.00	4	Ⅳ	×				NIG - 1476
150	柱根	アカマツ	A	2338	SB32	55.0	26.4		0.24	D	Ⅲ	e	0.69	4	Ⅳ	V				NIG - 1640
151	柱根	クヌギ節	A	2421	SB32	75.0	19.0		0.34	A	I	d	0.52	4	Ⅳ	×				NIG - 1518
152	柱根	クヌギ節	A	2439	SB32	87.0	26.0		0.27	A	Ⅱ	c	0.88	1	V	Ⅳ・V・Ⅵ	V			切り残し痕が細長い。NIG - 1529
153	柱根	コナラ節	A	1948	SB32	133.4	20.5		0.24	A	I	a	0.83	4	V		V			NIG - 1528
154	柱根	コナラ節	A	2226	SB32	88.2	19.9		0.26	E	I	e	0.58	5	Ⅳ	Ⅳ				底面（樹芯部）破損。NIG - 1632
155	柱根	コナラ節	A	1964	SB32	65.0	21.1		0.26	A	I	d	0.85	2.5	V	Ⅳ・V				NIG - 1520
156	柱根	コナラ節	A	1978	SB32	105.0	19.5		0.25	D	Ⅲ	e	0.52	1	V	×				NIG - 1504
157	柱根	コナラ節	A	2001	SB32	72.5	25.4		0.21	B	Ⅲ	d	0.70	3	V	V	V		△	僅かに樹皮（内皮）が残存。NIG - 1480
158	柱根	コナラ節	A	2248	SB32	100.4	26.6		0.35	A	I	e	0.65	4	Ⅳ	×				NIG - 1512
159	柱根	クリ	B	2186	SB33	43.0	18.4		1.36	E	I	d	2.00	4	Ⅳ	V			○	NIG - 1625
160	柱根	クリ	B	2198	SB33	47.4	23.0		1.21	B	I	d	1.09	5	I	Ⅳ・V			○	NIG - 1628
	柱根	コナラ節	A	1953	SB33	50.0	11.0		0.29	B	I	d	-	-	-	Ⅳ				NIG - 1584
	柱根	クリ	A	2006	SB33	36.0	15.0		1.00	A	I	d	0.48	1	V	V・Ⅵ				下端部は159・160と形態的類似。NIG - 1594
161	柱根	クヌギ節	A	25	SB34	45.5	13.0		0.33	A	I	d	0.70	4	Ⅳ	Ⅰ?				NIG - 1311
	柱根	ヤマグワ	A	26	SB34	74.5	13.0		0.19	A	I	e	0.68	3	Ⅳ	Ⅳ・V・Ⅵ				底面付近の側面削り。NIG - 1312
	柱根	ヤマグワ	B	1934	SB34	77.0	14.0		-	-	-	-	-	-	-	V			○	底面破損。下端部は削りにより先鋭？NIG - 1573
	柱根	クヌギ節	A	1938	SB34	32.0	8.0		0.35	EかB	I	eかd	-	-	-	×				NIG - 1568
	柱根	クヌギ節	A?	1952	SB34	43.0	10.0		0.30	A	I	d	0.87	1.5	V	-				側面破損。NIG - 1582
	柱根	クヌギ節	A	2010	SB34	51.0	13.0		0.29	A	I	d	0.80	1	V	-				NIG - 1595
162	柱根	クリ	A	2205	SB35	70.0	15.0		0.60	B	Ⅲ	f	-	-	-	Ⅳ				底面はタンニン付着。NIG - 1630
163	柱根	クリ	E	2011	SB35	62.8	15.0	12.0	0.31	B	Ⅲ	d	1.00	4	Ⅳ	V・Ⅵ				NIG - 1596
164	柱根	クリ	E	2009	SB35	57.6	19.0	11.6	0.27	D	I	d	0.51	4	Ⅳ	Ⅵ				NIG - 1491
	柱根	クリ	-	2202	SB35	-	-		-	-	-	-	-	-	-					全体に欠損・腐蝕。NIG - 1629
	柱根	ヤマグワ	A	1949	SB41	64.0	21.0		0.21	AかE	I	dかe	0.93	2	V	×				NIG - 1579
	柱根	コナラ節	A	1950	SB41	54.0	17.5		0.23	A	I	cかd	-	-	-	×				底面は破損とタンニン付着。NIG - 1580
	柱根	コナラ節	A	1980	SB41	60.0	22.0		0.14	B	Ⅳ	e	0.67	3	Ⅲ	Ⅳ?				NIG - 1592
	柱根	クリ	A?	2277	SB41	38.0	23.0		-	-	-	-	-	-	-					全体に破損。NIG - 1634
	柱根	ヤマグワ	B	1947	SB42	83.0	15.0		0.31	AかE	I	d	1.00	1	V	Ⅳ・V・Ⅵ			○	側面一部面取り。NIG - 1578
	柱根	ヤマグワ	-	1974	SB42	57.0	13.5		-	-	-	-	-	-	-	×				全体に破損。NIG - 1589
	柱根	クヌギ節	A?	1999	SB42	43.5	10.5		0.24	A	I	d	0.67	2	V	-				側面破損。NIG - 1593
	柱根	クヌギ節	A?	2280	SB42	24.0	15.0		0.20	A	I	d?	0.74	1	V	-				側面破損。NIG - 1635
	柱根	ヤマグワ	A	2283	SB42	48.0	12.0		0.40	A	I	d	0.80	2	V	×				NIG - 1636
165	柱根	クリ	A	1656	SB49	34.5	14.6		0.21	D	I	d	0.76	3	Ⅳ	×				NIG - 1371
166	柱根	クリ	E	1607	SB49	37.0	19.5	14.2	0.24	A	I	d	0.54	3	Ⅳ	V・Ⅵ				芯持ち角材状。NIG - 1742
	柱根	クリ	A	1466	SB49	99.0	20.0		0.55	C	Ⅱ	c	-	-	-	Ⅳ				切り残し痕あり。NIG - 1334
	柱根	クリ	A?	1469	SB49	46.5	23.0		-	-	-	-	-	-	-	Ⅳ				全体に破損。NIG - 1337
	柱根	クリ	A	1601	SB49	40.7	15.0		0.20	A	I	d	-	-	-	V				底面摩耗。NIG - 1360
	柱根	クリ	A	1609	SB49	47.0	16.0		0.19	D	I?	b	-	-	-	Ⅳ				NIG - 1426

木製品観察表（7）柱根・礎板・根絡み

（「備考」の ㊗ は、2004年3月時点で保存処理済みであることを示す。）

報告No.	種別	樹種	木取り	ピットNo.	遺構No.	法量			尖度	側面形態	加工痕配列	加工面構成	加工痕の計測			側面加工	溝	炭化	樹皮	備考
						長さ（cm）	太さ（cm）	厚さ（cm）					平面形（長さ/幅）	深さ（mm）	縦断面形					
	柱根	クリ	A（E）	1660	SB49	81.0	25.5		0.18	D	Ⅲ	b	0.67	3	V	Ⅳ・Ⅵ				側面一部面取りでやや角材状。NIG－1373
	柱根	クリ	A?	1675	SB49	67.0	17.0		-	-	-	-	-	-	-	-				全体に破損。NIG－1377
	柱根	クリ	D?	1977	SB50	18.0	8.5	8.5	-	-	-	-	-	-	-					1/6～1/8のミカン割材？NIG－1591
	柱根	クリ	A	1623	SA1	31.0	4.0		0.75	A?	Ⅰ?	-	-	-	-	×				全体に破損。NIG－1708
	柱根	タラノキ	A	1624	SA1	61.0	14.0		0.57	A	Ⅰ	d	-	-	-					側面一部面取り。NIG－1709
	柱根	ヤナギ属	C?	1625	SA1	18.0	5.3	3.5	0.75	A?	-	-	-	-	-	-				半割材？全体に破損。NIG－1682
	柱根	クリ	C?	1640	SA1	40.5	7.0	3.6	-	-	-	-	-	-	-	×				半割材？全体に破損。NIG－1370
	柱根	クリ	-	1683	SA1	42.5	7.5	5.5	-	-	-	-	-	-	-	×				半割材？全体に破損。NIG－1683
	柱根	-	-	1707	SA1	60.0	4.0		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	法量は遺構図から計測
	柱根	-	-	1713	SA1	47.0	6.0		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	法量は遺構図から計測
167	柱根	トネリコ属	A	942		22.0	16.0		0.43	A	Ⅰ	d	0.93	3	Ⅳ	×				樹芯部空洞化。NIG－1328
168	根絡み	クリ	板目	1467		37.0	16.0	4.5					0.54	1	Ⅳ		○			一端加工痕あり。169と同一原木？
169	根絡み	クリ	板目	1467		38.6	8.2	3.2					0.50	1	Ⅳ?		○			一端加工痕あり。168と同一原木？NIG－1740
170	根絡み	クリ	分割	1467		29.5	6.5	4.5					1.04	8	Ⅲ					一端加工痕あり。横断面三角形。NIG－1335
171	根絡み	クリ	分割	1468		38.5	9.0	6.5					0.50	1	Ⅳ		○			一端加工痕あり。角材状。NIG－1336
172	根絡み	クヌギ節	ミカン割	1472		30.4	4.5	4.4												一端加工痕あり。1/8のミカン割材。NIG－1895
173	柱根	クリ	C	1544		51.0	12.5	6.8	0.45	A	Ⅰ	d	1.36	10	Ⅳ	×				NIG－1349
174	柱根	スギ	G	1552		26.3	5.9	3.2	-	D	-	-	-	-	-					NIG－1351
175	根絡み	クヌギ節	丸木取	1615		18.0	5.0													Y字材。全木口に加工痕あり。NIG－1761
176	柱根	トネリコ属	A	1635		50.0	12.0		0.48	A	Ⅱ	c	0.49	5	Ⅳ	×				NIG－1368
177	根絡み	クリ	丸木取	1658		25.0	11.0													両端加工痕あり。NIG－1372
178	根絡み	クリ	分割	1658		13.8	5.9	8.7												角材状。両端加工痕あり。NIG－1944
179	根絡み	トネリコ属	分割	1679		18.0	7.0	5.5												芯持ち角材状。両端加工痕あり。NIG－1798
180	根絡み	トネリコ属	偏ミカン割	1679		15.1	5.4	3.4												両端加工痕あり。NIG－1911
181	柱根	トネリコ属	B	2244		102.2	14.0		0.63	B	Ⅰ	d	0.57	5	Ⅳ	×			○	NIG－1565
	柱根	単維管束亜属	-	23		53.0	13.5		-	-	-	-	-	-	-	-				全体に破損。NIG-1309
	柱根	クリ	A	28		96.0	16.5		0.27	C	Ⅱ	f	0.66	2	Ⅳ	×				NIG－1313
	柱根	ヤマグワ	A	29		60.0	15.5		-	-	-	-	-	-	-	Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ				全体に破損。NIG－1314
	柱根	クリ	C	30		47.0	13.5	9.0	0.22	A?	Ⅰ?	d?	0.50	2	Ⅳ	Ⅴ・Ⅵ				側面面取り。NIG－1315
	柱根	ブナ属	B	871		11.0	5.5		-	-	-	-	-	-	-				○	全体に破損。NIG－1689
	柱根	クヌギ節	B	918		16.5	7.5		0.33	A	Ⅰ	d	0.60	2	Ⅳ	-			○	NIG－1702
	柱根	ハンノキ節	C	924		28.5	13.5		-	-	-	-	-	-	-	-			○	NIG－1326
	柱根	ハンノキ節	-	926		18.0	5.8	3.0	-	-	-	-	-	-	-	-				破片。NIG－1677
	柱根	トネリコ属	B	927		64.0	7.5		-	-	-	-	-	-	-	Ⅰ・Ⅳ・Ⅶ			○	底面破損。NIG－1327
	柱根	ブナ属	A?	928		47.0	19.0		-	-	-	-	-	-	-					NIG－1738
	柱根	コナラ節	B	943		58.5	10.5		0.43	A	Ⅰ	d	-	-	-	×			○	底面摩耗。NIG－573
	柱根	樹皮	B?	965		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				○	木質部が腐蝕し、樹皮のみ残存。NIG－1690
	柱根	コナラ節	B?	968		18.5	10.0		-	-	-	-	-	-	-	-			○	木質部が腐蝕し、樹皮のみ残存。NIG－1712
	柱根	ヤマグワ	A?	978		45.0	10.0		0.55	A	Ⅰ	d	0.80	1	V	-				NIG－1330
	柱根	コナラ節	B	979		73.0	12.0		0.19	A	Ⅰ	d	-	-	-	×			○	底面摩耗・破損。NIG－1678
	柱根	クリ	D	989		26.5	8.5		0.71	B	Ⅰ	b	-	-	-					芯持ち角材状。切り残し痕あり。NIG－1713
	柱根	クリ	B?	994		18.0	5.5		-	-	-	-	-	-	-	-			○	全体に破損。空洞化。NIG－1714
	柱根	ヤナギ属	-	998		-	-		-	-	-	-	-	-	-				○	破片。NIG－1691

木製品観察表（8）柱根・礎板・根絡み

（「備考」の ㊟ は、2004年3月時点で保存処理済みであることを示す。）

報告No.	種別	樹種	木取り	ピットNo.	遺構No.	法量			尖度	側面形態	加工痕配列	加工面構成	加工痕の計測			側面加工	溝	炭化	樹皮	備考
						長さ（cm）	太さ（cm）	厚さ（cm）					平面形（長さ/幅）	深さ（mm）	縦断面形					
	柱根	ヤマグワ	A?	1000		20.8	8.0		-	-	-	-	-	-	-	-				全体に破損・摩耗。NIG - 1692
	柱根	樹皮	B?	1403		12.0	5.5	0.5	-	-	-	-	-	-	-				○	樹皮のみ。NIG-1693
	柱根	クヌギ節	E?	1404		51.0	4.0	3.2	-	-	-	-	-	-	-					角材状?両端破損。NIG - 1739
	柱根	トネリコ属	B	1434		17.5	9.3		-	A?	-	-	-	-	-	-			○	全体に破損。NIG - 1694
	柱根	クヌギ節	B?	1445		21.0	8.0		0.44	E	I	e	-	-	-	×			○	全体に破損。NIG - 1331
	柱根	クヌギ節	A	1463		65.0	9.0		0.56	B	I	d	0.75	1.5	Ⅳ	Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ				側面一部面取り。NIG - 1704
	柱根	コナラ節	A?	1464		55.0	11.5		0.17	A	-	-	0.58	1	V	-				底面破損。NIG - 1332
	柱根	コナラ節	E	1465		19.0	4.0	3.5	-	-	-	-	-	-	-	-		○		角材状。一部炭化。NIG - 1333
	柱根	クヌギ節	A	1472		55.5	11.5		0.17	E	I	e	0.94	1	V	-				側面破損。NIG - 1338
	柱根	クヌギ節	A	1495		79.0	16.5		0.28	E?	-	-	-	-	-	Ⅰ				底面破損。NIG - 1341
	柱根	ヤマグワ	-	1497		14.0	9.0	3.0	-	-	-	-	-	-	-	-				全体に欠損・摩耗。NIG - 1741
	柱根	ヤマグワ	F?	1498		19.5	9.5	3.5	-	-	-	-	-	-	-	-				板状？全体に腐蝕・欠損。NIG - 1248
	柱根	コナラ節	A	1543		41.0	6.9	4.0	-	-	-	-	-	-	-					全体に破損。NIG - 1348
	柱根	クヌギ節	C	1556		45.7	7.8	4.7	0.15	A	I	c	0.59	1	V	V?				分割後、底面加工。NIG - 1352
	柱根	ハンノキ節	E	1568		32.0	4.0	3.5	-	-	-	-	-	-	-	-				角材状。破片。NIG - 1681
	柱根	ハンノキ節	A?	1574		16.0	4.9		-	-	-	-	-	-	-	-				全体に欠損・摩耗。NIG - 1355
	柱根	ハンノキ節	B	1575		51.5	12.0		0.25	A	I	d	-	-	-	×			○	底面摩耗。NIG - 1356
	柱根	クリ	E?	1581		25.5	9.0	6.0	-	-	-	-	-	-	-	-				分割材？全体に破損。NIG - 1358
	柱根	クリ	A?	1591		31.0	11.0		0.18	B?	-	-	-	-	-	-				全体に破損。NIG - 1358
	柱根	クリ	E	1592		16.0	8.5	7.2	0.38	-	Ⅱ	-	-	-	-					底面加工後、分割。NIG - 1696
	柱根	クヌギ節	B	1606		27.5	7.5		0.33	A	I	a	-	-	-	×			○	底面摩耗。NIG - 1363
	柱根	トネリコ属	C	1611		43.0	6.0	4.0	0.50	A	I？	-	-	-	-	×				半割後、底面加工。NIG - 1365
	柱根	クヌギ節	B?	1614		22.0	6.0		0.42	A	I	d	-	-	-	-			○	全体に破損。NIG - 1707
	柱根	コナラ節	-	1615		31.5	6.0	4.0	-	A?	-	-	-	-	-	-				全体に破損。NIG - 1743
	柱根	コナラ節	A	1626		43.0	10.5		-	-	-	-	-	-	-	-				全体に破損。NIG - 1278
	柱根	-	A	1637		55.0	11.0		-	-	-	-	-	-	-	×				側面一部面取り？法量は遺構図から計測
	柱根	クリ	A	1639		47.0	11.5		-	-	-	-	-	-	-	-		○		全体に欠損・摩耗。一部炭化。NIG - 1369
	柱根	樹皮	B?	1959		8.8	3.0	0.5	-	-	-	-	-	-	-				○	木質部が腐蝕し、樹皮のみ残存。NIG - 1724
	柱根	トネリコ属	B	1963		25.5	10.5		0.48	B	I	f	1.05	2	V	Ⅳ?			○	NIG - 1586
	柱根	クリ	-	2012		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					破片。NIG - 1619
	柱根	コナラ節	A	2237		14.0	17.5	7.5	-	-	-	-	-	-	-					全体に腐蝕。NIG - 1633
	柱根	ヤナギ属	-	2306		21.0	7.0	5.0	-	-	-	-	-	-	-					全体に欠損と摩耗。分割材？NIG - 1638
	柱根	ヤナギ属	B	2330		47.0	10.0		0.50	A	I	c	-	-	-	×			○	底面腐蝕。両端加工？NIG - 1639
	柱根	同定不能	B	2430		53.0	7.0		0.36	B	I？	b?	-	-	-	Ⅳ			○	NIG - 1653
	柱根	コナラ節	B	2522		34.5	6.5		0.51	A	I	d	0.89	1	V	×			○	NIG - 1661
	柱根	クリ	E	9816		40.0	19.0	8.5	-	-	-	-	-	-	-	Ⅵ				板状分割材。全体に欠損。NIG - 1730
	柱根	クヌギ節	-	9817		39.5	9.5		-	-	-	-	-	-	-					全体に摩耗・欠損。NIG - 1666
	柱根	コナラ節	B	9818		57.0	15.0		0.27	A	I？	d	-	-	-	V?・Ⅵ?			○	底面摩耗。NIG - 1402
	柱根	ヤマグワ	E	9819		30.5	15.0	10.5	0.43	-	I？	-	1.00	1	V					芯去り角材状。側面面取り。NIG - 1434
	柱根	クリ	A	9820		55.0	15.0		-	B?	I	d	-	-	-	V				側面一部面取り？底面は破損・タンニン付着。NIG - 1404
	柱根	クリ	C?	9821		60.0	16.0		-	-	-	-	-	-	-	-				底面破損。NIG - 1405

木製品観察表（9）柱根・礎板・根絡み

（「備考」の ㊞ は、2004年3月時点で保存処理済みであることを示す。）

報告No.	種別	樹種	木取り	ピットNo.	遺構No.	法量 長さ(cm)	法量 太さ(cm)	法量 厚さ(cm)	尖度	側面形態	加工痕配列	加工面構成	加工痕の計測 平面形(長さ/幅)	加工痕の計測 深さ(mm)	加工痕の計測 縦断面形	側面加工	溝	炭化	樹皮	備考
	柱根	ヤマグワ	A	9823		44.0	18.0		0.28	E	Ⅲ?	a	0.74	2	V	V・Ⅵ				底面摩耗・破損。側面一部面取り。NIG－1406
	柱根	ヤマグワ	A	9824		58.0	22.5		0.29	E	Ⅰ?	e	-	-	-	-				底面摩耗。NIG－1669
	柱根	トネリコ属	A?	9825		28.5	16.0		-	-	-	-	-	-	-	-				全体に破損。NIG－1408
	柱根	トネリコ属	E?	9827		36.0	6.0	4.5	-	A?	-	-	-	-	-	-		○		角材状？一部炭化。NIG－1670
	柱根	クリ	C	9829		58.0	16.0	7.5	0.31	A	Ⅰ?	cかd	-	-	-	-				底面はタンニン付着。NIG－1409
	柱根	クリ	A	9830		37.0	12.5		-	-	Ⅰ?	-	-	-	-	Ⅳ				底面は破損とタンニン付着で加工痕不明瞭。NIG－1731
	柱根	コナラ節	-	9832		(28.0)	(15.0)		-	-	-	-	-	-	-					全体に破損。NIG－1671
	柱根	コナラ節	A	9834		75.0	13.5		-	-	-	-	-	-	-	-				底面破損。NIG－1412
	柱根	ヤマグワ	A	9840		68.0	17.4		0.26	A	Ⅰ	d	-	-	-	×				底面摩耗。NIG－1417
	柱根	ヤマグワ	A	9841		90.0	21.0		0.26	E	Ⅰ	e	0.60	1	V	Ⅳ				NIG－1418
	柱根	クリ	A	9843		33.5	12.0		0.29	B?	Ⅰ?	d?	-	-	-	×				NIG－2113
182	柱根	クヌギ節	C	1718	SB21	75.0	13.5	7.2	0.67	A	Ⅰ	a	0.56	3	Ⅳ	×				183（P1740）と同一原木。NIG－608
183	柱根	クヌギ節	C	1740	SB21	62.0	15.0	7.2	0.86	A	Ⅰ	d	0.61	3	Ⅳ	V・Ⅵ				182（P1718）と同一原木。NIG－601
185	柱根	クヌギ節	B	1743	SB21	70.0	14.0		0.57	A	Ⅱ	c	0.86	1以下	V	Ⅳ・V			○	NIG－602
186	柱根	クヌギ節	A	1721	SB21	77.5	12.0		0.56	C	Ⅱ	c	0.63	8	Ⅳ	V				NIG－604
187	柱根	クヌギ節	A	1725	SB21	78.0	12.0		0.40	A	Ⅰ	d	0.83	3	Ⅳ	Ⅳ				NIG－603
	柱根	クリ	B	1719	SB21	93.0	14.5		0.38	A	Ⅰ	d	-	-	-	Ⅳ・V・Ⅵ			○	底面付近側面削り。NIG－609
	柱根	クヌギ節	C	1720	SB21	67.5	14.0	7.5	0.36	A?	Ⅰ?	-	0.80	2	V					半割後、底面加工。NIG－607
	柱根	クヌギ節	A	1726	SB21	150.0	12.0		-	A?	-	-	-	-	-	Ⅳ				下端部は尖鋭だが、非人為？NIG－600
	柱根	ハンノキ節	A	1736	SB21	75.0	11.0		0.23	A	Ⅰ	d	0.71	1.5	V	×				NIG－605
	柱根	クヌギ節	A	1741	SB21	76.5	13.0		0.23	B	Ⅰ	d	-	-	-	Ⅳ				底面破損。NIG－606
188	柱根	クリ	A	1723	SB22	70.5	20.0		0.29	B	Ⅰ	c	0.72	2	Ⅳ	Ⅰ・Ⅳ				NIG－613
189	柱根	クリ	A	1727	SB22	39.0	18.5		0.36	B	Ⅱ	c	0.61	3	Ⅳ	V				NIG－610
190	柱根	クリ	A	1750	SB22	84.0	16.0		0.24	A	Ⅰ	d	0.45	2	Ⅳ	Ⅳ・V				NIG－612
191	柱根	クリ	A	1729	SB22	89.5	17.0		0.52	A	Ⅰ	d	0.69	2	Ⅳ	Ⅳ・V				NIG－1286
192	柱根	クリ	A	1739	SB22	65.0	22.0		0.24	C	Ⅰ	d	0.55	-	Ⅲ・Ⅳ	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ	V			NIG－614
193	柱根	クリ	A	1811	SB22	68.5	21.0		0.21	A	Ⅰ	d	0.92	-	Ⅳ・V	V				NIG－615
194	柱根	クリ	A	1728	SB22	82.5	26.0		0.28	B	Ⅰ	e	-	-	-	Ⅳ	Ⅰ			NIG－611
195	柱根	クリ	A	1846	SB22	85.0	28.5		0.21	D	Ⅰ	d	0.69	6	Ⅲ		Ⅰ			NIG－1389
196	柱根	クヌギ節	A	1831	SB23	81.5	15.5		0.26	A	Ⅰ	c	0.62	5	Ⅳ	×				NIG－617
197	柱根	クヌギ節	A	1833	SB23	81.0	15.5		0.34	A	Ⅰ	d	0.69	3	Ⅳ	×				切り残し痕あり。NIG－618
198	柱根	クリ	A	1830	SB23	86.0	14.5		0.31	E	Ⅰ	e	0.69	2	V	V・Ⅵ				NIG－616
199	柱根	コナラ節	A	1816	SB23	134.0	16.0		0.29	A	Ⅰ	d	0.80	5	Ⅳ	V・Ⅶ				NIG－621
	柱根	クリ	A	1810	SB23	77.0	16.5		0.24	A	Ⅰ	d	-	-	-	Ⅳ・V				底面はタンニン付着。NIG－620
	柱根	クヌギ節	A	1832	SB23	80.5	13.5		0.30	E	Ⅰ	d	-	-	-	V・Ⅵ				底面付近側面の広範囲に削り・剥ぎ取り。切り残し痕除去。NIG－619
	柱根	アカマツ	A	1811	SB57	15.5	6.5		-	-	-	-	-	-	-	×				底面破損。NIG－1710
	柱根	クリ	C	1847	SB57	23.0	10.5	6.5	0.48	B	Ⅰ?	-	1.06	4	Ⅲ	Ⅵ				NIG－1388
	柱根	クヌギ節	C	1477		54.0	14.5	8.5	0.24	A	Ⅰ	d	0.92	3	Ⅲ	×				NIG－1339
	柱根	クヌギ節	A?	1478		80.0	13.5		0.20	A	Ⅰ?	-	-	-	-	Ⅳ・Ⅵ				側面面取り？NIG－1340
	柱根	コナラ節	B	1479		33.0	11.5		0.30	A	Ⅰ	d	-	-	-	×			○	底面摩耗。NIG－1688
	柱根	トネリコ属	A	1724		12.0	6.0		0.58	E	Ⅰ	e	-	-	-	×				NIG－1684
	柱根	ヤナギ属	-	1732		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					破片。NIG－1721
	柱根	クリ	C	1812		73.0	12.0	7.0	0.25	A	Ⅰ	d?	-	-	-	Ⅲ				分割後、底面加工。NIG－1384
	柱根	コナラ節	A	1812		65.0	11.0		0.35	A	Ⅰ	d	0.62	3	Ⅳ	×				NIG－1383
	柱根	ブナ属	-	1815		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	×			○	破片。NIG－1385
	柱根	スギ	F	1842		53.0	19.5	6.0	-	-	-	-	-	-	-			○		矢板状の板状分割材。側面炭化。NIG－1685
200	柱根	クリ	A	2080	SB24	47.3	21.6		0.27	A	Ⅰ	d	1.28	6	Ⅳ	×				NIG－1521
201	柱根	クリ	A	2059	SB24	49.4	21.0		0.47	A	Ⅲ	c	0.51	6	Ⅳ	Ⅳ				NIG－1605
202	柱根	クリ	A	2063	SB24	47.7	19.5		0.23	A	Ⅲ	d	0.68	3	Ⅳ	×				NIG－1610
203	柱根	クヌギ節	A	2046	SB24	37.7	10.4		0.40	A	Ⅰ	d	0.64	3	Ⅳ	×				NIG－1562
204	柱根	クリ	A	2087	SB24	56.8	17.0		0.19	A	Ⅲ	e	0.50	3	Ⅳ	×				切り残し一部除去。NIG－1616

木製品観察表（10）柱根・礎板・根絡み

（「備考」の ㊙ は、2004年3月時点で保存処理済みであることを示す。）

報告No.	種別	樹種	木取り	ピットNo.	遺構No.	法量 長さ(cm)	法量 太さ(cm)	法量 厚さ(cm)	尖度	側面形態	加工痕配列	加工面構成	加工痕の計測 平面形(長さ/幅)	加工痕の計測 深さ(mm)	加工痕の計測 縦断面形	側面加工	溝	炭化	樹皮	備考
205	柱根	クリ	A	2040	SB24	81.0	17.8		0.39	A	I	d	0.66	6	Ⅳ	×				NIG - 1522
206	柱根	クリ	A	2045	SB24	64.5	18.0		0.47	C	Ⅲ	e	0.77	5	Ⅳ	×				伐採・分断後、切り残し痕を除去。法量は遺構図から計測。NIG - 1510
207	柱根	クリ	A	2416	SB24	45.6	17.4		0.45	B	I	d	0.71	3	Ⅳ	Ⅵ				底面付近側面を一部面取り。NIG - 1563
208	柱根	クヌギ節	B	2072	SB25	41.2	13.0		0.40	A	I	d	0.40	3	Ⅳ	×			○	NIG - 1547
209	柱根	クヌギ節	B	2368	SB25	59.8	10.0		0.35	A	I	a	1.09	1	V	Ⅳ			○	NIG - 1551
210	柱根	クヌギ節	B	2083	SB25	48.5	10.6		0.50	A	I	d	0.73	-	Ⅳ	×			○	NIG - 1549
211	柱根	クヌギ節	B	2347	SB25	47.2	12.2		0.28	E	I	e	0.68	5	Ⅳ	×			○	NIG - 1550
212	柱根	クヌギ節	B	2094	SB25	55.4	10.0		0.35	A	I	d	0.71	3	Ⅳ	×			○	NIG - 1548
213	柱根	クヌギ節	B	2417	SB25	72.0	8.8		0.61	A	I	c	0.59	5	Ⅳ	Ⅳ			○	NIG - 1546
214	柱根	クリ	C	2070A	SB26	42.6	27.5	15.5	0.14	D	I	d	0.85	4	Ⅳ	Ⅳ・V・Ⅵ				分割後、底面加工。一度の分割で形成。NIG - 1612
215	柱根	クリ	E	2089	SB26	40.7	21.1	14.4	-	-	Ⅳ?	-	-	-	-	V・Ⅵ	○	○		分割面が一部炭化。底面破損・摩耗。NIG - 1618
216	根絡み	トネリコ属	半割	2089	SB26	32.5	13.0	7.6	0.25	A	I	d	0.80	1	Ⅳ					伐採・分断後、分割。NIG - 1557
217	柱根	クリ	A	2379	SB26	34.7	22.1		0.21	A	I	c	-	-	-	×				NIG - 1554
218～220	柱根	クリ	A（E）	2374	SB26	39.0	24.8	21.6	0.23	A	I	b	0.71	5	Ⅲ	V・Ⅵ				NIG - 1553
221	根絡み	クリ	偏ミカン割	2374	SB26	18.4	17.0	6.0												両端加工痕あり。NIG - 1643
222	柱根	クリ	A	2074	SB26	129.0	26.6		0.32	A	I	d	0.75	8	Ⅳ	Ⅳ	I			NIG - 1552
223	柱根	クリ	A	2071	SB26	114.8	25.6		0.24	A	I	e	-	-	-	Ⅳ・V・Ⅵ				底面にタンニン厚く付着。側面一部面取り。NIG - 1613
224	柱根	クリ	A	2060	SB26	71.4	20.5	17.0	0.16	D	I	b	-	-	-	Ⅳ・V・Ⅵ				底面はタンニン付着と摩耗。NIG - 1555
225	根絡み	クリ	偏ミカン割	2060	SB26	9.5	7.5	4.0												両端に加工痕あり。NIG - 1902
226	根絡み	クリ	ミカン割	2060	SB26	12.9	6.5	8.1											○?	両端に加工痕あり。1/6～1/8のミカン割材。NIG - 1901
227	根絡み	クリ	分割	2060	SB26	9.0	9.5	5.3												両端加工痕あり。角材状。木表側も分割。NIG - 1905
228	根絡み	クリ	偏ミカン割	2060	SB26	9.0	7.4	5.4												両端加工痕あり。木表側一部削り。NIG - 1904
229	根絡み	クリ	分割	2060	SB26	9.9	6.3	4.6											○?	両端加工痕あり。角材状。木表側も分割。NIG - 1946
230	根絡み	クリ	板目	2060	SB26	12.8	11.6	5.9												両端加工痕あり。板目板状分割材。NIG - 1945
	柱根	クヌギ節	A	2386	SB27	68.0	13.0		0.25	AかE	I？	dかe	-	-	-	I？・Ⅲ?・Ⅳ				底面は破損・摩耗。NIG - 1559
	柱根	クヌギ節	A	2389	SB27	64.0	14.0		-	-	-	-	-	-	-	Ⅳ				底面は破損・摩耗。NIG - 1531
	柱根	ヤマグワ	B	2399	SB27	59.0	15.0		0.24	A	I	d	0.83	3	Ⅳ	×			○	NIG - 1560
	柱根	ヤマグワ	B	2401	SB27	77.5	12.5		0.21	A	I	d	0.95	1	V	Ⅳ	○?		○	切り残し痕あり。溝はガジリ？NIG - 1561
	柱根	ヤマグワ	A	2403	SB27	73.0	16.0		0.19	B?	I？	d?	-	-	-	Ⅳ				底面破損。NIG - 1523
	柱根	ハンノキ節	B	2405	SB27	66.0	13.0		0.27	A	I	d	1.00	2	Ⅳ	Ⅳ?			○	NIG - 1534
231	柱根	トネリコ属	B	2418	SB46	52.0	10.0		0.38	A	I	d	0.29	2	Ⅳ	×			○	NIG - 1526
232	柱根	ハンノキ節	A	2420	SB46	49.8	10.8		2.24	A	Ⅱ	c	3.40	3	V	×				NIG - 1471
	柱根	ヤマグワ	A	2461	SB46	59.0	8.0		0.36	A	I	d	-	-	-	×				NIG - 1509
	柱根	トネリコ属	B	2462	SB46	56.0	7.5		0.47	A	I	d	0.80	1以下	V	×			○	NIG - 1481
	柱根	クリ	B	2463	SB46	31.0	9.5		0.32	A	I	d	0.91	2	V	×			○	NIG - 1502
	柱根	ミズキ	A	2474	SB46	19.5	9.5		0.53	A	I	d	1.05	1	Ⅳ	Ⅳ				NIG - 1657
	柱根	クヌギ節	A	2470	SB47	69.0	11.0		0.40	E	I	e（d）	0.84	2	V	Ⅳ・V・Ⅵ				切り残し痕あり。NIG - 1539
	柱根	クヌギ節	A（E）	2471	SB47	35.0	8.0		0.42	A	I？	c	-	-	-	V?				側面一部面取り？NIG - 1655
	柱根	クヌギ節	D	2472	SB47	29.5	9.0	5.0	0.17	D	Ⅳ?	b?	-	-	-	-				NIG - 1656
	柱根	クヌギ節	B	2473	SB47	24.5	9.0		0.42	A	I	d	-	-	-	×			○	NIG - 1558
	柱根	ヤマザクラ	B	2479	SB47	26.5	9.5		0.32	A	I	a	1.00	3	Ⅳ	×			○	全体に破損。NIG - 1545
	柱根	クヌギ節	-	2482	SB47	(54.0)	(15.5)		-	-	-	-	-	-	-	-			○	全体に破損。NIG - 1660
	柱根	クヌギ節	A?	2357	SB52	40.0	7.0		0.50	B	I？	d?	-	-	-	-				全体に破損。NIG - 1641
	柱根	クヌギ節	A?	2391	SB52	47.5	11.5		0.35	A	I	d	0.68	2	Ⅳ	×				NIG - 1544
	柱根	クヌギ節	B	2400	SB52	24.0	11.5		0.35	A	I	d	0.60	2.5	V	×			○	NIG - 1537

木製品観察表（11）柱根・礎板・根絡み

（「備考」の ㊙ は、2004年3月時点で保存処理済みであることを示す。）

報告No.	種別	樹種	木取り	ピットNo.	遺構No.	法量 長さ（cm）	法量 太さ（cm）	法量 厚さ（cm）	尖度	側面形態	加工痕配列	加工面構成	加工痕の計測 平面形（長さ/幅）	加工痕の計測 深さ（mm）	加工痕の計測 縦断面形	側面加工	溝	炭化	樹皮	備考
	柱根	アカマツ	B	2364	SB53	43.0	6.5		0.69	A	I	d	-	-	-	×		○	○	樹皮のみ炭化。NIG - 1541
	柱根	クヌギ節	B	2385	SB53	58.0	12.0		0.33	A	I	c	0.80	2	V	Ⅳ			○	NIG - 1511
	柱根	アカマツ	B	2407	SB53	30.0	6.0		0.42	C?	I？	c（a）	-	-	-	×			○	底面腐蝕。NIG - 1542
233	柱根	クリ	A	1791	SB55	149.0	13.0		0.39	A	Ⅱ	c	0.56	3	V	×				NIG - 1380
234	柱根	クヌギ節	C	1823	SB55	73.5	14.5	7.5	0.38	A	Ⅱ	c	0.79	3	V	Ⅶ				分割後、底面加工。NIG - 1386
	柱根	クリ	E	1777	SB55	90.5	18.5	10.0	0.24	-	-	-	0.57	-	-	V・Ⅵ				分割後、底面加工。NIG - 1379
235	柱根	コナラ節	A	1793	SB56	35.5	8.0		0.33	A	I	c	0.36	3	Ⅳ	×				NIG - 1381
	柱根	トネリコ属	A?	1804	SB56	39.0	17.0		-	-	-	-	-	-	-	×				全体に破損。NIG - 1382
	柱根	ヤマグワ	A	1824	SB56	33.0	8.5		1.35	C	Ⅱ	b	0.68	2	Ⅳ	×				NIG - 1387
	柱根	スギ	E	2023	SA2	23.5	1.8	1.5	-	-	-	-	-	-	-					角材状。NIG - 1598
	柱根	エゴノキ属	A	2024	SA2	15.0	9.0		0.31	C	Ⅲ	c	0.68	2	V	Ⅳ				NIG - 1599
236	艫綱杭?	単維管束亜属	D	1849		57.0	14.0	9.6		?										上半部板状。根元部分。NIG - 1744
237	柱根	コナラ節	B	2075		43.0	9.0		0.70	B	I	c	0.66	3	V	×			○	NIG - 1614
238	柱根	ヤマグワ	B	2469		73.0	7.5		0.49	A	I	d	0.23	2	V	Ⅳ			○	実測図には樹皮が表現されていない。NIG - 1540
	柱根	トネリコ属	-	2038		48.5	12.0	5.5	-	-	-	-	-	-	-	-				板状？NIG - 1600
	柱根	クヌギ節	B	2057		23.0	9.0		0.31	A	I	d	-	-	-	×			○	NIG - 1604
	柱根	オニグルミ	-	2064		(57.5)	(17.0)	(5.0)	-	-	-	-	-	-	-					全体に破損。NIG - 1611
	柱根	トネリコ属	A	2070B		24.5	10.0		0.25	A	I	d	-	-	-	×				NIG - 1556
	柱根	トネリコ属	-	2084		43.0	8.0		-	-	-	-	-	-	-	-				分割材？NIG - 1615
	柱根	同定不能	D	2394		16.0	7.0	5.0	-	-	-	-	-	-	-					NIG - 1646
	柱根	トネリコ属	A	2411		15.0	5.0		0.48	C	Ⅱ	c	-	-	-	I？・Ⅲ?				NIG - 1651
	柱根	トネリコ属	A	2475		32.0	15.0		0.52	E	I	e	1.00	3	V	×				NIG - 1567
	柱根	ヤマグワ	A	2476		34.5	6.0		0.33	C?	I？	d?	-	-	-	×				底面腐蝕。NIG - 1658
	柱根	ヤナギ属	B	2478		37.5	8.5		0.59	B	I	f？	0.68	2.5	Ⅲ	×			○	NIG - 1536
	柱根	-	-	2483		67.0	20.0		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	法量は遺構図から計測
	柱根	クリ	D	2534		59.0	16.0	8.0	-	-	-	-	-	-	-					芯去り。底面は破損とタンニン付着。NIG - 1732
	柱根	クリ	E	2535		67.0	17.0	10.5	0.06	D	Ⅳ?	b?	-	-	-	Ⅳ				底面加工後、分割。底面タンニン付着。NIG - 1734

木製品観察表（12）

（「備考」の ㊙ は、2004年3月時点で保存処理済みであることを示す。）

報告No.	種別	木材名・木取り	樹種	出土地点	遺構	時期	長さ（cm）	幅・径（cm）	厚さ・高さ（cm）	炭化	樹皮	備考
239	丸木舟	横木取り	トチノキ	27D	SD1420-E6d	S1	（547.4）	75.0	24.0	○		舷側高24cm、深さ12～15cm以上。NIG - 501。㊙

木製品観察表（13）

（「備考」の ㊙ は、2004年3月時点で保存処理済みであることを示す。）

報告No.	種別	木材名・木取り	樹種	出土地点	遺構	時期	柄長（cm）	柄径（cm）	柄頭長	柄頭幅×厚（cm）	身長（cm）	身幅×厚（cm）	柄断面形	水かき肩形状	水かき断面A	水かき断面B	水かき先端形状	備　考
240	櫂	柄：削出、水かき：板目板材（削出）	スギ	20D4	SX1583-1	S1	73.2	3.6×3.0	6.0	（6.6）×2.4	51.6	7.8×1.8	隅丸方形	ややなで肩	扁平（突線）	扁平	V字	NIG - 502。㊙
241	櫂	板目板材（削出）	スギ	26E10	SD1420-E5c	S1	-	-	-	-	（63.6）	7.8×1.8	-	ややなで肩？	山形（溝）	扁平	V字	NIG - 1975。㊙
242	櫂	柄：削出、水かき：板目板材（削出）	クリ	19E4	SX1528-3	S1	85.8	6.3×5.4	21.3	17.1×6.6	74.4	21.0×5.1	隅丸方形	ややなで肩	山形	扁平（山形）	V字	NIG - 503。㊙
243	櫂状木製品	柄：削出、水かき：板目板材（削出）	クリ	27C24	SD1420-21d	S4～S3	133.8	3.6×3.3	-	-	85.8	22.5×3.9	隅丸方形	肩の張るもの	山形	山形（透かし）	角形	NIG - 553。㊙
244	櫂状木製品	柄・水かき部：流れ柾目板材（分割・削出）	クリ	26B25	SD1420-E16b	Ⅶd	（102.2）	7.2×3.0	-	-	（42.6）	12.0×3.0	長方形	顕著ななで肩	扁平	扁平	U字？	NIG - 1959
245	櫂状木製品	柄：削出、水かき：板目板材（削出）	クリ	23B11	SX1689-1	S1	-	-	-	-	（66.0）	（9.5×1.6）	方形？	ややなで肩	扁平？	扁平？	-	NIG - 1972
246	飾把手付木製品	削出	ケンポナシ属	18C24	SD1420-11e	S2	（26.8）	2.8×2.6	17.0	9.2×2.4	-	-	隅丸方形	-	-	-	-	NIG - 509。㊙
247	飾把手付木製品	削出	ケヤキ	24E5	SD1420-E5b	S1	（23.4）	3.0×2.8	6.5	6.6×2.1	-	-	丸	-	-	-	-	壁材に接近して出土。NIG - 1916。㊙

木製品観察表（14）

（「備考」の ㊐ は、2004年3月時点で保存処理済みであることを示す。）

報告No.	種別	木材名・木取り	樹種	出土地点	遺構	時期	長さ（cm）	幅・径（cm）	厚さ・高さ（cm）	炭化	樹皮	備　考
248	丸木弓	略丸木材	イヌガヤ	23E7	SX1702-3	S1	86.3	2.3				NIG - 504。㊐
249	弓状木製品	略丸木材	イヌガヤ	25E1	SD1420-E5b	S1	(154.0)	4.0			○	NIG - 551。㊐
250	弓状木製品	略丸木材	イヌガヤ	24C18	SD1420-21	S4～S3	146.5	4.5				NIG - 1974
251	掘り棒状木製品	丸木材	カマツカ	22D13	SD1420-21c	S4～S3	(96.5)	2.1				NIG - 555
252	横槌	削出棒材	マツ属	22C13	SD1420-21c	S4～S3	26.9	7.6（3.9）	6.9（4.3）	○		（）内の数値は柄部の数値。NIG - 554。㊐
253	把手付容器	横木取り	トチノキ	17F17	SD1420-2a	S1	36.4	(25.0)	9.5			NIG - 1929。㊐
254	柄頭状木製品	角材	キハダ	23E7	SX1702-2	S1	(54.5)	3.9	2.3			NIG - 1919
255	刻み付木製品	丸木材	ムラサキシキブ属	17E17	SX958-5	S4～S3	(25.4)	4.0	2.1			NIG - 1918
256	刻み付木製品	削出棒材	アカマツ	19D7	SC1517-1	S1	(16.0)	3.2	2.3			NIG - 1925
257	刻み付木製品	丸木材	クリ	17F8	SX2185-1	S1	(11.0)	3.6	3.1	○		全体の約7割が炭化。NIG - 1923
258	杓文字状木製品	板目板材	スギ	17E2	SX958-4	S4～S3	(19.5)	4.9	0.7			NIG - 1917。㊐
259	篦状木製品	削出棒材	クリ	8E12	SX763-8	S2～S1	28.0	3.9	2.3			NIG - 1950
260	杭状木製品	半割材	ナシ亜科	23B23	SX1687-1	S1	(15.0)	5.1	2.7		○	NIG - 1922
261	抉り入り板状木製品	板目板材	-	23B21	SX1687-1	S1	(5.0)	3.5	1.0			
262	紐で繋がれた木器と石器	板目板材（削出）	ムクロジ・針葉樹枝材	17F17	SD1420-2d	S1	10.8	9.8	2.6			計測値は木器の数値。木器：NIG - 2093、紐材：NIIG - 2094。㊐
263		芯去りミカン割材	クヌギ節	16F19	SD1420-21a	S4～S3	(202.5)	9.3	10.5			約1/8のミカン割材。NIG - 1466
264		角材	クヌギ節	22B9	SD1420-1c	S1	(135.0)	9.0	4.8		○	NIG - 1969
265		角材	クヌギ節	22B9	SD1420-1c	S1	(214.0)	9.5	5.7			NIG - 1977
266		角材	クヌギ節	22B9	SD1420-1c	S1	(184.0)	9.0	6.5			NIG - 1971
267		板目板材	クヌギ節	20D4	SD1420-21d	S4～S3	(146.0)	9.0	2.4			NIG - 1962
268		角材	クリ	25E2	SD1420-E5b	S1	(118.0)	7.0	3.0			壁材に近接して出土。NIG - 561。㊐
269		板目板材	クリ	23C4・9	SD1420-2b	S1	(187.0)	27.4	3.5	○		NIG - 1973
270		丸木材	トネリコ属	8F13	SD19-19	S4～S3	(121.6)	6.2				NIG - 1462
271		丸木材	ムラサキシキブ属	24E4	SX1702-3	S1	(119.6)	4.5			○	NIG - 1970
272		Y字材（丸木材）	クリ	17F11	SD1420-1d	S1	(53.0)	13.5				NIG - 1464
273		板目板材	ヤナギ属	26D23	SD1420-E17a	Ⅶd	54.6	21.2	6.1			NIG - 1960
274		板目板材	クリ	16F20	SD1420-1a	S1	(60.5)	11.4	4.8			NIG - 1463
275		板目板材	-	24E13・14	SX1844-1	S4～S3	46.5	13.5	5.5			
276		板目板材	クリ	24B13	SK1766-8	S1	41.0	17.0	3.5	○		NIG - 1949
277		板目板材	ブナ属	19B9	P1580-2b	S2	57.0	20.0	5.5			NIG - 1936
278		柾目板材	ブナ属	20E9	SD1420-21c	S4～S3	(52.0)	13.5	5.5			NIG - 1948
279		丸木材	トネリコ属	22B17	SD1420-2b	S1	73.0	15.0				NIG - 1890
280		丸木材	クリ	22B15	SD1420-2a	S1	30.0	11.8				NIG - 1893
281		半割材	コナラ節	16F24	SD1420-21a	S4～S3	(29.0)	9.7	5.5			NIG - 1892
282		ミカン割材	トネリコ属	17D24	SD1420-13	S2	(35.0)	7.0	5.5			NIG - 1930
283		ミカン割材	ハンノキ節	25E1	SD1420-E6b	S1	(29.5)	(7.0)	3.2		○	樹皮が一部残存。NIG - 1926
284		板目板材	コナラ節	25D25	SD1420-E9g	S2	25.3	9.5	1.8			NIG - 1927
285		板目板材	キリ	25D22	SX1702-3	S1	26.5	7.2	0.9			NIG - 1956
286		板目板材	クリ	23B21	SX1689-1	S1	(23.5)	11.0	3.3			NIG - 1915
287		丸木材	タラノキ	23B16	SD1420-2c	S1	24.0	2.7			○	NIG - 1934
288		半割材	ナシ亜科	17E12	SX958-5	S4～S3	26.0	6.0	3.0		○	NIG - 1932
289		板目板材（分割）	クリ	17B22	SC105-1	S1	13.2	8.6	3.0			分割後、分断。NIG - 1941
290		偏半割材	トネリコ属	17E12	SX958-5	S4～S3	13.0	13.1	4.8			分断後、分割。加工痕明瞭。NIG - 1920
291		角材（分割）	スギ	22B7	SD1420-1	S1	(84.0)	2.8	2.6			NIG - 560
292		角材（削出）	スギ	20D3	SX1583-1	S1	(43.9)	1.6	1.3			NIG - 1947
293		角材（分割）	スギ	23B7	SX1688-1	S1	(16.6)	1.1	0.4			NIG - 1914
294		角材（削出）	スギ	21C25	SX1583-1	S1	(26.4)	1.5	1.2			NIG - 1955
295		角材（削出）	スギ	23B6	SX1686-2a	S1	(22.0)	1.3	0.9			NIG - 1921
296		板目板材	スギ	20D3	SX1583-1	S1	23.8	2.3	0.2			NIG - 1954
297		角材（削出）	トネリコ属	26F5	SD1420-E14a	S5	17.2	7.4	4.1	○		NIG - 1953
298		角材	アカマツ	8E12	SX763-11	S2～S1	15.0	3.0	1.5	○		NIG - 1935
299		角材	アカマツ	17E3	SX958-4	S4～S3	(11.9)	1.6	1.5	○		NIG - 1931
300		角材（削出）	マツ属	20C3	SD1420-3a	S1	(10.0)	1.6	0.7	○		NIG - 1933
301	樹皮製容器	-	ケヤキ樹皮	22D4	SD1420-21c	S4～S3	18.9	17.3	0.6		○	平面円形ではなく、平面方形の「ミ」のようなもの？ NIG - 505。㊐
302	樹皮製容器	-	ケヤキ樹皮	23D13	SD1420-21a	S4～S3	8.0	(16.5)	0.9		○	NIG - 506。㊐
303	縄	-	-	17F8	SX2184-1	S1	1.5	0.5				
304	縄	-	-	17F8	SX2184-1	S1	1.9	0.5				
305	縄	-	-	17F8	SX2184-1	S1	2.2	0.4				
306	縄	-	-	17F8	SX2184-1	S1	2.2	0.3				
307	縄	-	-	17F8	SX2184-1	S1	1.7	0.2				
308	樺皮製環状製品	-	-	20D3	SD1420-2a	S1	2.4	1.7	0.5			
309	樺皮素材	-	-	17E7	SX958-4	S4～S3	1.3					
310	樺皮素材	-	-	23B16	SX1689-1	S1	-	0.5				
311	樺皮素材	-	-	15D23	P920-8	S4～S3	31.5	1.4				
312	樺皮素材	-	-	22E20	SX1702-2	S1	21.8	0.7	0.2			三重に丸まっている
313	樺皮素材	-	-	23B21・23	SX1689-1	S1	30.0	1.8				長さは推定値

漆製品観察表

（「備考」の ㊏ は、2004年3月時点で保存処理済みであることを示す。）

報告No.	器種	出土位置	出土遺構	所属層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	糸玉にかかる計測値			備考
								分類	結び目数	一束の本数	
1	赤漆塗り糸玉	10E14		S3	①3.7 ②③16以上	①1.0（0.5） ②③1.1（0.6）		B	①2 ②③5	約15	①と②・③は同一個体か？ ㊏
2	赤漆塗り糸玉	8E14	SX112-9	S1	①3.5②1.9 ③1.2	①0.8②0.7 ③0.9		①②A ③C	①3②2 ③1	約20	①と②は同一個体。 ①・②と③の関係は不明。 ㊏
3	赤漆塗り糸玉	8E14	SX112-8	S1	①2.0②2.3 ③2.6④2.7	①1.3②1.2 ③1.1④1.3		A	①2②2 ③2④2	約20	④の結び目同士にのみ若干の間隔がある。 ㊏
4	赤漆塗り糸玉	8E14	SX112-9	S1	1.2	0.7		C	1		㊏
5	赤漆塗り糸玉	8E14	SX112-9	S1	2.3	1		A	2	20～	㊏
6	赤漆塗り糸玉	8E14	SX112-4	S1	4.6	1.3（0.8）		A	3	20～	本来は長さ7cm以上の可能性がある。 ㊏
7	赤漆塗り糸玉	10E4	SC712	S1	約15.0	2.1		A	5（6?）	30～	㊏
8A	赤漆塗り糸玉	13F22	SC2424	S5	①9.5②4.0	①1.6（0.6） ②0.8		①B②C	①3 ②1(2?)	15～20	①と②は同一個体か？ ㊏
8B	赤漆塗り糸玉	13F22	SC2424	S5	①1.8②0.9	①1.4②1.0		D		15～20	図示しているのは①。②は未図示。 ㊏
9A	赤漆塗り糸玉	12F13	SC2266	S4	①5.7②3.5	①2②0.8		①B②D	①3	20	①と②は同一個体か？ ㊏
9B	赤漆塗り糸玉	12F13	SC2266	S4	2.9	1.7		C	1	25	㊏
10	赤漆塗り糸玉	13F11	SC2266-3	S4	5.6	1.4（1.0）		A	3	25～30	㊏
11	赤漆塗り糸玉	12F9	SC2266	S4	7.7以上	1.2		A	6	15～20	㊏
12	赤漆塗り糸玉	12F8	SC2266	S4	3.6	1.2		C	1	10～15	㊏
13	赤漆塗り糸玉	12F19	SC2266	S4	3.2	0.9		C	1		㊏
14	赤漆塗り糸玉	13E19	SC801	S4	13.5以上	1.4（0.5）		A	8	約20	㊏
15	赤漆塗り糸玉	13E16		S4	4.5	1.6（0.9）		A	2	20～	㊏
16	赤漆塗り糸玉	13E16		S4	2.4	1.5		C	1		㊏
17	赤漆塗り糸玉	12F19	SC2227	S1	①2.8②2.6	①1.5②1.1		C	①②1		①と②は同一個体であろう。 ㊏
18	赤漆塗り糸玉	13F16		S3	①10.3 ②2.5③2.3	①1.4 ②1.1③1.0		①A ②C③D	①6 ②1	①② 約15	①～③は同一個体で、本来は長さ20cm以上の可能性が高い。 ㊏
19	赤漆塗り糸玉	11E14	SX740	S3	20.0以上	0.9		A	17	10～15	㊏
20	赤漆塗り糸玉	12F3	SC2247	S3	①3.0②2.6	①0.9②0.3		①A②D	①2		①と②は同一個体か？ ㊏
21	赤漆塗り糸玉	12F4	SC2247	S3	1.6	1.7		C	1		腕輪状漆製品（38）が隣接。 ㊏
22	赤漆塗り糸玉	15D17	SC859	S4	3.3	1.1		C	1		㊏
23	赤漆塗り糸玉	17E1	SX958-1	S4～S3	1	0.5		C	1		㊏
24	赤漆塗り糸玉	23B21	SX1687	S1	2.3	1.8		D			㊏
25	赤漆塗り糸玉	23B21	SX1685	S1	1.4	1.1		C	1		
26	結歯式縦櫛	5D4		Ⅶ	4.8	5.2	1	-	-	-	㊏
27	結歯式縦櫛	5C4		Ⅶ中層	2.3	3.2	0.9	-	-	-	㊏
28	結歯式縦櫛	8F8		Ⅵ	7.2	9	1.3	-	-	-	㊏
29	結歯式縦櫛	19D11	SC1517	S1	7.4	7.9	1.7	-	-	-	㊏
30	腕輪状漆製品	13E21		S5	径7.0	0.5	0.1	-	-	-	腕輪状漆製品（31・32）が隣接。 ㊏
31	腕輪状漆製品	13E21		S5	径4.5	0.4	0.1	-	-	-	腕輪状漆製品（30・32）が隣接。 ㊏
32	腕輪状漆製品	13E21		S5	3.4	0.3	0.3	-	-	-	腕輪状漆製品（30・31）が隣接。 ㊏
33	腕輪状漆製品	12E25	SC2266・2247	S4	9.9	0.6	0.5	-	-	-	㊏
34	腕輪状漆製品	12F14	SC2266	S4	①2.5②1.0 ③0.8④1.4	①1.0②0.8 ③0.6④0.8		-	-	-	赤彩された貝殻が隣接（b～d）
35	腕輪状漆製品	13E23		S4	5.8	0.5		-	-	-	㊏
36	腕輪状漆製品	14F1	SX2249	S4	10.7	0.6	0.2	-	-	-	㊏
37	腕輪状漆製品	12F1	SC2247	S3	6.3	0.8		-	-	-	
38	腕輪状漆製品	12F4	SC2247	S3	4.6	0.3	0.08	-	-	-	赤漆塗り糸玉（21）が隣接。 ㊏
39	腕輪状漆製品	23B21	SX1685	S1	8.2	0.6	0.7	-	-	-	㊏
40	腕輪状漆製品	16F19	SD1420-2a	S1	10	0.8	0.6	-	-	-	㊏
41	腕輪状漆製品	13F3		S4	5.1	1.3		-	-	-	
42	腕輪状漆製品	13F5		S3	11.6	1.1		-	-	-	㊏
43	ヘアピン状漆製品	23B21	SX1685	S1	3.9	0.9	0.4	-	-	-	
44	ヘアピン状漆製品	17F2	SX2184	S1	1.4	0.6		-	-	-	
45	ヘアピン状漆製品	23B2	SX1688	S1	1.6	0.5		-	-	-	
46	ヘアピン状漆製品	10E1		S2	1.4	0.6	0.5	-	-	-	
47	ヘアピン状漆製品	13E	SC801	S4	1.2	0.5		-	-	-	ヘアピン状の結節部
48	棒状漆製品	16F15	SD1420-2a	S1	10.8	1.6		-	-	-	
49	漆塗り弓	23B16	SX1688	S1	54.6	2.3	1.6	-	-	-	ニシキギ属（NIG-523）、黒漆塗。 ㊏
64	赤色顔料塊	10E4		S4	31.6	23.9	2.5～3.0	-	-	-	赤漆塗り糸玉（7）が隣接
65	赤漆被膜	15E9-1		Ⅵ	6.7	5.4		-	-	-	写真図版でのみ掲載

漆要具観察表

（胎土、外面調整・施文、外面炭化物、内面炭化物、備考における略記号は土器観察表中の表記と同様）

報告No.	器種	分類	出土位置	出土遺構・出土層位	浮線文種類	器高（cm）	口径（cm）	底径（cm）	残存率	胎土	外面調整・施文	内面調整・施文	外面色調	内面色調	外面炭化物	内面炭化物	備考
50	壺	B	8E12	SX763-8					0.000	雲・長	肩:平行沈線文	ナデ	2.5YR 赤黒色	10YR 黒褐色			外面漆膜
51	壺		15B20	Ⅵ					0.000	金・雲・長	ミガキ	ナデ	2.5YR 極暗赤褐色	10YR 灰黄褐色			外面漆膜
52	壺	A	12E18, 11E17	S4		21.3	9.8	6.2	0.375	金・雲・長	口:浮線文③、肩:浮線文	ナデ	10R 暗赤色	7.5YR にぶい褐色			外面全面に赤漆皮膜、内面赤彩、2.55 ℓ
53	壺	A	24F2・3・8	SX2016-3・2,SD1420-E6c ③・②・①				7.5	0.000	海面骨針・雲	肩～底:ミガキ	丁寧なナデ	2.5YR 極暗赤褐色	10YR 灰黄褐色			一括・外面全面に赤漆皮膜
54	壺	G	26C7	SD1420-21d		6.0	2.5		1.000	金・雲・長	頸肩境に段あり、ナデ・ミガキ、丸底	ナデ	10YR 黒褐色	10YR 黒褐色			内面全面に赤彩、ベンガラ容器か、0.02 ℓ
55	壺	G	22E9	SD1420-E6c		6.1	2.2		0.063	雲・長	頸肩境に段、ミガキ	ナデ	10YR 灰黄褐色	?	頸体下～面		内面全面赤彩濃い、外面全面赤彩、ベンガラ容器か、0.07 ℓ
56	壺		12F13・20, 13F1	SC2247, SC2266				8.0	0.000	金・雲・長	肩～体下:縄文LR、底:ケズリ・ナデヨコ	ナデ	10YR にぶい黄橙色	10YR にぶい黄橙色			一括、内面赤彩濃い、外面も赤彩、割れ口にもあり
57	鉢	A	13F9･12	S5,S4		7.5	11.5	7.8	0.563	長（径1～3mm）多い・金・雲	ナデ、面:ササ圧痕	ナデ	10YR にぶい黄橙色	10YR 黒褐色	口～体上に漆、体下一部スス	口～底漆付着	漆入れ、0.54 ℓ
58	深鉢		11G3･8					5.3	0.000	雲・長	体上:平行沈線文、体下:縄文RL、底:ナデヨコ	ナデ・ミガキ	2.5YR にぶい赤褐色	2.5YR にぶい赤褐色	体～底・面	体	漆要具
59	甕	D2c	22B21, 23D16	SD1420-21c･21a	d2		10.2		0.375	金・雲・長	口:縄文LR、頸:浮線文（浮）、肩:綾杉文、体:縄文LR	ミガキ	10YR 黒褐色	7.5YR 黒褐色	口頸濃い、体～底漆か？	口～体上濃い、漆か？	内面全面に赤彩濃い、炭化物の上に赤彩認められる、漆要具か？0.78 ℓ
60	深鉢		9D25	S3				8.4	0.000	金・雲・長	体:ナデ・ミガキ、底:ナデヨコ	ナデ	7.5YR 黒褐色	5YR 暗赤褐色	体下底		外面体下底・面に漆付着、内面体下～面に0.2mmの厚みで漆膜付着凹凸あり
61	甕		20B11	SC1486				9.4	0.000	金・雲・長	底:ナデヨコ、面:網代痕	底～面:ナデ	2.5Y 黄灰色	2.5YR 暗赤褐色	底		内面の底面全体及び割れ口に赤漆付着、漆要具
62	浅鉢	B1	12E23・24,12F3	SC2227, SC2247, S1	b1	8.1	17.4	6.0	0.875	金・雲・長	口:浮線文③、体:ミガキ	ナデ・ミガキ	2.5Y 暗灰黄色	10YR 暗赤色	口～底		一括、内面体下～面:赤漆皮膜 ・ハケ状工具痕あり、 口～体上:異色の漆皮膜と赤漆膜混在、外面口縁赤彩、外面も赤彩、割れ口に漆あり、意図的に割った可能性あり、0.97 ℓ
63	深鉢		23F3	SD1420-E6c②				6.6	0.000	金・雲・長	体下:条痕文、底:ナデヨコ、面:ササ圧痕？	ナデ	5YR 極暗赤褐色	5YR 極暗赤褐色			漆パレット、外面：液ダレ状に漆付着・割れ面も付着、内面：タテヨコに板状（2.5mm）の圧痕あり

貝殻観察表

※殻長、あるいは殻高のどちらか一方でも計測が可能なものに限り、以下に示すこととした。

ヤマトシジミ

報告No.	遺構	出土位置	殻長（cm）	殻高（cm）
1	SD19-23	8F13	2.4	−
2	SD19-23	8F25	2.7	−
3	SD19-23	8F25	2.9	−
4	SD19-23	8F19	3.1	−
5	SD19-23	8F25	3.3	2.8
6	SD19-23	8F19	3.3	−
7	SD19-23	8F13	3.8	−
8	SD19-23	8F25	3.5	−
9	SD19-23	8F19	3.4	−
10	SD19-23	8F19	4.5	−
11	SD19-23	8F19	3.6	−
12	SD19-23	8F25	4.3	−
	SD19-23	8F19	2.6	−
	SD19-23	8F25	2.8	−
	SD19-23	8F19	2.9	−
	SD19-23	8F25	3.0	−
	SD19-23	8F25	3.1	−
	SD19-23	8F25	3.1	−
	SD19-23	8F13	3.2	3.0
	SD19-23	8F19	3.2	−
	SD19-23	8F25	3.2	−
	SD19-23	8F13	3.4	−
	SD19-23	8F19	3.4	−
	SD19-23	8F19	3.5	−
	SD19-23	8F19	3.5	−
	SD19-23	8F13	3.6	−
	SD19-23	8F13	3.6	−
	SD19-23	8F13	3.6	−
	SD19-23	8F19	3.6	−
	SD19-23	8F19	3.6	−

ヤマトシジミ

報告No.	遺構	出土位置	殻長（cm）	殻高（cm）
	SD19-23	8F13	3.7	−
	SD19-23	8F19	3.7	−
	SD19-23	8F19	3.7	−
	SD19-23	8F19	3.8	−
	SD19-23	8F19	3.8	−
	SD19-23	8F19	3.8	−
	SD19-23	8F19	3.8	−
	SD19-23	8F25	3.9	−
	SD19-23	8F13	4.0	−
	SD19-23	8F18	4.0	−
	SD19-23	8F19	4.0	−
	SD19-23	8F19	4.0	−
	SD19-23	8F19	4.0	−
	SD19-23	8F13	4.7	−
	SX1528	19E7	2.0	−
	SX1528	19E7	−	2.5
	SX1528	19E7	2.6	−

イシガイ

報告No.	遺構	出土位置	殻長（cm）	殻高（cm）
13	SD19-23	8F19	5.5	3.0
14	SD19-23	8F19	5.0	2.7
15	SD19-23	8F19	5.3	3.0
16	SD19-23	8F19	5.0	−
17	SD19-23	8F13	7.3	−
18	SD19-23	8F19	5.7	3.7
20	SD19-23	8F13	−	2.5
21	SD19-23	8F18	5.4	3.1
22	SD19-23	8F25	5.1	2.8
23	SD19-23	8F19	5.0	2.5
	SD19-23	8F25	3.9	2.3

イシガイ

報告No.	遺構	出土位置	殻長（cm）	殻高（cm）
	SD19-23	8F13	4.3	2.7
	SD19-23	8F19	4.5	3.0
	SD19-23	8F13	4.8	2.5
	SD19-23	8F19	4.9	2.8
	SD19-23	8F19	5.0	2.8
	SD19-23	8F19	5.4	−
	SD19-23	8F18	5.6	3.7
	SD19-23	8F13	5.6	−
	SD19-23	8F25	5.7	2.5
	SD19-23	8F13	6.4	4.2
	SD19-23	8F19	6.8	4.0
	SD19-23	8F13	−	3.5
	SD19-23	8F13	−	3.5
	SD19-23	8F19	−	4.3
	SX1528	19E7	−	2.3
	SX1686	22C8	4.1	−
	SX1686	23B21-1	3.0	2.6
	SX1688	22C5	4.5	2.0
	SX1688	22C5	4.5	−
	SX1688	22C5	5.2	2.5
	SX1688	22C5	−	2.3
	SX1688	22C5	4.6	2.3
	SX2020	23E21	4.8	3.0
	SX763-8	8E12-4	5.5	−
	SX763-8	8E12-4	5.6	−

カラスガイ？

報告No.	遺構	出土位置	殻長（cm）	殻高（cm）
	SD19-23	8F13	−	9.5
	SX1688	22C5	8.0	4.1
	SX1688	22C5	6.9	−

弥生時代以降の遺構観察表

（ ）：推定値

遺構No.	遺構種別	グリッド	検出層位	所属層位	形態			規模（cm）					底面標高（m）	覆土			出土遺物	備考
					平面	縦断面	立ち上がり	上端長径	上端短径	下端長径	下端短径	深度		堆積形状	覆土	掘形と柱根の関係		
52	P	7D20	Ⅶd層		円形	V字状	垂直	8	7	2	2	20	1.221	D	G	F		
53	P	7D20	Ⅶd層		円形	V字状	垂直	10	7	3	3	35	1.086	D	G	F		
54	P	7D20	Ⅶd層		円形	V字状	垂直	7	6	1	1	27	1.112	D	G	F		
55	P	7D19･20	Ⅶd層		楕円形	V字状	垂直	8	6	1	1	14	1.243	D	G	F		
56	P	7D14	Ⅶd層		楕円形	台形状	急斜度	13	10	2	2	13	1.290	D	G	F		
58	P	7D9	Ⅶd層		円形	V字状	垂直	10	8	2	2	10	1.324	D	G	F		
59	P	7D4	Ⅶd層		楕円形	V字状	垂直	9	6	2	1	15	1.284	D	G	F		
61	P	7D3	SD19覆土上部	SD19覆土上部	楕円形	V字状	垂直	10	8	2	1	35	1.062	D	G	F		
62	P	7D2	SD19覆土上部	SD19覆土上部	円形	V字状	垂直	9	9	1	1	16	1.223	D	G	F		
64	P	7D7	SD19覆土上部	SD19覆土上部	円形	V字状	垂直	8	7	2	2	28	1.140	D	G	F	粘土	
66	P	7D14	SD19覆土上部	SD19覆土上部	円形	U字状	垂直	8	7	1	1	14	1.274	D	G	F		
67	P	7A23	Ⅶd層		楕円形	V字状	垂直	8	6	1	1	17	1.260	D	G	F		
68	P	7A23	Ⅶd層		円形	V字状	垂直	5	4	1	1	7	1.380	D	G	F		
69	P	7A23	Ⅶd層		円形	漏斗状	垂直	8	7	2	2	11	1.353	D	G	F		
70	P	7A19	Ⅶd層		楕円形	V字状	垂直	7	4	1	1	11	1.371	D	G	F		
71	P	7A13	SD19覆土上部	SD19覆土上部	楕円形	V字状	垂直	7	6	1	1	25	1.140	D	G	F		
72	P	7A2	SD19覆土上部	SD19覆土上部	円形	U字状	急斜度	5	5	1	1	20	1.149	D	G	F		
73	P	7A18	Ⅶd層		円形	U字状	急斜度	12	11	7	6	20	1.200	D	G	F		
74	P	7A25	Ⅶd層		円形	U字状	垂直	5	5	3	3	16	1.325	D	G	F		
78	P	7A8	SD19覆土上部	SD19覆土上部	楕円形	袋状	急斜度	6	6	2	2	10	1.287	D	G	F		
80	P	7B13	Ⅶ層		円形	U字状	垂直	8	6	1	1	13	1.240	D	G	F	木	
84	P	6B12	SD19覆土上部	SD19覆土上部	円形	V字状	急斜度	6	5	1	1	6	1.188	D	G	F		
85	P	6B13	SD19覆土上部	SD19覆土上部	円形	V字状	垂直	9	8	1	1	25	1.040	D	G	F		
86	P	6B12	SD19覆土上部	SD19覆土上部	円形	V字状	急斜度	6	6	1	1	10	1.134	D	G	F		
87	P	6B18	SD19覆土上部	SD19覆土上部	楕円形	V字状	急斜度	8	5	1	1	11	1.159	D	G	F		
88	P	6B19	SD19覆土上部	SD19覆土上部	円形	箱状	垂直	6	6	4	3	5	1.178	D	G	F		
89	P	6B23	SD19覆土上部	SD19覆土上部	円形	半円状	垂直	10	7	1	1	5	1.200	D	G	F		
90	P	6C7	Ⅶd層		円形	U字状	急斜度	8	6	1	1	5	1.210	D	G	F		
91	P	6C5	SD19覆土上部	SD19覆土上部	円形	半円状	緩やか	12	10	5	5	5	1.295	D	G	F		
92	P	6C14	SD19覆土上部	SD19覆土上部	楕円形	V字状	急斜度	20	16	4	4	18	1.197	D	G	F	樹皮	
94	P	6C13	Ⅶd層		円形	U字状	垂直	6	6	1	1	11	1.187	D	G	F		
95	P	6C12	Ⅶ層		円形	U字状	垂直	6	7	1	1	17	1.203	D	G	F		
97	P	6A22	SD19覆土上部	SD19覆土上部	円形	U字状	垂直	6	4	2	2	28	1.020	D	G	F		
103	P	6B10	SD19覆土上部	SD19覆土上部	円形	V字状	急斜度	7	6	1	1	17	1.043	D	G	F		
129	P	8D15	Ⅶd層		円形	U字状	垂直	3	3	1	1	7	1.338	D	G	F		
132	P	8D7	Ⅶd層		円形	V字状	垂直	6	6	1	1	23	1.231	D	G	F		
133	P	8D7	Ⅶd層		円形	V字状	急斜度	8	7	1	1	12	1.340	D	G	F		
134	P	8D17	Ⅶ層		円形	V字状	急斜度	6	6	1	1	19	1.249	D	G	F		
139	P	6E15	Ⅶ層		円形	弧状	緩やか	10	7	2	2	11	1.170	D	G	F		
140	P	6D23	Ⅶ層		楕円形	V字状	急斜度	12	7	4	3	33	1.038	D	G	F		
141	P	7C8	Ⅶd層		円形	漏斗状	急斜度	14	13	2	2	25	1.080	D	G	F		
145	P	7C22	Ⅶd層		円形	V字状	急斜度	7	6	1	1	14	1.260	D	G	F		
147	P	7D7	Ⅶd層	SD19覆土上部	円形	V字状	急斜度	6	5	1	1	8	1.220	D	G	F		
148	P	7E15	Ⅶd層	SD19覆土上部	円形	V字状	急斜度	12	10	4	2	29	0.920	D	G	F		
149	P	7E15	Ⅶd層	SD19覆土上部	円形	V字状	急斜度	12	11	3	2	18	1.063	D	G	F		
768	P	10C18	Ⅶd層		円形	V字状	急斜度	6	5	1	1	25	0.942	D	G	F		
759	SK	13D14･15･19･20	Ⅵ層		楕円形	弧状	緩やか	225	106	133	55	19	1.152	A	D			SX51と同時期
760	SK	13D9	Ⅵ層		楕円形	台形状	急斜度	68	57	50	38	9	1.183	A	D			SX51と同時期
761	SK	13D11･12	Ⅵ層		楕円形	弧状	緩やか	143	95	78	32	19	1.105	A	D			SX51と同時期
861	SK	15･16CD25･21･5,1	S1層	S1層以降	不整形	弧状	緩やか	332	248	278	163	22	1.140	F	D		土器・楔形石器・クルミ	
51	SX	8･9AB,17A,10･16･17B,15･16C,9～14CD,11～13E	Ⅵ層直下	Ⅷb～Ⅶa層	不整形	弧状	緩やか	(9400)	(4800)			50	0.980～1.450				土器・石鏃・石錐・不定形石器・楔形石器・石核・磨石類・軽石･トチ・クルミ	
146	SX	8･9C18～20･23～25･16～18･21～23	Ⅵ層直下	Ⅷb～Ⅶa層	不整形	弧状	緩やか	1074	288	866	144	9	0.993					
741	SX	12E8･9･12～14･17･18	SX51-2層	Ⅷb～Ⅶa層	不整形	弧状	緩やか	384	164	338	80	37	1.230				土器・クルミ	自然の陥没
2016	SX	24EF,25～27E	Ⅵ層直下	SD1420-E5層以降	不整形			(4450)	(1900)			38	0.360～1.110				土器	

弥生時代以降の遺物観察表（1）土器・土製品・金属製品

胎土：英＝石英、雲＝雲母、長＝長石

報告No.	種類	器種	出土地点	所属遺構	層位	長さ・口径（cm）	幅・底径（cm）	厚さ・器高（cm）	外面調整	内面調整	胎土	焼成	外面色調	内面色調	口縁部残存率	備考
1	弥生土器	甕口縁部片	18D9	SD1420 - 21d	S4～S3	13.0		(5.1)	口縁：平沢、頸：ナデ	ナデ・ミガキ	英（多）・雲・長	やや良	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR2/1 黒	0.125	内外面に炭化物付着
2	土師器（古墳）	甕口縁部	9B1		Ⅵ	18.0			ヨコナデ	ヨコナデ	長・雲・英	良	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	0.139	全体的にやや摩耗。口径は推定値
3	須恵器	有台杯	6A15, 7A11		Ⅵ	12.2	6.9	2.6	体：ロクロナデ底：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	長・英・白色礫（径2～5mm）	還元硬質	10YR6/1 褐灰	10YR6/1 褐灰	0.667	脚台ややつぶれ。ロクロ左回転
4	須恵器	無台杯	9A17		Ⅵ	12.9	9.1	3.4	体：ロクロナデ・ナデ、底：回転ヘラキリ	ロクロナデ	長・英・白色礫（径2～5mm）	還元硬質	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	1.000	底部内面凹凸。ロクロ左回転
5	須恵器	杯口縁部	10B16	SX51-1b	Ⅵ	15.0			ロクロナデ	ロクロナデ	黒色粒子（細）・長石（細）・白色粒子	還元硬質	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	0.056	小泊窯産。口径は推定値
6	須恵器	杯蓋口縁部	15C15		S3				ロクロナデ	ロクロナデ	長・英・黒色粒子（細）	還元硬質	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	-	残存率が低い為、口径推定不能
7	須恵器	杯蓋口縁部	4E6		Ⅵ	17.0			ロクロナデ	ロクロナデ	長・英（細）・白色粒子（径1～4mm）	還元硬質	2.5YR3/3 暗赤褐	2.5YR3/1 暗赤灰	0.063	口径は推定値
8	土師器	無台杯	25F8		Ⅵ	14.0	5.4	3.8	体：ロクロナデ、底：糸キリ?	ロクロナデ	雲・長	やや良	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	0.333	
9	土師器（黒）	杯口縁部	4E5・9		Ⅵ	14.0			ロクロナデ	ロクロナデ→ミガキ	雲・長	良好	7.5YR2/1 黒	7.5YR7/3 にぶい褐	0.063	口径は推定値
10	土師器（黒）	無台杯	13D11,13E1・6		S1	18.3	7.5	6.2	体上：ロクロナデ→ミガキ、体下：ヘラケズリ、底：ヘラケズリかミガキ	（ヨコ）ミガキ	雲・長（・英）	良好	7.5YR7/2 明褐灰	10YR2/1 黒	0.75	ロクロ右回転?
11	土師器	小甕口縁部	2B21		Ⅶb	15.0			ハケ→ロクロナデ	ロクロナデ	長・雲	良好	10YR4/1 褐灰	10YR7/2 にぶい黄橙	0.128	外面煤付着、口縁部内面黒変色
12	土師器	甕口縁部片	25F6	SD1420 -E6c②	S1	19.0			ロクロナデ	ヨコハケ・ヨコナデ	長	良好	7.5YR6/2 灰褐	7.5YR5/2 灰褐	0.056	
13	土師器	甕口縁部	19B14・15・19		Ⅵ	15.0			ロクロナデ	ロクロナデ	長（径1～5mm）多	良好	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	0.188	
14	土師器	甕口縁部	8C21・22	②	Ⅵ	14.4			ロクロナデ	ロクロナデ	長多、英（細）・白色粒子	良好	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	0.125	
15	土師器	小甕底部	17B15, 18B11・16		Ⅵ		7.2		体：ロクロナデ底：回転糸キリ	ロクロナデ	長・雲	良	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	底部完	
16	土師器	小甕?底部	6B23・24		Ⅵ		8～9		?	体：ロクロナデ底：ロクロナデ→ナデ	長・雲	不良	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/3 にぶい橙	底5/6	外面摩滅・剥落
17	土師器	甕?体部片	5E13		Ⅵ				ロクロナデ	ロクロナデ?	長・雲（・英）	良好	7.5YR6/2 灰褐	7.5YR6/2 灰褐	-	内面摩滅により調整不明瞭
18	土師器	甕体部片	7D12		Ⅵ	6.9	7.2	0.7	ロクロナデ→タタキ	ロクロナデ→ナナメハケ	長・雲	良	7.5YR6/2 灰褐	7.5YR6/2 灰褐	-	外面若干凹凸
19	須恵器	甕体部片	表面採集		-	(9.5)	(9.4)	(0.8)	タタキ痕	同心円状当て具痕	長・黒色粒子（細）・砂礫	還元硬質	2.5Y6/1 黄灰	5Y7/1 灰白	-	調査区外南東の畦畔上で表採
20	土製品	土錘	10C12	SX51	Ⅵ	5.0	1.6		ナデ		長・雲	良好	7.5YR5/4 にぶい褐			孔径3mm。重量9.97g
21	土製品	土錘	10C11	SX51	Ⅵ	6.3	1.8	1.6	ナデ		長・雲	良好	7.5YR5/3 にぶい褐			孔径4～5mm。重量15.9g
22	土製品	土錘	10C18	SX51-3	Ⅵ	5.5	1.7		ナデ		長・雲	良好	10YR6/2 灰黄褐			孔径4～5mm。重量14.74g
23	金属器	鉄鏃	3C7		Ⅴ	(9.4)										鏃身一部欠損
24	金属器	短刀	10B20		Ⅳ	(28.5)	(2.5)	0.5								木質部残存

弥生時代以降の遺物観察表（2）木製品

（「備考」の ㊧ は、2004年3月時点で保存処理済みであることを示す。）

報告No.	器種	木材名・木取り	樹種	出土地点	遺構	層位	長さ・口径（cm）	幅・底径（cm）	厚さ・器高（cm）	炭化	残存度	備考
25	田下駄	板目板材	スギ	11C22		Ⅵ	21.7	12.2	1.6			NIG - 2024
26	鍬	板目板材	アサダ	13D15		Ⅵ	(26.6)	(11.6)	1.3			NIG - 2018
27	鍬	柾目板材	アサダ	4A14		Ⅳ	(33.0)	16.2	1.2	○		一部炭化。NIG - 2006
28	鍬	柾目板材	アサダ	9A17		Ⅵ	(32.0)	17.0	1.7			NIG - 2087
29	鍬	柾目板材	アサダ	7D18		Ⅵ	(20.5)	(6.0)	0.8			NIG - 2056
30	浮子	角材	スギ	11A25		Ⅵ	13.3	1.2	0.8			NIG - 2008
31	弓	丸木材	イヌガヤ	15B7		Ⅵ	(28.3)	2.4				NIG - 2057
32	弓	丸木材	イヌガヤ	13C4		Ⅵ	(63.0)	1.5				NIG - 2069
33	草履芯	板目板材	スギ	22E24		Ⅳ	(20.0)	4.9	0.35			NIG - 2082
34	下駄	板目板材	スギ	3A21		Ⅳ	17.6	7.1	1.5			NIG - 2031
35	杵	横木取り	ケヤキ	9B22		Ⅵ	(27.4)	11.4	5.8		踵欠損	NIG - 2044。㊧
36	円形曲物側板	板目板材	スギ	27C9		Ⅵ	(21.0)	3.2	0.4			釘穴2か所に木釘残存。NIG - 1982

弥生時代以降の遺物観察表（3）木製品

報告No.	器種	木材名・木取り	樹種	出土地点	遺構	層位	長さ・口径(cm)	幅・底径(cm)	厚さ・器高(cm)	炭化	残存度	備考
37	円形曲物側板	柾目板材	スギ	16B16		Ⅵ	(12.3)	6.2	0.5			釘穴1か所。綴じ方：1列外4段。NIG - 2019
38	円形曲物側板	柾目板材	スギ	24F23		Ⅵ	(15.2)	5.7	0.6			綴じ方：1列上外下内2段?NIG - 2038
39	円形曲物側板	柾目板材	スギ	26B9		Ⅵ	(12.3)	3.3	0.5			綴じ方A:1列内2段、B:?NIG - 1981
40	円形曲物側板	板目板材	スギ	10B9		Ⅵ	(23.4)	11.4	0.7	○		釘穴2か所。綴じ方：1列上外下内5（4）段。NIG - 2035
41	円形曲物側板	柾目板材	スギ	21B12		Ⅵ	18.0		2.0		完	ケビキ無し。綴じ方A:1列内2段、B：1列上外下内2段、C:1列外3段?NIG - 2055
42	円形曲物側板・底板	柾目板材	スギ	26B9		Ⅵ	14.9		3.6		完	側板厚0.3cm。底板厚1.1cm。側板：NIG - 2043、底板：NIG - 2095
43	円形板	柾目板材	スギ	20E5		Ⅴ	(18.0)		0.7		ほぼ完	端部丸。NIG - 2021
44	円形板	柾目板材	スギ	19C9		Ⅵ	16.2		0.8		完	端部丸。NIG - 2053
45	円形板	柾目板材	スギ	2D9		Ⅴ	14.4		0.6		1/2	変形している。端部面取り。NIG - 2042
46	円形板	流れ柾目板材	スギ	25D21		Ⅵ	15.5		0.7		完	釘穴4か所。端部やや丸みを帯びる。NIG - 2086
47	円形板	柾目板材	スギ	5A18		Ⅳ	15.0		0.9		完	釘穴1か所。NIG - 2048
48	円形板	柾目板材	スギ	27F15		Ⅵ	23.3		1.3		2/5	釘穴1か所に木釘残存。NIG - 1985
49	円形板	流れ柾目板材	スギ	23F21		Ⅵ	11.9		0.9		完	柄杓の底板?木釘3か所。端部面取り。NIG - 2037
50	円形板	流れ柾目板材	スギ	11B17	SX51-3	Ⅵ下	32.2		1.3	○	3/4	NIG - 2005
51	方形・楕円形曲物底板	板目板材	ヒノキ	28F13		Ⅵ	61.0	(10.0)	0.9			NIG - 1465
52	曲物部材	板目板材	アカマツ	21D19		Ⅵ	25.0	5.3	1.0			NIG - 1944
53	曲物部材	柾目板材	スギ	26F8		Ⅵ	17.3	7.0	1.3			NIG - 2030
54	蓋？	流れ柾目板材	スギ	7D22		Ⅵ	12.9		0.9		1/2	NIG - 2049
55	無台盤	柾目横木取り	ケヤキ	6A19		Ⅵ	-	21.0	-	○	3/5	底部外面の縁に若干のふくらみ。NIG - 2033
56	無台盤	柾目横木取り	ケヤキ	22B15		Ⅵ	19.6	16.5	2.3		6/8	全体的に歪んでいる。NIG - 2054
57	無台盤	柾目横木取り	ケヤキ	27B11		Ⅵ	24.6	21.4	2.2	○	1/4	底部内面の一部が炭化している。NIG - 2060
58	無台盤	柾目横木取	ケヤキ	9A12		Ⅵ	23.8	21.0	2.1		3/8	NIG - 2034
59	無台盤	柾目横木取り	ケヤキ	3D21		Ⅵ	-	-	1.1		-	復元不能。NIG - 2007
60	有台盤	柾目横木取り	ケヤキ	9B8		Ⅵ	22.2	18.2	1.7		1/2	NIG - 2026
61	有台盤	柾目横木取り	ケヤキ	9A18	SX51-1	Ⅵ下	25.0	23.0	1.8		1/4	NIG - 2052
62	有台盤	柾目横木取り	ケヤキ	12E7		Ⅵ	28.0	25.8	2.6	○		NIG - 2083
63	有台盤	柾目横木取り	ケヤキ	27C5		Ⅵ	26.3	21.8	4.1		3/4	NIG - 2040
64	有台盤	柾目横木取り	ケヤキ	立会		Ⅵ	25.0	23.0	1.5	○	3/16	底部残存率は1/2。NIG - 2045
65	有台盤	柾目横木取り	ケヤキ	6D20		Ⅵ	-	40.0	-		1/8	底部外面の削り（挽き）が粗い。NIG - 2046
66	稜椀	柾目横木取り	ケヤキ	8A13		Ⅵ	17.0	10.0	7.5		4/5	口縁部残存率1/8弱。NIG - 2041。㊧
67	蓋	柾目横木取り	ケヤキ	7B16		Ⅴ	口径17.0	つば径20.0			1/8	NIG - 2028。㊧
68	有台椀	柾目横木取り	ケヤキ	7E12		Ⅵ	16.0	11.0	3.1		1.5/8	全体的に腐蝕している。NIG - 2039
69	稜椀高台部	柾目横木取り	ケヤキ	11B17		Ⅵ	-	11.0	-		摩滅	摩滅のため全体に丸みを帯びている。NIG - 2080
70	蓋	柾目横木取り	ケヤキ	27B9		Ⅵ	18.8	17.6	2.1		1/2	NIG - 2059
71	黒漆塗り椀	板目横木取り	ケヤキ	立会		Ⅳ下	13.0	-	-		1/16	口径は推定値。NIG - 2022
72	黒漆塗り皿	柾目横木取り	ケヤキ	4F19		Ⅵ	-	6.8	-		底部完	NIG - 2023
73	円形板	柾目板材	ケヤキ	27E6		Ⅵ	20.0		0.7	○	完	NIG - 2084
74	円形板	柾目板材	ケヤキ	24F20		Ⅵ	19.8		1.4		完	NIG - 2088
75	円形板	柾目板材	ケヤキ	3C24		Ⅵ	11.2	10.5	2.6			NIG - 2085
76	円形板	柾目板材	スギ	3A21		Ⅵ	11.6	10.5	2.5		完	NIG - 2064
77	槽	板目横木取り	ケヤキ	4D14		Ⅵ	(71.5)	40.5	7.7			NIG - 2014。㊧
78	木釘状木製品	削出棒材	スギ	6D24		Ⅵ	7.1	0.3	0.25		完	NIG - 2047
79	箸状木製品	削出棒材	スギ	立会		Ⅵ	15.0	0.8	0.5			NIG - 2013
80	箸状木製品	削出棒材	スギ	2C19		Ⅴ	(14.4)	0.6	0.5			断面隅丸方形。先端残存。NIG - 2009
81	箸状木製品	削出棒材	スギ	6A4		Ⅵ	(19.0)	0.4				断面丸みを帯びた六角形（略円形）。NIG - 2012
82	箸状木製品	削出棒材	スギ	5E10		Ⅳ	21.0	0.6	0.45		完	断面長方形（部分的に六角形の部分もある）。NIG - 2011
83	箸状木製品	削出棒材	スギ	18D11		Ⅳ	22.5	0.7	0.4			断面長方形。NIG - 2010
84	火錐棒状木製品	削出棒材	スギ	3B20		Ⅵ	26.8	1.5	1.4	○		側面面取り。NIG - 2051
85	火錐棒状木製品	削出棒材	スギ	23B11		?	29.9	1.5	1.2	○		NIG - 2035
86	火錐棒状木製品	削出棒材	スギ	28F6		Ⅵ	23.7	1.4	1.3			NIG - 1986
87	形代	柾目板材	スギ	9C18		Ⅵ	16.6	2.4	0.7			NIG - 2063
88	形代	板目板材	アカマツ	21D18		Ⅵ	(16.5)	3.4	0.8			NIG - 2078
89	形代	柾目板材	スギ	5D15		Ⅵ	(26.4)	2.8	0.4			NIG - 2077
90	斎串	板目板材	スギ	9A6		Ⅵ	15.7	2.7	0.4		完	NIG - 2032
91	斎串	板目板材	スギ	9B9		Ⅵ	19.5	2.4	0.8			NIG - 2061
92	斎串	柾目板材	スギ	立会		Ⅳ	25.5	3.0	0.4		完	NIG - 2016
93	斎串	板目板材	スギ	9B8		Ⅵ	(16.6)	2.1	0.7			下端部欠損。NIG - 2027
94	斎串	板目板材	スギ	12E22		Ⅵ	(13.7)	1.7	0.6			下端部と頭部一部欠損。NIG - 2081
95	斎串	板目板材	スギ	15B3		Ⅵ	15.3	2.0	0.5			側面の切り込み部欠損。NIG - 2062
96	斎串	板目板材	スギ	19F15		Ⅵ	16.7	1.6	0.4			側面の切り込み部欠損。NIG - 2001
97	斎串	板目板材	スギ	11C4		Ⅵ	14.2	1.9	0.4			側面の切り込み部欠損。NIG - 2000
98	斎串	柾目板材	スギ	27B9		Ⅵ	14.3	2.4	0.4			頭部一部欠損。NIG - 2002
99	斎串	板目板材	スギ	16B12		Ⅵ	(15.4)	1.4	0.4			頭部欠損。NIG - 2003
100	斎串	板目板材	スギ	26C17		Ⅵ下	(36.9)	1.6	0.6			頭部欠損。NIG - 2004
101	器具部材	角材	スギ	11B22		Ⅵ	(39.5)	1.9	1.1			NIG - 1978
102	器具部材	削出棒材	スギ	12E1		Ⅵ	35.0	1.6	1.5			NIG - 2050
103	器具部材	角材（削出）	スギ	26C4		Ⅵ	(27.9)	1.9	1.3			NIG - 1998
104	器具部材	削出棒材	スギ	21B15		Ⅴ	(121.4)	3.0	2.8			NIG - 2089
105	器具部材	板目板材	スギ	21D19		Ⅵ	39.2	6.4	1.6			NIG - 1991
106	器具部材	板目板材	スギ	21D13		Ⅵ	39.1	7.7	0.9			NIG - 1992
107	器具部材	板目板材	スギ	21D17		Ⅵ	38.8	7.5	0.6			NIG - 1993
108	器具部材	板目板材	スギ	20E3		Ⅵ	39.6	6.0	1.8			NIG - 1989
109	器具部材	板目板材	スギ	3C7		Ⅵ	46.3	7.7	2.1			NIG - 2067
110	器具部材	板目板材	スギ	3E3		Ⅵ	(51.8)	6.1	0.8			NIG - 2068
111	器具部材	板目板材	スギ	3C24		Ⅵ	50.3	4.3	1.3			片面のみキズや凹みが多い。NIG - 2066

弥生時代以降の遺物観察表（4）木製品

報告No.	器種	木材名・木取り	樹種	出土地点	遺構	層位	長さ・口径（cm）	幅・底径（cm）	厚さ・器高（cm）	炭化	残存度	備考
112	器具部材	角材（削出）	スギ	11D13		Ⅵ	37.1	4.0	3.1			NIG - 2070
113	器具部材	角材	スギ	15C14		Ⅵ	41.0	1.9	0.8			NIG - 2076
114	器具部材	削出棒材	スギ	6C21		Ⅴ	（10.5）	（1.5）	2.0			NIG - 2079
115	器具部材	角材	スギ	11E9		Ⅵ	（9.7）	1.6	1.6			NIG - 1983
116	器具部材	流れ柾目板材	スギ	立会		Ⅵ	（11.5）	4.7	0.6			四角く屈曲させるよう曲げ物?ケビキ有り。NIG - 1988
117	器具部材	板目板材	スギ	19F15		Ⅵ	18.1	5.7	0.6			箱状容器の側板?NIG - 1997
118	器具部材	角材	スギ	19F20		Ⅵ	18.6	3.7	1.5			箱状容器の側板?NIG - 1990
119	器具部材	角材	スギ	3B18		Ⅴ	12.7	3.2	（1.4）			机の脚?NIG - 2017
120	建築部材	芯持ち分割材	トネリコ属	8D14		Ⅵ	（219.5）	16.5	13.2			NIG - 2091
121	梯子	半割材（削出）	コナラ節	27E1		Ⅵ	（128.6）	16.7	7.5			全体的に摩滅を受けている。NIG - 2090
122	建築部材	角材（削出）	スギ	27F13		Ⅵ	（14.0）	（11.5）	11.0			NIG - 1984
123	端材	板目板材	スギ	10A3	SX51-1b	Ⅵ下	8.4	30.3	3.8			NIG - 2015
124	端材	板目板材	スギ	9D4		Ⅴ	31.5	15.5	4.0			NIG - 2074
125	用途不明品	削出棒材	ブナ属	19F20		Ⅵ	24.0	4.2	2.5			NIG - 1996
126	用途不明品	板・棒材（削出）	スギ	3D23		Ⅳ	28.0	5.9	2.0			NIG - 2036
127	用途不明品	角材	スギ	9A23		Ⅵ	15.3	2.3	2.3		完	把手?立体的な形代?NIG - 2029
128	用途不明品	柾目板材	クリ	10B25		Ⅵ	（16.0）	（5.2）	2.1			NIG - 1980
129	用途不明品	柾目板材	クリ	10B25		Ⅵ	（23.7）	7.2	1.7			NIG - 1979
130	用途不明品	角材（削出）	スギ	3E1		Ⅵ	（28.0）	5.0	2.0			NIG - 1995
131	用途不明品	板目板材	スギ	6B19		Ⅵ	16.5	7.5	1.9			NIG - 2073
132	用途不明品	板目板材	スギ	22E1		Ⅵ	（42.0）	（14.0）	1.5			NIG - 1999
133	用途不明品	柾目板材	スギ	24F18		Ⅵ	26.5	16.0	1.3			NIG - 2065
134	用途不明品	削出棒材	スギ	2C20		Ⅴ	（12.9）	0.9	0.4			NIG - 2071
135	用途不明品	削出棒材	スギ	28F18		Ⅵ	（13.0）	0.8		○		NIG - 1987
136	用途不明品	材片	トネリコ属	2B10		Ⅵ	7.8	2.5	1.0			NIG - 2020
137	木簡	柾目板材	スギ	20G10		Ⅵ	（13.5）	1.7	0.1			NIG - 2072

報 告 書 抄 録

ふりがな	あおたいせき
書名	青田遺跡
副書名	日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書
巻次	Ⅴ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第133集
編著者名	荒川隆史・石丸和正・猪狩俊哉・加藤　学・赤塚　亨
編集機関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒956-0845　新潟県新津市大字金津93番地1　　TEL 0250（25）3981
発行年月日	2004（平成16）年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
青田遺跡	新潟県北蒲原郡加治川村大字金塚字青田985番地1ほか	15308	59	38°01′18″～38°01′26″（新座表）	139°21′24″～139°21′27″（新座表）	19990412～19991227 20000229～20000421 20000601～20001209 20010409～20010921	17,550㎡ 2,950㎡ 16,320㎡ 11,440㎡	日本海沿岸東北自動車道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
青田遺跡	集落跡	縄文時代晩期終末	掘立柱建物58、土坑79、埋設土器11、ピット257、杭列2、炭化物集中範囲269、堅果類廃棄範囲59	縄文土器、土製品（土偶、独鈷石状土製品等）、石器、石製品（玉類・石棒類・石冠・独鈷石・石製容器・異形礫等）、木製品（柱根・壁材・丸木舟・櫂等）、編物製品（籠類・筌状編物・簾状編物）、漆製品・漆要具、骨角器・動物遺体（骨・貝等）・昆虫遺体、アスファルト塊、植物遺体（クリ・トチノキ・オニグルミ等）	沖積地を流れる河川の両岸に営まれた、掘立柱建物で構成される集落跡。有機質遺物が多量に出土。
	散布地	弥生時代・古墳時代・古代・中世	土坑4、ピット46、足跡1,225	弥生土器、土師器、須恵器、土製品、金属製品、木製品	

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第133集

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書　Ⅴ

青　田　遺　跡（本文・観察表編）

平成16年3月30日印刷
平成16年3月31日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市新光町4番地1
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新津市大字金津93番地1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　株式会社　第一印刷所
〒950-8724 新潟市和合町2丁目4番18号
電話　025（285）7161